

アクセル・ワールド～蒼き閃光Ⅱ～

ダブルマジック

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目指すのは頂点。男ならそうでなくちゃ面白くない

誰よりもまっすぐに。誰よりも純粋に。そして誰よりも楽しく、加速世界で生きようとし体現する

これはそんな思想を胸に加速世界を駆ける少年の、未来が変わったもう1つの物語

※この作品は前作となる『アクセル・ワールド〜蒼き閃光〜』のAcceleration62からの分岐ルートになります

そのため話が唐突に始まりますが、わからない方は前作から読んでください

新作の執筆に当たって最新の情報に合わせ、以下のデュエルアバター名を変更いたします

《カーマイン・ボンバー》↓《^Sun^se^t・^Bom^be^rボンバー》

《スノー・イーター》↓《^Ic^e・^Eat^erアイス・イーター》

この作品は個人サイトで書いているものを加筆・修正してマルチ投稿しています

目次

原作6巻辺り

Acceleration 1 | 1

Acceleration 2 | 12

Acceleration 3 | 22

Acceleration 4 | 33

Acceleration 5 | 44

Acceleration 6 | 54

Acceleration 7 | 65

Acceleration 8 | 76

Acceleration 9 | 86

原作7、8、9巻辺り

Acceleration 10 | 96

Acceleration 11 | 106

Acceleration 12 | 117

Acceleration 13 | 127

Acceleration 14 | 137

Acceleration 15 | 147

Acceleration 16 | 157

原作11巻辺り

Acceleration 17 | 168

Acceleration 18 | 178

Acceleration 19 | 188

Acceleration 20 | 198

Acceleration 21 | 209

A	A	A	A	原作14卷辺り	A	A	A	A	A	原作13卷辺り	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	
c	c	c	c		c	c	c	c	c		c	c	c	c	c	c	c	c	c	c	c	c	
e	e	e	e		e	e	e	e	e		e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	
r	r	r	r		r	r	r	r	r		r	r	r	r	r	r	r	r	r	r	r	r	
a	a	a	a		a	a	a	a	a		a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	
t	t	t	t		t	t	t	t	t		t	t	t	t	t	t	t	t	t	t	t	t	
i	i	i	i		i	i	i	i	i		i	i	i	i	i	i	i	i	i	i	i	i	
o	o	o	o		o	o	o	o	o		o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	
n	n	n	n		n	n	n	n	n		n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	
S	S	S	S		S	S	S	S	S		S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	
e	e	e	e		e	e	e	e	e		e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	
c	c	c	c		c	c	c	c	c		c	c	c	c	c	c	c	c	c	c	c	c	
o	o	o	o		o	o	o	o	o		o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	
n	n	n	n		n	n	n	n	n		n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	
d	d	d	d		d	d	d	d	d		d	d	d	d	d	d	d	d	d	d	d	d	
4	4	4	4		3	3	3	3	3		3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	
3	2	1	0		9	8	7	6	5		4	3	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	
438	428	417	406		396	385	375	364	354		344	334	323	313	303	293	282	272	262	251	241	230	219

A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n
S e c c o n d 6 0	S e c c o n d 5 9	S e c c o n d 5 8	S e c c o n d 5 7	S e c c o n d 5 6	S e c c o n d 5 6
				 B	 A
686	676	666	656	645	634

原作16巻辺り

A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n
S e c c o n d 5 5	S e c c o n d 5 5	S e c c o n d 5 4	S e c c o n d 5 4	S e c c o n d 5 3	S e c c o n d 5 3	S e c c o n d 5 2	S e c c o n d 5 2	S e c c o n d 5 1	S e c c o n d 5 1	S e c c o n d 5 0				
 B	 A	 B	 A	 B	 A	 B	 A	 B	 A					
624	613	603	592	581	570	558	547	536	526	515				

原作15巻辺り

A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n
S e c c o n d 4 9	S e c c o n d 4 8	S e c c o n d 4 7	S e c c o n d 4 6	S e c c o n d 4 5	S e c c o n d 4 4
504	493	482	471	460	449

A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n	A c c e l e r a t i o n
S e c o n d 8 2	S e c o n d 8 1	S e c o n d 8 0	S e c o n d 7 9	S e c o n d 7 8	S e c o n d 7 7	S e c o n d 7 6	S e c o n d 7 5	S e c o n d 7 4	S e c o n d 7 3	S e c o n d 7 2	S e c o n d 7 1	S e c o n d 7 0	S e c o n d 6 9	S e c o n d 6 8	S e c o n d 6 7	S e c o n d 6 6	S e c o n d 6 5	S e c o n d 6 4	S e c o n d 6 3	S e c o n d 6 2	S e c o n d 6 1				
917	906	896	885	875	865	855	845	834	824	813	802	792	782	772	762	751	740	729	719	708	697				

オリジナル

原作17巻辺り

間章

原作6巻辺り

Acceleration Second 1

《エピナル・ガスト》と《サンセット・ボンバー》のタッグに勝利して現実世界に戻ってから、精神的疲労によって1度背もたれに寄りかかり長い息を吐く。

そこに向かい側に座っていたパドがスツと、その手にコーヒーカップを持って差し出してくるので、元に戻って自分のコーヒーカップを持って差し出されたカップに軽くぶつけてから一緒に勝利の美酒ならぬ、コーヒーを飲んで祝杯とする。

「ポイントは大丈夫？」

祝杯を飲んでから、残りの休憩時間を確認して唐突にそんな質問をテルヨシにぶつけたパド。

それが意味するところは、今日のこの日のために上げたというレベルによって失われたバーストポイントの安全マージン。

さすがに大量のポイントを消費するとあつてパドも心配になっていたのだろうが、その質問に笑ってみせたテルヨシは、ニューロリンカーのグローバル接続を切りながらちゃんと答える。

「問題ないよ。パドには正直に話すけど、これでもう100ポイントくらいで『届く』からさ」

「……………最近、バトロワ祭りでも最後まで残ってるって聞いてたけど、いつから？」

「最初からだよ。オレがバーストリンカーになったその日から。んー、決心という意味ではたぶん、あのイベントの最中。或いはその後すぐ、かな」

テルヨシの答えに、穏やかな雰囲気を出していたパドは一瞬で切り替わったようにその目に真剣な色を含ませ、核心を突く質問をしてきたため、前回の対戦の際には言及を免れたが、さすがにもう黙って通すことはできないかと諦めてその心の内を明かすと、聞いたパドは沈黙。

何かを考えながらジツとテルヨシを見つめて、全てを理解したようにその目を1度閉じてからもう1度テルヨシと向き合つて口を開いた。

「……それがテルの生き方なら、私は何も言わない。だけど『そういう姿勢』で臨んでも意味はないと思う」

「……何も言わないって言つてそう言つてくれるのは、パドの優しさだよ。……わかつてるよ。でも、そうなるから後悔したくはないから、やるんだ。オレが、オレの進んだ道をしつかりと刻むために」やはりテルヨシの考えはだいぶ見透かされていたようで、さらなる核心に迫る助言をしてきたパドに、自覚はあることを告げる。

そんなテルヨシのまっすぐな言葉に、ずいっと身を乗り出してテルヨシの両頬を手で挟んでアヒル口にし、その顔に近付いてから思わずドキツとしてしまうような優しい笑顔で、

「休憩時間終了。バイトに戻る」

予想だにしなかった唐突な休憩終了を告げることでの話の終了に、完全に思考が停止してしまい、あの一瞬でもういつも通りになったパドはコーヒーを飲み干してからさっさと休憩室を出ていつてしまった。何か淡い期待をしてしまった自分がとてつもなくアホっぽかったテルヨシはそれに遅れてコーヒーを飲み干して追うように休憩室を出ていったのだった。

勝利の余韻がまだ残る中でバイトを終わらせ、帰宅の準備を整えたパドとマリアと一緒に店の裏から出て表の通路に出たテルヨシは、いつものようにそこでパドと別れてバス停へと向かうのだが、今日は少しだけ変わったことが起きた。

表の通路に出たところで明らかに自分、またはパドかマリアに用がありそうな同じ年くらいの学校の制服を着た女子が近寄ってきたのだ。

その女子生徒は長い黒髪をつむじ辺りでまとめたいわゆるパイナップルヘアーにしている、どちらかといえばキリツとしたカッコ良い系の子で、それでもなんとなく小さな仕草などは女の子らしくてギャップ萌えするタイプ。

そんな分析を近寄ってくるまでにしたテルヨシの本能レベルの習性はさておき、その女子生徒に見覚えのないテルヨシはパドとマリアに視線を向けて知り合いかとアイコンタクトする。

マリアは当然ながら首を横に振り知らないと示したが、パドは何か心当たりがあるのかすぐには首を振らずに珍しく思考。

「……なるほどね。アンタ達がそうか」

その間にテルヨシ達のすぐ近くまで来た女子生徒は、テルヨシ達をゆっくりと見回してから1人で納得したように口を開き、左手を腰に当てて右手人差し指を立てビシツとテルヨシを指す。

「アンタが《レガッタ・テイル》ね」

そこから繰り出された言葉は思いがけないことで、言われたテルヨシは表情には全く出さずに何を言ってるんだくらいの顔までしてみせたが、隣にいたマリアが素直に驚いてしまつて可愛い反応で口をあぐり。

咄嗟の事だから責めることはできないが、反応しちゃつたマリアをすすつと背中にスライドさせてパドに視線を向けると、そのパドは焦つた様子もなく女子生徒に視線を固定している。

「それでその可愛い子が《ソレイユ・アンブツシユ》で、無愛想っぽいお姉さんが《ブラッド・レパード》ね」

「だ、誰ですかあなた……」

周囲に人がいないのを確認した上で響かない程度の声量で見事に《リアル割れ》させてくれた女子生徒は怪しき全開だったが、声だけである程度の人を判別できる謎スキルを持つテルヨシと長年の付き合いのパドは目の前の女子生徒の正体に気づく。

しかし警戒心が全開になったマリアはテルヨシの後ろからちよつと顔を出して女子生徒へと恐る恐る問いかけ、それを聞いた女子生徒はキョトンとしてから怖がらせたとわかつて目線をマリアに合わせ、屈み笑顔になる。

「急にだったから驚かせたわね。私は都田沙絢^{トダサアヤ}。デュエルアバター名はエピナール・ガストよ」

「えっ……ガ、ガストさんですか……むごっ!？」

そこで初めて名乗ったサアヤに本当に驚いて大声を出そうとしたマリアの口を押さえたテルヨシは、立ち上がったサアヤと現実で初めて言葉を交わした。

「わざわざ出待ちなんて可愛いところあるのね、ガツちゃん」

「誰のせいでこんなことしてると思ってるのよ、バカ」

「ええっ!? 誰のせい?」

「アンタよアンタ! ったく、自分からリアル割れとかバーストリンカーとして初めてやったんだけど」

「そ、それはまたガツちゃんの初めてを奪ってしまつて申し訳ない……」

「誤解を招く言い方はやめて」

かつてはリアル割れしてもいいとさえ言っていたテルヨシからすれば、サアヤの方から会いに来てくれたことは喜ばしいこと。

しかしこのタイミングで自らがあまり望まないながらも会いに来たみたいな雰囲気サアヤには疑問があるので、その辺の話をしてくれるだろうことを察して、初対面の緊張を解くような会話をしてから切り替える。

サアヤも相変わらずなテルヨシにげんなりしつつも、夜も遅くなってきたからと本題に入ってくれる。

「レパード。その子をちょっとお願い。これと2人で話したいから」

「K。マリア」

その前にテルヨシと2人で話したいからとマリアをパドに預け、少し離れた場所へ移動。

マリアもパドも見える程度の距離で待つてくれて、長話はできないと前置きしてから改めてサアヤが口を開く。

「えっと、テイル……名前まだ聞いてなかったわ……」

「あ、ごめん。皇照良。気軽にテルでいいよ」

「テイルとそんなに変わらないわね……まあいいわ。んじやテル。アンタさ、なんか企んでるでしょ」

「オレが悪巧みしてるって?」

「誰も悪巧みとは言っていない。この短期間でのレベルアップ。何もな

いって方がしっくり来ないわ。アンタはバカだけど無能じゃない。だったらこのレベルアップにも意味があるんでしょ」

腕を組んでテルヨシを問い詰めるサアヤに最初こそはぐらかそうとしたが、こうしてリアル割れまでして話をするなら、確認だけなんてことはないと確信。

ならサアヤが会ってまで話をするまでは沈黙を通そうと口を挟まずにいと、そういうところでの察しの良さを理解してるサアヤも話を続ける。

「それに今日の対戦の時に感じた気配っていうかな……アンタからなんかライダーと同じ気配がしたのよ」

「それは良い方？ それとも……」

「悪い方。いつやるのかは知らないけど、七王会議にはアンタも呼ばれてるだろうし、七王が出揃う場でアンタが何もしないわけがないじゃない。それこそその場でレベル9になって勝負を挑むくらいことはしそうって思ったのよ」

「……………」

パドはあえてハッキリとは言わなかったが、まさにその通りの計画を立てていたテルヨシは、女の勘とでも言うべきもので看破したサアヤに素直に驚く。

だがそれでもテルヨシが目指すべき道は変わらないし、相当な覚悟を持って進んできたのだ。今さら止まる段階にはもういない。

「まっ、そんなことだろうと思ったからこうして私も覚悟を決めてきたわけよ。私の覚悟とアンタの覚悟。どっちが勝つかの勝負をしましょ」

「しょ、勝負？ ならサアヤはオレを止めに来たってこと、だよね？」

「そうなるわ。でも勝負って言ったって時間なんかかからないわ。私はアンタにもう仕掛けたもの」

「仕掛けたって……」

「あら、頭の回転が良いのが取り柄なのに、まだ気づかない？」

予想通りその計画を止めに来たサアヤだが、だからといって何だと突き返すくらいの気持ちでいたテルヨシがキョトンとしてしまうよ

うな事を言うので、ようやく真面目に頭を使ったテルヨシが少し考える素振りを見せると、その間にサアヤの表情が少しだけ悲しそうなものに変化したのを見逃さない。

そしてそれを見たことでサアヤの言葉の意味を理解したテルヨシは、とんでもないことをしてくれたサアヤに愕然としてしまう。

「……………そういうことね。ズルいわサアヤ……………」

「わかったみたいね。じゃあダメ押ししてあげる」

「まだなんかあんの!？」

「私も覚悟を決めたって言ったわよ。耳を塞がないで聞きなさい」

サアヤが何故このタイミングでリアル割れまでして止めに来たのか。

それはこうして顔を合わせたサアヤは『バーストリンカー』としてのサアヤだからだ。

ブレイン・バーストをアンインストールした者は、それに関する記憶を失う。

つまりこのままテルヨシが来たる七王会議でレベル9となって、王の誰かと戦い負けた場合、この出会いまでテルヨシの中で『なかったこと』になる可能性が高いのだ。

いわば記憶を人質にした脅迫に近いサアヤの行動に揺らがないわけがない。

それでもまだ完全に止まるまではいかなないテルヨシだったが、そこにサアヤはまだカードを切ってくる。

「皇照良。私は……………都田沙絢はずつと前から……………レガッタ・テイルとして出会ってから、あなたのことが好きになった。私が失いかけたゲームを楽しむ気持ちを思い出させてくれたあなたを、堪らなく好きになった。もしもあなたがいいなら……………私と……………付き合ってくださいませんか……………」

精一杯の気持ち。本気の想い。

それが痛いほどに伝わってきたサアヤの告白に、テルヨシは頭が真っ白になってしまった。

最後は少し泣きながらだったサアヤも、言い終えてから胸に手を当

てて目を閉じてしまい、テルヨシの返事をただ待つ。

その告白によってテルヨシはようやくサアヤが止めに来た理由について理解できる。

——いなくなつてほしくない。

好きな人が自分の事を全て忘れていなくなつてしまう悲しみは計り知れないものだろう。

自分なら耐えられる自信もないその悲しみを自分が進む道の先ですることになる人がいる。

それをいま突きつけられたテルヨシは、マリアにもパドにも止められなかった自分の覚悟が脆く崩れていくのを悟り、ぎゅっと目を閉じるサアヤの肩に触れて目を開けさせる。

「……………オレさ、かなり目移り激しいよ?」

「知つてるわよそんなこと」

「女の子なら誰とでも仲良くなっちゃうよ?」

「それも知ってる。っていうかそうじゃなきゃアンタらしくないでしょ」

「それでも…………」

「それでも好きって言った私が変わってるのは承知の上よバカ。返事っ!」

「よろしくお願いしますっ!」

「……………ありがと、テル」

女の子にそんな悲しい思いをさせるわけにはいかない。

我ながら女に振り回される性格だなど自虐しつつも、こんな自分を本気で好きになつてくれる子など、今後いるかわからない気持ちと、自分もまた都田沙絢という女の子を好きな気持ちに嘘などないと思ひ、急かされつつもその告白を受け入れたのだった。

自らの壮大な計画がサアヤによって呆気なく打ち砕かれはしたものの、現実ではリア充の仲間入りをしたのではないだろうか。かなテルヨシは、改めてサアヤとアドレスやボイスコールの番号を交換——今までは捨てアドレスでメールだけ——してようやく恋人関係の第一歩を踏み出した。

しかしテルヨシのアドレスやらを登録して凄く嬉しそうにしたサアヤは、すぐに切り替えるように真面目な表情へと変わると、同じように嬉しそうにしていたテルヨシに向かって口を開く。

「恨んでもいいよ。テルにはその権利があるから」

「恨む？ ああ、オレの野望を阻止してくれちゃったことに対して？」
「私はテルのブレイン・バーストでの生き方は凄くまっすぐで好きよ。でも私はその生き方を貫くことを阻んだ、いわば障害。貶されたって、殴られたって仕方ないくらいの酷い仕打ちをしたもの。とても許されることじゃないわ」

「……オレの生き方は女1人の本気の想いにも負けるくらいだったっただけの話だよ。それにレベル10になるだけがこのブレイン・バーストの到達点じゃないとも勘づいてはいたんだ。ならまた探せばいいさ。レベル10以外のこのゲームの到達点をさ。だからサアヤは見えてるゴールだけで近道をしようとしたオレを止めてくれた恩人ってこと」

「ものは言い様よ。そうは言っただって私がテルにしたことが良いことには絶対にならない」

「うーん。じゃあ責任を取ってもらおうかな。オレが目指す別の到達点。それをこれから一緒に見つけてくれないかな。期間は無制限！

悪い条件じゃないっしょ？」

「……………ホント、女に甘いわよね、アンタ」

「彼女には特に甘いぞ」

本当はサアヤにもテルヨシを止めた罪悪感はある、それでもテルヨシとの絆が無くなることの方が嫌だと思っただけのこと、それをテルヨシが責められるわけもなく、だったらとまだ見当もつかないブレイン・バーストの目指すべき別の道と一緒に探そうと言えば、その意味するところが「一緒にいてほしい」になるために顔を真っ赤にしながらも了承したサアヤ。

そうして話も終わったので、離れていたマリアとパドがようやくかといった雰囲気で見守っていたテルヨシとサアヤを見てくる中、めっちゃくちゃ照れて話せなくなったサアヤに代わってテルヨシが報告。

「えー、オレとサアヤは付き合うことになりました」

「……唐突」

「……………むう」

テルヨシもちよつと恥ずかしいことだったので頭を掻きながら話を端折って結果だけ言うから、さすがのPADもどう返せばいいかわからずに見たこともない微妙な表情を浮かべ、マリアに至っては何故か不機嫌そうになる。

あれえ、祝福がないぞ？

当然と言えばそうなのだが、突然の話でテルヨシもどうしたものかと戸惑いを見せると、いち早く状況を整理したPADがマリアの肩に手を乗せて口を開く。

「とりあえずマリアには謝る。それが最善」

「うえっ!?! 何故に!?!」

「^{早く}HU」

「マリア、ごめんなさい」

「……………サアヤさん、泣かせちゃダメだよ」

「おっす。努力します」

「サアヤさんも、テルを甘やかしたらダメですから」

「あ、はい。注意します……………」

よくわからないままに不機嫌なマリアに謝らされたテルヨシは、それでぶくうと頬が膨らんでいたマリアが元に戻ったからホツとしつつも、なんか親みたいな立場で注意するマリアに苦笑。

同じように注意されたサアヤはまだマリアが誰なのかもよくわかってないながら流れで返事。

それを見届けたPADはさっさと帰りたかったのか、サアヤからリアル割れしたのだからとアドレスを交換して退散してしまい、残されたテルヨシ達も帰る雰囲気になる。

その前にマリアとサアヤがちゃんと自己紹介をして、テルヨシとマリアが現在、同居していることを教えると、そうなった経緯を知らないサアヤはナイスリアクションをしてくれる。

「同居って……………っっていうか改めて実感するけど、お互いに性格とかは

よく知ってても、リアルの方は全然わからないことだらけよね……」
「なんか順序がおかしくはあるけど、そういう普通じゃない始まり方があってもいいじゃん」

「サアヤさんのこと、もつと教えてください」

「2人ともお気楽ね……まあいいわ。私もマリアとは仲良くなりたいし、近いうちに家に招かれてあげる。そっちがいいならその……泊まりでもいいしね」

「いきなり彼氏の家にお泊まりなんて積極的」

「マリアがいるんだから変なことしないわよ！ させもしないし！」
「変なこと？」

「はいマリアはまだ知らなくてオツケーです」

なんだかんだ付き合いは長いテルヨシとサアヤだが、リアルでは初対面なのを実感したところで、そろそろサアヤも帰らなきゃと時間を気にして、テルヨシとマリアも帰りが遅れるとお風呂やらも押すので今日のところはもう帰ることになる。

その帰りの別れ際にふとあることを思い出したテルヨシは、行こうとしたサアヤを引き留めてあることを伝えておき、聞いたサアヤは「まあそれなら」と了承して走って行ってしまった。

本当なら家まで送るのが彼氏の務めではあるうが、まだ恋人関係に実感などもないし恥ずかしいだろうからと素直に見送ると、少し遅れてマリアと一緒に帰宅の途に就く。

「……テル」

「ん？ 何だ？」

「サアヤさんが彼女さんになって嬉しい？」

「その答えに果たして正解はあるのだろうか……」

「難しいと言わない」

「……嬉しいよ。サアヤの想いが凄く真剣だったから尚更ね。マリアは嬉しくない？ オレとサアヤが恋人になっちゃったこと」

「……わかんない。でもちよつと安心。サアヤさんならテルのことちゃんと怒ってくれるから」

「そうね。マリアのお仕事が少し減りますからな」

「テルが怒らせることしなきゃいいと思う」

「おっしやる通りで。でもマリアへの頬擦りはやめてあげなーい！」

その途中で珍しくマリアから口を開いたから真面目半分、冗談半分で付き合っただけで、10歳ながらも男女が付き合うという事に理解しようとする部分が見えて微笑ましく思う反面、サアヤにかまけてマリアに寂しい思いはさせまいと心に誓って頬擦りを実行したら、案の定蹴り飛ばされてしまったのだった。

Acceleration Second 2

七王会議を明後日に控えるという日の夜に、まさかの《エピナール・ガスト》こと都田沙絢のリアル割れと告白まで受けて、企てていたレベル10到達の計画を破綻させられたテルヨシは、しかし落ち込むわけでもなく自分にはできないだろうと思っていた彼女をゲットできた喜びでむしろ気持ちは上向き。

帰宅後はハイテンションのままに夕食を作り、終始ニヤニヤしたままマリアに気持ち悪がられるなんてこともあったが、明日は明日で朝から大事な約束もあったので今日のタッグ戦の感想をマリアから聞いたあとはすぐに就寝。ようやく色々あった1日を終えるのだった。「よっし。じゃあ行くこうかね」

「惚気けて負けそう」

「ぬぐっ……そうならないように気を付けます……」

翌朝。いつもよりも少し早く起きて登校の準備を整えたテルヨシとマリアは、これから行うある人物との対戦に気持ちを昂らせて家を出る。

対戦するのはテルヨシだが、マリアも相手が相手なだけにワクワクを隠しきれずに、まだ走れないテルヨシに遠慮なしの早足でグングン先を行く始末。

急かすマリアには困ったものだと思いつつも、そこまで楽しみにしている対戦で無様な姿は見せられないなと変に緊張もしてしまいが、そんな緊張なんてすぐに吹き飛ばすくらいに仕打ちがされるだろうことも予想してマリアに急ぎすぎだとブレーキを掛けてもらう。

2人はいつもなら梅郷中学校の近くで分かれて松乃木学園に向かうマリアを見送るといのが日課なのだが、今日はテルヨシも少しだけ梅郷中学校を通りすぎて南下。

周りに迷惑がなさそうなところで止まってニューロリンカーの表示する時間を確認し、7時30分にあと20秒ほどでなるというタイミングでグローバル接続。

そして時刻が7時30分を指した瞬間に加速しマツチングリスト

を表示。そこに確かにあった相手の名前をタッチして対戦を申し込んだ。

日の光さえも射し込む隙間のない曇天の空。その雲からは絶え間なく霧状の雨が降り続け《レガッタ・テイル》となったテルヨシの体にジワジワと水滴を作り出す。

《霧雨》ステージはこれといった障害もなく比較的穏やかなフィールド属性となっているが、レーザーなどの攻撃には命中率にマイナス補正がついたりとあるらしい。

そんなのはそもその攻撃手段としてレーザーなどが無いテルヨシには関係ないので不利に働くことはないよなとちよつと悲しくなりつつも自己完結し、霧雨によって若干ながらも視界が悪い程度の環七通りのど真ん中で【FIGHT!!】の炎文字が現れて消えるのを確認。

次いで視界上のゲージに意識を向け、対戦相手となる右側のデュエルアバターの名前を見て間違いなく《スカイ・レイカー》であることを確認し、ようやく対戦に集中する意識作りを完了させる。

「カーソル、あっちだよ」

「うしっ。じゃあ盛大に吹っ飛ばされてくるかね」

「えっと、弱音？」

「ははっ。レイカー相手に泥臭く戦おうって意思表示。負ける気はないよ」

隣には観戦者として《ソレイユ・アンブッシュ》になったマリアがいて、動かないテルヨシを見ながらガイドカーソルが環七通りを南にほぼまっすぐ示していることを教えてくる。

あのレイカー相手に華麗な勝利などあり得ないので、そうした意味の言葉で暗に言っただけのもの、マリアには表現として難しかったらしく、言い直してから2人で環七通りを南下し始めた。

事前に決まっていた対戦とあって、これを実現するために間に入って交渉してくれた黒雪姫は、組むのはいいがとある条件も出してきたいて、レイカーと会ったら有無も言わずにバトル！ とはならないとわかってるために比較的のんびりと環七通りを南下していた。

しかしそれもガイドカーソルがその表示をやめたことで終わりを告げ、前方には車椅子型の強化外装に乗ってテルヨシ達を待つレイカーが、着ていたつば広の帽子とワンピースを濡らしながらも手を振って挨拶してきた。

それに軽く会釈したテルヨシとマリアは、次に周囲へとその目を向けてこの対戦に入っているだろう観戦者を探すが、まだ到着はしていないようだった。

「話には聞いたけど、本当に戻ったのね、その足」

「はい。テイルさん達の作戦と鴉さんのおかげでこの通り」

その観戦者なしに対戦は始められないので、時間潰しに会話に興じて、まずは前回の《ヘルメス・コード縦走レース》の時からの変化。

その時には残念ながら消失していたレイカーの膝から下の足が存在していることに触れ、喜ばしいその事実レイカーもワンピースをたくし上げて健在のおみ足を披露。

「じゃあ私のおかげでもあるわけよね、レイカー」

そんな和やかな会話に割り込んできたのは、何故かちよつと上からの物言いの人物で、テルヨシ達がいる環七通り沿いの建物オブジェクトの1つの屋上にいたその人物に3人が目を向け、視線を集中された人物、サアヤは腕組みしながらレイカーをまっすぐに見る。

「あらガツちゃん。偶然の観戦にしては良いタイミングね」

「アンタがガツちゃん言うな。それに偶然じゃなくてちゃんとお招きを受けてるわよ。その自信過剰男にね」

「自信過剰って……」

「レベルで並んだくらいで勝てる相手じゃないってのに、どうやったのかこんなカード組んで。労力を考えたら勝つ気満々じゃないのよ。それが自信過剰じゃなくて何なのかしらね」

「紛うことなき自信そのもの!!」

「アホだ……」

「テイルがアホでごめんなさい」

「……アンが謝るの?」

「子の務めかなって」

挨拶こそレイカーに対してだったサアヤなのだが、いつの間にかテルヨシとマリアとの掛け合いになってしまつてレイカーが蚊帳の外という状況。

本来ならレイカーのような立場なら呆然としてしまふが、大人なレイカーはその状況でも呑気にクスクスと口元に手を添えて笑つてみせて、笑われたテルヨシ達はそこで掛け合いをやめてサアヤが咳払いし相手をレイカーにし直す。

「まあテイルの無謀はそれとして、レベル8になりたてのこれに負ける姿つてのも見てみたいもんだけど?」

「あらあら、ガツちゃんはわたしが負ける様を見てニヤニヤしたいのね。そんなに嫌われるようなことをした覚えはないのだけど?」

「どの口が言うか! アンタに因縁のない健全なライバルなんて加速世界にいるかもわからないわよ」

「酷いわガツちゃん。わたしは一生懸命に勝とうとしてるだけなのに……」

「……………もういいわよ。始めるならどうぞ」

おそらくバーストリンカーとしてデビューしたのがかなり初期であろう2人の間に過去、何があつたかなどテルヨシが知る由もないが、見ている面白い2人だなあとか、昔からこんな感じなんだろうなあとか思つたりしてクスリとするものがあつた。

しかしそれを面に出すとガストが怒りそうなので心の中で笑つておきつつ、マリアが何も言わずに自分から離れてガストの元へとジャンプしていったから、ようやく来たかとガストとは道路を挟んだ反対の建物オブジェクトの屋上へと目を向ける。

「ガツちゃんからもオツケーもらつたんで、始めてもよろしいかな、ロータス」

「ああ。あまり会話に比重を置くと止まらないくらいには花が咲くのでな。ガストが萎えてるなら始めた方がいい」

「そんな仲良く話したりしてたっけ? 顔を合わせりや対戦ばかりだった気もするけど」

「お前とはリアルでも色々共通点がありそうだったからな。私は割

と友好的だったぞ」

「そう言われればそんな気も……主にこれとか？」

「……皆にわかるジエスチャーはやめてくれ……」

そこには今回の対戦を観戦するという条件を出してきた黒雪姫とハルユキ、タクムの姿があり、ハイランカーが4人もいるせいでハルユキとタクムは口を開くことも躊躇ってる雰囲気。

対して黒雪姫は昔馴染みということもあって何故いるという疑問も口に出す前にガストと絡んで、話の中でガストが胸を示すジエスチャーをやると明らかに恥ずかしそうに口を閉じてしまう。

リアルルのアアヤは黒雪姫よりも全然大きかったので勝ったな。とか意味不明なことを思いつつもテルヨシは、本当に花を咲かせそうなノリの2人には少し黙ってらって、ようやく役者が揃ったのでレイカーとちゃんと対面。

「んじゃまあ、万全になったレイカーってやつを相手にさせてもらいますかね」

「前回にお会いした時は確かレベル6だったと思いますけど、この1週間で2つも上げちゃって大丈夫ですか？」

「ポイントの方？ それなら余裕だ……」

「ではなくて。レベル8になったことを後悔しないでくださいね。ということですよ」

「……………うえい」

軽く柔軟をしながら仕掛ける了承みたいなものを取りにいったテルヨシに対して、余裕をうかがえる返事と共にプレッシャーを上げたレイカーは、始めから全開で来そうな感じ。

それには一瞬だけ怯んだテルヨシだが、自分がこのあとにやろうとしていた野望で当たり前とさえ感じるだろうプレッシャーに臆しては、挑戦することさえおこがましいことだと意思を強く持ち、パドとの対戦時に培った『勝つための意識』へと切り替える。

そのわずかな変化にも敏感に反応しただろうレイカーも、車椅子に座っているながらその状態で迎撃する意志をテルヨシに伝えてきた。

……………マジで座ったままで？

なんて思うのも仕方ないが、相手は百戦錬磨の猛者。あの黒雪姫とさえ並ぶだろう実力者にこつちが手加減してやれることはない。

そんな意味も込めて脱力した体から瞬間的に加速して一直線にレイカーへと迫ったテルヨシの先制攻撃は鋭く突くようなドロップキック。

ほとんど真横に跳んだドロップキックはレイカーの体の中心へと迫るが、当たる直前で巧みな車椅子捌きで左右の車輪をそれぞれ逆に回してその場で回転。

その回転でテルヨシのドロップキックは空を切り、さらにわずかに横にスライドをしていたレイカーはテルヨシの背中の方へと位置取って回転の勢いを利用した右掌底を背中へと打ち込む。

それをモロに受けたテルヨシの体は進行方向から真横に吹き飛ばす衝撃で思考が飛びかけるが、ギリギリで《テイル・ウィップ》を地面に付けてそこを起点に軸回転して体をぐるんっ。

時計回りでテイル・ウィップを回り込んで掌底を放ったレイカーの背後から迫るというちよつとあり得ない挙動で再び左足での蹴りへと繋がったが、そこまでレイカーが反応するには十分すぎる空白があったため、今度もその場で反転して左の掌底を足に当てて相殺。

「ふんっ、にゃあー」

蹴りを掌底で相殺されたのは少なからずショックはあったが、そこで終われば追撃は免れないので、気合いの入ってるんだか入ってないんだかな声と共にレイカーの左手と接触する左足を軸にまた体を時計回りに回転させて、レイカーの真上から勢いに乗った右足のかかと落としをお見舞い。

今度はタイムラグがほとんど発生しなかったこともあり、レイカーも迎撃ではなく回避を選択し素早く車椅子をバックさせてかかと落としを避けたが、直後に着地して距離を取ろうとしたレイカーの車椅子の車輪の後ろにテイル・ウィップを伸ばしてあえて踏ませることでストップさせる。

それによつてかくんっ、と意図しない制止を受けて体勢の崩れたレイカーの隙を逃さずに渾身の右回し蹴りを放ってクリーンヒットを

狙う。

このタイミングなら車椅子を回転させられずに別の方法でしのぐしかない。

それを確信しながらほぼ全力で振り切った右足はぶうん!!

まさかの空振りに終わり、フオロースルーに入ったテルヨシは直前にレイカーがどう動いたかを捉えていたが、ちよつと自分にとって残念な避け方をされて心が折れる。

直後、テルヨシのほぼ真下から浮き上がるようなレイカーの右足が足裏を見せる状態で強襲し顎に強打を与えてきて、その衝撃で軽く浮き上がってしまう。

そしてリカバリーに入るより早く今の蹴りから立ち上がったレイカーのお返しとばかりの流れるような回し蹴りで派手に吹っ飛んでしまった。

吹っ飛んだのに加えて盛大に地面を転がって道路脇の建物オブジェクトにぶつかってようやく止まったテルヨシは、ズキズキと痛む体を確認しつつ視界上の表示を見ながら立ち上がる。

ここまでの攻防でテルヨシのHPゲージは4割を消費し、対してレイカーは1割も削れていない。

ダメージばかりが先行してしまっただが、おかげで必殺技ゲージはすでに7割は溜まっていて戦術にいくつか必殺技を組み込めるかなと考えながら今度はレイカー本体に目を向ける。

今の攻防でレイカーはテルヨシの回し蹴りを車椅子から滑り落ちることで躲して、そのまま懐へと侵入して攻撃に繋げてきたのだ。

そのおかげで重い腰を車椅子から下ろすことに成功し、回避の際に脱げた帽子と着ていたワンピースを排除して、車椅子もストレージに戻しテルヨシが戻ってくるのを待つ形。

「形勢不利。なんてしよつちゆうだし、落ち込んでも仕方ない」

そんな強者の余裕にも見えるレイカーの態度に腹を立てることもなく短く息を吐いたテルヨシは、レイカーの相手の力を利用したカウンター戦術が厄介と判断して不用意に突っ込まず、まずは歩いて射程圏内へと近づいていく。

「やっぱレイカーは強えよ」

「テイルさんも少し油断すると一気に持っていかれそうで怖いですよ」

「そりや嬉しいね。先輩にプレッシャーを与えられてるなら、オレの攻めも捨てたもんじゃないってことだ」

近づきながらインターバルに見せた会話をするテルヨシとレイカーだが、こうして話す間も油断など一瞬もなく、方が一があるかもと仕掛けたテルヨシもこれには苦笑いしてから、互いの仕掛けられるだろう距離、約8mに差し掛かったところで先手を打つ。

《インパクト・ジャンプ》

発動したインパクト・ジャンプで一瞬で距離を詰めて攻撃。

そんなことはレイカーに読まれていただろうとテルヨシは考えつつ、あえてその必殺技を使ってレイカーの動きを観察。

必殺技発声とほぼ同時に前方を庇いながらバックステップを踏んだレイカーの対応はさすがだが、その動きを誘発させたテルヨシは必殺技でやや前気味の真上へと跳び、到達点から見下ろしたレイカーがまだこつちを見ていないのを確認してその体を上下逆さまにして即座にインパクト・ジャンプ。

《インスタント・ステップ》の足場によって発動ができたハイ・ジャンプで今度は急降下したテルヨシの着地点にはもちろん、ギリギリで上を向いてきたレイカー。

ここでも本当に度肝を抜くほどの反応で両腕の防御を持ち上げてきたレイカーだったが、必殺技の加速と重力落下による全体重を乗せた蹴りはその防御を容易く打ち破ってレイカーの胸の中心に突き刺さって後ろへと倒し、さらに背中から落ちて地面をバウンドして吹き飛ばす。

——まだだ！

次があるかどうかさえわからない好機を逃すまいと、レイカーにぶつけて殺した勢いのおかげで綺麗に着地して、ギリギリもう一回使えるインパクト・ジャンプで吹き飛ばすレイカーに更なる追撃に出る。

「インパクト・ジャ……」

だがその手に出る前にレイカーが吹き飛びながらその体を前後で反転させて頭をこつちに向けてきて、その間に背中にはレイカーの力の象徴である《ゲイルスラスタ》が着装されるのが見えたのだ。

このまま突っ込めばブーストしたレイカーと派手にぶつかってしまふ可能性が頭をよぎってしまったテルヨシは必殺技の発動を躊躇い、その隙にゲイルスラスタを作動させたレイカーは地面に付く前にその体を吹き飛んでいた方向からテルヨシへと180度エネルギーを転換して物凄いブーストで地面スレスレからほぼ一瞬で間を詰めてきた。

あまりに早く懐に入ってきたレイカーに対してテルヨシが出来たのは、突き出されていたレイカーの拳を腹で受けて掴み、建物オブジェクトに突っ込まれる前にテイル・ウィップで地面を強く叩いて自分の体を無理矢理跳ね上げレイカーを飛び越えるくらいのものである。

攻勢など出る余裕すらなかったテルヨシが体勢を崩されながら受け身を取って地面に着地し、すぐさまやり過ぎしたレイカーに振り向くと、ゲイルスラスタを弱めて建物オブジェクトの前で止まり着地したレイカーは、やはり先ほどのダメージは効いたのか建物オブジェクトの壁に背中から寄りかかって蹴りを受けた胸を押さえる。

「はあ……はあ……女の子に容赦ないですね」

「ああその……リアルの方でなんか調子崩したら、あれ経由で請求していいよ？」

「いえいえ……ここまで綺麗にダメージを受けたのが久々で、嬉しきの方が上回ってますからお気になさらず。ダメージも平らになつてしまいました」

距離的にテルヨシにしか聞こえない音量で話したレイカーがちよつと罪悪感を覚えることを言うもんだから、反射的にその身を案じる言葉で返してしまう。

しかしレイカーはそんなことをしてもらいたいわけではなく、長らく前線から離脱していたゆえか、ここまでの対戦が久々で面にこそあまり出ていないがテンションが上がってきてるのだと言う。

見れば視界上のHPゲージも互いに残り3割程度となっていて、必

殺技ゲージはレイカーが満タンなのに対して、テルヨシは3割程度。

レイカーが必殺技ゲージを消費するタイプのアビリティや必殺技を持つてるかすらわからないテルヨシはまずそこに細心の注意を払わなければならず、必殺技ゲージとは違うゲージを消費するらしいゲイルスラスタターがどれくらい動くかも視野に入れておく必要がある。

HPゲージの上ではほぼ五分でも、状況的にはレイカーに分があると言えるので、残りのHPからリスクを負う攻撃はせいぜい1度が限度。

それはレイカーも同じだが、不思議と双方がそのリスクを負わなければ勝てないと確信する何かを感じ取って、そのリスクを伴う攻撃を仕掛ける策を巡らせる。

「……………次で最後かも？」

「……………かもしれないね」

いかに相手の攻撃を避けて自分の攻撃を通すか。

対戦経験の豊富なレイカーはその辺でもテルヨシよりいくらか有利ではあるが、テルヨシとて《逃走王》エスケープ・キングの称号を持つ逃げの達人。

逃げるためには相手の攻撃を正確に先読みする力は不可欠だし、それを培ってきたバトロワ祭りをもっと余裕がない状況がほとんど。

——やっつてやれないことはない。

それを考えればレイカーという明確な相手がいる状況は自分にとって有利だ。

と思うことでポジティブになったテルヨシは、建物オブジェクトから背中を離して構え直したレイカーを見据えて、その意識を限界まで研ぎ澄ませていった。

Acceleration Second 3

始まった《スカイ・レイカー》との壮絶な対戦は、残りHPゲージを互いに3割ほどにしたところで佳境を迎える。

両者がダメージからの回復を待つインターバルで会話に興じている間、テルヨシは後ろで《テイル・ウィップ》を巻き貝のようにして窪みのある器を作り、そこに絶え間なく降り続ける霧雨で雨水を貯めていた。

「まあオレが挑戦者って立場だし仕方ないけどさ、ここらでレイカーから仕掛けてくるってのもいいんじゃない？」

「そういえばわたしは受けだけでしたね。そちらの方が性に合ってるというのがありますけど、得意分野でだけ挑戦者に受けて立つてもカッコ悪いですね。その挑発、乗ってあげますよ」

その雨水がある程度貯まるタイミングを体に出来る水滴からおおよそで割り出して、振り向くことなくレイカーを挑発するテルヨシ。

というのも雨水を貯めた状態で自分が仕掛けるにはちよつと動きがぎこちなくなってしまうって、それによってレイカーに付け入る隙を与えてしまいかねなかったから。

もちろんレイカーが視覚的に見えなくはされてるテイル・ウィップに気づいていてあえて挑発に乗ってきた可能性もあるので、作戦が失敗することも視野に入れて動く必要はあるが、失敗を恐れて何もしないことの方が愚か。なら先の先を読めばいい。

「……いきみますよ」

この対戦で初めてレイカーから仕掛けてくることに少し緊張しつつ、そんな断りを入れてから仕掛けてきたレイカーの進撃はテルヨシの全速よりは遅いまでも近接系としての素の速度では速い部類。

《ゲイルスラスタ》による加速は使わずに接近してきたところから、勝負どころはまだのようだが、テルヨシ的には使われる前に決着が望ましい。

一直線に迫ったレイカーは構えるテルヨシに対して抜き手のような右手の突きで先制し、顔めがけて来たそれにビビることなく最小の

動作で外側に躲してカウンターのパンチを顔面に叩き込もうとする。

しかしそれはレイカーが誘い込んだ攻撃であったのか、繰り出したパンチは左手で完璧に受け止められて、クロスする右腕がテルヨシの右腕を絡め取って合気道に似た技で関節の稼動域を利用して地面に倒そうとしてくる。

曲がらない方向に曲げられる関節に上手く力が入らないテルヨシは為す術なく地面に倒されそうになるも、その力に抗わずに逆に勢いをつけることで体を1回転させて転倒を阻止。

ついでに極められそうだった右腕も抜き取って着地後すぐにバックステップし体勢の建て直しにかかる。

が、それすら読んでいたらしいレイカーの動きは機敏を通り越して予知に近く、バックステップしたテルヨシと速度を合わせて距離を詰めて間を開けさせずに左右の手から繰り出された水平チョップが空いた両脇腹へと突き刺さりHPゲージがガリツと1割削れる。

「肉を、切らせて……」

「——ッ!!」

それでもテルヨシは怯むことなく繰り出されたレイカーの両腕を掴んで挟み拘束すると、その伸ばされた腕の肘を狙って膝蹴りで強打。

関節も意識したそれにはレイカーも抗えず、命中した左肘は激しいスパークと共にHPゲージを1割削り、肘は良からぬ方向に折れてしまう。

いくら仮想世界でのこととはいえ、骨折レベルの損傷はレイカーの思考をわずかに鈍らせ、動きが止まった瞬間を見逃さずに腕を放して1歩後退。

ここで貯めに貯めたテイル・ウィップの雨水をレイカーの顔面めがけてぶっかけて思考と同時に視界も一瞬奪って攻撃へと転じ、深く屈みながらの時計回りの右足払いでレイカーを宙に浮かせ、足払いから流れるように軸足で強引に立ち上がりながら今度は倒れかかったレイカーの頭に渾身の回し蹴りを叩き込む。

「だっしやらああああ!!」

叫ばずにはいられない気力全開の攻撃はテルヨシからすれば完全に不可避のものだった。

事実、テルヨシの回し蹴りは倒れかけるレイカーに命中したのだ。しかしレイカーはテルヨシの蹴りが当たったのと同時にいつの間にか上下で逆に噴射口を変えていたゲイルスラスターを起動して蹴りの振り抜き速度を越える速度で横へと動きダメージをほぼ無効化。結果的にレイカーの頭を軽く撫でた程度の蹴りにしかならなかった渾身の攻撃がフォロースルーに入ったところで、レイカーがゲイルスラスターを起動したまま地面を蹴って体の向きを調整して噴射口を元の位置に戻し、そのまま攻撃へと転じてきたのを確認。

全力の蹴りだったのと、強引な立ち上がりで酷使した左足がガクガクになっていたのもあり、レイカーの接近に対応が遅れたテルヨシが取れた咄嗟の行動は《インパクト・ジャンプ》による緊急回避。

物凄い速度で迫ったレイカーはなんとかやり過ごせたが、必殺技発動時にモロに力を込めた方向がわかる感じにしてしまったせいで、大きくバツクジャンプしてテイル・ウィップの補助付きで着地は成功したが、その時にはもうレイカーが方向転換を終えてテルヨシに再度迫ってきていて、もう1度だけ使えたインパクト・ジャンプを使う暇もなくゼロ距離に迫ったレイカーの突き出された右ストレートがクリンヒット。

壮絶な加速を得たその拳によって残りのHPゲージは容易く吹っ飛んでしまった。

——惜しかったなあ。

そんな感想を抱きながら物言えぬ浮遊霊のような存在になって死亡マークの付近であぐらをかいたテルヨシは、視界の「YOU L O S E」の炎文字を見るまでもなく敗北を受け入れて反省会。

思考と視界を奪ってまで仕掛けた攻撃が避けられるなんてこれっぽっちも考えてなかった。

それが敗因だなど自分の慢心に渴を入れてみると、死亡マークの近くにレイカーが近寄ってきて、健闘したテルヨシに労いの言葉をかけてくれる。

「ナイスファイトでしたよ。遠ざかりつつあったわたしの対戦勘がギリギリのところに戻らなければ、結果は変わっていたかもしれないですね。また機会がありましたらお手合わせ願いたいですね。ティルさんは不思議とそう思える清々しさがありません」

凄く嬉しいことを言っただけではなく、生憎とその言葉に物理的に返事ができないテルヨシは、あとで黒雪姫にメッセージを伝えてもらわなきゃなと思いつつ、その言葉を受け取ってレイカーがこの対戦を閉じたことで現実世界へと意識が戻されていった。

現実世界へと意識が戻ったテルヨシは反射的にグローバル接続を切りつつ、隣のマリアに視線を向けて申し訳なさそうにするが、負けてきたテルヨシに対してマリアはグローバル接続を切りつつニコツと笑ってくる。

「負けちゃったけど、凄かったよ」

「んー……次は負けない？」

「何で疑問系なの？」

「いや、言葉ではそう言っておくべきかなあと」

「言うならちゃんと言う方がいいよ。あとサアヤさんから伝言。『なに負けてんのよ！』だって」

「厳しいよお……」

落胆させたかと思っただけのもの、対戦自体はマリアにとって楽しめたものになったようなので安心しつつも、彼女の厳しいお言葉には涙するしかなかった。

まあサアヤの厳しさは今に始まったことではないので今さらかと開き直ったところで、朝の約束事を終えマリアのお見送りとなってハイツチから学校に向かおうとしたところ、ふと何かを思い出し立ち止まるマリア。

「あつ、今日はお店に行かないで家にいるから」

「何だ？ 宿題でもするの？」

「内緒」

「にやんだとー？」

それによって伝え忘れた案件は学校が終わってからバイト先には

来ないというもので、当然ながら理由について尋ねたテルヨシにはぐらかしに来たマリアは、言及される前に走って行ってしまい、悪いことをするつもりならわざわざ言ってくるわけもないので、気にはなりつつもどうせ様子見にも行く暇はないから了承するしかないのだった。

学校では着いてすぐに朝練をしていたチユリに見つかって、そういう観戦者としていなかったなど1人納得しながら、対戦自体は知っていたチユリに結果報告をして別れて教室へと行き、一足早く来ていた黒雪姫にレイカーへの伝言を残していつもの日常へと戻る。

放課後のバイトも問題なく終わらせて、今日は新宿第2戦域での領土戦に参加してきてようやく帰宅。

時刻は午後6時になる少し前といったくらいで、それもまあいつもとほぼ変わらないことではあった。

「おかえりー」

「おかえりなきーい」

「……………ん？」

だがリビングに入って聞こえてきた声は聞き慣れたマリアのものともう1つ、これも聞き慣れた声がして不思議に思い、リビングのソファでくつろいでいたマリアとは違い、姿なきその人物を探してキッチンの方に目を向けると、いた。

「ん？ ああ、お邪魔してまーす」

「マリーアーさーん」

「はーい」

「なーんでサアヤがいるのかなー？」

「遊びに来るって言ってたからー！」

「はい聞いてませんっ！」

「ひゃふんっ」

その人物、サアヤはちよつとメンズ寄りのシャツとパンツの私服にエプロンをつけて夕食を作っていたらしく、呆然とするテルヨシに少し振り返ってすぐ調理に戻る。

そんなサアヤは1度無視してリビングにいるマリアに向き直って

その辺を絶対知ってるだろうと詰め寄ると、なんかテンション高めで悪気もなく親指を立てて言うもんだから反射的にデコピンをお見舞いしてしまった。

すると今度はキッチンからサアヤが寄ってきてテルヨシの頭にチョップを加えてくるもんだから何故にと振り返る。

「こら、マリアを怒るのは筋違いよ」

「じゃあサアヤが内緒にしろって言ってたわけね」

「そんなことも言ったかなあ。っていうか遊びに行く的なのは言っただじゃない」

「昨日の今日だよ!! 近いうちになって近すぎない!!」

「なに? 迷惑だったって言うんだ? ふーん」

「いいや! とても嬉しいです!」

どうやら今朝の対戦の時にでも観戦ついでに遊びに来ることをマリアに告げていたっぽいサアヤの来訪はテルヨシにとって突然で、呑気な言動には思わずツツコンでしまったが、嬉しくないわけではないのでその辺は全力で訂正しつつサアヤのご機嫌は取っておく。

「それならいいけど、明日は日曜だし問題ないわよね?」

「……………」

「だから休みだから泊まっても問題ないわよねって言ってんの。マリアの許可はもう取ってるけど、家主はアンタだし一応ね」

「……………」なるほど。オレと一緒に寝たいと?」

「どこをどう解釈したらそうなるのよ……………マリアと一緒に寝るに決まってるでしょ。バカ言ってる暇があるなら手伝ってちょうだい。もう少しで出来るけど手は多い方が早いし」

「男をオトすならまず胃袋を驚掴めと言いますしな。良い心持ちじゃ」

「アンタ人の話を聞かないわね……………」

「聞いた上でふざけてる」

とりあえず遊びに来たことはわかったので、夕食まで作ってくれてることから少し長居するのかなと思っていたら、がつつり泊まってく旨を知らされて思考停止。

確かに泊まりに来るようなことを昨日に言っただけでなく泊まりにまで来るとは予想外。日の今日で遊びに来るだけでなく泊まりにまで来るとは予想外。

それでもマリアがすでに歓迎ムードでテンションが高いし、夕食まで作ってくれた手前で泊まる気満々の女の子を帰すのは残酷すぎるので、テルヨシもすぐに受け入れ体制からおふぎけモードに移行しつつもの調子に。

そしてマリアとやってるような家でのおふぎけをサアヤとやってから、端から見たテルヨシとサアヤが面白かったのか、クスクスと笑うマリアに2人して釣られて笑ってしまい、どうせだからとそのあとは3人で夕食の準備をしていったのだった。

サアヤは意外にも和食が得意らしく、作られた料理もしょうが焼きと刻みキャベツにホウレン草のおひたし。ワカメと豆腐の味噌汁と純和風なラインナップ。

アメリカ育ちなテルヨシはここまでの和食を作ったことがなく、洋食が中心だったのでなんだかとても新鮮で、マリアもおばあちゃんと一緒に暮らしていた頃を思い出したのか、テルヨシの料理より嬉しそうに食べていた。

サクラのように壊滅的なオリジナリティーを出すこともなく作られた料理はとても美味しく、テルヨシもマリアも大満足なまま完食し、初めて振る舞った料理が好評だったサアヤもホッ、と胸を撫で下ろしてから後片付けを始めて、テルヨシも手伝いつつ、マリアにはお風呂の準備を頼んでおく。

こうした些細なことでも知らないことだらけなテルヨシ達は、改めて自分達の関係が現実で始まったばかりなのだと言いつつ、恋人同士だということを思い出してする共同作業がなんだか気恥ずかしくなったりしたのだった。

「現実とは残酷なものである……」

「バカ言ってるじゃないの」

「変なテル」

それから女2人が仲良くお風呂に入って、テルヨシがそのあとに1人寂しく入浴を済ませたまではあくまで当然の出来事で納得できた

が、いざ寝るぞ！ となった時にひよつとしたら3人で雑魚寝くらいはと考えていただけに、意気揚々とマリアの部屋に行こうとする自前のパジャマ姿の髪を下ろしたサアヤとマリアに愕然。

食事中に言っただけなのに、今日はマリアとの親交を深めるのが目的なので、テルヨシよりもマリアが優先されることは理不尽だと文句も言えない状況。

しつかりと外堀も埋めていくサアヤの堅実さには恐れ入るが、単純にマリアが可愛すぎるからな気がしないでもないので、マリアの魔性の女性的魅力に嫉妬しつつも、この短い時間で姉妹のように仲良しになった2人を見てそれには微笑ましく思いながら自室に入って、それでもやっぱり寂しくて泣き寝入りするのだった。

珍しく泣き寝入りなんてしたもんだから、マリアがサアヤの家に移り住むという変な夢まで見て目を覚ましたテルヨシは、深夜の1時を回っていた時刻を確認しつつカラカラになっていた喉を潤すためにキッチンへと足を伸ばす。

冷蔵庫から麦茶を取り出してそれを飲んでみると、トイレから水の流れる音がしたので少し黙っていたら、丁度サアヤも水でも飲もうとしたのかキッチンへとやって来てテルヨシとばったり。

「テルも目が冴えたの？」

「サアヤとマリアが意地悪するから寝付きが悪いんだもん」
「子供か」

明かりが乏しかったのでテルヨシがいたことに多少は驚いたようだが、少し眠気もあるのかりアクションは薄かったサアヤは、洗うのも面倒だしとテルヨシが使ったコップを拝借して麦茶を飲むと、いじけ気味のテルヨシを察してすぐにマリアの部屋には戻らずにリビングのソファで話をしようとする提案してくる。

断る理由もないし眠気も微妙だったからテルヨシもそれに了承してサアヤと隣り合ってソファに座り、互いに顔は見ずに正面を向いたまま話をする。

「いい子ね、マリアは」

「当たり前だろ。あっちでもこっちでも自慢だよ」

「私もあんな可愛い《子》が欲しかったわ」

「それは《イーター》が可哀想な発言ね」

「あの子は……良くも悪くもマイペースだから、私が色々言うのを鬱陶しいって思ってる節があるのよ。男の子って本当によくわからないわ」

「そこはほら、男のプライドが邪魔するみたいなあれよ。カッコつけたい時期ってのは男にはあるもんだし」

「テルにも覚えが……って、今もか……」

部屋でどんな話をしたのかはわからないが、現実のマリアと知り合ってそんな話を述べたサアヤはこれからもマリアと仲良くしてくれそうだと安心。

嫌う方が難しいくらいに良い子なのは疑わないから心配などしていなかったが、女同士だからな部分を示すような子の話もするから、ちよつとぞんざいな扱いをされた《アイス・イーター》へのフォローをする。

しかしそれも自分に返ってくる言葉のカウンターで撃沈しガツクリしたら、小さく笑ったサアヤはごめんと謝ってくる。

「まあテルのカッコつけは寒いけど、私は自信なさそうに対戦するイーターよりずっと好きよ」

「比較対象がイーターなのね……」

「なに？ テルをライダーくらいのレベルと比較したら可哀想でしょ。あっちは実力あつてのカッコつけだもの」

「そう言われるってことはオレもまだライダーより劣ってるってことか……サアヤの1番は遠いな……」

流れるように辛辣な言葉を放つサアヤの容赦のなさにはグサグサとテルヨシにダメージを与えてきて、それにちよつといじけるようなことを言つて気持ちも沈みかけたのだが、直後に隣のサアヤがとんつ、とその頭をテルヨシの肩に乗せて体重を預けてくる。

「それはそれよ。一応、私の今の1番はテルなんだから、そんな落ち込まないでよ」

「……サアヤのデレが破壊的に可愛いんだけど、このまま抱き締めて

も怒らない?」

「セクハラでマリアに訴えるわよ」

急なサアヤのデレには驚くものの、嫌なわけはないから雰囲気的に攻めるべきかと了承を取りに行くが、割とマジなトーンで拒否されたので仕方なくそのままの状態で話を続けることになる。

「レベル10への道は敬遠してくれたけど、これからどうするか考えた?」

「それなあ……今のところ確定的な道はないんだけど、色んなやつから噂とかは聞かし、チャレンジする価値はありそうなところを目指すのがいいかもな」

「レベル10以外でささやかれてるゲームクリアって言う……テルがずつと敬遠してた戦場の方か」

「そもそも対戦格闘ゲームってだけのブレイン・バーストなら《無制限中立フィールド》なんて上位フィールドは必要ないんだよね」

「上限値がある状態のバーストポイントは加速とレベルアップする人が増えるだけ総量は減るだけだし、救済措置って名目だと思ってたけど、だったらレベル4以上って制限を加えてる理由がわからないしね」

「色んなところで引つ掛かる作りがあるんだよ。だからこそレベル10になって開発者と話す権利ってのを取るのも選択肢として間違っていない!」

表情こそ見えないが普通の会話は恥ずかしくて出来ないと判断したのか、真面目な話で繋いできたサアヤに合わせてテルヨシも真面目に話をするが、またレベル10への道を進む可能性を示した直後に頭を持ち上げて顔面にぶつけられてしまう。

あくまでも選択肢としてあったのだと言いつつ謝って、改めて今後の当面の目標をサアヤに話してみる。

「まずは《帝城》の攻略を基盤に色々と模索してみようと思う。さしあたってはその門番である4体の《超級》エネミーの戦力調査が最優先ってところ?」

「……………サラツと言うけど、まだ誰も成し得てない帝城攻略よ?」

努力と工夫でどうにかなった四大ダンジョンとは訳が違うんだからね？」

「目標は高いくらいでいいんだよ。叶いそうとか届きそうな可能性がある人と人ってのは油断するからね」

それがどれほどの偉業かをよくわかってなさそうなテルヨシの軽い感じに頭を抱えそうになったサアヤだったが、長いため息で色々なものを吐き出してから呑気なテルヨシに言葉を返してくる。

「……まあ、テルの道を閉ざした私が文句を言うのは筋違いだし、別の道を一緒に目指すって約束もしたんだから、ついていくわよ。その上でテルのことは私が守る。だからテルは私を……守りなさい……」

普段はサアヤの方がノーブレイキなのに、目指す道の上ではテルヨシの方がノーブレイキなのは笑えるが、持ちつ持たれつな関係が嬉しかったテルヨシは、ついてきてくれると言ったサアヤを絶対に守ることを約束し、それ以降は口を閉ざしてしまったサアヤが静かに寝息をたて始めたのがわかってちよっと困ってしまう。

このままの状態で寝るには苦しくなるし、一緒に寝たら寝たで翌朝にマリアの方が早く起きて見られるとあれな感じになるしで、悩んだ末にサアヤを自分の部屋に運んでベッドに寝かせて、自分はソファアールで一夜を過ごすという最善を取るようになるのだった。

Acceleration Second 4

2047年6月16日、日曜日。

《ヘルメス・コード縦走レース》から丁度1週間となった今日この日。

加速世界で大きな意味を持つ会議が行われようとしていた。

約3年前に、たった1度だけ開催されたレベル9バーストリンカー《純色の七王》が集まった《七王会議》。

それが今日、これから数分後の午後2時ジャストに青のレギオン《レオニーズ》の幹部《コバルト・ブレード》と《マンガン・ブレード》の対戦にギャラリーとして入る形で行われる。

昨夜、突然のサアヤの宿泊で、翌日に流れでデートでも誘われたらどうしようかと思ったのだが、サアヤも午前中は習い事があるからと朝食後にあっさりと帰ってくれてひと安心したのも少し前のこと。

そんな嬉しいハプニングのあとに会議の場として指定された千代田戦域。

その広大な戦域の中でテルヨシも会議への参加要請を受けて現在、午後1時56分となった時刻に電車を利用して地下鉄の水道橋駅を降り、その近辺で腰の下ろせる場所にて待機していた。

会議は参加者のみに時間と場所が開示されているため、基本的には今日の会議を知るバーストリンカーも極一部——7大レギオンのマスターと幹部くらいだろう——となっていて、サアヤはもちろん、テルヨシの《子》であるマリアもこの会議については知らず、今は新学期になってからやっている学校の委員会の用事で日曜日ではあるが登校している。

そんな事情のある中で行われる会議も気付けばもう開始1分前。

何かのミスでギャラリーとして入れなかったら大事なので、一応この段階からニューロリンカーをグローバル接続して、観戦者登録がちゃんとされてるかの確認もおき、視界の時刻が午後2時を示した瞬間。

テルヨシの耳に聞き慣れたら加速音が響き、次いで「A REGI STERED DUEL IS BEGINNING!」という炎文字が現れ消えると、対戦フィールドの構築とデュエルアバターへの変身が完了した。

視界上を見ればちゃんとコバルとマーガの名前が左右に表示されていたので、ギヤラリーに入れたことは間違いないかと安心しつつ、今回の構築フィールドである《魔都》ステージの物々しい雰囲気がこの先の会議の雲行きを表しているような気がしなくもない。

とかなんとか思いつつも100秒以内に集合するようにと指示があったことを思い出して、ガイドカーソルが示す場所を目指してギヤラリーに与えられた移動力を最大限生かして動き始めた。

ガイドカーソルが指し示していた場所は現実世界においては侵入不可の《皇居》において一般開放されている《東御苑》の辺り。

その小高い丘の上に見知った姿のデュエルアバターがすでに何人か姿を見せていて、そこへと続く道に降りて階段を上がり、広大な石畳と鋼鉄の円柱が輪を作って立ち並ぶ空間へと辿り着く。

テルヨシの視界にまず映ったのは背中を向けて奥のコバルとマーガと話しているっぽい《ブラック・ロータス》《スカイ・レイカー》《シルバー・クロウ》の3人。

雰囲気的に良くはなさそうな両陣営には少なからず因縁があるのだろうから仕方ないとしても、それが続くのはどうかと思ったので、無駄に跳躍して空中で無駄な回転やら捻りやらを加えて両陣営のど真ん中に着地。

「この喧嘩、オレが買うー!」

「……………いや、喧嘩など始めからしていないぞ、テイル」

「そうですよテイルさん。あちらが最初から喧嘩腰なだけで、わたし達は和やかに会話していただけです」

「貴様ら、ぬけぬけと」

一応、空気を読んだ上でシラケるかなあといった言葉で流れを変えにいったのだが、黒雪姫とレイカーがまさかの流れを戻そうとするもんだから苦笑い。

「コバルちゃんもマーガちゃんもカリカリするとシワが増えるからそのくらいにしておきなつて。ナイトもカツコつけて座つてないで止めてやればいいのに」

人を煽る才能は何故か高い黒雪姫とレイカーを諭したところで右から左に流される気がするので、ここはコバルとマーガに大人になつてもらおうと言葉をかけつつ、2人の後ろで円柱の柱を綺麗に横一線して椅子にしたものに腕組みしながら腰を下ろす《ブルー・ナイト》にも仲裁に入ってもらおう。

そもそもコバルとマーガはナイトがひと声かければ喧嘩などすぐにやめるくらいには従順なのに、それをせずに後ろでニタニタしてたのだから、黒雪姫とレイカーに負けず劣らずの性格のひねくれ方だ。

「いやあ、止める前にお前さんの姿が見えたから、なんか面白い止め方するかなと思つたんだが、期待を裏切らないねえ」

「ご期待通りに動いたんだからこれで終わりでいいだろ？ 無駄話してると登場するにできない連中が困るだろ」

「おっと。時間も有限だしな。これはテイルが正論だし、コバルもマーガもその辺にしとけ」

「はっ」

かつて赤の王《レッド・ライダー》の首を取つた黒雪姫を前にして、そのライバルであり親友だった男がこうまで落ち着いて余裕すら見せるのは恐怖もあつたが、頭に血が上がつたトップが会議にいたら荒れるだけなので大人な対応をしてるだけなんだろうと思いつつ、喧嘩腰だったコバルとマーガもナイトの声でその脇に移動しようとする。

しかし会議の場にしてはナイトだけ椅子が用意されてるといふ不公平さは拭えず、その辺で黒雪姫が「椅子を用意しろ」と言うと、また喧嘩腰になりそうになつたコバルとマーガを押さえて「その通りだな」と対戦者である2人に指示。

その指示を受けて渋々にも見える態度で半円を描くように並んだ柱を6つ、腰の刀型強化外装で鋭い抜刀から両断し手頃な椅子を作り出した。

「……へいコバマガちゃんズ。椅子が2つほど足りないY O！」

だが用意された椅子はナイトのを含めて7つ。

今回の会議では王の頭数とは一致するものの、呼ばれたテルヨシともう1人の分がないから、その辺をふざけつつ指摘するが、それが聞こえてなかったかのように平然と刀を鞘に納めてしまうコバルとマーガは、もはや抜刀の気配すら出すことなくテルヨシを見て言葉を放つ。

「何故お前のような傍聴者に王と並ぶ席を設けねばならん」

「バカはバカなりに立場をわきまえろ」

はっ？ なに言ってるんだこいつ。的な抑揚のないその言葉は、然るべき対応だろうという雰囲気周囲へと拡散し、それには黒雪姫からも「まあ発言権はないしな」と賛同の言葉が漏れて、部下がやったことなのにナイトは失礼極まりなく口辺りに手を持っていつて顔を背けて笑う。

こうなるとテルヨシが食い下がっても時間の無駄になるので、仕方なく半円を描く王座と呼ぶべき椅子から少し離れた位置であぐらをかいて座り、黒雪姫も中央に座るナイト視点で左の端の席に座り、その後ろにハルユキとレイカーが並んで立つ。

そうして場が落ち着いたことで出てくるタイミングをうかがっていた連中もようやくといった雰囲気姿を現し始め、まずは黒雪姫達の隣の椅子に静かに着地した《ブラッド・レパード》ことパドが、その肩に《スカーレット・レイン》ことユニコを乗せて現れ、挨拶もパドの「プロミからは王と私だけ」と酷く簡潔なもので終わり、パドの肩から降りたユニコがそのまま席へと座ると、パドもその後ろに移動して控えた。

ここでテルヨシが超フレンドリーに挨拶しようとしたのだが、2人揃って口を開く前に手の平を向けて「そういうのいいから」とハモるもんだから、拒否られてふて寝に移行。

「クク……、王ねえ？ 私の記憶が確かなら、王とは純色の七王の略だった気がしますけどね？ でも、そこに座ってるおチビさんは、赤と言うにはちよつと色が安っぽくはないですかねえ……？」

次いで声だけで存在を知らせてきた《イエロー・レディオ》も、そ

んなイヤミを言ってから、黒雪姫達の向かいの3つの席の真ん中にぼわん。

白い煙を上げてから姿を現してああだこうだ無駄に言ってから一礼してその席に座り、そのレディオにもテルヨシは一応の挨拶をしてみせるが、野郎に対しては淡泊なところがあつてふて寝したまま余計なことは言わずそれだけに終わり、それにはレディオもちよつと拍子抜けを食らつたように肩をすくめてしまった。

テルヨシの淡泊な挨拶のせいがおかげか、以降大人しくなったレディオの気配に、挑発されたレイン達も一応は波風立てずに収まつてくれて、そんな2人に視線を向けていたら、その後ろから圧倒的な存在感を放つデュエルアバターが、薄くかかった霧の中から現れる。

「……へえ」

そのデュエルアバターを見て思わずあぐらへと戻りそんな声が出てしまったテルヨシは、初めて見た自らの《親》の親にちよつと気圧されてしまう。

大型の中では小柄な方の体軀——それでもテルヨシより大きい——に、マスクや肩、下半身といったあらゆる部位が分厚い板のような装甲に覆われたそのアバターは、エメラルドよりも深く鮮やかな緑色。

加速世界最大レギオン《グレート・ウォール》のレギオンマスター、緑の王《グリーン・グランデ》その人である。

とはいえ親であるリュウジと同一年なのだからテルヨシとも同い年になるが、その風格と存在感は最古参ゆえの経験値の差を肌で感じられるほどに圧倒的。

おそらくは加速世界で過ごした時間は現実世界での何倍と差があるのだろう。

そのグランデは左手に携えた大盾を持ったまま、何も言わずにレインとナイトの間の席に腰を下ろすが、それを失礼と思うような王はいないようで黒雪姫達も何も言わない。

「やつほー、グラちゃん。モビルルからはオレのこと聞いてるよね。よろしくっ」

そういう沈黙が基本的に嫌なテルヨシは、とりあえず初対面なのでらしく挨拶してみたのだが、それには周囲がドン引き。

凍りつくような視線を浴びながらもめげずに返事を待つと、グラндеは顔だけをテルヨシへと向けてこくり。

1度だけ首を縦に振って会釈してまた元に戻ってしまった。

——まあこれも個性だよな。

とかなんとか思っただけでグラндеにはそんなもんでいいかと両手を後ろについてリラックスしたテルヨシは、自分の後ろから響いた足音を聴覚が捉えて首を後ろへと曲げて上下逆さまの視界で誰かを確認。

モデルのような細身のF型で、長い髪のようなベール状パーツとロングスカート型のアーマーを揺らしながら、刺々しいデザインの錫杖を携えたままピンヒールの鋭い足音を鳴らしてテルヨシの横を歩いて通り過ぎ、半円形に並ぶ王達の席の真ん中で停止。

テルヨシが知る中でもおそらくは最も現実の女性のパーツを揃えて完成されているだろうその見事なアバターを染める色は、紫。

紫のレギオン《オーロラ・オーバル》のレギオンマスター、紫の王《パープル・ソーン》は、その触れたら切れそうな鋭利なものを含む視線を明確に黒雪姫達ネガビユへと向けて錫杖の下端を床へと打ち付けると、ハルユキはそれにビクツ、と少しだけ体を硬直させるが、黒雪姫とレイカーはどこ吹く風。それを真っ向から受けて立つ。

「久しぶりだね、ロータス。まさかこうしてもう1度あなたと口をきく日が来るとは思ってたな」

「私もだ、ソーン。次に会う時こそ、どちらかの首が落ちるのだと確信していたからな」

過去に因縁のある両者は声色こそ落ち着いているものの、その胸の内では決して相容れない思いを抱いていることは間違いない、何やら不穏な雰囲気まで出し始めた両者が取り返しのつかない雰囲気を作り出す前に立ち上がった黒雪姫を見るソーンへとダイブ。

何か言おうとしたソーンを押し倒したテルヨシは、そのままソーンの腰に抱きつく形で挨拶をする。

「ソーンちゃんおひさし。相変わらず聞き惚れる美声だね」

「お前……この、テイル！ 空気を読みなさいよバカ！」

あまりに突然のことで黒雪姫への威圧も忘れて持っていた錫杖でテルヨシの頭をガスガス叩くものの、ギャラリーゆえに攻撃力は皆無なので全く無意味。

しかしその後、一緒に来ていたらしいソーンのレギオンの幹部8人が現れて、その中の代表がテルヨシの《テイル・ウィップ》を根元から掴んで持ち上げると、くるりと体を回されてその人物とご対面。

「あー、ヴァインちゃんもおひさー」

「私はお前などに会いたくなかったよ」

——ふうんっ！

そうして対面した《アスター・ヴァイン》にも呑気に挨拶してみた方がいいが、さすがにソーンにちよつかいを出したとあつてカンカンらしく、持っていたテイル・ウィップを乱暴に投げられて元いた場所に落とされ、残りのメンバーはソーンを起こして体を気遣う素振りをしていた。

「もう最悪……ロータス、もしこの会議で何かが起きても、あなた達を逃がすつもりはないってこと、覚えておきなさい」

「……ふっ。テイル程度に抱きつかれるとは勘が鈍ってるのではないかソーン？ そんなお前ならば、たとえばバトルロイヤルモードになつたとしても負ける気はしないがな」

テルヨシの横槍で完全に張り詰めていた雰囲気切られたソーンは、連れてきた精鋭を牽制に使って強気が出るが、それも鼻で笑った黒雪姫は売り言葉に買い言葉で返してみせる。

それにはまたソーンが何か言おうとしたものの、周りからもういいだろみたいな空気が出てくることに気付いてその言葉を引っ込めると、ナイトとレディオの間の席に腰を下ろして、ヴァイン達もその後ろに整列して残りのメンバーの到着を待つ。

「ははっ、もうちよつとピリピリした空気が続くと思ったが、やっぱお前は面白いなテイル。今からでも俺のレギオンに来いよ」

「おいナイト。今は勧誘とかする時間じゃねーだろ。そういうのは後にしな」

「おやおや、一番の新参が注意するとはね。まあ、今から物怖じされても面白くありませんし、そのくらいの虚勢は張っていてくださいよ」
「お前も隙あらばちよつかいを出すその癖。皆に嫌われてるのを自覚しろ」

とりあえず穏便に事を収めてあぐらへと戻ったテルヨシに、ナイトが笑いながら勧誘をしてくるも、そこからユニコ、レイデオ、黒雪姫と会話が繋がりちよつとしたインターバルがあつたが、その会話もすぐに終わって沈黙となる。

だがその沈黙はすぐにちよつと驚くような空気へと変わって、皆の視線が残っていたレイデオの右隣の空席『だった』ところへと集まる。

——いたのだ。

もうすでに、初めからそこに座っていたかのように、1人のデュエルアバターが静かに腰を下ろしていた。

ひよろりとした細身に、艶の薄い象牙色のシンプルな装甲に身を包み、細長く尖った頭部くらいが唯一の特徴と言えるそのアバターは、あまりに気配が希薄でその出現に誰一人として気付けなかつたようだった。

誰にも悟られることなく残る席に座るその人物は、王達の反応からして白の王ではないことは明白であり、それを証明するかのようにな座つたまま一礼したデュエルアバターは、男の声だとわかる声で挨拶をする。

「レギオン《オシラトリ・ユニヴァース》所属の《アイボリー・タワー》と申します。白の王の全権代理としてこの会議に参加させて頂きます。よろしく」

非常に事務的で感情の含むところがないそんな挨拶に、一同は様々な反応を示すものの、口を開く者はいなく、とりあえずは白のレギオンの代表も来たという事実を受け入れてナイトが話を進める。

「よし、これで全員……つと、あと一人いねえな。そろそろ出てこいよ」

一応は7大レギオンの代表が揃つたので会議を始めようとしたが、この場にあと一人呼んで来ていない人物を思い出してそう声を

かけると、テルヨシの後方の階段からカツンカツン音を鳴らして姿を現した人物が。

クロウにも似た比較的無駄の少ないスリムで薄い装甲に、ロータスのような鋭利な頭部。

特徴的なガントレットのような割と大きめな腕パーツが目を引くが、全体的に少し打たれ弱そうなM型アバターなのに、その色はグラデよりも濃い暗色寄りの緑。

パツと見で防御寄りのアバターには見えないが、実際に聞く話では相当な防御能力を有しているという侮れないその人物は、テルヨシも初めて見る墨田第1戦域のバトロワ祭りの管理者。

《真空の剛拳》バキウム・ナツクラの通り名を持つその人物は階段を上がり終えてから頭を掻いて歩いてきて、あぐらをかくテルヨシの真横まで来てから立ち止まり、年相応の好青年っぽい声で挨拶をした。

「いやあ、王の方々の前に出るのにびびって頃合いを見てたんすけど、結局最後になってしまつて申し訳ないっす。お呼ばれして参上しました《シーバ・カタストロフ》っす」

カタストロフとはずいぶんな名前だよな、と隣で改め思うテルヨシではあるが、名前は自分で決められるわけではないので仕方ないかと完結させて、ペコペコと王達に頭を下げまくったカタストロフは、そのまま直立で話を始めるようにナイトに進言。

「いや、お前もそのこのテイルみたいに座つとけカタフ。そこに立たれるとなんかこつちが尋問でもしてるみてえだし落ち着かねえ」

「りよ、了解っす。では失礼して……《レガッタ・テイル》っすね。よろしくっす」

すつすつすとやたら語尾が『す』にまみれた愛称カタフは、ナイトに言われて正座で腰を下ろすと、隣のテルヨシにもペコリと一礼してきて、それに適当に会釈すると正面を向き直り、これで本当に全員が揃ったので改めてナイトが話を始めた。

「まずは、7レギオンとバトロワ祭り主催の2人が欠けずに参加してくれたことに礼を言っておくよ。お疲れさん。時間もないことだし、とつとと本題に入らせてもらおう。——もう全員知つてることだろう

から掻い摘まんで話すけど、先週行われたヘルメス・コード縦走レースイベントの真つ最中に、数百人のギャラリーの目の前で《心意システム》が発動されるという事件が起きた。今日の第1の議題は、この状況に我々はどうか対応すべきか、ということだ。と言っても、考えられる対応策は2つに1つしかない。今まで通りシステムの秘匿に全力を尽くすか、それを諦めて全バーストリンカーに公開するか、そのどちらかだ」

ナイト主導のもとで始まった会議ではあったが、心意についての議題は秘匿が必須なのは揺るがないことなので議論の余地もなさそう。で、全権代理とはいえ白の代表がイベントで心意を使った人物について追求したところで《加速研究会》の名前が黒雪姫から告げられるも、この辺はテルヨシは決まったことを受け入れるだけなので割と気を抜いて聞いていて、隣のカタフにふと視線を向けて口を開いた。

「お前って確かレベル7だったよな。そんな高レベルなのにどこにも所属してないとか変わったやつだよな」

「今は会議中つすよ。私語は慎んでおかないとレデイオさん辺りが文句言ってますつす」

「いいって。オレらは発言権ないし、決定事項を聞くだけの役目。過程を聞く意味はないって」

「それでも姿勢は大事つすよ。王達の会議に呼ばれるだけでも凄いことなんすから」

「お堅いねえ」

暇潰しと思つて会話を試みたテルヨシではあったが、変に真面目な性格のようで質問にも答えてはくれず会話も続かなかつた。

口調こそ軽い感じなのに変なやつとか思いながらも、なんか会議は心意うんぬんからレイン発信で復活した《災禍の鎧》の件に移つていて、それならちよつと聞かないわけにはいかないと耳を傾ける。

「つーわけだよ、クロウが鎧を装備して6代目ダイザスターになつちまったわけだが、今こうして鎧を外して平静でいられてるのも異例なわけだ。その上でクロウをどうするか決めようぜ」

「んー、現状で脅威になつてゐるってわけでもねえし、即断罪つてのもや

るせねえわな。イベントの壊滅的被害を止めてくれた功績もある」

「功績と呼ぶかはともかくとして、事態がいつ悪化するかわからないわけですし、早めに退場願うのが手っ取り早いと思いますけどね。そのロータスが素直に了承すればの話ですけど」

「無論、却下だ。クロウを断罪するくらいなら、今ここでお前達の首を落としてゲームクリアする道を選ぶ覚悟だ」

「それはそれでいいけどね。私はロータスの首が落とせるならその機会を逃したくはないし」

うわあ……私怨やらにまみれてるう。

トップの会議だつていうのに私情が優先されたりとだいたいぶあれな雰囲気になってきてげんなりなテルヨシだったが、発言権もないし早く終わらないかなあと思いつつ、発言権がないながらもこの雰囲気をつぶ壊すくらいのは出来そうだと閃き、大きく上に伸びをしてからその体を横へと倒して頬杖を突いて寝てやったのだった。

約3年ぶりに開催された《七王会議》ではあったが、以前とはすっかり変わってしまった各陣営の諸事情などでいまいち進行が悪く、残り時間もあることだとテルヨシはこの悪い流れを断ち切るためにその場で寝そべってあからさまな退屈ムードを醸し出し始める。

突然のそれには隣のカタフがやめるように小声で言いかけたが、その前に目ざといレディオが不機嫌なオーラを放出してテルヨシを見てくる。

「その場で最も立場の低いあなたがそのような態度でいるのはどうなんでしょうか。《蒼き閃光》？」

その言葉によって会議も1度は中断のような雰囲気になって、みんなしてテルヨシを見ては冷ややかな視線を浴びせてくるが、それは甘んじて受ける覚悟でやった行動なので目論見には成功しあぐらへと戻る。

「じゃあ多数決とかそういうのでも決めるべきことはスパツと決めてくれない？ 譲れない部分ってのは誰だってあるだろうけど、全員が納得できる妥協点ってのを出すのが建設的だと思いますがね」

「ほう。ではあなたが何か意見することでもありますか？ 言い出しっぺとして」

「オレからは特にないよ。あるとするなら《シルバー・クロウ》を傘下に入れる《ブラック・ロータス》だろう。この件が議題に上がるのなんて予測できてたことなんだ。だったら目くじら立てないでとりあえずロータスの意見つつーか、提案を聞くべきじゃね？」

そうやって王からわざわざ話しかけさせて発言権を得たテルヨシは、喧嘩腰なソーンやレディオをなだめつつ考える時間は十分にあつた黒雪姫が無策で臨んでるわけもないとわかってたから、そのまま黒雪姫へと発言権をパス。

それを受け取った黒雪姫はテルヨシがこうなるようにとした行動に気づいてアイコンタクトで「礼は言わんぞ」と示すと、本当にちゃんと考えてきた提案を王達に述べる。

「現状、クロウの手元に《災禍の鎧》があるのは事実だ。しかし先の一件の後にはベルのおかげで非装着状態まで時間を巻き戻すことに成功し、自らの意思で再び装備しない限り、鎧の干渉は限りなく弱いようだ」

「だが『弱い』ってことは、そのまま持ち続けてるのも危険だわな。どうする、ロータス？」

「この一件でわかったことだが、鎧には対戦後も残る呪いや寄生といった属性が付与されている。だからそれらの属性を排除できる者に試させてみたいのだ」

決して王達に頭を下げるような要求ではなく、対等な目線から「試させる」と言ったに等しい黒雪姫は、先のイベントで壊滅的な被害を出さなかった功績がこちらにあるという立場も利用していて実に上手い。

下手に下からいけばレディオ辺りから速攻で却下が入りそうなものだが、チャンスは与えるべきな空気を醸し出しながらのこれにはレディオもソーンもだんまり。

しかしナイトが指摘したようにハルユキを蝕む鎧の干渉は弱いだけで全く問題ないわけではない。

いくら試したいことがあっても、それが成功するかしないかはチャンスとはまた別問題になる。

「ロータスの話はわかった。それに対して意見も出ないみたいだし、それはまあ大いに試せ。ただし」

「期間が必要ということだろう。ならば来週、またこの会議を開いてもらい、その時にクロウから鎧を排除した証明をする」

「それに関しては……あー、デュエルアバターのステータスやらを見るやつがいるし、そいつを呼べばなんとかなるか。だがもしも鎧の排除に失敗した場合は、悪いがクロウに賞金を懸けさせてもらうぜ」
「その大義名分を得た鴉の退治に関して、対戦の勝利数に応じたバーストポイントの付与ということにしてはどうでしょうね？」

「ケツ。他人事だからってそういう話を意気揚々とするのは気分が悪いなレディオ」

「おやおや、前回の鎧の被害者が乗り気でないとは面白いものですね。ここは率先して事に当たるのが普通では？」

「誰だろうとバーストリンカーをこの世界から意図的に消そうって話だろ。それを楽しそうに話すお前の方があたしは普通じゃないと思うぜ」

そしてちやんとわかつてる王達はこの話に期間を設けて、次回の会議でハルユキの今後を決めることまでスムーズに決定。

鎧の解除に失敗した場合の話にはレディオとユニコが口論を繰り広げたが、ナイトがなだめるように2人に言ってから話を進行する。「クロウの賞金についてはレディオのを採用する。その働きが加速世界に貢献するわけだし、危険も伴うんだから当然だ。ロータスもその覚悟で事に当たれよ」

「無論だ。貴様らにクロウを狩らせるような事態には決してしはしない。だからその間に『余計な茶々』は入れてくれるなよ」

残り時間もいよいよ600秒を切ったこともあり、鎧の件はこれで終わる流れになったが、最後の黒雪姫が明らかにレディオを見ながら言うもんだから、そのレディオも口は開かなかったものの、その手を挙げて「そんなことしませんよ」みたいなジェスチャーはしてみせるが、おそらくこの場の誰もが100%信用はしていないだろう。

だからこそあえて口にすることで『妨害があつた場合は全てレディオの仕業だ』とする流れを作ったわけだ。

これはもう日頃の行いとか言動で損したなあとかなんと思いつつ、言葉だけで牽制されたレディオの自業自得は影で笑い、流れをぶった切つてした鎧の話から加速研究会の話に戻る。

とはいえ現状で加速研究会については何ひとつ明確なものがないために話そうにも何も具体的な話はできず、目的すらわからない不気味な組織については情報収集の継続と要警戒といったフワツとした決定になってしまう。

「なんか締まんねえ話にはなったが、テイル、カタフ。とりあえずお前からこのバトロワ祭りでも何か起こるかもしれない可能性は考えておいてくれ。今日もやるんだろうし、実際に何かあつた場合は次回

の会議で挙げてくれや」

「そんな悠長でいいのか？ 1時間後の話を来週までつてのはどうなのよ」

「それならガスト辺りから經由してプロミに話を通して周知させろ。カタフの方はソーンかレディオのどこと繋がらねえか？」

「それならCCCの《レモン・ピエレット》さんと浅いつすが繋がりがありますっす」

「んならレディオに任すわ」

「やれやれ。どうして墨田戦域は私達の領土の近くにあるのか」

「いよいよ会議もお開きの段階に来て、ようやくテルヨシとカタフにも話が飛んできたのはいいが、何やら不穏な事を言うもんだから嫌になる。」

確かに多くのバーストリンカーが1度集まるバトロワ祭りは不測の事態と呼べる何か起きてても不思議はないし、たとえ起きたとしてもそこらじゅうでドンパチやるから、その何か起きてても表面上は分かりにくいこともあり得てしまう。

停滞してしまった加速世界において今やこのバトロワ祭りは、多くのバーストリンカーにとって腕を磨く場であると共に、領土からなかなか出てこない7大レギオンのバーストリンカーと真つ向から戦え、多くのバーストポイントが動くゆえに新たなレベルアップの可能性を秘めている。

テルヨシ自身、このバトロワ祭りのおかげでレベル9になれるだけのバーストポイントを稼いだ——もちろんそれだけではないが——ので、努力次第で可能性は現実になる証明もできたわけだ。

そんなみんなが楽しく盛り上げてきたバトロワ祭りに、加速研究会なんて得体の知れないやつらが介入してくるのは、どんな理由があるうと気分が良いわけがない。

そうした意味でも呑気な対応のナイトには進言をして迅速さは修正してもらい、墨田戦域の方も面倒臭がりつつもレディオとカタフが繋がってくれた。

「そんじゃ今回の会議はこれで終わりってことでいいな。なんか他に

あれば早く言ってくれ。残り時間も5分を切っちゃまってるし」

その辺の話もすぐに終わり、いよいよ会議を終わらせにきたナイトの言葉で返す者はいなく、そんな空気をいち早く察して立ち上がったグランデがまず最初にバーストアウトしていき、それを皮切りにソーンと幹部達。レディオ。ユニコとパド。黒雪姫、ハルユキ、レイカー。いつの間にか消えていた《アイボリー・タワー》とバーストアウトしていく。

「あの、テイルさん」

次々と各陣営が退場していく中で、テルヨシもそろそろ消えるかと立ち上がったところで、隣のカタフも立ち上がりつつ話しかけてきて、予想外の声かけにちよつと驚きつつ何かと尋ねる。

「こんな機会がないと会うこともないっすから、今のうちに言っておくっす」

「あんま焦らすなよ。ナイトが『早く出ていけよー。出ないとフィールド閉じちゃうぞー』って顔して見てるし」

「もしもテイルさんの都合がつかならでいいっすね、どこかで対戦を試みたいっすね。テイルさんの噂はずいぶん聞くんっすね、対戦したことがなかったっすから」

「へえ。意外とバトルマニアの気があるんだな。オレもお前には興味が無いわけじゃないし、とりあえず今週は無理だろうが、次の会議の終わり時にでもやるか」

「ホ、ホントっすか!? ありがとうっすー!」

会議の時はお堅いやつと思っていたが、仕事とプライベートを完全に別物として考えるタイプのように、普段は割と頻繁に対戦をしてそうなカタフにちよつと好感度がアップしたテルヨシ。

それに観戦すらしたことがないカタフとの対戦はテルヨシも心踊らないことはないのです、ハルユキの鎧の件を他人事と片付けるのは難しいことから、そちらに協力的であろうとした上で対戦は来週以降に持ち越しとする。

対戦に対して好意的なテルヨシの返答には申し込んだカタフもあからさまなくらいに喜びを現し、ついでにその話が聞こえたっばいナ

イトがコバルとマーガに「お前ら観戦してきてお願い」と小言してたのを聞き逃さなかった。

まあ対戦となったら盛大にやりたいので周知させてもいいかなと思いつつ、嬉しそうにしながら突然、我に返って待たせてることを思い出し、ナイト達にビシツとお辞儀をしてからバーストアウトしていったカタフを見届けて、ようやくテルヨシもナイト達に会釈してからフィールドを出たのだった。

直前に不吉なことを言われたせいで、現実世界に戻ってきたテルヨシは、来た道を巻き戻すように電車を乗り継いで中野駅まで来る間、これから始めるバトロワ祭りでどんなことが起こり得るかをぼんやりと考えてみた。

前回の《ヘルメス・コード縦走レース》での《ラスト・ジグソー》による心意システムの漏洩が意図したものであるなら、心意システムの存在を表舞台に出したかったと考えるべきだが、だからといって習得が容易じゃない心意が拡散的に広まることはあり得ない。

事実、この1週間でもイベント時のシステム外攻撃については噂されはしても、明らかな心意技を使って対戦で連戦連勝！のような輩は耳にしていない。

「……………バーストリンカーが多い過密戦域はそうだが、逆に人のいない過疎戦域でのことは情報の伝達も遅いんだよな……………」

だがそれは対戦が活発な戦域だからこそすぐにわかることであることに気づき、普段から対戦があまり行われない東京の中心から離れた過疎戦域——世田谷戦域や大田戦域、江戸川戦域などがそうなる——でのことはあまり聞くことがない。

もちろん耳が早かったり顔の広かったりで情報収集する者もそれなりにいるが、それが騒がないのだから目立った問題は起きていないのかもしれない。

それならそれが一番だし、何かが起きると身構えて対戦に身が入らないなんてアホなことになれば、サアヤみたいな血気盛んなやつらに開幕から叩かれて即退場、なんて日常茶飯事なあのフィールドでは命取り。

「何事も楽観的な部分は持つべきってか」

難しいことを考えるのは苦手ではないが好きでもないのが、その辺は黒雪姫がもつとよく考えてくれるだろうと思いを切って、集中しなきや自分が真つ先に狩られるバトロワ祭りを純粹に楽しもうと意識を切り替える。

たとえ何かが起きたとしても、予測し得たこととして混乱しなきやいいだけ。

最低限、それだけを頭の片隅に置いてニューロリンカーをグローバル接続したテルヨシは、その時刻が午後3時を指し示した瞬間に加速し、マツチングリストからバトルロイヤルモードを選択して、そこにズララツ！ と並んだバーストリンカーの名前を確認せずに『デュエル』ボタンを押す。

【A BATTLE ROYAL IS BEGINNING!!】

心踊るその炎文字を見届けて《レガッタ・テイル》となったテルヨシは、構築された《世紀末》ステージに降り立ってまずは各表示を瞬時に把握しにかかる。

そこでまず見るべき右上の相手を示す表示はいきなり3人。

これはマズイと反射的に動き出したテルヨシは走り出した先に1人を発見するが、向こうもいきなりの遭遇戦で戸惑う様子が見えたので先制しておくかと考える。

が、すでに混戦時の極限集中モードになりつつあったテルヨシは、攻撃される可能性の低いその相手を無視して、同じように動き出していた赤系アバターの狙いが自分に向いていることに気づき、即座に方向転換して建物オブジェクトを遮蔽物にし一時的に回避。

そこからは建物オブジェクトの出っ張りなどを器用に使つてスルスルと登り屋上へと逃げると、表示がガイドカーソルへと移つて相手の名前も1つに絞られ、コロコロとその相手が変わったたり、ガイドカーソルがその度にぐるんぐるんして当てにならなくなる。

他に高い建物オブジェクトがある関係上、テルヨシはそれでも低い姿勢で縁に待機しながら表示が落ち着くまでは待とうとするが、目に見える表示だけが全てではないことも知ってるので、1対1の対戦で

はほぼ起こり得ない『ガイドカーソルの方向と別方向からの攻撃』への警戒を高める。

勝手知つたる中野第2戦域。

フィールドの属性が変わろうとその地形がまるごと変わり果てるなんてレアケースは《大海》ステージや、不人気N01の呼び声高い《下水道》ステージくらいのもなので、自分が今いる建物オブジェクトの高さから見るべき建物オブジェクトを見定めて、そこに誰かいないかを確認。

するとまあ、でっかい砲撃系の強化外装をどっしりと構えて、見れる範囲の相手を片っ端から撃ってやろうって魂胆が丸見えの赤系アバターがここらで一番高い建物オブジェクトの屋上を陣取っていた。

ああいう輩は必殺技ゲージが溜まると手がつけられなくなる可能性があるので、見つけたら割と早めに処理するか、射程圏外に待避するのが定石だが、今回はどちらもテルヨシが選択する必要はなかった。

さあいくぞ！ と強化外装を構えた赤系アバターが攻撃に入ろうとした瞬間、その屋上におびただしい数の遠距離攻撃が降り注ぎ、一瞬で火の海になる。

これぞバトルロイヤルといった光景だが、長い対戦の歴史から定石が生まれるように、その定石通りに事を進めることもまた難しくなってきたという事。

高所を陣取って遠距離火力で無双。はずいぶん初期からある戦法だが、これを最後まで実行するにはかなり広い視野と見つかった際に対応できる高い機動力が必要になってくる。

しかも初期からある戦法なわけだから、バトロワ祭り常連のバーストリンカーともなれば『とりあえずあそこに攻撃すれば当たる』みたいな当てずっぽうもできて、これが案外バカにならない驚異なのだ。

今回は固定砲台の危機察知能力が低かったのも悪いが、たまにいる『定石潰し』が今回はいるようなので、テルヨシも長居は危険と判断してまだくるくるしてるガイドカーソルを多少無視して、屋上から静か

に降りてすぐさま移動を開始。

まだまだ周囲から聞こえる様々な音でわかる混戦模様のバトロワ祭りはもう少し続きそうなので、定石潰しもいることから回避に専念したテルヨシは立ち止まることなく戦場を駆け抜けて、音のあまりしない空洞地帯へと命からがらで到達して、自分のHPゲージが1割未満の減りで留まったことに安堵しつつ、極限集中モードをいったん解除。

精神的な疲労も多いこれを維持し続けるのはテルヨシも後半に影響するので必要な休息だが、ようやく周囲の音も断片的なものへと変わってきて、その様相は局地戦へと移ったらしい。

残り時間も20分少々となれば残り人数も20人を下回ったのは間違いないが、被弾も最小で回避を優先したせいで必殺技ゲージの溜まりが悪いテルヨシは、今のうちにオブジェクト破壊でゲージを溜めようとする。

しかし右上の表示は常に誰か一番近くの相手を表示し、ガイドカーソルもそちらを向くことから、その相手が姿を現してはそれも叶わず、隙を見せないように緩く構える。

「よお。やっぱ常連は強いな」

その相手はずいぶん前からバトロワ祭りの終盤まで生き残る武闘派のデュエルアバターで、その名前を《ゲ^Oテ^t・ス^hピ^eン^s》^{Spin}というかなり彩度の高い青の近接M型。

レベルも6と十分なもので、7大レギオンに属さない零細レギオンの傘下ながら、その実力は7大レギオンの幹部クラスとも遜色はない。

テルヨシと同じようなフェイスマスクは比較的ありふれた造形で、身長も170cm程度ながら、それらはこれといった特徴ではなく、注目すべきはその両手足の肘から手首までと膝から足首までの部分にリボルバーのような回転式の駆動部分があり、これをアビリティ《^{ドライブ}駆動》で必殺技ゲージを消費して回転させることで様々なことができるのだ。

戦い方も豪快で、バトロワ祭りではいつも目に入る相手はまとめて

相手するくらい勢いで戦い、それで勝ち残ってしまうことが少なくないのだから本当の実力者なのは疑う余地はない。

ゆえにこのバトロワ祭りでもテルヨシと同じく異名をとるバーストリンカー。いつでも臆すことなく戦い抜く者として《豪傑王》^{ヒーローキング}と呼ばれている。

なんとも逃げ腰な感じが拭えないテルヨシの《逃走王》とは打って変わって目茶苦茶カッコ良いので、超絶に羨ましいとは思ってるが、そういうスタイルを貫くスピンの凄すぎるのだから真似はできない。

「……ん？」

そうした豪の者なスピンなので、普段からかなりテンションが高い方——ステイニングやアツシユといったウザい感じではなく、敵も味方も士気を高める感じだ——なのだが、今日は何やら様子が変で、そこに疑問を抱いたテルヨシは自慢の観察眼でスピンを観察。

すると不思議なことにスピンの両手足の駆動部分が全く使われた形跡がなく、乱戦を制したならばいつも必ず傷くらいは付いているものだ。

もちろんテルヨシのように乱戦を避けて逃げていたなら説明はつくが、スピンの性格で『逃げる』という選択肢が始めからないのは周知の事実。

それでいて必殺技ゲージは満タンなのだから本当によくわからないが、再び口を開こうとしたテルヨシは、スピンのその手に『どす黒い心意の過剰光』が宿ったのを見るや、その身を回避へと移行する。

『《ダーク・ショット》』

そしてテルヨシが動き出した直後に心意を宿した手がテルヨシの動きに合わせて持ち上がり、そこから《射程拡張》を施した心意のエネルギーが放たれた。

Acceleration Second 6

《七王会議》が終わった後に開催されたバトロワ祭り。

いつものようにみんなでワイワイガヤガヤとフィールド全域でドンパチをやったと思われたが、テルヨシの前に現れた《ゲート・スピン》が何の会話もなくテルヨシへと《心意技》で攻撃してきて、《射程拡張》の黒いエネルギー直射砲《ダーク・ショット》はそれなりの速度で迫ってきたが、予備動作を見逃さなかったテルヨシはなんとか初見で回避することに成功。

外れたダーク・ショットは《世紀末》ステージの壊滅的な破壊は不可能な建物オブジェクトの壁に当たって、深々と奥が見えないほどの穴を穿ってみせ、その威力が真正銘の心意技であることを伝えてくる。

「お前……何でこんな……」

スピンの心意システムに関して知識があるなら、当然ながらこんな愚行に及ぶことはあり得ない。

実際に手合わせを何度もしたからわかるが、スピンはテルヨシと同じくらい対戦に対して純粹な思いを持っていて、勝っても負けても最後は笑い合えるような爽やかな面が強かった。

だからこそ、心意システムを対戦に持ち込むことの理不尽さなどに配慮が及ばないわけがないと確信するテルヨシは問いかけずにはいられない。

そんなテルヨシの問いかけに対してスピンは、テルヨシへと向けた手から黒い過剰光を出したまま、クスクスと不気味に笑ってみせる。「ふははははは。何でだって？ キレるお前にしては勘が悪いな。この攻撃に大した動揺がないってことは、お前も使えるんだろ？ これと同じ力をよ。ダーク・ショット！」

ここでようやく口を開いたスピンだったが、問いかけに対して問いかけで返して、ついでにまたダーク・ショットを放ってきたので、警戒していたテルヨシはまたそれを避けてみせたが、不気味な雰囲気のスピンにどう返すか迷う。

「目は口ほどにものを言うってな。その目でわかっちゃまう。ったく、やっつてられねーんだよ」

「……………やっつてられない?」

「そうだよ。俺達が毎日どうやって対戦で勝てるかとか、どんなアビリティや必殺技の使い方がとか、そんなことを考えてる横で、こんな理不尽なことができるやつがいる。戦術も努力も全てを無にするほどの力だぜ。やっつてられないと思うだろ?」

「……………」

「それによ、お前も含めてこんな力を隠して、知らなかった俺みたいなやつらとワイワイ楽しくー! なーんてやっつても、内心では『本気を出せば余裕で勝てる』って思ってたんだろ!」

その沈黙が悪かったのか、スピンの何かに火を点けてしまったようで、心意の存在がチラついたことでその力を使えるやつらが『本気を出していない』と誤解してしまってるのが今の話でなんとなくわかった。

確かに心意システムがどんなロジックで存在するかをちゃんと理解していないと、急に見せられた側からすればそうした理解に及ぶのは普通のこと。

だがスピンの口ぶりから違和感を覚えたテルヨシは、その辺を聞こうと会話に持ち込むために落ち着かせようとするが、その前にスピンの方から突っ込んできてしまい、その手に宿した黒の過剰光を揺らめかせて拳を振りかぶってくる。

「《ダーク・ブロー》!」

今度は射程拡張を使わない、近接攻撃が飛んできて、単調だったゆえに簡単にバックステップで回避はできたものの、空振りした拳が地面に当たったのと同時に、その周囲の地面はクレーターを作るように抉られ、その余波が距離を取ったテルヨシのところまで伝わって威力を物語る。

おそらくは《攻撃威力拡張》の心意技なのだろうが、それを見てもやはり違和感しかないテルヨシは、自分の心意技の威力証明を終えて佇むスピンの改めて言葉をかける。

「その力、自力でどうこうしたもんじゃやないんじやないか？」

「……譲ってもらったのさ。これを使えばお前らが隠してたものと同じ力が使えるようになるってな」

「譲る？ それはそんな簡単な代物じゃ……」

ここまでのスピンの見て感じたテルヨシの違和感。

それはスピン自身が自力で習得した心意技にしては、その原理についての理解が及んでいないこと。

スピンの言動からもわかるが、スピンは心意技を『ゲーム内で使える必殺技やアビリティと同類の隠し技』くらいの認識でしかないっぽく、事象の上書きという侵食に近い現象であることに気づいていない。

そして何より、先週のイベントからまだ1週間しか経っていないこの期間でこれほどの心意技を習得できるとは思えないのだ。

もちろん《無制限中立フィールド》に籠って何カ月も苦勞して習得したというなら納得もできないが、それなら先に挙げたような心意システムへの理解があつて然りだ。

この違和感からのテルヨシの言葉に対しスピンは、この力が他人から『譲られたもの』だと言ってみせ、それには今日一番の驚きを面に出してしまう。

「やつぱお前も使えるんだな。ますますくだらないって思うぜ。実際、ここまで遭遇したやつらなんて、全員この力だけで簡単に消し飛ばせたからな」

心意システムを理解もなく譲渡し即時使用できるようにする『何か』に恐怖すら感じたテルヨシの呟きで、テルヨシも心意が使えると確信したスピンの雰囲気が一層で黒いものを帯びたのを察知。

しかもここまでの対戦で生き残ったのも全てこの心意技によるものだと話すから、自慢の両手足の駆動部分が傷ひとつない理由も判明してしまう。

「こんな力があつてずっと使わないまま、お前は今までどんな気持ちで俺達と対戦してたんだ？」

「楽しかったよ。純粹に、熱く、激しく、気持ちと気持ちをぶつけて、

どういふ戦略が通用したとかしなかつたとか、そんなことを言い合つて笑える毎日が……」

「嘘を言うなー！」

嘘などどこにも入る余地がないほどの本音を珍しく口にしたテルヨシだったのだが、心意のことがある以上、今のスピンは煽りにしか聞こえないようで、感情的な叫びが悲痛に思えてくる。

——助けなきやな。

自分の『言葉』がスピンの心の奥底に届かないのなら、何度もぶつけてきたもので届かせるしかない。

そしてそれを以て闇の中に足を突っ込んでしまっているスピンを救い出す。

思うのは簡単だが、実行するためには覚悟も度胸もいる。

なまじ心意の攻撃と相対することへの緊張は並々ならないが、大事なライバルを救うと考えれば力なんていくらでも湧いてくる。

フィールド全域では今も局地戦が繰り広げられているが、いつ誰が乱入してくるかわからないし、スピンの心意攻撃の犠牲者を出さないためには5分程度しか猶予はないはず。

チンタラやってもいられないとようやく本気の構えへと移ったテルヨシにスピンもその手の過剰光を揺らめかせて迎撃する態勢を取る。

しかし互いが動き出す前にテルヨシの視界にスピンの背後から迫るデュエルアバターの姿が飛び込んできて、それにピクリと反応したテルヨシの挙動で反射的に振り向いたスピンは、目の前にまで迫ったそのデュエルアバターにダーク・ブローを躊躇いなく放つ。

だがこれを同じ心意の防御で弾いたデュエルアバターは受け止めたついでにその手の緑色に輝く扇子型強化外装を振り抜いてスピンを真横へと吹き飛ばし、そのままテルヨシの元へと辿り着く。

「何がどうなってんのよ!?! スピンのアレは何よ!?!」

「落ち着いてガツちゃん。オレもまだ整理がついてない」

そのデュエルアバター《エピナール・ガスト》ことサアヤは、テルヨシとスピンの姿を発見して近寄ってきたようだが、ただならぬ気配

とスピンの過剰光を見て訳がわからないままスピンを攻撃したようだ。

それだけ見ると《猪突猛進》の性格が全開だが、混乱しながらも心意に心意で応戦できる即応力は古参のそれだろう。

「アンタもかよ、ガスト」

とりあえずスピンを警戒しながら深呼吸するサアヤがすぐに特攻しないのを確認し、その間に吹き飛ばされながらも踏ん張りを効かせて転倒などもなく踏み留まったスピスが、ダーク・ブロウを相殺してきたサアヤにも明確な敵意を放ってくる。

が、変化はそれだけでなく、その拍子にスピンの胸部装甲の中心に直径5cmくらいの黒い半球が出現。

まるで人間の瞼のように見開いて現れたそれは、まさにその瞳のように深紅の色を宿してギョロついてみせる。

それには隣のサアヤが気持ち悪いといった雰囲気醸し出すが、ここまでの話からテルヨシはあれがスピンの心意に繋がる『何か』であることを確信する。

「悪いんだけどガツちゃんは手を出さないで。これはオレがどうにかする」

「はっ？ よくわかんないけど、あつちは心意攻撃に躊躇がないのよ？ 倒すなら2人の方が……」

「違うよガツちゃん。倒すんじゃない。『救う』んだ。だから、頼む」

理由はどうあれ対戦に心意を持ち込んだとわかったサアヤは適切な判断をしてくれるが、スピンの抱く感情はそうしても逆効果だし、それを説明する暇もないので強い意思をサアヤへとぶつける。

それには始めこそ反論しようとしたサアヤだったが、真剣なテルヨシの気持ちに気づいたのか、小さなため息を吐いてからその構えを解いて《ブレード・ファン》を肩に担ぎ後ろへと下がる。

「尻拭いは私がするから、存分にやりなさい」

「サンキュー、ガツちゃん！」

後のことを考えなくてもいいのはテルヨシとしても肩の荷が下りた感じはあり、スピンの対戦に集中できるのはありがたい。

そうしてサアヤの後押しを受けて飛び出したテルヨシは、いびつな心意を身につけたスピンのへと突貫。

「ダーク・ショットー！」

その接近にスピンは先制となるダーク・ショットでテルヨシを消し飛ばしにくるが、これを《テイル・ウィップ》を併用した大ジャンプで躲してみせる。

しかし空中は自由の効かない空間なのも事実で、格闘ゲームなどでは遠距離技で相手を跳ばせて対空技で仕留めるといった流れも作られるほど。

スピンも跳躍したテルヨシに間髪入れずに次弾のダーク・ショットを放って貫きに来る。が、そんなのは跳ぶ前からわかってたので、ダーク・ショットが放たれる直前に今度は《インスタント・ステップ》で空中を蹴って強引に前へと蹴り出してダーク・ショットを回避しながら前宙からのかかと落としをお見舞い。

しても良かったのだが、今のスピンにはダーク・ブローもあるので防御すら手痛い攻撃になりうる。

だからそのかかと落としにダーク・ブローで迎撃しに来たところで、かかと落としする逆の足でインスタント・ステップを使ってキャンセルし、ダーク・ブローを空振りさせ、今度はバック宙からスピンの目の前で着地。

すかさず回し蹴りでの足払いでスピンを転倒させると、その両足をテイル・ウィップで絡め取って振り回し、手頃な建物オブジェクトへと投げ飛ばし衝突させた。

——悲しくなった。

そこまでの攻防だけでも涙が流れそうになったテルヨシは、それをグツと堪えてゆっくりと立ち上がったスピンの見る。

今の攻防。本来のスピンならもっと凄い切り返して潜り抜けて反撃までしてきたのは間違いないのだ。

それができなかつたのは、スピンが心意攻撃に盲信して自分のステックを『無視』したからに他ならない。

「お前、まだ手を抜くつもりかよ」

「手を抜いてんのはどっちだよ、スピピン」

「あつ？」

テルヨシが対戦に込める思いにまだ気づかない様子のスピピンは、未だに心意を使わないテルヨシに苛立ちを見せるが、テルヨシからすればスピピンの方が舐めた対戦をしているのだ。

——心意があれば培ってきた力なんて必要ない。

そんな気持ち駄々漏れのスピピンに再度アタックを仕掛けるテルヨシ。

あくまで心意は使わないと示すテルヨシに苛立ちが頂点に来たスピピンは、ここで両手に黒い過剰光を宿して、両手からダーク・シヨツトを同時に放ってくる。

こればかりは余裕がなさすぎたため、仕方なく《インパクト・ジャンプ》でスピピンの頭上を飛び越えて建物オブジェクトの壁へと突き刺さって止まり、反動ダメージに怯むことなく落下を始めた体に合わせて壁を蹴ってスピピンへと頭から突撃。

その時にはすでに振り返って両手を構えるところだったスピピンだが、落下しながら体をギョルンツ！ と回転させて弾丸のごとく突っ込んだテルヨシの方が速く、両手をすり抜けてスピピンの胸部装甲に盛大な頭突きをお見舞いした。

それを受けたスピピンは盛大に吹き飛んで10mほどのところで地面に仰向けで倒れ、テルヨシも満足な着地ができずにうつ伏せで倒れる。

ダメージ状況はテルヨシが残り7割ほどで、スピピンは6割あるかどうかといったくらいか。

スピピンからの攻撃は1度ももらっていないが、1度でも心意攻撃が当たれば即死級のダメージとなるのは間違いないので、テルヨシの残りHPなどあつてないようなもの。

勝手に予測した制限時間も残り3分あるかなくらいで、フィールド全域からの音もかなり頻度が落ちてきている。

局地戦もそろそろ終わってしまい、ここに参加者が集まるのもそう遅くないとわかって立ち上がったテルヨシは、ほぼ同時に立ち上がった

てきたスピンの胸部装甲の目玉が頭突きによってヒビが入っていることに気づく。

「何で使わない?」

「……………お前ももう気づいてんだろ。その力はオレ達のデュエルアバターのパフォーマンスを丸ごと無視した、システムが本来認めてる力じゃない」

それが影響したのかなんなのか、さっきよりも苛立ちを小さくしたスピンの対話に応じそうな気配を出したので、テルヨシもこれだけ使ったら察しがつくだろうと偽りのない事実を告げる。

「たぶんその力はパッチが入らないところから、もつと使うべきところがあるんだと思うが、少なくとも対戦に使っていい代物じゃない。それがわかっているからオレやガツちゃん含めて、力を扱えるやつらにはあえて使わないし、不用意に広めたりもしてこなかったんだ。それが手加減とかそういう類いに思えるなら、これから先もスピンはその力で勝てばいいさ。だがな、そうすることはつまり、今までお前がひとつひとつ積み上げてきたものを全て否定することと同じだ。お前が築いた歴史。丹精込めて育ててきたデュエルアバター。ゲート・スピンは、誰かから譲渡されただけで強くなれる、そんな力を望んでいるのか?」

「……………俺は……………」

ようやく心に響いたテルヨシの言葉に動揺を見せたスピンは、その手の過剰光を一気に弱めて心意の力を解除しかける。

しかし次の瞬間、それを拒むかのように胸部装甲でうごめく目玉が深紅の光を放ち、それに鼓動するように心意の過剰光が強くなる。

「スピンー!」

明らかに本人の意思に反して力を行使しようとする力が働いているのがわかり、テルヨシも待機していたサアヤもスピんに近寄ろうとするが、その接近を拒むように制止の手を示したスピン。

「おいおい……………貰いもんの方で調子に乗るなよ。俺は今、テイルのクサイ言葉でようやくエンジンがかかってきたところなんだ。邪魔すんならくたばっとけ!」

苦しそうにしながらも本来のスピンの言動になったことがわかり、無理矢理に心意を使おうとしてみる譲渡された何かに抗うと、その手を胸部装甲の目玉にズガンツ！ 躊躇なく突き刺すことで破壊し、心意攻撃のせいでスピンのHPゲージが残り2割を下回る。

しかしその攻撃によって目玉は沈黙したようで、荒い息を吐きながらもその全身から闘志をみなぎらせたスピンは、バチバチとスパークを放つ胸部装甲を無視して両腕をグルグルと回す。

「邪魔者は消えた。さあやろうか《蒼き閃光》。今日はまだ俺の真骨頂を見せてないんだからよお！」

「……ぷっ。さつきまで病んでたお方が何を言っただけですか？」

「う、うるせえよ！ そつちが来ないならこつちから行かせてもらおうぜ！ アクセル!!」

「ああ、来いよ《機動戦士》!!」

すっかり憑き物が取れたような雰囲気のスピンは、自ら削ってさらなる劣勢になったにも関わらず、負ける気など微塵も見せない闘争心でテルヨシを威嚇するが、神経をすり減らして説得したテルヨシからすれば身勝手もいいところ。

しかしそれこそがテルヨシの望んでいたスピンの本来の姿なら、すり減らした神経など問題ない。

あとは全身全霊で目の前の相手をぶっ倒すだけ。簡単なことだ。

スピンのアクセルのコマンドによって両足の駆動部分が高速回転を始め、その回転を利用して脛を地面につける立ち膝の状態になると、駆動部分がタイヤのように地面を捉えてスピンを立ち膝の状態のまま移動させテルヨシへとまっすぐに迫る。

陸で波乗りでもするようなその移動はスピンならではの、何度も見てきた突貫なのでそこからどうスピンが攻撃してくるかはなんとなくわかるテルヨシは、テイル・ウィップを地面と垂直にして前方に置き、直進コースを変更せざるを得なくさせ、左右どちらかにスピンを誘導。

右足を前にした横向きで迫っていたスピンなら、体重移動が楽な左

から来る確率が高いと読み、そちらに方向転換した瞬間にテイル・ウィップを取り払って直進しすれ違い様の蹴りを狙う。

「アクセル!!」

だがスピンは方向転換をせずにまたコマンドを叫んで、今度はその両腕の駆動部分を回転させると、立ち膝から跳び上がってその腕でテイル・ウィップを挟み込むと、駆動部分の回転でテイル・ウィップを登ってしまう。

ギョルンツ！ と一気にテイル・ウィップを登り切ってテルヨシの頭上に躍り出たスピンは、回転させたままの両手足の駆動部分を利用して身の縮めて、正面を守りながらの体当たり。

ご丁寧に左右で回転が逆にしてあって、当たれば外側へと弾き出されてしまうし、正中線で捉えられたらどつちつかわずで装甲を削られて最悪そのままのしかかれて、ヤスリの要領で研磨されてしまう。

めっちゃや荒いヤスリは逆効果よ！ なんて思う暇もなく選択を迫られたテルヨシは、攻防一体のスピンの体当たりに小さな穴を発見し、そこに勝機を見出だす。

いくら身を縮めて両手足を中心に寄せても、必ずそこには隙間が生じる。

その隙間。両手足の肘と膝の中心の空洞にレイカーのように鋭い手刀を放ってスピンの懐に腕をねじり込もうとしたテルヨシ。

「いつ……だあああああ！」

が、普段から全然使わない見様見真似な手刀だったために、隙間にねじ込むどころか狙いも逸れて硬い関節との接触で見事に突き指。

——デュエルアバターって突き指するんだなあ。

そんな新たな発見を遠い目をしながらにしたテルヨシは、止まることなくのし掛かってきたスピンの為に術なく倒される。

とはいえ今の手刀と突き指による不意の挙動が奇跡的にスピンの体当たりの真正面から外れる位置へと導き、駆動部分の右部分のみがテルヨシに当たって、外側へと弾き出す回転でのしかかられるのを阻止。

ガリツ、と装甲を削られながらスピンの横に移動させられたテルヨ

シが体勢を崩しつつも転倒を免れてよろよろステップを踏む間に地面に着地した-spinは、瞬時に足の駆動部分の回転を操作して立ち膝状態から僅かにスライド移動しながら超低空の高速足払いを仕掛けて、よろけるテルヨシの足を吹っ飛ばす。

普段から自分がやってる相手を浮かせるこの技から連続して繰り出されるのは、当然ながら高攻撃力の必殺技。

巧みな回転操作で回りながら綺麗に立ち上がった-spinは、わずかに宙に浮くテルヨシの胸の中心に右手を添えて、耳鳴りが起きそうなほどの大声で必殺技発声。

「《ジャイロ・ブレーカー》!!」

瞬間、右腕の駆動部分がさっきまでとは桁違いの超高速回転をして、その回転力が衝撃波となつて前方へと射出。

ジャイロ回転の衝撃波は右手が添えられていたテルヨシの胸の中心で炸裂し貫き、ジャイロ回転に巻き込まれてテルヨシの体もグルグルと回りながら後方へと吹き飛ばされてしまったのだった。

Acceleration Second 7

バトロワ祭りも終盤に差し掛かり、なんとか外部から入手したという心意を扱えるようになる『何か』から《ゲート・スピン》を解き放ったテルヨシ。

それで調子を取り戻したスピンとそのままガチンコで対戦を再開させたまでは良かったのだが、全開のスピンの猛攻によって優勢は一気になくなり、渾身の必殺技《ジャイロ・ブレーカー》によって、物凄い勢いで建物オブジェクトへと激突させられる。

ジャイロ・ブレーカーには短いながらもスタン効果が付与されているため、受けた時点で受け身すらまともに取れなくなり、かなり有用な必殺技と言える。

おかげで盛大にダメージを受けたテルヨシのHPゲージは残り1割くらいにまで減少。スピンとの差はほぼなくなってしまった。

「げほっ……容赦ねえ……」

「おらー！ 立てよテイル！ まだHPゲージは残ってただろうが！」

「ホント……調子いいのな……」

もう互いにクリーンヒット1発で吹き飛ぶHPゲージながら、その闘志は増すばかり。

さすがにウザいと思うくらいには元気になったスピンのテンションに苦笑しつつも立ち上がったテルヨシは、誰のおかげでその元気が出せたかと口に出したかったが、男がグチグチと言うのもカッコ悪いので、それは拳で返してやろうと煌々と輝く必殺技ゲージを確認して前へと出る。

満タンではないので《インビジブル・ステップ》は使えないが《インパクト・ジャンプ》なら3回も使えるゲージ量は十分すぎる。

スピンも必殺技ゲージの消費を抑えるために駆動部分の回転を止めてテルヨシの迎撃に構えるだけだが、スピンにはまだ必殺技が1つあり、それはジャイロ・ブレーカーより威力は落ちるが消費の少ない《ジャイロ・ショット》での攻撃がある。

これも衝撃波なので発射点を見ないと避けるのは困難で、両手足か

ら出せるせいでフェイントも混じえられると見極めも難しい。

だからこそスピンの挙動に一瞬の見逃しもないように接近し、素振りを見せたらこっちはインパクト・ジャンプで先制するつもり——だったのだ。

「《ブラスト・ゲイル》!!」

「へっ？」

だが2人のギリギリの攻防が衝突する寸前で、横からそんな必殺技発声が響き、目の前の相手に全身全霊で挑んでいた2人は、揃って間抜けな声を出して声のした方を同時に見る。

それと同時に放たれたサアヤの必殺技ブラスト・ゲイルの発生させた横倒しの竜巻によって為す術なく吹き飛ばされた2人は、これも揃って建物オブジェクトへと叩きつけられてそのHPゲージを消失させられたのだった。

「アンタら、これがバトルロイヤルってこと忘れてんじやないの？」

消滅する寸前に聞こえたサアヤの声色は、もう呆れを通り越してバカに諭すようになっていて、2人してその事を完全に忘れていたことに気づき、とつても恥ずかしい思いでフィールドを出ることになったのだった。

結果としてレベル8となって初のバトロワ祭りはマイナス収支で終わってしまった、ハイランカーのリスクを身をもって味わう苦い経験となったが、反省は帰ってからでも出来るのでグローバル接続を切らずにそのまま再度加速。

バトロワ祭りも終わってすぐなのでまだいるだろうとスピンの名前を探して対戦を挑み、さっきは流れで出来なかった話をするために、ドン引くくらいの観戦者——これもバトロワ祭りのせいだろう——をサアヤを除いて解散させて無観客状態に。

スピンも用件はわかってくれていたので、先ほどのような熱いテンションは引っ返めて冷静な思考でどっしり腰を下ろして話をしてくれる。

「んで、スピンの譲ってもらったっていうやつはどんなもんなわけ？」

「ああ。俺もアイテム欄での名称くらいしかわからないんだが……」

そうして正体不明の心意を扱えるようになる『何か』についてを話してくれたスピンの言葉は、始めこそテルヨシもサアヤも信じられないといった雰囲気になる。

しかし先ほどのスピンを見れば真実でしかなく、2人はその現実を受け入れるしかなかった。

「テール」

「……ん。なんだ、マリア」

翌朝。

家に帰ってからスピンの話が頭から離れなかったテルヨシは、どうすればそんなものが出来るのかと思考し続け、それは朝食時まで長引いてしまい、大事な話をするマリアの言葉も半分程度しか入っていないで反省。

話自体はすでにサアヤがパド辺りに伝えてプロミにもいつているだろうし、登校すれば黒雪姫という頭脳もあるので、1人で唸りながら考えるよりは建設的な段階を踏もうと思考を一旦切って、マリアの話に集中する。

「今日は放課後にテルの学校に行くからねって言ってるんだけど」

「えーと、それはあれだよ。新校舎設立の際に無くなっちゃう動物飼育の飼育動物の引き取り先の1つとして、うちが場所を提供するっていう」

「そうだよ。その小屋のお掃除に行くから、今日はお店には行かないって話」

「ちよつと待った。ってことは同じ飼育委員でマリアの親友という『うーちゃん』もうちに來るってことだよな?」

「そう、だけど」

改めて聞いた話から変な食いつきをしたテルヨシになんだか嫌な予感がしたのか、マリアがあからさまに表情に出してくるが、そんなのお構いなしなテルヨシは、さっきまでの難しい顔はなんだったのかといった笑顔でマリアにウキウキしながら話をする。

「じゃあ放課後にそのうーちゃんに挨拶しに……」

「嫌」

「……なしてさう？」

「どこの方言？」

「北海道とか色んなところかな。それより何で挨拶しちやダメなの？」

「だってうーちゃん可愛いから、絶対テルが変なことするもん」

「テルヨシお兄さんは変態さんじゃないんですが……」

当然、学校の話をするればほぼ名前が出てくる噂の『うーちゃん』も同行してくるだろうと読み、顔すら知らないその子に会いたいと思うのは自然。

マリアと仲良くしてくれてる子だし、ちゃんと挨拶はしないと半分以上は真面目な理由——残りは可愛いと聞いていたから興味本意ではある——なのだが、普段の性格がマイナス評価を与えるのか、マリアからは敬遠されてしまいガツクリ。

マリアの通う松乃木学園は、少子化の波でその生徒数が減少。

10年ほど前から様々な対策がされたものの、抜本的な対策とはならず敷地の一部を売却し、今年の1学期をもって初等部の現校舎が取り壊しとなり、初等部・中等部の合同校舎の新設と相成ったのだ。

その際にやむを得なく継続が不可能とされてしまったのが、敷地内で飼っている飼育動物達の飼育。

学校側は『適切な対応をする』とは言ったらしいのだが、小学生でもその意味くらいはわかり、この1学期でどうにか方々へと掛け合っ
て飼育動物の引き取り先を見つけて、ほぼ全ての動物が無事に引き取りを完了させられた。

しかし松乃木学園には引き取ることもできない動物が1匹だけいて、それはどうしても飼育していかなければならないとなり、同系列の梅郷中学校にある使われていない飼育小屋を提供しようという話になったわけだ。

もちろん、その話は生徒会などに通る案件なので黒雪姫と恵も知るところだが、別にマリアが泣き落としでどうこうしたとかではなく、ちゃんと手順を踏んだ上での決定だと聞いたものの、どうしても何かの力が働いたと思えてならない。

「……とか言われて引き下がるテルヨシお兄さんではなーい」

その辺で黒雪姫も言葉を濁したことがあったので、時折やつてる職権乱用を今回もしてそうだなあとか思ってたスルーしたのはつい最近。

裏がありそうなこの話に興味が湧いたテルヨシは、表面上はマリアに顔出しはしないと喋っておきつつ、いつものように登校してマリアを見送ってから、怪しい笑みでそんなことを呟いて梅郷中学校の門を潜っていった。

「……ってことがあったんだわ」

「……………うむ。にわかには信じがたいが、それが起こりうるのもこのゲームの奥深さというべきか……………」

その企みはまあ人に話すことではないので、放課後の楽しみにしておきつつ、こつちもこつちで話しておかなきゃと今日はハルユキとの逢い引きをキャンセルしてもらって、黒雪姫と2人でランチとしたテルヨシは、昨日のモーターの件を真面目に話してその感想と意見を黒雪姫に求める。

黒雪姫でさえにわかには信じられないといった雰囲気でも難しい顔をしたが、やはり古参ゆえに整理も早く、いくつかの可能性を話してくれる。

「お前も知っている例で言えば、我々が問題として直面している『災禍の鎧』。強度などから言えば違いはあるが、原理はあれに近いかもしれないな」

「ああそっか。でも譲渡されたアイテムを使うだけで心意が使えるようになるってのはどうよ？」

「そこはまだ不明な部分が多いが、話を聞く限り個々人から独自の心意を引き出すわけではなく、そのアイテムに『あらかじめプログラムされた心意技』を使えるようになるといった外的な要因ならば、使用者は『器』としての機能でしかないのかもしれない」

「つまりそれはアイテムを介して『別の誰かの心意技』を使ってるって可能性か。ますます原理がわからんがね」

モーターが攻撃的な思考と行動を取ったことに関して、黒雪姫は鎧の干渉に近いものと推測し、それにはテルヨシも言われて納得。

そして問題の心意技の譲渡についてもそれらしい可能性を示してくれたのはさすがだが、この短い時間で具体的なことまでは考えが及ばなかった黒雪姫は、残りの休み時間を確認しながら席を立つ。

「何にしてもその《ISモード練習キット》……IS Sキットとやらは流布する者がいる限り、使用者は徐々に増えてしまうだろう。だがこちらも今は立て込んでいる。あれもこれもとやっではいられんしな……」

「いいよ。その辺はオレとかサ……ガツちゃんとかで動いてみるから、姫はハルユキ君のことに集中しな」

「任せきりは癪だ。こちらでも私がふ……レイカーと知恵を出してみるのが、フットワークはお前の方が良いだろ。ガストの顔の広さも活かして情報収集してくれ」

「りよーかーい」

とりあえず今は問題が色々あるので、誰がどうするかといった大雑把な方針決定だけして、1つ1つ片付けていこうとなる。

とりわけハルユキの鎧の浄化はタイムリミットも絡む早急な案件。その優先順位は比べるまでもない。

その上で頭は貸すと言うのがどれほどの労力かは説明する必要もないが、どうにも簡単な問題じゃない予感があったテルヨシは、やはり手回しは色々しておこうと思案に入った。

「それはそれとして……ってなるはずが……」

放課後。

さあバイトだバイトー！ の前にうーちゃんに会いに行こう！

と、HRが終わるのを待ちわびていたら、なんか担任からの呼び出しを食らい現在、職員室にて担任からある提案をされていた。

テルヨシも今年で最上級生だし、紛いなりにも特別^{エキストラ・ワン}枠入学の生徒。

そんな生徒がいてそのまま卒業させてしまうのはあまり学校にとっても意味がないとのことで、今月末に開催される文化祭。そこでテルヨシに檀上で何かしてほしいとのことだった。

何かというのはもちろん心理学による何かしらの講義的なプレゼ

ンみたいなそれだが、正直なところ面倒臭いし断りたかった。

しかし現実はこの学校に入学できるだけの学力はギリギリないくらいで入学させてもらい、あれな成績も温情で切り抜けてきたところはあるので、学校側からの要求を無下にできない部分が多分にあっさりする。

「……………うい」

なので決して圧力があつたわけでもないそれを断ることが出来なかったテルヨシは、概要をまとめたファイルを渡されて解放され、今週中にでも内容を固めて教師陣にまずプレゼンしなきゃならなくなつた。

あつちもこつちも忙しいよお。

なーんて悲鳴をあげると黒雪姫辺りが「それを生徒会副会長でありレギオンのマスターである私に聞こえるように言うのか?」とか何とか言われそうだから、心でだけ泣いておき、バイト先には少し遅れることをメールしておいたのでほんのちよつと時間があつたテルヨシは、結果的に良い頃合いになつたので飼育小屋のある敷地の北西の角へと足を運んでみる。

全校生徒にその存在すら忘れ去られてるだろう、何も飼われていない飼育小屋まで行つてみると、予定通り来ていた体操服姿のマリアが見えて反射的に声をかけそうになつたが、絶対に怒られるのでそれは少しだけ延ばして何故かいたハルユキとだけ目が合いつつ、背中を向けるうーちゃんらしき体操服姿の黒髪女子に音もなく接近。

「君がうーちゃんかな?」

その背後にまで迫つて肩をチョンチョンと指で触つて声をかけたテルヨシに対して、ビクツと肩を跳ね上げた少女は1歩飛び退いてテルヨシへと振り返る。

身長や体格はほとんどマリアと変わらないが、イタリア人の血を濃く引いたマリアと違って顔立ちは純和風。

前髪をスパツと眉の少し上で切り揃えて後ろ髪をポニーテールにまとめた少女は、マリアが言う通り将来が楽しみになる可能性を秘めていた。

そんな観察をイヤらしい目線など一切なくしたのだが、ちよつと混乱気味のうーちゃんに代わって膝裏に蹴りを入れてきたマリアは、踏ん張りが効かずに這いつくばったテルヨシとうーちゃんの間に入つて庇う位置取りをする。

「来ちゃダメって言ったのに！」

「だってえ……マリアがいつもお世話になってます。つて一言だけでも言っておこうと思つた親心だもん。やましい気持ちはこれっぽちよっ。」

「ある時点でダメ！ それにバイトは？」

「用事があつたから遅れるつて言つてある。ああ、用事つてのはこれじゃなくて本当によ？」

早速マリアに怒られてしまったものの、うーちゃんを見ずにはバイトになど行けないの精神だったので、めげずにマリアとコントを繰り広げ、親指と人差し指で1cmくらいの隙間を作つてやましい気持ちの割合を示す。

それでも怒るマリアの厳しさにうちひしがれていると、やり取りを見ていたうーちゃんからアドホック・コネクションの接続申請が飛んできたので、話には聞いていたテルヨシも驚くことなく了承し、視界にチャット窓が表示される。

そしてそれが成された途端に、マリアを隣に移動させてテルヨシと向き合つたうーちゃんは、目を疑うようなタイピング速度でホロキーボードを打つてチャットで挨拶してくる。

【UI】はじめまして。あなたがマーちゃんの話していたテルヨシお兄さんなのです。私も1度はお会いしたいと思つてましたので、会えて嬉しいのです。マーちゃんと仲良くさせてもらってます、シノミヤウダイ四埜宮謡と申します】

「マリアがずつとうーちゃんとしか言わないから本名が知れて嬉しいよ。皇照良。マリアと同じく気軽にテルって呼んでくれていいよ」

【UI】ではテルお兄さんと呼びするのです】

かなり礼儀正しい文面でその性格がわかる謡からは育ちの良さが家柄みたいなのがチラツと見え、見た目以上にしっかりした印象を覚

える。

そんな謡がわざわざチャットでの会話をするのはもちろん理由があり、マリアの話では『運動性の失語症』を患っているからだとか。ざっくりと説明するなら、謡は発声する機能が上手く働かず肉声や思考発声が出来ないということなのだ。

この辺で障害があるのはマリアのおばあちゃんもそうだったことから割とすんなりと受け入れるテルヨシにニコニコとする謡は、またホロキーボードを叩いてテルヨシへと語りかける。

【UI】 テルお兄さんのお話はマーちゃんや噂でたくさん耳にします。サツちゃんとも仲良しさんとうかがってますから、これから色々と話すこともあるでしょうから、よろしくお願いします」

「サツちゃん？ ああ、姫のことか。本名で呼ぶことなんてないから記憶の彼方に飛んで……ん？ 噂？ 姫？ ってことはうーちゃんは姫と知り合いで……姫が唯一知ってる松乃木学園の生徒ってことは……」

【UI】 お察しの通りなのです。その辺のお話は近くすることになるはずですので、サツちゃんの了承が出たらということ。それよりもアルバイトの方はよろしいのですか？」

「えっ……にやあ！ バスの時間があ！ うーちゃんはマリアとこれからも仲良くね！ あとハルユキ君！ マリアとうーちゃんに何かしたら姫にチクるからね？」

「は、はひっ！ 何もできません！」

どうやら謡もまたマリアから色々聞いていたらしく、初対面なのにその性格に動揺しなかった——大抵の人は微妙なりアクションをする——のはそういうことで納得。

しかし噂と聞くと疑問は浮かぶため、その辺で勘の良いテルヨシは黒雪姫との交友があると話す謡が、以前に黒雪姫の言っていた『松乃木学園に1人いるバーストリンカー』であると確信。

マリアにはずっと同じ学校のバーストリンカーについて話す必要はないと言っていたから責められないが、まさかずっと話に聞いていたうーちゃんがそのバーストリンカーだったとは思わずこの場で話

し込もうとさえした。

だがギリギリの時間を使って顔を見せに来た都合、バスも待つてはくれないとあって謡に促されるまま大慌てでその場を去るテルヨシは、その去り際に呆然としていた何故いるのかも知らないハルユキに念押しだけしていったのだった。

遅れてバイトに参加したため、今日はイトインコーナーでのおしゃべりを封印されて真面目に仕事をさせられていたテルヨシ。

しかも休憩時間となれば、タイミングを合わせてくれたパドと2人きりで休憩室にて加速世界の話題で会議。当然、話は昨日のISSキットの件。

「プロミにはもう周知させて、他のレギオンにもそろそろ情報が行き渡ると思う」

「とはいえ、それで注意できんのは7大レギオンだけつてな。それ以外の零細レギオンや無所属には無駄に混乱を招く可能性もあるし、難しいところか」

「ISSキットの流布は今のところ防ぎようがない。それでも拡散を遅らせることはしておく。それがニコの意見」

「そうなるISSキットの現物を押さえるのも、危険はあるが原因究明にはいいかもしれないな……」

「スピンが持ってたアイテムはすでに使用済みでアイテム欄から消えていた。となるとアイテムを流布しているバーストリンカーと接触する必要がある。でも私やテルのような名前が広く知られるバーストリンカーは警戒される可能性が高いし、あまりリスクを負ってミイラ取りがミイラになっても本末転倒」

「だよねえ」

すでに7大レギオンへの周知は済んでそうな報告をしてくれるパドだったが、それでも全バーストリンカーの半分以下の周知ということになるし、心意システムの詳細を隠したままISSキットに注意しろというのは、零細レギオンや無所属にまで周知させるとなるとなかなか難しいこともわかる。

ならば問題解決のためにISSキットの現物の入手を考えるが、こ

れもパドの指摘通りそうそう上手くいくわけもなくため息が出る。

「あまり後ろ向きでもいけない。この件では私も少数で情報を共有しながら収集する。必要となればテルにも手伝ってもらおうから、ネガビュとも何かあるだろうけど、優先順位は冷静に判断して」

「どうして問題って順番じゃなくて一気に押し寄せてくるんだろうね」

「世の中はそう上手くできてない」

「がつくし……」

Acceleration Second 8

加速世界に拡散しつつあるISSキットの脅威がまだ弱いながら、対応が遅れるのは危険と判断したテルヨシ達はその対策に乗り出して一夜が明ける。

火曜日となった今日も変わらぬ日常から始まり、現実世界の平和さで加速世界の問題を忘れそうになるのを引き締めて、マリアとの登校を終えかけたが、何故かこのところ直前で何か言い忘れるマリアの「あつ」を聞いてやれやれと立ち止まる。

「今日は有田さんのお家にお邪魔してくるから、バイト先には今日も行かないね」

「ハルユキ君の家はまあめっちゃ近いし別にいいけど、マリアだけじゃないよね？」

「えっと、黒雪姫さんと黛さんと倉嶋さんとうーちゃんとレイカーさんが一緒のはず」

「……レイカーのリアルが気になる」

「私も楽しみ」

「行くのは」

「バイトでしょ」

「ですねぇ……はあ」

なんか最近バイト先に来てくれないなあ、なんて思わなくないが、ユニコも駆け回ってるようで店に来ないから暇にさせるしなと納得して、マリアのことは黒雪姫に一任。

黒のレギオンが集合するからには何かしらの会議が行われるのだろうが、そこにマリアが参加するのはちよつと疑問もある。

それでもマリアが納得して参加するなら咎めることではないし、何かあればマリアから連絡くらいはしてくれるはず。

「それからメールするかもだから休憩時間にもグローバル接続しておいてね」

「詳しいことは姫に聞くからいいよ。マリアが関わるなら姫も話さないわけにはいかないだろうし」

案の定、何か計画があるようでそのメールとやらの受け取りはする
ように言われて、それを受け取ってからあれこれと思考するのもあれ
だから学校で事前に聞いておくと返せば、まあそれならいいかみたい
な雰囲気では行ってしまうのだった。

「勘違いしないでほしいが、私はマリアに強制など一切していないぞ」
それで実際に学校で黒雪姫から話を聞き出すと、まだ全容も話して
いない段階で前置きみたいになんかそんなことを言う黒雪姫は、どうせ話す
ことになるだろうと予測していたからかすぐに今日の計画を説明。

全てはハルユキの《災禍の鎧》浄化計画の第1歩とかで、浄化の心
意を使える元幹部《四元素^{エレメンツ}》だった謡をレギオンに引き戻すのが目的。

それ自体は今日にでもすぐに復帰してもらえるように説得すると
豪語するも、問題は復帰して「よし浄化だ！」といけないことにある
らしい。

というのも過去に第一期《ネガ・ネビュラス》が3年前の《七王会
議》のあとに無謀にも《帝城》攻略へと挑み見事に失敗し、それが実
質的にレギオン解散の理由となったのだと衝撃的な事実を告げる。

《無制限中立フィールド》にある難攻不落の最難関ダンジョンと噂
される帝城は、現実世界での皇居に位置し、そこが丸々ダンジョンと
なっているのだが、ここは先日、サアヤが話していたようにまだその
内部へと足を踏み入れた者すらいなまさに鉄壁のダンジョンなの
だ。

進入すら実質的に不可能となっている理由は、帝城内部へと続く東
西南北の4つの門。これも現実世界の半蔵門などと一致するが、巨大
なその4つの門をそれぞれ守護する《神獣級》エネミーすら越える《超
級》エネミー。《四神》とも呼ばれるエネミーがいるから。

その力は王が束になっても1体にすら敵わないと言われるほどに
強力で、さらに1つの門を強行突破しようとしても、四神は相互リン
クがあるらしく、弱らせたそばから他の出現していない四神からバフ
をもらって回復したり、より強力になったりして詰み状態になると
か。

だから帝城攻略の第1歩からして四神を同時に相手するのが最低

限で、それほどの戦力が大レギオンと言えど準備できるかと言えば、まあ不可能に近い。

その帝城攻略に無謀にも挑み、敗北した際に黒雪姫達は大きな犠牲を伴い、謡と《グラフィイト・エツジ》《アクア・カレント》の3人が四神のテリトリの奥深くで《無限EK》に陥ってしまったのだとか。

そして鎧の浄化には多大な時間を要するため、とても通常対戦の時間内では無理。だから無限EK状態の謡を救出するのが、今日の計画ということらしい。

「それって言うほど簡単じゃないよね？」

「当たり前だ。結果いかんによっては謡のみならず、他の者も無限EKとなる可能性がある」

「それでもマリアは行くって？」

『親友のうーちゃんのためなら火の中の水の中』だそうだ。正直なところ、トラウマになるレベルの相手にマリアを連れていくのは気が引けるのだが……何故こういうところはお前に似るのか……」

包み隠さず今日の計画の全てを話した黒雪姫に対して、もちろんその危険性についても考えられたので、その辺での配慮もマリアにはしたと付け足す。

だが親友のために危険にも飛び込もうとするマリアの覚悟は相当なようで、頑固なところはテルヨシに似てると言われて照れるが、黒雪姫には呆れられてしまう。

「そういうわけで連れていかないとレギオン加入の話を蹴られてしまうのでな。ここは芽を摘むよりも赤いのかから1歩リードしておきたい」

「そういう魂胆は話すなよ。ニコたんにチクるよ？」

「構わん。それとどんな理由であれマリアを同行させる以上、お前をセツトとして考えている。バイトもあるだろうが、都合は合わせてやるから、計画に参加しておけ。マリアのストッパーはいて損はない」

そんなこんなで色々あるみたいだが、マリアが言っていたことも大方で理解できたので、計画のリーダーから直々に参加の了承ももらえて一段落。

別に黒雪姫は参加は認めしたが、計画に力を貸せとは言わなかった。これは最悪、安全圏でマリアを守るだけでもいいといった意味が含まれるが、やはり似た者のマリアの《親》である以上、気持ちはマリアと同じ。

「じゃあオレもうーちゃんを助けて『テルお兄さん素敵です！』って言われたいし参加しよっかな」

「……………ういいういはそんなあからさまにテレはしないぞ」

放課後。

今日は掃除した飼育小屋に動物を移すから、またマリアと謡が学校に来ることは知りつつも、顔は出せないから渋々バイトへと直行したテルヨシは、働き始めて早々にイートインコーナーの方を任せられたので意気揚々と行ってみる。

「まあなんつってもこの苺のラビリンスは外せねえな」

「こんなの毎回頼んでたら懐が大変でしょ」

イートインコーナーは最近では安定して半分くらいの席が埋まってるので、テルヨシが来ると話し相手に飢えた女学生達が、日々のお出事を話そうと招く。

そんな人達に笑顔で応対しつつも、珍しくユニコの姿があったので嬉しく思ったのも一瞬。

その横で店のレクチャヤーを受けてたっぽい客が紛れもなくサアヤで、学校から直で来たのか、2人とも制服を着て鞆とランドセルを下に置いていたりとしてすでに打ち解けてるご様子。

思わず話しかけそうになったのだが、生憎と先にお声をかけてもらってる客をないがしろにはできないので、そちらへの対応を優先してとりあえずは様子見してみる。

確かサアヤは《リアル割れ》に関してはかなり慎重で、実際にリアルを知ってる《親子》以外のバーストリンカーは、現役では《パンジー・ステイング》くらいしかいないのかなんとかだったのだが、先週から結構なペースでリアル割れしてるなあ。

とは思うのだが、サアヤもISSキットなどの問題が深刻なことを察知して連携を取りやすくしているんだらうと勝手に解釈。

まだユニコが赤の王であることを知らない可能性もあるが、偶然に店で仲良くなつたにしては年齢差もあるし、何よりレジに立つパドが王のリアル割れを警戒しない——サアヤが元プロミなのはあるが——のもちよつと変な話。

ならばパドがユニコとサアヤを引き合わせたと考えるのが妥当なので、客との会話が1周したから追加の注文を受け付けてレジの方に引込み、その辺のことをパドに聞けばズバリ。

「サアヤは顔が広いから、ユニコが情報収集にはうってつけだからって。このあと外でバーちゃんとも会うはず」

「みんな行動力あるなあ。っていうかサアヤとバーちゃんがリアルで知り合いじゃないのは意外だった。元プロミの最強タッグだったなら、てつきりリアルでも連絡取ってるのかと」

「サアヤは第2世代のバーストリンカーだから、私達のように親子の絆がずっと希薄な中で生き残った、その名残だと思う」

「第2世代っていうとモバイルと同じ《オリジネーター》を親に持つバーストリンカーか」

「Y」

働く手を止めずに小声で話す中で、ふとパドの口からそんな単語が飛び出したので、テルヨシも記憶の隅にあったそれらの単語を引き出して確認し、そうした過去があるならと1人納得する。

オリジネーターとは《ブレイン・バースト》を開発者から渡された最初の100人のプレイヤーを指す言葉で、所謂『親を持たないバーストリンカー』ということになる。

そしてそのオリジネーター達がしのぎを削ってレベル2へと上がった者に与えられたコピーインストール権から生まれたのが、サアヤやリユウジといった第2世代と呼ばれるバーストリンカー。

当時はこのコピーインストール権に回数制限がなかったので、とにかくインストールを試す子が多かったらしく、成否を問わずに1度きりとなった今とは様子もかなり違っていったとか。

その良い例……いや、行いとしては悪い例だが、コピーインストールした子にレクチャーすることなく、ただ一方的に与えられた初期

バーストポイントを奪ってアンインストールさせる横暴なやり方があったみたいで、第2世代のバーストリンカーは色々なことを『試された』ちよつと可哀想な世代だと、古参のバーストリンカーから聞いていた。

きつとサアヤもパドが推測したように、親や他のコピーインストールした子の残酷な顛末を見たり、もしくは自らが体験していたりもあったから、リアル割れにも敏感になっていたのだと理解が及ぶ。

そう考えるとサアヤがどんな覚悟を持って自分やマリア、パドの前にリアルを晒し、今もどれほどの勇気を振り絞ってユニコと会って話をしているのか計り知れたものではない。

「……裏切れないな」

「テルには責任があるけど、ずっと二の足を踏んでいたサアヤの背中を押したのも事実。だから」

「その勇気に相応しい男になれて？ めっちゃ重いねそれ」

「女の1人や2人、背負うのが男じゃないの？」

「オレが言いそうなことを先回りするのやめて……カツコつかないし」

きつとリュウジもそんな経験があったから、春先にあんなことを言ったのだと今さらながらに理解し、サアヤがそうまでして自分の前にリアルを晒した重さのしかかってくる。

だがパドが言うような意味にも捉えられることから、支えてあげるのも当然だと思うし、それを義務だとか言うつもりもない。

テルヨシはただ、その覚悟と勇気に見合うだけの価値があったとサアヤに示し続けるだけ。これでやる気にならないわけがない。

そうして言葉とは裏腹に強い意思を瞳に込めたテルヨシを見たパドは、優しい笑顔を一瞬だけ見せて注文されたケーキを運ぶように渡していつもの表情でレジへと戻る。

時おり見せるパドの笑顔は彼女持ちになった今でもドキツとさせられたから困ったものだが、あくまでサアヤが一番！ と言いついて聞かせてイートインコーナーへと戻っていくと、パドの話通りに初来店だったサアヤの常連化計画——勝手にそう解釈しただけ——を終えた2

人が店を出るために席を立った。

その2人に自然と話しかけられるテルヨシは役得ながら、偶然とはいえサアヤと顔を合わせられたならと接客ついでに小声で用件を伝えておく。

「暇だったらでいいんだけど、バイト終わりに店に来れる？」

「一緒に帰ろう。なんて可愛い理由じゃなさそうね。それならそう言うし」

「詳細はその時に、ね」

「まっ、変な理由じゃないならいいわ」

本当なら色々とした承が必要な案件ではあるが、こっちもこっちで企みはあるので、今後のためにも利用はしてもいいかなな考え。

その内容についてはまだ知らないサアヤは怪しく思いつつも話だけは聞きに来ると言ってくれたので、まあ何人かから起こられる覚悟を決めて店を出ていったサアヤとユニコを見送りバイトへとまた集中していった。

「……………なんかおかしいとは思ってたのよ」

何事もなくバイトを終えて完全に帰宅の準備が整ったところまできていたテルヨシだったが、店の外で待っていたサアヤを裏から招き寄せて、パドからのプライベートルームの使用許可を3分くらいもらった上でまずは休憩室で今回の騒の救出計画についてを説明。

黒雪姫のリアルなどは完全に伏せて説明はしたのだが、やはり黒のレギオンのそんな重大な計画に MARIA がいるとはいえ参加させてもらえるテルヨシに疑問が出たサアヤは、怪しむ視線でテルヨシを見つめる。

「四元素がレイカー除いてそんな状況になってたのも初耳だけど、まあそれは置いておいてもよ。この前のレイカーとの対戦といい、今回のといい。アンタ、ネガビユの誰かとリアルで知り合いでしょ。それも第一期ネガビユにも所属してた誰かと」

「んー、その辺はサアヤが向こうに聞いていいかも。オレが判断することじゃないと思うし」

「……………まあその辺は確かに言及しても私とネガビユの都合になっ

ちやうか。ああもう……アンタとこうなってから私のリアル割れが激しすぎて泣けてくるわ……」

「もしかしてそれが嫌だっと思うようなことがもうあった？」

「……ないわよ。今のところはみんな向こうとあんまり変わらないし、ずっと申し訳なさっていうか、そういうのがあったから、スッキリした部分もあるのも事実」

加速世界では行動力の方が先行しがちなサアヤだが、リアルではなかなか冷静に物事を見られる思考力でネガビユとテルヨシの近い関係に勘づく。

テルヨシとしても自分の彼女である以上、遅かれ早かれ黒雪姫やハルキ達ともリアル割れするだろうし、話してもいいとは思うのだが、そこはテルヨシが黙っていれば済む話でもある。

しかしサアヤがテルヨシの歳の近い知人に疑念を抱くことは避けられなくなったし、そうした一抹の不安をずっと抱かせるくらいなら堂々とリアル割れさせた方が精神衛生上でも良い。

とはいえ両者がそれを望まないでテルヨシが勝手に引き合わせたら怒号が飛ぶのは間違いないので、そこは今日にでも話をしてもらえたらと思う。

「それで話を戻すけど、せっかく四神のところに行くんだし、今後の帝城攻略のためにも一緒に行かない？ 参加するかはサアヤの自由でいいし。というかぶっちゃけ時間がもうない」

それを踏まえて行くかどうかを問うが、現在時刻が8時12分となり、バイト終わりに速攻でマリアからのメールに返事をして決めたダイブ時間は3分後の15分ジャスト。

正直、悩んでる暇もないほどギリギリの中でサアヤを誘っているのが強制力が発揮してると言っても過言ではないが、そわそわし出したテルヨシを見たサアヤは短いため息を吐いて席を立つと、

「私は《テスタロッサ緋色弾頭》に特別なあれはないけど、無限EK状態で3年近くも封印されてるのは可哀想って思う。時間がないならとりあえず行って、そこで考えさせなさい」

「サアヤはなんだかんだで手伝ってくれそうだけど、とにかく行きま

すか」

すでにプライベートルームの存在も教えられたのか、移動することもわかって先を行くサアヤに遅れて席を立ったテルヨシも、行つてから考えると言うサアヤのらしさに笑みを浮かべてプライベートルームへと足を伸ばしていった。

イトインコーナーから行けるプライベートルームは外部との通信などを完全に遮断する特別仕様となっていて、中に備えた端末との有線接続なしにグローバル接続が不可能。

だが今回は無限EKの可能性があるので、保険なしにダイブしてしまえば大惨事を招くため、こうして有線接続で切断セーフティーを設定する必要があったのだが、何事にも備えあれば憂いなし。

セーフティーに加えてサアヤがいれば、どちらかが無限EKに陥つた場合もセーフティーを待たずにニューロリンカーを引っこ抜いてもらえるといった具合だ。

切断セーフティーは1分後に設定することで、一応は内部時間で約17時間ほどで自動離脱となるが、移動や作戦立案などを含めて実行に至つても、無限EKになつた場合はそれでも10回くらいは殺されてしまうので、2人いるのはありがたいのだ。

「ダイブしたらとりあえず現地集合つてことになつてるんだけど」

「そこはもう諦めてるわよ。南門だから1時間くらい全速すりや着くでしょ」

「さすが東京を探索した先駆者はスケールが違う……」

「まあ最長で熱海くらいまで行つたし、千代田区なんて散歩感覚よ」

オレも沖繩から東京まで来たから勝つたな。

とかなんとか頭をよぎるも、ほぼ全距離を天馬エネミーの背中を踏破したやつが自慢気に言うことでは全然ないので、都内なら平気で歩き回りそうなサアヤの行動力に苦笑しつつ、準備万端でいよいよダイブの時間となり、これから行う謡の救出に集中して無制限中立フィールドへとダイブしていった。

「イーターの呪いだな」

「恩恵の間違いでしょ。相手からすれば悪くないフィールド属性よ」

久しぶりの無制限中立フィールドに降り立って早々、テルヨシとサアヤが見たのは、もう見飽きたと言つても納得の《氷雪》ステージ。見渡す限りに続く銀世界は広大さをより強調して目的地まで果てしない錯覚を覚えるが、そんなこと全く気にせずなさつさと走り始めたサアヤのサバサバした感じに尊敬すらして隣を走り黒雪姫達との合流へと動き出す。

謡が封印されている南門は四神《スザク》が守護していて、巨大な鳥型エネミーであるスザクの属性は非常に強力な火。

だからその属性を若干でも弱めるフィールド属性を引けただけでも幸先は良く、これが《煉獄》ステージや《焦土》ステージだったらと考えれば、ただでさえ勝ち目が無い相手と遭遇する前に青ざめてしまったかもしれない。

「氷雪は障害を多少無視できて楽だわ」

「軒並み冰山やら雪山だからねえ。壊せるオブジェクトが少ないのは困るけど」

「着く前には満タンにしときなさいよ。その辺、ロータスは効率的な考えだからグチグチ言われるわよ」

「どうせ怒られるし1つや2つ案件が増えても怖くないですがね……」

高さに差はあるが建物だったものはほとんどが冰山や雪山になっている氷雪はがちり建物オブジェクトがある他のフィールド属性よりはずつと移動が楽で、グイグイ先を行こうとするサアヤのペースに必殺技ゲージを溜めながら合わせるテルヨシは、この先で怒られる現実がちよつと気持ち沈むが、今さら落ち込んでも仕方ないしとすぐに開き直ってしまう。

そんなこんなで効率よく移動を完了させたテルヨシとサアヤは、他のバーストリンカーやエネミーと遭遇することなく、千代田区の桜田門——これが南門と一致するわけだ——がある付近にまで到達し、ダブ時間が微妙にズレたか到着が早かったかでまだ黒雪姫達の姿がなかったので、しばらく待ちぼうけをし、10分程度の待機後によりやく来た黒雪姫達と合流することができた。

Acceleration Second 9

「……………どういうことだテイル？」

「流れでな」

「誘ってきたのはアンタでしょ。流れは適切じゃないわ」

「ここは話を合わせてくれても良かったのでは……」

「真実を語らずに言い逃れしようとするなんてカッコ悪いわね」

現実世界では午後8時15分を過ぎた頃に《無制限中立フィールド》の《帝城》がある千代田戦域。その南門付近で予定通りに黒雪姫達《ネガ・ネビュラス》と合流したテルヨシとサアヤだったが、話に聞いていないサアヤがいたことから、合流して早々に《ブラック・ロータス》こと黒雪姫からそんな言及を当然ながら受けてしまう。

偶然ってことにすれば或いは……なんて甘い考えが浮かんでシラを切る選択はしてみたものの、サアヤの裏切りによってあえなく失敗。

仕方なしに誘ったことを話すと、最初こそイラツとした雰囲気を出した黒雪姫だったが、ハルユキ達もいることからリーダーとしての立場で思い留まり《エピナル・ガスト》となってるサアヤへと話しかける。

「いいのか。これは我々のレギオンの問題だ。参加する義理も強制もないぞ?」

「誰も参加するなんて言っていないわよ。でもアンが助けたいって言ってる《緋色弾頭》を助けるのはやぶさかじゃないわ。もちろん、アンがそれを望むならだけど」

来たからには作戦に参加するものという前提だった黒雪姫に対して、ツンツンなサアヤは素直に協力するとは言わず、お願いされたならいいわと成り行きを見守っていた《ソレイユ・アンブッシュ》となったマリアへと視線を向ける。

たぶんサアヤは始めからこうすることで協力するのは決めていたのだろうが、性格が素直にそうさせてはくれなかったところか。

案の定、心強いサアヤの参加の可否を委ねられたマリアは、即答に近い「お願いします！」でサアヤに抱きつき、それによってツンデレなサアヤも無事に参加を表明し波風立てずに合流は成功した。

「それはそれとしてロータス。ちよつと話があるんだけど」

「奇遇だな。私も話すべきことがある。内容は一緒の気がするが、まずは聞こう」

改めて今回の作戦を集まったメンバー全員で取り組むことになってから、作戦の開始はこつちがタイミングを取る関係上、話すべきことは始まる前にとサアヤと黒雪姫が明らかにテルヨシを見ながら怪しい会話を繰り広げて2人で内緒話をするので、絶対にリアルについてだと確信しつつもレイカー達の方に移動して今の段階での作戦を聞いておく。

「やることは簡単ですよ。まずはこの中の誰か。おそらくはパイルになるでしょうが、離脱ポイントからこちらに見える離脱の合図を出して離脱。現実世界の《アーダー・メイデン》に加速してもらって、そのタイムラグの間にタイミングを見てわたし達が南門に向けて進撃。スザクの足止めをしつつメイデンの出現と同時に最大速度の鴉さんがキャッチして、急上昇からスザクを振り切って全員が離脱。話せばその程度の内容ですが、その程度と言うにはあまりに危険です」

「あくまで救出が最優先の動きになるわけね。クロウは大役だけど大丈夫？」

「は、はい。メイさんのために精いっぱい飛びますので、フォローをお願いします」

「おつ、言うねクロウ。テイルさんや姉さんの前だからってカッコつけなくていいんだよ?」

「クロウがやる気になってるんだから、ベルも余計なことを言わなくていいじゃないか」

「そ、そうだけベル。こんな俺は珍しいんだから、作戦前にやる気を削ぐなよな」

「そのやる気とやらをいつも出せばいいのにねえ」

聞けばなんてことはない作戦ではあるが、南門へと続く大橋は50

0 mもあり、その橋に足を踏み入れた瞬間からスザクが出現し攻撃してくるのだから、その橋の最奥に鎮座する祭壇辺りまで行って封印されているという謡のデュエルアバター、アーダー・メイデンを拾って戻ってくるのがどれほどの危険か。

その謡を拾い上げて戻ってくるという重大な役目を担うハルユキも事前に言われていたのか、すでに開き直りにも見える覚悟は出来ているようだったが、茶々を入れるチュリと仲裁に入るタクムとの幼馴染みのやり取りは和やかな雰囲気で緊張はいくらか和らいだろうか。

テルヨシも足止め役になるはずなので、その方法についていくらか考えつつ、すでに《シャープネス》を呼び出して黙々と溜めていた必殺技ゲージを使って銃弾を生成するマリアに近づいて様子をうかがう。

「アンは橋に侵入する必要はないから、フオローをお願いな」

「うん。でもロータスさんとレイカーさんに閃光弾と音響弾は効かないだろうって言われちゃったから、炸裂弾や貫通弾でどれくらい足止めになるかわかんない」

「相手が火熱属性だしな。それでも目とか狙えば有効かもしれないし、頼りにしてる」

「テイルも無茶しちやダメだよ。1人の無茶がみんなに迷惑をかけるんだってロータスさんもレイカーさんも言ってた」

「お、おう。気を付ける……」

ここに来て凄く冷静なマリアにド正論を言われて親子としての立場が逆転したような気がしないでもないが、自分よりずっと無茶はしなさそうなマリアにはひと安心して、内緒話を終えたサアヤと黒雪姫が戻ってきたことで改めて全員での作戦会議を行い、細かい段取りやそれぞれの役割を明確にする。

「まずは私とテイル、ガストで先行し心意技も惜しまずに出現したスザクへと攻撃しタゲをもらう。ベルとアンは橋の外から我々をサポート。それとほぼ同時に大橋より200 m後方からクロウを背負ったレイカーが《ゲイルスラスト》での加速で橋に突入し我々の頭上を越えたところでクロウを射出。クロウはその加速と翼でスザ

クを飛び越えて祭壇付近に出現したメイデンを抱き抱えて浮上し、転回して戻ってくる。その際に我々も防御を最大にしてベルの回復も頼りに後退。概要としては以上だが、質問はあるか？」

「へいロータス。考えたらキリがないのはわかってるけど、不測の事態には誰の判断に従う？」

「無論、私だ。と言いたいところだが、切羽詰まった状況で人の判断を待つ時間が致命的になることもあるだろうからな。その時は各々でリスクのない判断で動いてくれ。いいか。リスクを負って無限EKになることが最悪の事態だ。それを念頭に置け」

「何故にオレを見ながら言うかね。信用ないわあ」

「女のためなら無茶も平気でやるからでしょ。作戦じゃクロウ以外みんな女で心配しないわけではないでしょ」

「何故オレが不安要素みたいな扱いを受けねばならんのか……」

「それはテイルさんが素敵な人だから、ついつい気にしちゃうんです」「姉さんのそう言っとけばいいだる感が凄い……」

真面目な話をしていたのにみんなに弄られてしまうテルヨシは完全に不満なのだが、結果として作戦前のひと笑いを取ることの良い緊張感を生み、この段階に来てもガチガチで動けなくなる、みたいな者はいなくなつたから、まあいいかと気にしないことにする。

そしていよいよ作戦開始となつて、一番近い離脱ポイントへと移動していったタクムを見送りつつ、いつか実行する帝城攻略の下調べとしてしっかりとスザクの行動を記憶しようと集中力を上げるテルヨシ。

その横ではすでに《ブレード・ファン》を展開剣にして、そのうちの1本を両手持ちして精神統一するサアヤからは、視認できるといったものではないが、明らかに通常とは違う気配を出し始め、強力な心意技を使う準備をしているものと思われた。

心意は使うと周囲のエネミーを呼び寄せるといった未だ解明されていない謎現象もあるため、過剰光を纏うほどの心意はまだ使うわけにはいかない。

これがわかってるから攻撃担当のサアヤも黒雪姫も精神統一まで

に留めてその時をじつと待っているのだが、初見のテルヨシはいきなりタゲられたら怖いからと2人の少し後ろから追撃か防御かといった選択肢で動けと指示されていた。

だから一番槍を担当する2人ほど迅速性は必要ないので、突入直前から過剰光を纏う予定だ。

1分もせずにタクムの合図である《ライトニング・シアン・スパイク》が空へと放たれて、それを確認したテルヨシ達もタイムラグのおよその時間。現実世界では約1秒。加速世界では約16分となったカウンタダウンに向けて動き出し、ハルユキとレイカーは橋の後方200mの地点へ。

マリアとチユリはスザクの攻撃が届かない橋の入り口の手前10mほどに待機し、テルヨシとサアヤと黒雪姫は最前線の橋の1歩手前で極限の集中力を引き出して、一言も喋ることなくその瞬間を待つ。

スツ、と時間を計っていた黒雪姫が、その右腕を真上へと掲げて、後方のハルユキとレイカーにも見えるようにその腕を振り下ろして作戦開始の合図を送ると、並んで大橋へと突入したサアヤと黒雪姫に続いてテルヨシも大橋へと突入。

直後、最奥にある1辺が20mはある祭壇から渦を巻くような炎が出現し、みるみるうちにその猛々しい炎は立ち上ぼり火柱のようになると、その火柱から突き破るように左右へと翼が出てきて、徐々に小さくなる火柱の中からは、炎そのものを鳥という形ある存在にしたような、圧倒的なプレッシャーを持つ大鳥が姿を現す。

その姿を見た瞬間から、テルヨシがちよつとだけ甘く考えていた帝城攻略という目標は『限りなく不可能な目標』へと変わってしまったのを脳が理解してしまった。

——やっべえなこれ。

今まで少なからず見てきたエネミーは、理不尽な強さはあっても、1つや2つはどう攻めるべきかを考える余地があった。

あのニーズホックとかいう《神獣級》エネミーでもそうだっただけに、目の前のスザクに対して何ひとつ攻撃手段が浮かばなかったテルヨシの衝撃は凄まじく、その動揺を意気消沈へと追い込もうとするよ

うに天を仰いで咆哮したスザクは、全身のどこよりも赤いその双眼で眠りを妨げたテルヨシ達を捉える。

かみかぜしやうらい
「神風招来!!」

「《オーバードライブ》!! 《モード・レッド》!!」

その睨みに纏おうとした過剰光をコントロールできなくなったテルヨシだったが、そんなテルヨシとは裏腹に精一杯の勇気と気迫で強大な過剰光を纏ったサアヤと黒雪姫は、1歩でも後退しようとしたテルヨシに振り返りもせずとその背中で語りかけてくる。

——臆するな! お前は1人じゃない!

きつと2人も腰が砕けそうなほどのプレッシャーを受けてテルヨシのようになってしまふのを、寸でのところで踏み留まってるくらいギリギリの状態。

それでも前へと踏み出せたのは、2人が『強くあろうとする』からに他ならなく、女がそうやって振り絞ってる勇氣に感化されない方がおかしな話。

両手持ちした展開剣の1本と後ろに控える残りの17本の展開剣にも真紅の過剰光を纏わせたサアヤは、右利きの持ち方で剣を引き絞って突きの体勢を取ると、より一層の過剰光を放って手に持つ剣を突き出す。

それと同時に黒雪姫もいつかの自己暗示の心意と槍を思わせる形状へと変化した右手を引き絞り、真紅の過剰光を纏ってサアヤ同様にその手を前へと突き出す。

ストライク・ガスト
「《突風塵》!!」

ヴァーバル・ストライク
「《奪命撃》!!」

2人から放たれた心意技は、まだ300mは先にいたスザクへと槍のごとく伸びていき、前進していたスザクの胸へと突き刺さり、血のように身に纏う炎が弾けて視界に表示されたスザクの5段もあるHPゲージの1つを雀の涙ほどの量だけ減少させた。

ライジング・ブレード
「《昇竜剣》!!」

さらに攻撃を終えた黒雪姫とは違い、後ろに控えていた展開剣を切っ先から伸びるように射出させて長大な剣をイメージさせたまま

過剰光を放つサアヤは、スザクの突き刺さったままの心意の剣を豪快に振り上げて追撃し、スザクの体を突き破って頭上へと掲げられた長剣は、頂点に差し掛かって過剰光を収めリーチが一気に短くなり、展開剣18本分のものに戻り、ズララツとまたサアヤの後ろへと控える。

その追撃に怯む素振りを見せて咆哮したスザクに、更なる一撃となつて炸裂したのは、橋の外から狙撃したマリアの炸裂弾。

その狙いはまだ遠くにありながらも正確無比にスザクの左目へと命中し、炸裂弾のスプラッシュで爆炎が巻き起こる。

そんな3人の攻撃でスザクも完全にそのターゲットをテルヨシ達へと向けて前進してきて、その頭上をレイカーのブーストを得たハルユキが翼を叩いて飛び越えていくのが見えた。

役目を終えたレイカーも前進するスザクの手前に着地して、すぐに防御の心意を身に纏って全速での後退を始めて、作戦は順調に進行していた。

「……………ふあっ!？」

完全にタゲ取りは成功し、遠くの方に謡のアバターが出現するエフェクトも見えたと思つた時。突如としてスザクが前進を止めてその身を翻したのだ。

まるでより深く侵入した者のそれ以上の歩みを止めるかのごとくテルヨシ達を無視して、謡へと近づくハルユキに狙いを定めたスザクは、その体を180度翻すより早くそのくちばしを開けて、その口内に紅蓮の炎を溜め始める。

あまりに突然のスザクの挙動に、瞬間的に動けたのは黒雪姫とレイカーで、それでも謡救出に集中するハルユキに注意を促すような叫びを上げるのが精一杯で、とてもじゃないがスザクの火炎ブレスをどうこうする余裕はない。

サアヤも心意の連続技の直後で精神力の消耗が大きいのか、再び心意技を放つための溜めが間に合わない感じで呆然としていた。

「……………ふう」

緊迫した状況に作戦の失敗を匂わせる雰囲気。

マイナスな空気が周囲へと拡散され始めた瞬間に、テルヨシは驚くほどに頭をクリーンな状態にして、その足に群青色の過剰光を纏い、その場で左右の足を地面を擦るように交互に1往復させる。

「《インフェルノ・ステップ》」

そしてその足に炎熱属性と吸収。全身に炎熱耐性を付与する必殺技を発動し、隣にいたサアヤの「ちよつと!？」という声も、前にいた黒雪姫とレイカーの「なっ!?!」「えっ!?!」という驚きも無視して一直線にスザクへと迫ったテルヨシは《移動能力拡張》のみの心意技ライトニング・ファントム《閃光の幻影》でスザクの火炎ブレスが放たれる寸前で振り返ったスザクの前方に到達。

「来いよスザク」

そして黒雪姫とレイカーの叫びを受けても謡の救出に動いたハルユキをチラ見してスザクの顔の前に跳躍したテルヨシは、直後に放たれた火炎ブレスを真正面から直撃する。

ニーズホックの《スコーチング・インフェルノ》すら1割のダメージに押さえたテルヨシの必殺技、インフェルノ・ステップだが、スザクの火炎ブレスは比較するのおおこがましいと言うようにテルヨシのHPゲージを1秒で3割も削っていく。

しかしインフェルノ・ステップも火炎ブレスをいくらか吸収してその威力を減退してくれたらしく、ハルユキへと迫った炎も直撃さえしなければ逃げ切れるかもしれないくらいになったように、炎の中からは見えたが、それは楽観的だったかもしれないとも思う。

そしてスザクの火炎ブレスは3秒と経たずにテルヨシのHPゲージを消滅させて死亡。謡ほどではないが、大橋の半ばほどで死亡マーカーとなってしまうた。

—— やつべえ……どうすつかなあこれ……

死亡マーカーの近くで浮遊霊状態になったテルヨシは、その視界でギリギリ、ハルユキと謡の姿を見ることができて、謡を抱きかかえたハルユキは上昇することができずに火炎ブレスによって焼かれるかと思われたが、そのまま直進して南門に手を伸ばすと、まさかの門が開いて2人はその中へと入ることで火炎ブレスを回避。

こういうのってボスを倒さないと開かないもんだよな……と、何もできないゆえにかえって冷静になったテルヨシは、絶対に押しした程度で開くはずもないその門が開いた事実には納得がいかなかった。

だが現実には門は開き、結果として2人が無限EKを逃れたのだから有難いハプニングだ。

いや、事態はそう楽観的なものではないかもしれない。

スザクによる無限EKは逃れたが、あの門の先が帝城の内部である以上、もしかしたらスザク以上かそれに比肩するエネミーがいて、そこで2人が無限EKになっていることも十分にあり得るわけだ。

状況としてはスザクの無限EKより深刻かもしれない——門が再び開くかわからないためだ——ので、黒雪姫らがどう判断するかかわからないが、その前にまずは自分のことについて考えなきゃならない。

マジでどうすつかなこれ……と黒雪姫達が大橋を抜けたからか、スザクもその姿を消して静かになった大橋の上で呆然と思考したテルヨシだが、とりあえず1回目の蘇生で1歩でも移動できれば、250mほどの距離なら毎歩1mとしても250回くらいで脱出は可能だ。

だが1歩も動くことができずに即死するようなら、謡と同じ状況で打っ手はない。

幸い、レベル9になろうとしていたから、レベルアップに必要な1万ポイントに限りなく近いポイントはあるので、50cmでも前に進めればなんとかなる。

なんとかなる。そうは言っても失うバーストポイントは莫大なものとなるので、もっと何か別の方法を模索しておきたいのも事実で、さらにISSキットの問題もあるから、のんびり封印生活をエンジョイしている場合でもない。

とにかくここでフットワークを落とすわけにはいけないので、今日、明日にでも大橋からの脱出はしておきたい。

そこまで考えたところでテルヨシの視界に「DISCONNECT WARNING」の切断警告の表示が現れ、数十秒後に蘇生を待たずして現実世界へと戻されていった。

意識が現実世界へと戻ってまだ頭が整理できていない状態だった

テルヨシは、突如として振りかかったサアヤのビンタを回避することができずに面食らう。

そのビンタをくれたサアヤは、その目にこぼれ落ちそうな涙を浮かべてテルヨシを正面から見ていて、そのビンタの意味するところをすぐに理解する。

「……………ごめんな、サアヤ。心配させた」

「……………あんだだけ言ったのに突っ込むバカはこの世にアンタだけよバカ。バカバカバカ……………」

作戦前に笑い話にさえされながら、本当にリスクを負う足止めに動いたテルヨシを責めるサアヤは何ひとつ間違っていない。

それでもテルヨシは動いてしまった。死ぬのを承知でスザクの前へと躍り出て、その火炎ブレスを受けた。

それ自体にテルヨシは後悔はないが、目の前の彼女を泣かせたのは紛れもなく自分であることを自覚しつつ、バカバカ言いながら胸に顔を埋めたサアヤを優しく抱き締めて落ち着かせるように頭を撫でる。それしか、できなかつた。

とはいえサアヤは強い女なので、ものの10秒ほどで泣き止んで顔を上げると、ムギユツとテルヨシの両頬を手で挟んでアヒル口を作り、その状態で話をする。

「なったものをうじうじネチネチやっても仕方ないし、切り替えていくわよ」

「ど、どうしゆんによ?」

「幸い、アンタが死んだ場所は無限EKになるかならないかギリギリのラインだったし、スザクを3秒でも足止めできれば、アンタの足なら抜け出せるでしょ」

「ちゅ、ちゅみやり」

「明日にでもやるわよ。アンタをスザクのEKから脱出させる」

原作7、8、9巻辺り

Acceleration Second 10

「すんげえ1日だった……」

《アーダー・メイデン》の無限EK救出作戦が行われた翌日。

家に帰ってからは MARIA と送ってくれて居座っていたチユリにポコポコと殴られながらに説教を食らい、翌朝には登校して早々に黒雪姫からわざわざ対戦の30分をフルに使っての説教を、ハルユキ達のギャラリー有り——タクムが風邪で欠席していたが——の中でされて、放課後はちよつと頑張つて早く来た謡に「UI」申し訳なかったのです」と謝られるという失態を演じて、ボロボロの精神状態でバイトを始めていた。

そうなったのも全てがテルヨシのしでかしたことにして当然の報いになるのだが、みんなしてガミガミガミ言いきでビンタ1発——とちよつとのバカ連呼——で終わったサアヤが一番優しい怒り方だったなんてことが起ころうとは夢にも思わなかった。

そんなこんなでバイトはキツチリとこなしながらも、今日のバイト終わりにはサアヤが立案する《無限かもしれないEK脱出作戦》が行われるので、その進行具合をイートインコーナーでくつろぐサアヤともう1人のセーラー服を着た女子高生を見ながらに確認する。

サアヤと一緒にいる女子高生はすでに何度か来店歴があるので、テルヨシも顔と名前くらいは普通に知っている。

名前は馬場園由梨。

超を付けてもいいほどに美人で大人びておしとやかな印象を持ちながら、長い黒髪を左右2つに分けてお下げにしている、まだ可愛さを残しているのがまた憎い。

性格も凄く穏やかで礼儀正しくて、のんびりとした口調は癒しそのもの。

何よりもあのパドをも凌ぐ丰满な胸は、店の女性客でも1度は凝視してしまうような代物。男ならよだれが垂れる。

これを高校1年生。まだ16歳——誕生日的にはまだ15歳らしいが——で持つのは胸囲的……いや、驚異的と言えよう。

そんなユリといつの間に仲良くなったのかと思いつつも、なんか楽しそうにしてるから作戦とか絶対に考えてないっぽいサアヤにジト目を向けつつ接客をしていると、それに気づいたサアヤが「わかつてるっでの」みたいな態度で楽しそうな会話を中断してユリと何やら別の話題で会話をする。

少しして周りの客がテルヨシを呼ぶ声が出さなくなったタイミン
グでサアヤがテルヨシを呼び寄せて追加の注文がてら内緒話をしてきて、ユリの注文を聞きつつそれに耳を傾ける。

「んで、あのあと2人がどうなったか聞いたの？」

「2人？ ああ、詳しい話はしてくれなかったけど、2人とも中で無限EKとかにはなつてないみたい」

ずいぶん端折って質問してきたから最初はピンと来なかったテルヨシだが、小声でする話なら加速世界のことだろうと思い、すぐに昨日の作戦でのハルユキと謡のことだとわかり、今日の説教ついでに黒雪姫がちよつとだけ話してくれたことをさらに端折って伝える。

説教しながらだったからか、もう作戦には参加させない意思を示すように、帝城内で何かあったらしいハルユキと謡の詳しい話も、今後の作戦の話も本当にしてくれなかった黒雪姫は、とにかく2人が切断セーフティーでまだ帝城内にいながら無事であることだけ教えてくれた。

それを考えると端折るも何もなかったが、それを聞いたサアヤは「ならいいわ」と軽い感じで流して注文を述べて、今度は今夜の作戦の話に入る。

「今日はイーターもれんこ……同行させるから、私はバイト終わりで待つてあげられないから」

「じゃあどうすんの？」

「アンタにはユリを付ける。2人きりだからってあの凶悪な胸を触ったりしたら速攻で別れるからね」

「……………えっ？」

というかユリがいるのに小声とはいえこんな話をしてても大丈夫だろうか。

と思わなくもなかったテルヨシがどう切り出そうかと迷った瞬間、なんか衝撃的なことをサアヤが言うから、つい隣のユリに顔を向けると、そのユリは話がガツツリ聞こえていたのか、ニコツと笑顔を作り胸元で小さく手を振ってみせる。

「……どなたですか？」

「こほんっ。はて、誰じゃろうな？」

話に理解があるということは、つまりユリもバーストリンカーであることは間違いないのだが、生憎と何度か会っていてもその性格と一致する人物がパツと浮かばなく、自分の知らないバーストリンカーかと思っただけで済ませた。

するとまだわからないのかといった雰囲気ですら笑ってからは、小さく咳払いをして急にコツテコテのおばあちゃん口調をしたユリでようやく誰か理解して驚きの声をあげるのを寸でのところで止める。

「バーちゃん、か」

「ご名答」

そんなコテコテのおばあちゃん口調を使うバーストリンカーは一人しか知らないのです、目の前のユリが《サンセット・ボンバー》であることを確信し、すぐに元の口調に戻ったユリは話の主導権をサアヤに移して紅茶に口をつける。

「そういうわけだからバイト終わったらユリの指示に従いなさい」

「くっそう。あそこまで作ったキャラだとマジで見抜けん……」

「……話を聞きなさいよ」

ユリの正体がわかったので話は理解できたテルヨシだったが、サアヤの話を聞きつつも何度も会っていないながらユリがバーちゃんであることに気づくことすらできなかつた事実には衝撃を受けてブツブツ言っていたら、ツッコまれながらその頭を軽くチョップされてしまったのだった。

バイト後。帰宅の準備を終えてから、昨夜のようにユリを店に招き入れて、物凄いジト目を向けられたパドから再びプライベートルーム

を借りて、そこにユリと2人で入って隣り合ってソファアに座る。

「サアヤからはあまり詳しい事情は聞いてないのだけど、とにかくスザクのテリトリーでテル君が死んじゃったんだよね」

「まあ色々あつて不甲斐ない結果に」

「ふふつ。テル君がそんなことするつてことは、そこに困ってる女の子でもいたのかな」

「オレの動機がいつも女性関連とは限らないのではないでしようか」

「わかるよ。だってテル君は自分の目標には一直線でも、意外と堅実などころあるから、無茶するのは女の子絡み。何年見てきてると思ってるの？」

まだ作戦の時間までは余裕があつたので、時間潰しがてらユリから会話を切り出してきて、初めてユリと2人きりで密閉空間にいるというなんとも言えないいけない空気に珍しく緊張したテルヨシは、なんとなくその話し方にも緊張が出てしまい、それを笑いつつ話すユリは、ようやく互いにバーストリンカーであることを認識したりアルでの会話に嬉しそうな感じがあつた。

「それはそれとして、今回のこれに参加してくれるのはやっぱりサアヤに強引に?」

「話を貰つたのは一方的ではあつたけど、参加を決めたのは頼まれたからとかじゃないのよ」

作戦前なのになんとなく緊張感が欠如してるユリには締まりがないが、サアヤ達が主導で行う作戦に文句を言えないので、それとなく話を本筋にしてユリの参加が強引なものだったのでと勘ぐるが、そうではなく自らの意思で参加したと返したユリ。

何かそうさせる出来事でもあつたかなと記憶を掘り起こす手前までいったテルヨシだが、その前にユリが自分の胸に手を当てて口を開く。

「だって私はまだ、テル君に恩を返せていないんですもの」

「……恩? なんがありましたっけ?」

「テル君にとっては当然のことをしたつて意識だろうけど、私にとってはバーストリンカーとしていられたかどうかの大事なことだった。

だから今回の件はその恩を返すためのもの」

「えーつと……そんな大事なことって、あれですか？」

「そう。《チェリー・ルーク》の鎧の件。あの時はちゃんと面と向かってお礼を言おうと思ったの。でも、直前でやっぱり恥ずかしくなっちゃって出来なくて……それがずっと心残りだった」

その口から出た恩とやらに始めは心当たりがなかったが、聞けばチェリーの件であることにすぐ思い至る。

しかしあれは後日。テルヨシが作ったケーキを1品ずつ購入するといった太っ腹な恩返しをされたので、テルヨシ的にはもう終わった話だったのだが、ユリは加速世界での恩は加速世界で返そうというプライドがあったようで、今回がそのチャンスだと思ったのだそう。

「だから改めて言わせて。あの時は私とチェリー。ユニコちゃんを救ってくれてありがとう。この恩はこれから全力で返すからね」

「うっ……くっ……」

だからその時に出来なかったこともしたいと思ったのか、真正面から精一杯の気持ちを込めて言われたお礼があまりにストレートすぎて、恥ずかしくなって言葉が出なくなる。

そんな珍しいテルヨシの姿が面白かったのか、クスクスと笑ったユリは、ずつと胸につつかえていたものが取れたようにスツキリとした表情へと変わると、すぐに頭を切り替えてテーブルに備え付けられたケーブルを引っ張り出してニューロリンカーと有線接続させる。

「そろそろ時間だから準備して。今回の作戦では最小のバーストポイント消費でテル君を脱出させたいから、タイミングだけはキツチリね」

「う、うす。切り替え早え……」

そうして普段ののんびり具合さえ嘘のようにテキパキと動くユリに促されてテルヨシもケーブルをニューロリンカーと繋げて切断セーフティの設定。

バイト終わりのサアヤから来たメールによると、今回の作戦は目茶苦茶シビアなタイミングで行われるので、テルヨシの出現に1秒の誤差も許されない。

そのため、まずはサアヤ達が先行して加速し南門まで移動。それが終わっただろうタイミングでテルヨシが加速してスザクに瞬殺される。

これによってテルヨシの死亡を見届けたサアヤ達がタイムカウントを正確にでき、蘇生のタイミングがハッキリとわかるといった流れ。

次の蘇生時にサアヤ達がスザクへと攻撃を仕掛けて怯ませ、そのわずかな時間で蘇生したテルヨシが全力で離脱。

作戦としてはこんなところだが、サアヤ達がどうやって攻撃するかは聞いてないテルヨシは、なんとなく予想がつきつつも怖いからあえて口にせずにその時を待つ。

「いいねテル君。私が加速した4秒後に続いて」

「了解です」

「あと、加速してる時にイタズラしちゃダメだよ?」

「それはサアヤにもミヤアにもタコ殴りにされるので神に誓ってしません。というかマナーですし」

いよいよその時間が迫って、子供に言い聞かせるように確認したユリの過保護っぽい性格に苦笑しつつ、冗談なのか本気なのかわからないことを言って頬を赤らめたユリにはちよつと困ってしまう。

それでなんかパドのトゲがいつもより痛かった理由がわかった気がしないでもないが、そこまで節操ないキャラのイメージありますかね? と思わなくもない。

大変に失礼な話だが、他人に植えついたイメージというのはなかなか払拭されてはくれないから、これから誠実に生きていこう——そもそもやましいことなどした覚えすらないのだが——と心に誓いつつ、時間となって加速したユリの4秒後にテルヨシも続けて加速し、まずはスザクに豪快に焼き殺されにいったのだった。

案の定、出現から1歩だけ前に進む余裕はあったものの、テルヨシの出現を感知してるのか、完全に出現した時にはもう、スザクも出現を終えてその口から放射された火炎ブレスが容赦なく襲いかかってきて即死。

だが予定通り、南門の大橋の入り口にサアヤ達の姿があったので、次の蘇生時に渾身の全力ダッシュをすればいいのだと考えながら、刻み始めた蘇生へのタイムカウントをじつと見て集中力を高めていく。

その間にサアヤ達が何をしているのか視界からは全く見えなかったものの、サアヤが連行……ではなく、同行させてきた《アイス・イーター》とユリを参加させたということは、おそらくはそういうこと。

ユリのデュエルアバター、サンセット・ボンバーには、規格外とも呼べる破壊的威力の必殺技《デンジャラス・タイマーボム》があり、必殺技ゲージを200%も消費するので最短でも2度のチャージが必要な面倒臭さを持つ。

しかしイーターが持つアビリティ《フリーザー・アイス》はその必殺技ゲージを一瞬でフルチャージする超絶便利な代物で、それによってチャージ時間を劇的に短縮できるというわけだ。

もちろん、フリーザー・アイスを食べたあとは1分間の思考停止による拘束はあるが、そこはサアヤがフォローしてあげればいいだけ。

そうやって時間の許す限りデンジャラス・タイマーボムを生成することで、この世のものとは思えない核爆弾でも投下したような途方もない威力のデンジャラス・タイマーボム祭りをこの南門でやろうとしている。かもしれないのだ。

これが自分の蘇生する数秒前に炸裂すると考えると、たとえ浮遊霊状態とはいえ失禁もあり得そうでマジ怖いのだが、そうしてテルヨシがマジでびびるレベルの攻撃なら、さしものスザクといえども反撃は容易ではないだろうと思いたい。

というかこれは今後の帝城攻略に使えるのではなからうかと考えたりもしたが、すぐに冷静になって考えると、爆発は味方も即死レベルで、その爆発範囲も直径500m。大橋の最奥に投げ入れても橋の半分が爆発の範囲になってしまうので、とてもじゃないが畳み掛けるような追撃は不可能だし、ファーストアタックとしてはちよつと得策ではなさそう。

さらに冷静に考えれば、それをユリ本人が気づかないわけもなく、絶対に昔に《四神》全部にデンジャラス・タイマーボムは投げてみて

いるはず。

その結果、多少でも怯んだからサアヤも作戦の根幹に組み込んだかもしれないことに今さらながらに気づいて空笑い。

考えるくらいのことしかできないとテルヨシは無駄に色々と考えてしまうのが今さらながらに判明し、普段の集中力のなさが露見したところで蘇生する1分前となり、さすがにもう思考してる時間は勿体ないので集中を別の方向に切り替えて、可能ならと心意を使う精神統一もしておく。

そしてテルヨシが蘇生する10秒前にサアヤ達が大橋に足を踏み入れたのか、祭壇からスザクが出現し、侵入者を屠らんと前進を始める。

「《ブラスト・ゲイル》!!」

それを確認するかしないかのタイミングでサアヤが高々と必殺技発声をして、浮遊霊状態のテルヨシの上を横倒しの竜巻が通り過ぎ、その竜巻に巻き込まれながら飛ばされるデンジヤラス・タイマーボムの姿も確認。

だがその量たるや、本当に時間が許す限り作り続けて、ユリの手にストックできる限界まで作ったぞといった量で、それが通り過ぎた直後。

スザクが前進してくる方向から鼓膜を破らんほどの轟音が間隔などほぼなく同時に炸裂し、その余波がサアヤ達の方へと突き抜けて、テルヨシのいる地点は爆発の煙で視界ゼロになる。

——あれ、この状態で走らなきゃならないのオレ……

と思う暇もなく蘇生時間を経たテルヨシは黒煙で全く見えない大橋の上に降り立って、怒り狂うようなスザクの咆哮がした逆方向へと黒煙を突っ切るように走り出す。

余計なこととも一切考えずに一心不乱に全力疾走したテルヨシは、ようやく抜けた黒煙から見えた景色の先にサアヤ達の姿を発見。その距離はあと100mあるかないか。

「早くしなさい!! 来てる来てる!!」

「振り返るなテイル!!」

「ぎゃあああああ!! デイルざああああん!!」

そこまで来ると3人の叫びが聞こえてきて、その声で反射的に振り返りそうになったが、振り返らずともわかる圧倒的なプレッシャーがどんどん近づいてくるのが背中越しに伝わってきて、振り返ったが最後、スザクの猛追にびびって腰が砕けるだろうと確信。

もう全力で走るしかないと覚悟したテルヨシは、残り80mほどになったところで心意技《閃光の幻影》を発動しスザクを引き離す加速をしてみせたが、スザクも逃がさんとばかりに火炎ブレスを飛ばしてきたようで、背中にチリチリ……メラメラと熱さが伝わってきた。

「ふんぬらあああああ!!」

閃光の幻影よりも早く迫るらしい火炎ブレスが恐ろしいが、もうあと10メートルになったところで渾身のヘッドスライディングを繰り出したテルヨシは、スザクの火炎ブレスから逃げるように退避していた3人を余裕で抜き去って盛大に地面を転がり、およそ50mも転がってようやく仰向けで止まる。

逆さまの視界で自分が転がってきた方向を見たテルヨシは、火炎ブレスが消滅して、その先にいたスザクが悔しそうに後退して炎となって消えていくのが見え、大橋を抜けて倒れてることを認識。

次に自分へと走り寄ってきたサアヤとユリとイーターに目をやりながら体を起こして、感動で抱きついてきそうなサアヤを迎え入れるために両手を広げた。

「心配させんじやないわよバカ!!」

が、そんな感動は一切感じさせない全力疾走からの飛び蹴りが炸裂し、それを迎え入れてしまったがためにまたも地面を転がる羽目になってしまった。

とまあそんなツンデレが炸裂したところで改めてホッと胸を撫で下ろしたテルヨシは、どうにかスザクのEKから脱出させてくれた3人に土下座しながらお礼を言う。

「マジありがとうございました! オレの身勝手になったEKなのに、こうして助けてくれたのは感謝しかありません!」

「本当よね。今後またこんなことがあっても助けないかもしれないか

ら」

「そうは言ってもなんだかんだで助けてしまうのがお主であろうに」

「ガスト姉はツンデレさんだから仕方ないです」

「わかったような口を利くのはどこのどいつだい？」

「ガストが照れておるぞー。逃げろー」

「バーちゃんさん早い！　ぎゃー！」

自分の落ち度による事態だったのに、こうして力を貸してくれたサア達の優しさは泣きそうなほど嬉しかったが、その感動を打ち消すようなコントを披露し始めた3人に、珍しく真面目にやったのにー！　と思いつつも、らしくさせようとしてくれたのだと感じてすぐにその騒ぎに加わって、しばらく無駄にじゃれあってから離脱ポイントを潜って現実世界へと戻っていった。

現実世界に意識が戻ってからテルヨシがまず見たのは、隣にいたユリで、ユリもケーブルを外しつつテルヨシと目を合わせてから、急に優しく抱きついて、その耳元でささやいてくる。

「テル君が無事で良かった」

「……ありがとうございます……だけどこれは……」

不意のことに感謝の言葉をなんとか捻り出しはしたものの、それ以上ユリが抱きついたことで押し当てられるその豊満な胸の感触が理性を飛ばそうとしてきて、離れてほしいようなほしくないような葛藤が繰り広げられる。

しかしその葛藤も店を閉める関係で待っていたパドが扉を開けて入ってきたことで終わりを告げ、それを見たパドは虫でも見るような冷たい目でテルヨシを見てからボイスコールして「Hi、サアヤ」と言うもんだから、パドに気づいてなかったユリを引き剥がしてジャンピング土下座を披露するのだった。

Acceleration Second 11

スザクによるEKから脱出して一夜。

あれからユリに抱きつかれたところを見られて、かつてないほどの冷めた目でサアヤにボイスコールしたパドをなんとか留まらせて、事実のみを報告されることでギリギリ別れ話にはならなかった。

本当に肝が冷える思いをしてから家に帰れば、今度はマリアからきな臭い話を聞くことになり、今日は欠席していたタクムが最悪のPK集団《スパーノヴァ・レムナント》に襲われ、返り討ちにして全滅させたと噂が流れ、すでに新設の飼育委員だったらしいハルユキには話して真相を知るために動いてるようだった。

最悪のPK集団とまで呼ばれる、バーストリンカーとすら呼べない集団によるリアルアタックをタクム1人で返り討ちにしたというのは、たとえ自分が同じ状況になったとしても無理そうなので、何かある気はしたものの、すでに夜の8時を過ぎてタクムも家にいるだろうし、ハルユキも動いているならすでに初動は遅い。

話は黒雪姫などにもいつてると聞くし、もう動こうにも動けないので翌日に回しての今日なのだが、いざ登校してみれば黒雪姫から「ハルユキ君からメールをもらって、すでに事は終息したようだ」と言われて肩透かしを食らう。

だがやはりISSキットが関わった事態だったようで、概要こそ放課後に集まって詳しく聞くようだが、ISSキットはテルヨシも問題視する事態だけにその集まりに参加したい。

「姫よ。悪いんだがその話は先にタクム君から聞いておいていいか？」

「ン、集まりに参加したいと言わなかったのは殊勝だな。対戦時間だけで足りるかはわからんが、情報は赤の方にも伝わるならば良からう。対戦拒否の方は解かせておく」

したいのだが、先日の件もあって突っぱねられる事は間違いなかったから、在校中にタクムから話を聞く許可をもらえば、それならばと早速タクムにメールを送った黒雪姫は、10秒足らずで返ってきた了

解のメールを伝えてどうぞと促してきた。

が、タイミング的には朝のHRが始まる直前だっただけに落ち着き
がなかったのも、仕方なく1時間目の終わりにでも対戦を申し込もう
と思っていたら、今度は授業の終わる直前に黒雪姫へとチユリから
メールが届き、ハルユキが体育の授業で倒れたとの報告に慌てふため
いて椅子から滑り落ちてから、チャイムと同時に教室から飛び出て
いったのを見届け、なんか空気を読んでその休み時間もパスすること
になってしまった。

結局、向こうが落ち着いただろう昼休みにまで延ばした対戦でよう
やくタクムから話を聞く段階にきたテルヨシは、合わせて60分しか
ない時間——同じ相手に2度挑めない仕様のためだ——でできる限
りの情報を引き出しにかかる。

事の始まりは一昨日の無限EK脱出作戦の後に、すでにISSキッ
トを使ったバーストリンカーと対戦していたハルユキから話を聞き、
その夜に塾の見学に外出し世田谷の南の方へと足を伸ばし、そこで
《マゼンタ・シザー》というバーストリンカーからISSキットを譲つ
てもらったらしい。

その夜はわずかながら雨も降っていたので、そのせいで翌日に風邪
を引いて学校を休み、午前中に新宿の病院に行った帰りに情報収集を
しようとしたところ、落ち合うはずだった昔のバーストリンカー仲
間が裏切り情報を買ったスーパーノヴァ・レムナントにリアルで遭
遇。

相手も心意の使い手であったため、付け焼き刃の心意しか使えない
タクムでは到底太刀打ちできないものだったが、持っていたISS
キットを使い、撃退に成功。

しかし1度でも使用したISSキットは使用者に寄生し、タクム自
身の精神も侵食し始めて、どうにかなくなってしまいそうな衝動に駆り立
てられていたところにハルユキが来て、そこで対戦することとなっ
た。

対戦はおよそ心意による酷い内容となったのだが、その対戦の中で
キットが成長し複製体を作り、ハルユキにまで寄生しようとしたこと

ろでタクムが自滅し防いだらしい。

ここまででI S Sキットの脅威は相当なものだとわかるが、そのキットは複製体同士で繋がりがあつたため、増えれば増えるほどキットの力は増して精神干渉も強くなつていく。

それがどのように行われているのかは、その夜にタクムと直結しながら寝たハルユキとチュリまでをも巻き込んで起こつた現象が明らかしてくれたとかで、夜に眠っている装着者のイメージネーション回路を自動的に開いて《ブレイン・バースト中央サーバー》へと繋げて、そこにあるI S Sキットの本体が悪意の並列処理のような操作をして力を増大させているようなのだ。

中央サーバーはデュエルアバターのセーブデータやら加速世界のほぼ全てのデータを管理する場所だが、そんな場所にI S Sキットの本体があるというのも疑問はある。

それはそれとして、キットによつて無理矢理中央サーバーへと意識を繋げられて並列処理させられていたタクムは、直結によつて道連れにした感じのハルユキとチュリの援護によつて正気を取り戻し、心意技をI S Sキットの本体に叩き込んで現実へと戻つた。

そうして戻つてみれば、タクムに寄生していたI S Sキットはセーブデータを破損させられたに等しいダメージで消滅し、今は完全に元通りとのこと。

残念ながらキット本体の破壊までは出来なかつたようだが、タクムと同じ複製体のキットの使用者は干渉が弱まつているのは確実とかで、その感染力の抑制には一時的にでも影響したようだ。

「…………マゼンタ・シザー、か。オレも1度だけ対戦した覚えがあるが、足跡は追えそうにないな」

「僕ももう無茶は出来ませんから、不用意に接触はしません。ただ、世田谷方面の感染源に最も近いのは彼女である可能性が高いです。キットを渡す時の口調もずいぶん流布してる感じでしたから」

「その辺は顔が広いお方がいるから任せておきんさい。だが一時とはいえ、そんな力に頼つちまつた自分の心の弱さ。それだけはしっかりと噛み締めておけ。それがこれからの強さにきつとなる」

「……はい。テルさんもくれぐれも無茶だけはしないでくださいね。スザクのEKから脱したとはマスターから聞いていますが、そのイメージは僕らの中で色褪せるには時間がかかりますしね」

「……傷口を抉るな後輩……」

それら全ての話を聞いて考察までしていたら、たつぷり55分も費やしてしまって、とにかく話は理解したのでカッコ良く締めに入ったものの、最近の失態を引き合いに出されて締まりが悪くなってしまった。

それでもタクムはキッチンとテルヨシに感謝を現すお辞儀をしてからフィールドを出ていき、想像を越えるISSキットの手の込み具合にどうしたものかと考えながら遅れてバーストアウトしていった。

「………つてな感じでとりあえずはどうでしょうかね？」

放課後。いつもならばHR終了からまっすぐにバイトへと向かうテルヨシだが、今日はそのバイトを休んでまで学校に留まっていた。

来たる文化祭も再来週の日曜日に迫り、テルヨシが学校側から任された特別講義の試作的なプレゼンテーションを加速世界の問題と並行している都合、どうしても一段落しておきたいのがあった。

なので期日は今週中ではあったものの、早めにクリアしたいからと木曜日の今日にでも大雑把な内容は通しておこうと、今まで集まった教師陣の前で10分程度だが話をしていった。

詳しい内容についてはまた持ち帰って詰めることにはなるが、テルヨシが主導権を握る講義というアドバンテージから、具体的な意見は教師陣といっても特になく、内容を理解しそれが有意義なものになるならと割とあっさりオツケー。

あまりスムーズだと困惑してしまうのはちよつとひねた考えかもしれないが、折角バイトを休んでまでした説明なので、もう少し話を詰めておこうとオツケーが出て解散ムードになる中、どこまでやっていいかとかその辺のことを具体的に聞いておいた。

普段は熱心なところをほとんど見せないテルヨシの意外なやる気に教師陣が困惑しながら付き合うという不思議な会議を終えて、それでも時間は午後4時半を回るかといったくらい。遅れはしてるがバ

イトに行けてしまう……

しかし折角のお休みなのでたまにはのんびり放課後を満喫してみようかなと思いきや、今日もマリアと謡が来てるよなと校門へと向かわずに校舎裏の飼育小屋に足を伸ばしてみる。

案の定、一昨日から小屋に入れられたコノハズクを前にマリア達が餌やりを終えたところのようで、ほんのりと撒収の流れが見て取れた。

マリアには今日、バイトを休むことは伝えてあるので来る可能性については考慮されてるだろうが、それでも驚かそうと物陰に隠れながら接近していたら、それよりも先に堂々と飼育小屋近くのマリア達にまっすぐ近寄っていった女子生徒。しかも梅郷中学校の生徒ではない誰かが勢いそのままに背後から無防備な謡とマリアをまとめて抱き締めてしまう。

「ういういとマリアアッ……かま……ええたっ！」

いきなりのそれにはマリアも謡もどうすることもできずにされるがまま、ユリと同等かそれくらいの豊満な胸に顔を埋められてジタバタするしかなさそう。

——なんとうらやまけしからん！

と思うのはテルヨシが紛うことなき男である証明ではあるが、当の本人達はそれで窒息寸前までいってやるわけで羨んでる場合ではない。

近くにいるハルユキも止める様子がないので、仕方なしに隠れるのをやめて近づいていったのだが、声をかけるより早く2人のジタバタしていた手がパタリと力なく落ちたため、ちよつとだけ手遅れになってしまったのだった。

「マシユマロに殺されかけた……」

【UI】のです……】

実際に窒息寸前まではいったがギリギリで解放されて、衝撃的な経験を語る2人のぐったり顔はマジのあれだったが、代わるものなら代わってやりたかったとか言ったらドン引きされそうなので口から出るのを止めつつ、どうやらハルユキ達と知り合いらしいその女子生徒と対面。

薄い茶髪のナチュラルロングの超絶美人で、淡い水色のブラウスとチエツクのスカート。膝より上までを覆う薄いオーバーニー。

見るからに自分よりも年上の雰囲気もある女子生徒は、テルヨシの出現にもそれほどリアクションを見せずに口を開いてくれるのを待っている様子。

「あー、まあなんとなくこれは偶然のあれだけど……会ったことありますよね。お互いに」

「そうかもしれないですね。わたしもそんな気がしていました。こちらでははじめまして。倉崎楓子クラサキフウコと言います」

「皇照良。テルでいいですよ。マリアとももう仲良くなってるみたいで」

「ええ。マリアはもうういういと同じくらい可愛くて困っちゃいます」

「完全に同意です！」

あまり回りくどいのもあれだしと開口一番で核心に迫る発言をしたテルヨシに対して、全く動じることなく涼しい顔で即答したフーコは、やはりテルヨシが予想した通りの人物のようだった。

そもそも今の学校のセキュリティからして明らかな部外者であるフーコが問題なく入っていて、さらに謠とマリア、ハルユキとも親交があるとなれば、自然とその人物像は見えてきてしまう。

テルヨシがリアルを知らない黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》の副長《スカイ・レイカー》であることは間違いなく、フーコの方もこの輪の中に自然と入り込んだテルヨシが何者なのかをすぐ理解したようだった。

そうした言葉ではない状況から互いを理解したテルヨシとフーコは、近くでぐったりするマリアと謠も無視して『可愛い』という共通認識を確認してがっしりと握手。

この人とは仲良くなれそうだ。などと思っていたら、何か不吉な予感でもしたのか、その可愛い当人達は握手が怖かったらしく、2人して間に割り込んで握手をやめさせてきた。

「スキンシップは」

【UI】 ほどほどに、なのです」

「なぬ!? それじゃあオレとフリーコさんのスキンシップが過剰だど!?」

「酷いわ2人とも。わたしもテル君も愛情表現が顕著なだけなのに……」

「フリーコさんはハグがハグじゃないです……」

【UI】 今さっき殺されかけたのですよ……」

どうやら2人の中でのテルヨシとフリーコのスキンシップは少々激しいみたいで、その2人が意気投合する恐怖を感じての行動だったっぽい。

しかしそんな2人の反応すらも楽しむフリーコのブレのなさに同類として感心すると同時に、ついつい笑みがこぼれてしまうのだった。「さてと、今日もうーちゃん顔の顔を拝めてフリーコさんとも知り合えたから満足でござる。マリア、あんまり遅くならないように帰っておいで」

「えっ……うん。気を付ける……」

「それじゃあフリーコさん。今度はマリアとうーちゃんの可愛さについてをじっくり語り合いましうね」

「ええ。とても有意義な時間になると思いますから、今から楽しみですっ」

なんだかんだで和やかな雰囲気の流れはしたものの、ネガビユのメンバーが部外者含めてこうも校内に集まるのは偶然ではあり得なく、おそらくはフリーコも黒雪姫の招きによって入ってきたことは予測できる。

ならば今日もハルユキの家に行くと言っていたマリアや黒雪姫の言葉から、タクムの件の他にまた何かしらの作戦が行われるのは間違いないく、前回の作戦で残念な評価を受けたテルヨシがそれに加わるのは無理な話。

ならここで呑気に雑談をしている時間は向こうにとってはいあまり良くはないと思ったので珍しく空気を読んで撤回の流れにしたら、それが気持ち悪かったのかマリアの歯切れの悪い返事は印象的。

それでもさらに空気を讀んだフーコの笑顔の見送りによつてその場をあとにして一足早く帰宅するのだった。

平日にまつすぐ帰宅するなんてほとんど記憶にないくらいの珍事にちよつと違和感がありながらも、帰ってからやることをぼんやりと考えて高円寺駅近くの自宅マンションの前まで到着。

だがそのマンションの入り口前には見知った顔が待ち構えていて、テルヨシの接近に気づいて目力で『早く来い』と訴えてくるもんだから、走れないのに無茶な要求をしてきた相手に苦笑しつつ、出せる全力で近寄つて挨拶。

「2人して健気に待つてくれるなんて、モテる男は辛いねえ」

「そういうのいいから」

「あれ？ さつきまで『こうやつて彼氏を待つとかなんか彼女してる感じ』って言つてたのはどこの誰だったかな？」

「ユーリー……それは言わないって言つたばかりでしょうがあ!!」

「キャー、サアヤが怒つたー。テル君助けてー」

「んな抑揚のない声でテルの後ろに隠れるなー!」

待つていたのは帰宅はせずに制服のまま直行してきたっぽい彼女のサアヤとユリの2人で、合流して早々に騒がしくはしゃぐサアヤとユリが楽しそうに混ざりたかつたが、なんか眩しすぎて割り込めずに板挟みになつて約1分。

ユリの平謝りでとりあえずは場が収まつてから、特に約束もしてなかつた2人が何故いるのかという話になり、直前の騒ぎでそれすら忘れていたようにハツとしたサアヤは、とにかくまずは落ち着こうとテルヨシの部屋へと移動を促す。

「というかオレがバイト休んでるのよくわかつたね」

「先に連絡したユリがレパードから聞いてたのよ。アンタのグローバル接続は切られてるだろうし、それなら家の前で待つてうって話になつて今に至るつてわけ」

部屋に移動してからお茶を出しつつダイニングテーブルに落ち着いて、バイトを休んでいたにも関わらず待ち伏せできていた理由についてを聞いてみると、まあ納得。

その辺の疑問は前置きとして適当に処理しつつ、出されたお茶をちよつとだけ飲んで改めて話を切り出したサアヤは、鞆からXSBケーブルを取り出し、ユリも同様に1本のケーブルを取り出す。

「とりあえず噂のISSキットってやつを調べてみたんだけど、発生源は世田谷とか江戸川の過疎戦域って感じ。まだ流布自体は点々としてて大事には至ってないけど」

「目を追う毎に確実にその数は増えていってるかな。来月まで問題が延びると、さすがに大多数のバーストリンカーが異変に気づくはず」「それくらいには進行が早いってことか。んで、そのケーブルを出すってことは《上》に行くんだよね。目的は？」

「うーん。緊急ってこともなさそうなんだけど、調べてる時に耳の早いやつから変な情報が入ってきたから、確認しに行くのよ。もしかしたらISSキットとも関係があるかもしれないしね」

「危険はないと思うけど、一応セーフティはあった方がいいから、ホームネット経由でお願いね、テル君」

「その辺のことを詳しく話してほしいのに『詳しくは向こうで』が染み付いた古参は時間の使い方が上手いのか下手なのか……」

その行動から確実に《無制限中立フィールド》に行くのは間違いないが、向こうの方が経過時間的に有意義に時間を使えるからか、現実での説明を極力省いてニューロリンカーにケーブルを挿して繋げる2人に合わせると、どうしても古参と割と新参の差異が生じて苦笑するしかない。

ただでさえ無制限中立フィールドはテルヨシが行くことをなるべく避けていたフィールドだから、その2人との温度差は大きいが行かない選択肢なんて始めからないのだから大人しく言われた通りにホームサーバーとの有線接続と切断セーフティをセットして2人と直結。すぐに無制限中立フィールドへとダイブしていった。

「んげっ……《原始林》って……」

「また面倒な属性の時に入ってしまったの」

「あー、なんかすばしっこくてやたら強い獣型エネミーがいるとか聞いたことあるねえ」

「それもだけど、何より移動するのが面倒臭いわ……」

フィールドに降り立って早々に近くで四つん這いになって原始林ステージに落ち込んでいたサアヤを発見し、ユリでさえやれやれな雰囲気を出すので、おそろしくここから少し離れたところに移動するのだろうかとは思った。

移動となると確かに植生する木々やらが邪魔なことこの上ないし、エネミーもこのフィールド特有の種類が何体か確認されていて、その遭遇率もバカにならないとあつては落ち込むのも無理はない。

「もう1回入り直す?」

「……バーストポイントが無駄になるでしょ。嘆いても仕方ないし《変遷》も期待しつつ行くわよ」

「お客さん、どこまでですか?」

「《東京ミッドタウン・タワー》付近までじゃな」

その落ち込み様が可哀想だったので、1度離脱して入り直す提案を試みるが、ポイントを大事にするタイプのサアヤはそれを拒んで持ち直し移動を決め、移動となつたらテルヨシがタクシーなので言われるより先に《テイル・ウィップ》を2人の胴に巻き付けて持ち上げ、その行き先を尋ねて走り出す。

「それでそのミッドタウン・タワー付近に何があるの?」

「あんまり現実味がなくて実物を見ないことには私達も信じられないんだけどね……」

「んむ……テイルにはどう説明したものかの。東京の4大ダンジョンは知っておろう?」

「聞いたことはあるね。ナイトとかが持つてる《七の神器》セブン・アーキクスがあったダンジョンでしょ?」

「そう。それでどこのダンジョンにもダンジョンらしくボスエネミーつても存在するのはバカでもわかるでしょ」

「ボスのいないダンジョンとかただの探索ですもんね……」

「ボスと呼ばれるだけあつて、そのエネミーも等しく《神獣級》ということとは言うまでもないが、ボスエネミーはボスエリアでしか出現しない『テリトリーを持つとるエネミー』とも言えるじゃろ」

移動しながらその目的地についてをようやく話してくれる2人の話は主戦場を無制限中立フィールドに置いていなかったテルヨシに對して丁寧すぎる気もするが、それは優しさからのあれなので甘んじて受けて理解に努める。

そしてそこまでのことを聞いたら察しの良いテルヨシならもうなんとなく言わんとしてるのがわかり、思わずその足を止めてしま

う。

「……………えっと……………つまりそのダンジョンのボスエネミーが？」
「そのミッドタウン・タワーの頭頂に陣取ってるって情報が入ってきたのよ」

Acceleration Second 12

6月20日。木曜日。

文化祭で行う講義の内容説明のためにバイトを休んでいたテルヨシは、帰宅早々にサアヤとユリに連れられて《無制限中立フィールド》にダイブし、港区赤坂にある《東京ミッドタウン・タワー》を目指して《原始林》ステージのジャングルの中を移動していた。

「ダンジョンのボスエネミーが？」

「話だけ聞いたってそういう反応になるでしょ。だから直に見ようって話になったの」

「しかもそのエネミーが本当にダンジョンを出て居座っておるなら、厄介極まりないしの……」

2人の話では東京にある最強クラスの強化外装《七の神器》が鎮座していた4つのダンジョン。そのダンジョンの最奥にいるはずのボスエネミーが何故かそのダンジョンから出てきて、現在向かっている東京ミッドタウン・タワーの頭頂に陣取ってるらしい。

まだ2人とも情報で知っただけで実際には見ていないから半信半疑ではあったが、このところの異常事態は特に異常の度合いが凄いで、何かしらの関連性があると踏んでみるみたいだ。

「さ、さすがに4大ダンジョンのボスエネミー全部がいるわけじゃないよね？」

「それはないわね。もしそんな仰々しい陣取りしたら、今頃は噂レベルで済んでないし」

「そっか。そんな目立ってたら噂じゃ済まないよね……ん？ ってことは出てきてるエネミーってなんか目立たない感じの地味系とか、オレらくらいのサイズで見つけるのも難しいとか、そんなの？」

「地味系ではないが、目立たないというのは合っておる。なにせ凝視でもせんと『見えん』からの」

「見えない？ 物理的に？」

古参である2人がそうして直に見ないと信じられない怪奇現象に驚きの度合いは違うかもしれないが、それでも普通ではあり得ないこ

とと理解しつつ、その出てきたエネミーとやらの情報を得るために色々聞いてみる。

すると2人して物理的に見えないエネミーなのかという質問に首を縦に振って肯定するので、まさかの透明なエネミーとやらの興味が湧いてくる。

「言つとくけど興味が湧いたから仕掛けてみようとか思わないですよ。何の攻略法もなく突っ込んだって近づく前に即死させられるんだから」

「じゃな。儂らでもどうすることもできんじやろうて」

「2人でも攻略法がないって……透明ってだけじゃないの？」

「いちいち説明するの面倒臭いわね。今からガーツと説明するから移動と聞きに徹しなさい」

「……うい」

そういつた雰囲気テルヨシから敏感に感じ取ったらしいサアヤが言う前に釘を刺してくるので、上がりかけたテンションがガクツと下降するが、聞いてくることに答える対応が面倒臭くなつたサアヤは、移動の速度アップと効率を考えて自分の知る情報を矢継ぎ早に言うことにして、テルヨシも順応するしかなくて黙って速度を上げて走り続ける。

「エネミーの固有名は《大天使メタトロン》。《神獣級》エネミーで、大きさは……とにかく大きいわ」

「……テキトーすぎない？」

「うっさいわね。メタトロンは芝公園地下大迷宮《コントラリー・カセドラル》のボスエネミーで、ある1つのステータス属性を除いて、常に不可視・即死攻撃・全属性ダメージ透過とかいう冗談みたいなステータスになるのよ」

「当然、そんなステータスのエネミーなど倒せるわけもないが、ダンジョン内であれば不可能ではない。ガストが言うた通り、メタトロンはあるステータス属性ではそのステータス補正が弱まって攻撃可能となるのじゃ」

「本来ならダンジョン内にその属性に任意で切り替えるパネルがある

から、攻略自体は苦戦はしても不可能じゃないわ。でもそんなステータス持ちがダンジョンから出られたら、どうしようもないじゃない」「……んで、そのステージ属性って?」

「お主も見ただことは限りなく少ないであろう……暗黒ステージの中でも最高峰の《地獄》ステージじゃよ」

……言葉が……すぐに出てこない。

一気に説明されたことでメタトロンがどれほどふざけたエネミーかは十分に理解できたが、それでも『ゲームとして』ならちゃんとした攻略法が用意されているダンジョンのボスとして納得もできた。

攻略法どころか攻撃方法すらまともに出てこなかった《四神》とは違って、聞く限りではまだ希望的な部分はあるものの、攻略の恩恵とも言えるものがない状態でメタトロンを相手にするのは現状では不可能であることを確信すると愕然とせざるを得ない。

ユリの言った地獄ステージは、暗黒系のステージの中で最も邪悪なステージ属性で、バーストリンカーになって2年ちよつとになったテルヨシでも、これまでの対戦でそのステージをお目にかかったことは『1度だけ』なくらいに出現率は低いのだ。

おそらくはサアヤとユリですら両手の指で数えられる程度しか見たことがないはずのステージ属性を、ダンジョンにあるというパネルなしでダンジョンの外にいるメタトロンを倒そうとしたら《変遷》によって地獄ステージになるのをひたすら待つしかない。馬鹿げた話だ。

「………待ってくれない? そもそもそのエネミーがどうやってダンジョンから出たのよ。まさかエネミーが意思を持って勝手に出てきたなんてことはないでしょ?」

「四神はともかくとしても、そんな高度なAIを持ったエネミーの話は聞いたことがないしね。おそらくは……それも不可能に思えるけど、誰かがメタトロンを調教して移動させたくらいしか考えられないわ」

「調教……か……」

とにかく、地獄ステージ以外で挑んだところで為す術もなく即死さ

せられることはわかったが、そもそもなことを尋ねてみると、ここも推測の域を出ない様子だった。

それでも調教と聞いたテルヨシは、春先に起こったあの事件を思い出すきっかけとなって、その時のことを鮮明に思い出しながら、メタトロンについても考察を始める。

調教といえば沖縄で出会った《サルファ・ポット》とかいうバーストリンカーが神獣級エネミー《ニーズホッグ》を操っていて、その強化外装であった《幻想の手綱》ミスティカル・レインズは今もおそらくは黒雪姫の手元にあることだろう。

その性能は確かに神獣級エネミーをも調教していたことから、今回のメタトロンもあり得ない話ではないとサアヤとユリ以上には納得しはするが、ニーズホッグはおそらく徘徊するタイプのエネミーであり、ボスエネミーをも調教してしまう強化外装というのは規格外。

それこそ《ブルー・ナイト》の持つ神器《ジ・インパルス》や《グリーン・グランデ》の持つ《ザ・ストライフ》といったレベルでなければ可能性すら……

と、そこまで真剣に思考したところで急に黙ったテルヨシを心配する声が飛んできたので、そちらへ反応しつつ現在位置を大まかに把握すると、ほぼ直進コースで進んだはずだが、ジャングルの景色ではよくわからなくて冷静になって1度立ち止まる。

「えっと……今どの辺？」

「はあ……言うと思ったわ。まあこのジャングルを迷わず進めつて方が無理な話よ。ボンバー、お願いね」

「まっすぐ来たはずじゃから……おおよそ向こうじゃの。頼む」

真面目な話をしていたところでのこれにはサアヤとユリも微妙な空気を作ってしまったが、自分達も楽しんで移動していた手前で文句は言わず、2人とも下ろしてもらってから、サアヤが《ブレード・ファン》を呼び出してその上にユリを乗せると、そのまま真上へと投げ飛ばしてユリをジャングルから抜けさせて進路の確認をさせる。

アビリティ《デイセント》によってゆっくり降りてきたユリは、現在地が大体で代々木公園付近であることを知らせ、目的地までの進路

も示してくれて、改めてミッドタウン・タワー目指して進むこと約10分。

巨大な樹木と化していた東京ミッドタウン・タワーは、周囲からも頭ひとつ抜けて高くそびえていて、傘のようになった天辺も見える位置からテルヨシも目を凝らして見てみる。

「んーっと……あー。なーんかうっすら見えるような見えないような……」

「ボンバー。メタトロンの反応圏ってどのくらいだっけ？」

「さあ。ボスフロアの大きさから考えれば、半径200mはあるものと考えてよいかもしれんな」

太陽光もあるのでなんとか輪郭程度なら見えないこともないレベルで見えたメタトロンは、確かにサアヤがテキトーに言ったくらいには大きく、天辺に収まりきれないほど。

それをサアヤとユリも確認しながら、メタトロンの反応圏を探ろうとしていたが、テルヨシがここで勇猛果敢に「1発食らう覚悟で近づいてみる？」なんて言ったら火に油。

先日のスザクでEKになっておいて、今回もまたEKされに行くなんてバカ以外の何者でもないし、そうでなくてもすでにダンジョン攻略経験のある2人はおおよその反応圏は推測できているのだから、わざわざ怒られるためにしやしやり出る必要はない。

「とりあえず事実の確認はできたわけだけど、あれをどう思う？」

「普通に考えて、調教してわざわざあそこに配置してるんだから、メタトロンを操ってるやつはミッドタウン・タワーに近寄せたくないってことだよな？」

「そうなるよあの建物自体。或いは内部に近寄せたくない『何か』があると仮定できるわけじゃが……」

そして今回は別にメタトロン攻略のために来たわけではないので、危険を冒すこともない。

それでもバーストポイントを払って来ている以上、それで撤収では勿体ない。

ならばその危険に含まれる行動を避けて出来る限りの考察はして

おこうと、メタトロンの反応圏に注意しながら周囲を探索がてら話し合い。

もはや難攻不落の要塞とも言える東京ミッドタウン・タワーだが、これほど強力なエネミーを調教してまで連れ出したからには、建物自体が内部に何か隠したい、守りたい何かがあることはユリの予測の通りだろう。

テルヨシとサアヤもそこには意見を一致させるが、その何かを探るとなると難しくなってくるので少しだけ唸る。

「何らかのアイテムを手に入れたけど、どうにも扱いが難しいから人の手に触れられないようにした可能性」

「そんな善良な思考の持ち主がメタトロンのなんて危ないエネミーを連れ出してまで守らせるわけないでしょ。アイテムなら適当な倒されそうにない神獣級エネミーにでも食わせた方がよっぽど安心できるわ。《太陽神インティ》とかよさげね」

「あれは近づくこともできんし、口があるのかすらわからん謎すぎる火の玉エネミーじゃろうて」

「でも倒したって人はまだ聞いたことないし、危ないアイテムを食わせて安心するならあいつか四神くらいじゃないかしら」

あんまりうんうん唸つても仕方ないので、冗談混じりで適当な推測を述べて和やかな雰囲気にしようとしたら、速攻で否定された上にテルヨシが知らない神獣級エネミーの話で勝手に盛り上がり始めてしまい置いてきぼりに。

まあ結果として2人の雰囲気は和やかな感じにはなったので失敗ではなかったが、蚊帳の外な自分が寂しいので盛り上がるところに申し訳なくも割り込んで話を区切り、また本題の方に戻そうとした。

だがその前に進行方向の先に明らかにエネミーではない2つの人型のシルエツトが見えて、和やかムードから一転して臨戦態勢に入つて立ち止まったテルヨシ達は、まだ遠くて誰かもよくわからないそれに警戒心を全開にする。

わざわざ危険なメタトロンの近くにいるなら、その存在をすでに

知っている可能性は高いし、それならばメタトロンをミッドタウン・タワーに設置した人物と関わりがあるかもしれない。事によつては当人であることも考えられる。

そのため慎重に接近していくテルヨシ達であったが、近づくにつれてそれがデュエルバターであることがわかり、その装甲色も判明し、シルエットまでがわかるまでに接近すると、向こうも接近に気がついて明確にその顔をテルヨシ達に向けてくる。その全身からは警戒の気配すらない。

「以前に見たような面子だな……」

「羨ましいのかい、拳ちゃんっ」

「だからお前が拳ちゃんと呼ぶな」

向こうが戦闘の意思を見せなかつたことで、テルヨシ達も無駄な交戦は避けるために警戒を解いて話ができる距離にまで近寄つていくと、2人のうちの1人《アイアン・パウンド》が口を開いて会話へと興じる。

以前というのはおそらく、災禍の鎧の件でエネミー狩りをしていたところを無視して横断したあれだろうが、そんなことは挨拶程度の切り出しでしかないのはわかっているので、テルヨシも軽くジャブで返しつつ、もう1人の意外な人物に話しかける。

「グラちゃんも重役出勤、お疲れ様です」

「……………」

その相手であるグリーン・グランデは、大盾ザ・ストライフをドンと前で構えて直立不動のまま、顔だけをテルヨシに向けてすぐに元の目線へと戻って動かなくなる。その視線の先には、東京ミッドタウン・タワーがある。

「まさかグランデとパウンドがいるなんてね。アンタ達もメタトロンの視察に来たのよね？」

「ああ。聞いた時は半信半疑だったが、こうして実際に見てしまえば受け入れるしかあるまい。我らはこれを深刻な事態と見て、早期の解決を図ることにしたのだ」

「それでわざわざグランデも来ておるのか。他におらんのか？ デク

リオンくらいはいた方がよかろうに」

「生憎と急を要した案件で、動けたのは俺と王だけだったのだ」

どうやらグランデとパウンドもメタトロンの出現を聞きつけて来た野次馬的なあれだったのだが、テルヨシ達とは違って何らかの対応策を持って待機していたようだった。

それでもたった2人でメタトロンを相手にするのは無茶苦茶な話に思えるが、無謀なことはいらないパウンドがそれでもやると言うのだから、勝算はあるのだろう。

おそらくはグランデの存在がそうさせるに至っていることもなんとなくわかる。

「ふーん。急を要したってことは、何らかの策があるけど、時間的に余裕がないってことだよな？ 差し支えなきや教えてくれる？ 場合によってはオレ達も協力はできるかもだし」

「ちよつとテイル。勝手に話を進めないで。こいつらは長期的な試行錯誤が好きなのよ。だから協力なんて軽く言わない方がいいわ」

「話を聞くだけでもよかろうて。協力するかはそれからでも遅くはない。どうじゃ、パウンド」

そして早急に対処すると言って、集まるタイミングを選べていない以上、それがパウンド達のタイミングで行えることではないのを理解したテルヨシが軽い気持ちで尋ねると、ちよつと慌てたサアヤが露骨に嫌そうな意見で割り込んでくる。

加速世界で最大のレギオンともなると、色々と探究もしているのだろうが、サアヤが物好きと言うくらいには具体的にやってるその内容から今回の対処に当たるのなら、テルヨシ達が考えつかないような妙案である可能性は高い。

だからユリも話を聞くだけでもサアヤをなだめつつパウンドに振ると、1度グランデに顔を向けたパウンドは、そのグランデが小さく首を縦に振ったのを見てから視線をテルヨシ達に戻してその口を開く。

「あまり推奨はしないが、協力してくれるならありがたい。我らはガ

ストの言ったように長期的なデータ収集で《変遷》にある法則性があることを突き止めたのだ」

「変遷の、法則性？」

「変遷は基本的にランダムなんだが、大きく分類した8属性。地水火風木金と聖暗が連続して同じ属性になることはない。そんな中であるタイミングで前者の6属性に変遷が片寄り、聖暗の属性にならないことがあり、そのあとに変わる聖暗属性のステージがかなりの上位属性になる可能性が高いことを突き止めた」

「相変わらず変なことを調べてるのね……」

「じゃがそれが本当ならば、こうしてグランデとパウンドがおるといふことは、今がそのタイミングということなのじゃろう」

「そういうことだ。まあさすがにジャストタイムリングがわかるわけじゃなく、大まかにこの時間帯といった大雑把なものにはなるが、そう巡っても来ないチャンスを逃す手はないからな」

「時間帯って……もしかしてお2人さん、ここでどのくらい待機してるの？」

「内部時間ではもうすぐ1ヶ月になるかもしれん」

「さあ帰るわよ」

「エネミーの1体くらいは狩っていかんか？」

「野獣級くらいにしとこう。あんまり時間かかるのはNGで」

「……踵を返すのが早すぎるだろ！」

パウンドの話では、もうすぐ暗黒系の上位ステージに変遷するから、それで地獄ステージになったらメタトロンを討伐するといったものであった。

それを実行に移すまでに収集した情報はさすがといったところだが、それでも変遷によって出現するステージが地獄とは限らないし、タイミングにしても精密にはわからずに逃さないために内部でひたすらに待つことになる。

それを証明するようにグランデとパウンドはすでにダイブして1ヶ月ほども待ちぼうけしていると聞けば、協力に前向きだったテルヨシでさえ、速攻で撤収を決めたサアヤとユリに便乗して踵を返して

しまった。

そのあまりの却下の早さに硬派なキャラも忘れてツツコんでしまったパウンドの叫びは、わずかでも希望を持たせた故の悲痛さが含まれていて、良心くらいはあるテルヨシも心が痛んだが、それでもこれからいつになるかわからない変遷を待ち続ける気力はなかった。ので、呑気に話をしながら離れていくサアヤとヨリに合わせてその場をあとにするのだった。

代々木公園辺りで適当にエネミー狩りをしてからフィールドを離脱したテルヨシ達は、備えなしで遭遇したグランデとパウンドの作戦が上手くいくことを願いつつも、そうそうスムーズにはいかないだろうこともわかった上で、今後の対応を考えながら夕食の準備を始めていく。

それが終わった午後6時前に何故かハルユキの家に直行すると言っていたマリアが帰宅して初対面であろうヨリと遭遇する事態が発生して、面的に誤魔化しが難しいとさえ思ったテルヨシ。しかし……

「あれ、サアヤさんとヨリさんがいる」

「マリア、おかえりー」

「マリアちゃん、おかえりなさい」

「……あれ？ マリアとヨリさんって知り合い？」

「うん。ニコさんが『あたしの姉貴だ！』って4月くらいに紹介された」

「もう知り合いましたー」

「……………オレのドキドキを返して！」

Acceleration Second 13

《無制限中立フィールド》の《東京ミッドタウン・タワー》にメタトロンが出現した情報を聞きつけて、それを確かめに行って戻ってきてから3人で夕食。といったタイミングでまさかの帰宅をしてきたマリアとユリの対面はテルヨシのハラハラとは裏腹に何事もなく終了。

しかし連絡なくの帰宅だったために3人分の夕食しかない状況が発生し、マリアもリビングからキッチンの方を見て3人分の準備が整いつつあるのを敏感に感じ取り微妙な表情を浮かべる。

「お夕飯、もうできちゃってるんだね」

「あ……そう、なんだけど……」

空気を読めるマリアはここで連絡しなかった自分が悪いことを謝る雰囲気は自然とできてしまつて、テルヨシしかないならそんなこともなかっただろう事態で対応が遅れる。

それを見てすかさずサアヤがテルヨシの首に腕を回して顔同士を接近させて内緒話を持ち込み、ユリはとりあえずマリアにランドセルなどを置いて着替えてくるように言ってくれる。

「マリアは今日は友達の家で食べてくるからつて言ったのはアンタよね?」

「そうなんすけど、先方が気を利かせるなんて予想してなかったんですよ……」

「はあ……これもグローバル接続を基本オフにするバーストリンカーの弊害か……」

マリアがいない間とにかくマリアに謝らせない、気を遣わせない空気を作らなきゃと必死な3人は、戻ってきた時にまずどうするかと話す。

別に3人分を4人分に分け直すのは量的にも問題はないが、マリアの性格では『そうさせてしまった』罪悪感が残ってしまうのは間違いない、今から追加で作るのも同様のこと。

どうしたつてマリアを困らせてしまうからテルヨシもいつもの対応力が発揮できずにいたが、サアヤは何か策があるのかテルヨシから

離れてユリと何やらヒソヒソと話をして「任せろ」と言う。

それには感謝が半分。悪い予感が半分で苦笑するしかなかったが、何も思いつかないテルヨシでは頼るしかないのです、マリヤが戻ってくるのを黙って待つことになった。

そしてまだハルユキの家に行く関係から、可愛いワンピースに着替えてリビングに戻ってきたマリヤだが案の定、部屋で色々と考えしまったのか、マリヤの私服に目を輝かせるサアヤとユリを無視して開口一番で謝りかけてしまう。

が、それよりも早く動いたサアヤとユリは、左右からマリヤに抱きついてその頬に頬を密着させてサンドし、アヒル口にしてしまう。

「可哀想なマリヤ！ マリヤが帰ってくる家はここなのに、あの男は！」

「マリヤちゃんの分の夕食を用意できない、気の利かないテル君は食べる資格がありません！」

「な、なん……だと……」

「謝って！」

「あの、私が変わる……」

「謝って！」

「マジすんませんでした」

有無を言わずにマリヤ側についた2人は、揃ってテルヨシを糾弾して強引に謝らせにばかり、自分達のことは棚に上げてそんなことをする2人の強行策には呆れを通り越して理不尽さが溢れていた。

それでもマリヤが謝ろうとしたのをねじ伏せてテルヨシに早くしろと目で訴えた2人に負けてその場で土下座を披露したテルヨシは、恐る恐る顔を上げてからマリヤの顔を見ると、その表情はニコツと笑っていた。

「ふふっ。何でテルが謝ってるの？」

「……マリヤが帰ってこないって決めつけてたのはオレの責任だ」

「私も連絡しなかった。ごめんなさい」

最悪なのはマリヤが一方的に悪いという状況で謝らせること。

どうあがいてもマリヤの罪悪感は拭いきれないことがわかってた

サアヤは、せめてそうした状況を脱したいと今のような行動を取ったのをそうなってから気づいたテルヨシは、今回のことをおあいこにすることで収めたサアヤに感謝。

マリアも罪悪感こそあれど、責任の全てが自分にあるわけではないと思うことで緩和できているようだった。

それから3人分を4人分にして夕食とした食卓は、マリアの隣の席争奪戦という壮絶なジャンケンに勝利したユリがマリアに食べさせてあげるといふ嬉し恥ずかしい行為に及ぶのを見せつけられたテルヨシとサアヤは、互いを慰めるように食べさせあいつこを……するわけもなく、ぐぬぬしながらに食べていった。

そんな天国と地獄の夕食を終えて6時半を過ぎた頃。

後片付けをみんなで作ったから早くに終わって、マリアもハルユキの家にお邪魔しに行くことになり、すぐその高層マンションながらサアヤとユリに付き添いを言い渡されて一緒にマンションの前まで歩いていったテルヨシは、そのわずかな道中でマリアと話をする。

「サアヤさんとユリさん。優しかった」

「そうねえ。女の子同士だからわかることもあるんだろうし、助かるところはあるな」

「テルはサアヤさんとユリさんという時は楽しそうだね」

「それは楽しいよ。2人とも面白いし、何より美人で可愛いし」
「そっか」

話の意図はよくわからなかったが、よくある話だしテルヨシも深くは考えはしなかったが、サアヤとユリについてを楽しそうに話した瞬間、ちよつとだけ遠くを見たマリアは、しかしすぐにいつも通りの表情になって、目の前にまできた高層マンションを前にテルヨシの足を止めさせる。

「もう大丈夫。それよりサアヤさんもユリさんも何か用事があって来てたんだよね。なら早く戻ってあげて。私のせいで帰りが遅くなるのは嫌だから」

「おう、了解。マリアも遅くなるようならチユチユとか姫に送ってもらって」

「うん」

色々敏感な年齢で、最近まではおばあちゃんと2人暮らしをしてきたこともあって『気を遣う』という行為に慣れつつあるマリアの言動はちよつと年齢不相応に思えるが、そうさせてしまっているのはテルヨシ達なので、遠慮なんてしなくてもいい環境ってやつは自然と作っ
ていかなきゃならないと思ったテルヨシは、走って行ってしまったマ
リアの背中をしばらく見届けてから、きつとガールズトークで盛り上
がってるだろう2人の元へと戻っていったのだった。

「さて、それじゃ1つずついきましよう」

テルヨシが戻ってくると、何やら部屋を物色していたような様子の
2人が不自然なほどの挙動からリビングのソファで正座するとい
う妙技を披露するも、別に見られて困るものもないから焦りもしな
かったテルヨシに拍子抜けしてずっこける。

予想通り部屋を物色していた2人も何も面白いものが見つからな
くて開き直ってつまらなそうにしたのには呆れてしまったが、それは
それとして2人の帰宅が遅れたらそれこそマリアがまた責任を感じ
てしまうので、マリアが帰ってくる前に話をまとめようとテルヨシが
珍しく仕切ってみせる。

「まずメタトロンの件だけど」

「もうだいぶ知れ渡ったかもだけど、確定情報として私がユニコちゃ
んに報告しておいたよ。もう七大レギオンに周知してくれてるかも」
「グラちゃん達の作戦が成功したら問題はないんだけど」

「確率が高いからって、そんな都合よく《地獄》ステージになってくれ
たら苦労はないわよ。パウンドが言ってた《変遷》の周期つてのも1
日に何回。とかそんなもんじゃなさそうだったし、別の攻略法も模索
した方が賢明ね」

それでもいざ真面目な話になればスパッと切り替えられる2人は、
すでにメタトロンの件はユニコに報告してくれていて、話すべきこと
もその方向性を示す。

「そういえばメタトロンの即死攻撃って具体的にはどんななの？
なんか抜け道的な回避方法とかなかったり？」

「簡単に表現するなら……ユニコちゃんの主砲のレーザーを10倍とか20倍とかそのくらいにした光線攻撃、かな。たぶん緑の王の防衛でも10秒耐えられないと思う」

それで別の攻略法を模索といった方向性になったところで、ふとテルヨシはメタトロンの即死攻撃とやらを実際に見たことがないためにその辺のことを改めて尋ねると、ユリが平然と恐ろしいことを言うので青ざめてしまう。

そりゃ確かに即死攻撃だな。と納得したところで初心者なりの意見をぶつけていく。

「レーザーってことは要は直線的な攻撃なわけだし、全方向から一斉に接近して建物内部に侵入するとかは？」

「できなくはないだろうけど、メタトロンをそもそも倒せないんだから、反応圏の深くで死んじやって無限EKになるやつも出てくるでしょ。リスクに対してのリターンが弱すぎるし、建物内部に何もありませんでしたーって可能性だってあるんだから、こっちのリスクは最大限下げるに越したことはないわ」

「そうね。メタトロンの攻撃をノーリスクですり抜けて建物内部に侵入できる人がいたら、メタトロンをスルーする選択肢もないこともないんだけど」

とりあえずバカ丸出しの特攻野郎な意見で切り込んでみたものの、見事にバツサリと切られて苦笑。

わかってはいたが全否定されるとそれはそれで悲しいとか思いつつ、ユリの無い物ねだりな眩きに賛同してそれが出来そうなバーストリンカーを記憶から掘り起こしてみるが、出来そうはあっても確実に出来ると言い切れるバーストリンカーはいなくて、そんな危険を冒してまで何もないかもしれないメタトロンのいる建物に侵入してくれとは頼みにくい。

「攻撃をすり抜けるっていうのとは違うけど、物理的に無効化できるバーストリンカーはいるかも」

「レーザーを、無効化？」

「まあメタトロンのレーザーも出来るかはわかんないけど、カノンの

やつのレーザーとかは平然と無効化してたし、可能性はあるかも」

「サアヤ、それって『ミラー・マスカー』のことかしら？」

「そつ。《理論鏡面》ならつてね」

サアヤとユリも出会ったバーストリンカーを色々と思い出していた中で、サアヤがなんとか出来る可能性が高そうなバーストリンカーの存在を挙げ、ユリも知るそのバーストリンカー、ミラー・マスカーとやらのアビリティがなんと、メタトロンのレーザーさえ無効化してしまうかもと聞くと期待は高まる。

「ならそのミラー・マスカーつてやつにダメ元で内偵に行ってもらあ……えない理由がありそうね」

ならばその可能性とやらに当たってみるのは無駄足ではないのでは、と提案しかけたわけだが、考えてみれば約3年もバーストリンカーをやつてテルヨシが名前すら知らなかったデュエルバター。しかも2人が知るからには中野や練馬からもそう遠くない活動地域で割と有名なはずなのに、存在を認知すらしてないのはおかしいのだ。

そこから考えられるのは、そのミラー・マスカーがすでに全損。或いはすでに加速できる環境になくなってしまったか。

「ミラー・マスカーは今から3年とちよつと前から、全く姿を見てないのよ」

「全損したか、もしくは東京の外に引越してしまったか。憶測にはなるけど、ミラー・マスカーはもう存在しないっていうのが私達バーストリンカーの見解になつてるわ」

「じゃあダメじゃん！」

「可能性の話をしてんでしょーが！」

「ふんがっ！」

その予想は当たっていて、すでにいない可能性の高いミラー・マスカーを頼って何かをするということは実質的に不可能なので、考えなしにツッコんでしまったテルヨシに対してイラツとしたのか、キレ気味にデコピンをしたサアヤにやられて椅子から転げ落ちてしまった。

まあ転げ落ちたのは完全にノリだが、そんなテルヨシに気遣うこと

もなく話を戻したサアヤの冷静さはノリが悪いが、脱線に定評のある自分達がそうならないようにしてくれるのはありがたいので椅子に座り直し、言葉の意図を説明してくれる。

「別にミラー・マスカーを頼りたかったわけじゃないわよ。要はデュエルバターの性能でもメタトロンのレーザーをどうにかできる可能性がなくてもないって話。だから理論鏡面と同等かそれに近いアビリティとか必殺技とかあるかもしれないし、その辺で情報を集めることは可能かもってことよ。わかった？」

「そんなバカに言い聞かせるみたいに言わなくてもわかりますけどね……」

「テル君はバカを装ってるのか本当にバカなのかわからなくなっちゃう時があるから、仕方ないかな」

「ユリさんが残酷なことを……ガクツ」

つまりはデュエルバターの性能でメタトロンに対抗し得るアビリティや必殺技もある可能性があるということと言いたかったわけで、テルヨシもそれくらいなら少し考えさせてくれればわかったのにとグチグチ言ったら、横からユリのキツイ発言が割り込んで再び椅子から転げ落ちて四つん這いになってしまったのだった。

そうして2人に弄られつつも話はまとまりつつあるので、メタトロンの件での情報収集も追加でISSキットの件も引き続きといったところに落ち着きかけた。

「……………あっ」

「うわっ、その思いつきは嫌な方ね」

「決めつけはダメよサアヤ。テル君、どうしたの？」

「アビリティや必殺技と言えばそういえばって話なんですけどね」

時間も午後7時15分を回ったので、2人もそろそろ帰るか椅子を立とうとしたところでのテルヨシの「あっ」だったので、反応しないわけにもいかないサアヤが嫌そうにしながらも聞きに徹してくれる。

「オレがレベル8になった時に出てきたボーナスの中に《クリア・ステップ》って必殺技があったんですよ。これが『ジャンプ中は透

明になって無敵』とかそういうのだったら面白いなあって考えたのをいま思い出して……」

「跳んだ先を見極められないようにする《インビジブル・ステップ》とは違うコンセプトの必殺技かな。レベル8のボーナスなら相当な性能だろうけど、だとしたらメタトロンのレーザーもタイミングさえ合えば避けられたりするかも」

「威力に直結しにくそうな必殺技だけど、今回の件にはうってつけっぽいわね……」

くだらないことだったら殴られそうだったが、先週のレベルアップの際のボーナスについてとメタトロンの攻略の糸口になりそうな噛み合い方だったため、サアヤもユリも食いついてくれた。

それだけにテルヨシを見る2人の視線は期待が込められていたが、こんなピンポイントな案件のために実質的に最後のボーナスを振ることはないといった雰囲気も醸し出してくる。

「あのう……お2人の言いたいことはわかるのですがね……そのお……ボーナスに関してはまだ別のを獲得しちやつて……」

「さっ、帰るわよユリ」

「マリアちゃんも帰ってくるかもだしね」

「切り替えはやっ！」

しかしながらそうして思い出して話したということは、つまりテルヨシの選択はすでに終了していて、ボーナスも獲得してしまってることを意味する。

事実、テルヨシはそのレベルアップボーナスでデュエルアバターの基礎能力の大幅な底上げをしまっている。

ブレイン・バーストの不親切なところは、その全ての表記が英語なものもさることながら、獲得できるボーナスのアビリティや必殺技、強化外装の簡易説明くらいはあるものの、実際にどういうものかといった詳しい部分が不透明なので、実質的に最後のボーナスとなるとより明確にわかるボーナスを獲得してしまうのは仕方ないことだし、ボーナス獲得後のデュエルアバターは実際はかなり基礎能力が上がっているのが目に見えていた。

そんな事情を知る由もない2人は期待していたようで全くしていなかったリアクションで椅子から立ってさっさと帰り支度を始めてしまい、それには先ほどのパウンドと同様のツツコミをせざるを得なかった。

引き留める理由もないので割とあっさりと帰ろうとする2人を見送るために玄関まで移動して、最後の確認としてISSキットの件とメタトロンの件に関連性があるかも調べようとなり、3人で集まっただの話し合いを土曜日の夕方とする。

「ああそうだ。土曜日はまた泊まりたいんだけど、問題ない?」

「それはこっちが聞きたいんだけど。親とか怪しんだりしないの?」

「家は放任主義っていうか……やることさえやってれば特に何も言われないから。アンタのことを話したらむしろ連れてこいとか言われてくるくらいには問題ないと思うわ……」

「わーい。ご両親からの了承があるなら安心半分、プレッシャー半分だー」

「あらあら、2人とも見せつけないで。独り身には眩しすぎるわ」

そのついでにサアヤが今週もお泊まりしたいと言ってきて、それ自体に不都合は全然ないのだが、サアヤ側の両親がどう思ってるのかをやりわり尋ねてみると、なんかすでにテルヨシの存在は報告済みでお呼ばれもしてる感じだったのに驚く。

だがサアヤはなんか招待するのは乗り気ではなく、聞かれなきや黙ったままだったろうそれに触れたせいで遠い目をしてしまう。

おそらくサアヤの両親はサアヤの望まないリアクションを盛大にする類いのあれなのだ直感的に悟ったテルヨシは、自分から以降、サアヤの家に行きたいとは言えない雰囲気を作られてしまい、ちよつと残念に思いつつもサアヤから来てほしいと言ってくれるまでは待とうと思った。

そんなやり取りをするもんだから蚊帳の外だったユリが冷やかしに入って微妙な空気になるのを防いで、冷やかされたサアヤはテルヨシに「マリアにもよろしく」とだけ残して、脱兎のごとく逃げていったユリを追って帰っていつてしまう。

——あんな胸で走ったら大変な光景になるのではなからうか……

2人が帰ってからリビングに移動して、今頃は地上まで降りてしまっただろうユリの巨乳がバインバイン踊る様を唐突に想像したテルヨシは大変にいただけでないが、男だから仕方がないのだと開き直って女の胸の神秘について考えてしまう。

これも大変にどうでもいいので集中力は異常なほどに低く、午後8時になる頃に黒雪姫と一緒にマリアが帰宅。

しかし2人の表情がいまいちパツとしないため、何かしらをしてきただろうそれが上手くいかなかったのかと尋ねてみるも、黒雪姫が「問題が1つ解決して1つ増えてしまった」とだけ言うものだから首を傾げるしかない。

詳しいことはまた明日、学校で話してもいいと言って帰っていった黒雪姫の言葉があり、これからマリアに聞くといった行為も、大きめのおくびをした姿を見たら出来ず、結局は明日に持ち越しでモヤツとしてしまう。

それでも伝えるべきことは伝えなきやなので、お風呂に入ろうとするマリアに土曜日にサアヤが泊まりに来ることを告げると、眠気も吹き飛ばして喜ぶかと思ったが、一言だけ「そうなんだ」とだけで洗面室へと消えてしまった。

この時は本当に眠いだけだと思ったテルヨシではあったが、それが間違いであったことに気づくのは……もう少し後になってしまった。

翌日の金曜日。

昨夜に黒のレギオン側で動きがあったとだけ聞いていたテルヨシがようやく話を聞けるとなった朝のHR前。

長くなりそうだからと自分とハルユキの挑戦権を使って1時間たっぷり話してくれる心遣いはありがたかったが、なんか話すことは同席するタクムとチユリにもあるらしくて、その辺も含めて黒雪姫と時おりハルユキが加わって話し始める。

まずはテルヨシも知るところの《帝城》へと入ってしまったハルユキと謡は、かつての災禍の鎧の初代所有者《クロム・ファルコン》がまだ抜け道があったらしい帝城侵入から、その奥にあった神器《ザ・デイスティニー》を入手したまでの記憶の導きによってエネミーとエンカウントすることなくそこに到達。

ハルユキと災禍の鎧との繋がりが見せた奇跡によってどうにかそこまで行けた2人は、そこでまさかのデュエルアバター《トリリード・テトラオキサイド》と名乗るバーストリンカーと遭遇。

ザ・デイスティニーと並んで鎮座していた神器《ジ・インフィニティ》を腰に差したリードは、敵意を持つことなくハルユキと謡に帝城内部で得た情報を教えてくれ、四方の門に本来備わっていた封印を予め壊していた張本人でもあった。

そうしておいて、いつか訪れてくれる存在を待っていたらしいリードの助けもあって、昨日に行われた脱出作戦もなんとか成功し無事に2人を帝城から脱出させて無限EKからも救出できた矢先。

今度是一緒に作戦に参加するはずだったフーコの《子》である《アッシュ・ローラー》が作戦開始から姿を消していたことが判明し、近くにいるはずだと搜索に飛んだハルユキがISSキットを装着した集団に袋叩きにされていたのを発見。

多勢に対してISSキットもあるのではハルユキでも助けることは不可能だったが、激情に身を委ねてここで災禍の鎧を再度装着してしまい、その侵食度も比ではないレベルにまで到達し《6代目クロム・

《デイザスター》となってISSキット装着者を圧倒的な力で一蹴。

その後すぐにISSキット装着者から赤い光が抜け出てどこかへと飛んでいくのを見たハルユキは、それがISSキット本体へと向かってると確信してそれを追跡。

そうして辿り着いたのがまさかの《東京ミッドタウン・タワー》で、光はその建物の中へと吸い込まれていったらしい。

そしてさらにひたすら《変遷》を待つと言っていた緑のレギオンの《グリーン・グランデ》と《アイアン・パウンド》とも遭遇し、一旦は戦闘になったものの、メタトロンがいることがわかって、ようやく来た変遷でも《地獄》ステージにはならなかったことからグランデとパウンドはチャンス逃したことで離脱。

ハルユキも内部時間で1時間後に切断すると言われていたために間を置かずに強制離脱。

派手に暴れたおかげで現実に戻ってからのハルユキは鎧の侵食も弱くなっていたが、またいつ暴れ出すかわからない恐怖から黒雪姫達の前から逃走し、人知れず全損しようとするも、それを現実のアツシユが阻止して黒雪姫達がなんとか引き戻すことに成功。

と、ここまでがタクムとチユリも知るところで、本来ならば今日の放課後にハルユキの鎧の浄化を『強行』する予定だったが、昨日の解散後にハルユキと黒雪姫が2人で偶然ながらも合流し、流れでいつ始まるかわからない鎧の侵食を再度弱めておこうと動いたらしい。

そうしてダイブした《無制限中立フィールド》の東京ミッドタウン・タワーの近くで合流しようとした2人だったが、そこでは先刻にハルユキにその存在を見せるためにパウンドがあえてメタトロンの攻撃を誘発し、そのメタトロンが動いたと報告を受けて以降、BICの恩恵を使って現実時間の知覚のままに加速しつと待機していた《ブラック・バイス》とエンカウントしてしまい、そもそも災禍の鎧を生み出すきっかけを作った加速研究会は好機と見てハルユキを拉致して鎧を回収——要するに全損だ——しようとした。

災禍の鎧もバイスのことを覚えていて、ハルユキの意思をも押し潰

して強引にバイスと戦闘に及び、しかし卑劣な策略で合流した黒雪姫に攻撃を誘導されてしまい、暴れ疲れて動けなくなるを待つバイスの強かさに1度はしてやられてしまったらしい。

しかし寸前のところで災禍の鎧の呪縛を断ち切ったハルユキが正気を取り戻し、瀕死にまでなっていた黒雪姫と共闘してバイスの撃破に成功。

災禍の鎧も長らく存在し続けた禍根を断ち切られて沈黙し、今はただ寄生の属性を持った強化外装《ザ・ディザスター》としてハルユキの元であり、今日の放課後はその鎧の寄生属性を取り除いて本来の2つの強化外装、ザ・ディステイニーと大剣《スター・キャスター》へと戻してあげるだけとなったと。

「なるほどね。災禍の鎧が寄生なんて属性を持って生まれ変わって、所有者の元を転々としたのは、クロム・ファルコンの加速研究会の連中を殺したいって願いが形になったのと、そもそもとして2つとない神器ザ・ディステイニーだったから消滅しなかったわけだ」

そこまでの話で災禍の鎧に関する悲しい過去を知ったテルヨシは、鎧の誕生に関わったクロム・ファルコン、通称ファルと《サフラン・ブロッサム》というF型デュエルアバター、通称フランの話にやるせなさを覚え、災禍の鎧についても純粹で強い思いが歪んでしまったがために呪いとなって残ってしまっただけで、チェリーの件を含めても今は憎しみを抱く対象にはできなかった。

帝城からザ・ディステイニーを取って戻ったファルは、当時から共に行動していたフランに腐食以外のほぼ全ての耐性を与えるという規格外の鎧、ザ・ディステイニーをプレゼントし、一時は加速世界でも逸脱した強さを得ていた。

しかし本来なら帝城を攻略したバーストリンカーが正規で獲得できる強化外装がシステムの穴から入って持ち出されてしまったせいでゲームとしてのバランスが崩壊。

当時はまだ黎明期と呼ばれる手探りの時代に反則級の強化外装の出現は脅威でもあり、様々な懸念があったが、神器ゆえに所有者を全損させてもアイテムだけが移動して新たな所有者が生まれてしまい、

鎧の脅威は消えることはない。

その問題を早期に解決しようと動いたのが、加速研究会。

決して善意で行ったわけではないだろうし、研究会側にも思惑はあったと思われるが、バイスと他もう2人は、フランを誘い込んで無制限中立フィールドの特定のステージ属性に出現する神獣級エネミー《ヨルムンガンド》の縄張りに放り込み、鎧の唯一の弱点である腐食攻撃によって無限EKを仕掛けた。

そうすることで全損すれば、鎧は元あった場所へと戻されて加速世界に平穏がもたらされる。

と、バイスは説いたようだが、それで「はいそうですか」と強い愛情をフランに抱いていたファルが納得できるはずもなく、会長とやらの強制蘇生の必殺技で1時間の待機を待たずにヨルムンガンドに即死させられていくフランの元へとバイスの拘束を振り解いて辿り着くも、すでにフランは全損の1歩手前でヨルムンガンドの牙も止まることなく襲い掛かる。

そうなるくらいならとフランはファルに自らにとどめを刺させて全損。鎧はファルへと移動し、こうなった状況を作り出したバイス達を倒すために鎧を装着し、鎧の唯一の弱点である腐食に耐性を持つクロムとが合わさってヨルムンガンドを一蹴。

そのヨルムンガンドからドロップしたスター・キャスターも駆ってバイス達を倒そうとするも、寸前で逃げられてしまい、怒り狂ったファルはそこで装着した2つの強化外装を心意の力で融合しザ・ディザスターを誕生させ、フランを嵌めるために使われた他のバーストリンカーを皆殺しにしていた。

それから5度。災禍の鎧は渡り歩いて呪いは引き継がれ、6人目の装着者ハルユキによってようやくその禍根を断ち切ることができたのは、本当に喜ぶべきことだ。

「とにかく災禍の鎧は今日にでも元に戻せるってことだろ。大変だったみたいだが、それにはオレもホツとしたよ」

「そうだな。これでマリアもこちらの案件から外すことができる。今週は私達が独占してしまったから、赤いのが拗ねる前に解決して良

かったよ」

「ニコたんあれで寂しがり屋だからねえ」

そうした話が終わった頃にはすでに時間もほぼ1時間を使い切るところで、今度の七王会議でのハルユキの断罪は避けられた現実の安堵がその場を包み込み、和やかな雰囲気の流れる。

正直、何をどうやって災禍の鎧の呪縛を解いたかは、ハルユキの体験からの話では理解が8割あったかくらいには曖昧なものだったが、それでもファルとフランの魂と呼べるものが救われたことはわかったので、テルヨシもそれでよしとしたのだった。

そのさらに翌日の土曜日。

無事に災禍の鎧を浄化することに成功し、今でも規格外と呼べるザ・デイスティニーとスター・キャスターを誰の手——黒雪姫達もだ——も届かない場所に封印したことをマリアから聞いたテルヨシは、ちよつと勿体ないことをしたんじゃないかと思いつながらもその選択に賛同して封印については言及するのをやめた。

そうしたことがあったからか、バイトに向かう足も自然と軽やかになり、ちよつとテンションが高いと調子に乗る悪い兆候もありながらも、パドと珍しく店長にまで注意を受けて落ち着いてからは何事もなくバイトも終了。

今日は領土戦はお休みということにしていたので、そそくさと着替えて出かけていったパドの行方を気にしつつも、このあとはサアヤとユリが来る予定もあるのでマリアと一緒に帰宅。

「今日はマリアも参加ね」

「おす。よろしくお願いします」

「何で体育会系のノリなのかしら……」

「これはスルーして恥ずかしがらせる流れだった」

「そんな流れはないから!」

帰ってから着替えて少しだけ夕食の下準備をしていたら、すぐにサアヤとユリが一緒にやって来てさっそく会議を開始。

今日はマリアも参加しての会議だが、そこに拒む理由もないテルヨシ達が少しのノリで迎え入れて空気を緩和してから切り替える。

「まずユリからね。行ってきたんでしょ、東京ミッドタウン・タワー」
「レギオンの代表として美早と一緒にね。まあ私はおまけみたいなもので、報告なんかは美早がしてくれてるけど」

「東京ミッドタウン・タワーって、現実の？」

「うん。少し考えればわかるけど一応ね。外から侵入できないなら、始めから中から入っちゃえばいいかなって」

それで最初に報告を上げてくれたのは、今まで東京ミッドタウン・タワーに行っていたらしいユリで、ユリに言われてから意外な作戦にテルヨシとマリアがほぼ同時に「おおっ！」と声を上げた。

ユリの話は単純明快で、メタトロンに守られてる東京ミッドタウン・タワーだが、その東京ミッドタウン・タワー内からダイブしてしまえばメタトロンを無視できるだろうと。

「あー、期待してるテル君とマリアちゃんには悪いんだけど、それは無理って結論なんだよね」

「マリアはともかく、テルはわかるでしょ」

「マリアだけ除外はズルい！　って言いたいけど、そりやそうよね」
「テル、何で？」

「それやるなら切断セーフティーが必要なのよね。外に出たらメタトロンにやられちゃうわけだし。でも切断セーフティーをやるにはホームネットみたいな中継がないと出来ないでしょ？」

「……………あつ。ミッドタウン・タワーのどこかのお部屋を取らないとダメ？」

「マリア、冴えてるわよ。それで一番安いところでどのくらいだった？」

「えーっと……………ツインルームで1泊3万円」

「さんっ!？」

「まんっ!？」

「円かあ……………」

加速世界での出来事だけに盲点だったが、いち早く動いてくれたユリが明るくないのをすぐに察したテルヨシは、サアヤに言われるよりも早くその理由についてを考え始めて、マリアに問われる前にはす

でに答えは出てきていた。

それを聞いたマリアも冴えていて話が進むと、その辺のことを調べる前提だったユリが厳しい現実を叩きつけてきて、テルヨシ、マリア、サアヤと言葉を分けて愕然としてしまった。

どうしたってバーストリンカーの最年長は高校1年生。そんな学生100%の集団が最低3万円をはたいてまで問題の解決に乗り出すにはあまりに高すぎる。

「……まあ侵入方法の方は引き続き可能性を探るとして、その東京ミッドタウン・タワーに何があるかは突き止めたよ」

「へえ。テルにしては情報が早いわね」

「何もなかったってこともなさそうね」

「ISSキットの本体があるっぽい」

「ネガビュ提供の情報です」

現実世界からのアプローチは出来ないとわかって頂垂れた一同ではあったが、そこで思考停止しては問題の解決はあり得ないのでテルヨシがその中でも掴んだ情報を提供して、2人もISSキットと聞いて目を見開き、ドヤ顔を決めかけた。

しかしテルヨシの言葉のあとに間髪入れずにマリアが補足説明を
してしまっただためドヤ顔の披露に失敗。

「ふーん。やっぱりロータスとは仲良さそうね。学校でもよく話したり?」

「あっちから話しかけてくることはあんまり……って、大丈夫なのこの話?」

「問題ないわ。近々アンタの学校で文化祭があるんでしょ。そこでリアルで会う約束したから。ああ、招待券はアンタからもらう予定だからよろしくね」

「あ、じゃあ私もお願いしまーす」

「私も!」

「りよ、了解でーす……」

2人を驚かせてやる珍しいチャンスで空振りして落ち込んでるところに自然とそんな問いかけをするサアヤに思わず答えかけたが、り

アルに関する話を言いかけたことに危機感を覚えてその辺を尋ねると、やはり謡の救出作戦の時に何やら話していた内容はリアルに關してだったようだった。

まあこれでバーストリンカーであるサアヤを文化祭に呼べるので黒雪姫様様といったところだが、便乗してユリも来ることが決定し、最初から呼ぶ予定のマリアまで手を挙げて招待券をせがむので、もうなるようになれな精神でヤケクソ気味になってしまう。

「それはそれとして、ISSキットの本体があるとわかったなら、メタトロン攻略は最優先事項になったわね」

「焦ったところで仕方のないことだけど、キットの感染は待つてはくれないし、次の七王会議ではその辺の具体的な方針を決定してほしいわ。テル君も遠慮するタイプじゃないし、何か気づいたらユニコちゃん達に割り込んでね」

「この前それやってレディオに嫌な顔されましたけど」

「いいのよアイツは。自分の思惑通りにいかないと拗ねるタイプだし、詰めも甘いし、どうせ場を乱すようなことしかしないわ」

「酷い言われよう……」

そのテルヨシを見て引っかけ回せて満足したのか、話を戻したサアヤが今後のこちらの動きを確認して、七王会議の方での決定も報告するようにと暗に言ってみせると、割と無茶なことを言うユリに苦笑しつつ、レディオをボロクソに言うサアヤにさらに苦笑するのだった。

そうして週末のプチ会議もお開きとなって、今夜はパドのところにお泊まりだと言うユリが帰り支度をする、何故かマリアを少し借りて部屋を出ていってしまう。

数分で返すと言われてからリビングのソファーに移動したテルヨシとサアヤだったが、なんとなく部屋で2人きりという何故か珍しい状況に緊張して、隣り合って座るものの互いに話題が思い付かない。

彼女持ちになっての経験は皆無のテルヨシも色々と考えは浮かぶのだが、何が地雷になるかわからないと軽い混乱状態に陥って本当に言葉で出てこない中、なんかサアヤも色々と考えた末に「ああもう！」とヤケクソな台詞を吐いてからぼすっ。

その体をテルヨシの方へと傾けて倒れて、そのまま膝枕の状態になつてしまう。

「ねえテル。私達つてまだ恋人らしいことちゃんとしてない、よね？」
「えっと……そう、ね。まだデートすら行つてなかったっけ」

「マリアもいるし、こう堂々と『付き合ってます！』つて感じは出したくなかったけど、それでお互いに縮こまつて遠慮してる感じがするのよね」

テルヨシを見上げる形で話を振つたサアヤは、まだ恥ずかしそうにしながらも真面目なことを言うから、テルヨシもサアヤが落ちないよ
うに注意しつつ正直な気持ちを吐露する。

「そうね……そもそもこうして会える時間も2人きりになれる状況を
作らないとだし、普通の恋人らしいことは難しいのかもね」

「アンタが平日の全部にバイト入れてるからこうなつてんでしょ。シ
フトを見直せバカ」

「だって彼女なんて学生のうちにできるなんて考えてもいなかったん
だもん……」

「どんだけ過小評価よそれ……惚れた私がバカみたいじゃない。つて
いうか文句を言いたいんじゃない……つまり……」

「今がチャンスと仰りたいわけですか」
「むぐつ……」

そうして話してるうちにユリの意図がこの辺にあつたことに気づ
いたテルヨシは、おそらくは示し合わせたのだろうサアヤとユリの連
携に応えるように、いつの間にやらその目をキュツと閉じていたサア
ヤの無防備な唇を見つめてキスしようとする。

が、膝枕の状態からキスするのは意外と難しく、サアヤの頭を
ちよつと持ち上げて唇を近づけると、その身を委ねるサアヤは目を開
けないでテルヨシのキスを待つ。

そしてその唇同士が重なるうとした瞬間、部屋のドアが開く音が聞
こえ、次いでマリアの「ただいま」が玄関から聞こえるよりも早くサ
アヤがソファアアへと座り直して何事もなかったようにする。

——が、状況は何事もなくとはいかなかった。

部屋の構造上、玄関からリビングへは1本の通路で繋がってるので、玄関からでもリビングの一部は普通に見えてしまう。

しかもそれがサアヤ側のソファアの端っこが見えるもんだから、リビングまで入ってそのサアヤの隣にテルヨシがいたとなれば、足の位置やらが慌てて戻っていくのが見えたとはいえずの。マリヤはなんとなくも状況を察してしまえたのだ。

「……………あの、私、今日は倉嶋さんの家にお泊まりしてくるね」

「……………えっ？」

「だからその……………テルもサアヤさんも気にしなくていいよ。2人とも恋人同士、なんだから……………」

その急なマリヤの言葉に咄嗟に言葉が出なかった2人は、すぐに身を翻して自室へと入っていき、泊まるための道具を持ち出したマリヤを見てようやく動き出し、慌てて引き留めにいくが、もうすでに半分以上は聞く耳を持たなくなっていたマリヤは2人の制止を振り切って玄関のドアを開き、出ていく際に一言だけ……………

「ごめんなさい」

そう言って、ドアを閉めてしまうのだった。

Acceleration Second 15

加速世界での問題がいくらか進展して少しだけホツとした週末を迎えたテルヨシだったが、そのわずかな気の緩みからあまりにも急展開な事態が発生。

テルヨシとサアヤが結果的にマリアの目を盗む形で恋人らしいことをしていたのを当人に見られてしまい、この場に居づらいつと感じたのだろうマリアはまだ許可なんて取つてもいけないはずのチユリの家泊まると言つて出ていってしまい、それを止められなかったテルヨシとサアヤは閉じられた玄関のドアを呆然と見つめて立ち尽くしていた。

——最悪だ。

そんな思いがテルヨシの頭に浮かんだのとほぼ同時に隣にいたサアヤが滑り落ちるように崩れた正座をしてしまい、その瞳からは大粒の涙が溢れ始める。

「ちがつ……私……そんなつもりじゃ……」

ただ呆然とドアを見ながらに呟くサアヤは、自分がしてしまったことに酷い罪悪感を抱き始めていて、自分よりも酷く傷ついたサアヤを見て、出ていったマリアのことを考えて冷静になったテルヨシは、ニューロリンカーをグローバル接続しようとする。

しかしそれより前に隣のサアヤがテルヨシのシャツの裾を引っ張ってきたのでそちらに意識を向けると、泣きながら見てきたサアヤは必死に言葉を吐き出してくる。

「追つて……お願い……私が追つてもダメ、だから……」

「わかつてるよ。でも……」

「アンタと！ テルとマリアの『絆』は……絶対に壊れちゃダメなの！ それを私なんか壊していいはずが……ないから……だから……走つてでもすぐに追いかけてよ！」

その悲痛さは聞いているテルヨシの心まで痛むほどの訴えだったが、追えと言うサアヤに急かされてもすぐに追えない理由がテルヨシにはあるのだ。

その辺のことをまだサアヤにちゃんと話してなかったのは本当にコミュニケーション不足だったが、言われても追うことなく、むしろサアヤに合わせて腰を下ろしてきたテルヨシに腹が立ったのか、その胸を叩いて急かしてくる。

「行けってば！ 私なんか今はどうでもいいでしょ！」

「いだいっ！ ちよっ！ まっ！ 待てっての！」

ドンドン叩く両手が止まらないもんだから、珍しくテルヨシも声を荒げてサアヤの両手首を掴んで止めて、それが出来ないようにすぐに抱きついて落ち着かせるように頭と背中を擦ってあげる。

「……………ごめん。すぐに追いかけたいのは気持ちとしてあるんだけど、オレまだ、走ったりとかは出来ないんだわ」

「……………何よ、それ」

「自力で歩けるようになったのは去年の終わり頃で、それまでは車椅子を使わなきゃ1人で出歩けない状態だったからさ。だからマリアに走られたら今のオレじゃ追いつくどころか引き離されちゃう」

軽く興奮状態だったサアヤもどうすることもできなくなると聞く耳を持ってくれて、ようやく自分の足のことを話したテルヨシに表情は見えないながらも、驚くような雰囲気醸し出す。

「幸い行き先は言ってくれたから、そっちの方に話をしてマリアを引っ張ってきてもらう。来なきゃこっちから乗り込めばいい。それにこんなに泣いちやってる彼女を放って追いかけたら、それこそマリアに怒られるし」

「……………私……………ごめん」

「謝るのはこっちだよ。オレとマリアのことをそんな風に大事に思ってくれてたなんて気づかなかった。ごめんな。それと、凄く嬉しかった」

ぼん、ぼん、ぼん。

話しながらに頭を優しく撫でるテルヨシのおかげでようやく嗚咽の声が出たサアヤは、今さっき自分が2人を思って放った言葉でテルヨシを傷つけていたことに対して謝罪するが、知らなかったんだから仕方ないと許してあげる。

何よりテルヨシの性格上、泣いてる女の子を放って行けるほど割り切れる都合のよい性格はしていないし、あの状態で1人にしたら危険だとわかるほどにはテルヨシも冷静に判断できていた。

「落ち着いたところで動くかな。ちよつとごめんね」

自虐的だったサアヤが落ち着いたので、擦る左手をニューロリンカーに伸ばしてグローバル接続したテルヨシは、ボイスコールでチュリへと繋ぎ、すぐに「いま連絡しようと思ってました」という言葉と共に繋がる。

「悪いねチュチュ。そっちにマリアが行くでしょ」

『すつごい急にだったから何でだろうって思っただもテル先輩からは許可をもらってるから大丈夫とか言っていましたけど、何かありましたね?』

「ちよつとした思いのすれ違い、かな。これから行くから、出来たらマリアをマンションの外に連れてきてくれる?」

『それはまあ出来ないこともないでしょうけど……』

「……何をこそ望んで?」

『今度は正式にマリアちゃんをお泊まりさせてください』

「それは本人の意思を尊重しなきゃだ」

『説得するのはテル先輩のお仕事ですからねえ』

チュリの方に今しがたあつたらしいマリアの連絡に疑問を持っていたチュリの理解力はさすがでありがたいが、空気が読め過ぎちゃうので、こっちが割と重い空気と察すると明るい方向に持っていくのに、結局なにかしらのお願いを聞くことになってしまう。

それでもチュリのお願いは前向きに考えつつ、マリアとの対面に向けてボイスコールを切ったテルヨシは、必要になるだろうものを取ってくるために立ち上がって、サアヤはすぐ後ろの壁に背中を預けて体育座りする。

そしてテルヨシが玄関に戻って靴を履いていると、落ち着きながらもまだしよんぼりとした声で口を開いてくる。

「私達……早すぎたんだよね……」

「そんなことないよ」

「そうじゃなきやマリアだってもっと気持ちを整理する時間があつたもの。私がマリアくらしいの頃に兄さんがいきなり彼女を連れてきた時のこと思い出して気づいた。自分に近い人間関係に急に割り込みをかけられると、気持ちがね、上手くまとまらなくて、どうしていいかわからなくなるの。それまでと同じではいられないって思っちゃう」

「……………」

わかるような、気がした。

状況は違えど、テルヨシもサクラとの関係がぎこちなくなつてしまった時期があつたし、同じようにしたいと願えば願うほど、その同じが遠退くような、そんな感じが感覚的に理解できるのだ。

だが仕方のないことなのだ。人は日々を生きていく中で少しずつでも変わっていく。

変わらないということはそれはつまり『立ち止まる』ことと言えないだろうか。

変化を望む望まないは色々と思うところはあろうが、大事なのはその変化に対してどう対応するか。今のテルヨシはそう考えている。

それらを今ここで全て言葉にして伝えるには時間がかかりすぎてしまうので、とにかくマリアを連れ戻してきてから話をしようと思つたが、それより先に一方的な答えを出しかけるサアヤが嫌な雰囲気醸し出す。

「……………ねえテル。私達……………」

「その先を口にしたら、さすがのオレでもゲンコツの1つは飛び出すよ」

流れ的にサアヤのことだから「マリアが悲しむくらいなら別れた方がいい」くらいのこととは言いそうだと思つたら、本当に近いことを言いかけたので、ちよつと慌てつつもその口に指をそつと添えて止めてやりつつ、全てを伝えきれないながらもサアヤを安心させる言葉を探す。

「……………夕飯、作っておいてくれる？　もちろん、オレとサアヤと、

マリアの3人分。帰ってご飯が出来てるって、凄く嬉しいことなんだよね」

「……うん。美味しいご飯作って待ってる」

そして出てきたのは鳴りそうだった腹の虫からの腹ペコな言葉で、それでもなんとかそれらしいことを言って笑ったテルヨシに、サアヤもまた少しだけ呆然としてからぎこちないながらも笑顔で返してくれる。

それを見届けたテルヨシは絶対に失敗できないミッションに挑むために玄関を出て、そのドアの向こうで少し待機。

するとドア越しのサアヤが少しの沈黙から「よしっ！」と切り替えたような声をあげたので、サアヤへの心配を少し減らし改めて出発。

これから夏本番ということもあって、午後6時近くになってもまだ明るい外の景色は、遠くにいたマリアとチユリを一目で見分けられるほどで、ある程度まで来ればその表情まで見て取れた。

厄介事に巻き込まれても嫌な顔ひとつしないでマリアを連れてきてくれたチユリは、テルヨシが来たことでマリアの背中をポンとひと押しして送り出し、1度だけ笑顔を向けてマンションへと戻っていく。

対してマリアはと言えばここに呼ばれたこともだが、自分なんかに構って何してるのみたいな不機嫌丸出しの表情でテルヨシが近づいてくるのを待っていた。

「その顔は好きじゃないなあ」

「……サアヤさんを1人にするなんて最低」

「そうかもね。でも今のマリアほど酷いことはしてないよ」

「……………」

笑ってるマリアが大好きなテルヨシにとって今のマリアは好きとはほど遠い顔をしていたので、不機嫌具合を探る意味でもあえて口にして反応を見るが、ちよつと思つたよりも深刻そうなので優しさだけではダメなことをすぐに悟る。

聡いマリアはたぶんだが、自分が何をしたかをなんとなくわかってはいるし、それでもそうするしかなかったからここにいることも理解

はしている。

幼いながらにテルヨシとサアヤに気を遣った結果だからテルヨシも怒るわけにはいかないし、むしろ謝る立場にはあるが、大事なものはこれから先のこと。

その場その場で今後もこれと同じことが起きて謝ったりなんだりをしていたら、本当にサアヤが別れ話を切り出してしまおうし、マリアだって家を出るとかなんとか言いかねないのだから、腹を割ってちゃんと話をする必要がある。

だからこそテルヨシはムスツとするマリアがこのまま微妙な沈黙をしてしまうのを避けるため、懐から持ってきたXSBケーブルを取り出して近くの座れそうなところを指して移動。

ムスツとしながらもちやんとテルヨシの隣に座ったマリアは、周囲に人がいないことを確認してから渡されたケーブルの先端をニューロリンカーに繋いで直結。

「そんなにオレとの直結を見られるの嫌ですか？」

「嫌」

「そうですねか……じゃあそのモヤモヤしてるものはあつちで吐き出してもらおうからな。バースト・リンク」

その挙動がテルヨシ的にはちよつと傷つく行為だったが、今のマリアでは仕方ないと割り切って加速してマリアとの対戦を選択。

初期加速空間でも良かったが、何事にも言葉だけでは足りないものは存在するのはわかってるので、全てを曝け出す意味でも対戦の方が良いと判断した。

ブレイン・バーストの粋な計らいかどうかは不明だが、降り立ったフィールドの属性はマリアと初めて降り立った《平安》ステージで、あの頃からもう3ヶ月も経つのかと少し考えていたら、ガイドカーソルの表示がないので一瞬、マリアが近くにいると思っただが、よく考えたら対戦は最低でもガイドカーソルの出現する位置に配置されるのである。これはマリアのアビリティ《インキュベーション》による恩恵だと理解するのに時間はかからなかった。

しかしそのわずかな思考時間でもマリアにとっては好機。

対戦が選択されて開始の合図が出て早々にテルヨシの視界から消えていたマリアは、発射音のほとんどしない狙撃銃型強化外装《シャープネス》から1発の銃弾を発射してテルヨシの後頭部を強襲。構えすらしてなかったテルヨシにとつてこの一撃はクリーンヒツトと同時に思考停止に追い込むこととなり、ガリツと1割弱は減ったHPゲージを見てなんとか踏み留まる。

テルヨシとしてはまず話をしようと思っていた。からのこの不意打ちなので思考停止は仕方ないとも言えるが、対戦となったら即攻撃に転じてくるマリアの容赦のなさは割り切りすぎではなからうか。

——我が《子》ながらあつぱれ。

相手の隙は見逃すなど狙撃手としての在り方を教えてきたからには全然オツケーな攻撃だが、今回はそういうのじやないでしょと思いつつ、銃弾が飛んできた後方を振り向いて即座に物陰に身を潜めるが、マリアの姿はすでに見えない。

インキュベーションのおかげでその姿が見られるまではガイドカーソルも表示されなかったため、こうなったマリアの面倒臭さは《親》が1番わかっている。

「なあマリア。1つ賭けをしないか？ オレが勝ったら否が応でもマリアを連れて帰る。んで、マリアが勝ったらマリアの好きにしていよいよ。もちろんレベル差もあるから、オレは必殺技を使わないハンデありでな」

状況はマリア優勢だ。その上でどこかにいるマリアへとそんな賭け事を持ちかけたテルヨシに伝える声はない。

「沈黙は了承と取るぞお。んじやスタート」

一方的ではあったが、テルヨシがそうやって賭け事を持ちかけたのは、マリアに本気でぶつかってきて欲しいからに他ならない。

中途半端な気持ちでぶつかってこられてもテルヨシも困るし、マリアだって秘めたものを吐き出すチャンスが必要。

だがマリアは頑固だからテルヨシがただ「言ってくれ」と言ったところで、気を遣って自分を押し殺してしまう可能性が高い。

そうならないようにテルヨシは対戦の中で自分の気持ちをマリア

に吐き出して、マリアの本心を吐き出させる必要がある。

純粹な対戦の方が性には合ってるが、これは心の戦い。そう自分に言い聞かせて物陰から飛び出したテルヨシは、すでに再装填を終えているだろうマリアに狙い撃ちされないように出せる最高速でフィールドを駆ける。

「マリアの気遣いは嬉しいよ！ オレのこと。サアヤのことをちゃんと思っただけ行動したりしてるのも痛いくらいにわかる！」

駆けながらマリアを探すテルヨシは、それと同時に思いの丈を姿なきマリアへと聞こえるように叫び、それすらも作戦だと思ってるマリアがそれでも反応せざるを得ないように言葉での追い込みをかける。

その間にマリアの狙撃はなく、今のテルヨシに当てることがはできても、速度の差でそのあとに続かないと判断して何かのチャンスを待っているのだろう。

「でもな！ それでマリア自身が傷付いたり、遠慮したりする姿はオレもサアヤも見たくなかった！ そうしちゃったサアヤはマリアが出ていったあとに悲しんで泣いちゃったよ！ オレも痛かったよ！ 心がな！」

そうしてくれるならテルヨシも話に集中できていいので、こっちがチャンスとばかりに言葉で畳み掛けながら、マリアの心が痛む言葉を選んでみせる。

マリアを傷つけずに済むのが最善ではあるが、自分のしたことによって起きたことを認識させ、良かれと思っただけでも、本人の意に沿わない結果になり得ることを教えてあげる。

優しいだけではダメと周りに散々言われてきたテルヨシなので、この行為自体に心が痛むが、ここでマリアの本心を吐き出させないとここからの関係が崩れかねないことも職業柄わかっていた。

「マリアはオレとサアヤが恋人らしくしてほしっと思ってるのは今回のでわかったよ！ でもそれでマリアが邪魔者扱いになるなんてこっちが願い下げだ！ マリアのいないところでコソコソしてたのはオレ達が悪い！ 悪かったよ！ でもそれならマリアはオレ達にどうして欲しい！ 逃げてないで教えてくれ！」

心理学は人の心を学ぶ学問だが、その人の考えの全てがまるっと全部わかるならこんなことにはならないし、テルヨシだって普段の生活に心理学は持ち込まないようにはしているのだ。

加速世界の密度のせいで忘れがちにはなるが、マリアは幼馴染みのサクラのように長い時間を一緒に過ごした深い関係ではなく、一緒に暮らしてその性格やらをちゃんと理解し始めてまだ4ヶ月に満たない程度の、言い方は悪いが浅い関係でしかなく、本気の喧嘩すらしたことがない未熟な家族なのだ。

それなのに相手のことを理解したつもりでいたり、究極的に他人だから本当の家族に対しての気遣いとは違った気遣いをしてしまう。

そういった所謂よそよそしさがまだテルヨシとマリアの間には無意識ながらもあるのだ。

——家族同然ではあるが、家族ではない。

その無意識がこの状況を作り出してしまったなら、責任は壁を作っていたテルヨシにあるし、マリアの不安、不満といったマイナス面のケアを怠った怠惰。

「じゃあオレが、サアヤがマリアにどうして欲しいって言ってもいいのか！ どうしたいか決めていいのか！ それなら最悪、オレとサアヤは別れることになるかもしれないな！ サアヤもマリアがそんな風になるならいつそ、別れた方がいいかもって言ってた……」

「——ダメエツ!!」

そのマイナス面を面に出さないマリアからそれを引き出すには、マリアの都合が悪い現実を突きつけるしかない。

そう思っただけ最後の切り札を切ったところで、その言葉を切るようにマリアが叫び、直後にテルヨシの胸部装甲に強烈な《炸裂弾》が命中し激しい爆発に巻き込まれる。

ダメエツも相当で一気に3割も削られてしまったが、発生した煙を突っ切って怯むことなく銃弾が飛んできた方向に抜けたテルヨシは、その視界の先。

今は五重の塔のような建物オブジェクトの自宅マンションの屋上でシャーブネスを構えて立つマリアを発見。

これによってインキュベーションの発動条件を満たせなくなりテルヨシの視界にもガイドカーソルが出現したが、今も隠れることなく立つマリアの様子からしてあえて見つかった節がある。

「そんなのダメエ!! それでテルとサアヤさんが別れたら、私のせいになっちゃう!!」

「……そうだよ。マリアのせいだ。マリアのせいでサアヤが泣いたし、オレも悲しいことを言われた」

「私の、せいで……うう……」

そうならばとテルヨシも立ち止まってマリアを見上げていると、マリアも腹から声を出してその本音をぶつけてきて、決して、絶対に、98%くらいはテルヨシの責任だが、今は非情となってマリアを追い詰めると、自分のせいでテルヨシとサアヤが別れるかもと知って戦意を失ったマリアはその場で泣き始める。

「……………泣いても状況は変わらない。泣けば誰かが解決してくれるような歳じゃなくなってきたんだよ、マリア。あの時だって……オレのところに来ると決めた時だって、マリアはちゃんと自分の意思を示してくれただろ。なら今度もちゃんと教えてくれ。マリアは本当はどうしたくて、オレ達にどうして欲しいのか。それを言うことがわがままでおこがましいって思ってたなら、それは間違いだ。両親を退けてまでマリアを預かったオレの最高のわがままに比べたら、なんだって些細なことなんだよ。そんな願望も要望も聞けないような覚悟でお前と一緒に暮らしてないんだよ!!」

胸が張り裂けそうな罪悪感に駆られながらも、泣いているマリアに對して厳しい言葉をぶつけるテルヨシだったが、その言葉の中にも確かな優しさが含まれていることに気づいたマリアは、ゆっくりではあるが嗚咽の声を小さくしていき、完全に泣き止んで再びテルヨシを見下ろすと、先ほどの叫びほどではないが、確かに芯の通ったはつきりとした意思のある声で言葉を紡いだ。

《平安》 ステージの月光を背に自宅マンションだった五重の塔のよ
うな建物オブジェクトの天辺に立つ 《ソレイユ・アンブッシュ》こと
マリアは、テルヨシの言葉による攻撃によって精神的にかなり酷いダ
メージを受けたが、その真意を汲んでまだ少しだけ泣いた反動の嗚咽
を抑えて口を開く。

「私は……テルとサアヤさんにもつと仲良くしてもらいたいよ。でも
私がいたら手を握ったりとかもしないし……」

「……………おう……………そうね……………」

元々はマリアから本音を聞き出すための精神攻撃だったが、いざ本
音を語られ始めると、なんだか自分のよそよそしさとか奥手な部分を
突かれて意外なダメージを受ける。

それが事実だから痛いのが、それがマリアにダイレクトに伝わってる
事実の方が今は痛い。

「きつとサアヤさんももつとテルのこと『好き』って気持ちを出したい
んだと思う。テルだって時々だけど私にやってくるセクハラみたい
な『好き』って伝え方、サアヤさんにしたことない。それがテルらし
くなくてヤダ」

「いやあ、それはサアヤから殴る蹴るの暴力が飛んできそうで怖いん
ですが」

「私もいつも蹴ってるもん」

「そうですね……………」

この1週間でほとんど一緒にいたこともなかった気がしなくもな
いが、そのわずかな時間でさえもマリアはテルヨシとサアヤのぎこち
なさや恥じらいを見抜いて、それが自分がいるせいだと思ってしまう
ていたことがわかる。

間違っではないかもしれないが、テルヨシとサアヤが恋人らしい
ことをするぎこちなさや恥じらいは、その全てがそこにあるわけがな
い。むしろ割合からすれば1割とあるかどうかかな小さな要因。

「……………確かにオレらしくなかったのかもな。マリアになら『大好きー!』って言いながらハグも出来るのに、サアヤにはどこか遠慮してた。それがマリアを困らせる原因になったなら……………」

「そうだけど、そうじゃなくて。サアヤさんに本当にそうしてほしいわけじゃなくて、テルがサアヤさんのこと『好き』て気持ちをもっともつとわかるようにしてほしいの。テルが人の目を気にするの、凄く嫌だから。それともサアヤさんが彼女さんに見られるの、イヤ?」

「そんなわけ……………って、あー、そうよねえ。なんだかんだでこの1週間で姫にも恵にも自慢話にさえしてなかったわ……………彼氏としてどうなのよそれ……………」

マリアから伝えられる本音はビシビシ、グサグサとテルヨシのことを貫通したりと大変に手厳しいものの、考えてみればサアヤと付き合うことになって、その事実を知る人はマリアを除いてもまだパドとユリとユニコ。それから可能性として黒雪姫くらいだ。

決して隠しておきたい関係ではないし、テルヨシ的には有頂天になってクラス中に言いふらすくらいの珍事を起こしても不思議はなかった。

それなのに現在でそうしたことになっていないのは、テルヨシが変に身構えて『サアヤに嫌われないようにしよう』と行動や言動を無意識で抑制してしまったから。

——それが果たして良かったのか。

否。マリアはそれが嫌だと言ってるのだ。

怒られるとわかっててもやる。呆れられるとわかっててもやる。空気読めな雰囲気の中でもあえてやる。嫌われるとわかってても、やるかもしれない。

それができるからこそその皇照良なのだ。

「……………そっか。そういうオレだから、サアヤもオレのことを好きになってくれたのかもな」

「女の子に甘くて鼻の下伸ばしていつもヘラヘラしっぱなし。でも……………」

知らず知らずに自分らしさを失っていたことに今さらながらに気

づいてハツとさせられたテルヨシを見て、さらに言葉を重ねてくるマリアだったが、言い切るより前に突然、立っている場所からピョンツと飛び降りて地面へと真つ逆さま。

あまりに唐突な行動だったために反応が遅れたため、瞬時に《インパクト・ジャンプ》を使ってマリアの落下地点に移動。

微調整は出来ないもので着地後に上を見てマリアを受け止めようとしたが、ギリギリで体勢が整わなくてほぼ仰向けだったテルヨシの腹の上にマリアがお尻から着弾。

——ぐっほええええ!!

言葉にならない奇声をあげてマリアのクツションとなったテルヨシは、かろうじて背中に《テイル・ウィップ》を噛ませてダイレクトアタックは避けたが、それでも女の子1人を受け止めた反動はダメージとなってHPゲージを残り半分まで減らす。

「お、お怪我はありませんか姫君……おえ」

「おかげさまで」

マリアの全体重を乗せたヒップアタックで吐きそうなほどの衝撃に耐えながら、尻に敷くマリアにグーサインを出すと、マリアも無事なようにグーサインを返してから呑気に上を退いて立ち上がる。

「でも、使っちゃったね」

「えっ……あつ！ なしで！」

「ダメだよ。約束は守らないと」

そして何故こんな自殺行為に及んだのかを口にしたマリアに、してやられたテルヨシはみつともなく懇願。

テルヨシは一方的な賭けを持ち込んだ際に自分は『必殺技を使わない』と公言していたため、高所からの落下をリカバリーする術がないマリアはそれをわかった上でテルヨシが何がなんでも助けてくれると踏んでいたのだ。

さすがのテルヨシも人を助ける時に賭けだ何だを考慮してる余裕はなかったなので、完全にマリアにしてやられた形だが、反則負けは凄く締まりが悪い気もする。

「でも、こうやって自然と優しくできるテルが、私は大好きだよ」

「へっ？　今マリアから凄く泣きそうになる言葉が出たような……」

HP残量とかも意味ないなあと腹を擦りながらに立ち上がったテルヨシは、その間にちよつと歩いて離れていくマリアの小さな眩きが微かに聞こえて、もう一度聞きたいからリピートの要求をしようとした。

しかしマリアは背中を向けて歩きながらに何故か銃弾を再装填して、5メートルほどの距離でクルツと振り返ってシャープネスを構えてみせる。

「テルもサアヤさんも大好きツ!!」

かなり不穏な挙動をするマリアだが、そんな構えを取りながらも意表を突くハートブレイクショットのせいでテルヨシは完全に有頂天になり、恥ずかしい告白を誤魔化すように直後に放たれた貫通弾がノーガードのテルヨシの眉間に突き刺さってクリティカル。

完璧なヘッドショットによってテルヨシのHPゲージは一気に吹き飛んで対戦は終了したのだった。

「……………ポイントを奪われ、心まで奪われてしまった」

「相手の隙は見逃すなってテルが言ってたんだよ」

対戦が終わって現実世界に戻って早々にガツクリとうなだれたテルヨシに対して、ケーブルを外しながらドヤるマリアは大変に可愛い生物なのだが、こんな悪知恵をこの幼さで身に付けてしまったては今後が心配になったりならなかったりと複雑な心境になる。

これもユニコの入れ知恵に違いないと後日に抗議してやろうと考えつつ、テルヨシもケーブルを外して改めてマリアを見ると、そのマリアは喜びの笑顔からさつきよりも影はなくなつたぎこちない笑顔に変えて、テルヨシのことをまつすぐに見る。

「ごめんなさい。私、テルにずっとお世話になってて、少しでもテルに迷惑をかけないようにって思つて、それで……」

「迷惑なんてどんとこいなんだよ。変に良い子でいられるとオレも困っちゃう時があるし、もつとわがままになってくれ。というかニコたんとかミャアには結構わがまま言ってるのに、オレには甘えられないとは何事か」

「それはテルの日頃の行いのせいかも」

「にゃん、だと」

10歳の少女が考えるには大人すぎる気遣い。

それは一種の優しさでもあるが、今から磨くべき優しさではない。いっぱい迷惑をかけて、怒られて。それを繰り返すことで少しずつ大人になっていくべきで、マリアはその怒られることをする以前の問題と言えた。

それが今回のことでわかったなら、テルヨシがそれ以上なにを言うこともなく、クスクスと笑うマリアの頭をポンポンと優しく触ることで終わりにするのだった。

「それで、賭けに勝ったマリアはどうするんだ？」

そして大事なこととしてさっきの対戦での勝者の特権。マリアが勝ったら好きにしている。

それをどう使うのかを頭から手を離しながらに問いかけると、いつもの大好きな笑顔に戻ってハッキリと言ってくれる。

「お家に帰ろう。サアヤさんが待ってるもん」

「帰ったら2人で土下座しようか。『マジすんませんでしたっ！』って」

「フローリングにうつ伏せで貼りつくようなね」

「土下……寝？」

「フフツ。ベターツて」

言いたいことも言えて、もう少しわがままになってもいいとわかったマリアは、それならばもうチュリのとこに泊まる必要はないので、結果としてテルヨシの思惑通りに解決。

帰ってからの最初にやることも決めてから、チュリのところにある荷物を取りに一旦マンシヨンの方に戻っていったマリアだったが、3分と経たずに走って戻ってきて何事かと思った。

その理由はマリアが家に戻るだろうと踏んでいたチュリが密かにマリアの荷物を持って来てくれていて、わざわざ1階で待ち構えてくれたから。

これにはテルヨシも頭が上がりなかつたので、本人から別れ際に聞

いたというお泊まりの話は近日中に実行に移す流れになって、2人で自宅マンションへと戻っていった。

「マジすんませんでしたーツ!!」

そして予定通りに家に戻って早々、マリアに抱きついて謝ろうとしたサアヤを制して、玄関すぐの廊下で2人して土下寝を披露すると、明らかにリアクションに困って頭から大量のはてなマークを浮かべるサアヤ。

「いや、その、謝るのはこっちだと思うんだけど……」

「いや違うしー!」

「サアヤさん悪くないし!」

「ちよつと! 何で2人して口裏合わせてきてるのよ! 私にも謝らせてよ!」

「嫌だし!」

「悪いのは全部テルだし!」

「それはちよつと酷いし!」

何故か真面目なことだったはずなのに変な空気が場を満たしてしまい、サアヤが本当に困り顔をするのを見たテルヨシとマリアは、有無を言わせないごり押しで話を終わらせようとする。

そこでちよつとかり責任逃れをしようとしたマリアのズル賢さに戦慄しながらも、謝られていたサアヤが小さく笑ったのを見てちよつと安心する。

「私も悪かったでしょ。ごめんなさい」

それでもサアヤも自分が悪かったことをちよつとと謝って笑ってみせると、それでももういいかと顔を見合ったテルヨシとマリアは、追撃するように、仲直りと言わんばかりに急に目の前のサアヤへと飛び付いて押し倒し抱きついてしまう。

あまりに急だったから2人に抱きつかれて倒れるサアヤも思考停止状態に陥ったが、すぐに恥ずかしさが込み上げてきたのかテルヨシだけに乱暴が発動。

「ちよちよちよつ! 離れなさいよお!」

「いーやーだーねっ」

「ヤーダー」

「もう！ 何なのよアンタ達は！」

「マリアがね、自分の目なんて気にしないでオレ達にイチヤイチャラブラブして欲しいってさ」

「そこまで言っていないもんっ！」

ポカポカ頭を叩かれながらも離れようとしなないテルヨシにマジで赤面が凄いいことになっていたサアヤだったが、さつき聞いてきたマリアの本音をぶつけると叩く手も止まって「えっ？」と反応。

さすがにマリアもイチヤイチャラブラブまでしろとは言つてなかったからすぐにツツコむが、そうしたマリアの本音を聞いたサアヤは、本当にそれでいいのかとマリアを見る。

「テルもサアヤさんももう少しだけ『好き』って気持ちをちゃんと出してください。私は幸せそうなテルとサアヤさんがもつともつと見たいから。だから私に遠慮しないで」

「マリア……マリアああああ!!」

「うっ、ぐえええええ!!」

それで誤解のあるテルヨシの言葉を訂正して改めて自分の言葉で本音を語ったマリアに感動したのか、さつき見せた悲しみの涙とは別の涙を滲ませたサアヤは、感極まって抱きついていていたテルヨシを全力で横に蹴り飛ばしてマリアだけを受け入れて抱き締める。

これには理不尽さを感じずにはいられなかったテルヨシではあったが、マリアをこれでもかと強く抱き締めながらも喜びの涙を浮かべるサアヤを見てはツツコむことをはばかれて、サアヤが落ち着くまでその様子を笑顔で見守るのだった。

無事に問題が解決されたのは良かったが、思いのほか早くに戻ってきたおかげでまだ夕食の準備が出来ていなかったらしく、それならと3人でパツパと準備を進めて午後6時半頃にいざ夕食となる。

いつもならマリアの隣を奪い合うところだが、それも恥ずかしさを誤魔化す行動だったと自覚してしまえば、席は自然とテルヨシとサアヤが隣り合う形となり、まだ微妙な恥じらいのある2人を対面から見るマリアはニヤニヤが止まらない。

「2人とも可愛い」

「マリアに弄られる日が来ようとはな……」

「初めてマリアを怒りたいと思ったわよ……恥ずかしい……」

それを見て何やら言う2人の初々しい姿が面白いマリアは、ずっとニヤニヤしながら黙々と食べていて、非常に食べにくい状況の中でいつまでも恥ずかしがってはマリアが調子に乗ると理解していたテルヨシは、切り替えるように深呼吸をして隣のサアヤを見る。

するとサアヤも何故かテルヨシを見てきてバツチリと目が合うと、あうあうと不思議な声を出したサアヤは、それでも意を決してテルヨシのおかずに箸をつけてその口元へと運んでくる。

「ほら、開きなさいよ」

「突然だね……」

「本当は昨日もやってみようかなとは思ってたけど、結局できなかつたから。だから、ハイ」

その行動自体にはすぐに理解が及んだわけだが、なんか鬼気迫る感じもあつたので若干引きつつも、念願の食べさせてもらう行為をサアヤからしてくれたのだから受け入れないわけもなく、差し出されたおかずをひと口でぱくり。

味はもちろんながら、好きな人に食べさせてもらうのは格別に喜びが大きい。

これはいいものだなあ、と思いながら咀嚼を終えてみると、サアヤが何か言いたげな顔をしていたので、お返しをしなきゃかと思いきり、サアヤのおかずを摘まみ口元へと持っていくと、何故か色っぽく髪を耳の後ろに運ぶ手つきをしながらに食べたサアヤは、美味しそうに、そして嬉しそうに咀嚼してみせた。

思いの外、2人してその行為は好きになれそうだったものの、改めてその一部始終を見ていたマリアを同時に見てみると、バツチリ目撃しておきながら、吹けもしない口笛を吹きながら顔を赤くしてそっぽを向いていた。

さすがに見せつけるような行為はマリアでも直視するのは恥ずかしかったようだが、そうするようにと言ったそばからのこの反応には

テルヨシとサアヤも「おいおい」とツツコミたくなる。

しかしそうはせずに顔を合わせてニヤリと笑ったテルヨシとサアヤは、さつきまでの恥ずかしさはどこへやらで席を立ててマリアの椅子に強引に座りサンドすると、マリアのおかずを揃って摘まんでその口元へと持つていく。

「はい、あーん」

「や、やめてよー！」

完全なる仕返しの形になったが、こうしている時でも3人に確かな笑顔があるのは、今日で今までの関係が変化したからに他ならない。きつとこれからも何か問題は起きてしまうし、その度に喧嘩みたいなこともしてしまうだろう。

それでも本音でぶつかる意味を知った今なら、解決していけるはずだ。

「オレも入る！」

「ヘンタイ」

「マジないわー」

それでも解決できない問題があつたが、まあ仕方ないことで話し合
いの余地すらないこと。

夕食後は自然な流れでお風呂となったが、今なら3人で仲良くな
って甘い考えをしたテルヨシに対して、超がつくほどの真顔で拒絶を示
したマリアとサアヤは、覗きすら許さないといい謎のオーラを纏つ
て洗面室へと消えていく。

1人リビングに残されたテルヨシは、1度はソファでしくしくと
泣いていたが、浴室からわずかに聞こえてくる2人のキャツキヤとし
た声だけでも楽しもうと、かつてない集中力で耳を澄ませたのだっ
た。

テルヨシがそんなことをしてまで楽しんでいたことなど知る由も
ない2人がお風呂から上がって、1人寂しくお風呂に入ってから、今
度こそはと上がって早々に「一緒に寝ようぜイエー！」とかそんなテ
ンションで行こうとしてリビングに入ってみたら、2人が部屋から布
団を運んで並べてくれていて、スペース的に2つしか並んではない

が、マリアがまだ小さいのでくっつけば問題はなさそう。

「まっ、一緒に寝ようって感じのは来るだろうから、それくらいならつてね」

「テルがわがまま過ぎだよね」

「いやったああああ!! 両手に花で寝れるけど寝つけないかもしれないわー!!」

「テルを挟んで寝るとかないわー」

「私、サアヤさんとくっついて寝たいもん」

「……………」

単純なテルヨシの思考を先読みして準備してくれたのはいいが、歓喜に湧くテルヨシのサアヤとマリアのサンドイッチ状態で寝るという願望は叶えてくれそうになく、何かされるのではといった恐怖を表現するように布団の上で抱き合った2人は「何かしたらどうなるかわからないわよ」と目で訴えてくる。

そんなわけでテルヨシの夢の両手に花は叶わなかったが、いざ寝てみたらテルヨシとサアヤの間にマリアが収まって、テルヨシの腕枕でサアヤが寝て、サアヤの腕枕でマリアが寝るといった形ができ、結構な密着具合だったので最初は寝苦しかったが、それよりも3人で仲良く寝られている事実が嬉しかったからか、すぐにマリアが寝息を立ててしまった。

「ありがとね、テル」

「ん？ 何が？」

必然的に顔を向け合って寝るテルヨシとサアヤは、マリアが寝たことを確認してからそんな会話をするが、何に對しての感謝かハッキリしなかったなのでその辺を尋ねてみると、優しい笑顔を向けてくるサアヤは、空いていた手を自分の手と絡めて口を開く。

「今回、私じゃどうしていいかわからなかったから。だからテルが任せてって言うてくれて、その……ちよっただけ頼もしかった、かな」
「お礼を言うのはオレの方だよ。オレとマリアのことを大切に思ってくれてありがと。大好きだよ」

「あ……その……私も……その……」

最初に口を開いたのはサアヤだったが、こういった話でハツキリと物事を言えてしまうテルヨシのペースに吞まれたサアヤは、優しく笑うテルヨシにもごもごととしてから、落ち着くように息を吐いて切り替えて、改めてテルヨシを見て口を開く。

「私も、大好きよ、テル」

原作11巻辺り

Acceleration Second 17

2047年6月23日。日曜日。

前回と同じ《魔都》ステージの東御苑へと再び集まって行われた《七王会議》。

前回のような牽制混じりの合流はなく、比較的スムーズにほぼ全員が集まって、しかし今回の追加で招集された1人の到着が遅れてその待ち時間。

今回の最初の議題は先延ばしにされていたハルユキの《災禍の鎧》が浄化できてあるかの確認になるが、まだ浄化に成功したことを知らない《コバルト・ブレード》と《マンガン・ブレード》の2人がギャラリーのハルユキを中心に立たせてジロジロと目の前で睨む光景が目映る。

ハルユキの鎧の件についてはテルヨシはすでに知るところなので、心配することは全くないが、遅れている1人。

要するに会議が進行しない原因が到着しないことにはハルユキの鎧の有無が確認できないので、周囲でもヒソヒソと雑談みたいなやり取りが行われて空気が散らかってしまっていた。

この空気からピリツとするのは議長の力量を問われるな。と思つたのもつかの間。

「やー、遅なつてゴメンなあ！ うっかり帝城のまるでむこつかわに出てもおてん！」

そんな関西弁と共にテルヨシの後ろから会議場に姿を現した最後の1人の登場で、気の抜けていた場の空気が一瞬にして引き締まり、その声の主を警戒する気配が漂う。

金属質の床を踏み鳴らしてテルヨシと隣に座るカタフの横を通り過ぎて、さらに王達の前にいたハルユキとコバル、マーガをも通り越して席の中央で立ち止まり、飄々とした雰囲気ですと会話が始める。

「——急な要請に応じてくれたことに、まずは礼を言うぜ、《アルゴン・アレイ》」

「なーに、かまへんて。ウチも貰うもん貰てるしな、あはは！」

装甲色はごく薄い紫。これといった身体的な特徴もない標準のF型デュエルアバターではあるが、頭部だけは違つて、扇形に広がる帽子のような巨大な頭部は、身長の5分の1は占めている。

チラツとすれ違う寸前までに正面を見た限り、前方には隣り合つて並ぶ巨大な浅い丸の空洞のようなものもあつたが、一見すると4つの目があるようにも見えないこともないことから、彼女がクアッドアイズ・アナリスト《四眼の分析者》と呼ばれる由縁は察することができた。

サアヤから話だけ聞いた限りでは、無所属にしてレベル8という相当な実力者を匂わせるステータスで、テルヨシも大いに興味はある人物なのだが、この場の緊張感が全てこのアルゴン・アレイへと向けられているという事実の方が驚き。

その間にも《イエロー・レディオ》と温度差のある漫才のようなやり取りを繰り返して、王達とも旧知の仲であることをうかがわせていたが、決して好意的な関係ではなさそうなのが会話からもわかつて苦笑。

おそらくはあの親しみやすそうな性格とは違つた『何か』が王達とその他を踏み込ませないのだろうが、この段階でそれがわかるほどテルヨシも考察ができるわけもないので、ようやくハルユキの鎧の話に戻つた流れを黙つて見守る。

ハルユキの鎧の有無を確認するために呼ばれたアルゴンだが、そもそもギャラリーではそれを行うアビリティも使えないとあつて、ハルユキとアルゴンはバトルロイヤル・モードで対戦者側が変わる。

それで視界上の表示が4人のゲージやらを小さく表示して、2人が対戦に加わつたことを確認してから、ハルユキの前に立つたアルゴンはテルヨシ達にもその正面を向けた状態で、頭部にあつた丸い窪みを上下に開けてレンズをむき出しにする。

露となつたそのレンズからは、怪しい紫色の光が照射されて目の前のハルユキを照らし出す。

「……………ふむふむ、ストレージは完全にカラツポやね。装備中の強化外装もナシ。何らかの支援効果、あるいはアイテムによる欺瞞も一切ナシ……」

その光を当てている間は相手の内部ステータスを見られるのである。アルゴンは、じつくりとハルユキのステータスを観察しながら、徐々に坦々とした事務的な口調へと変化していき、さっきまでの関西弁すら作り物であったかのようになくなっていく。

それでも見られるところが残り少なくなってくると元の口調に戻っていき、全てを見て満足したように笑顔を見せる。

「それでもって……寄生属性オブジェクトも、いっこともナシ、と。安心せえや、ぼん。あんたにはもう鎧は取り憑いてへんで。このクアッドアイズがばっちり保証したるわ！」

そこから導き出されたアルゴンの結論を聞いて、会議場ではホツと息を吐くような安堵が見られ、ようやく問題らしい問題が1つ解決したことが気持ちを上向きにする。

それから役目を終えたアルゴンは、ハルユキと何やら最後の言葉を交わしてから後ろへと下がって改めて災禍の鎧がハルユキの元になり、ことを宣言。

ナイトも残り時間を確認してから次の議題へと移ろうとする。が、そこに割り込みをかけてきたのは白の王の全権代理を名乗る《アイボリー・タワー》。

「シルバー・クロウ氏から《クロム・ディザスター》が分離された件は了承しました。しかし、ならば、鎧は再びアイテムカードとして封印されたのでは？ そのカードはどこに行ったんでしようね？」

質問は考えれば至極当然のものであったため、それを場違いだと指摘する声も上がらず、むしろこれを黒のレギオンが所持していたならと勘繰るレイオやソーンの視線は黒雪姫へと向けられる。

その視線を一身に受けながら毅然とした態度でいた黒雪姫は、あらかじめ用意はしていただろう言葉でこの場を収めにかかる。

「アイテムカードは、2度と誰も入手できない形で封印した。私もクrouも、もう触れることさえできない。——この答えでは不満か、ア

イボリー・タワー？ それとも……封印の方法とその場所まで知りた
いか？」

「いえいえ、その回答で充分ですよ、黒の王。割り込んで失礼しまし
た、青の王」

その言葉を100%信じろというのは無理な話ではあるが、封印し
た場所をわざわざ教えてやろうかとまで言われてしまえば、現状で黒
のレギオンの元にもない可能性は高いし、それで手出しができないと
言い張るなら、それ以上の追求は必要がなくなる。

アイボリー・タワーも鎧を手に入れようといった魂胆からの質問で
はなかったのか、あつさりと引き下がってしまい、黒雪姫も他に声か
ないことを確認してからナイトへと主導権を移し、ようやく鎧の話が
終了した。

「――第1の議題については、これで解決とする。クアッドアイズ、ご
苦労さん。悪いが、対戦者になっちまった関係上すぐには退場できな
い。会議終了まではちよつと待ってて貰えるか」

「かまへん、かまへん。そこのお2人さんと一緒に見学させて貰うわ」
次の議題に入る前にナイトが立ちっぱなしのアルゴンに言葉をか
けて、ギャラリーではなくなった関係上、会議が終わるまでは参加し
てもらわなきゃならないことを伝え、それはわかっていると軽い感じの
アルゴンは、気にしてない風で座っていたテルヨシとカタフを指し
て、カタフの隣へと腰を下ろしてあぐらをかく。

それに便乗するように晒し者にされていたハルユキも黒雪姫と
フーコの元へと戻る了承を得てその場を退散。

「カタフちゃん、お久しぶりやね」

「そつすね。アルゴンさんは相変わらずの調子で安心したつす」

それでやつと次の議題へと移った会議場だったが、そんなのお構い
なしで隣では陽気にアルゴンがカタフへと話しかけていて、ここも旧
知の仲だったのか割と友好的な空気が醸し出される。

それよりも驚いたのは、先週に私語は慎めと注意してきたカタフが
普通に挨拶とはいえ会話を成立させたこと。

男女で差別してるのではないのかと勘繰るものの、やはりどこか真

面目なカタフは会話を続けようとするアルゴンとは違って早々に切り替えて会議の方に意識を向けてしまい、つまらなそうにしたアルゴンはカタフの後ろをハイハイして移動してテルヨシの隣で再びあくらをかく。

「噂は色々と聞いとるんやけど、こうして話すんは初めてやね」

「そつちもガツちゃんから聞くまで存在すら知らなかったんだけど、まあミステリアスな女性ってのも魅力的よね」

「おつ、女をわかっつとる風やな。やけど分析者としては簡単に内側を見られるミスはせえへんよ。テイルちゃんはウチをどのくらい探れるんやろうね？」

「それは口説きに来てってお誘いと捉えてオツケー？」

「はははっ。エエねえそのノリ。ウチは好きやよ」

なかなかフレンドリーなアルゴンにテルヨシも元来のフレンドリーが炸裂して合わせてしまったが、たったこれだけの会話の中でも会議場の誰もがアルゴンを警戒した理由がなんとなくわかってちよつとした恐怖に駆られる。

飄々とした雰囲気フレンドリーな様子とは裏腹に、あまりに表面的な楽しみ方しかしていない感じ。

簡単に言えば表面上は楽しそうにしているが、裏では大して楽しんでもいなく、別の何かを考えているといった具合。

非常に器用な人間だが、これはテルヨシも割と出来ちゃうことで、加速世界で分析者を名乗っているからか、どこことなく同業者に似た空気もするアルゴンは、向こうも似た空気を感じたのか、即座に心のフィルターをしたような気配が会話からうかがえた。

それはつまりテルヨシをこのわずかな時間で警戒したのだ。本能的なのか、確信してなのかはわからないが、そうしなきゃならない理由がアルゴンにはあるようだ。

秘め事は誰にでもあるものだから、テルヨシも深くは探ろうとしなかったが、驚異の即応力を見せたアルゴンにはビックリしたし、その奥にわずかに垣間見えた何かは無視してはいけないものだったかもしれない。

「あのよお、見学するならもう少しポリウムを下げてください」

鋭い感覚の持ち主なのはわかったのでテルヨシも本気を出すのはやめたが、その決断をさせたのは意外にも議題を進めていたナイトで、ことのほかこちらの声が大きかったらしくて、議題について説明するために出てきていた《アイアン・パウンド》もメタトロンの件を話す口を止めてテルヨシとアルゴンを睨んでいた。

それにはアルゴンもすぐに「堪忍や！」と謝り、テルヨシも巻き込まれた形だが平謝りして、会話を注意されたアルゴンは以降、テルヨシとの会話を警戒もしたのだろうが、話しかけてくることはなく、会議の方に耳を傾けていた。

その会議の方はメタトロンの出現とISSキットの話が繋がって、レギオンが協力して《東京ミッドタウン・タワー》を攻略する流れができ、しかしメタトロンの特性から光線技への対抗策が必要となる。

この辺はテルヨシもすでにサアヤ達と済ませた話なので流して聞いていたが、グランデがわざわざパウンドを連れてきたなら、何かあるだろうと話が進み、かつて存在した《理論鏡面》アビリティが浮上っていたが、パウンドの口から、鏡が『銀』であることが言及され、幸いなのかどうなのか、今の加速世界に銀。シルバーを冠するデュエルアバターが存在する。

そして理論鏡面アビリティ習得の可能性があるととしてハルユキに白羽の矢が立ったのだった。

「これで今回の議題は終わりってことになるが、テイル、カタフ。お前らに提案っつーか、推奨っつーいうかがある」

実に他力本願ではあったが、パウンドの案でハルユキが理論鏡面アビリティ習得を試みる形でメタトロンの攻略戦の話は終わり、会議もいよいよ終わりとなる流れだったが、解散の前にナイトが代表してテルヨシとカタフに話しかけて、何かと顔を向けたテルヨシとカタフはその提案とやらに耳を傾ける。

「先週のバトロワ祭りでテイルのところでもISSキットの使用者が出たって報告は聞いている。言い方は悪いがよ。バトロワ祭りはキット

の感染者を増やす原因にもなり得ちまうわけだ。だからこの件が解決するまでは開催を控えて……」

「やだね」

「嫌っす」

話として理解は十分にできるナイトの提案は、ISSキットの感染をイタズラに増やす可能性があるバトロワ祭りの休止。

実際に先週は《ゲーテ・スピン》がその力で勝ち残る事態も発生し、無視できない脅威とはなっていた。

しかし、それでもナイトが言い終えるよりも早く返事したテルヨシは、ほぼ同時に同じ返事をしたカタフと顔を合わせてしまう。

「それは………何でだ」

ナイトも2人して意見が一致するとは思ってなかったのか、それでも理由についてはしっかりと聞いて納得したいと質問で返ってきて、理由まで同じとは思えないのでテルヨシがまずは口を開いた。

「確かにナイトの話はもつともだし、普通ならバトロワ祭りは見送るさ。だがな、そうやって向こうのやることに合わせてこつちが折れるなんてのは負けと一緒だ。何より、毎週このバトロワ祭りに参加してくれてる奴らは、誰よりも純粋に対戦を楽しんでくれてるんだよ。それを咎められる謂れはない」

「どうしたテイル。珍しく熱く語るじゃないか」

「茶化すなよロータス。あれでもバトロワ祭り開催のきっかけを作った奴だぜ？　そこへの思い入れってのもあんだろ」

残り時間もそうないので、いつもの調子で話していたら周囲からの茶々が多そうと予測し、始めから真面目な姿勢で話したのだが、それでも黒雪姫からはその真面目さにツッコまれてしまい、これも珍しくフォローに回ってくれたユニコが主導権をテルヨシへと戻してくれる。

「オレはそんな感じで、もちろん参加者の代表って立場での意見とは違って、個人としてのただのわがままだ。最終的にナイト達で多数決でもしてくれても構わないし、それに文句を言うほどオレも子供じゃない」

「……なるほどな。じゃあカタフ。お前はどうかんだ？」

それでもナイトの方が正論ではあるし、別にバトロワ祭りの参加者から声を聞いてここにいるわけでもないの、判断はナイト達に委ねる形が良いと思ってそうしたことにし、テルヨシの意見を聞いたナイトは、続けてカタフの意見に耳を傾け、振られたカタフも立ち上がって意外にも堂々とした態度で王達に話をした。

「僕もテイルさんと同じような意見になるっすが、墨田第1戦域を中心とした戦域はバトロワ祭りのおかげで活気が出てきたっす。中にはバトロワ祭りで勝ち抜くために研鑽をしているバーストリンカーもいるっす。それはつまり、バトロワ祭りがすでに僕らバーストリンカーにとつての日常に変わりつつある、凄く喜ばしい出来事っす。その日常を壊そうとする研究会に屈するようなことは、僕もしたくないっす」

「おやおや、あまり似てないと思ってましたが、《蒼き閃光》と《真空の剛拳》は似た者同士の頑固者でおバカさんのようですね」

「あら。小さな不安に怯えて縮こまってしまふよりも、私は2人の意見を尊重するわ」

「その結果がキツトの感染を助長してもいいと？ これだから感情論が優先になりがちの女性は困りますね」

「そう言うお前は2人のような熱意が決定的に欠落しているようだがな、レディオ」

カタフもなかなか熱い意見を述べてくれて、バトロワ祭りの主催2人が揃って同じようなことを言うもんだから、ここぞとばかりにレディオが茶々を入れてくるが、そんな2人に感化されたいらしいソーンが便乗し味方に。

それでも熱くはならないレディオが冷静な意見を述べるも、保身に走っているレディオを鼻で笑うように黒雪姫も参加してくる。

そこから王達によるちよつとした意見の飛び交いがあったが、ナイトがそれを止めて立ち上がると、まとまった意見を王らしく堂々と述べてくれる。

「やるやらないで揉めるのはしゃーないわな。だがよくよく考えてみ

りや、バトロワ祭りは毎日行われてる色々な対戦の中で、少々規模が大きいってだけで、しかも週に1回のそれがキットの感染にどの程度の影響を及ぼすかなんてのは、微々たるもんなのかもしれない」

「確かにな。それにキットの力が強力とはいえ、それだけでバトロワ祭りを簡単に勝ち抜けるとは到底思えん」

「ロータスのは楽観的に思えるけど、1対1の対戦ならまだしも、四方八方に敵がいるバトルロイヤルとなったら、そのバーストリンカーの力量も問われることにはなるのかもね」

「へっ。この流れでまだ何か言うかよ、レディオ？」

「……あなた方の楽観思考にはほとほと呆れますよ。これでは多数決など無意味でしょうし、どうぞ好きにしてください。元々私のレギオンには関係のない話ですからね」

「いやいや、お前さんのレギオンだけの問題じゃないんだぜ」

そんなナイトの言葉に黒雪姫、ソーン、ユニコが賛同するような雰囲気を出し、形勢が不利と見たレディオはいつものお手上げポーズと一緒に噛みつくのをやめて引き下がるが、ナイトのツツコミがなんとなく場の空気を和やかなものへと変えた。

「グレウオとオシラトリもそういう感じでまとめていいか？」

「我々のレギオンは毎週の参加者も多い。この措置は正直にありがたい」

「皆さんの仰る危惧はありますが、特に問題はないと判断します」

「んじゃそういうわけで俺の提案は却下で。ただし、何か問題が起きた場合は報告してくれや」

一応の判断として沈黙していた緑と白のレギオンの意見も引き出しにいったナイトに、パウンドとアイボリーが代表して返答。

これによって結果的に多数決でバトロワ祭りの休止の提案は却下となり、不安要素を抱えつつもテルヨシとカタフはひとまずは握りこぶしを作って喜びを表現。

これでようやく今回の会議は終了し、続々と退場をしていく面子を見ながら、テルヨシも予定があるのでさっさと退場しようとするが、それを引き留めるようにカタフから声がかかる。

先週もこんな流れになってたなあ。と思い出すのと同時に、カタフが話を切り出すより早くその時に言われたことも思い出して、現実世界では現在進行形で浮かれている自分をちよつと殴りたくなった。

「あの、テイルさん。先週のお話……」

「お、おう。たぶん、大丈夫、だと、思う、よ？　ただ、場所、とか、時間、に、よる、かも？」

「凄い動揺が見て取れるっすけど……」

決して完全に忘れていたわけではないが、ISSキットやらの問題もある中でその優先度を低く設定していたせいもあり、よく考えてなかったテルヨシは、いざやるとなつてから割とマジで焦つてどうするか迷う。

「いやあ、オレとしては夕方の5時とか6時とかそのくらいの時間に、出来れば中野戦域か隣接する戦域にしてもらいたいというかで」

「何やらリアルの事情がありそうっすね。僕は時間も場所も問題ないっすから、ご指定してもらえばどこでも行くっすよ」

「マジ？　じゃあ午後5時半ジャストに中野第2戦域でいいか？」

「そこはテイルさんの主戦場っすが……戦略的なアドバンテージが欲しいわけじゃなさそうっすから、それでいいっす。それでは失礼するっす！」

それで迷いながらもとにかく約束は約束だったから、カタフとの対戦の予定をねじ込みにいったテルヨシは、きつと現実世界に戻つてから怒られるだろうなあと予想しつつも、対戦が決まつて嬉しそうに退場していったカタフをもう裏切れないとも思つて苦笑。

そしてこの話を聞いていたナイトから去り際に「どうせやるなら新宿戦域でやれよ勿体ねえ」とか勝手な愚痴をこぼされたが、そのナイト経由で対戦カードの情報を拡散してもらえらることになったので、それには感謝しつつバーストアウトしていった。

「……………ふう」

《七王会議》が終了して現実世界へと意識が戻ったテルヨシは、思ったよりも疲れたその会議にひと息ついてグローバル接続を切る。

それらの動作をしつつ、今日のバトロワ祭りが午後4時ジャストにしていたことと現在時刻を確認し、あと2時間の猶予があるな——加速世界にいると経過時間の認識がズレるので——と再認識させた。

「何か収穫はあった？」

現実時間にしてみればわずか1・8秒の出来事ではあるが、その会議が終わるのを隣で待っていたのは、現在進行形でデートの最中の彼女、サアヤで、今日の会議のことを今朝になって教えてついてきてくれたのだ。

そもそもデートと相成ったのは、今朝方の朝食時にサアヤが「午後買い物に出かけたいなあ」と呟いたことに始まり、マリアのごり押しもあって急遽、初デートでこれから新宿の大型デパートへ直行する予定。

そうなると会議のせいでも1度、千代田区に来なくてはいけなく、不自然に足を伸ばせばサプライズとか何とか期待させたりとしちやう可能性もあったので、そこは正直に言って千代田区に同行してもらって現在に至る。

「収穫らしいことは何も。ミッドタウン・タワーのも鴉の色に賭けるみたいな感じ」

「色？ ああそつか。鏡って銀の塗料で鏡面にしたりするんだっけ」

「そこから或いは、みたいなね。あと非常に申し上げにくいのですが、対戦の約束をしてきちゃいまして……」

「……………時間と場所は？」

「午後5時半に中2戦域にしてはもらったけど、やっぱ怒るよね？」

「……………はあ。別にいいわよ。ちゃんと私との時間を確保した上でした約束なんだろうし。それで相手は誰よ」

「カタフ」

「よし勝て。負けたら承知しない。コテンパンにしなさい。出来なきや別れる」

「そんな横暴な！」

サアヤも明るい進展を期待して尋ねたわけでもなさそうで、会議についてはそれ以上は聞くこともなく、テルヨシとしても早くデートを再開したいので、カタフとの対戦についても早めに処理しにかかった。

しかしそのカタフがサアヤにとっては因縁の相手だったようで、何がなんでも勝てと言う目力は半端ではなく、変なプレッシャーまでかけられてしまった。

「まあ別れるとかは冗談としても、アンタまで負けられると中2戦域のバトロワ祭りのレベルが向こうより低いみたいになっちゃうじゃない。それは色々複雑な心境よ」

「あー、そういやサアヤはカタフに勝ったことないんだっ……げえ」

「えー？ 何か言ったかな？」

カタフの名前に敏感に反応してしまったサアヤは、そのことを反省しつつも、負けられない理由については納得しなくもないので、中2戦域のバトロワ祭り代表みたいな立場で臨まなきゃならない空気は図らずも出来てしまった。

きっと向こうはそんなつもりは微塵もないだろうから、テルヨシも始まってしまえばそんなことは忘れられるとは思うが、先日のイベントの時に少し話していたサアヤとカタフの戦績を思い出して何気なく口にしたら、物凄く怖い笑顔で首を絞めてきたので「何でもないです」と返事してなんとか解放してもらおう。

考えてみればサアヤが対戦において完全に負け越している相手とこのもなかなかレアな存在なので興味の方も湧いてきたが、今はそれをあれこれと考えていい時間ではない。

「さて、と。お話はこれくらいにして、行きますか」

「……そうね。じゃあ、うりゃっ」

加速世界の30分が現実世界の1.8秒に過ぎなくても、現実世界で30分を加速世界で流れる時間に換算して考えていいわけではな

い。

たとえ加速世界で何千、何万年の時を過ごしたとしても、現実世界でテルヨシ達が生きられる時間は80年程度。

時という感覚が麻痺してしまうバーストリンカーが忘れてはいけないのは、現実世界で過ごす時間。

だからテルヨシもサアヤもそこら辺での切り替えはちゃんとしていて、いざそうなったらサアヤも彼女モードに切り替わったのか、移動を始める前にテルヨシの腕に自分の腕を絡めてその腕を引っ張るようにして歩き出し、それに釣られる形で新宿を目指して歩き始めた。

「んー、よし。ここにしましようか」

「これはテンション上がるわー。期待してますぜ姐御」

「そのノリはなんなのよ」

バトロワ祭りもあるのでチンタラ店選びもしてられないと、新宿の大型デパートにやって来てすぐに案内板を見て目ぼしい店を決めたサアヤは、テルヨシの意見はちよつと無視してここでいいだろみたいな意見を押し付けてくる。

それでもテルヨシ的にはこの場であれこれ悩まずに即決できるサアヤのテキパキとした性格は好きだし、元々サアヤの買い物に同伴しているようなものなので、今回はテルヨシが行きたい場所なんて優先されるべきではないのだ。

そうしてやってきたのは、これからシーズンを迎える水着の専門店。ちなみに女性用限定。

店としての売れ時はもう少し先になるのだが、品揃え的には6月の後半だからと侮ることもなく、すでに新作やらもたくさん出てきているのだ。

それをわかった上で来たのかは不明ながら、わざわざ自分を連れて来たからには試着も期待してしまってるテルヨシも、周囲の色とりどりの水着を見ながら徐々にテンションが上がる。

こういった店は男が敬遠してされてで入れない不具合がよく起るところだが、生憎とそうしたことでは恥じらいを覚えるような性格を

してないテルヨシには無縁の話。

他にお客もちらほらといて、中には試着をしている人もいたが、彼女持ちはそれをチラ見する特権を持つ……

「はい鼻の下伸ばさない」

「ごめんなさい」

……わけもなく、テルヨシの視線に敏感なサアヤは「他の客に迷惑をかけたら店から出る」と釘を刺して、それに了承したのを確認してから楽しそうに水着選びを開始。

こうなると試着室のある方向を見るだけでもサアヤのお怒りを買ってしまうので、視線を楽しそうにサアヤにロックオンしつつ、その視界の中に映り込む女性客の様子を見る程度でしか楽しめそうになかった。

だがそれも些細なこと、すぐにテルヨシを巻き込んで水着の良し悪しを尋ねるサアヤの一喜一憂を眺めることが楽しくなって、それに付き合っていたら周りなどどうでもよくなっていた。

「じゃあこれとこれとこれが最終候補ね」

30分ほどあれこれと悩んで、テルヨシの意見も一応は参考にしたサアヤが、最終的に3つにまで絞った水着。

1つ目はパレオ付きのちよつと大人びた白基調のハイビスカス柄ビキニ。これを着て海に出られたら高校生くらいならナンパしてきそう。

2つ目は泳ぐ用と言うよりは魅せる用といった感じの黒ビキニで、首の後ろと左右の腰で紐を結ぶこれもちよつと大人な水着。泳いだら流される典型かもしれない。

最後はショートパンツ付きの花柄ビキニで、これは他の2つと比べて年齢相応のおとなしいデザイン。活発なサアヤに対してギャップ萌えである。

どれも甲乙つけがたい水着だが、やはり男としては服の上から重ねる程度の着た気になる試着では物足りないと思うのは当然で、その辺を口にしようとしたのだが、それよりも先にテルヨシの表情を読んで頬を少し赤くしたサアヤは、

「わ、わかってるわよ。アンタを連れてきたんだから、ちや、ちやんと試着するわよ……もう」

めちやくちや恥ずかしがりながらも試着をしようの姿に何だかいけないお願いをしてみましたような錯覚を覚えてしまう。

実際には健全なやり取りのはずなのだが、サアヤの恥じらいがなんか無駄にエロいせいで変な空気になってしまった。

その空気をいち早く察知してくれたのが、こちらの様子をチラチラとうかがっていた店員さんで、試着と聞いて飛んできてサアヤをグイグイと試着室へと押し込んでくれ、それについてテルヨシも試着室の近くに備えられたベンチに座ってサアヤが出てくるのを待つ。

その間はサアヤの監視の目がないので、テルヨシ的には好機となるのだが、サアヤの尻に敷かれていたのを見抜いた店員さんがチクリするような雰囲気で見えてくるので下手に視線を動かさずにいた。

こういうことに敏感だから危機回避能力もそれなりと自負してるテルヨシだったが、ここで予期せぬ事態が発生。

おそらくは高校生であろう3人組のグループが試着室から水着を着て出てきて、最初こそ3人であれこれ言い合っていたが、ふと。本当に偶然に近いものでテルヨシと目が合って、バイトの経験から『話しかけやすい空気』みたいなものを無意識に醸し出していたテルヨシが捕まる。

話としては単純明快で、水着の見映えはどうであるか男目線からの意見で欲しいといったもの。

サアヤの目を盗んで他の女の子と仲良くお話は大変に修羅場になるのはわかっていた。

それでも女の子のお願いを余程のことがなければ断れないテルヨシは、やるからには超真面目に3人の水着の評価をしてあげる。

3人も年下っぽい雰囲気を感じて参考程度と思っていたのか、始めは笑いながら聞いていたのだが、かなりガチな意見がきて、最後の方には心理学もちよつと混ぜた男の視線の動きなどを講義されて、店員さんもなんか聞き入っていたりとなっていた。

「何してんのよ、アンタは」

そんな不思議な空間が出来ていたおかげで、奇跡的に修羅場な展開になることなく、試着を終えたサアヤが出てきて呆れてしまったが、サアヤが彼女とわかった3人組はそのサアヤに近寄ってテルヨシは見る目があるのかなんとか言って褒めると、まんざらではなかったのか彼氏を誉められたサアヤは照れてしまう。

そこからはまあ流れるにみんなの前でサアヤの水着の評価をさせられたわけだが、外野からは彼女鼻肩だの補正が入ってるだのと言われる始末となつて、最終的に仲良くなつた3人組とサアヤが店員さんまで巻き込んでキヤツキヤとはしゃいでしまい、テルヨシは完全に蚊帳の外。

「ごめんってば。そんな不貞腐れないですよ」

「ふーんだ」

結果的に「水着は着るタイミングになつてから初披露する方が盛り上がる」とか正論っぽいことを言われたサアヤがテルヨシを店外に追い出して水着を買つてしまい、どんな水着を買つたのかを知らないことよりも、除け者にされたことで不貞腐れていた。

その辺がまだまだ子供だという証拠なのだろうが、適当なカフェに入つてそこで謝るサアヤもさすがにいつまでも不貞腐れるテルヨシが面倒になつてきたのか、逆に怒りそうな雰囲気に変わりかけた。

その変化にそつちの方が面倒臭いと直感したテルヨシは、このカフェにあったカップル限定メニューとやらを一緒に食べてくれたら許すと切り出して事なきを得た。

「おっと。あんまりゆつくりしてたから時間がないね」

「うえ、もうそんな時間か。今日のスターターはイーターに任せてももう少しいるって手もあるんだけど……」

機嫌を直してからはカップルらしく仲良く限定メニューとやらを食べてまったりとしていたが、ニューロリンカーが表示する時刻が午後3時半になりそうといった頃になつていて、すぐ隣の中野とはいえ移動をしないやならないとあつて席を立つ2人。

出口を目指して歩く中でサアヤがグローバル接続の準備をしながらにそんな提案もしてくれたが、会議であれだけカツコつけておいて

参加してないとか恥ずかしすぎるのでやんわりと却下して移動を続行。

なんとか中野第2戦域には時間までに間に合いそうと安堵したところで、まだ継続中のデートの次の行き先についてを話しておく。

「それについてはアンタの約束もあるし、中野の行きつけの店に行こうと思ってるわ。どうせならマリアも呼んでいいしね」

「いいの？ それじゃデートにならなくなっちゃうかもよ？」

「いいわよ。なんか凄い彼女面した気がするし、あんまり一気に色々消化しちゃうのも勿体ないから。だから今日はこのくらいにしとく」

「じゃあ次のデートではキスくらいしちゃいます？」

「アンタがそんな空気を作れたら、心の準備くらいはしておくわよ」「オレ次第なのね……了解であります」

ほとんど抵抗のないデートだったからなのか、割と満腹気味だったサアヤはこれ以上の特別なことはいらないと身を引いてしまい、サアヤがそれでいいならとテルヨシも引き下がったが、ここで押すべきだったのかもと思いつつ、サアヤの言うようにあれこれやり過ぎても勿体ないかと納得してマリアへと連絡。

サアヤが教えてくれた店の所在をメールに添付して来るようにとメッセージを残してから中野第2戦域へと到着。

少しだけ移動してニューロリンカーをグローバル接続したテルヨシとサアヤは、メニューから操作してバトロワ参加をONにしたが、今日のサアヤはデートの余韻に浸りたかったのか、ギャラリーへと回る宣言により不参加となった。

——感覚が研ぎ澄まされていく。

それは決して虚実などではなく、頭の前から足の指までにしっかりとした感覚が馴染むような心地よいもの。

定刻通りにバトロワ祭りへとみんなを誘ったテルヨシは、降り立った《鉄鋼》ステージの発する大量の音から、バーストリンカーが発する足音などだけを聞き取って周囲の状況を大雑把に把握。

次いで視界上の表示に目を向けて、そこに把握した人数+αがいる

ことを確認してからようやく意識を戦闘モードに移行。

「最近の戦績も落ちてるし、今日は結構狙われるかもね」

そこから動き出そうとしたテルヨシに呑気に声をかけたのは、ギャラリーとして入ったサアヤ。

攻撃する能力も意志も持たないサアヤからの言葉なので、テルヨシも過度な反応はしてみせなかったが、言われたことに関しては自覚があったので集中力をより高める。

考えてみればフーコとの対戦以降の自分の成績がいまいちパツとしないことをバトロワ祭りの前に思い返し、だからこそうして開始早々から全力で生き残るために極限集中モードを即座に使っていたりと、結構なりふり構わずな感じになっていた。

サアヤも開始からやる気に満ちてるテルヨシの肩の力を抜くために言葉をかけてくれたのだろうが、今回ばかりは逆効果となったような。

——ひゅんっ。

フィールドが派手に音を鳴らす特性を持つせいで、いつも以上に音の選別が必要な中で、さつそく不吉な風切り音が急接近してきて、迫るものを確認するより早く回避に動いたテルヨシは、直後に自分のいた地点にミサイルが着弾したのを発生した爆炎と爆風で理解する。

その発生した爆発のせいで周囲から音を拾えなくなる問題が起き、仕方なく視野を全開にして周囲を警戒しながら、爆発の音に紛れて身を隠し、再び近くで発生する物音に耳を傾けつつ、このフィールドでどう立ち回るかを考える。

鉄鋼ステージはとにかく金属の地面、床のせいで移動するだけで音が鳴り、ある種の近接殺しなステージ属性を持ち合せている。

どうしたって接近には音を引き連れてしまうし、バックアタックなど余程のバカでなければ受ける可能性など皆無。

対して遠距離攻撃は視界さえ確保できれば移動はあまり必要なく、他の音に紛れて攻撃すれば発射音などで特定もされにくい。

とりわけ参加者のひしめくバトルロイヤル序盤では様々な音が鳴り響くおかげで、慎重に立ち回れば俄然有利になるのは間違いない。

とにかく音が重要なこのステージでバカみたいに逃げ回っても「ここにいるぜハイハイ！」みたいなことを言うに等しいため、持ち前の機動力を活かすには工夫が必要。

それが十二分にわかっているテルヨシは、最小の動作で物音を抑えながら路地裏へと侵入し、建物オブジェクトとの間に無数に配管されている金属管に目を向ける。

その中でかなり太く重そうな金属管を選別したテルヨシは、その金属管の両端を蹴り砕いて取り外すと《テイル・ウィップ》で持ち上げて、自慢の足でそれをほぼ真上に蹴り上げる。

その際にかんりの縦回転を加えたので、空中に放り出された金属管はグルグルと回転しながら頂点へと達して、すぐに落下を開始してテルヨシのいた地点より少しズレて落ちてくる。

その間に一変して音を気にしない速度重視の移動に切り替えたテルヨシは、今の蹴り上げで注目を集めただろうことを確信しつつ、落下する金属管の方向を再確認して一気に建物オブジェクトの屋上へと躍り出る。

——ガガガアアアアアン!!

それとほぼ同時に落下した金属管が他の金属管に当たって、激しい音が周囲の音をかき消してしまう。

さらに連鎖的に金属管が外れたりとあつて音はかなり長く響いて、その音が何なのかを理解していないテルヨシ以外のバーストリンカーは、音に対して敏感にならざるを得ないこのステージにおいて必然として注目してしまい、ほとんどのバーストリンカーは反射的にその音の発生源から身を隠そうと動いてしまう。

テルヨシだってあまりに派手な音が響けばそうしてしまうだろうし、だからこそこうした策も取れたわけだ。

その心理がわかっていれば、コロコロと表示を変えるガイドカーソルも味方して、音の発生源から身を隠す動作をしたバーストリンカーを見つけてるのは割と容易く、さらに金属管の衝突音がカモフラージュとなつて接近も本当に直前まで気づかれることなく攻撃は成功。

数いる中の1人とはいえ、どうにか倒すことができ安堵するところ

ろだが、そこを狙い撃つ相手もいることからすぐに移動して音の比較
的少ない場所へと逃げ込み小休憩。

まだまだ乱戦模様のフィールドは油断ならないが、表示されてる相
手は今のところ一人でガイドカーソルも安定している。

が、その相手がこのフィールドであろうと関係なしにうるさそうな
やつでちよつとゲンナリしてしまう。

「ハイハイハイハイー!!」

相手も表示されたのがテルヨシだったからなのか、まさに正々堂々
といった雰囲気でガイドカーソルに従って直進してきたらしく、黙視
で確認できる距離にまで近づいてくると、案の定で元氣すぎるそのバ
カっぽさをアピールしてきて困る。

「……………うるせえな、ステイングよお」

「テイルの兄貴い！ 今日漢と漢の勝負ってやつにチャレンジだぜ
イエーイ!!」

その相手《パンジー・ステイング》が好戦的ではあっても、格上で
あるテルヨシに自ら迷いなく接近してきたことには少なからず違和
感があったので、その辺を語ってもらおうと仕方なく出ていくと、
あっさり目的を述べてくれて苦笑。

しかし漢と漢の勝負とはなんぞや？ といった疑問も浮かぶので、
まだ喋るんだろうといった雰囲気促してやると、やはりウザい声量
でどういふことを話す。

「これはイーターから聞いたトークなんだけだよお！ テイルの兄
貴ってガスト姉さんとマジラブってるってリアリー？」

「……………それ関係あんの？」

そこから繰り出された話はあまりに予想外のリアルでのことで、ど
ういった理由でそんなことを聞くのかと思考してしまったのだが、思
考が戦闘モードに寄っていたために面倒臭くて尋ね返してしまう。

「大有りリアリーだぜオイエー！ 実はっつーかそのよお……………ガスト
姉さんがその……………俺のファーストラブの相手だったんだよお！」

Acceleration Second 19

ISSキットの不安がある中でもいつも通りに行われたバトロワ祭りは、その不安があろうと今日も盛況のようで、開始から10分ほどが経った今も他のフィールドよりも音が響く《鉄鋼》ステージの至るところから、激しい戦闘音が聞こえてくる。

その戦闘音を避けるように立ち回ってきたテルヨシも未だ集中力を保ったまま、死角の多い場所にいたのだが、それでもガイドカーソルとバトルロイヤルの仕様によつて最低でも1人には捕捉されてしまうので、その相手が見えるところに姿を現してくれたのは僥倖（うまゆび）と言えた。

「……ファーストラブ……珍しく合ってる英語だ」

「そこは今はどうでもいいんすよ！」

その相手《パンジー・ステイング》が現れて早々に真つ向勝負を挑んできたので、その唐突なガチンコの理由についてを聞けば、何故かサアヤとのリアルでの仲を聞かれ、《親》が《アイス・イーター》であることからリアルでもサアヤと知り合いらしいステイングは、どうやらそのサアヤに片想いをしていたようだった。

人を好きになるのは自由なのでテルヨシもとやかく言う権利はないが、その相手が彼女のサアヤなら、たとえ泣かせることになっても諦めてもらうしかないのが悲しい運命。

「テイルの兄貴がスーパーストロングでナイスガイなことはベリーノウですけど、それでもアタックもできなかった俺のこのヒートなソウルをどうすりゃいいかアングスタねんす！」

……アングスタねんすってなんやねん。

というかそんなに熱い想いをサアヤに抱いていたなら、アタックくらいしておくとマジで思うが、直前に自分を認める発言をしてくれたのでその辺はツッコまないでやりつつ、割とキャンキャン吠えるステイングの声は物凄い反響して悪目立ちしていた。

なのでとりあえず話は聞きつつも、周囲への警戒レベルを上げていると、まだキャンキャン吠えてたステイングがようやく臨戦態勢に

なった。が、

「そんなわけでこれは俺の八つ当たりも含まれてるんですけど、俺のヒートなソウルもキャッチしてくれたらそれがいんじゃないや……ギヤツ!!」

そりやもう堂々と視界良好な場所にいたせいで、他のバーストリンカーから容赦なく遠距離攻撃で叩かれてしまい、この辺は本当にバカな部類だなあと思いつつ、爆炎から抜けてきたステイングの接近にテルヨシも構えてみせる。

「つてなわけでゴー・フォー・ブロークンツ!!」

「それはホーンの専売特許だがな」

ステイングはバカだが、バカなりにサアヤへの気持ちを諦めようとして、自分の気持ちも背負って真面目に付き合っつてほしいってことを言わんとするのはわかった。

それはやろうと思ってもなかなか出来ないし、未練たらたらで引き摺り続ける人も少なくないデリケートな問題だ。

——バカではあつてもお前は男だよ、ステイング——

その生き様は同じ男として不覚にもカッコ良いと思ったし、その心意気を買わないわけにはいかないので、テルヨシもどんどこいな気持ちでいた。

「ちよちよちよちよつ?! 何でエスケるんですか!?!」

しかしながら今はまだバトロワ祭りの序盤の乱戦時。

参加者が多数ひしめく今では、そのステイングの心意気を汲める存在がテルヨシのみだと、本人達が望む望まないに関係なく他の参加者からの攻撃の横槍は免れない。

そこを「空気読めよバカ野郎!」なんて言おうものなら「はっ? 知るかよバカ野郎!」と言われるのがオチ。こっちの事情などお構いなしなフィールドなのだから当然だ。

だからこそテルヨシはその真っ向勝負とやらをするのは今ではないと示すようにステイングから逃走をしてみせたのだ。

しかしおバカなステイングはそんなこともわからずに必死に追いかけてきて、的確に死角への移動をこなしているテルヨシとは違い、

とにかく最短ルートで走るステイングは移動中でもどつかんばつらん他のバーストリンカーからの攻撃を受けてしまい、そのHPゲージはどんどん減少していく。

これでは真っ向勝負の前にさようならしそうなおバカさんのイノシシっぷりは誰譲りなのか考えたくもないが、退場されても困るので一か八か。《インパクト・ジャンプ》での長距離ジャンプでステイングとの交戦距離から抜けて、ガイドカーソルとゲージ表示からも逃げてしまおうとする。

「インパクト・ジャンプ！」

本来の使い方をすれば40mほどは一気に跳べるインパクト・ジャンプで消えるように近くの建物オブジェクトの屋上に跳んだテルヨシは、華麗に着地を決めてから視界上の表示からステイングの名前が消えたのを確認しつつ、まだ捉えられる視界の中にいたステイングを見ると、見失ったからか相当に悔しがりながらもさすがに残りのHPゲージを守るために隠れていたのも確認。

すぐに下りるとまたステイングとの交戦距離に入ってしまう可能性が高いので、遠距離攻撃が出来ないのに高所にいるのはあまり得策ではないが、仕方なしに逃げる算段だけは立てて周囲の状況を観察。

各所から絶え間なかった戦闘音もいくらか落ち着いてきて、視界の表示も切り替わりが頻繁ではなくなってきたことから、もうすぐ乱戦から局地戦に移行する頃かとおおよその推測が立つ。

そうなればステイングとの真っ向勝負も短い時間ではあるができなくもないので、戦闘音のしない場所を見定めてから、ステイングが消えていった方向へと飛び下りて再びステイングを視界上に表示させる。

そうなればステイングもまたイノシシのようにテルヨシを追ってくるので、他のバーストリンカーがいなさそうな場所へと上手く誘導してどうにかこうにかタイマンできる状況を作り出すことに成功。

……だがそもそも、ただでさえ神経をすり減らすバトロワ祭りで、さらに神経を使う『特定のプレイヤーを死なないように誘導する』なんてことをしなきゃならないのかと疑問に思ってしまった、そんな思惑

も知らないで目の前でやる気満々のステイニングを見たら、なんか理不尽な怒りが込み上げてきてしまう。

——よし、倒そう。完膚なきまでに。

何やら戦う意識のベクトルがステイニングとは違ってしまったテルヨシだが、戦うことには変わりはないので、ようやくやる気になったのがダイレクトに伝わったからか、珍しく仕掛けることに躊躇いが見えたステイニング。

以前までは無鉄砲でがむしやりに仕掛けてきた印象だったが、ようやく敵との戦力差を感覚的にわかるようになったようになり、成長が見られたが、仕掛けてきたのはステイニングの方なのも事実なので、ブンブんと顔を振って臆した自分を奮い立たせて仕掛けに来ようと足に力を込めた。

——ピコンツ。

まさに戦闘開始といった絶妙なタイミング。

集中力を高めた瞬間に訪れた視界上の新たなプレイヤーの表示は、否が応でも反応せずにはいられなかった2人ともがその足を止めて、両者と同じくらいの距離に姿を現したプレイヤーに目を向ける。

「ようやく会えました。スターターだからいるのはわかっても、会えるかどうかは運が絡むので」

とても爽やかで礼儀も知っていそうなM型デュエルアバターは、その視線を明らかにテルヨシへと向けた状態で嬉しそうに話しかけてきて、初めて見るその相手にテルヨシもちよっと困惑。それと同時に衝撃も受ける。

視界上の表示からわかる相手の名前は《Wolf ram Cerberusウルフラム・サーベラス》という聞き慣れないもので、英語圏にいたテルヨシでも聞かない単語からは能力や色の特性は判別できなかったが、驚きなのはそのレベル。すでに局地戦に移行しているこのフィールドを生き延びるためには、いくらかの被弾は覚悟しなければならないが、表示されているサーベラスのHPゲージはまだ9割は残して輝いている。

テルヨシも同じくらいの被弾には出来ているが、レベル8であるテルヨシが至っている最小のダメージ量と同様のダメージ量に抑える

サーベラスのレベルは、1。

最初期のレベル。聞かない名前からも新人である可能性が限りなく高いサーベラスの出現は、かつてバトロワ祭りを初めて開催した時に遭遇した《アクア・カレント》を彷彿とさせる強者感が……

後から聞いた話では、カレントは《四神》の1体である《セイリユウ》から《レベルドレイン》という特殊な技を受けたことよってレベルがダウンしてしまった経緯があり、レベル以上の実力を持っていることは納得している部分がある。

が、目の前のサーベラスはそのカレントとは違って、おそらく何の経緯もなく、完全なる新人である気配がしていて、それがほぼ被弾なしで目の前にいることの衝撃はカレント以上のものがある。

「オレを探してた？ 今日には男にモテる日なのかね……」

そのサーベラスが自分を探してフィールドを駆けていたのが疑問だが、カタフも数えて本日3人目のご指名にはさすがのテルヨシもちよつとどうしたのかと謎のモテ期の到来に困惑。

男にモテてもなあ、とかマジで思いながらもサーベラスのデュエルアバターを観察するテルヨシは、それでもサーベラスがどういったデュエルアバターかがいまいちわからない。

色としては艶のない灰色で、四肢には目立つ突起などもなく、強化外装も見当たらない。

体も細身で小柄。犬科動物的なフェイスマスクは、上下の牙をモチーフにしたギザギザのヘルメットの間から黒ずんだゴーグルレンズが覗く形。

取り上げるのがそれだけなくらいには特徴といった特徴が少ないサーベラスだが、あれでここまで生き残った新人ならば、当然ながらそれを裏付ける能力か実力はあるものと仮定して、探していたからにはスティング同様に戦う意思があるのだろうとそこら辺を聞いただそうとする。

「あなたの噂は聞き及んでいます。その噂のテイルさんは僕が戦った方の1人でもありましたので、本日はそのためにお祭りに参加しました！」

が、それより早くテンションが上がっていたサーベラスが礼儀正しくも挑戦的な参加理由を述べてくれて、わざわざテルヨシに挑むだけに参加したという事実には呆れ半分、驚き半分。

「そうした理由なので、実際にお会いできた手前、身勝手ではありませんがこれからあなたに挑ませてもらうおうと……」

「ちよつと待ツチングー！」

完全にテルヨシだけしか見ていなかったサーベラスが、そのテンションのままテルヨシに挑もうとしたところで、忘れ去られていたステイングがツツコミのように割り込みをかけてきて、本当に視界に入ってなかったのかビックリした雰囲気の手前は、割り込んできたステイングに初めて視線を向ける。

「粹がる新人は俺も嫌いじゃねーが、生憎とテイルさんと先にバトるのは俺。割り込みはノーサンキューだぜ！」

「……これは失礼しました。何やら因縁があるようですが、それでも僕もテイルさんとの対戦を譲りたくはありません」

「ほう。つーことはテイルさんとバトる前にやることは決まったな。わりいけど俺はこの腕のせいでジャンケンなんてピースな方法で決められないぜ？」

「構いません。男同士が譲れない戦いなら、この拳で決めましょう」

……オレ、待たなきやいけない空気だよねえ。

バトルロイヤルだということを感じ知らされた先週の出来事を思い出しつつも、なんか盛り上がる2人を見たらサアヤのように割り込む気にはなれなかったので、仕方なく勝者と戦う流れに身を任せて地面に座り込んだテルヨシ。

その間にも他のバーストリンカーから狙われる可能性もあったので周囲への警戒は怠らないが、情報として自分のことを知ってる節があったサーベラスが手の内を見せてくれるならありがたいとばかりに観察に入ったテルヨシの視線に気づいたのか、ステイング相手に徒手空拳で構えながらもこっちにも警戒するような気配を醸し出す。

それが油断にならない方がいいがな。

そう思いながらレベルの上では完璧に格上なステイングが先制す

るようにサーベラスへと仕掛けていき、自慢の槍のような腕を伸ばして鋭い突きを放つ。

これに対してサーベラスは慌てることなく見事な捌きで突きの狙いを外して空振りさせ、ステイングの外側へと流れるように移動してカウンターの気味に手刀を空いていた脇腹へと叩き込む。

鮮やかな一撃にテルヨシも感心してしまうが、一撃としては軽いためステイングが怯むはずもないと確信しつつ、すぐに向きを変えて至近距離からの右腕の突きを放つものの、サーベラスは当たるのは覚悟してその突きを左肩の装甲の絶妙な角度で受けて滑らせ、ダメージを最小に抑えると、今度は突き抜けたその腕を真上から手刀が襲い、鈍い衝突音と共にステイングの右腕に浅いヒビが入る。

「ぐっ、らああ!!」

あの腕が折られるとステイングは攻撃力のほとんどを奪われてしまうので、一旦サーベラスを引き離すように蹴りなども交えて連打を浴びせて距離を取る。

しかしそれはレベル4がレベル1にするような逃げの一手ではない。

明らかに格上を相手にして切羽詰まった側が無理矢理にでもやる足掻きにも近い行動。

つまり今の攻防はそれだけステイングが押されていた何よりの証拠。

「なん、なんだテメーはー」

「どこにでもいる対戦を楽しむ1人のバーストリンカーですよ。なったのはここ最近のことですがね」

ステイングがナメてかかった節は見られなかったが、直接戦って出てきたステイングの疑問は、やはりサーベラスが新人にあるまじき実力を秘めていることを裏付けており、経験値は決して多くはないはずなのに動きの無駄のなさが際立っていて、テルヨシもちよつとちあきに似た将来性の高さに戦慄。

その危険性を肌で感じたステイングは、テルヨシとの対戦まで温存しようとしていた必殺技ゲージを使うことも厭わない様子で構え直

して、突撃の構えから一気に距離を詰めて両腕を引き絞って必殺技発声。

「《ラツシュ・ニードル》!!」

そこから繰り出される両腕の目にも止まらない突きの連打は、おそらく今のテルヨシでも全弾を捌くなんて芸当は不可能。

突きのくせに面での制圧をしてくるあの必殺技は空間を抉る威力があるので、如何なサーベラスでも全力回避はせざるを得ないだろう。

そう思ったテルヨシだったが、ステイングの必殺技が放たれる直前。当のサーベラスは回避に動く気配すら見せないまま、その場で踏ん張り受けて立つように構えたのだ。

まさかの受けに回ったサーベラスは無謀にも思えたが、直後にフェイスマスクの上下の牙がガツチリと噛み合うように閉じたのを見たテルヨシは、その変化がもたらした結果に驚愕する。

「ぐっ……あああああ!!」

痛みに耐えられずに叫んだのは……必殺技を放ったステイングの方。

ステイングの連続突きは確かに動かぬサーベラスに連続で命中し、激しい衝突音が響いたのだが、必殺技を終えて動きを止めたステイングの両腕の槍は、その時にはすでに肘の辺りから先を消失していた。

「か、硬すぎだろうがクソ……」

ステイングの必殺技を真っ向から退けるほどの防御力。

そのあまりの性能に思考停止気味だったステイングは、距離を取るのも忘れていた隙を突かれて反撃の一撃をクリーンヒットさせられ、元々がかなりの被弾率だったせいでHPゲージはそれで全損。

バトルロイヤルでのこととはいえ、レベルが3つも上のステイングに勝ってしまったサーベラスの実力は、疑う余地もなく本物。

「これで心置きなくあなたと戦えます」

競合するステイングを倒してフェイスマスクを元に戻したサーベラスは、そのジャイアントキリングをなんとも思っていないのか、訪れたテルヨシとの戦いに心を踊らせて構えてみせる。

インターバルもなしにさらなる格上相手に物怖じしないその度胸はもはや恐怖すら覚えるが、テルヨシとて強敵相手の対戦は恐怖よりも楽しみが上回る。

サーベラスに倣って新人であるという意識を排除し構えたテルヨシは、サーベラス以外の名前がまだ視界上にないのも確認してから、ほぼ意識をサーベラスへと集中して突貫。

先ほどのステイングとの戦いでわかったことは、レベル差を考慮しても被弾時のサーベラスのHPゲージの減りが明らかに少ないこと。

そしてステイングの言葉からサーベラスはレベルに見合わない高い防御力を有しているのは確実。

それを考慮して迎撃に構えたサーベラスへのテルヨシの初撃は、ほぼ全力の中段回し蹴り。

まずはその硬さとやらを直に感じるべきと判断しての一撃だったのだが、単発ゆえのミス。

そんな攻撃は受けるまでもないといった感じでその場に深くしゃがみこんで蹴りを搔い潜ったサーベラスは、流れるように回転回し蹴りで片足立ちのテルヨシの足を払い転倒を狙ってくる。

「いいの？」

テルヨシの舐めプのようにサーベラスには見えたかもしれない攻撃。

しかし意地の悪いテルヨシはそうやって『対処が容易な単発技』を繰り出すことでサーベラスの行動を誘導し、予想の範疇の動きをしたサーベラスに対して思わず声を漏らす。

サーベラスの鋭い蹴りは軸足となっていたテルヨシの足を綺麗に払う……より早く《テイル・ウィップ》を軸にし直したテルヨシが軸足だった足をも持ち上げて蹴りを躲して空振りさせると、浮き上がった体からぐわんっ！

回し蹴りを放ってフォロースルーに入ろうとしていた足を体の回転を利用して加速させて縦回転に変え、ほぼサーベラスの真上から撃ち下ろす変則蹴りを放ってみせた。

「うぐっ……い！」

タイミングとしてはカウンターも回避も防御すらシビアなものはあったが、直前に声をかけてしまったからか両腕による必死のクロスガードを頭上に掲げて強烈な一撃を防御。

ガードを挟んだとはいえ、レベル8がレベル1に与えるダメージは予想よりもずっと大きく、如何なサーベラスといえど体勢もままならない状態で受けたせいですぐに地面へと沈んで四つん這いのようになってしまい、その目の前で着地を決めたテルヨシは、容赦なしに再び軸回転からの下段回し蹴りでサーベラスを蹴り飛ばしてやる。

——ガガガンツ！

普通のレベル1デュエルアバターならば、これだけでHPゲージの全てが吹き飛ぶだけの威力を持つ連撃だったが、サーベラスは驚異的な防御力と反応速度でこれらの直撃を全て避け、蹴り飛ばされる直前にもしつかりと腕をガードに回してクリーンヒットを避けてきた。

威力を殺すまでは不十分で地面を何度か転がってリカバリーしてきたサーベラスは、そこで残りのHPゲージを2割ほどにしながらも、まだまだ戦えるといった意思を込めて構えてみせる。

「凄い……凄いですねティルさんは。あんなに変則的にかつ滑らかな攻撃。予測するのも難しいです」

「いや、お前もさすがだよ。レベル1でこれは正直、今後が怖すぎる」
一方的な攻防ではあったものの、さらにテンションが上がったサーベラスが興奮気味にテルヨシを称賛してくるが、そんなことをする余裕がまだあるサーベラスに背筋が凍るような恐怖を覚えつつ、視界上の自分のHPゲージを見て、数ドットとはいえ『攻撃したはずが減っていた』事実苦笑いしてしまい、同時に撃ち込んだ感触からあることを確信する。

——あいつは、メタルカラーだ。

Acceleration Second 20

テルヨシの見える範囲でISSキットの脅威は今のところないバトロワ祭りも、序盤の大乱戦を終えて参加者の半分以上が脱落した中盤。

各地で勝ち残ったバーストリンカーが次の相手を求めて少人数で戦う局地戦へと移行しただろうタイミング。

テルヨシも例に漏れず1人のバーストリンカーとの戦いに身を投じていたが、初めて戦うレベル1の《ウルフラム・サーベラス》の驚異的な実力に戦慄していた。

「ウルフラムってのが何かよくわからなかったが、メタルカラーなのか」

そのサーベラスとの攻防ではレベル差も相まって完全に勝ち越してはいたのだが、想像以上の反応速度と防御力で未だに目の前にいることがそもそも凄い。

さらにほぼ一方的な攻撃を加えたはずのテルヨシが、サーベラスの装甲に多少ではあっても『反動ダメージ』判定を受けてそのHPゲージを減らしたのは、それだけサーベラスの装甲が硬いことを意味している。

そして数多くの対戦を経験したからこそわかる衝突の際の感触。

サーベラスの装甲は通常のカラーサークルにおいて硬いとされる緑系統のそれとは違う硬質さがあって、テルヨシが今までにこれと限りなく近いと思った感触は《アイアン・パウンド》を殴った時のそれだ。

「英語での名前は浸透率が良くないですからね。僕も初めは戸惑って検索しました。テイルさんにもこう言えばわかると思います。僕のデュエルアバターは、スウェーデン語名やギリシア語名を用いるところ読みます。《タングステン・ケルベロス》」

そうしてテルヨシがサーベラスの色に関する部分の正体を見破ったことに敬意でも称したのか、意気揚々と自分のデュエルアバター名を言い換えてくれたサーベラス。

テルヨシもそうやって言い換えられれば通りが良くなって納得し、同時にタングステンの特徴についてもなんとなく思い浮かべる。

博識でもないので詳しくは調べ直しになるだろうが、戦車の装甲や切削ドリルなどに用いられたりしているはずなので、その身で体験したように超硬度と呼べるほどには硬い金属。

加えて下の名前のサーベラス。ケルベロスもよく聞く名前前で、神話などで3つ首の番犬として出てくる空想上の生き物。

いったいどの辺がケルベロス要素を持つのかは不明だが、アビリティなどに関係するなら少なくとも3種類はありと考えて良さそうなので、そこは注意しておこうと記憶の片隅に置いておく。

「タングステンか。こりやダイヤモンドでも持つてこないと対抗できないかな」

「冗談を。そのような声色にはとても聞こえませんが」

残りHPゲージは2割程度しかない状況でも礼儀正しさを失ったリ特攻をしてこないサーベラスのレベル1にあるまじき振る舞いには依然として勝ちにきている節が見えて好感が持て、最後の最後まで諦めないガッツは見習うべきところがあるほど。

だからこそテルヨシも油断は一切せずに張り詰めた緊張を解すようなことを言つて適度な緊張感へと戻すと、たとえ一撃でもレベル1からもらつてたまるかと勝負を決めに突貫。

サーベラスの反応速度はハルユキに勝るとも劣らないし、自分のデュエルアバターをかなり理解していることも考慮してレベル8がやるべきではないが、最速からの飛び蹴り、ドロップキック、かかと落としの3つの動作フェイントを混ぜて放つた本命の一撃は、かかと落としをする逆の足による顎を狙った撃ち上げ。

その動作フェイントによって防衛、踏ん張り、ガードを上げるといった動作を誘発させて完全に顎が空いたところへの威力はお察しながらもクリーンヒットのタイミング。

普通なら残りHPゲージを吹き飛ばせるだけの攻撃になるはずだったが、ガードを上げた瞬間に見えたサーベラスのフェイスマスクが、その上下の牙を思わせる部分がガツチリと噛み合つて閉じてし

まっていたのだ。

それを見た瞬間。或いは見るよりも本能的な何かで当たりかけていた顎への一撃をキャンセルして、わずかに手前に引いて爪先が掠める軌道でサーベラスの顎へと命中した攻撃は攻撃力などほとんどなかったが、当たった瞬間に爪先からタンスの角に小指をぶつけたかのような電撃にも似た衝撃が走って思わず後退。

——硬い。

先ほどまでも確かに硬い装甲だったのだが、フェイスマスクが閉じた今の状態の硬さは比べるのも馬鹿げてるほどには硬い。

しかしサーベラスはあの硬さを得るのに必殺技の発声をしなかった。

それでもフェイスマスクが閉じるという目に見える変化をしたことから、あれがサーベラスに備わった何らかのアビリティであることが予想できた。

「……確かめるしか、ないか」

未だに鈍く残る爪先の痺れと、仮にも攻撃を当てながら1ドットも削れなかったサーベラスのHPゲージを見て、あのアビリティの性能とやらが気になったテルヨシは、さつきは本能的に逃げたところを今度は真っ向から撃ち込んでみるために再び全速からの右回し蹴りを叩き込んでみせる。

——ガギイイイイイン！

単調な攻撃だったにも関わらずに避ける動作すらしなかったサーベラスに戦慄する暇もなく撃ち込まれたテルヨシの右足は、サーベラスの下がっていた右腕へとクリーンヒットしたのだが、弾かれたのは攻撃を仕掛けたテルヨシの方。

まるで破壊不可能なオブジェクトに当たったような、無情とも言えるほどの硬さに弾かれてテルヨシのHPゲージがガリツと1割は削れてしまい、そのショックによる硬直の隙を突かれて即座に動いたサーベラスは、鋭い拳を顔面へと叩き込んでガリツとまた1割ほど削ってくる。

この拳もとにかく硬く、理不尽なまでのその硬度は尋常ではないと

逃げるように下がったテルヨシは、サーベラスのフェイスマスクが依然として閉じられているのを確認してそのアビリティの正体をおぼろげに見破る。

「物理攻撃への絶対的な耐性ってところか……」

その証拠に回し蹴りを直撃したにも関わらずサーベラスのHPゲージは1ドットも削れずに未だ2割を残して輝いていて、テルヨシの攻撃が通ってすらいなかったことがわかる。

しかしそれほど性能なら、おそらくサーベラスのポテンシャルのほとんどがあのアビリティに注がれている可能性は高い。

ケルベロスの部分の特性はまだ不明だが、レベル1のデュエルアバターにそこまでのポテンシャルの幅はないはずなので、ケルベロスの部分はまだ弱いのだと仮定し、今は物理耐性アビリティの攻略に思考を使う。

メタルカラーであることから、物理攻撃に対しては鉄壁に近いはずで、おそらく炎熱属性への耐性もそれなりに高いのは融点などからも予測できる。

「だとしたら……」

レディオのような間接攻撃やユニコの主砲による超高熱のレーザーなどはさすがに通るだろうが、そんな攻撃をテルヨシは持ち合わせていないし、今ある武器で最大限の力を振るって戦うのもバーストリンカーの実力。

だが今のテルヨシの攻撃手段は《インフェルノ・ステップ》の炎熱属性を除けば、ほぼ全てが打撃属性。

絶望具合はかつての《アクア・カレント》の完封を思い出させるものの、テルヨシとてあれから約2年を経て、カレントが足りないと言っていた経験値をたつぷりと蓄えたのだ。

そこから導き出されるテルヨシの攻略法が全くないなんてことがあってはならない。

未だに固く閉じられるフェイスマスクのサーベラスは、口まで固くなるのか無言のままに今度は迎撃ではなく自ら果敢に攻め込んで、物理耐性アビリティを発動したままでの攻撃はそのまま攻撃力に

もなるのは間違いない。

壊せない壁が迫ってくるような圧迫感を感じながらテルヨシは、そうした例えを内心でしたところでふと閃き、それを実行しようと迎撃に動く。

超硬のサーベラスは自分の硬さに絶対の自信を持って鋭い拳を放ってきて、これをテイル・ウィップを支えにして体を持ち上げて躲し、突き出されたその拳の上にトンツ、と着地。

依然としてテイル・ウィップに体重をほぼ預けていたので、サーベラスには乗られたという感覚は薄かっただろうが、そこからさらにテイル・ウィップをバネに使って、サーベラスの腕を踏み切り台にして跳躍したテルヨシは、サーベラスを飛び越える月面宙返りを決めながら、テイル・ウィップをサーベラスの顔面を覆うように巻きつけて視界を奪い取り背後に着地。

当然サーベラスも直前の動きからテルヨシが背後にいるのはわかって、見えないながら即座に振り返って回し蹴りを放ってくる。

「《インパクト・ジャンプ》」

その攻撃が放たれるよりも早く必殺技発声をして跳んだテルヨシは、真上へと跳ぶことでサーベラスの回し蹴りを回避しつつ、サーベラスごと40m上空へと到達。

視界を奪われたサーベラスは唐突な浮遊感に疑問を持っただろうが、それも狙っていたテルヨシはジャンプしたタイミングでその体を縦回転させて、ジャンプの到達点に来たところでさらに上空へとテイル・ウィップを豪快に振るう動作を完了させていた。

「どっせええええええい!!」

当然、そのテイル・ウィップに巻きついているサーベラスは、全力で振るつたと同時に解放されればテルヨシよりさらに上へと放り投げられてしまい、60mは到達するだろう高所から自由落下することになる。

しかしサーベラスはそんなテルヨシの期待を裏切って、テイル・ウィップから放り出される前にそのテイル・ウィップを握り締めて振り払われるのを阻止。

もはや戦いに対する本能がずば抜けてるとしか思えないサーベラスの勘の良さは、今日一番の驚きを見せたが、テルヨシもテルヨシでそれすら『可能性の1つ』として頭の片隅に置いていた。

だからこそテルヨシはサーベラスを投げ出したのと同時にテイル・ウィップをアイテムストレージへと戻すという超絶シビアなタイミングを問われる駆け引きを実行して、サーベラスの踏ん張りを阻止。忽然と消えたテイル・ウィップを掴もうとしたサーベラスの手は空を切り、しかし放り投げる力にはしっかりと巻き込まれてさらなる上空へと投げ出されたサーベラスを下から見ながら落下を始めたテルヨシは、ここからさらなるシビアなタイミングに緊張しながら、すぐ迫ってきた鋼鉄の地面とその周辺を観察。

テルヨシの高所落下によるリカバリーを可能にしているのは、言わずもがな頭から伸びるテイル・ウィップだ。

しかしそれを今アイテムストレージへと仕舞ってしまったため、再びそこから取り出して装備するには若干のインターバル。すなわちクールタイムが存在するので、この落下までには間に合わない。

ならばどうやって落下ダメージを回避できるか。

地面までもう10mもない距離からテルヨシは、その体の正面を下に向けて、地面まで2mと来た激突の瞬間。

「インパクト・ジャンプ！」

そこからまたインパクト・ジャンプでの跳躍をする。

アビリティ《インスタント・ステップ》を使ったほぼ直角の跳躍は、90度近い角度でテルヨシを縦から横へと移動させて、ほぼ地面と平行で40mを跳ぶと、その時には自分がどうなってるかも計算して体勢を整えていたテルヨシは、しっかりと両足を地面に向けてズザザザザザアアアアア！

激しい火花を上げながら20mほどを滑るようにして地面へと着地して、ノーダメージとはいかないまでも、足裏がちよっと削れる程度のダメージに抑えて高所からのリカバリーに成功する。

「……ふう。あっつー！」

地面が鋼鉄なこともあつて摩擦熱が凄く、着地の安堵よりも足裏の

熱を逃がすようにピヨピヨするのが優先され、それをやめる頃には遅れて落ちてきたサーベラスが見えてその様子を見ながら落下地点へと走り出す。

驚異的なサーベラスの物理耐性アビリティではあるが、このフィールドにはそれと同様の『破壊不可能』な属性を持つものが存在する。

——ガアアアアアン!!

その破壊不可能な地面と激突すればどうなるか。それはテルヨシにも五分五分ではあったが、おそらくは為す術なく地面に落下したサーベラスは、鐘でも打ちつけたような激突音を上げて沈黙。

距離が離れてしまったことで別のバーストリンカーが視界上に表示されてしまっていたが、落下地点に近づくことでそれは確認できることと構わずに走っていく。

が、その落下地点に到達しても視界上の表示は変わることなく、落下してきたはずのサーベラスの姿もない。

あの高所からの落下からノーダメージだったとしても、多少なりと意識は朦朧としそうなもので移動する時間はなかったはず。

そこから導き出される結論は、サーベラスのHPゲージの全損しかない。

さすがに破壊不可能な地面との衝突ではダメージが通ったサーベラスだが、物理耐性アビリティなんてそれだけで近接殺しすぎるだろうと思いつつ、おそらく物言えぬ幽霊状態になってるであろうサーベラスに健闘を称えて言葉をかけておく。

「お前は強いよサーベラス。これからレベルが上がってポテンシャルが上がれば、オレでも簡単に負けちまうくらいには強い。だけどよ、その次は負けない。そういう気持ちさえありゃ、お前とは良いライバルでいられると思う。またいつでも挑んでこい。オレは来る者は拒まないからな」

これでもうフィールドを出ていたら恥ずかしくて顔を覆いたくなるが、たぶんまだいてくれると信じてそうした言葉で締め、まだ続いているバトロワ祭りへとその意識を再び集中させて、残りの参加者を倒すためにフィールドを駆けていった。

結果として今回のバトロワ祭りは大幅プラスの成果となり、レベル8のプレッシャーにもいくらか慣れた気がしないでもない。

開始からずっとテルヨシについてフィールドを回っていたサアヤも「まあ頑張ったんじゃない？」と〴〵好評をいただき、詳しくは移動してからにしようと思はずはサアヤが鼻屑にしてマリアとも待ち合わせをしている喫茶店へと足を伸ばす。

中野駅の南口から少し南下した先にあった喫茶店『せせらぎ』は、建物自体はかなり新しく外装は焦げ茶色の木目調の洋式建築。建材は木ではないが。

内装は焦げ茶色の木造のテーブルや椅子がいくつもあり、明るすぎない照明が良い感じにそれらを照らして落ち着いた印象を与えてくる。

「マスター、いつもの席は？」

そのちよつと大人な雰囲気も漂う喫茶せせらぎに何のためらいもなく我が物顔で入っていったサアヤに続いて店に入ったテルヨシは、完全なる常連を確信する『いつもの』をあげ髭がダンディーなマスターに尋ねたサアヤに笑みがこぼれる。

今は客足もほとんどなく、マスターも「見ればわかるだろ」とそのいつもの席とやらの方を見て苦笑し、空いてるとわかったサアヤは挨拶ついでにこれもいつものを注文してからテルヨシの手を引いて店の端のテーブル席へと向かい合って腰を下ろす。

「ここは雰囲氣的に私達くらいの歳の子はほとんど来ないから、小声くらいでなら直結なしで話せるわ」

「確かに外装からして大人が好みそうな雰囲気だったけど、ここに入ろうと思ったサアヤのきっかけが気になる」

「店自体が5年くらい前に開店したばかりで、その時にここならくつろぎながら対戦できそうって思ってたね。それから中野で腰を下ろす時は家かここになったのよ。ずっと家からだどリアル割れの可能性も上がるから、カモフラージュでもあったり」

年相応とは言えない大人な雰囲気がいまいち落ち着かないものの、サアヤもその自覚はあったのか、その辺での安全性を口にしてくつろ

ぐ。

この店の常連になった理由もそこにあるようだが、小中学生が頻繁に来るにはお小遣いの無理がありそうと思わなくもない。

そうした疑問を抱きながら改めて店内を観察してみると、今はグローバル接続をしていないのもあるかもしれないが、なんとというか凄くアナログな気配がする。

今やほとんどの飲食店はメニューやら何やらをARに搭載しているし、そういうところは例に漏れずに専用のローカルネットを持っている。

だから入店と同時にネットへの接続申請でも飛んできそうなものだったが、それもなく席に着いているし、メニューもテーブルの脇に実物が置いてある。

「気づいた？ この店、ネット環境なしの完全ローカルなの。宣伝も全然してないし、なんか古臭いから経営も赤字ストレスって感じ」「古臭くて悪かったわね」

自分とは違って落ち着きのないテルヨシをニヤニヤしながら見ているサアヤは、さすがの観察力を持つテルヨシを察して大変に失礼なことを笑顔で言うが、お冷やを出しに来た女性店員さんに丸聞こえでツッコまれてしまっていた。

しかしそれも挨拶代わりなのか、すぐに謝罪から仲良さそうに話を始めたサアヤは、なんだか早く紹介してといった雰囲気的女性店員に急かされて恥じらいながらテルヨシを紹介。

「えつと……これはその……私の、彼氏？ みたいな？ 感じ？」

「何で曖昧な存在にするんすか」

「サアヤちゃんはシャイだからねえ。お名前は？」

「皇照良です。可愛くテル君でいいですよ」

「うっぎ」

30代半ばかなといったくらいの年齢の女性店員は、そうしたサアヤの性格をよく知るほどには付き合いが長そうで、テルヨシのノリにも笑顔で対応してくれる。

その間に自慢の観察眼で見ると、エプロンの胸元に『流川』と

書かれたネームプレートがあり、マスターにも『細川』と書かれたネームプレートがあったことを思い出し、これもまたアナログなもので新鮮さがある。

しかしさすが女性なので、我が子のように思ってたらしいサアヤが彼氏を連れて来店してきたことでテンションが高い流川さん。

小声ではあったがサアヤにキスはしたのかだのと矢継ぎ早に尋ねてはその反応を楽しむ姿は面白く、テルヨシにもニヤニヤと見られて恥ずかしさ全開になったサアヤは、追い返すようにして流川さんを退かしてテルヨシの足をノールックで踏んでくる。

それはさすがに理不尽だという視線をくれてやりつつも、なんだかんだで嬉しそうにするサアヤが可愛かったので許してやりつつ、マリアの到着を待つ間にもう少しこの店についてを教えてもらおう。

「見た感じ、この店はマスターと流川さんだけでやってるんだな」

「元々この店自体が2人の趣味なのよ。マスターが株に詳しくて大損しない限りは安泰らしいし、流川さんも本職は別にあって、隔日で営業してるくらいにはテキトー。だから赤字だろうとあんまり構わないうってわけ。慈善事業みたいなものよ」

「2人のつてことは、マスターと流川さんは結婚してる?」

「子供もいるわよ。ネームプレートが違うのは、単純にどっちも細川だと面倒臭いから、流川さんが旧姓を使ってるの」

なるほどなあ。と思うサアヤの説明に2人の趣味の使い方がリッチな感じで素直に凄いとも思う。

それでも本人達は赤字はやっぱり嫌なのか、サアヤの注文したドリンクと一緒に本音を置いていった流川さんは、宣伝してほしいのかなといった言葉を残していくのだが、サアヤ曰くそうではないのだと言う。

その理由はメニューにあるとサアヤに促されて脇にあつたメニューを取り出して見てみると、何事もない喫茶店らしいドリンクやセットメニューが写真付きで載っているが、なんかメニューの右下の注意タグに「18歳以下の方は一部メニューが半額」と書かれているのが見える。

「ああ……だからサアヤが常連になれたのね」
「ドリンク1杯60円なり！」

Acceleration Second 21

「キヤー！ 何この子！ 可愛いー！」

バトロワ祭りが無事に終了して、サアヤとのデート納めに入ったテルヨシは、そのサアヤの行きつけという中野駅に近い喫茶店『せせらぎ』で腰を落ち着けて、あと1時間もすれば約束していた《シーバ・カタストロフ》との対戦が行われるので、それまでのんびりと雑談していたようとなっていた。

それでデートもほぼ終わりということでも、マリアも呼んで来てもらったわけだが、店の大人な雰囲気にも恐る恐るで来店したマリアは、店を間違えたのではといった顔をしたマスターにビクツツとしながらも、店の中を見回してテルヨシとサアヤを発見。

すぐに走り寄ってサアヤの隣へと座ってみせたのだが、そんな迷いなくサアヤの隣に行かなくてもと思わなくはない。

まあ可愛い彼女と妹的存在が対面に並んで見られるなら眼福なので、不満自体は口から出ることはなかったが、ちよつとにやけたせいか気づいたサアヤに注意されてしまったのだった。

そしてマリアの来店に1番テンションが上がったのが、追加のお冷やを持ってきた流川さんで、マリアを見るなり年甲斐もなくはしゃいでマスターに苦笑されていた。

しかしそれで留まることなく、テンションだけは抑えた流川さんは欲望の赴くままにマリアの隣のわずかなスペースに腰を下ろしてギューツ。

頭を撫でながら熱い抱擁をしてみせ、訳もわからず初対面の店員さんに抱き締められたマリアはどうしていいのかわからないと目でテルヨシに訴えてきた。

「凄いわねえ。お人形さんみたいなんて例えは失礼かもしれないけど、私とは別の生き物みたい」

「流川さんはとりあえずお仕事してください。マスターも怒りますよ」

「わお！ それじゃ、あとで一緒に写真を撮りましょ」

確かにマリアは日本人には見られないほどにイタリアの血が濃く容姿に出ている、流川さんの表現は理解できたが、バイト中のテルヨシでさえここまでのスキンシップはしないので、趣味の経営で怒る人が客とマスターしかいないからこそそのあれだな。

これもサアヤが常連だからこそその距離感で、ちやつかりマリアを抱き返しつつ流川さんを退けたサアヤは、ようやく3人揃ったことで話をブレイン・バーストへと移行させていった。

「……《ウルフラム・サーベラス》？」

話が始めれば開口一番でサアヤの口から出た名前は、やはりレベル1ながらテルヨシをも悩ませたサーベラスで、サアヤから見てもその実力は新人のレベルを逸していたようだ。

そのサーベラスの存在はマリアも知らなかったもので、今後に遭遇することもあり得ることから、2人してサーベラスについての現在の評価を教えてあげる。

「正直なところ、あれはマリアだと見つかったらほぼ負けるわね。それだけバトルセンスが優れてる」

「バトルセンスなんて持ち出したら、同レベルならオレも勝てるかわかんないけど」

「まあ見ても今回はレベルとポテンシャルの差で勝ったようなものよね。ステイングの犠牲がなきやあのアビリティも考察の間に攻略させてもらえなかったかもだし」

「テルとサアヤさんがそんなに言うと、ちよつと怖い」

それによる2人に評価は総じて高く、同じ条件なら勝てるかどうかとも危ういとさえ言うテルヨシとサアヤにマリアも驚きを隠せない。

しかし2人もマリアを怖がらせるつもりは毛頭なかったもので、戦うことになっても臆することはないと言いつつ、サーベラスの実力を支えていたあのアビリティも脅威だと口を揃える。

「物理耐性アビリティ。それもほぼダメージをシャットアウトするとか、無効に近いね」

「観戦中に先にサーベラスの対戦を見たって人に会って話を聞いたんだけど、そこでサーベラス本人が言ってたアビリティ名。

《物理無効》とか言うんだってさ。無効に近いんじゃないかって、無効そのものってこと」

「えっ？ そんなの相手にテルはどうやって勝ったの？ テルの攻撃、全部物理だよな？」

「ん？ そりゃあれよ。テルお兄さんの努力と根性と気合いと……」

「フィールドには破壊不可能な場所があるでしょ？ それを利用したのよ」

「えっと……あつ！ 地面だ！」

「……………」

さすがは顔の広いサアヤらしく、バトロワ祭りの中でも情報収集はしていたらしく、サーベラスのアビリティもそれで判明。

本当に無効化アビリティとは思ってなかったテルヨシも驚いてしまいが、そんな相手に脳筋のテルヨシが勝ったことがビックリなマリアは、その勝因についてを尋ねてきて、カッコつけたいお年頃なテルヨシが勿体ぶっていたら、横からサアヤがほぼ答えのヒントを与えて理解されてしまうと黙るしかなかった。

だがそうとわかるとマリアもバーストリンカーらしく、対サーベラス戦での立ち回りなどを思索し難しい顔を始めるが、すぐにサアヤが「見つからなければどうということはない」とかなんかどこかで聞いたような台詞のオマージュを炸裂させて、それに「なるほど」と返すマリアもマリアであった。

さすがにそれだけでは対抗策としては不十分すぎるので、寝る前でも別の対抗策を練るように言って、今はまた別の話題に切り替えようとサアヤがサーベラスの話を切ると、視界の時刻を確認したのかわずかに視線を動かしてからテルヨシをジト目で見ながらジュースを飲む。

「でよ。あと20分もしないうちに約束の時間なわけだけど、対策はあるの？」

「対策？… なんか必要なの？」

その意図は言う通り、20分後に始まるカタフとの対戦を考えてのことだったのだが、対戦に向けて何か考えているのかと尋ねたサアヤ

に対して、テルヨシは能天気を考えなしだと答える。

それにはサアヤもズルツと体を滑らせて呆れを表現しながら頭も抱えるが、そんな深刻な問題なのだろうかと疑問ではある。

そしてカタフとの対戦を知らないマリアは何の話かと頭の上にはてなマークを浮かべてしまい、そういえばとまずはサアヤが説明をしてあげた。

その説明が終われば話は戻って再びテルヨシへと視線を向けたサアヤは、普通ならやって当然のことをやらないテルヨシに苦言。

「バカなアンタにわかるように言うけど、その姿勢の時点で対戦のアドバンテージはカタフにあるのよ。良くも悪くもアンタはこの2年で有名になったから、その戦い方もアビリティも必殺技だって知られてる。対してカタフは活動戦域が極端に狭いから、知らない人は知らないし、現にアンタも通り名くらいしか知らないじゃないの」

「それでも向こうがオレのことを知ってるとも限らないんじゃないよ」
「向こうから吹っ掛けてきておいてそれはないでしょ。というよりもよ」

物凄く真つ当なことを言うサアヤの気持ちもわからないわけではないのだが、テルヨシとしても初見を楽しみたいという思いはあって、その辺での意識の差が両者の間で出てしまっていた。

それが今のやり取りだけで察せたようなサアヤは、無駄な問答にならないように話し方を変えてくる。

「これはまあ私の持論ではあるけど、対戦っていうのは互いのことを理解した上で初めて成立するものだって思うのよ。情報戦を否定するわけじゃないけど、アンタやカタフみたいなタイプはさ。相手がどんなことをやってくるかある程度の理解があつた上で戦術を立てるのが前提で、そこからの駆け引きが重要だと思うの。だから情報戦でアンタが負けてたら、それだけで最初の駆け引きが成立しないと思わない？」

「あー、そう言われるとそうよねえ。格闘ゲームでも相手の使うキャラの技とか把握した上で立ち回りを決めたりしてあるし」

そうして話すサアヤがどうして親身になつて考えてくれるのか。

それを考えながらその意見にずいぶん納得してしまい、ようやく意見が通ったことでサアヤが明るい笑顔を見せたことで、疑問も解ける。

要するにサアヤもカタフとの対戦を楽しみにしてくれてるのだ。

だからこそスタート時点での差を無くして対等な条件で始まってほしいという思い。

ハイランカー同士の手汗握る高度な駆け引きを最初から最後まで純粹に見たいという願い。

「じゃあオレはお願いすればいいんだよね」

「時間もそんなにないし、さっさとしなさい」

「カタフについて知ってる情報を教えてほしい」

「よろしい」

カタフとの対戦はナイトの計らいでおそらくはもうずいぶん知れ渡っているので、ギャラリーの数もなかなかになってくるはず。

その中の大多数はサアヤのように勝ち負けはもちろんのこと、見ごたえのある対戦を期待しているのは間違いないし、そうした期待に応えるのもテルヨシの役目だと認識すれば、自ずと答えは出てきて、素直にカタフの情報をサアヤに提供してもらうことにする。

そんなやり取りを黙って見ていたマリアにはクスクスと笑われてしまったが、時間もないので頭を対戦へと切り替えて、サアヤからもたらされる可能な限りの情報をインプットして、それらへの対抗策を色々と模索し始めた。

カタフの対策だけに加速して時間延長など勿体ないので、現実の経過時間である20分後となって、向こうに都合を合わせてもらった手前でスターターはテルヨシがやる。

3人はニューロリンカーを同時にグローバル接続し、1拍置いてからテルヨシが加速。

マッチングリストから目的のカタフの名前をスクロールして探していき、5、60人は飛ばしてレベル7のところまで来て目を凝らすものの、カタフの名前がない。

あれ？ まだ来てないのか？

そう思いつつも一応はマッチングリストを最後までスクロールしていつてみると、王達を除けばマッチングリスト上で最高レベルになる8まで来ると、さすがにその数は片手の指で数えるほどに少ない——中にはフーコの名前もある——が、その中に目的の名前が存在していたことのでつい2度見してしまった。

対戦の前から予想外をぶち込んできたカタフではあるが、考えればレベルの上でもこれでフェアになったわけで、そのただけにレベルアップしたなら相当なアホだが、そのアホさはまっすぐにレベル10を目指していた自分と重なる部分もあったので、嫌いではない。

そんな粹なことをやってくれたカタフに呆気ない決着などさせては申し訳ないなど思いつつ、1度だけ深呼吸をしてからカタフの名前をタッチしてデュエルボタンを力強く押ししてみせるのだった。

——ワアアアアアアアアア!!

構築されたフィールドに降り立ってテルヨシがまず聞いたのは、視界に表示された【FIGHT!!】の炎文字とほぼ同時に響いた、ギャララーの大歓声。

どこにいても判然としないうちに皆が皆、示し合わせたかのように様々な歓声を上げながら、当人達を目指して近寄ってくるのがなんとなくわかる。

「ここまで盛り上がるとはね」

「ビツクリしたあ」

その歓声には近くに出現したサアヤとマリアも素直に驚いていたが、すぐにテルヨシに一言だけ述べて対戦の邪魔にならないように離れていき、そこまでが済んでから、ようやくテルヨシも情報の処理をしっかりと始める。

構築されたフィールドは建物内部への侵入が不可能な《世紀末》ステージ。

余計な属性がほとんどないので純粋な実力で戦えそうなのは良かったが、集まってくるギャララーの数が半端じゃないせいで、建物オブジェクトの屋上がほぼ満席状態になりつつあるのは多少ではあるが気が散りそうだ。

「おいテイル！ 中2戦域代表として負けんじやねーぞ！」

「《逃走王》の逃げっぷりにも期待してるよ！」

「ぼっか！ 今回は《蒼き閃光》って呼んでやりなさいよ！ 頑張ってテイルー！」

ガイドカーソルはまっすぐブレずに動かないところを見ると、カタフの方もまっすぐに向かってきているようで、その間にギャラリーからの声援にも応えつつ、ギャラリーの顔をざっと見渡してみる。

注目度で言えばおそらくかなり高い今回の対戦は、7大レギオンの幹部もいくらか呼び込んでいるようで、プロミからは《三獣士》が揃って観戦していて、ネガビユでは黒雪姫以外のメンバーが固まって観戦しているのが見える。

《レオニーズ》からも《二剣》が並んで見えたし、まさかの《クリプト・コズミック・サーカス》からも《レモン・ピエレット》が観戦に来ていた。

《オーロラ・オーバル》は《アスター・ヴァイン》のみが見えていて、《グレート・ウォール》では珍しく《ベリジアン・デクリオン》の姿があった。

《オシラトリ・ユニヴァース》の幹部はテルヨシ自身がまだ見たことがなかったせいでわからなかったものの、そうそうたる顔ぶれがギャラリーとして入ってきているのは間違いない。

それからわずかにいたマツチングリストのレベル8の中に気になる名前もあったが、今はそれを気にするほどの余裕はないので遠くの方に見えたカタフの姿を見て集中力を上げていく。

たくさんのギャラリーを引き連れてやって来たカタフも、ついてきたギャラリーと話をしながらだったようで、必殺技ゲージの方は全く溜めることなくガイドカーソルが消える距離にまで来ると、そこでギャラリーとも会話をやめてまっすぐにテルヨシを見つめてペコリ。

丁寧なお辞儀をしてみせてから、対戦の前に会話への興じてくる。「お忙しい中で対戦に応じてくれてありがとうっす。こんなにギャラリーも呼び込んでくれて感謝ばかりっすね」

対戦者が顔を合わせたことで、さっきまで賑やかだったギャラリー

達は、これも示し合わせてはいないのに皆がその口を閉ざしてテルヨシとカタフの会話の邪魔をしないようにする。

しかし静寂の中で響いたカタフの言葉を聞きながらのギャラリーからは、不気味なほどの沈黙とは裏腹に今か今かとその対戦が始まるのを待つ空気が充満してきていて、ダラダラと会話に興じている時間も惜しそうだ。

「呼び込みはナイトのやつに感謝しろよ。オレは何もしてない。あそこにコバマガ姉妹がいるから一緒にお礼言っとく？」

「そうっすね」

なので早くに切り上げるために片付けるべき話を選択したテルヨシは、カタフとそんな打ち合わせをして屋上の一角にいたコバルとマーガに口を揃えてお礼を言ってみせ、いきなりのことだったせいで慌てた2人は、こちらも口を揃えて「は、早く始めろ！」と対戦を促してくれる。

「まだまだ話したいことはあるんですが、ギャラリーからの熱い視線には応えなきゃいけないっすよね」

「だな。話したいことなら対戦中にでもしろよ。どうせテンション上がれば勝手に語れるくらいはやっだろ？」

「お見通しっすことっすか。流石っすね」

「今のお前を見れば誰だっかわかるわアホ」

コバルとマーガの催促もあって、会話も終わりの雰囲気になるや否や、話しながらのカタフは落ち着いた口調とは裏腹にその体が自然と臨戦態勢へと変化していて、おそらくは無意識だったことが今のでわかった。

テルヨシに指摘されたことで1人笑ってしまったカタフだが、臨戦態勢を崩すことはなくて、意識したからこそむしろより明確な拳を持ち上げての構えを取ると、テルヨシも釣られるようにボクサーさながらのステップを踏んで全身を脱力させ、いよいよギャラリーもその開幕に声を上げかける。

「待ち望んだ対戦っすが、簡単に勝っても文句は言わないでほしいっす」

「やる前から大口を叩くやつは、世の常であつさり負けるぜ？」

会議の時はヘコヘコしているイメージが先行するカタフだが、こと対戦となるとそれも見る影はなく、すでにテンションが上がりかけているからかビッグマウスも飛び出す、それを売り言葉に買い言葉で返したテルヨシにカタフはまた笑う。

——そして運命の1戦の幕が上がる。

開幕の先制を仕掛けたのはテルヨシ。

まずはサアヤから聞いた情報をその身で体感するための攻撃は、全体重を乗せた右足の中段蹴り。

速度も申し分なく、単発としても回避に動かざるを得ないものだったが、迎撃の姿勢から動かなかつたカタフは、テルヨシの右足がその左胴へと迫った瞬間、右の拳を当たる軌道に置いてテルヨシの右足を受け止める。

——バシユウウウウウウン。

普通ならただ置いただけの拳など取るに足らない障害物でしかないが、カタフの拳と右足が衝突した瞬間、テルヨシの右足には不可思議な感触が包み込み、放たれた強力なエネルギーが根こそぎどこかへと奪い取られたのだ。

それによりカタフの拳に当たってもダメージ1つなく、HPゲージは微動だにせず、カタフに対して大きな隙を見せることへと繋がる。

「ふんっ！」

その隙を意図的に作り出したカタフのカウンターの左フックがまだ右足を上げたままのテルヨシの顔面に迫り、これを体を後ろへと反らすスウエーでギリギリ回避。

しかし体は無理なスウエーで態勢が崩れて後ろへそのまま倒れる形になるが、その体を《テイル・ウィップ》が支えて留まらせ、右足を振り上げてカタフの左腕を蹴り上げつつ、勢いを殺さずに左足でも踏み切ってほとんどその場でバック宙をして体勢を無理矢理に整える。

対して左腕を持ち上げられたカタフは反射的にバックステップしてテルヨシの射程圏内から脱出しつつ、着地後を狙ってすぐさま切り

返して右ストレートを放ってきたので、テルヨシも左回し蹴りでその拳を迎撃。

だがまたしてもカタフの拳と激突した左足はエネルギーを消失してしまい、相殺すら出来なかった拳に難なく弾かれてしまう。

気持ち悪いとさえ思える感触だが、弾かれた際に膝を上手く使って拳を蹴るようにしてバックジャンプし距離を取ったテルヨシは、カタフが追撃してこないのを確認してからウォーミングアップを終えたかのようにその場で屈伸しながら話しかける。

「実際に撃ち込んでみると厄介極まりないな。《会心防衛》クリティカル・ガードだっけ？

そのアビリティ」

「動揺が少なかったのは、やっぱりそういうことっすか。さっきの前は撤回しておくっす」

「あつ、その言い方はオレが情報収集してない前提だったってことだな？ 心外だわあ」

実際に直前まではそうだったのだからぐうの音もでないところだが、それを悟らせても仕方ないので誤魔化しつつ笑いへと変えるが、会話が聞こえたギャラリーからは「近接バカなのは間違ってるじゃないしょ」とかそんな声が飛んでくるので困ったものだ。

それはともかくとしても、これでまずはカタフの厄介なアビリティを体感することができて収穫はあった。

カタフのクリティカル・ガードは、その拳に物理的攻撃が当たると、即座に絶対防壁を展開して拳を守り、衝突するエネルギーを消失させてしまう防御アビリティ。

拳に当てるだけで発動するという割と楽な条件のせいで、カタフ自身の動きが後手に回っても対処が間に合うことは多く、完全に迎撃に回られれば後出しの防御をされた上に手痛いカウンターを貰う羽目になる。

「あのアビリティを破るには……」

会話もちよつとで終わって屈伸を終えたテルヨシは、迎撃慣れしているカタフの無理に攻めてこないスタイルを確認しつつ、まずはクリティカル・ガードの攻略へと乗り出した。

Acceleration Second 2

——暖簾に腕押し。糠に釘。

《シーバ・カタストロフ》との一大決戦に挑んだテルヨシの前に立ち
はだかった最初の関門は、そんな諺がピッタリの防御アビリティ《ク
リティカル・ガード》。

拳に当たった瞬間に展開される衝撃吸収付与の防壁は物理耐性が
ほぼ完璧で、こちらから与える攻撃はことごとくダメージとして通ら
ない。

「対策その一」

それでも攻略しないことには勝てないので、サアヤから教えられた
ことを参考にテルヨシなりの対策をいくつか試すために迎撃に構え
るカタフに突貫。

厄介なのはまずその発動条件。

拳に当てるだけというお手軽すぎるくらいの条件だが、要は拳に当
たらなければいいという対策。

直進して繰り出す初撃は振りの小さい右の中段蹴りに留め、それに
カタフが右の拳を合わせようとしたところで緩急も変えた上段蹴り
へと筋力任せの軌道変更。

至近距離ならハルユキやサーベラスクラスの反応速度がなければ
回避に動くのがやっとなフェイントからの強襲だったが、恐ろしいほ
どにテルヨシの動きを観察していたカタフは、そのフェイントに用い
たわずかな体重移動を見逃さなかったのか、テルヨシの蹴りに拳を即
対応させて衝突させる。

この衝突時の運動エネルギーを消失する感覚が気持ち悪いテルヨ
シは、負荷もなく止まった自らの足をどうするかと逡巡させ、その間
隙を縫うようにカタフが拳でテルヨシの足を力強く押し戻して振り、
体勢を崩そうとしてくる。

「対策その……2い！」

しかしテルヨシもここで押し戻されるのはダメだと思いが早くな
り、押し戻してくるカタフの力に抗って再び振り上げていた足に力を

込めてカタフの拳を押し返す。

カタフのクリティカル・ガードは確かに強力だが、そこにもしつかりと突くべき穴があり、展開された防壁が衝撃を吸収するのは、最初の一撃のみ。

そこから密着して防壁を展開させたままならば、そこに加えられる新たな力を無効にはできないのだ。

だから今、テルヨシとカタフの力は拮抗して膠着状態が発生し、五分に持っていったかに見えるが、まだ分はカタフの側にある。

片足を上げてるテルヨシは次なる一手が打てないのに対して、カタフはまだ左腕を残しているし、やろうと思えばテルヨシの足を防壁の上で滑らせてその下を潜り躲すこともできなくはないはずで、どちらに転んでも苦しい対応を迫られてしまう。

だが予測できればそのロスも最小にできるのは事実で、向こうもどう動くかを考えてそうなことも考慮した上で予想外を加えるために思考。

直後、それをやらせないように本能で悟ったのか、カタフは拳の向きを微妙に変化させてテルヨシの足を軽く持ち上げて自らは少し屈んで、振り抜かれたテルヨシの足を潜る形で回避し、それと同時に空いていた左拳でテルヨシの背中へ一撃食らわせようと鋭く振る。

それを見てではないが、空振りした右足がフォロースルーに入る前にまたも筋力任せに動きを停止させて、振りは小さいながらも軌道を修正した蹴りをカタフの側頭部へと叩き込み、それと同時にカタフの拳が背中へと命中。

「ぐっ！」

「がっ！」

痛み分けとなった攻防で両者がHPゲージを削り、反対方向へと軽く吹き飛ぶが、すぐに体勢を整えるリカバリーを済ませて構え直す。

それが同時だったおかげで互いに攻め時を逃して見合う形に留まると、今の攻防にギャラリーの方から「おおー」と感心するような声が入る。

「強引な戦い方っすね」

「それができるのがオレのアバターなんだよ」

「型にはまらない戦い方をするっていう噂も納得できるっす。これは僕も対近接アバターのセオリーを捨てる方が賢明そうっす」

「いいのか？ そのセオリーを使うのもオレのやり方だが？」

「どうっすかね。言葉で惑わせるのが狙いかもっすよ」

「意外とセコいな」

まだまだ小手調べといった感じの両者ではあるが、感覚的に崩れたら一気に削られるだろうことはわかって緊張感が増す。

それでもこの対戦を楽しむ気持ちは全く衰えることなく、そんな些細な会話の中でも笑いは出てくる。

それにしても厄介な相手だと思おうテルヨシは、フェイントにも動じないカタフのカウンターの戦い方に攻めあぐねる。

対戦経験もさることながら、それで培われただろう観察眼はギリギリの攻防ではそれだけで切り札になり得てしまう。

観察眼では負けないつもりだが、攻め手と守り手では使い方も微妙に変わるし、先手になる攻め手はどうしても守り手に対して後手になるのが痛い。

だからといって攻め手が絶対的な不利なわけではない。攻め方は色々あるのだ。

あまり見合っているもギャラリから野次が飛んでくるので、無理に均衡を崩そうともせずに迎撃体制を変えないカタフに再び突っ込んだテルヨシは、そこからあまりに無防備で豪快な飛び蹴りを披露。

速度は最速に近かったのでプレッシャーはあつただろうが、ちよつとビツクリした雰囲気を見せても動じないカタフは、飛んで火に入る夏の虫といった感じで拳での迎撃をしようとした。

が、あまりにも単調な攻撃のせいで勘づかれたか、直前で拳を引っ込めてステップ回避に切り替え横へと逃げられる。

しかしこれが狙いの1つだったテルヨシは、着地後すぐにカタフを追って左の回し蹴りを放ち、なんとしても拳を出させようとする。

その気迫に圧されたか、体勢も不十分だったカタフは回し蹴りに対して左の拳でガードし、全ての衝撃は無に帰してしまう。

それでもニヤリと笑ったテルヨシは、カタフの防壁が展開されてから密着する足をそのままに《テイル・ウィップ》との2点を支えにしてぐりんっ！

体を持ち上げて捻り、強烈な右足をカタフの防壁へと叩き込んだ。防壁の衝撃吸収は1度だけ。さっきはそこに密着した足で圧力をかけたが、防壁が展開されたままなら、その上から叩くことも可能。

それをほぼ空中に留まるような挙動で、しかも足技でやってしまえるテルヨシの3次元的な攻撃は珍しいだろうし、この攻撃が狙ったのは『拳を置く』というカタフの防御方法を逆手に取った防御貫通攻撃。

ただ置くだけで防御できるカタフは、その防御を最小の力で行うことでカウンターにエネルギーを使えるが、衝撃吸収を終えた防壁の上からさらに叩き込まれる攻撃にはほぼ無防備と言えるわけだ。

対応する隙も与えずに叩き込まれたテルヨシの右足の衝撃に、ほとんど力を入れてなかった拳は呆気なく弾き飛び、この対戦で初めてのクリーンヒットがカタフの肩付近に命中。

勢いに押されて吹き飛んだカタフは、地面に2度ぶつかって転がりつつも、リカバリーだけはしっかりとやってダウンは回避して追撃を防ぐ構えを取る。

テルヨシも体勢があれだったのですぐに追撃には動けなかったが、しっかりと1割を削ったカタフのHPゲージを見て笑みがこぼれる。「……っし」

思わず小さなガッツポーズまでしてしまったが、同じ手は2度通じないのがハイランカー。

さらに言えばやられてそのままなハイランカーもそうはいないので、すぐに集中して次の手を考えるが、ギャラリーの歓声のせいでカタフが何か言ったのを聞き逃してしまう。

直後。カタフから放たれるプレッシャーが1段階あがったのがなんとなくわかり、歓声が止まないうちに今度はカタフから仕掛けてくる。

その速度は重量型が多い緑系統よりもむしろ、テルヨシのようなスピードタイプの青系にも引けを取らない素晴らしいもので、大した距

離もなかったせいでテルヨシも対応が遅れてその場での迎撃に構える。

——そしてそうなつてから気づく。

迎撃に用いれば最強クラスの後出し防御が可能なクリティカル・ガードだが、その拳がパウンドのようなフットワークから連打をしてくれば、それはつまり……

最短の接近から放たれたカタフの拳は、当たればこちらの衝撃は伝わらずに一方的な攻撃となつて襲いかかり、最初だけは確認のために蹴りで迎撃したテルヨシだったが、蹴りにいった足を障害にすらせずに直進してくる拳は脅威で、回避に動かざるを得なくなったテルヨシがギリギリのところまで躲しながら後退する。

しかしカタフもまたその後退を追うように前進して拳の連打を繰り出してくるのでどんどんジリ貧となつてしまい、さらに地形も見ながらヤバイと思つてもどうすることもできずに建物オブジェクトが背中に迫ってくる。

そうして背中にわずかに意識が向いた瞬間。テルヨシは迫るカタフの拳にこの上ない違和感を覚えながらもギリギリで回避。

左のジャブだったそれは確かに避けたのだが、避けたのと同時に鈍い衝撃が胸部を襲い、何事かと見る暇もなく今度は右のストレートが顔面へと叩き込まれて後ろへと吹き飛び、建物オブジェクトに激突して跳ね返る。

そこにさらに左のフックがテルヨシを襲つて顎へと命中すれば、意識が寸断されなかったのが奇跡に近いが、もうダウンするしかなく地面が目の前に迫る。

「《インパクト・ジャンプ》」

だがそこでダウンすれば負けると確信したテルヨシは、ほとんど意識せずインパクト・ジャンプで強引に距離を取つて遠くの地面に滑り落ちてそこでダウン。

50mほどの距離をカタフが詰める間になんとか持ち直そうとするが、予想外の一撃からの連打は思うよりもダメージが大きく、HPゲージも3割も削られてしまっている。

何よりも不可解なのは、連打の起点となった胸部への一撃。

左の拳は避けて引き戻している暇はなかったし、右のストレートだって胸部への一撃を加えた後ならあの威力では撃てないほど短い間隔だった。

つまり『第3の拳』がテルヨシを襲ったことになるが、カタフの腕は2本しかないのでテルヨシの知らない範囲で何か仕掛けてきたはず。

「……………レベル…………アップ」

ギャラリーの方からも驚きの声が上がっていることから、今までのカタフにはなかった戦術であった可能性もあったので、よろめきつつも立ち上がり構えたテルヨシは、カタフの追撃を止めつつその考えに行き着く。

「レベル8のボーナスは…………アビリティ獲得か？」

「…………さすがつすね。分かりにくいようにインファイトに持ち込んだんすが、まさか初見で見破られるとは思わなかったつす」

「ついさつき取得したにしては…………ずいぶん使い慣れた感じがしたが」

「この対戦の前はかなり使い込んだつすからね。不慣れな技ほど隙ができるのはよく知ってるつす」

必殺技の発声がなかったこともあり、残りの選択肢からアビリティの可能性を考えて問いかけてしまったが、なんか普通に答えてくれて拍子抜けする反面、聞いてもそのアビリティがよくわからないのはさすが。

「でもアビリティと見破ったテイルさんに敬意として名前だけは教えあげます。アビリティ名は『ファンタム・フィスト幻影拳』。これを破れないとキツいですよ」

「幻…………拳」

それでも隠し通す気はそこまでないようで、むしろ攻略してくれな雰囲気のカタフはアビリティ名を教えしてくれるが、それを考えさせる余裕は与えてくれないのか、すぐにまた突っ込んできてインファイトに持ち込んでくる。

まだ頭がふらついているテルヨシだが、泣き言は言ってられないので今度はこっちも攻めに出ようと迎撃ではなく攻撃に攻撃をぶつける。

とはいえ足技主体のテルヨシとカタフの拳では手数でも勝てはしないし、クリティカル・ガードでこっちからの攻撃はシャットアウト。さらに謎のファントム・フィストが繰り出される可能性もあつては、接近戦が不利に不利を重ねた不運満載このやろう状態。

じゃあ足技が拳に勝てないのか？

否。テルヨシはムエタイ選手でもサッカー選手でもセパタクロー選手でもない。足技主体である種の異種格闘技戦を勝ち抜いてきたハイランカーなのだから。

この際、多少のダメージは目をつむるとして、テルヨシは突っ込んで拳を繰り出してきたカタフに対しテイル・ウィップを土台部分に接点を増やして支点にして軽く浮き上がり、両足が同時に使えるようにすると、繰り出された拳を足裏で受け止めてダメージを軽減。

衝撃吸収は厄介だが、こうして拳を受けるだけなら影響は少なく、テルヨシが足を止めたことでカタフも足を止めての拳の連打が基本となる。

ダメージは蓄積してしまうが、これで足を止めてカタフを観察できるので、回復を促しながら繰り出す拳のわずかな変化も見逃さないようにその目を見開く。

「僕の拳に足技で応戦されたのは初めてっす！」

「この距離で防戦一方なのはオレも初めてだよ！」

依然として連打を浴びせてくるカタフは、少しでもダメージを稼ごうとしているのだろうが、テルヨシもいつまでも受けに回ってるつもりはないので、楽しそうなカタフには申し訳ないが攻めの予兆を見せにいく。

受けるだけだった拳は戻りも早くてテンポも一定のリズムがなくタイミングを掴めなかったが、こっちが当たるタイミングを合わせることで解決できてしまう。

カタフにも拳を当てるタイミングはあるだろうが、それを無視して

足を伸ばしたりして先に当たりにいったりで無理矢理タイミングを一定にすると、今度は拳が当たって引くタイミングより早く足の爪先で防壁を横へと振ってリズムを崩す。

当然、予期せぬ腕の振りに対応するわずかな隙を狙って空いた正面へと蹴りをお見舞い。

しかし対戦勘も良いカタフは半歩早くバックステップしてテルヨシの射程から外れて空振りさせると、後退させられたのが癪だったのかすぐにまた前進して拳を繰り出してくる。

そう。それでいい。

テルヨシが攻勢にも出られるとわかれば、カタフとて変化を加えなくなる。

そしてその変化は緩急やフェイントといったものでは弱いとわかっていれば、使える手はフロントム・フィストのみ。

出さざるを得ない状況にさせられた意識はカタフの中にあるのかもしれないが、出し惜しみして戦況を覆されるのを良しとしないのは当たり前。

先ほどとは違って余裕のある接近戦。

インファイトよりも少し間があるリーチギリギリでの攻防のおかげで視界も良好。

来るなら来いとばかりに拳を全弾捌いていくテルヨシに油断も隙もないため、カタフもようやく変化を加えてきて、先ほどと同じ左の拳がテルヨシへと迫り、それを受けようと足を動かす。

が、繰り出される直前でカタフの拳が半テンポだが止まったのが見え、しかし左の拳は軌道上を突き進んでテルヨシの足裏へと命中。

した。はずだが、命中したのと同時に拳は幻のように消えてしまい、手応えもまるでなし。

直後、半テンポ遅れたカタフの左拳が迫ってテルヨシの足裏へと命中。

今度はしっかりと重い衝撃が伝わってきて、踏ん張りが甘かったテルヨシの足は弾き飛び、それで全体のバランスが崩れた隙にラッシュを仕掛けられる。

「なんのその！」

そこまではまあ攻略する手前で折り込み済みだったので、こうして受けに回った段階で手は打っていたのが幸いし、片足で着地をするのと同時にテイル・ウィップを今度はすぐ上に配置していた街灯を掴ませて、カタフのラッシュから後退して浮き上がり、街灯の上に着地。

黒雪姫にはよく猿だなんだと言われてバカにされるが、意外と挙動が掴めず対応が遅れて状況をリセットできる利点があつて、現にカタフも拳の届かない距離に逃げたテルヨシを見上げるしなくなっている。

「ファントム・フィストとはよく言ったもんだ。映像を記憶して再生するアビリティってところか」

「たった2回見ただけでそこまでわかるっすか……大した観察眼っすね……僕も自慢の1つつすが、テイルさんには1歩及ばないかもっす」

街灯に腰を下ろして完全に思考も回復。ダメージも抜け切ったところで先ほどの現象を紐解くテルヨシは、1回目のファントム・フィストが使われたであろうタイミングと今回のを照合し、どちらも同じ軌道を通った左の拳だったことに気づき、仮説としてそうした回答をすると、大体は合っていたようでカタフもやれやれといった雰囲気。「ファントム・フィストはあるコマンドの後に繰り出した拳による攻撃を記憶して、僕の任意で映像として再生することができるっす」「幻影の拳から本物の拳を少しだけ被せてズラして、別の角度から攻撃って感じか。こりゃわかつてても現状じゃ完全な攻略は無理っばいな」

それでようやくファントム・フィストの正体が判明したことで、テルヨシがギャラリーの歓声で聞き逃したのがそのコマンドだったこともなんとなく悟り、仕組みがわかったところでそう簡単に見破れるものでもないことも理解できた。

それだけだと弱気な発言ではあったが、スルリと街灯から下りたテルヨシはそうとは思えない自信に満ちた雰囲気再び構えてみせ、開き直りではないとわかったカタフも様子を見るためか迎撃の構えに。

「まあそれでもだ。オレが勝てない理由にはならないわけよ」

「大した自信つすね。じゃあその自信を真正面から打ち砕いてやるつす！」

「できるならよろしく！」

迎撃に構えてくれたのはラッキー。

慎重さと大胆さのバランスが掴めないカタフだが、未知に対しての人間の多くはまず『見る』ことを重視する傾向にあり、よほどの特攻野郎でもないと思っ込んではいない心理を突いたのだから、確率としては高かった。

そうやって迎撃に構えてくれたカタフに果敢に突っ込んでいったテルヨシは、ほぼ全力に近い右足の上段蹴りをお見舞いしにかかり、変化もクソもない単純な火力押しにカタフは拳を添えるだけ。

そして訪れるのはクリティカル・ガードによる完全防御とテルヨシに生じるわずかな隙。

「おらあああああ!!」

……のはずだったが、防壁を展開して衝撃も吸収したカタフの拳は、直後に訪れた強烈な圧力で押し返されて頭ごと地面へと沈められる。

あまりの威力で地面をバウンドしたカタフの隙を見逃さず、フォロースルーに入った右足を引き戻して、完全にエネルギーが抜ける前に突き出すように後ろへと蹴り出してカタフの胸部装甲を捉えて吹き飛ばす。

テルヨシが行った攻撃は単なる強撃ではない。

全体重を乗せた上段蹴りには違いないが、わずかに違うのはインパクトのタイミング。

通常の蹴りはその膝が完全に伸びきってインパクトするのに対して、テルヨシが行ったのは膝を伸ばしきらずにまずカタフの拳に8割の力で当たり衝撃を吸収させ、そこから膝を伸ばしきって残りの2割の力から再び加速してカタフの拳ごと蹴り抜いたのだ。

2段階加速の蹴り。とは言えないが、カタフのアビリティ込みで蹴りにいった通常なら無駄な動作を加えただけの攻撃。

しかし両足でしか突破できなかったアビリテイを片足だけで突破できたということは、カタフの予想を上回ったのは確かで、このチャンス逃すまいとテルヨシも煌々と輝く満タンの必殺技ゲージを確認して両足の爪先を地面にトントン、トントンと交互に触れさせる。「インビジブル・ステップ!!」

Acceleration Second 23

1対1の対戦で使える状況はそうないテルヨシの最強の必殺技。

フルチャージ状態の必殺技ゲージをわずか5秒で使い切る燃費の悪さだが、それに見合うだけの効果。目で追うのも難しいほどの速度での連続ショートジャンプを可能にする《インジブル・ステップ》。テルヨシがこの必殺技を使って勝てなかった対戦は、おそらく片手の指で数える程度しかない。

千載一遇のチャンスにためらいなくそれを発動させたテルヨシは、まだこつちをちゃんと知覚できていない重い攻撃を受けたカタフへと突貫。

時速360kmの3mショートジャンプの連続使用で稲妻のような軌道で追撃したテルヨシは、まずカタフの倒れかけた体を蹴り上げて宙に浮かせ、そのカタフを追い越すようにして真上へと跳んですぐに急降下からのかかと落としを叩き込んで地面へと沈め、さらに着地から真横へジャンプして反動で浮き上がったカタフを蹴り飛ばしてみせる。

まさに電光石火の連続攻撃でカタフのHPゲージは一気に残り4割を切り、必殺技の残り時間が2秒あるかどうかとなって、決め切るにはわずかに足りないかと頭をよぎり、それでもできるだけの攻撃は叩き込もうと吹き飛ぶカタフをさらに追撃するため足に力を込める。

「……………《ジ・エンド》」

そしてショートジャンプをした瞬間。カタフが吹き飛びながらにそんな必殺技発声をしたのがわずかに聞こえ、カタフを中心に不気味な風が吹き抜けていき、テルヨシもその風を受けたがダメージはなく、何の障害にもなり得なかった。

が、それを受けてから突如としてテルヨシの消費されていた必殺技ゲージが止まり、跳んだはずのテルヨシの動きもエネルギーを消失したように止まって、上手く制御できずに着地に失敗し転けてしまう。

それでも倒れまいと《テイル・ウィップ》を支えに踏み留まろうとしたが、いつもテイル・ウィップを動かすための感覚が虚しく空振り

するような感覚が襲ってきて、それに戸惑いながら転倒してしまふ。

何が起こったかを確認する前に反射的に頭の後ろに手を持っていき、そこにあるはずのテイル・ウィップが消失していることに驚くが、その驚きをかき消すかのように視界に映ったのは、今までのダメージを物ともしないように立ち上がって一直線にこちらへと突撃してくるカタフの姿。

驚きの連続で思考が一時的に停止し、何をどうするかを判断できなかったテルヨシは、接近するカタフに対して反射的に立ち上がることはできなく、繰り出された壮絶な拳の連打に為す術なくHPゲージを削られていく。

「我ながら、つまんない必殺技っす」

「何が……だよ」

それでも何とか距離を取ろうとした絶妙なタイミングで渾身の右ストレートを叩き込んで後退させてきたカタフ。

それになんとか耐えて踏み留まったが、そんなテルヨシに対してさつきまでのハイテンションが見る影もないカタフの寂しげな言葉に疑問が生じる。

その間にもカタフの必殺技ゲージは減り続けているが、その減少は毎秒2%といったところで、リチャージも可能なのか使用時からそこまで減っていないように見える。

「この必殺技は、バーストリンカーの個性を殺す禁じ手っす。これの前では如何なテイルさんでも無力っすよ」

「さつきまでのハイテンションはどこへやら、だな」

ようやく落ち着いて思考する猶予ができて、互いのHPゲージがまたほぼ五分にされてる悲しさを覚えつつ、現在進行形で発動中のカタフの必殺技について思い出す。

ジ・エンドは、カタフの半径50mの範囲に展開されるフィールド干渉型の必殺技。

その効果は範囲内にある間は、あらゆるアビリティ・必殺技・強化外装・それらに関する効果を完全に無効化するというとんでもないもの。

だからさつきテルヨシのショートジャンプが途切れるように中断させられたのも、装備していたテイル・ウィップが消失したのもカタフのジ・エンドのせい。

テイル・ウィップは範囲内にいる間は装備すらできずアイテムストレージに強制的に戻されてしまうようだが、それを失うテルヨシの損失は他が思うよりもずっと大きい。

ギャラリーからの声も聞こえるほどに集中し直せてきたテルヨシだが、そこから聞こえてくる声の中には「あれが出ちやったかあ」とか「ここからは殴り合いだな」とかそんな少しだけ落胆したような、つまらなくなつたみたいなきろ気のある声があつて、それを聞いた時にカタフの言葉を振り返ると、その理由についても理解が及ぶ。

デュエルアバターが個性と呼べるものを出せる最もな要因は、様々なアビリティ・必殺技・強化外装によつてであり、それらを除いてしまふと残るのはそのアバターの色による特性のみ。

それも硬いか柔いかの差でしかなく、その中で緑系のカタフは青系のテルヨシより有利ということになる。

強力な没個性を誘発する必殺技。そんなものが存在してしまえるブレイン・バーストの可能性には恐れ入るが、こんな必殺技を持ち得たカタフという少年の心の闇はどんなものを秘めているのか。

しかし今はそんなカタフのことを考えてやれるほど余裕もないテルヨシは、目の前で相手を倒すだけの『作業』を始めようとするカタフに対してむしろ闘志を燃やす。

「没個性？ だから何だよ」

この必殺技の中での戦い方を知つてるカタフは、自分自身さえもその効果を受けてアビリティが使えないという大前提が頭にあるおかげで、咄嗟の行動などでアビリティに頼つたりをしない意識の切り替えがすでに完了しているようだ。

これは今のテルヨシでは完全にはできない、隙が生じる要因になり得るが、こんなことで対戦を楽しむ心をなくしてしまつている目の前のカタフが気に食わない。

その思いだけが今のテルヨシを突き動かして、攻めてきたカタフに

対してテルヨシも前進して真つ向から迎え撃ちに行く。

アビリティが無効化されてるということは、カタフの自慢の《クリティカル・ガード》も今は障害にはならない。

ならばと振るわれたカタフの拳に対して蹴りを選択したテルヨシは、全体重を乗せて放たれた拳に回し蹴りをぶつけて相殺どころか弾き返そうとする。

だがカタフは衝突の寸前で体重を後ろへと引き戻して拳を衝突させると、難なく弾き飛んだ拳を止めることなく体を回転させることで勢いを増して即座に横殴りの裏拳がテルヨシの足に命中。

威力を出し切った足に命中した拳によって簡単に弾かれた足に体を振られてバランスを崩したテルヨシに追撃するように流れるような反対の拳による正拳突きが繰り返し出されて顔面に命中。

ここで倒れる状態に持ち込まれて咄嗟にテイル・ウィップを使うとするが、それができないことを思い出して自力で踏み留まろうとしたところで、その足を払われて転倒させられてしまう。

「ぐっ……クソがッ！」

惨めな背中からの転倒に悪態をついたテルヨシに対して、あくまで作業的に次の拳を振り下ろしてきたカタフの非情さは空虚さえ覚える。

——そんな拳なら振るうな！

そう叫びたかったテルヨシだが、その余裕すらない中で行動にだけはしようと思考する。

テイル・ウィップはテルヨシにとって手足の延長であり、補助でもある。

《レガッタ・テイル》は上半身と下半身の強弱がかなりアンバランスで、強靱な下半身とは違って非力な上半身を補う意味でもテイル・ウィップはその手の代わりを担う場面が非常に多かった。

だからこそ、テルヨシ自身もいつからか『上半身は脆弱』という意識が強くなり、戦い方も蹴りが主体になっていったところがある。

思えば対戦の中で手を使うことさえも珍しいテルヨシの片寄り方は異常で、その代わりを担っていたテイル・ウィップの消失で使わざ

るを得ない状況となった今。ようやく気づくことがあった。

迫る拳に対してテルヨシは咄嗟に両手で手首を掴んで止め、その間に足を上半身に寄せて溜め、足裏を見せてカタフを蹴り上げる両足を揃えた蹴りをお見舞い。寸前まで掴んでいた腕のせいで逃げられなかったカタフはこれを逆の手を割り込ませて直撃は避けるも、威力を殺しきれずに仰け反りかける。

蹴りと同時にカタフの腕を放して、今度は両手でしっかりと地面を捉えて蹴り上げた足を横へと動かして体をコマのように回転させて、それに合わせて腕の力で体を持ち上げてカポエイラに繋げてカタフを蹴り飛ばしながら立ち上がる。

そんな華麗な足技に後退しながら驚いた様子のカタフは、すでに構え直したテルヨシにすぐ突っ込んでくることはなかったが、これにはやった本人が1番驚いてしまう。

以前までのテルヨシ……とはいってもそれが指す状態がどこから以前かはハッキリしないが、レベル1の頃にはやろうと思っても腕が支えきれずに沈んでいただろう今の動作が、今になって出来るようになっていたのは何故か。

その答えは単純明快。テルヨシのレベルアップボーナスによるアバターの強化は、何も『下半身のみ』に適応されるものではなく、アバター全体に反映されるボーナスだったということ。

「……あらら。こりゃ新発見」

それに気づいた時、テルヨシは新たな戦略が頭の中に浮かび笑みがこぼれる。

否。正確には浮かんだのではなく、このブレイン・バーストという対戦格闘ゲームを始めた頃に実現できなかったことができるようになって選択肢が増えてくれた。

レガッタ・テイルは言わずもがな、テルヨシの心の傷を体現して生まれたデュエルアバターで、歩けなかった足は再び自由に走り回りたいという願望から強靱な下半身を生み、母親への憎悪と嫌悪がティル・ウィップという醜悪な強化外装を生み出した。

だからその他の部分が脆弱で、現実のテルヨシとはほとんど真逆の

特性を持って生まれたレガッタ・テイルを操るために、テルヨシは上半身を使うことをやめた。

——強靱な下半身と脆弱な上半身。

それは現実のテルヨシには当てはまらない特性であり、本来のテルヨシは車椅子に乗ったままでも逆立ちして階段を登り降りできてしまうほどには上半身は鍛えられていて、その扱い方だってよく知っているのだ。

だからテルヨシはいくつもの対戦をする中で、パウンドのような所謂《パワフェクト・マッチ完全一致》にどこか羨ましいと思える感情を抱くことが少なくなかった。

現実の自分のように強靱な上半身も持ち得たらと、心のどこかで無い物ねだりをしていた。

だからこそテルヨシは笑う。ただ嬉しくて笑う。

そんなテルヨシの内心を知る由もないカタフは、未だ冷めたようなテンションでテルヨシの隙をうかがう構えだが、必殺技ゲージは動かないと減る一方なので大したインターバルもなく再び突貫してきて、選択肢の増えたテルヨシはその迎撃にワクワクする。

ただ腕が使えるとはいえ、さすがに元が脆弱なことを加味すれば攻撃や防御への直接の運用は向いていないため、あくまでも足技の補助が主になるが、それを念頭に置いて行う迎撃は、やはりテルヨシらしくトリッキーなもの。

迫ってくるカタフに対して後退しながら地形を確認し、すぐ後ろに建物オブジェクトの壁も迫り来る位置へとやって来る。

カタフには追い詰められて来たように見せるため余裕のない演技もしていたのが功を奏したか、逆に追い詰めたかのように拳を振るうカタフに迷いはない。

そしてついに壁を背に止まったテルヨシがそれに驚く演技をした瞬間を見逃さず、渾身の右ストレートを放ってきたカタフにニヤリとしながらその拳に添えるように左手を乗せて自らは真上へと跳び、その左手をわずかな支点にして身を捻ってカタフに肩車させてもらい、そこから後ろへと倒れながら回転で勢いをつけてカタフの体を持ち

上げ地面へと叩きつける変則フランケンシュタイナーで反撃。

さらにうつ伏せに倒したカタフから絡めていた足を抜いてカポエイラのように巧みに手足を使って倒立へと持っていき、そこからグツと全身のバネを利用して跳び上がったカタフの真上から渾身の蹴り下ろしを叩き込む。

しかしさすがのカタフも倒立するまでに気づいて転がりながら落下地点から逃げて回避させてしまうが、上手く受け身を取って地面を蹴らずに、立ち上がられる前に一撃だけでもと即座にカタフを追って不十分な体勢から1発だけ叩き込む。

カタフも必死だったのかそこからギリギリで両腕のガードをして後ろへとさらに転がりながらリカバリーして立ち上がり、そうなる追撃も難しいテルヨシも止まって構えることになる。

「……………不思議な人っすね」

何度目かわからない見合った状態で、依然としてテンションは低いような声色でテルヨシに語りかけたカタフ。

何が不思議なのかと自覚のないテルヨシは疑問しかないが、カタフが何を思っただけでそう言ったのかはすぐにはわからない。

「必殺技もアビリティも、強化外装さえ失って、戦術を根本から覆された人のほとんどは、ことごとく僕の拳で沈んでいったんす。中には反撃してくる人もいたんすが、それも仕方なく僕の土俵に上がってって感じで。でもテイルさんは何故かこんな状況になってから、どんどん生き生きとしていってるのがわかるっす。とてもじゃないっすけど個性を失った人がなるような精神状態ではないっす」

「……………かもな。いやなに。普段から使い慣れてそれが当たり前になってて、気づかないうちに来るようになってたことに気づけた今が楽しいのは確かだよ。その点ではお前に感謝してる」

「僕はこの必殺技が好きではないっす。自分と相手の個性を殺して、ただの殴り合いにしてしまうこの必殺技を持って生まれた自分を恨むこともあるっす。それでもこうして使ってしまうほどに追い詰められると思うんす。これは自分の弱さが招いた結果だよ」

「はっ？　なに言っただよ。相手の個性を殺すってのは確かにつま

んねー必殺技かもしれないけどな。その必殺技は紛うことなくお前の『個性』だろうが。その個性をお前自身が否定してやるなよ。そんなの《シーバ・カタストロフ》が可哀想だ」

カタフが言うように、多くのバーストリンカーはこの必殺技の前では無力になってきたのだろう。

事実、考えられる中で影響を強く受けるのはその強化外装に全てを注ぎ込んできたユニコや赤系のアバター全般。

相手によっては完封さえ容易なカタフの必殺技は確かに強力だが、それだけで勝敗の全てが決まるほどブレイン・バーストは甘くない。

カタフほどのハイランカーとなると、覆せるほどの相手とぶつかる機会も減ってそのことを実感しにくくなるのは仕方のないことではある。

それでこのテンションの落差を生み出しているなら、ハッキリとこう言おう。

「それから、オレをあんまりナメるなよ。没個性になろうと、この身ひとつありや、お前を倒すなんて朝飯前だ」

「……………フツ。それじゃ僕が弱いみたいない草っすよ。ハンデを背負った人に負けるほど、僕も甘くないっすよ!」

カタフがテンションを下げる理由は、こうなったらほとんどの確率で自分が勝ってしまう故。

つまりは自惚れもいいところで、言動もどこか上からの物言いなのも気になっていた。

だったらテルヨシがさらにその上から物を言うことで喧嘩を売り、それが妄言や強がりじゃないと思えば、カタフも笑うしかなかったのか、売り言葉に買い言葉。自分の強さを誇示して突貫してくる。

自分の強さに自信を持つのは必要なこと。

それがどこから自惚れになるかは価値観で変わってくるが、今のカタフに負けるのは嫌なテルヨシは、完膚なきまでの勝利のために集中力を増して迎撃に構えた。

連打。連打。連打。

繰り出す拳と足が何度もぶつかり合って、その度にガツ、ガツ、と

互いのHPゲージが削れていく。

HPゲージも残り3割を切って、互いが勝負を決める攻撃を仕掛けるタイミングを探り合って、射程ギリギリでの単発技が繰り返されてきたが、その攻防も残りHPゲージが2割になればクリーンヒットの1発で決まる圏内に入るため、戦術も大技の1発にシフト。

たった1手のミスが、相手の決定打を引き寄せてしまうギリギリの駆け引きはギャラリーにも緊張感を与えたのか、固唾を飲んで見守るギャラリーからの声援は全く聞こえない。

単にテルヨシが集中しすぎて耳に入ってこないだけかもしれないが、それだけの集中力をもってしても崩す隙を与えてこないカタフは本物の強者といえる。

「ハッ！ ハハッ！ 初めてつすよ！ ジ・エンドを使いながら対戦を楽しいと思えたのは！」

「そりゃ勿体ない戦い方してたんだな！ お前の気持ちひとつで簡単に変わるのによ！」

「そうつすね！ テイルさんには感謝するつす！」

そんな極限の状態でさえ、徐々にテンションを上げてきたのが目に見えてわかったカタフは、ついにそれを言葉にして拳に乗せて語ってくるが、テルヨシもアドレナリンがたまくりで蹴りを繰り返しながらそれに応えてしまう。

そうして再び対戦を楽しむカタフになって、テルヨシもそれを嬉しく思った瞬間。

「《エンド・ストップ》」

カタフの口から何らかの発声があり、それを意識するより先に出てしまった右足の蹴りに対して、カタフは左の拳を『当てるだけ』で防御。

そして訪れたあの気持ち悪い感覚がテルヨシを襲い、ピタリと止まってしまった右足をどうするかと思考を巡らせた隙にカタフの右拳がテルヨシの胸の中心を撃ち抜き、思わず後ずさる。

クリティカル・ガードが戻っている。

そうとわかったのが遅かったテルヨシが次に陥るのは、カタフの

ジ・エンドがその効力を失ったことに対する対応。

無駄に頭の回転が早くなっているからこそ陥る選択肢の多さによる硬直。

テイル・ウィップの再装着。必殺技による離脱。アビリティも用いた応戦。

それらの出来ることが一気に雪崩れ込んできたせいで最優先の行動を決められなかったテルヨシは、カタフの繰り出してきた左の拳にガードを構えるしかなく身を固めたが、カタフの拳はガードに当たることなく幻のように消えてしまい、思考を完全停止させるような《フアントム・フィスト》にはもう打つ手がなし。

当たらなかつた左拳にわずかに緩んだガードの隙間を正確に撃ち抜いてきたカタフの本物の左拳を顔面に叩き込まれたテルヨシは、仰け反る頭を反射的に戻して踏み留まってしまい、間髪入れずに叩き込まれた渾身の右ストレートでそのHPゲージを全損。

【YOU LOSE】

視界に浮かんだその炎文字を見ながらに物言えぬ浮遊霊になったテルヨシは、目の前で大歓声に応えるカタフを見ながら、このギリギリで必殺技さえも餌にしたカタフの戦術に感心してしまった。

サアヤからは必殺技を任意で解除できるようなことは教えられなかつたので、カタフもほとんどやらないことだったので、あそこで相手に選択肢を増やすのは1つの賭けではあつただろうと思うし、なまじ集中していたからこそ様々な思考が頭の中を巡ってしまつたのは運が良かったと言える。

だからこそカタフの勝負強さは認めるし、次は負けなと思いつつも、この対戦でおぼろ気にわかつた自分に足りないものについてを思考しかけたところで、ギャラリーに伝えていたカタフがテルヨシのいるだろう位置に向き直つてペコリとお辞儀。

「ありがとうございました！ テイルさんとの対戦は凄く……物凄く楽しかつたつす！ またどこかで、今度は僕のホームの墨田戦域で戦いたいつす！」

物言えぬ浮遊霊のテルヨシに対して答えを待つわけでもなく、そん

なことを言ってからギャラリーにも丁寧なお辞儀をしたカタフは、清々しいまでの楽しい感情を剥き出しのままフィールドを去っていき、それによってテルヨシもギャラリーも対戦の余韻に浸る間もなくフィールドを去ることとなったのだった。

Acceleration Second 24

「じゃあはいっ、ピースっ！」

《シーバ・カタストロフ》との対戦に敗北して現実世界へと戻ってきたテルヨシは、早々に対面のサアヤから「なに負けてんのよ」に始まるお叱りを受けてぐうの音も出ず、単純に対戦を楽しんでいたマリアはそれを横目に呑気にジュースを飲みながら終わるのを待つ。

待つくらいなら割り込んで流れを変えてくれとも言えないまま、3分くらい続いたサアヤによるダメ出しを飲み干して糧としたところで、時間もいい感じに経過していたから、今日は解散ということに。家まで送ろうかと席を立つ前に提案してみたテルヨシだったが、サアヤは家が近いから送ってもらおう必要はないと断られてしまいガツクリ。

その様子を見ていた流川さんが笑いながらに近寄ってきて「本当は恥ずかしいだけだから」と小言してくれて、実はそれはわかってたテルヨシも「そういうところが可愛いのでオツケーです」と返して2人してサアヤを見てニヤニヤ。

そんな2人に謎の怒りが湧いたサアヤが本格的に怒る前に笑いを収めた2人は、誤魔化すようにマリアへとシフトさせ、さっき言っていた記念撮影をしようと提案。

マスターのニューロリンカーで流川さん含めた4人で撮った《視界スクリーンショット》は後日、流川さんからサアヤが貰って配布することになって店を出て、そこでサアヤと別れたテルヨシとマリアは、マリアの腹の虫が鳴ったのを皮切りにちよつと急いで帰宅し夕食としたのだった。

なんだか今日だけで色々あったせいで密度が半端なかったが、全てを終えてベッドでくつろぎながらテルヨシが考えていたのは、それらを経ておぼろ気に辿り着いた1つの結果。

バーストリンカーになって2年ちよつとが経ったテルヨシだが、そのレベルアップの速度はユニコにも負けず劣らずの速度で駆け上

がってしまったところがある。

それ故に他のハイランカーよりもひと回り……いや、場合によってはふた回りは経験値に差があることをほぼ確信した。

その差は今日のカタフとの最後の駆け引きや、フーコとの対戦でも顕著に現れ、そうしたギリギリのところまで勝ちをもぎ取るための力が決定的に不足している。そう感じたのだ。

「最後の最後で踏ん張れる力と、勝ちを引き寄せる運ってやつか。運と表現するのはあれだが、実力者ってのはその運を力で引き寄せる必然性を持つてるもんな」

じゃあそんな経験値の差を埋めるにはどうするべきか。

単純な話をすれば、それを培うための対戦を今の何倍も多くしてしまうのが手っ取り早いのが、そんなことが出来ない身の上事情は今さら説明するまでもないし、対戦にかまけて現実世界をおろそかにしても本末転倒。あくまでブレイン・バーストはゲームなのだから。

それではどうすればいいのか。それを夕食後からずっと考えてきたテルヨシは、寝る直前の時間になってある1つの策を思いついたが、あまりにもリスクで事によっては全くの無意味に終わる可能性もなくはないし、得るもの以上に失うものの方が多いこともあり得る。

「……………だけどこの差は早急に埋めないとなダメな気がするんだよなあ」

しかしそれでも今、加速世界に迫る脅威は無視できないものだし、そうした問題に直面した時にこの差が致命的な敗北を招くことになるかもしれない。

そんなことが起きてから後悔するのは嫌だし、いつかリュウジが言っていたこともこれに起因しているのがわかって覚悟を決めたテルヨシは、ベッドから起き上がって電気を点けないうままリビングに移動し、ホームサーバーと有線接続。

「逆算すると……まあ50分くらいか」

加速世界への時間の換算はまだちよつと遅いので、現実世界での10分が加速世界で約7日だというザックリとした計算を元に割り出

した暗算で切断セーフティを『50分後』に設定したテルヨシは、かつてないほどに長期滞在することになる《無制限中立フィールド》にドキドキしながらコマンド発声しようとする。

「……テル?」

「によわっ!?!」

その直前にトイレにでも行こうとしていたのか、自室から出てきたマリアがテルヨシに気づいて声をかけてくるハプニングが起き、奇声をあげてソファアールから飛び上がったが、そんなテルヨシにビックリしつつも有線接続をしているテルヨシを確認したマリアは、これから何をしようとしていたかを理解して首をかしげる。

《エネミー狩り》とか? 夜更かししちゃダメだよ?」

「ぐぬ……マリアに言われるとマジ反論できないけど、明日には回せない用事だからなあ」

「待ち合わせしてたり? だったら邪魔だよね」

「待ち合わせはしてないよ。ただ、長丁場になりそうだからマリアは付き合わせられないかな。ごめん」

「ううん。テルにとって大事なことなら早く解決してきて。おやすみなさい」

「おう、おやすみ」

勘が良いマリアには何か余計なことを言っつけて付いてきたりされても困ってしまうので、個人的な用事だからとマリアを遠ざける言葉を選んで寝かせにいくも、なんとなく嘘を言ってる感覚もあるので申し訳なくも思う。

それでも付き合わせるには精神的にかなりキツイので、後日にも聞かれたらちゃんと話そうと心に決めて、トイレに行ってから自室へと入っていったマリアを見届けてから改めて加速コマンドを口にしてフィールドへとダイブする。

《アンリミテッド・バースト》

おそらく自身が初めて自発的に来た無制限中立フィールド。

誰の助けもなく、理不尽な力を持つエネミーが闊歩する危険なフィールドに1人で降り立ってわかる心細さは、何も知らず能天気な

1人でダイブした2年前とは何もかもが全く違った。

あの無知さは今になって恐ろしいほどのバカさ加減だったことを理解しつつ、自宅マンションの屋内に降り立ったテルヨシは、壁の構造からある程度フィールド属性を特定しつつ、その壁を壊して外へと出る。

「幸先悪い……」

予測した時点で嫌な予感はしていたものの、実際に見えた外の景色にゲンナリしてしまうのは、曇天の空に負けないほどの暗色に染め上がった禍々しい建物オブジェクトや普通の生物が生きていくには辛そうな毒々しい大地で形成される《煉獄》ステージ。

これから危険を承知で武者修行に出ようというのにこの禍々しさは笑えないが、こんなことでいちいち一喜一憂していたら精神的によろしくないのも、早々に切り替えて「これ以下はない」と頭で反復させてから建物オブジェクトから飛び降りて地面に着地。

通常対戦フィールドでもいる奇妙な生物オブジェクトがうごめいているのを苦笑いしつつも、それらを潰して必殺技ゲージを溜めながら目的地への移動を開始した。

「うーん、そういや必殺技とか極力は封印の方がいいのか」

始めは溜めた必殺技ゲージを温存して移動していたテルヨシだったが、目的地に近づくにつれてこれからやろうとしていることを鑑み、下手に必殺技が使える状況は甘えだということに気づき、どうせ使わないならショットカットしてしまおうと、割と避けてきた建物オブジェクトを《インパクト・ジャンプ》を用いて飛び越えて、途中からほぼ一直線に進めば、ものの30分程度で目的地が見えてしまった。

エネミーとも遭遇することなく来られたのは運が良かったが、こんな運が強くても仕方ないなあと皮肉に思ったところで、辿り着いた千代田区麹町の警察署前から、東の方向にそびえる《帝城》を見上げる。「とりあえず今回はあそこは無視して……つと」

しかしテルヨシの今回の目的はその帝城ではなく、割とすぐに視線を下ろして、道の先に見える巨大な門。

現実世界では半蔵門に符合するそこは、加速世界の《超級》エネミー

である《四神》が守護する四方門の西側に位置する1つ。

情報によればこの西門は四神《ビヤッコ》が行く手を阻み、かつて黒雪姫とフリーコが挑み敗走した、超スピードと高攻撃力を有する四足歩行の虎型エネミー。

「さてさて、何回……何百回殺されるかわからんが、行きますか」

情報だけでも1人ではどうすることも出来ない絶対的な力を持つビヤッコだが、それほど覆せない相手ならば『修行相手』にはもってこい。

何かを掴めれば万々歳。逆に本当に為す術なく蹂躪され続けられただの無駄骨。

《無限EK》の危険もなきにしもあらずだが、西門から遠ければその危険性も低いし、通常対戦では1日に1度の挑戦権が弊害となつてすぐに相手が枯渇してしまうが、ここならばテルヨシのバーストポイントがある限りはビヤッコを相手に戦うことができる。

もつと手頃な《小獣級》や《野獣級》を相手にしてもいいのだが、無制限中立フィールドでは予期せぬ《変遷》が何度か邪魔になることもあるので、不変の存在である四神が相手として最適なのだ。

その中でビヤッコを選んだのは、様々な情報を鑑みて物理攻撃に特化したエネミーであることがわかっていて、先日に相対した《スザク》は特殊すぎて相手として悪く、東門の《セイリユウ》はこちらのバーストポイントを吸い取って強制的にレベルダウンまでさせる《レベルドレイン》を撃ってくるため、そもそもの根底が覆されるから即却下。

北門の《ゲンブ》も少ない情報ながら重力を操って超重量で押し潰すといった戦法を使うらしく、そんな重力攻撃で祭壇付近まで引き寄せられでもしたらそれこそ無限EKでさようならとなるので、結果から言えば消去法ではない。

それでもビヤッコの現物を見たことがないテルヨシは、スザクくらいの大きさもあつたらマジで洒落にならないふざけんなどと言える自信があつたが、本来ならばレベル9に上がるために貯めていた1万近いバーストポイントをもて余していたわけで、さらに言えばこのビヤッコさえもいつか攻略する帝城の最初の関門でしかないのだ。

それを仮定するなら、テルヨシが相手にする四神はこのビヤッコになることは確率的に高い。

同時相手が条件になるので、1番嫌なセイリユウを相手する可能性もあるが、それは実際に攻略に乗り出した時に決めることなので今は無視して、ビヤッコ相手に光明を見出だす必要はあるわけだ。

「高度なAIを持ったエネミーなのも忘れずに……来な、ビヤッコ」
最後に侵入者をただ機械のように迎撃するエネミーではなく、自らが考えて動くこともある理解を上回るエネミーであることを記憶に刻んで西門に至る大橋に足を踏み入れたテルヨシは、その瞬間に最奥の祭壇に発生した竜巻を凝視し、それが収まって中から現れたビヤッコに思わず足が後退しかける。

遠目からでもわかるほどに鋭い牙と爪。

逆立つ毛もそのほぼ全てが混じり気のない白色で、虎のように浮かぶ体の模様は真逆に位置する漆黒で染められていて、敵と見なしたテルヨシを見る目はマリアを上回る金色。

現実世界にもホワイトタイガーという希少種の虎が存在し、テルヨシも小さい頃にサクラと一緒に動物図鑑を見てカツコ良いと思ったものだが、このビヤッコは体高だけでも8mはあるし、体長などそこから計れば10mを越えているはず。

足だけですでにテルヨシが踏み潰せてしまうほど大きいそれには悪態もつきたくなくなるし、爪ひとつだけでテルヨシサイズとなれば回避も全身全霊で行わないと簡単に餌食となるだろう。

「スザクとは違った絶望感が押し寄せてくるな……」

スザクの際は黒雪姫やサアヤもいたので、及び腰になった段階でも踏ん張れたが、今は完全に孤立無援の状態で、その足を止める存在はいない。

今ならまだたった1、2歩ほど後退してしまえば、迫り来るビヤッコから逃げることは容易だ。

だがそれをしてしまえばおそらく、もう2度とテルヨシは黒雪姫達と同じ舞台上上がることは叶わない。

たった少し。ほんの少しの差でしかない経験値で、長い目で見れば

急ぐ必要もないことだ。

それでも……

「……追いつかなきゃ、ダメだろ」

レベル8になった自分の選択。

それに見合うだけの實力を持つ責任と覚悟。

数々のバーストリンカーから勝ち取ったバーストポイントで上げたレベルは、決してテルヨシだけで成し得たものではなく、彼、彼女らとの経験を糧にした結晶。

それがフーコやカタフ達に劣っていないはずがない。

そんな覚悟がビヤッコに伝わったのか、出現から少しだけ悠長に構えていたビヤッコが、猛々しい肉食動物のそれをさらに獰猛にしたような咆哮を天に響かせてから、その巨体を物ともしない速度で走り出しテルヨシを屠らんと躍動する。

近づけば近づくほどビヤッコの巨体さが如実になって、回避に動くことすら不可能に思えてしまうが、極限だからこそ意味のあるこの修行の中で活路を見出ださねばならない初撃。

始めから全開なテルヨシの集中力から導いた行動は、やはり全力の回避。

接近してきたビヤッコはまず、挨拶代わりの右の爪をやや斜めから内側へと振り下ろしてきて、その前足が地面へと叩きつけられるよりかなり早い段階で大きく前進しビヤッコの懐へとスライディングで潜り込んだテルヨシは、頭スレスレで通り過ぎた右前足に肝を冷やしながら流れるように立ち上がり、頭上にあるビヤッコの顔を見上げる。

すると懐に入られたビヤッコも驚くべき反応ですかさず伏せの姿勢へと移行して頭を下げ、そこにあったテルヨシを噛み千切らんと牙をギラつかせる。

伏せによつて退路をビヤッコの前方のみにされたこともあって、迷いなくそちらに逃げようとしたのだが、ビヤッコは伏せをしつつその前足を抱え込むようにして内側へと寄せてテルヨシの退路を断ち、その前足の壁に盛大にぶつかったテルヨシは、そのわずかな空洞に顔を

突っ込んできたビヤッコに為す術なく噛み砕かれてゲームオーバー。

役目を終えたビヤッコはつまらないといった雰囲気を出しながら立ち上がり、踵を返して歩きながらその姿を風のように消していき、それを浮遊霊状態で見ていたテルヨシは、遊んでさえいるようなビヤッコの挙動にイラツとしつつも、初撃は避けられたことをまず良しとする。

あれこれ1度には求めすぎても仕方ないし、こういうことになるのは想定して切断セーフティーを50分後にしてきたのだから、まだまだ焦るタイミングではない。

1つ1つクリアすべき課題を出して、着実にクリアしていく。

ゆっくりでもいいから後退せずに前進すれば、自分が納得のいく段階にまでは至れるはず。

まずは初撃のパターンを見て確実に、どんな攻撃でも避けられるようにする。次に繋がる動きはそこをクリアしてから考えればいい。

浮遊霊状態でも頭を休めることなく、先ほどの初撃の他に考えうる攻撃をいくつか予測して、ビヤッコのサイズからどれだけ動けば紙一重で避けられるかをシミュレート。

ただ避けるのではダメ。次に繋げるには余裕がなければ手詰まりだ。次に繋げるための回避はどんな状況でも必ず活きてくるから、何がなんでもビヤッコ相手に習得しなければならぬ。

しかしあまりに集中していたせいで蘇生時間を見た時には残り2分となっていて、少しくらいは頭を休めようとしていた計画が完全に狂ってしまったのは痛い。幸い集中力の方は持続していたので勢いで行こうと蘇生を待ち、いざ2回戦！

蘇生とほぼ同時に出現を終えて接近してきたビヤッコの迅速さは嫌になるが、このタイムラグなら無限EKにはならず済むなどしっかり後のことも考えてから、再び迫ったビヤッコの右前足の剛爪が唸りをあげてくるのを今度は《テイル・ウィップ》で爪の先端を掴んでそこを起点に体を後退させながら浮き上がらせて1回転。地面に付いた右前足の上に着地してみせる。

「つと、とあつと！」

ゴツゴツした右前足にバランスがわずかに崩れてしまった一瞬の隙。

その一瞬で今度は左前足が豪快に横から振るわれて、壁が迫ってくるような圧迫感に心臓が飛び出そうなるほどの衝撃を受けて思考が停止。

それでも何かしなきゃという生存本能が咄嗟に右前足の上でベタツと伏せる動作をギリギリで完了してくれたが、それで避けられるほど甘くはなく、避けきれなかった背中に剛爪が掠ってそれだけでHPゲージがガリツと3割も削られてしまう。

さらに当たった衝撃で右前足から振り落とされて横へと落ちると、少しだけ浮かせてズラしてきた右前足がのし掛かってきて圧死。再び蘇生待機状態となってしまった。

進歩したようなそうでないような2回戦にはテルヨシ自身が納得しにくいながら、何も得られなかったなんてことはなかったのだから次に繋ごうと再び思考を開始。

今度はしっかりと頭も休めようと30分は確保して休息に努めてからの3回戦は、まさかの接近しながらの大咆哮による衝撃波攻撃で、開幕から吹き飛ばまいと踏ん張ったところに近づかれてガブリ。それでチーン。

衝撃波自体に大したダメージはなかったものの、絶妙に大橋から出ていかにいくらしいの衝撃と一時的に聴覚を使えなくされる爆音は使われると厄介。

しかも避けようにも大橋の幅いっぱい範囲のせいで避けようがなく、耐えるとするならテイル・ウィップを壁にしつつ軽減するしかないかもしれない。

予備動作は見て覚えたので2度は食らうまいと備えた4回戦。

大咆哮は使ってこなかったが、ジクザグのステップを交えて接近してきたビヤッコは、本当に最後の瞬間まで何をしてくるかわからないまま射程に入って、そこから体を90度傾けて右後ろ足を前に持つてくると、その勢いで唸る尻尾が横風ぎに払われてテルヨシを強襲。

尻尾なら或いはと渾身の力でテイル・ウィップを土台にして蹴りで

迎撃してみるが、やはり大きさが規格外で横倒しの電柱をぶつけられたような衝撃で簡単に吹き飛んだテルヨシを、さらに左前足がバゴンツ！叩き落とすように振るわれて死亡。

——なんか遊ばれてるよね。遊ばれてるよね！

まるでこつちを嘲笑うかのようにその挙動を変えて攻撃してくるビヤッコの統一感のなさはやはり高度なAIを持っているからなのかもしれないが、それにしてもテルヨシの出方をうかがうようなやり方にはずいぶん上から見られているような気がしてならない。

実際に圧倒的な実力差があるので上から見られるのは仕方ないが、こちらの意図をわかって馬鹿にされてるような気がしないでもないので、ちよつと今度はマジで1発反撃するつもりでいこうと考えて色々としミュレートしてから挑んだ5回戦。

蘇生からビヤッコが接近してくるのを待つのではなく、少しだけ前のめりになったタイミングで、突然頭に響くような声が聞こえてくる。

——小さき者よ。我が眠りを妨げた報いを受けよ。

瞬間。だいぶ慣れてきていたビヤッコのプレッシャーが急に跳ね上がって、それにわずかに臆して体が硬直した隙に接近を完了したビヤッコは、撫でるようにテルヨシに左前足を触れさせて、そこからぐりんっ！体を捻って器用に180度回転しながらテルヨシを自分の後方。つまりはテルヨシからすれば大橋の奥へと投げ込んできて、あまりに突然のことに《インスタント・ストップ》で停止する間もなく大橋の中腹辺りまで吹き飛んだテルヨシは、そこで投げ込むのと同時にジャンプしていたビヤッコに踏み潰されて死亡してしまう。

——ヤバい。これはほぼ確実に、いや、間違いなく無限EKになっている。

——やばいやばいやばいやばい！

非常に精神的に不安定な状態で《無制限中立フィールド》で死亡し、物言えぬ浮遊霊となったテルヨシは、全く頭の整理ができないままかれこれ15分ほど思考がとっ散らかっていた。

急速なレベルアップによる他のハイランカー達との小さくも決定的な実力の差を埋めるべく、自らを追い込みながら極限の緊張感を持って挑める修行として《帝城》の西門を守護する四神《ビヤッコ》との無謀な攻防を《無限EK》にならない位置取りでしていた。

のだが、数回の攻防の後に急にビヤッコがその挙動を即死させるものから変えて、テルヨシを西門へと意図的に近づける攻撃をしてきて、現在テルヨシは500mある大橋の半ばほどで死亡してしまっている。

かつて南門の《スザク》でも同じくらしいの位置で死亡し無限EKに近い状態に陥った。

あの時は蘇生からわずかながらも1歩は後退することができたので、バーストポイントに余裕があれば代償は大きいが脱出することはできた。

しかしだ。今回は事情が全く違う。

突然に訪れた無限EKの危機に取り乱しまくって、これ以上ないほどに混乱して逆に落ち着いてきたところで、蘇生まで残り30分ほどとなり、ようやく順を追って状況を整理してこの後はどうするべきかを決定する。

まずはビヤッコの行動の変化についてを考えると、たった数回の対峙でこちらの意図を読んで安全圏にいたテルヨシを大橋の奥へと引き寄せてきた。

これだけでも恐ろしい事態だが、驚くべきはそうした考えに至れる高度すぎるAIと、回避優先で動いていたテルヨシをわずかでも攻撃の意思を持たせて前のめりになるように誘導してきた策略。

もはやそれは人と変わらない確固たる感情と思考力を有している

証明に他ならないが、問題はそれほどの思考と行動の自由を持って次の蘇生で何をしてくるのかわからないことだ。

最悪なのは、こちらがどうすることもできずにさらに西門へと近づける攻撃をしてきてビヤツコの祭壇の目の前で死亡すること。

そうなればわずかに残された無限EK脱出の望みが完全に断たれてしまう。

いや、そうなってもまだわずかながらに可能性があることはある、かもしれない。

その可能性は先週に起きたハルユキと謡の2人の帝城への侵入。

後に聞いた話によれば、四方門の扉には四神を倒さなければ開かない封印が施されているが、その封印を内側から《トリリード・テトラオキサイド》が破壊してくれているらしいのだ。

1度開いて閉じれば封印は復活してしまうようだが、ビヤツコの守る西門を突破したバーストリンカーがいなければ。たとえ封印が復活していても、定期的に封印を壊してくれているなら、大橋を抜けるよりも扉を開けて帝城に侵入した方が無駄死にだけは避けられるかもしれない。

もちろん、その後は帝城の中のエネミーに惨殺される可能性があるが、ハルユキ達の話では安置は確実に存在するので、それまで切断セーフティーが働くのをひたすらに待つのも手だ。

——うーん、ないな。

と、最悪に対する回避策を練ってはみたが、テルヨシが切断セーフティーを設定したのは現実時間で50分後。

まだこちらでも6時間程度。つまりは現実時間で20秒くらいしか経っていない計算だ。

現実世界での50分は加速世界では約1ヶ月にもなるため、それだけの期間を呆然と帝城内で過ごすのは精神衛生上よろしくない。というよりも発狂する。

今の状況も大して変わらない気もするが、それならビヤツコの無限EKからの脱出のために頭を使っている方がよっぽど気が楽なのは、マシ程度。

そうこう考えていたら蘇生まで残り3分を切ってしまい、蘇生後にやる最優先はまず、これ以上ビヤッコに西門へと近づける攻撃をさせない、または食らわないこと。

させないというのはほぼ不可能なので、全力の回避に動くのが得策だが、あの高度なAI相手に簡単ではないのはもうわかった。それでも1歩ずつでも西門から遠ざからなくては詰みだ。死ぬ気でやるしかない。

そうして覚悟を決めて蘇生を迎えて、それとほぼ同時に出現したビヤッコが開幕から踏み潰さんとその前足を振り下ろしてきたのを全力の横っ飛びで外側に躲してみるが、大橋に突き刺さった前足の衝撃波で意図せぬ着地を迫られてしまい、仰向けで大橋に転がったところへ反対の前足がドゴーン！ 無事に1歩も後退できずに死亡する。進展なしとはまさにこの事。

せめて後ろに全力回避していれば後退できたものを、何故に横っ飛びしたのか自分でも謎だが、回避の方向すらもビヤッコにコントロールされているとしたら後退も容易ではないかもしれない。

なんとかして1歩ずつでも後退を。

そうした思考に陥ったテルヨシの牛歩戦術は、いつの間にか本来の目的を忘れるほどの焦りとなって現れ、ここから実に21回ほどは西門から1歩ずつ後退する状況が続き、思考が単純化していった。

一撃食らう前に1歩でも後退する。

それは確かに大事なことはあるが、テルヨシがこの西門へとやって来た真の目的はその『一撃をもらわない見切り』を身に付けることに他ならない。

だから今の状況で『一撃もらう前提』のこの牛歩戦術は明らかに目的に反している愚行。

始めから避ける気もない、後退しか考えていないこの行為が果たして何に繋がるのか。何に活きるというのか。

それを考え始めたのは、実に33回目のビヤッコによる即死攻撃を受けた蘇生待機時間のことだった。

すでにビヤッコに殺されて1日以上が経過してしまっていたが、

ずっと後退ばかりを考えてビヤッコの動きに反応することを放棄していた自分を振り返って恥ずかしい気持ちが入み上げてくる。

もちろん、西門へと近づける攻撃への注意は忘れていなかったが、それとこれとは話が違ってくる。

意識の違い。一言で表すならばそんな感じだが、その気持ちひとつで変わるものは確実にあるのだ。

逃げの回避と攻めの回避。

それは同じ回避でも動きがまるで違ってくるもの。

ある種の開き直りにはなるが、切断セーフティーのおかげで全損はしないテルヨシは、無限EKは甘んじて受ける覚悟を決めて33回目の蘇生をする1分前から極限集中モードに移行し、好き勝手にやってくれたビヤッコに一撃入れるために最小限の回避からカウンター攻撃に転じようとする。

「……さあ来いよビヤッコ」

そんな言葉が出た時には、すでに蘇生を終えてビヤッコも出現してその前足を叩きつけてくる瞬間ではあった。

だがテルヨシとてこの攻撃はもう20回以上もされているのだから、今さら恐怖で足がすくんだりはずせ、2回目の攻防の際に行なった《テイル・ウィップ》を前足の爪の1つに巻きつけて体を逃がすように後ろから浮かせてビヤッコの叩きつけられた前足に着地。

前はここでバランスを崩してやられたが、今度はそうならないように硬い爪の上に綺麗に足を付いて、間髪入れずに横風ぎに振るわれた逆の前足に対してもテイル・ウィップを爪に巻きつけて、体を前足の範囲の外に逃がして空振りさせ、爪に引っ付いたまま今度は空振りした前足の上に着地する。

ここまで為す術なく即死してきたテルヨシの急な粘りにビヤッコがわずかに反応が遅れた一瞬の隙。ただのエネミーなら機械的に処理できたであろう人間的な隙を縫うように前足を駆けたテルヨシは、そこから一気にビヤッコの顔面へと全力の蹴りをお見舞いしてやる。

とはいえビヤッコの顔も大きいので一番当てやすい鼻っ面にということになったが、まがいなりにもテルヨシのポテンシャルでかなり

の比重を占める足技はビヤッコにも多少は効いたらしく、今まで聞いたことのない声を上げて、直後にその牙で噛み砕いてこようとしたりころを鼻っ面を踏み台にバックジャンプして辛くも回避して大橋の上に着地。

「へっ、どうだ……よっ!?!」

これだけの攻防で相当な精神力を消耗したテルヨシがようやく出来た反撃にドヤツた瞬間。

まさに有無を言わせぬ無慈悲な前足の一撃がテルヨシに振り下ろされてペシャンコに。

しかしこれがもたらした結果は大いなる収穫だった。

ビヤッコに一撃を入れることに重点を置いたにもかかわらず、テルヨシが死亡した位置は先ほど蘇生した位置よりも5mほども後ろになったのだ。

これがスザク相手だったなら到底無理な所業だったのは言うまでもなく、本当に物理特化のビヤッコ相手に良かったと思いつつ、あまりにも消耗が激しい精神力を回復するためにすぐに思考を停止して感覚的に寝るような体制を取って休息に努める。

34回目の蘇生。

比較的小調子者なテルヨシではあるが、置かれた状況は依然として最悪の1歩手前なのは変わりないため、ギリギリ寝過ぎさないタイミングで意識を覚醒させ集中力を高めて挑んだ攻防。

ビヤッコもやはり高度なAIを持つエネミーで、単調な攻撃は反撃の際を与えると踏んだのか、即死はないだろうが反撃の際を与えない振りの小さい素早い連撃でテルヨシを攻め立ててくる。

しかしテルヨシの集中力はその攻撃への対応も早く、感覚的にその攻撃が即死しないと判断して、本当に紙一重の回避で爪に掠ってあえてダメージを受けることで必殺技ゲージをチャージ。

掠るとはいえ相手はビヤッコ。そのダメージはたったの一撃で3割近くも削られてしまい、3発は耐えられないかもしれないほどのダメージをギリギリ2発に留めて、必殺技ゲージを8割チャージすることに成功する。

徐々にビヤッコに対して慣れが出始めたものの、テルヨシの集中力だつて休息を交えても1日維持するだけで大変なのだから、その負担となる無限EKに近い状態からは脱しておきたい。

『《インパクト・ジャンプ》!!』

だからこそ2度目があるかどうかわからないチャンスを逃す手はなく、すかさず溜まったゲージを消費して後方に大きくバックジャンプして距離を稼ぎ、40m地点で着地して追走してくるビヤッコに注意しながらゲージの許す2回、同じジャンプをして合計120m大橋を後退することに成功し、さらに追いついてきたビヤッコの攻撃を1度だけ全力回避してそこでまた死亡。

ここまでを合計するとおよそ150mは後退できたことになり、残り100mほどで大橋を抜けられるところまで来て、浮遊霊状態でも橋の終わりが見えたので、次のビヤッコの出方には細心の注意を払いながら残りの精神力を振り絞るつもりで、とにかく1度ビヤッコのテリトリから抜けてしまおうと考える。

もちろん言うほど簡単なわけではないし、残り100mと気を緩めれば、またいつ大橋の奥へと引き込まれるかわかったものではない。

どんな隙も見逃さない集中力と判断力と行動力。これらが揃って初めてビヤッコと対峙できると考えれば、その消耗が激しいのは当然だが、この極限状態でなければ引き上げることができなかつた今のコンディションは、テルヨシ的には悪くないと感じている。

恐怖しかなかったビヤッコからのプレッシャーにもいくらか胆力がついたし、確実に動きが良くなっている自分に楽しさや喜びといった感情が芽生え始めているのも自覚してきた。

——やっぱオレってバカなのかもな。

浮遊霊状態で休みながらに、この状況を楽しみ始めてる自分が相当なバカであると笑い、気を引き締めなきやと思えば思うほど頭は『次はどうやってしのいでやろう』と思考してしまっているのだ。

そんな思考の変化が実際に影響しないわけもなく、35回目の蘇生ではそのせいで集中力を欠き、心と体のバランスが崩れた隙を突かれて1歩も動くことなく即死。

あまりに呆気ない死に方だったからか、テルヨシを倒したビヤッコも「急にどうしたんだ？」といった雰囲気で踵を返して消えてしまい、どんな状況も楽しもうとする心は大事だが、それに対して体がまだ追いついていかないのをしつかりと理解して、楽しもうとする心を落ち着かせる作業に待機時間を消費。

次の蘇生でも呆気なく死亡してしまうが、その時にはもう思考の切り替えも完全に完了して、まずは残り100mをどうにかしようところまでの攻防を頭で反復させて、その射程と威力などを寸分の狂いもなく把握していった。

アビリティのレベルアップ以外での取得方法の条件には『逆境』という状況が必ず立ちはだかる。

かつてテルヨシはその逆境を2度も打ち破って《スイッチ・アーマメント》と《インスタント・ステップ》の2つのアビリティ取得に成功している。

その逆境を作った自らの《親》である《レイズン・モビル》は、決してそうした意図があつて『1日100回の直結対戦』などという馬鹿げた特訓をやったわけではないだろうが、大きな壁を目の前にした時に立ち向かう力をテルヨシは才能と呼べるレベルで持ち合わせていた。

その後を訪れた黒雪姫との対戦の日々でも、バイトと対戦の両立でも、現実でのトラウマとの向き合いでも、テルヨシはその歩みを止めることなく乗り越えてきた。

アビリティ取得に逆境が必要ではあるが、それは別にアビリティに限ったことではない。

人が成長するために必要な壁もまた、逆境などといった自分にとって苦しい状態に陥ることが必要なこともあるのだ。

それだけを聞いてことごとく乗り越えてきたテルヨシはなんだかM属性の逆境好きみたいに思えてしまうが、逆境の中で笑ってしまうテルヨシが異常なのは誰が見ても明らかではあるはず。

振るわれる一撃一撃が必殺のビヤッコの猛攻。

数を重ねる毎にそのパターンに法則性を見出だせなくなる高度な

AIが繰り出す攻撃の1つ1つが襲いかかってくる度にその顔を変えてくる。

およそ攻略などと呼べるパターンを持たないビヤッコに対してテルヨシはすでに238回目の敗北に喫して、すでに死亡した回数すら累計ダイブ時間で計算しないとわからなくなってきたが、それだけの回数を死んでいくと見えてくるものもある。

すでに無限EKからは脱して、再び最初に位置取っていた大橋の入り口付近で戦闘を継続していたテルヨシだが、その間に2度もまた引き戻される攻撃で100mほど引き込まれたりとあった。

その度に心が折れかけたが、自分の未熟さから来る状況に鞭を打って奮い立たせてようやく今の位置を100時間ほど維持している。

そして驚くべきはその1度の戦闘継続時間。

まだまだバラつきは半端なく、平均してみれば微々たるものだが、最長の継続時間では53秒を叩き出していた。

その最たる要因は、かすかに芽生え始めたテルヨシの観察眼の覚醒。

別にシステマ的な表示が増えたとかそんなわけではないが、ビヤッコの攻撃を数多く受けていくうちにテルヨシにはその攻撃に含まれる『殺傷力』や『予測ダメージ』が感覚的にわかるようになったのだ。

そのおかげで完全に躲すべき攻撃と紙一重で受けて必殺技ゲージを溜める攻撃を選択することができ、その溜めた必殺技ゲージをここぞのタイミングでだけ使える判断力が磨かれていった。

それらが完全にガツチリ噛み合った時のテルヨシは、わずかながらにビヤッコ相手に余裕ができ、その顔はあり得ないほど笑っていた。

そして大橋を出て近くの建物オブジェクトの上で12時間にも及ぶ爆睡から起きて挑んだ756回目の攻防。

現実時間ではすでに45分以上が経過していることになるが、加速世界ではそろそろ30日が経とうかという馬鹿げた日々をほぼ対戦と休息だけで過ごしたテルヨシは、これほどの期間を加速世界で過ごしてから改めてフーコやカタフ達との差が小さくもとてつもないものであったことを自覚。

これだけでもテルヨシには長いと感じたのに、フーコ達はこれ以上の時間を加速世界で過ごしてきたのだ。そりゃ簡単に埋まる差なわけがない。故に荒療治は必須だったのだ。

「これでラストだビヤッコ。最後くらい花を持たせてくれよな」

残りの時間はまだあるが、1ヶ月もぶつ続けで戦い続けたテルヨシの精神力の方が先に尽きそうで、それは睡眠を経ても大差なくなったことから、この辺りが引き際と見て最後と決め大橋へと侵入。

ビヤッコの方もここまで懲りずに挑んでくるテルヨシに怒りすら湧かなくなつたようで、100回目くらいまでは時折だがその怒りを言葉にしてきていたが、すでに無限EKにもよほどの隙がなければ陥らせることもできなくなつて、心なしかそのプレッシャーに『早く帰れ』といった意思が込められているような、そんな気がした。

——これで最後だから付き合ってくれ。

そんな思いと一緒に迎撃に構えたテルヨシに、ビヤッコはこれまで防御があまりされていなかった大咆哮による衝撃波を初撃に繰り出してきて、これで後退しないことがわかってるから接近しながらのもの。

対してテルヨシは踏ん張って堪えるだけでダメージまで発生する衝撃波をテイル・ウィップをとぐる巻きにして前方へとかざして楯のようにして防御に使い直撃を避けて堪えることに成功。

しかしこれの弊害は前方を守ることによる視界不良。

衝撃波が収まってテイル・ウィップを退かした時にはすでにビヤッコが目前まで迫つてその剛爪をテルヨシへと放つていて、地面に叩きつけていた軌道よりもやや袈裟に飛んできたそれを即死攻撃と判断して迷いなく前進して接近していたビヤッコとの距離を一気に詰めて懐に入ることでもギリギリ回避。

だがそれはビヤッコが体を沈めてしまえば死の行き止まりになる悪手。

即死に次ぐ即死のコンボに誘い込まれては意味はないが、ここにも活路を見出だしていたテルヨシは、ビヤッコがその体を沈める前に足を止めることなく駆け抜けてビヤッコの下を潜り、最後にスライ

ディングをすることで下敷きにならずに抜けることに成功する。

それで潰せなかったのはビヤッコもわかっているのです、すぐに立ち上がって振り返り居場所を確認しようとしてくるが、そのビヤッコの動きに合わせて同じ方向に回り込んで発見をわずかに遅らせ、完全に対面する前にその後ろ足に蹴りをお見舞いして必殺技ゲージを微量チャージ。

大橋の縁を背にビヤッコと対面し、この状況で真っ先に動いたビヤッコの攻撃は大橋の奥へと誘う横風ぎの前足。

この位置ならほぼ間違いないくそうするだろうなと予測していたテルヨシはある種の信頼を以てその攻撃をしてくることだけを前提に攻撃の瞬間に動き出し、振るわれた前足の一撃をテイル・ウィップも使った大ジャンプで跳んで躲して、その際にテイル・ウィップのみを前足に叩かせて空中であり得ないほど横に吹っ飛ぶ。

が、その勢いを利用して加速するところでインスタント・ステップで軌道を修正しビヤッコに向かう力へと変えて顔面を強襲。

鼻つ面の上部分を捉えて炸裂した蹴りに少しだけ怯んだビヤッコをすかさず踏み台にして前方宙返りして背中に乗れば、ビヤッコもその背中から落とそうと前足を持ち上げて大橋から奈落の谷底へと飛ばそうとする。

「50……51……52……」

それでもテルヨシは恐ろしいほどに冷静にビヤッコとの交戦からのタイムカウントを刻みながら、インスタント・ステップで吹き飛ばすのを防いでビヤッコの背中と挟まり、そのまま滑り降りて大橋に着地すると、また後ろ足に蹴りをお見舞いしてからバックステップで大橋の入り口へと下がる。

「……59……60」

1分。自分がいつからか定めた時間を生き延びたテルヨシが未だ大橋に足を踏み入れている。

にもかかわらず、ビヤッコはさつきまでの攻勢を収めてテルヨシを威嚇しながらもしつかりと見て、いつぶりがの口を開いてくる。

——小さき者よ。次に我の前に現れた時は、その命が尽きるまでこ

の牙で噛み砕こうぞ。

「——おう。次来る時はお前を倒してその門を潜る時だ。覚悟しておけよ」

まるでテルヨシの思考を読んだようにこの攻防が最後とわかっていたビヤツコは、そんな返事を聞いてから容赦なくその牙を立ててテルヨシを襲ってきたが、そんなビヤツコに拳を向けて感謝の意を示しながら大きくバックステップして大橋から出れば、ビヤツコもテリトリーから出たテルヨシを追撃することなくその身を翻して煙のように消えていった。

Acceleration Second 26

「……………ズルい！」

「ズルくはないだろうが……」

《無制限中立フィールド》での《ビヤッコ》との1ヶ月に渡る戦闘を経て現実に戻ってきたテルヨシは、精神的疲労が限界突破していたこともあってそれから泥のように眠りに就いて、翌朝は目覚ましても起きられず珍しくマリアに起こされて朝食まで作らせるといふ失態を犯したのも1時間ほど前。

マリアとしては珍しいことが起きて面白かったとか楽しんでいたようなので良かったのだが、今後はこんなことが起きないようにと誓って登校して、教室で挨拶がてら黒雪姫と話していたところで問題が発生。

「ふんだつ。どうせオレの介入がされない時間を見計らってそういうことしてるんだろ。仲間外れ良くない」

「…………お前の都合に合わせていたら完全にタイミングを逃すだろうが。恨むならそのバイトのシフトにした自分を恨めバカ者」

挨拶もほどほどで黒雪姫から切り出された話は、今日の夜にハルユキ宅でカレーパーティーを開催するといったことで、参加者がネガビュの全メンバーにユニコとパド。あとは現在進行形で謡とその話をしていようマリアだと言われ、そんな男女比が酷い集まりにバランスを保つためにも自分は必要だろうと参加を表明したいところだった。

しかしながら時間は午後6時から7時くらいとなるとテルヨシは完全にバイトをしていて残念極まりない。

せめて事前に教えてくれていれば、とも思うが、このカレーパーティーが決まったのが昨日のことでは、如何にテルヨシと言えどバイトに都合がつくわけもなく、こんな時に限ってギリギリシフトが終わるパドのラツキーには恨めしい感情が。

そもそも何故そんな豪華な面子を集めてカレーパーティーなどといったことになったのか。

それは昨日に行われた《七王会議》の議題に上がっていたメタトロ
ン攻略に関して、ハルユキが《理論鏡面》アブリティ発現の可能性を
示されて、成功するかどうかはさておいてもまずはチャレンジしてみ
ようってことで話が上がったらしい。

今のネガビユには残念ながら光線系の攻撃ができる人がいないた
め、半端な威力の光線でもあれだからとユニコに声をかけたところ、
協力する代わりにカレーをご馳走しろといった流れがあったんだと
か。

カレーならばオレの至高のカレーを振る舞おう！

とも言えたような言えないようなテルヨシではあるが、参加できな
いものはできないので机に突っ伏してふて寝を決め込むと、故意では
ないが仲間外れにしたことには変わりない黒雪姫も申し訳なきは出
てきたか、次の催しは事前に知らせると約束してご機嫌取りで事なき
を得るのだった。

「それはそれとして、昨日は良い対戦をしたようだな」

「ん？ ああ、カタフのか。負けたけどね」

「ん、まあ仕方あるまい。あれは私もレベル9になる前に3度ほど
戦ったが、勝ち越せてはいない。初見であれに勝つには情報戦で完勝
していなければ無理に近いからな」

次に唐突ではあるが昨日のカタフとの対戦についてを掘り下げて
きた黒雪姫は、おそらくまだ対戦の内容自体は把握していないのだろ
う物言いで、やはり主戦場が離れていたこともあって黒雪姫もカタフ
とは対戦経験自体が少ないことを述べてくる。

しかしレベル9になる前とはいえ、黒雪姫に勝ち越しているとは恐
るべしといったところで、それ相手に善戦したのを本当に称賛してく
れているのがわかる。

「今やったら勝てる?」

「無論だ。やつの前でグラフのやつが自慢の双剣を失って呆然とした
記憶は今も色褪せることなく鮮明に残っているが、あれの敵討ちに駆
り出された私まで返り討ちにされた屈辱は今も忘れん。次に刃を交
えることがあれば、戦績をイーブンにしてやる」

「グラフ……ねえ」

HRまで時間も迫ってきて、クラスメートもそろそろ本格的に集まり出す時間になってきたので、ブレイン・バーストの話をするのもここまでかというタイミング。

テルヨシも話を締めるための質問をしたのだが、その返しで出てきたグラフ。《グラフアイト・エッジ》の名前を聞いてふと、昨日のことを思い出してしまった。

「なあ、今ってそのグラフは無制限中立フィールドでは《ゲンブ》のところで封印されてるのは間違いないんだよね？」

「あれが自力で抜け出すようなことをしないと限らんが、そのままの状態ならば間違いはないだろう。それがどうした？」

「あ、いや、そこはどうでもいいっちゃいいんだが、そのグラフは今、どこで何をしてんのかなって」

「……………知らん。あの作戦の後から1度たりとも応答がない。知っているならこっちが聞きたいくらいだ」

実は昨日のカタフとの対戦の際、マッチングリストを一番下まで確認した都合で、必然的に中2戦域にいたバーストリンカーは全員ざつと眺めたことになり、ことさら下の方のハイランカーの名前は今も鮮明に覚えているし、レベル8ともなれば忘れる方が無理というもの。

だからこそ見間違いはなかったし、テルヨシもカタフとの対戦後に1度だけ加速し直してマッチングリストを見たのだが、そこにはもうその名前はなかった。

「たぶん、スターターのオレしか知らないことかもしれないけど、昨日の対戦、たぶんそのグラフが観戦してたっばいよ？」

「……………なに？」

「いやあ、カタフがレベル8になってたから、そこに並んでた名前にグラフアイト・エッジってあって、どうしたもんかなあとはその時に思ったんだけど……………」

と、テルヨシが事後報告気味にグラフの目撃情報を提供すると、さすがの黒雪姫も予想外だったからか珍しく思考停止したように固まってから、何か考える仕草をして盛大なため息を吐き、自分を落ち

着ける行為に及ぶ。

「……………あれがすることにいちいち反応しては身が持たんのは昔からか。だがそうしてまで観戦したからには目的らしきものはあったのかもしれない。大方、モビールの《子》であるお前への興味か、カタフが負ける姿を見に来たかだろう」

「そんなもんなんじゃないの？ まあでも良かったじゃん。名前だけとはいえ、ちゃんと生存確認は取れたわけだし」

「フフツ。そうだな。これで再会した時に色々と言及してやれるだろう。放課後のリプレイカードではやつ姿が映っていないかも確認してやるとしよう」

何やら黒雪姫の反応からして余計なことを言った気がしないでもないテルヨシだったが、まあ悪いのはグラフだしなど納得して忘れることにして、ちょうど恵が登校してきたことで話は終了し日常へと戻っていった。

昨夜の荒療治もあって微妙に疲れが取れていなかったテルヨシが、1ヶ月後に控えた期末テストのことなど微塵も考えずに半ばほど寝て過ごした学校もいつの間にか終わり、これから黒雪姫達がキャツキャウフフなカレーパーティーをやることを知りながらバイトに向かう足は若干だが重い。

「んじゃ行くかパド」

「K」

「むー…」

その足で辿り着いたバイト先でさえ、2時間後にはパドがシフト上がりとなり、そのパド待ちだったユニコまで待つてましたとばかりに居座っていた席を立て店の奥に引っ込んでいってしまい、それを傍目にむくれるしかできないもどかしさは半端ではなかった。

そのテルヨシを煽るように着替えてきたパドのバイクにタンデムして股がったユニコは、出発の間際に「お前の分も美味しくいただきたいぞヒヤッホー！」とか言い残してガレージを出ていき、その様子を提げていたエプロンを噛むことで悔しさを現して見送るのだった。んぎー！

悔しきは100倍くらいだがバイトはやらないといけないので、店長が雷を落とす前に仕事に戻ったテルヨシは、午後6時になるこの時間帯になると夕食を考えた人達が多く、イートインコーナーが空いてくるのを知っていたので、ぼちぼち閉店に向けて動く頃と動き方がそつちに比重を置くようになる。

が、本当にたまにだがこの空く時間帯を狙ってイートインコーナーを利用しようという悪知恵を働かせるお客もいて、この日はその悪知恵を働かせた客が賑やかに大所帯で来店してきた。

「やつほーテルルンツ！ 来てやつたぜ！」

「何でそんなに偉そうなんだ……」

「だって胡桃ちゃん、私達はお客様だよ？」

「だからといって横暴な振る舞いが許されるわけじゃないだろ……」

2週間ぶりくらいになるその来客は、祝優子がリーダーのような立ち位置のグループ。

今日はいつもの胡桃、ちあき、リーリヤもいたが、

「こういうところはアタシにや合わねーんだけどなあ」

「ヨミも一応は今どき女子なんだし、たまにはキャワキャワなケーキを食べたってバチは当たらないって……」

「そうですわ。イノアさんの言う通り、せつかくのお誘いなんですから楽しまないと。ほら、リークさんもいらして」

「俺もこういうところは苦手なんだが……」

テルヨシが初見の新たな4人の男女も後から続いて店に入ってきて、何やら俗に言う不良っぽい風貌の女子高生に、ファッションにこだわりのあるような快活なゴスロリ女子。超清楚系のお嬢様を思わせる少女。高校生かも怪しいグラサンにハットを被った男。

なんというかグループとしては謎すぎる集まりの来店にレジに立っていた店員が目を点にしていたので、名指しもされたことだからとテルヨシが表に出ていって一応は騒ぐのは厳禁だと注意してから、イートインコーナーを使う旨を聞いてから席に案内し、8人の大所帯だから割と占拠に近い具合に落ち着く。

まあそうなるだろうことを予想してこの時間帯に来たのだと豪語

する優子のドヤ顔の気遣いには感謝を表面上でしておきつつ、初来店
でそわそわしてるヨミと呼ばれた不良女子やリークなどと呼ばれた
男にはちゃんとした対応をしておく。

「初来店の方はホオリ……優子さんなどから勧められた物をご注文さ
れる方が迷わないでよろしいかと。あとは様子見としてご注文はさ
れずにお友達とシェアするといった具合でも」

「テルルンが丁寧語とか久しぶりに聞いたわあ。優子さんとかこそば
ゆいし」

なんか失礼なことを言われている気もするが、胡桃に脳天チョップを
食らわされたのを確認してとりあえず無視し反応をうかがうと、やは
り店員パワーが働いたのか、注文しなくてもいいというワードに便乗
しようとする。

「えー、どうせシェアするならみんな違うもの注文して食べたーい！」
が、それをキャンセルしてイノアと呼ばれていたゴスロリ女子が粋
な提案を挙手と共にしてくれる。

店的にはそつちの方が売上が出るのでラッキーなのだが、こういう
商売で目の前の利益を優先すると成功しないとも言っているので、客が定着
する選択をしたいところなのだが、しかし今はイノアの提案がどうな
るかを見守ることしかできない。

「それさんせいーい！ 8人いるから8種類の味が楽しめるしね！」

「ああ。私もこのものは全て美味しいと思っっているから、たくさん
の味を1度に楽しめるのは魅力的だ」

「わたしも、それが、いい！」

「り、リーリヤと千明様がいいのでしたらわたくしも」

「せっかくみんなが集まったんだし、私も異論はないかな」

どう転ぶかなあと沈黙したテルヨシを他所に盛り上がる優子パー
ティーは、優子を皮切りにちあき、リーリヤ、清楚系お嬢様、胡桃と
賛成に回り、残ったヨミとリークにみんなの視線が注がれて、それで
1度は流れを変えようと口を開きかけたが、優子達の期待の眼差しに
は勝てなかったのか、観念したように「しゃーねーな！」とヨミが折
れる。

そうならば1人残されたリーグも「多数決なら仕方ない」と渋々っぽくはあるが、ちゃんと納得した上で満場一致となった。

そこからは早いもので、8種類の厳選は主に優子とちあきが担当し好き嫌いも加味して5分もしないうちに決定。

注文を聞いてから店の奥に引っ込んでから、学年も学校も違うだろうに仲の良さそうな優子達を見て、本当に何の共通項で知り合った集まりなのかと疑問に思うが、優子達がバーストリンカーであることを知っているテルヨシにはなんとなくその答えはわかってしまう。

おそらくはあの4人もまたバーストリンカーであり、リアルでも知り合ってもいいと思えたからこそ、こうして集まって時間を共有しているのだ。

ああやってバーストリンカーの輪が広がっていくのはテルヨシとしても嬉しいことで、最近の自分の周りでもリアル割れがずいぶんと発生してしまったが、それが良かったと思えている身としては、今の優子達の姿が凄く微笑ましく思えたのだった。

結局は食いしん坊のちあきが夕食も兼ねてということと追加注文して、優子と範子ノリコと呼ばれた清楚系お嬢様が1品だけ追加注文して楽しんで談笑してから店のすぐ外で解散になったようで、それが今日の最後のお客となって店も終了。

帰ったら自分の分だけの夕食を作って食べるのかあ、と寂しい気持ちで自宅に辿り着くと、先にハルユキの家から帰ってきていたマリアが出迎えてくれて、その顔が何故か笑っているので何かしらと首をかしげる。

「倉嶋さんがね、参加させてあげられなかったからせめてって」「せめて?」

そんなテルヨシの手を引いてリビングに招いたマリアは、テルヨシの帰宅時間を完全に把握した上で今日のカレーパーティーでわざわざ残してくれた分を貰って温め直してくれたらしく、湯気が立っている状態のものがテーブルに置かれていた。

「黒雪姫さんもニコさんもね、すまんって伝えてくれって」

「べ、別にこんなことされても……嬉しくなんてないんだからね!」

「男の人がやるツンデレはなんかイヤ」

「セリフ回しが女の子だったからな。仕方ない。んじゃありがたくいただくかな」

テルヨシとしては今日のはもう仕方ないと割り切れていただけに、無駄にブーブー言ったのが気を遣わせたかなと反省しつつも、こうなった以上はありがたくいただくのがよかろうとマリアにも少しだけ分けてあげて夕食とする。

「じゃがいも、小さくない?」

「それたぶん、黒雪姫さんがやったやつ。ピーラーでずつとしゃつしゃやつて小さくしてた」

「あー、そういや調理実習で配膳とかしかやってるところを見たことが……」

味をどうこう言う権利はないのだが、やはり家事全般をこなしている身としてはネガビユの合作カレーの品評はしてやらねばと思い、普通に美味しいのは良かった。

というかカレーを不味く作れる人間もそうはいないかと食べ進めると、全体的に均一性のない具材でひときわ小さいじゃがいもがスプーンに乗ってきて、それに対してのマリアの回答で納得。

一人暮らしをしてるくせに炊事を全くしない黒雪姫は、今までの調理実習でずつと恵の影に隠れていいように使われるだけで、包丁すらまともに持ったところを見たことがなかった。

そんなのがいたら調理も大変だったのではなからうかと、あれを上手く使っていた恵を尊敬しつつその辺を聞いてみると、主導はチユリとフーコがしていたから大事には至らなかつたらしい。

「それで、ハルユキ君のアビリティ取得は上手くいきそう?」

「んー、今日では無理そうだったけど、みんな色々と考えてまた試してみるって」

「ニコたんの光線技ってあの主砲のだけだったはずだから、酷い絵面が何度も再生されたんだろうね……」

「2、3秒で蒸発して1時間で蘇生してまた蒸発してって10回やったけど、みんな途中からエネミー狩りを始めたから、私もそつちに参

加してた」

「10回かあ」

10時間も見てるのはさすがに辛いよなあ。とその光景を思い浮かべながらにある意味で参加しなくても良かったかとも思いつつ、昨夜の自分はその70倍以上は死んでたなあとその死亡数に戦慄する。

あのビヤッコ相手に750回以上もソロで挑んだのはおそらくテールヨシが最初で最後だろうが、あれに比べればスパルタと評判のフーコや黒雪姫がいて10回で切り上げたのはぬるいのではと思わなくもない。

「まあアビリテイのレベルアップ以外での習得は並大抵の努力じゃ無理だしね。荒療治はもつと切羽詰まってからでもいいかも」

「あ、アビリテイで思い出した。今日のエネミー狩りでわかったことがあったの」

ただ、どんなアプローチをすれば望みのアビリテイを取得できるかなんてのは誰にもわかるわけもないので、ポイントを無駄に減らす行為を続けなかったのはスパルタとは別に英断と言えるはず。

明日は自分なりに考えた何かをハルユキに伝えてみようかなと考え始めたところで、アビリテイの話をしていたからマリアが話そうと思っていたことを思い出して口を開く。

「私のアビリテイ《インキュベーション》って、通常対戦では見つかるまでガイドカーソルが出ない効果だよな」

「そうね。厄介よね」

「でもそれってガイドカーソルが出ない無制限中立フィールドでは意味のないアビリテイってことになるよね？」

「そうなるね。残念ね」

「私もそう思ってたんだけど、今日のエネミー狩りが少人数だったからフーコさんとうーちゃん気づいてくれて、無制限中立フィールドだと別の効果があるってわかったの」

「アビリテイ名から逸脱しない効果ってなると、潜伏だから……エネミーのヘイト関連だったたり？」

「おお、凄いい」

何やら嬉しそうに話すマリアが壮絶に可愛かったので、テルヨシもうんうん頷きながら笑顔で聞いていると、なかなか真面目な話だったのでちよつと真剣に思考して推測を語ってみると、どうやら当たり前だったらしくて驚かれる。

といつてもアビリテイ名があれなだけに予測の幅がなかったただけだが、意外な発見に気づいてくれたフーコと謡には後日、ちゃんとお礼を言っておこうと頭の片隅に置く。

「フーコさんとうーちゃんの予測だと、私の攻撃で増えるヘイトが、他の人よりも5分の1くらいしか増えないんだって。だから私だけ極端に狙われなかった」

「そりゃ凄いな。単純に考えてマリアが5発当てる間に他の人がそれを上回る攻撃をすれば、ずつとマリアは狙われないってことよ？ 遠隔としては有り難すぎる効果よね」

「うーちゃんも『羨ましいのです』って言った。でもフーコさんは『守り甲斐があまりなくてガツカリです』って言っててごめんなさいしてきた」

「それでもオレはマリアを全力で守りますけどね！」

しかもその効果は思っていた以上に優秀で、ヘイトコントロールはエネミー狩りでは肝になってくるが、マリアはパーティーの人数が増えれば増えるだけ狙われにくくなるアビリテイを持っていることになる。

これは前線でヘイトを集めるタイプのフーコは確かにヘイトに気を遣わなくても勝手に守れてしまう部分はあるので気持ち的には共感できるが、そんなことは関係なく《親》であるテルヨシはどんなことが起きようとマリアは守ってやると言葉にして抱きつきにいき、案の定で返り討ちの蹴りを食らったテルヨシはリビングの床に沈むことになったのだった。

Acceleration Second 27

6月25日、火曜日。

今日はバイト先にサアヤとユリが顔を出してくれると今朝メールをくれていたので、マリアも飼育委員の仕事が終わったら直行すると行って登校していった。

もちろんサアヤとユリが顔を出すのは何もテルヨシに会いたいから、なんて可愛い理由ではなく、ユニコも交えて話すことがあるからなのだから。

テルヨシは言ってしまうばついででもいいところで、バイトの休憩を利用してちよつと話せば儲けものレベルの扱いだ。

それでもサアヤとユリに会えるのはテルヨシ的にそれだけでテンションが上がるイベントに近いので、特に扱いについて気にすることもなく、放課後となつてすぐにバイトに向かうため席を立ち下校しようとした。

「はいストロップ！」

「うぎやつ！」

特に今日は今すぐにも学校から出たかったから出せる最速を叩き出そうと教室の扉を開けようとしたら、それよりも早く外から開け放たれた扉からはとても元気な女子生徒とその仲間2人が道を塞いで立ちはだかり、キラツキラした目でホロキーボードに手を置いて録音機能までオンにした表示が見える。

「梅郷リアルタイムズから逃げられると思わないでよね、テールくんっ」

「くっそう……やっぱり今日バラすんじゃないかった……」

テルヨシは遅れば間違いなくこうなるだろうことは確信していたからこそ急いでいたのだが、目の前の新聞部から逃げるにはもうバイトを遅刻すると言ひ張るしかない。

しかしだ。この同級生でもある新聞部部長は新聞部にかける情熱が凄く、捏造などはしないことで有名だが、ここで逃げて後日の記事に『皇照良の彼女は自慢できないほど微妙な子なのか!』とかなんと

か書かれても文句が言えなくなってしまうし、そうだったら正直に話さなければサアヤにも悪い。

そもそもこうして新聞部が放課後に突撃取材に来たのは、今日の昼休みの終わり頃に何気なく黒雪姫と恵とで話をしていたら、文化祭まであと5日になったので、3枚配布されている招待券で誰を誘うのが話題になり、すでに3枚とも配布が決まっていたテルヨシがその人物達を挙げていったことでサアヤのことが発覚。

そういえばまだクラスにも言っていないことを思い出したのだが、その事実クラスがざわつく事態が発生し、しかし昼休みも終わるところだったから質問はお預けとなり、授業と授業の休みにはクラスの生徒が取り囲んでしまったために、別のクラスの新聞部は放課後に回らざるを得なかったのだ。

「テルくんは彼女ができたなんて驚きだけど、やっぱり梅郷中で話題性のある生徒の記事は注目度が違うしねえ。だからお願いっ」

「……バイトあるから校門まで歩きながらで頼むよ。写真の提供はしてやらないがな」

「それは文化祭まで取っておきますとも。来るのがわかっていたらこっちも対策できますからなあ。フツフツ」

「あんまり問い詰めたりしないでくれよ。他校の子だし、梅郷中の評判を落としたりは新聞部も本望じゃないっしょ?」

「オツケーオツケー。私を信じなさいな。それじゃ早速だけど彼女さんとの馴れ初めから詳しく〜」

そうして出遅れたのも相まって押しが強い新聞部にはどうせ取材をさせられるなら早い方がいいかと開き直って、道を開けてくれた新聞部と一緒に校門へと向かうがてらにあれこれと飛んでくる質問にしっかりと答えてあげる。

しかしテルヨシが恥じらいもなく割と堂々と話すからか、恋愛スクープとしては照れるテルヨシもスクショしたかったようだったが、ネタにされる身としては全て新聞部の思い通りになるのは面白くない。

だから努めて平静で自慢気に話すことで惚気話を強調してお腹一

杯にしてやり、向こうから「もういいよ」と言わせるつもりでいたのだが、さすがに入学から取材を続けてきた猛者。

テルヨシの照れ顔をゲットできずともしつかりと校門前まで取材を続けて、明日にでもローカルネットの掲示板にアップすると豪語して校舎へと戻っていった。

これはサアヤにも注意喚起しておこうと新聞部の評価を改めたところで校門を目前にし、止まることなく潜り抜けようとする。

「……わっ！」

「おおっ」

そのタイミングでちょうど校門から入ってくる子達がテルヨシとぶつかりそうになり、テルヨシが咄嗟に受け止めてあげれば、校門をノータッチで通過できる生徒と教師以外の存在などほほいなので、それがマリアと謡であることはすぐにわかり、ぶつかってきたマリアとその後ろでお辞儀してきた謡に笑顔で対応。

「うーちゃん、今日もご苦労様。マリアは元気なのはいいけど前はよく見なきやな」

「うん。テルは今日はのんびりだね」

「ちよっと新聞部の取材を受けながらだったからな」

そうやってマリアと話している間にふと、謡の方をうかがうと、話す前から何やら考えていた謡が何かを決めたような表情をしてから、少し苦しそうにしながらも肉声で話せないその口を動かしてあるコマンドを発声。

その動き方でなんと言ったかはすぐにわかったが、まさかと思うよりも早くテルヨシの頭にバシイイイ!! という加速音が響き、その意識は加速世界へと誘われていった。

——うるさい。

そんな感想がまず最初に出てしまうほどにはうるさいフィールドに《レガッタ・テイル》として降り立ったテルヨシは、視界に表示された【FIGHT!!】の炎文字が消えるや否やその目を空へと向ける。

太陽の光さえも届かない厚い黒雲と、その中でくすぶるようにゴロゴロという音を鳴らして、上空で何か動こうものなら容赦なくそこに

落ちる雷がフィールドを支配する 《轟雷》 ステージ。

近くの建物オブジェクトよりも上の高度に達すればたちまち落雷の餌食となるため、屋上に陣取るのすらビクビクなフィールドでは必然的に地上戦が強いられ、ミサイルなどもナパームといった放物線を描くタイプは高さ制限に引つ掛かり大変らしい。

「んで、対戦者にされたわけで……」

そうしたことをまあ慣れでやってから、この対戦に対戦者として入ったことをようやく受け入れて視界上の表示を見れば、対戦相手の表示は《A r d o r M a i d e n 「L e v e l 7」》。

アーダー・メイデンは今の今まで目の前にいた謡のデュエルアバターの名前であり、要するに挑戦してきたのはその謡ということ。

どういう意図があつて対戦を挑んできたのかは不明だが、無意味なことはしない子だとは思っているので近距離からのスタートだからとガイドカーソルの示す方向を見ると、ちょうど校門から校舎にかけての途中の道の真ん中に位置がズレたらしい謡が視線が合ったのを確認してペコリとお辞儀をしてくる。

「テルお兄さんはこれからアルバイトですが、突然の乱入をして申し訳ないのです」

「……ん？」

なんとも可愛らしい、歳相応の謡の声に頬が緩みかけたテルヨシだったが、どう考えてもおかしいことにすぐに気づいて離れた位置にいる謡を凝視。

—— 発声したのだ。

失語症を患っているはずの謡が何故ここでは発声ができるのか。

ここでの会話が現実であるのと明確にどう違うのかはテルヨシにはわからないが、話せるということは失語症の及ばない何かが作用して話せるのだと思うので、まじまじ見られて何やら恥ずかしそうにする謡の可愛さにまた悶えかける。

「うーちゃんはここだとちゃんと話せるの」

「そういうことは教えてくれないんじゃないかな、マリア」

しかしそれを止めるように横にいたマリアが指でツンツンして存

在を知らせながらに伝え忘れていたと言わんばかりのことを今さら報告。

それには完全に同意だったからか、こちらも可愛く頭をコツンと小突いて「ごめんなさい」と謝るので、怒っていたわけでもなかったからすぐにその頭をなでなでしてから、時間も進んでいるから再び謡へと向き直る。

「オレを引き留めたからには、うーちゃんの何かご用事があるんだよね。テルお兄さんが何でも答えてあげるよ」

「そう言っていたけるとありがたいのです。実は……」

と、30分しかからないからさっそく本題に入ろうとした謡だったのだが、その前に急なこの対戦にギャラリーとして巻き込まれた方々が姿を現して謡の口を止めてしまう。

「何の気まぐれだテル。バイト前にういいういに挑むなどバカなのか？」

「何故にオレが挑んだのが前提なんだ。逆パターンの可能性も考えてくれないか」

「えっ？　じゃあこの対戦は四埜宮さんが？」

「サツちゃんも有田さんも早とちりなのですよ。今回は不躰ながら私がテルお兄さんをお引き留めしたのです」

ギャラリーは当然ながらこの梅郷中学校に在籍している黒雪姫、ハルユキ、タクム、チユリ。ネガビユの4人だが、現れて早々にテルヨシが仕掛けた対戦だと勘繰ってきた黒雪姫にはちよつと苦笑気味に否定し、同じように思っていたハルユキも驚きの声をあげた。

そこにはすぐに謡本人からの訂正が入って、黒雪姫もハルユキも雰囲気だけで「ごめん」と謝って、タクムとチユリが「決めつけるのは良くない」とそれぞれがらしい言葉で言っつてひと笑い取ると、それではどうしてと仕切り直した黒雪姫が謡に発言を促す。

「では改めて話すのです。本当は先週までにはやっておこうとしたのですが、フーねえが来たりで色々調子が崩されてしまったので、今日になってしまいました」

「なるほど。噂のテルお兄さんの彼女が誰かについてか」

「……違うのです」

真面目な話なのは雰囲気ではわかってはいたのだが、重苦しいのは苦手なテルヨシはそうなる可能性が少しでも減るようにと冗談で割り込んだら、困惑気味の否定が入ってから黒雪姫らから「黙っている」とツッコまれてしゅんとする。

その様子に謡がくすりとしてから、そこまで深刻な話ではなさそうな雰囲気になって明るい感じの声色で話を続けた。

「テルお兄さんのお噂はたくさんお聞きしていましたが、こうしてリアルでもお知り合いになっても、まだ私はテルお兄さんの実力をこの目で拝見したことがありません」

「あー、そういやそうね。というかオレもうーちゃんのアバターをちゃんと見るの初めてだわ」

そうした前置きがあつて出てきた話は、互いにまだ加速世界での関わりが皆無であるという事実。

確かに先週には謡を無限EKから救い出すために作戦に参加はしたが、その時も謡の出現より先にテルヨシは無限EKもどきになつてしまつて対面とはならなかつたし、そのあとの作戦には参加さえさせてもらえなかつたから、このような事態になつたのは色々と込み入つた事があつたせいでもある。

なのでテルヨシも改めて目の前の謡のデュエルアバター、アーダー・メイデンを観察。そうしてみると謡のデュエルアバターがかなり異質であることを今さらながらに感じる。

アバターを構成する色。上半身は混じり気のない白色で、腕には下部に長く垂れるシールドがあり、頭は現実の謡のように額を前髪状の黒い装甲が覆い、後頭部からは細いスタビライザーが長く伸びる。

緋色に輝くアイレンズも綺麗だが、そのアイレンズと同じ色の下半身は、腰から足元まで広がるように覆うアーマースカート。

あまりにも鮮やかなツートンカラーはテルヨシも初めて見たが、その出で立ちを表現するにピッタリな言葉を選択するならば、巫女装束。

そうとしか見えない謡のデュエルアバターがアーダー。《劫火》が示す色を備えていながら、特色の白までをも有しているのには謡の心の傷が関係しているのだろうが、その傷を知る由もないテルヨシはただ謡のデュエルアバターを純粋に綺麗だと思うのだった。

「あの……テルお兄さん。そんなに見られると恥ずかしいのです」

「ん、おお、ごめんね。それでこうして対面はできたわけだけど、話はそれで終わるわけないよね？」

「お話が早くて助かるのです。本当はサツちゃんが近くに乱入して見せると言っていたのですが、やはりこういうことは自らの身で体験するのがバーストリンカーらしいと思ったのです」

時間にして言えば5秒程度の観察だったはずだが、やはり女の子は視線に鋭いのか、またもしもじとしてしまったので謝りつつ、本題がテルヨシの実力を見ること。また謡の実力を見せることにあるとわかったので、快く了承の意を示せば、ギヤラリーもレベル7と8の対戦をほぼ独占して見られるとあってノリノリで集合して観戦モードに移行。

「テルお兄さんはこれからアルバイトですから、疲れが出てはあれですし、決着は少しシンプルにしましょう」

「最後までやっても余裕よ？」

「そうは言っても私は気にしてしまうのです。なのでクリーンヒットを1発、先に当てた方の勝ちということでしょうか？」

「まあうちちゃんがそれで納得するなら文句はないよ」

ギヤラリーも離れたので始めようかと互いに距離を取る前に、とてもとてもお優しい謡から、このあとに少しでも疲労を残さないための提案がされて、優しいが故にこの提案を呑まないと気にしちやいそうだから、テルヨシもそういう方向で納得して距離を取り、そうなる戦い方も少し特殊なものになっちゃうかなと思考。

謡のデュエルアバターはその色から推測すれば遠隔の赤が主体。

現に距離を取ってからその左手に弓型の強化外装を呼び出して持ち、開幕から射ってくる気が満々の気配を纏う。

放つべき矢が見当たらないが、それは弓を引くことで装填されるも

のだと予測がつくので、マリアのように連射が難しそうなことは想像して接近は相手の手をいくらか見てからにしようと思われ、まずは回避を優先。

「スタートがやりにくからうから私が合図を出そうか？」

「サンキュー、姫」

「ありがとうございます、サツちん」

どのみち射程距離の差はあるので、接近戦オンリーのテルヨシは遠隔相手には先手も打てないため回避に動くしかないが、こっちが一方的にスタートしてしまえばある意味で先手になるかなと思つたところろに黒雪姫のナイスな気遣いが割つてきたので、内心ではずっこけつつ感謝の言葉を述べてから、互いに集中力を高めて開始の合図を待つ。

「では、始め！」

——ビュワツ！

電光石火とはこのこと。

黒雪姫の開始の合図とほぼ同時に弓を構えて引き、テルヨシに狙いを定めて矢を射つまでにかけた謡の所要時間は、わずか2秒。

驚くべき所作の早さにビックリ仰天だが、驚いて固まっていたは良的なので、2秒も止まってるアホはいまませんとばかりに難なく躲してみせたテルヨシは、次弾の装填も早いことを確認しながら、こちらの動きを先読みした謡の狙い撃ちの精度も確認。

さすが旧ネガビュの幹部だっただけあって、現実ではマリアと同年ながら経験値では圧倒的な差があるようで、こちらの接近を阻止しつつ動きを制限・誘導するような射撃でジワリジワリと追い詰めようという意思を感じ取れる。

さらにテルヨシへと狙いをつけながらも、外れた矢が無駄にならないようにちゃんと破壊できるオブジェクトに当てて必殺技ゲージを溜める器用で効率的なことまでやるので、テルヨシもそれに倣って回避と同時に壊せそうなオブジェクトを蹴り碎いて必殺技ゲージを溜める。

「なんだかフリーねえを相手にしてるみたいなのです……」

まだまだ小手調べの段階だと思うのだが、本気で当てようとする意思はひしひしと伝わっていたので不思議ではない。

だが不動のまま射ち続けていた謡はテルヨシの『余裕がありすぎるくらいの回避』になんとも言えないやりづらさを感じたのか、攻撃を続けながらボソツとそんなことを呟いて苦言。

同じ近接型のアバターとしては尊敬しているフーコに似てると言われるのは喜ばしいことではあるが、その変化にはギャラリーの黒雪姫も気づいたようで、テルヨシを凝視するような挙動が見て取れた。「おいテル。たった2日で何をしたのだ？」

そして対戦中にも関わらず、中断させるように言葉を発した黒雪姫によって、テルヨシも謡も一旦その動きを止めざるを得なくなり、水を差されたテルヨシは文句も交えつつ会話に応じてやる。

「対戦中に割り込まなきゃなんない質問なわけ？ 何かしたって言われたらしたわけだけどさ」

「文化祭もあるから今週は対戦を控えようと決めたのは私だが、明らかにお前の動きが違う」

「どう違うのさ」

「気持ち悪いくらいに無駄がない。故にテルらしくないとさえ思えている」

「ディスプレイってるのか褒めてるのか微妙なのやめてくれる？」

それによると今のテルヨシは2日前。カタフとの対戦までとはその動きに明らかな違いがあるようで、テルヨシは割といつも通りのつもりだったが、言われてみれば謡の攻撃に対して常に心に余裕を持って対応していた気もする。

それは単に謡が小手調べをしているからと思っていたが、実はそうではなかったようで、黒雪姫の発言のあとに謡も口を開いてその肌で感じたことを言ってくる。

「私は本気で当てるつもりで狙っていたのですが、テルお兄さんがあまりに余裕を持って避けられるので、ちよつとムキになりかけたのです」

「マジで？ そうなるとあれもあながち間違いじゃなかったのか

……」

どうやら謡としては小手調べのつもりもそれほどなく、最初からほぼ全開で狙ってきていたようなのだが、どうしても連射性能では銃型の強化外装などよりも劣る都合で、次弾の発射までのタイムラグがあり、テルヨシにはもう単発での攻撃を脅威に感じる事があまりなくなっているようだった。

それはひとえに一昨日の夜に実行した《ビャッコ》とのアホな戦闘の繰り返しによる成果と言えるのだろうが、考えてみればあれ以降でこれが初の対人戦であったことから、テルヨシ自身がその変化に気づかないのも無理はなかったのだ。

そうした指摘を受けてから、自分がどの程度のステップアップができたかを感覚的に理解できたテルヨシは、実感として出てきた手応えに笑みがこぼれ、早く続きをやらうと構えると、謡もやる気に満ちたテルヨシの覇気というかそんなものを感じ取って再び弓を構えて対戦を再開。

もはや自分の速射ではテルヨシを意図して崩すのが難しいと判断した謡は、躊躇することなくここまで溜めた必殺技ゲージを使って必殺技を発動してくる。

「《フレイム・トーレンツ》！」

轟雷ステージだとわかっているはずの謡がそうした発声をしながらその弓をテルヨシの頭上へと向けてつがえた矢を山なりに放つので、矢はすぐに落雷の餌食になってしまうのではと思いつつその軌道を目で追ってしまう。

その矢は軌道上の頂点に達したところで案の定、黒雲からは落雷の予兆が見えて無駄撃ちに終わってしまうのではと思つた瞬間。

矢は赤い光を放って球体へと変化し、その場に留まったかと思われた直後にババババババッ！

いくつもの火矢となってテルヨシの頭上から降り注いで襲い掛かってきたのだった。

——降り注ぐ火矢の雨。

《アーダー・メイデン》。謡が放った必殺技《フレイム・トーレンツ》は《轟雷》ステージの落雷が反応するより早くテルヨシの頭上で炸裂して、逃げ道を塞ぐように数十本の火矢となって降り注いでくる。

弓矢という連射性能のない強化外装には補完するべき範囲攻撃をちゃんと備えている謡はさすがだが、迫る火矢を前にしても驚くほどに冷静だったテルヨシは、このピンチをどう切り抜けるか即決。

降り注ぐ火矢の雨は確かに回避は必要だが、ノーダメージで避けようとするとアクションが大きくなってしまい、回避の直後を謡に狙い射ちされてしまう。

普通はそう考えるが、テルヨシはフレイム・トーレンツが炸裂した瞬間にはすでにその視線を前方の謡へと向けて、視線が上にいつている隙を狙っていた謡の策を潰していた。

マリアと同じ10歳とは思えない戦略だが、そのくらいでなければ旧ネガビユで幹部にはなれなかったはず。

初見の必殺技に対して全く動じずに自分の狙いを潰された謡は、矢をつがえはしているものの当たる可能性がないと見て構えたまままで静止。

それはそれで困ると思いつつも、テルヨシはまだピンチを切り抜けてはいないことを自覚して、落ちてくる火矢に対して視線を前にしたまま、炸裂した瞬間に直撃しそうだった軌道からわずかにスライドして避けてみせて、地面へと突き刺さった火矢は小規模の爆発によるスプラッシュを発生させてテルヨシにダメージを与える。

しかし落ちてきた火矢のどれもがテルヨシに直撃することではなく、全ての火矢が落ちて爆発も収まった時には何事もなかったかのよう
に謡と相対していた。

ダメージとしては累計で1割ほどは削れたが、謡の提示したクリーンヒットにはなっていないので、謡もその弓を下ろすことなくテルヨ

シへと語りかける。

「私の狙いを読んだだけでなく、必殺技まで見切っていましたか」

「必殺技を見切ってたならノーダメに抑えるよ。狙いの方はわかったけどね」

実際のところテルヨシは今の必殺技を完全に避けられないと判断して諦めた部分があり、そういった意味では避けられない状況にした謡を称賛したいくらいだった。

「そうではありません。今の必殺技がテルお兄さんにとって『致命的な攻撃になり得ない』と瞬時に見切ったのではないですか？ だからこそこれほど冷静に対応してきたように思えるのです」

「んー、それはまあ……根拠はないけどなんとなくそうかなあとは思ったよ」

だが謡はテルヨシがその上の見切りで必殺技が大ダメージを負わないと判断したのではと勘繰っていたらしく、言われてみれば直撃はちよつと危ないなくらいで、必殺技自体にはそこまでの脅威は感じていなかった。

まあ比べている攻撃がああ《ビヤツコ》の攻撃なのだから比較すればその威力に歴然たる差があるのは仕方のないことなのだが、テルヨシはあの修行の中でなんとなくの予測ダメージを見て計ることができるとようになっていたことを今さら思い出す。

「そうなると思えばテルお兄さんから隙を作り出すには、絶対に食らってはいけない攻撃をしなければならぬわけですね」

「通常攻撃の1発でも入れば今回は終わりだし、そこまで深刻な問題でもなさそうだけど」

「いえいえ。テルお兄さんにはそれでは当たる気がしませんので、こちらも渾身の一撃をお見舞いするのです」

そんなテルヨシの修行を知る由もない謡は、謎の見切りを發揮するテルヨシにさらに闘志をみなぎらせて、持てる全ての力で勝負に勝とうと構える弓矢に力が入る。

おそらく謡が本気で仕留めに来たらテルヨシと言えどクリーンヒットは免れないと直感し、謡が動き出すより早く決着にしなきゃ

と、2回だけ発動できる《インパクト・ジャンプ》で奇襲作戦を考える。

「それは怖いから今回は遠慮するよ、うーちゃん。インパクト・ジャンプ」

ただ突っ込むだけでは速かろうとなんだろうとハイランカー相手には通用しない。

だからテルヨシは始めのインパクト・ジャンプで真上への垂直ジャンプをして40m上空へと到達。

謡もジャンプした先をすぐに確認してその弓矢をテルヨシへと向けてくるが、その時にはすでにテルヨシはその体をほぼ180度転換して謡に頭を向ける姿勢に。

そしてその高さに到達したことで黒雲から落雷の予兆があり、すぐにでも落ちてきそうなギリギリのタイミング。

「……インパクト・ジャンプ」

紙一重なタイミングで《インスタント・ステップ》の足場を利用して再びインパクト・ジャンプを使い、今度は謡めがけて急降下。

後ろではまさに今テルヨシがいた地点に雷が落ちて稲光が発生し、それを認識するよりも早く謡の後方へとダメージ覚悟で両足着地。

地面を捉えた衝撃が足から頭に突き抜ける痛みを堪えて、稲光によつて視界を一時的に遮断されていた謡が反応するより先に近づいてひよいつ。その体を持ち上げてお姫様だっこしてしまう。

「ひゃうっ!？」

「うーちゃんっーかまーえたあー!」

本当なら一撃入れて終わりにするところなのだが、どうしても謡を背後から攻撃できなかったテルヨシが日和ってそうしたことをすると、抱き上げられた謡は予想外の行動にきよんととしてテルヨシの顔を見つめるだけになってしまう。

「……けど、やっぱ攻撃しなきゃダメだった?」

「……なのです」

お互いにどうしたものかと思合った状態で、どうにも決着が微妙になつたせいで現実を見ることになり、真面目な謡はしつかりしてくれ

と言うように返事してから下ろしてほしいと要求。

それに応えて静かに地面に下ろしてあげると、すぐに1歩下がった謡はその手の弓を両手持ちして振り上げて、パコンツ！ ノーガードのテルヨシの頭へと振り下ろしてダメージを与えてきた。

「これで私の勝ちなのですっ！」

「えーっ！ それズルい！」

「ズルくないのですっ！ ちゃんと先にクリーンヒットさせたのですっ！」

そうしてえっへん！ と腰に手を当てて勝ち誇る謡は壮絶に可愛いのだが、すでに決着はしていたも同然のところでのそれにはさすがのテルヨシもツツコミが先行してしまう。

このくらい負けず嫌いな方がバーストリンカーとしてはいいのだろうか、なんともいえない大人気なさ——子供なだけど——には歳上のテルヨシが折れるしかなく、それを後押しするようにギャラリの方からも謡を誉め称える声が飛んできてしまったのだった。

仕方ないのでこの対戦は謡の勝利ということに納得しておき、お互いの実力がなんとなく理解できて当初の目的は達成できたかなと思っていると、謡が改めて向けてくる視線に気づき何かと尋ねる。

「タイミング的には落雷よりも早く降りてきたようでしたが、そういうことでしたか」

そう言いながら謡が見ていたのは、今はすでにそこにはない後頭部から伸びていたはずの《テイル・ウィップ》。

そして謡の言う通り、轟雷ステージの落雷は割と高性能で、落ちる対象がなくなれば、その時点で落雷はキャンセルされてしまい、さつきやったギリギリで落雷を避けるなどという芸当はそもそも不可能なのだ。

それを可能にするには、あの場に『雷が落ちるべき対象』がある必要があるため、テルヨシはあの瞬間、必殺技の発動とほぼ同時にテイル・ウィップを後頭部から切り離して置き去りにしたわけだ。

そうして落雷を誘発しながら、稲光をブラインドに謡へと接近し決着まで持っていくことができたのだが、今回は特殊な勝利条件だった

からできた捨て身の攻撃に近いので、あまり実用的な作戦ではなかった。

「テルお兄さんは勝負どころでの発想が面白いのです。柔軟な思考を持っている証拠ですから羨ましいのです」

「うーちゃんも可愛い見た目で追い込み方がなかなかエグいよ。さすが旧ネガビュの四元素つてところかな」

「私などフリーねえやレンねえ。グラフィさんと比べたらまだまだ未熟者なのです。今のテルお兄さんならフリーねえ達にも引けを取らないかもしれませんね」

「買ひ被りだよ。レベル8の重圧にもまだ慣れないひよつこが思い上がるようなこと言わないでくれ」

それでも謡からの評価は割と良くて、フリーコ達とも良い勝負ができるだろうと言ってはくれたが、いくらビヤッコとの修行を生きて帰ったとはいえ、それだけで完全に埋まるほど甘い実力差ではないと自分に言い聞かせて、優しい謡の言葉にも気を緩めない。

そうした謙虚な姿勢もまた謡には好印象だったのか、甘い評価だったかもと頭を下げてから、いつまでも話しては決着を特殊なものにした意味も薄れるので、さっさと対戦をドローにして加速を解き、現実世界へと戻っていった。

戻ってすぐに物言えぬ謡が申し訳なさそうに頭を下げようとしたのをテルヨシは手で制して止め、その代わりに両手を広げて謡を迎え入れるような体勢になる。

それにきよとんとした謡にウィンクしてみせればさすがに意図は理解できたようで、ちよつと戸惑いつつもテルヨシに近寄つてその懐へと飛び込んで、そこですかさず広げていた両手を戻してギョツ。

謡を軽くハグして暗に「謝らなくてもいいよ」と示してあげてから、マリアに蹴られる前に解放してあげて、マリアと謡の頭を優しく撫でてから別れてバイトへと向かっていった。

謡との対戦は予想外だったものの、収穫は上々であったこともあってバイトには上機嫌で入り、さつそくウェイターとして店に顔を出してみると、すでに来ていたサアヤ、ユリ、ユニコの3人がイートイン

コーナーで談笑しながらテルヨシに気づいて軽く会釈。

小・中・高の学年のバランスが良いんだか悪いんだかな組み合わせには初見なら何の集まりだろうと疑問が生じるところだが、意外と客同士というのはそこまで気になるものではないのか、他のお客は全く気にすることもなく楽しそうに談笑して、いつものようにテルヨシを呼び寄せて愚痴を吐いたりとする。

そうやって通常業務をこなしながらも、サアヤ達が何の話をしているのかは気になってしまうので時おり耳を傾けてみても、している話に使っているシャンプーが何なのかとかガールズトークが中心で大事な話とやらをする気配すらない。

まさかいわゆる女子会なのではと思わざるを得ない微笑ましい光景には平和な空気満載なので一向に構わないとは思いますが、あの集まりでブレイン・バーストの話題が出ない違和感やはり半端ではない。

客層を見て話題に慎重になることはよくあるが、今の客は他に大学生以上しかいないので声を大にしない限りは問題ないはず。

じゃあ何なのだろうかと、結局は厨房に引込込むまでブレイン・バーストの話をしていなかったサアヤ達の謎が解けないまま、作業が一緒になったパドにその辺をうかがってみる。

「今日は MARIA が来てから本題に入る。それまではただの女子会」

「MARIA が来るなんてオレ話してもいないし、メールにも連れてこいとかなかったけど?」

「そんなことしなくても MARIA なら知れば来る」

「みんなミヤアのせつかちの悪影響を受けすぎではなからうか」

「NP。物事が円滑に進むなら省略はすべき」

やはり事情を知っていたパドによる説明で納得がいくようないかないような理屈を言われて苦笑。

MARIA が必要なら最初から言っただけでほしいと思うのが変みたいなパドの言い分は普通におかしいはずなのに、思惑通りに事が進んでしまってるせいで否定をしづらい感じに。

まあそれもテルヨシや MARIA の人間性を理解してくれている上でのある種の信頼とも言えるので、あまり多用されても困るが悪い気は

しないからとりあえずそういうことにしておいて、噂をすればなんとやらで飼育委員の活動を終えて直行してきたマリアが店の裏から中に入ってきて、休憩室にランドセルやらを置いてすぐにイートインコーナーへと足を運んでいく。

テルヨシがおまけみたいな扱いだということなので、話はISSキットやメタトロン攻略とはあまり関係ないと思われるが、ユニコム絡んでくるとレギオンも絡んでくる話ではないかと勝手に予想しつつ、あと30分もすれば休憩になるので、その時間で判明する話の全容に今から緊張してしまう。

「……テルの学校。今度の日曜日に文化祭がある」

「おえ？ それって今さらでは？」

「ユリがテルに招待されたって言ってた」

「確かにしたけど、ネガビュとも折り合いはついてるし、マズかった？」

「……………別に」

そこへ唐突にパドから文化祭の話が振られたのでビックリするが、先週にはそれに関わることでバイトに遅れたりもあつたから今さらな話だった。

しかしそこでユリを誘ったことをわざわざ言ってきておいて、それに対してなんか不機嫌な感じで返してきたパドに違和感を覚え、作業を続けるパドに何度か本音を聞こうと迫るも、返ってくるのは「別に」の一言だけ。

さすがにテルヨシもバカではないので、パドにしては可愛いと思いつつ付き合いの長い自分がユリより先に誘われなかつたことを拗ねているのだろうと指摘してみれば、作業が高速化したパドは逃げるように別の作業をしにテルヨシから離れていったのだった。

パドが拗ねるなんて珍しすぎてどうしたら機嫌が直るのかわからない状況に戦慄し、解決策を見いだせないまま休憩時間を迎えてしまい、店の裏に移動してサアヤと2人きりになってからもすぐには切り替えられず悩んでいたら、真剣な話をしようとするサアヤから脳天チヨップを繰り出されて我に返る。

「なに？ レパードが文化祭に誘われなくて拗ねてる？ んなバカなこと」

「いや冗談ではなく……どうしましょうか。招待券はもう余ってないし……」

「それは……うーん。アンタのクラスのもて余してる子から土下座して譲ってもらおうとか？」

「それでも良いとは思うんだけど、パドが拗ねてるのってなんか、自分よりユリさんが優先されたことの方だと思えているわけで……何かプラスαはないと解決しない気も……」

「考えすぎな気もするけど、もしそうならそれこそ当日に気前よく奢るくらいしてあげればいいでしょ。もちろんユリとかには内緒になるけどね」

それで事情を話してみたところ、自分が関係ないからか親身になつてといった感じでもないが、最も波風が立たないだろう解決策を提示して話を終わらせにきた。

完全に個人的な悩みだから仕方ないし、話を聞いて意見を出してくれただけありがたいので文句も言わず、うだうだするのはそれでやめて頭を切り替えると、それがわかったサアヤも時間が少ないこともあつてすぐに本題に入ってくれる。

「まずはそうね。テルは自分が言ったことの実現がどれくらい難しいことかは理解してるよね？」

「ホワツツ？」

「クソみたいな英語とかいいから。ISSキットとかメタトロンとか問題もあるけど、アンタが目標として言った《帝城》攻略の話よ。この前の《スザク》を相手にしてその難易度はわかったわよねって言うてるの」

「おお。そうね。いきなりな振りでビックリだけど、難易度に関しては理解したつもり」

やはりここでもパドの影響はあるのではなからうかと思うサアヤの話の入りには困惑してしまうが、話が通じたならいいやといったサアヤの雰囲気の流れされてそのまま続けていく。

「なら現実的に考えて、その帝城攻略を実現するためにどのくらいの戦力。要は人員が必要かはなんとなくでも想像はつくでしょ」

「《四神》の同時攻略が大前提として、1体あたりにレベル6、7、8だけのバーストリンカーを選りすぐっても……最低20人は必要になるかも?」

「事前の対策とかその辺もしつかりすればそのくらいにはできるけど、私の見解では最低30人。それが4ヶ所つてことは、作戦実行に移すだけで120人以上の大パーティーを組まなきゃならないわ。その意味、わかるわよね?」

ISSキットやメタトロン。加速研究会のことが表沙汰な問題となっていたこともあって、テルヨシが新たに掲げた目標。帝城攻略が具体性を持って進展していなかったことを突きつけられ、それでも先週のサクヤや一昨日のビヤッコを相手にしたことから、話の内容には理解が及んだテルヨシの見積もりに概ね納得のサアヤは、ならばとその言葉の意味についてを考えさせてくる。

そしてそう言われてみれば自分のやろうとしていることの規模の大きさに冷や汗が出てくる。

100人以上の規模での大パーティーを作るということは、現在で最大のレギオンである緑のレギオン《グレート・ウォール》と並ぶか、それ以上のメンバーを召集しなければならないということであり、それだけの人数を足並み揃えて指揮するだけでも相当なレベルを要求されることになる。

人数など増えれば増えるだけコントロールも難しくなるし、それを4隊にするため指揮官は4人必要になる。

どうあってもテルヨシ1人でどうこうできるレベルではない。

「有象無象の集団じゃ話にならないし、綿密な作戦計画と先行調査は必須。連携強化とパーティー練度も十分に上げないとか」

「他にも色々必要な要素はあるわけだけど、1日でも早く実行したいなら、今からでもやるべきことはたくさんあるのよ。そりゃ、ISSキットとかメタトロンとか解決しなきゃいけない問題もあるけど、それはそれよ。アンタの目標が優先されない理由にはならないわ」

テルヨシがレベル10に至る目標を奪ったサアヤだからこそ、次なる目標である帝城攻略に真剣になるのは、テルヨシへの責任と義務があるのだろう。

それでもバーストリンカーとして挑みたいという気持ちがなければ、こんな無謀な計画に参加してはくれなかったはずのサアヤがすでに動き出していることに自然と笑みがこぼれたテルヨシは、嬉しさと同時にサアヤらしさを垣間見て良いなと思う。

「それが今回の女子会と繋がるわけね」

「プロミに協力をつてことではないけど、条件によっては参加してもいいかなって話にはしてみたつもり。それはまあレギマスのユニコちゃん向けの話で、ユリとマリアに関しては別」

「別って言うとう？」

「やつぱりパーティーの熟練度っていうのは一朝一夕で成せるものじゃないのよ。そういった意味で言えば私にとってユリは長年のパートナー。熟練度はたぶん、他のどのバーストリンカーよりも高いレベルにあるって自負してる」

「そうね。つてことはもしかしてユリさんをヘッドハンティングつてこと？」

「無理強いはしてないわ。ただユリも頑固つてどうか義理堅いつていうかで、私達のレギオンに移籍するなら条件があるつて」

そこまでの話で方向性はわかったので、次に話を今回の集まりに繋げてみると、まずサアヤがやるべきと思つたのがレギオン《メテオライト》の戦力増強だつたらしく、その候補としてユリを選んだみたいだつた。

その人選には理由を含めて納得しかないが、ユリもユリで二つ返事で了承できる案件ではないため、それなりの条件を提示したと聞き、当然その条件とやらを尋ねたテルヨシにサアヤは無情とも言える提示された条件を話す。

「私達のレギオン、メテオライトの規模拡大に合わせて、中2戦域のバトロワ祭りで討ち取れば大金星になる、アンタ含めた5人。《五芒星》ペンタゴンを全員レギオンに引き入れられたなら、移籍するつて話よ」

その条件を聞いた瞬間、テルヨシの頭では1度すべての考えていたことが停止し、確認するように今のサアヤの言葉を噛み砕いて理解してみるが、やっぱり聞き間違いないかと思つて頬をつねるが、紛れもなく現実で、言つたサアヤも頭を悩ませてしまつていた。

「……………いやいやいやいや。無理っしょ」

原作12巻辺り

Acceleration Second 29

——ユリさんのおバカさーん！

テルヨシが目指す新たな目標である《帝城》攻略の計画を進めるために、協力してくれているサアヤが色々と動いてくれたのはいいのだが、レギオン《メテオライト》の戦力強化を図る最初の段階で無理難題が立ちはだかった。

現在は《プロミネンス》に所属するユリに移籍してもらうためにユリが要求してきた条件。

「……………どないせいっちゅうねん」

その条件をサアヤの口から聞いたのもすでに昨日のこと。

とりあえずバイトで自由が利かないテルヨシに代わってサアヤとイーターがコンタクトに動いてくれることにはなつての今日だったが、自分の掲げた目標に対して自分自身が何も出来てない現状を嘆かわしいとさえ思いつつ、やはりどうにかできないかと頭を悩ませていた。

しかしユリが提示してきた条件である『五芒星のレギオン加入』はその難易度があまりに高く、誰から交渉すべきかも見えてこない。「当たるべきはまず無所属のあの子だけど……超ライバル意識が高いからなあ、あの子……」

中野第2戦域のバトロワ祭りにおいて倒せば大金星となる5人のバーストリンカー。

その活躍から各々が『王』の名を冠する称号を持つていながら、それとは別の2つ名も持つ5人をいつからか参加者の間で《五芒星》などと総称した。

実力などではサアヤやパウンドといった強者の常連参加者もいながら、五芒星にはサアヤ達は含まれておらず、総称されるということ、5人には何らかの共通項が存在するということ。

それはテルヨシら5人が現在の7大レギオンに所属せず、バトロワ

祭り以降から台頭してきた実力者であるから。

現在のバトロワ祭りでのテルヨシら五芒星の実力差はほぼなく、互いのライバル意識も高いことから馴れ合いも今まで全くと言ってしこなかつた生粋のライバルなこともあって、ここから1つのレギオンとして協力関係を築き上げるといふことの難しさは想像するに容易い。

何よりも帝城攻略という共通の目標を持たせなければならぬのだから、五芒星の誰かが『そんな無謀な事に興味はない』と突っぱねて交渉の余地もなければそれで終了。

それに五芒星のうち、テルヨシ含めて4人が零細レギオンに所属しながら、そのレギオンでも最大級の戦力ということもあって、引き抜きたとなるとまた条件の提示がされる可能性は高い。

「……………ン、何だテル。まだ唸っているのか。昼休みももう終わってしまっぞ?」

ユリの話を進めるだけで別の話が浮上していく未来が透けて見えて本当に頭を抱えてしまう現状。

大レギオンがどうやって出来上がっていくのかという神秘について迷走して考え始めたところで、ローカルネットにダイブしていた黒雪姫が戻ってきて早々、机で死んでいたテルヨシがダイブする前と同じ状態なのを見て呆れる。

「なあ姫。姫は旧ネガビユの時ってメンバー集めは地道にやった感じ?」

「藪から棒に何故そんなことを聞くのだ。いや、意味もない質問はしないお前なら、そこには意味があるのだろうな。私の場合は、まあ………なんというか、皆が過保護でな。放っておけないとかなんとかで知らぬ間に大所帯になっていたよ」

「まあわからなくもないな。今も恵には保護者やらせてるし」

「わ、私の本意ではないぞ! 恵は優しいから私を気にかけてくれてるだけで、それに甘えて怠けたつもりは毛頭ない!」

レギオンの問題なので黒雪姫に相談というわけにもいかないが、かつての7大勢力の1つを率いた黒雪姫がどうやってレギオンを大き

くしたのかを問いかけるだけしてみると、何やら可愛い理由で旧ネガビュが成り立っていたことがわかりホッコリ。

それには黒雪姫としては未だ納得いかない案件のようだが、今も恵に世話されている辺りを指摘すれば顔を赤くするしかなかったらしい。

それでもおんぶに抱っこではないと訂正させたところで、その保護者が部活の集まりから戻ってきて近寄ってくれば、さっそく生徒会の仕事について指摘されているのだから、もう納得するしかないんじゃないのと思わざるを得ないのだった。

結局は黒雪姫のカリスマ性が判明しただけで何の進展にも繋がらなかったのは残念でしかなかったが、大レギオンのトップというのはそうなる必然性を持ち合わせるものなんだなと、ユニコなどのことも考えてバイトへと突入。

今日は午後から雨も降ってきて客足が伸びにくいだろうなと思いつながらレジカウンターに立っていると、午後6時になる少し前にサアヤが来店。

雨のせいでテンションが低いのか、はたまた動いてくれた先で何か問題でもあったのか、レジに立つテルヨシを確認したサアヤの表情はため息でも漏れそうなほど疲れ気味で、そのテンションでテイクアウトの注文がてらにテルヨシに小言してくる。

「とりあえず1人連れてきたわ。連れてくるだけで疲れた……もういるはずだからグローバル接続お願い」

「ちなみに誰？」

「バトル・ダンサー
《戦場の舞姫》」

「ああ、お姫様ね……」

上手くいかなかったものとはばかり思ってたので、意外にも練馬戦域にまで引つ張って来ていたことに感謝しつつも、サアヤがそこまで疲れた理由については連れてきたバーストリンカーで納得。

そして連れてきたということは話自体はまだまとまっていないから、当人であるテルヨシも交えて話そうといったことになったのだと解釈し、注文を聞いて箱詰めをしながらグローバル接続してすぐに加

速。

マッチングリストにいた目的のバーストリンカーの名前をタッチして対戦を挑み、生成された対戦フィールドへと誘われていった。

人が踏み入ってはいけない神聖さというべきか、幻想的な楽園をイメージし再現したような、のどかに咲き誇る草花と中世の石造りの神殿が目に入る《妖精郷》ステージ。

対戦で荒らすには少し勿体ないと思えるほどの綺麗なフィールドに降り立ったテルヨシは、今回がその対戦になる可能性は低いかかと考えながら、視界上に表示されている相手の名前を改めて確認。

《Cinderella Contrary [Level6]》

《シンデレラ・コントラリー》と読めるその相手こそ、テルヨシ達がこれからレギオンに加えるべき五芒星の1人にして、サアヤを精神的疲労へと追い込める稀有な存在。

「とりあえずギャラリーは私以外を追い出しといて」

「そうね。対戦するわけでもないし、変に期待させてもあれだし」

そのサアヤがギャラリーとして真つ先に近寄ってきて、今回は話がメインだからギャラリーに入った他のバーストリンカーは退室させるように指示してきて、とりあえず相手と合流しようと、用事があるこつちから近づくために移動を開始。

ガイドカーソルが導く先では、何やら遠間でも聞こえるほどの声で話す声が聞こえてきて、特徴的なその声でそれがシンデレラであることはすぐにわかり、ガイドカーソルが消えたことでシンデレラもテルヨシの到着に気づきその視線を合わせてきた。

「テイル、あなたからお話があるとその暴力女から聞いて、わざわざサーベラスの観戦を切り上げて練馬にまで足を運んだのですから、つまらないお話でしたら頭をかち割るだけでは済みませんことよ」

「サーベラス？ あいつも見所あるからなあ。ガツちゃんスカウトした？」

「そう言うだろうとは思ったけど、まだよ。誘うんなら私よりアンタからの方がいいかもね。こういうのは男同士の方が盛り上がるでしょ」

「次のバトロワ祭りの時に見かけたら話してみるかね」

「あなた方！ わたくしを無視して話を進めないでくださいませ！
不愉快ですわ！」

——ダンダンッ！

始めこそ上から目線な態度で話しかけてきたシンデレラだったが、話がさっそく脱線してハブられると、途端に地団駄を踏んで怒りを露にする。

シンデレラ・コントラリーは、かなり薄い黄色。近いとすれば薄^{うす}橙^{だいだい}色に当たる装甲色をしている、身長160cmほどのF型アバターで、頭にはティアラのような細かい装飾の装甲があり、後頭部からは4つの巻き髪状のパーツが腰辺りの長さまで伸びている。

上半身は非常にスリムで飾り気はなく、腰から下にふわりと膨らみを帯びて広がるアーマースカートのピンヒール型の足も覆い隠す長さで地面スレスレにまで伸びている。

その外面は中世のヨーロッパで栄えたコルセット巻きのドレス衣装と非常に酷似している。

「これは失礼、シンデレラ姫。お話の前にギャラリーの方に退室をお願いしてもよろしいですか？」

「そのような対応ができませんのに、どうしてもなさらないのでしようね。手早く済ませなさい」

そんな外見だからか、シンデレラ本人も完全なるロールプレイに徹していることを公言した上で、コテコテのお嬢様口調を使用して、扱いに関してもちよつとうるさいことで有名。

それがわかっているテルヨシも機嫌を直すように言葉づかいを正してあげると、その扱いに納得したシンデレラは話の準備を整えることを許してその場に崩れた正座で腰を下ろす。

ということでは対戦はなしの方向なのを雰囲気察したギャラリー達は、五芒星のマッチングに期待していただけにかなり残念そうな言葉を言い残してフィールドを退室してくれて、次はちゃんと対戦することを約束して見送ってから、3人になったフィールドで輪を作って座り話を始めた。

「……………なるほど。それでわたくしを引き入れようとなさったわけですか」

本当にサアヤからは何も聞かずにここに来たことが話してわかって愕然とするが、いちおう最後まで大人しく話を聞いてくれたシンデレラは、あまり荒れてない雰囲気醸し出す冷静な口調から、少しの間を取って一転しボリユームを上げ口を開く。

「気に食いませんわね。実に！ 実に！」

「あー、やっぱり？」

「だから嫌なのよ……バカボンバー……」

「黙りなさいなその暴力女！ まずあの爆弾魔がどのような思惑があつてわたくし達を引き合わせようとしたかは知りませんが、わたくしは爆弾魔と猪突猛進のお2人が嫌いなのでしてよ！ それはもう出会ったら有無を言わずに攻撃をしようくらいいは！」

「本人を目の前に嫌いとか言うもんじゃないよ、お姫様」

「誰が猪突猛進か！」

そこから繰り出された言葉は、話には賛同できないといった意味が込められていて、それはほぼ予想できていたテルヨシもサアヤも改めて落胆したりはしなかった。

むしろこの状態からどう賛同の方向に持つていくかをこれから交渉するのが目的だ。

「このわたくしの華麗にして美しい2つ名。戦場の舞姫があなた方2人の二番煎じになってしまっている現実是非常に不快！ 被りすぎですよ！ 早急に爆弾魔と猪突猛進を公認の2つ名に変え、混沌の舞姫の看板を降ろすならば、交渉の余地も作りましょうけど」

「それは絶対に嫌。誰が猪突猛進か」

「バーちゃんもあれで妖精の舞姫は気に入ってるし、爆弾魔は嫌いだからねえ……」

「それでしたらお話はこれで終わりですわね。このような無駄な時間に付き合わせたテイルからは、引き分けなどではなく、キツチリと勝利分のバーストポイントをいただきますわ」

「ちよっと待つてよシンデレラ。もう少しお話しようよ。まだ20分

もあるんだから、シンデレラの可愛い声をもつと聞かせてちょうだい」

しかしシンデレラにとってお気に入りな2つ名、戦場の舞姫がサアヤとユリの2人に酷似していることは思っていた以上に気にしていたようで、それが元で決して仲良くもないサアヤ&ユリとシンデレラの溝は埋まる余地がないように見える。

それでもここでシンデレラとの交渉を終えるわけにはいかないの
で、テルヨシが得意の話術でシンデレラをおだてにかかれれば、褒められて嬉しくないシンデレラも、一時の感情に流されていた自分を落ち着かせて、仕方ないからと話を続ける。

「何が気に食わないとかはひとまず置いておいて、まずはシンデレラ自身、オレ達の目的である帝城の攻略に賛同してくれるかどうか。そこはどう？」

「それは……まあ、大きな目標を掲げる殿方は嫌いではありませんし、わたくしだって誇り高きバーストリンカー。難攻不落の帝城攻略に可能性があるのであれば、挑んでみたい気持ちがありますわ」

誰にだって譲れないものがあるのは仕方がないが、それだけのため
に諦められるほどテルヨシの目標が低いわけもないため、とにかく話を好転させようと共感してくれるところを探る質問をする。

それに対してシンデレラも帝城攻略に関しては興味もあり、勝機さえあればチャレンジもしたいと言ってくれる。

「そこで嫌だって言われたらオレも諦めるしかなかったけど、シンデレラにその気が少しでもあるなら希望はあるな」

「で、ですがわたくしもそのためだけに今のレギオンを移籍などできませんわよ。わたくしのレギオンに明確な目標があるわけではありませんが、それでもレギオンを大切に思う気持ちはありますよ」

「そつちがいいならこつちとしてはレギオンの合併も検討してもらってもいいんだけど、シンデレラのレギオンのメンバー全員が帝城攻略に全面的に協力してくれる可能性は低いよね」

「ですわね。中にはまだレベル4に到達していない方もおりますし、ダンジョン攻略やエネミー狩りにも積極的な方ではありませんから、

おそらく話を持ち帰ったとしても意見は真つ二つになりますわ」

それでもシンデレラもユリと同じように簡単に移籍を決められるほどレギオンに義理や絆といったものを持っていて、いつそのことシンデレラのレギオンを吸収して合併してしまう手も浮かぶも、やはり個人の意思を尊重しなければならぬため、難易度は増すばかりだ。「んじやシンデレラ。アンタがもしもこつちに移籍を決めるなら、どんな条件が必要になるかしら？」

「まずは今のレギオンメンバー全員が納得してわたくしを送り出してくださいような理由ですわね。それ無くして移籍はあり得ませんわ」「それは必須だよねえ。でもそんな理由を作るってのはどうやる？」「そこですが、話を直接聞いたわたくしでさえ夢物語の域を出ません帝城攻略。それがより明確に実現する可能性を示していただければ、わたくし達もその本気の程くらいは理解できましたよ」

「なるほどね。要は妄言を吐くくらいなら可能性を示してから引き抜きをしろってことか。確かに筋は通ってるわ」

レギオンの移籍ということの大きさに改めてうちひしがれるテルヨシが頭を悩ませる中、はいそうですかで引き下がるつもりがないサアヤが強引に話を前に進めるために、もしもを使ってみると、意外にも話は進展し帝城攻略に本気で取り組んでいることを証明できれば或いはという話に。

しかしだ。帝城攻略はまだその具体性すら見えていない曖昧な計画で、現段階で示せる可能性などないに等しいわけで、サアヤも筋は通っていてもどうしたものかと思考に入ってしまう。

「……わかった。それについてはこつちでももつと練ってみる。それとは別にまだ要求があるなら聞いておきたいかな」

「そうですね……爆弾魔に倣うわけではありませんが、残りの五芒星の方々が全員、あなた方のレギオンに加入するというのなら、面白そうとは思いますわ」

「どのみち全員を引き入れなきゃならないし、それは不可能じゃないか。了解。あとは？」

「確かあなた方のレギオンのマスターは猪突猛進でしたわね。わたくし

し、あなたよりも下に位置するのは死んでも嫌ですわ」

「……あん？」

「わたくしがレギオン加入となった場合は、レギオンマスターはテイ
ル、あなたがやってくさいな。そしてサブマスターはわたくしに立
てなさい」

「はあ!? 何それ!? 図々しいにも程があるわよ!」

だが考えれば帝城攻略は今日明日に実行しようといった急を要す
る計画ではなく、実行に当たっては期限というものがほぼないわけ
で、確かに早めにそれを示せるのは悪いことではない。

それでもいずれば公言する必要があるのだから、この時間内で可能
性を無理矢理見出だすよりは1度持ち帰ってしまう方がいいかとこ
れに関しては保留にして、別の条件を聞いていくと、なんともシンデ
レラらしいというかな条件が提示され、これにはサアヤもキレかけ
る。

「納得いきませんか? でしたらこの条件を吞まずに済む方法を提示
して差し上げてよろしくですよ?」

「上からの物言いはイラツとするけど、聞くだけ聞いてあげるわ」

「わたくしを従えたいのですしたら、あなたがわたくしを屈服させれば
よろしいのですわ。決闘です! 誇り高きバーストリンカーならば、
その力を以てわたくしを従えてみせなさいな。もしもあなたが勝て
たなら、テイルをレギオンマスターにして、あなたがサブマスターで
も納得してあげますわ」

「どっちみち私がレギマスなのは納得しないわけね。いいわよ! そ
の代わりに、私が勝ったら今後の移籍交渉の手伝いもしてもらうわ!」
「まあ! 譲歩したわたくしに対して更なる要求をするなんて、なん
という畜生! これだから野蛮な暴力女は困りますわ」

「ついでにその煽りばかり出てくる口も閉じさせてあげるわ……」

——ゴワツ!!

と、今までは下火になっていた2人の険悪な雰囲気がここに来て再
燃して燃え盛ると、もうテルヨシには割り込んで仲裁する余地すらな
くて泣きたくなる。

しかしシンデレラがこの提案をしてくれたおかげで、サアヤが乗った段階で交渉は成立。

どっちが勝つてもこの問題は解決なので、テルヨシ的にはラッキーなのだが、どのみち自分がレギマスになることは確定したようなものなので、それに関してはどうしようかと頭を抱え、その問題に関して進言しようとした。

が、その時にはもう2人の熱き闘志がメツラメラのギツラギラに燃えていたので、結局は切り出せないままこの対戦はドロローにして閉じられ、現実世界に戻ってきたと実感するよりも早く再び観戦者として加速世界へと誘われていった。

「ついでにわたくしが勝つたらあなたの今後の通り名は猪突猛進で統一いたしませんか？」

「別にいいけど？ 私負けないし。ならアンタも負けたら追加で何かしなさい」

「ではそうですね……屈辱にはなりますが、交渉には関係ない命令を一つ、わたくしにしてもよろしくてよ？」

「じゃあじっくり考えさせてもらおうわ。フフフツ」

今度はちゃんとした対戦なのでギャラリーの追い出しもなく、その経緯も知らずに盛り上げるギャラリーに囲まれた2人は、まだ追加で賭けをし始めて、もう好きにやればいいよと呆れながらにその結末を見届ける体勢になったのだった。

Acceleration Second 30

世界から発生する音が消失し、無機質なオブジェクトとほぼ唯一の光源である満月に、その光によって作り出された底の見えない真っ黒な影で構成される《月光》ステージ。

音を発する存在はこのフィールドにダイブしたバーストリンカーのみである中で、なんとも言えない険悪な雰囲気に対戦者である2人から発せられてしまっていて、ギャラリーとして入ったテルヨシ含めた全員がその両者の割り込めない空気に圧されて沈黙。

異常な緊張感が張り詰める空間で《エピナール・ガスト》ことサアヤと《シンデレラ・コントラリー》は沈黙を破って言葉を交わす。

「この決闘にこのステージ属性なんて、運命とは残酷なものですわね」「はっ？ わけわかんないこと言わないでよ」

「何をおっしゃいますか。憎たらしいあなたの2つ名《月下の舞姫》はこの月光ステージが由来だと聞き及んでおりますわよ」

「……ああ、そういうえばライダーが昔にここでそう呼んだのが定着していったっけ」

「でしたらまさに僥倖と言えましょう。その由来のステージであなたをコテンパンに打ちのめして差し上げれば、猪突猛進がますますお似合いになりますわ」

「まだ言うかこのお姫様は……」

対戦が始まり対面してすぐに新たな賭け事もした両者だが、仕掛けるタイミングを探るように会話をするので、ギャラリーは始まってしまえば勢いで歓声をあげられるのにと思いつつ、まだ重苦しい空気を払拭してくれない両者に「早く始めてくれ」と念のようなものを送る。それが届いたのかどうかはわからないが、挑発されたサアヤがやれやれといった雰囲気を出しつつも、やっぱり怒りのボルテージは確実に上げていたので、先に仕掛けたのはサアヤだった。

扇子型強化外装《ブレード・ファン》を重量がないかのように振るってシンデレラに横風ぎの一撃を放ったサアヤのスピードはなかなかのものだった。

しかしシンデレラとて挑発しておいて先制に備えていないなどあり得ないため、サアヤの接近にも冷静に距離を保って回避に動き、動きにくそうなアーマースカートをものともせず華麗なステップ移動で踊るように避ける。

シンデレラは強化外装を持たず、攻撃はほぼ素手による掌打がメインで、たまにやってくる蹴り技も侮れない。

防御も回避が主体で、テルヨシもアーマースカートの隠れた足のせいで挙動が読みづらくて空振りさせられることが少なくない。

と、そうしたことを聞くとシンデレラが示す色が間接攻撃に特化している黄系統なのかと疑問が生じるところだ。

「おほほほっ！」

「ああ！ 腹立つっ！」

シンデレラの体重移動すらフェイントに使うステップ回避に翻弄されるサアヤは、すでに10回ほどはブレード・ファンを振るっているが、未だに掠りすらせず、余裕の表れか高笑いをするシンデレラにさらにイライラが募っていき、これは大振りするのも時間の問題かと予想。

しかしそれよりも早く回避をしながらにサアヤを誘導していたっぽいシンデレラは、踏み込みから振るわれたサアヤの一撃を紙一重のバックステップで回避したのと同時に、自分だけが建物オブジェクトの影の中へとすっぽりと入ってその姿を眩ませ、目の前にいるはずなのに全く見えなくなったシンデレラにどうすべきか咄嗟に判断ができなかったサアヤがブレード・ファンを盾に構えた瞬間。

闇の中からシンデレラの右手だけが鋭く撃ち出されてブレード・ファンをすり抜けて胸部装甲に強打を浴びせ、追撃の左手も繰り出されたが、さすがにそこはバックステップで距離を取ること回避し、シンデレラが影の中から出てくるのを警戒しながらに待つ。

シンデレラの強みの1つは、どんな属性のステージでも順応し、ほぼ安定した戦術と勝率を誇ることに。

もちろん苦手なステージもあるので、安定した勝率というのにもバラつきがあつて、各ステージで集計した勝率でも最低は5割くらいと

本人が話していたのを思い出す。

意外にもファーストアタックを成功させたのはシンデレラで、余裕の態度で歩いて影の中から出てきたシンデレラに対して、サアヤのギアが1段階上がったのが遠目からもわかる。

サアヤも猪突猛進と呼ばれる程度には感情に流されやすいが、本当の強者を相手にした時には集中力の上がり方がちよっとおかしく、自分の思い通りに事が進まない状況になると逆に冷静になってギアを段階的に上げていく。

それ故にスロースターターになりがちだが、全開レベルのサアヤなドテルヨシが相手にしたくないほどには超強いので、如何なシンデレラでもギアの上げすぎには注意しなければならぬだろう。

まあそれだとシンデレラ的には意味のない決闘ということになるから、意図的にサアヤのギアを上げさせた節もあるし、何にしても対戦はここから苛烈を極めることは確定的に明らか。

何よりもあのシンデレラに必殺技ゲージが1割でもチャージされてしまったのだから、サアヤは気を付けなければならない。シンデレラの恐ろしい効果を持つアビリティを。

集中力が上がったことで無駄な動きをしなくなったサアヤは、シンデレラを近づけさせない戦術に切り替えてブレード・ファンを展開剣へと変化させ、両手に持った2本の展開剣に直列で連動させたリーチ重視の形態を取る。

質量に影響されない連動操作による長大リーチの斬撃は、今のテルヨシでさえそのリーチに見合わない振りの速さに回避が追いつかずかなり強引な接近を迫られる。

《逃走王》のテルヨシがそうなのだから、回避主体とはいえテルヨシよりは劣る動きのシンデレラは、当然ながらそのリーチと速さに悪戦苦闘となり、ジリジリとHPゲージを削られるも、体勢まで崩される前に逃げるように建物オブジェクトの影の中へと待避して斬撃の嵐を止める。

「甘〜」

だがサアヤもこの月光ステージで名を馳せた経歴を持つことから、

影の中であろうと単に見えないだけなのがわかっていて、展開剣を1本の両手持ちに変えて超長大リーチの展開剣で影の外から豪快な風ぎ払いでシンデレラのいる影を一閃。

「甘いのはどちらでしてー」

サアヤの剣が影の中へと突入した瞬間、その影の中からサアヤの動きは見えていただろうシンデレラは、そっくりそのまま言葉を返してみせ、サアヤの剣は直後に影の中を一閃し横から抜ける。

が、サアヤの方には手応えがなかったようで、テルヨシの耳にも剣が当たったような音は捉えられなかった。

その代わりに声で誤魔化してはいたが、叫ぶのと同時に影の中で別の物音がしたので、おそらくは影の中でジャンプして建物オブジェクトの壁を蹴ってサアヤの剣を回避したと思われる。

それを証明するようにサアヤの剣が通り過ぎてからカツンツ！とピンヒール型の足が地面を捉えた音がしたので、サアヤもすぐに剣を折り返して追撃に出る。

着地直後なら、また壁を蹴つての跳躍は難しいだろうから、別の回避方法でくるかなと予想してみるが、それよりも攻め気だったシンデレラの行動は大胆。

まさかの着地直後から迷うことなくサアヤに向かって前進していたようで、剣が影の中へと侵入するよりも早く影から出てきたシンデレラは、まだ5mほど離れているサアヤに届く前に剣が当たると見るや、恐ろしいまでの柔軟性で両足を前後で開脚して体も後ろへと反らし姿勢を低くすることで回避。

まるで新体操の技のようで魅入ってしまう美しさがあったが、サアヤはそれに見惚れている場合ではないので、再び空振りした剣を即座に立ち上がってきたシンデレラに合わせて手元へと戻して並列にして前方を遮る盾を展開。

「カツンツ！」

しかし接近したシンデレラはその展開剣の盾に生じた隙間へと自らの右腕をためらいなく突っ込んでその先のサアヤの胸部装甲に触れる。

「《リバース》！」

決して攻撃力があつたわけではないその接触でサアヤにダメージが発生することはなかったが、この上なく危険と判断して飛び退こうとしたサアヤより早くシンデレラが何らかのコマンドを発声し必殺技ゲージが減少。割り込みをかける。

すると後ろに下がろうとしたサアヤの体はその意に反してまさかの『前進』をしてしまい、向かってきたサアヤに盾の隙間から右腕を引き抜いたシンデレラは、その身を屈めて低空の足払いで転倒させ、前のめりになったサアヤはバランスを崩して前へと倒れてしまう。

「ッ……急すぎよこれ!!」

完全に意図としない転倒をさせられたサアヤだったものの、起きた現象に関しては理解しているので混乱は少なく、すぐに立ち上がろうとするが、完全に立つ前にシンデレラの追撃の蹴りが炸裂し、辛くも展開剣での防御は割り込ませたが、再びバランスを崩して尻餅をついてしまう。

「調子に乗るな!」

いいように転がされて流れがシンデレラに持っていかれそうになったところで、古参の意地がそれを阻止しようと体を動かし、展開剣を再び超長大剣へと変えて迫るシンデレラの腹に切っ先を当てると、展開剣が次々とシンデレラの体を押し返して直列になろうと伸びていき、16本全てが伸びきった頃にはシンデレラの体は15mを越える距離にまで離されて建物オブジェクトに突き飛ばされていた。

「……便利な扇子ですことね……」

ダメージも切っ先の連続ヒットのおかげで2割も減少して、ダメージの上ではほぼ五分に戻った。

しかしそれによってシンデレラの必殺技ゲージは3割ちよつともチャージされてしまったので、そのことには危機を脱したサアヤも微妙な雰囲気醸し出し立ち上がる。

先ほどの攻防でシンデレラが叫んだコマンドは必殺技の発声ではなく、あるアビリティの発動に必要なコマンド。

《反転》^{インベート}と呼ばれるそのアビリティの効果は、対象の体に接触した

状態でリバースのコマンドと必殺技ゲージの100%を消費することで『対象のワンアクションを反転させる』というもの。

わかりやすく説明するなら『前進する』アクションを『後進する』アクションにしたり『拳を突き出す』アクションを『拳を引く』アクションに反転してしまうということ。

厄介なのはこの『ワンアクション』が『連動したアクション』にも影響を及ぼすため『走って近づく』アクションにも『走って遠のく』アクションとして適応されてしまうので、アビリティを使用された場合は『首を振る』などの単純なアクションでピタリと1度停止して効果を打ち消さなければならぬ。

首を振って止まらずに次のアクションに繋いでしまうと、連動したアクションと見なされてアビリティの効果が消えないので、1度『きちんと止まる』というのが肝になる。

だがこのアビリティを割り込まされる脅威は、対戦経験があればあるほど理解できるもので、たとえ接触とコマンドを必要とするアビリティといえど、発動されればそれだけでシンデレラにとって無駄な動きを強いられて隙ができた敵になってしまうわけだ。

この隙に追撃し必殺技ゲージをチャージし次のインベートへと繋げて隙を作り出し追撃し、とそうやってしまえばもうシンデレラの独壇場にして悪魔のようなハメ技が完成してしまう。

シンデレラのアバター名にあるコントラリー。4大ダンジョンの名にもあるこの単語には『反対』『正反対』という意味があるのと同時に、意に沿わない者。『天の邪鬼』という意味にもなる。

「ホント、間接攻撃は正面突破が効きにくくてやりにくいわ。テイルと戦う方が万倍くらい楽よ」

「黄系アバターには誉め言葉ですが、それはそれでテイルには酷い言い様ではないかしらね……」

「そうだそうだー」

「アンタはどっちの味方なのよ！ 黙って応援しなさい！」

「すまんガツちゃん。この対戦、オレにとってはどっちが勝ってもいいから正直どっちも応援してる」

「どっちつかずの男（殿方）はキザなだけ（ですわ）ね」

そんなシンデレラの対人性能の高さと厄介さには真つ向勝負が性に合ってるサアヤは露骨に嫌そうにするが、黄色系統のアバターはそういう嫌がることをするのに特化したアバターなので嫌味にもならず、何故かテルヨシに飛び火しておかしなことになる。

本当にこの対戦の結末がどうなろうとテルヨシ的には不変の結果しかないので、女同士ということもあるから鼻眞は良くないかなと思っていたのに、正直なテルヨシに対して何故か息ピッタリでツッコんでこられて崩れ落ちる。

——こ、こんなことで対立してる2人が意気投合しないでください……

それはともかくとして、互いのHPゲージは残り7割前後といった具合で持ち味も出てきたところ。

しかし両者がたったの一撃から勝負を持つていけるほどのポテンシャルと戦術を持つことから、すでに対戦は中盤を越えたところに来ているのは間違いなく、3割の必殺技ゲージを持つシンデレラに関しては、インベートを連続で攻撃と一緒に撃ち込んで更なる行動制限を強いることができるのは悪夢。

自慢ではないがかつて1度だけ必殺技ゲージが満タンの状態から『14連続インベート』を撃ち込まれて頭がこんがらがったまま敗北した経験があるテルヨシとしては、あれが2連発以上になる恐怖を誰よりもわかっていると自負してる。

さらにまだシンデレラには黄系らしい必殺技も存在し、使い勝手も良いので、インベートと同じでいつ使われても厄介だ。

『《スラツシュ》！』

そのどちらにせよ、テルヨシが考えるサアヤの戦略は1つしかなく、接触が必要なインベートも、直接的な攻撃力はない必殺技も間合いいに入れなきやいなので、中距離戦で失敗した先ほどの経験を活かして、今度は自分が一方的に攻撃できる近接のリーチを維持するスラツシュを使い、二刀流の両手の剣に並列させた4本の剣で剛爪を模し、残りの6本が後ろで控えて蹴りに連動して直列に動く伸びる斬撃に

対応させる。

「本当につ！ 応用力があまりすぎますわよ！」

サアヤがレベル7になったことで得た分割連動操作は、日に日に磨きがかかってきて応用性もかなり柔軟になってきている。

それにはさすがのシンデレラも悪態をついてリーチから逃げる回避に動き、いつ直列になって襲ってくるかもわからない剛爪と蹴りに全神経を集中させて隙を探し始めていたが、そうして選択肢を与えて考えさせ、動きが鈍ったところで一気に畳み掛ける。

それを可能にするだけの集中力を引き出したサアヤに守りの意識は全くない。

それこそがサアヤの戦闘スタイル。この辺は本当に黒雪姫に似ているが、要は『攻撃は最大の防御』を実践してみせているわけで、相手に反撃などさせずに勝負を決めにきたサアヤのプレッシャーは対峙したシンデレラだけでなく、ギャラリーでさえ息を飲むほどに苛烈で圧倒的。

そのプレッシャーにわずかに圧されてしまったシンデレラは、得意のステップ回避にほころびを生んでピンヒール型の足が地面を捉えきれなかったのか、バックステップの終わりと共に膝が折れて転倒しかける。

しかしそこで倒れずに右手だけを地面について体を跳ね上げて持ち直したシンデレラのリカバリーは無駄が最小限になっていた。

だがそれでも、その生じたわずかな隙を見逃すほどサアヤは甘い。い。

リカバリーに成功した直後で余裕のないシンデレラの胸部装甲を狙い澄まして放たれた右手の剛爪を直列に伸ばした一撃は、勢いそのままにシンデレラの装甲を突き貫き穴を穿つ。

HPゲージもガガンツ！ と3割も削られてそのダメージが痛烈だったこともわかるが、貫通したことで展開剣がシンデレラの動きを阻害し回避にも動けない状況でサアヤが止まるわけもなく、間髪入れずに左手の剛爪が刺突となって命中率の高い腹へと穿たれる。

「肉を、断って……」

再びズガンッ！ とシンデレラの体を貫いたサアヤの一撃で2つの穴が空いたシンデレラのHPゲージは残り2割を切ってしまい、たとえ残っても痛みによる硬直で止めを刺されてしまいうだろうと、ほとんどのギャラリーは思った。

テルヨシも、目の前にいるサアヤすら確信に近いものを持っていたからこそ、サアヤの追撃を受ける前に自ら前進して攻撃を受けながら間合いに入り込んだシンデレラの奇策には対応が遅れる。

「リバーズッ!!」

その遅れはシンデレラにインベートを撃ち込むだけの隙を与えて、動きが反転させられたサアヤはやはり咄嗟に展開剣を手元に戻したり、シンデレラを攻撃することさえもできずに変な動きを強いられる。

その動きの間にサアヤの両手から手刀で展開剣を叩き落として、続け様にインベート付きの掌打でサアヤを後方へと吹き飛ばして体から展開剣を抜き、転倒を食い止める動きが反転して完全にバランスを崩して倒れるサアヤに3発目のインベートを撃ち込みに接近。

「……《ジエノサイド・カッター》!!」

完全に流れがシンデレラに向いてギャラリーが沸き上がった瞬間、インベートの効果が切れて再び撃ち込まれるまでの間に背中にクロスして収めていたブレード・ファンの両端を握ったサアヤは、インベートが撃ち込まれるのとほぼ同時に抜き放って目の前でクロスさせ必殺技発声。

直後、倒れるサアヤをマウントしかけたシンデレラが、後方から回転しながら襲い来る展開剣に気づいて飛び退き、初めて地面を転がりながらの全力回避で16本の展開剣から逃げ延びる。

「あそこから逃げさせられます……のお!？」

後先も考えない全力の回避。

食らえば間違いなく敗北していただろう一撃からの生還はシンデレラの今日一番の隙となってサアヤに勝機をもたらし、元の扇子に戻ったブレード・ファンを持ったサアヤはインベートをすぐに打ち消して立ち膝の状態から、

「《ブラスト・ゲイル》!!」

今度は横倒しの竜巻を発生させる必殺技でシンデレラを追撃し、その範囲から逃げられなかったシンデレラは、竜巻の勢いに吞まれて後方へと吹き飛び、建物オブジェクトの壁へと激突しその残りのHPゲージを消失させたのだった。

「はあ……はあ……ホント、アンタのアビリティは大っ嫌い。でも、ここぞって時のアンタのガッツは、嫌いじゃないわよ」

勝利の余韻に浸るわけでもなく、ギャラリーの歓声を浴びながらのサアヤは、近寄っていったテルヨシにだけ聞こえそうな声でシンデレラを称賛するが、どうせなら聞こえるように言っておけばいいのと思う。

それを口にはできないテルヨシもヘタレではあるが、とにかく対戦には勝ったサアヤがドヤ顔してそうな感じでテルヨシに向き直ってくる。

しかしながらテルヨシはその結果はどうあれ、また面倒な案件が増えたことを告げねばならなかった。

「勝ったのはいいんだけどさ。シンデレラを迎え入れた場合になるレギマス。オレ、肝心のレギマスの証を持ってないんだけど」

「……………あっ」

「突撃！ 今夜のレギオンクエストお！」

「ですわー！」

「何そのテンション……引くわー」

「ガスト姉はもう少しテンション上げてても良い気が……」

《エピナール・ガスト》ことサアヤと《シンデレラ・コントラリー》の対戦が終わってから浮上した新たな問題。

シンデレラ加入時にテルヨシがレギオンマスター。サアヤがサブマスターになることは確定したのだが、そもそもサアヤが持っていたレギオンマスターの証を利用して作ったレギオンだったせいで、テルヨシがその証を持っていないことが露呈。

譲渡できるものでもないのに、対戦が終わってから再度シンデレラを招いて話し合った結果。今夜にでも取りに行こうという話でまとまったわけだ。

そして訪れたのは《無制限中立フィールド》の池袋にある《池袋地下迷宮》という《レギオンクエスト》を行うためのダンジョンで、レギオン結成のための試練ということもあって最低人数である4人は必要なのは分かっていた。

そこでサアヤは1度だけできるシンデレラへの命令をこのレギオンクエストの手伝いに使ってくれ、残りの1人は《子》である《アイヌ・イーター》がほぼ強制参加になっていた。

現地集合ということで時間だけを合わせてダイブしていたテルヨシが無事に3人と合流してから、消化しなきゃいけない案件が減らない現実を直視しないように開き直りで意気込んだら、テンションについてきたシンデレラはともかく、サアヤとイーターのノリは微妙で早くもまとまりがない感じに。

「えつと……まあレベル6以上のパーティーなんで、レギオンクエストとか今更かよみたいいな空気はありますが、サクツとクリアしてお開きにしましょう」

「クエストの内容は話した通りだから、このパーティーでの選択肢は

迷いなく『アレ』と『アレ』だからね」

「わたくし、このレギオンクエストで《完全一致》がどうなるか少し楽しみなんですのよ」

「あーそれ私も。今回は実験的要素あるわよね」

それでもやらなきゃいけないので、これからリーダーになるわけだしと統率に動いたテルヨシに対して、サアヤとシンデレラは何故か別の意味での楽しみを見出だしたようで、レギオンクエストが話でしかわかってないテルヨシとイーターはついていけずにポカーン。

何故かこんな時には仲良さそうに見える女子2人の神秘は深まるが、喧嘩するよりは良いのでそのままを維持していざ出陣。

長く下る階段を下りながら、楽しそうに先行するシンデレラと手を引つ張られるイーターを笑いつつ、隣を歩くサアヤと一応の情報共有をしておく。

「んで、イーターの方の収穫はあった感じ?」

「話ではできたみたいよ。会えるかどうかはまた私が調整してみるけど、どうなるか」

「スピンは今はISSキットのせいで活動しづらいだろうから《天井知らず》ノン・リミットか《最終兵器》リサル・ウエボンだよね?」

「後者の方。スピンは誘う都合、ISSキット問題も解決しないとダメよね。やることいっぱい過ぎい」

「何事もコツコツやらないとってことよね。土台はしっかりしとかないと崩れるのは一瞬だし」

シンデレラとの対面の時には話が終わってからテイクアウトですぐに帰ってしまったので、イーターの方の進展についてバイトが終わってから聞こうと思っていたものの、どうせ会うしなと後回しにしていたことをいま聞けば、コンタクト自体は取れたようで安堵。

《五芒星》の1人である《ゲート・スピン》については、先日ISSキットの感染者であることがわかっていたので、キットの寄生が解除されない限りはまともな対話は無理と判断していた。

なので消去法でイーターがコンタクトしたのが残った2人であることはテルヨシもわかっていたが、これはこれで厄介なのが残ったと

思わざるを得ない。

「理屈じゃわかかってるわよ……ああそうだ。この先でふた手に分かれることになるけど、イーターをお願い」

「どして？ 経験者が分かれた方が効率良くない？」

「うーん……私がやるとあの子、露骨にへそ曲げるからかな。アンタがやった方が好転するような気がするのよ」

「何の話？」

「大事な話。私はアンタにこうして協力的だけど、あの子はたぶんまだ『付き合わされてる』って感じてるから」

厄介者を後回しにした感が拭いきれず、最後にしたらしたで文句を言いそうなのが容易に想像できてげんなりしていたら、急に話がレギオンクエストに戻ってくるので何事かと真意を問えば、イーターの《親》としてちよつと情けない理由を吐露する。

そしてそれは五芒星だなんだよりもまず優先しなきゃいけなかったことなのを言われてから気づいたテルヨシは、そんなつもりはなくてもイーターのことをないがしろにしていたことを恥じる。

「……ごめんサアヤ。責任はオレが負うよ」

「いいわよ別に。私もテルに頼っちゃってるし、あの子の主張が弱いのも悪いんだし」

テルヨシとサアヤが帝城攻略を目標に掲げたのは、両者が納得した上での決定だから問題は全くなかった。

だが同じレギオン《メテオライト》に所属するイーターはその決定をほぼ一方的に聞かされた立場であり、何の確認もなしに手伝わされている現状はイーターの本意ではないはずなのだ。

そんなことにすら気づかずイーターが手伝ってくれていることを当たり前だと感じていたテルヨシも、それを言わずにここまで引張ってしまったサアヤも、シンデレラに振り回されているイーターを見ながら、どんな結果になろうとイーターの好きにさせてあげようと決心するのだった。

長い階段もようやく終わり、広い部屋に出たテルヨシ達は、その空間の中央に立つ錫杖と盾を持つ戦乙女の白亜の像の前で止まり、初見

ではないサアヤとシンデレラがその像に対して慣れた感じで話しかける。

「アテネ、レギオンクエストを受けたいんだけど」

「よろしくて?」

「この像ってイベントキャラ的なアレなのね」

「そういうこと」

「対話も成り立つAIですから、失礼のないようにですわよ」

一見すれば奇行に思えるその行動も、ちゃんと理由があるなら納得であり、そうした問いかけにアテネと呼称された像は閉じていた瞳をパチリと開けてテルヨシ達を見据えてくる。

「友人感覚で来られる方は珍しいですね。レギオンクエストの挑戦。承りました」

「まあ私は6回目になるし」

「えっ? 何でそんなにやってんの?」

「旧プロミでレギマスの証が目的で何人かまとめて取ったのよ。ライダーは当然として《三重土》^{トリアード}の3人と私で5回。それでこの6回目」
「改めてあなたが第2世代なのだと思わされましたわ」

「そりやどうも」

如何にも強そうな装備をしているが、アテネの声は驚くほどに流麗で優しい印象があり、攻撃性のないAIもちゃんと作れるんだなあと製作側へのちよつとしたデイスリも内心で入れつつ、サアヤの散歩感覚のレギオンクエストへの挑戦の理由に苦笑。

黎明期ともなるといくらかの備えとしてそうしたことが他のレギオンでもあったのだろうが、レギオンクエスト1回につき1人しか証を貰えないという非効率さは改善してくれてないんだなあと思いつつ、話を進めていたアテネの方からさっそく指示が飛んできて、目の前の祭壇のような台座に4つの卵が出現。

「今からこの卵をそれぞれ1つずつ持って、後ろの2つの扉からふた手に分かれて進んでもらいます。その先も要所の指示に従って行動してくださいね」

「よっし。んじやイーター、行くぞ」

「えっ？ 僕とテイルさんで組むんですか？」

「男同士の方が気楽だろ？ ガツちゃんもシンデレラも変な気遣いしなくていいし、サクサク進んでちょうだいな」

「まあ、初見さんお2人で楽しんでくるのも有りですわね」

「あんまり待たせたら寝てるかもね」

「なるべく早く合流するって」

アテネの指示については事前に聞いていたので、その卵をどうすればいいかもわかっているテルヨシは、それらしい理由と共に多少は強引にイーターと組んでサアヤとシンデレラと分かれ、なんか納得したようなしてないようなイーターを無視して引っ張り、無駄に大きい両開きの扉を開けてその先へと進んでいった。

扉の先はまたも下りの階段が続き、もう地下10階くらいには来てんじゃない？ と体感で推測しながら、隣を歩くイーターが気まずそうに無言なのでテルヨシから話しかけていく。

「あのさ、イーター。唐突だけど、今のレギオンはいて楽しいか？」

「えっ？ 楽しいか、ですか？ そうですね……領土戦は毎回、僕も活躍させてもらえますし、特に縛りとかもないメテオライトは不自由は感じません。領土だって占有してるわけじゃないですし、レギオンの恩恵は元々あまりないですから」

まずは探りを入れるように遠回しにレギオンへの不満はないかと聞いてはみたが、こんな質問でイーターが本心をテルヨシに打ち明ければ苦労はない。

おそらく話し始めるまでの間で不満はパツと浮かんだのだろうが、テルヨシに対して言うべきかと考えて言わなかったのがわかれば、やはり男同士ならストレートに行くべきだなとズバリ言う。

「元々メテオライトはオレが領土戦をやりたかって願望からガツちゃんもイーターが協力してくれて出来たレギオンだ。だからこそイーターには活躍してほしいし、ガツちゃんもイーターにもっと自信が付けばって思って協力してくれたと思う。でもさ、最近はおレとガツちゃんですごい目標を掲げたわけで、その帝城攻略に関してイーターはどう思ってる？」

「僕は別に……」

「いや、違うな。まずやるべきは謝罪だ。悪かったイーター。レギオンの決定をそのメンバーであるお前抜きで決めちまったオレとガツちゃんは全面的に悪い。お前が本当は帝城攻略なんて馬鹿げた目標に賛同できないとちよつとでも……全く以て無理だつて思つてるなら、このレギオンクエストを最後にレギオンを抜けてくれても構わない。オレとガツちゃんはお前に目標を押し付けたくない。それが本心だ」

この言い方だと、テルヨシがサアヤに頼まれて話をしてしていると丸わかりで配慮が足りなかったが、そんなことを隠して言うくらいなら偽りなしの本音をぶつけた方がいいだろうとそのまま続ける。

それを聞いたイーターは、深々と頭を下げるテルヨシに何も言わずしばらく沈黙し、ようやく口を開いてテルヨシに頭を上げるように言うと、本音でぶつかってきたテルヨシに対して本音で語ってくれる。

「僕は別に怒つてたり不満だつたりはないんです。テイルさんとガスト姉はいつも僕の前を歩いてくれて、僕のための道を作ってくれました。今回だつて帝城攻略をやるつて聞いて『僕がいても大丈夫なんだ』つて思つたくらいです。僕は誰かに手を引つ張つてもらわないとなかなか前に進めない臆病者で、ずつとガスト姉やテイルさん達におんぶに抱つこで、本当はそんな自分が変わらなきゃいけないつて思つてました」

そんなことを聞くとサアヤが思つていたようなことはない感じのニュアンスで、むしろ帝城攻略には本当に協力的なように聞こえて、これには普段のイーターのことを考えてもテルヨシも意外ですぐに言葉が出てこない。

そして今までにないイーターのハッキリとした意思の主張はそれに終わらず、ここからどうしたいかもその口から宣言。

「だから僕は、この帝城攻略の計画から変わろうつて思つたんです。ガスト姉……サアヤ姉やテイルさんの『背中』じゃなくて、隣に立つて『同じ景色』を見るために、自分から前に進もうつて」

「……………同じ景色、か。カツコ良いじゃんそれ」

きつとサアヤが感じていたイーターの違和感は、今までと同じ自己主張もなく言われたことをやっていたイーターが、どうすればこれまでの自分から変われるかを悩んでいたから感じたもので、元来の性格から若干ネガティブに捉えてしまっただけなのだ。

それがわかればもうテルヨシが何かを説得したりする必要はなく、隣を歩きたいと宣言したイーターが本当の意味でレギオンの一員になったことを嬉しく思いつつ、ただイーターに対して右拳を向けると、意味を受け取ったイーターも嬉しそうに右拳を持ち上げて拳と拳をぶつけてくるのだった。

そうして改めてイーターとの意思疎通が出来たところで、自分達が完全に足を止めていることに気づいたテルヨシは、あまり待たせると合流した時に寝られていそうなことを思い出して再び階段を駆け下りてまた開けた部屋へと躍り出る。

先ほどの部屋よりはひと回りほど狭いものの、中央にはまっすぐに伸びる大木。近くに池のような水溜まりがあり、天井には太陽を模した照明が。

それらには意味があるようなないようなとサアヤとシンデレラが話していたが、とりあえずまっすぐ歩いた先にあった石碑の前に移動してそこに書かれている『卵に与えるものを選べ』という指示から選択肢である『火』『水』『風』を見て、2人で迷いなく『水』を選択。

その選択を宣言してからすぐに部屋の中で変化があり、水溜まりの中から2匹の青色のワニ型エネミーが姿を現し、その目は明確にテルヨシとイーターが持つ卵をロックオンしていた。

「なあイーター。お前の決意は聞いたけどよ。やっぱりこれまでのお前からどこか頼りない印象は拭いきれてないと思わないか？」

「そうですね。でも今それを言うってことは……」

「君のような察しの良いバーストリンカーは嫌いではないよ。卵は預かってあげるから頑張ってみな」

「テイルさんはこのエネミーに脅威を感じてないんですね？」

「パツと見でもいくら弱点が見えたり、たぶんほぼノーダメで倒せると思うよ」

「ノ、ノーダメ……頑張ります……」

何が出てくるのかもサアヤとシンデレラから聞いていたので、驚くようなリアクションもなく観察したテルヨシは、それだけでこのエネミーが小獣級よりもふた回りくらいは弱いのがわかった。

だから覚悟は見せてもらったイーターにこれからの計画で役に立ってもらうため、腰の引けた戦いはしてほしくないという思いで背中を押し、エネミー2匹を相手にどう戦うかを見る。

テルヨシのそんな意図がイーターにもわかったからか、余計なことも言わずにノーダメージでいけると言うテルヨシに負けないように前へと踏み出して構えてみせた。

今のイーターの実力だとノーダメージは厳しいだろうが、倒すだけなら必殺技なしでもいけそうかなと戦力分析を済ませていたテルヨシの視線を受けながら、大きな口をガチガチ鳴らして迫るワニ型エネミーをまずは距離を保つように円を描いて移動し動きを観察。

正面に対しては強そうなエネミーだが、横の動きへの対応はそこまで早くもなく、転回になると十分な隙が生じる。

それと現実のワニなどもそうだが、視野も狭くイーターの動きに常に顔の正面を向ける動きを強いられているようで、背後を取ってマウントしてしまえばほとんど勝ったも同然。

とはいえ相手は2匹なので攻略となると少し工夫は必要。その辺でどうするかと見ていたら、イーターも考えがまとまったのか、ターゲットが自分に向いているのを確認してから部屋内にあった大木を勢いよく駆け上がってパルクールさながらの壁蹴りジャンプを披露。

それによって追ってきていたエネミー2匹が揃ってイーターの動きを目で追えずに口をあめぐりさせて、頭上を取ったイーターは落下の勢いと共に強烈な踏みつけを2匹にお見舞い。

——ドゴオオオオン！

………したのだが、そのインパクト音がかなり硬質な物がぶつかったかのような鈍い音を響かせたため、そんな音が出ようはずのないイーターをまさかというように目でガン見。

見た目には全然これっぽっちも変化はなく、踏みつけ後に1匹にマ

ウントしてゴッスンゴッスン猶予の限りに拳の連打を背中に叩き込んでみせるが、やはりそのインパクト音は金属質とは違った硬質さから来る音。

何かを手足に仕込んでいるとも思えるが、履き物に見えるミトン装甲や長靴は等しくイーターの体の一部なのでそもそも中身という概念はない。

あるとすれば『イーター自身が硬質化している』か『視認できないタイプの強化外装を装着している』か。

謎のイーターの現象についてを考察していると、マウントしていなかったもう1匹が助けるようにイーターを襲い、いち早く察して離脱したイーターは、2匹から正面以外の角度になるように待避しながら懐に手をつ込んで《フリーザー・アイス》を2つ取り出すと、振り向いてきた2匹の大きく開いた口の中へと投擲。

何か反射的なものなのか、何の疑いもなく口に飛び込んだきたフリーザー・アイスを飲み込んだエネミーは、直後にその体を硬直させて動かなくなってしまう。

フリーザー・アイスには食べた者の必殺技ゲージを満タンにする驚くべき効果があるが、その副作用として食べた後は約1分間——ゲージの上がり幅に影響するらしい——の完全思考停止に追い込まれてしまう。

それはどうやらデュエルバターのみならずエネミーにも有効のようで、どの程度の効力を発揮するかは待ってみないとわからないが、1分間も止まってくれるはずもないので、後退から反転して効き目が出たと見るや接近に切り替えて時間の許す限りまたメツタ打ち。

「おおぅ……ノードダメおめえ……」

結局そのまま動き出す前にエネミーを倒してしまったイーターは、終わってみれば無理そうだと思っていたノードダメージでの達成に言葉が上手く出てこない。

イーターもこの結果には満足なのか、珍しくテンションが高くガッツポーズなんてものが飛び出す。

結果には驚いたが、しかしテルヨシが気になるのはその結果に導い

た謎の現象。

「なあイーター。もしかして新しいアビリティとか取得してたり？」
「はい。ガスト姉から帝城攻略の話聞いて、それに乗ろうって決めた後に加速してみたら《高密度^{ハイ・デンシティ}》というアビリティが追加されました。使ってる間は必殺技ゲージを消費するんですが、装甲密度が桁違いに跳ね上がるみたいで《ジャイアント・スノーマン》にも匹敵するかもしれません」

「あれと同等レベル……小さな凶器だなそれ……ってどうかそういうことなら覚悟なんて試す必要なかったし。アビリティ発現させるほどの決意ならオレもガツちゃんも認めますってば」

その疑問を解決するためにした質問にテンション高めで即答したイーターは、おそらくこの事をサアヤにもまだ報告してないのだろうと予測しつつも、そういうことがあったならこの課題も半分くらいは意味のないものになっていたので、いつもはテルヨシ達のハチャメチャぶりにツツコンでばかりのイーターにツツコミを入れてしまうのだった。

「未熟なやつのことを『ひよっこ』とか『青二才』とか言うけど、どっちも合わせるとこうなるんだな」

「それはちよつと違う気もします……」

山積みの問題を抱えながらも1つずつ解決していつているテルヨシ達は、現在進行形でレギマスの証を獲得するために《レギオンクエスト》に挑んで、その第一関門となったエネミーとの戦闘を《アイス・イーター》の意外な健闘で突破し、それによって持っていた卵が孵化して真っ青な雛鳥が出現。

倒したエネミーによって雛鳥の色が変化するとサアヤとシンデレラからは聞いていたが、実際に目にしてみるとなかなか見ない色の鳥に変なことを言ってしまう、イーターが微妙なツツコミを披露する。

現実世界にも確かマウンテン・ブルーバードと呼ばれる青い鳥がいた気もするが、やはり外敵を考えれば目立つ色なのは間違いない。

「まあ幸せの青い鳥ってことも言うし、縁起は良いよな」

「メーテルリンクの童話ですね」

「あれ、イーターがなんか博識」

「物心ついた頃に親が読ませてくれただけですよ」

そんなやり取りをしてから、いつまでも雛鳥にリアクションしていても仕方ないので、適当に締めて先に進もうとしたら、意外なところでイーターが食いついてきてビックリ。

テルヨシもよく知らないので深掘りはしないが、青い鳥を子供に読ませる親というのがなかなかレアな気がしないでもない。

と、そうこうしていたらまた足を止めていたので、雑談もそれくらいにして先へと進もうとなり、今度は2つの扉を1人ずつ選んで進めと指示があったので、どっちも進んだ先は別の同じ部屋と聞いていたから、特に悩むこともなく分かれて1人で進んでいった。

右に90度の方向転換と左へ90度曲がる踊り場を1度ずつ経由して下りていった階段の先には、また部屋があつて中の空間も図書室

といった感じで無数の本棚と収納された本。

中央奥には大きな机もあり、その上にも色々なものが置いてあったが、その中に次の指示が書かれた掲示板もあったのでそれを読む。

そこにはまた『雛鳥に与えるものを選べ』という指示と共に『剣』『寶石』『本』の3つの選択肢が与えられていて、雛鳥にはどれもよくわからない選択肢だなあと思いつつも、事前に選択肢は決めていたので迷いなく『剣』を選択。

そうすればやっぱり近くの本棚がスライドして動き、その奥から青基調の人型エネミーが槍を持って出てくる。

「まっ。さつきはイーターに頑張ってもらったし、楽ばっかりしちゃダメよね」

レギオンクエストと言いつつもいまいちチームプレイをしない内容には疑問も残るが、個々の実力あってのレギオンってことかと勝手に納得しつつ、どうせ倒さなきゃならないのだろう目の前のエネミーを、イーターもいなくなったので相手にしなきゃと構えてみせれば、意を汲み取ったエネミーもリーチを活かして先制してきた。

しかし槍捌きは《親》である《レイズン・モビル》ことリュウジの方が段違いで上手いので、向上した観察眼と合わさって焦りを覚えるような攻撃はほほなく、少し様子見をして予想外の攻撃を加えてくるかと思つたものの、青系として愚直なまでに素直な攻撃しかしてこないなので、長引かせても仕方ないかと突き出された槍を紙一重で避けて掴み、強烈な蹴り上げで槍をへし折り武器を奪ってしまふ。

そうなるとエネミーも肉弾戦に切り替えるしかなく、槍捌きよりも拙いその攻撃を受けることなくエネミーを撃破。

やっぱりレベル8になってやるクエストではないよなあ、と苦笑しながら変化を待つと部屋内にアテネの声が響いてきて、エネミー撃破で目的を達成したとのことで最初の部屋までワープさせられる。

「おっそ」

「女性を待たせる殿方はモテませんのよ」

「テイルさん、僕も怒られました……」

「オレがラスト、だと……遊びすぎたか……」

ということであテネがいた部屋にワープして早々、すでに待ちぼうけしていたサアヤとシンデレラが辛辣な言葉で歓迎してくれて、テルヨシよりも少しだけ早かったのだらうイーターですら怒られたなら、20分程度はかけたかなのテルヨシに対して、この2人は10分もかけずに戻ってきたのではなからうか。

まさに電光石火の進撃だが、内容を知ってるからといってそんなに早く進めるものなのかと素直に驚くが、待たせた事実を消せないのとおりあえず謝罪しておき話を進める。

4人が揃ったことでアテネも次の指示をくれて、卵が置いてあった台座に4匹の同じ選択肢で染まった真つ青な雛鳥を置き、何故か後退するサアヤとシンデレラに倣ってテルヨシとイーターも台座から離れる。

すると雛鳥達はその身を寄せ合ってモゴモゴしだして、粘土のようにまとまり1つの塊となると、その形を体積を無視して肥大し1匹の青い鳥の姿になる。

形状はダチョウやエミューといった陸上を疾走する鳥類に非常に似ていて、頭には鶏のようなトサカも存在し、喉辺りからはヒラヒラとした長い装甲が垂れている。

明らかに飛べないタイプの上陸に特化したエネミーへと変貌し、テルヨシ達の視界にも明確な敵として表示が出る。

そこには《Blue Cassowary》^{ブルー・キャッソウリー}といった名前が現れるが、さすがに聞き馴染みが無さすぎるその名前にはテルヨシもサアヤさえも首をかしげる。

「まあ！ まあまあ！ さすがは青の名を冠するエネミーですわ！
ブレイン・バーストはわかってらっしゃいます！」

しかしシンデレラはそのエネミーの名前を見た瞬間に歓喜の声をあげて喜びを表現し、どこに向かってなのかグーサインをするが、なんのこっちゃなテルヨシ達はテンションの上がったシンデレラにその理由を尋ねる。

「皆様！ あのエネミーは『ヒクイドリ』ですわよ！」

「ヒクイドリ？ なーんか聞いたことあるような名前ね」

「オレもどつかで聞いた気が……」

「はあ……何故あなた方はヒクイドリをご存じないのでか……」

テンション上げ上げのままにエネミーについてを語ってくれたシンデレラではあったが、言われてもピンとはこなかったテルヨシ達に露骨にテンションが下がってしまう。

なんか凄く申し訳ない気持ちでいっぱいになりつつも、そのヒクイドリとやらの説明を要求すると、やれやれといった態度を取りながらシンデレラは親切に話してくれる。

「ヒクイドリは未だに世界一危険な鳥としてギネスブックに載っていません陸上最強の鳥類ですわ。その危険とされるのは獰猛な攻撃性と強靱な足と爪から放たれる人さえも殺せてしまうほどの蹴り……」

鳥に関して博識なシンデレラは意外な面ではあったが、現実の鳥の名前を冠しているなら、加速世界でもその特徴が反映されているだろうと説明を聞きながらに思っていたら、シンデレラが言い終えるより前に突如として真横にギャグのように吹き飛んでしまい、テルヨシ達の目の前には豪快な飛び蹴りを放って着地を決めたエネミーが降り立つ。

「世界一危険な……」

「蹴り技を持つ鳥ってことね……」

「僕の体も一撃で砕かれちゃいそう……」

エネミーもシンデレラへの攻撃が挨拶だと言わんばかりに次なる標的としてテルヨシ達を見定めてくる中、近くに来ると体高は2メートルほどもあつてダチヨウの大ききくらはあることがわかる。

現実のヒクイドリもこのくらい大きいのかなと考える暇もなく、その目をギラつかせたエネミーに合わせて3人が別方向へと逃げるように散開してターゲットを明確に見定めにくくと、レベルの関係なのかイーターがターゲットとされて追いかけられたので、テルヨシとサアヤはアイコンタクトで挟撃を仕掛けに行く。

イーターも自分のやるべきことがわかったのか、ギリギリまで逃げてから《ハイ・テンシティー》を使って装甲強度を上げ、あえて蹴り技を受けて隙を作り出しテルヨシ達の攻撃を援護。

エネミーの強烈な蹴りを受けてゴムボールのように吹き飛んだイーターを気遣う暇もなく、攻撃後の隙を狙って横から攻撃を仕掛けたテルヨシとサアヤの挟撃は見事にクリーンヒット。

スピードとパワーはさすが純色の青といったところだが、こつちもこつちで始めから近接タイプのエネミーを想定してクエストを進めていたので、強力とはいえ動揺は少なく、バリバリ近接の4人なら連携すれば倒せそうなことはすぐにわかる。

「カチンとききましたわよ!!」

下手な博打を打たなきゃならない状況もなさそうだなと、油断せずターゲットを散らして攻撃していたテルヨシ達ではあった。

が、最初にエネミーの攻撃を受けて放心していたのか倒れたままだったシンデレラが、突如としてガバリと起き上がって何故かはわからないが視覚化した気がしないでもない怒りのオーラを放出しながらエネミーに向かって叫ぶ。

「わたくし、東武動物公園であなたを見て、恐怖ではなく関心が強くなりましたのよ。本当は臆病だからこそ周囲を威嚇しているものとかかって、その攻撃性も可愛いものだと思っておりました。ですがあなたとは別ですわ!」

「おーい、シンデレラ姫!」

「たうえエネミーと言えど、わたくしの説明を遮ってまで自ら攻撃してくるその攻撃性は、わたくしの知るヒクイドリではありませんわ!

制裁が必要ですよわね!」

「お姫様!、暴走するな!」

テルヨシとサアヤの落ち着かせようとする声すら無視して怒り心頭なシンデレラは、ズビシ! とテルヨシ達を攻撃中のエネミーを腰に手を当てて指差してみせる。

こうなるとチームプレイとか無理な気がしてきたテルヨシとサアヤは、適当にエネミーの攻撃を避けながらシンデレラターゲットがいくように攻撃を控えると、地響きでも鳴りそうな力強い踏み出しでエネミーに近づいたシンデレラは、謎のプレッシャーでエネミーのターゲットをもらって攻撃を誘発。

鋭い蹴りがシンデレラを襲うが、それをさつきまでの力強さとは打って変わってしなやかな動きで躲してカウンターの蹴りを軸足にお見舞いし離脱。

「さあエネミーさん、一緒に踊りましょうか。死のダンスを、ね」

その発言から今の一撃で必殺技ゲージが満タンになったのがわかったテルヨシは、すでに壁に寄りかかって見物に移っていたサアヤとイーターと並んで腰を下ろして、その成り行きを見守ることにするが、自分のためのレギオンクエストなのにこれでいいのかと疑問は残る。

「《マスカレード・ボール》!!」

それでもあのシンデレラを止めるのは気が引けてもいるので深く考えないようにして見ていたら、さっそく溜まった必殺技ゲージを消費してシンデレラ最強の必殺技が発動。

するとシンデレラを中心に周囲に変化が起こり、シュババババツ！とたくさんのシンデレラが出現。

普通に考えればシンデレラの色の特性上あり得るものだが、黄系特有の幻覚系攻撃と侮るなかれ。

出現したシンデレラの分身はなんと、自らが意思を持つかのようにバラバラの動きと声まで出し始めて、すでにどれが本物のシンデレラなのかテルヨシ達にさえわからなくなる。

「酷い絵面ね」

「そう？ オレは好きだけど」

「あれ出されるといつの間にか負けてたりして怖いです」

エネミーもそのAIで判断に迷いが出たのか、その場で動き回るシンデレラ達にキョロキョロするばかりで、攻撃が定まっていない。

そこにシンデレラの1人が後ろから強烈な蹴りをお見舞いしてエネミーに痛烈な一撃を加えると、エネミーも背後に本物がいると思つて振り返ったが、今度は別のシンデレラが背後から足に蹴りをお見舞い。

「さあエネミーさん」

「わたくしのダンスについてこられますか」

「ついてこれなければ」

「何もできずに倒れるしかなくてよっ。」

初見なら絶対に混乱すること間違いなしなこの状況で、言葉を分けて煽るシンデレラ達に、エネミーもさすがに苛立ったかようやく攻撃に乗り出すが、シンデレラー1人1人が元のシンデレラの回避性能を有していて、ヒラリヒラリと舞うようにエネミーの攻撃を華麗に避ける。

それでも数も数なので予期せぬ一撃がシンデレラの1人に命中すると、そのシンデレラは煙のように消えていなくなってしまう。

消えるということはそのシンデレラは本物ではないのだが、依然として全てのシンデレラに攻撃判定があつてエネミーもその踊るように近づいての猛攻に踊らされていき、あれよあれよと表示されているHPゲージが減少していく。

しかしエネミーもこれだけで終わるわけにはいかないとも言うように、その身に宿る必殺技のようなものを発動し、持ち上げた右足を水平に360度回転して振るい、そこから周囲へと衝撃波が放たれ、テルヨシ達の頭上にも壁に当たった衝撃波が余波となって襲ってくる。

それほどの衝撃波だったので、周囲にいたシンデレラもほぼ全てが風ぎ払われてボロボボボンツ！ と消えてしまったが、肝心のシンデレラ本体は衝撃波の放たれた瞬間に分身の1体の力を借りて空中へと投げてもらつて回避し、落下しながらエネミーの頭上を狙う。

「ファイナレですわ!!」

そして繰り出された回転力も加えた強烈な回し蹴りがエネミーの脳天に炸裂し、決めに入っただけあつてそれでエネミーのHPゲージも消失。

力なく倒れてポリゴン片となつて消滅したエネミーのそばに着地したシンデレラは、スカート状の装甲を摘まむような仕草と一緒に綺麗なお辞儀で締めるのだった。

「終わっちゃったよ」

「まあ勝手にやってくれたんだしいんじやない?」

「テイルさんも倒せそうでしたし、誰が倒したかは気にしなくてもいいと思いますよ」

「でもなーんか釈然としないよねえ」

結果としてレギオンクエストはクリアになったのだが、最後が見てるだけだったことが不完全燃焼な感じは否めなく、満足気に近寄ってきたシンデレラからも「勝手にやったことなのでお気になさらずに」と言われる始末。

そこでなんだか微妙な感じのテルヨシの雰囲気を感じたサアヤが、帰る前に適当にエネミー狩りでもして解散しようとして提案してくれて、シンデレラもダイブに使ったポイントくらいは回収したいと賛同してくれて、不完全燃焼はそのエネミー狩りで消化することになった。

そうと決まれば行動も早く、アテネからレギマス証をもらってアイテムストレージに仕舞ってから、雑談しながら池袋地下迷宮を出ていく。

「それにしてもアンタのあの必殺技。黄系にしても異質よね」

「お褒めに預かって光栄ですわ」

その道中で先ほどのシンデレラの必殺技についてを語ったサアヤに便乗するように、テルヨシもシンデレラが使った必殺技。マスカレード・ボールについてを考察。

シンデレラのマスカレード・ボールは、溜まっている必殺技ゲージの量によって効果が変わる特殊なもので、消費されるゲージ10%毎に2体の分身体を出現させる。

1度に出せる分身体は最多で20体に及び、その分身体は驚くべきことに1体1体が独立しシンデレラの基本的な思考とポテンシャルを持って実体化しているのだ。

シンデレラ本人には分身体への絶対命令権があるにはあるが、基本的に行使はせずに好き勝手やらせるせいで動き出すと本当に見分けがつかなくて酷いものとなる。

そんな分身体と合わせて21人のシンデレラが全て襲ってくるとなれば、どんな相手も余裕はあまりなくなり、ほとんどが蹂躪されてしまうのだが、エネミーがしたように攻撃は有効。

分身体の耐久力はダメージ判定がある攻撃を1度でも受けてしまえば消滅するほど低いため、ポテンシャルもシンデレラ同様となればとにかく数を減らす攻撃をするしかない。

だがしかし、シンデレラは回避主体の戦い方で分身体もその行動パターンを基礎にしているため、数を減らすだけでも容易ではなく、本人のみしか使えないながらもアビリティ《インベート》まで使われたらもうどうしようもない。

そうやってシンデレラが分身体とダンスパーティーでもするよう
に華麗に攻撃し鎮圧していく様から、バトロワ祭りでは《シエター・クイーン演劇女王》
と呼ばれ、必殺技であるマスカレード・ボールを日本語に訳せば『仮
面舞踏会』なのだ。

「でもまあ、テイルの必殺技とやり合ったら勝ち目ないんじゃない?」
「そ、そんなことはなくてよ?」

「そうかしら? テイルの《インビジブル・ステップ》なら、アンタの
分身に移動して触れるだけで倒せるし、相性は悪いわよね?」

「やめなよガツちゃん。どっちもゲージ全消費だから優劣も付けづら
いし」

「そうですねよ。5秒しかないのですしたら、わたくしもどうかして
しのげますもの。テイルはわかってらっしゃって嬉しいですよ」

「女性の心は常に把握してるのさ」
「うっぎ」

シンデレラの必殺技にはかつてテルヨシもサアヤも手痛い思いを
したおかげでその威力に関しては認めざるを得ないが、鼻が高くなっ
たシンデレラが気に障ったのか、すぐに弱点を突くような発言でぐぬ
ぬとさせる。

確かに言うようにテルヨシの必殺技であるインビジブル・ステップ
なら、シンデレラの分身体を移動しながら処理できるが、全滅させて
本体まで攻撃に及ぶとなれば時間的な猶予はあまりない。

それでは互いに必殺技ゲージが空になっての振り出しに戻るだけ
である種のリセットになってしまうから、根本的な攻略にはなってい
ないので、そこだけは指摘しつつ余計なことと言って割り込めば、彼

氏が目の前で他の女を持ち上げたのが気に食わないのか明らかにイラツとした雰囲気になる。

そんなところも素直で可愛いものなので、冗談であることを補足してご機嫌を取りつつ、思い出したように出入り口の直前でイーターの《フリーザー・アイス》を使って必殺技ゲージを満タンにして外へと出れば、このわずかな時間で《変遷》があったのか、イーターにとって好都合の《氷雪》ステージになっていて、エネミー狩りをする都合で余計な手間が省けたと歓喜。

「そういえば知っていました？ この氷雪ステージにしか出現しないエネミーがいるというお話」

「オレはエネミー狩りにはほぼ無関心だったから知らなーい」

「僕もよくは知らないです」

「私は実際に倒したことがあるけど」

「……………あなたは本当に面白がりませんのね…………」

「褒めないですよ」

「褒めてませんわよ」

歓喜ついでにこれからするエネミー狩りに関してシンデレラの方から情報提供があったので、ポイント的に美味しいのかもしれないそのエネミーを探す流れかなと思っていたら、さすが古参のサアヤはすでに討伐済みで話が終了してしまった。

ここは知らない流れでシンデレラに詳細説明をしてもらおうところだったのでは？

といった空気はわかっていたのだろうが、サアヤはそのエネミーを探す手間を知っているからか、その流れを拒否するようにブツタ切るから、シンデレラも気持ちが悪えてしまったのだった。

一応の話では氷雪ステージらしく雪男のような巨獣級の巨人エネミーがいるみたいで、遭遇率に関しては徘徊しているから運が絡むとのこと。

しかしサアヤはまた空気を読まずにさらなる情報として神獣級エネミーに雪女がいるとか言うもんだから、もうシンデレラのいじけ方が半端なく可哀想になる。

「ちなみにその雪女って倒したことあるの？」

「倒した報告は聞いたことないわね。面倒臭いことにそのエネミーって標高2000m以上の山にしか出現しないっぽくて、東京近辺にないから遠征してまで倒そうってパーティーがいないのよ」

「じゃあ誰が遭遇したんだそれ……」

「たまにいるのよ。辺境調査が趣味の危険を承知で探検するバーストリンカーがね」

まあそれらの討伐は今回は見送るにしても、情報くらいは仕入れておこうと話を広げてみると、加速世界で8000年の時の流れがあつてまだ討伐されたことがないエネミーというのには少しばかり興味が湧く。

が、それを見越したサアヤが釘を刺すように「手伝わないからね」と言ってしまうと、ソロ討伐など考えられないテルヨシは保留にするしかなかったのだった。

6月27日。木曜日。

体感でも長く感じた昨日のあれこれもだいぶスッキリと解決したのだけは良かったと思いながら登校したテルヨシは、学校に着いて早々に持ってきたショートケーキを恵へと献上し、余らせていた文化祭の招待券を物々交換で獲得。

昨日に交渉をしてパドの分の招待券を手に入れようとしたテルヨシに恵は店のケーキを所望されたため、要望通りのケーキに満足なような恵は喜んで招待券を譲渡してくれて、これである当日に何か奢るくらいのことをしてあげれば大丈夫だろうとひと安心。

そうやって現実世界での問題も1つずつ解決していつていた昼休み。

文化祭の催しについて詰め作業をしながら黒雪姫と他愛ない会話をしていたら、この黒雪姫の元にメールが届いたようだが、そんなことは日常茶飯事なこともあつて気にしないでしたら、メールを読んで急に深刻そうな表情を浮かべた黒雪姫は、タタタンツ、とホロキープードを叩いてメールを作成するとすぐに送信。

「すまないがテル。お前も5分後に観戦者として対戦に入ってくれ。文化祭にも関わる問題だ」

「緊急っぽいけど、どこからのメール?」

「フーコからだ。少しセキュリティをいじつて、フーコとういうい、マリアとはこのローカルネットでも外部から干渉できるようにしておいたのだが、さっそく役に立ったな」

「まーた裏道みたいなことして。オレらが卒業してからそのシステムどうするのさ。タクム君に託すの?」

「強要はしないさ。ハルユキ君達が自発的に生徒会役員選に出てくれるならそれに越したことはないし、そうでなくても少しばかりガードが甘くなる程度のこと。私達が1年だった頃とそう変わらんよ」

まさかのメールの差出人がこの学校にいないフーコなことにはビックリだが、またセキュリティを勝手にいじっていた黒雪姫の悪

さについては今さらなので言及はやめておき、そんな少しばかり先のこともなんとなく話してから5分後に加速。

黒雪姫がフーコに対戦を挑んで開かれた対戦フィールドにテルヨシもすぐに観戦者として誘われていった。

「うっわ、面倒なところに入っちゃってるなあ」

構築されたのは岩山に生じた割れ目がちよつとした迷路になっている《荒野》ステージで、残念なことに降り立った場所がその割れ目の迷宮部分なのがすぐにわかったテルヨシは、ちよつと暗いのもあるし外には出たいよねと、近くに出現していた黒雪姫に目で訴える。

すると黒雪姫も日の光が上から差し込むのを見ながら「切り崩していくか」と物騒な発言が飛び出す。

「砂埃が酷いでしょうから、ここはわたしの《ゲイルスラスタ》で飛んでいっちゃうのもいいかもしれませんね」

黒雪姫らしい行動ではあるが、盛大に巻き上げられる砂埃が嫌だなあと思つたら、同じことを思つたフーコが近くに現れて平和的な解決策を提案してくれる。

どのみちギャラリーであるテルヨシは自動追従機能でテレポートできるのでどっちでもいいといえればいいのだが、ちよつとだけ移動して出口がないかとウロついてから戻ってきた黒雪姫は、行き止まりしかなかったからかその苛立ちを現すようにその両手を持ち上げてスパパパーン！

何度かの切り裂きで岩山を切り崩して外へと出ていき、フーコもやれやれといった感じでそのあとに続いていく。

レギマスとしてこの短気具合はどうなんだろうなあと思いつつも口には出さずにそのあとに続いて外へと出ると、すぐ近くにギャラリーとして入っていたハルユキ達が集合していたので、そこに3人で近寄つてようやく合流。

「みんな、待たせて済まない。山から外に出ようにも、通路が行き止まりばかりだな」

「だからって壁を切り倒すのは、巨大迷路の攻略法としては邪道もいいところですけどね」

「フーコさんも邪道の上から飛んでいこうとか言ってた気が……」

「あら、天井のない迷路は俯瞰で見ているいいルールがあるんですよ？」

「それはどうなんだ……」

合流に手間取ったことをまずは謝罪した黒雪姫ではあったが、茶化すようにフーコが割り込んでテルヨシも便乗すると、なんだかコントのようなやり取りになってしまう。

年長組が揃ってコントをやるもんだから、ハルユキ達が微妙に話を本筋に戻しにくそうにしていたので、自分から話を戻そうとしたら勇敢なマリアが「お話があるんですよね？」と発言し、まさかの最年少の1人に言われてしまえば、自分達もすっかりしなきやという意識が働いてふざけた雰囲気も吹き飛ぶ。

それでまずは昼休みの最中に急な召集をかけてしまったことを謝罪してから、時間も限られているのですぐに本題へと入る。

「諸君の中で、下北沢にある《明北学院》という中高一貫の男子校を知っている者はいるか？」

「はい、マスター。都内ではかなり上位の進学校です」

「うむ。中等部の全国統一テストの平均点は、全学年とも我々が梅郷中より10ポイントほど上だ。ここに下げてる原因もいるが」

「褒めんなよ」

「その図太さだけは尊敬に値するがな」

話の切り出し方がちよつと遠回りな気がしたもの、他校の話から自分達にも関係があつて文化祭とも関連があると事前に言われていただけに、テルヨシはすぐに何の話かは予測がついたのでボケも挟んで重苦しさを緩和。

話の腰を折られて頭を叩きたい衝動もあつたのだろうが、生憎とギャラリーには干渉できないので半ばスルーする形で流して続け、その学校が今日の午前中にだけ簡略化した文化祭をやっていた旨を話す。

そうすれば勘の良いタクムが一般公開をしていたその学校にバーストリンカーの襲撃。それもISSキットの装着者が来たのではと勘繰り、それに黒雪姫もフーコも首を縦に振る。

「……明北には、緑のレギオン所属のバーストリンカー3名と他レギオンのもう1名が在籍していたようだ。その1名は欠席していたので難を逃れたようだが、彼らは文化祭で招待客に開放されたローカルネット経由で1人のバーストリンカーに次々と対戦を挑まれ……全敗したらしい」

「襲撃は驚くところだけどき、襲撃者もそれだけが目的じゃないよね。リアル割れのリスクを負ってまで仕掛けたなら、それに見合うだけの成果も得ようとしてたはず」

フーコが登校中にどうやってその情報を掴んだかは気にしないでいい、襲撃者の大胆な行動にはポイント欲しさだけで実行したわけではない感じがヒシヒシとするのでその辺を勘繰ると、こういう時にだけ頭の回転が早いテルヨシに調子が狂うのか「急に真面目になるな」と注意を受ける。まことに遺憾である。

「……テルの言う通り、襲撃者は最後の1人を容易く蹴散らした後にこう言い残したらしい。『この力が欲しければ、世田谷第5戦域に来い』とな」

「自分達のホームでの完敗からのISSキットの流布か。精神的な隙を突く良い手だな」

「敵を褒めるのはどうかと思いますけど、いよいよ6大レギオンにも宣戦布告をしてきたと見てよさそうよ」

的を射たテルヨシの問いかけに対して答えを持ち合わせていた黒雪姫の説明で、実際に春先に能美によって似たような経験をしたハルユキ達も緊張した空気を伝えてきて、攻め込んだ場所が場所だけにフーコも補足するようにその行動の意味を汲み取る。

そして代表するようにタクムがその襲撃者についてを問いかけて、黒雪姫も聞いていた襲撃者の名前をまだ言っていなかったことを思い返して《マゼンタ・シザー》の名前を出す。

そのバーストリンカーはタクムにISSキットを渡したことでテルヨシ達も知るところだが、そこにだけ驚いたような声を出さずにビックリした叫びをあげたハルユキもチュリに全員の視線が集まる。

「ええと……報告が遅れましたが、僕とチュは昨日の夜、世田谷戦域で

マゼンタ・シザーと一戦交えたんです……」

その驚きの声の理由をハルユキが述べると、ISSキット装着者との対戦とあって黒雪姫が心配して色々矢継ぎ早に問いかけるが、そんな黒雪姫をフーコが落ち着かせて、それを確認してからハルユキが詳しく説明をしてくれる。

それによると昨日。中2戦域で《ウルフラム・サーベラス》との対戦後に帰宅して、チユリが《無制限中立フィールド》の世田谷戦域でレーザー攻撃をする小型のエネミーを発見していたことから、促されるままに《理論鏡面》アビリティ習得の練習台にしようとダイブ。

しかしそのエネミーはレギオン《プチ・パケ》によって飼い慣らされたエネミーだったらしく、その時間にダイブしていたレギオンメンバー《シヨコラ・パペッター》と遭遇。

何やら事情があつた彼女から話を聞けば、残りのレギオンメンバーである《プラム・フリッパ》と《ミント・ミトン》がマゼンタ・シザーによってISSキットを無理矢理装着させられ、近隣のバーストリンカーはほぼ感染させてしまつてエネミー狩りに移つていたマゼンタ・シザー達は、残つた彼女を仲間にするべく、飼い慣らしたエネミーを倒そうと襲撃してきたらしい。

そのタイミングに居合わせたハルユキ達はほとんど成り行きではあつたが彼女と協力してマゼンタ・シザー率いる集団と交戦。

そこでチユリの《シトロン・コール》もあつてプチ・パケのメンバーからISSキットを取り除くことに成功し、マゼンタ・シザーも撃退することができたとか。

そこまでの話を聞いてサーベラス戦からよくやるといつた感想を抱く黒雪姫達のあとに、そうしたことがあつた中でマゼンタ・シザーがISSキットの拡散に意欲的なことを知りながら『拡散が先かISSキット本体の破壊が先か勝負だ』と余計なことを言つたらしく、それがマゼンタ・シザーを焚き付けて今回の襲撃が起きたかもしれないと話す。

「ネガティブねえ、ハルユキ君や。マゼンタ・シザーはどうせ拡散を止めないんだから、こういうことが起こるのはハルユキ君のことがあつ

ても早いかどうかの違いでしかないんじゃない？」

「そうだとハルユキ君。それに君とチユリ君がしたことは、昨夜消滅してしまうかもしれない1つのレギオンを守り、2人のバーストリンカーをISSキットの支配から解放した。それだけだよ」

100%そうではないと言える話でもないから全否定はできなかったが、物事をポジティブに考えればハルユキとチユリのしたことはむしろ褒めるべきことの方が比率として大きいのは誰の目に見ても明らか。

そこだけはハッキリさせようとテルヨシと黒雪姫が訂正してあげれば、ハルユキもチユリも今回のことを深く結びつけることよりも、プチ・パケを救えたことの方が大きかったと実感してくれる。

さらに謡からは「勝負を持ちかけたなら勝ってしまったえばいいのです」とも言われて、その意味するところであるISSキットの本体の破壊により一層の気合いが皆に入った。

が、ここでまたもハルユキとチユリからほぼ同時に思い出したような「あつ！」が飛び出して、まだあるのかとちよつと呆れ気味なテルヨシ達とは裏腹に、今度は明るめの雰囲気ではハルユキが確認を取ってくる。

その確認とは習得する理論鏡面アビリティが実際どのような効果を持つて発揮されるかといった内容だったが、これについて具体的に説明できるのが謡だけで、それによる説明を聞いてからハルユキとチユリは何やら落胆というかやっぱりといった雰囲気になって「名前が違ったもんね」とか意味深なことをチユリが言い、ハルユキに至っては深々と頭を下げる始末。

「す……すみません！ 僕……違うアビリティ身につけちゃいました！」

そこから約3分を要して説明されたハルユキの新アビリティオプティカル・コンダクション《光学誘導》について皆が皆、どう反応したらいいかといった感じで唖ってしまい、ハルユキも予想外の結果にしゅんとなってしまう。

しかし本来なら、レベルアップボーナス以外でのアビリティ習得は

相当な難易度を誇ることであり、その辺について謡が言及し励ますと、黒雪姫とフーコもそれに便乗して励みます。

「謡の言う通りだ、ハルユキ君。私の知る限り《ポテンシャル覚醒》に2度も成功したのは君だけ……ではなかった……励ます話に割り込むなバカテルが」

「存在するだけで貶されるとか酷すぎる……」

「それに、たとえアビリティの名前が違ってても、要はメタトロンのレーザーを防げればいいんですから、現象を聞く限り、可能性はあるとわたしは思います」

「流された……」

そんな2人の励ましならハルユキにとって大幅なプラスになるだろうと黙っていたのに、自分からしたポテンシャル覚醒の話で実際すでにそれに成功しているテルヨシが視界に入っただけで罵倒してきた黒雪姫の理不尽さはふざけるのだが、それをなかったことにして話を再開するフーコもフーコで酷かった。

そんな扱いには慣れたようで慣れてないので内心で泣きつつも、とにかく文化祭では細心の注意を払って臨もうという全体での共通意識を強めて解散の流れかと思われた。

だがもう何度目かのハルユキの申し訳なさそうな割り込みがあつて、まだ何かあるのと満腹気味の一回を他所にアイテムストレージから2枚の黒いカードを取り出して皆に見せる。

「ン……なんだ、それは？」

「あの、ISSキットです」

——ささささささあ。

取り出されたカードの正体を問われたままに答えて、その名前を聞いた瞬間にチュリ以外のメンバーが恐ろしく不気味なスライド移動で後退。

タクムに至ってはかつて痛い目を見た経験からその後退はより大きい。

「どんな経緯での入手か問おうではないか、ハルユキ君」

「あ、はい。これはプチ・パケの2人からチュがシトロン・コールで取

り除いてアイテムカード状態にまで戻したもので、戦いの後にマゼンタ・シザーがくれたんです」

ハルユキが普通に持つていることから、この状態なら危険はないのはわかるのだが、やはり本能的に拒絶してしまうものは近くに置いておきたくない心理から距離を取った事情聴取に乗り出す黒雪姫。

マゼンタ・シザーがわざわざプレゼントしたというのも不可解だが、真心や優しさに汚染されたから使いたくないとかなんとか言っただけならいいことを続けたハルユキに、勝手ながらチユリも自分なりの解釈を述べる。

チユリのシトロン・コールが巻き戻しの力であることはマゼンタ・シザーも知っていたのに、そのシトロン・コールを受けて手元に戻ってきたISSキットがそんな曖昧なもので汚染されているわけがない。

それがわかってないわけもないのにそんなことを言っただけで譲ったのは、その真意を隠しているのだろうか。

「なるほどな……。そのまま他のバーストリンカーに寄生させることもできたのに、敢えてハルユキ君に渡した、か。——よかろう、それは私とフーコで預かろう」

マゼンタ・シザーの真意はわからないが、こちらとしては貴重な情報になり得るものを入れたことになるので、黒雪姫も責任を持ってハルユキから預かり、フーコも恐る恐るな雰囲気でカードを持ち、上に掲げて観察する。

こんなアイテム一つで心意技が使えるようになる不思議は全くわからないが、そうやって観察していたら雲間から差し込んだ日の光に照らされたカードの裏面に、うっすらと紋章が見えた。

それが見えた瞬間。黒雪姫とフーコは揃って驚き、黒雪姫はあまりの衝撃でカードを落としてしまい、それをテルヨシがキャッチし、微妙に見えなかったそれを確認。

カードには深紅のアルファベットで《インカーネイト・システム・スタデイ・キット》と記してあり、その奥にクロスするリボルバー式拳銃の紋章が刻まれている。

「クロストガンズ交差する拳銃……どっかで誰かに聞いたことが……」

その紋章を見るのは初めてのテルヨシだったが、交差する拳銃についてずいぶん前に誰かからチラツと聞いたことがあつた気がして記憶を遡る。

そんなテルヨシの記憶が呼び起こされるのを悠長に待つてる時間が惜しいので、衝撃で沈黙した黒雪姫に代わってフーコが教えてくれる。

「……この紋章は………先代の赤の王《レッド・ライダー》のものです」

それを聞けばテルヨシの記憶の扉も簡単に開いてくれて、プロミの《カーマイン・カノン》が同じ紋章を刻んだ銃型の強化外装をかつてチラ見せして、ライダーに譲ってもらつたものだどボソツと呟いていたのだ。

当時は太っ腹なレギマスだなくらいにしか思わなかったが、こうしてライダー亡き今になって予想外のところから出てきたこれには、実物を知らないテルヨシでもちよつと驚き。

「……テル君。その一つはテル君が保管してください」

「えっ？… どうしてオレ？」

「テル君はプロミとの交友がありますから《三重土》やバーちゃん辺りに渡せば何か掴めるかもしれません。それにプロミ創設メンバーのガツちゃんなら或いは……」

皆がどう反応すべきなのか困ってしまった中で、話をまとめなければならぬ立場のフーコがテルヨシの持っているISSキットをそのまま懐に仕舞うように言つて、新旧所属のプロミメンバー辺りに見せてほしいと付け加えた。

その判断はおそらく正しいので、テルヨシもバイトの時にでもパドに渡そうと考えながらアイテムストレージに仕舞い、黒雪姫が精神的に不安定になってしまったので話も半ば強制的に終了してしまつた。

そのあと現実世界に戻っても黒雪姫は気持ちの整理ができていなくて話はできなかつたが、放課後にはハルユキと話をしてから区切りはつけるとだけ言つて恵と一緒に生徒会室のへと移動していき、テル

ヨシも明日までは待ってやるかと、そのままバイトへと向かっていった。

が、いつもの練馬行きのバスに乗り込んだ時に思わぬ遭遇を果たしてビックリ。

なんとどこから乗ってきたのか不明ながら、制服姿のサアヤが最後列の席に座っていたので、同じバスに乗り合わせたのは偶然だろうが隣に座って事情を聞く。

「待ち合わせよ。指定されたのが杉並で、アンタのところに行くついでに済ませられたら一石二鳥だから、乗るバスを変えてきたんだけど、乗り合わせたなら付き合いなさい。あと2分13秒だから」

「待ち合わせって《最終兵器》とだよ。活動戦域は渋谷戦域が中心だったと思うけど、何で杉並？」

「ギャラリーの数が多くなりがちだからでしょ。渋谷戦域は放課後は活発だからね」

さすがに手回しが早いサアヤは、もう次の《五芒星》との対話をこぎつけて、これからそれが行われると聞けば参加は当然の流れ。

それに先のISSキットの件もフコからサアヤにも聞けば何か掴めるかもと言っていたので、バイトの前にサアヤに渡してしまおうと決めてすぐに行われたサアヤの対戦にギャラリーとして入る。

例のごとく対戦目的ではないので、わずかにいたギャラリーには早々に退場してもらって、ガイドカーソルに導かれて対戦相手と合流。

その相手の名前は《Chive Release》。レベル6の緑系M型デュエルアバターで、他のバーストリンカーからは最終兵器と呼ばれる、たぶん危険で面倒な相手だ。

ギラギラの太陽の光が容赦なく降り注ぎ、辺り一面、見渡す限りに広がる砂、砂、砂。

《砂漠》ステージに放り出されたテルヨシとサアヤは、まずはギヤラリーに入ってしまったバーストリンカー達に対戦をするわけではない旨を伝えて退場してもらい、微動だにしないガイドカーソルを辿って砂漠の上を移動。

視界上に表示されているサアヤの名前とその相手《チャイブ・リリース》の名前を見ながらに、今回の交渉相手もまた話が通じそうに通じないだろうなど、すでにちよつと意気消沈気味だ。

「話はサアヤがする？ それともオレがする？」

「古参の私からの方がちよつとだけ説得力はあるだろうし、とりあえず任せて」

性格的にはおそらく一番の良識人であるのは間違いないのだが、それ故に合理的なところもあるリリースはだからこそその難敵。

その辺で言葉巧みに勧誘できなければ交渉の余地どころか2度と対話も叶わない可能性が出てくる。

それがわかってるからかサアヤも歩きながら腕を組んでどう話そうかと悩み中のようで、このままだと考えがまとまる前に対面しちやいそう。

そう思っていたら視界が良好すぎてガイドカーソルが消えるよりも早くリリースの姿が発見できてしまい、ほとんど埋まった2mとない高さの岩山の天辺にあぐらをかいて座るリリースは、テルヨシ達の姿が見えても微動だにせずに近寄ってくるのを待つ。

座っているからわかりにくいだが、リリースは180cmにも及ぶゴツめの体躯のM型デュエルバターで、ひと目見て注目するのは、アバター素体にガッチガチのパワードスーツを着せたかのような装着感が溢れまくりの超防御型の装甲。

見るからに動きが鈍そうで、かの《グリーン・グランデ》も小柄に見えるほどの重装甲のリリースは、かなり薄い緑色を基調としてい

る。

正統派の騎士型アバターとも違ったその出立ちには初見でずいぶんリアクションしたものだ、全身を覆う装甲はユニコの《インビンシブル》とほぼ同類の強化外装で、総称では《アーマー・シエル》と呼ばれている。

「テイルも来るとは意外だったな」

「偶然なんだけどねえ」

「当人が来たんだし補足はできるでしょ」

良識人であるリリースは、やはりその性格に合わせたような落ち着いていながら声変わりを完全に終わらせた、低く重厚な男らしい声でテルヨシ達を迎える。

どこか年上な感じが当初からしているので、テルヨシも無意識で言葉遣いに注意を払っているレアな相手だが、飄々としたテルヨシの性格を知っているリリース本人から言葉遣いで何か言われたとかはない。要は勝手にやってるだけだ。

「イーターから少しだけ話は聞いたが、具体的なことは聞いていない。席も設けたのだからその辺のことを頼む、ガスト」

「先に言っておくけど、強制とかは全くない話だから、変に身構えたりしなくていいわよ」

そんなリリースだから話も脱線などしようはずもなく、リリースからさっそく本題に入るように言われたサアヤは、前置きとしてそうしたことを言ってから、自分達がやろうとしている《帝城》攻略計画についてを順を追って話し始めた。

よく整理された要領を得た説明に最後まで聞きに徹していたテルヨシも落ち度はないかなといった感想を抱く。

しかしこちらにも終始で黙って耳を傾けていたりリリースは、説明不足はなかったはずのその話に少しだけ思考してから、あり得ないほど厳しいことを言ってくる。

「……………論外だな。お前達は根本的なところからやるべきことを間違っている」

「……………間違っている?」

「聞き捨てならないわね。どういふことよ」

「どうもこうもない。俺にこんな話をする以前の問題だと言っている。それがわからないようなら、そもそもとしてこの計画は破綻している」

開口一番で真つ向からの否定をしてきたリリースに、サアヤはともかくとして寛容な方のテルヨシもさすがに文句の1つも出かける。

しかし畳み掛けるように計画に欠陥があると言われてしまうと、実際のところでそうでしかない部分があるのは否めなく、リリースが言わんとしているところはいくつか心当たりがあった。

「まずは何を最優先にして動くべきかを考えろ。ボンバーの勧誘などに拘るからおかしくなる。ガスト、引き分け申請だ。今の段階でこれ以上話すこともない」

完全に交渉決裂。いや、交渉すらさせてもらえなかった具合で話が終わってしまったため、まだ何か言おうとしてやめたサアヤは、引き分け申請にサインして対戦を終わらせ、リリースは去り際に「だが試みだけは評価している」とだけ言ってバースト・アウトしていった。

「……………うがあああああ!! あの澄まし野郎がああああ!!」
「荒ぶらない荒ぶらない。難しい相手なのはわかってたでしょ」

リリースがいなくなつて速攻で苛立ちをぶちまけるサアヤの荒ぶりは酷いものだったが、リザルト後なのでサアヤにもフィールドへの干渉力はなくなつていて、振り回される《ブレード・ファン》は岩山に叩きつけられてもびくともしない。

苛立つ気持ちはわかるテルヨシでもさすがに荒ぶりすぎと思いながら、色々と吐き出すのを待つて落ち着かせてから、リリースが言っていた優先順位というものについて考えたことをサアヤに話す。

「オレ達はまずレギオンの強化つてところを優先してユリさんを引き入れるために五芒星を揃えようとしてた。けどそこから順序を間違っていたのかもね」

「……………間違つてはいないわよ。ただ同時進行でやらなきゃいけないことを進めてなかっただけ。具体的に言えば……………」

荒ぶりながらも頭では色々考えていたサアヤは、どういふ頭の構造

をしているのか知りたいところだが、話が進まないで置いておいて何を言わんとしてるのかなんとなくわかるので口を揃えてみる。

「四神の攻略」

リリースも未知数の部分をどうこうしろといったことは言わないはずなので、目に見えている問題として四方門を守護する四神の撃破は勝算がある上で動くべきだと言っていたと思われる。

テルヨシとサアヤもシンデレラに指摘されたこともあって、そこはどうにかしなきゃと思っただけながらメンバー集めを優先していた。

メンバーは必要だ。だがそれと同じくらい勝算も必要になるのは当たり前の話で、サアヤの言うように同時進行でやらなければならぬ問題だったのだ。

リリースは良識人であり現実をちゃんと見られる達観した視野を持つゆえ、今の段階で無謀でしかない話に価値はないと厳しい言葉をぶつけてきたが、勝てない勝負をしない堅実な男でもないのだから『勝てる可能性』さえ示せば交渉の余地も出てくるだろう。

「どうしよつか。昨日も同じようなこと思っただけ、今日明日で勝算を見出だすなんて無理難題だし、スピンともう1人は保留にしておく？」

「あー……ごめん。今日はイーターに残りの1人にアタックしてもらってる……たぶん玉砕されてるだろうけど、話くらいはすることになると思う……」

「可能性の話をするなら『ルール』の力は必要になると思うし、当たって砕けますか」

「話し合いの前に問答無用で飛びかかってくる様が容易に浮かぶけどね」

シンデレラとリリースから同じようなことを指摘されてしまったので、やはり交渉は後回しにした方がいいかと考えたが、すでにイーターが動いてくれてしまっていると報告するサアヤを責めるわけにもいかない。

それでも五芒星の最後の1人は無所属で、その能力からも四神攻略には一番可能性のある戦力。

なのだが、性格に非常に難があるサアヤ以上の超好戦的な子なので、まず対話が成り立つかどうかを心配して互いに笑ってしまった。まあ暗いよりは良い雰囲気の話を終えられたかなと加速を解こうという流れになった時。

対戦の前に渡そうとしていたISSキットのことを思い出し、行動が早いサアヤをギリギリで引き留めて話を切り出す。

「実は今日、ネガビュからプロミに経由してほしいって言われたものがあった、サアヤにも見せた方がいいってレイカーが」

「私に？ プロミとってことは旧の方が関係ありそうね」「さすが」

いきなり出すと驚かせるだろうから、そんな前置きをしてある程度の予測をさせてみると、さすがのサアヤは旧プロミと関係があるものだとして理解してくれる。

心の準備はまあできただろうとアイテムストレージからISSキットを取り出して、何これみたいな雰囲気サアヤに手渡してあげ、カードに書かれたISSキットの文字にまさかの2度見して投げ返されてしまった。

「な、なんなのよ!? どうしてそんなもん持ってくるの!?」「だからプロミに関係あるもんなんだってば。よく見て」

さすがに予想外すぎてサアヤも取り乱してしまったが、取扱注意事項のとわかった上で心を落ち着けてもう1度手に取りまじまじと観察。

そうすれば文字の背景に交差する拳銃の紋章があることに気づき、今度は別の意味の「はあっ!?」といった声があがる。

「何でライダーの紋章がこれに……」

「それがどういふことなのかわかればって感じなんだけど、どう?」

「どうって言われても……生前……って言い方はあれだけど、まだライダーがいた頃でもこんな創ってた覚えはないわよ」

「……創ってた?」

「ああそっか、そこからか。改めてアンタがライダー亡き後の世界のバーストリンカーだってことを確認できたわ……」

動揺を隠せないながらも、目の前の現実とすぐに向き合って情報の整理に入ったサアヤは黒雪姫よりもずっと有能だが、サアヤの言う『創ってた』という言葉に疑問が湧き、そこは共通認識だと思い込んでいたサアヤの面倒臭いといった雰囲気はひしひしと伝わって申し訳なく思う。

「ライダーには《銃器創造》^{アームズ・クリエイション}っていう、自らで強化外装を創造するアビリティがあったのよ」

「……何その反則気味のアビリティ。ズルい」

「アンタも知ってるでしょ。強力な力にはそれ相応の代償もあるって。ライダーだってそんなホイホイ創れたりはしなかったわよ。ライダーの《銃匠》^{マスター・ガンズミス}の異名はそこから来てるわけだけど、当時のプロミのメンバーは精度も良いライダー作の銃を譲渡してもらったりで、強大な戦力アップに貢献してたのは間違いないわね」

「気前の良いレギマスなこと。でもそれならカノンが言ってたこともいくらか納得がいく話になるな」

故人——アンインストールしたただけだが——に対しての興味は割と薄いテルヨシは、存在は知っていても中身までは知らないといったバーストリンカーがほとんどで、サアヤから改めて話されるライダーという人物像は随分なお人好しなのは明らかだ。

代償を払ってまで創った強化外装をレギオンメンバーとはいえ譲渡してしまえる懐の広さはあっぱれだが『他人に戦力を分け与える』ということの危険性ももちろん孕んでいる。

「そのアビリティって際限が理論上でないなら、譲渡とかしちゃうライダー自身にもコントロールできないところまでいく可能性もあったよね」

「まあね。実際、当時のプロミのメンバーでライダー作の銃を持っていない人の方が少ないくらいには普及してたし、それだけの数の銃をライダーの目の届かないところ。要は移籍とかして持っていかれたら大変なもの。でもそうならなかったための措置が創る段階でされてるのよ。ライダーの任意でオンオフができる《遠隔セーフティー》っていう制御装置がね」

「なるほどねえ。創ったら創りっぱなしじゃなくて、ちゃんと保険もあるわけか」

「この交差する拳銃の紋章はライダー作の強化外装である証明と、遠隔セーフティーがついている証拠でもあるってわけ」

性能はどうであれ、無限に創り出せる強化外装が自分の手を離れて使われることの危険性は敵になった場合にわかることだが、そんなことはアビリティを使っていたライダーは百も承知。

ちゃんと悪用などを防ぐための措置はあったみたいで、交差する拳銃の意味についてようやく説明できたサアヤは、やつと本題に入れるかと言葉を切って小休憩。

「でもだからこそこれは納得がいかないわ。だって交差する拳銃があるってことは、これはライダーが創ったってことになるんだから」

「実はライダーはまだ生きている説？」

「あり得ないわよ。だったらソーンのあの恨みはあそこまでロータスに執着しないもの。可能性があるとすれば、ライダーが生前にすでにこれを完成させて誰かに譲渡していたか……ライダーに次ぐアームズ・クリエーションの発現者が現れたか」

本題に入るまでも可能性を考えていたサアヤが意見は言ってみたものの、本人が納得していない感じはびしびし伝わってきて、テルヨシもどつちの可能性も限りなく低いと思いつつ自分の可能性も模索。

アンインストールする前に創って譲渡していたというのは、聞き及んでいる限りのライダーの性格からは考えられない行動で、新たにアビリティ発現者が出てきたにしても、交差する拳銃の紋章を刻む意味がない。

ミスリード狙いにしても相手側の目的がハッキリしないし、ライダーが生存している可能性を匂わせることに何の意味があるのかわからない。

「……ライダーが生存している可能性を知って動くやつらってどんなもん？」

「何よいきなり。そうね……旧プロミ所属のやつらはライダー信者み

たいなところがあつたし、知れば動くやつが1人2人いてもつて思うけど、だから何？　つて感じよ。王クラスが動くのとは比べるまでもないわ。ソーンだつてライダーが全損してるのは現実世界でも確認してることなのは間違いないし、これだけじゃ揺らがないわよ」

「そつか……ISSキットを流布したやつらがそうしてまで手に入れたい癖があるか、キーパーツ的な戦力つて線を疑ったけど、具体的に動かれて困るようなやつがないならミスリード狙いではないか」

「……………とりあえずこれは私がユリとかに見せて知らせておくわ。私が知らないライダーの情報を持つてるやつもいるだろうし、何かわかつたらネガビュにも教えてあげて」

「……………了解。オレには可能性の話しか出来ないから頼りになるよ」

そこでミスリードに引つ掛かる可能性のある人物に何かあるかと疑つてみるも、パツと思いつく限りではイーターみたいな癖のあるバーストリンカーはいないっぽく、加速研究会がその能力欲しさでミスリード狙いをしている可能性も低くなる。

だがテルヨシの可能性は今のところで思いつく範囲であり、よく考えれば誰かいそうと思つたのかサアヤも少し思考したが、それは頭数を揃えて意見し合った方が良くと判断してこの話を切り上げ、ISSキットも自分のアイテムストレージに入れて加速を解いていった。

現実世界に戻つてもまだ思考が途切れないのか、グローバル接続だけはちゃんと切つて黙り込んだサアヤに何を言えるわけもなく微妙な空気の中で杉並を出てすぐに練馬区に突入。

バイト先の洋菓子店までも沈黙していたサアヤは、テルヨシが声をかけなきゃそのままバスに乗り続けてたくらいの深い思考に入つていたようで、降りるとなつた時にようやく2人きりのチャンスを棒に振つたことを自覚してしよんぼり。

そういうところがたまらなく可愛いのだが、テルヨシも手ぐらゐ握つてあげれば気づいたのにとちよつと後悔しつつ正面入り口と裏口とで一旦分かれてバイトに突入。

「こちらがミヤア様の分の招待券になります」

の前に同じくらいにバイト入りしていたパドと鉢合わせたので、仕事の前に今日手に入れてきたばかりの文化祭の招待券をアドホック接続でパドへと献上。

それを無言で受け取ったパドは、深々と頭を下げながらのテルヨシに頭を上げるように言ってから、更なる追撃をしてくる。

「ニコの分は？」

「……マジリアリー？」

「嘘」

「やめてくれよホントもう……」

この対応ですでにテルヨシの手元に招待券がないのがわかりきっているのに、そこからさらに搾り取ろうとするパドの残酷さには血の気すら引いて青ざめたが、そこまで鬼じやなかったパドは即答で冗談だと言ってくれた。

そのテルヨシの反応が楽しいのか、こういう時に少しだが笑顔を見せるパドのSっ気がユニコに似てきていてマジ困りものだが、本気で困らせようとかしてこないだけ全然マシな方か。

「ニコはたぶん自分でなんとかすると思うから、私が余計なことをして困らせたくない。日曜日はテルの講演含めて楽しみにしてる」

「知り合いの前で講演とか地獄だね。それを言ったら学校の生徒も含まれちゃって今さらだけど」

「サアヤももつと惚れる可能性があるかもしれない」

「頑張る。めっちゃ頑張る」

「フフツ。グッドラック G L」

パド的には日常であまり見ないテルヨシの顔を引き出して楽しみたいだけなのは今のでわかるが、オモチャにした手前で悪気はあるからか、ちゃんとアフターケアも欠かさないのは嬉しい限り。

テルヨシもテルヨシでパドの口車に乗ってる意識はあっても、素直に受け取るくらいの方がこういう時は和むから良いのだ。

「ああそうだミヤア。ついでに聞いておきたいんだけど、帝城攻略の可能性を示す方法って、倒す算段を抜きにしてあり得るかな？」

思惑通りに場が和んでパドの笑顔も再び出たところで、さあ仕事だ

と動き出す直前。

ものは試しにとパドに立ちはだかった問題の解決策はないかと尋ねてみると、急なことだからさすがのパドでも即答とはいかず、それでも少しの思考から言葉を捻り出す。

「……その答えはもうテルの中であるんじゃない？　ただあまり現実的じゃないから口に出さないだけ」

「んー、どうだかねえ……」

「帝城攻略は私達バーストリンカーにとって現状で最難関のダンジョン攻略。それをやろうとするなら『普通の考え』じゃダメ。それがわかっているテルだから、普通じゃない考えが浮かぶし、時には実行に移したりする。だからテルは他の王達にも一目置かれる」

そうして言われたことは予想外の質問返しに近く、テルヨシの数少ない理解者としてなんとなくそんな気がする程度のものであった感じがする。

それでも言われたことで心のどこかにあった『できたらいいな』程度の考えが掘り起こされて、続けた言葉で不可能を可能にするには、幾多ものトライ&エラーが不可欠だと考え直させる。

なまじ帝城攻略という《無限EK》すらあり得ることなだけに慎重になっていたが、つまり《フロスト・ホーン》よろしく、当たって砕けるの精神はどんな時にも必要なんだということ。

「……………ならやるだけやってみるかな。THX、ミヤア。いつも相談に乗ってくれて感謝してる」

「NP。私もテルにはたまに感謝してる」

「たまになのね……」

それを思い出させてくれただけでもパドと話せて良かったと思えたテルヨシは、自然と感謝の言葉で締め括って話を終わらせにくくも、やっぱり締まりが悪い返しをされて苦笑いするのだった。

原作13巻辺り

Acceleration Second35

6月28日。金曜日。

昨日は《五芒星》の1人である《チャイブ・リリース》の勧誘に大失敗し、ISSキットの正体がおぼろげに見えたが、進展としては微妙となった。

サアヤに渡したISSキットもその夜には報告が上がってきて、余計な混乱を避けるために様子見でユリと《三重士》だけに話したこと。そこから注意すべき案件も現状では見当もつかなかったらしく、それでもライダーが生きているなどと思う人はいなく、ユニコにも今日の予定にあるエネミー狩りの最後に話すとおった。

「……………マジでこんな大々的にやるんですか？」

それを受けて今日の登校ですぐに黒雪姫に報告をして中継役としての責務を果たし、何故か昨日の今日ですっかり持ち直した黒雪姫の謎の機嫌の良さも気になったが、その辺で無駄に鋭いテルヨシに対して「何でもないさ」で押し通してきて教えてはくれなかった。

機嫌の良さからして黙ってる理由がネガティブ方面ではないことは間違いないので、そこはまあ心配ないかと言及はやめてあげたが、ちよつと気持ちの上下が激しいのでとりあえず1発だけデコピンをしてやった。

そして迎えた昼休み。

明日は文化祭前日ということとちよつと忙しくもなるので、今日のうちに済ませてしまおうと教師陣の呼びかけに応じて、当日のテルヨシの講演の最終確認を会議室を使ってさせられていた。

講演の内容については聞いてくれる人達に関心が向くように、かなり日常の中の色々に寄せて構成したため、教師陣からの反発の声もなく無事に通過。

おそらく特別枠入学者としては最初で最後の仕事になるので頑張らなければならぬが、別の意味で頑張っちゃった教師陣からは、当

日のテルヨシの講演に合わせて事前の告知をローカルネットから配信して集客を狙うらしい。

これは他の出し物系の展示でも見ようと思えばタイムスケジュールから見るとはできるが、ほとんど強制的にポップアップするよう仕向けるようで、見たくなくても目に入ってくる残念仕様。

「いちおう言っておきますけど、これで集客とか反響があっても、それは僕のあれであって、学校側が『こんな生徒を輩出しています』みたいな宣伝は詐欺になりますけど……」

別に大勢の前での講演など、アメリカで教授の手伝いで壇上に上げられたりが日常だったテルヨシにとっては大したことではない。

だが気がかりなのは言葉にした通りのことで、学校側がそこまで意欲的になるほどのイベントではないと個人的に思えたからだ。

それに対しての学校側からの回答は『日本の教育の利益と弊害についてを考えさせる個性の伸ばし方』を世間に考えさせる目的があるらしい。

日本というのは昔から『みんなが同じことをやる』という集団行動や教育理念で学ばせる環境が整備されていて、その中で優劣。スクールカーストが形成される。

だがそれは一概に良い面ばかりではなく、皆が『同じことをやらされる』と言い換えることもできてしまい、個人の個性を伸ばすための環境と教育理念が根付かない。

だからその枠からはみ出してしまう、テルヨシのような突出した個性は羨望や期待を受けるのと共に、枠から逸脱して孤立してしまうこともある。

人と違うからと爪弾きにされ、それでいじめが発生したりとなってしまうのは、そうした教育環境に一部で問題があると、そう唱える人は数十年前から少なくない。

「ああなるほど。つまり学校側が世間に主張したいのは『僕のような生徒でもこの学校は個性を失いません』ってところですか。学校も慈善事業ではないですね。同系の松乃木学園のこともありますし、生徒数の確保は経営に直結した問題。何も間違ってますん」

そこから考えれば学校側の思惑は自ずと見えてきて、ドストレートに本音を吐き出すが、学校側としては生徒にそうした本音を肯定するのは卑しきや利用した感があるので黙るしかない。

それでもテルヨシとしてはこの梅郷中学校に入学しなければ出会わなかっただろう黒雪姫や恵、ハルユキ達は大切な存在になったのは確かで、学校側にどんな思惑があろうと気にしないことにした。

これで自分に何か不利益があるわけでもないし、その辺で問題がないなら別にといった感じで話すことはもうないかと確認すると、教師陣からは明日の確認作業もよろしくとだけ言われて終了。

時々だが教師陣すら戦慄することを平然と口にするテルヨシのこれは自覚もある悪い癖ではある。

しかし口にしたことはあくまでも物事の本質であり、そこにテルヨシの感情は含まれていないのだが、やはり言葉というのは発せられるだけで受け取る側の捉え方も違ってきってしまうということ。

それもわかって言葉にしちゃうから反省しかないテルヨシは、とりあえず明日の準備では明るくやろうと決めて残りの昼休みで急いで昼食にするのだった。

「ああああああ……」

放課後、バイトも終わって帰宅の徒につく前。

今日は店には来なかったサアヤが、それでもバイト終わりのテルヨシに間に合うように店まで来てくれて、歩きながら話をするくらい時間はできたのだが、なんだか不思議な疲れを見せるサアヤは色んなものを吐き出すような『あ』を息の続く限りひたすらに伸ばしてみせる。

その奇行には相当のストレスか何かがあったと推測するのは容易だが、こつちから尋ねるとタイミングが狂いそうだから自分から話してくれるのを待つ。

「……《ルー子》に会ってきた……」

「ルールーに？ ああ、だからそんなにゲツソリしてるのか。その様子だと話もできなかった感じだね」

「イーターも昨日、ボツコボコにされた上で私に挑戦状を叩きつけて

きて、肝心の話はこれっぽっちも聞かなかったみたいで、今日は私がいかに会に行ったら『敵討ちに来たか!』っていきなり攻撃されてハッスルし出して、こっちの制止も無視されて結局は超火力で叩き潰されたわ……」

「攻撃の意味もないサアヤを叩くって……やっぱりルールーはおかしい」

「ルー子の戦う姿勢は嫌いじゃないけど、この『対戦超おバカさん』なところだけは直してほしい。切に」

サアヤがここまで頭を抱える理由が五芒星の最後の1人であるルールー。《ボツシユ・ルーレット》^{Bosch Roulette}にあるとわかると、問題児の行動に頭を抱えるのは賛同する。

よくわからないが会った当初からルーレットは『周りみんな敵!』という謎思考を持っているところがあり、とにかく共闘とかそういうのが出来ない残念な子なのだ。

その異常とも言える好戦的な思考からテルヨシと同じで通常対戦をメインにしてレベルを上げた猛者で、現在のレベルもサアヤと同じ7。

エネミー狩りすら野獣級までソロ討伐してしまう——もちろん相性もあるが——辺りはまさに鬼のような実力の持ち主で、レギオンの勧誘も未だにひっきりなしの引つ張りだこ状態。

それでもソロプレイを続けるルーレットの孤高の強さはテルヨシもサアヤも認めるところだ。

が、やはり対戦フィールドでは会話にすらならないのは論外なので、そこだけはどうかしてほしいものと本気で思う。

「あの子、観戦も全くしないタイプだからギャラリ参加で話も出来ないし、とにかく個人情報がなさすぎ。会話が成り立った人とかいるのかも不明よ」

「オレも視界に入っただけで攻撃されて話とかできる感じはまっつたたくしなかったわ。誰もが知ってるバーストリンカーなのに、誰も何も知らないバーストリンカーでもあるんだよねえ」

「そうなるにあの子との交渉の可能性は《親》を経由するしかなさそう

「……知ってる？」

「それずいぶん前からある疑問だよ。あれだけの《子》なら親も鼻高々だろうに、それを名乗るバーストリンカーは聞いたこともない」

「……やっぱりあの子の親はもう……」

「そうなのかもねえ」

そうしたところで会話が成り立たないルーレットをどうすればいいか話す中で、彼女の親についても話す。

しかしルーレットが台頭してきた頃からすでに親の影も形もないことから、2人でほぼ同じ結論。全損してしまったのだと考えて、ここからの交渉は諦めるしかないかと振り出しに戻ってしまった。

「……ルー子についてはとりあえず保留にしましよ。それよりも四神攻略の可能性。なんか考えてみた？」

「それなんだけど……あり得ないことかもしれないけど、やるだけやってみる価値はありそうなことは思いついてる」

そんなルーレットだから交渉の糸口など現状でないに等しいため、そこでうんうん唸りながら考えたところで妙案が浮かぶわけもないので早々に切り上げて、次に解決すべき問題を持ち出すサアヤに対して、昨日にパドから言われて実行に移してみようと考えていた案を前置きまでして話してみる。

「………つて感じなんだけど……やっぱ無理よね」

「……いいんじゃない？ 戦国時代みたいな頃に生きてた私達からは生まれない発想よ。やってみてダメなら、また何か考えれば良いだけだもの。後退するわけじゃない」

「でもその場合の取り分とかなかなか……」

「まだ時間はあるんだから一緒に考えるわよ。思いつかないならいつそのことロータスにでも知恵を借りればいいわ。頭良いんでしょアレ」

時間も限られてるので口早に考えていた案を話してみて、バカらしいと一蹴されてもおかしくないなと身構えていたら、まさかの好印象でビツクリ。

しかしそれならそれで考えなきやならない問題も出てくるので、そ

こをどうするかと問えば、サアヤもすぐには答えが出ないから一緒に考えようということになる。

プライドどうこうもこの際いらないとばかりに黒雪姫に頼る案まで出したサアヤは、そろそろ分かれ道になるからと立ち止まりテルヨシを見送る。

「あつ。明日は泊まったりする?」

「んー……遠慮しとく。アンタも文化祭の準備とかで疲れるでしょ」

完全に分かれてしまう前にふと毎週のように土曜日は泊まっていたサアヤが今週も泊まりに来るかを尋ねると、少しだけ考える素振りをしたサアヤは、今週は遠慮すると答える。

しかしテルヨシとしてはむしろ泊まってくれた方が嬉しいのは言うまでもないので、自分を気遣うサアヤに気にしなくてもいいと言おうとした。

が、サアヤなら夕食だつて作れるしむしろテルヨシの家での作業を減らせるまであるので、どこか微妙に理由の強引さが見えてきて、その事に勘づいたことに気づいたサアヤが髪を指でクルクルしながら観念したように本音を漏らす。

「……………泊まっちゃったらその……………準備に時間をかけられないから……………」

「……………準備?」

「アンタの学校にその……………か、彼女として行くわけだから……………なるべく彼女らしくしたいっていうか……………ああもう! わかれバカツ!!」

——どげしっ!

サアヤ的には壮絶にらしくないことをしようとしてたからか、察しの悪いテルヨシに苛立って最後まで言う前に察しろと腰に蹴りを入れてくる。

さすがに加減くらいはしてくれたが、割とまだ貧弱な下半身では踏ん張りが微妙で膝をついてしまい、やり過ぎたとすぐに手を伸ばして立ち上がらせてくれた。

「とにかくっ! 泊まりには行かないから。それじゃあね」

「お、おっす。楽しみにしておっす」

サアヤとしてはもう本音は言い切ったっぽく話を締めてしまい、テルヨシもそれに合わせて交差点を渡っていったサアヤを見送りつつ、さすがにバカでもアホでもないのと言わんとしたことは理解。

確かに泊まってしまおうとテルヨシが登校するまでの時間でおしゃれする時間を奪われるし、1度帰宅するにしても手間ではない。

それなら自宅ではうちり支度して文化祭に参加する方が時間を有意義に使えるし、テルヨシにおしゃれした姿を直前まで見られないメリットも生まれる。

そうしておしゃれをまだまだしたことが少ないサアヤだとそれに必要な時間もそれ相応になるのだろうし、自分のためにしてくれることに嬉しさを覚えないわけがない。

あとは当日のサアヤを見る楽しみが増えたのでなんだか元気をもらったテルヨシは、明後日に迫った文化祭でサアヤに恥をかかせるようなことはできないなど、より一層の気合いを入れて挑むことを決意したのだった。

「おかえりなさいーい」

文化祭の楽しみが増えてちよつとウキウキしながら帰宅して早々、いつもならリビングで宿題でもやりながら迎えるマリアが、何故か玄関まで来て出迎えてくれたことに何か不思議な感じがする。

機嫌はいつもと変わらないし、文化祭を控えたこのタイミングでおねだりなんかをしてくる子でもないから疑問に思いつつ玄関から上がってリビングに移動すると、その時に理由が判明する。

「さつきミヤアさんから連絡があつて、テルが帰ってきたらボイスコールしてほしいって」

「ミヤアから？ 緊急だった？」

「んー、いつも通りな感じだったけど、ブレイン・バーストのお話だった」

どうやらバイト終わりで別れてから帰宅までの間にパドからマリアに連絡があつたらしく、グローバル接続を切っていたテルヨシは何の話かを把握しつつマリアと一緒に夕飯の支度をしながらホームネット経由でグローバル接続をしてパドにボイスコール。

「こんばんは
GE、パド」

『帰宅が遅い。徒歩で帰ってた?』

「途中でサアヤと歩いて帰ってたからかな。悪いね。それより話して何?」

繋がっていきなり文句みたいなのを言われてしまったが、せっかちさんなパドだから別に気にせず手間を取らせてしまったことを謝罪しつつさっそく本題に。

『今日プロミでエネミー狩りをする事は知ってたはず』

「ああうん。もしかしてもう終わった?」

『私のバイト終わりに合わせてくれてたから終わったのは現実時間で10分くらい前』

「バスに乗った頃か。それでエネミー狩りで何かあった?」

『まだ確認が取れないから慎重に動いてるけど、神獣級エネミーに意図的に襲われた』

慣れた手つきで調理しながらパドとの通話をしていくと、今日のエネミー狩りで問題が発生したらしく何が起きたのかを聞けば、ちよつと言葉の意味についてを考えてしまう発言に首をかしげる。

「エネミーに意図的に襲われた?」

『Y。エネミー狩りをしてた私達のところに「誰か」が神獣級エネミーを放り込んできた』

「その誰かっつのがわからない感じか」

『……姿だけなら見えた。けどそれが問題』

神獣級エネミーともなれば余程のことがない限りは遭遇戦にはならないし、パドの言い方からしてその神獣級エネミーが本来のテリトリーを無視して現れた可能性があった。

そうなるとエネミーが調教された状態で連れてこられてプロミを襲わせたことになり、パドもその存在を確認していた。

しかし問題はその存在にあったようで、わざわざテルヨシに報告してくるからにはテルヨシにも関係のあることなのは間違いない。

『神獣級エネミーの上に乗って現れたのは……黒の王《ブラック・ロータス》だった』

「ふーん」

『……反応が薄い』

「あ、ごめん。あんまりあり得ないことだと素直に受け取れなくて。ミヤアだってそれが事実ならそこまで冷静に構えてないでしょ」

『それは当然。私も黒の王がプロミを襲撃する理由がないことくらいわかってる』

作業しながらその正体について身構えたテルヨシにパドから告げられた人物の名は確かに衝撃だったが、冷静になるまでもなく黒雪姫がそんなアホなことをするわけがないので、何かあるなど勘繰り、パドも見た人物が本物の黒雪姫であるなどと思っ報告してきたわけではないと補足。

「そのロータスの偽物はどうしたの？」

『神獣級エネミーを放り込んでからエネミーの上から降りて、地面に触れて溶けるように消えた。それから私達はすぐにニコの力も使ってその神獣級エネミーから逃げ切って離脱した』

「地面に触れて消えた……」

『何か心当たりがある？』

「いや、可能性の域を出ないからなんとも。でももしもそいつがオレの知る奴なら、消えたんじゃないやなくてプロミを観察してた可能性がある」

『……ニコも同じようなことを言ってた。見られてる感じがしたって。あとは本物の黒の王よりも情報圧が小さかったとも言ってた』

「行動の理由は判然としないけど、もし奴ならその行動に意味がないってことはないと思うから、ニコたんにも警戒させといて。エネミー狩りも控えた方がいいかも。んでオレは一応、本物から証言を取ってくればいいわけね？」

『Y。偽物にしても敵として黒の王をプロミに見せてきた意図は許せない。中には見えたものをそのまま捉えて動いてしまうメンバーもいるかもしれない。だから事実確認だけはしておきたい』

だがそうと確信が持てるのは黒雪姫と親交のあるユニコとテルヨシを知るパドとユリくらいなもので、かつてライダーの首をハネた黒

雪姫を100%信じられるプロミメンバーはほぼいないはず。

ことに旧プロミ所属の現プロミメンバーなどはその傾向が強いのは間違いない。

そうしたメンバー達が何かしてしまう前にとにかく黒雪姫が襲撃してきたわけではないことをちゃんと確認しておきたいというパドの判断は理解できたので、明日やるべきことに追加しつつプロミにも警戒を促す。

「あとはそうね……あくまで可能性として偽物の心当たりだけは教えておく。そいつは《ブラック・バイス》。加速研究会の副会長を名乗ってて、影の中に潜伏して移動する能力を持つてる」

『ブラック・バイス……わかった。ニコには報告しておく。Bye』

長話は好きじゃないパドだからそろそろ締めるだろうなと予想して、最後に黒雪姫の偽物の可能性の1人を教えておき、そういえば七王会議の時には黒雪姫が報告していなかったなと今さらながらに考え、バイスの名を覚えたパドは用件も済んだのですぐにボイスコールを切ってしまった。

それにしてもだ。ISSキットが流布されている今にバイスがそんなことをして何をするつもりなのか。

プロミを観察していたなら、そのプロミに目的があったのか。或いはネガビユとプロミの繋がりを絶つのが目的か。

予想の範疇に収まらない加速研究会の行動は読みきれない部分の方が圧倒的に多いが、予感だけはしている。

自分達の考えも及ばないとところで、加速研究会の企みは確実に進行しているということ。

それだけは忘れないで止まっていた作業を再開させたテルヨシは、それはそれとして切り替えて明後日に控えた文化祭についても頭のリソースを割き始めたのだった。

文化祭前日。

今日はバイトも休んで午後いっぱいまで文化祭の準備をする予定だったテルヨシは、まず先に忙しすぎて話す時間もなさそうな黒雪姫を登校早々に捕まえて昨夜プロミのエネミー狩りで起きたことを報告し、わかつてはいるがその犯人が黒雪姫ではないことを確認。

黒雪姫も話を聞いて犯人が《ブラック・バイス》であることをほぼ確信したようだったが、本当に今日は忙しすぎて頭のリソースが割けないらしく、HRなどといった朝の恒例すらも参加せずに恵とほか生徒会メンバーは姿を眩ましてしまった。

生徒主導の文化祭とはいえ、生徒会がああなるほど放任はどうなのかと思わなくないが、この自由さなしに黒雪姫が生徒会であそこまで横暴な振る舞いはできないので、なにかと緩い校風にはツツコまないしておく。

そんな生徒会を他人事のように見ていたテルヨシではあるが、自分も自分で今日はクラス展示——生徒会は免除されてるがケーキ屋をやる——の手伝いと講演のリハやらがあつて忙しい。

クラス展示に関しては始めこそバイトの経験を活かしたテルヨシの主導で女子が中心になってやっていったが、試作などを始めた段階で女子が主導になったので今は諸々の最終チェックなどを担当。

出す以上はオーナーも来るので妥協はなしのテルヨシの最終チェックはなかなか厳しい関門として今週の頭から女子に立ちはだかったが、今日の午前中のうちにそのチェックをクリアしてくれる。

男子は肩身が狭い思いをしながらも装飾などの飾りつけにこき使われて、当日は裏方仕事——使った道具の洗い物など——がメインで接客も女子が担当。不憫だが仕方ない。接客は大抵、女子がウケる。

その枠から勿論はみ出るテルヨシは現場監督なので、当日も午前中の始めは現場指揮で先陣に立ち指導する予定で、それから休みなしに講演となる。

「おーい、皇い。若宮がメール読めって」

「あー聞こえない見えなーい。まだみんなとガールズトークしていいーい」

「テル君は女子違うしい」

クラス展示の方はこれで問題はなさそうだったといった段階に落ち着いてから、女子との昼食を楽しんでいたテルヨシだったが、体育館で現在進行形で進んでいるはずのリハーサルに行かず、20分前に届いた恵からのメールを無視していたら、案の定で体育館で出し物をするクラスの男子が使いとして出されて連行しに来る。

——お昼くらいゆっくりする権利はあるはずだ！

といった主張をしたところだが、1人のわがままが通るほど体育館でのリハーサルはなあなあで処理できないことなので、どうせメールにはテルヨシの性格を読んで早めに来るようにと10分前行動を促すことしか書かれてないだろうが、一応はメールを読みながら遅刻にはならないことだけ確認して体育館に移動。

遅刻してないのに現場指揮でいた恵にちよつと怒られる理不尽にも耐えて、予定通りにステージでのリハーサルを開始。

当日も使う機器の確認もあるので、使えなければ困るライブ映像配信とAR大ビジョンのスクリーンは、テルヨシのニューロリンカーの視界映像をリンクさせて映し出される。

「はい、めーぐみっ。ピースピース」

「……………視界は良好っ。音声も……………後ろの方まで聞こえてるみたいね。ボリウムは当日にもちゃんとチェックしてくださいな。音割れでも起きたら大変ですから」

「忙しいのはわかるけど笑顔を絶やしちやダメよ?」

「これでも楽しんでやってるのでお気になさらずに」

その視界でステージの上からそばにいた恵を映しつつ音声チェックも兼ねるが、淡々とした進行の恵が面白くなって笑わせようとする。

しかしとてもそうとは思えない返事で会話を終了させた恵は、講演の中でテルヨシがやりそうな客を困惑させる発言や行動を事前に注

意してチェックを終了。

まあ恵は嫌なことは嫌だと割と素直に言う方だし、本人が楽しんでと言うならそうなのだろうと納得しつつ「寒いジョークは飛ばさないように」とかなんとかまで注意するのはいかなものかと内心でツツコみ、あとはステージ担当の生徒と細かい打ち合わせで調整をしていった。

それらを全て終えて、体育館全体での出し物のチェックを全て終了したのは午後2時を回ったくらい。

バイトも休んでいるので下校時刻にはなっているが、やはり祭りの前日は心が躍るもので帰る気にはなれなく、まずは速攻でクラス展示の女子グループに混ざろうと向かった。

だが提供するケーキのチェックも終えて完全に後片付けに入っていた女子達からは「あとは本番に備えて寝るのみ！」とか言われると食い下がれず退散するしかなく、今もあちこち動き回ってる生徒会の黒雪姫と恵など暇潰しに捕まえようものなら、全生徒からバッシングを受けること間違いなし。

会話相手がいないと死んじゃうテルヨシとしては下校の選択肢しなくなっていたが、生徒が自由に動き回れるならやれることはある！ と考え直して移動を開始。目指すは後輩の元だ。

「あー、テル先輩がサボってるー」
「失礼な。ちゃんとやることはやりましたけどー」

そうしてまず訪れたのは、陸上部が出す予定のクレープ屋台。

そこでは料理ができるチュリが戦力として入っていて、今も生地を焼く練習を他の部員達と楽しそうにしていたが、テルヨシが来ればイタズラな笑みで失礼なことを言って茶化してくる。

「明日はタツくんの演舞を見終わったらみんなで講演を聴きに行くので、失敗だけはしないでくださいよっ」

「何の配慮か、オレの講演の時は他の限定的な出し物は全部スケジュールから外れてるから、こういうクレープ屋台とか以外の生徒は来れるようになってるしねえ。どんだけ大々的にやるんだか」

「テル先輩が表舞台で何かするのがそれだけ大きなことってことじゃ

ないですか。そう考えたらタツくん達の演舞とかも前座にしかなくてないような……」

「やめてさしあげろ。都大会も近いのにダンスやってるタクム君が可哀想になる」

「それを言ったら部活の人達みんな大会前に頑張ってますよお」

相変わらず遠慮がないというか嘘がつかないというかなチユリの発言は話しやすい一方でなんか先輩への敬いとかそういうのも排除してそうで怖いところ。

ギリギリのところ敬語は使ってるからいいのだが、そうやって先輩相手に物怖じせず話すチユリを部活仲間の後輩女子も凄いいみちな顔で見ている。

それはそれとして現在進行形でクレープ作りの試作をしていたチユリ達の手元が気になったテルヨシは、アメリカにいた頃に作ったなあと思いつきながら見てみると、食べたいと勘違いしたチユリが試作品の試食を勧めてくれる。

まあタダ食い出来るのはラッキーなのでありがたいんだけど、その感想はガチでやってから、生地の厚さだけ気になったので自分で焼いてみせたら、思いのほか女子ウケしてそのまま焼き方講座を10分くらい開催することに。

今は機器が優秀なので人の技術など入っても大差ないが、手際だけはいくらでも詰められるもの。

言葉で説明しづらいそれをずっとやってみせて感覚的なもので掴ませる形で済ませてしまったが、体育会系は理論派より感覚派が多いようなそうでないような気がするのでもいいかと、報酬としてその生地でトッピングしたクレープをいくつか貰って次なるちよっかいへと出撃。

「も、物凄く視線を感じる……」

「気のせいだタクム君」

訪れた剣道場では、創作ダンスに励む男子剣道部とその衣装作りに勤しむ女子部が楽しそうに作業していて、今はちようど当日に着る衣装の試着をしていたようで、試着を終えたところに居合わせたテルヨ

シは、新撰組のような衣装に身を包んだタクムをまじまじと観察。

ダンスの方は当日の楽しみにしたのであまり見ないようにしつつ、女子部員がキラキラした目でタクムと、ついでにテルヨシを見るので、会話がしづらかったのか剣道場の外へと移動しようと提案されて、外ならいいかとチュリからの餞別だと適当なことを言つて貰ったクレープをあげると、ハニカミながら受け取ったタクムはそれを頬張りつつ口を開く。

「テル先輩は暇潰しを始めるくらいには余裕なんですね」

「仕事もできちやう先輩で申し訳ない」

「それをマスターの前でも言えるのでしたら報告しておきますが」

「姫にならない。恵にはダメ。さつきいじめられたもん」

「いじられたの間違いでは？ 先輩は僕達の学年とかだと面白くて楽しい先輩のイメージですけど、同年代と違うイメージを持たれてさうです」

「ノリが良すぎてたまに真面目なこと言っても流される時はある」

忙しいだろうに話はしてくれるタクムの人の良さは今さらなことだが、真面目なだけとは違ってノリも悪くないのでテルヨシもそれに甘えて会話を盛り上げる。

面倒な先輩という自覚はありながらそれを表情に出さないタクムはなかなかタフな部類だなと勝手なことを思いつつ、出し物の出来はどうだとかその辺の話題で適当に話をしてから、持っていたクレープも食べ終わったタイミングで視界の時刻を確認。

「そろそろ領土戦かあ。忙しいのに領土持ちのレギオンは大変ね」

「さすがに今日は僕は参加できそうにないですがね。これから本腰入れてダンスの練習なので」

「チュチュも主導で動いてたから、今日はハードになりそうよ。助けてやらないけど」

「助けるって……マスターが嫌がりそうです」

「オレは問題児ですからな。領土戦中にうーちゃんやフーコさんとイチヤイチャする可能性は高い」

「否定できないのがテル先輩の凄いいところなのかもしれないですね」

……」

時間も良い感じで潰せて30分後くらいには加速世界でも領土戦が始まるといった頃になって、メンバーの半数以上が梅郷中の生徒という偏りのあるレギオンは大変だなあと他人事のように思いタクムと笑い混じりで会話。

それからすぐに剣道場の中から練習するような声かけがあつて、タクムもそれに応じるようにクレープのお礼を言つて軽くお辞儀してから剣道場の方へと戻つていき、それを見送つて次なる暇潰しにどこへ行こうかと思考。

「……………あつ。飼育委員といえば」

しかし文化祭に頭がいつていたから完全に抜けていたが、マリアと謡が来る飼育委員は毎日欠かさずに来るので、いま行けば普通に会えることに気づき、すぐ様その進路を第2校舎の裏へと向けていった。

「うーちゃん今日も可愛いー!」

【UI】 テルお兄さんは今日もお元気なのですね

「テルはバカなだけだよ、うーちゃん」

「マリアつたらあ、うーちゃんだけ可愛いって言うから拗ねちゃつてえ」

「どう捉えたらそうなるんだろう。さすがバカテル」

着いた頃にはすでに飼育委員の仕事は全て終了していたようで、これから体操着から制服に着替えようトイレに移動しかけていたマリアと謡の進路に割り込んで挨拶をするが、さすがに慣れてきたのか謡も笑顔を崩さずにチャットで挨拶し、マリアに至っては平常運転すぎて笑えない。

しかし領土戦も迫ってるから謡も早く着替えてしまいたいと申し訳なさそうにチャットで伝えてからお辞儀してマリアと一緒にトイレに行つてしまい、残されたテルヨシは同じく取り残されたハルユキと一緒に備えられたベンチに腰を下ろしてみる。

「あの、テル先輩は講演の準備とかいいんですか?」

「終わつてなきやここに来ないよ。チュチュとタクム君にも言われたんだけど、オレってそんなに怠け者に見えるわけ?」

「そそ、そんなわけでは決してなくてですね……テル先輩はなんといつか黒雪姫先輩と同じで、苦労を顔に出さないとというか、いつもどこかで余裕を持っている感じがして」

「弱味を見せるのは彼女とマリアの前だけでいいのだよ、ハルユキ君」「そういうものなんですか……」

よほど後輩からの信頼がないのか、唯一と言っていい後輩3人ともが似たようなことを言ってきて少し悲しいが、そう見えるのなら仕方ないと諦めて会話を続ける。

それでもハルユキとだと微妙に会話が弾まないテルヨシが飼育小屋のコノハズク。名前は確かホウだったはずの方を向いて何か聞こうかと思つたら、黒雪姫からメールが届き内容を確認。

そこには「領土戦前の会議に参加しろ」との命令があつて、プロミの件で話すことでもあるのかなと予測しつつハルユキにも報告。

「なんかこれからの領土戦会議に参加しろって姫が。何か理由は知ってる?」

「えつと……テル先輩に関係あるのかはわかりませんがなんとも……」

「んー? ということは隠し事はあるわけか。まあ問い詰めても言葉を濁したつてことは話す気はないだろうし、楽しみにしておくか。ネガティブ方向じゃないよね?」

「それは、はい。大丈夫です。あつ、黒雪姫先輩と僕しか知らないのだから他の人にはまだ……」

「余計なことほしないうつて。信用ないなあ」

一応テルヨシが知らない何かがあるのかもしれないので、それとなくハルユキにも報告がてら探りを入れてみたら、凄く分かりやすく言葉が濁してくれたので、悪い話ではないことだけは確認しておき言葉はやめてあげる。

そうこうしながらマリアと謡が戻ってきて割とすぐに領土戦前の会議のための対戦が始まり、ギャラリーとして入ったテルヨシは《月光》ステージに降り立ってすぐに近くにいた謡と合流し、対戦者になつているハルユキが移動するのを手を振つて見送る。

そしてちよつと待ってからギャラリーの自動追従機能でテレポトし、黒雪姫、ハルユキ、チユリ、タクムと集まった中に出現。

「あれ、何でテル先輩がいるの?」

「お呼ばれたの」

「マスター、もしかして文化祭で何か問題があるんですか?」

「ン、別に問題が発生したわけではない。ただ話が見たいと言う者がいたのでな」

『話が見たい者?』

そうなれば本来ならいはずのテルヨシが話題になるのは当然で、その辺で鋭いタクムが先読みしたのだが、ネガティブな方向じゃないとわかってたテルヨシはその返答がどうなるかと思っていたら、本当に予想外の返答にハルユキ以外のみんなと口を揃えてしまう。

しかしそうなるとその場にいないフーコがその人物に当てはまってしまうが、わざわざ黒雪姫が名前を伏せる理由が全くないので疑問が浮かんでいたら、そのフーコもすぐ合流してきて話に加わる。

「えっ? わたしからは特に何も無いのだけど……サツちゃんは誰のことを言っているの?」

「それはだな……」

だがやはりフーコから話があるわけではなく、フーコからまでそう言われてしまえばもう言うしかなくなって、まだ言い淀む黒雪姫は言葉ではなくその顔にある建物オブジェクトの屋上に向けることで示し、それに釣られてみんなして同じ場所を見てみると、月光を背にして屋上に立つ1人のデュエルアバターが姿を現していた。

その姿を見た瞬間。フーコと謡は揃って息を呑み、タクムとチユリも存在しないはずの人物に驚き固まり、テルヨシもかつて1度だけ対峙したことがあるそのデュエルアバターに笑みがこぼれる。

屋上に立つ人物は沈黙した一回を他所に壁面をその『流水装甲』を崩して流れるように降りてきて、再び人型の姿になると、吸い寄せられるように歩み寄ったフーコと謡に近づきようやく言葉を発する。

「……ただいまなの、レイカー、メイデン」

「カレン……なの……?」

「レンねえ、ですか……?」

ずっと秘めていた勇気を振り絞るようにして2人に言葉をかけた人物《アクア・カレント》は、まだ信じられないといった感じで約3年ぶりに再会した2人の問いかけに静かに頷き、それでようやく実感が湧いた2人は人目もはばかることなく目の前のカレントに抱きつき、カレントもそんな2人を優しく抱き止めた。

「ハロハロー。2年ぶりくらいになるかな、カレント」

「あなたは相変わらずの飄々っぷりみたいなの、レガッタ・テイル」

「まさかこのタイミングでカレントと会えるとは思わなかったよ」

「私もロータスから聞くまでこんなことになるとは思わなかったの」

空気を読むべきかとも思いつつも、本来この場がネガビュの会議であることを考えて早々に退場した方がかえって良さそうと考えて話があるというカレントへと挨拶。

カレントもフーコと謡と抱き合いながら顔だけをテルヨシへと向けて会話をしてくれる。

「それで話つてのは?」

「話というほどのことでもないの。ただあなたにお礼だけ言いたかった」

その状態で話し続けるかと思ったが、テルヨシが本題に入るなり2人から離れたカレントは、唐突に心当たりのない感謝を述べたかったと言うから疑問が浮かぶ。

これには黒雪姫も何のことやらと首をかしげたが、カレントは言葉に困るテルヨシにさらに言葉を続ける。

「あなたがいてくれたから、ロータスが長いグローバル切断を経ても、変わらずに外の情報を得られたし、対戦を繰り返すことでブランクもなく復活できた」

「あー、それね。別にカレントが感謝することじゃない気もするけど。姫とは利害の一致でやってたことだし」

「そうだぞカレン。その代わりに私がアイツを鍛えていたのだから対等な取引だったのだ」

「それでもなの。私達のレギオンマスターの剣が錆び付かなかったというのは、それだけ大事なことだったの。だから元《四元素》として感謝するの」

「だそうよ、ひーめっ」

「……まったく。どうしてこう皆、私に対して過保護なのだ」

何に対しての感謝かはそれで判明し、感謝されることでは全然なかったから物凄く照れ臭かったものの、真面目なカレントに言われて黒雪姫までが照れ臭そうにして笑いを誘うと、フーコと謡まで便乗して笑ってしまった。

しかしカレントはそれだけで終わらずに笑いが収まってから改めて口を開き、またも予想外なことを言ってくる。

「それからレパードとも仲良くしてくれてありがとうなの」

「んー、ん？ それはまあパドは好きだし仲良くしてもらって感謝するのはオレの方……だけど、何でカレントが感謝？ っていうかバトロワの時にもそんなことを言ってた気が……」

「……秘密なの」

どうしていきなりそこでパドの名前がと思わざるを得なかったのだが、話しているうちにかつてのバトロワでもパドの名前を出していたことを思い出す。

何か関連があるのだろうことまでは勘づいたものの、本人がそれ以上は口を閉ざしてしまっただけは言及も出来ず話は終了。

これについてはパドからも聞いたりはできそうだから今ここでの問い詰めはやめるが、次に会ったらこれだけは聞いておこうと決めていたことを今のうちに言っておく。

「まあそれはいいや。じゃあ最後にオレからも。あの時にカレントに言われた足りないもの。この2年で積み重ねてきたつもりだけど、今のオレはカレントからどう見えてる？」

それはかつてバトロワでカレントに言われた埋められない差。すなわち対戦による経験値に他ならない。

あの時は確かに圧倒的に経験値の差を実感しうちひしがれたものだが、この2年で埋まらなかった差を少しでも詰めることはできたの

か。それだけは確認したかった。

「……………難しい質問なの。この2年であなたの対戦を直接見ることはほとんどなかったけど、今こうしてギャラリーでも相対してみても感じたのは、わたし達ともそこまで差がない雰囲気はなんとなく伝わるの」

「カレン。一応だけどテイルさんはわたしと僅差の勝負をしているわよ」

「私も少しだけ交えさせていただいて、実力のほどは認めているのです」

「そうなの。ならもう自信を持っているの。レイカーとメイデンが認める実力なら……………うん。近いうちに直接見てあげるの。その方があなたも納得するはず」

「悪いけどあの時みたいな絶望はもうしない予定だからよろしくっ」
でもさすがのカレントと言えど今のテルヨシの実力を正確に把握しているわけもなく、漠然と強くはなってるだろうと言ってはくれない。

そんなカレントにフーコと謡が補足するように自らの対戦経験を報告し、それを聞いて少し明確な判断をしかけるが、やはりバーストリンカー。

相手を理解するなら対戦の中でと言うように近いうちの対戦を約束し、バトロワの時にはいかなる攻撃も無力化された悔しさを忘れていなかったテルヨシも、この対戦には熱が入り宣戦布告。

それを受け取ったカレントは「楽しみにしてるの」とだけ言って、それを聞いたテルヨシもこれ以上の時間の消費はネガビュに悪いと思っただけで自ら対戦フィールドから退室して現実世界へと戻っていったのだった。

Acceleration Second 37

文化祭前日になって知った《アクア・カレント》の《ネガ・ネビュラス》への復帰はビックリだったが、現実世界に戻ってきたテルヨシは誤差程度の差で戻ってきたハルユキと謡を見て、その嬉しさに溢れた笑顔にニツコリ。

「いいよねえ、ネガビュはすんなりメンバーが集まって」

「えっ？ でもテル先輩のレギオンって別にレギオンの拡大とか目的じゃなかったですよ？」

【UI】 そうなのです。テルお兄さんのレギオンはガストさんもおりますから、メンバーを募ればいくらでも集まるはずなのです」

「まあ誰彼かまわずにつてことならうーちゃんの言う通りなんだろうけど、そういうわけじゃないからねえ」

「テルはネガビュの人に言っただけだったんだ。メンバー集めのこと」

「言っただけの問題でもないからいいかなって黙ってたんだけど、目の前でメンバー加入を見ると愚痴りたくもなる」

「……誰かネガビュに加入したの？」

カレントの復帰は喜ばしいことだが、順調に人数を増やしているように見えるネガビュには、現在進行形でそれが難航している《メテオライト》としてはなかなか悔しいもので、その辺の話をネガビュにしてなかったことを今さら言及されてしまう。

それに関しては言う通りネガビュには関係ないことなのでさらっと流しつつ、会議の場になかったマリアも今さらカレントの復帰についてを尋ねて、謡がその事を報告したところで、時間も午後4時となる。

ここからしばらくは領土戦の時間になるのでハルユキと謡は意図しない加速で防衛に回ることになり、会話はしばらく時間潰しでマリアと校内を適当に回ろうかと思っただけ、割とすぐに防衛戦の1戦目を終えてきたハルユキと謡が何故かそれを制止してくる。

「何かあった？」

「えっと、テル先輩ってプロミとも親交が深いですよ。今の防衛で

その、停戦中のプロミのメンバーが仕掛けてきて……」

「あー、それってISSキット絡みとは違う感じ?」

「UI◇ そうなのです。攻めてきた方々のお話では、昨夜のエネミー狩りでサツちゃんが神獣級エネミーをけしかけてきたと」

「はあ……姫には朝に報告したのに、さっきの会議で話してなかったのか。動いたのは旧プロミにも所属してた子達でしょ。だったら悪く思わないであげて。きっとその子達もプロミを守ろうってしたことだと思おうし」

「それは大丈夫です。ちゃんと拳を交えてから和解しましたので」

2人によると今の防衛戦で攻め込んできたのが、停戦中のプロミのメンバーだったらしく、昨夜にパドから報告があつてその理由についてはISSキットかそつちかしかないと予測したテルヨシの理解は早かつた。

それでISSキット関連ではないとわかれば出てくる言葉はプロミの側に立つての弁護であり、攻め込んだことに対して怒っているわけではなかつたハルユキと謡も、テルヨシがもし知らなかつたら教えてあげようといったニユアンスであつたことを理解。

この件は明日にでも解決してるだろうが、パドには報告がてら伝えしておくかと領土戦の終わる頃を見計らつて1度校門の外へと出てグローバル接続。

バイトの休憩中とかだと思われるパドに速攻でボイスコールしてみると、これもまた速攻で繋がる。

『タイミングが絶妙。昨夜の件の他にも何かある』

『お察しの通りで。そつちでも確認はできてる?』

『Y。何人が攻め込んだ?』

「聞いた話じゃ3人。撃退もされたし誤解らしきものもとりあえずは解いたみたいだけど、そつちでも改めてお願いね」

『それから?』

「怒らないであげてってニコたんに」

『怒らないでだって。わかつてるって』

「そこにいるんかい」

さすがパドと言うようにすでにテルヨシの言うことがわかってた感じでいきなり本題に入ることができ、ポンポン話が進むと、どうやらそばにはユニコもいたようで伝言が速攻で伝わって返事まで来てしまい苦笑気味にツッコむ。

しかしそうならこつちも伝言くらい頼まれてやろうとユニコから黒雪姫に何かないかと尋ねると、一言だけ「わりい」と伝えてくれとあり、一応は承知したもののすぐに頭に返事が浮かんで先に伝えておく。

「うん。じゃあ姫からのお返事を先読みして返しとく。『謝るのなら赤いのに直接来いと伝えてくれ』」

『……これ以上の伝言は無意味。 Bye』

それを聞いてわずかに沈黙したパドは、先日のカレーパーティーで黒雪姫とユニコの関係を見抜いたのか、このままでは伝言がしばらく続くと判断して早々に切り上げて、これ以上の用件もないだろうとほぼ一方的にボイスコールを切られてしまった。

その判断は間違いじゃないのは確かだが、なんとというかこういうボイスコールを切るタイミングをいまいち掴めないテルヨシとしては、この清々しいまでの切り方は心にくるものがあったて悲しいやら虚しいやら。

せめて名残惜しそうにしてほしいところだったが、切られたものに文句を言うのもかけ直すのも選択として嫌われそうなのでやめておき、グローバル接続も切ってからまた校内へ戻り、帰り支度を済ませたマリアと謡に少しだけ待ってもらって帰宅の途につくのだった。

いつもよりも早い夕食の後、珍しくマリアから話があるということでお風呂の前にリビングのソファで向かい合ったテルヨシは、最近なかで悩んでいた節だけはあったマリアがようやくよくお悩み相談してくれることに感無量。

これがお金が絡むことなら勿論だし、そうでなくてもマリアから切り出してくる話は真剣に聞いてあげようと嬉しい気持ちは封印して聞き耳を立てる。

「今週の火曜日にお店でサアヤさん達とお話したのは知ってるよね

？」

「あー、うん。五芒星の話をした日だから覚えてるよ。そういやあの時はマリアも集まりの中で話があったんだよね。その辺を聞いてなかったな」

「うん。サアヤさんからなるべく早く決めた方がいいってお話されて、でもなかなか決められなくて今日まで悩んじゃってたこと」

「オレにも関係ある？」

「ないわけじゃない。でもテルは自分で決めていいって言うてくれたことだから」

やけに勿体ぶるなと思いつつも、ブレイン・バーストの話であることはわかったので頭は完全にそっちに切り替えて、自分が何を言ったかも予測しておく。

基本的にはマリアの自由にさせてあげてるのでこれだといった確信のあることは閃かなかったが、決めた方がいいとサアヤに言われたからにはなんらかの選択肢があったようだ。

「レギオンのこと。ずっと保留にしてきたから、どうするか決めた」

「その話かあ。悩んでた選択肢は？」

「プロミカネガビュか、メテオライトか。どのレギオンも仲良しの人が出て困ってたけど、今日ユニコさんからメールが来てて、ユニコさんも『腹を括った』って」

「……話が見えない。サアヤとはどんな話をしたの？」

「えっと、サアヤさんからは『これからプロミもネガビュもメテオライトも大きな動きをすることになるだろうから、どこにも入らずに無所属でいると取り残されちゃうかも』って言われて、私もユニコさんとかうーちゃんとかと繋がりはあるっても、やっぱりゲスト扱いで作戦の深いところには関わらせてもらえなかったりはわかってた。だからフラフラしてるのはダメだって思ってた」

——また10歳に難しいことを言ったもんだ。

そう思いもするテルヨシではあったが、このところの加速世界の問題はレギオンとして団結して取り組まなきゃならないと感じてはいたし、中には重要な作戦だっで行われることもある。

そんな時にゲスト参加ではマリアの言う通りのことが起きてても不思議ではないし、いないとは思いますがマリアを何かしらのスパイと思う人も出てこない保証はない。

そうならないためにもマリアはこの数日で悩んで所属するレギオンを決めたようだが、何故かその決定にはユニコも関与しているっぽくて腑に落ちない。

「話はわかるけど、何でニコたんが絡んでくるの?」

「ユニコさん、今月頃から考えてたことがあったみたいで、その決定には私も関係あるから報告してくれたの」

「具体的には?」

マリアが決めることにユニコが絡んでいるのはちよつとおかしいので当然そこを尋ねてみると、隠す気もないマリアは割と素直にメールの通りに話をしてくれたが、一応は極秘情報だから黙っておいてと釘を刺してくる。

が、また思い切ったことを考えたもんだと感心しつつも、驚きがそれを上回り目を丸くしてしまう。

しかしそうとわかれば話にも筋が通り、それを踏まえてのマリアの決定がどうなったかによくやく辿り着き、覚悟を決めた目をしたマリアはハッキリとした言葉でその答えを告げてくれたのだった。

「明日はうーちゃんと一緒に来るの?」

「えつとね。校門の前でうーちゃんとフーコさんとサアヤさんとユリさんと、もう1人かな? と合流してから行く」

話を終えてお風呂にも入って明日に備えるだけになったところで、明日はどうするのかをマリアに尋ねてみると、ちゃんと約束はしてきたように安心。

もう1人というのがよくわからなかったが、もしかしたら《アツシユ・ローラー》辺りが来るのかもしれないとフーコ繋がりで勘繰りつつも楽しみを取っておいて自室に入るマリアを見送ってから自分も自室へと入って、緊張とかではないが明日の講演の最終チェックをしてから眠りに就いていった。

そして迎えた6月30日の日曜日。

遠足前のウキウキに似たもので寝るのに苦戦したと話したマリアは、テルヨシが登校する10分前に起きてきて、のんびりと支度してから行くと先に出るテルヨシを手を振って見送ってくれる。

開場は午前9時半からなのでいつもの時間なら早いくらいではあるが、お客の側との気楽さの差が顕著に出たなあと思わざるを得ない。

でもまあ文化祭が始まってしまえば、サアヤと一緒にもてはやされて大変な思いをする——テルヨシの関係者は色々と話題性があるため——のは間違いないので、その気楽さがいつまで保てるか見物ではある。

マリア達は開場後にまずテルヨシのところに顔を出すと書いていたので、登校後すぐにクラス展示のチェックに入って、朝早くに来てケーキ作りをしていた女子チームに問題がないのを確認。

すでに文化祭の雰囲気呑まれた感じの女子チームはテルヨシのことを『店長』とか呼んで遊んでいたものの、その余裕があれば大丈夫だろうと席を外して、約束していた新聞部に開場後すぐにサアヤが来ることを伝えて他の客に迷惑になつたりしないように注意もしておく。

「うっし。それじゃあ中学最後の文化祭。受験とか部活の大会とかそういうのは今は忘れて楽しんでいきましょう」

「言わんでいいことを言って思い出させるなバカテルが」

「ホントに言葉のチョイスにセンスがありませんわ」

「だったら店長とか担ぎ上げずに副会長と書記がやればよかですばい」

「エセ方言はやめろ」

「アメリカ育ちが何を言ってますの」

そして時刻も9時半を回り、準備を完了させた教室でクラスのみんなが集まって意気込み、代表としてテルヨシが何か言えと前に出されて言ってみれば、クラス展示はテルヨシ達任せで動いていた黒雪姫と恵の辛辣なツッコミが炸裂して締まらない。

それでもいつも通りなテルヨシ達の安定のやり取りに笑ったクラ

スマイト達は、ローカルネット経由で表示される来場者数がカウントを始めたのを皮切りに自分の役目へ動いていき、テルヨシも最後の文化祭の開催に心を踊らせながら、まずは最初のイベントに備えてソワソワしていった。

「いらっしやーい」

教室の位置的に開場からまっすぐに来る客でもない一番乗りは難しいクラス展示なので、約束でもしていないとまず間違ひなく最初に来るのはマリア達。

その予想通りクラス展示の最初の客は和気あいあいと話しながらやって来たマリア達で、その来店にバイトで習慣化したスマイルで応えたテルヨシ。

そんなテルヨシを見慣れてるマリアは平然と先頭を切って教室内に入り、それに続く形で謡、フーコ、ユリが仲良さそうに入ってくる。そしてその後ろからもう1人。テルヨシも知る人物が姿を現してビツクリ。

タクムと同じように現在では珍しい赤縁の眼鏡をかけた茶色のシヨートボブでジーンズにボーダー柄のカットソーのボーイツシユなイメージのある女の子。

「あれ？ アキちゃんだ」

「おはようなの、テル君」

——氷見^{ヒミ}あきら。

テルヨシはわずか3度しか顔を合わせたことはないが、店の店長を任されている氷見^{カオル}薫さんの一人娘で、薫さんはパドの父親の妹ということで、パドとは従姉妹同士ということになる、テルヨシより1つ年下の女の子。

ちよつとした用事で店に顔を出した時に自己紹介だけはお互いにしていたので話すこと自体は初めてではないが、いつもバイト中だったこともあつてまともに会話をしたことは未だにないため、あきらがどんな女の子かはまだよくわかってはいない。

「……ん？ 待って。この集まりでアキちゃんが馴染んでるってことは、アキちゃんも？」

「挨拶は昨日に済ませたはずなの」

「ああ……………そういうことね」

そのあきらがこの集団に普通に加わっているというのはさすがに偶然とかそんなもんじゃないのは一瞬でわかり、誰だろうと探りを入れてしまったが、快くヒントをくれたあきららによつてデュエルアバターは判明。

まさかアクア・カレントの正体があきらだったとは予想もしてなかっただけに、テルヨシも少し動揺してしまつたが、それよりも先にニコニコなフーコとユリがテルヨシを見て助言。

「あらあら、テル君ともあろう人がわたし達を見て何もありませんか？」

「せっかく普段はあまりしないお化粧なんかもしてきたのに、テル君は酷いなあ」

「うわーおっ。これはとんだ失礼を。お2人とも、今日はいつもよりも美しさに磨きがかかつていて、直視したらその美しさに魅入られてしまいそうです」

【UI】 私達もいるのです」

「鼻貞だー」

「うーちゃんもマリアも今日も超絶可愛いよー！」

別にテルヨシに良く見られたいとかそんな理由ではないだろうが、わざわざそんなことを言うのは男としてやるべきことをしてくれといった意味合いで、それはあきららのやり取りよりも優先される案件であつたと言いたいわけだ。

優先度については判断しがたいが、言われてしまつたらやらなきや怒られるので、いつもの調子で改めてフーコ達を見て褒めちぎる。

フーコは制服以外の格好は初めて見るが、水色のワンピースは清楚な感じがとてもグッドで、適度な露出も素敵。

ユリは対極に露出は抑えて、薄めの生地のパインクのロングスカートと白のシャツにブラウンのジャケットを羽織っていた。

前に聞いたが大きな胸が密かなコンプレックスで、人の多いところなどでは男の視線を気にして上半身のガードが固くなる傾向にある

らしいが、その中でも今日はオシヤレしてきた感は十分。

マリアと謡は校則にも一応はあるからか、今日も松乃木学園の制服姿で真新しさはなかったが、可愛さは衰え知らずなので全く問題ない。

「つと、挨拶が済んだところで……1名ほど姿が見えないのだが」

そうしたテルヨシの対応に概ね満足したマリア達ではあったが、ここまでのやり取りで絡んできていない人物が約1名いることに気づき、マリア達はその事にクスクスと笑う始末。

「はーいっ！ テル君の彼女さんはー！ えつと、どなたですか？」

その輪の中に躊躇なく飛び込んできたのは、約束して待機していた新聞部の部長。

さつそく噂のテルヨシの彼女が誰かを探ろうとするも、フーコ、ユリ、あきらを見回してテルヨシを見た部長は「何でこんなに美人ばかり」みたいな痛い視線も交えて質問してくる。

そんな部長を他所に教室から出ていったマリアを目で追いつつ、時間稼ぎで部長の質問には質問で返しておく。

「誰だったら驚く？」

「いや、誰でも驚くけど、どういう繋がりからこんな美女がテル君に引つかかるのかが気になる」

「言い方……酷くない？」

サラツと酷いことを言う部長の悪意なき疑問が突き刺さりダメーヂを負ったものの、その時間稼ぎの間に教室の外から「ちよつと、待つてマリア」とかいう声と共にマリアに背中を押されて入ってきた人物が。

さすがに教室の中に入ってしまえばもう後戻りはできないので、出入り口をマリアがガードしてることもあるとあって観念した人物、サアヤは、関節が動かなくなつたかのようなぎこちない動きでテルヨシと向かい合うと、途端に顔を赤くして固まってしまった。

そのおかげで観察がはかどったテルヨシは、張り切ってきたであろう今日のサアヤのチェックに入る。

彼女らしくと言うからってつきりイマドキの女の子らしくまとめ

くるかと思っただが、化粧つ気はほとんどなく、七分丈の紺のレギンスにノースリーブの黒のシャツと、かなり薄い白の長袖シャツを前を開けて重ね着したスタイル。

女の子らしさで言えばフーコとユリには劣り、あきらよりも凄く頑張ったといった辺りで、変に頑張り過ぎずにサアヤらしさが残っててちよつと安心。

それと同時にいつもよりも仕草が女の子らしくてドキツとするが、自分が声をかけないと話し出すことさえできそうにないサアヤが緊張でどうにかなる前にその肩を寄せて並び、いきなり抱き寄せられたサアヤはもう爆発寸前。

「部長、この子が世界一可愛い彼女の都田沙絢だよん」

「あ、えつと、えつと、テルのか、か、彼女ですつ！」

そうしてようやく彼女を紹介することができ、テルヨシに続いて持ち直したサアヤも自ら公言して頭から湯気が立ち上ぼり、そんなサアヤを見て、ほほうと悪い笑みを浮かべた部長は、挨拶がてらに記念撮影を申し出る。

テルヨシは全然オツケーだったが、緊張しまくりのサアヤは表情が固くてとてもじゃないがツーショットを撮られていい顔ではなかった。

しかし近くで見ていたマリア達が気を利かせて「テルの方が変な顔してるから大丈夫だよ」とかそんなことを言うから、それでテルヨシも初めて自分が壮絶に引くレベルで緩みきった顔をしていることに気づいてサアヤと顔を見合ってしまった、互いの顔で笑い合ったところを部長のニューロリンカーの視界スクリーンショットが煌めいたのだった。

——そんな楽しい文化祭の始まり。のはずだった。

始まった梅郷中学校の文化祭。

開場早々にクラス展示に顔を出したサアヤをクラスメイトの女子を中心に紹介できたのは良かったが、いつまでもワイワイやってると他の客が入りにくいだろうととりあえず席に落ち着かせてテルヨシお墨付きのケーキを出していく。

バイト先の常連であるマリアやユリ。母親がパティシエールのあきらは「店の味の方が美味しい」と辛口になるもの、生徒の出し物としては及第点以上をくれて、フーコと謡は普通に美味しいと評価し食べてくれる。

しかしサアヤはと言うと、まだ客の入り甘いのを良いことに新聞部部长を筆頭としてクラスの女子に詰め寄られて、テルヨシとの馴れ初めなどを矢継ぎ早に尋ねられケーキどころではなかった。

「それじゃあわたし達は他の出し物を見て回りますから、後でまた合流しましょう」

女6人で割と大所帯だったこともあって、客の入りも考えれば長々と居座るのもあれかと思ったのか、ケーキを食べ終えて少しだけ待っていたフーコ達は、まだまだ終わりそうにないサアヤと、ついでにテルヨシと同居してる噂の少女だと判明して巻き込まれたマリアを置いて笑顔で手を振りながら先に教室を出ていってしまう。

こういうところはさすがなフーコに苦笑いを浮かべつつ、助け船を求めらるサアヤとマリアの困り果てたような視線をかるーく受け流して他の客の対応をする。

が、それが地雷だったか、困り顔から一転して般若のような形相をチラツと見せた2人にビクツとなってしまう、物凄くお花が咲き乱れるガールズトークの中へと突撃。

「あのう、そろそろ皆さんお仕事に戻られてもよろしいのでは？」

「残念ねテル君。これが今の私の仕事よ！」

「部長には聞いとらん。話ならここ以外でも出来るでしょ。サアヤも

マリアもまだ来たばかりで他を見て回りたいたろうし、解放してあげて。話なら後日オレがするから」

ちゃんと話が区切れそうなタイミングを見計らって割り込んだので「テル君は邪魔ー」とかならないようにしつかりと解放してあげる理由も付け加えて説得すれば、話のわかる女子達は「それもそうだよねえ」と同意が取れ、部長も少しの間はついて回る許可をもらってようやく席を立つてくれた。

なんだかんだで仲良くはなったらしい女子達に手を振られて教室を出たサアヤとマリアは、すぐ外まで見送りに出たテルヨシに小声で話しかけて今後の予定を合わせにくる。

「マリアがいるからロータスとかはすぐわかんと思うけど、ネガビユが揃いも揃って文化祭にいるって何なの？ マッチングリスト見たらなんかユニコちゃんまでいるし」

「お祭りだし大目に見てよ」

「まあいいんだけど。それでアンタはいつ頃に時間が取れるの？」

「午前中は割と余裕ない感じ。クラス展示から講演まで30分とないし」

「……講演？」

それで午前中は一緒にいられそうにないとわかんると露骨に残念な顔をしたサアヤだが、テルヨシの言う講演が何なのかわからずに首をかしげる。

そこでそういえばと講演のことをサアヤに話してなかったのを思い出し、すぐにARで表示されてる文化祭のスケジュール表を開いてもらい、11時半に行われる講演についてを教える。

「……えっ？ なにアンタ……ひよつとしてなんか凄い生徒なの？」

「テルはテルだよ。誉めると調子に乗るからダメ」

「マリアが厳しい……でもそういうわけで自由時間は講演が終わってからになるかな」

「そうなんだ。それなら仕方ないから、午前中はマリア達とブラブラして……」

そんなわけで昼食くらいからなら一緒にいられると話すと、納得せ

ざるを得なくてマリアと部長で移動を開始しようとする。

が、その話を聞いていたクラスの女子達が顔だけ廊下に出して割り込んできて、残念そうなサアヤが可哀想とでも思ったのか「店長はフリーで良いよお」と粋なことを言ってくれる。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、なーんか見返りを求めてないですかね?」

「バレてたか。じゃあ今度テル君のバイト先に行くから、ケーキを割引にして?」

「それはオレが独断で決められることじゃないんですが……」

軽い感じで提案されたことにサアヤは嬉しそうにする一方、テルヨシはクラスの女子が何の見返りもなしに自ら負担を買って出ようなんて優しさ100%な行動をするとは思えず、後日に無茶な要求をされるならと言及する。

その見返りがまたテルヨシ個人でどうこうなることでもないから、サアヤには悪いが断ろうとした。

「K。割り引いた分はテルが負担すれば問題ない」

「それなら売上に影響はねえしな」

しかしその前に後ろから音もなく近づいたパドが話に勝手に了承してしまい、一緒にいたユニコまで後押ししてきて困る。

その突然の登場には女子達が誰だと一瞬だったが、バイト先に何度か来てくれてはいるのですぐにテルヨシの同僚だとわかり納得しかける。

それでもパドに決定権があるのは不思議だったから揃って「何で?」みたいな顔をしたので、仕方なくパドが店のオーナーであることを教えて、オーナーからの許しが出てしまえば話にも洩々で了承するしかなかったのだった。

「マリアよ、来月のお小遣いは割引です」

「テルがカツコ悪い」

「自分の取り分だけ減らしや良いだけだろ。マリアを巻き込むよなあ」

話が丸く収まって自由の身になったはいいものの、代償付きでは手

放しで喜べず冗談も言いたくなかったが、これから教室に入ろうとしていたユニコにツッコまれて撃沈。

ユニコとパドの他にはハルユキともう一人、ハルユキの袖を摘んで放さない、見慣れない気弱そうな灰色のシヨートカットの女の子もいたが、バーストリンカーかなと勘繰りつつもとりあえず挨拶だけして名前を聞き出す——日下部^{クサカベリン}綸というらしい——ことはできた。

そのパド達のグループとはとりあえずで別行動にして、展示物を散策しながら部長の独占インタビューが終わっていなくなってくれた頃に、ようやく緊張も解けたサアヤが「ロータスに会いたい」とか言うもんだから、どこにいるかもわからない黒雪姫にメールを送つてみると、数秒で返信が来て「見つけたから動くな」と指示があり、校舎前の玄関外で待つこと2分。

「シフトをサボって彼女とデートとは良いご身分だな、テル」
「ちゃんと交渉して勝ち取った自由ですよーだ」

校舎の中から姿を現した黒雪姫は、テルヨシのクラス展示のシフトも頭に入っていたのか鋭いジヤブを飛ばして調子の良さを示してくる。

それにも慣れっこなので軽いなしてやり、マリアとも挨拶を終えた黒雪姫は、ようやく訪れたサアヤとの邂逅で何故か腰に手を当てて偉そうに見る。

「お前がそうなのか。こちらでもずいぶん気の強そうな顔をしているな」

「ふーん。アンタがそうなのね。こつちでも黒いとかどんだけリアルに色が侵食してるのかしら」

「悪いが私の黒リスペクトは物心ついた頃からだ」

「だからあつちでも黒いわけね。納得。でもまあ……わかってたけどお互いに少し寂しいもんね」

「……やめろ。周りがおかしいだけで、私達は晩成な……というよりお前はまだ良い方ではないかー」

黒の王として威厳的なものを出したかったのだろうが、そんなものに一切動じないサアヤは、負けず劣らずの強気で黒雪姫と視線を合わ

せて向き合い、なんか喧嘩腰の挨拶になる。

しかしすぐに互いが互いの胸部装甲に視線を落として同時に落ち込んでしまうという謎行動をし、大きさではサアヤの方がひと回りは大きいのですかさず黒雪姫のツツコミがズビシッ！ と指差しと一緒に入る。

そんな話をマリアの前でしてほしくなかったが、マリアもマリアで「私が2人の歳にはどのくらいになってるかな？」とか自分の胸を軽く触りながら尋ねてくるから、未来予知などできようはずのないテルヨシは無責任なことも言えず「あとでユリさんとフーコさんに大きくなる秘訣を聞いてみな」と他人任せにしてあげたのだった。

そうしてサアヤと黒雪姫のリアルでの対面は胸の話で落ち込んで終わり、まだやることでもあるのか割とすぐに移動しようとした黒雪姫は、敵も味方もなくバーストリンカーとしてでもなく、文化祭に遊びに来たテルヨシの彼女として扱って「来たからには楽しんでいけ」と言ってから校舎に引っ込んでいってしまう。

生徒会でも出し物をするとか言っていたから、その辺で手抜きはしない黒雪姫ならギリギリまで準備とかしてるのかなと考えつつ、サアヤの目的が果たせたから次はマリアが行きたいところへと行くことになり、ARマップを見ながらチュリ所属する陸上部のクレープが食べたいと言うのでそちらに向かう。

「あつ、テル先輩とマリアちゃん！ いらっしやーい」

「ウサギ耳がキュートね」

「倉嶋さんは今日も元気です」

陸上部のクレープ屋は食堂の一角にあり、出入り口に近い校舎の外とは集客率で差が出てしまうが、そこはくじ引きの結果で文句は言えない。

それでも美味しければ人気は出るし、チュリ達が頭につけてるウサギ耳などの仮装的な見た目で盛り上げればノリで売れたりもするのが商売。

それがわかってる陸上部のクレープ屋は同業——クラス展示の方だけ——としてなかなか強敵だ。

どうせ今さらオプシオンなどつける余裕もないクラス展示は味で勝負してもらうとして、テルヨシとマリアに元気よく挨拶したチユリは、その横のサアヤを見て誰だろうと首をかしげる。

「ねえテル。もしかしてこの子も？」

「そうよ。魔女の子」

「ああ、魔女か。はじめまして、私は都田沙絢。テルの彼女で、扇子のお姉さんよ」

「あー！ 噂のテル先輩の彼女ですか！ って、扇子の……もしかして、ガスト姉さん？」

2人と親しげな感じからサアヤもチユリがバーストリンカーである可能性に気づき、直接的な言葉は避けて教えてあげれば、サアヤもチユリが《ライム・ベル》であることがわかり、自己紹介も兼ねつつサアヤも自分が誰かを教える。

すると噂は聞いていたチユリが割と大きめの声で驚き周囲の視線を集めるが、すぐにペコペコ頭を下げてから言葉を理解しにかかって、サアヤが《エピナール・ガスト》であることに思い至り小声で確認。

それに笑顔で応えたサアヤは、他の客もいるからと話もそれくらいでクレープを注文し、話したいことはあるのだろうチユリだったが、ここでの雑談は渋々やめて注文されたクレープを作って3人を見送る。

「あつ、タツくんの出し物が11時15分からあるので、よければ一緒に見ませんか？」

「すつごいギリギリだけど、見る！」

「終わったら体育館にダツシユしなきゃだよ？」

「剣道場と体育館は隣接してるからダツシユできないけど問題ない。問題なのは体育館の出し物の進行をしてる恵にギリギリで入って何を言われるかわからんことだ……」

「土下座すればいいよ」

「オレの土下座が安くなってる気が……」

その別れ際にタクムの所属する剣道部の出し物を一緒に見ないか

と提案してきたチユリに、断る理由もなかったテルヨシはサアヤとマリアが「いいんじゃない」といった顔をしたのを見てから答え、時間が結構シビアなことを危惧するマリアには大丈夫だと言う。

が、やはり恵には怒られるだろうなと考えてげんなりし、マリアの土下座の提案にも「ここ最近で何回かしてしまってる土下座が安くなってそれで効果が薄い気がしてしまう。」

それでも恵なら情に訴えれば大丈夫だろうと思うことにして、クレープを食べながら次の行き先を決めていると、恐れ多そうなハルユキからメールが届き、合流しようという提案が。

どうせユニコ辺りが言い出したことだろうとは思いつつ、タクムの出し物も割とすぐだしと合流には賛成。

メールを返して校舎の玄関前で再び待っていると、校舎の中からまあゾロゾロと女子をたくさん侍らせたハルユキが先頭でやって来て、その一団には周りもちよつと仰天気味。

揃いも揃って美少女、美女の集団を引き連れるあの男はハーレム王なのではなからうかと冗談混じりに思いつつ、なんかあの集団に加わるといよいよ注目度が限界突破しそうだかと頭をよぎると、サアヤとマリアもなんか以心伝心したのか近寄ってきた一団から距離を取るように離れて無関係を装おうとしてみた。

そうすれば慌てん坊なハルユキが焦って追いかけてきて結局は合流となってしまう、屋台から抜けてきてウサギ耳をつけたままのチユリまで合流してきて、総勢12人となった集団は、やっぱり目立って仕方なかった。

「これヤバイ。やつぱ散開しない？」

「あわわわわ……ボクが合流しようなんて言ったばかりに凄いことに……」

「あら、両手に花どころじゃない状況はテル君も鴉さんもどんとこいではなくて?」

「何にでも限度ってもんがあるでしょ。こんなにバーストリンカーでリアルを固めて戦争でも始めるつもりなの? バカなの?」

一応は黒雪姫とタクムを除き梅郷中学校にいるバーストリンカー

全員が集まったことになるこの集団だが、いくらお祭りだからといって12人はやはり多い。

マッチングリストを見た限りでは綸がああ《アツシユ・ローラー》ということになるのだが、リアルとアバターの性別が逆転する例はよくわからない事情がありそうなのでとりあえずスルーして、こんな目立つ集団での行動はさすがのテルヨシでも避けたいと思わざるを得なく、ハルユキも安易に合流したことを後悔している様子。

「まあまあフーコ姉さんもサアヤ姉さんも喧嘩しないで。とりあえずもうすぐタツくん達の演舞も始まりますし、テル先輩の講演もありますから、それが終わったら考えましようよ」

この状況を楽しめるフーコの余裕はさすがを通り越して呆れてしまい、サアヤも女だらけな空間にテルヨシを放り込みたくない——喜ぶからだ——のか、分散に賛成のようだ。

しかしタクムの演舞ももうすぐ始まるし、その後もテルヨシの講演があるのでそれを考えるのは後回しにしようとチユリが提案すれば、満場一致で可決されとりあえずこれから始まる演舞を見るために12人が同じ目的地に向けて進行……いや、侵攻していった。

剣道場に着いてみれば、すでに中はほぼ満席状態で立ち見を余儀なくされてしまい、低身長のマリア、謡、ユニコはフーコ達のあざといお願いで最前席を男子から譲ってもらい、小学生の特権だなあとはいつつ残りのメンバーは後ろの方で立ち見。

タクムも女子人気が高いので客には女子生徒が結構いて、まだ始まってないのにヒソヒソと声かけの打ち合わせをしているのが聞こえてきて苦笑。

そのタクムが想いを寄せている相手のチユリはそれをどう思うんだろうとチラツと見てみるが、どうやら心配はそこではなく無事に演舞が成功で終われるかのハラハラが勝ってしまったようだった。

そして11時15分になって剣道場の明かりが落ち、ステージにだけ照明が照らされると、タクムをセンターで先頭にした水色の袴かみしもまで着て白ハチマキを巻いた武士スタイルの男子剣道部員が腕組みして立っ立って、鳴り始めた音楽に合わせて腰に差した模造刀を抜き放つ

ての演舞が始まった。

「あのセンターの子が《シアン・パイル》？」

「そうだよ。よくわかったね」

「周りを見ればなんとなくね。でも意外。あっちがてつきり鴉かと思っただけ、あのぼっちやり君がそうなんて」

「見た目からはアバターの判断は難しいよねえ」

その剣道部員の中には、春先にハルユキ達を苦しめた能美征二の天真爛漫な笑顔で踊る姿もあってちよつと違和感は拭いきれないが、彼はもう略奪者《ダスク・テイカー》としての記憶を失ったただの後輩。タクムとも今は良好な関係を築いていると聞く。

そんなことは知らないサアヤは、隣からテルヨシにだけ聞こえる音量で囁きかけて、タクムがシアン・パイルであることを周囲の様子から察して見抜き、先ほどの移動の際にハルユキが《シルバー・クロウ》であることを知らされて驚いたことを正直に話す。

言われなきやそもそもハルユキがバーストリンカーであることもちよつと疑いそうなりアルにはテルヨシもちよつと同意だが、リアルな姿がどうあれデュエルアバターがその影響を受けるケースはほとんどないし、むしろタクムのような育ちも良さそうな好青年がバーストリンカーになれてしまう方が異質にさえ思える。

なんにしても心の傷が千差万別であることを再確認したテルヨシは、クライマックスで手拍子も混ざってきた剣道場の雰囲気にも吞まれて、サアヤと一緒に手拍子に参加して場を盛り上げ、音楽と手拍子の終了と共にカツコ良くポーズを決めて締めたタクム達は、盛大な拍手に見送られてステージを降りて引っ込んでいく。

5分程度の演舞でも相当なクオリティーと運動量だったなあと感じながら、タクムを迎えに剣道場の裏の方に回っていったハルユキ達を見送り、今度は自分の番だなどちよつと気合いを入れて伸びをする。

「あと10分ないけど、間に合う？」

「ん、すぐそこだしね。余裕」

「その余裕は講演にもかかっているのよね？」

「もちのろん。サアヤとマリアに恥はかかせられんし、まあ楽しんでって」

そのテルヨシのそばにいたサアヤとマリアが何やら心配するようなことを言ってくるから、信用のない自分の普段の頼りなさを感じつつも、今日くらいはカツコ良く見せてやりたいと親指を立ててみせる。

それには直前になってもいつも通りなテルヨシに安心したのやら呆れたのやらな反応を見せたサアヤとマリアは、お互いに顔を見合っ
て笑ってしまう。

「じゃあ楽しませてもらうわ。アンタのポカにも期待しながらね」

「一回だけ盛大に失敗した方が緊張とれるかも」

「失敗しないってばあ」

それでもやっぱり言うことは言うサアヤとマリアに失敗を期待されても思いながら、いよいよ時間も迫ってきたので話はそれで終わり、今頃ハラハラしてそうな進行役の恵を安心させるために移動を開始していった。

「はい、ありがとうございます。さて、次は文化祭にお越しの皆様には強制的に宣伝されたであろう特別講演です」

体育館に入って脇から裏へ回り、テルヨシの到着が遅れるとでも思っていたのか、やたらゆっくりな喋りで進行する恵が壇上からステージ脇へとチラ見して、そこにテルヨシの姿があることを確認すると、安堵したように小さく息を吐いてから、テルヨシの名前を述べながら引っ込み、すれ違い様に「あとでお説教ですわね」とお叱りを受けてしまい苦笑。

時間通りには到着したのだから怒らんでもと内心でツツコミつつステージ中央の壇上に立ったテルヨシは、ほぼほぼ満員の体育館と生徒から上がる「テルせんぱーいっ」という黄色い声に笑顔で応えつつ、リハーサル通りにスクリーンの映像も出ていることを確認。

次に体育館をザツと見回してサアヤ達の姿を確認すると、黒雪姫が特等席でも取ってくれたのか、みんなして最前列に加わって熱い視線を送ってくる。

最後にニューロリンカーのAR表示に妙なものも見つけて触れてみたら、なんか聞かされてないこの講演のライブ映像が中継されていて、カメラの位置からして客に混じって最前列中央に陣取っていた恵のニューロリンカーのカメラで撮られていることがわかる。

「おい進行さんや。ライブ中継は打ち合わせになかったんですが」

講演を始める前にマイクまで使って出てきた第一声がこれである。

これにはほぼ名指しされた恵が声が入るとあれだからとジェスチャーでとぼける仕草をして誤魔化してきたが、こんな仕返しの方法があるうとは予想すらしなかったテルヨシは、ざわつく体育館の雰囲気を見無視して短く息を吐くと、

「まあいいや。んじや始めまーす」

めちやくちや軽い調子で講演の開演を宣言。

それにはテルヨシを知る一同からの盛大な「軽ッ！」という容赦ないツッコミが入って幕を開けてしまったのだった。

「目は口ほどにものを言う」

文化祭におけるテルヨシの講演はまさかのライブ配信までであるというサプライズもあつたが、体育館に入れずにいた人も観れるならいかと軽く流して、時間も限られているとサクッと始める。

スケジュールなどには堅苦しく『心理学講演』とか書かれてしまったのが唯一の不満点——しかしそうとしか書きようがないし仕方ない——だったため、始まりは明るくいこうと決めていたから、結果としてライブ配信のサプライズは良い機会をもらえた。

「本日お越しの生徒のお父様や彼氏などなど、男性なら1度くらいは女性の謎の鋭さにビクリとした経験はありませんか？ 逆に女性の方々は旦那様や彼氏の怪しい雰囲気をなんとなくでもわかったりしたりしませんか？」

そんな感じで緩い雰囲気も出しつつ始まった講演の冒頭で、まずは会場の興味を惹き付けるためそうした切り出しで周囲を観察してみると、言葉こそ返ってこないものの、心当たりがある人は親を中心に多そうな印象。

それも人生経験あればこそなので当たり前の結果だが、会場でザワザワしてくる前に反応を見るのをやめて話を再開。

「それもそのはず。女性は元来、男性よりも細かく見る力に長けているからです。例えばこれ。何気ない生徒の仲良さそうなワンショットでも、男性と女性では視覚から得ている情報量に大きく差が出てきます」

いきなり難しい言葉を使って会場との距離を開くのは興味を失うことにも繋がるため、日常での体験を踏まえた上でそれに理由があることを教えてグッと引き寄せる。

それを説明するためにまずスクリーンに映したのは、あらかじめ用意していた修学旅行での写真の1枚。

そこには仲良さそうな黒雪姫と恵のお土産選びをする沖縄でのひと幕が写されていたが、ちゃんと使用許可も出てるし2人から文句は

飛んでこない。

「この写真、大多数の男性は写真全体、或いはメインの生徒2人をぼんやりと見てしまいますが、女性の場合はこの生徒が身に付けている服や装飾、周囲の気になるものなどといった細かい部分を見る傾向が強いのです。あ、うんうん頷きをいただきました。ありがとうございます」

そしてその写真を見ながらにテルヨシの説明を聞いた会場では、両親などは互いに「そうなのか」と顔を見合って確認していたり、生徒の中でも確認の声が小さく出てくる。

これで講演への興味はだいぶ上がったかなと掴みに成功したと考えたテルヨシは、説明を踏まえた上で今回の冒頭に戻る。

「では実際に対面している時に全体を見てしまう男性とパーツを見る女性で、どう違ってくるか。最初の諺にある通り、目というのは時に言葉以上に何かを相手に伝えてしまうことがあります。今回はその目についての心理学を皆様にかいつまんでお話ししますのでよろしく」

まだ講演が始まったとも言えないタイミングながら、割と舞台慣れして饒舌なテルヨシが意外だったのか、前列にいたサアヤがちよつとビツクリした表情で呆然としていた。

そのサアヤに目配せのウイंकをしてちよつと気持ちを和らげながら、テンションも上げて口を開く。

「冒頭での例え話ですが、おそらく大多数の女性はその人の目を見て意識的にしろ無意識的にしろ何かしらの判断材料にしていることと思います。では実際に心理学と目がどう関連しているかを話してみましよう。まずは隣同士でもいいのですが、誰かの目を見てみてください。この講演が始まってまだ少しですが、瞳孔が開いている方はいませんか？ 通常、瞳孔というのは明るさによって大きさが変わり、明るいとこころでは小さくなり、暗いとこころでは大きくなります。これは瞳孔が光を集める役割をしているためですが、しかしそれ以外でも瞳孔が動くことが心理学でも証明されていて、暗いところ以外で瞳孔が開いている場合は目の前の何かしらのものに興味を示している。つまり今、瞳孔が開いている方は私の話に少なからず興味を抱いてく

れているか、或いは別の何かに興味津々なのです」

スクリーンの関係上、ステージの近くだけ照明は切っているが、全体的には全然明るいので、テルヨシの言う瞳孔の話はすぐにみんなが確認でき、ザワザワする会場の声の中には瞳孔の開いていない人もいたようだが、それも仕方ないこと。

「皆さんに覚えてもらいたいのは、彼氏彼女、気になる人と話をしてる時、この瞳孔がどうなっているかを観察することで自分への興味の有無を確認することができると。瞳孔に変化がないようならバツサリと話題を切って別の話をし、興味のある話にシフトさせるといいでしょう。暗いところでやっても意味ないですからねー」

万人に興味を持ってもらう話というのはこの世に存在しないと断言できるし、そういう人を少なくするための話術はそこそこあるつもりだ。

逐一で客の反応をうかがいながらどんな話し方をすべきかを考えて口を開くテルヨシは珍しく賢く見えたりするのか、サアヤ達の見る目が感心を含む色を帯びているのがわかり、緩い雰囲気は保ったまま講演は次の段階へと進む。

「さて、瞳孔と心理学についての結びつきはご理解できたと思います。目にはまだ心理学で分析できることがあります。それは目の動き。大抵の人は無意識で動かすので自覚もないかと思いますが、物事を考える時にこの目の動きはある種の法則を持っているのです」

瞳孔に関しては最も理解しやすいだろう事柄を挙げて、客の心理学に対する認識のハードルを下げる役目を担っていた。

ここで「心理学も結構わかるものだな」と思わせることで吸収率を上げておき、その上でちよつと話を難しくすると話についてこられる人も増える。

そういった算段もありつつで始めた目の動きについては言葉だけではなかなか堅苦しいことが出てくるので、スクリーンをテルヨシのニューロリンカーのカメラとのリンクに切り替えて、壇上に乗る気さうな女子生徒の1人を上げて目の前に立ってスクリーンに顔を映させてもらう。

カメラを動かせない都合でテルヨシの首が不自然に動かせない挙動はギャグ要素があったが、ひと笑いで収まってから話を進める。

「ではこれから私がいくつか質問をするので、素直に答えてください。即答でなくても問題ないので、必ず返答をくださいね」

テルヨシの確認事項にコクコクと頷いた女子生徒はこれから実験台にされるといふのに何やら楽しそうで不思議だが、女性は好奇心が強い傾向にあるので、自分がどう分析されるのか気になるのだろうか。

どうあれこういったことに協力的な人間は必要だったから助かると思いつつ、客には女子生徒の目の動きを見るように言ってから質問を始めた。

「昨日の夕飯は何を食べましたか？」

「えーっとお……クリームシチューです」

「はい、おわかりいただけましたか？」

1つ1つ解説しなければならぬので質問に対しての反応で都度、質問が止まってしまうが、そういう主旨だから咎めるような声もなく、今の質問に対して女子生徒がその視線を左上へと持っていてから答えたことを挙げる。

「利き手によって逆になる場合もありますが、多くの人は物事の過去を参照する時に視線が左上へと向きます。つまり何かしらの心当たりがあつてそれを思い出そうとすれば視線はこの位置に動いてしまふわけです。では逆位置における右上に動く場合はどうかと言うと、質問します。ロサンゼルスってどんなところですか？」

「えっ？ えっと、行ったことがないので明確にどうとは……」

「このように経験になかったり、物事を想像するしかない場合に視線は右上へと動くのです。つまり視線が上方へと行く動きは想像と過去に関連することになります。これがわかっていると恋人の浮気なども問い詰め方によってはわかっちゃったりするので、この場では享受しませんが、先ほど述べたように女性はパーツに注目する生き物なので、理屈抜きでこれがわかるところがあります。だから男性はこれに痛い目を見たりとあるわけですね。あとは人に対しての上目遣

いがある人への尊敬や好意であったりは言うまでもないでしょう」

かなり噛み砕いての解説ではあったが、実例を見ながらのそれには客の理解度もそれなりに高そうで、中には感心する声も挙がる。

それらの反応を見届けて次への興味が自分に注がれたのを確認し、残り時間もサラッと見てこのあとのペース配分も計算。

「では次の質問の前に目線が横方向に向く場合の対人心理について。目線が横。つまりは平行ということは、その相手とは対等でありたいという心理となっていて、友人などという時は目線がだいたいこの位置に来ます。上とか下に行く場合は、その友人関係でも序的的なものが生じてしまつてるかもしれないので、気をつけてみてください」

アメリカカンジョークでも飛ばしながら進行するつもりでいたので、そうしなくても緩い雰囲気スムーズに形成されたこともあつて時間的には余らせそうな感じがあつたから、余つたら質問タイムでも設けようと考えて進行していく。

「それでは質問です。ホトトギスの鳴き声はどんな感じですか？」

「ホトトギスは……ホーホケキョツ！　って感じですか？」

「ではそのホトトギスを限りなく野太い感じをお願いします」

「ええっ!!　んーと……ホーホケキョツ……凄く恥ずかしいんですが」

さすがにここは女子生徒の乗り気を勢いで押すしかなかったもので、解説はまとめてすることにして2つの要求を間もなくやらせる。

その際にまず女子生徒は目線を右へと向けて鳴き声を真似、次は左を向いてから低い声での鳴き真似を披露した。

「可愛い鳴き真似をありがとう。というように今ので目線は右、左と動いたのがわかったかと思えます。最初の鳴き真似では記憶にある音。両親の声であったり兄弟の声であったりを思い出す時に目線は右へと向き、後者のような『想像を含む音』を作る際には目線が左へと向くわけです。つまり目線の左右は聴覚に関わる事柄と関連性があることになります。おそらく今、質問で『パンダの鳴き声は?』と尋ねた場合は、目線は想像を含む右上から左へと流れたりするはずで。私もパンダの鳴き声はどんなか知りませんから答えはわかりま

せんが」

恥を忍んで勢いでやってくれた女子生徒にはお礼を言いつつ、今の目線の動きについての解説をして、それで質問タイムは終わりだと示して拍手で送って戻らせる。

再び1人で壇上に立ったテルヨシは、この流れで話の主旨を理解してらるだろう客に急かされるように、残った目線の下方向の心理についてを解説しようとする。

しかしその前に講演が始まった頃からチラチラ確認していたサアヤ達のいる周辺に目を向けて、その中の1人がずいぶん悪い感じに見えたので進行しつつどうにかしようと思考。

「残るは目線の下方向になります、対人の場合、相手よりも優位に立ちたいという心理である可能性があり、言葉にも見下すといったものがありますね。ただここまでのように考え事になると違ってきて、左下は先に挙げた視覚・聴覚以外の感覚で記憶を参照する時に向き、右下は自分の世界。要は独り言などをする時に向きますから、人に見られるといったこともあまりないかもしれませんね」

その結果、目線の話はちよつと雑になってしまったが、ここまでの話で理解力がなんとなく身に付いていた客からは疑問の声がほぼ挙がらずに済む。

そこだけは申し訳ないと思いつつ、ようやく話を絡ませた忠告ができそう、講演も終盤に差し掛かって締めにかかる。

「それから目に関わるところではまばたきがあり、よく集中してる人がまばたきをあまりしなくなったりと見る必要があると思います。では逆にまばたきが多くなると人間はどういう状態かと言うと……その女の子。君のようにまばたきが不自然に多くなっていたりするのには緊張状態や不安なこと。或いは『悟られたくない何か』がある証拠になります。もしも具合が悪いようなら保健室に行くことを勧めます」

そうやって話に絡めつつあえて指まで差して忠告したのは、ハルユキの隣に座ってしきりにまばたきをしていた倫。

実は校舎で合流して自己紹介をした時からどことなく違和感が

あつて、剣道部の創作ダンスの時からまばたきがちよつと多いなあ
と見ていた。

そしてこの講演が始まってからは周囲に見られないように伏し目
がちになって注目されないように身を縮めていた。

それが単に具合が悪かったり疲れによるものなら休めばいいし、保
健室に勧めたのはハルユキやフーコに『どうした理由でそうなる
のか』を調べてもらうために落ち着いた場所に誘導してもらいたい
から。

そんなテルヨシの意図を汲んでかハルユキとフーコがちよつとフ
ラついた縁に寄り添って体育館を出ていくのを見送り、そうした目ざ
とさで生徒から「さすがテル先輩つ。優しーい」といった声でピンポ
イントの指摘も不信感を煽ることなく流すことができた。

「——とまあ色々とお話ししてみました、心理学というものの入り
はこのくらい簡単なもので、どのような分野の学問も小さな興味・関
心・疑問がきっかけで始まる人がほとんどです。私がこうして心理学
という分野に足を踏み入れたのも、言葉が通じないアメリカに住んで
いた時に、どうしたら相手に自分の意図が伝わるかを考えたところか
ら始まっています」

縁のことは気になるものの、講演を放るわけにはいかないので良い
頃合いになってから本格的に締めに入り、自分が際立つて特別な人間
ではないことを説明。

誰にでも何かを学ぶチャンスと権利はあるし、それが伸びればテル
ヨシのような人間が少なからず出てくるということを主に生徒とそ
の親に話しておく。

「才能なんて言葉は安易に使っていいものではないし、何が自分に
とって開花のきっかけになるかなんてこともわかりません。ただ1
つ言えることは、どんなことでもやってみなければ始まらないってこ
とです。今日お越しの生徒のご両親。自分の子供に才能があると思
いたい気持ちもわかります。でもそれ以上に大切なことは、子供が本
気で取り組みたいと思うことを、常識などに囚われて頭ごなしに否定
しないこと。踏み出そうという1歩に背中を押してあげることが大

切だと、私は思います」

——もちろん、お金がかかることは二の足を踏んで当然ですがね。テルヨシは自分に心理学の才能があるなどと1度たりとも思ったことはない。

誰でも同じくらいに打ち込めば到達できるだろうところにいると信じて疑っていないし、自分の可能性は自分自身でも推し測れるものではない。

「そしてこれから何をしようかと考えている学生諸君にはこれだけ言っておきます。才能つてもものがあるとすれば、それは『何かに全力で取り組める』こと。それこそが才能なんだと、私はずっと考えています」

だからこそ踏み出し頑張ってみるごとの大切さを説いたテルヨシの締め言葉には、15歳のガキとは思えないちよつとだけ不思議な力が作用し、親の目線に立つての言葉も付け加えてひと笑いも取りつつ、ちよつと時刻も昼の12時を指して講演が終了。

壇上で丁寧なお辞儀をしたテルヨシは盛大な拍手に見送られて、両手を振ってステージ横へと姿を消し、完全に客からは見えなくなつたところで近寄ってきた恵には悪いと思いつつも会話も交わすことなく入れ違つて、待つていた黒雪姫と一緒に体育館をあとにする。

「なかなかどうして真面目な話もできるじゃないか」

「学校に恥をかかせられないからな。それより綾ちゃんは？」

「わからん。今頃フーコとハルユキ君が保健室に着いただろうが、もしかすると日下部君はすでにあれの汚染を……」

体育館を出てすぐに小声でそうした話をしながらどこを目指すのかを問いかけると、どうやら綾はこの文化祭に来る前にISSキットを移植させられた可能性が出てきて、今はフーコからの連絡待ちの様子。

だがどうにも嫌な予感がしているテルヨシも樂觀視はできず向かう先が生徒会室であると聞かされて納得。

次いで体育館から出てきたサアヤ達とも合流し、この面子が一同に介しても不審がられない場所など生徒会室しかないのだ。

「仮に綾ちゃんがそうだとして、状態によってはどう動く？」

「一刻を争う深刻な状態ならば、我々も覚悟を決めるしかあるまい」

「ちよつとロータス。それってつまりこれから……」

「無論だ。《東京ミッドタウン・タワー》にあるアレを破壊して、その元凶を断つ」

その生徒会室を指して歩く一同の中で話を察したサアヤが代表するように黒雪姫に問いかけ、何の迷いもなくそう宣言したことにテルヨシ達はちよつとビックリしつつも、いずれはやることを今やるだけのことと腹を括って一様に笑顔を見せた。

その後、生徒会室を黒雪姫が昼食で他の役員が出払う間の15分間だけ貸しきることができ、ゾロゾロと生徒会室に雪崩れ込んで各々で楽な位置で陣取ると、タイミング良くフーコからの報告がある。

やはり綾は昨日ISSキットを《マゼンタ・シザー》に寄生させられてしまい、しかもそれが綾のデュエルアバターではなく強化外装であるバイクに寄生させられてしまったことで、チユリの《シトロン・コール》による巻き戻しも意味がないだろうとのことだった。

「しつかし、たかが文化祭でどんだけ豪勢な面子が集まったんだって話だぜ」

その報告には一同から落胆のため息が漏れるが、空気を察してユニコがソファァーでふんぞり返りながら集まった顔ぶれを見て不敵な笑みを浮かべる。

「そうねえ。下手に寄せ集めた6大レギオンより総力で上回りそう」

「連携が取れる前提でつてのが抜けると誤解がありそうね」

ユニコなりにやることは決まったのなら俯く必要はないだろうというレギマスらしい言葉にはみんなが察して顔を上げ、改めて見ても王が2人に幹部クラスもゾロゾロいるこの面子は確かにおかしい。

この面子で挑むISSキット本体の破壊というミッションが失敗するはずがない。

そんな空気で生徒会室が満たされ始めたところでフーコが合流してきて、黒雪姫がメールを送ったハルユキも来て全員が揃ったところで代表して黒雪姫が口を開く。

「ではまずこの作戦におけるタイムリミットは現実時間で10分。加速世界に換算すると約7日ということになる」

「それだけあればエネミー狩りして使ったポイントも補給して帰ってこれるっしょ」

「テル先輩の言う通り！ サクツと終わらせて残りの文化祭を楽しまなきゃね」

「ン、テルとチユリ君の言う通りだ。楽しいはずの文化祭に水を差した加速研究会には、ここらで灸を据えてやることとしよう」

この場の全員がISSキット本体の破壊に賛成し意思を統一し、士気も高まった。

だがしかし、何か問題があったのか、続く言葉に「……だが」と付け加えた黒雪姫は、その視線をあきらめへと向け、その視線の意味を汲み取ったハルユキが「あつ！」と思い出したように声を上げる。

そう。今のあきは四神《セイリユウ》の祭壇の前で封印されていて、特殊スキル《レベルドレイン》まで食らってそのレベルが初期の1になってしまっている。

たとえこの場ですぐにレベル4以上にできたとしても、封印されている以上は今回の作戦には参加できないことになる。

その事にはあきらめ自身が気づかないわけもなかったため、作戦に参加できないことを悔やむ思いはありつつも、気にせずに進めてくれと発言したあきら。

正直な話、戦力が1人でも多ければ良い現状であきらの不参加は痛いため、全員がその意見を飲み込んでしまう前に進言しようとしたら、それより先に近くにいたパドが口を開く。

「その選択はアキラしくない」

原作14巻辺り

Acceleration Second 40

「水は流れ続けてこそ水。停滞はアキに似合わない」

楽しい文化祭の最中、調子の悪そうだった綸が《ISSキット》を寄生させられていた事実が発覚し、全員が楽しめる文化祭を続けることができなくなったため、だったらISSキットの本体の破壊を決定しようとしたテルヨシ達。

一同が一致で作戦に賛成した直後、ISSキット本体があるのが《無制限中立フィールド》であることで、未だレベル1のままデュエルアバターが四神《セイリユウ》の祭壇前に封印されているあきらが作戦に参加できないことが判明。

自分抜きでもやれと言ったあきらに皆が言葉を失う中、パドが珍しく率先して言葉をあげて諦め気味のあきらをまっすぐに見据える。

「……なら、どうしろと言うの、ミヤア?」

思えばあきらがバーストリンカーであったならば、その従姉であるパドがあきらと近い関係でないことの方が無理な話。

ハルユキとタクム、チユリのように幼馴染みでバーストリンカーというのもレアなケースだが、親等の上でも近いパドとあきらなら、2人が《親子》である可能性は限りなく高い。

そしてパドがこれまで決して話してはくれなかったレベルアップをしない理由についても、今の状況からようやく理解ができる。

「今すぐ《無限EK》から脱出して、そのままメタトロン攻略に参加すればいい。7日もあれば、2つの作戦を連続して行うことは充分に可能。そしてこのメンバーなら、戦力的にも充分」

その事に気づいているはずのユニコにチラッと視線を向けながら、パドが出した提案を聞いていると、視線に気づいたユニコも「こうなるだろうとは思ってたさ」みたいな諦めに近い視線で返ってきて腹はとつくに括っていたようだ。

そしてまさかの提案がプロミネンスの側から挙がってしまったが

ために割り込みをかけた黒雪姫が慌ててしまったが、すぐに落ち着いて正面に座るユニコと、その後ろにいたサアヤにも視線を向けて言葉を紡ぐ。だが何故テルヨシを見ないのか。

「……………いいのか、赤の王、サアヤ。レパードの提案は、我々にとつては正直願ってもないものだ。ネガ・ネビユラスの人員だけで救出作戦を行うよりも、遥かに成功率が上がるだろうからな。だが、依然として困難なミッションであることに変わりはない。作戦に加われれば、セイリユウの猛攻で1度ならず死ぬか、レベルドレインの特殊攻撃を受けるか……最悪の場合」

「皆まで言わなくてもわかるわよ」

黒雪姫の視線には不満はあったが、あきらの救出作戦はネガビユで取り組むべき問題であることが前提。

それに協力してくれるのかと確認する黒雪姫の言葉を最後まで聞かずに言葉を切らせたサアヤは、巻き込まれた手前、ちよつと機嫌が悪そうだったが、やると決めたからにはそれにはブーブー言うほど子供でもない。

「プロミだつてユニコちゃんとユリが割り込まなかった時点で腹は括つてるし、私もテルもレパードの言い分は納得してる。ただでさえちよつと無茶な作戦なんだから人数は多いに越したことはないわ。でもアキちゃんを助ける危険な作戦を見返りもなしにやらせるのはロータスもユニコちゃんも関係性のない私達には気が引ける。詰めるならそんな話でしょ」

「ム、対価を求めるのは当然だが…………」

「メンバーの引き抜きとかはやめてくれよな。ただでさえユリさんの引き抜きやろうとしてるんだし」

「私はそこまで鬼じゃないわよ。ネガビユとプロミには今後の7王会議でこのバカが変なことを言つても味方してやってほしいの。明確な味方じゃなくても、肯定派みたいな感じでいてくれればそれで良いわ」

だからサアヤもあきらの救出作戦には賛成した上で、本来なら参加をお願いされる立場の自分達に無報酬では後味も悪いだろうと、その

報酬の話に素早くスライドし、どんな要求をされるのかと生唾を飲んだ黒雪姫とユニコ。

その2人に叩きつけたお願いは、テルヨシを指しながらの意図が分かりにくいものだったが、それを言われてから理解したテルヨシもサアヤの無理すぎない要求には凄いとさえ思う。

「意図はよくわからんが、アレの言うことに何かしらの意見を述べればいいのなら、いつもやっているから問題ない」

「だな。あたしらがやらなくても勝手にレディオ辺りが焚き付けてくるから問題ねえ」

「バカとかアレとか、オレの扱いが酷すぎる件についてお説教したいのですが」

「そんな時間ないわよバカ」

「アレの言うことは無視して話を進めよう」

「うがー!!」

ともあれ、サアヤが無理な要求をしてこなかったことでスムーズに話が進み、あきらの救出作戦は実行に移されることとなる。

だがテルヨシの扱いが色々酷いからその辺をツツコんだら、時間も限られているからスルーされ唸ると、結果的に皆に笑われることになるのだった。

現実での時間が貴重ということで作戦会議のために通常対戦のフィールドで時間を1度使って打ち合わせをしてから、午後12時20分にあきらを残して一同が無制限中立フィールドにダイブ。

《世紀末》ステージのフィールド属性を確認しながら今作戦に加わる一同の出現を待つこと十数分。

どうしてもコマンドは合わせても多少のラグが生じてしまうのは仕方ないことなので、失語症の都合、かなり頑張ってくれてる謡の出現で全員が揃ってから、並ぶ一同に深々と頭を下げたのはハルユキ。

「……本当に、ありがとうございます。文化祭の真っ最中なのに……何も言わずに協力してくれて……」

「そのやり取り、またこっちでやるつもり？ 鴉くん」

「見返り求めたオレらは何も言わずとかないしねえ」

「NP。カレンの救出もISSキット本体の破壊も必要不可欠」

「つーか、聞いた今も信じらんねえんだけど、ホントにあの弱気オーラ出まくりな女が《アツシユ・ローラー》なのかよ?」

「儂のようにキャラクター作りをしておるわけでも、たまにおる人格が変わるタイプとも思えんが……」

「てゆーか私はダイブしてようやくガスト姉さんとバーちゃんさんだつて納得したんだけど、みんな受け入れ早すぎない?」

よっしゃ行くぜ! って感じでダイブしていたのでハルユキの改めての感謝はなんかあれだと思つたか、早々にサアヤが断ち切つてテルヨシ達が便乗。

和やか雰囲気になりかけてからのチユリのその言葉に、リアルでは初めて会つたはずの黒雪姫は「いや、2人のリアル情報は少しだけ見えていたのでな」と答え、フーコも「5年ほど前にブラジャーを着けるだの着けないだのと話したことが……」と口を滑らせて黒雪姫に言うなど口を塞がれていた。

ブラジャー云々の話なら胸の成長具合による着けるタイミングとかそんなところかなと予想しながらその辺をサアヤに小声で聞いたら「ユリもフーコも小5で着け始めたのよ」とキレ気味に回答してくれ、その当時は小4だったサアヤと黒雪姫がどんな気持ちで聞いていたのか察してあげるのだった。

「ほら、雑談してないで行くわよ。カレントの出現時間はほぼ決まってるんだから、こつちが遅れたらなに言われるかわかつたもんじやないわ」

ちよつと話が速攻で脱線しかけたので、ワイワイ騒ぎ出す前に手を叩いて引き締め直しにかかったサアヤは、チンタラやつてたらこつちの時間で3時間後に出現する予定のあきらが出現早々にセイリユウに死亡させられるからと要点だけをまとめて事実を突きつける。

それで和やかモードもいくらか引き締まって、それじゃあ移動しようかとなる。

「あつ、でもこの人数で高速移動つて割と無理じゃね?」

「うむ、それは私も考えていたのだが、ちよつとみんなで頑張つてみる

か」

「おいおい、それじゃ移動だけで1時間以上は消費しちまうつての」
しかしそうなってから。いや、そうなる前から薄々は感じてたが、総勢12人になる集団で移動するには何らかの移動手段を選ばなければならなく、世紀末ステージは生憎と電車などの機関も動いていない。

そうなれば必然、黒雪姫の言うように頑張ってみんなでランニーングっ！ みたいな形になるしかない。

だがそんな疲労も溜まる移動ではセイリユウ戦に使うエネルギーも消費することになるのでなるべくなら却下の方向にしたいと思っ
ていると、やれやれな態度のユニコが割り込んできて策なしな黒雪姫とテルヨシを笑う。

「しゃーねえな。あたしが丸の内までタクシーしてやるよ。特別サー
ビスだかな。ちょっと下がってろ」

そうするからには何か策があるのだろうとは思いつつ、偉そうなユニコにイラツとした黒雪姫を抑えて言われた通りに下がり、みんなもユニコから距離を取ると、まずはユニコの主武器である《インビンシブル》を召喚しコックピットに乗ってしまう。

これだけなら《不動要塞》^{イモビブルフォートレス}としての赤の王の本領を發揮する固定砲台だが、任せろと言ったからには何かあるはずで、何も言わないパドとユリは何をするかわかった上で黙ってる感じ。

「んでもってこっから……チェンジ！ 《ドレッドノート》!!」

それなら口を挟む必要はないなど見守っていると、そんなボイスコマンドの後にインビンシブルに変化が。

まずは本体を支えていた4本の脚が前後で2つずつくっついて伸び、その上に突き出ていた機銃やミサイルポッドがせり出したコックピットブロックの後ろにに集まるように格納され、左右の主砲はそのコックピットの横にスライド。

最後部にスラスタがズドンと収まってから、最後に脚部だったパーツの下から合わせて12個のタイヤが出現して変身完了。

「これは完全にトレーラーね」

「座席はどっこかしら……」

その出で立ちには全長10mを越える大型トレーラーそのもので、誰がどう見てもタクシーではないなあと思いつつサアヤのちよつとしたボケが炸裂。

それには変身させた本人から「んな都合の良いもんねえから」とツツコミをいただき、何も言わずにそのトレーラーの上に飛び乗ったパドとユリに続いて全員が長方形平面の屋根の上へと乗る。

全員が乗っても少し余裕があるのでなかなか大きいのが、その代わりに掴む場所も何もないので、動き出したら死に物狂いですがみつくしかなさそうなのがまたワイルドな感じだ。

「さてと、レインの運転は荒いでの。テイル、支えておいてくれ」

「そんなに荒いんじゃないやオレも振り落とされるんじゃないや……」

「つていうか何でテイルに抱きついてんのよアンタは」

「仕方なからう。儂は風の影響を受けやすいんじゃないから、誰かに掴まりでもせんと簡単に飛んでしまうぞ」

「それはわかかってるつての。それで何でテイルなのかって話でしょ。ガタイならパイルの方が良いんだからそつちに支えてもらいなさいよ」

これで《帝城》の東門までを突き進むとなると乗るだけでもちよつと神経を使いそうだなと考えていたテルヨシに、近寄ったユリが甘えるように首に腕を回して抱きつきながらそうした理由で密着してくる。

まあ確かにどのくらいの速度が出るのか知らないが、吹きっさらしの屋根ではユリのアバターは紙も同然の軽さで簡単に置き去りにされるのは想像するに容易い。

それなら仕方ないかと思いかけて、ちゃんとしてるようでしてなかった理由にサアヤが鋭いツツコミ。

それを聞いてからそりやそうだと思いながらチユリといたタクムを見れば、確かに向こうの方がアバターとしては安定感がある重量級。わざわざテルヨシを指名する理由はない。

「あのバーちゃん？　もしかしなくてもガツちゃんて遊んでる？」

「むっ、気心知れたテイルを選んだのがいけないことかの。というのは可愛い言い訳じゃが、結論としてはそうなるの」

「ボンバーー！」

ならどうしてと考えるまでもなく、最近はサアヤ弄りが楽しそうなくリだから、こんな時でも遊んでたようで、そうした本心をバラしたユリに思惑通りにやきもちを妬いたサアヤは照れながら追いかけて回す。

そしてそうなるとわかってたっぽいマリアなんて、最初からトレーラーの先頭に陣取ったパドの腰に抱きつかせてもらおう許可を取っていたし、黒雪姫さえなんか騒ぎそうと思ってたか予想通りの結果に「本当に騒がしいな、この2人のコントは」とか呟いていた。

「そんじゃ、帝城目指して……しゅっぱーっ!!」

自分の頭の上でわいわい楽しそうなのが羨ましかったか、ちよつとテンションを上げていたユニコがこっちの状態を多少無視していきなり発進の合図を出したため、騒いでいたサアヤとユリは切り替わるようにテルヨシに抱きついて今の喧嘩が何だったのかわからない仲直りを披露。

トレーラーっぽく重々しいエンジン音を鳴らして12個のタイヤが回転を始め、梅郷中学校のグラウンドを出発して正門ゲートの鉄骨を蹴散らして公道へと出る。

大きな道はエネミーとのエンカウンド率が上がるため、東門まではほぼ裏道を進んで無駄なエンカウンドを避ける方針だったので、ユニコもすぐに公道から中野第2戦域の裏道へと入ってひたすらに東に進路を取る。

「それにしても、あの鴉は色々といレギュラーね」

移動中のメンバーで小さなグループが形成され、テルヨシとサアヤとユリで固まり、ちよいちよいユリが《リトル・ボム》を適当なところに放り込み必殺技ゲージを溜める物騒なことをしていたが、割と一石二鳥だから真似できる人はやり始める始末。

マリアもパドに抱えられながらトレーラーの進路上で邪魔するようなオブジェクトを撃って退け、何気に移動に貢献してたりする。

真似と言っても近接オンリーなテルヨシには関係ないので、体を支えるユリが景気よく両手を合わせてるのを見ながら、隣で呟くサアヤの話に耳を傾ける。

「イレギュラー？」

「加速世界初の完全飛行型アバター。災禍の鎧の6代目で、その負の連鎖を断ち切ってくれた子。それから今回のメタトロン攻略でも新しいアビリティを習得とか、盛りすぎよ」

「話を聞いてると完全に物語の主人公よね」

ダイブする前の作戦会議でメタトロンのレーザー対策にハルユキの《光学誘導》アビリティが使えるかもと話されたこともあって、参加メンバー全員がハルユキの新アビリティは認知していた。

しかしそれを含めてもハルユキの盛り盛りな経歴にはため息が出るサアヤの気持ちはわからなくはない。

テルヨシも加速世界に少なからずの影響は与えた自覚はあるものの、それは全体からすれば微々たるもので、ハルユキの与えたインパクトは周囲を巻き込んだものが多い。

「なんとなくだけど、あの鴉の近くにいとわかるわ。ロータスやレイカー、レインちゃん達が何かを期待しちゃうって気持ち」

「オレはそうじゃありませんかね？」

「フツツ。やきもち？」

「そういうのじゃないけど、頼りたいお年頃って感じのあれですかね」

「言つとくけど、このパーティーでレベル的な序列でいけば4番目のアンタは、みんな言わないだけで期待はしてるのよ。その分、責任ものし掛かってるわけだけど」

やることなすことがいつも予想の上をいくハルユキにはテルヨシも何度も驚かされてきたし、このわずかな時間でもそうした謎の期待感を肌で感じたサアヤはさすが。

その期待感のようなものは男として常に女から持たれたいテルヨシがちよつとだけ噛みつくつと、可愛いみたいな笑いで弄ってきたサアヤは、期待してないわけじゃないことを言いつつ、しっかりとプレッ

シヤーまで与えてくる。

確かにレベルで見れば黒雪姫とユニコに継ぐレベル8。序列的にはまだフーコには及ばないから4番目ということになるが、セイリユウとは初対面になるので、過度な期待はやめていたただきたいと思つてしまう。

到着するまでやることもないのでそうした雑談で時間潰しをしていたら、トレーラーも裏道から靖国通りに合流し、新宿駅北側の大ガードにさしかかる。

山手線の高架を潜るアンダーパスを通ろうと進路を取っていたトレーラーだったが、遠目に見たアンダーパスの高さに結構ギリギリじゃね? と思わなくもない。

『……あ、やべ』

トレーラーでギリギリだからその上にいるオレらつてどうなるんだろうなあと考えていたら、コクピットにあるらしいスピーカー越しにユニコの何かに気づいた風な声上がり、何かと黒雪姫が聞えれば、予想通りトレーラーの上のテルヨシ達が潜れそうにないっぽいと報告。

「こ、こら、そうと気づいたなら停まればいいだろう!」

『いやー、それがさあ、ブレーキついてねーんだよなこのクルマ。つーわけで、ロータス、任せた。通信終わり』

なんとも無責任な報告には一同が呆れてしまったが、ブレーキがないのではどのみちどうかしなきゃならない。

なのでどうしようかと適任を探すインコンタクトが交わされ、ユリに1度は視線が集まるが、ユリでは最悪、上の線路ごと破壊して生き埋めにされる可能性があるから却下。

次にサアヤに視線がいくものの、こっちもこっちで加減が難しいし範囲も調整しにくいということ却下。

そんな中で任せると珍しく名乗りを上げたタクムが、さすがの先見性で溜めていた必殺技ゲージを使って高架下の鉄骨に《ライトニング・シアン・スパイク》を撃ち込んで出口まで大穴を穿とうとした。

が、脆い鉄骨に加えて必殺技の威力が貫通特化していたせいで威力

のほとんどが一点から抜けていってしまい、直径30cm程度の穴を穿つに留まってしまう。

その結果にうなだれてしまったタクムを労いつつ、レギマスとしてバトンを貰った黒雪姫は、ゆらりと右足を持ち上げて目の前の鉄骨に対して水平に構えると、秒間100発以上にもなる連撃系必殺技《デス・バイ・バラージング》で挟み取りながら高架下を通過。

黒雪姫の作った穴に入る形で落下を免れた一同はホッと安堵しつつも、謡によるボソツとささやかれた黒雪姫の蹴り技のえげつなさに相づちを打つのだった。

それから話が今のやり取りからアバターの能力の伸ばし方についてになって、オールラウンダーと特化型スペシヤリストの長きに渡る最強議論に未だ結論が出ていないみたいなのが出てくる。

ネガビユもプロミも基本方針で『悩んだら特化』というらしさの見える形がまた面白いが、そういうのはレギオン単位で決まるものなのかと思って《メテオライト》も基本方針くらいは掲げておくかとサアヤとちよつと相談。

「だがまあ、この話をするとき必ずと言っていいほどに憎たらしいアイツの名前が出てくるものだよ」

「そうなのよねえ。ある意味ではこの議論に対して単体で唯一の『どっちも』なんて答えを見出だしたと言うべきかしら」

「やめて。その名前は私が聞きたくない」

「ふむ、付き合いならガストが一番あるうに」

『おっ？ それってもしかして……』

話は特化させすぎてユリや《アイス・イーター》といったアバターになると極端に弱い条件も出てきてどうしようもない場面も出てくることについて触れられ、それも努力次第ではいくらか克服できることをフーコが謡のアバターを証拠にして力説。

テルヨシがどちらかというとき6:4くらいの割合で万能型に寄つてるところがあるビルドなのは、そうした極端に弱い場面を嫌つてのことなので、マリアやユリのような純粋な特化は尊敬に値したりもする。

が、それらの話を経て嫌そうに声をあげた黒雪姫にフーコとサアヤ、ユリ、ユニコまでもが同じ人物を思い浮かべたのか、テルヨシ含む他の人はそんなバーストリンカーがいるのかと興味津々。

「どっちもとか、欲張りなバーストリンカーもいたもんだねえ」

なまじ古参ばかりが納得する話だから声をあげにくいだろうとテルヨシが代表するように口を開いたら、なんか一斉にジト目がテルヨシに向けられて何事かと思う。

しかしよく考えればそんなどっちもなんてことが理屈では不可能なことをやってしまえるバーストリンカーがテルヨシの物凄く近くにいた。

「……あー、もしかしてそれって《レイズン・モビール》のこと？」

と、思い至ったからには口にしなはいわけにはいかないもので、恐る恐る尋ねてみれば、ジト目を向けてきた一同からようやくわかったかといった深いふかい頷きが返ってくるのだった。

Acceleration Second 41

綸を蝕む《ISSキット》を破壊するために作戦を開始したテルヨシ達は、現状の最大戦力でメタトロン攻略に挑むためにまずは四神《セイリユウ》の祭壇前に《無限EK》によって封印されているあきらの救出に乗り出す。

ユニコが新たに習得した《インビンシブル》のバリエーションである大型トレーラー形態《ドレッドノート》で東門へと向かっていった道中。

裏道をひた走ってきたユニコのトレーラーは1度、新宿通りへと出て内堀通りと合流する丁字路で減速。

その合流地点の正面にはいつか攻略する《帝城》がどんなフィールドにおいても姿を変えずにそびえ立っており、その手前には先日テルヨシがアホなことをした西門とそこまで続く幅30m。長さ500mの大橋がかかっている。

「……今回はお前じゃないからな」

その大橋に直進して入っても目的のセイリユウではなく《ビヤッコ》が出現してしまうので今回は完全にスルーし、トレーラーも避けるように右折して帝城の外周を回るルートへと突入。

ここから東門までは常に帝城の見える位置になるため、遠からず攻略に乗り出すその城を見ながら、まずは第1関門となる四神に意識を向けボソツと呟く。

「お前って……まるでビヤッコに会ったことがあるみたいな言い草ね」

特にビヤッコとはただの口約束ではあるが、次に戦う時は本気の帝城攻略の際だとしていたから、思わず出た言葉だった。

それに敏感に反応したサアヤがなかなか鋭いが、ビヤッコと修行目的でタイマンしていたなんて話したら怒鳴られそうだからやめておく。

「考えすぎよガツちゃん。四神に臆してないって表現でお前って言うだけ」

「そうねえ。前に《スザク》を見て腰が砕けそうになってたのは情けないと思ってたし、良い心がけね」

「その話はなしでお願いします」

なので適当に誤魔化して切り上げようとしたら、完全に墓穴を掘って過去のカツコ悪い場面を思い出させることになってしまった。

その事を知らなかったユリにまで聞かれて弄られる展開になったのは本当に酷い話だったが、それも南門の前を通る頃には収まってくる。

ビヤッコに関してはぼんやりと攻略の糸口は見えかけているテルヨシだが、スザクに対してはまだ光明を見いだせない。

未だ対峙すらしていないセイリユウと《ゲンブ》もそうだが、改めて《チャイブ・リリース》が論外と言った意味についてを実感する移動はなかなか堪えるものだ。

だが今は四神の攻略は二の次。あわよくば可能性を見いだせれば御の字くらいに考えておいて内堀通りを走って見えてきた東門へと意識を向ける。

『終点、帝城東門前ですう！ お客様はとつととお降りくださいあーい』

そしてようやく東門の大橋前の交差点へと到着して、猫かぶりモードのユニコのアナウンスの後に全員がトレーラーから降り、インピンシブルをストレージに戻したユニコも神経を使う移動をしたからか大きく伸びをしながら集団の輪に加わる。

移動に要した時間は約30分ほどで、大幅な時間短縮によってブリーフィングに当てる時間にも余裕ができ、重要な作戦前にも関わらずどことなく和やかな雰囲気のまま、みんなから緊張の様子が無いのは良いのか悪いのか。

「……………うーん」

「どうしたのよ、唸るくらいなら言いなさい」

「何か危惧でもあるのかの？」

そんな中で黒雪姫がブリーフィングは15分の休憩後に行うと指示を出して、ただ休んでるのが嫌なメンバーは頭痛くなる東門。現実では坂下門に符合するところから歴史の雑学というか試験前の勉

強を始めてしまい、そういうのを聞いてると眠くなるテルヨシは少し離れて大橋の手前で腕を組みちよつと唸る。

そのテルヨシに近づいたサアヤとユリが何か気になることでもあるのかと尋ねてきて、同じように難しい話についてこれなかったか近寄ってきたマリアも巻き込んで4人で会話。

「うーん、みんなに緊張がないのは良いことなんだろうけど、現実はいっしょに見るべきではあると思うわけですよ」

「ダメだよ。それ以上は前に進むの禁止」

「アンが正解ね。アンタも四神が意思に近いAIを持つてるのは経験済みでしょ」

「じゃな。下手に探りを入れてこちらの意図に勘づかれてもすれば、想定外のことも起こる可能性が上がってしまう」

問われてしまえば正直に答えるべきだと思っただけで考えていたことを口にしたテルヨシに対して、具体的に何をやるかなんて言っていない、それだけで何をしようとしているのかわかったらしいマリアに動くなど言われてしまう。

テルヨシはこのメンバーの中でも約半数がまだセイリユウの姿すら見たことがないという不安要素を抱えていることを受け止めていた。

だからこそ作戦の前にセイリユウを1度でも見ておくことは無意味ではないと考えていたが、言葉を繋げたサアヤとユリの言うことも十二分に理解していたので、だからこそそれらを天秤にかけて唸ったのだ。

「アンは不安はない？」

「あるよ。だって私なんかよりずっと強い人があそこに封印されちゃうくらいのエネミーだもん。不安がないなんて嘘でも言えないよ」

天秤は今のところほぼ釣り合いが取れてしまっている、黒雪姫とユニコにも話してどうするか判断するのも1つかと思いつつ、自分と同じでセイリユウが初見になるマリアにこの作戦への不安がないかを問う。

しかしそれは愚問とばかりの即答で返したマリアは、不安があるの

は当たり前前だと言いつつも、声色は恐怖で震えたりはしていない。

「でもそれは私だけならって意味。私が1人で挑んだって、カレントさんを助け出すどころか、自分が無限EKになっちゃうかもしれない。でも1人じゃないから。みんなが力を合わせれば、きつとカレントさんを助け出せるって信じてる」

「よく言ったわ、アン。心配性なテイルは頼りないかもしれないけど、私とボンバーは存分に頼りなさい!」

「女は度胸じゃ。テイルもアンを見習ってドンとしておれ。《親》が及び腰では示しがかんぞ?」

「ええー……オレがいつ及び腰になったというのか……」

我が《子》ながらたくましくなったものだなと思いつつながらに精神的な成長を見せたマリアには込み上げてくるものがあったが、最年少の1人がここまで言ったなら、他の初見組が「ちよつと不安だし姿だけでも」とはいくにいけないのは当然。

だがテルヨシとしては『自分が』というよりも、このチーム全体で考えた時の総合的な勝算の変動を考察しただけであって、テルヨシ自身は初見のセイリユウに対してはかつてのスザクやビヤッコほどのプレッシャーはない。

むしろ好奇心の方が上回ってるくらいだから、ユリの言動には全くもって納得がいかなかったが、聞いたサアヤとマリアに笑われてはどうしようもなかったのだった。

「よし、作戦開始15分前だ。カレンはかなり正確にタイミングを合わせてくれるはずだが、現実世界での0.1秒の誤差が、こちらでは100秒に拡大してしまう。つまり、前後2分程度のズレは計算に入れておかねばならない」

そんなこんなで休憩の後には完全に切り替えて始まった入念なブリーフィングとシミュレーションであきらが出現する15分前まではあつという間に過ぎ去ってしまい、作戦のリーダーである黒雪姫がいよいよだと言葉を紡ぐ。

その中では先日のスザク戦でも見せられた高度なAIによるこちらの予測を上回る動きもある程度は想定しておかないと注意も入

る。

その際にはテルヨシのようにアホなことはせずに絶対に自分の身を最優先に退避するようにと、主にテルヨシに視線を向けながら言う黒雪姫に、皆も視線を合わせてうんうん頷く。

「あのさあ、オレばかり気を付けろって感じだけど、みんなもいざつてなったら仲間を助けたいって葛藤はあるでしょ。その気持ちまで否定されてるみたいで落ち込むんですけど」

「ムッ……そこまでお前を否定はしていないが、やはり前例がお前なだけに語調が強くなるのは仕方あるまい」

「そうですね。テイルさんのそういうところは好きですが、全員が全員、持てる力を最大限に出せれば、そういったピンチにも陥らずに作戦を終えられると、わたしはそう信じてます」

「あらレイカー。この急造のチームで信頼関係が成り立つって本気で思ってるの?」

「少なくとも、ツンデレでそういうことをあえて言っちゃうガツちゃん、作戦で失敗だけはしないだろうなってことだけは確信してるわよ?」

「ガストのツンデレはわかりやすいからのう」

「Y。そこが可愛い」

「まったく、ツンデレは言うことに刺がなきゃならん条件でもあるのか」

「刺で本心を隠すからツンデレなのですよ、ローねえ」

「ちげーねえ。刺の無えツンデレとかただのデレじゃん」

「そんなガストさんも可愛いよ?」

「なんとたつてオレの彼女だからな」

「アンタらはあ……緊張感を持ってこのバカどもがああああああ
!!」

もう前科持ちの宿命として受け止めるつもりではいたテルヨシだが、ここにいる全員があと半歩でも踏み込めばテルヨシと同じことをするようなメンバーなことはいちおう警告しておく。

それを否定もできなかつた一同もそうならないようにとより一層

の意識を持ったのは良かったが、士気を上げるつもりだったサアヤの言葉が思わぬ方向に話題を逸らしてしまい、サアヤのツンデレをこれでもかと弄る流れに。

まあこれでフーコとサアヤの言う信頼関係が成せる連携が取れたことになるわけだが、こんなのを望んでなかったサアヤは本日2度目の癩癩を起こしてしまった。

「よっしゃ。要は全員でおりゃーって突っ込んで《アクア・カレント》拾って、また全員でうおーって逃げれりゃいいんだろ？ 片道たったの500mじゃん、楽勝らくしよー！」

「デュエルアバターのオレの全力疾走でも40秒弱はかかるんすけど、たったの500mなの？」

「そうだぞ赤いの。往復にすれば1kmだ。うおーと走るにはなかなかしんどいぞ」

「うっせーな！ 片道切符はあたしが出してやんだから、文句言うなら駄賃取るぞ」

ウガーツと唸るサアヤはみんなで宥めつつ、今回の作戦をめっちゃちやザックリと表現したユニコのはわかりやすいのだが、ちよつとアホっぽい擬音のせいでテルヨシと黒雪姫が反射的にツッコんでしまう。

そんなやり取りが繰り返されるのはこれ以上は無駄と思ったか、反論させない作戦放棄に近いユニコの発言を最後に切り替えて、各々が所定の位置へと移動を開始していった。

『いつ……けええええ——ツ!!』

現実時間で12時20分10秒。

テルヨシ達より10秒遅れてダイブしてくるあきらが出現するだろう時間が来て、約2分のセイリユウとの攻防が開始される。

その口火を切ったユニコの雄叫びは、東門へと続く大橋の300m後方から木霊してきて、再び召喚されたドレッドノートが12個のタイヤをフルスロットルで回して発進し加速してくる。

それを大橋の手前から見ていたテルヨシは、ブレーキもないのにあの加速はヤバイよなあとか思いながら隣に立つユリとマリアに目を

向ける。

他のメンバーは全員、加速するドレッドノートの左右の主砲に掴まる形で乗っついていて、屋上に乗れない都合、人数制限に引っかかったためにテルヨシとユリがドレッドノートの進撃に続く形で大橋に突入することになる。

マリアは腰さえ据えれば大橋の奥まで射程圏内なので、わざわざターゲットをもらうメリットはなく、狙撃手としてセイリュウの動きに合わせて臨機応変にフォローする役割。

「危ないと思ったらすぐに降りてきてよね、バーちゃん」

「どのみち儂の耐久では一撃で死ぬでの。そうならんように主らが全力でタゲ取りをしてくれ」

「任せて！」

「いやん、アンが頼もしすぎる」

「それは儂の台詞じゃろうが」

テルヨシの最初の動きはなかなかハードなのだが、それ以上に危険な役割かもしれないユリの心配はするの当たり前で、小さく震えていたユリの手を2人で優しく握って言葉をかける。

そうすれば良い意味で開き直ったユリの手震えは止まり、大丈夫と言うように握られた手を放すと、ドレッドノートも目前まで迫って大橋へと突入する3秒前。

その時には屋上の位置の装甲板がガバツと4箇所が開いて、そこから無数のミサイルがせり上がって発射態勢を整えていた。

『しっかりと掴まってるよ！ スラスタ、オ——ンツ!!』

だからみんなが屋上から待避していたのだが、動けるようになったインビンシブルの火力そのままに迫ってくる迫力は物凄い。

さらに大橋突入の寸前でドレッドノートの後部に装備されたロケットモーターが点火されて爆発的な加速が加わり、小石の1つでも踏んだら盛大にクラッシュしそうな速度で大橋に突入。

「遅刻するう!!」

ちよつと予想以上に激しい加速で驚いたが、驚いて反応が遅れるほどバカでもないので、ドレッドノートが大橋に突入した0.5秒後に

ユリを《テイル・ウィップ》で掴んで大橋へと侵入し、東門をまつすぐ直線で捉えたところで、

「《インパクト・ジャンプ》!!」

だいたい75度くらいの角度で前方へ大ジャンプ。

一瞬で地上から35m付近まで到達し、その到達点でユリを解放したテルヨシは、体勢をサッカーのオーバーヘッドキックのように捻らせて、蹴り出す右足の上にユリを乗せる。

「いって……らっしやああああ——いッ!!」

そしてそこから跳んだ角度と同じ角度のままユリをさらに上空へと蹴り上げて飛ばし、加速世界においておそらく最軽量アバターであるユリは上空100m以上の飛距離まで到達。

1度だけシミュレーションでやってみてそのくらいまで行ったらしいので、おそらく今回もそのくらいには到達しただろうことを感觸で予想しつつ、落下を始めたテルヨシが次にやるのは、眼下で始まったセイリユウ戦にいち早く参加すること。

東門の手前の祭壇にはすでにセイリユウがその姿を現し、4本の角を備えた頭部。菱形の鱗に覆われた首。鉤爪を備えたたくましい4本の足と長い胴体。鞭のように鋭い尾。頭から尾までを金属光沢のある瑠璃色の剛毛が逆立ち、背には等間隔で4対8枚の小翼が伸びている。

どちらかと言えば東洋龍に近いフォルムながら、誰が見てもドラゴンだと答えるだろうセイリユウはやはり、スザク、ビヤッコにも引けを取らないプレッシャーを放っていて、曇天を貫くような咆哮は空中にいるテルヨシが圧だけで後ろに吹き飛びそうなほどだ。

しかしそんなセイリユウに全く臆することなく進撃を続けていたユニコのドレッドノートは、予定通り先制のミサイルを発射して出現直後のセイリユウを強襲。

さすがの高火力は一瞬でセイリユウの姿を爆炎と黒煙で包み込み姿を確認できなくなるが、それを悠長に見ていたら大橋に不時着してしまうので、ミサイルを打ち切って安全になったドレッドノートの屋上めがけて追隨するように直角にインパクト・ジャンプを使って、奇

跡と呼べる速度調整とタイミングで屋上に綺麗に着地。

「うおっ、奇跡」

「アンタのそういう勝負強いところは素直に感心するわよ！」

さすがに装甲板が開いたままでデコボコの屋上に直立不動は難しく、すぐに受ける風圧でよろけるが、同じタイミングで屋上に上がってきたサアヤがその体を支えてくれて、黒雪姫達も上がってくるなり遠距離攻撃部隊が追撃へと出る。

ハルユキとタクムが最前列に立って心意技《レーザー・ジャベリン光線投槍》と必殺技《ライトニング・シアン・スパイク》が放たれ、煙によってシルエツトだけが見えるセイリユウのどこかへと命中。

次いで攻勢に出られてなるものかと意気込むような謡が長弓《フレイム・コーラー》を構えて必殺技《フレイム・トーレンツ》をセイリユウの頭上へと放ち、天辺で数十本の火矢となって降り注ぎ小爆発を起こす。

さらに強烈な真紅の過剰光を右手に宿らせた黒雪姫が、渾身の《奪命撃》を放ってセイリユウの胸へと伸びる斬撃が深々と突き刺さる。
《ヒートブラスト・サチュレーション》ツ!!」

それに負けじとユニコも黒雪姫が貫いた胸部を狙って左右2本の主砲から放たれる極太の光線系必殺技を炸裂させ、天地を揺るがすほどの大爆発を引き起こした。

「そろそろね」

「超怖い」

如何なセイリユウでもこれほどの連続攻撃を開幕から浴びてしまえば、多少なりの硬直は促せただろうと思いつつ、ふと空を見上げたサアヤがそんな眩きを漏らしたため、全速で近づくセイリユウと空を交互に見てビクリとする。

直後。未だ猛攻によってシルエツトしか見えないセイリユウの頭上から、数えるのも恐ろしいほどの《リトル・ボム》が降り注いできて、ユニコの引き起こした爆発とは規模の違いはあれど、その継続的な爆発はこのメンバーの攻撃では最終的には最大級になるだろうダメージを与えていく。

おそらく現在、セイリユウの頭上100m付近に到達したユリが、アビリティ《テイセント》を使いながら非常にゆっくり降下しつつトリル・ボムを次々と量産して雨のように降らせているのだ。

止まない爆弾の雨にはセイリユウも忌々しそうに体をくねらせ、5段あるHPゲージの1つが5割も削れていたが、突如としてゲージが減る量よりも増える量が上回って徐々にそのHPゲージが回復されていく。

これは待機状態になっている他の四神からのバフによる回復がされてしまっている残念な結果だが、目的はセイリユウの撃破ではないし、始めから回復されるのは折り込み済み。

だからこの現象に今さら愚痴をこぼすようなメンバーはいなく、セイリユウの祭壇まで残り200m付近にまでさしかかると、ついにセイリユウから反撃の予兆がある。

それを磨き抜いた観察眼で狙いを見定めたテルヨシは、その反撃が頭上ではなくこちらに向いたことを察知し防御班に声をかけると、ハルキキとタクムと位置を入れ替わったサアヤとフーコが最前列に踊り出る。

サアヤはすでに《ブレード・ファン》を展開剣へと変えて、両端の部分を手を持って深緑の過剰光をブレード・ファンに纏わせ、フーコも右手の平を前に掲げて深緑の過剰光を身に纏う。

それを確認してか知らずか、降り注ぐトリル・ボムの雨の中から顔を出してきたセイリユウは、その口を開いて奥から超高压のジェット水流。《ウォーターブレス》を発射。

あきらによる事前の情報によれば、特殊攻撃に秀でたセイリユウの技の1つで、威力にして緑系アバターでも数秒で即死するほどだとか。

「《ブラスト・ゲイル》!!」

「《庇護風陣》!!」

それが放たれた瞬間に、サアヤは展開剣状態では花卉のように開いて高速回転しながら攻撃する必殺技ブラスト・ゲイルを前方にウォーターブレスに向けて展開し、フーコの防御心意技はドレッドノート全

体をドーム状に包み込み全員を守る。

——ドギヤアアアアアツ!!

その2重の防護壁にウォーターブレスが正面から激突し、高速回転する展開剣がミキサーのようにウォーターブレスを削って霧散させ、フーコの防護壁がカバーできない部分から迫るウォーターブレスを防御。

かなりの防御力を有しているはずの2人の防護壁だが、セイリユウのウォーターブレスはその上から叩き潰そうと圧力を上げてくる。

その威力に膝をついたサアヤとフーコではあったが、防護壁は必死に維持したまま展開し続けて、ブラスト・ゲイルが効力を失って扇子へと戻ったタイミングでウォーターブレスも止まり、なんとか反撃を防ぎきることができた。

——セイリユウの祭壇まで、残り100m!

Acceleration Second 42

「時間だ！ 5秒前……2、1、ゼロ！」

始まった《セイリユウ》との戦闘。

激化してきた中で祭壇までの距離が残り100mを切ったところで、黒雪姫がそんなカウントを始めて前。セイリユウの奥の祭壇へと目を向ければ、カウントを終えて3秒後にアバターの出現エフェクトが生まれる。

あきらがほぼ寸分の狂いもなく現実世界から加速し出現しようとしてる確かな証拠で、あまりの正確さに笑いすら込み上げてくるが、セイリユウの脅威は未だ衰え知らず。

笑ってる場合でもないのであきらの救出は担当のフーコに集中してもらおうことにして、その道を作るためにテルヨシも集中を上げてセイリユウの挙動を全力で観察。

ほぼ出現を終えたあきら《アクア・カレント》を確認しつつ、セイリユウのターゲットがどこに向くかを見抜きにいってテルヨシの目からは、まだ自分達にターゲットが向いているように見えたため、このままギリギリまで肉薄しようとするユニコに指示しつつ、セイリユウの4本の角が青白く輝いたのを見逃さず、タクムと後方のマリアに手振りで指示を出す。

セイリユウの角の輝きに合わせて上空の黒雲に幾筋ものスパークが走り、落雷の予兆が頭上から迫る。

セイリユウによる特殊攻撃《サンダーブラスト》だ。

《スプラッシュ・ステインガー》!!」

しかしこれもあきらから事前に聞いていた攻撃だったため、対策は取れていて、上体を反らしながら胸部装甲に収納されていた複数のニードルミサイルを発射する必殺技を放ったタクムのニードルは、トレーラーの周囲の上空に散布される。

それとほぼ同時にユリが絶え間なく降り注ぎ続ける《リトル・ボム》の1つを狙撃しマリアの《バレット・クリエイション》のバリエーションの1つである《ジャミング弾》がセイリユウの頭上でキイイイイ

イン！ という甲高い音と共に炸裂する。

そしてセイリユウのサンダーブラストは直上から紫がかつた稲妻となつて放たれたが、タクムのニードルが避雷針代わりとなつて落雷を直撃コースからズラしてくれ、落雷を受けて次々と爆発していく。

さらにマリアのジャミング弾は直弾点から半径100mの範囲に強烈なジャミングを発生させてホーミングなどの効果を120秒間だけ無効化するのだが、実は副次的効果として『遠隔攻撃への命中率のマイナス補正』も発生することが判明していた。

『オメーら！ 上手く合わせろ！』

その助けもあつてセイリユウのサンダーブラストは大橋には落ちるがトレイラーへと命中することはなく難を逃れ、残り60mまで来たところでスピーカーからユニコの合図が飛んできて、直後にトレイラーは大橋を滑りながら元の《不動要塞》モードへと移行し、その変形に巻き込まれないようにテルヨシがサアヤとタクムを《テイル・ウィップ》で掴んで大ジャンプ。

パドもビーストモードになつてその背中にチユリを乗せてジャンプし、ハルユキも黒雪姫と謡を両手に抱えて短時間の飛行で回避。

残されたフーコは慣性に逆らわずにむしろトレイラーから飛び出すように前へとジャンプしながら、空中でストレージを開き機動力抜群の車椅子型の強化外装を取り出して乗り、見事な着地から減速することなくセイリユウの下をロケットの如く駆け抜ける。

ユリのリトル・ボムも降り注ぐ中を心意強化もした加速で抜けるフーコはさすがだが、いつセイリユウが誰をターゲットするかかわからない複雑な状況でテルヨシの集中力はさらに上がる。

完全に変形を終えてセイリユウの目前で止まった《インビンシブル》が壁となり、その後ろで着地したテルヨシ達は、それとほぼ同時に響いたユニコの『あぶねーぞー！』の声に反射的に防御体制になると、直後。

インビンシブルの頭上へとセイリユウのしなつた尻尾が振り下ろされて、その衝撃波が襲う。

その攻撃でインビンシブルの4本の脚部パーツが大橋にめり込み、

本体を支えられずに根元から折れてしまう。

『マジかよクツソ！ わりい！ 反動で引っくり返るから撃てねー！』

「そのまま壁になってくれ！ 攻撃は我々が引き受ける！」

予定ではインビンシブルが無事ならこのままユニコの火力を撃ち続けることになっていたが、支えを失ったインビンシブルは反動に耐えられないため早々に断念せざるを得なくなる。

なので黒雪姫が次のプランとしてインビンシブルを壁にして溜めを作り、一斉に攻撃に出る作戦に移り、攻撃できる全員がイマジネーションに集中し強力な心意技を放とうとする。

——小さく儂き者たちよ。

——そなたらは、何故に妾の眠りを妨げるのか。

だがその作戦を看破したかしかないかわからないタイミングで、突如として頭上のセイリユウが頭に直接語りかけてきて、セイリユウの行動を見る担当のテルヨシが過剰光を足に発生させながら見上げれば、セイリユウの両目がこちらを向きながら怪しく光つたのを見逃さなかった。

そしてそうと認識した瞬間から、テルヨシの体に真っ白な霜が降りて凍りついたように動かなくなり、声までもが出なくなる。

かろうじて動く視線で他の仲間にも目を向けても、皆が同様の拘束技を受けたように動けそうな者はいない。

この特殊攻撃は完全に未知の攻撃だったため、対抗策が用意されていなかった。

『——強化外装、解除!!』

おそらくはこの降り積もった霜が拘束力を生んでいると思われるが、動けない、必殺技が使えないでは抜け出すこともままならないためセイリユウの攻撃はどうやっても受けてしまうと覚悟を決めかけるが、セイリユウは硬直したテルヨシ達が脅威ではないと判断したのか、その狙いを未だに攻撃していたユリへと向けて《ウォーターブレス》を放とうと口を開く。

その動きにテルヨシ達が反応しないからか、本能なのか、霜による

拘束をコックピット内で回避できていたらしいユニコが、動かないインビシブルをストレージへと戻して大橋に降り立ち振り返り、テルヨシ達の状態を見るやマリアに見えるようにジャンプしてサインを出す。

その2秒後にテルヨシの背中へと強烈な《炸裂弾》が撃ち込まれて、その周囲にも爆発の余波が広がってスプラッシュダメージをもたらす。

一見するとミスショットのようだがそうではなく、霜による拘束を炸裂弾の爆発で吹き飛ばしてくれたのだ。

それがわかってからダメージを負った一同ではあったが、文句を言う者は1人もいなく、拘束中も信じてイマジネーションを引き絞っていた黒雪姫とハルユキと即座に動いたユニコが遠距離心意技を放ってセイリユウの下顎を狙う。

3人の心意技はウォーターブレスを放つ寸前でセイリユウの下顎に命中し攻撃をキャンセルすることに成功。

さらにテルヨシは今の炸裂弾で溜まった必殺技ゲージを消費して《インパクト・ジャンプ》でセイリユウの頭上まで跳び、下に向かって《インスタント・ステップ》の足場を蹴って落下からの過剰光を纏った足で強烈なかかと落としをセイリユウの鼻っ面に叩き込んで強引にその顔を下へと下げる。

これでユリへの攻撃を完全にキャンセルしつつ、後ろのあきらとフーコも同時に守れたことになるなど、反撃に注意しつつ着地し後退したテルヨシは、セイリユウの後方から強烈なライトブルーの光が上空へと一気に昇っていくのが見えた。

無事にあきらの元へと辿り着いたフーコがあきらを抱えて《ゲイルスラスト》を使い、遙か上空まで退避してから大橋を落下しながら抜けようとしているのだ。

そしてそこまでにユリが空中にいた場合は、ユリが軌道修正をすることで空中でフーコに回収してもらい、《ディセント》で落下スピードを大幅に緩和しつつ着地できる算段もあった。

事実、ゲイルスラストの噴射煙が黒雲まで伸びて途切れてからは

ユリによる攻撃が止み、回収が成功したのがわかった。

あとはそのフーコ達をセイリユウが追いかけないようにテルヨシ達が後退しながらタゲ取りするだけだ。

「よし、全員後退―」

それを確認した黒雪姫がセイリユウのターゲットがこちらに向いていることも確かめてから指示を飛ばし、全員が大橋のど真ん中を縦一列の編成で走り始める。

「《シトロンのコール》!!」

その編成が成されたところで今度はチユリがサアヤに向けてシトロンのコールを使ってその時間を巻き戻し、サアヤも《ブレード・ファン》を必殺技の範囲外の空中に投げてそれを受け、突入前の必殺技ゲージが満タンの状態まで戻してもらおうと、投げた扇子状態のブレード・ファン――シトロンのコールで展開剣に戻っては困るためだ――をキャッチして即座に開いて構える。

「逸れないですよ！ 《リベレイション・ストリーム》!!」

そして放たれたのはゲージ全消費の大技であるリベレイション・ストリーム。

サアヤを中心に360度へと広がりながら巻き起こる暴風が一瞬の静寂のあとに発生。

その暴風が発生する1秒未満の時間でブレード・ファンを閉じたサアヤとチユリをテイル・ウィップでまとめて回収して前を走る編成と同じ直線上に並んで走れば、直後に背中を押す……どころか体を浮かせて吹き飛ばすほどの暴風に巻き込まれて前の編成に突っ込み、黒雪姫達も小さな悲鳴を上げてそれに巻き込まれる。

吹き飛びながら後方のセイリユウに目を向ければ、あのセイリユウさえもサアヤの起こした暴風のせいで移動を妨害されてその場で耐えるように動かないのが見え、大橋を抜けるまで風に乗ることはできないが、距離は大幅に稼げそうだと思う。

――妾の眠りを妨げた小さき者たちよ。

――捧げよ。重ねた時の精華を。

だがそうは問屋が卸さないとばかりに、後方のセイリユウがまたも

言葉を紡ぎ、暴風域を抜けて150m以上も吹き飛んで着地したテルヨシ達だったが、セイリユウの変化に気づいた黒雪姫もホバーでのバック走をしながらその挙動を確認。

そのセイリユウは右手を掲げて、その中心に黒い球体を生み出し、ゆらゆらと不定形に揺れるその球体の表面には紫色のスパークが走っている。

「――来るぞ!! 《レベルドレイン》だ!!」

あきらから聞いた事前情報によってその挙動がレベルドレインであると確信した黒雪姫が叫んだ瞬間、ここまで必殺技ゲージを温存してきたハルユキが立ち止まって編成の最後列まで下がりつつその銀翼を広げて宙に舞う。

「任せたぞ、クロウ!」

「任せてください! 先輩達は走り続けて!」

そのハルユキを追い抜きつつ黒雪姫が言葉を交わし、正面を向いて後退を始めて、テルヨシもレベルドレインにターゲットされないように本腰を入れて走ろうとした。

――足掻け、小さき者たちよ。

が、またもセイリユウから語りかけるような声が発せられ、反射的にセイリユウを見れば、右手のみならず左手にも黒球を発生させていたのだ。

「マジかよ!」

あきららによればレベルドレインの黒球はアバターに命中すると黒球の中に呑み込んでまわりつき、そこから蓄積されたバーストポイントを奪っていき、全て無くなってから不可避の硬直と同時にレベルが1つ下がるらしい。

現状では呑み込まれてからの対策は水結が可能性としてあるくらいのもので、食らったら終わりという認識で間違いなく、黒球は直線なら際限なく加速してアバターを追い詰めるらしいのだ。

だからこそ、飛行アビリティを有して三次元的な動きで逃げられるハルユキがレベルドレインをジグザグ飛行で振り切り大橋を抜けてしまう作戦を立てて、実際にハルユキもそうしようと最後列に立った

のに、その黒球が2発となれば発射タイミングをズラされただけで回避も困難になり、最悪はレベルドレインに捕まってしまうかもしれない。

「くっそー」

全員が無事に大橋を抜けるという最高の結果をもたらすには、この状況は最大の難関と悟ったテルヨシは、かろうじて1回だけ使えるインパクト・ジャンプでどうにかできるかと考えたが、大橋を抜けるまでまだ300m近くもあるため、ほぼ不可能と結論。

それでも何とかしなきゃと足を止めかけたテルヨシをサアヤが「止まるな！」と叫び、どういうことかと正面を向くと、それと同時に赤い軌跡が前方から後方へと流れ、その流線型のしなやかな体は四足歩行で走り抜けていた。

「……………パド……………」

それがパドであることを理解したテルヨシが足を止めずにレベルドレインに立ち向かったパドの心配をするのと同時に、セイリユウから時間差で黒球が放たれる。

1発目はハルユキをターゲットイングして、空へと逃げたハルユキを追っていき、遅れて放たれた2発目は立ちはだかっていたパドへと一直線に突き進み、あっという間にパドを呑み込んでしまう。

「シトロンの・コール！」

この時点で全員が無事にという条件が崩れてしまったが、それでもまだ出来ることはあると言うように、前を走っていたサアヤが再びチユリからシトロンの・コールで必殺技ゲージを少し戻してもらって、走りながら「真ん中を開けなさい！」とユニコ達に注意をしながら《ブラスト・ゲイル》を前に放つ。

それを見るよりも圧倒的に早くレベルドレインを受けたパドが猛然と加速してその横倒しのブラスト・ゲイルの中へと突入して、蓄積されたバーストポイントを奪われながらブラスト・ゲイルの追い風を受けて大橋を抜けようと《ファースト・ブラッド》も全開で超加速。

「行きなさい！ レパードー！」

「頑張れ！ パドお！」

その勇姿に送り出したサアヤと抜かされたユニコが声援を送り、それを受けて300mを疾走するパドがいつレベルダウンしてしまわないかと心配しつつ、そうなたら自分が抱えて大橋から連れ出そうと決めて、静かに全速に切り替えたテルヨシは、あっという間に全員をぐぼう抜きしてパドに次ぐ位置につける。

思えばパドがレベルアップをせずにはひたすらにバーストポイントを蓄えていたのが、このためだったとわかった時から、パドが不測の事態で真っ先にこうするだろうとわかっていたテルヨシは、それほどの覚悟で走っているパドの姿に涙が溢れる。

そうしてしまった自分の不甲斐なさが悔しいし、それを助けてやることすら出来なかった対応力のなさがもつと悔しい。

何のために磨いた観察眼と見切りなのかと責めたかったが、過ぎたことを悔やむのは全てを終えてからでいい。今は前を走るパドを全力で応援する。

「パドー・抜けろお!!」

その声が届いたかはわからないが、300mの距離を6秒足らずで走り抜けて大橋を脱出。

それと同時にパドにまわりついていていた黒球も飛沫のように弾けて消失して、止まることを考えてなかったパドはその体を何度も地面で転がしてブレーキを強引に掛けていた。

硬直するよりも早く大橋を抜かれたということはレベルダウンは免れたようだが、一体どれほどのバーストポイントを奪われたのか計り知れないテルヨシは、それを気にしつつ次いで黒球を振り切ったハルユキがパドの近くに着地したのを見届け、自分も残り50mのところに来てから立ち止まり、後続が安全に抜けられるように最後までセイリユウの挙動を確認。

しかしセイリユウは大橋の真ん中辺りですでにその動きを止めていて、こつちへの攻撃はもう無駄と悟ったか、テルヨシだけが大橋に残っても咆哮するだけで襲ってくる気配がなく、パドの犠牲に幾分か満足したような、嘲笑うようなその動きには苛立つものの、目的は達せたので大橋を抜けると、セイリユウは静かにその体を水へと変えて

溶けるように消滅していった。

セイリユウが消えたということは、大橋にもうバーストリンカーが存在しないことを証明している。

なのでテルヨシは大橋を出てすぐに一同がパドに走り寄る中で唯一、空を見上げ黒雲を抜けて見えた赤と青の重なるシルエツトを凝視。

シルエツトは落下と呼ぶには遅すぎる速度でテルヨシ達のいる地点に降りてきて、その輪郭がハッキリと見えた辺りで一同も視線をそちらへと向けて歓迎ムードが作られる。

「そろそろ良いか、レイカー、カレント」

「ええ、こんなに優雅に空を散歩したのは初めてでした」

「レイカーはいつもロケットみたいだったから仕方ないの」

上空10mのところまで降りてきてから、デイセントによって空気を含むように広がったスカート装甲の下にあるユリの両足を掴むフーコと、そのフーコの体に形を崩してまとわりつくような形でくつくあきららが、そんな呑気な会話をしているのが聞こえる。

それからすぐにユリの足から手を放したフーコが綺麗に地面に着地し、あきらもフーコから離れてその体を人型へと戻して立ち上がり、その近くにユリも優雅に着地を決める。

その姿を黙って見ていたパドは、自分を助け出してくれた一同を見回したあきらに視線を固定して、その視線に気づいたあきらは自らの最も身近な《子》へと近づき、ボロボロでうずくまるパドに跪いてその首に両手を回し抱き締める。

「おかえり、アキ」

「ただいま、ミヤア」

そんな2人に水を差すほど野暮な性格ではないテルヨシも、他のみんなも、長らく離ればなれになっただろう《親子》の再会を黙って見守っていた。

それでも2人の世界は数秒程度で終わりを迎え、パドから離れて立ち上がったあきらと、ビーストモードを解いたパドが立ち上がれば、ようやく最初の作戦が終了したと言わんばかりにユニコが言葉を発

する。

「よーっし！ これでばっちりミッション・コンプリートだな！」

その言葉をきっかけに場の全員から張り詰めていた緊張感がすうっと抜けていく感じがして、ホッと安堵しながらも、やはりパドの受けたダメージはHPゲージの減少などよりも遥かに凄まじいものであるはずで心が痛む。

「みんな、本当に頑張ってくれた。四神セイリユウの猛攻に耐え、こうしてカレントを取り戻せたこと……そして新たな封印者はもちろん、1人の死者も出なかったことは、全員の奮闘が具現化した奇跡に他ならない」

次いで黒雪姫からも労い言葉がかけられ、一同も微笑するような雰囲気醸し出されたが、すぐに「……だが……レパードが……」と言いついた淀んだ黒雪姫に空にいた3人以外が落ち込むこととなる。

その空気の変わり様に気づき、代表してフーコがその理由について黒雪姫に問い、言わなければならないことはわかってる黒雪姫も隠すことなくその事実を告げる。

「セイリユウは、最後の最後でレベルドレインを撃ってきた。予定通り、クロウが決死の飛行で黒球をエリア外まで引つ張るはずだったが、セイリユウはレベルドレインを2連撃で放ってきたのだ」

「……！ それじゃあ、パドは……」

「ああ。2発目はレパードがその身を挺して防いでくれ、彼女はドレイン状態のままエリア外まで走り、レベルダウンこそ免れたものの、恐るべき量の蓄積ポイントが失われてしまったはずだ」

それを聞いたフーコ達からも言葉を奪うだけの事実は一同に重くのし掛かり、皆がパドへと視線を向けるも、その当人は割とケロツとした態度で肩をすくめて口を開いたのだった。

「NP。もともと、この日のために溜めてたポイント。また稼げばいいだけの話」

Acceleration Second 43

どうにか《セイリユウ》の祭壇からあきらを救出し、全員が《無限EK》になることもなく作戦を終えることはできたのだが、その代償にパドが《レベルドレイン》を受けてレベルダウンは免れたものの、大量のバーストポイントを失うことになってしまった。

あきらが封印されてから貯めてきたポイントなど、とつくにレベル8になれるほどにはあつただろうに、それを失ったパドはケロツとした態度で「また貯めればいい」とかなんとか言うもんだから一同は呆然。

そんなパドに対して《親》であるあきらだけがまともに反応しその頬に手を添える。

「だから……私のごことは忘れてって、言ったのに」

「親を忘れるのは無理」

「相変わらず、ミヤアは意地っ張りなの」

ケロツとしてはいるが、本心では問題ないなんてことはないだろうことは長く付き合ってきたテルヨシにもわかっていたが、同じく理解者のあきらもそれはわかっていながら、本人がそう言うならと受け入れている感じ。

次いでパドから手を離れたあきは、プロミの3人に深々と頭を下げて、感謝と共にレギオンの幹部が被った損失は必ず補完することを約束。

これはほぼ確定事項でネガビュが負うべき責任とばかりに黒雪姫達も助力を惜しまず、雰囲気も幾分か明るい方向へと行き、その中であきらはまだ感謝してなかったテルヨシ、サアヤ、マリアの前に移動してきて丁寧に頭を下げた。

「テル君達もありがとう。この恩はわたし個人として何か別の形で返せばと思っているの」

「いいわよそんなの。作戦前にそういうのは納得してやってるんだし」

「そうよねえ。求めすぎるとバチが当たっちゃう」

「あきらさんが助かって良かったです」

「本当にお人好しな人達なの。出来ればミヤアのポイント回復にも協力してほしいと言いたいけど……」

「別にいいよ。ミヤアにも薫さんにもバイト始めた頃からお世話になりっぱなしだし、オレも最近ごっそりポイント減らして補充したか……」

礼儀を弁えているあきらにこれ以上の何かを求めなんてことが、言うようにお人好しな3人にはできなく、流れるにパドのポイント回復のエネミー狩りもやることになるだろうなと思いつつ、自分の都合も考えながら同じくエネミー狩りの話をしていた黒雪姫達の集まりに目を向ける。

そしてふと、バーストポイントの話をした時にチュリの姿が目に入り、次いでパドへと視線を向けて思考したテルヨシは、何か抜け道的なものが頭に浮かぶ。

確かにパドはセイリユウからレベルドレインを受けてそのポイントをごっそりと減らされたが、減らされただけで肝心要のレベルダウンはまだ食らっていない。

つまりパドは何らかの操作——レベルアップやショップでの購入だ——をしてバーストポイントを減らしたわけではなく、アバターのステータスにおいて『状態異常攻撃を受けた』だけで……

「ああ……ああああああ!!」

と、そこまで考えが及んだところで悲鳴にも似た奇声を上げてしまったテルヨシは、同時に同じような声を上げたチュリと目が合い、1秒を争うことなだけに仰天する一同を無視して急いでチュリに近寄って確認。

「チュチュ、ゲージはどのくらいある?」

「サアヤ姉さんに2回使っちゃったからほぼ空っぽなんです!」

「んじゃその辺のオブ……溜まりが悪い! 男衆、来い! 犠牲になれ!」

そのチュリも考えは同じだったようで、テルヨシの確認にも即答し左手の《クワイアー・チャイム》をブンブン振り回し始める。

しかし何のことやらなハルユキとタクムは先輩と呼ばれたとあつて疑問はありながら近づいてきて、直後、チユリが容赦なく2人の頭を1発ずつ殴打。

「テル先輩！ 何発いけます？！」

「もう殺してくれて構わん！ 3、4発来いや！」

——リゴリゴリゴオオオオン！！

意外と殴打系の攻撃としては重いチユリのクワイアー・チャイムに昏倒するハルユキとタクムだが、それを無視してテルヨシにも振りかぶったチユリは切羽詰まりすぎて本当に3発も頭を強打してきて、一瞬お花畑が見えて気絶しかける。

しかし寸でのところで戻ってきてHPゲージが真っ赤になってるのを確認し、チユリもそれで必殺技ゲージを満タンにできたか、クワイアー・チャイムをグルグルと回しながらパドへと近づく。

「レパードさん！ 私とテル先輩を信じてください！」

「K」

「《シトロン・コール》!!」

どうせ了承を得なくてもやるだろうが、一応はパドからの了承を貰ってから、溜めた必殺技ゲージを全部消費する勢いでシトロン・コールを発動。

《ライム・ベル》の必殺技シトロン・コールは、擬似的な回復を可能にする《時間逆行》の能力。

これにも2つのモードがあり、1つはアバターの状態——HPゲージや必殺技ゲージ、損傷具合など——を時間単位で巻き戻すモードI。

もう1つはアバターのステータス変化単位——強化外装の譲渡や着脱など——を最新の変化から段階的に巻き戻すモードII。かつてハルユキの翼を取り戻したモードがこれに当たる。

しかしシトロン・コールでもレベルアップやショップでの購入に用いてしまったバーストポイントをなかったことにして巻き戻したり、レベルアップボーナスを選び直すといったことは不可能。

今回はこのモードIの方が使われたはずで、テルヨシとチユリはパ

ドがそれらの巻き戻し不可能な操作をしていないことに気づき『パドがレベルドレインを受ける前の状態』まで時間を巻き戻すことが出来れば、レベルドレインによって失ったバーストポイントも戻るかもしれないと、そう考えついたのだ。

だからこそ経過する時間が多ければ多いほどシトロン・コールで巻き戻せる時間がなくなり、レベルドレインを受ける前まで時間を戻せなくなるかもしれないから、2人ともが大した打ち合わせもなしに横暴レベルの行動に及んだ。

その1秒も無駄にはできないという行動力には周囲も戸惑っていたが、シトロン・コールを受けて緑色の光に包まれるパドに変化が訪れる。

パドの頭上からキラキラと白い光の粒が雪のように舞い降りてきて、それを受け止めるように両手を差し伸べると、光の粒はパドの両手に触れてから消え、その現象はしばらく続いた。

そしてチュリのシトロン・コールが終わると同時に光の粒も消えてしまい、固唾を呑んで見守る一同の視線を一身に受けたパドは、その手をスツとインスタメニユーを操作する手つきにして、今のバーストポイントの残量を確認し閉じる。

「ありがとう、ライム・ベル」

それから口を開いたパドからは、いつものTHXというパド語を使うことなく、ちゃんとしたありがとうが出てきて、続けて「戻ってきた。セイリュウに奪われたポイント、全部」と紛うことなくテルヨシとチュリの思惑が成功した旨が伝えられた。

それを聞いた一同は一瞬の沈黙のあとに大きな歓声を上げて喜び、これであきら救出作戦において真正銘で犠牲者なしが実現。

その結果をもたらしたチュリがホッと胸を撫で下ろす中で、リーダーである黒雪姫が代表するように近づき改めて感謝の言葉を述べる。

「……ベル。いや、チュリ君。キミにはいつも驚かされるよ……。私からも礼を言う、キミのおかげで、アクア・カレント救出作戦はこの上ない形で終わることができる。これからも、その発想力と行動力

で、私と仲間達を助けてくれ。……ありがとう」

「べ、べつにあたし、いつも思いつきで突っ走ってるだけだし……でも、ほんと良かったです、巻き戻しが間に合って。それにテル先輩が同時に気づいてくれたからギリギリで間に合った気がします」

「オレにも感謝感謝」

「必殺技を使ったのはチユリ君だろう」

「テルは殴られただけ」

「そうやってオレにだけ冷たいのって昔から似てるよね、姫とミヤアは」

「冗談だ。お前もチユリ君の貢献の2割ほどは評価している」

「NP。テルに対して本心を言葉にする必要はない。ちゃんと汲んでくれる」

「……急にデレないでよお……やりにくい……」

チユリが感謝されるのは当然のことなのでテルヨシも拍手を送って健闘を讃えるが、そのチユリの口からテルヨシの名前が出たなら仕方ないかと割り込んでみた。

しかし案の定で自分への塩対応は規定路線だったから、その方向で明るい流れにしようというテルヨシの思惑があったのだが、ちよつと不貞腐れたら素直に感謝されてしまって、笑いどころがなくなつて困ってしまった。

こんなはずでは……と思いつながら素直に2人に言葉を詰まらせたら、それが逆に周囲から笑いを誘い、マリアの「感謝されたいの？ されたくないの？」という質問から結局は笑われる羽目になったのだった。

まあ結果オーライか。

と、自分が笑われることには慣れつこな悲しいテルヨシのポジションはさておき、パドのポイントが戻ったことで今までレギオンの戦力アップを犠牲にしていたパドにユニコが近づき、そのしがらみもなくなったことで話が一気に飛ぶ。

「んで、パド。どーすんだ？」

落ち着きを取り戻した一同を余所にそうした質問をしたユニコに

対して、意図がわかってるパドはこくりと頷き、次いで近くのユリにもアイコンタクトして頷き合うが、このアイコンタクトにはユニコも首をかしげる。

「上げる。今すぐ」

「長かったのう。4ヶ月ほどは待ったか」

「ユリにも迷惑かけた」

「よいよい」

テルヨシもせっかちなパドには慣れてるので、これから何をするかはわかったが、この流れでパドに近寄ったユリにはさすがにまさかと思わずるを得なく、隣にいたサアヤも「えっ、ちよつと待ってよ」と呟きのように漏らす。

そんなことも気にせず2人してインスタメニューを開いたと思えば、何やら素早く指を動かして全く同じ動作をし、先にパドが最後のワンプッシュをしてみせる。

するとパドの足元から虹色の光が柱となってアバターを包み込み、大変に賑やかなファンファーレが鳴り響く。

そう。今パドは戻ってきたポイントでそのレベルを上げてみせたのだ。

あまりに呆気なく上げるから、わかってたユニコとテルヨシ以外は素っ頓狂な声を上げて驚く。

が、ここでテルヨシにも少し疑問が湧く。

パドがレベル7に上がるのは納得する部分はあるが、あの流れでどうしてユリが最後のワンプッシュを止めているのか。

そう思っていたら、驚く一同を余所にまたもレベルアップボタンに触れようとしたパドに合わせて、今度はユリも同時にアイコンタクトでボタンを押してレベルアップ。

「はっ？ はあああああ!?!」

二重に重なったそのファンファーレに、今度はテルヨシとユニコが思わず叫び、ハルユキなどは尻餅をついたり奇妙なポーズで固まったりと酷い有り様に。

さすがの黒雪姫達さえも呆然と立ち尽くすしかなかったのか言葉

を発することもできずにいて、ライトエフェクトが収まってインスタを閉じたパドは、その足をまっすぐにフーコへと向けて近づき、目の前で止まる。

「お待たせ、レイカー」

「どうとう、ここまで来たわね、レパード」

交わした言葉はそれだけ。

だがたったそれだけの会話でも2人のライバルとしての関係性はハッキリと見えて、自分の都合でレベルアップを見送ってきたパドとしても、フーコとしてもこの瞬間はずっと待ち望んでいたに違いない。

そしてようやく対等な関係になった2人は、互いに拳を持ち上げて軽くぶつけ合ってみせ、そこに込められた意味を汲み取ったテルヨシからは「いつか戦おう」と言ったように思えた。

「これでようやくプロミにレベル8が誕生できたの」

それを見ていたら、スツと近寄っていたユリが横から同じように視線をパドとフーコに向けて言うので、それはそうだと思つてすぐ自分だってそのレベル8になつてるじゃんと思つてすぐ。

「見てた分だと、ミヤアと前から打ち合わせてたの？」

「《災禍の鎧》の件の後に、ミヤアの抱える問題が解決したら、その時は共にレベルを上げようと約束しておつた。儂が先んじてはポツキーとカツシーも落ち込むしの。じゃからミヤアと同時にいうわけじゃ」

「にやるほどねえ。そういやユリさんってプロミだとどんなポジションなの？ 《三重土》と同じ古参？」

「儂は……そうじゃな……御意見番といったところかの」

自分のレベルアップは大したことはないといった雰囲気はユリではあるが、現状での最高レベルへの到達がこうも気楽に行われると客観的に見れば衝撃的。

けどそんなことを対等なレベルでのタッグ戦のためだけにレベル8にしたテルヨシが指摘できるわけもなく、自分もかつてはこんな風に半分くらいは呆れられていたんだなあとしみじみ。

そうした雑談をしていたら、隣でわなわなと震えるだけで言葉を発していなかったサアヤが、突然ガツとユリの両肩を掴んで向き合い、それにビクツとしたユリは何事かとサアヤの顔を覗き込む。

「……………何でアンタの方が先にレベルアップすんのよ……………私はアンタの引き抜きができたなら景気良くやろうって密かに計画してたのに……………こんなのズルいわよ!」

「いや理不尽じゃろ!」

「理不尽はそっちよバカあ! 私のインパクトが薄れたあ!」

「確かに2人同時のレベル8誕生のインパクトに勝つにはサアヤの計画じゃ弱くなってしまうたかもしれん」

「黙れバ彼氏!」

こういう盛り上がることにはテンションを上げるタイプのサアヤが何故こうも黙ってるかと不思議には思っていたが、どうやらサアヤなりに自分のレベルアップ計画があつて、それはユリよりも早く実行しようと思っていたらしい。

それなのに今日のこのタイミングで急にユリがパドと一緒にレベルアップしちゃうもんだから、そのインパクトも含めての逆ギレ。

これには穏健派なユリもさすがにツツコミに回らざるを得なく、なんか中では涙目にさえなつてそうな声の震え方をするサアヤがちよつと不憫に思いつつも、やっぱり言うことは言つちやうテルヨシの言葉に物理的なツツコミ。ぶん殴りが炸裂。

ブレード・ファンを盛大に振りかぶつてのそれには回避も出来たのだが、酷いことを言った自覚はあるので甘んじて受けようとは思つたテルヨシ。

しかし振り回し始めたタイミングで自分のHPゲージの残量が真つ赤に染め上がつてることを思い出して、慌てて回避しようとするも間に合わず「ぶべらっ!!」の断末魔と共にテルヨシは死亡。

いらんポイント移動までされて浮遊霊状態になったら、とどめを刺したサアヤの驚く雰囲気は当たり前だが、死亡時にはライトエフェクトが発生するので黒雪姫達も敵襲かと身構えてから、サアヤの説明で落ち着く。

「つていうかアンタも避けられたのに避けないとかバカなの？ 死ぬの？ 死んだわねごめん」

「私の炸裂弾と倉嶋さんの攻撃で相当減ってたから仕方ないよ」
「うむ、しかし意味のないところで全く無駄な犠牲者が出てしまうたの。その辺、アキからコメントはないかの」

「話は漏れ聞いてたけど、自業自得なの。だから犠牲者のカウントではないと判断するの」

「まったく、いつもいつも締まりの悪いことをしてくれるものだ」

「でもほら、そこがテル先輩らしいっていうかなんというかですし」

——色々と酷くね？

物言えぬ浮遊霊状態なのを良いことに、こっちに聞こえてることまで計算して死亡マーカーに向かつて話す一同に怒りすら覚える。

それでもテルヨシの死亡によってぎざわわしていたメンバーの意識が同じ方向に向いてくれて、雑談は全てを終えてからでもいいだろうという黒雪姫の言葉に了承。

「——第1ミッション、アクア・カレント救出作戦はこれにて任務達成とする。みんな、素晴らしい働きだった。最後に……………改めて、おかえり、カレン」

示し合わせたわけでもなく、皆が自然とその立ち位置を調整して大きな輪を作り、黒雪姫がようやく1つ目の作戦が完了したことを告げてあきらへ改めて言葉を贈る。

それにかけて一同も揃ってあきらに「おかえり」と唱和すれば、当人であるあきらはその事実を噛み締めるように一同を見回して、最大限の感謝を込めてそれに応える。

「……………ただいまなの、みんな」

実に感動的で涙が出そうなほどだが、そういったこともできない自分の今の状態が非常に歯痒いテルヨシは、それでもせめてと心であきらにおかえりの言葉を贈り、あきらも死亡マーカー付近にいるだろうテルヨシを探してくれた、ような気もしなくもない挙動を取ってくれたことに感謝。

「よし、では赤の王の強化外装のリフレッシュなどもせねばならんか

ら《無制限中立フィールド》からは一旦離脱する。最寄りのポータルは東京駅なので移動するぞ。あと、どこかのおバカさんは蘇生後すぐに離脱するように。お前のせいで私達は向こうで3・6秒も待たねばならんんだから、その事を忘れるな」

——じゃあこつちで蘇生するの待っててくれてもいいじゃん！

そうした感動すら一瞬でかき消すようにきびきびとした指示で次の行動に移っていった黒雪姫はある意味で凄いのだが、テルヨシに対する辛辣さが1段階上がった気がする命令にはなんか理不尽な感じがある。

気持ち的には声を大にして言ってるのだが、実際には何の音も発生していない心の声でしかなく、そうしたツツコミも黒雪姫には聞こえていなかった。

しかしここで優しい優しい後輩のチュリが「蘇生するまで待ってれば向こうでのロスは少なくとも済みますよね？」とド正論を黒雪姫にぶつけてくれる。

ざまあみろ姫ー！ とマジで思ってたあつかんべーまでしてるつものテルヨシだったが、正論のはずのチュリの意見を真っ向から切り捨てにいく黒雪姫に戦慄する。

「確かにチュリ君の言うことは正しい。だがここで1時間このバカを待って呆然とするのと、さっさと離脱してすぐにダイブし直すのと、どちらが感覚的に短く済むかは明白だろう」

「あー、確かに1時間って意外と長いですしねえ」

——ま、待ってくれチュチュ！ もう少し粘って！ 切に！ 切に！

！
ここで体感時間を持つてくるのは卑怯だ！ 鬼か！ 悪魔か！

チュリの意見は正論だったが、黒雪姫の意見もまた賛同を得るには十分すぎるのは理解できてしまう。

そうした時に人間は楽をする生き物なので、短く済むならそっちを選ぶのは自明の理。最後の砦のチュリは呆気なく陥落してしまったのだった。

「お前は戻ったらすぐにコマンドを合わせる心づもりで離脱しろ」

「コマンド合わせらんねーで待ちぼうけさせたら置いてくかな」

「いつそのこと蘇生したら離脱しないでメタトロンのところに行くつて手もあるわね」

「それでは合流が面倒じゃろうて」

「テルだけバーストポイント節約はズルい！」

「でも死亡したのでポイントはサアヤお姉さんに取りられてるのです」

「収支でいったらテル君はもうみんなよりマイナスなのよねえ」

「お気の毒になの」

「NP。これも自業自得」

「先輩ごめんねー。待つのは暇そうだからお先にー」

「女性陣がみんなテル先輩に厳しいね、ハル……」

「せめて俺達だけでもテル先輩の味方になってあげようぜ、タク。離脱はするけど……」

そこからはもうみんな素早いなのなの。

申し訳なさは多少なりともあるからか、全員が一言程度テルヨシに何かを言ってから移動を始めて、最後のタクムとハルユキの上げから落とすような発言にはちよつと怒りが混じる。

そして誰もいなくなった東門前の道路にポツンと残されたテルヨシは、もじもじと地面に『へのへのもへじ』を延々と書いて繰り返し返すような気持ちでいじけて、1時間後の蘇生をして実体を復活させた瞬間。

全開の声で置いていったみんなにツツコミを入れるのだった。

「すうう………1時間くらい待ってくれてもええやんけえええええええええええ!!」

Acceleration Second 44

「くっそ……ビビリすぎた」

あきらら救出作戦を終えてアバターのリフレッシュのため現実世界に戻って、再度《無制限中立フィールド》にダイブ。

しかしテルヨシは離脱の直前に死亡してみんなとは離脱のタイミングがズレてしまい、離脱後にすぐに合わせると脅されていたこともあって、本当に現実世界に戻ってから間髪入れずにダイブし直して合わせにいったのだが、黒雪姫とユニコが遠慮なしな性格なことも影響しじやつかん早口になってしまったのだ。

そのおかげで今度は1秒の誤差はないだろうが早くにダイブしてしまったテルヨシが待ちぼうけすることになってしまい、15分程度だろうが仕方なしに《黄昏》ステージとなっていたフィールドで文字通り沈みかける夕日を見て黄昏れることにした。

「ダイブし直すと場所もリセットされるのは面倒だなあ」

そうなることややはり考え事に頭がいくのは普通で、正規離脱したことでまた梅郷中学校の校舎の上という現在位置に戻されてしまったのは、これから《東京ミッドタウン・タワー》に行こうという自分達からすれば、東門からの方が近かった事実は多少なりともげんなりする。

またユニコがトレーラーを動かしてくれるだろうことは間違いなが、移動時間というのはそれなりにもて余すのがちよつとだけ嫌な感じ。

「あー、こういう時に備えて姫が今も持つてるはずの《ミスティカル・レインズ幻想の手綱》だったかのタイム用の強化外装でエネミーをタイムさせとけばいいのか」

「フム、その案は今後の参考にさせてもらおうとしよう」

そうして1人でいるといういろいろ考えると同時にたまに閃くテルヨシがふと、黒雪姫のストレージにそんな便利品があったことを思い出してみると、いつの間にか15分くらい経っていたのか、ダイブして出現した黒雪姫に聞かれてしまう。

かつては加速研究会のメンバーと思われる《サルファ・ポット》が《神獣級》エネミーである《ニーズホッグ》をもタイムしていた強化外装だ。

さすがにメタトロンといったボスエネミーをタイムできるとは思えないが、飛行能力のある大きめのエネミーを上手くタイムできれば、これほど上等な移動手段はないだろう。

とはいえ飛行能力を有したエネミーというのものなかなかレアで、フィールド属性によっては出てこないとかあるので安定感なさそうなのが問題か。

黒雪姫もそういったことがあるからそれ頼りに今後の方針を立てるのは良くないと判断してあくまで参考にした程度と思われる。

「んだよ、ロータス。そんな便利なもん持ってんなら始めから使えよな」

「バカもの。タイムにはある程度エネミーを弱らせる必要があるのだ。この面子だからといって、移動に最適なエネミーを探して弱らせてとやってる時間でお前が移動した方が圧倒的に早いだろう」

「そりやそうだけだよお」

その話をさらに聞いていたユニコが混ざってトレーラーを出さなくてもいい雰囲気かと乗り気だったが、少し考えればわかる結論によつてそうはならず不貞腐れてパドになだめられる。

そうした話をしていたら続々とダイブし直したメンバーが出現して、早めにダイブしたテルヨシを除けばほぼ誤差なしでの集合にはテルヨシだけが落ち込む。

「さて、離脱前に少し話したが、先の《セイリユウ》戦での皆の精神力の消耗は大小様々だったことと思う。なので東京ミッドタウン・タワーへと向かう前に休息を取りたいのだが……」

そのテルヨシは当然のごとく無視されて全員が揃つてから黒雪姫が口を開いて、これからどこか落ち着ける場所で休息を取りたいと提案する。

しかしその肝心の休息場所が決まっていなくて言葉を濁した黒雪姫にすぐに答える者もいなく、チユリがここで休んじやえばと意見す

るも、やはり無制限中立フィールド。

エネミーや他のバーストリンカーとの遭遇の可能性を考えると誰かしらが見張りをしないといけなくなると却下気味に。

「休むといえ、フリーねえ。あそこはダメなのですか？」

「そうね。わたしも考えなくはないけれど、ちよつと遠いのよね……帝城東門からなら、少し南に移動するだけで良かったんだけど」

テルヨシも無制限中立フィールドで安置などあるのかと疑問しかないで、ここは古参の意見に耳を傾けようと黙っていたら、心当たりがあつたらしい謡がフリーコに提案をしていて、フリーコも安全性は確保できているが遠いのがネックだと洩る。

そこがどこなのかはわからなかったが、行ったことがあつたのか話を聞いたハルユキが「師匠のお家があるじゃないですか」と賛同。

お家というとまたそんなものがと疑いかけるが、そういえばショツプにはプレイヤーホームを購入できるシステムがあつて、鍵を購入することで特定の場所を私有地にできるとかなんとか話には聞いたことがあつた。

そのプレイヤーホームをフリーコが所持しているようで、黒雪姫も「楓風庵があつたか」となんか賛成の流れが形成されつつある。

「確かにここからは少し離れているが、幸いタクシーが配車されていることだし……」

「あのなあ、次からは運賃取るぞ！ まいたいそのフリーアンてのはどこに……芝公園ン!? オシラトリの領土の奥で、すぐ右はオーロラの領土つつう魔境じゃねえかよ！ なんでそんなところに……」

「ふふ、23区でいちばん高いところにあるプレイヤーホームなのよ、赤の王。現状、自力で辿り着けるのはわたしと鴉さん、それと……運がいい日のアッシュくらいのものね」

代替案が浮かばない以上、割り込む余地すらない会話はどんどん進んでいき、その話の中でフリーコのプレイヤーホームがある場所はほぼ特定できたが、行ったら行ったでまたそこからの移動が大変なのではという疑問も生じる。

でも話はもうまとまってしまう、セイリユウ戦での心意技の影響で

千代田戦域にはエネミーが寄ってきてしまってる可能性があるので、山手通りを品川まで行つて北上するルートが提案される。

そうなるとう度は渋谷戦域を通るのでグレウオから何か文句を言われそうと危惧するユニコだが、ただ通るだけで文句を言ってくるようなレギオンなら最大規模にはなつてないだろうと黒雪姫も納得するようないような理由付きで問題ないと判断。

「ともかく、渋谷から品川コースは比較的危険は少ないと思う。オシラトリの実質的な本拠地は港区白金にある小中高大一貫の女子校と推測されるが、2 km以上離れて移動すれば問題あるまい」

確認するような黒雪姫の言葉に返す者はいなかった。

しかしテルヨシは口には出さなかったものの、今の黒雪姫の言葉の中に疑問が生じる。

聞かなかつたのはそのタイミングではなかつたからだだが、黒雪姫は白のレギオン《オシラトリ・ユニヴァース》の拠点をほぼ正確に把握しているような発言をしていた。

これは長い加速世界の歴史から徐々にわかつてきたとかそんな話ではなく、テルヨシ達のようにバーストリンカーが例外なく学生であることから、その基本拠点が学校になることはままあることだろうかとはわかる。

そしてそこをバレないようにセキュリティを上げるのも黒雪姫がやっていることだ。

だからこそ白のレギオンの基本拠点が白金の女子校であるとピンポイント過ぎる情報を持つことがどういうことかに気づく。

つまり黒雪姫は知っているのだ。白のレギオンのレギオンマスタ―《ホワイト・コスモス》がその女子校に通つていふことを。

それは黒雪姫がコスモスのリアルを知っている可能性が限りなく高く、場合によつてはパドとあきらまのような近い関係にある可能性もあるため、ここでは大勢の耳に入ってしまうのを避けるべきだと判断。

だからなのか、こういうことには割と口を挟んでくるテルヨシがだんまりなのが気になったか、反対意見が出なかつたから、必殺技ゲー

ジを溜めてから出発しようとして、各々が散らばってオブジェクトの破壊に移っていったところ。

黒雪姫はまっすぐにテルヨシへと近づいてその耳元で小声で話しかけてくる。

「——気づいたな」

「何も言っていないじゃん。勘づきはしたけど……ってどうか気づくよ
うな言い回しする姫が悪いし」

「……この作戦が終わったら、折を見て話す。だから今は……」

「だから何も言っていないじゃんって。本人が濁したことをぐいぐい聞
くほど聞きたがりじゃないよ?」

「……いや、お前は割とぐいぐい聞いてくるぞ?」

やはりテルヨシの観察眼には見抜かれていたと判断した黒雪姫は、
この作戦が終わってからコスモスとの関係については話してくれる
と言うが、面倒なことに巻き込まれそうだからやんわりとお断りして
みる。

それなのにどうせ聞きたがるだろうみたいな空気では話を進めるか
ら困ってしまうが、すでに黒雪姫とは一蓮托生などころもあるので聞
いてやるかと諦めて了承。

また遅れるとか文句を言われる前に皆に倣って必殺技ゲージを
溜める作業に乗り出していった。

滞りなく必殺技ゲージを溜めてから、皆を屋上に乗せたユニコの
《ドレッドノート》は時速40km程度の速度を維持して山手通りへ
と到達し、その速度のまま予定通り渋谷方面に南下して北上するルー
トで目的地である旧東京タワーを目指す。

その道中は2人くらいが周囲への警戒に当たって、残りはりラック
スしながら雑談といった緩い感じでやっていたが、新宿戦域でも渋谷
戦域でも目黒戦域でもバーストリンカーやエネミーなどに遭遇する
こともなく、不気味なほどにはスムーズに品川戦域まで到達。

その品川戦域から北上し、港区戦域へと入る頃には、その視界にも
旧東京タワーであろう巨大な白亜の塔が見えてきた。

最後のオシラトリとの遭遇もないまま、30分かけて旧東京タワー

のある芝公園へと辿り着き、その白亜の塔の前でドレッドノートを戻し全員が地面に降り立ち、この天辺にあるというフーコのプレイヤールームを見えるはずもないのを見上げてみる。

何せ現実世界の縮尺と同じなら、この旧東京タワーの天辺までは333mあるということで、これからこれを登ろうというのだから手段も限られてくる。

「さて、移動中に言おうかなあとは思ってたけど、どうすんのこれ？」

「あら、アンタも登ろうと思えば登れそうじゃない？」

着地のリカバリ手段こそあれど、これを登るとなるとさすがにハルキに運んでもらうのが最善だろうなあと思いつつ、一応は黒雪姫も何回かに分けて運ぶ案でいたようだった。

しかしサアヤはなんてことないみたいな態度で《ブレード・ファン》を肩から下ろしてみせ、パドもパドで壁面に触れてみてから「たぶん登れる」とか言い出す。

確かにパドにはビーストモード時に壁面走行能力はあったが、あれにはゲージ消費があるはずだと思ったら、ケロツとサラツと「移動中にボーナスで《常時全面走行》を取った」とかでゲージ消費なしでいけるようになったらしい。

そのボーナス取得の早さには一同が驚愕し、そこからボーナス取得の再選択の方法があるにはあるといった話になったが、察しの良いメンバーは一樣にあきらを見て現実的ではないなと結論し、察しの悪い子達にはあきらが改めて説明することで納得の流れに。

確かにセイリユウの《レベルドレイン》を食らってレベルが下がれば、取得していたボーナスが失われて、新たにレベルアップすればボーナスの再選択はできる。

だがそのためにわざわざセイリユウを怒らせてレベルドレインだけを食らって帰ってくるなど出来るはずがないとして、あきらからも黒雪姫からも実行しないようにと念押しがあった。

それらを経て、ようやくタワーを登る段階に戻って、先行するようにパドがまずビーストモードへと変身し、その背にスモールサイズの

ユニコとマリアを乗せて掴まらせると、足の肉球らしきものがちゃんと壁面にくつつくかを確認して、

「K。たぶん頂上まで登れる」

「た、たぶん!？」

「……おそらく登れる」

「ぜ、絶対じゃないとダメですミヤアさん!」

そんなコントを繰り広げてから平面を走るように壁面を登っていつてしまった。

それを見送りながら今度はサアヤがその手のブレード・ファンを広げて構えると、何をやろうとしてるかをわかつてるユリが真上辺りにジャンプして緩やかに降下。

そのユリが地面に着地する前に広げたブレード・ファンを真上へと振り《ブラスト・ゲイル》を使うと、それと同時にブレード・ファンをストレージに戻して流れるように突風に煽られる直前のユリの両足を掴んで急上昇。

「んじゃお先い」

「あつー、それズルい!」

ブラスト・ゲイルは何か不動のもの——破壊不可のオブジェクトなど——に当たるまで直進を続けるという特性があつて、その特性とユリのアバターの軽さとアビリティが組み合わせれば、実質的に突風に乗っていれば無限上昇が可能になる。

実際には風という現象が起こせる高度までということになるが、旧東京タワー程度の高さなら余裕で届くだろう。

さすがは旧プロミの最強タッグは熟練度が違うなあ、と割り込む余地すら入れされてもらえずに悠々と上昇していった2人を見送り、今度はフーコが相棒である謡を抱き上げて《ゲイルスラスト》でさつさと登っていつてしまい、残りはテルヨシ、黒雪姫、ハルユキ、チユリ、タクム、あきらだけとなる。

「さて、ハルユキ君。この人数だとさすがに2回に分けねばならないかな?」

「そう、ですね……災禍の鎧の時みたいな運び方でも重量的な問題が

ありそうです」

「あー、あの飛び方ね。アキちゃんも形を変えられるからハルユキ君の体にくっつけばいけるでしょ。となるとオレがネックか」

「だから2回に分ければいいだろう。そのあとにハルユキ君に土下座でもなんでもしろ」

「いやあ、最近はオレの土下座の価値が下がりつつあるのでそれは避けたい。だから自力で登ってみるわ」

残りの人数的にはハルユキでも分けて運ばなきゃならない感じではあったが、両腕で黒雪姫とチユリ。両足にタクムをぶら下げて、体にあきらをくっつけければテルヨシを残して運べそうなことにテルヨシが気づいてしまう。

それならあまりやりたくはないが、余計な手間を増やすのもあれだから損な役回りになる発言を試してみれば、その方法がわからない一同から疑問が飛んでくる。

まあ仕方ないよなあと思いつつ、サアヤにも登れるじゃないとか言われたのもあって、とりあえずやってみることにして壁面に向けて軽い助走からジャンプ。

壁面を蹴って少し上昇して体を反転させて、今度は壁面に背を向けて足を前に出し《インスタント・ステップ》でその足場を蹴って少し上昇しながらまた反転して壁面を蹴ってジャンプ。

これを繰り返せば、一応は理論上で登ることはできるが、5mほどの高さから着地したテルヨシを見ての一同の反応は冷ややかだった。

「そんな方法で333mも登る気力があるのか？」

「テル君、あまり無理は良くないの」

「テル先輩ってやっぱりちよつとバカなんですわね」

「登頂と気力との戦い。どちらに分があるかと問われると……」

「あの、僕がすぐに戻ってきますから、先輩は大人しく待ってた方が……」

「……………ふんぬー！ なんじゃいなんじゃい！ 儂だつて根性あるところ見せたるわボケエ！ 登ってみせりゃエエんじやろオラア！」

いくらデュエルバターに肉体的な疲労——呼吸や筋力低下など

——がなくても、1回1mの上昇としてそれを300回以上も繰り返すのは精神的に折れる。

その精神力が尽きた時は地面まで真っ逆さま。また登り直しになったら登ろうという意思さえも砕かれるのは間違いない。

それを察したからこそ、一同の冷ややかな反応は納得できるのだが、こうも声援なしの反応をされると逆に奮起してしまう。

何がなんでも登頂するしかないだろうと、怒りと同時にアドレナリンも出し始めたテルヨシは、それが切れる前に怒りを力に変えてタワーに登り始める。

奇声に近い雄叫びを上げながら連続壁蹴りジャンプで登っていくテルヨシの姿は端から見たら珍妙極まりないだろうが、そんな体裁を気にするよりも始めから無理と断言してきた黒雪姫達への怒りが上回ってる現状、どうでもいいことなのだ。

とはいえ登る速度的には秒速2m程度。

単純に考えても登頂までは160秒くらいはかかってしまうため、後発のハルユキの飛行にもあつさりと追いつかれて、1度だけ速度を合わせたハルユキによってまたボルテージの上がる煽りが黒雪姫達から飛んでくる。

「まだ50m程度だぞ。全体の7分の1くらいだが、大丈夫か？」

「クロウが上から戻ってくるまで落ちないでくれればいいと思うの」

「うわあ、本当にあれで登れてる……現実だったらギネス認定できちやいそう」

「これはもうテル先輩のアドバイザーのステータスが成せる技だね。それでも登頂は気が遠くなるけど」

「あの、出来るだけ早く戻ってくるので、それまでは頑張ってください」

「茶々を……入れる……暇が……あるなら……さつさと……行けごらあああ！」

こっちは踏み外さないように集中してるのに横からやいやいやいと言われると腹が立ちまくり。

それほど煽ってもいないはずのチュリの言葉でさえボルテージが

上がってしまったる今の状態は割とおかしいが、何でも怒りに変えでもしないと登りきれそうにないことを本能的に理解していたっぽい。そうした怒りの補充をしてから先に飛んでいってしまったハルユキ達を見る暇もなく唸りながらジャンプを繰り返していった。

そしてそこから80秒ほど登って残りが100mを切っただろうタイミングで、上からハルユキが降りてくるのをチラツと確認したものの、ここまで来て自力で登りきれないのは男じゃないと、すでに怒りのボルテージは切れてただの意地で登っていた。

だからここまで来るまでに一気に距離を稼げそうな珍技を思いついていたテルヨシは、近寄ってきたハルユキを手で制してから、壁面を蹴って空中に躍り出たところで《テイル・ウィップ》をとぐる巻きにして足下へと持つていき、そのテイル・ウィップを足場にして接地。《インパクト・ジャンプ》！」

そうすることで落下を始める前に真上へと飛ぶための角度を有した足場の確保をしてインパクト・ジャンプを発動することができ、一気に40mの大ジャンプに成功。

必殺技ゲージを満タンにしていたので最大4回使えるインパクト・ジャンプをもう2回使って残りの距離を登ったテルヨシは、最終的にタワーの天辺より15mほど高く登ってしまい、急に現れたテルヨシにちよつとビックリした一回を見ながらに芝生の地面に華麗な着地を決める。

「フツ。我ながら自分の才能が怖い」

「……バカさ加減で言えばグラフにも負けず劣らずな気がしてきたぞ」

「そうね……デタラメって意味ではそうかもしれないわ」

「あまりグラフには似ないでほしいの」

「グラフさんと同じく扱いが難しくなれると困るのです」

「そりゃ無理って話でしょ。同じバカ仲間のモビールの《子》よ?」

「安心せいテイル。主がバカでも構ってもらえる範囲に留まればまだ大丈夫じゃ」

「NP。もうバカの仲間入りしてる」

「むしろテルからバカを取ったら何も残らねーだろ」

「バカなくらいがちようど良い」

「マリアちゃんは何気に酷い」

「ぼくはこの突き抜け方はちよつと羨ましいと思えてきます」

「男として憧れちゃダメな流れ、だよなあ」

よく考えれば割と凄いいことをしたのだが、それを素直に褒めるところか呆れてしまった女性陣の反応が大変よろしくないが、同じ男のハルユキとタクムだけは羨望の眼差しを向けてくれたので、あまり男に好かれてもと考えるテルヨシも、この時だけはハルユキとタクムに泣きついてしまったのだった。

Acceleration Second 45

《東京ミッドタウン・タワー》攻略作戦の前に旧東京タワーの天辺にあるフーコのプレイヤーホーム《楓風庵》で休息を取ることとなったテルヨシ達は、アホみたいに労力を使つて登つたテルヨシを除いて全員が無事に登頂。

どうせ休息を取るために来たから疲れるのは構わないのだが、自分だけがこうも疲労度で勝ると素直にハルユキに運んでもらつた方が良かったと、後悔先に立たずなことを思いながらも、アホみたいな方法で登つて呆れる女性陣と違って、尊敬の眼差しで見るハルユキとタカムには口が裂けても言えるはずもなかった。

旧東京タワーの天辺は《黄昏》ステージでも青々とした芝生に覆われた庭園で、中央には小さな泉とその中心に離脱用のポータルがあった。

こんなところから正規離脱できるバーストリンカーなんて限られてるだろうなあと思いつつ、うっかりそこに入つて振り出しに戻る。なーんてバカなことにならないように一応は注意しつつ、フーコがプレイヤーホームの鍵をストレージから出してそこにあるだろう場所に近づくと、白壁に緑屋根の可愛らしいコテージが出現。

直径20mほどの円形の塔の上に建つ楓風庵は普通の一軒家くらいの大きさがあるので、一応は全員が入ることはできそうだが、多少は窮屈な雑魚寝は仕方ないかなといった割とギリギリな感じ。

「……これは仕方ないよねえ」

「はい女性陣ー。テルが雑魚寝にかこつけてみんなにセクハラしようとしてまーす」

「セクハラは犯罪ー」

「まだ何もしてませんけど!?!」

そうした考察を顎に手を当てて考えていたら、完全に思考を読んだサアヤが速攻でやりそうなことを潰しにかかってきて、即座にマリアも批判してくる。

そうなってしまうと楓風庵に入ろうとしていた女性陣の冷ややか

な視線がテルヨシへとグサグサと突き刺さり、何やら集まってヒソヒソ話まで発展。

何を決議してるのかなんとなくわかっていながら、下手に何か言っ
て印象を悪くするのは避けるべきと本能的に判断。

「すまないテル。私達も苦勞して登ってきたお前を勞つてやりたかつ
たが、生憎と楓風庵で全員が休むためにはスペースが確保できなさそ
うでな。邪な感情を持つお前が屋根の上で休んでくれれば安泰なの
だが……」

「すまないとかこれっぽっちも思つてない感じが溢れまくりの感情の
なさが怖いんですけど？ 姫の後ろのお嬢様方なんてクスクス笑つ
てるのが雰囲気わかるんですけど？」

その決議の結果を黒雪姫が何の感情の起伏もなしで告げてテルヨ
シの寢床が決定されてしまい、すでに楓風庵に入りかけていた他の女
性陣も完全なる無感情の謝罪の雰囲気でした。

どうやってもここから楓風庵の中で休むには泣き落とししかない
とわかりきつてる状況だが、割とマジで疲労感が出てきたテルヨシも
これ以上のテンション維持も反論するエネルギーも出したくない感
情が上回る。

なのでテルヨシの反応を楽しみたかった黒雪姫達を余所にため息
を吐いてから《テイル・ウィップ》を引っかけた屋根の上に登り、緩
やかな傾斜の上に寝転んでふて寝を決め込んだ。

「どうやらあれも思った以上に疲れていたようだ。まだ弄り足りない
だろうが皆も適当に休もう。誰がどこで寝るかは公平な話し合いが
必要なようだが……と言つてるそばから赤いの！ ハルユキ君の隣
に移動するな！」

そこからは黒雪姫達も本格的に休息モードに移行して、寢床争奪戦
らしき言い争いが少しだけ勃発していたが、それも終わればこれだけ
の大人数にも関わらず楓風庵の中は静かなもので、静寂に包まれた旧
東京タワーの天辺で時おり吹く風を受けながらテルヨシも暫しの眠
りに就いていった。

——コンコンツ。

黄昏ステージの景色は時間経過でも変化はないので、起きてすぐはどのくらいの眠りであったか定かではないが、累計ダイブ時間から逆算することはできる。

下から屋根を軽くノックする音で目覚めたテルヨシは、そうして眠ってから5時間程度が過ぎていることを認識して、次いでノックがした足下を見てみる。

するとまだみんなが寝ているからか声は出さないものの、わずかに見える右手がひらひらと動かされて「上げて」と訴えてきていたので、テイル・ウィップを伸ばしてその人物を拾い上げて隣に座らせる。

「割とぐっすり眠ってた感じね。もう少しで声出しそうになってた」「何回かやってたのね。気づかなくてごめん」

まあセクハラ未遂のテルヨシに自分から近づこうなんて人はサアヤくらいのものだが、実際に隣に座られると安心してしまうのは、ああいう未遂事件があってもサアヤが嫌わなideくれているとわかったからか。

サアヤもなんとなく嬉しそうな雰囲気が見てとれるので肩でも抱き寄せてみようかなと思つて手を伸ばしかける。

「まあ私もあれが起きる気配で起きたところがあるしね」

しかしその前に言葉を発したサアヤは、言いながら塔の西側。

夕日を正面に据えるベンチを指差すのでそちらを見ると、そのベンチに座つて和やかなの雰囲気話合つてる黒雪姫とハルユキを発見。あれということはサアヤが言つてるのは黒雪姫の方で、ハルユキはサアヤと同じで後から気づいて近寄つた感じだろうが、向こうはこっちにも気づいた上で話をしているようなので、あんまりラブラブして他の人に弄られる元を作るのはサアヤにも悪いかと抱き寄せるのは中止。

「そういうえば《ISSキット》の進展はあつたの?」

「特にないかなあ。ライダーのアビリティによって作られてることだけは疑いようがないつてくらいで、実際に誰がどうしてつてところはさっぱり」

話し声は抑えれば向こうにも聞こえなくはできるが、やはり良い雰

困気というのは漂う空気で察せるところがあるので、そこも抑える意味で少し真面目な話から切り出してみる。

するとストレージから渡していたISSキットを取り出して上に掲げ、そこに刻まれた交差する拳銃の紋章を見ながら返答。

「でもいいわよ。上手くいけば今回の作戦でその謎も解けるかもしれないし、もしもライダーが何かの拍子で現れるようなことがあっても、私達がやることは変わらない」

「その過程でライダーと戦うことになっても？」

「うん……………ううん。やっぱり嘘ついた。たぶん、すぐには切り替えられないと思う。きつと色んな感情が渦巻いて押し寄せてきて、何をすればいいのかわからなくなるかもしれない」

「それだけライダーと積み上げてきた歴史や思い出があるんだもんね。仕方ないよ」

珍しく弱音みたいなものを吐き出したサアヤに対して、そうやってしまうことを仕方ないと言いながらも、そこまでサアヤの心を乱してしまうライダーに少しだけ嫉妬に似た感情も抱いてしまう。

プロミの創設メンバーで黎明期からの付き合いなのだから、たかだか2年ちよつとの自分とは積み重ねた時間さえも段違いなのは言うまでもないが、密度では負けてないつもりではいたのだ。

だからライダーへの対抗心も含めてサアヤに「オレがついてる」的なことを続けて言おうとしたのだが、そんなことを言って実際にそんな状況が訪れてしまった時、サアヤをちゃんと支えてあげられるか確たる自信がなかった。

そうした自信のなさが情けなく思えて言葉を詰まらせていたら、スツとサアヤがテルヨシの右手に左手を絡めて握ってきて、視線は前のまま口を開く。

「だから、もしも私が迷ったりしたら、テルが私を引っ張って。私達がしていることが正しい。ライダーの方が間違ってるって、100%の自信で私を引っ張ってちょうだい」

内心を読まれたわけではなかったのだろうが、自分が言うべきでも躊躇ったことを、サアヤからしてほしいとお願いされて少し驚く。

サアヤは良くも悪くも自己完結タイプの他人の意見に左右されにくい性格をしていて、第2世代という微妙な時期のバーストリンカーなこともあって人を頼ることに積極的ではない。

それは簡単に人を信用しない疑心暗鬼な部分もあるが、環境がそうさせてしまったのなら仕方ないし、自力で考える力が備わった要因でもあるから全てが悪いことではないかもしれない。

そのサアヤがテルヨシのことを信用して頼ってくれたのだ。意味は十分に汲み取れる。

「……………正しきなんて曖昧なものは結局、法とか誰を信じるかとかになってくるんだよね。だからオレが正しきを説いてもサアヤがどっちを信じるかって話になっちゃう」

「……………そっか」
「それでもオレはそういう状況になったら、自分の精一杯の気持ちをサアヤにぶつけるよ。それがサアヤの心に響いてくれたら良いと思う」

「……………いつもなら自信満々に『オレを信じろ』とか言うくせに、たまにクソ真面目なこと言われると困惑しちゃうわ」

誰かを信じ抜くというのはそれ自体が凄いことだが、それも諸刃の剣であることをテルヨシは知っている。

信じることは大事だが、それがいきすぎて盲信的な思考に陥ってしまえば、今までサアヤが培ってきた自分で考える力を失うことになりかねない。

だからここでサアヤが言うように「任せろ！」といった言葉で安心させてしまえば、テルヨシが間違った判断をした時にサアヤまで巻き込んでしまう可能性がある。

寄り添い合うのと依存は似て非なるものだが、その境界はハッキリと見えるわけでもない。

それでもサアヤがテルヨシに依存してしまうことだけはあつてはならないと考えたからこそ、テルヨシの返事は最終的な判断をサアヤに委ねるものとした。

きつとサアヤの本心は胸を張って任せろと言ってもらいたかった

のだろう。

サアヤだつて中身は弱い女の子なのだから男にリードされたい本能は必ずあるし、気持ちの上下だつて若いゆえに幅が大きいものだ。

「でもまあ、たまりに頼り甲斐があるくらいの方が、テルは良いのかもね。割合的にも夫婦で主導権を握ってるのは妻の方が多いって言うし、母性を駆り立てる部分も必要か」

「私が支えてやらなきゃーつてやつね。サアヤはあそこの黒い方と違つて家事スキル高いから、結婚生活は甘えちやいそうで困る」

「結婚生活つて……話が飛びすぎじゃない?」

「夫婦の云々を持ち出したのはサアヤの方じゃん。それともサアヤは将来オレと結婚する気がこれっぽっちもないと?」

「そりゃあ……このまま順調に付き合つていつて、どつちかが経済的に安定するなら考えるけど……つて、中学生に結婚云々を語らせるな」

「でもオレは中学卒業からは本格的にミヤアの店で働く予定だから、オレ的にはそう遠くない話なんですよ」

「はっ? アンタ高校行かないの? 雇用の制度が変わつたとはいえ、最終学歴が中卒つてやつぱり見る人からすればあれよ?」

どうなるかわからない状況で迷いが生じた際にどうするかは決めたらしいサアヤが、堅苦しい話を嫌つてか割と脱線気味のワードを混ぜて口を開くと、狙い通りにワードに食いついたテルヨシいつもの夫婦漫才を披露。

この過程で今後の進路について初めて話したら、やつぱり高校に行かない選択は驚きだつたらしい。

こういう話は今後の交際にも影響するものだが、客観的にはまだまだ批判もある雇用制度の改正で可能な選択にも否定してくるわけでもなく受け入れたサアヤは、順番的には自分も話さないとと思つたか漠然とした進路を話してくれる。

「まあアンタがミヤアやアキのお母さんに見放されない限りは路頭に迷うことがないと思うしいけど。私はそんな大胆な決断はできな

いいし、周りと同じで高校、大学って通うと思う。その過程でやりたいことを見つけられなかったら、その……専業主婦でもいい？」

「それでサアヤが納得できるならいいけど、やりたいことを我慢して主婦に落ち着くのだけはオレも嫌だよ」

「それはこっちの台詞なんだけど。アンタがそうやって早くに働くことを選択してるのって、マリアのためでもあるんでしょ？ マリアを預かってる事情は聞いたけど、やっぱり学生と社会人って立場の違いは大きいもんね」

「否定はしないよ。でもミヤアの店で働くのはやりたいことを諦めたからじゃないよ。これでも薫さんにはミヤアと同じくらい目をかけてもらってますからな。作った洋菓子が美味しいって言ってもらえるのは素直に嬉しいし、やり甲斐も感じてる。そして将来の店長候補ですぞ？」

「パティシエールって定年退職とかないから、アンタがミヤアの店の店長になるとか何十年後の話よ」

「顎に立派な髭をたくわえた頃になれるんじゃないかなあ……」

「私、髭は苦手だから伸ばすのはやめてほしいかも。やりたいなら止めはしないけど」

そんな未来予想図を描きながら、真面目な話からいつしか他愛ない雑談へと変わっていった2人の会話は、楓風庵で寝ていたみんなが起きてくるまで続き、そうして将来のことを話したことで、なおさら今のサアヤとの関係を終わらせたくないと思えることができた。

それはイコール。ブレイン・バーストを何がなんでもアンインストールしてやらない覚悟と、サアヤを守り抜く覚悟をしたということだ。

全員が起きてきて、泉のほとりに集まって腰を下ろし準備は万端とあった状況になると、東京ミッドタウン・タワーのある方向に背を向けて立った黒雪姫が皆に向けて作戦の前の会議を始める旨を伝える。「いま、ちょうど10時間が経過したところだ。残念ながら……というべきか、変遷は発生しなかった。しばらくはこの黄昏ステージが続くだろう」

それに当たって現状の確認のためにあれこれと話す黒雪姫は、神聖系ステージではメタトロンに若干のステータス補正がプラスされてしまう事実と、そもそも補正があろうとこちらの攻撃が《地獄》ステージ以外では通らないことを話す。

なのであくまでも目的がISSキット本体の破壊であることと、それが成せるならメタトロンは最悪無視しても構わないと方針を出す。

当然、事前にそういうことに決まっていたので方針に関して異論がある者はいなかったが、やはり言うべきことは言うタクムが「タワー内部に入れば攻撃が止まるのか」と疑問を口にする。

もちろん前例がないことなので黒雪姫もそこに関しては一抹の不安を拭い去れず言葉を濁しながら、実際にその攻撃を見たハルユキに状況分析を尋ねる。

それによる分析では半径200m以内に入ったデュエルバターが即座に狙われるだろうとのことで、適当なオブジェクトをテリトリーに投げ込んでレーザーを無駄撃ちさせ、エネルギー切れを狙う作戦も出来なさそうだった。

またメタトロンの反応からレーザー発射までのタイムラグが2秒程度しかないこともあり、その間でタワー内部まで全員が走り抜けるのはまず無理だと判断。

不安要素がある中でやるしかない作戦は大小違いはあれど緊張感が漂い、話だけなら本当にメタトロンに対してはハルユキの《オペティカル・コンダクション》頼りになりそうだと思っていたら、そのハルユキが自ら立ち上がって黒雪姫と一同の間に踏み出して口を開く。

「大丈夫です……みんながタワーに辿り着くまで、僕がちゃんとメタトロンのレーザーを防ぎますから」

ハルユキが自分からこういうことを言うのは性格的にもかなり珍しいことだ。

だがハルユキも自分の役目の重要性をちゃんと理解し、自分が弱音を吐いていい場面ではないことを察して、自らに発破をかけたのだろう。

期待を背負うというのはなかなか重圧がのしかかるが、そうしてハルユキが覚悟を示せば、謡の「よろしくお願いするのです、クーさん」の発言を皮切りに茶化するようなことを言わずに全員が何かしらの声援を贈りハルユキを鼓舞した。

そうしてハルユキが頑張ってくれるなら、自分達もまた己に与えられた役目を絶対に全うしてやるといった覚悟と一緒に。

「セイリユウ戦に続いて、またしても大役を担わせてしまうことになるが……しかしクロウ、キミの翼こそがネガ・ネビュラスと、そして加速世界の未来を切り拓いていくのだと私は信じている。ISSキツト本体を破壊し、世界を覆わんとしている闇を払い……そして我々の大切な友を救うために、キミの力を貸してくれ」

「よくもまあそんな言葉がスラスラ出てくるもんね。ロータスって割とファンタジーもの好きでしょ」

「語彙力アピールですね、わかります」

「サアヤさんもテルも言わなくてもいいこと言ってる」

その鼓舞を締めくくる黒雪姫のカッコ良い言い回しは相変わらずだが、なんとなく流れるに緊張を和らげておこうかとアイコンタクトからテルヨシとサアヤがハルユキの返事を待たずに割り込み、マリアには呆れ気味にツッコまれて周囲から小さな笑いが起こる。

その笑いのネタになった黒雪姫はカッコ良く締めに行ったからか不満そうな雰囲気を出す、その笑いが収まってからハルユキもちやんと黒雪姫に向き合って言葉を紡ぐ。

「僕の力はずっとあなたのもので、黒の王。一言命じてくれれば、僕はどこまでも飛んでみせます」

その言葉を受けた黒雪姫は、まだ何かやろうとしているのか、1歩ハルユキへと歩み寄ってから、右手の剣を前へと出してその手に穏やかな過剰光を纏ってみせると、1本の剣だった右手の先がハッキリとした五指へと変化してみせる。

攻撃目的ではない心意ながら、かつて握手もまともにできないことを嘆いていた黒雪姫がこの心意を生み出した意味を汲み取ることは簡単だが、こうして形にすることがどれだけ困難なことだったかは計

り知れない。

「戦おう、共に」

その五指へと変化した右手をハルユキへと差し出した黒雪姫は、繋がることを拒絶していたその手でガツチリと握手を交わし、次いで残りのメンバーとも順番に握手を交わしていった。

そして最後に回されたテルヨシにも手を差し伸べた黒雪姫に手を伸ばして握ろうとした瞬間。

突如としてキンツッ！ という鋭い音と共に黒雪姫の右手が元の剣へと戻り、握ろうとしていたテルヨシの右手が触れる0.5秒前の出来事に慌てて手を引き戻す。

「あつぶな！ 作戦前に部位欠損させないでくれる!？」

「ン、すまない。この心意もまだ持続時間が安定しなくてな。さすがに30秒も経つと限界だったようだ。決して故意ではない」

「どっちか判断がつかない感じで言わないでくれますかね。怒るに怒れない」

「だからわざとではないと言っている。お前だって貴重な戦力なのだから、こんなどうでもいいところで部位欠損させて我々に得があるのか?。」

「いや、ないけど」

「だいたい、いつもギャグ担当に回るからまともな時にも弄られていると錯覚してしまうのだ。つまりお前が悪い」

「何でだよー」

一瞬、確実に狙っただろと思ったのだが、割とマジで限界で戻ってしまったのが声色でわかると強く言えず、しかし普段が普段だから疑心暗鬼になってしまう。

そのせいで黒雪姫も開き直ってお笑い担当のテルヨシが悪いと逆ギレし意味不明なやり取りになるが、梅郷中の3年コンビの漫才には後輩達がまたやってるとクスクス笑い、釣られて他のみんなも「ナイスコンビ」と茶化してきた。

意図しない笑いには当人達が冷める法則で口喧嘩をやめた2人は、こんな時でも喧嘩しちゃう自分を反省しつつ、締まらない感じの雰囲気

気を引き締めるためになんとか真面目な言葉を引き出す。

「まああれだよあれ。笑うつてのは健康にも良いわけで、これでみんなの体調も万全だ！」

「それは苦しいが……皆の緊張が適度に解けたならそれに越したことはない。ではスパッと解決して楽しい文化祭に戻ろうではないか」

こういう時に語彙力が欲しいー！

とかなんとか思いながらフォローに回った黒雪姫の言葉に一同が「おー！」と唱和し、ようやく東京ミッドタウン・タワー攻略作戦の幕が開けることとなった。

Acceleration Second 46

10時間ほどの休息と1時間程度のブリーフィングを旧東京タワーの天辺の庭園で行ったテルヨシ達は、ようやく本来の目的である《東京ミッドタウン・タワー》を目指して移動を開始する。

降りる際はみんな——黒雪姫とハルユキとフーコと謡が含まれない——して楽しんでユリの足を起点に連結しどこかのサーカス団かと言うような縦長の人の列となつて降下し……たのは一瞬で、さすがのユリの《デイセント》でも8人分もの重量を支えるには至らず、ほぼ落下に近いスピードで降下。

すぐにヤバいと判断した下の方のパドがビーストモードで壁面へと跳び、それに乗してさらに下にいたユニコとマリアがその背に乗って難を逃れ、テルヨシもあきらを身に纏うユリの足に掴まるサアヤの足から手を離して自分の足に掴まるチュリを回収しお姫様だっこ。

もう素直にこうしておけば良かったなあとか失敗に終わった降下作戦に苦笑いしながら、キヤーキヤー楽しそうなチュリに一応はしっかりと掴まっておくように言つて、10秒足らずで見えてきた地面を見てから、激突のほんの少し前に地面と水平方向に《インパクト・ジャンプ》を発動。

先日のサーベラス戦にて身につけた新たなリカバリー方法によって落下エネルギーを殺して横への移動エネルギーに変え、ズザザア！ と地面を捉えて着地。

「おおー！ テル先輩やるうー！」

「チュチュは度胸あるよねえ。ほぼ落ちてたのに怖がらないんだもん」

「それでもテル先輩を頼りにしてますからね。まさか出来もしないのに真っ先にあたしを抱えたわけじゃないですよねえ？」

「ホント、みんなチュチュくらい素直に信頼してくれればいいのに……」

「それは無理ですよ。テル先輩つて黒雪先輩とかフーコ姉さん達と

比べたら自信満々な感じがちよつと足りないじゃないですか。そういうのって女は鋭いですから」

「バーストリンカーになる女性はみんな度胸がありすぎる気もする」
無事に地上に到着したので抱えていたチユリを下ろして会話しながらみんなの到着を待つことになったのだが、嬉しいこととなかなかキツイことを半々くらいで言ってくるチユリに、裏表のなさが良くも悪くも出ているなあと苦笑。

そりや姫達の度胸を上回るには足りないわな、とかなんとか素直に思っちゃった時点でテルヨシの敗北。

彼女らからの信頼を得るのが大変そうなのを今さらながらに認識してその彼女らが降りてきたのを確認。

1分程度で再び全員が揃って、サーカス団降り作戦の失敗を笑い合ってから気を引き締め直して移動を再開。

東京ミッドタウン・タワーまでは1、2km程度だが、作戦は電撃作戦のようなもので、余計な不安要素——他のバーストリンカーやエネミーなど——を寄せ付けなかったためにユニコのトレーラーは使わず徒歩で移動。

歩く際にはいくつかのグループが形成され、先頭に黒雪姫とユニコ。その後ろにチユリとタクムが続き、パドとあきら、さらに後ろにハルユキときて、テルヨシ、サアヤ、マリア、ユリが固まつて、しんがり殿をフーコと謡が務めてくれる。

これから4大ダンジョンのボスエネミーとの戦闘が待ち構えているというのに、パーティーの緊張感是非常に良い感じ。

メタトロンが初見の人の方が多いのにこれはなかなか凄い状態のだが、パツと見てもレベル9が2人。レベル8さえ今や4人。レベル7も3人——当時のあきらがこのレベルだったのを考慮した——いるのだから、その平均レベルの高さこそ異常に思えてきた。

「あー、こう物事が順調だと、どっかに落とし穴がありそうな気がしてくるわあ」

「ガストよ、そういうことは言葉にすると現実になるものじゃぞ」

「知ってますー！ 言霊ってやつですよね？」

「さてはメイデンからの受け売りだろ。メイデンはそっちの雑学ありそうだし」

「違わないけど違うもん！　ちゃんと2人で調べたもん！」

ここまでイレギュラーは少しあったものの、結果として無事にメタトロン攻略にまで辿り着くといったところに差し掛かれば、サアヤのように運の良し悪しを気にするのも仕方ない。

吉凶というのはほぼプラマイゼロに収束するとかなんとかバラエティーでもやっていたし、そこから考えたら今は確実に良い方に傾いているため、せめてこの作戦が終わるまでは傾いたままであった欲しいと思う。

それこそ現実世界でその分の不幸を被っても構わないと思えるくらいにはモチベーションも高まってきているし、運だけに頼るような気構えでいるつもりもない。

それでもわざわざサアヤが口にしたのは、心のどこかで抱いている漠然とした『やれないはずがない』が慢心にならないようにするため、だと思いたい。

サアヤは本心を棘で隠しちゃうツンデレさんだが、本当に本心を口にしちゃっただけかもしれないし、それを確認すると殴られそうだからやめておいた。

不測の事態など加速世界ではよくあることと。そう思うことでイレギュラーにも反応を良くすることはできるので、思考が止まることだけは避けようと考えていたら、前を歩いていたハルユキがパドとあきらと合流して何やら話をしていった。

内容を聞いていたら、かつてあきらが自分の救出のためにレベルアップを見送る行為……成長を停滞する行為に及んだパドに対して、心意技で記憶からあきらの存在を消そうとしたことが語られ、それも失敗に終わったこと。

そして今はレベルアップだけが成長なのではないと思いきらされたのだと。

そんな話にいつの間にか全員がハルユキ達に近寄って歩幅を合わせて移動していて、あきらの話に黒雪姫もかつてグローバル接続を

切って隠遁生活を送っていたが、それも停滞ではなく今に繋がっていると話す。

さらにユニコもパドのレベルアップが見送られていた事情を知るのがプロミでは自分だけだったが、ちゃんと話せばメンバー全員が理解してくれると信じてると、案に気にするなと言ってみせた。

そうした2人の王の話にあきらは、過去を否定して今と未来を遠ざけるよりも、過去を受け入れて今を肯定し、未来に繋げることに意味があると意識を変えることが出来た。

「……繋げましょう。過去を、未来へ。そのために……今を、全力で戦いましょう」

そんな話に各々が物思いに耽^{ふけ}っていた中で、いち早く口を開いたハルユキは、もう500mほどにまで迫っていた東京ミッドタウン・タワーの天辺に感じる存在感。メタトロンにまつすと指さすと、皆も続いてメタトロンへと宣戦布告の指さしをしてみせるのだった。

その宣戦布告が届いたかどうかはわからないが、作戦前にパーティーの士気が上がったのは良いことなので、その勢いを殺さないように皆に振り向いて作戦の最終確認を始める。

「では、ここでもう1度作戦を確認しておこう。メタトロンのアグレッション^{アグレッション}は、ハルユキ君が《アイアン・パウンド》から伝えられた情報によれば半径200mとなっている。だがあまりギリギリまで近づいて先制攻撃されてしまったては元も子もないので、待機位置はタワーから250mの地点とする」

話しながら剣の先端で白い敷石に小さな正方形を描き、それをさらに囲うように大きな正方形を描く。

「小さい四角がミッドタウン・タワー、大きいのは東京ミッドタウンの敷地だ。敷地の北半分は公園になっていて、タワーまで障害物はほとんどない。ゆえに、突入は北の公園から行う」

「んで、まずはハルユキ君のアビリティでメタトロンのレーザーに対抗できるか判断して、行けそうなら前進。2発目までに全員がタワー内部に到達できれば上出来。無理そうならまたハルユキ君に頑張ってもらおう」

「その通りだ。あそこの交差点を右に曲がったら公園の敷地になるが、まずは周辺の警戒をしてくれ。エネミーや他のバーストリンカーがいたならば可能な限りやり過ごして落ち着いてから作戦を開始したい」

真面目な時は真面目にやるテルヨシはみんなにとつて厄介らしいが、熟練度の違う黒雪姫は割り込みも意に介さず話を続け、その指示で全員が移動を再開してまずは公園の入り口まで到達。

黒雪姫の説明通り、公園の敷地内には障害物となるオブジェクトはほぼ存在しなく、ただっ広い草原の先に東京ミッドタウン・タワーである白い巨塔がそびえ立っている。

周囲にも人とエネミーの気配もなく、これならすぐにも作戦は開始できるかと思われてこれから進む公園を最後によく見る。

「……………あれ、なに……………」

視野を広げていたこともあったが、大理石のアーチの手前で止まったチュリに続いて全員がそこで止まり、公園内のメタトロンの反応圏から30mほど手前に奇妙な楕円体のオブジェクトが存在していた。

高さ約7m。横幅も4mはあるそれはエネミーでもなさそうだが、オブジェクトとして出現するようなものもあそこにはないとフーコが指摘したため、正体は不明。

色も夕陽のせいで判然としないが、緑にも見えるし、黒にも茶色にも見える。

テルヨシも見覚えはないそれには首を傾げてしまったが、何やら心当たりのあるっぽいハルユキとチュリが自信なさげに確認し合っていたのを耳でだけ聞き、凝視を続ける。

すると夕陽に照らされていない漆黒の部分で瞬く鮮血色の光が見え、楕円体には見覚えはなかったがその光にはハッキリと見覚えがあったテルヨシは、それが間違いなくISSキットの眼であると確信。

つまりあれはエネミーでもオブジェクトでもなく、ISSキットを装着したデュエルアバターということだ。

「あれは……………敵です！」

それと同時にハルユキも不確かなものから確信に変わったのか、声をあげて皆に警戒するよう呼び掛けて、その声に反応した一同もすぐに身構える。

だがその声が影響したのか、微動だにしていなかったデュエルアバターは長い眠りから覚めたかのようにのっそりと立ち上がり、こちらをいま認識したような気配が漂う。

「あいつ、《マゼンタ・シザー》の仲間なの」

まだ向こうから攻撃してくる気配はなかったが、次いで面識があるっぽいチユリが補足するようにそう口にすれば、この遭遇が単なる偶然ではないと思えてくる。

マゼンタ・シザーの仲間と言うからには、こちらにとつても明確な敵であることに間違いはないので、即座に先制に出ようとしたタクムを制したハルユキとチユリは、あのデュエルアバターに物理攻撃が全く効かないことを教え、すでに判明している弱点もハルユキが「炎と、ええと……」と曖昧なのにチユリが補足して叫ぶ。

「凍結プラス打撃！」

それを聞き終わるよりも早く有効打を放てるユニコ、謡、ユリが前へと出て、ユニコは右手に赤い過剰光を纏って拳を引き絞り、謡も《フレイム・コーラー》に火矢をつがえて発射態勢を整え、ユリも《リトル・ボム》を作り出し、そのリトル・ボムに青い過剰光を纏わせて爆発力を強化する。

「可能ならISSキットを狙え！ 心意技による反撃にも気をつけろ！ —— 撃て！」

黒雪姫の号令と共に放たれた攻撃は鈍重そうなデュエルアバターへとまっすぐに迫って、確実に命中するタイミングに思えた。

しかし3人の攻撃が当たる前に突如としてデュエルアバターの全面が視認できるほど大きく口のように開いて、中身さえ見えないその奥から数発の《ダーク・ショット》が撃ち出されて迎撃。

心意技による激突で爆発が起きるかに思えたが、激突のエネルギーは相殺するように収縮して消えてしまう。

今ので明らかにかおかしいのは、手からしか撃てないはずのダーク・

ショットが複数発同時にデュエルアバターの体の中心辺りから放たれたこと。

謎の現象に観察眼を光らせていたテルヨシは、開いたままのデュエルアバターの口らしき中の暗闇に目を凝らしていると、その闇の中から突如としてデュエルアバターが次々と出てくる。

その誰もが例外なくその胸にISSキットを装着していて、横並びになったその数は14人。

「……………スピン……………」

しかもその中には先日、ISSキットを装着してしまったことを確認できていた《ゲート・スピン》の姿もあり、かなり初期の装着者であることもあって、すでにISSキットの支配に抗えないレベルに達していたのだろう。

そしてそれらを率いるようにして出てきて最前線に立ったのは、彼らに寄生させた張本人であろうマゼンタ・シザー。

赤紫色の細身のスラツとF型で、全身を顔すらも包帯巻きにしたような装甲はミイラ人間といった感じだが、キットの支配すら受け入れて狂気に走っている様子は雰囲気からなんとなくわかる。

最後に彼らを体内？ に収めていたデュエルアバターの体が萎むように小さくなって、そのサイズが2.5m程度にまでなったところで、驚愕するテルヨシ達に対して余裕すら感じる挨拶をしてきた。

「こんにちは、《シルバー・クロウ》。お久しぶり、《シアン・パイル》。また会えて嬉しいわ」

敵としてはそうそうたる面子の前にしてもハルユキとタクムに対して挨拶をするマゼンタの度胸は相当だ。

その自信を裏付けるだけのISSキットの熟練度と信頼があるのだろうか、問題なのはテルヨシ達を前にしても全く動じた様子がないこと。

それはつまりマゼンタ達の集団はテルヨシ達がここへ来ることを事前に察知して待ち伏せをしていたという事実到他ならなく、それは《アッシュ・ローラー》にISSキットを寄生させたのが意図的でこの展開を読んでいたとも言える。

しかしこうもタイミングよく待ち伏せを成功させられるわけがない。

《ブラック・バイス》という例外もあるが、途方もない時間を待ち続けるのは精神的な疲労が半端なく、何カ月も内部時間で待ち伏せをして成功したとしてもコンデイションはボロボロになるはず。

しかしマゼンタ達にはその疲労を抱えている様子は微塵もなく、コンデイションも万全にしか見えない。

その疑問は当然、他のメンバーも抱いているところだったので、話しかけられたタクムが会いたかったとか言うマゼンタに疑問を投げかけると、何故かあっさりとは答える素振りを見せる。

そこからまずはヒントといった形で「待ち伏せにかける時間を感じなければ問題ないでしょ？」とトンチみたいなことを言う。

それである程度で謎に見当がついた黒雪姫が先ほどまで楯円体デュエルアバターの中にいたことを怪しむと、マゼンタも察しの良さを褒める。

その楯円体デュエルアバター《アボカド・アボイダ》の口の中には^{v.o.i.d}虚無しかないらしく、許容量に際限もなく時間すら存在しないから、中にいる間は外の時間を感じないというのだ。

だからマゼンタ達が実際に待ち伏せを開始したのは現実時間で午前9時頃だったらしいのだが、つい今しがたアボイダの口の中から出てきたマゼンタ達は、口の中に入った瞬間からすぐに出てきた感覚なのだとか。

実に5ヶ月ほどの時間を待ち伏せたマゼンタ達はさすがだが、その恩恵を受けられないアボイダ本人は実際にその時間をここで過ごしていたことになり、ユニコもそこを指摘したが、アボイダ本人がずっと寝ていたから平気だと返し、さらに何か言おうとしたのをマゼンタが制してようやくテルヨシ達イレギュラーであろうメンバーに目を向けてくる。

「初めまして、赤の王とプロミのお2人。それから《メテオライト》の破天荒コンビと小さな狙撃手さん。アナタ達は少々予想外だったけれど、会えて嬉しいわ。……アナタの言う通り、確かにワタシはアボ

カドに辛い役目を強いた。ワタシだけでも長すぎる待ち伏せに付き合うべきだったけど、そうしなかった。でも、待つのが面倒だったワケじゃないわよ」

「御託はもういいわ」

マゼンタとしてはこの場で対立する大義名分のようなものを言いたいところだったのだろうが、その言葉をバツサリと切り伏せたサアヤは、手に持つ《ブレード・ファン》を肩に担いで誰にもわかるレベルの闘志をほとばしらせる。

「待ち伏せの疑問が解けたならもういいわ。んで、アンタがそうまでして私達を待ち伏せていたなら、私達がこれからやることもわかって立ち塞がった。なら話し合いなんて生易しい解決策はない。アンタがそうまでしてISSキットを広めたいなら、それを必死に守りなさい。それを私達は粉々に砕きに來たんだから」

「スイツチ入ったガツちゃんさすが……」

「じゃが言うことは間違つたらん」

「悪役っぽい言い回しは気になつけど、どうするよ、ロータス」

「無論、ガストの言う通りだ。そちらに我々と対立する理由があるように、我々にもお前達と対立する理由がある。譲れないことならばバーストリンカーらしく拳で決めるしかあるまい」

「………強引な人。ワタシ、アナタみたいに余裕のない人が嫌いよ、

《エピナール・ガスト》」

「そりやどうも」

どうせ長々と話したところで戦闘になることはわかりきっていたから、サアヤはそんな時間が無駄と判断してすっ飛ばしたが、その強引な進行に不満そうなマゼンタは明らかに苛立ちを見せた。

それでも言ってることは間違つてないからか、仕方ないといった感じで後ろのメンバーにも構えさせたマゼンタは、お返しとばかりにこちらの準備が整う前に先制の気配を出してくる。

「全員、メタトロンの活性化範囲に十分気を付けて、心意技もここぞというタイミングでだけ使え！ 行くぞ！」

短い指示だが要点だけは押さえて全員の認識が統一されたところ

で、返事など待つ暇もなくマゼンタ率いる集団が先制のダーク・シヨットを放ってくる。

「悪いガツちゃん。アンのこと頼む」

「はっ？ 急になに……」

その直前に話を聞きながらもずっとスピンを観察していたテルヨシは、このタイミングになってもスピンはダーク・シヨットを放つ素振りを見せなかったことに疑問を持ち、その答えを確かめるべくサアヤにそれだけ言ってメンバーの集まりから大きく横へと移動。

それをトレースするように統率の取れたマゼンタ軍からも抜けてテルヨシを追ったスピンは、しかしダーク・シヨットを放ってくるわけでもなくアビリティ《ドライブ》を駆って得意の膝立ち走行で急接近してきた。

明らかに自我を失った者の動きではないが、これで確信を持たたテルヨシは、接近から跳び上がって振るわれた豪快な回し蹴りに回し蹴りで迎撃し相殺すると、難なく着地を決めて距離を取り構えたスピんに笑みをこぼす。

「やっぱお前は凄いや、スピン」

スピンがこの場にいるのは間違いなくISSキットの支配によるものだ。

しかしこの局面でもスピンが心意技を使わないのは、もはや意地と言ってもいいほどの強靱な意思によってまだISSキットに抗っているから。

体は支配されてしまっているのかもしれないが、心でまだスピンは戦っている。だから心意技も使っていない。

おそらくこれほどまでにキットの力に抗えているのはスピンの他には誰もいないと確信できるし、この2週間でスピンの悪評を聞くことがなかったのも、キットに抗い続けた結果なのだ。

「お前だけはバーストリンカーとして倒してやりたい。その誇りを守るために、オレが、この手で」

それがいつまで持つのかはわからないし、フェイクである可能性も捨てきれないが、テルヨシがそうしたいのだからもういいのだ。

横ではすでに心意技による凄惨な戦いが始まっていて、激しいエネルギーのぶつかり合いが音と光となって周囲に拡散しているが、こちらにスピンのいかないようにジリジリとさらに横へと移動しながら攻めるタイミングを探っていく。

——バリツ。

しかし不意に、微かといった感じではなく、明らかに電撃にも似た感覚がテルヨシの全身を駆け巡り、本能がその場にいることを拒み、何事かと移動していた横を見ると、公園の敷地の外の建物オブジェクトの屋上に人型のシルエットが出現していて、その脇には明らかに常軌を逸した大砲レベルの砲身と口径を持つ《強化外装》がその銃口をこちらに向けて抱えられていたのだ。

「《バースト・ショット》オオオオ!!」

誰かも確認する暇もなく、そいつから必殺技発声が豪快に叫ばれ、その必殺技には覚えがありすぎたが、まずは全力回避に動いたテルヨシとスピンは、直後に訪れた空間さえも抉るような砲撃が自分達のいた地点に着弾し激しい爆発の余波で吹き飛びかける。

そのあまりの威力で地面が抉れ……はしていないが、草の根も燃え尽きて爆心地とわかる惨状に逆方向に回避していたスピンも呆然としている。

「何で……お前がここにいるんだ」

その衝撃には黒雪姫達さえも動きを止めてこちらを見てきたが、テルヨシはそれを実行した人物がいる建物オブジェクトの屋上に目を向けて眩き、次いで本人に聞こえるように声をあげる。

「《ボツシュ・ルーレット》!!」

Acceleration Second 47

パドにも似た流線型の真っ赤な装甲と女性らしい曲線のフォルム。160cm程度の身長にしなやかそうな四肢。

頭にはテンガロンハットを思わせる造形の装甲があり、能面タイプのフェイスからは全てのものを敵と見なしたように紺碧の双眸そうぼうがキラついている。

「……ルーラー！ どうして君がここに……!?!」

《マゼンタ・シザー》が率いる《ISSキット》装着者の集団との戦闘が始まってすぐ。

そこに割り込みをかけるように盛大に必殺技をぶつ放して登場した《五芒星》の1人、《ボツシユ・ルーレット》は、テルヨシ達が戦う公園を一望できる建物オブジェクトの屋上を陣取って立つ。

完全なる遠隔型のルーレットにあそこに陣取られると相当に厄介なのだが、何故ここにいるのかという疑問が先行し敵と判断ができずにいたテルヨシが対話を試みようとした瞬間。

必殺技を放った大砲型の《強化外装》である《アレース》をストレージへと仕舞った……いや『戻された』ルーレットは、次の攻撃のための強化外装を装備。

取り出されたのは両手持ちで撃つ狙撃銃型の《カリス》であったが、明らかにその銃身が長く、遠目に見てもわかるほどゴツくなっている。

明らかに対物レベルのそれにはテルヨシも言葉を切って構えたルーレットの射線から逃げるように回避を優先。

テルヨシと同じくらいの距離にいた《ゲート・スピン》も狙われたら困るといふように《ドライブ》も使って回避へと動く。

「消し飛ばええええ!!」

そして甲高いハスキーな声と共に放たれたカリスの一撃は、撃ったルーレット本人が反動でひっくり返るほどの威力と速度で発射され、その軌道をギリギリまで見ていたテルヨシは、それが黒雪姫達の密集地帯へと放たれたとわかり声をあげようとするが、そんなのは時す

に遅し。

あまりに速く軌道すら撃った瞬間をよく見ないとわからなかったレベルの弾丸は、心意技での防御すら間に合わない速度でマゼンタ軍のアバター1体の頭に命中。

命中と同時にアバターの頭はそこだけがトラックに撥ねられたかのように吹き飛んで即死。

死亡時のライトエフェクトが発生してから、ようやく黒雪姫達もルーレットのヤバさに頭が回り、マゼンタ軍さえもまずはルーレットの排除が先決と判断したのか、次々と《ダーク・ショット》をルーレットのいる屋上へと放つ。

「ナメるなあ!!」

そうした反撃に対してもすぐに立ち上がったルーレットは怯むことなく屋上から飛び下りて、虚無属性の爆発の余波を背に浴びながら着地の際にカリスの狙撃を地面へと撃ち込んで、その反動で速度を減退しリカバリー。即座に壁を背にして次のダーク・ショットを放とうとする集団へと狙撃を実行する。

この段階ですでにルーレットがテルヨシ達ともマゼンタ達とも協力関係にはない、完全なるソロアタックであることは確定したが、状況は非常にマズイ。

「ガツチャーン！ バーチャーン！ アンー！ 協力してくれえ！」

考えているうちにカリスの一撃でまたもマゼンタ軍の1人がヘッドショットで一撃死させられてしまい、今でもヤバイと感じているのに、ここからさらにヤバイことになると思えば、スピンを相手に行っている場合ではない。

たったの2発で2人を仕留めたルーレットは、再び放たれたダーク・ショットの集中砲火を持ち前の機動力で躲すと、

「《レイズ》！」

そう叫んでカリスをストレージへと戻して新たな強化外装がその手に装備される。

「お前か《アネモイ》！ マガジン《エウロス》！」

今度は大口径のオートマチック拳銃型の強化外装、アネモイが取り

出されて、複数ある弾種の内の1つを選択しその弾が入ったマガジンを装填。

「ロータス！ ルールーはオレ達で抑える！ お前らはそつちを頼む！」

「了解した！ こちらへの被害は出ないように頼むぞ！」

それを見ながら合流したサアヤ達と一緒にルールレットを止めるため動き出したテルヨシは、黒雪姫達には引き続きマゼンタ軍を抑えてもらい、そうした会話も筒抜けだったのでマゼンタもルールレットに注意は払いつつも標的は再び黒雪姫達へと向ける。

「へいへい、ルールー！ こつちこつちい！」

分担が決まったところで隙の見える相手を的確に狙っていたルールレットのターゲットを明確にこつちにするためあえて的になりになったテルヨシの挑発に、清々しいほどアツサリと乗ってきたルールレットは、アネモイの銃口をテルヨシへと向けて即発射。

確かエウロスの弾丸は軽く速いスピード重視のはずだったと思いつ出すテルヨシが《テイル・ウィップ》である程度で防御に構えた。

が、そのテイル・ウィップに命中したエウロスの弾はズドンッ！

とわけがわからないほどに重い衝撃を伝えてきてマジで焦る。

「ちよいちよい！ ガツちゃん！ 今のルールーってマジで『何段階目』？」

「わかんないわよ！ カリスの威力的にもう5段階はいつてそうだけど、エネミー狩りしながらここに来てたってことかしら」

「目的はわからんが、儂らの戦闘音に気づいてこの数を見てもあえて現れたと考えるべきじゃな」

「早くしないと手がつけれなくなりませす！」

「うらああああ!!」

あまりにも想定外のルールレットの力に分析が追いつかないテルヨシ達は、彼女が会話もまもにしてくれないことがわかりきってるので話しかけることはせず、あれこれ話しながら迎撃に構えた。

4人を一辺に相手するというのは厳しい状況のはずなのに、全く怯むことなく撃ちながら突貫してくるルールレットは、的確にヘッド

シヨット狙いでテルヨシ達を撃ち抜きに来る。

——ボツシユ・ルーレット。

《天井知らず》と異名を取る彼女がこうもデュエルアバターを狙うのはちゃんとした理由がある。

彼女にはまず装備した強化外装のステータスを2倍にする《増強》^{インクリース}というアビリティが備わっていて、これだけでも厄介すぎて笑える。

その制約として装備できる強化外装は1つに限られ、装備も毎回ランダムになるという話だが、そんなものはルーレットにとってハンデにはならない。

「ガツちゃんとバーちゃんとオレで方陣で囲って挟撃しよう！ アンはオレの後ろから援護を頼むー！」

身体能力も高くてバリバリに動ける遠隔型ということも加味すればその脅威は上乘せになり、とにかくルーレットがこいつと定めてからの猛攻は凄まじいので、それをさせないためにテルヨシも方陣による陣形でルーレットの狙いを一点に絞らせないようにする。

そしてあまりにも厄介すぎてルーレットとの長期戦を死んでもやりたくないと思えるのが、もう1つのアビリティ《向上》^{レイズ}の存在だ。

このアビリティを獲得したのがレベル6の時だったとかで、それ以降からルーレットの名が爆発的に知れ渡ったと言っても過言ではないほどの強力なアビリティ。

ルーレット本人が話をしないので憶測にはなるが、どうやらそのアビリティには蓄積ゲージのレベルのようなものがあり、それを満タンにしてレベルを上げることで装備している強化外装にレベルアップボーナスと同等の強化をすることができるのだ。

そしてその強化値は対戦中ずっと引き継がれ、強化外装を破壊するかルーレットを1度倒さなければリセットされないし、インクリースによって実質的に強化値は倍になる始末。

ただしレイズを使うと現在装備中の強化外装が強制的にストレージへと戻されて、インクリースの効果でランダムで別の強化外装を装備——同じ強化外装が連続するのは確認されてない——することとなり、強化の度に戦術を組み立て直さなければならぬ。

それとは別に必殺技使用時もゲージの溜まり具合がリセットされた上で装備の入れ換えがされてしまうらしく、大抵は毎回レイズか必殺技かを選ぶ戦い方になる。

そのレイズもどうやらオブジェクト破壊ではゲージが溜まらないらしく、デュエルアバターとエネミーを攻撃した際にしか溜まらない仕様なので、だからこそルーレットは執拗にテルヨシ達を狙ってくる。

レベルの上ではテルヨシがルーレットを1つ上回っているが、実力で見た時にはほとんど差はないと言えるし、1段階でも厄介なレイズの強化がこの遭遇の時点で明らかに通常対戦ではお目にかかれないレベルになってるからには、もう単体でルーレットに勝つのは厳しい。

要するにルーレットは制限時間のない《無制限中立フィールド》において死んだり強化外装を破壊されれない限り、その強化に限界がないのだ。

倒せる敵の多いバトルロイヤルでも本領は発揮できるが、だからこそ天井知らず。

サアヤ以上の突撃志向と迷いのなさも、いつしか怖いもの知らずな無鉄砲さから、眼前の敵を屠らんとする圧倒的なプレッシャーに変わってしまった。

「フンッ！ マガジン 《ゼピュロス》！」

ルーレットの遠隔攻撃の命中率は多彩な強化外装群を物ともしない、マリアもビツクリな精度を誇っていて、突撃志向とは裏腹にほとんど無駄撃ちがないことで有名。

だから方陣で囲うまでにルーレットの銃撃はテルヨシに3発。サアヤに2発。ユリにも1発。直撃ではないが確実に命中させられて、当たらなかつた弾はない。

そうしてなんとかこちらの有利になる陣形にまで持ってこれたものの、そうなたらなかつたで即座に対応してきたルーレットは、空になったマガジンを排出して新たなマガジンを装填。

アネモイには記憶の限りで全4種の弾種が存在し、ゼピュロスは

……

「……貫通弾ッ!!」

と、テルヨシが一瞬だが思考に入りかけた時に後ろのマリアが答えを叫び、装填が完了しテルヨシにその銃口を向けてきたルーレットはためらいなくゼピュロスの弾丸を撃ち込んだ。

少なく見積もっても5段階もレイズがかかった貫通弾など食らおうものなら、ほぼ確実に着弾点には口径と同じ大きさの穴が開く。

テイル・ウィップさえも防壁にならなそうな威力の貫通弾は当然避ける場所だが、生憎と今はその後ろにマリアがいて、なんとか処理しなきゃならない。

自分が受けたところで威力が減退する保証はないので、壁になる選択は速攻で消え、それでもどうにかしなきゃと動いたテルヨシの動きは馬鹿げたものとなった。

ルーレットの弾丸はテルヨシの右肩の辺りに命中し、穴を開けようと装甲を削るが、そのわずかな感触が伝わった瞬間にテルヨシはその体を右に振ってみせる。

そうすることで貫通しようとしていたゼピュロスの弾丸はテルヨシの体を貫通中に方向修正されて、抜ける頃には45度ほど曲がって通りすぎる。

「……いったあ……」

痛覚2倍の無制限中立フィールドだから、遅れてきた痛みにも苦悶の表情を浮かべたが、あまりに綺麗に貫通してくれたことでダメージは逆に少なく済んで右腕もまだ動く。

マリアにも当たらなかつたようなので良かったが、残念ながらルーレットの攻撃の手は止むことはなく、次なる銃弾をテルヨシとマリアをまとめて撃ち抜こうとしてきた。

とはいえこの場には頼りになる仲間がいて、引き金を引こうとしたルーレットの左右の後ろからサアヤとユリが攻撃を仕掛けて、後ろのマリアもテルヨシをブラインドにルーレットを狙撃。

「いざかいんだよ!!」

《リトル・ボム》をルーレットの体に当たるように投げ込んだユリ

に、その爆発を防げるように左から右へと《ブレード・ファン》を飛ばし、フォロースルーからブレード・ファンを開く動作をしようとするサアヤに、出来るなら手に持つアネモイを狙撃しようとするマリア。それぞれが別の攻撃と目的がある同時攻撃は完全回避など不可能と思えたが、驚異的な反応で手に持つアネモイを真上へと放り投げたルーレットは、それでマリアの狙いを外し、それと同時に振り向き様にユリのリトル・ボムを紙一重で躲してやり過ごし、サアヤのブレード・ファンも身を屈めて空を切らせる。

そして1度は逸れたものの、やるべきと判断して空中に放られていたアネモイを破壊しようと引き金を引いたマリアの狙撃よりも早く体のバネを利用して跳び上がったルーレットは、落下に入ろうとしたアネモイを空中でキャッチしてマリアの狙撃すら躲かせてみせて、着地を待つ前にその銃口をサアヤとユリへと向けて1発ずつ発射。

至近距離だったおかげで発砲のタイミングが見えたからか、2人共がギリギリでそれを躲して距離を取り、着地したら今度はテルヨシとマリアにその銃口を向けてきた。

「《バースト・ショット》オ!!」

ルーレットのただ1つの必殺技、バースト・ショットは、どの強化外装でも撃てるという汎用性があり、その効果は純粹な威力強化系。

だから放たれた必殺技は貫通力を強化され、発射時の口径も3倍ほどにまで膨れ上がってしまった。

「《インパクト・ジャンプ》！」

驚愕の動きに魅入ってしまうところだったが、銃口を向けられた瞬間に我に返ってバースト・ショットと同時に真上へとジャンプ。

その際にしっかりとマリアもテイル・ウィップで掴んで運び、バースト・ショットは躲すことに成功する。

だがルーレットはバースト・ショット後に強制装備となった次の強化外装を手にとって、身の丈を越える大きさの巨大ブーメラン《セレネー》を振りかぶって空中のテルヨシとマリアに投げ放ってきた。

「《貫通弾》！」

それを見るより少し早くテイル・ウィップに掴まれたマリアが《バ

レット・クリエイション』で貫通弾を創り、即座に《シャープネス》に装填し迫るセレネーを撃つが、セレネーはほんの少しだけ軌道が変わった程度でビクともせず迫ってくる。

軌道がズレたので回避もギリギリで出来そうだったが、それよりも投擲武器というルーレットの手から強化外装が離れる絶好の好機を逃す方が勿体ないと考えて、縦回転で迫ったセレネーにタイミングを合わせて全力の蹴りをお見舞いして相殺し、威力を失ったところで奪取しようとした。

「ファイアあああ!!」

しかし再度のアタックを仕掛けたサアヤとユリが後方から迫る中で、テルヨシがセレネーの回転をダメージを受けながら相殺して止めたところで急に叫び、爆発でもするのかとセレネーを反射的に蹴ろうとした。

だが違う。回転が止まったからわかったが、セレネーには半時計回りになるように両端に噴射機構が追加されていて、ルーレットのコマンドでその噴射口から激しい炎が噴き出し、自力でまた回転を始めたのだ。

「ぐっ……はああ!!」

その回転は凄まじく、初速にも関わらずに問答無用でテルヨシを上から叩きつけて地面へと落とし、自らは復活した回転力とブーメランの特性でルーレットの手元へと大回りしながら戻っていく。

もうレイズの強化が未知数すぎて後手に回りまくりの展開に苦虫を噛み潰したような表情になりながら落下したテルヨシは、激突の寸前にテイル・ウィップを上にしてマリアには落下ダメージが発生しないようにし、自分は最低限の受け身でダメージを抑えたが、すぐに立ち上がれるほど甘くないスタンが入ってしまう。

その間にユリがサアヤに打ち上げてもらって上から逃げ道を塞ぐようにリトル・ボムを投げ込み、移動を制限されたルーレットは展開剣の2刀流に切り替えたサアヤとタイマンの展開へ。

さすがにセレネーが戻ってきてない段階ではサアヤに分があつて、ルーレットも回避に動かざるを得なかったが、ユリが的確に移動を妨

げてサアヤとの間合いを広げることは叶わない様子。

「《シトロン・コール》！」

2人が頑張ってくれてるのでテルヨシもいち早く戦線に復帰しようと思いをもち上げるも、想像以上にダメージが大きく、HPゲージはすでに半分を切ってしまった。

そこに突然、黒雪姫達の集団から果敢に近寄ってきたチユリが絶妙のタイミングでテルヨシにシトロン・コールを使ってくれ、スタンは取れなかったがルーレットからゼピュロスの弾丸を食らう直前までの状態に巻き戻してもらったことができた。

「サンキュー、ベル！」

あとは気合いで立ち上がったテルヨシは、ルーレットの力に共鳴するように集中力を上げて極限集中モードに移行。

鋭い眼光でサアヤにアイコンタクトを送りつつルーレットへと急接近して、回避に動きながらセレネーをキャッチしたタイミングでサアヤが離脱しテルヨシとスイッチ。

マリアとチユリは心意技が使えないため、マゼンタ軍に狙われたら対処ができないので、必ず誰かが傍で防御をしなきゃならない。

それをアイコンタクトだけでわかったサアヤがわざわざ下がってくれたのだから、しくじるわけにはいかない。

「バースト・ショットオオ！」

そのスイッチのタイミングで向かってくるテルヨシと背中を向けるサアヤと、さらに奥にマリアとチユリがいるという好機を逃す手はないとばかりに必殺技発声からセレネーを投擲したルーレット。

だがあまりに集中しすぎて先読みしていたテルヨシは、投擲直後で加速がつく前のセレネーに向かってインパクト・ジャンプで突貫。

おそらく必殺技はあの噴射が強まって推進力と破壊力を増加させたものと予測できていたから、その噴射口が火を噴く前にあらぬ方向に吹き飛ばしてしまったのだ。

テルヨシの突貫によって明後日の方向に向けて飛んでいったセレネーは、進む先の建物オブジェクトを物ともせず突き進んで、あつという間に遠くの彼方へと行ってしまい、ルーレットの目の前に着地

したテルヨシは、反射的に後退しようとしたルーレットにテイル・ウィップを巻きつけようと伸ばす。

しかしセレネーが地面と激突でもして早めに必殺技が終了したのか、テイル・ウィップが体に巻きついて拘束が完了したタイミングで、突如として地面から巨大な大砲が出現しテルヨシにその砲口を向けてくる。

これは間違いなくアレースだが、初期の段階くらいなら脇に抱えて持つ程度の大きさだったはず。

現にこの公園近くに現れていきなりぶっ放してきたのもこのアレースだった。

「ファイア!!」

しかも便利なことに手動ではなくコマンドによるリモートコントロールもできるらしく、ルーレットのコマンドに反応したアレースは即座にその砲口を轟かせて、直径30cmはあろう砲弾を発射。

——爆発は……起こらなかった。

アレースが放った砲弾は、テルヨシに命中することなくその軌道はほぼ地面と平行で放たれたのに、テルヨシを通りすぎて放物線を描いて遠くのどこかへと着弾。

「……………ふう」

「っ?! バケもんかお前は!」

そしてテイル・ウィップによる拘束を解かれていたルーレットが、目の前で起きた現象に驚愕しテルヨシに向かって怒鳴る。

そのテルヨシは極限まで身を屈めながら、テイル・ウィップを2つ折りのようにして折り返した先を地面に設置しアレースの砲口の真下に来るようにして、そこから2本のレールのように上方方向に向かう軌道で固定していた。

そうすることで放たれた砲弾をレールの上に乗せて自分の上を爆発させることなく飛ばすことに成功し、事なきを得たのだ。

そんなことをあのタイミングで思いついて実行できたのは極限集中モードによるところだが、あまりの絶技に開いた口が塞がらない状態のルーレットに隙が生じたので、アレースの上に乗りつつ再びルー

レットをテイル・ウィップで拘束することに成功したのだった。

Acceleration Second 48

「こんのおおー！ はーなーせー!!」

メタトロン戦を前にして立ちほだかったマゼンタ軍との戦闘に単騎で突っ込んで掻き乱してきた《ボツシユ・ルーレット》を、5人がかりでようやく拘束することに成功。

《テイル・ウィップ》に巻きつかれて両腕を封じられ、宙に浮くルーレットは、その拘束を解こうと足をじたばたさせながら全身を揺さぶってすり抜けようとする。

しかしそんなことで抜けられては間抜けなので仕方なくテイル・ウィップの拘束を強めて圧迫し「ぐえっ」とちよつと苦しそうにしたルーレットに《アレース》の砲口をあえて向けて固定。

遠隔操作できるらしいから、これで撃つてもルーレットが自爆するだけなので安泰だろうと極限集中モードを解いたテルヨシは、この状況で会話にならないようならもはやアホなのではと思いつつ、少し大人しくなったルーレットに話しかける。

「相変わらず過激すぎて疲れるな、ルーラーは。それでここに現れた理由はあったりするの?」

「うるさーい! いいから離せバカ野郎!」

……アホの子だこれ。

こっちの気が変わればいつでも一方的に倒せてしまう状況でも闘志むき出しのルーレットは相当にアホなのだが、それでもかろうじてこちらの声に反応したのか? な態度に引き続き対話を試みる。

「《レイズ》の強化をエネミー狩りですてたっばいから、オレ達の動きを読んでたってわけじゃないのかな。目的さえ教えてくれれば、こっちに被害が出ない限りはオレ達もルーラーのやることに干渉しないよ?」

「だったら邪魔するなー! アタシはあのデカブツをブツ飛ばしたいんだよー!」

「デカブツって、もしかしてメタトロンか?」

「それ以外に何がいるんだバカかお前は!」

——アホにバカって言われるのはちよつと不快だな。

強気すぎる態度のルーレットに珍しくイラツとしたテルヨシだが、ここでキレてはルーレットと同列のアホになるのでグツと堪えて、その目的をなんとか聞き出すことができた。

その声は大きかったのでルーレットが無力化されたことで近寄ってきたサアヤ達も会話へと加わってくる。

「メタトロンをぶっ飛ばすって、私達と方向性は同じよ、ルー子」

「じゃな。むしろそれを邪魔しておるのが、今ロータス達が戦っておるあやつらじゃ」

「そんなの関係ない！ 黙ってアタシのレイズの餌になればバカ共が!!」

それなら話は早いとルーレットにとつての敵という認識をマゼンタ軍にしようと話したサアヤとユリだったが、さすがアホの子元氣の子。

単騎でメタトロン攻略に乗り出そうとしているらしいルーレットは、とにかくレイズの強化をしようとの場に現れたことが判明。

しかしその態度には割と短気なサアヤがイラツとして抵抗できないルーレットにゲンコツをお見舞いし大人しくさせようとする。

ドゴツ！ とヤバめの音がルーレットの頭から発生したものの、むしろゲンコツしてきたサアヤに微妙に届いた足で蹴りをお返し。

全く反省の色を見せないルーレットに《ブレード・ファン》の展開剣を手にして首をはねようとしたのをユリがなだめつつ、どうにか話を進めてみる。

「餌とは言うが、してルーレットよ。仮にこの場の全員が餌となつてレイズの強化が進んで、それでメタトロンに対抗でき得るものが発現するのかなの？」

「そんなことアタシが知るか！」

「わからんのかーい！」

ルーレットはアホの子だが、メタトロンを倒そうとするからにはレイズの強化の先に何か対抗策でもあるのかと勘繰ったユリの推測は正しかった。

しかし当の本人は何の勝算もなしにレイズの強化をしていたらしく、どれだけ強化をしても対抗策がない可能性すらあるアホな行為には聞いていた全員がずっこける。

「でもアタシは行かなきゃならないんだ！ あのデカブツの守るミッドタウン・タワーに！ どうやってでも！」

これはさすがに無謀と言わざるを得ないので止めてあげようとしたテルヨシだったが、直後に叫んだ理由があまりに真剣な色を帯びていたからキャンセル。

ルーレットの本当の目的はメタトロンではなく、テルヨシ達と同じ《東京ミッドタウン・タワー》にあったのだ。

「ルールーは、ミッドタウン・タワーに何があるのか知ってるのか？」
「《ISSキット》の本体だろ！ だから行くんだ！ わかったなら離せ！ アタシの邪魔をするなあ！」

現状、ミッドタウン・タワー内部にISSキットの本体があることは極一部のバーストリンカーしか知らない事実のはず。

それを知ってるのが気になるが、詳しいことは全く話してくれそうにないのはここまでで十分にわかってたから今はスルー。

「ルールーの目的はわかった。解放するのも条件付きでしてあげるよ。解放してあげる代わりに、オレ達にルールーの手伝いをさせてくれないか。必ず君をミッドタウン・タワーの中まで連れていく。こっちはルールーより可能性のある突破方法もあるから」

「ちよつとテイル！ 何で私達がルー子に協力しなきゃ……」

向いている方向が同じならわざわざ敵対する必要は全くないし、ルーレットは協力してくれと素直に言ったところで「知るか！」と怒鳴られるのは見えきっていた。

だからあえてテルヨシはルーレットにこっちが協力する提案をしつつ、こちらへの敵性を排除しようとする。

そんなこっちが頭を下げるような話にはサアヤが不服そうにしたが、この言葉を口に指を当てて黙らせ、交渉を続ける。

「だからそれまではオレ達……あそこにいるISSキットを着けた連中以外を攻撃しないでほしい。それ以外にルールーが何をしようと

オレ達は邪魔をしないから」

「……………あの連中は餌にしているんだな？」

「キットの力は厄介だから、同じ力がなきや正面から倒すのは難しいと思うけどね」

「……………必ずだな？」

「ダメだった時はいくらでもオレ達を餌にしてくれていいよ」

「……………約束したぞ。だからさっさと離せ！」

ルーレットに共闘はほぼ不可能だが、自分にとって有益なことをする存在をわざわざ排除しようとするほどバカではないのが生物として本能。

その交渉がどうにか上手くいつて安堵し、これ以上の拘束は機嫌を損ねそうだったからすぐに解放しようとテイル・ウィップを緩めようとした。

瞬間。まさに全員が油断していたタイミングで猛烈なモーターの回転音と共に急接近してきた《ゲート・スピン》がテルヨシへと飛び蹴りを放ってきたのだ。

完全に虚を突くスピンの特攻は誰も反応が間に合わなく、まともに飛び蹴りを食らったテルヨシは、テイル・ウィップからルーレットを解放しつつスピンと一緒に勢いを殺さずに吹き飛ばす。

「ルーラー！… 約束したからな！」

それでもルーレットの敵性を排除することはできたので、サアヤとユリには一応アイコンタクトで注意してくれと送りつつ、ルーレットにも言葉にして約束を守るように叫び、そこでスピンの蹴りが外れて地面に背中から不時着。

テルヨシをほぼ踏み台に飛び越えたスピンを勢いに乗せるのはマズいと、背中から落ちながら両足を持ち上げて反動でわずかに浮いた瞬間に低空バツク宙からの馬蹴りをスピンの背中にお見舞い。

すぐにテイル・ウィップで体を支えてリカバリーしつつスピンの方に向き直ると、背中を押されたにも関わらず《ドライブ》で回転する脚部のモーターで地面を捉えて加速しつつUターンしてテルヨシへとまた突貫してきていた。

もはやスピンの蓄積してきた対戦勘とでも呼べるものでキットの力に抗いながら個性で戦うスピンは、本能のみで動いているところがあり、そこには対戦特有の駆け引きが存在していない。

こっちの動きに反応して攻撃を通そうとする意思と、攻撃を避ける意思が適所で判断を下して行動している感じか。

「この戦いが終わったら、また全力で戦おう、スピン」

そんなスピンに脅威を感じることがなかったテルヨシは、急接近してくるスピンに対して呟いてから、繰り出してきた加速からの右掌打を本当のギリギリまで引きつける。

そうして2つの意思が判断を下し動かれる前に最速の反撃を繰り出せば、理論的に攻撃は当たる。

繰り出された拳は必殺技《ジャイロ・ブレーカー》も放てるので油断はならないが、その掌打にバックステップを踏んで左足の裏を合わせて、そこを軸に右足を振り上げてその爪先をスピンの下顎へと電光のごとく蹴り抜く。

これにパワーは必要なく、下顎を撃ち抜く正確さが重要で、寸分の狂いもなく下顎をクリーンヒットされたスピンは、テイル・ウィップを巧みに動かして飛び越えたテルヨシを通りすぎて前へと倒れながら地面を転がっていった。

加速世界でも脳震盪に近い現象を起こせることは対戦の中で知っていたテルヨシは、それを狙ってスピンを昏倒させたのだ。

ほとんど受け身も取れずに地面を転がったスピンは、思惑通りに加速が仇となってダメージも大きそうだったが、フラフラと立ち上がったので、完全に意識を刈り取るまでには至らなかつたようだ。

しかしそれがいけなかつたか。今まで絶妙なバランスで堪えていただろうスピンの挙動に変化があり、ぶらんと垂れ下がった両腕には力がなく、頭も俯いてしまっていた。

そして戦闘開始からもずっと固く閉じられていた胸部装甲のIS Sキットの血のように赤い眼がギョロリと開眼しキョロキョロと辺りを見回し始めた。

——ズギャンツ!!

が、ISSキットが本格的にスピンを動かそうとしたまさにそのタイミングでスピンの後方から正確無比の狙撃が背中からISSキットの眼に直撃し貫通。テルヨシの横を通りすぎる。

胸部装甲に小さな穴を穿たれたスピンは、静かに地面へとうつ伏せに倒れて動かなくなってしまうた。

「……………ごめんなさい、スピンさん」

それを放った MARIA は、不本意な決着と不意打ちに謝罪して《シャープネス》を下ろし、目が合ったテルヨシにも小さく頭を下げた。

その近くではアレースの砲口をマゼンタ軍へと向けて盛大にぶっ放しているルーレットと、そのせいで《ダーク・ショット》の反撃を受けて必死に防御するサアヤとユリの奮闘が見える。

倒れたスピンは死亡マーカーになってないのでまだHPゲージは残っているはずだが、ISSキットを一時的に破壊した今の状態の方が安全だと判断。

これで死亡して蘇生してしまえば、また1時間後に全快の上にISSキットも復活してしまうからだ。

しかしこれで本当にこっちとしては想定外の《五芒星》の2人との連戦はとりあえず終わりを迎え、今度は黒雪姫達に加勢しなきゃといったタイミング。

向こうも向こうで戦いは佳境にさしかかる、そんな気配がしていたところ。

テルヨシの視界は都合良く黒雪姫達とミッドタウン・タワーを同時に捉えていて、そのミッドタウン・タワーの上の景色が歪んだのを見逃さなかった。

それは不可視の何かが迷彩を施して蠢いたような、不自然な歪みだった。

「……………ッ！ ヤバい！」

そしてその歪みはミッドタウン・タワーの天辺からゆっくりと移動してテルヨシ達のいる公園の方向に近寄って、なだらかな丘の上に着地。

その直後。それによる衝撃波か何かが強烈な地震と轟音となって襲ってきて、戦闘中だった黒雪姫達やマゼンタ軍さえもその揺れには動きを止めてしまった。

この場の誰もがその原因にすぐ理解が及ばなかったのに対して、直視していたテルヨシは、地震によって一時的に足下がおぼつかなくなつた一同に声を張り上げる。

「メタトロンだ！ 攻性化範囲に入ってるぞ!!」

その声を聞いて公園にいた全員が本来メタトロンがいたミッドタウン・タワーの方向を向き、その手前の丘の上に不可視のメタトロンが蠢いているのを確認。

その時にはすでにメタトロンはその巨体に備わっている大きな両翼を広げて何かをチャージするように仄かに発光。

「――全員、後退!!」

「みんな、逃げて!!」

あまりにも突然のメタトロンの挙動に即決に近い判断を下した黒雪姫ではあつたが、その指示を聞いて動くまでが精一杯でもじやないがメタトロンの攻性化範囲から抜けるのは不可能なタイミングだったことは間違いない。

だからなのか反射的になのか、黒雪姫の指示と同時にハルユキがメタロンとの最前線へと飛び立っていつ撃たれてもおかしくないレーザーに備えて《オプティカル・コンダクション》を使おうと両腕を前に掲げて交差してみせた。

そして無情にもメタトロンの丸い頭部の中心から、あらゆる者の命を一瞬で奪い去る激光のレーザーが放たれた。

あまりの光の奔流に視界がホワイトアウトしてしまい、その間にレーザーによって即死したとさえ思えた数秒間。

ここまで凄まじい攻撃とは思ってなかったテルヨシは、視界が戻ってきて自分のHPゲージがまだ存在することをまず確認し、次に状況の把握に意識を集中。

生きているということとはハルユキのアビリティはメタトロンのレーザーにも耐えられたということ。

なので直前にハルユキが立ち止まった場所へと目を向け、そこで今も衰えることなくレーザーを照射するメタトロンの猛攻をオプティカル・コンダクションで周囲に拡散しながら耐えるハルユキの姿があった。

しかしいつ終わるかもわからないレーザーの照射とハルユキが耐えきれなくなつて蒸発するかは全くわからない。

見れば拡散されているレーザーの一部がハルユキの足下の草を焼きマグマのように変質させて余計なダメージを与えているので、そっちの方が危惧される。

黒雪姫達は近くで動かなくなつてしまつていたマゼンタ軍のバーストリンカー達を公園の外へと運び始めたところで、ハルユキへの加勢は少し遅れそう。

サアヤ達も黒雪姫達の加勢に回つてしまつたので、そっちの人員は足りそうだと判断し、テルヨシはまっすぐハルユキの下へと駆けて加勢に向かう。

レーザーが放たれる直前。ハルユキの位置がマゼンタ軍を庇うようなどころにいたのが幸いしたのか、テルヨシが加勢に加わるより早く、マゼンタがハルユキの背中を支えて加勢し、それに遅れてテルヨシもハルユキとマゼンタの後ろへと到達。

「《インフェルノ・ステップ》」

そして近くで見ればやはりドロドロとマグマのようになった足下は相当に辛い状態にあつたので、加勢する前に炎熱属性と耐性、吸収を付与するインフェルノ・ステップを発動し足下のマグマを排除しつつハルユキの肩に手を置き支える。

「おらー！ エネルギー切れまで持ち堪えろよ、クロウ！」

「せんぱ……はいッ！」

「アナタ、こんな技を持つてたのね……」

「これも君が否定しようとしてる『個性』だよ！ そのおかげでちよつと長生きできてんだ。感謝してもバチは当たらないんじゃない？」

「感謝なら……この状況を乗り切れたらしてあげなくもないわ」

インフェルノ・ステップは秒速4%消費と燃費が悪いので、リ

チャージできないこの状況だと最長でも25秒しか持たないが、それまでには黒雪姫達も援護に来られるだろうとハルユキを支える手に力を込めて踏ん張る。

そしてそのハルユキも拡散していたレーザーを少しずつではあるが一点に集束しつつ、その角度を完全な反射角。つまり180度まで持つていこうとしてるのがわかる。

そこにどんな意図があるのかはわからないが、全く衰えないメタロンのレーザーの威力とこちらが持ちこたえる時間では、向こうに分がありそうなのはなんとなくわかるので、エネルギー切れ以外のしぎ方があるなら早くしてほしい。

しかしハルユキがレーザーの反射角を大きくするほどにこちらへの重圧も上がり、テルヨシとマゼンタが支えてもハルユキの体がジリジリと後退していく。

まだ100度くらいでこんなではとてもじゃないが180度の反射には耐えられない。

そう考えながらも必死に体を支えて踏ん張っていると、そのテルヨシとマゼンタの背中を押す存在があり、黒雪姫達が間に合ったかと思つて少し振り向いたら、そこにいたのは《アボカド・アボイダ》だった。

だがそのタイミングでインフェルノ・ステップの効果が切れてしまい、決してマグマ自体を消していたわけではなかった足下は再び業火の炎となってテルヨシ達を襲い、炎に弱いと言うアボカドは途端に苦しそうな声をあげたが、テルヨシ達を支える力を緩めずに踏ん張り続ける。

「へえ、根性あるじゃないかアボカド。うちに欲しい人材だね」

「こんな時に勧誘しないでもらえる？ それにアボはワタシの仲間よ」

「じゃあマゼンタも一緒にどうよ？ もちろんISSキットは外してもらおうのが条件だけど」

「そんなの……」

その根性は称賛に値するし、テルヨシ達を助ける義理もないのに逃

げずに来たことが好印象だったので、タイミングも考えずに勧誘を始めてしまい、マゼンタが止めつつも一緒にと言われて言い淀んだ。

そこには明らかな迷いが生じていたものの、答えを聞くよりも早く足下のマグマに大量の水がかけられて冷やされ、それをしてくれたあきらが合流しテルヨシの肩に手を添える。

さらに続々と援護が到着し全員がハルユキを支えるように後ろで踏ん張りつつ、もう少しで180度になろうとしている反射角まできたハルユキに声援を贈る。

「うらあああああ!!」

あと少し、あと少しだ。そう思いながらレーザーとの攻防に目を向けていたら、メタトロンが動いてから援護に回るでもなく何かしていたルーレットが突如としてテルヨシ達の後方に陣取って叫び、何事かと頭だけを後ろに向ければ、いつの間にかアレースをストレージに戻されて新たな強化外装を装備したルーレットが、その銃口をこちらに向けていた。

対戦車ライフルなどにもある銃身を支えるスタンドを有した。いや、それがなければ支えることすらできない超長銃身の角張ったデザイン、狙撃銃とも大砲とも言えないゴツイ銃型強化外装。

形状からしておそらくは特殊兵装型の《エリーニユス》なのだが、レイズの強化でほとんど面影はない。

「ブツ飛ベデカブツ! 《メガイラ》チャージ!!」

何を血迷ったかと思っただが、位置取りが紛らわしいものの狙いはレーザーを撃っているメタトロンの方だったようで、ルーレットのコマンドで特殊弾が装填され、エリーニユス全体がバチバチと電気を放ち始める。

エリーニユスは強力な電気力で弾を飛ばす、所謂《レーザー電磁投射砲》と呼ばれるもので、3種あるはずの弾丸にはそれぞれルーレットのステータスに依存する威力が秘められている。

今回装填したのはルーレットの残HPが多ければ多いほど威力が上がるメガイラ。

あれだけの戦闘をしたにも関わらず残HPはほとんど減ってない

ルーレットは恐ろしいほどだが、レイズによる強化でおそらくはデュエルアバターならまとめて5、6人は一撃で倒せるだろうほどの威力の弾丸が発射されようとしている。

前からも後ろからも強大なエネルギーが放出されようとしてる中で、とうとうハルユキもレーザーをほぼ180度まで反射させるところまで来て、ルーレットもその狙いをレーザーの発射口として弾丸を発射。

レーザーで蒸発してしまうのではと思われた弾丸は物ともせずレーザーの中を突き進み、同時にハルユキの反射も180度に到達。

ルーレットの弾丸はメタトロンの発射口まで到達し、反射したレーザーと同時に何かを捉える。

《地獄》 ステージ以外では全ての攻撃を透過するはずのメタトロンの、確かに何か当たった事実を証明するように、その後から徐々にレーザーの威力が落ちていき、最後には完全に沈黙してしまうのだった。

Acceleration Second 49

ミッドタウン・タワーが、消えていく。

いや、実際に消えているわけではなく、テルヨシ達から見るとミッドタウン・タワーの前に、徐々に何かの姿を現してきたのだ。

ハルユキのレーザーの反射と《ボツシュ・ルーレット》の超攻撃を受けたメタトロンが《地獄》ステージ以外でダメージを受けて1度は沈黙。

しかしレーザーを撃たなくなったメタトロンの周囲からびしびし、きしきしと何かが軋むような音がしたかと思えば、今までメタトロンが覆っていた透過の装甲が剥げ落ちてその姿を現した。

1枚だけでミッドタウン・タワーの横幅ほどもある巨大で複雑な形をした翼。

それが左右で2枚ずつ存在し、その4枚の翼は無数のリングを連ならせたような胴長な胴体と繋がっていて、胴体下部には多足類タイプの脚が10本以上も生えている。

そしてその胴体の上には直径10mに迫るほどの巨大な球体の頭があり、正面の中心に集まるような放射状の起伏がデザインされていて、その中心の窪みは今は何もないが、おそらくそこがハルユキとルーレットが撃ち抜いたレーザーを放つ機能が備わっていた部分。

頭の上にはメタトロンの全体のデザインとは少し違ったプラチナシルバーの王冠に見えるリングが載っていて、球体上部の中央からはピンと1つの突起物が伸びていた。

「間違いない。あれこそが、神獣級エネミー《大天使メタトロン》だ」
ようやくその全容が露となったメタトロンを速攻で分析にかかったテルヨシではあったが、実物を見たことのある黒雪姫が間違いなくこれがメタトロンであると断言しつつ、これからこれを倒すことも告げてマゼンタにはさつきまでの勝負を一旦預けたいと申し出る。

このメタトロンが倒されればミッドタウン・タワーを守る存在は消え、ISSキットの本体の破壊が近づくので、却下された上で不意打ちもあり得るかと思えた。

が、大半の仲間も行動不能にされて戦力的にも勝つのが難しいと判断したのか、逃げることもできる状況であえてメタトロンを倒そうとするテルヨシ達の邪魔をするようなこともせず、黒雪姫の申し出に了承し静かにアボカドと一緒に北へ向けて去っていったしまった。

マゼンタが何を考えてそうした答えを出したのか不明だが、メタトロンを相手にしながらマゼンタ達までとなると散漫な意識で倒すどころではなかっただろうから正直、助かったと言うべきか。

何はともあれマゼンタ達による妨害はなくなったので改めてメタトロンへと向き直れば、そのメタトロンもレーザーの機能を破壊されたスタンから回復したらしく、明確な敵意を以てテルヨシ達を見下ろし攻撃の意思をビシビシと伝えてくる。

「主たる武器であるレーザーを封じたと言っても、メタトロンが恐るべき敵であることに変わりはない。だが、倒さねばならん。絶対に。クロウがあればどの決意と覚悟で大役を果たした今、我々がそれに応えられねば……」

その攻撃が本格化する前に黒雪姫が皆の士気を上げる言葉をかけようと意気込みを語る。

こういうことを言わせたら様になるのは黒雪姫の凄いところなので茶々を入れずに「おー！」くらいは合わせておこうと待っていたら、全員が黒雪姫に視線を送る中でただ一人、全く空気も読まずに雄叫びを上げる人物が。

「うおらああああ!! くたばれデカブツー!!」

もう仕方ないとはいえ、その雄叫びの後には、叫んだ本人であるルーレットによる《エリーニユス》の一撃がメタトロンへと放たれてしまい、決戦の火蓋はこっちの意図としない形で切って落とされた。

「……あれは何なのだ」

「ルールはルールよ。敵対しないだけマシと思おう」

「あたしも実際に見るのは初めてだが、ありやマジもんのアホだぜ……でもよ、啖呵の切り方はシンプルで好感持てんぜー!」

「あっ! この赤いの! 今回は調子が狂うなもう! では行くぞ!」

自分の役割をかつさらわれて不機嫌そうな黒雪姫にルーレットのアホさを説明したところのため息しか出ないが、そのルーレットに続いてユニコも動き始めてしまえばもうどうにでもなれな感じに。

ルーレットが盛大に先制攻撃はしてくれたので、その勢いを殺さないように黒雪姫の合図で散開した一同は、大規模集団戦用の連携に切り替えて各々の役割を最大限果たせるポジションに着く。

しかし今回は連携が取れないルーレットという爆弾を抱えているため、近接主体となるテルヨシや黒雪姫達は常にルーレットの狙いを確認しながら攻撃をしなければならぬ。

本当にもうどうしようもなく面倒臭い存在なのだが、テルヨシがした約束ではルーレットのやることの邪魔をしないとしてしまったので、こつちから「合わせろ」とは言えないのだ。

「よっしやああ！ 《レイズ》!!」

連携は取れないアホではあるが、すでにこのパーティーの中で最大火力を有しているため、近接でバシバシと2、3発テルヨシが当たっている間にルーレットはエリーニユスの一撃でその5倍以上のダメージを与えてくれる。

ダメージソースとしてはもはや不可欠レベルのルーレットにそれを差し引いても文句は言えなかつたので、せめてフレンドリー・ファイア——味方に攻撃したりされることだ——は避けてルーレットにターゲットがいかないようダメージを分散していく戦術が確立する。その甲斐あって順調にゲージを溜められたルーレットがもう何度目かわからないレイズによる強化をしてエリーニユスがストレージへと戻され、次の強化外装にチェンジ。

巨大だったエリーニユスに代わって出てきたのは、意外にも初期から変化が見られない丸みを帯びたフォルムのハンドガン。

見た目上の変化がないそれには初見の黒雪姫などが戸惑う雰囲気を見せたが、ルーレットと一緒に遠隔攻撃していたマリアがそれを見てテルヨシ達へと声を張り上げる。

「逃げてー!! 《アストライオス》 ううう!!」

「まっじかよおいおい!」

「ちよつと！ まだ撃たないで！！ 全員後退こうたーい！！」

ルーレットにはハンドガンタイプの強化外装が3つあるので遠目からはわかりづらいが、マリアがちゃんと形状を把握して理解があったのでその声に反応して行動開始。

というよりもルーレットの強化外装の中で特に危険とされる強化外装だったのでマジで焦ったテルヨシとサアヤが黒雪姫達に指示を飛ばして一目散にメタトロンから離れると、その慌てように恐怖した一同も攻撃をやめて散開。可能な限りメタトロンから距離を取る。

その後退を待つなどあり得ないので、最中にそのハンドガンを空へと向けたルーレットは、派手さも全くなくそのまま1発の弾丸を空へと向けて発射。

メタトロンを狙ったわけでもないその弾丸は強烈な赤い光を放ちながら上空100mほどの高さに到達すると、光はより強烈に輝いて落下を始めるよりも早く爆発して弾けてしまう。

「なっ!?!」

「あらあら……」

その現象は一見すればただの花火に近いものだが、ルーレットのアストライオスはここからが本番。

おそらく初見であろう黒雪姫とフーコが近くで驚きの声をあげたのは、その弾けた弾丸の欠片1つ1つが急激に肥大化し直径5mほどの巨岩となって降り注いできたからだ。

その数およそ30。テルヨシの知る中でも最大最多のアストライオスの『流星弾丸』は、暴れるメタトロンへと一直線に降り注いでいくが、どうしてもいくらかはその周囲に分散し後退中のテルヨシ達にも当たるかもな軌道。

「もうやだ災害よこれ！」

「弱音吐いてる暇あるなら走る！」

当たったらデュエルアバターなら100%即死する速度と大きさと重量を1つ1つが秘めるアストライオスの弾丸は、動きが鈍重なメタトロンへ次々と突き刺さって、ドゴオオオ！ ドゴオオオ！ と重々しい衝突音と共に弾けて爆発。

メタトロンもアストライオスの流星弾丸には少しではあるが怯みが発生し大きな隙をもたらずが、生憎と近接チームはその流星弾丸のせいで攻撃をキャンセルせざるを得なく追撃はできない。

それどころか現在進行形でその流星弾丸が地面に落ちて爆発した際のスプラッシュダメージを受けるか受けないかの瀬戸際だった。

そんなルーレットのデタラメな火力に泣きたくなるのも仕方ないが、なんとかギリギリのところで被害は免れて流星弾丸が全て爆発し終えた惨劇の現場を遠目に確認しながら、近くに逃げてきたサアヤと合流。

あまり長くメタトロンへの攻撃をしないと依然として頑張っている遠隔攻撃チームにターゲットが向いて戦線が崩されてしまうので戻りたいのは山々なのだが、今の攻撃でルーレットの必殺技ゲージが満タンになったような気がして、2発目の流星弾丸か必殺技のどちらを使うのか見極めてから動こうとする。

アストライオスとはとにかく強力だがこっちの戦線も崩壊するので早くストレージに戻ってほしいと両手を組んでお祈り。次弾発射まではインターバルもあるのでどかしい。

戦闘開始から約10分でメタトロンの残りのHPゲージを4段あるうちの2段階半分まで削れたので、神獣級エネミーを相手にこの人数で考えれば圧倒的に早い。早すぎるくらいだ。

それほどルーレットの火力がずば抜けているのだが、こっちと連携できればもつと効率が上がりそうなのが本当に惜しい。

「《バースト・ショット》おおお!!」

テルヨシの祈りが通じたのか、ルーレットの次の攻撃はインターバルを待たずしてアストライオスによる必殺技が放たれて、今度はメタトロンに直接向けられた銃口から飛び出したのは、直径10mに及ぶ巨岩の爆弾。

ユリも顔負けな特大の爆弾による爆撃はすぐに訪れて、壮絶な爆発の威力によってそれよりも巨体のメタトロンの体が仰け反りながらわずかに後退。

ここまでで一番の硬直状態に陥ってくれたため、これを好機とテル

ヨシ達もまたメタトロンへと殺到して攻撃を仕掛けていった。

アストライオスの次の強化外装がハンドガンタイプの《アネモイ》になってくれたので、ルーレットによる攻撃の規模が一気に縮小された——威力は落ちてないが——おかげでテルヨシ達も攻撃へのリソースが増えて効率上がる。

メタトロンの攻撃は一撃が重く当たれば相当なダメージは覚悟しなければならぬが、戦闘経験者の攻撃予測の声に耳を傾けたり、持ち味の観察眼で今のところ全員に直撃はないが、1つの油断が戦局を変える緊張感は心臓に悪い。

とはいえ今後、近い未来にはこのメタトロンよりも強大な《四神》に挑もうとしているのだから、こんなところで寿命を縮めている場合ではない。

「あの、テイルさん！」

そうやって勝手に士気を上げながら攻撃していたテルヨシの元にハルユキが飛んできて、何か用なのかメタトロンの動きに注意しながら話しかけてくる。

「何か緊急？」

「えっと、どうやらメタトロンの弱点があ頭の王冠みたいで、あれを中心に攻撃したいんですけど」

現在、メタトロンの足下にいるのでハルユキの言う頭の王冠は見えづらいが、デザインに違和感があったものなので覚えていて、どういうものかは記憶にあった。

「あれね、たぶんだけどメタトロンをタイムしてるアイテムかもしれない。だから弱点っていうか、もしかしたらあれを壊せばメタトロンを自由にできるかもな」

「あつー！　じゃ、じゃあ今すぐにでもみんなに」

「いや、仮にタイム状態が解けてもオレ達への敵性が解除されるとは限らない。出来るなら倒すのと同時くらいに破壊できるのが望ましい、かもしれない。弱点がどの程度で効果があるかで判断して適時で有効打を与えるのがいいか……」

「確かにまだ弱点のほどわかりませんが、それよりもちよつと困る

のは、ルーレットさんの Damage Per Second だとどつちかに片寄ると絶

対にそっちの方が大きく削れてしまつて」

「にやるほど」

それで何故テルヨシの元へとやって来たのかよくわからなかったが、いざ弱点を攻撃するとなつてもルーレットの DPS。秒単位でのダメージ効率は他の追隨を許さないほどなので、どうしてもこつちがやろうとしてることにルーレットが合わせなきゃならない。

だがそうなるるとルーレットをコントロールしないといけないが、それはハルユキには不可能なことでわかりきつていたから、それをどうにかできるかもしれないテルヨシを頼つてきたのだ。

自分でもどうにもできなさそうに思えて苦笑してしまうテルヨシだったが、なんとなくあのタイム用のアイテムは壊しておかないといけない気がして、撃破はもちろんだがそちらもやるべきと判断。

「……よし、やるだけやるか。ルーレットのところまで運んでくれるか」

「はいッー」

あまり直感とかは持ち出すべきではないのだが、それが悪い予感なら無視して状況を悪化させる方が最悪。

ましてや《加速研究会》が取りつけたアイテムなら、壊しておくことに越したことはない。

それができるかどうかはルーレットに左右されるとあつては話だけでもしなきゃならない。

通じるかどうかはさておき、今もばかすかと撃ちまくっているルーレットに近づくためにハルユキの手を取つて運んでもらつた。

アネモイで射程も縮んでいるのに果敢に前線へと出て撃ちまくるルーレットは、メタトロンに一番のダメージが出る徹甲榴弾《ボレアス》を撃ち込んで、弾頭をメタトロンに食い込ませて遅延爆発によつて削つていた。

さすがにレイズによる強化もかなり進んでゲージの溜まりが遅そうだが、すでに通常攻撃で全員の必殺技以上の威力が出てるから過剰なほどなので気にしない方向で、とにかく当たるところに当ててる

ルーレットの後方から近づき話しかける。

「ちよつとルールー！ ルールーに集中的に狙ってほしい場所があるんだけど！」

「ああ!? いま忙しい！」

「やってくれたらもうちよつと早くメタトロンを倒せるかもしれないんだけど！」

「ああもう！ どこだよ！」

ボレアスの爆発範囲のギリギリ外まで近づいて撃ってるせいでボツカンボツカンうるさい中を声を張り上げてお願いしてみるが、やはり言うことを素直には聞いてくれそうにない。

それでも効率の話をしたら場所だけでも尋ねてきたので頭の王冠だと言えば「高い！ アネモイじや狙えない！」と却下されてしまう。

「じゃあ次のレイズで出てきた強化外装で決めよう！ 頭の王冠が狙えたら狙って。狙えないならそのままでもいいから！」

「わかったから油売ってんな！ いい加減に撃つぞ！」

ルーレットをコントロールできないならこつちが合わせてやればいかと開き直りからのどつちに転んでもいい提案をして、それに了承したようなしてないような返事から銃口を向けられてしまう。

確かに話してる間に攻撃くらいしろと思うルーレットは正しいので反論できなかつたため、ハルユキと一緒にすぐに逃げるように移動をして、メタトロンから50mの距離から攻撃していたユニコ達に近づいて作戦会議。

『あ？ 頭の王冠なあ？ ホントに効くのかよ』

「私はクーさん達を信じるのです！」

「とりあえず1発集中攻撃だね！」

ルーレットの攻撃が未だアネモイなので、今のうちにハルユキ情報の弱点が本当に有効かを試す流れとなり、ユニコが《ドレッドノート》の主砲を。謡は《フレイム・コーラー》から必殺技《フレイム・ボルトクス》で。マリアも《炸裂弾》を装填して、ハルユキも心意技だが《光線投槍》で声で合わせて一斉に攻撃を放った。

ほぼ同じ位置から放たれた攻撃はマリアの炸裂弾のみ先行して王

冠に直撃し炸裂。

次いで途中で混ざり合うように1つとなつた3人の攻撃が強大なエネルギーとなって、マリアが撃ち抜いた場所へ追撃するように炸裂。

ルーレットの攻撃にも負けない壮絶な攻撃を受けたメタトロンは、これまで見せた中でルーレットのアストライオスによる必殺技と同等レベルの怯みを発生させる。

「本当に効いたのです」

『んじやあたしらはあれを狙えばいいわけか！』

「ちよい待ってレイン、メイデン。狙うのはいいんだけど、それはこのあとのルーレットの動きで変わってくるんだ」

『ああん？ あのアホに合わせんのかよ。んなの近接組だけで十分だろ』

「あの王冠が破壊されてどうなるかわからないから、メタトロンの体力も平行して削りたいんだ。だから次のレイズの後にはルーレットが王冠を狙い始めたら、レイン達は王冠は狙わなくていい。狙わなかつたらレイン達とオレやクロウが狙っていく。そうしないとダメージバランスが……」

確かに弱点であることは確認できたが、王冠の耐久がイコール、メタトロンの体力というわけではないのはチーム用のアイテムであることから確実。

だからそのバランスを取るためにルーレットの狙いと別の動きをテルヨシ達がしなきゃならず、ユニコ達にはこのあとのルーレットの動きに注視してもらう。

そうしたテルヨシの話が面倒臭くてユニコがグチグチと文句を言ってきたが、自分以上の火力になってるルーレットの状態は理解してるので、マリアと謡に宥められながら攻撃を再開していった。

弱点の王冠による怯みが思いのほか大きく、近接組のテルヨシ達も攻撃される頻度が下がると、そこからのメタトロン攻略戦はペースアップ。

強力な攻撃をしてくる予兆を正確に見極めて、それをキャンセルす

るようにユニコ達が王冠を攻撃すれば、キャンセルまでいなくても攻撃までのタイムラグを発生させることができ、テルヨシ達にも回避の余裕が増える。

攻撃のバランスもほぼ均衡が取れて、戦闘開始から30分ほどが経過し、ところどころにひび割れが発生し出して、何かの決定打で完全に壊れるほどになった王冠。メタトロンの残りのHPゲージは最後の4段目の半分も削るまでに。

ここまで来たらもう王冠が破壊されて不測の事態になっても対処ができるかと攻撃しながらに思っていたら、メタロン削りに多大な貢献をしてくれていたルーレットが突如としてメタロンから距離を取っていったため、その挙動を観察。

アホな子だが対戦勘というか、位置取りに関しては天才的なまでに優れていて、いま移動した位置はこれからどんな強化外装が出てもすぐに対応できる絶妙な距離。

つまりレイズによる強化がここできたようで、高々と叫ばれた「レイズ！」と共にアネモイがストレージへと戻されて、ルーレットの近くに次の強化外装が現れる。

「……………はあ?！」

出てきたのは初期では手で持てるはずのボウガン型の《アポロン》だったが、今やその原型でしか残っていないほど巨大な弩弓どきゆうへと変化し、アレースと同様にコマンド操作が可能になっているようだ。

そして弾となる矢は1度に何本も発射できるのか10本は装填されていて、その狙いはギリギリと上へと向けられていく。

「バースト・ショットお!!！」

動きとしては約束通りに王冠を狙ってくれているのだが、あの強化状態で必殺技は確実に王冠が破壊されるし、こんな終盤でユニコでもできそうな役割をやるのもタイミングが微妙としか言いようがない。

しかしそんなこともお構いなしなルーレットは即座に必殺技を発動し、装填された10本の槍とさえ言える矢は強烈な光を放って撃ち出され、ある程度で扇形に拡散した矢はメタトロンの頭部と王冠に次々と着弾し、重さも相当だったのか大きく仰け反ったメタロンが

その動きを止めたのと同時に王冠が粉々に砕けてしまう。

それには必殺技を放とうとしていたユニコがスピーカーから『あつ！ ずりい！』とかなんとか言っていたが、王冠が破壊されたことでメタトロンがどう動くかに注視していたテルヨシは耳だけ傾けて視線を固定。

だがメタトロンは仰け反った体を静かに元に戻すだけで、むしろさっきまでの激しい攻撃が急に収まってほぼ沈黙してしまう。

これには黒雪姫も戸惑ったようだが、好機であることに変わりはない、全員に攻撃の指示を出して数十秒後。

黒雪姫による《奪命撃》が決まったところでようやくメタトロンのHPゲージが尽きて、その体が地へと伏したのだった。

原作15巻辺り

Acceleration Second50

全属性攻撃無効というステータスを失って攻撃可能となったメタトロンに対して猛攻を仕掛けたテルヨシ達の奮闘によって、戦闘開始から約30分ほどでメタトロンはそのHPゲージを全て削られて地へと伏した。

崩れ落ちた体は次々と光の粒子となって消えていき、その現象の最後には視界左に大量のバーストポイントの加算がされる。

初めて神獣級エネミーを倒したテルヨシは達成感とかがもつとあるものと思っただが、なんだか終始で《ボツシュ・ルーレット》に振り回されてしまった疲労感の方が強くて実感が湧かずにため息が漏れる。

近くでは近接組のメンバーが勝利の余韻に浸っていたりしたが、このタイミングでもまだルーレットの挙動に注意していたテルヨシとサアヤは気が気ではない。

「みんな気楽で良いよね……」

「メタトロンが倒された今が何するかわからないのにね……」

そうした眩きをしながらルーレットを見ていたら、必殺技を使ってストレージへと戻された《アポロン》から極端に銃身が短い角張ったデザインのハンドガンに持ち変わって、明らかに士気が落ちた雰囲気ですぐ《東京ミッドタウン・タワー》に乗り込もうといった感じにはなっってなかった。

その原因は出てきた強化外装が特殊弾装型の《ホーライ》だからなのだろうが、あれはあれで怖いから無闇やたらに撃たないでくれるとありがたい。

サアヤもそんなルーレットの雰囲気を感じたのか安堵の息を短く吐いてからようやく周囲に目を向けて、ユリに手を振りかけて止める。

その動作にはテルヨシも気づきサアヤの向く方向に視線を向けユ

リを見れば、ユニコ達と合流していたユリとその近くのマリアと謡もどこかへと指を差して警戒の意思を示す。

何事かと指差す方向を向き、ハルユキ達もそれに気づいてそちら。さつきまでメタトロンが崩れ落ちていた場所を見ると、その場所の上。

上空に浮遊する物体があつて、よく見ればメタトロンの頭から生えていた奇妙な突起であることがなんとなくわかる。

見えていた部分は上半分といったところだが、今は上と下が尖った白い紡錘形ぼうすいがたで、細長い帯が斜めに巻き付いて中身を隠すようなデザインをしている。

しかしあれも紛うことなきメタトロンの一部であるのに、ポイント加算がされた今も存在しているのか。

その疑問は黒雪姫達にもあつたのか、この現象に理解ある者はいないように対応に困る。

——おまえたちが破壊したのは、私の半身に過ぎません。

次いで一番危険であろうルーレットの挙動に目を向けて、やっぱりその銃口を向けつつあつたので、目を離すのは危険だがまずはルーレットへと近寄って様子を見るように手を止めさせようとした。

そこに突如として聞こえたのは《四神》と同じような頭に響く女性らしき声で、その声を発したのが今も浮いている存在であることにすぐに気づく。

声のした後には、巻き付いていた物が解けるように開いて、それが4枚の翼であつたことを理解すると同時に、その中に包み隠されていた存在が姿を現す。

純白の鎧と衣に身を包み、髪も肌も染みひとつないマットホワイトなその女性は、とてもではないがエネミーには見えなかったが、圧倒的な存在感とプレッシャーはさつきまでのメタトロンとは比較にならない。

半身、と言ったからにはあれもメタトロンであるのは間違いないが、閉じられていた目を見開き、その金色の瞳でテルヨシ達を見るメタトロンからは、プレッシャーこそあれど不思議と敵性は感じられな

い。

——おまえたちは、私を縛る忌まわしき頸木くびぎの破壊を成し遂げました。戦士たちを焼き尽くす定めにある私ですが、今は見逃しましょう。おまえたちが、戦いを望むのなら別ですが。

その理由は本人から説明され、こつちにその気さえなければ戦わずに済むと言うので、完全なる未知数にしてさっきのメタトロンよりも強力なプレッシャーを放つ相手をわざわざする理由もこつちにはない。

なので答えは決まっていると思ったが、挑発とも取れる今の発言に反応しそうなのが1人いたのでテルヨシは現在進行形でその銃口をメタトロンへと向けるルーレットにタツクル。

「もちろんやるに決まって……えええええ!!」

「ちよつとルーラー! ミッドタウン・タワーが目的でしょ? なら必要ない戦闘は避ける!」

そのタツクルでホーライの弾丸が放たれることなく事なきを得て、なんとか取り押さえながら説得。

その間にハルユキが戦闘を望まないと声高々に宣言すると、メタトロンは再びその翼で身を包んで白い炎の柱となって消えていった。

本当に心臓に悪すぎるルーレットの挙動は寿命が縮むが、なんとか危機を回避して安堵すると、もういいだろ的な蹴りで突き放されてしまった。

ともあれこれでメタトロン戦は無事に終了。

あとは守りを失ったISSキットの本体を破壊するだけ。と、誰もが思うだろうタイミング。

しかしテルヨシはルーレットのせいもおかげか、まだ保っていた緊張感が解ける寸前にあることが引つ掛かる。

——何故メタトロンが突然動き出したのか。

そりゃエネミーなら動くしテリトリー持ちでもなければ攻撃もしてくるだろう。

だがそのメタトロンが本来はボスエネミーでありテリトリー持ち。しかもタイム状態にあったのだ。

攻撃性はテリトリー内で発揮するにしても、自らが動いてテリトリー内にテルヨシ達を入れてくるような動きは『タイムした存在が命令でもしない限りあり得ない』のではないか。

だとすれば、その命令をした存在はテルヨシ達がいることを察知してメタトロンを動かしたことになる、つまりこの近くに潜伏している可能性が高い。

それに気づいた瞬間。テルヨシは行動を妨害されてイラついていたらルーレットを無視して立ち上がり、武装解除してしまったユニコ達を見てマリアにハンドサインを送り、サアヤにも見えるように《テル・ウィップ》の先端を頭上に持っていきクルクルと回す。

そのサインは『周辺要警戒』であり、声を出さなかったのはテルヨシが気づいたことを相手に察知されなかったためだ。

サアヤは後ろの方にいるので直接確認はできなかったが、気づいているとしてマリアもサインに気づいて下ろしていた《シャープネス》を静かに持ち上げていつでも撃てる準備だけは整えてくれる。

しかし敵の狙いが何であるかはわからないので、テルヨシもどこにどう警戒し備えればいいのか判断がつかず、漠然と周囲を見ることしかできない。

そんな中で消耗もある遠隔組が東京ミッドタウン・タワーによって出来ていた影に足を踏み入れた瞬間。その後方の建物オブジェクトの屋上からキラツ、と4つの紫の光が煌めいたかと思えば、次にはすでにその光が謡の体を貫く結果として現れる。

「……《ヘル・インパクト地獄の一撃》」

それには近くにいたユニコとマリア、ユリが驚く様が見て取れたが、倒れる謡に手を伸ばしたユニコに今度は地面から黒い長方形の板が2枚ぬるっと這い上がってきてユニコを万力のように挟み込み押し潰そうとする。

それを見て……いや、謡が撃ち貫かれた瞬間に両足に真っ黒な心意の過剰光を纏ったテルヨシは、一直線にマリア達のいる場所へと駆けつけていた。

「これはこれは……やはり君は面白い」

——声がした。

あまりに子供らしくない、教師のような口調と低い声色。

それは4月に耳にした《ブラック・バイス》と全く同様の声であり、テルヨシが板の万力に抗うユニコに迫ったが、寸でのところでその板に挟まれてしまったタイミングでのこと。

誰よりも速く駆けつけたテルヨシにしか聞こえなかっただろうその声は板が地面に沈もうとした瞬間に聞こえ、死亡エフェクトがなかったユニコがまだ生きて捕らわれたと理解するより早く沈む板へと全力の心意での蹴りを放つ。

しかし蹴り足が振り抜かれる直前で再び謡を貫いた紫の光線がテルヨシの頭と胸部装甲のど真ん中を撃ち抜く軌道で迫ったのを感じ覚的に察知して無理矢理に体を捻って狙いを外しつつ板へと攻撃。

光線はギリギリこめかみ辺りと脇を掠める軌道で命中したが、そのせいでテルヨシの蹴りはインパクトがズレて、板の上先端を砕く程度でユニコの解放には至らずに沈降を許してしまった。

「……まだ」

着地してマリアの横に来て光線に注意を払いつつも怖いくらいに冷静な頭で状況を分析するテルヨシは、ワンテンポ遅れはしたがここに駆けつけようとするハルユキとパドを視界に捉える。

次いで今のテルヨシへの攻撃と同時にシャープネスを向けてきたマリアにも牽制の光線を1発撃っていて、その回避に動かされていたのも把握。

4発まで撃てるらしい光線のラストは初速のあるパドへと撃つて到達を遅らせたようだが、次弾発射までのインターバルは数秒確保できたと見るべきだ。

その間にテイル・ウィップで倒れる謡を拾い起こして抱き上げつつ、バイスの沈降した影がどこまで繋がっているのかを鋭い眼光で見抜きにかかる。

バイスには影の中を移動するアビリティがあるが、言ってしまえば影が途切れてしまえば1度はその影から出て別の影に入らなければならない。

そして東京ミッドタウン・タワーによって作られた影は500mほど先の交差点で途切れていて、周りには大きな影を作り出すオブジェクトもないため、必ずそこで姿を現すはず。

さらに万全を期すためには拉致されたユニコを《無制限中立フィールド》から離脱させて一時的にでも危機から脱することだ。

それをするには誰かが離脱してユニコのケーブルを引っっこ抜き強制切断させるしかないが、近くには離脱用のポータルは見当たらない、最速でも数分はかかってしまうし、現実に戻ってから3秒程度でケーブルを抜けても、こつちでは1時間近くも経過してしまう。

それでもやらなきゃならないと、自らの王が目の前で拉致された現実に絶望することなくテルヨシへと駆け寄ったユリは一言「あそこじゃ！」と指示して小ジャンプし、狙いがわかったテルヨシも跳んだユリを足に乗せて東京ミッドタウン・タワーに向けて蹴り出して離脱用のポータルにいち早く到達してもらえるようにする。

そのフォロースルーに入ったと同時にハルユキと目が合ったため、何やら自分の翼の他に別の4枚の光の翼まで出現させていたハルユキが怖いほどの加速をしていたので、この速度ならと交差点の方に指差して、その先にバイスが姿を現したことを知らせ追うように指示。

その指示を理解してほぼ直角に曲がったハルユキは尋常ではない速度で交差点を渡るバイスを猛追していき、フォロースルーを終えたテルヨシを追い抜いてパドが光線を撃ってきた敵へとまっすぐに駆けていくのを見送る。

それら全て、テルヨシが着地を終えてからの出来事で、かけた時間は約3秒。

自分でも信じられないほどの行動数だが、称賛など後回し。今は出来ることを全力でしなければ一生後悔することになる。それだけは確信している。

「ベル！ メイデンの回復を頼む！ ロータス！ 戦力の分散は仕方ないが分担を素早く振り分けてくれ！ ガツちゃん！ ルールーが動いてるから頼む！」

バイスも追っていったハルユキの姿もすで見えず、光線を撃って

きた敵も逃走に移ったかインターバルを過ぎても攻撃は来ず、黒雪姫達が遅れて近寄ってきたところでパドが進んだ先から猛烈な爆発音が轟く。

パドがやられたかとも思えるが、光線を撃ってきた敵の主武器が光線ならここまでの爆発を起こすとは考えにくいし、火柱も見えたのでおそらくパドが逃走を阻むために《ブラッドシエッド・カノン》を使ったものと思われる。

それを確信させるように近寄ってきたあきらも「パドの技なの」と驚く一同に言って、その間にチユリが謡に《シトロン・コール》でアバターの修復をしてくれたが、受けたダメージが見た目上で回復するだけなので意識はまだ戻りそうにない。

その謡をフーコへと預けてから、この場での決定を黒雪姫へと委ねて判断を扇ぎつつ、余計な障害もなくなつて当初の目的のために走り出したルーレットを1人で行かせるのは色々と問題がありそうだから、こつちに近寄ろうとしていたサアヤだけはそのあとを追うようにお願い。

ルーレットの危険性がよく理解できてるのがテルヨシとサアヤとマリアくらいということから、サアヤも考えはあつたろうがその足をこつちではなくルーレットを追跡する方へと向けて走り出し、それら全てを整理した黒雪姫も時間勝負な局面と判断してチーム分けをする。

「——パイル、ベル、2人はレパードを追ってくれ！ テイル、お前はレパードとの付き合いが長い。速度もある。2人を連れて出来れば追いつけ」

「任せて、先輩！」

「了解です、マスター！」

「……2人は先に行つて。10秒で追いつくから」

人選に文句があるわけではない。追いつけるかもわからないパドとハルユキを追って戦力を過剰に分散するのは下策だし、短い思考で現状の戦力と連携まで考えられた黒雪姫は冷静でもある。

だがテルヨシにはここで分かれるとするなら、誰がどう動くのかを

把握し、パド達にも伝える役目を担わなければならない。

だから先に走り出したチユリとタクムには全速で追いついてティル・ウィップでまとめて運べばいいと判断し、手早く黒雪姫達の動きを聞き出す。

「私とレイカー、カレン、メイデン、アンは先行したガストとボンバーを追って東京ミッドタウン・タワーへ行く。守りを失ったとはいえ、何が待ち構えているかわからないしな」

「クロウを追わないのは諦めか、信頼か」

「無論、信頼以外にあるまい。今の彼ならきつとバイスにも引けを取らんさ」

「……わかった。ガツちゃんもアンもいるから具体的には言わないけど、ルールー……ボツシユ・ルーレットの目的もISSキットの本体にあるっぽいから、そこは頭に入れておいて」

「あのアホ娘が？ン、ならば早く追いつかねばな。あの暴走具合ではガスト1人では制御できまい」

すると残りの全員がISSキットの本体の破壊に動くという判断を下した黒雪姫は、すでに影も形もなくなったハルユキを追うのを断念。

そう決断したが、それは追いつけないから諦めたのではなく、信頼によるものであると断言した黒雪姫にテルヨシも言うことはなし。

最後にルーレットが何をするかわからないことを注意してから、意識が戻った謡の頬に優しく触れて「もう少しだけ頑張つて」とささやかな声援を贈ってから先行した2人を追って走り出した。

宣言通り10秒足らずで走る2人に追いついて、そのままテイル・ウィップで拾い上げて心意技《ライトニング・フアントム閃光の幻影》による移動力強化で一気に加速。

疲労はかなりあるが、一刻を争う事態は待つてくれないので体に鞭を打って走り、物凄い熱気が立ち込める地帯を抜けてさらに奥へ。

そこでまたさつきと同じ轟音が轟き、かなり近くで炸裂して火柱が見えて、そこを目指してひた走る。

そして、見えた。

足を止めて逃走していた敵と対峙するビーストモードのパドの後ろ姿と、機嫌の悪そうに少しイラついた雰囲気、《アルゴン・アレイ》の姿が。

テルヨシは具体的にアルゴンについてを黒雪姫達から聞いていたわけではなかったたので、この場にいることさえちよつとした衝撃だったのだが、バイスに協力し敵対しているのなら、彼女もまた加速研究会の一員であるということ。

それだけの事実があれば迷いはなく、2人の均衡を破るようにアルゴンへと駆けて捕らえるためにチユリとタクムを速度を殺しつつパドの近くに放り、空いたテイル・ウィップで捕獲に挑む。

「もう何やねんって！——《ラズル・ダズル》」

しかし寸でのところで謎の必殺技が放たれて、頭の4連レンズから強烈な光が発生。

それには防御が間に合わなかったテルヨシは空振り覚悟で視界ゼロの中、テイル・ウィップを振りアルゴンを捕らえようとしたが、テイル・ウィップは虚しく空を切り、テルヨシ自身も盲目状態でバランスを崩して地面を転がってしまった。

「くっそ……パドおー！」

幸い、テルヨシが至近距離で必殺技を受けたことで、後ろにいた3人はテルヨシがブラインドになって今の目眩ましの影響をあまり受けなかったはず。

ならば視界を奪われずにいてスピードの出せるパドなら逃走を追えると判断し叫ぶのと同時に、何か物凄い速度で通り過ぎる風切り音がした。

パドもまた決断に迷いなく飛び出してくれたのだ。

そのタイムラグはほとんどなかったと思われるが、テルヨシもすぐに追おうと立ち上がるものの、視界が戻るにはまだ時間がかかりそうに困った。

だからヨロヨロとした足取りのテルヨシはどう進めばいいかわからず走るに走れなかったが、その体を両側から支えてくれる存在が声と共にやってきた。

「行きますよ、先輩！」

「ナイスアタックでしたよ、テイルさん」

小さな体でも必死に支えようとしてくれるチュリと、迷いのなかった行動を称賛するタクム。

2人の優しい後輩に支えられて導かれるようにパドとアルゴンを追いつめたテルヨシは、1秒でも早い回復を促すために2人を頼って完全に目を閉じ、追いついた先で役に立てるように準備を始めた。

「パドさんー！」

「レパードさん!!」

十数秒とかならなかつたはずだが、まだ視界が戻らないテルヨシに教えるようにパドの姿が見えたことを伝えてくれた2人の声に応えるように、近くにいるはずのパドも声を張り上げる。

「手伝って！ このゲートを！」

その言葉からは必死さが伝わってきたが、何が何やらなテルヨシではどうすればいいかわからず、一刻を争うのか2人がテルヨシから手を離してパドへと近寄り、あれこれ話してタクムがカウントダウンを始めてしまう。

ゲートって何？ 何のカウント？

というテルヨシの疑問が解ける間もなくゼロのカウントと共にタクムの口から「《スパイラル・グラビティ・ドライバー》!!」とかいう聞き慣れない技名が飛び出し、何かを掘削するような音とドリルの回転音が。

そしてタクムの気合いの声の後には、バリバリバリイン！ といった何かの碎けるサウンドが轟き、音は止んでしまう。

「へい！ 何が起こってるの?」

「GJ！ あとは任せて！」

「あたしたちも行くよ！」

「そうですレパードさん！ テイルさんも行きますよ！」

「だから何!?! 何なの!?!」

ようやくぼんやりと視界が戻りかけてきたのだが、まだ全然状況を把握できるレベルではなかつたテルヨシをほぼ置いてきぼりにして

話が進行。

アルゴンを追ってたはずが何かを壊す作業をしていたっぽいのはわかるが、今度はタクムがテルヨシの手を取って確認もなしにいきなりどこかへと身を投げたらしく、一瞬の浮遊感でどこかに落ちたと思っただが、すぐにその感覚は失われ、今度は手を掴んでくれているはずのタクムの感触がなくなり、聴覚も機能していないようだ。

さらに体は何かの力の流れに流されているようで、高速で移動している感覚がなんとなくなる。

——えっ？ 待って。オレどこに行こうとしているの？

「うわっとー!」

《東京ミッドタウン・タワー》を守護するメタトロンを退けられたかと思えば、気を緩める絶妙のタイミングで今度は加速研究会の《ブラック・バイス》と《アルゴン・アレイ》が奇襲を仕掛けてきて、消耗していたユニコを拉致。

その奪還に動いたテルヨシは唯一追えたアルゴンを追ってきたのはいいが、そのアルゴンの目眩ましで視界ほぼゼロのままどこかへと移動させられて、謎の力の流れに抗うこともできずにそれが止まるのを待っていた。

そしてようやく止まったかと思えば、いきなり尻から硬質な地面に落とされて何事かとぼやける視界で周囲を観察。

まだ不明瞭な視界だが光源はあるらしく白い壁や天井。床が見えることからどこかの室内のように思える。

「はああ……ふう。集中集中」

ここまで視界が戻ればあとは黙って目を閉じて回復に専念し、数秒の沈黙から目を開ければバツチリ回復。

やはりどこかの建物の中のようなだが、大理石の神殿の一室といった長方形の空間の現在地には窓もなく外が見えないが、大理石の長テーブルと丸椅子がいくつか規則的に並んでいる。

あの謎の移動速度だと結構な距離を移動してきたようだが、何度か曲がったような感覚もあったから、直線距離にすればそこまで遠くに来たような気もしないが、要はよくわからない。

「……あれ、パド達は……」

だがアルゴンを追ってここに辿り着いたなら、まだ近くにアルゴンがいる可能性はあるし、ユニコの奪還という役目を担うからには判断は早くしなければと立ち上がった。

しかしそこで一緒に来たはずのパド、チュリ、タクムの姿がどこにもないことに今さら気づいて心が乱れかける。

考えられるのはあの謎の移動中にはぐれて別のところに出てし

まったか、或いはタクムに嵌められて自分だけがよくわからないところに放られたか。

まあ後者は冗談としても、前者の可能性は高いので、適当に移動していたら会えるかもと、とりあえず何もなさそうなこの部屋からは出て同じ方角の左右に2つある扉の1つを開けて進もうとする。

「……ん、待てよ」

ちよつとあまりに冷静に、常識的に判断してしまったが、この《無制限中立フィールド》で馬鹿正直に扉を開けて移動する必要はそもそもないのだ。

ここがどこかをまず確認するなら、ここの壁を破壊して突き進んで外に出て、見覚えのあるランドマークなりなんなりを見つければいい。

《黄昏》ステージのオブジェクトは基本的に脆いから破壊は容易だし、そっちの方が中を移動するより手っ取り早いなど判断して扉ではなく壁の前に移動して、とりあえず景気よく派手に壊そうと右足での回し蹴りを放つ。

——ガツギイイイイン!!

……ホワツツ? ドウユウコトデスカ?

しかし壁はテルヨシの回し蹴りをまともに受けてもビクともせず、むしろテルヨシの足を弾き飛ばすほどの強度を持っていて、完全に予想外だったテルヨシは頭に大量のクエスチョンマークを出現させる。破壊できない、もしくは異常な強度を持っているオブジェクトなのか。

どちらにしてもそんな例外なものが黄昏ステージにあったか記憶を掘り起こしてみるが、そんなものがあつたら黒雪姫辺りがとくに教えてくれている。

「……破壊不可……地面と……大型建造物と……ダンジョン?」

それならば破壊できない理屈が存在するのは道理で、テルヨシの知る限りの破壊不可能なオブジェクトやらを思い出し、その中でダンジョンというのに引っ掛かる。

確かにダンジョンを形成する壁や天井なら破壊は難しいだろう。

だがそうだと断言するには材料が足りないし、どうにも違和感もある。

その違和感はこの部屋の雰囲気であり、初めて来たはずのこの部屋ではあるが、何故かこう、初めて入った気がしない。

「……………学校？」

だから扉の前に移動して部屋全体をじっくりと観察しながらその違和感の原因を探してみると、規則的に並んでいる長テーブルと丸椅子と、1つだけ違う配置にあった長テーブルが教壇のように見え、不意に学校の教室。理科実験室辺りの配置に近いことに気づく。

だとすればここがダンジョンである可能性は低くなった気がする。どこかの廃校がダンジョン化した可能性もあるが、丸椅子がこうも生成されているならまだ現役の学校で、そんなところがダンジョンなら、ここに通うバスストリンカーは大変な思いをすることになる。

「……………長考しすぎだな。まずは動くか」

そこまででずいぶんと足を止めてしまつて、今はここがどこかを判明させるのも大事だが、何よりもユニコを奪還することが最優先。

壁や天井が破壊できないなら素直に扉から移動するしかないと判断して、ここが学校であるという仮説のもと移動を開始する。

扉を出た先は、やはり広めの廊下といった感じで、直線で作られる廊下はかなり長く、梅郷中学校など比ではない大きさだ。

廊下の先には学校らしく他にいくつも教室と思われる場所に繋がる扉があり、周囲に人の気配はしない。

「目指すなら屋上か」

奇妙なのはこの廊下に1つくらいあってもおかしくない窓がないこと。

学校の造りとして窓がないなどまずあり得ないので、可能性はここが窓をつけられない状態。例えば地下であつたりとすることだが、学校であるなら生徒のために複雑な造りはしていないので、廊下を歩いていけば自然と階段に突き当たる。

生成されているならここにもソーシャルカメラが存在するわけで、その廊下を警戒しながら歩いてみるが、やはり長い。一辺だけで10

0 m以上はある。

校舎だけでこれほど広大な敷地面積だと、一貫校などの広い学年層の生徒が在籍しているマンモス校なのは間違いないから、場所さえ大体でも特定すれば学校名もすぐにわかりそうだ。

そんなことを考えながら歩いていると、ようやく四方に割れる道が現れ、どこに進んでも未知だが、左の道の先だけは少し先で広い空間になっているようだったので、そちらをまずは確認しようと廊下を左に曲がり広い空間に出る。

部屋、というには何も無い空間で、ここもまた四方に通路があつて、右の通路からは上層へと階段が見えている。

どうやら当たりを引いたようだが、この階層にアルゴンがいる可能性も捨てきれないため、すぐに上がるべきか判断に困る。

「もう少し探索しておくか……」

もしもパド達がこの上層にいるなら、そっちはパド達が搜索してくれているだろうし、この階層より下もあるかもしれない。自分しかいないなら見逃しはあつてはならない。

せめてここより下の階層がないかだけでもと動こうとした時、右の階段から物音がして、誰かが降りてくるのがわかった。

誰かはわからないので隠れようとも思ったが、敵だとしても早く情報が欲しいのであえて階段の真正面からドンと待ち構えてやる。

そして思ったよりずっと長かった階段を降りて折り返す踊り場に姿を現し降りてきたのは……

「お前……」

「どうして……ここにいるんすか」

テルヨシと同じく加速研究会の企みに屈したりしないと王達の前で宣言し明確に敵視して、テルヨシとも激闘を繰り広げた《シーバ・カタストロフ》だった。

テルヨシもそうだが、カタフの方もこの遭遇には驚きを隠せない雰囲気即戦闘。ということにはならなかったが、状況が状況なので警戒だけは向こうに伝わるように軽く身構える。

「それはごっちの台詞だがな、カタフ。お前こそ加速研究会がいるか

もしれないこんなところで何してんだ？」

「加速研究会？　あり得ないっすよ。ここは僕の『友人』のプレイヤーホームっすよ」

「プ……この建物全部がか？」

「それより上で僕はお願いをされたんすよ。『このホームに招かれざる客が来てしまったから、こちらの作業が終わるまで相手をしてほしい』って。その招かれざる客っていうのが、テイルさんなんすか？」

「……そうだとしたら？」

「なら僕はテイルさんのお相手をしなきゃならないっすね」

カタフにも混乱はあったが取り乱したりはせずに会話に応じてくれるが、この建物全部がプレイヤーホームという衝撃の事実に驚愕。

さらに畳みかけるように侵入者認定されていることにも疑問が生じる。

テルヨシはここに来てからまだ誰とも遭遇していないので、おそらくはパド達の方が先にアルゴン達と遭遇してのことだろうが、カタフがここまで遭遇していないなら単に見逃したか、或いはこの階層に誰かいるかだ。

そもそもカタフにお願いとやらをした人物が誰かも不明で状況が飲み込めないし、カタフの言う友人が誰を指しているのかもわからない。

わからないことだらけで正しい判断ができないのは非常にイラつくが、目の前のカタフが今は敵であることはほぼ間違いない。

「要は時間稼ぎってことだろ。なら平和的に雑談でもしながらやり過ぎすって手はないかね」

「そうもいかないっすよ。僕もかなり驚いたんす。まさかテイルさんが『赤の王を全損させようとする』なんて。そんなことは絶対にさせないっす」

「レインを、全損ねえ……」

敵であることには違いないが、話の限りでは完全に敵というわけではなく、事実をねじ曲げて上手く使われてるといった感じだ。

お願いをした人物というのもどうやらユニコを拉致したブラック・

バイスの可能性が高い。

そうでなきやユニコをピンポイントで名指しして話しても説得力に欠けるから、必ずユニコ本人をカタフに見せる必要がある。

「ちなみにそのお願いをしてきた友人か？　は誰なんだ？」

「……残念ながら教えられないです。僕もこれから戦わなきやならぬい相手にベラベラと口を開くほどバカじゃないです」

「んじや最後。ここに来るまでに誰かに会わなかったか？」

「会ってないです。それならそつちを優先してるつすよ。テイルさんもよくわからない人つすね」

「そつか。それなら……」

アルゴンを追ってきて辿り着いた場所だが、バイスとユニコもこの建物内にいる。

それがわかったただけでも収穫はあつたし、できるかどうかもわからない説得を試みる時間もおそらくはない。

なのでもしもまだこの階層に誰かいるならと、右足に過剰光を纏つてみせ、カタフが身構えたのを他所にその足を思い切り大理石の床へと振り下ろす。

プレイヤーホームというのはかなり優先度の高いものと黒雪姫やサアヤも言っていたことから、心意での事象の上書きでもしないと傷1つ付かない可能性は高い。

だからこそその心意での蹴りだったが、予想以上に強度はあつて予想よりも破壊の規模は小さかったものの、空間を揺らす震動と轟音と共に着弾点から放射状に床がひび割れる。

しかしすぐにリソースを割かれているからか、床はひびを修復して3秒とかからずに元通り。

それには何がしたかったのかと首を傾げたカタフだったが、別に攻撃が目的だったわけじゃないのでテルヨシもすぐに過剰光を消してしまう。

「さつてと。それじゃあ赤の王を全損させようとする患者の退治、やってみるか？」

「……まだ信じたくはなかったつすが、自分からそんなことを言うな

ら、もうやるしかないっすね」

やれることはやったのであとは経過を見て判断しようと、心意を使う様子のないカタフに合わせてテルヨシも心意はなしで……というよりはここまでの消耗でしばらく心意も出せるかわからない具合まで来ているから、正直ありがたいくらい。

それを知らないカタフには気づかれないように静かに構える。

こういう時でも変に律儀というかなななカタフは、テルヨシが構えるまで仕掛けることはせずに、構えた瞬間に前へと出て拳を振るってくる。

前回の対戦では惜敗したが、あれから対カタフ戦の考察は死ぬほど……それこそ《ビヤツコ》に殺されまくって暇な蘇生待機の時間であれこれとしていたので、負けを引きずるような気おくれは今さらない。

しかしだ。現実とは非情なことこの上ない。

おそらくは万全の状態に近いカタフの活気に溢れる拳に対して反応しようとしたテルヨシだったが、自分で思ってるよりも体が鈍重になっていて普段なら余裕を持って避けられた拳を手で捌いてようやく避けることができた。

そのテルヨシの疲弊に気づいたか、拳を捌かれたカタフも確信を得ようとしたのかすぐに追撃の拳を放ってきて、ここでも足がついてこなかったせいで咄嗟に膝を折って屈み《テイル・ウィップ》でカタフの足を払いにいき回避へと動かさせ、その隙に立ち上がって距離を取る。

「どこか調子が悪いんすか？ 装甲もところどころ傷が目立つっすね」

「こちとら十数分前までメタトロンと戦ってたんだ。疲れてないって方が無理がある」

「メタトロンって、東京ミッドタウン・タワーからどうやってここまで来れるんすか。ここ白金っすよ。そもそもこここの出入り口には僕がいたんすから、テイルさんがここにいないこと自体、訳がわからないんすか……」

それはこつちが聞きたいくらいだ。

完全にテルヨシの消耗に気づいたカタフはすぐに倒そうといった
気配が薄れて、こつちの情報を引き出そうとしてきた。

なのでカタフには多少だが迷いが出るように真実だけを語ってや
れば、勝手にここがどの辺かを漏らしてくれる。

白金となると東京ミッドタウン・タワーからは2、3kmは離れた
場所で、テルヨシからすればワープに近い移動をしたようだ。

……白金？

しかもカタフがこの出入り口にいたなら、テルヨシもどうやって
そんな場所の下層階にいたのか謎が深まるが、それよりも白金と聞い
て何やら急に引つ掛かりを感じて思考に入りかける。

だがそれをキャンセルするように口が滑ったと言うようなカタフ
の強襲があつたので、思考しながら戦闘など余裕がないため仕方なく
戦闘に集中しつつ疲労回復のタイミングを図る。

加速世界での疲労に肉体的な疲労はないが、精神力が消耗されれば
それだけ反応速度や命令伝達速度にダイレクトな影響を及ぼす。

それを回復させるにはとにかく頭を休めるのが最善だが、カタフが
そんなことを悠長にさせてくれるはずもないので、可能な限り頭を休
ませながらカタフを躲す手段を取る必要がある。

そんなこと出来るはずがないと思うかもしれないが、日頃から職業
病に近い心理学での観察を封印してるテルヨシがそれを解除すると、
割と悪巧みは浮かんてしまうもので、そこに消耗という概念はない。

「おいおいカタフ、手負いの相手には全力を出せないか？ 甘ちゃん
だねえ」

それだけでなくテルヨシのコンディションが悪いとわかってから
のカタフのパフォーマンスも1段階下がってしまつて対処がギリギリ
りで間に合つてしまう。

だがそれでは困るのでカタフの拳を捌きつつ余裕があることを示
してみせると、自覚はあつたのかちよつとムツとした雰囲気になつて
からのカタフの拳に力が戻る。

普段は攻めてくる相手を迎撃するカウンタータイプのカタフを前

に出す。

それをやろうとしての挑発だったが、消耗した精神力でカタフの豪腕を捌けるのも短い時間となりそうな予感にして、挑発は余計だったかと思いつつ徐々に後退を強いられて階段から遠ざかってしまう。

1度でもクリーンヒットを貰ったらそこから雪崩のように拳を叩き込まれて一瞬で撃破されてしまうだろう猛攻の要所は回避してすっきり余裕のない雰囲気の下がる足がもつれそうになる。

しかもカタフはまだ《ファントム・フィスト》を使わずに追い詰めてきているので、それが使われた時には《インパクト・ジャンプ》による全力での離脱も止むなし。

「さて、向こうは……どうなったかね」

「向こうって、どこっすか？」

「メタトロンは倒したからな……パド達が今頃はISSキットの本体を壊してくれたかなってな」

「……どうして赤の王を全損させようって人が、レパードさんと行動してるんすか！」

しかしカタフがファントム・フィストを使ってくる気配がほぼないことに気づいていたテルヨシは、友人のお願いとやらとテルヨシの言っていることに矛盾を感じているからと推測。

その迷いがまだわずかにカタフの拳を鈍らせてくれている内に手を打ちたかったので、一種の賭けに出てみる。

カタフはテルヨシとプロミとの関係が良好なことはすでに知っているから、友人の言葉に疑問が生じているとして、全損させようとしていたテルヨシがさつきまでそのプロミと行動を共にしていたとわかる言葉で更なる迷いを生み出す。

本当はパドもこの建物に来ているだろうが、重要なのはプロミと行動を共にしていた情報。

「そんなの決まってるんだろ。オレがレインを助けにここに来たからだよ！」

そこから飛んでくる疑問など誘導したのだから答えも持ち合わせていたテルヨシは、言葉と共に撃ち出された拳を紙一重で避ける集中

力を一瞬だけ発揮してテイル・ウィップで体を持ち上げ拳を躲すと、いつの間にやら広い空間から階段に通じる道と反対の通路に入って60mほどは後退していた位置から素早く体を調整してカタフの頭上でインパクト・ジャンプを発動しカタフを飛び越えて来た道を一気に戻る。

ここでカタフがすべきだったのはテルヨシの足止めであり、倒さないまでも最悪、階段を登らせてはいけなかったのだが、テルヨシを倒すことに意識を向けたことで守備の意識が薄れていた。

それだけを狙って挑発と必死の後退を演じたわけだ。

そして広い空間に戻って着地し、通路で振り返ったカタフにテルヨシも振り返ってみせ、先ほどの床の破壊に反応した存在もないことを確認——敵だろうと味方だろうとだ——して、やはり悪い奴ではないカタフに1つだけ助言しておく。

「何を信じるかはお前次第だ、カタフ。だがお前が最も信じられるのは、自分の目で見た真実だろうよ。そしてあるぞ、この先に。お前の知りたい真実ってやつがな」

「真実……」

悪い奴ではないからこそ、加速研究会のような多重の策を巡らせるズル賢い連中につけ込まれてしまうのだ。

先見という言葉があるように、将棋や囲碁、チェスといったテーブルゲームでは先の先を読む力が必要になるが、カタフには対戦ではなかなかだが、普段はそれが少し欠けてしまっている。

いや、もしかするとその先見すらも凌駕する『心酔』や『信仰』、『洗脳』がすでにカタフにはされてしまっているのかもしれない。

ともあれここでカタフと戦っていても勝ち目はないので、友人が言っていた『作業』とやらにとてつもない危険を予感するテルヨシは、その阻止のためにカタフから逃げる形で階段を登り始めたのだった。

——反応できなかつた。

《神獣級》エネミー《大天使メタトロン》の撃破に成功して全員が安堵し警戒が薄れた数秒。

《ボツシュ・ルーレット》にタツクルをしてメタトロンの第2形態と思われる存在に攻撃するのをキャンセルさせたテルヨシが邪魔だと蹴られてるのを少し笑いながら見ていたら、そのテルヨシが急に立ち上がってその後頭部に接続されてる《テイル・ウィップ》をくねつと動かして頭上で先端をクルクル回す。

それは長い領土戦においていくつか出来上がった言葉を用いない時のサインで、意味するのは『周辺要警戒』。

ここからだとしてテルヨシの後ろ姿しか確認できなかったが、その奥にいたマリアもユニコやユリが警戒を解く中で《シャープネス》を構え直したから、おそらくテルヨシがハンドサインを出したのだろう。

しかしサアヤにはそれが意味するところがわからず、どこをどう警戒すればいいかも不明で漠然と周囲に目を向けることしかできなかった。

せめてテルヨシが見ている別の方向をと思つて後ろに振り返つて警戒をしていたら、2秒程度でハルユキの悲痛な叫びが聞こえて振り返る。

その時にはすでに遠くの視界で謡が前に倒れる姿と、ユニコがいつの間にか現れた2枚の黒い板に挟まれて押し潰されそうになつてる姿が見え、警戒を促していたテルヨシも両足にどす黒い心意の過剰光を纏つて誰よりも早く駆け出していた。

1秒後。ユニコが黒い板に完全に挟まれてしまい、その板へと強烈な蹴りをお見舞いしようとしたテルヨシが《アルゴン・アレイ》の2本のレーザーに阻まれてクリーンヒットを外されてしまい、黒い板は地面へと沈み込んで消える。

アルゴンのレーザーは一瞬遅れて飛び出したレパードと迎撃に動いたマリアにも1発ずつ放たれたものの、命中はせずにそれ以降の攻

撃は来なくなる。

さらに翼を広げて飛び出したハルユキには心意とは違う別の力が加わって4枚の光翼が出現。これまで以上の加速でテルヨシのいる場所へと迫ったが、ユリを《東京ミッドタウン・タワー》に向けて蹴り飛ばしたテルヨシが北の交差点を指差したのを見てほぼ直角のターンでそちらへと飛び、その先にはユニコを抱えた黒い板のアバター《ブラック・バイス》が交差点を渡り始めていた。

それら全てが終わった頃に全員がテルヨシ達のいる地点に走り出し、サアヤも急いで走り寄ろうとした。

だがそれと同時にサアヤの前方でそれとは別の方向、東京ミッドタウン・タワーへと走り始めたルーレットがいて、目的がISSキットの本体にあることはわかっているものの、真意までは見えていないため野放しにしているものかと思惑。

「ガッちゃん！ ルーラーが動いてるから頼む！」

そこに聞こえたテルヨシの声に足を止めかけて、サアヤの迷いにドンピシャなお願いをされてしまえば、黒雪姫達と短くても作戦会議をするべきところでもルーレットを追う選択をすることができた。

東京ミッドタウン・タワーにはすでにユリがアビリティとテルヨシの力で先行して飛んでいったが、目的は離脱用のポータルを潜って現実世界のユニコからケーブルを抜き強制切断することで間違いないので、ISSキットの本体の相手はしないはず。

そうなることやりルーレットを先にISSキットの本体まで到達させるのは危険、とは違うが何が起きるかわからない以上は阻止すべき。

「……情けないわね」

そう考えながらも、サアヤの頭にあるのは、さっきの奇襲において何ひとつアクションすることができなかったこと。

後ろを向いていたから反応が遅れた部分はある。それでもだ。

おそらくは今回のメンバーの中ではフーコとあきらとほぼ同等の最古参である自分が、2年ちよつとのテルヨシと1年と経っていないハルユキに反応速度で完全に負けたのは少なからずショックを受け

た。

さらにテルヨシは反応しただけでなくその後の判断も常人の域を越えた処理での確に指示を飛ばし、サアヤの迷いすら断ち切った。

本来ならばそれはサアヤやフーコ、黒雪姫がやるべきことなのに、それができてしまったテルヨシは称賛に値すると同時に、サアヤ達をその間だけでも越える実力の片鱗を見せた。

——才能なんてものはもう見飽きたと思っていた。

《レッド・ライダー》《ブルー・ナイト》《グリーン・グランデ》《パール・ソーン》《イエロー・レディオ》《ブラック・ロータス》《ホワイト・コスモス》。

かつての《純色の七王》はもちろんのこと、フーコを始めとした古参リンカーの中にも天性と呼べる才能を持つ人はそれなりにいたし、それらと対等以上に渡り合うための努力と経験値を積み重ねてやつてもこられた。

勝ち負けなど別にいい。才能などに屈する段階はどうに乗り越えているから。

だがサアヤが悔しいのは、最も身近な存在が自分を置いて先に行ってしまうことだ。

今のサアヤにとっての身近な存在は《子》である《アイス・イーター》はもちろんだが、彼氏であるテルヨシもその家族であるマリアもそれに当てはまる。

そのテルヨシが、隣を歩いてくれたはずのテルヨシが、今の出来事で背中をチラツと見せてきた。

今はまだいいのかもしれない。けど、このまま同じ速度で歩いてはいずれテルヨシの背中だけを見て追いかけることになる。

そんな気がした時、悔しさと共に恐怖が襲ってきたのだ。

「嫌よ、テル。置いていかないで」

きつとテルヨシなら、遅れるサアヤに振り返って優しく手を差し伸べ引っ張ってくれる。

そんなことはわかりきっていても、かつて勝手に先に行っていないくなったどうしようもない『バカ』がいたのだ。

その過去とは決着をつけたものの、それで恐怖まで振り払えたわけでは、決してない。

——あんな思いは、もう2度とごめんよ。

歩く速度が違うなら、自分が合わせればいい。それが無理なら弱音を吐けばいい。

それが出来るのが皇照良という、信じると決めた男なのだから。

弱音は戻ってからいくらでも吐いてやる。でも今は強がりでもなんでも弱い自分は押し殺して進む。

そうと決めたらサアヤの足は自然と速くなり、少し前を走り東京ミッドタウン・タワーの建物内に入ってしまったルーレットに続いて、サアヤも建物内部へと突入した。

東京ミッドタウン・タワーは高さにして248mもあり、階層にすると地下の5階を含めれば59階層の高層タワーだ。

この内部にはユリが真っ先に目指した離脱用のポータルもあり、それはサアヤの記憶の限りでは45階に存在するが、ISSキットの本体がこの巨大なタワーのどこに、どれほどの大きさで存在するかわからない。

それなのにルーレットは全く速度を緩めることなくどんどん上へと登っていきこうとしていて、とにかくルーレットよりも先にISSキットの本体を見つけて何かするのを阻止しなきゃならないので、追いつけ追い越せの勢いでサアヤもアバターのステータスで天井に穴を開けてその穴からジャンプして上の階層を目指す。

幸い今のルーレットの装備している強化外装は特殊弾装型のハンドガン《ホーライ》で、知る限りで使える弾丸はマーキングによる地面への設置・振動感知し、スタン付きの電撃を出す《エウノミアー》。5秒間ロックオンした敵にかなり速い雷を落とす《ディケー》の2種類。

エウノミアーもディケーもいずれもオブジェクトに対しては使用できず、ディケーに至っては屋内では不発するのか使ったところすら見たことがない。

だからルーレットも律儀に階段や、すでに壊れて通れそうな穴を

使って登っているので、若干だがサアヤの方が登る速度で上回り《黄昏》ステージのオブジェクトが脆いことも加味して《ブレード・ファン》を展開剣にしてリーチを伸ばし天井を円形に斬り抜いて効率を上げる。

「あああああ!! 焦れたい!!」

そうやってサアヤが横から徐々に抜き去っていくからか、イラついたルーレットはそれを吐き出すように叫んで速度を上げたかと思えば、サアヤが次の階層に行こうと天井に穴を開けるタイミングでルーレットがサアヤの足下にエウノミアーを撃ち込んできたのだ。

「はあ!? あつぶな!! 何すんの!!」

「うるさーい! 横でひよいひよい進むなバカああ!!」

設置からすぐには発動しないので感知されるより早く範囲から出て事なきを得たものの、ここにきていきなり約束を破って攻撃してきたルーレットには短気なサアヤも喧嘩腰。

そうして足を止めたのがいけなかったか、叫んでから「ディケー!」と弾丸を換えたルーレットは、今度はサアヤをロックオンしようと銃口を向けてくる。

「あ、あら……それって屋内じゃ使えないんじゃないの?」

「使えない、普段なら。天井とかにぶつかって当たる前に消える。だが今は違う!」

「ま、まさかあ……」

屋内で使えないのは当たりだったが、それも通常対戦中の《レイズ》の限界があるからで、この《無制限中立フィールド》で上限のないレイズによる強化が進めば、その限りではない。

サアヤの疑問に対しての答えはつまりそういうこと。

その間に5秒のロックオンを完了させたルーレットは、まだ半信半疑なサアヤに構わずに「貫けええ!!」と盛大に引き金を引く。

するとサアヤの頭上から物凄い勢いで建物が壊れる音が近づいてきて、3秒としない内にサアヤのすぐ上の天井が猛烈な雷によって粉砕されて勢いそのままにサアヤへと襲いかかる。

だがさすがに着弾までに時間があつたので、如何に落雷と言えど当

たつてやれるわけもなく、大きく横つ飛びすることで落雷を回避。

雷はサアヤのいた地点を穿つても衰えを見せずに地上1階まで直径3mほどの穴を開けてようやく消えたが、もはやソーンの電撃など比較にならない威力に戦慄。

「……よしー」

「よし！ じゃないわよ！ 死ぬわ！」

「うるさい！ こうすればお前もいちいち壊さなくていいだろうが！」

——本当にこのアホは！

そう思つて怒りに任せて怒鳴ってしまったが、何でか満足気なルーレットにちよつと違和感があり、サアヤに命中してないのによつて何だと思つたら、ホーライを下ろしたルーレットは、どうやら東京ミッドタウン・タワーの屋上より上から落ちてきたらしいデイケーの落雷によつて出来た屋上までの直通ルートを開拓したかつたようだった。

改めて出来た大穴を見れば、確かに一直線に開いた穴の彼方に黄昏ステージの夕焼け空がわずかに見えるので、余計な手間を省けてはい

る。しかしこうも綺麗に穴が開くものなのかと疑問は残るが、純粋なエネルギーゆえに拡散せずに周囲への被害が出なかった結果かと自己完結。

それを狙っていたルーレットはすぐにその穴から次の階層にジャンプして行つてしまい、少し遅れてサアヤもそのあとを追うが、今でサアヤの中でルーレットの評価が変わる。

イラついていたのは確かだし、約束を破つて攻撃してきたのも経過としての事実ではあるが、結果としてサアヤはダメージを負つていない。

最初のエウノミアーにしてもサアヤの足を止める目的で撃たれたのだと今になればわかるし、デイケーを撃つためにサアヤをロックオンしなきゃならなかったのも、落雷が到達するよりも早くサアヤが避けられるだろうことも計算していたなら、ルーレットは本当はアホの

子ではなく、ちゃんと結果を予測して動ける知略を持っている、かもしれない。

目に映るものは全て敵！ という思考は身に染み付いているのかもしれないが、それはそうあらねばならないルーレットなりの理由があつて、本当は他人のことを考えて行動できる子なのではないか。

あくまで可能性の話ではあるが、そう思うとルーレットを頭ごなしにアホの子と諦めるのは早計ではないかと思えて、今回の遭遇はひよつとすれば不運ではなく幸運だったのかもしれない。

「つて、ちよつと！ 速いわよー！」

「うるさいオバさん！」

「オバツ!? こ、殺す！」

そうやって少しだけ先を行くルーレットの姿を見ながら思考していたら、ちよつとずつルーレットが引き離してきたので、せめて階層のチェックくらいちよつと止まってやれと暗に言ったら、年頃の中学生に禁句を口にしたので、反射的に展開剣を刺しそうになったが、ギリギリのところまで踏み留まる。

——やっぱリアホの子なので全てが終わったら後日にブツ潰す。

わずか数秒で前言を撤回しアホの子の汚名を挽回したルーレットには恐れ入るが、こればかりはサアヤに非はない。誰もがそう思うだろう。

会話をすれば喧嘩になりそうなので、それ以降はルーレットに話しかけることはせずに、オバさん呼ばわりの仕返しは1度だけジャンプした瞬間の足を掴んで止めて先行することで晴らし、階層のチェックも怠ることなく30階を越えて少し。

おそらく35、6階のところの穴から下を覗く人影が見えて一瞬だけ身構えたが、先に来たはずのサアヤがいつの間にか追い抜かれてしまったようだ。

「よつと。レイカーが3人を運んだわけね」

「そうなんだけど、ちよつと重量オーバーだったから、ロータスには走ってもらってるわ」

その人物達のいる階層に辿り着いてから、短い挨拶とマリア、フー

コ、あきら、謡の4人がいることを確認。

フーコの《ゲイルスラスト》で一気に飛んできたのだろうが、さすがに謡とマリアではぼ重量ギリギリで、体を崩してくつつけるあきはなんとかなったものの、黒雪姫はどうにもならなかったから、現在進行形で登ってきてるところらしい。

と、そんな確認をしていたら下からすぐにルーレットが飛び出してきた、フーコ達の存在に一瞬だけ警戒しつつも敵意がないとわかるとまた上に行こうとしたので、さすがにそれは肩を掴んで止めておく。「はいはい、ここから上はみんなで行くわよ。どうせアンタのホーライじゃこのタワーにこれと同じ穴を開けまくることになるでしょ」

「ホントにうるさいなあオバさ……ンン!？」

「ああ、さっきの落雷とこの穴はこの子が……」

「アンの言ってたことは正しかったの」

「あんな派手な攻撃はルーレットさんしかないもん」

「胸を張るところを間違ってるのです……」

邪魔されるのが心底嫌いなルーレットは暴れてまた暴言が飛び出す、今度は言い切る前にチョークスリーパーで首を絞めてキャンセルし、必殺技を使って引っ込めるにしてもあのバカ威力を1度は放たないとならないし、次に出てくる強化外装がタワーでもっと使えない感じが出てくる可能性もある。

それがわかってるからルーレットも溜まってるはずの必殺技ゲージを使わず、まだ使ってるホーライを引っ込めていないのだろう。

こんなところで大砲の《アレース》や電磁投射砲の《エリーニユス》。弩弓の《アポロン》など出ても重量とかで床が抜けかねない。

「まあこの子のおかげでロータスもここまでまっすぐに来られるでしょうから、とりあえずみんなで褒めておきましょう」

野生の猿みたいな気性の荒さは見えてわかるルーレットがサアヤを撃ちかねない雰囲気はあったものの、それをものともしないで空気を変えようとフーコが変な提案をして、いきなりルーレットの頭をなでなで。

完全に子供扱いされてわなわな震えてきたルーレットだったが、続

けてあきらかに「よしよしのな」と撫でられ、謡とマリアの明らかな年下組にも「偉いです」とされたとあつてはさすがに恥ずかしさが上回ったか、サアヤのチョークスリーパーを抜けてその場であぐらをかきそつぽを向いてしまふ。

「お前ら嫌いだ！ 調子が狂う！」

それを狙ったのかどうかはわからないものの、結果としてそれでルーレットは沈黙し上に行こうとしなくなったので、下からどんどん登ってくるのが見えた黒雪姫を待つことが出来た。

2分程度で合流してきた黒雪姫も、この穴がルーレットの開けたものと聞いて、下の階層のクリアリングも完了した報告を手早く行う。「数えてきた限りでここが36階だ。屋上からはボンバーが行っているはずだが、残りは18階層。ポータルがあるのは45階。そこに到達した時は、ポータルを潜っているはずのボンバーが何か情報を残してくれている可能性もあるので……」

ユリの飛んでいった先がタワーの屋上だったのはサアヤも確認していたので、そこから下の階を目指したユリが途中でISSキットの本体を見つけていたとしても、目的はポータルだからスルーしている。

そうだとしても必ず追いかけてくるサアヤ達に何らかのメッセージは残してくれていると断言した黒雪姫に疑問を持つ者はいなく、そのメッセージを見逃さないようにしようと言おうとしたところで、不意に上の階から爆発音がして会話が中断される。

「今のは……」

「ボンバーの《リトル・ボム》よ。コンビだった私が聞き間違えるわけではないもの」

その爆発音は散々聞いてきたユリのリトル・ボムによるものかわかったサアヤは、警戒する黒雪姫達に断言しつつも、まだポータルを潜ってなかったらしいユリに疑問が湧く。

すでにユニコが拉致されて10分以上は経ってしまっているの、その間にポータルを潜るなんて余程の事がない限りは簡単だ。

それが出来ていないということは……

サアヤの言葉のあとに全員がそうした悪い予感が頭をよぎったか、顔を合わせた一同はすぐ上に広がるルーレットが開けた穴を見上げる。

するとその穴に誰かが滑り込んで綺麗に降りてきて、下からは完全にスカートの中を覗く形になる長いアーマースカートを広げての光景は間違いなくユリのもの。

穴が広がるスカートとほぼ同じ大きさのため、ユリからは穴の下が見えない形になってしまっているので、サアヤがひと声かけてあげると、ユリも声に気づいてすぐ下の階で止まろうとしたのをキャンセルしてそのまま降下して、サアヤ達の階まで降りてきたところをサアヤが手を取って床に下ろす。

「何かあったわけね」

「すまん。ポータルまでは無事に辿り着けたのだがのう。そこで想定外なことが起きておった」

『想定外？』

メタトロン攻略戦の直後と傷の具合などは変わらないユリだが、今の爆発が戦闘によるものならと予測しつつ話を聞く。

それによるとポータルまでの階層には何もなく順調に下りられたようなのだが、そのポータルのある45階で問題が発生したようで、ユリが想定外と言うのだから待ち伏せといった類いではないのはわかる。

「うむ、説明しにくいのじゃが、わかったことが一つだけ。このポータルは主らの助けなしでは潜ることは不可能ということじゃ」

「それは敵がいるってこと？」

「敵、と言えばそうなのじゃが、ポータルがそれによって守られ……んー、取り込んで……の方がしつくりくるかのう……といった感じで、排除せねば潜れん」

歯切れが悪いユリの説明は本当に状況の説明に困っている証拠なのだが、ユリがそんな説明困難な状況というのがどんなものなのか。

イメージすら出来ない上の状況に困惑する一同に、ユリも混乱させてしまった責任はあったか、ここだけはハッキリさせておこうとある

ことだけは断言してくれる。

「――ISSキットの本体が、ポータルと重なって鎮座しておるの
じゃ」

「なっげえなおいー！」

いつの間にやら《東京ミッドタウン・タワー》付近から白金にある巨大なプレイヤーホームとなった学校内へと移動していたテルヨシは、そこで遭遇した《シーバ・カタストロフ》を振り切って現在、地上階を目指して階段を駆け上がっていた。

……のだが、踊り場で折り返して上ること、15回ほど。

高さ的にはすでに30m以上来ているし、途中に出られそうな扉などもなかった。

それくらい長いもんだから、それに嫌気がする前に別のことを考えることにして、すぐあとを追ってきているだろうカタフについて考える。

スピードタイプの青系のテルヨシと防御タイプの緑系のカタフでは速度にも差があるので、テルヨシが割とマジで移動する限りは追いつかれないだろうが、カタフが移動拡張の心意を使える場合はその限りではないからそれだけは警戒する。

そもそもテルヨシの前に立ちはだかつたのも、この上の階層で合流しただろう《ブラック・バイス》が真実をねじ曲げて敵対するようにしたからだ。

加速研究会がユニコを拉致した理由は判然としないが、カタフが漏らしたバイスの台詞に『作業』という単語があつたのは、とてつもなく嫌な予感がする。

そして推測にはなるが、バイス達はカタフに自分達がしていることをひた隠しにして都合よく使っている節があり、今回の作業とやらも周りから見れば「何してんだこの野郎」と言いたくなるものの可能性は高い。

だからカタフを侵入者の足止めと称して自分達からは遠ざけて、その間に作業とやらを終わらせるようにした。

悲しいことに《七王会議》では加速研究会のメンバーの名前についてはまだ告げていないため、カタフも友人とやらが加速研究会のメン

バーであることに気づけていない。

だからといってここでテルヨシがそれを指摘したところでせいぜい半信半疑。良くても後日の問い詰めをさせるくらい。それだって加速研究会に良いように言いくるめられる可能性の方が高い。

「研究会の会長とやらは、恐ろしいまでに悪魔的だねえ」

さらに考えられる可能性として最悪なことは、本人にバレるリスクも背負った上で、あの慎重派で表には出てこない加速研究会がカタフとの縁を切ろうとしていないこと。

そこに意味があるならば、必ず近い将来にカタフは何かの計画に利用されてしまう。いや、もうすでに利用されている可能性だってあるわけだ。

それを決定したであろう加速研究会の会長は、一体どんな人物なのか興味が湧くと同時に、人を人とも思わない冷酷な一面を持ち合わせる人間性に寒気がする。

それこそ今回、テルヨシ達が侵入してこなかったケースが加速研究会としては予定通りで、侵入者の足止めなど本来は役割としてないはずのカタフを事前に呼んでいた以上、何かしらに利用する算段があるとも考えられる。

カタフには偉そうに言ったものの、テルヨシにさえ今回の事の真実というものはほとんど見えてこないの、見極めるしかない。

加速研究会の企みを看破して、今度こそ阻止する。そして拉致されたユニコを取り戻す。

正直な話、今のテルヨシの消耗はカタフ1人さえも倒すことが出来ないかもしれないほど激しいものだが、ここまですべてまだ会えていないパド達。バイスがいたことからハルユキもいる可能性のあるここで先輩が弱音を吐くわけにはいかない。

——全てが終わったなら、サアヤの膝の上で寝よう。

そんなことを勝手に決めて自分を奮い立たせたテルヨシは、ようやく見えた階段の終わりを示すわずかな光に向けてその足を踏み出した。

飛び出した先は一本道で、少し先から右折のみのルートが存在する

ため、壁破壊などが出来ない都合で勢いそのままに道なりに走る。

右折してみればやはり、この建物が学校であることを証明するように、右側の壁には規則正しく教室の出入り口のような扉があり、反対には地上階ということで窓枠が設置されて《黄昏》ステージの夕陽が入り込んでいる。

窓の外の見える夕陽の位置から自分の走ってる方角がおおよそ南であることも確認しつつ、ひととき高い白亜の塔が見え、ここが白金であることから旧東京タワーであることもわかる。

しかしそれよりも大きな問題が前方に見えてしまい思わず立ち止まりそうになる。

かなり長い一本道の先に、3mはありそうな西洋騎士型のエネミーと思われる存在が見張りをするように前を歩いていて、テルヨシがそのいつの感知範囲に入った瞬間にぐりん、と後ろを振り返ってテルヨシを敵と認識して両手に装備された大剣と大盾を構えてくる。

プレイヤーホームにいるエネミーとなれば、それは意図的なものと見てほぼ間違いないし、頭の兜の部分にはメタトロンにもあつた銀色のリング状のタイム用アイテムらしきものも確認できた。

「今はお前の相手をしてる暇はない！」

加速研究会が用意した衛兵みたいなものとして、テルヨシ達のような不意の侵入者の排除が目的なら、最低でも《野獣級》はあると見ても、万全の黒雪姫でさえ倒すとなれば相当な時間を食ってしまうだろう。

それを今のテルヨシでは逆に倒されかねない事態なのはすぐに理解できたので、廊下の広さから考えてもエネミーの横を抜けることさえ難しいスペースのなさは泣きたくなくなる。

後ろからは角を曲がってきたカタフも追いかけてきているし、カタフは正規で呼ばれてここを通つて地下に來ていることから、エネミーにターゲットされることはないと思われる。

前方のエネミー。後方のカタフ。見事な挟撃に遭ってしまったが、カタフとの距離は幸いまだ少しあるので、試しに右の教室の扉の1つを走りながら開けられるかやってみたら、普通に開いてくれたのでこ

れを利用することを思い付く。

エネミーもテルヨシに向けて重厚な足音を響かせて近寄ろうとしていたので、そのエネミーが教室の前と後ろの扉のちょうど中間辺りに来たタイミングで、前の扉を開けて中に侵入。

如何なエネミーと言えどプレイヤーホームとなった校舎を破壊は出来ないのです、テルヨシをターゲットしてる以上は開けた扉から追いかけるしかなく、エネミーがその動きをしたと判断して今度は後ろの扉を中から開けて廊下へと戻り、教室に入ろうとしていたエネミーを見事にやり過ぎて突破。

ちよつとした回り道と経過を観察したことでカタフとの距離が縮まってしまったものの、教室に入るのをキャンセルしたエネミーとほぼ横並びの距離ならまだ何とかなる。

廊下も見える曲がり角まで半分の距離まで来たのでひとまずは危機を脱したが、自分を追ってくる敵が増えてしまったのはいただけない。

「ちよつと黙っててほしいっす」

そう思いながらどうしようかと後ろをチラツと見て走るテルヨシは、そこで驚愕の光景を目にした。

テルヨシだけを明確にターゲットイングしているはずのエネミーと並んだ瞬間、カタフはその身に灰色の過剰光を纏って、何か遠隔攻撃をしてくるかと思っただけでなく、すぐ横のエネミーの足元に急に黒い穴が出現。

その穴にエネミーの両足が突っ込まれて、音もなく穴に沈み込んで身動きが封じられたエネミーは、そこから抜けようと足掻くが、心意によって作られた深淵の穴はどんどんエネミーの足を呑み込んでいく。

そしてエネミーの両足が膝まで沈降したタイミングでカタフの過剰光が消え、同時に黒い穴も収縮して消えてしまうと、床よりも下に埋まった足がガギイイイン！

強大な力に抗うことも許さないというように呆気なく砕け散り、膝から下を喪失したエネミーは床に転がって動けなくなる。

「マジかよおいおい……」

あまりの光景に足を止めてしまったテルヨシだが、カタフもまた集中するためか足を止めていたので差が縮まるようなことはなかった。しかしだ。プレイヤーホームとなった校舎に干渉する心意技をあの速度での威力で扱ったカタフの錬度は達人の域。

あれが完全にエネミーを呑み込んでしまえば、ほぼ一方的に倒せるのは間違いないが、そうしなかったのはあの心意技も相当な消耗を強いられる可能性があるからか。

いや、そもそもとして何故、味方と言つてもいいエネミーをわざわざ自分で無力化してしまったのかの方が重要で、その真意についてを問うべきかと迷う。

だが依然としてテルヨシに対する敵意といったものをアイレンズに宿しているカタフが歩み寄るのではなく走り寄ってきたからには、追いつかれるのは得策じゃないと判断して再びのおいかげっこに。

「ん、玄関っぽいのと……こっちは」

とりあえずエネミーに追われる心配はなくなったのでそこだけは感謝しつつ全速で廊下を走り一本道の先を右折。

すると視界はすぐ左側にあつた規則的に並ぶ柵のようなオブジェクトを捉え、数も相当だが玄関の靴箱であるとわかる。

そうなると左へ行けば校舎の外に出られそうだが、その玄関の正面。テルヨシからすれば右側の壁の方に口を開ける道が存在し、ルートは全部で左右と前で3つある。

右は先が見えないし、正面ルートもあのエネミーが1体しかいない可能性の方が低いから、選択肢として外に行くのが得策と判断。

外は外でまた心配事もあるが敵の拠点の中にある不安よりはマシかと靴箱のエリアに踏み込み、同時に右のルートの先も少し確認しようとして外に出る前に正面まで移動してみる。

「……………行くしかないか」

その道の先はどうやら中抜きになった校舎の中庭に通じているらしく、廊下よりも圧倒的に明るかったおかげでかなり奥の方まで見える。

その中庭の中央辺りに、いた。自らの腕を消失させ、その腕のパーツで意識のないユニコを黒い十字架に磔にしているバイスの姿がそこにはあった。

そのバイスは東の方角に視線を固定しているので、南側のテルヨシにはまだ気づいていない様子。

それならば最大限の奇襲を以てユニコの奪還に動けると踏んで、玄関から中庭へのルートに変更し可能な限りで上下左右にブレずにバイスに接近を悟らせない走り方をする。

その際に目前までカタフが迫っていたが、今は無視してバイスとユニコから視線を外さず突き進む。

そこまで広くはない通路を抜けて中庭に出てしまうと、さすがのバイスも接近に気づきそうなので、その手前2mまで走り、そこから前へと《インパクト・ジャンプ》を使うことでバイスのすぐ近くに出現。

そこから迎撃に動かれるわずかな時間で心意も使ってユニコを拘束するバイスの十字架を破壊し奪取。

あとはインパクト・ジャンプで屋上にでも上がって、そこから校舎を脱出して最寄りのポータルへと全力疾走。

そこまでを頭に描いた上でいざ、中庭へと足を踏み入れる直前まで来たテルヨシが、さあ行くぞという絶妙のタイミング。

「――《ジ・エンド》」

張り上げたわけでもない、抑揚もない無感情な声だったが、テルヨシを絶望へと叩き落とす必殺技が確かに聞こえてきて、インパクト・ジャンプと発声し終えるより早く後ろから不気味な風が通り過ぎてきて、ジャンプと着地を跳ぶ前に考えていたテルヨシは跳んだ前提の前傾姿勢のまま不発に終わったインパクト・ジャンプの着地体勢で中庭に1歩踏み入れて頭から転倒。

すぐに受け身を取って立ち上がったものの、その時にはすでにバイスに感知されて視線は完全にテルヨシを射抜いていた。

「おやおや、これはまた珍客が来たものだね。ここに現れるまで気付かなかったのは危なかった」

「ちつくしょうが……ッ!?!」

距離にして約40mほどの間で話しかけてきたバイスだが、その視線はすぐにテルヨシから先に来ていただろう東側壁際にいたハルユキ、チュリ、タクムへも向けられる。

こうなったら数的有利を活かしての奪還といこうかとハルユキ達とタイミングを合わせようとしたが、後ろから「《エンド・ストップ》」のコマンドと共にカタフが強襲してテルヨシの後頭部を掴んで力技で地面へと押し潰し、うつ伏せのテルヨシに頭を押しさえたまま背中に乗っかってくる。

「カタフ……」

「大人しくしてるっす。ここまで逃げられたのは僕の失態っす、もう自由には……」

と、そこまではカタフが自分の役割を全うしようと思死だったことがよくわかる真面目ぶりだった。

だがテルヨシというブラインドを退けて、中庭へと入って目の前の光景を見たカタフは、そこで言葉を切ってテルヨシの頭を掴む力を少し緩める。

その反応は完全に予想外の人間が陥る注意力の欠如に当たるが、このあとのカタフの反応でテルヨシはどう動くべきかを判断しようと、今はあえて拘束から抜けようとしなない。

「……お前は『誰』っすか」

テルヨシを拘束したままに視線を前へと固定していたカタフは、ユニコを拘束するバイスを見ながら、テルヨシすらも予想外の反応をする。

てつきりバイスが正体を隠してカタフを良いように使っているのかと思っていたが、まさかバイスとは『初対面』であろうとは。

「……あれが加速研究会の副会長、ブラック・バイスだよ、カタフ。自称だからシステム的に正式な名前かは知らないがな」

「ブラック……バイス……」

ユニコを拘束するバイスという構図に驚いていたのかと思えばそうではなかったから、テルヨシも少し戸惑ったものの、動揺するカタフに今なら言葉は届くと信じて目の前の人物についてを教える。

そうするとカタフはまっすぐにバイスを見つめたまま沈黙してしまい、見られているバイスも少々予定外だったかどうしたものかと思いで思考しているように見えた。

「なあカタフ。オレ達は確かにこのプレイヤーホームの侵入者かもしれないが、ならあいつは……ブラック・バイスは侵入者じゃないのか？」

「……侵入者つすよ。あんな奴が僕の友人の家に入り込んでたなんて、怒りすら覚えるつす」

「侵入者とは心外だね、カタフ君」

その頭の整理がされてカタフを丸め込まれる可能性はなくてはないので、バイスに先手を打たれる前にカタフへと疑問を投げかけて、それには明確にバイスを敵と見なす言葉を返してくれた。

だがそれがいけなかったか、ある種の決断をしたように割り込んできたバイスは、あくまで冷静な口調で眼光鋭くしたカタフに否定を込めた言葉をかける。

そしてテルヨシは見逃さない。話をしながらもユニコを拘束してすでにない右腕はともかく、上手く見えないようにしていた左腕の板が中庭の地面に沈み込むのを。

「カタフ！ 避けるッ！」

その動作は非常に静かながら、狙いは明らかにカタフとわかったため、どう動くかと迷っていたカタフには叫び警告。

しかしバイスの技についてを知らないカタフはテルヨシの警告にどう避けるべきなのかわからずに逆に迷いを大きくしてしまった。

「スタティック・プレッシャー
《静 止 重 圧》」

そこに割り込んだバイスの技名の直後、カタフの左右の地面からバイスの左腕を構成する板が2枚、音もなく出現し間にいたカタフを力のごとく押し潰しにかかり、その力に抗うようにカタフも両腕を広げて《クリティカル・ガード》で応戦したものの、心意技であるそれには如何なアビリティも効力を持たずあつという間に身動きが取れないほどの力で挟まれてしまう。

そこからさらに板はその厚さを数cm程度から1mほどにまで増

して圧力を上げカタフの腕からスパークが迸る。

しかも発声すら妨害する心意技なのか、抗う声すらも出せずにいたカタフは、苦しそうにしながらも立ち上がって倒れるテルヨシから退き、目で脱出しろと訴えてくる。

おそらくそれが今のカタフに出来る最善の選択だったのだ。

その行為を無駄にしないためにもバイスの板の範囲から転がり出たテルヨシは、この攻撃を止めようとバイスに詰め寄りかけたが、直後にバイスの奥の校舎屋上から4つの紫色の光が煌めき、テルヨシの頭の上を通過。

ハツとして振り返ってみれば、バイスに拘束されていたカタフの眉間と心臓の辺りに2つずつの貫通した穴が開き、直後にバイスの板が無慈悲に閉じて死亡時のライトエフェクトが発生した。

「我々は君の『友人である会長殿』から正式に許可をもらってここにいるのだからね」

「何やのバーやん。カタフちゃんを攻撃するとか心が痛むんやけど」「仕方ないと思うがね。会長殿がもしこの場にいたならこうしてははずだよ」

そして地面へと沈み込んだ板が消えたあとにはカタフの死亡マークだけが残りに残り、そのカタフを撃ち抜いた《アルゴン・アレイ》は北の校舎の屋上で心にもない悪態をバイスについてから、すぐに屋上から中庭へと飛び降り、入れ替わるようにアルゴンのいた場所に現れたのは、傷を負いながらもここまで追ってきたパドだった。

パドも中庭の状況を把握するのに数秒を要したようだが、拘束されるユニコを見た瞬間に吠えて、しかし冷静さは保ったまま中庭へと飛び降りてハルユキ達と合流。

アルゴンも中央のバイスの元へと駆けて合流してしまうが、状況はわずかにこちらが有利か。

「……ふう。カタフを死亡させたのは、一時的にでもこっちに有益な情報を漏らさないための口封じか、バイス」

「説明の必要がなさそうで助かるね。彼とはこれまでとても良好な関係を築いていたのだが、まさかこんな些細なことでそれが崩れてしま

うとは、こちらとしても予想外だったよ」

あまりに無慈悲で冷酷な決断と行動に頭に血が上りかけていたテルヨシだったが、現れたパドとユニコを前にしても怒りに任せて飛び出そうとしないハルユキ達を前にして自分がそれをしてしまえば、連携不足によってバイス達に有利に働く可能性があった。

ただでさえこっちの消耗は激しいので、数的有利さえもわずかな均衡の崩れで覆されかねないのだから、事は冷静に運ばなければならず、そうした意味で自分を落ち着かせるようにバイスへと語りかけつつ、ハルユキ達と合流しながらストレージへと戻っていた《テイル・ウィップ》を後頭部に再接続。

「お前たちは、カタフさんすらも利用していたってことだろ」

「心外だねクロウ君。言っただろう、彼とは良好な関係を築いていたよ。それは本心だし、会長殿だってカタフ君には期待をしていたのだよ。テイル君。君が『面白い催し』をしてくれたおかげで、カタフ君も滞りなくポイントを稼げていたわけだからね」

「催し？ バトロワのことか」

「本来ならば、彼は『王達にさえ先んじてレベル9になれるほどの実力を持っていた』のだからね。彼なりの葛藤が邪魔をってしまった足踏みをしていたのだが、君が頭角を現した頃から活力が戻ってきて、先日には見事レベル8になってくれた」

「ちよつとバーやん、喋りすぎやて。カタフちゃん死んどるけど声は聞こえとんのやで。今ごろ本人、相当へこんどるやろし、その辺でやめときゃ」

隠す気もなくなつたか、ハルユキの核心に触れる言葉に対して坦々とした口調で珍しく饒舌に語るバイス。

その話には興味があったものの七王会議の時にテルヨシへの警戒をいち早くしたアルゴンがこれ以上の話は危険と判断したか、バイスの口を止めさせ、バイスも自分の語りすぎを自覚したか素直に口を閉じる。

「申し訳ない。これ以上の話は今後に差し障る可能性もあるので控えさせてもらうよ。あとは予定通りに事を進めたいのだが、やはり君た

ちがそうさせはしないのだろうね」

そしてこれ以上の会話は不要といった雰囲気になったバイスが戦闘もやむなしと暗に言ってみせると、テルヨシ達もあるかもしれない奇襲に備えて構える。

が、次に起こったのは、両陣営の間に突如として巻き起こった土煙による急襲。

轟音と衝撃波を伴って巻き起こった土煙だが、それが何か落ちてきたことによる余波であると理解したテルヨシ達は、その土煙が晴れるのを待つ。

そして土煙が晴れてその中から現れたのは、ここ最近にテルヨシを戦慄させ、その後も驚異の快進撃で名を馳せていた《ウルフラム・サーベラス》だった。

——《ISSキット》の本体がポータルを取り込んでる？

ひと足早く《東京ミッドタウン・タワー》にある離脱用ポータルまで辿り着いたユリが、そこを潜らずに下の階層にいたサアヤ達に合流してもたらした情報によれば、45階に存在したISSキットの本体がぼーたるを潜れないように鎮座しているとのこと。

実際に見てみないことにはどういう状況なのかさっぱりわからな
いし、黒雪姫やフーコもおそらく正確に表現している話でもイメージ
が出来ていない様子。

「うだうだ言ってるな！ 見りゃわかることだろうが！」

「百聞は一見にしかずじゃな。ここであれこれ話しておくよりも有意
義じゃろうて」

「ん、あまり突撃志向は好かんが、ここはルーレットの意見を採用しよ
う。異論はあるか？」

そもそもポータルを物理的に潜れなくするなど出来るのかと思う
のだが、ユリの話を聞いて黙ってしまった一同にイラついたルーレッ
トがもつともなことを言うものだから、ある種の踏ん切りがついた一
同は実際に確認することを決定。

目標が45階とわかってるので、そのすぐ下の階層まで一気に上
がって、そこで1度ユリから助言が入る。

「先ほどの爆発じゃが、あれの感知範囲がどのくらいかを確認するた
めにあえて近寄ってみたんじゃが、20mほどで迎撃に動いてしもう
ての。小型のキットを飛ばして寄生しようとしおったから、それらを
倒しつつ後退しておる」

「つまり今、上上がった瞬間に攻撃される可能性もあるということ
ね」

「では私が先制の一撃を射つのです」

「なら私が盾になってあげる」

「すまん。儂の《リトル・ボム》では下手に放ると爆発で床が抜けか
ねんでの。足場がないのは主らも大変じゃろうし」

そうしたやり取りからISSキットの本体が鎮座する位置をユリが教え、その方向に《フレイム・コーラー》を構えた謡を肩に担いだサアヤは、すでに展開剣になっている《ブレード・ファン》を謡の視界と射線以外の全てをカバーするよう前面に並べてジャンプ。

「《フレイム・ボルテクス》!!」

上の階に顔が出た瞬間に必殺技を放った謡の火矢は、猛烈な炎を発生させて螺旋を描きながらISSキットの本体があるだろう軌道を突き進み、その手前にカサカサと動くキットの端末の眼に虫のような足が生えた気色悪いものがあつたが、それら全てが謡の火矢によつて焼かれて、火矢も本体へと命中し火柱が上がった。

「クリアなのですー!」

「お見事」

それで差し迫る脅威は退けたと判断し謡が今のうちにと声を上げれば、黒雪姫達も素早く上へと上がってきて密集陣形を整え自分の目で45階の様子を観察する。

現実世界では超高級ホテルのロビーとなっている場所で、整然と並ぶ四角い柱がいくつもあり、四方の壁際は光源が乏しくよく見えないものの、謡の必殺技を受けたISSキットの本体が弱まってきているが、まだ炎に包まれていることから正面。方角として南側だけはハッキリと確認できた。

ISSキットの本体は巨大な球状のオブジェクトとして存在していて、表面全体に這い回るような細かい凹凸の網目模様が浮き出てそれが脈打つ様は、人間の脳を思わせるところがある。

色は艶消しの黒に染まり、中央には横一線の亀裂がある。

なんとも不気味な見た目だが、あの端末からすればこのくらい禍々しい方がかえって自然に思えてくる不思議な感覚になりながらも、謡の炎が収まって再び闇へと消えてしまう。

「メイデン、奇襲されないようにキット本体近くに光源を頼む」

「了解なのです」

「ふんっ。《エウノミア》」

その暗闇に乗じて奇襲されては面倒なので黒雪姫が今度は光源の

確保のために謡に火矢を射ってもらい、南側の壁と天井の境目辺りに突き刺さった火矢が再びキット本体周辺を照らす。

それを見てから何故かルーレットが《ホーライ》の弾丸をエウノミアーへと替えて、その弾丸をキット本体の近くにこちらとの境界を作るように列配置する。

「あら、気が利くわねルー子」

「アタシはアタシの目的があるんだ。それよりここにはあれ以外に誰かいないのか」

「うむ、儂はここに3分ほど居座ったが、あれ以外には人の気配はせんかったぞ」

「ルーレット。その言い回しは少し気になる。あなたはもしかしてここに誰かいることを見越して来たの？」

「……………」

警戒は緩めないままに気が利くルーレットの行動を素直に褒めたら、茶化すなどばかりに強引に黙らせてから、ユリに確認の質問をして周囲に目を凝らす。

そしてそのルーレットの言い回しに引つ掛かりを感じたあきらが、核心に迫るようなことをズバツと言いつつ、途端に沈黙したルーレットは話すべきかどうかを迷いながらも、ここまで来たのがサアヤ達の協力あつてのことと思つてか話す気にはなつたようだ。

そこで突然ストレージを操作して、強化外装の任意での入れ替えは《レイズ》による強化をリセットしてしまうのにどうして。

と思つたらホーライはそのままに《インクリース》の影響を受けずに取り出されたのは、アイテムカードだった。

これは例外なんだなと発見がありつつ、無言で黒雪姫へと渡してきたものは、天井の穴から注がれる光によって照らされてわかったが、なんとISSキットそのもの。

「これをどこで手に入れたのだ？」

「二昨日の放課後にバトロワで襲ってきたバカが、他の奴らに渡そうとしてたところをぶっ殺して落ちてたのを拾った」

「それはわかるけど、それでどうしてここに来ようなんて決断に至る

のかしら？」

「それ、《レツド・ライダー》が創ったんだろ。《交差する拳銃》の話は聞いたことがあった。だから《親》代わりの人にその本体がある場所を聞いて来た」

「ルーレットさんに親代わりの人がいたんですね」

「アンは注目するところがちよつと違うのです」

こんなに落ち着いて話をするルーレットを見るのが初めてなので、普段のそれを知ってるサアヤやマリアは割と衝撃を受けながら、してくれている話に耳を傾けるが、本題はここに来た理由なのにルーレットにリアルでコンタクトを取れる人物がいたことに驚くマリアに謡がやんわりとツツコミを入れてしまった。

しかしそれもなんだか重要な話のような気がしつつ、今はそこではないと口から出かけたものを引つ込めて考察に優れたあきらが慎重に言葉を引き出す。

「それじゃあ、あなたはここにいないかもしれないライダーに会えるかもしれないからここに来た、ということ？」

「可能性があるなら来るさ！ 何故なら——」

あきらの見解はサアヤも同じだったので言うこともなく、どうして接点もなさそうなルーレットがこんな危険を冒してまでライダーに会おうとするのか。

その辺もハッキリするかなとルーレットの話を黙って聞いていたのだが、それよりも前にフーゴが「みんなー」と声を上げて一斉にキツト本体に目を向ける。

そこでは本体がその正面にあった亀裂が上下に開いて、中にある大きな眼を見せて、そこから音もなく分離して独立し自走するさっきの端末が床を走って襲撃しようとしていた。

その数は見えた範囲で約30体はいたものの、事前に張っていたルーレットのエウノミアーが振動を感知して強烈な電撃を端末にお見舞い。

一気に半分近くも撃破してくれるが、まだ10体ちよつとが抜けてサアヤ達へと寄生しようと殺到。

「奴らに触れられるな！ 寄生される可能性がある！」

速度はさほどではないが小さいので、確実に狙うならギリギリでの近接は仕方ないかと、黒雪姫の注意は頭に入れつつ、火力が高く調整ができないユリとルーレット以外の5人が迎撃に動く。

黒雪姫は必殺技《デス・バイ・ブラーディング》を使って寄ってきた端末を蹴りの弾幕で斬り裂き、フーコも黒雪姫が取りこぼした数匹をピンヒールのかかとで串刺しにして撃破。

謡とマリアは連射性に劣る部分を互いに補うように交互にスイツチして撃つことで隙なく撃破に成功し、あきらかもメタatron戦から体の水を消費して小さくなってしまっていたが、衰え知らずな水の攻撃で弾き飛ばして黒雪姫の蹴りに巻き込ませていた。

サアヤも飛びかかって空中にきた端末を展開剣でバツサリと斬り捨てる。

端末は単体では心意技を使えないのか、20体くらいが殺到したものの、サアヤ達がそこまで苦戦するほどでもなかった。

しかしキット本体が20m以上離れたサアヤ達を攻撃してきたからには、のんびり会話をしている暇はないのかもしれない。

今の攻撃で消耗したのかキット本体も新たな動きを見せないが、それを好機と見るか早計と見るか黒雪姫の判断を待つと、まだルーレットの話は全て聞いていないが、ユニコの件もあるので破壊できるならして早くポータルを潜ってしまおうと決断。

その判断に異論のなかった一同は一斉攻撃のタイミングを黒雪姫へと託して身構えてジリジリと近づく。

そしてこちらの交戦距離の20mを切ったところで黒雪姫が合図しようとした瞬間。

「相変わらず容赦ないな。あの頃と変わってないみたいで嬉しいぜ、まったく」

不意にしたそのM型であろうデュエルバターの声がフロアに響き動きを止めざるを得なくなる。

しかもその声はサアヤが昔、何度も……それこそ聞き飽きるほどに聞いてきた『あのバカ』の声にしか聞こえず、無意識に硬直してしま

う。

黒雪姫達は声の反響のせいで確信を得られていないかわかっていないのか、誰かと問う質問を飛ばしていたが、そんなサアヤに気づいたか、ユリもまたもしやといった雰囲気は確信へと変わったように見えた。

そして声の主と思われる存在はキット本体の陰から現れ、ロングブーツ型の装甲が見えた瞬間について黒雪姫達も絶句。

かかとはギザギザした拍車もあり、それがわずかに回る音を立て、その装甲は純粋な、赤。

そのアバターはキット本体の横にまで来ると、左肩を寄りかからせて、頭に乗せたテンガロンハットを思わせる装甲の鏢を右手で持ち上げて挨拶してくる。

「よお、久しぶりだな、ロータス。ガスト」

「……レッド・ライダー……」

少し緊張感の抜けるそんな挨拶にも強張った返しをしてしまったサアヤと黒雪姫は、目の前に現れたライダーが本物かどうかについてを考える。

シンプルに、そして常識的に考えれば、目の前のライダーは本物のはずがない。

そうでなければ約3年前に起きた事件を王達が事実として受け入れていない。

首をはねた張本人たる黒雪姫も、真正銘の本物であるなどと思っ
てはいないだろう。

しかし、サアヤの記憶が言うのだ。あれは本物だと。一緒に加速世界を生きてきたレッド・ライダーなのだと。

「お前は私が殺したはず、レッド・ライダー」

かつてはライダーの首をはねた場面を《イエロー・レディオ》にリプレイで見せられて零化現象ゼロフィアルを起こしたほどの黒雪姫は、心配して寄り添ったフーコ達の心の支えでなんとか衝撃から立ち直り、混乱しているだろうが核心に迫る問いを投げかける。

「ああ、その通りだな。あの時はなんつうか、天国から地獄って感じ

だったよな。お触り厳禁の《絶対切断》にいきなりハグされたと思ったら、コレだもんなあ」

真剣味が強い黒雪姫の問いにも、やはりサアヤの知るライダーらしく少年っぽさの残る軽さというかラフな感じを纏って、かつての《七王会議》で起きたことを自分の口から事細かに話し右手の指2本で鋏を作り閉じるジェスチャーまでしてみせる。

「じゃあアンタは何なの？ 本物なのに本物じゃないのが私にはなんとなくわかるけど、どういう状態なのよ。幽霊？」

「ははっ、良い勘してるなガスト。ざっくり言っちゃえば幽霊に近い状態だな」

「幽霊、か。ならば現実の説のように、加速世界に何かしらの恨みや未練といったものが残っているということかの。例えば、ここにおけるロータスへの恨みといった具合に」

「あー、違う違う。バーちゃんもロータスが言いにくいことをあえて言っただけやう優しいところは相変わらずだけど、今の俺はもう知ってるんだ。ロータスが不意打ちしてまで俺の首を落とした、本当の理由を」

サアヤとユリともあの頃と同じように普通に普通に話すライダーにはますます本物感が増すが、サアヤの幽霊発言を肯定するような今の自分の状態は自分でもどう説明したものかと悩んでる節がある。

ならば現実の幽霊のように未練などがあるのかと言えば、そこもなんだかそういうわけでもないという意味不明なライダーには全員が疑問符を頭に浮かべてしまった。

こういう理屈っぽいことを言わせても締まらないのがライダーなのだが、そのライダーが言う、かつての黒雪姫の行動の理由について理解し受け入れてる発言には衝撃を受ける。

黒雪姫がライダーの首を落とした理由。そんなものはレベル10になろうとする野望から来た行き過ぎた行動でしかないのではと、これまでのサアヤは思ってきたが、先の《災禍の鎧》の一件で黒雪姫がライダーの首を落としたことを後悔していたこともわかって、なんとなくそれから引つ掛かりは感じていた。

だがそれだけ。この話は終わったことだと蓋をして、以降は深く考えたこともなかった。

そんなライダーの言葉に疑念を持ってしまったサアヤが黒雪姫へと顔を向けると、視線に気づいた黒雪姫も顔を合わせてサアヤの内心を察知。

「……その件はお前が望むなら後日に話そう。だが今は」

「……そうね。今はこの不可思議な状況を整理しましょう」

モヤモヤは残るが、黒雪姫が話してくれるというならいくらでも聞くし、それに耳を塞ぐほど意地も張っていない。

だが今はそれを言及している状況ではないので2人共が納得した上で話を棚上げし、その様子にライダーもわずかに笑ったように思えた。

それじゃあ本題に戻ろう。そう思つて改めてライダーと向き直つたまでは良かったが、その時にライダーに変化が起き始めていて、真つ先に気づいたあきらがライダーの装甲色が変わっていつていることを指摘。

言われて観察してみると、確かに足先からライダーの体が純色の赤からどんどんと暗い色へと変わり、最後には艶のない黒色に。

「ちっ、もう来やがったか。あと3分はいけると思つたけどな……」

「——それはどういう意味だ！ お前は本当にライダーなのか!? 何を言うために、この場に現れたんだ……!?!」

黒色の侵食はどんどん進んで、あつという間に腰の辺りにまで及んでしまうと、時間がないのか黒雪姫の問いかけにもちゃんとした返しはしなかったライダーは、テンガロンハットの鍔を持ち上げて口早に要点を伝えてくる。

「悪いな、ロータス。話の続きは戦つてからだ。いいな、勝てよ。あん時以上に、容赦なく、コテンパンに勝て。こいつのエネルギーを使わせれば使わせるほど、俺が俺でいられる時間が長くなるからな」

「……勝てとは、いったい、誰にだ」

「そりゃあもちろん……俺に、さ」

言つてゐることはシンプルなのだが、それが意味するところはさつぱ

りすぎてサアヤ達は戸惑うが、俺に勝てと言ったライダーはそれを最後に頭の先まで黒一色に染まって、アイレンズにキットと同じ血のよな深紅の光が宿った瞬間。

45階のフロア全体に恐ろしいまでの殺気とプレツシャーが満ちて、腰回りにあるリング型のガンベルトの両側にマウントされていた2丁の拳銃に両手が霞むほどの速度で手をかけたライダーは、躊躇なくそれを引き抜きこちらへ向けて構え、そしてその拳銃に込められていた弾丸が火を噴いた。

「ボンバー達は私とロータスの後ろに！」
「くっ！」

しかし長い経験と過ごした時間が段違いのサアヤは、ライダーが動いた瞬間を頭が反射的に処理して叫び、咄嗟に自分と黒雪姫の後ろに回るよう指示。

そうしてマリアとユリとルーレットをサアヤが、フーコと謡とあきらを黒雪姫が庇う位置取りとなってライダーの2丁の回転式拳銃《ヘリオス&エーオース》の凶弾を弾くことに成功する。

恐ろしいのは総弾数6発ずつのヘリオスとエーオースの弾丸をわずか2秒ほどで撃ち尽くす連射力と、その内の2発がサアヤと黒雪姫のクリティカルポイントである心臓に正確に迫ったこと。

もちろんこれもライダーを近くで見えてきたサアヤと黒雪姫は防衛に成功していたが、自我を失っていないながらも戦闘力はあまり落ちていない気がする今のライダーが厄介そうなのは理解した。

「援護しますー！」

「待つてアン」

直前にコテンパンにしろと言われていたこともあって、ライダーのリロードのタイミングで猛然と斬りかかった黒雪姫を見て、後ろのマリアが《シャープネス》を構えた。

しかしサアヤはその射線に自分の展開剣を挟んで止め、自分も動くせいで動向を見守る。

よくよく見ればフーコ達《四元素》も黒雪姫に続くわけではなく、1人駆けた黒雪姫を歯を食いしばって見守るように身構えていた。

「これはね、アン。ロータスが乗り越えるべき過去なのよ。ロータスがそれを越えられたら、その時に私達も加勢する。だから信じなさい、ロータスを」

「過去………はい」

何を今さら黒雪姫がライダーの首を落としたことを後悔してるのかサアヤには予測しか出来ないが、バーストリンカーとして後悔してることがあるなら、その中にはきつと『真つ向勝負で勝ち取りたかった白星』があるのは間違いない。

それはもうどうしたって果たすことが出来ない願いだし、今の戦いで消化できるものではもつとない。

それでも黒雪姫が過去と向き合うために立ち向かうべき壁であることは理解していたサアヤ達は、黒雪姫がその壁を乗り越える瞬間を見逃さないように集中する。

ライダーのリロードはアビリティ《オートリロード》によって劇的に短縮されてしまったため、排莖とほぼ同時に前腕の装甲が開いて、そこから出てきた高速装填器スピードローダーがシンダーに新たな弾丸を叩き込み、シンダーがフレームに戻され、ローダーが装甲に収納されるまでに要した時間はわずか2秒。

幸い、交戦した距離が20mほどだったことで黒雪姫もその間にライダーに肉薄しその手の剣を首筋へと振りかぶっていた。

が、遠目に見てもその剣に普段の黒雪姫からすれば冴えがないのは比べるまでもなく、そのわずかな揺らぎがライダーの銃撃を許してしまふ。

至近距離から胸部装甲に連射を受けた黒雪姫は、ギリギリで左腕の剣でガードしようだったが、その威力でジリジリと後退させられてしまい、右手のヘリオスの弾丸が撃ち尽くされたところで黒雪姫の後退が止まる。

「約束を破るつもりなの、ロータス」

そんな黒雪姫の姿を見るに見かねて決して大きくはない声でささやいたサアヤの言葉は、しかし黒雪姫には確かに届いていた。

それは災禍の鎧の一件でした口だけでの約束。

——もう2度と無様な姿を晒さない。それが黒雪姫にできるライダーへの唯一の償いだ。

そう言つて了承したからこそ過去とのけじめをつけたサアヤを前にして黒雪姫がその約束を違えるなど、あつてはならない。

その時はサアヤが容赦なく首を落とすと決めていたが、今さらそんなことをさせるなど暗に言つたサアヤに対して振り返ることもなく気合いを込めた雄叫びをあげた黒雪姫は、左手のエーオースが火を噴く前に再び前へと踏み込む。

今度は絶対に怯まないと、決意の踏み込みを見せた黒雪姫は可能な限りの前傾姿勢でライダーへと肉薄しながらエーオースの弾丸を潜り抜け、リロードを終えたヘリオスが向けられるのを頭突きで打ち上げて防ぎつつ、その両手の剣を広げてライダーの胴へと抱きつく。

「《デス・バイ・エンブレッシング》!!」

そこから繰り出されたのは、かつてライダーの首を落とした黒雪姫のレベル8必殺技。

鍔のように両サイドから閉じられた剣の横一線によって、ライダーの胴体は綺麗に両断されて上半身が宙に舞う。

——やれるなら最初からやりなさいよ。

その瞬間が黒雪姫にとつての過去との決着と見たサアヤ達は、両断されながらもまだ攻撃しようとするライダーを視界に捉えながら、我慢した分を爆発させて殺到し、撃たれようとしていたヘリオスを謡の火矢が射抜いて弾き、リロードしていたエーオースをマリアの狙撃が弾き飛ばし、倒れる下半身をフーゴが掌打と蹴りで粉々に砕いて、あきらの水につぶてがライダーの上半身に次々と突き刺さる。

そしてあきららによってガード不可能になったライダーに展開剣を引き絞つたサアヤは、渾身の力でその頭へと突きを放ち、寸分の狂いもなく頭を貫かれたライダーに、技後の硬直から復帰した黒雪姫が伸身後方宙返りをしながらの蹴りによる縦一閃を叩き込み上半身を両断すると、アバターのそれとは違う黒い煙となって消滅してしまつた。

それらを経てライダーを知る全員が思ったことは、やはりライダー

であってライダーではない違和感があること。

武装や戦術はライダーそのものだが、実力や中身が本物に劣るものだったとわかり、謎は深まるばかりで、最後に黒雪姫が倒したのにサドンデスルールによる勝利数にも変化がなかったところぼす。

「ははは、そいつが増えたらえらいこったぜ。ここで俺の相手をしてるだけで、レベル10になれちまう」

その疑問に答えたのは、キット本体のうつすらと開いていた眼の部分からぬるつと出てきた赤い装甲色に戻ったライダー。

もう理解が追いつかない状況にキレそうになったサアヤが八つ当たり気味に攻撃しようとしてそれを全力でなだめようと両手を前にかざしたライダーのコメディイな雰囲気であれだった。

「レッド・ライダー!!」

が、その空気をぶち壊す叫びが後方からあり、なんだと振り向けば、今まで大人しすぎて腹での下したかと思っていたルーレットがまっすぐにライダーを見るが、当のライダーは初見のルーレットに首をかしげる。

そんなライダーに対して、今まで引くくらの交戦具合を見せてきたルーレットが、初めて年相応の女の子のような声でライダーへと話しかけた。

「……………会いたかったよ、『お兄』……………」

——ここで来るのか……。

ようやくユニコを拉致した《ブラック・バイス》を発見し、拘束されて意識のないユニコも手の届くところに来て、こつちに来ていた戦力であるハルユキ達とも合流できたテルヨシ。

だが加速研究会と知らずに接点を持っていた《シーバ・カタストロフ》が真実を知り味方になろうとしていたところで即死させられてしまい、有益な情報を得る前にバイスと《アルゴン・アレイ》と対峙することになってしまった。

さらに仕掛けようとしていた寸前でテルヨシ達とバイス達の中庭の中庭に空から《ウルフラム・サーベラス》が降って現れ、テルヨシ達と対峙してくる。

『そっち側』か、サーベラス」

「まさかクロウさんだけでなく、テイルさんまでいるとは思いませんでした」

「レベルは？」

「クロウさんと同じ、5にまで上げてきました」

——驚きは不思議となかった。

このタイミングで現れてバイス達に背を向けて立つサーベラスを敵対関係にあると見るのは簡単だったし、あのバトルセンスと快進撃を見れば《無制限中立フィールド》に来られるだけのレベルアップもできたと素直に思う。

「レベルも対等か。でも……それなら、レベル1のままポイントを稼ぎ続けるっていう君の《役目》はもう終わったんだろう？ 僕は君と、普通の対戦をしたい。何のしがらみもない、純粋な対戦を。だから……そこに立たないでくれ、サーベラス」

それほどのバーストリンカーがISSキットと時をほぼ同じくして登場したことも、頭の片隅で偶然ではないと思っていた。

それが現実になるとやるせないが、テルヨシよりも密な関係になっていたらしいハルユキが話しかけると、どこか悲しげな雰囲気纏っ

たサーベラスはその首を横へと振る。

「すみません……ここを動くことはできません。でも、クロウさんが木曜日のバトルロイヤルのあとに言ってくれたこと、嬉しかったですよ。リアルで、僕と会ってくれたことも」

「……過去形にする必要はないよ。これからも、何度だって会えるんだ……君がそう望みさえすれば」

「さつき、クロウさんが言ったとおり……僕に与えられた役目は、ほぼ完了しました。それはつまり、僕が存在を許される理由も失われたこととなります。今日を最後に、僕がこうやってクロウさん達と話すことは、もうないでしょう……」

「役目とか存在意義とか難しいこと言ってるのな。機械かお前は」

話を聞く限り、サーベラスは生まれた時から加速研究会に役割を与えられて、それを遂行するだけの道具だったことがわかり、あれほどのバトルセンスを使い捨ててみたいにする加速研究会に怒りが湧く。

だがそれよりもそれを受け入れて諦めてしまっているサーベラスに苛立ったテルヨシは、ハルユキが否定し叫ぼうとしたところに割り込んで静かな怒りをサーベラスへとぶつけ、それにビクリと反応したサーベラスはテルヨシを恐る恐る見てくる。

「つまりあれか、オレに挑戦してきた時のお前も、単に自分の役目を果たそうとしてだけの行動ってことだな。あの時お前が言った『戦ってみたかった』ってのも、自分の意思に含まれてなかったってことなんだな」

「それは……」

怒気に含まれたテルヨシの雰囲気には圧されたサーベラスが、何かしらの決意と共にここに来た心を揺さぶり本心を引き出しかける。

しかしそれを嘲笑うようにして割り込んできたのは、心というものに敏感なアルゴン。

「ダメやよテイルちゃん。君、初めて会った日からなんや危険や思たけど、どないすれば人の心が揺れ動くかようわかつとるなあ。メンタリストかいな？」

「そう言うアンタも飄々とした態度の中にどれだけの『残酷さ』を隠し

てるのか、興味があるね」

「怖いなあ。カタフちゃんを倒さんでここまで引つ張ってきたんも、カタフちゃんとウチらのいびつな関係を見抜いたからやろし、バーヤんももうちよい警戒せなあかんよ」

「ふむ、確かに私にも不備はあったがね。彼……クロウ君以外の彼らをここまで導いたのは君の方なのだから、私にだけ糾弾するのは筋違いというものだよ」

「そこを突かれると痛いわあ。やけどこない苦労したんやから、1個くらいこつちの目標も達成せなな」

「それは私も同感だよ」

……上手いなこいつら。

サーベラスとの会話に割り込んだ上でテルヨシを話に巻き込みつつ、好機と見て探りを入れたらぬるつと話が逸らされてしまった。

さらに話の主導権を握ろうと好き勝手に会話をするバイスとアルゴンが先制してきそうな雰囲気を目力だけでさせるかと睨みを効かせつつ、こつちも分担を決める。

「サーベラスはクロウ。お前に任せていいか？」

「……………はい。彼は、僕が相手をします」

「K。私はアルゴンを仕留める。テイル達は……」

「バイスをやる。倒すとなると難しいかもだが、何かをさせたりはしない。パイルはオレがぶつかってる隙を突いて、ベルは回復のタイミングを見極めて」

「レインの拘束のために右腕は使えないと思いますしね」

「任せて先輩、パイル。思いつきりブツ飛ばしてきて！」

言葉の中に気になるワードを混ぜてテルヨシの意識を分散しようとしていたアルゴンだが、ここまでの会話やらですでにアルゴンの性格を分析し、真実と嘘を混ぜて真意を隠すタイプと断定。

なのでバイスと会話を始めた段階ですでにアルゴンからは何も引き出せないと諦めていたので、カタフから聞いた『作業』という目的だけの阻止に集中し相手となるバイスに意識させるように両足に青い過剰光を纏わせ、パドも両前足に赤い過剰光を纏ってアルゴンへと

視線をぶつける。

それに当然ながら気づいたバイスとアルゴンも、意味のない会話をやめていつ仕掛けられても反応できるように静かな闘気を身に纏った。

「閃光の幻影」

レイヤード・アーマー
「複層装甲」

先陣を切ったのはテルヨシ。

おそらくはハルユキ達が消えたと錯覚するほどの初速から鋭く2度、方向転換してバイスの背後へと回り込み蹴りを叩き込むが、バイスも振り返ることなく左腕の板を崩して2枚の板を割り込ませて防御。

そこでハルユキも左へと動き、パドも右へと動いてサーベラスとアルゴンを引き受け、タクムも右腕の杭打ち機から《蒼刃剣》シアン・ブレイドを抜き放って正面からバイスへと斬りかかる。

それを予測していたか、左腕の板の残りを防御に使ってタクムの斬撃も防御してしまうバイスだが、これで両腕が塞がっている状態に等しい。

やはり心意においてはバイスの方が上手。

そんなことはわかってたにしても、2人がかりで左腕を封じることしかできないのは何か悔しさはある。

だからといってテルヨシにも考えがないわけではない。

そうしてせめぎ合いをすればバイスにも消耗を強いられるし、反撃の手さえ出させなければハルユキとパドのどちらかが勝利した時にユニコの救出の手が増えるのだ。

それにはハルユキにもパドにも敗北は許されないし、テルヨシとタクムの精神力が尽きてバイスに余裕を与えてもダメなギリギリの攻防が必至だが、囚われのユニコを前にして膝をつけるわけもなく力ならいくらでも湧いてくる。

「うおおおおお!!」

「せあああああ!!」

長期戦覚悟とはいえ倒せるなら倒したいので、バイスの心意防御の

板へと連続で蹴りつけ、斬りつけとするテルヨシとタクムに対して、2人共を視界に捉えるように半身の状態になったバイスは、防御に集中するためその場から動けないようだったものの、焦りや疲れといった感情を全く見せることなく平然としてみせる。

「いやはや、ここまで心意を半年も満たない内に身に付けるとは恐れ入るよ」

「まるでオレ達の心意習得の時期を知ってるみたいな物言いだな、バイス！」

「憶測ではあるのだがね。パイル君はかつてのテイカー君との戦いと会話で察しているが、ティル君は……その時にはすでに習得していたようだけど、2月にあつた出来事の時にはまだだつた気がするのだよ」

「……ッ!!」

そんな余裕から話しかけてきたバイスは一見するとテルヨシとタクムを称賛しているようだが、言い方に引つ掛かりを感じたテルヨシがそこを言及してくることでわかつてたか、用意されていたような言葉で意識を削ぎにくる。

2月の出来事といえれば記憶に新しくも苦い記憶。《災禍の鎧》によつて友人《チェリー・ルーク》が加速世界から消えてしまった事件があつた月。

あの時のテルヨシは完全に怒りに身を任せて暴走気味の負の心意を噴出させてしまい、寸でのところで黒雪姫とサアヤとユリに助けられた。

その事を知っている風なバイスの言い方にわずかに心が乱れたテルヨシの心意が弱まったところを、反対側のタクムが一層の気合いで圧を上げてバイスに斬りかかりカバーしてくれ、その隙に弱まった過剰光を再燃させて攻撃を続行。

「なるほどな。あれもお前達が根本的なところで関わってたつてことか」

「察しの良い君ならもうわかっているはずだよ。我々は求める結果がある程度で予測し、そうなるかもしれない『タネ』を蒔く。蒔いてか

らは極力だが手を加えず、芽が出て育つまでは摘んだりはしない」

「要は芽が出るのも育つのも自分達のせいじゃなくて育てたやつが悪いって理屈だろ。反吐が出るね」

「現実でもそういうことはままあるものさ。ひと昔前なら、ペットショップで買ったペットを育てられなくなつたからと勝手に自然に放つて、野生化させ繁殖してしまつて在来種を脅かすなんてこと、ペットショップの側からすれば望んでいない結果だよ」

「お前らは望んでないとかそういうことじゃないだろ」

「そこは否定しないよ」

加速研究会が加速世界の裏で暗躍し始めた時期については、ハルユキ達から聞いた災禍の鎧の誕生秘話が今の最古となり、ブレイン・バーストのかなり初期から存在する組織なのは間違いない。

そんなやつらが蒔いたタネなるものが、これまでいったいくつあつてどれだけが芽を出し摘まれてしまったのかなど想像もつかない。

ただひとつ、わかつてることがあるとするなら、加速研究会は加速世界に存在するバーストリンカーを実験の道具くらいの感覚でしか見ていないということ。

表面的には加速世界に混乱や悪意を撒き散らしていても、本当は加速世界のために何かしているという可能性だつてもちろんあるが、それを成すために許される範疇の行為を過ぎてしまつてることを容認するわけにはいかない。

そうやって思考しながらもバイスの状態を冷静に見極めていたテルヨシは、今の段階で2人がかりでも押し切れないことはわかつたが、バイスもまた余力があるわけではないと感覚的にわかる。

ユニコもここまで長い時間が経つても目を覚まさないのなら、バイスの拘束に意識の覚醒を阻害する効力があると考えられ、それも並行しながら防御までするのは如何なハイランカーでも簡単ではないはず。

——なら勝負は1度きりだ。

攻撃の手は緩めずにチャンスだけをうかがうテルヨシが狙うのは、

バイスの防御を上回る攻撃、ではなく、すぐ横で磔にされているユニコ。

おそらく拘束する十字架を破壊すればユニコは意識を取り戻し戦線に復帰できるはずで、ついでにバイスの右腕を破壊するのは単純に戦闘力の低下に繋がる一石二鳥というやつだ。

その狙いに気づかれぬようにするのは至難の技なのだが、限界までイマジネーションを研ぎ澄ますことで対応する前に叩き込む。

今のテルヨシの心意は移動能力拡張のみの心意のため、過剰光は青色を保てるのだが、ここに攻撃威力拡張の心意を複合させると、残念ながらその過剰光はどす黒く変色してしまう。

「一つ聞いておくと、バイス」

「私に答えられる範囲なら、答えてあげなくもないよ」

「お前は《オリジネーター》か？」

「……………それはいま聞くことだったのかな？」

「いや別に」

その変化に気づかせないために突拍子もない質問をしてバイスをほんの少しでも困惑させられたらと口を開けば、本当に戸惑う様子が伝わってきてビックリしたものの、チャンスはチャンスなのでそこで心意を切り替えて素早いスライド移動から渾身の右回し蹴りを十字架の裏側から叩き込んだ。

「君は本当に強かだね」

が、その渾身の回し蹴りに対して完璧に反応していたバイスは、左腕の板の全てをテルヨシの攻撃の防御へと回して受け切り、前が開いたタクムが踏み込んで斬りかかったのを右足の板を崩して防御に回し寸でのところで防いでもしよう。

——くっそおお！ 嵌められた！

最初からバイスはこう来ることを予測して余力がないように見せかけていただけだったのだ。

バイスの作戦に嵌まってしまったショックもあるが、元々ここに来るまでの消耗を回復させて放った一撃だったので、ここで複合心意を使うだけのイマジネーションを維持できずに、それでもなんとか青の

過剰光だけは収めることなくバイスへの圧力はかける。

「君のその黒い心意には、とてもシンプルな『憎悪』と、そして『諦め』が含まれているね」

「わかった風な口を利くな」

「いやいや、これでも君よりずっと心意というものを研究してきた経験からわかる考察を述べたままだよ。憎悪は心意の力を最も容易に引き出す、その力を否定しながら扱う君の心までさすがに読めはしないかな」

テルヨシの攻撃の圧力が下がって本当に余力ができたか、タクムの猛攻を悠々と防ぎながら疲労が見て取れてきたテルヨシに対して好奇心からかそんな分析をしてくるバイス。

その分析はちよつと引くくらいのを射ていて鳥肌が立ったが、そうやって精神力を削ろうといった魂胆もあるのだらうそれにギリギリで耐えてみせる。

「しかし君もだけど、クロウ君も目覚ましい成長をするものだよ。あのサーベラス君が倒されてしまうとはね」

そんな揺さぶりにも耐えたテルヨシを称賛するように、言葉による揺さぶりをやめたバイスは、ここでテルヨシから横で戦っていたハルユキとサーベラスへと視線を向けて、他人事のように言うので、テルヨシも一旦バイスから数歩だけ距離を取って牽制しつつハルユキの方を見る。

そこには体を大の字にして仰向けに倒れるサーベラスと、そんなサーベラスをそばで見下ろすハルユキの姿があり、決着はついたのか何やら話をしている様子。

「僕は、バーストリンカーでいる限り、彼ら……加速研究会には逆らえない。何故なら彼らは、僕が邪魔だと思った時には、ブレイン・バーストを取り上げることができるようから。でも……そんな僕でも、1つだけ、自分で決められることがあるんです。それは、加速世界からどういうふうに見えるか、です」

そこから漏れ聞こえたサーベラスの言葉に、バイスと、パドと対峙するアルゴンの2人が初めて焦りに似た空気を醸し出す。

どうやらサーベラスにはまだ他に役目があるらしく、ここで別の『何か』に変わるはずだったのだが、それが嫌だったサーベラスはここにハルユキがユニコを助けに来ると信じて、最初で最後の真剣勝負をしてから消えようと、残りのバーストポイントを10にできていた。

そんな今の自分の状態を話したサーベラスは、よろよろと立ち上がってハルユキに自分をどこかへ連れて行って全損させてほしいとお願する。

勝とうと負けようと、始めから全損するつもりでこの場に来たサーベラスの覚悟が並々ならないことは十分に理解できる。

何故ならサーベラスほどの誇り高いバーストリンカーが、自分のことよりも加速研究会の企みを潰し、未来を守るために消えようとしているのだから。

「ふ、ふふ、あははは……」

その覚悟にすぐに返事ができなかったハルユキに対して、自分達の命令以外のことをしようとするサーベラスを笑ったのは、パドと戦闘中のアルゴン。

「あはは、こら参った。まさかそこまでするなんてなあ、やるやないのイーちゃん。嬉しいで、育ての親としてはな。ほんま、大きゆうなつたなあ。加速研^{ウチ}からイーちゃんみたいな立派なBBプレイヤー、もといバーストリンカーが出るやなんて、こういうのをえーと、青は藍色より青いとかゆうんやよねえ。ってそんな当たり前やがな、ナイトー君が聞いたら怒るで、あはは。まあ、でも、イーちゃんが親離れすんのはまだちーつと……1000年くらい早いかなあ」

サーベラスとアルゴンの間にはパドが立ち塞がって不意打ちのレーザーは撃てない状況。

それなのにアルゴンにも、目の前のバイスにもまだ何か余裕のような雰囲気醸し出していて、とりあえずでもサーベラスをハルユキが飛んで運んで逃げることもでき、そうなれば作業とやらにも支障が出るのではないか。

そう思っていたのだが、やはり加速研究会。事前の対応策を何重に

も用意していたようだった。

「イーちゃん、ごめんなあ。どうやら《零化》せえへんかったら自分のまんまでいられるみたいに思ってるみたいやけど……会長はんの《反魂》は、そんな生やさしい技やないねん。ほんま、どないな悪魔と契約したらあんな……」

「アレイ」

まだサーベラスについての謎が解けていなく、度々出てくる自分が消えるだのに理解が及ばないが、そのリセットのような処理をさせたらユニコまで危険なことはなんとなくわかった。

そしてここで初めてバイスがベラベラ喋るアルゴンに怒りに似た感情を込めて注意し、それには肩をすくめたアルゴンも言葉を切る。「ま、そういうわけやから、堪忍やでイーちゃん。向こうに戻ったら、こっちの学食でゴハン奢ったるから、氣イ悪くせんとな」

「……何を言われても、僕はこれ以上命令に従うつもりはありません。あなたたちは間違ってる。こんなこと……しちやいけないだ」

そしてアルゴンの最終通告のような言葉にも強い意思で拒絶を示したサーベラスは、その手をハルユキへと伸ばして連れていってくれと懇願。

ハルユキとしてはユニコの救出が今の最優先事項だが、サーベラスのやろうとしていることが結果としてユニコを救うことになると話で理解してテルヨシとアイコンタクト。

こっちは任せると目で訴えてやればハルユキもサーベラスの手を取って背中を翼を広げる。

「ひとまず君の言うとおりにする。でも、全損なんかさせない。きつと何か方法があるはずだ。レインも、君も、両方を救う方法が」

「あるわけないやん」

それがハルユキの答えであり決意だったのだが、そんな言葉すら幻とでも言うような冷たく残酷な言葉で割り込んできたアルゴンは、さっきまでの陽気さを完全に消失させる。

「誰かを助ける方法なんて、この世界にはいつこもないんや。だってこの世界には最初から、救済は用意されてへんのやから。あるんは憎

しみ、争い、裏切り、欺瞞ぎまん、蹂躪じゆうりん、慟哭どうこく、絶望、エトセトラ、エトセトラや。今、坊やたちに教えたるわ。加速世界の残酷さつちゆうもんをな……出番やで、ミーちゃん。——サーベラス・ナンバー・スリー、アクティベート」

まるでこの世界に恨みでもあるような怨念に近い感情をぶちまけるアルゴンは、ここで何かのコマンドを口にする。

それがサーベラスに対しての何かに作用するコマンドなのはすぐに理解できたが、ただの音声で他人をどうこうできるはずもないと、そう思ったのだが、そのコマンドのあとにサーベラスが突如として苦しみ出してしまう。

見ればサーベラスの顔の牙を思わせるバイザーが上下に閉じようとしていて、それがサーベラスの意思によるものではないようにサーベラス自身が左手で食い止める様が見て取れる。

しかしその抵抗も虚しく、すぐにバイザーは強力な力によって完全に閉じてしまい、サーベラスが沈黙。

次いで変化が起こったのは顔の装甲と限りなく似た造形の両肩のアーマーの内の右肩の牙がギチギチと音を立てて開き、その中から暗い紫色の光が浮かび上がってくる。

そして直後にサーベラスの手には紫色の鉤爪状の心意のオーラが武器となつてハルユキに襲いかかり、寸でのところで後退し直撃は避けたハルユキだが、明らかに雰囲気からして変わったサーベラスにテルヨシも驚愕。

さらにそのサーベラスからは、かつて聞いたことがある、人を嘲笑うことに愉悦を覚えている人間の神経を逆撫でするような小さな笑い声がかすかに聞こえてくる。

本能が察した。こいつをオレは知っている。

それを証明するように、笑い声を収めたサーベラスからは、さつきとは全く違う人間の声が発せられる。

「……ようやく、会えましたね。お久しぶりです、有田先輩」

「……お兄ちゃん……だと……?」

《加速研究会》に捕らわれたユニコを救うため、一刻も早く離脱用のポータルを潜らないといけない場面だったが、最も近い《東京ミッドタウン・タワー》のポータルは《ISSキット》の本体が取り込んでしまっていて潜れず、さらにはそれが生み出したのか《レッド・ライダー》までもが現れて状況は混乱。

それを整理すべくライダーの言う通りに1度コテンパンにやつつけてみれば、また平然と姿を現したライダーがゆっくり話せる雰囲気になったところ。

今度は《ボツシユ・ルーレット》がずっと言いあぐねていた事をぶちまけて余計に混乱を招いていた。

「お兄って、ライダー?」

「いやいやいや! 俺は見ず知らずの女の子にお兄ちゃんなんて呼ばせる趣味はねえよ! 大体その子とは初対面……」

それには黒雪姫も驚きを隠せず声を漏らし、そういう趣味があったのかとジト目になったサアヤがライダーの反応をうかがうと、完全なる否定から入ってルーレットとも初対面だと話す。

しかしじっと見てくるルーレットを見て何か思い当たる節があったのか、断言するよりも前に言葉を切って記憶を辿るように顎に指を添える。

「……もしかしてお前……しず……つと、あー、現実の俺の妹?」

「そうだよ! 無責任なバカ《親》に放置された、哀れな《子》だよ!」
そこからもしかしてとルーレットに尋ねたこともまた度肝を抜かれる事実だが、それを肯定したルーレットは途端に怒りを露にして《ホーライ》の銃口をライダーへと向ける。

撃ったとしても弾丸は《エウノミア》なので即時効果はないが、一応は話をちゃんとすべきと咄嗟に判断してその射線に割り込んだサアヤは、山盛りの疑問にさらに上積みされた疑問を解決すべく、どういふ事情があるのか2人の話を聞こうとする。

「いや、そのな、えっと、ルーレットってのか？ お前が怒るのも無理はないんだが、俺だつて好きで放任したわけじゃなくてだな……」

「だったら何で『大事な会議の日』にアタシにインストールしたんだ！ そんなことをしなきゃアタシだってこんな……」

たったそれだけの話でも見えてきた事情があり、ルーレットが口にした大事な会議という部分では無意識にだろうが黒雪姫がピクリと反応してルーレットを見てしまう。

どうやらライダーのリアルの妹らしいルーレットは3年前の《七王会議》の当日にライダーからコピーインストールされて、その日に全損しブレイン・バーストの記憶をなくしたライダーから何の説明もなしに加速世界へと誘われて今日に至ったのだとわかる。

よくよく見ればルーレットの頭のテンガロンハットを思わせる装甲も、多彩な強化外装群——名前がギリシア神話の神の固有名なのだ——もライダーと似通った部分が見られる。

これは実の兄妹だから心の傷が似てしまったことが要因と思われるが、まさかライダーの子などと夢にも思うはずがない。

ライダーはおそらく1度きりになってしまったコピーインストール権を大事に取っておいたのだろうが、それを会議の日に使っていたとは。

「会議のことを知つてても今もバーストリンカーでいられてるってことは、お前はソーンから聞いたんだな。今の親代わりもあいつか？」

「そうだ！ バカなお兄のせいでお姉がいつぱい悲しい思いをしたのに、それでも残されたアタシに色々教えてくれたんだぞ！ それなのにリアルのお兄は……」

「……それは本当に悪いと思う」

「ルーレット。そうライダーを責めてやるな。真に責められるべきはライダーではなく、その原因を作った私にあるのだからな」

それならばルーレットの親が影も形もないのに納得がいくし、今日この場所へとやって来られたのも紫の王《パープル・ソーン》から話を聞いたからと理解が及ぶ。

ライダーと恋仲……今もそうかはわからないが……いや、ルーレッ

トの口ぶりからして今はもうそうではないのかもしれないが、ライダーなき加速世界でレクチャーすら受けずに放り出されたルーレットが生き残れる確率などゼロに等しい。

そのルーレットの最も近い存在がライダーに次いでゾーンであるのは必然であり、彼女の存在なしには今のルーレットが存在し得なかっただろうことも明白。

だからこそ加速世界で顔を合わせることもなくなくなったライダーを許せなかったルーレットは、今まで溜まりに溜まっていたものをライダーへとぶつけていた。

しかしそれを止めるように黒雪姫がライダーを庇う立場でルーレットを宥め、ライダーがそうなってしまった原因は自分で、責められるのも自分であると謝罪の雰囲気も出てくる。

「うるさい！ 黒の王は黙ってろ！ お姉も悪いのはお前だつて言つてたけど、そもそもお兄が不用意にバトロワで話なんてするからそんなことになったんだろ！ 万全を期せないバカは死んで当然だ！」

「ぐっ……返す言葉もねえ……」

しかしルーレットはそんな黒雪姫すら越えるバカはライダーだと断言し、謝罪する気満々だった黒雪姫も呆然。

捲し立てるようにライダーが糾弾され続けてついにはライダーも精神的ダメージで膝をついて四つん這いポーズで落ち込み始め、かつての自分の王が妹に言い返せないでいる情けない状況にため息が漏れる。

「はあ……それでルーレットはそういう愚痴をライダーに言いにかけて来たわけ？ 何か他に理由はなかった？」

「……………ない。現実のお兄に怒りをぶつけても意味がなかったから、吐き出す場所がなくてずつとモヤモヤしてた。だから今ので大分スッキリした。そしてアタシはお兄みたいなバカなことにならないように、お姉以外の人は信用せずに、近寄らせずにここまで来た。お前らお人好し集団は本当に例外だ」

「それでアンタ、アホなくらい好戦的だったのね」

「アホって言う方がアホなんだぞ！」

あまりに愚痴が飛び出てくるから助け船もして話を進めるために大人な対応をしたサアヤに対して、さつきまでの怒りを少し落ち着かせてこれ以上ライダーに言うことも特にないと返すルーレット。

さらにそうしたライダーの不意打ちを自分も受けなかったために今まで必要以上に人を遠ざけてソロプレイまがいのことをしていたことも吐露した。

それらのことを聞いて項垂れていたライダーも顔を上げて立ち上がり、まっすぐにルーレットを見て口を開く。

「ルーレット。本当にお前には悪いことをした。今の俺は現実で生きる俺とは違うがよ、お前を子にしようと考えて実行した記憶はこっちに確かにある。親としてお前にはBBをインストールしてやることしかできなかつたけど、ソーンのやつがちやんとお前を導いてくれた。そうじゃなきゃ今日のこの出会いもなかつたもんな」

「なに喜んでんだバカお兄。アタシは文句だけを言いに来た親不孝だぞ」

「それを言ったらお前に何も教えられなかった俺は子不孝？　ってやつだろ。そんな親不孝なんて子が今もバーストリンカーでいてくれる方がどうでもよくなるくらいに嬉しいもんさ。よく生き残ってくれたな。さすが俺の子だよ」

「あつ……くつ！　なに親ヅラしてんだバカお兄！　アタシの親はお姉だけだ！　良いとこだけ持っていこうとすんなバカ!!」

「……3年前のお前はもつと懐いてくれてたはずなのに、時の流れつてのは残酷だよなあ……」

なんだかんだで仲は良さそうな兄妹だなあ、と喧嘩みたいな会話を聞いていて思ったのはサアヤだけではなく、いつの間にか黒雪姫達も2人の会話を穏やかな気持ちで見守っている雰囲気が見て取れる。

ルーレットだって本当は加速世界で王にまでなっていた自分の親をこの目で見たいと思っていたに違いないし、ライダーの武勇伝をどこかしらで聞いて自慢に思うこともあったはずなのだ。

本当ならもつともつと話したいことがあったのかもしれないが、さつきのライダーの変化も気になるし、そろそろ本題に入らないとま

たライダーと戦うことになりかねないので、またライダーが落ち込んだタイミングでサアヤが前のめりになっていたルーレットを引つ込めて本題を切り出す。

「ルー子も落ち着いたところで本題よライダー。時間もないんだろ。し脱線はなしだからね」

「お、おう。相変わらず姉御肌なのな、お前」

そんなサアヤに昔から押しきられるところもあったライダーは、それに何度も助けられてきた過去を振り返りつつ和やかに振りかけていた空気に緊張感を持たせて本題に入る。

「まずはそうだな。俺はさつき表現されたように幽霊みたいなもんだが、自分の意思で化けて出てきたわけじゃない。ロータスに首を落とされて全損した俺を、あるバーストリンカーが『限定的に生き返らせたんだ。自分の目的を実現するためのパーツとして』な」

「い……生き返らせた……だと……？ 体力ゲージがゼロになって死んだのではなく……ポイント全損して、加速世界から消滅したバーストリンカーを、か……？」

そうやって口にしたライダーの話に、思わず黒雪姫が聞き返してしまったが、サアヤ達もまさかそんなことが可能なかと驚愕で言葉を失ってしまう。

「限定的に、つつたる？ 今の俺は、3年前にお前と戦って消えたレット・ライダーの《影》……有り体に言やあゾンビだ。現実世界の本物は、ルーレットが知ってるだろうが、加速世界の記憶を全部失ったまま、今頃は平和な学生生活を送っているんだろうさ。……問題のシーンの記憶がないから断言はできねえけど、おそらく誰かが必殺技、あるいは心意技で、俺の魂みてえなモンのコピーを作り出して、あいつに……後ろに転がってるでっけえ目玉に憑依させたんだ」

憶測も交えながらに今の自分の状態を説明するライダーは、嘘のようなそんな話にも真剣さだけを全面に押し出してみせ、それに謡とフーコが反応する。

「それが本当なら……生き返らせた、とは言えないのです。加速世界から去った者の魂を複製し、己の目的のために利用する……そんな力

は《蘇生術》ではなく《死靈術》ネクロマンシーと呼ぶべきなのです」

「ほんとうにそうね……でも、どうして？ その誰かは、なぜそんなことを……？」

「もちろん、レッド・ライダーの能力を利用するためだ。アビリティ《銃器創造》で、自分の望む強化外装を作らせるために、そいつはライダーのゾンビである俺を作り、依代であるあの目玉に寄生させたんだ」

「なるほどの。それがISSキットというわけじゃな。じゃからキットの端末にはお主の紋章が刻まれておったと」

「言つとくが、デザインもスペックも俺が決めたわけじゃねえぜ。そもそも、デカ目玉に呑み込まれてる時の俺は、なんつうかメインスイッチが切られてて、見たり聞いたり考えたりできねえんだ。こうして出てこられるのは、デカ目玉がエネルギーを大量に消費して、回復モードになつてる時だけだ。今がまさにそうなんだけどな」

話がとんでもなく非常識というかで理解するのだけで大変だが、その中でも見えてきたものはある。

今のライダーがこうして意思を持つて話せているのは、キット本体がサアヤ達を攻撃するために出してきた端末やライダーを撃破し、その回復にリソースを割いてライダーを拘束する力が弱まっているから。

だからコテンパンに倒せなどと指示していたことにも納得がいき、その回復が済むとまたライダーは攻撃的になつてしまうということ。

そう考えれば時間がないということにも理解が及び、出来る限りの情報を引き出したところだが、黒雪姫も何から聞き出せばいいか頭が整理できていないようで沈黙してしまふ。

その辺で回転の早いあきらがフォローするようにライダーへと核心に迫る質問をする。

「そもそも、あれは何なの」

言いながらにあきらの視線はライダーのすぐ後ろのキット本体に向けられて、質問が指すものを理解したライダーも推測からの答えを述べる。

「どうやらエネミーでも、強化外装でもねえ。あれはおそらくデュエルアバターだ」

「えっ、でもそれってメタトロンが確認された時にはもうここにあったんです、よね？」

その答えが今までで一番あり得ないと驚いた一同が本当に言葉を失った中、加速世界の事柄にみんなほど知識がなく驚き具合でわずかに小さかったマリアがふと湧いた疑問を口にする。

確かにあれがデュエルアバターだとしても、サアヤ達がメタトロンを確認したのは今から1週間以上も前の話。

いや、そもそもISSキットの存在を確認したのはそれよりも前の2週間前になるから、ことによってはその時からすでにここに鎮座していたことになるのではないか。

「良いところに気づいたな嬢ちゃん。えっと、ロータスのとこの新人か？　ここにいるなら新人ってほどじゃないのかもだが」

「彼女はテイル……《複合兵器》の子のそのまた子だ。まだレギオンには加入していない」

「へえ……どええ!!　モビールの子の子!!　マジで時間の流れって怖いよね……」

「は、はじめまして《ソレイユ・アンブッシュ》です。アンで構いません」

こんなタイピングでマリアの自己紹介が挟まれて話の腰が折られてしまったものの、ルーレットの件でも色々と話した影響か、そろそろヤバイと感じてるのか自分から話を戻しにいった。

「アンが言うように、こいつが出現してから、こつちじゃ少なくとも50年は経つちまってる。だからエネミーならタイムもされてねえのにああもじつとしてるわけがねえし、強化外装なら《変遷》の時に消滅してるはずだ。それにあの目玉には、確かに感情や意思みてえなものがある」

「だからデュエルアバターって推測になるわけね。納得しがたい事ではあるけど、筋を通すなら間違った考察じゃないか」

「でも50年だなんて……あまりに非常識な事態よ。それをさせてる

とすれば、加速研究会は非道なんてものでは済まないわ」

「人を人とも思わぬ悪魔といったところかの」

もはやキット本体の一部となっていているライダーの考察ならと納得するサアヤ達だが、それが事実としてもこんな拷問に等しい行いをさせている加速研究会は許しがたい。

そうした怒りを露にする一同を見ながらに、ようやくリーダーらしく頭を整理し決断を下した黒雪姫が、これからのことについてをライダーに話す。

「私は……我々は、あの巨大な目玉を完全に破壊しなくてはならん。デュエルアバターであろうと、なかろうと、そして……その結果、ここに存在するお前が消滅するのだとしても」

と、黒雪姫が当然のことを述べたのに対して、わずかに反応したのはライダーではなくルーレット。

具体的にはライダーをまた消滅させると聞いた瞬間に、ルーレットの肩がピクリと跳ねたのだが、それを見逃さなかったライダーは、それをわかった上で黒雪姫への返答をする。

「やめてくれ、なんて言うはずねえだろ。今の俺は、ぼんやりした意識の中で、ひたすら糞みてえな強化外装を作らされるだけのゾンビだ。俺はずーっと待ってたんだよ、終わらせてくれる奴をな。それが、ロータス、お前だったのは……」

話しながらルーレットの反応を観察していたライダーは、自分が消滅することを望んでいると伝える中でルーレットにかける言葉を考えているようだった。

「でもな、いざ戦うとなったら、アイツは強えぜ。どんな攻撃をしてくるかは俺にも解らねえが、とんでもなく強えのだけは間違いねえ。ただの置物だと思わねえで、最初っから全力で行けよ」

「……解った」

何の因果か影である自分を終わらせるのもまた黒雪姫であったことを皮肉に思ったか、皆まで言うことなく次には警告して容赦なくやれと言い切り、それに了承した黒雪姫。

これでもう言うことはないかと黒雪姫から視線を外したライダー

だったが、やはりあきららがそもそも疑問をライダーへと尋ね、キツト本体を破壊すれば端末も一緒に死ぬのかと。

それに対してのライダーの返答は残酷なもので、本体の破壊をしても端末との相互リンクが切れるだけで端末自体は死なないと言う。

それでは今回の作戦の目的であった日下部倫を救うということが不可能ということになるが、精神干渉が止まるということにはなるので分離の方法はまだあると希望も湧いてくる。

しかしそんな面倒は残さないと、浄化能力を持つ謡が張り切ったのを見て返したライダーは、そうならないように本体の破壊と一緒にアビリティに備わる《遠隔セーフティ》で端末も無力化してくれると言う。

その辺のタイミングは意識のあるなしでシビアになるとかでも、バーストリンカーとしてのプライドでどうにかしてやると静かに宣言したライダーは、これでいいかと問いに対しての答えを終了。

いよいよライダーの残された時間もないのか、ようやくルーレットと向き合つて親らしく子へと伝えるべきことを伝えようとする。

「ルーレット。せっかく会えたのにこんなすぐに別れることになって悪いな。だが俺はもう本来ならこの世界にいない存在だ。その俺がお前に残せるものなんてねえのかもしれないけど、お前は言ったな。俺のようになりたくないから人を信用しないんだって」

「……そうだ。それは今も変わらない」

「そりやお前をそんな風にしちまった俺の責任だが、人つてのは結局のところ1人じゃ限界がある。ソーンだけでお前を支えてやれない時がいつか必ず来るだろう。ソーンだけを支えに生きるのが辛いかなる時が必ず来るだろうよ。そうならないように、少なくともいいから、今よりも信頼できる人を増やしておけ。人が増えりやそれだけ裏切りとか企みとか、そういう面倒なもんも背負うことになるけどよ、その分、辛いことは分け合えるし、嬉しいことは共感して何倍にも膨らむ。目的もなくこの世界で1人強くなったところで、行き着く先は虚しいもんさ。だからもつと楽しめよ、この世界を。その楽しみをもつと大勢で分かち合え」

時間がないのにまあ長々と話すライダーの意外な子思いな部分を見つつ、その話を黙って聞いていたルーレットは、何を言うでもなく顔を伏せてしまう。

何かしら言ってくれてもと思うライダーではあったが、してしまつた罪の重さや埋められない溝を感じたかそれはそれでいいと視線をルーレットから外し、今度はかつての仲間だったサアヤとユリへと視線を向ける。

「ガスト、バーちゃん。凄い勝手なお願いで悪いんだが、ルーレットのこと、支えてやってくれとは言わないが、これから先は見守ってやってくれないか」

「本当に勝手じゃのう。ルーレットがそれを望まんじやろうて」

「ホント親バカって見てて笑えるわね。そういうところもアイツに似てたなんて……」

「ん？ 誰と比べられたかはわかんねえけど、まあよろしく頼む」

そうやってこちらが了承してないのに決定したように話を進めてしまったライダーはあの頃のままだが、なんだかんだでそういうところに着かれたところもある2人はやれやれといった雰囲気です承することになった。

それでも言うことも言ったと踵を返してキット本体の中へと戻ろうとしたライダーを見て、サアヤは言うべきかどうか少しだけ迷つてから、やっぱり過去との決別のためには言っておこうとライダーを引き止め振り向かせる。

「あのね、ライダー。アンタは気づいてなかったかもしれないけど、私はずっとアンタのことが好きだった。ソーンがいようと構わないくらいにはね」

「そりやまた……嬉しいやら複雑やらだが……」

「でもね、今はアンタ以上に好きな人ができたわ。そいつはどうしようもなくバカでやること成すこといつもブツ飛んでて、一緒にいるとむしろ疲れるくらいだけど……アンタと同じかそれ以上にカッコ良い、私の太陽なのよ」

「すっげえ言い様だな。でもお前が惚れた男なら、きつとこの世界で

何かを成し遂げるでつかいやつになるだろうな」

「……それって、アンタもでつかいことしたって言いたいわけ？」

「お、そういう意味にもなっちゃうか。はははっ」

そうしてずっと隠してきた想いを本人に告白し、今は別の人を好きなことも告げて、ちゃんと前を向いて進んでいると言ってみせると、ライダーも安心したのか笑ってサアヤを祝福してくれる。

「……じゃあね、ライダー」

「おう。そいつと仲良くしろよ。ガストは喧嘩っ早いからちよつとそいつに同情するわ」

「余計なお世話よ」

あとはそれだけ。それだけのやり取りで満足したように再び踵を返したライダーは、楽しかったとでも言うように機嫌良く歩き出していく。

「……リアルのお兄は元気だから……」

そんなライダーを引き止めるでもなく、張る声でもない呟きで送ったのは、ルーレット。

もはやリアルライダーとは切り離された存在である目の前のライダーだが、それもまた子からの、妹からの言葉とあっては反応しないわけにもいかず、しかし振り返ることなく口を開いた。

「そうか。リアルの俺とは仲良くしろな」

それにルーレットが応えることはなかったが、ライダーは見なかったが確かに頷いたルーレットをサアヤは微笑ましく思うのだった。

「あばよ、ロータス。《四元素》の3人も。《矛盾存在》にもよろしく言っといってくれ。それと……プロミを継いでくれた2代目に、あんがとよ、あとは任せた、つてな」

そしてキットの瞳孔に足を踏み入れたライダーは、最後に振り返り黒雪姫達に別れの挨拶をすると、清々しいくらいにあつさりキットの中へと入って行ってしまい、取り込んだキットは緩慢な瞬きをしてしまえば、そこにはもう何も存在していなかった。

——その声を、知っている。

あまりに粘着質で神経を逆撫でするような、人を見下すことでしか自身を主張できない性質を孕んだその少年の声に、背筋が凍りつくような感覚に襲われる。

いよいよユニコ奪還の正念場となった誰かさんのプレイヤーホームである学校の中庭での戦闘中。

ハルユキに敗北した《ウルフラム・サーベラス》が加速研究会の企みを阻止するために全損しようとしたところで《アルゴン・アレイ》の強制コマンドによってサーベラスの人格が変貌。

話の中でサーベラスの中には複数の人格が内包されていると推測されたが、その内の1人が抗っていたサーベラスと入れ替わり表面へと出てきた。

そのサーベラスは暗い紫色の心意の鉤爪を両手に出現させながら、目の前にいたハルユキへと言った。「有田先輩」と。

さらにそいつは目覚めたばかりで状況を把握できてなかったか、不意にテルヨシ達へも完全に閉じた正面のバイザーを向けてくる。

「……ああ、黛先輩と倉嶋先輩。それに皇先輩までいらっしやっただんですね。なんだか思い出しちゃいますねえ……あの夜のことを……」

あの夜のこと。それが指し示す出来事に心当たりは当然あったが、目の前のサーベラスがまだあいつ本人であることを確信できないテルヨシは考察に全力。

代わりにタクムの方が情報を引き出そうとクツクツと笑うサーベラスに言葉を返す。

「……悪趣味な物真似はやめろ！ きみが模倣しているバーストリンカーは、今はもうそんな喋り方や笑い方はしない。彼は加速の呪いから解かれたんだ。きみもバーストリンカーなら、ちゃんと自分として戦ったらどうだ！」

「あーあ、何度言えば解るんですか？ ボクをその気色悪い汎称はんしょうで呼ばないで下さい。それに、他人の猿真似みたいな趣味もありません

ね。ボクはボクですよ、黛先輩。——戦闘前に名乗りを上げるなんて鳥肌モノですけど、ま、今日は特別な日ですからよしとしましょう。ボクの名前は……」

ここまで拒絶反応を示す人間はそういないものだが、テルヨシの中でこれほどの拒絶が出たのは、後にも先にも母親を除けばあいつしかない。

きつとあいつを知る者。ハルユキ、タクム、チユリは全力で否定したい感情が確実にあっただろうが、その名乗りを聞くのと言うのでは受ける衝撃にいくら違いが出る。

それが本能的にわかったか、そいつが名乗り上げる前にチユリ自らがその名前を口に出してしまう。

「——《ダスク・テイカー》」

これによつてハルユキとタクムは認めざるを得なくなるが、それをテイカー。能美征二の口から告げられるよりもずっと嫌悪感などは少なくなつたはず。

こういうのはやっぱり女子が優秀なことを再確認しつつ、自分の口から精神的ダメージを与えられなかつた能美は明らかに不快なオーラを醸し出してチユリへと向き直り笑い声を漏らす。

「くつく……またこうしてお話できて嬉しいですよ、倉嶋先輩。楽しかったですねえ、2人でタッグを組んで新宿や渋谷エリアを蹂躪するのは。ま、先輩は従順なペットのフリをしてボクを裏切るチャンスを見逃さず虎視眈々狙つてたわけですけどね。アハハ、可愛い顔としおらしい態度にすっかり騙され……」

とりあえず能美の声には薄いフィルターをして深いところに刺さらないようにしつつ、しっかりとしたダスク・テイカーとしての記憶を有していることを理解。

だがサーベラスに人格が入り込んでいるというのは奇怪な現象なので、全損して記憶を失つた現実の能美が再インストールしダイブしてきている可能性は限りなく低い。

だとすれば、ここにいる能美は本物と呼べるほど確かな存在ではなく、ブレイン・バーストが保存している能美のいわゆる『セーブデー

タ』を掘り起こして使っているのではないか。

そうした仮説が成り立つのは、修学旅行の時に恵に起きたことももちろんだが、先日の《災禍の鎧》の浄化に至るまでの話で《クロム・ファルコン》と《サフラン・ブロッサム》の記憶が教えてくれたいくつもの事実があつたから。

加速世界の全損したバーストリンカーの記憶とは、つまりセーブデータ。それがあつたからこそ起きた奇跡が確かにあるのだ。

そうした考察をしている間にハルユキとタクムが能美と口論していたが、そうやって自分が本物と証明する能美にこれまたチユリが否定から入り、自分なりの考察を口にする。

「さっき、サーベラスIはこう言つてた。《2番》はもともと、サーベラスじゃない名前を持つ、独立した1人のバーストリンカーだった、つて。なら《3番》のあんたも仕組みは同じよね。もともとはダスク・テイカーっていう名前のバーストリンカーだったけど、今は違う。今のあんたは、ウルフラム・サーベラスのアバターに寄生する影……ダスク・テイカーの記憶をコピーした幽霊、そういうことでしょ！」

さっきの戦闘中にそんなこと言つてたのかい。

《ブラック・バイス》に集中していたせいでそんなサーベラスの重要な言葉を聞き逃していたのは痛かったが、チユリの考察がテルヨシとほぼ同様だったことには素直に驚き拍手しかけるも、戦闘中なので行動は控えておく。

だがそれなら色々と説明のつく現象がまだあるのだ。

《レッド・ライダー》の影をチラつかせた《ISSキット》に刻まれる《交差する拳銃》の紋章。これも同じ原理で出現した可能性が高い。

ブレイン・バーストのライダーのセーブデータを掘り起こして何かに定着させ《銃器創造》でISSキットを生み出した。

今の能美を見ているとライダーがたとえセーブデータを掘り起こしたとしても加速研究会に協力するようなことはないに等しいが、アルゴンがやったようなコマンドで制御されてしまうならば、操られている説が濃厚。

そうするとISSキットの本体の破壊に動いているサアヤ達が操られているライダーと交戦する展開もあるかもしれないが、今はどうすることもできないし信じるしかない。

それよりもだ。次に考えるべきことはアルゴンがこのタイミングで能美を引つ張り出してきたことと、ライダーで思い出されるある事実だ。

能美を引つ張り出したからには、これからやるであろう作業とやらに必要なパーツが能美であるということ。

それは確定的な事実として理解しつつ、では実際に能美が担う役割とは何か。

そこに至るとテルヨシの頭には考えるのもおぞましい役割を状況から察することができてしまう。

1つ。サーベラスのアバターに寄生した能美が、ライダーと同じような状態ならば、ダスク・テイカーが有していた能力を行使する力も必ずある。そうでなければISSキットなどという代物は生み出せていない。

2つ。テルヨシ達の中から明確にユニコを狙って拉致した加速研究会に意図があるなら、ユニコでなければならなかった理由が必ずある。

3つ。かつて加速研究会が災禍の鎧を生み出し、ハルユキから『回収』し何かしようとしていたのを阻まれていることが、今回のことに繋がっている可能性がある。これはISSキットという『心意のエネルギーを集める道具』が出てきたことから推測される。

4つ。かつての災禍の鎧も同様の心意のエネルギーが『ザ・デイス・ティニー』と『スター・キャスター』という2つの強化外装を依代に内包され変質し、長い年月をかけて成長させたものであり『七星外装』という消滅不可能で強力な強化外装の存在があつたから実現した代物だということ。

その4つの事柄から加速研究会が新たな災禍の鎧、に近い物を人為的に作ろうとしている可能性が浮上する。

心意のエネルギーはすでにほぼクリアしたものとしても、残る依代

となる強化外装は生半可なものでは七星外装と同等レベルにはなり得ない。

だが、今回ユニコを拉致し、能美を引っ張り出したことで点が線となる。

ユニコにはその全てを注いで育ててきた強化外装《インビンシブル》があり、それが七星外装に引けを取ることなどないと断言できる。でなければ王などと呼ばれたりはしないのだから。

なら依代がインビンシブルだとしても、ユニコはレベル9でたとえ災禍の鎧のような自我を失う事態になったとして、同じレベル9の黒雪姫などに討伐されてしまえば、たった1度の敗北で七星外装ではないインビンシブルも道連れに消滅してしまう。

——だから能美なのだ。

能美のデュエルアバター、ダスク・テイカーには相手の必殺技やアビリティ、強化外装の有無を言わずに奪ってしまう、かつてハルユキが翼を奪われ絶望の底にまで叩き落とされた必殺技が存在する。

「ちっ！」

そこに行き着いた頃には、タクムが能美のデータのサルベージについてを推測して、アルゴンがその推測に拍手を贈っていた。

まだ間に合う。そう確信したテルヨシはハルユキ達に何かを伝えるよりも早く、アルゴンが話を切り上げてしまうよりも速く能美へと攻撃を仕掛けた。

加速研究会がこれからすることは能美が鍵になるが、その能美が器にしているサーベラスはハルユキとの戦闘ですでにHPゲージは少ないはず。

残ポイントが10ならレベル差でテルヨシが倒してもここで全損にはならないし、サーベラス救済の手立ても色々考える余地も生まれる。

とにかく今は能美が動く前に死亡させてしまい、たとえ1時間でも加速研究会の企みを遅延させる！

それが最善の策だったが、テルヨシのその行動が実現することはなかった。

こういった話でテルヨシが不気味なほどに沈黙していたのが悪かったか、バイスとアルゴンもまたテルヨシへの警戒レベルを最大にしている、そのテルヨシが有無を言わずに動こうとした絶妙のタイミングで、バイスの防御に回っていた板が真横から痛打を与えて吹き飛ばし、校舎の西の壁に激突したところへ今度はアルゴンのレーザーが発射される。

完全に不可避のタイミングだったものの、アルゴンのレーザーはパドがいち早く反応して射線に割り込み、心意の爪で弾いてくれる。

「オクタヘドラル・アイツレーション八面断絶」

その猶予の間にハルユキ達へと叫ぼうとした時には、もうバイスは動き出してしまい、灰色の過剰光を纏ったバイスになまじ反応の良いハルユキ達はその心意技の発動にバイス達から距離を取ってしまうが、違う。そうじゃない！

『隔離』だ！ 分断されるな！

その心意技が攻撃目的ではないと確信していたテルヨシは、バイスの左腕と右足を構成していた数十枚の板が分離し浮遊した時に叫ぶ。

しかしその板はすぐにバイス、アルゴン、能美、ユニコを取り囲んでしまい、正三角形となった板はみるみるうちにその隙間を埋めるように大きくなり内側へと折れ曲がって、上下で2つの頂点を作る一辺20mはある正八面体の障壁が完成する。

障壁となっている板は薄くて中もスモークガラスのように透けて見えたが、殺到したハルユキ達の心意による攻撃でもビクともしない。

「危ない危ない。やはり君は油断ならないね、テイル君」

「ホンマえっげつないくらいエエ観察眼持っとなあ。そっち側やなかったら真っ先にスカウトして懐に抱えときたかった因子やわ」

「そうだったなら、お前らにとつての特大のウイルスになつてやったのにな！」

「そう吠えないでくださいよ先輩。折角の二枚目が台無しですよ？
くっくっ」

声も通るらしく、障壁越しに話しかけてきたバイス達に立ち上がり

つつ噛みついてやり、こうなった以上はハルユキ達と協力してこれから行われるだろう作業を1秒でも早く阻止するために動くしかない。「さて、テイル君が気づいてしまっているようだし、手早く頼むよ、テイカー君」

「ボクに命令するなよバイス。ボクは、ずっとこの瞬間を待っていたんだ。《1番》からデュエルアバターを奪い、もう1度あなたがたと戦う、この瞬間をね。ボクからたくさん、たくさん、たくさん奪ったものを……ポイントも、プライドも、そして力も、全部返してもらいますよ、先輩たち!!」

テルヨシがすでに企みに気づいているためにバイスが能美に催促し作業が開始されようとして、かつて自分を見捨てたバイスに文句を言いつつもやることはやるといった雰囲気話しながらユニコへと歩み寄る。

「パド、クロウ達も集まれ。みんな協力してこの障壁を破る。1秒でも早くだ。じゃないとレインのインビンシブルが、あいつに『奪われる』」

「——ッ!! の、能美! やめろ!」

「くっくっくっ……いいですねえ有田先輩! その苦痛に耐えられない悲鳴! もっと聞かせてくださいよ!」

どういう理由でというのは省いたにしても、ユニコからインビンシブルを奪うと聞けばそれだけで理解できるハルユキ達には十分で、苦痛の声をあげて障壁を攻撃するハルユキにユニコの前で止まった能美は楽しそうに笑うだけ。

どうあつても止まる気などないし、そうしてこちらが悲痛を声にすればするだけ昂る能美にこれ以上の愉悦を与えたところで仕方ないので、落ち着かせようとハルユキを強引に輪の中へと引っ張り戻す。「落ち着け。そんな心理状態で何かしようとしても何もできん。怒りは腹の下に落としてどうすべきかを冷静に考えろ。パド、見立てでいいがこの障壁は破れそうか?」

「この壁は絶対的な拒絶の心意。生半可な心意技じゃ確実に破れはない」

「となれば全員でどこか一点を集中して攻撃を加えて打ち破るつてのが得策か」

「ですがこちらも消耗が激しいです。全員の力を合わせても破れない可能性も」

「バイスだつて絶対強者つてわけじゃない。奴の拒絶を打ち破るイマジネーションが重要だ。ネガティブな可能性は今捨てた方がいい。ベルはゲージを満タンにしといて。また頑張ってもらうから」

「あたしは心意が使えないし仕方ないですね。ほらクロウ！先輩が頼りになるんだから、あわあわしてるな！」

「わ、わかつてる！」

実際にはテルヨシだつて心穏やかに話してはいないし、パドやタクム、チュリも能美達に叫びたい気持ちにはあつたはず。

それでもやるべきことはそんなことではないと無理矢理にでも落ち着かせて話に加わつてるのがわかつてるので、ハルユキも自分だけが取り乱してできることができなくなることを避けるため、チュリの力強い背中を叩く動作に返事。

そんなテルヨシ達が心底気に食わなかったか、笑い声が止んだ能美はこれ以上の揺さぶりが無意味と悟つて、開いた右の肩アーマーを磔にされるユニコへと向けて必殺技発声。

「……デモニック《魔王……コマンドイア徴発令》——ツ!!」

その発声のあとに右肩のアーマーから夕闇色の光線がまとわりつくようにユニコの胸部装甲に命中し、装甲の隙間から内部へと入り込み、今度は何かを吸収するように逆流を始める。

テルヨシがこの必殺技を実際に見るのは初めてだが、触れられるほどの至近距離でなければ発動できないのなら阻止だけなら容易か。

冷静に分析しつつも、また取り乱しかけたハルユキの頭にチョップを叩き込んで血を抜いてやり、今度はその行為を止めるための思考に集中。

正八面体は8つの正三角形で構成される多面体で、頂点は6つ。

頂点の1つは中庭の大理石の床を深々と貫いて見えないが、横に4つと20m以上ある天辺に1つあり、先ほどのハルユキ達は面に対し

て攻撃しビクともしなかった。

基本的にどんな物体にも急所と呼べる箇所が存在するので、難攻不落に見えるこれにも必ず弱い部分は存在するはず。

とりあえずテルヨシは自分でもその強度やらを確認するために一度だけ心意なしで普通に蹴ってみて、重量なども確かめてから、この障壁ごと蹴り上げて中を転がすことは無理そうなのを把握。あまりに重すぎる。

「となればあとは……クロウ。あの天辺の角だ」

「面じゃなく角……そうか！　パイル！　必殺技ゲージは？」

「まだまだあるよー」

そうなると狙えるのは辺と辺を繋ぐ接合部の端っこ。つまりは頂点の角。

さらに力は上方向から下方向へが最も力が出るのは当然なので、障壁の天辺の角が最も力が加わる部分ということになる。

逆に言えばここを攻撃して破壊できないようなら、もうこの障壁はほぼ破れないことになってしまうが……

テルヨシの意図に気づいたハルユキはタクムを掴んで障壁の天辺まで運ぶと、タクムを掴んだまま角の真上に陣取りタクムの体勢を固定。

タクムも心意剣を元の杭打ち機に戻して、その杭を角へと密着させる。

「《スパイラル・グラビティ・ドライバー》!!」

その必殺技はここに来る前に聞いたことがあったが、目が眩んでいってどんなものかわかってなかった。

発声のあとに杭打ち機が青い光に包まれて、その砲口が拡張され、収納されていた杭もハンマードリルとなって、杭打ち機の後方から火を噴き高速回転を伴って射出される。

その間にユニコからは2つのインビンシブルのパーツが奪われてしまったが、タクムの必殺技はビクともしなかった障壁の全体を振動させる衝撃を加え始め、それには微動だにしなかったバイスが真上を向いてから障壁をハンマードリルの回転とは逆の方向に回転させて

タクムとハルユキへの負荷を上げて振り払おうとする。

そうするとすることは破られるかもしれないと危惧したからに他ならず、確信を得たタクムも青い過剰光を杭打ち機に纏わせてバイスの抵抗に真っ向から立ち向かう。

激しい火花を接地面から飛び散らせながら拮抗していた力は、徐々に障壁の回転を止めて、完全に止まってからもハンマードリルの回転はより一層激しさを増して加圧し続け、ついに天辺の角から4つの辺を伝ってひび割れが起きる。

しかしひび割れはその先の角で止まってしまいタクムの力だけではそれ以上の圧力を加えるまでには至らないようだ。

そこでハルユキも加勢するようにその背中からバイスを追いかけていった時にも出現させていた4枚の光翼を現出させ、空気を叩いて真下へと突き進む推進力を力に変えて圧力を加える。

その加勢によって角で止まっていたひび割れがさらに下の辺にまで及んでいき、パドも角の1つに噛みついて手助けをし、テルヨシも青い過剰光を足に纏って角の1つに蹴りを叩き込んでみせる。

だがテルヨシとパドの加勢でもひび割れは下の角にまで及ぶところで止まり、本当にあとひと押しが加えられない。

おそらくテルヨシが攻撃威力拡張の心意を使えばギリギリ足りるかどうかの具合だと感覚的にはわかるのだが、さっきの十字架への攻撃から消耗するばかりでそこまで強大なイメージーションを引き出せない。今もこれで全力なのだ。

「くっそ……あと1発でいいのに……」

そうとわかっていてもすでに限界突破して引き出している心意がどんどん弱まっていくのが実感でき、悔しさでどうにかなりそうになる。

そもそもテルヨシの攻撃的な心意の力の源は、母親への憎悪。それを引き出して使うには、その憎悪をぶつけるに値する相手と、その負の心意に呑まれない強靱な精神力が揃わないと暴走の危険が伴う。

黒雪姫はその暴走をさせないために心意を教えてくれたのだし、ここで暴走してハルユキ達に負担を強いるわけにはいかない。

それでも引き出さなきゃならない。攻撃威力拡張の心意を。
「……………逃げるのは、もうやめだ」
そしてテルヨシは、今この瞬間に自分の負の心意と向き合う。

「——やるべきことは変わらない。持てる力の限りを尽くして、ISSキット本体を破壊する」

ISSキット本体を依代にサルベージされた《レッド・ライダー》との会話を経て、まだ各々で整理すべきことも多い中、これから始まるキット本体との戦いに意識を向けなければいけない場面で、ライダーとして黒雪姫が決断を口にする。

「ルーレット。どう言おうと結局はまたライダーを倒し、この世界から消すことになるが、構わんか？」

「……何でアタシにだけ確認するんだ。アタシはもうここでやることはした。あれをどうするかなんて知ったことじゃない」

「そんな言い方はないでしょ。仮にもアンタの《親》がまだあの中にいるわけだし、ソーンのやつだって……」

「アタシの親はお姉だけだ。それにお姉にはあれと《交差する拳銃》の関係は話してない。ここでのことも報告するつもりはない。もうお姉の悲しい顔は見たくないから」

しかしそうなる場所で判明したライダーの《子》である《ボツシュ・ルーレット》から親を再び奪ってしまうことになるので、その辺でルーレットに了承をと思ったが、やはりこちらでのライダーとの関係が皆無だったこともあって未練みたいなものはないらしい。

むしろ今の親代わりをしている《パープル・ソーン》が傷つくことの方を心配してライダーのことも話してないことがわかると、その親思いなルーレットに母性でも出たか、フーゴがその頭を抱き寄せていい子いい子し始めてしまう。

「ライダーは《オリジネーター》だから、リアルで妹のこの子は100%わたしよりも年下よね。そんな子が優しさに溢れたことを言うから可愛く見えて仕方ないわ」

「やーめーろー！ デカ乳に顔を押し付けるなー！」

「完全に妹キャラになってしまったの」

「み、身代わりができたのです……」

「メイちゃん、本音が漏れてるよ」

「あの高飛車なソーンには勿体ない優しい子じやの」

「みんな気を緩めすぎよ……」

そのせいでなんだか引き締まった空気作りをしていた黒雪姫がどんよりとした雰囲気纏ってしまつて、見かねたサアヤがちゃんとしようと声かけだけはしてみようと、フーコも猫みたいに暴れるルーレットを解放してあげて、フーコへの警戒心が上がったルーレットは露骨にフーコから距離を取る。

それにまたちよつとした笑いが起きたものの、立ち直つた黒雪姫が大きな咳払いをすれば改めて集中した一同も黒雪姫をまっすぐ見る。「クロウ達の状況もわからん以上、私達がここで足止めをされている場合ではない。あれがデュエルアバターであろうとなかろうと、撃破しポータルを潜り捕らわれたレインを救出する。異論はないな」

ずいぶんと長い話にはなつてしまつたが、これでようやくISSキット本体を破壊する段階に進み、各々がらしい返事で気合いを入れてキット本体と対峙。

するとキットの方も回復が済んだのか、ポータルの青い光に染まっていた瞳孔が暗赤色へと変わり、キット全体から悪意の可視化と呼べる黒い過剰光が放出されて、20mも離れたサアヤ達にすら突き刺さるようなオーラを届かせる。

「これが……全部、心意の過剰光だ……?!」

ライダーが去り際に言った「とんでもなく強い」というのを実感するような冷たい負の心意に対して、フーコが驚愕しながらも心意の使えないマリアとルーレットを守るように過剰光を纏い、サアヤ達も同様に過剰光を纏いつつ仕掛けるタイミングを黒雪姫へと託す。

「あの凶体なら小回りは利かないはずだ！ 一気に接近し、後方に回り込んで叩く！」

『了解！』

そもそも動けるかもわからないものだが、数の有利を活かすならそれが最善とルーレット以外の全員が即応し突撃のタイミングを図ろうとした瞬間。

キット本体を包んでいたオーラが瞳孔へと集束し、遠隔心意技《ダーク・ショット》がサアヤ達へと放たれる。

しかもそのダーク・ショットは今まで端末を使って放ってきたキットユーザーの数十倍にもなる規模と威力で迫ってきて、防御すら不可能と確信するよりも早く全員が左右へと回避に動く。

他人を気遣う余裕すらなかったものの、なんとかギリギリで全員が直撃を避けたようだったが、あまりに太いダーク・ショットの力の奔流はサアヤ達の装甲に突き刺さるような余波を浴びせて削りダメージを与えてくる。

しかし削り、と呼ぶのもバカバカしいほどのダメージに戦慄しつつ、避けてこれでは掠めるだけでも即死するかもしれないあんな攻撃を至近距離で受けるリスクを負って戦えるものか。

避けたダーク・ショットは後ろの壁に大穴を開けて突き抜けて《黄昏》ステージの夕空へと飛び去っていったが、何かに当たれば破壊的な惨劇を生んだだろうダーク・ショットにあきらま「何度も撃たれたら建物がなくなる」と危惧。

「アンブツシュ、手伝え」

「えっ、何をするんですか、ルーレットさん」

そうなるとユリが困るだろうと言っていた足場すらなくなってしまい、ポータルが固定座標でそれを取り込んでるキット本体ならそこに留まってしまいかもという新たな危惧が生まれ、やはり危険は承知で接近戦で短期決着を狙うしかないとなる。

その中で後ろのルーレットがマリアへと声をかけて何かしようとしていたので様子をチラツと見ると、大穴が開いた壁から顔を覗かせて下の方を見ながら指示を出していた。

「《バースト・ショット》」

そして確認が取れたのかルーレットが外の地面へと向けて《ホーライ》の弾丸《エウノミアー》を必殺技で撃ってみせ、遙か下の地面に地雷となって設置されただろうエウノミアーが発動しないと新たな強化外装も出せないからか、そのエウノミアーをマリアが《シャープネス》で狙撃し起動する策に出たらしい。

このタイミングでやるということは戦闘参加の意思表示であり、役に立てない強化外装が出て今よりはマシだと考えたからか。

「ルー子の戦力アップは半々としておいて、接近戦だと《ダーク・ブロウ》とかいうのもあるんですよ。手もないのにブロウをどうやって出すかはさておいて、それも即死級よね」

「あの目玉に手足が生えるところは見たくないが、今更ながら遠近両方の心意技を無制限に使えるなど無茶苦茶もいいところだ!」

愚痴りたくなる気持ちもわかるが、それを言ったところで状況が好転するわけでもないのです、割とスパツと切り替えて、そんなものはおさら破壊すべきとする。

キット本体は依然としてサアヤ達を照準して、こっちが動けば即座にダーク・シヨットを撃つてくるだろう雰囲気纏っているので、無意味に仕掛けてピンチになるのは避けるべき……

——ズギヤアアアアアン!!

とかなんとか思ってた矢先に後ろの、それこそ遥か下の方から何やら壮絶な炸裂音が木霊してきて、ルーレットのエウノミアーが起動したことを知らせてくる。

それと同時に必殺技の使用で強制的にホーライをストレージへと戻されたルーレットの手元に新たな強化外装が出現した。

「のわああああ!!」

が、一瞬見えただけで電磁投射砲の《エリーニユス》だったとわかった時には、すでにルーレットと共に重量だけで床を踏み抜いて階下へと転落してしまった。

その転落に巻き込まれないように MARIA 達が飛び去った瞬間、キット本体がこちらの動揺を狙うように再びダーク・シヨットを放つてきて、左右で割れていた内の黒雪姫、フーコ、あきら、謡の4人が範囲に捉えられた。

「あのアホ娘は!」

「事故よロータス」

「カリカリしたらダメなの」

「集中なのです」

ルーレットなりに戦力になろうととしてやった結果ならとイラつきながら回避していた黒雪姫をなだめる《四元素》の3人の保護者具合がネガビュらしいが、その問題児は段階的に5階層くらいも落ちたらしく、仕方ないがルーレットの復帰はないと見てよさそうだ。

「……ルーレットは放置する。次のダーク・ショットを回避後に仕掛けるぞ。私とガスト、メイデン、アンは心意技込みの遠隔攻撃。レイカーとカレン、ボンバーは心意防御を……」

さすがにサアヤ達が足場を気にしてるのに、その足場ごとブツ壊して攻撃はしてこないと思いたいが、なくもないので小声でルーレットの開けた穴から様子を見ておくようにユリに言っておきつつ、北側の壁に2つ目の大穴が開いてから、刺激しないようにサアヤ達に近寄ってきた黒雪姫が分担を割り当てる。

しかし言い終えるよりも早く意見を割り込ませたのは、意外にも最年少組の1人の謡。

「攻撃は、私に任せてほしいのです」

「だがメイデン、いくらお前でも1人では……」

四元素でも一番の新参である謡だが、心配する黒雪姫の言葉を切る形である種の覚悟を決めた声色で堂々と言い切ってみせる。

「私には、ああいう《大きくて動きの鈍い敵》専用が開発した技があるのです。1度発動できれば、体力ゲージがどれ程あろうと削り切ってみせます。でも、発動準備に3……いえ2分かかるので、その間、ローねえ達で何とか凌いで欲しいのです」

その技が誰を想定して編み出したかはサアヤには推測でしかわからなかったが、ほとんど確信に近いものを感じたフーコがそれを確認しかけてやめ、自分から役割を買って出る謡はそうそうないのか、フーコの了承を皮切りにその決意を汲み取った全員が了承。

攻撃を謡が全て担うならば、サアヤ達がやることはその準備時間中、謡を守りつつ建物の破壊の被害を最小に留めることだけだ。

「それでは、始めるのです」

全員からの了承をもらった謡は《フレイム・コーラー》を頭上へと掲げて心意によってその形を変化させ、1つの扇子を作り出し開いて

みせると、フェイスマスクにもアイレンズの部分が能面のように細く切られる。

日本の伝統芸能である能とは違うものの、サアヤも日本舞踊の心得がある——その顕現したものがブレード・ファンなのだが——ため、謡が扇子と能面を纏った瞬間から、見る者を魅了するカリスマに呆然としかけてしまった。

多くの伝統芸能は女には才はあっても資格がないだのと言われてしまうが、その才だけで見るなら謡はおそらくサアヤよりも格上。

謡についてはまだよく知らないが、ゆらりと揺らぐ綺麗な過剰光を身に纏って舞い始めた謡の動作1つ1つは一朝一夕で身につくものではないとわかる。

出来るならその一部始終を見ていたいとさえ思うものの、謡が放つ過剰光に反応したキット本体がその瞳孔を見開いてこちらを照準してきたために動かざるを得なくなる。

「こつちだ、化け目玉！」

謡とマリアの守りはユリに任せて左右へと散ったサアヤ達によって、その狙いに迷いを生じさせたキット本体の瞳孔がキョロキョロと動き、走りながらより強烈な過剰光を纏った黒雪姫に照準し謡から狙いを外させることには成功。

しかし心意技はその発動に集中しなければならぬ都合、それに必要な動作を並行して行うのは困難を極める。

黒雪姫の遠隔心意技は移動を必要としないために回避しながらの発動は難しそうなのは、狙いの分散のために別のところで立ち止まったサアヤにもわかり、それでもダーク・ショットを撃とうとするキット本体をターゲットし続けるために攻撃を強行しようとする。

「つたくもうー！」

それを見るや否や、1人で戦ってんじゃないわよ！ といった怒りと共にサアヤも赤い過剰光をブレード・ファンの展開剣に纏わせて刺突の構えを取りキットの瞳孔を狙う。

「——《奪命撃》!!」

「——《突風塵》!!」

狙うのはキットからダーク・ショットが放たれる瞬間に黒雪姫への狙いをわずかでも外すこと。

そうすれば黒雪姫が直撃を受ける可能性を下げることもでき、ターゲットを自分に向けた際にフーコ達がまた隙を狙える。

そこまで考えてほぼ同時に放たれた2人の遠隔心意技は別方向からキット本体へと迫り、しかしダーク・ショットも同じタイミングで放たれてしまつてサアヤの狙いが少し狂ってしまう。

それでも黒雪姫も回避しながらの攻撃にギリギリ成功したようなので攻撃に集中したが、黒雪姫の奪命撃と交差したダーク・ショットが黒雪姫をホーミングするように捻れて曲がったのだ。

さすがのそれには攻撃中のサアヤではどうしようもなかったが、サアヤの突風塵の軌道の上を煌めく青い軌跡が横切つて黒雪姫へと迫り、ダーク・ショットのホーミングが直撃するルートから間一髪のところまで横から叩いて救出。

そしてサアヤと黒雪姫の攻撃もキット本体の瞳孔と白目の部分に命中し鮮血のようなエフェクトが周囲に撒き散らされ、いくらかのダメージを与えられたようだった。

ダメージによる反動かキットの眼が何度か瞬きをして回復を促す素振りをした間に伸長させた展開剣を引き戻しつつ、黒雪姫を助けに《ゲイルスラスター》を使って突っ込んだフーコを見ると、黒雪姫に抱えられたその体の両足がダーク・ショットによって膝から消失してしまつたらしい。

痛覚2倍の《無制限中立フィールド》でそのダメージは洒落にならないほどの痛みを伴つたはずだが、零化することもなくストレージから車椅子の強化外装を出してそれに乗つて戦闘を継続する意思をビシビシと伝えてくる。

そしてすかさず前へと出た黒雪姫とフーコに続いてサアヤとあきらも別方向からキット本体へと殺到して打ち合わせなしで正面を避けつつのクロスする4方向から挟撃。

さらにサアヤ達の動きに合わせてマリアも銃弾を選択し、シャープネスにその弾を込めて即座に発射。

キット本体の瞳孔のど真ん中へと撃ち込まれた銃弾は着弾と同時に強烈な光を周囲へと放って視角を遮断しにかかる。

《閃光弾》を撃つとマリアは全く言わなかったが、ここまでの戦闘で視界の遮断は有効と見ての無言のサポートにサアヤ達が気づかないわけもなく、着弾の寸前にちやんと目を閉じてやり過ごし、目を開いた時にキット本体が瞬きを繰り返す姿を捉えれば好機と見るしかない。

「相転移」——《鋭》！
「——《旋回風路》！」

近接戦用の明確な心意技は使えないサアヤ——射程拡張と防御拡張しか使えない——は始めから追い打ちに留めて挙動の観察の方にリソースを割いていたが、あきらとフーコは同じ直線上で同時に心意技を発動。

技名発声のあとにあきらの水流装甲が瞬時に凍結し、青く透き通った鎧となると、両腕には長大な手甲剣カタールを出現させて、薄く鋭いその刃でキット本体の側面をメツタ切りにする。

フーコも緑色の小型の竜巻を手の中から生み出し、それを防御目的ではなく攻撃目的でキット本体へと放ち、真空の刃がキット本体の装甲を次々と切り裂いていった。

サアヤは元々が旧プロミのメンバーであることもあって、今回の作戦に参加したメンバーでは基本的にユリしかどんな心意技を使えるかを知らない。

ユニコもそうだが、あの美早ですら旧プロミ時代のサアヤにとってはほぼ新人という括りに入ってしまうのがなんとも言えない。

そもそもとして心意システム自体が秘匿され続けてきたものであるからには『他レギオンの誰々がこんな心意技を』なんていうアホ丸出しな情報が出てくるはずもなく、サアヤが今回の作戦で知り得ていたのは、前回の《サク》戦で黒雪姫が使った奪命撃くらいなもの。

実際に使ったのも歴代の《災禍の鎧》討伐時くらいのもので、そのくらい使用頻度も限られてくる心意技だからという言い訳にはしたくないが、サアヤはこの心意技に関してはそこまで研鑽し明確なイマ

ジネーションを作り出せているわけでもない。

実際に旧プロミ時代のサアヤは射程拡張の心意だけを实战で使えるくらいの練度でしかなかったし、防御拡張の心意も割と最近。今年に入ってからようやく実戦で使えるレベルに出来たほど。

だから防御拡張の心意にはまだこれといった固有名も付けていない、発動にわずかにもたつくが、この心意技だけは自分の納得する名前にしてあげたいと考えていた。何故ならこの心意はサアヤ自身の『守りたい』という意思そのものが形となって顕現しているから。

謡の《フレイム・ボルテクス》から考えても、普通のデュエルアバターならこの時点ですでに3度ほどは死亡しているほどのダメージを負っているキット本体だが、そんな常識も覆ってあきらとフーコの攻撃を受けて肉質な表面装甲を抉られても未だ消滅しない様は不気味すぎる。

それでもISSキットなどという代物を野放しにするわけにはいかない、その意思力を以て跳躍した黒雪姫は、キット本体の真上で宙返りし上下逆さまの状態で全身に白に近い青の過剰光を纏って錐揉み回転しながら技名発声。

「――《光環連旋撃》!!」

まるで小さな太陽のように発光する黒雪姫は、その超高速の錐揉み回転から壮絶な剣による連撃をキット本体へと撃ち込み始め、その苛烈さたるや1撃ごとにキット本体の装甲を爆発にも似た規模で千切れ飛ばす。

2、3秒ほどで撃ち切って同時に攻撃をやめたフーコのそばに着地した黒雪姫は、秒間10連撃以上も放った強烈なイマジネーションを引き出した反動ですぐには動けないようだ。

それはあきらとフーコも同様で距離を取って警戒しながら休む様子が見て取れ、キット本体も3人の攻撃によって両側面と上部の装甲が抉れて、眼球であろう滑らかな曲面が露出している。

ここまででまだ1分ほど。謡が稼いでほしいといった時間まであと1分だが、このままいけるのか。

そうした不安も拭いきれないまま、余力を残したサアヤが集中を上

げ、黒雪姫達がチラツと舞を踊る謡に目を向けた瞬間。

キット本体の瞳孔に鮮血の色が煌めき、再びダーク・ショットが放たれるのかと構えたサアヤは、いち早くそれに気づき展開剣を両腕に半分ずつで分割連動操作し長大剣を作り出す。

キット本体からダーク・ショットは放たれることはなく、代わりに起こった現象は、後ろに残った肉質な装甲から出現した2本の長い触手だ。

コブのように膨らんだ先端には漆黒のオーラがまとわりついていて、そこから放たれたダーク・ブロウが回避に動いた黒雪姫とあきらを射程に捉えてしまう。

「させない、わよ!!」

その挙動を見てからでは間に合わなかっただろうが、ある種の勘でダーク・ブロウが放たれた瞬間に動いたサアヤの展開剣は、キット本体と黒雪姫、あきららの間に割り込んですぐ、その腹を2人にほぼぶつける勢いで当てて外側へと押し出し、ダーク・ブロウの10mはあっただろう長大な射程から1歩早く脱出させて左右の壁際まで後退させることに成功した。

「助かったガスト。だが、もう少し優しく出来なかったものか」

「助けてもらって文句を言わないで」

助けられておいて文句を言う余力がある黒雪姫には呆れてしまうが、過剰光を纏う余裕もなかったブレード・ファンはダーク・ブロウの余波によってポロポロに刃こぼれを起こしていて、扇子の状態に戻すことが不可能だろうことが1発でわかる。

こうなると必殺技を使ってしまえばブレード・ファンは扇子に戻るための形を形成できずに破壊判定を受けてしまうので、展開剣のまま戦い切らないといけなくなる。

そう思いながら伸びきった触手を引き戻すキット本体を警戒していたサアヤは、直後に瞳孔へと漆黒のオーラを集束する様を見て焦りにも似た感情で判断が鈍ってしまった。

——心意とは『心よりいづる意思』。

力の源にあるのは常に己の心より引き出される強い願望であり、それが一定以上の強固なイメージーションを練り上げた時に、システムがそれを現実にしようとして実際に事象を上書きする形で起きる。

その際に纏う過剰光はイメージーション回路との接続の強度に比例し、強力な心意技にはそれなりのイメージーションを練り上げる時間にも必要になる。

この心意システムが加速世界誕生の頃からパッチも当てられずに、他の抜け穴的な要素は異常なレベルで対応してくる運営側が放置しているのは正気を疑うような事実ではあるが、そうする理由が運営側にもあるのだらうと、テルヨシは習得の段階でおぼろげにはあるが考えていた。

しかしひと一言に習得と言ってもそれは非常に困難を極める苦行に近く、デュエルアバターが自身の劣等感や羨望といった大多数の『負の感情』から形成されるのもそうだが、己の心の内から引き出される心意は己自身とも正面から向き合い、受け入れ、乗り越えなければ使うことすらできない。

テルヨシは約7ヶ月前に渡米しての足の治療の際にその自分自身と向き合い、トラウマを克服するという試練と呼べるものを乗り越えて心意の習得に取り組んでいた。

だからこそ《閃光の幻影》と《地獄の一撃》という2つの心意技を扱えるようにもなれたし、今回の作戦でも十分にその力を発揮できていた。

しかしだ。この誰かさんのプレイヤーホームである学校に来て、相対した《ブラック・バイス》の胸の奥に刺すような言葉でテルヨシは、ずっと考えないようにしていたことを考えさせられてしまった。

——君のその黒い心意には、とてもシンプルな『憎悪』と、そして『諦め』が含まれているね——

別にテルヨシはそれを望んで地獄の一撃が纏う過剰光をどす黒い色にしているわけではない。

しかしそうなってしまっただけの理由は確かに存在してしまっているのだ。

テルヨシが習得した心意技の1つ、閃光の幻影は移動能力拡張のみの、文字通りのほぼ移動専用の技。

ここにテルヨシが強くイメージするのは『誰よりも速く大切な人のそばへと駆けつけたい』という純粹かつ渴望にも似た願い。

故にここには混じり気1つない正の心意として青い過剰光が全身を纏って、それが両足へと一気に集束し発動する。

現実世界のテルヨシが未だその足で満足に歩き回れないことも加味すれば、その渴望はより強固となり、移動力だけならおそらく翼での全力飛行をするハルユキとほぼ同速レベルには昇華させられるだろう。

そんな閃光の幻影は黒雪姫も太鼓判を押すくらいには実践レベルに練度を高め、その使用にも必要に迫られた場合のみで許可も出たが、そのあとに習得した地獄の一撃に関しては未だ黒雪姫からは『必要に迫られても使用するのは可能な限り控え、出来るなら1人の時には使うな』とまで言われてしまっている。

移動能力拡張に加えて、攻撃威力拡張も加えた複合心意技である地獄の一撃は、その使用の際に『母親である皇遊佐スメラギユサへの激しい憎悪』を源としてしまっている。

そもそもとしてテルヨシの人生において他に對して強い攻撃性を持つことなど皆無であり、本来ならば攻撃威力拡張の心意など習得すら出来なかつたはずのものを持ち得たのは、遊佐がテルヨシの足が動かなくなつた原因を作つた従姉であり幼馴染みの白穂梓桜シラホシサクラを影で虐待していたから。

それを知つたテルヨシがサクラを守るため遊佐へと振るつた拳には激しい怒りと憎悪が宿り、結果としてサクラを守り遊佐を收容所に隔離することはできた。

だから地獄の一撃の力の根源は『大切なものを守るために誰よりも

速く駆けつけ、脅威を徹底的に排除する』ことに集約していて、如何に閃光の幻影が正の心意であろうと、その攻撃性は負のエネルギーを帯びて過剰光がどす黒く変色してしまうのだ。

その事を黒雪姫は良くは思わなかったし、何度も負の心意からの脱却方法を模索してもくれたが、テルヨシ自身がこれでいいと納得してしまつて今に至っている。

いや、正確には納得などしたくはなかったが、この心意技に関しては遊佐への憎悪なしに発動すら不可能であると気づいてしまつたから、黒雪姫の優しさをはね除けて『諦めてしまつた』だけだ。

それをバイスは明確にかはわからないが看破し、しかし負の心意と知っていても使おうとするテルヨシの心までは理解できないと言つていたわけで、加速世界の黎明期から心意についてを研究し暗躍していただけたことはある。

そうした背景があるためか、テルヨシはこの地獄の一撃に関しては引き出せるイマジネーションにある種の限界。

天井とは違うが踏み越えてはいけない絶対的なラインを感覚的に定めて、負の心意が暴走したりしないようにブレーキを掛けていた。

だからなのか、発動こそ他に引けを取らない心意技でも、そのエネルギーの密度に埋められない差があつて、黒雪姫やフーコ達の正の心意を間近で見た時に自分の心意の濁り具合が情けなく思えていた。

そして今、隔絶と呼べるほどのバイスの拒絶の心意を前にして、テルヨシは考えさせられる。

——お前の心意は何のためにあるのか。

本当に負のエネルギーでしか引き出せない、諦めなければならぬような攻撃の心意しかお前の内からは生み出せないのか。

お前はまだ、心のどこかでトラウマを乗り越えられていないのではないのか。

そんな自分への質問を内心で投げかけていけば、自分がどれほど弱い存在だったかを理解するに至り、遊佐への憎悪などは結局のところ『安易に心意を引き出すトリガーとしての逃げ道』でしかなかったと自覚するのだ。

そうして遊佐を『悪』と断定し、その悪に対しての制裁——暴力による制止——を正当化し、自分のしたことを柵に上げてしまっているのが今のテルヨシ。

その事から目を背けている限り、これ以上のテルヨシの心意の限界は上がらない。

「……………自分のしたことを認め、その先の未来を見る」

遊佐との間に出来た溝はもう埋められないものとなったのは間違いないが、自分が遊佐に対してしてでかした事の愚かさと残虐さを認め、謝ることくらいはできる。

それからサクラに対して謝らせることだつてきつと出来るはずだ。そんなことすらも出来ずにいた自分の愚かさをようやく受け入れたテルヨシが、目の前の拒絶の心意を改めて目にして、前へと力強く踏み出す。

——心意とは心よりいづる意思。

テルヨシの中で攻撃性を持つ心意の根源が変化を遂げるには、新たな源泉を見つけなければならぬ。

だがそんなものは探す必要も迷う必要もなく、今、目の前で礫にされたユニコとその間を隔てる壁を見れば自ずと見つかる。

テルヨシが振るう新たな攻撃威力拡張の心意に込める願いは『あらゆる壁をぶち破り突き進む』こと。

それさえ明確に定めてしまえば、テルヨシの抑圧されていたイメージネーションは上限など突破して迸り、閃光の幻影よりもさらに濃い青色の過剰光を両足へと集束させる。

その変化には今も《八面断絶》を打ち破ろうと圧力を加えるハルユキ達からバイスとアルゴンも視線を外して驚く雰囲気醸し出す。

これならこの壁も打ち破れるかもしれないと、そんな予感に足を振りかぶる直前の動作までした時にふと、テルヨシの頭に心意の原理が引っ掛かる。

心意システムは自身のイメージするものを具現化し事象を上書きして現象を起こすものだが、これが心意同士の不つきり合いになれば、より強いイメージネーションが相手の心意を上書きして打ち破るこ

とになる。

ならばバイスのこの八面断絶の拒絶の心意に対して、さらに強力なイマジネーションで上書きすることで理屈の上では破壊できるといふこと。

つまりイメージするのは『過程』ではなく『結果』。

何物をも拒む壁に対してテルヨシが振り絞るイマジネーションは、その壁を自分の蹴りによって粉々に打ち砕く結果。

だとすればテルヨシの蹴りには振りかぶって加速する動作も必要なく、蹴りを当てて打ち砕くイメージだけに集約してしまえばいいのではないか。

動作はあくまでイメージの補助。大事なのは思い描いた結果を強く『事象の上書き』^{オーバード}することだ。

そのある種の境地に至った瞬間、テルヨシの両足に宿る過剰光がキーン、といった静かな音と共に小さくなり、しかし密度はとんでもなく引き上がったのが直感でわかる。

何か歯車がガツチリと噛み合ってくれたような、そんな感覚の中でそれが失われる前に振りかぶっていた右足を蹴り出して目の前の壁へと打ちつける。

「――『流星突破』^{メテオ・ブレイク}」

元々ハルユキ達の力によってひび割れを起こしていた八面断絶だが、テルヨシの極限の心意による事象の上書きで完全にその耐久を上回り、蹴りの着弾点から一瞬の静寂を経て放射状のひび割れが一気に裏側にまで到達して、八面断絶はガラスが砕けるように木端微塵に打ち砕かれた。

八面断絶が壊れる寸前にはユニコの中から4つ目の《インビンシブル》のパーツが能美に奪われてしまったものの、最後の1つを奪おうとしたところで八面断絶を突破してそのまま《スパイラル・グラビティ・ドライバー》を維持して落下したハルユキとタクムが能美の脳天めがけて攻撃を仕掛ける。

しかしそれを即座にアルゴンのレーザーが狙い撃ち、4本のレーザーの内、2本はハルユキがアビリティで防ぐが、残りの2本がタク

ムに命中しバランスが崩れ、スパイラル・グラビティ・ドライバーは能美のすぐ横の地面へと着弾。

直撃こそ防がれたものの、能美の略奪はすぐに動いたハルユキによって阻止されて、追撃に動いたアルゴンはパドが強襲し放たれたレーザーは逸れて校舎へと突き刺さる。

さらにバイスもここまでくると迎撃ではなく回避を優先したらしく、ユニコを磔にしていた板を戻して地面へと沈めて後退。

そうした判断をしたなら、せっかく奪ったインビンシブルを取り戻させないために迅速な撤退はしてくると見て、テルヨシもバイスが影の中に入らないようにしようとしたが、その時にはテルヨシの視界は90度傾いて見えていた。

「……あれ……う？」

誰に阻止されたわけでも、攻撃されたわけでもないはずなのに、テルヨシの体は大理石の床に倒れてしまっていて、そうと気づいたのがこのタイミングだったのが最悪。

おそらくは今の心意技の発動の反動でアバターを動かす気力すら失った状態に陥ってしまったのだろうが、完全に動かなきゃいけない場面でのこれにはテルヨシも焦るしかない。

その焦りと硬直を見抜いたかのように、後退したバイスはハルユキ達を警戒しつつもその視線は明らかにテルヨシへと向けていて、何を狙ってるのかと観察していたら、てつきり戻していたと思われたユニコを拘束していた右腕の板がテルヨシを挟み込むように床の影から音もなく出てくる。

弱った敵を確実に叩く。実に堅実な策だが、万力のように左右から迫った板がテルヨシを挟み込み圧殺することはなく、その直前にハルユキの腕の中で零化から復帰したユニコが即座にその両拳に深紅の過剰光を纏って跳躍し、迫った板へと心意の炎で迎撃してくれる。

八面断絶に左腕と右足を使い、かなり消耗のあるバイスは、これ以上の欠損を嫌ったか、ユニコの心意の炎を受ける前にあっさり退いて板を影へと沈め回避すると、今度こそその板を戻して右腕を構成する。

それを経て周囲を見回しながら大理石の床に着地したユニコは、今まで拘束されていた屈辱を怒りに変えて、本来は緑色のアイレンズが青みがかかった白へと変色する。

「てめえら……よくも好き放題やってくれたよなあ……この借りは倍返しじゃ済まねーからな。10倍……いや、世話になったツレの分も合わせて50倍返しだ。消し炭も残らねーくらいコンガリ焼いてやっから、覚悟しな」

復活して早々の王たる堂々とした啖呵には味方のはずのテルヨシが小さく笑ってしまうが、頼もしい味方が復活してくれたのは心強い。

そう思っていたらアルゴンを牽制していたパドがテルヨシへと近寄って《テイル・ウィップ》の接続部辺りを噛んで持ち上げその背中に乗せると、そのままユニコのそばへと移動し、ハルユキ、タクム、チユリも集合し離れた位置に陣取ったバイス達と対峙する。

「つたく、助けに来たやつが真っ先に助けられる側に助けられるよな」

「返す言葉ありません」

「NP。テイルは十分に頑張ってくれた」

「……まあメタトロン戦の時より傷も目立つし、そうなんだろうけどよ」

「頑張ったのはオレだけじゃないし、お礼とかはあとにしようか。今は……」

「おう。取られたもんを取り戻さねーとな」

意識が戻るなりユニコらしい絡みでテルヨシと会話をしてくれたのはいいが、張り詰めている緊張感までなくなってしまう前に早々と切り上げて再びバイス達と向き合い、テルヨシはパドの背中で回復に集中する。

「いやはや、君には本当に恐れ入るよ、テイル君」

「ホンマ読めんくらい飛躍的な変化やねえ」

「……何の話だ」

そんな戦力外状態のテルヨシに称賛するような言葉を贈ってきた

バイスとアルゴンに、何を言ってるのか本当にわからなかった——判断力も落ちていたのもあるが——テルヨシが反射的に聞き返すと「おや」と小さく漏らしてバイスが言葉を紡ぐ。

「どうやら無自覚での発動だったようだね。それはそうか。先ほどまではあれほどの心意を引き出せる可能性など到底ないレベルだったのだから、この場の様々な要素が偶発的に君をある種の『ゾーン』に導いた結果というわけか」

「それにしても自力であのレベルを引き出せたんはテイルちゃん以外には片手の指で数えるくらいしかおらんとちゃうかな。あとは……」
「アレイ、あまり多くを語るときっかけを与えかねないよ」

「……ホンマやね。そんなくらい気をつけなあかん存在になってしまったってことや。光栄に思いや、テイルちゃん。ウチらが危険と判断するんは割と多いけど、ホンマにヤバイと思うことはそうないんやから」

「あの心意、そんなにヤバイ代物なのか……」

どうやらテルヨシが八面断絶にとどめを刺した心意は相当な代物だったような話が聞いてわかるが、これ以上の情報は今後、偶然ではなく意識的に扱えるようになるかもと危惧し口を閉ざしてしまふ。

そんなマイペースなバイスとアルゴンに主導権を握られるのを嫌ったか、ボルテージが上がりまくりのユニコが強引に割り込んで話をインビンシブル奪還へと戻す。

「こいつらの言うことにいちいち耳を傾けんな。今やんのはあたしの取られたもんを取り返すことだろ」

「お、おう。すんません」

「威勢ええなあ、おちびちゃん。4つも強化外装パチられたゆうのに大したもんや。ウチなら、この帽子いっこでもいかれたら速攻で泣き入っつるとこやで」

「……なら、お望み通り、そのウザったい外ハネ頭ごと引っぺがして泣かせてやるよ」

「あっはは、おっかないなあ。でもウチかて女の子やからな、ツルツパゲは勘弁や。それに、久しぶりに戦闘っぽいマネして疲れたしなあ。

あとは若いモンに任せて、高みの見物させて貰うわ。ってなわけで、ミーちゃん、よろしく頼むで。望みどおりに、新しいオモチャも手に入ったことやし」

その威勢にアルゴンは茶々を入れてタイミング外しを怠らなかつたが、こつちもこつちでただ仕掛けても残りのHPゲージが少ないだろう能美をうっかり倒しかねないし、そうなってしまえばバイスとアルゴンを何がなんでも1時間、離脱させないための戦いを強いられる。しまう。

すでに状況がユニコ奪還時と全く異なってしまうているのはテルヨシ以外もわかっているから、唯一残されたインビンシブル奪還の策を成功させるために全員が後ろのチュリを死守しつつ、撤退が濃厚なバイスとアルゴンよりもこれから動くであろう能美に意識を集中する。

その能美は最後のインビンシブルのパーツを奪えずに落胆しているように脱力し沈黙していたのだが、アルゴンに話しかけられてすぐにその口から不気味な笑い声が聞こえてくる。

「ふ……ふ、ふ、ふふふ。……最後の最後で邪魔が入ったのはムカつきましたが……でも、これは凄い……さすがは《王の力》と言うべきでしょうね……。昔、どこかの誰かから奪ったカッターだの触手だのケチくさい羽根なんて、これと比べればゴミですよ。4つ奪っただけで、3人分のキャパシティをこっそり持っていましたからね……」

さすがは略奪者といった愉悦でユニコのインビンシブルの力を自分の力のように喜ぶ能美には不快感しかないが、同時に4月にも抱いた感情がテルヨシの中に芽生える。

「これこそが略奪の快感！ 他人が必死の努力で手に入れて、大事に育ててきた力が、一瞬でボクのものに……ふ、ふふ、この力でもっと、もっと奪ってやりますよ……くくくく、くははは……はははは、あーっはっはっはははははー！」

「……………お前は本当に悲しいやつだな、能美」

ほとんど自分の世界に入って気持ちを昂らせていただろう能美だったが、高笑いをした直後に別に張り上げたわけでもないテルヨシ

の言葉で我に返ったように高笑いをやめて不機嫌そうな視線でテルヨシを見る。

「何ですか先輩。ボクはこの在り方を自分自身で選んでいるんですよ。それを悲しいだのなんだと言われても不快なだけです」

「略奪つてのはな、結局のところ『自分にならないものをねだる子供のわがまま』なんだよ。自分がどうやっても得られなかったものを他人に求めてすがって。略奪の快感なんてのはその付属品でしかない。自分を育てることを放棄した、自分の時間を止めたバーストリンカー」

「ですからボクをその汎称で呼ぶのはやめてくださいよ。それに付属品は酷いですね。ボクのこれは生来のものであって、決して先輩が言ったような理屈が先に来るものではありません」

きつとハルユキ達が聞きたくないだろう能美の高笑いを止める目的でしかなかったものの、絡んできたからには言いたいことは言おうと、パドの背中から降りてよろめきながらも1人で立ち能美と対峙。

そのテルヨシに対してあくまでも平静で話す能美だが、探らずともわかる苛立ちが内側で爆発寸前なのを理解しつつ、おそらくは最後になるだろう能美との会話を続けてやる。

「気付けよ能美。オレが言いたいのとはそんな表面的なことじゃねえよ。略奪つてのは詰まるところ『1人じゃできない』ってことだ。馴れ合いが嫌いだ、仲間なんて反吐が出るなんて言っても、結局はお前以外のバーストリンカーがいなきや何も出来ない。繋がりを否定するお前は、最初から繋がることでしかこの世界に存在意義がないってことを自分で言ってる……」

「黙れ！ 黙れ黙れ黙れ！ もうあなたの言葉は聞きたくない！ ああ！ どうしてあなたの言葉はこう、ひとつひとつがボクをイラつかせるんだ！ 黙ってボクにやられて苦痛に歪む声をあげろよ！」

略奪でしか存在を示せない能美にテルヨシの言葉は認めたくないほどの核心を突いていたか、大多数の人間が見せる拒絶によって会話を終わらせにくる。

それによつていよいよ能美がユニコから奪ったインビンシブルを乱暴に取り出す素振りでインスタメニユーを開いて呼び出そうとす

る。

ブレイン・バーストのコマンドなどが嫌いらしい能美がそうしてボイスコマンドでも呼べるはずのインビンシブルを展開しようとした頃には、テルヨシも足手まといでいられないとその足に力を込めて力強く立ってみせるのだった。

——都田沙絢は《オリジネーター》を《親》に持つ第2世代のバーストリンカーだ。

サアヤの親はブレイン・バースト最初期の段階で全損しすでに加速世界には存在しない。

その全損の事情は今ではほぼあり得ない、最初期だったから起きた悲劇が関係している。

当時、ブレイン・バーストを渡された最初の100人の小学1年生は、手探りの中で互いに対戦を繰り返し、蹴落としてレベル2へと上がり、無制限のコピーインストール権を獲得した。

サアヤの親もその激戦を勝ち抜いてレベル2へと上がった1人で、コピーインストール権を最大限に活用するため、ほとんど手当たり次第に友人や同じ学校の同級生などを巻き込んでインストールを試行していた。

そして同時にそうして出来た《子》の中で有能そうな人材を育てて自らの輪の中へと入れ、生き残れそうもない人材は早々に見捨てて『初期バーストポイントを奪い取る』略奪行為にも及んでいた。

ブレイン・バーストは時に現実の性格をも歪めてしまうとはよく言うが、サアヤの親もそれに当てはまっていただろうことは間違いない。

そうして同級生を巻き込んだインストール騒動は入学してわずかふた月の間にピークを迎え、サアヤはその中でもかなり最後の方のインストールに成功したバーストリンカーとなった。

そのせいも、その時点ですでに親のコミュニティーは形成されてしまっていて、淘汰される速度も恐ろしく、親が赤系で遠隔最強理論みたいなものを勝手に作り上げて、赤系以外のデュエルアバターが出来上がった人はその時点でただの餌になり果てていた。

当然、ガッツリと緑系のサアヤもその淘汰の対象となり、インストールした翌日にレクチャーなしでいきなり直結による無慈悲な対戦を強いられた。

親はこの時すでにレベル3へと上がるだけのポイントを奪って、新人の育成とかで子にポイントを分け与えていたので、サアヤは訳もわからないまま3度、同じ子に完敗を喫してポイントを奪われた。

——何なのこのゲーム。おかしいんじゃないの……

みんなで作って楽しめるゲームだと言われてインストールしてみたサアヤにとって、初めて相対した相手は何の遠慮もなしに自分を痛めつけてくる悪魔以外の何物でもなく、同じような思いをして全損していく子達の悲痛の声は『ここは地獄だ』と叫んでいるようにさえ聞こえてきた。

たった10回の敗北でこの世界からは消えることが出来る。地獄から抜けられる。

敗北を重ねていく中でサアヤは、ギャラリーの「あと何回だ？」「4回。次は俺な」といったこの地獄を楽しむ声を聞いた時に、悔しさと共に激しい怒りが湧いてきた。

——何でアンタ達はこれを見てヘラヘラしてられるんだ。

サアヤには8つも歳の離れた兄がいて、その兄の影響はかなり男勝りな性格が形成されてしまい、小学1年生の時点で男子に物怖じしない姉御肌全開の活発少女だった。

それを更正させ少しでもおしとやかな女の子にしようと母親が強引に取り組んだ日本舞踊の稽古は、小学校に上がる2ヶ月前から嫌々で続けていた。

それらのストレスとデュエルアバターが持つ巨大扇子型強化外装《ブレード・ファン》がサアヤの魂に火を点けて、このまま何もせずに敗北するくらいなら、向かってくるやつらを全員ぶっ飛ばしてから消えてやる。

そんな覚悟と共に7度目の対戦で反撃ひとつしてこなかったサアヤが突如として牙を向いて強襲してきたから、相手も作業と思っていた油断から速攻で潰されてサアヤが勝利。

ここまでで加速コマンドも対戦の挑み方も理解したサアヤは、そこから怒涛の反撃で直列で直結していた相手を全損に追い込んで、勢いそのままに本丸となる親に直結対戦を仕掛けていった。

ブレード・ファンの防御性能は当時からかなり優秀で、レベル2の親の攻撃でも簡単には壊れず、ブレード・ファンを盾にした急接近——直結対戦ゆえに開始位置が近い——からの防御の緑の硬さを生かした肉弾戦は、遠隔型の親からすれば悪魔的なコンボで、全損の直前にはこれまで全損させてきた子達と同じようにプライドも己のしてきた過ちも忘れて泣きじやくっていたが、そんな声はサアヤの耳に届きはしなかった。

親とその仲間グループをまとめて全損させたサアヤは、わずかに残った淘汰されていた子達をどうこうすることはなく完全に放置——どうせトラウマでアンインストールすると思つてもいた——して放課後には脱力気味に帰路についていた。

帰つたらブレイン・バーストをアンインストールして元の日常に戻ろう——全損した子達が軒並みブレイン・バーストのことを忘れていたのも確認した——と考えていたサアヤは、マッチングリストの仕組みをちゃんと理解していなく、ニューロリンカーが学校を出てからグローバル接続されて対戦待ち受け状態になつていることに気づいていなかった。

だからそのせいで下校途中に他のバーストリンカーからの乱入があり、まだ自分を痛めつけてくる輩がいるのかと反射的に戦闘モードになつてガイドカーソルが示す方を警戒していた。

そしてその方向から現れたのは、なんか安っぽい段ボールで各パーツを人型に繋ぎ合わせたかのような濃い紫色の装甲色のM型デュエルアバターだった。

「はじめましてだね！ 僕は《レイズン・モビル》！ 君のアバターは……エピ……エピナー……グスト？」

「……そんなの知らない。英語わかんないし。それよりアンタ、なに呑気に自己紹介とかしてんのよ」

「ええっ!? 初対面の人に挨拶するのは普通なのでは!？」

「……このゲームはそんな必要ないでしょ。アンタだってポイント欲しさに挑んできたわけで、私はカモつてことですよ」

なんだか無駄に明るい奴だなと、当時のサアヤは思ったものだが、

学校であんなことがあった直後の対戦だっただけにサアヤの心は荒んでいて、この時は純粹に対戦を楽しもうとしていたはずのモビールに悪いことをしたと今は反省している。

そんなサアヤだったからか、簡単に狩られてたまるかと鬼気迫る感じだったのを敏感に察したモビールは、当時すでにレベル2だったことも加味しても相当に腹の立つ作戦でサアヤを追い詰めてきた。

今にも飛びかかってきそうなサアヤの雰囲気になしただけ考える素振りをしてから、その手にハンドガンタイプの強化外装《フォックス・ファイア》を取り出したモビールは、反射的に前に出たサアヤにブレード・ファンを広げさせて、唯一本体に当たるであろう持ち手の部分にフォックス・ファイアを撃ち込んでくる。

その炎には謎の粘着性があつて振り払つてもなかなか消えてくれない嫌らしさがあり、その対応に足が止まったサアヤだが、炎はものの数秒で勝手に鎮火しHPゲージを微減させた程度に留まった。

「なっはっはっ!! これで僕の勝ち確定だあ!!」

攻撃としては手に焦げ目がついた程度のものだが、それだけでもモビールにとっては勝利を確信するだけのものだったようで、足を止めていたサアヤはふざけるなど再びモビールに接近しようとしたものの、その時にはモビールの両足の裏にローラースケートのような強化外装《ドンキー・ライダー》が装備されていて、謎の敬礼をしてからそのドンキー・ライダーによる機動力で逃走を開始してしまう。

速度的にはサアヤが全力で走っても追いつけないほどの加速を得たモビールは、みるみるうちに遠くへと行つてしまい、ガイドカーソルはあつても速度差でどうすることもできず、残りの時間をひたすらモビールを追いかけて回すことしかできずにタイムアップで敗北したサアヤは、この時ばかりは全損させようとしてきた親とその仲間以上に別のベクトルでモビールに対して憤慨し、すぐにマツチングリストを確認するも、すでに名前はなくその日は終了。

あのクソ野郎にリベンジするまではアンインストールはしないと心に決めたサアヤは、翌日に対モビル戦の作戦を練るために登校中、まずは自分のアバターについて色々調べていき、そこでようや

くアビリティや必殺技の存在と使い方を知ることになった。

逆に言えばそれなしで親達を全損させたのは完全にパワープレイ極まりなかったが、これが後に《猪突猛進》だのという不名誉な2つ名をもたらず片鱗を見せていたのかもしれない。

そして放課後にリベンジ戦へと挑んだサアヤが同じ戦法で仕掛けてきたモビールに対して《ブラスト・ゲイル》で壁に激突させて昏倒を狙い、その隙にボッコボコにすることで勝利。

鮮やかとは見る者は思わないちよつとしたバイオレンスな様相でのリベンジだったものの、それでスッキリしたサアヤは心置きなくアインストールできると思っていたが、その対戦のギャラリーに世にも酔狂な輩がいたようで、豪快な戦い方をしたサアヤを笑いながら称賛。

「いやあ、清々しいほどにフルボッコだったなあ。モビールも同じ戦法が通用すると思うのが間違いだわな」

「……誰よアンタ」

「俺か？俺は《レッド・ライダー》ってんだ。いいだろ、名前そのままの赤だぜ赤！」

「私、赤色のデュエルアバターが大嫌いなんだけど」

「おいおい、初対面のやつに色だけで嫌いとかずいぶんだな。まあでもないや。お前のその豪快なところが気に入ったんだ。これから観戦者登録させてもらうからよろしくな。えっと、エピ……」

「……………《エピナル・ガスト》。そういう読み方みたい」

「おう、じゃあガスト。また面白い対戦を見せてくれよな」

最初は何を言ってるんだこいつは。ときえ思ったサアヤは、この対戦を面白いなどと評価されて困惑。

サアヤはただ自分に何もさせずに勝ちを取ったモビールにムカついてリベンジしたに過ぎなく、そこには面白さなど求めてはいなかった。

だがライダーに去り際でそう言われて、その夜に物思いに更けたサアヤは、翌日になってもアインストールはせず結局はのらりくらりとブレイン・バーストを続けていった。

おそらくサアヤにとってモバイルとの対戦とライダーとの出会いは、当時のブレイン・バーストを続ける1つのターニングポイントになっただけのことでは間違いがない。

それからのサアヤは徐々に対戦の楽しさを覚えていったし、ライダーに誘われるままにライバル関係ではあるも時にはタッグなどを組んで、レベル4になってすぐにレギオン《プロミネンス》を結成した。

その後にも色々あったが、2047年6月末となった現在においてサアヤが思うことは、辛いこと以上にそれら1つ1つの『思い出』はかけがえのないものとなっていたこと。そして何よりも……

——皇照良というどうしようもない彼^{バガ}に出会わせてくれた。

その思い出と出会いをくれたブレイン・バースト。加速世界を加速研究会などというくだらない企てをする組織に壊されていくのは何よりも許しがたいと考えたサアヤが『大切な加速世界を守るため』の心意を伝えるようになるのは当然と言えたのかもしれない。

そして今、その加速研究会が生み出した巨悪の根源、ISSキット本体がダメージを負いながらも攻勢に出て《ダーク・シヨット》をフリーコへと向けて放とうと……いや、そのさらに後方でイマジネーションを練り上げるために舞い続ける謡を狙っているのがわかる。

それはフリーコにもすぐにわかったか、回避に動くこともギリギリで出来たはずの行動をキャンセルして、後ろの謡を守るように両手を左右に広げる。

「無茶だ、レイカー！」

単純に考えてもキット本体のダーク・シヨットは直撃など耐えることすら不可能な威力を持っていることはこれまでの戦闘で十分にわかるし、フリーコもそれは理解しているはず。

それでも謡を守るために立ち塞がる選択をしたフリーコに黒雪姫も叫び駆けつけようとするが、サアヤが力一杯に飛ばしたせいでひと息で駆けつけられる距離ではなく、無情な虚無属性の光はキット本体の瞳孔から発射されてしまった。

「——今できなくてどうするの、都田沙絢！」

それを一番近くで見ているサアヤが何もせずに棒立ちなど情けないにもほどがある。

そうして自分を奮い立たせてダーク・ショットを受けたフーコへと駆け、防御ではなく虚無属性の心意に正の心意をぶつけて中和しているようなフーコの必死な様子を確認。

過剰光を生み出して纏っているはずの両手は中和のスピードに追いつかず視覚化する前に消えてしまってる感じだが、それほどにギリギリな状態ならフーコも長くは持たないだろう。

フーコが受け止めるダーク・ショットの余波は周囲に拡散して床や天井の崩壊を助長していて、いつ崩れてもおかしくないそれを食い止める意味でもサアヤはブレード・ファンの展開剣に緑色の過剰光を纏ってフーコの隣につく。

「半分くらいは削ってやるから、ちゃんと守りきるわよ!!」

「——ええ。必ず!」

そこからブレード・ファンの両端に持ち替えて、18本の展開剣を後方から一気に前面へと展開し、

「《ブラスト・ゲイル》!!」

横倒しのミキサーの刃のように高速回転を始めた展開剣がダーク・ショットの虚無エネルギーを削り出す。

しかしあくまで必殺技であり、そこに過剰光を纏わせているだけの防御技はまだ大部分のエネルギーを削るには至らず、むしろ展開剣ごとサアヤとフーコを押し込みに来る。

だからこそサアヤはここからさらにイメージネーションを練り上げて、ずっと名前もなかった心意に明確なイメージを作り出す。

ブラスト・ゲイルの生み出す小さな竜巻。これをより強固にした、

攻防一体の心意。

「——《ガーディアン・ストーム守護風塵》!!」

そのサアヤの強いイメージネーションによって高速回転する展開剣はより強烈な緑色の過剰光を纏って勢いを増し、削り取った虚無属性のエネルギーは床や天井に突き刺さることなく霧のように霧散し無力化。

しかしやはり規格外の心意のエネルギーの全てを削ることはできずに半分以上は突破してフーコとサアヤに殺到するが、それをフーコが中和することでダメージはそこまで酷いものでもないが、無視できるほどでもない。

「頑張れレイカー！ ガスト！」

「加勢するの！」

キット本体のエネルギーが尽きるのが先か、こっちのHPゲージが吹き飛ぶのが先かの勝負になったところで、駆けつけていた黒雪姫とあきらまも加わって中和するフーコの心意に同調するように手をかざして虚無属性のエネルギーを押し退けてくれ、HPゲージの減少も微々たるものになってくれる。

その4人分の振り絞られた心意がキット本体の心意を遠ざけ、サアヤのブラスト・ゲイルが終わり扇子に戻ろうとして戻れず粉々に砕け散ったところで、キット本体からのダーク・シヨットも終わりを迎えて、膝から崩れ落ちたサアヤ達。

だがこれでいい。これで約束の2分は稼ぐことが出来た。

そんな思いと共に後方の謡にあとは任せたとばかりに脱力すれば、その期待に応えるように準備を整えた謡が言葉を紡ぐ。

「《あわれくるしき瞋恚の炎》……」

見れば謡を包み込む紅蓮の過剰光は炎となって天井にまで立ち上ぼり、その中で舞う謡の神々しさは状況を忘れさせるまでに美しい。

「……《土中の塵とぞなりにける》」

その舞の中で持っていた扇子を掲げて歌が響いた直後、ごうっ！ というとてもない轟音が起こり、その音の発生源はISSキット本体がある場所辺り。

反射的にそちらを見れば、その下の大理石の床が直径10mほどの範囲を真っ赤に染めあげ、キット本体を範囲の中心に捉えていた。

その光は謡が練り上げたイメージーションが床を構成する大理石をオーバードライドして溶かし超高温に熱してマグマと化した溶岩沼。

溶岩沼はキット本体の出す虚無のエネルギーすらも焼き尽くして消滅させ、座標を固定されているのだからキット本体をもやがては溶

かし始める。

その謡の心意には如何なキット本体も苦しみを表現するように眼がしきりに開閉されて、苦し紛れの《ダーク・ブロー》も溶岩沼に撃ち込まれたが、変化など熱エネルギーがわずかに減る程度の微々たるもので、容赦なく焼き続ける。

「すつご……でもあれは第4象限の……」

「ええ、メイデンはそれも覚悟して使っているはずよ」

しかし謡がいま使っている心意技は、先の《ヘルメス・コード縦走レース》において《ラスト・ジグソー》が使った心意技と同様の第4象限《範囲を対象とする破壊の心意》に分類されるもの。

確かに威力は高いものの、その分で心意の暗黒面に引きずられる力も増すため、フーコなどからすれば使ってほしくはない力。

それでも使うと決めた謡の覚悟を汲んでやめると言わないフーコの気持ちは痛いくらいに伝わってくるが、自分達ではもうあのキット本体に攻撃するだけの力がないこともあって止めるわけにはいかない。

だから必ずキット本体の破壊を成し遂げてくれと願いを込めて謡を見守るサアヤ達は、ついにダーク・ブローを放つための触手も残っていた装甲も焼け落として、眼球のみになったキット本体にもうひと息と思いつながら、直径2 m半ほどになったそれが放つ不気味な存在感に戦慄。

もはやその眼球も溶岩沼に半ばまで沈み込んでしまっているのに衰え知らずの敵意に気持ち悪さを感じた瞬間。

突如としてキット本体の瞳孔が漆黒のオーラを纏って集束し、最後の足掻きとでもいうようにぐったりするサアヤ達を照準。

「ちよつと……マズ……」

「主らー！ 衝撃に備えい!!」

もうしばらくはまともに動けないほどのイメージネーションを振り絞ったばかりのサアヤ達はダーク・ショットが来るとはわかっていても体が動いてくれなくて焦る。

だがそこに響いたユリの叫びに別の意味で驚いた一同は、言う通り

に衝撃に備えて反射的に全員で掴み合つて固まると、ダーク・シヨットを放とうとしたキット本体が……いや、その下の溶岩沼ごと沸き上がってきた圧倒的な破壊の衝撃によつて吹き飛び、ダーク・シヨットは照準が上向きになつてサアヤ達の頭上の天井を撃ち抜いていった。その破壊によつて落ちてきた破片がゴスゴスと体に当たる中で何が起きたのかを考察したサアヤは、キット本体のあつた場所。ポータルの下にぽっかりと開いた大穴が垂直ではなくさらに奥の天井を貫通していることに気づく。

その軌道からして放たれたエネルギーはおそらくサアヤ達のいる場所より『後方の下』から放たれたことがわかり、そんな位置から攻撃してくるのは一人しかない。

「あのアホ娘はまつたく、良い仕事するじゃないのよ……」

「何とかとハサミは使いようとはよく言ったものだな……」

「それはもうほとんどバカつて言つてるわね、ロータス」

「抜き撃ちはバカにはできないの」

崩落が止まつてから、ダーク・シヨットを止めてくれた《ボツシュ・ルーレット》に各々が感謝なのかよくわからない言葉を贈りつつ、今の攻撃がとどめとなつたのか、座標固定されていたはずのキット本体もポータルから離れて後方に転がっていたが、その瞳孔は未だに光を放つたまま、明確にどこか。方角にして南側を向いているように見えた。

そして瞳孔に集束していた光は何の発射音もなく瞳孔から放たれて向いていた方向へと飛び出し、しかし行き止まりとなる壁を透過してしまう。

攻撃目的ではない何かとすぐに理解しつつ、サアヤ達はそれが何であつたかも同時に理解する。

——あれは、キット本体がこれまで蓄積していた膨大な悪意そのものだ。

原作16巻辺り

Acceleration Second 56—A

——ゴゴン！

凄まじい轟音と共に中庭全体を揺らす微震が発生してすぐ。

《ウルフラム・サーベラス》の体を依代に出現した能美の周囲に紫色の装甲板に覆われた武装オブジェクト群が実体化する。

細長いコクピットブロックが後ろから能美を包み込んで姿が見えなくなり、そのコクピットブロックの左右に長大なレーザー砲を備えた腕が接続される。

背面には4つの大型バーニアを備えるスラスタブロックが貼り付き、下からたくましい2本の足が飛び出てきた。

強化外装はその持ち主によって同じものでも姿形が微妙に変化するのによくあることと知ってはいたテルヨシだが、能美が装備した《インビンシブル》はユニコが装備した時とは全く異なる人型をしていて、唯一あるべき頭のパーツがない様は不気味さを増している。

もちろんその合体が完了するのを悠長に待っていたわけではなかったが、ハルユキとユニコが遠距離攻撃を仕掛けるのを後ろの《ブラック・バイス》と《アルゴン・アレイ》が牽制して阻止していた。

そうして悠々と合体を完了させたインビンシブルは校舎の高さに迫るほど大きい、その分で細身なフォルムとポリウム感——全てのパーツがあるわけでもないからか——だ。

しかし能美が遠隔の赤と近接の青の中間色である紫だからか、主砲のレーザー砲はスケールダウンしつつ4本の鉤爪を備えた凶悪な両手と、2本の爪を飛び出させた両足に、肩と膝にも巨大なスパイクが装着されていた。

『どうだ……これが、力！　これが、支配するということだッ!!　略奪による支配!!　それこそが、唯一、絶対的な力なんだッ!!　誰がなんと言おうとなッ!!　はははは……、ははははははははは!!』

すでにコクピットの中で姿が見えない能美は、着装を終えたインビ
ンシブルの力に酔いしれて、直前のテルヨシの言葉を振り払うかのよ
うに高らかな笑い声をスピーカー越しに響かせる。

その笑い声を聞いても能美という存在がただ悲しいと思うテルヨ
シは、人から奪うことでしか自己を主張できない歪んだ在り方と、ギ
ブ&テイクにも思えるが実際には加速研究会にただ利用されている
ことにさえ気づけていない哀れな現実から、せめて解放してやろうと
心に決める。

「もうちよつと回復するのに時間がかかりそうだから、オレとタクム
君でチュチュを守ろうか」

「じゃあ僕とニコ、パドさんであいつから隙を作り出します。ニコ、パ
ドさん。インビンシブルと戦うことになるけど、大丈夫だよね」

「構わねえ。思いつきりやってくれ」
「K」

そのためには能美が受け持っていた役割であるインビンシブルを
強奪するという行為自体を『なかつたことにする』のが最善なのはテ
ルヨシ達全員での共通認識。

それを可能にするのがチュリのアバターが持つ必殺技《シトロン・
コール》であることも先の能美との決戦で理解があるため、チュリが
如何にインビンシブルに近づきシトロン・コールを使えるかが勝負の
鍵となる。

だからチュリを生かしながら能美に隙を作り出し、インビンシブル
のパーツを取り戻すためにためらいなどがなくと小声でユニコと
パドに確認をするハルユキに、ユニコとパドも力強く返事をして目の
前の首なし巨人と向き合う。

『作戦会議は終わりましたかあ、《勇者とその手下》の人たちいい。ポ
クをがっかりさせないで下さいよ……最低5分は楽しませて貰わな
いとねえ!』

不意打ちで呆気なく倒しても面白くないとでも言うようにテルヨ
シ達の作戦会議が終わるのを待っていた能美が、そろそろ始めてもい
いかといった意味で左腕の主砲をテルヨシ達へと向けてくる。

スケールダウンしたと言ってもその主砲の直径は15cmはあるので、まともに当たれば体に大穴が開くか即死する威力は十分に秘めている。

さらにその能美の後方には物静かに見守るバイスとアルゴンが控えているが、この2人が攻撃してこないことなどあり得ないのでそれらにも警戒をしなければ……

主に能美に意識を集中しなきゃならないハルユキ、ユニコ、パドをサポートする立場にあるテルヨシは、2人が動くのを牽制する役目も密かに受け持つ覚悟をしたが、いざ戦闘開始となる直前。

突如として近くのユニコやバイス、アルゴンが何かの気配を察知したのか、その顔を北の空へと向けてしまう。

まだ感覚的な機能が鈍っているテルヨシもそれに倣って北の空を見れば《黄昏》ステージの夕空の中に一筋の赤いラインが音もなく伸びてくるのが見える。

速度的には大したこともなく、攻撃力というのもおそらくは皆無とわかるそれは、そのままの軌道ならこの学校の上空を素通りするもので警戒するほどのものではない。

しかしテルヨシは……いや、この場にいるハルユキやユニコ達すらも、その赤い光に対して凄まじいまでの怖気を覚えて、あまりに冷たい恐怖の感覚にアバターを動かす気力が一時的に麻痺してしまう。

ここで能美に攻撃されたら成す術なくやられると確信し必死に体を動かさそうとしたのだが、その能美すらも赤い光に注目して主砲も発射体勢で止まっていた。

そして赤い光はこの学校の真上で急激な挙動の変化を見せて真下へと曲がり、この中庭めがけて降ってくる。

その光が放つ音はさらに不気味で、ひいひいん、ぎえああああ、という何かの悲鳴にさえ聞こえ、始めからそこが到達地点だったかのようには能美が乗り込むインピンシブルのコクピットブロックにうねりながら命中。

爆発などの物理的な現象は起こらなかったが、装甲表面にへばりついた光はスルスルと隙間から内部へと入り込み、直後。

『う……うわあつ！ やめろつ……！ 聞いてないぞ、こんな……バイス！ アルゴン！ さっさとこれを止める——ッ!!』

能美の悲鳴のような絶叫がこだまし、インビンシブルの両腕がもがくように滅茶苦茶に振り回され、両足が大理石のタイルを踏み荒らす。

その様は外からは把握できないが、内部へと入り込んだ光はどうやら能美におぞましい現象をもたらしているようで、その悲鳴だけで想像を絶する何かが起こっていると漠然とわかる。

「嘘やろツ……早すぎるやろ、幾らなんでも！ まさか……連中、アレをやりよつたんか……さすがにこれは、会長はんも想定外やろ………」

赤い光の正体は判然としないが、最初の反応からしてそれには理解があつたアルゴンは、能美に起こっている現象を止める様子もなく考察に回りつつで言葉を漏らす。

その口振りからして加速研究会側でもこの現象はイレギュラーなのは間違いなく、足掻きながら校舎を殴打し始めた能美が起こす余波の震動によつて硬直から回復することができた。

早すぎる、ということはこの現象を加速研究会側として『いずれは』起こす予定だったことを意味し、アルゴンが指したアレというのはおそらく、別行動の黒雪姫達が破壊を目指したはずのISSキット本体。

ならばあの赤い光はISSキット本体という依代を失った、数多のキットユーザーから集めた心意のエネルギーということになる。

つまり黒雪姫達が無事にキット本体の破壊に成功したことにはなるが、加速研究会が欲していたのがこの赤い光。心意のエネルギーであることは間違いなので、まだ解決とはならないか。

それらを高速で思考している間にチャンスだと直感したユニコが「よくわかんねーけどぶちかます！」とハルユキと一緒に遠距離心意技で足掻く巨人に攻撃を仕掛け、左肩辺りに全弾命中した攻撃によつて巨体がぐらつき、ジョイント部が破壊されたか左腕がスパークを迸らせながら地面へと落ちた。

それを受けて足掻いていた能美が動きを止めて、こうなった原因が加速研究会にあるということにはわかったか、その視線をバイスとアルゴンへと向けて「騙したな」と吠える。

それに対しての2人の返答はあまりにも薄情なもので、なつてしまつたものは仕方ないと、計画の若干の狂いは許せと宥める。

そんな残酷な言葉に自己中心的な思考の能美は苦しみながらも残つた右腕の主砲をギチギチと見捨てる風のバイスとアルゴンへと向けて助けろと迫るが、それさえもどこ吹く風な感じで肩をすくめるだけで無理だとバツサリ。

こちら以上に今の状況に理解があるのは間違いない2人は、すでに撤退の雰囲気醸し出して、それがどんな意図を持つのかはわからないがテルヨシ達の陣営に顔を向けたバイスが言葉をかけてくる。

「最後に、諸君らにも1つ忠告しておこう。強化外装を取り戻そうなどとは思わず、今すぐ離脱することをお勧めするよ。融合が早すぎたとはいえ、アレはもう君たちの手に負える存在ではない」

こつちの意図をわかつた上で離脱を勧めるバイスは、逃げる気満々で今回の達成度が4割程度だのとボヤクが、その4割を2割くらいにまだしてやれる可能性が残されているので、向こうが減ってくれる分にはありがたいと喧嘩腰のユニコの前にサツと腕を割り込ませて止める。

「悪いがその忠告の中に含まれてる『強化外装を取り返されたくない』ってやつは砕かせてもらうぞ」

「ふむ、聞こえ方によつてはそうとも取れてしまうか。私としては純粹にそう思っただけなのだがね」

「そうやでテイルちゃん。ウチらにも人の血。良心つてもんがまだあるつちゆうこつちや」

「ケツ。バーストリンカーを道具としか思つてねえようなやつらがよく言うぜ」

撤退するなら好きにしろといった意味合いで返したテルヨシにも動じなかつた2人は、それが不可能だとも思っているのか意思は変えずに戦意を引つ込めて、いよいよ能美も我慢の限界といった具合に

バイスとアルゴンを撃つ段階に踏み込む。

しかしその動向に注意は払っていたバイスがいち早くその体を崩して2枚の板へと変化すると、呑気に手を振るアルゴンをその板で挟み込んで校舎が作り出す影の中へと沈降しあつという間に姿を消してしまう。

それとほぼ同時に放たれたインビンシブルの右腕の主砲が2人がいた地点に突き刺さったが、収まった余波のあとには粉々にされた大理石のタイルと抉られた地面の破壊の跡しか残っていなかった。

影の中に入られてしまえばもうバイス達は追えないので、春先の全損する直前のようにとにかく何でもいからすがろうとする能美が絶叫する様子を静かに見たテルヨシは、能美にではなく逃げたバイス達に少しでも意識を持っていつて思考するも、すぐに今はいいかと切り替える。

徐々に能美という存在が薄れていくような感覚が強くなる中で、それに反比例するようにインビンシブルの装甲板からは黒いモヤのようなオーラが漏れ出てきて、それにざわつく感覚に抗ってハルユキがユニコの掛け声と共に再び巨人へと心意攻撃を放つ。

だが2人の心意攻撃は巨人の背中に直撃したにも関わらず全くのノーダメージ。

観察した限りでは漏れ出ているオーラが2人の心意攻撃と装甲の間に集中して割り込んで阻んだようで、結果としてそのオーラが尋常ではない心意のエネルギーを含んでいることを証明していた。

しかも攻撃されたことにさえ気づいていない様子の能美が、とうとう呻き声も掠れてしまい、それが消え行く最中で突如として『別の何か』に変質した気配と共に不気味な悲鳴が発せられた。

『きえて……キエテ……えて、て、で、で、で、デデデ、デイツ、デイツ、デイル、デイル、デイルデイルデイル、デイルデイルデイルデイルデイ

』

人の悲鳴とは一線を画すほどの不気味さを持った悲鳴は、しかし絶叫と呼べるものになる前にぜんまいのネジが切れたように途切れてしまい、巨人の動きも零化したようにピクリとも動かなくなる。

いや、動いてはいないが、今や全身に広がったオーラがジワジワと左肩のジョイント部に集中していき、そこから血のように尾を引きながら地面へと垂れ落ち、オーラが意思を持つように地面を這ってうごめき、目指す先にあった左腕にまとわりつく、それを引き上げるようにしてオーラが集束して左腕が肩のジョイント部に再接続されてしまう。

強化外装のリフレッシュは持ち主のフィールドからの離脱を経なければできないが、そんな常識すらも覆ってきた目の前の巨人は、首なしのほずその姿で明確にテルヨシ達を見ている気配を出しながら低く唸る。

そして左腕を戻したオーラは再び全身へと広がってその密度を上げると、今度はインビンシブルの装甲をより禍々しく、凶悪で鋭利なフォルムへと変化させ、最後にはずつと違和感を残していた頭があるべき部分に半球形の頭が出現。

その頭の正面はすぐにまぶたのように開いてその奥から血のような虹彩の眼球が現れてテルヨシ達を射抜く。

『ディールル……ルルロロオオオオ——ッ!!』

大鎌のような鉤爪に変化した両手を高々と振り上げた巨人は、意思というよりも闘争本能のようなものを全面に放出させるように咆哮。

ビリビリと刺すようなプレッシャーを受けながら目の前の巨人に抱いたテルヨシの結論は、最も表現するに相応しい名前をハルユキが呼称する。

「……災禍の鎧……マークII………」

アルゴンの早すぎるの発言からもそういう認識で間違いはないと思つたテルヨシは、咆哮を終えて両手を下ろし再び沈黙したマークIIがまだ誕生して間もないことを考え、同時に撤退していったバイスとアルゴンを頭の片隅におきつつハルユキ達に話しかける。

「バイス達に啖呵を切っておいて、ここで撤退はないわな、ニコたん」「つたりめーだろ。ここまで来たら行くっきやねーよ。いいぜ、今日のシメにあのデカブツをぶっ飛ばして、でっけー花火打ち上げようぜ」

「K」

倒す対象が能美からマークⅡになってしまったが、その目的自体が変わったわけではないので、ユニコもパドも交戦する意思は変えずに気合いを入れ、その2人が戦うならとハルユキ、タクム、チユリも気合いを入れる。

「みんなであいつと戦って勝って、それでインビンシブルを取り戻しましょう！」

「だね。あれが災禍の鎧と似たものなら、時間が経つほどに強くなるのかもしれないし、戦うなら今だ」

「よおーし！ そうと決まったらガツーンといきますか！」

「よし、そのチユチュの気合いはオレが預かってぶつけてくるから、チユチュはチユチュにしかできない役目に集中してね」

「……先輩、あたしって基本的にサアヤ姉さんタイプなのに、こんなばっかでいい加減フラストレーションが……」

「んじゃ帰ったらオレのクラスのケーキを奢ってあげようではないか」

「もちろんあたしとパドとユリさんの分もだよな？」

「……ごとばかりにたからなくてくださいますかね……」

行動開始前としては緊張感に欠けるやり取りをしてしまいしたが、マークⅡを前にして1度はガチガチに硬直してしまった体をほぐすには丁度良いものとなったか、テルヨシの困った声色に小さく笑ってから一同が集中力を上げてマークⅡを睨む。

その闘志がマークⅡにも伝わったのか、出現した頭の単眼をぎよろりとテルヨシ達にフォーカスし、その眼に続く形で体も向きを変えて正面を向けてくる。

マークⅡが内包するエネルギーは底知れないほどに強大なのは間違いないが、この破壊不可の校舎に囲まれた中庭の広さに対してマークⅡの大きさは少々窮屈なことも事実で、やりようによっては校舎内からほぼ一方的に攻撃することも可能かもしれない。

実にズル賢い戦法だとは思いますが、進んで危険を冒していい場面でもないのだから抜け道的な攻略は考えてもバチは当たらない。

ハルユキもインビンシブル自体が遠隔型の強化外装なら足元は弱いはずと分析し、まずはチユリ以外がそこに飛び込んでみようと意見を出し、ユニコ達も了承。チユリも被弾しないために一旦校舎内へと退避することを決める。

それらの初動を決定したところで、いよいよマークIIもその両手の主砲をテルヨシ達へと向けて攻撃の意思を見せ、それが放たれる直前に足元へと全力疾走し回避するタイミングを図った。

が、チャージを開始した主砲がおぞましいほどのエネルギーを蓄えていくのと同時に、それに比例して周囲の空間が歪んでいくのが目に見える。

明らかに想像を絶する威力の攻撃が来る。

それはマークIIの足元へと飛び込むことで回避できるのか。

——否。

本能が無理だと警告するようにその場に、中庭に留まることを拒んできて、その本能が正しいものだと思断したテルヨシは、同様の本能が働いたらしいハルユキがみんなを抱き寄せようと声かけしたところへあえて行かずにユニコに頼み事をする。

「ニコたん、オレを校舎の屋上に打ち上げて！」

「一人で大丈夫なんだな！ ならブツ飛べ！」

そうした判断をしたのは、アビリティによる翼と一緒に見える4枚の光翼があるにしても、この人数を同時に飛んで運ぶのは不可能だと思ったからで、それならば瞬間的にでも速度を出せるテルヨシが自力で動いた方が負担を減らせると考えてた。

その意味を即座に汲み取ってくれたユニコが小ジャンプしたテルヨシの足裏に添えるようにして深紅の過剰光を纏った拳で押し出して校舎の南側の屋上に着地。

その時点でもうマークIIの主砲は発射される寸前で、ハルユキも残った全員を抱き込んで急いでその場から飛び立とうと翼を震わせる。

「《インビジブル・ステップ》」

その様子を呑気に見ている余裕もなかったので、主砲が火を噴く前

に両足の爪先をトントン、トントン、と床にタッチして予備動作を終えてから必殺技発声。

心意は未だ使える気配すらなかったが、システムアシストで動ける必殺技は問題ないとわかつていたテルヨシは、そこから時速360kmの3mショートジャンプを5秒間、可能な限りで連続使用してマークIIから離れるように全力ジャンプ。

ほぼほぼ一直線に南へと進路を取っていたテルヨシだったが、その最中にマークIIの主砲が中庭に着弾し大規模な破壊が巻き起こったようだが、後ろすら見る余裕がないほどの破壊の余波を背中に感じてかつてない恐怖がその身を襲った。

「ぐっ……っ……っ」と

気づけば5秒という必殺技発動時間を過ぎてショートジャンプが不発しバランスを崩して地面に倒れかけるが《テイル・ウィップ》を支えになんとか踏み留まることができた。

マークIIの主砲の破壊からはなんとか被害を受けずに回避はできて安堵の息を吐いたテルヨシだったが、同時に来た道を振り向いて絶句。

距離的には約200mは離れたはずだが、辿ったはずの道の奥が隕石でも落ちてきたかのように何物も存在しない大きな穴を開けていた。

その中心部は間違いなくマークIIが主砲を撃った中庭のはずだが、その中庭を取り囲んでいたプレイヤーホームで破壊不可のはずの校舎すらも跡形もなく消失している。

そしてそうとわからせるようにクレーターの中心にはその破壊をもたらしたマークIIが自らの攻撃でもダメージを受けた様子もなく佇んでいる姿がハッキリと見えた。

「あれを倒すってか。ヤべえな……」

まさに規格外と呼べるほどのマークIIの力に思わず弱音が出かけたものの、それで「やっぱ無理」と言える状況でもないことを認識して言葉を飲み込み、この破壊にハルユキ達が巻き込まれていないことを上空に浮かぶ姿から確認したテルヨシは、当たればそれで終わりの

攻撃力を有するマークIIを倒すために来た道を走って戻り始めた。

——あれは止めるべきだったのかもしれない。

ISSキット本体との壮絶な心意技による攻防を経て、総力でようやく撃破の1歩手前まで追い詰めた時。

《ボツシュ・ルーレット》の《レイズ》の強化で絶大な威力となった《エリーニユス》の一撃を受けたキット本体が眼球部分だけを残してポータル付近に転がったタイミングで、その本体から南の方向へ攻撃性のない赤い光が放出され、それがキット本体がこれまで溜め込んできた負の心意のエネルギーであることが本能的にわかったサアヤ達は、しかしここまでの攻防の消耗で全く動くことができなく見送ることしかできない。

目視して動けたと思われるマリアとユリもいたが、光が壁さえもすり抜けて飛んでいった様を見て攻撃してもすり抜けてしまうと判断したようだった。

この現象はキット本体が考えてやったことなのか、あらかじめこうなった場合——キット本体が消滅の危機に瀕した場合——にそうするよう設定されていたかはわからない。

しかしどこかへと飛んでいった心意のエネルギー。あれこそが加速研究会が欲していた力であることは間違いなく、また新たな災厄が加速世界に生み出されようとしている可能性が高い。

加速研究会にはいつも後手に回らされているために、せめて企みを阻止することくらいはしてやりたいのだが、それすらままならない現実には歯噛みしつつ、今は残されたキット本体を完全に破壊してしまわなければと転がるキット本体を見る。

が、今やルーレットの破壊の攻撃によってポータルが存在する周囲の床は抜け落ちて、それによって謡が作り出していた溶岩沼も消滅。

さらに後ろではキット本体に致命傷を与えてくれた謡が力を使い果たして倒れてしまったようで、それに振り向くとマリアとユリが支えて抱えているのが見えた。

「お疲れ様じゃな、メイデン」

「ゆっくり休んで、メイちゃん」

その様子に少し安堵したサアヤ達は、ようやく動けるようになった体を起こして、フーコの車椅子を拾ってそれにフーコを乗せつつ、近寄ってきたユリとマリアが謡をフーコの膝の上に乗せてあげる。

一時的な《零化現象》に陥ってしまったっているのだから謡に改めてサアヤ達で労いの言葉をかけてあげて、ポータルの青い光の先に見えるキット本体を皆が振り向くが、もはや脱け殻に等しいキット本体が動く気配はほとんどない。

《レッド・ライダー》はあれがデュエルアバターだと予測していたが、こうして焼け焦げた眼球だけの姿になっても未だに自分達と同じデュエルアバターとは思えない。

人型から少し逸脱したデュエルアバターはいくらも見えてきたものの、ああまで異形のデュエルアバターは前例がない。

それは黒雪姫達も同意見で、半信半疑な予測を疑問として《無制限中立フィールド》でデュエルアバターの名前を確認する方法はなかったかと黒雪姫が投げかける。

それができれば目の前のキット本体の名前が出た瞬間にデュエルアバターであることを確認できるが、残念ながら最古参レベルのサアヤやフーコ、あきらさえもそんなことができる方法が知らなかった。

「なら、方法は一つでしょ。私はもう《ブレード・ファン》がないし、致命傷を与えてくれたメイデンはいつ目覚めるかわからないんだから、リーダーのアンタがやりなさい、ロータス」

「ン、メイデンには申し訳ないが、我々の目的はキット本体の破壊と共にあのポータルを潜ることにあったからな。悠長にはしていられんか」

そうした方法はないため、残る手段としてキット本体を倒した時にデュエルアバターなら死亡マークが出現するかどうかで判断がつくし、大事な今は今も囚われの身であるユニコをこのフィールドから離脱させること。

ほぼ同時に出来ることならしてしまえばいいと、すでに自らの主武器を失ったサアヤが黒雪姫に促せば、フーコ達もそれで終わりにしよ

うと賛同。

皆に背中を押されてキット本体へと近寄った黒雪姫は、とどめを刺すべく刃こぼれや剣先が折れたボロボロの腕を振り上げて一閃しようとした。

——ズズンツ！

まさにその瞬間、あまりにも突然、このミッドタウン・タワー全体を揺らすほどの衝撃波とプレッシャーが赤い光が飛んでいった南側から押し寄せてきて、何かの攻撃かと全員が身構え、キット本体にも目を向けるが、変わらず沈黙するキット本体が原因ではない。

あまりに巨大な力が遠くの方で解放され、その余波がここまで届いたとしか思えない現象だが、それほどの力がいったいどこで発生し誰が生み出したのか。

しかしその余波がサアヤ達に直接的なダメージを与えてきたわけではなかったので、そちらの確認もするとしてまずはと黒雪姫とキット本体の方に目を向け直すと、呆然と南の壁を見ていた黒雪姫がその目の前でまぶたを開けたキット本体の変化に気づくのが遅れた。

「サツちゃん!!」

その危険を知らせるようにフーコが叫び、即座に反応してみせた黒雪姫だったが、瞳孔から飛び出した黒い球体から無数の針のようなものが迫り、折れた腕の剣が振り払おうとしたものの、全てを切り裂くまでには至らずにいくつも胸部装甲に突き刺さった。

右手の剣がかりうじて間に入って侵食を阻んでいるようだが、キット端末と同じ力があるとすれば寄生される可能性が高いため、サアヤ達がすぐに処理しようと駆ける。

「待てー!」

しかしそれを制止した黒雪姫は、もう精神汚染が始まったのかと焦るがそうではなく、ハツキリとした黒雪姫のまま止めた理由を口にする。

「私は大丈夫だ。ただ……こいつを通して、何かが聞こえる……いや、見えるんだ……」

侵食を受けてはいるみたいだが、それによってキット端末から何か

を感じ取ったらしい黒雪姫はそれから口を閉ざして見えるという光景に集中したように見える。

それをハラハラしながらも見守った時間はわずか数秒ほどだったが、そちらに意識を持つていきすぎたのか、キット端末がどんどん黒雪姫へと自らを近づけて寄生しようとするのを見て、さすがにヤバイと叫びながら駆け寄る。

その声で戻ってきた黒雪姫も抵抗してはいたが、もはや《絶対切断》の双剣も見る影がない両腕では食い止めるのが限界でジリジリとキット端末が迫る。

おそらくこれがキット本体の最後の足掻きと思われるが、ここで黒雪姫を敵に回しては精神的に辛いものがある。

だから決死の思いでキット端末が飛ばす針を抜こうと殺到したサア達はその針に手をかけて引き抜こうとした時、キット端末からガシヤッ！ というシャッター音のようなものが聞こえたような気がした。

すると直後に相当な力で黒雪姫に貼り付いていたキット端末が突然、動力を失ったように伸ばしていた針をダラリと垂れ下げて勝手に抜け落ち、キット端末も床に落下し動かなくなってしまった。

「……ライダー？」

「はあ、はあ、どうやらそのようだ……」

それによって間一髪で助かった黒雪姫と動かなくなったキット端末を見たサアヤは、直感ではあったが遠隔セーフティを使うと言っていた《レッド・ライダー》の言葉を思い出し眩くと、黒雪姫もそうだろうと肯定。

ならばキット本体ももう余力などほとんどなく、拘束する力に抗ったライダーが約束を守ってくれたということになり、最後に意地を見せたライダーに口にはしないが心の内で感謝する。

——ありがとね、ライダー。

目の前の脅威からもとりあえずは脱して、黒雪姫も直前で見ることに徹したほどのものを整理しながらサアヤ達に説明。

「……さっき私に寄生しようとしたキット端末は、何かとリンクして

いたようだ。だがそれは、あの本体ではなかった……。ミッドタウン・タワーからずつと離れたところにいる何か……。そして同じ場所に、ハルユキ君たちも……」

「テルとかは？」

「どうやら辿り着いた先で合流したようだ。赤の王も今は私がリンクしていたものの視点からハルユキ君たちと並び立っていたから、奴らからは奪還できたようで、ケーブルを抜いてくる必要もなさそうだ」
この場ではないどこかが見えていた黒雪姫の言葉は信憑性も薄い
が、ここに至って嘘など意味を持たないので疑うことなく受け入れた
一同は、ハルユキとテルヨシ達が無事に合流しユニコ奪還までを達成
したことに安堵の息を吐く。

しかし気を抜くのはまだ早い
ため、それを示すように1歩前に出た
黒雪姫は、目の前に転がるキット本体を見下ろしてその右腕を引き絞
り、今度こそとどめの一撃を放った。

「『デス・バイ・ピアッシング』」

刃こぼれや損傷の激しい両手の剣だが、必殺技となればシステムアシストが働いて威力に問題ない刺突が繰り出され、キット本体の瞳孔の真ん中に突き刺さった瞬間、あまりにも呆気なくキット本体が崩壊を始めてしまう。

だがその現象はエネミーの消滅のそれや死亡マークとなるそれとも違い、体を構成していたデータが紐解けて1本の赤い粒子の帯となって天へと登っていくもの。

「……最終消滅現象……」

「まさか、本当にデュエルアバターだったとはの……」

その現象に見覚えのあったサアヤが驚くようにそれを見届け、その現象を起こすのが全損したデュエルアバターのみであることで黒雪姫達もまさかという気持ち
が確信に変わっていた。

レベル9の黒雪姫に1度だけ倒されただけで全損したということ
は、キット本体だったデュエルアバターはすでに全損の1歩手前の状態だったことを意味し、彼女だったのか、彼女だったのかさえ不明な粒子が完全に消えてしまおうのを見送り、なんともやるせない気持ちにな

る。

「終わったのか」

それらを終えて少しの沈黙のあと、ポータルの下に開いた穴からひよっこりと出てきたルーレットが状況を察した上で確認を取りにきて、それには黒雪姫が答える。

「ああ、ルーレットもよくやってくれた。アホ娘などと呼んで済まなかったな」

「まったくだ。こんな壁抜きがアホに出来るか」

「そういえばどうやったのよ。上の状況は見えてなかったでしょ」

「年上臭いオバさんなのにわからないんだな。三平方の定理って知ってるだろ。高さと距離さえわかれば射角は計算で割り出せる」

——ピキッ。

三平方の定理は中3で習う勉強だしライダーの妹なら確実に中3でもないガキが理解してる方がおかしいんじゃないですかね！

と、またのオバさん発言のせいでキレかけたサアヤだったが、ギリギリで耐えて意外と秀才っぽいルーレットは説明をそれで終えてしまい、補足するようにマリアとユリが口を開く。

「ルーレットさんが落ちてった穴の上に私がいたので《シャープネス》のスコープについてた測定器で高さキット本体までの距離をルーレットさんに教えていたんです」

「それで儂が撃つタイミングを見計らっておったというわけじゃよ」

「ふーん。計算もボンバーがやったんじゃないのお？」

「床に凶解はしたけど、ちゃんと自分で割り出したっての！」

2人もやれることを精一杯やってくれた結果がルーレットの援護だったのには少々ビツクリながら、それをやろうと示したのはおそろくルーレット本人。

ルーレットも床が抜けて落ちてからもやれることを探して何とかしようとしていたことがわかると、やっぱりなんだかんだで憎めないサアヤは、オバさん呼ばわりはムカつくが、労うようにフーコやあきらに頭を撫でられて照れるルーレットを見て小さく笑ってやる。

「だああ!! 子供扱いすんな! やることやったならさっさとポータ

ル潜ればいいだろ！」

「そうしたいのは消耗から考えても山々なのだがな……我々はまだやらなければならぬことができてしまった」

「ルーレット。あなたの力はわたし達を幾度となく助けてくれて、本当に感謝しています」

「あなたの当初の目的だったキット本体を倒した以上、私達の協力関係はここで終わり。その上であなたはこれからどうする？」

「お前ら……そんなボロボロでまだ何かするつもりなのか。人のことは言えんが、バカだな」

「あら、自分がバカだって認識はあるのね」

「茶化すでないガスト」

「ルーレットさん……」

子供扱いが嫌なルーレットがフーコとあきらを振り払いつつ、終わったなら帰れともっともなことを言うが、別行動になっていたテルヨシ達がピンチとわかれば行かないわけにはいかない。

だからこそ同じ目的で動いていたルーレットがこれ以上は付き合う必要はないが、ほとんど消耗もなく戦い抜いた超火力の戦力はサアヤ達にとつてすがりたくなるほどに欲してしまうもの。

出来るならこのあと……と口にはしなかったサアヤ達だが、そういった意味が含まれる問いに対してルーレットは、意図を汲み取ったのかサアヤに茶化されても少しだけ沈黙して答えに迷う。

「……………勝手にしろ。アタシは疲れたから帰る。レイズも最大値を2段階上げられたし、その助けをアンタらがしたのも事実だが、それに見合う働きはしてやったつもりだ」

「……………そうか。残念だ」

「ふーん……………そうなんだ」

悩んだ末のルーレットの答えはN.O。

持ちつ持たれずの協力関係で考えてもイーブンくらいだろと言うルーレットに異論はなかったため、黒雪姫も本音を引っ込めて素直に諦めることを言う。

しかしサアヤは聞きながらルーレットが通ってきた斜めに伸びる

大穴の先を見てそれだけが理由ではないとわかってしまう。

「アンタさ、エリーニユスはどこいったの？　ここに持ってこれないのは重さ的に無理としてもさ、この穴の先にあってもおかしくないと思うんだけど？」

「ぐっ……う、うるさいんだよオバさん！」

「なんじゃルーレット。もしや儂らがキット本体を倒したとわかったから、エリーニユスをストレージにしまっておったのか」

「あ、それでレイズの強化がリセットされちゃったんですか。実はちよつとあの強化段階からのリセットで心が折れちゃったりですか？」

「うう……黙れ黙れ黙れええええ!!　行かないったら行かないんだ!!」

断じてレイズのリセットのせいじゃない!!」

手ぶらで上ってきた時から違和感があったが、穴の先にエリーニユスもなければルーレットが全ての強化外装をストレージにしまったしまったことは明白。

そこをつついたら案の定で、ユリとマリアが追撃したところから白状して地団駄を踏む。

確かにあそこまで無双できる段階にあったレイズをリセットしてしまえば、サアヤでさえまた一から育て直すのは心が折れると思うので同情するが、それでも被弾などを考えればルーレットはまだ戦力になるのは間違いない。

それは黒雪姫達も思ったか、それだけが理由なら問題ないといったことを口にしようとしたが、その言葉を出させるより前にルーレット自身が口を開く。

「……レイズはまあ……確かに理由の1つだけど、アタシはお前らが使ってた心意をまだ使えない。今のやつとでさえこのアタシが守られる側にいたのが素直に悔しい。お前らがこれからやることに心意が関わってくるなら、またお前らに守られる状況があるかもしれない。それはアタシにとって屈辱以外の何物でもない」

「ルー子……」

ずっとソロ同然の環境で育ってきたルーレットにとって、自分が守

られる側にいるというのは想像以上の屈辱だったと吐露され、この先でもまたそうなるなら耐えられないと言われてしまえば、実際にそうなるかもしれない可能性がある以上は無理強いできない。

だがそれがサアヤ達の足手まといになりたくないという、他人を思っただけの悔しさであるなら、それは今までのルーレットから出てくるはずのない感情。

「ねえルー子。アンタのプライドもあるし引き止めはしないけど、少しだけ私の話を聞いてくれる？」

「……何だよ」

「ライダーも言っただけど、今のルー子からは強さの『先』が見えないわ。この世界で強くなった先であなたは何をしたいの？」

「……それは……」

「余計なおせっかいかいと思っただけだけど、もしもルー子がその答えをまだ持ち合わせてないなら、私達のレギオンに来なさい。私達は今、とても大きな目的を持って全力で動いている。その目的にはルー子の力が……うん、ルー子が必要だっただけの共闘で確信した。それに私はね、ライダーの言ったこと。仲間と共有する楽しみとか喜びとか、そういうものをアンタに教えてあげたいって純粹に思った。他と繋がるってことは辛いことも増えちゃうけど、やっぱりあとに残るのは『仲間がいて良かった』って気持ちはずっとずっと大きかったわ。まあこれは経験則だけだね」

その気持ちが芽生えてくれたのなら、もしかしたらレギオンにも加入してくれる可能性はある。

そう思っただけの話をしたサアヤだったが、話しているうちに打算的な思考は薄れていき、いつの間にかルーレットをこのまま元のソロプレイに戻すのを『勿体ない』と感じていた。

ルーレットはまだこの加速世界の『楽しさ』を知らない。

ゲームと割り切りすぎてデュエルアバターの中に確かな人の意思が存在することから目を背けている。

それを教えてあげるのは《親》代わりである《パープル・ソーン》で然るべきなのかもしれないが、やっぱり自分でも笑っちゃうほどの姉

御肌がそうさせてしまったのだと思えば開き直れてしまう。

そうした話に黒雪姫達も同意するような領きをしてみせ、それらを聞いて見て、ルーレットは今の段階での回答を述べる。

「……今はお前の言うことはよくわからない。だがお前らとの協力に不思議な感覚があったのは認める。ただ1つ確認するなら、お前の提案はお兄が『見守ってくれ』と言っていたから出てきたものか?」

「……ううん。これは私の性格がさせたこと。昔からライダーにはこの性格を姉御肌だつて弄られたけど、性格なんだから。仕方ないじゃない?」

「……やっぱりお前はオバさんだな。余計なお世話が過ぎる」

「ちなみにうちのレギオンに入ったなら、まずそのオバさん呼ばわりは真つ先に矯正するわよ。これでもまだ現役の女子中学生にオバさんはないっての」

ここでレギオンに入るかどうかは決めない答えではあったが、以前のように聞く耳さえ持たなかったルーレットからすれば進展だ。

1つだけ確認されたこともライダーの去り際のお願いを聞いていたから勘繰ったようだったが、今のサアヤにそんなお願いは先にきてしまった理由に過ぎない。

それがわかったルーレットは、それでもやはりここで決断するだけの心の準備は出来なかったようで「わかった」と一言だけ述べてポータルを潜ろうとする。

その時、再びミッドタウン・タワー全体を揺らすほどの衝撃とおぞましいまでの寒気を帯びたプレッシャーがサアヤ達の元にまで届き、その発生源が南側。テルヨシ達がいると言っていた場所であると確信する。

「のんびり話なんてしてる暇ないんだろ。さっさと行けよ」

「……ええ。ルー子も、後日でいいからちやんと返事を聞かせて。今日はありがと」

「……じゃあな」

その余波のただならぬ感じはわかるルーレットは、これ以上の時間の浪費をさせないためにそれだけ言ってポータルを潜ってファイ

ルドを離脱していった。

ルーレットの離脱によって少し残念な空気が場に漂ったものの、遅れて意識が戻った謡がすぐに状況を察して「まだやるべきことがあるのです」と力強く言ってしまう。全員の覚悟は決まる。

「では行くぞ。そして全員で帰って文化祭の続きを楽しもう」

「ええ、そうね」

「なの」

「なのです」

「じゃな」

「ですね」

「……本当に、そうね」

満身創痍という言葉が当てはまりすぎるほどの消耗ですでにポロポロのサアヤ達だが、心の炎はまだまだ燃えたぎっている。

その炎でデュエルバターを再び動かし始めた一同は、今も戦うテルヨシ達がいる場所を目指してミッドタウン・タワーを出発していった。

ユニコの《インビンシブル》奪還のために動き始めたテルヨシ達は、加速研究会が生み出してしまった《災禍の鎧マークII》の依代となったインビンシブルの2門の主砲によってさら地と化して消し飛んだ誰かさんのプレイヤーホームとその周囲の建物や地形オブジェクトに驚愕する。

直径150mほどの範囲が何も無いクレーターのようになっただの中心には全くダメージを負った形跡もないマークIIが静かに佇んでいて、その出で立ちはまさに悪魔といった印象を受ける。

生まれてすぐにこの破壊力を持つとなると今後の成長の伸びを考えると、何としてもここで倒しておきたい。

そんな意気込みと共に《インビジブル・ステップ》を使って辿ってきた道を走って戻るテルヨシは、接敵するに当たっていくつか注意すべき点を反復。

まず両腕の主砲。あれを着弾させると今のような規模で破壊がもたらされてしまうため、足元に張りついて誘発させるようなことは出来ない。

撃たせるなら破壊の規模が範囲に入らない射角にするか、着弾しない空へと撃たせるかだ。

そしてマークIIを装備している《ウルフラム・サーベラス》を直接攻撃しダメージが入るような攻撃もしてはいけない。

ただでさえハルユキとの戦闘で残り少ないだろうHPゲージを削り切って死亡させてしまえば、チュリの《シトロン・コール》をサーベラスに使えず、1時間の蘇生を待たねばならなく、そうなってしまう。またマークIIも全快して襲いかかってきてしまうからだ。

「狙うならインビンシブルのパーツだけ、か。難儀なもんだ」

もう1つ付け加えるなら、サーベラスを死亡させてしまった場合、あっさりと離脱していった《ブラック・バイス》と《アルゴン・アレイ》の両者、または片方がリアルなサーベラスのそばにいるなら、そ

の間にニューロリンカーを抜くことで強制離脱させられてしまう可能性がある。

そうなるのとさえサーベラスを死亡させずにマークIIを消耗させられても、その時が来てしまえば奪還のタイミングは失われることになる。

離脱してニューロリンカーを抜くまでの作業にはどうやつても現実時間で1、2秒はかかるはずなので、テルヨシ達に残された時間は残り20分あるかどうかといったところか。

圧倒的な負の心意をほぼ無尽蔵に使えるだろう相手に慎重になりたい気持ちがある中でタイムリミットを加えられる鬼畜ぶりは、こちらの消耗を考えても精神的に無理に等しい。

それでもやらねばならないのは、降下を始めたハルユキ達が戦闘の意思を見せるような挙動でマークIIへと迫っていったのもあるが、何よりもあれが今後に撒き散らすだろう惨劇を野放しにすることが出来ないから。

マークIIの主砲のチャージ時間を正確に測る余裕がなかったのが痛い、幸いというのか再び動き出したマークIIはその両腕を降下してきたハルユキ達がいる空へと向けて発射体勢に入った。

狙いはもちろんハルユキ達だが、2条のビームが発射された瞬間に高速でスライドしたハルユキによって全員がギリギリのところまでビームを掻い潜り、発射後の硬直を狙ってハルユキから離れて自由落下から攻撃を仕掛ける。

ほぼほぼ同時だったが、最初にタクムの《ライトニング・シアン・スパイク》がマークIIの単眼の中心を捉えて命中し、畳み掛けるようにユニコのハンドガン型強化外装《ピースメーカー》から放たれた心意の弾丸が爆発を生み、その爆発を意に介さないように《ブラッドシエツド・カノン》で捨て身の特攻を仕掛けたパド。

大規模な爆発を起こしてすぐその中から飛び出たパドと入れ替わるように最後にハルユキが謎の4枚の光翼のうちの2枚が伸び上がり、鋭い槍と化したそれがマークIIの単眼に突き刺さった。

しかしその連続攻撃を受けても単眼が破壊されることはなく、マー

クII自体もまだ耐えて踏み留まってしまっている。

「うお……りやああああ——っ!!」

あれほどの猛攻でも耐えられると効いてないんじゃないかと思うが、辿り着いた足元から見ればその単眼には確かなダメージとしてひび割れが見えて、そこにほとんど落下エネルギーを力に換えたチユリが渾身の《クワイアー・チャイム》をマークIIの単眼へとぶち込む。

それでついに単眼レンズがいくつもの欠片となって破壊され、体もバランスを崩して後ろへと倒れそうになる。

自分だけ何もしないっていうのは癪なので、次々と着地したユニコ達と入れ替わるように跳躍したテルヨシは、マークIIの胸部装甲にダメージは稼げないまでも全力の蹴りをお見舞いしてマークIIを完全に後ろへと倒し、攻撃の反動で空中に一瞬だけ留まっていたチユリをお姫様だつこでキャッチし綺麗に着地。

……したかったがさすが緑系だけあり、消耗も相まってその重さに片膝をついてしまったが、女の子に「重かった」なんて口が裂けても言つてはならないので平静を装ってチユリを地面に下ろす。

「……よろめきましたよね、先輩」

「着地したら小石を踏んじやったのよ。それが痛くてね」

「……そういうことにおきますか？」

「……ケーキのトッピング増しておきます……」

それでもテルヨシがよろめいたと気づいてしまったチユリの静かな圧力に耐えられなかったテルヨシは、仕方ないのでこのあとに奢るケーキのトッピング増しで手を打って解決。

こんなやり取りをこのタイミングで呑気にやつてる場合でもないので、すぐに仰向けに倒れて動かなくなったマークIIを見ながら、テルヨシが確認できていない主砲のチャージ時間をハルユキ達に問いかける。

そこはしつかりとカウントしていたパドがチャージ完了までは60秒と答えてくれて、今の2撃目も発射から20秒が経ったことを伝える。

「ニコとタクはあいつが動きそうになったら遠距離攻撃で止めて！」

パドさんは必殺技ゲージの回復を！ 先輩は回復しながら警戒を頼みます！」

倒れてから行動不能状態にはなったようだが、残り40秒でチャレンジすべきかを迷った時、力強く全員に指示を出したハルユキに従って動いたユニコ達。

この場で指揮権を持つならレベル9のユニコが適任ではあるうが、秒単位で決断力を問われる状況で指示を出す勇気を皆が認めた証。

それならテルヨシが反論して時間を使うのは愚策にもほどがあるのと言われた通り不気味なオーラを纏い続けるマークIIに注視しながら、視界横で声をかけられてチユリが前に出たのを確認する。

「《シトロン・コール》!!」

左腕のクワイアー・チャイムを半時計回りに4度頭上で回してから、その必殺技発声によってクワイアー・チャイムから緑色の光が発生し、それがマークIIの足を捉えると瞬く間にマークII全体を包み込む。

必殺技ゲージを全消費する燃費の悪さはあるが、これを受けたデユエルアバターは現状から恒常的な変化を巻き戻される。

これによってマークIIが受ける効果は、サーベラスIIIとして出てきていた《ダスク・テイカー》が《魔王徴兵令》でユニコから奪ったインビンシブルのパーツを奪う前へと巻き戻される。

チユリのシトロン・コールでは現状では4段階の巻き戻ししか出来ないが、ユニコが奪われたパーツもまたギリギリで4つ。その全てを取り戻すことは可能なのだ。

ただシトロン・コールは強力ゆえに発動から効果が出るまでに時間がかかり、対象をロックオン出来るわけでもないの、発動中にマークIIに動かれてしまえば割と簡単に失敗してしまう。

そうさせないためにユニコとタクムがその素振りを見せたら攻撃できるように構えているし、虚を突くような行動にはテルヨシとハルユキが備えている。

最悪を想定するなら、このシトロン・コールが失敗しチユリがマークIIの反撃を受けて死亡してしまうことだ。

そうならば離脱したバイスとアルゴンのどちらかがリアルサーベラスからニューロリンカーを抜く時間を稼がれてジ・エンド。ユニコのインビンシブルを取り戻すチャンスはほぼなくなってしまふ。

常に最悪を想定しておけば、たとえ虚を突かれてもそうはならないようにいち早く動けるため、決して無駄な思考ではない。

そうこう考えているうちにシトロン・コール発動から5秒ほどが経過し、あともう数秒で巻き戻しが起きるといったタイミングで、やはり簡単にはいかなかったか、倒れていたマークIIが突如としてその両足をビシッ！と直立させてくっつけ、その足に腰から折り畳まれるように上体が跳ね上がって重なる。

人間の体で言うなら長座体前屈で頭まで足につけた感じだが、尺としてはマークIIの頭は両足の先端だった部分にまで来てるので上半身と下半身で同じ長さということになる。

さらに左右に出ていた腕も隙間を埋めるように収納されてさつきまでの人型から見る影もない箱型の物体へと変化。

その変化によってマークIIの弱点である単眼がテルヨシ達の真正面に姿を現し、レンズの割れた単眼の奥には底知れない闇が満ちていた。

この動きにはもちろん警戒も反応もしていたテルヨシ達は、ここからチユリのシトロン・コールから逃れるような動き。もしくは攻撃してくるようならすぐにでも離脱・攻撃できる体勢を整えていた。

それからマークIIが単眼の中で明滅する赤い光を少しだけ強くした瞬間、構えていたタクムとユニコが動くこと察知して即座にその単眼へと攻撃を叩き込んだ。

しかしその攻撃は直前にシャッターのように閉じられたオーラを纏った強固な装甲板によってあまりにも無情に弾かれてしまい、唯一の弱点である単眼が塞がれたことでマークIIの動きをキャンセルする手段がなくなる。

そうなってしまうえばマークIIが『デイルル……』と低く唸ってから謎の駆動音が沸き上がるまでにどうすることもできなく、地面との接地面から砂煙が起こり、完全に動くことがわかった段階でシトロン・コー

ル発動まで残り2秒。

あと2秒と粘るチユリの気持ちもわかるが、恐ろしいまでに攻撃の意思を発したマークIIから逃げるように《テイル・ウィップ》をチユリの胴に巻きつけたテルヨシは、それと同時にマークIIの正面から外れるように左へと横っ飛び。

ハルユキ達も同様に正面から逃げるように回避したのと同時にマークIIが謎の推進力で爆発的な加速で突っ込んできてテルヨシ達の横を抜けて後方へと流れる。

それによつてチユリのシトロン・コールは対象を失つて失敗してしまふが、あのまま続けていればマークIIに轢き殺されていたのだから判断は間違っていない。

「あと2秒だったのに……」

「めげてもしょうがないよ。次で成功すればいいんだから切り替えて。タクム君、チユチュの護衛を頼むね」

「チユ、タク。南のクレーターの先に壊せそうなオブジェクトが見えたから、そつちに行つてくれ」

「了解。戻つてきた時にみんな倒されてたなんてことにならないでくれよ」

「おつ、ハカセも言うようになったな」

シトロン・コールに失敗してチユリは悔しがるものの、テイル・ウィップから解放しつつ切り替えさせるテルヨシの言葉にさすがな早さで順応し、マークIIが左右3つずつあったタイヤでスピンのターンの決めて再び正面を向けてくる間に、チユリとタクムは必殺技ゲージを溜めにクレーターから走つて抜けていく。

「にしてもあのバケモノ。《ドレッドノート》まで出来んのかよ」

「パーツが足りないから重量感はないけど、その分で速そうではあるな」

「弱点の単眼も金属装甲に守られちゃいましたけど、視界は必要なんですかね。少し開いています」

ユニコのドレッドノートまで真似て変形したマークIIの学習能力は驚異的ながら、元が強化外装なのに完全に閉じていた単眼を守る装

甲が視界を確保するようにわずかに開きその奥の光がテルヨシ達を射抜く。

50 m程度の距離で睨み合いながらも獣のように襲ってくるでもないマークIIの不気味な沈黙には緊張するが、その間でユニコが不意にテルヨシとハルユキに助けに来てくれたことへの感謝を述べて、今回の事態を招いた責任が自分にあるとか語り始める。

3人とも顔を向け合うようなことはせずにマークIIから視線を外さないでいたが、そこからユニコが言わんとすることがわかったのとおりあえず聞くだけ聞いておく。

「——あいつとのケリは、あたしがつける。あんたらは、パイルとベルを連れてミッドタウンに戻れ。心配すんな、あいつを片付けて強化外装取り戻したら、あたしとパドもすぐに……」

「戻る時は一緒だ、ニコ。僕は、約束したんだ」

筋を通すと言う意味でユニコの決断は立派なものだが、それを言い切るより前にハルユキは却下。

ほぼ予想通りの言葉だったのでテルヨシも年長としてハルユキの言葉に賛同しつつ理路整然と口を開く。

「立派な」決断ですがねえ、ニコたん。たとえそれに従ってオレ達がいなくなつたとして、どうやってあれからインビンシブルを取り戻すつもりですかね？ 消滅不可能な《七星外装》ならいざ知らず、全損させたとしてもインビンシブルが移動する可能性は低いでしょ。第一、全損させるにしてもレベル8と9の2人じゃ、どのみちサーベラスは1度じゃ全損はしないしね。その辺の問題を納得のいく形でご説明いただければ、我々も従うのはやぶさかではありませんが？」

「ぐっ……っ、の、や、ろ、う、があ………ああねえよ！ 取り戻す算段なんてねえけど、あんたらが背負う必要のねえもんだって言ったんだよ！ 悪いかコラ！」

「開き直りの逆ギレやん……」

ハルユキに対しては何故か柔らかい態度なのに、テルヨシがド正論をぶつければ何故かキレられて理不尽さが拭えないが、そんな本音が出てしまえばもう撤退しろとは言えなくなつてしまったユニコは、自

分を落ち着かせてから切り替えるように覇気を言葉にする。

「……しゃーねえ、一緒にあいつをぶっ飛ばすぞ!!」

「了解!」

「最初からそうすりゃいいのよ」

改めて全員で戦う意思を示してみせ、その闘志に反応するようにマークIIの装甲の隙間から障気のようなオーラが吹き出して単眼を守る装甲がさらに開き、左右に備えた主砲をガシヨツ、とテルヨシ達に照準してくる。

チャージ時間はもう問題ないのでいつでも発射できるとは思うが、学習能力からしてバカみたいに単発ではもう撃ってこない可能性があるため、どうにかしてまた主砲の2発を『撃たせなければならぬ』。

それがマークIIの望むタイミングではなく、テルヨシ達が望むタイミングで撃たせるには、向こうが『当たる』と確信する隙を見せる必要があるが、それを避けるのもまたシビアなものになる。

着弾すら許さないと地上戦オンリーのテルヨシではクレイターの中で狙われたが最後、確実にどこかに着弾し2つ目のクレイターが出来上がって終了。

それがわかってるからか、翼を広げたハルユキがテルヨシとユニコに声かけて呼び込み、左右からホールドする形で空へと上がる。

それに合わせてマークIIの主砲もその砲口を上へと向けてきたので、このままいけば直撃しなければ被害が出ることはないが、ハルユキのスピードを削ぐ要素は減る方がいいのは間違いない。

「ハルユキ君、手を放していい。少し挙動を見てみる。あと足を借りる」

だからテルヨシはハルユキから手を放してもらってから、落下の途中でハルユキの足にテイル・ウィップを巻きつけてぶら下がり、縦に伸びたこちらを見てマークIIがどんな反応をするかを見ると、翼の面積分で命中率を重視したか、主砲のどちらもテルヨシを狙うような修正をしてくれなかった。

「降りる。避けるよ」

「はいッー」

そうしてテイル・ウィップを足から放して地面に着地したテルヨシは、直後に放たれたマークIIの主砲が頭上を通過したのを見ると同時にマークIIへと肉薄。

しかし虚無属性のレーザーは1本しか見えぬ、そこにゾワツとした感覚が襲う中でマークIIを見れば、やはり主砲のレーザーを時間差で撃つたらしく、走り出した時に2発目がハルユキとユニコを襲った。

避けたと思ったところへの2発目はヒヤリとしたが、驚異的な旋回で直撃を避けたハルユキは、無理な制動でバランスを崩しながらマークIIへと迫る急降下へと入り、主砲の2発で倒せなかったマークIIもチャージ時間を稼ぐようにタイヤを後転させて距離を取ろうとする。

さらに見えていた単眼も装甲で守ろうと閉じかけたが、そこはいち早く反応したユニコがピースメーカーの連射で動きを鈍くし、その隙にハルユキの《光線槍》が単眼を捉えて装甲が閉じるのを阻止。

そしてマークIIの上に着地したハルユキ達に続いてテルヨシも到着し、勢いを殺さずにハルユキが光線槍を引き抜くのと入れ替わりに強烈な飛び蹴りを単眼へと叩き込む。

『ティルルル……ルルウー！』

攻撃後すぐに足を引き抜いてマークIIの後方へと転がったテルヨシは、即座にユニコがピースメーカーを撃ち込み、悲鳴のようなマークIIの咆哮を聞きながら落下する前に装甲を掴んで前を見る。

そこからさらにハルユキが《光線剣》を突き入れようと腕を引き絞った時、テルヨシの視界の左右から影が射して、反射的にその場から飛び去ってしまうが、わずかに広がった視界が捉えたのは、左右に収納されていたマークIIの両手が上に乗るハルユキとユニコを掴んで拘束したところ。

マークIIの後ろで着地しながらも、すぐに前へと出て飛び乗って助け出そうとしたが、タイヤを後転させたまま後ろのスラスタを噴射するという明らかな攻撃目的のマークIIの動きに体が反応してしまう。

前方に壁のように広がったスラスタの噴射炎はゴウツ！ とい

う音と共に壮絶な温度でテルヨシへと迫り、直撃すれば装甲が溶かされると前に出る力を無理矢理に止める《インスタント・ステップ》で見えない壁を蹴り後ろへと下がって噴射炎の直撃を回避。

いくらかの熱はデュエルアバターに伝わってダメージになるが、欠損などは出ずにやり過ごしてバック転とテイル・ウィップで体勢を整えることには成功。

『ティルル!!』

ギリギリの回避ともあつて落ち着く間が欲しかったテルヨシだが、そんな時間すら与えないといった狂気でスラスターの噴射を止めていたマークIIは、その反動を打ち消すために後転させていたタイヤは止めず、結果としてそのままバック走行で猛烈なアタックを仕掛けてきた。

「こんのやろうがああ!!」

10mとない距離を一瞬で詰めたマークIIの突進に横への回避が間に合わないと理解したテルヨシは、悪態をつきながらバック走でわずかに衝突を遅らせて、その間にテイル・ウィップをマークIIに接触させる。

そこからテイル・ウィップでマークIIと接触しない距離を保つたまま体を持ち上げてマークIIの速度に乗ってしまったらダメージはない。

瞬発力とテイル・ウィップの繊細な操作が可能にした回避法だが、それを実行に移せたのは磨いてきた観察眼あつてのことだ。

しかしいつまでもマークIIがバック走行を続けるとは思えないので、一瞬だけ地面を蹴って体を跳ね上げて一気にマークIIの上へと生還を果たし、改めて拘束されるハルユキとユニコを見ると、今まさにハルユキが拘束されていない腕を引き絞って単眼へと攻撃しようとしていたところ。

だがマークIIはそれを阻止しようと急ブレーキと一緒に両手をぶつけてハルユキとユニコをまとめて攻撃してしまうのだった。

驚異的な学習能力からどんどんテルヨシ達を追い詰めてくる《災禍の鎧マークII》に苦戦を強いられるが、ただ1度の《インビンシブル》奪還のチャンス逃すまいと奮起。

なんとか《ドレットノート》形態のマークIIに取り付くことには成功したが、ハルユキとユニコが左右から伸びた両手に掴まれて拘束され、攻撃もさせまいとその両手を打ち付けて2人をぶつけダメージを与えてしまう。

加減など知らないマークIIの打ち付けは2人に相当なダメージを与えたようだが、HPゲージはまだ残っているようで死亡マークにはならず済む。

だが頭以外が拘束されてるユニコも、腕と翼だけは動かせるハルユキも両者ともに攻撃など出来る様子もなく、ダメージの反動で軽いスタンにも陥っているようだ。

そんな2人に対してまたも両手を打ち付けようとする予備動作をしたマークIIにゾツとしながら、《無制限中立フィールド》ゆえにHPゲージが見えない2人が次の攻撃で死亡する可能性がある以上、なんとしても阻止しなければならぬと動く。

容赦なく中央に振りかぶったマークIIの両手がぶつかると直前に衝突地点へと飛び込んだテルヨシは、自分も死亡する可能性のあるその攻撃を阻止しつつ食らうまいと《テイル・ウィップ》をバネのように丸めてマークIIの右手に添えて、両足と裏側を左手にぶつける形で間に挟まり衝突を緩和。

——メキメキ……パキパキ……

恐ろしいまでの万力のような両手からの衝撃をテイル・ウィップと両足の関節で吸収し、どうにか衝突を防げはしたが、テルヨシのアバターの部位で最も強固な両足が砕けるのではないかというほどの衝撃で装甲にひび割れが起き、関節部からスパークが迸る。

「ぐっ……」

『ティルルル!!』

それでも砕けずに持ちこたえた自慢の足に誇りさえ持てたが、2人から感謝の言葉を聞くよりも早くマークIIがテルヨシを退けようと挟み込んだまま両手を振り上げて投げ飛ばそうとする。

当然そんなことさせるかと抜け出ようとしたが、その時にマークIIの正面に深紅の光が煌めいたのを見て動きをキャンセル。

直後、テルヨシ達の真下。マークIIの開かれた単眼へと猛烈な勢いで突っ込んできたパドが必殺技ゲージを溜めて戻ってすぐに爆炎を発生させながらダメージを与えてくれる。

必殺技《ブラッドシエツド・カノン》の威力は凄まじいが、パドの残りのHPゲージを考えればほぼこれで打ち止めだろう。

そんなパドの捨て身の特攻で怯んだマークIIはテルヨシの拘束を緩ませて、間から滑り落ちたテルヨシはそのまま反動で仰け反りながら落下するパドを両手で抱き止めて地面に着地。

マークIIの正面は危険なので反射的に素早いステップでマークIIの横に移動しつつわずかに距離を取り、あの攻撃でまだハルユキとニコを拘束するマークIIに舌打ち。

なんとか両手から2人を解放してやりたいと更なるダメージを与えに行きかけたが、その時に気合いの雄叫びを上げて6枚の翼を震わせたハルユキが、マークIIごと空へと上がろうとしているのが目に入り動きをキャンセル。

マークIIの重量は相当なもので持ち上がるのかと少しだけ様子見をすると、ハルユキの翼に銀色の《過剰光》が輝き浮き上がる力がさらに上がると、ぐぐ、ぐぐぐ、とハルユキの体が浮き上がるのに合わせてマークIIも浮き始め、完全に宙に浮いてからはその速度も上がってどんどん高度を上げていく。

そうなってしまうとテルヨシではどうしようもないが、如何なマークIIでも高所からの落下ダメージは相当なものになるはず。

それを狙ってかどうかはわからないが、テルヨシやパドがいる状況でそうしたならハルユキにも考えがあるのだと信じることにして、腕の中でアイレンズを明滅させるパドに呼びかけ回復を促す。

ズズン。

パドもなんとか回復し残りのHPゲージが1割程度だと報告し、ハルユキとユニコ、マークIIが上空100m付近にさしかかったタイミングで、クレーターの西側から小さな地響きが伝わってきて、地響きが起きるほどの重量を持った存在が近づいてきたと瞬時に理解したテルヨシは、1人で立てるようになったパドを解放してクレーターの西側を見る。

「……ちい、こんな時にかよ」

「N。こんな時だからが正解」

それを見て思わず舌打ちをしてしまったテルヨシに対してそんな訂正と共にパドが背中に乗るように促してくる。

クレーターの上にはいたのは、体高10mはある2本の太い角を持った巨大な馬型のエネミー。

《ブル・ホース》。かつてテルヨシが初めてダイブした無制限中立フィールドでサアヤと《アイス・イーター》がターゲットイングされて遭遇した徘徊型の《巨獣級》エネミーだ。

あの時はユリの《デンジャラス・タイマーボム》を口の中にぶち込んで体内で爆発させて昏倒している間に逃げ切ったが、今回はおそろしく度重なる心意の使用によって引き寄せられてしまった形。

「近寄ってきたエネミーがあれだけってことはないか」

「おそらくあと数分で他のエネミーもゾロゾロと辿り着いてくるはず。でもここに集まられたらみんなが危険」

「……やるしかないな」

エネミーが心意に反応することはわかっていたが、いざこうして目の前に現れてくれると厄介でしかない。

それでもどうにかしなければ空に上がったハルユキとユニコも、必殺技ゲージを溜めに行ったチュリとタクムも本当に大事なインビンシブルの奪還という目的を遂行できなくなる。

それがわかってからこそパドの背中に乗ったテルヨシは、猛牛のごとく前足を掻き蹴ったブル・ホースが明確にテルヨシとパドをターゲットイングしたのを確認して、チュリとタクムが南側にいること

も加味して逆の北側へと走り出す。

当然、ブル・ホースもその動きに合わせて突進を開始して、クレーターの縁をなぞるように猛然と突き進んでくる。

「様子見しつつ先制する。上手く誘導して」

「K」

スピードに乗ると恐ろしいが、巨体な分で小回りが効かないブル・ホースは、1度でも止まってしまうえば即死級の踏みつけにだけ注意し、やり過ぎすこと自体は難しくない。

ただ懸念材料はブル・ホースのみではなく、今も近寄ってきているだろう他のエネミーもであり、そちらも警戒するためにクレーターを抜けてすぐにパドと簡潔に話してから飛び降りて《インパクト・ジャンプ》を発動する。

ほぼ真上に向けて発動し40m上空の視界からでも他のエネミーを目視できるかと思っただが、やはりその視界からでも見える範囲でもいくつかそれらしいものが点在していた。

大きいもので2つ。ブル・ホースと同等か《野獣級》っぽいエネミーが東側からクレーターに向けて迫っている。

《小獣級》も含めるとその数は定かではないが、顔を合わせたエネミー同士が喧嘩することもあるとかなんとか聞いたことがあり、自分より明確に強いエネミーの存在を感知して寄ってきていないのかもしれない。

それならブル・ホースにターゲットイングされたまま、東側に移動しつつ、クレーターから離れてエネミー同士をぶつけてみるのが最善策か。

そこまでを到達点から落下するまでの間に思考したテルヨシは、その落下地点でブル・ホースを待ち構えていたパドがギリギリで避けてくれるのを信じて、突進してきたブル・ホースの頭上から落下エネルギーも加えた強烈なかかと落としで迎撃。

ただ、突進してきたブル・ホースにそのまま叩き込むと反動で死にかねないので、インパクトはブル・ホースの交錯した瞬間の後頭部にして、前に進むブル・ホースの軌道を追う形になったのでダメージは

少し逃げたが、そのおかげで止まろうとしたブル・ホースを前のめりになるようにバランスを崩すことには成功。

そうしてバランスを崩しつつもターンし正面を向け直してくる間に着地し、近寄ってきたパドに取り急いで報告。

「K。なら東に抜けてエネミー同士をぶつけてみる。それで争ってくればその隙に戻ってこれるかもしれない」

「もしそうならなくてもオレを置いてもいいよ。パドは何があっても戻って」

「……THX」

報告を聞いてからまた背中に乗るように促したパドに従って、そんな話をしながらまた突進しようとしていたブル・ホースの下を潜って東へと走り抜ける。

パドもほぼ同じことを考えたので良かったが、エネミー同士を喧嘩させられる可能性は期待以上に低いし希望的な部分が多い。

だからそうならない場合は『どちらか一方がターゲットイングを引き受ける』ことでクレーターに殺到するのを遅らせることができるのだが、その役目をテルヨシが買って出たのはちゃんと理由がある。

パドには守らなければならぬユニコという存在があり、たとえわずかな時間だろうとそのユニコから離れるのは精神的にも良い影響はない。

それが自分でもわかっていたのか、少し躊躇いつつもテルヨシに感謝を述べたパドは、少しでもブル・ホースをクレーターから引き離そうと全速で駆け抜ける。

走ることに専念するパドの代わりにブル・ホースがちゃんと後ろをついてきてるか確認していたテルヨシは、しっかり追いかけてきたブル・ホースの後方の空に漆黒のエネルギーが至近距離で何かと激突するのを見る。

漆黒のエネルギーがマークIIの放った主砲であることは間違いないが、その当たった何かがハルユキとユニコでないことを祈りつつ、今は自分達がやるべきことに集中。

体格差と速度差でほぼ五分のまま道路沿いを走っていくと、その先

の前方200m付近にサソリ型のエネミーが見えてくる。

南東の方にもう1体、大型のエネミーが迫っているはずなので、こちらも警戒するためにエンカウントも数秒後に迫るサソリ型のエネミーがターゲットイングしたのを確認してすぐに道路沿いに右折し2体の様子を観察。

だがブル・ホースがいち早く曲がってきたおかげでまだ正面衝突とはいかず、遅れてサソリ型のエネミーが追いかける形でブル・ホースの後方からテルヨシ達を追ってくる。

ただブル・ホースとサソリエネミーに速度差があつて、このままではサソリエネミーからターゲットイングが外れてしまう可能性があつたので、パドには先行してエネミーを引っ張ってきてもらうことにして道路に降りたテルヨシは、おそらく攻撃を加えた自分がブル・ホースに狙われていることを確信しつつ決死の特攻。

突進してくるブル・ホースの下を観察眼をフルに使って潜って回避しようとしたら、ブル・ホースがテルヨシの活路を閉じるように急にその頭を下げて塞ぎ、2本の角までこちらに向けて圧力を上げてきた。

左右に避ければ4本の足が容赦なく轢き殺し、正面突破で頭に当たっても即死。この時点でもうテルヨシには逃げ道はない。

「……って、普通は思うよな！」

だが回避不可能に思えるその中でまだ諦めてなかったテルヨシは、勇気を振り絞って唯一わずかにあるだろう活路に飛び込むため、正面突破で超低空スライディングを敢行。

如何なエネミーといえど、突進する力に合わせてしまえば、下げた頭を地面と接地するわけにはいかない。

そうなれば瞬く間にバランスを崩して前方に転倒するのは、関節を持つ動物型のエネミーならば必然だ。

だからテルヨシはそのわずかな隙間に潜り込むように、ほぼ体を寝かせた状態で地面を滑ったテルヨシは、迫ってきたブル・ホースの頭の鼻先が装甲を掠めた感覚に戦慄しながらやり過ぎして、土煙が巻き起こった中で素早く立ち上がり後方を確認して、止まろうとしたブ

ル・ホースがターンし正面を向け直してくるのを見る。

次いで正面からサソリエネミーが両手のハサミを広げて幅を利かせながら迫るのを確認する。

後ろのブル・ホースもすぐに突進を始めるだろうし、サソリエネミーももうその両手のハサミを振りかぶってきて、左右も建物オブジェクトが壁のように立ち塞がっているため、横道に逃げ込む場所もない。

建物内部に入ったところでブル・ホースもサソリエネミーも問題なく突破してしまう。

「伊達で《逃走王》なんて呼ばれてないんで、そこんどこよろしく」

だがそんな危機的状況にも関わらず不敵に笑い、むしろ生き生きとしだしていたテルヨシは、ここからミスの許されない駆け引きをエネミーと開始する。

サソリエネミーはまず両手のハサミを鈍器のように振るってテルヨシを狙うが、右のハサミをバックステップで躲して、次の左のハサミにテイル・ウィップを引つけてハサミの上に着地。

しかしサソリエネミーもサソリらしく尻尾の毒針で鋭い刺突を飛ばしてくるが、これをハサミの下に潜り込むことで躲して、ハサミと毒針をぶつけて自爆を誘発。

さすがに自分の攻撃でまともなダメージを受けるはずもないので、金属質な衝突音とハサミと毒針が火花を散らす程度だったが、その隙にハサミから降りてサソリエネミーの胴体下に潜り込み死角に入る。

そこからすぐにテイル・ウィップも使って胴体下にへばりついていると、突進してきたブル・ホースがサソリエネミーを攻撃し、その攻撃でブル・ホースの角に掬い上げられたらしいサソリエネミーがへばりつくテルヨシごと宙を舞う。

相当な力で飛ばされたか、軽く50mは舞い上がったサソリエネミーがその腹を上に向けたところでテイル・ウィップを解放し腹に乗ると、かなり垂直に近い放物線を描いて落下を始めたサソリエネミーと地面にいるブル・ホースの位置を確認。

どうやらブル・ホースは落下してくるサソリエネミーに後ろ足によ

る蹴りをお見舞いするらしく、ご丁寧に落下地点で後ろを向いている。

ただその蹴りを食らうとサソリエネミーが尋常ならぬダメージと共にブル・ホースから離れる、またはテルヨシにも致命傷を与える可能性があるのです、エネミーをひとかたまりに置きたいテルヨシとしては蹴りは食らいたくないところ。

なので一瞬だけ青い過剰光を両足に纏って落下するサソリエネミーの頭付近の腹を全力で蹴り抜いて強引に体を回転させ、タイミンを計っていたブル・ホースのインパクトをズラす。

それに巻き込まれないように蹴ったあとにハサミにテイル・ウィップで巻き付き、上にいったタイミングで放してサソリエネミーの上に放り出され、回転しながらブル・ホースに突っ込んだサソリエネミーは尻尾付近の腹に蹴りを食らって半時計回りから時計回りに撃ち出されて、しかしインパクトがズレたおかげでほとんど吹き飛ばさなく地面に仰向けで激突。

そしてテルヨシは蹴られて飛んできたサソリエネミーを《インスタント・ステップ》も使って空中で躲しつつ蹴り終えたブル・ホースの腰に着地し、尻尾にテイル・ウィップを巻きつけて振り落とされぬように備えた。

この怪獣大戦争みたいな状況でテルヨシが徹底するのは、2体から同時に狙われない状況を常に作ることにある。

そのためにはエネミーのどちらかにほぼ引っ付いて攻撃を阻止しつつ、もう一方の攻撃を引っ付くエネミーに向けて躲す。

それができるのは常に先を読んで安全地帯を見つけ、そこに飛び込む観察眼と判断力と反応速度が合わさって初めて成し得る綱渡り。

その綱渡りを四神《ビヤツコ》相手に700回以上もやったテルヨシなら、巨獣級と野獣級の2体同時であろうとできないことはないのだ。

それでも長い時間を生き抜くのは集中力の限界があるので、おそらく持って5分くらいがギリギリだろうが、それだけ稼げればテルヨシが死亡してクレーターに向かわれても、もう5分は稼げるはずだ。

一応はそこまで計算して足止めを徹していたテルヨシではあるが、まさに暴れ牛のごとく引つづくテルヨシを振り払おうとするブル・ホースにロデオする形はなかなかハードで、地に足がつかないといった感じで振り回されるうちにサソリエネミーが起き上がってきて、ブル・ホースかテルヨシかどちらを狙っているか全くわからない感じで突撃してくる。

それを見定めるためにブル・ホースの後ろ足が地面に付いて再び蹴り上げるタイミングで腰を踏み台に大きくジャンプし迫るサソリエネミーを一気に飛び越えて後方へと逃げつつ挙動を見てみると、サソリエネミーはテルヨシが後方に回っても進路を変えることなくブル・ホースへと迫って、さっきの仕返しとばかりにハサミで殴打。

そこからはブル・ホースもテルヨシよりもダメージを与えてきたサソリエネミーをターゲットイングしたようで、ハサミに対して角で応戦して怪獣大戦争が本格化。

「よし、これであとはパドが連れてくるやつを……」

テルヨシが蚊帳の外になつてくれたことで時間稼ぎのリスクも減ってくれて、あとは様子を見ながらパドが連れてくる大型エネミーもあれに巻き込んでクレーターに戻れば最良。

そう思っていたら来た道を走って戻ってきたパドの姿が見えて、その後ろを追いかけてきたエネミーの姿も捉えたが、なんかそのエネミーが俗に言うスライムのような軟体生物型のエネミーで、しかもヘドロが形を持ったような毒々しい紫色の見た目をしていた。

なんとなく物理攻撃が効かなそうな匂いがプンプンするが、連れてきたからにはどうにかしなきゃならないため、戻ってきたパドがターゲットイングされてるのをまずは自分に移そうとわずかに溜まった必殺技ゲージを消費して《インフェルノ・ステップ》を発動。

「あのエネミー、可燃性物質を体内に含んでる」

「嫌だなあ、爆発で死ぬかも」

5秒ほどで効果が切れてしまうので手早く行こうと駆け出し、すれ違ったパドと短い情報共有をする。

それによるとまず間違いなく攻撃が当たると爆発が起こるが、爆発

も炎熱属性に含まれるのでインフェルノ・ステップならほぼ無効化できる、はずだ。

というかそうじゃなきゃ本当に死ぬので必殺技の力を信じてスライムエネミーに飛び蹴りを実行。

ズブンッ！ という気持ち悪い感触と共に体内に入り込んだ炎熱属性を帯びた足が火種となってスライムエネミーの体の一部がテルヨシを巻き込んで爆発。

爆発によるダメージこそ炎熱吸収効果もあつてほとんどなかったが、何故かそれによつて拡散した悪臭の方がキツくて、反射的に足を引っこ抜いて後退。

どうせなら酸性の液体とかぶち撒けてくれる方がまだマシだったと思いながら、スライムエネミーのターゲティングが自分に移つたことを確認し、今度は圧殺しようとするそれを引っ張つて喧嘩するブル・ホースとサソリエネミーの方へと誘導。

幸いなことに2体とも足をガツチリと止めて撃ち合いをしてくれていたので、サソリエネミーの腹の下へと滑り込んでスライムエネミーが後ろから覆い被さるようにしてやる。

すると面白いようにサソリエネミーを呑み込んでのし掛かつてくれたので、巻き込まれる前にさらに前進して両手のハサミとブル・ホースの突き出された角を掻い潜つてブル・ホースの体の下を通り抜ける。

「これでどうよう？」

スライムエネミーのターゲティングが自分にあることを加味して2体を巻き込む直線軌道で逃げてみたが、予想通り直進してきたスライムエネミーが2体にまとわりついて、その2体の足掻く攻撃が当たつてターゲティングがテルヨシから外れてくれたか、ブル・ホースとサソリエネミーを同時に呑み込もうとうねり始めていた。

その怪獣大戦争に妖怪が加わった地獄絵図は少し結末を見ていた気持ちがありつつも、横をスルツと抜けてきたパドが近寄つて背中に乗るように促してきたので、クレーターにすぐには来そうにないエネミー達を放つて急いで来た道に戻つていった。

《災禍の鎧マークII》が作り出した巨大なクレーターに心意によって引き寄せられた大型エネミーをどうにか離れた位置で喧嘩させて到着の時間を稼いだテルヨシとパドは、2分とかけずに再びクレーターまで戻ってくることに成功する。

《巨獣級》エネミー《ブル・ホース》とエンカウントしてから10分と経っていないはずだが、その間にマークIIを空へと引っ張っていったハルユキがクレーターの中心で力なく倒れるマークIIのそばでニコと支え合って立つ姿を見つける。

その姿を見て心配するようにクレーターの縁から走ったパドの背に乗るテルヨシも近寄り、全員ボロボロではあるが無事なことを確認して安堵。

そして力なく倒れるマークIIを近くで見ると、人型に戻ってはいたがあれだけ強固だった装甲が頭部と右腕を完全に消失させて、その欠損部分からどす黒い障気のようなオーラを噴き出させている。

「よくまあ、こんだけのダメージを与えられたもんだな……」

「それは……ニコと、とても心強い仲間がいてくれたからです………。それより先輩とパドさんも無事で良かったです。近寄ってきたエネミーをどこかに引っ張っていつてくれましたよね？」

「ん？ あの状態でそこまで見る余裕があったのか？」

「あつ、と……それはその……ここで説明するのは少し難しいかもです」

その現実を疑問にして口にしてみると、それを実行しただろうハルユキがなんともらしく要領を得ない感じで回答するが、よくわからないので今は結果を受け止めるに留める。

そうしていると必殺技ゲージを溜めに行っていたチユリとタクムも戻ってきて、今度こそ成功させると意気込んだチユリがみんなの視線を一身に受けて2度目の《シトロン・コール》をマークIIへと放った。

《クワイアー・チャイム》から出た緑色の光がマークIIを包み込んで

10秒。言うことすら出来なかったマークIIからすうつと左腕が消失。正確には消失した右腕も一緒にだろうが、主砲のパーツがユニコに戻ったのだ。

次に両足が消えてユニコの中へと戻っていき、3つ目は《インビンシブル》の心臓とも言えるべきコクピット・ブロックが消失。

するとそのコクピットブロックに入っていた《ウルフラム・サーベラス》が残るスラスター・ブロックを体のサイズに合わせて背中に装着した状態で出現し横倒しで地面に倒れる。

まさに奇跡とも言える確率で死亡せずにいたサーベラスの頑強さには感服するが、マークIIを消滅させたとしてもサーベラスの取り巻く環境はまだ劣悪と言っているかもしれない。

それこそマークIIが消滅してしまえばサーベラスの存在意義を奪われ、直前には加速研究会と敵対する意思を見せてしまった以上、強者となる可能性をみすみす敵に回すなんてことをやつらがするわけもなく、そこから抜け出すだけでも孤独な戦いが待っている。

それを考えればいつそのこと、ここで全損させてあげるのも救いなのかもしれないが、そんなことが救いになるなら、加速研究会なんて組織を完膚なきまでに叩きのめしてサーベラスを引っ張り上げる方がいい。

そうしてまた1つ加速研究会との因縁が増えたところで、いよいよ残るスラスター・ブロックがユニコへと戻るといったタイミング。

サーベラスの背中のスラスター・ブロックが光に包まれて消えるところで、あまりにも唐突にスラスター・ブロックごとサーベラスの姿がフィールドから消失。

それによって対象を失ったシトロン・コールの光も霧散して消えてしまい、その現象に驚きの声をあげたハルユキやタクム、チユリらとは違い、どういうことか理解が及んだテルヨシとユニコは思わず舌打ち。

「思った以上に早かったか」

「ちっ、道理であいつらの撤退が早かったわけだ」

「テル、気づいてて言わなかった？」

「あー、いやあ……言うともみんな焦ったりとかするかもと思って、あえてよ。」

そうやってわかってる前提の話で進めてしまったが、キョトンなハルユキ達に改めて説明しようとしたら、わずかな時間で考察したタクムがいち早く気づいて口を開いてくれる。

つまりサーベラスはフィールドを離脱した《ブラック・バイス》か《アルゴン・アレイ》によって現実世界でニューロリンカーを抜かれて強制切断させられたのだ。

その可能性に気づいていて言わなかったテルヨシの言い分には納得しがたいといった雰囲気も少しだけあったものの、トータル的判断としては良い方向に傾いただろうとユニコが言ってしまったえば、ハルユキ達も冷静になって納得するしかなかった。

「じゃ、じゃあ、ニコの強化外装のラスト1個は……?!」

「フィールドから消えられちゃあ、どうしようもねえ。スラストは、しばらくあいつに預けとくしかねーな……」

だがそうなつてからユニコのスラストが取り戻せなくなったことを嘆いたハルユキに現実を受け止めたユニコが仕方ないと言うが、これ以上できることが本当にないのかと諦めきれないハルユキが悲痛の声を漏らす。

その気持ちはわからなくないが、それ以上のことを言ってしまうと本当は一番のショックを受けているはずのユニコが泣きかねないので、明るく振る舞うのも少し違うが希望だけはあることを述べる。

「結果は少し残念だったけどさ、加速研究会にとって災禍の鎧マークⅡが重要なものなら、サーベラスもスラストもまだ大丈夫ってことだ。それならまた取り戻すチャンスはあるって」

「それはそうなんでしょうけど……でも……」

「それからエネミーを遠ざけたって言っても、オレとパドは大型だけをそうしたってだけで、他のは……」

と、多少なりとも強引に話をスライドしようとハルユキの言葉を切って状況を見ようとしたら、物事が悪い方に向いてきてしまったかのようにクレーターの縁に20を越える小獣級エネミーがゾロゾロ

と姿を現してしまおう。

本来ならばここに来ていたはずのブル・ホースやサソリエネミーをテルヨシとパドが遠ざけてしまった結果なのか、こんなになっていたのかというエネミーの数にちよつと引きつつ、こちらの消耗を考えてもいくら小獣級とはいえ相手にするのは厳しいものがある。

「どうしよつか、ニコたん」

「んなの突破するか、クロウにまとめて運んでもらうかしかねえだろ」
「こ、この人数をいっぺんには今の僕では無理そうです……」

「なら全員でどこかを一点突破するしかないね」

「ニコちゃんの強化外装を全部取り戻せなかったんだから、せめてみんな無事に戻らないとねー!」

「TR。その通り先陣は私とニコが務める」

「突破するならば北に向かいますし。黒雪姫先輩達がこつちに向かつてくれますから」

また何でそんなことがハルユキにわかっているのかと疑問はあったが、呑気に話をしている暇もないのは間違いないので、それもさっきの発言と一緒に説明してくれるだろうと呑み込んで、全員がクレーターの北側へと向けて出発。

しかしテルヨシは殿を務めると言いつつ最後列になってから、クレーターの中心付近に浮かぶ死亡マーカーに目を向けて少し立ち止まる。

誰のものは言うまでもなく、バイスとアルゴンによってほぼ即死させられた《シーバ・カタストロフ》のものだが、そのマーカーの表示する蘇生時間が残り10分を切っていたのが見えて思わず考えってしまった。

おそらく蘇生したカタフならこの状況でも小獣級の群れ程度は適度に交戦しつつ撤退することは不可能ではないだろう。

だがこのカタフもまた加速研究会に長い間、騙されてきた犠牲者にして、その主要な人物と接点を持つ。重要な情報を持つ人物ということになる。

サーベラスが強制切断されたタイミングでカタフが消えなかった

のなら、リアルのカタフはバイスやアルゴンとは別の場所からダイブしているのだろうが、リアルでも接点がある時点で加速研究会がカタフをこのまま放置するとは考えにくい。

「……………10分後に戻ってくる。エネミーはその間に引つ張るから、クレーターの南のところまで待っててくれるか?」

今後、残酷な言い方にはなるがカタフと会えるかどうかすらわからなくなってしまう以上、せめてカタフから聞き出せる情報くらいは引き出して加速研究会へ反撃のための手掛かりを掴もうとしたテルヨシは、物言わぬ死亡マーカアのそばで聞こえてはいるだろうカタフにそれだけ言って先行したハルユキ達を追って北へと走り出した。

だが予想以上にエネミー達の包囲が早くて、クレーターに殺到してきた数の暴力がテルヨシ達の足を止めに来るが、そうはいかないとパドの背に乗るユニコが《ピースメーカー》で正面のエネミーを攻撃してくれるも、やはり物量が手数を上回り突破には届かない。

「あともうちよつとでしょ! 根性見せなさいよアンタ達!」

人海戦術とはよく言ったものだが、小獣級エネミーにそれをされたらひとたまりもない。

この際、死んでもそこまで痛手ではない状況と開き直ってあっさり死んで、エネミー達が引き上げたあとに帰ればいいかもしれない。

そんなことを頭の片隅で考えかけた瞬間、向かっていた北の空からなんとも頼もしいような、懐かしいような、勇ましい声が飛んできて……いや、実際になんか飛んできてテルヨシの後ろから迫ったエネミーの1匹に壮絶な飛び蹴りをぶち込んで着地。

その姿はまさしく《エピナル・ガスト》ことサアヤその人だったが、その両腕にはお姫様だっこされた《ソレイユ・アンブツシュ》ことマリアが収まっていて、着地と同時に飛び降りたマリアは迫るエネミーに《炸裂弾》を撃ち込んで周囲にいたエネミーも爆発に巻き込んでしまう。

さらに弾幕薄い! とばかりにテルヨシ達のいる周囲に空から次々と火の矢が降り注ぎ、その中に無数の《リトル・ボム》まで混じつての大爆発が周囲で巻き起こる。

「《フレイルム・ボルテクス》！」

それらを放った《サンセット・ボンバー》ことユリと《アーダー・メイデン》こと謡は、ユリ自身がおそらくはサアヤとマリアを足にぶら下げて《デイセント》で滞空しながらクレーターの上来て、謡は《スカイ・レイカー》ことフーコと一緒に《ゲイルスラスタ》で飛んで来たようだ。

さらにフーコのホールドから離れて落下してきた謡が直下のエネミーに対して猛烈な炎を渦巻かせた直射系の必殺技を放って炸裂させて、その爆発でブレーキを掛けて見事に着地。

ユリも近寄ろうとしたエネミーにリトル・ボムを投げつけながら優雅にテルヨシのそばに着地した。

「消耗もあるんでしようけど、呆けてないで動く！ あと頭のそれ、私に貸しなさい。《ブレード・ファン》が壊れちゃってないから武器が欲しいのよ」

「……それは良いけど、元気すぎない？」

「ガストのこれは主らが無事だったことへの安堵じゃよ。じゃが儂とアンは有り余つとるから、メイデンと3人で殿を務めようぞ」

向こうでもISSキット本体と戦っているはずなのだが、何故か自分達よりも活力に満ちているサアヤ達の姿が頼もしくはあるが不思議で、ブレード・ファンが壊れるなんて激闘のあとにも関わらずテルヨシの《テイル・ウィップ》を貸せと言ってくるサアヤの血の気が怖い。

だがとにかく今はこのエネミーの群れを抜けてみんなが生還することが大事なので、言われた通りにテイル・ウィップを後頭部から外して本来の鞭となったそれをサアヤに手渡すと、初めて使うはずのそれを持って頭上で振り回しながら先頭に回って道を切り開いてくれる。

よくよく見れば北のクレーターの縁にはエネミーを蹴散らしながら道を開く《ブラック・ロータス》こと黒雪姫と《アクア・カレント》ことあきらも到着して、ヘトヘトのハルユキ達に声援を贈っている。

そんな仲間の姿を見ればテルヨシもサアヤ達が元気な不思議は自

然と解けて、自分にもいつの間にか活力が復活していることに気づけば、もうやることは一つ。

殿はユリや謡が巻き起こす爆発がエネミーを蹴散らしてくれ、先頭もサアヤが猛威を振るっているなら、テルヨシが蹴散らすのはハルユキ達に横から迫るエネミー。

油断すればこつちがやられるほどには強い小獣級だが、これほど心強い仲間がそばにいてやられたら情けないにもほどがある。

そんな気持ちでエネミーを蹴散らすテルヨシにユニコとパドも合わせて左右のエネミーを攻撃してくれて、完全に敵なしな状態になったところで黒雪姫とあきらがいているクレーターの縁に到達。

そこからさらに北へと向かってエネミーの包围を抜けてから様子を見てみると、テルヨシ達の気迫に圧されたか、はたまた大型エネミーが現れる前兆か、小獣級エネミー達は仕掛けてくる様子がなく、遠くにいるエネミーからポツポツと散り始めていた。

「向かってくるというならば、全力で相手をしてやるぞ」

そこへ全員を守るようにエネミー達の前に躍り出た黒雪姫が、半ばから折れてしまっている腕の剣を持ち上げて、渾身の覇気で威嚇。

その覇気に圧されたか、仕掛けようかと敵意を見せていたエネミー達もジリジリと後退をして、最後には四方八方に散って姿が見えなくなってしまうた。

「うむ、これで今日の戦いは終わりのようだ。さすがに皆も疲れただろうから、最寄りのポータルから帰ろう。現実世界へ」

大型エネミーが来るとまた状況は変わるが、差し迫つての脅威は退けたところで黒雪姫が全員に作戦終了の宣言をし、警戒はしながらもひとかたまりになって移動を開始しようとした。

しかしテルヨシにはまだやるべきことがあるので、歩き出した面々には続かずにその場へ留まって口を開く。

「悪い、姫。オレまだやることあるから、先に帰っててくれ」

「……急ぎなのか？」

「帰ってからだと取り返しがつかないかもしれないとだけ。詳しくは帰ったらするよ」

「そうか。だがまだエネミーもその辺をうろついているだろうしな……お前1人で大丈夫か？」

「なら私とユリがついていくわ。3人なら小獣級くらいは蹴散らしてポータルには行けるだろうしね」

この場でカタフに会って話を聞いてくる理由を説明すると時間を使うので、かい摘んでやることだけ報告すると、汲んでくれた黒雪姫も言及は避けてすんなり行く許可を出してくれる。

ただ1人では不安だと漏らすと、サアヤがユリを指差して同伴すると提案し、それに異論はないかとテルヨシを見てくるので、問題ないと示せば話は終了。

長居は無用と言うように移動しろと促したテルヨシに従って黒雪姫達は移動を再開して北の方向へと歩いて行って、残ったテルヨシ達も行き先は決まっているので迷いなくクレーターの方へと歩を進めた。

10分後に戻ってくると言っていたが、予想よりも早く援軍が状況を打破してくれたので、カタフが蘇生するより前に再び死亡マーカーのそばへとやって来れた。

そして周囲を警戒しながら数分だけ待てば、待機時間を経たカタフが蘇生してテルヨシ達の前に出現するが、蘇生して早々にカタフが取った行動はその場に正座して頭を下げる、土下座だった。

「……すまなかったす。知らずに騙されていたとはいえ、赤の王を助けに来たテイルさん達を僕は……」

「あー、そういうのいいよもう。お前が悪いなんて誰も思わないし」「それでもこうしなきゃならないです！ 僕が加速研究会に騙されなければ、赤の王があんなことにならずに済んだはずっす！ 災禍の鎧なんてものも再び現れたりしなかったっす……」

唐突な謝罪のせいでテルヨシ以外にはなんのことやらな話が展開され、サアヤとユリはキョトンとしてしまっていたが、とりあえず見晴らしが良すぎるここから移動しようと提案して、品川駅のポータルを目指しながら改めて話をする。

「過ぎたことをとやかく言うのは生産性がないもんだよ。大事なものは

これからどうするかだ。マーカーの位置から色々と見て聞いてたろ。ならオレが聞きたいことはわかってるよな」

「ねえ、何でカタフがあそこで死んでたかの説明はしてくれないわけ？」

「話を聞く前に儂とガストにも情報を共有させてはくれんかの。勝手に ついて来た身で申し訳ないとは思うが」

「そうだね。かい摘んで話すと……」

移動しながらでもカタフの落ち込み具合が見て取れるほどには消沈していたが、いつまでもそれではこつちも滅入るので前向きな話に切り替えようとしたら、話についていけてなかったサアヤとユリが理解できるように説明を要求してきたので、そりゃそうだと納得して自分が見てきたことを簡潔に話していった。

要所だけにまとめた説明で色々とツツコミどころはあつただろうが、テルヨシの話を聞いて言葉を失ったサアヤとユリは、なんだかまとまらない話ながらに理解はしてくれたか、本題に入ってくれと促す。

「それじゃ聞くぞカタフ。お前が長い間、友人と言っていたあのプレイヤーホームの持ち主。そいつが加速研究会の会長であることがわかった。酷なことを聞くのはわかっているが、そいつは誰だ？」

「……………僕もバーストリンカーつすから、他人のリアルをバラすよいうなことは、たとえ許せない人であっても出来ないっす。それにここでテイルさん達にその人と会長が同一人物だと言ったところで、物的な証拠は何もないんす。次の会議でそれを主張したところでどうにも出来ない。それをわかってても聞くんすか？」

「ああ。誰ともわからない敵を攻めるのは、それだけ余計な力が必要になる。何かをするには周囲への証明以上に、自分達がそうとわかって動けた方がいいんだ」

「そう……………つすね。テイルさんの言うことはもつともつす。ただここでの話は黒の王の耳にも入れるんすか？」

「報告するって言っちゃったしなあ……………そこは了承してもらえるとありがたいんだが」

「いや、いいんすよ。ただ僕の中でも腑に落ちない引っ掛かりが、今回のことでわかったような気がするんす。黒の王はきつと3年前のあの時から、あの人と決別してたんすね……」

なかなか勿体ぶる様子のカタフの言いたいこともわかるが、どうしてもと言うテルヨシやサアヤの気持ちを汲んで、何やら待機時間中に色々と考えていたっぽいことも吐露しつつ、自分にしかわからないその話は置いておいて、いよいよその重い口を開く。

「あのプレイヤーホームの所有者。僕の友人であり、影で加速研究会の会長だった人は、あのプレイヤーホームのある戦域を領土にする白のレギオン《オシラトリ・ユニヴァース》のレギオンマスター、白の王《ホワイト・コスモス》っす」

「なっ!？」

「にっ!？」

「ぬっ!？」

そこから飛び出したバーストリンカーの名前に、思わず驚きを分割して声にしてしまったテルヨシ達。

あのレベル8のバイスやアルゴンが傘下にいる組織なら、その頂点にいる人物が同等かそれ以上の立場にいることは予想できていた。

が、まさか《純色の七王》の1人がそうとは思ってもいなかったから、その驚きはひととき大きいものだった。

「これは言うべきかどうかかわからないっすが、黒の王と交友があるなら言うておくっす。そのコスモスさんは、黒の王の《親》なんす。だから黒の王は実質、加速研究会の会長とリアルでも見知った関係にあるってことっす」

Acceleration Second 60

《災禍の鎧マークII》と心意によって引き寄せられたエネミーとの戦闘を終えて、ようやく現実世界に帰れるといたところで、加速研究会に騙され続けていた《シーバ・カタストロフ》が蘇生するのを待って話を聞くことができたテルヨシとサアヤとヨリ。

しかしそのカタフからもたらされた加速研究会の会長の正体が《ホワイト・コスモス》であると聞かされて、さらにそのコスモスが黒雪姫の《親》である事実も突きつけられ言葉を失っていた。

「2年半前くらいになるっすか。コスモスさんから黒の王と仲違いをしてしまったと聞かされて、その理由についてはガストさん達も知つての通り、先代の赤の王の件だとすぐにわかつたっす。実際、コスモスさんも頑なにレベル10を目指すと利かなかつた黒の王と口論になつた末に離別してしまつたと言つてたっす。僕は黒の王のリアルは知らないっす、コスモスさんが本当に残念そうにしていたのが印象的で、でも同時に、あのコスモスさんが『説得できなかつた』という事実はどこか引つ掛かりがあつたんす」

衝撃で沈黙するテルヨシ達を他所に話を続けるカタフは、結構がつつりコスモスとの交遊があることをうかがわせる内容で当時あつたことを話してくれる。

そこから垣間見えるコスモスは非常に聡明な『表の顔』を持っていて、他人に絶対にその本性である『裏の顔』を見せない狡猾さとポーカーフェイスがあるようだ。

おそらく黒雪姫はコスモスが加速研究会の会長であることをまだ知らないだろうが、当時の仲違いの理由については、カタフの言う通りのことが全てではないと思える。

「でも今回のことで蘇生待機中になんともなく思つたんす。もしかしたらコスモスさんは、黒の王とそうなることを最初から予想していたんじゃないかって。ならどうしてそんなことになるかと予想していたのかを考えた時、赤の王の《アームズ・クリエイション》と《ISSキツト》がふと繋がつたっす。アルゴンさんの《反魂》の話から僕は……」

「……コスモスがライダーのゴーストを作るためにロータスを利用して全損させた。つてところかしら」

そもそもコスモスから聞いた話ということが今はもう真実を語っていないと証明しているが、疑念を持ったカタフは事の真相というものに迫っていたのかもしれない。

しかしカタフが言わんとすることを言葉を切つてまで話したのは、情報ではテルヨシより劣るはずのサアヤで、しかもその仮説に対してカタフが首を縦に振ったので驚きは一層だ。

「ロータスから詳しい話は後日って約束してたけど、そういうことか……実際にISSキット本体にライダーのゴーストが入ってたし、そのライダーも同じような予想はしてたのよ。自分の能力目的でロータスを利用して全損させたんだってね。それが誰かまでは言わなかったけど、あの段階でそんな過去があったなら、話を聞いたロータスはもうわかってるわね。加速研究会の会長がコスモスだってことは」

「そうっすか。なら僕が黒の王を心配するようなことは不要っすね。戻ったら伝えてほしいっす。あなたが当時したことを僕は納得していなかったっすけど、今は納得しているって」

「そんなの、次の会議の終わりにでも小声で言っつてやればいい」「テイルさん、そう言っつてもらえるのは嬉しいっすけど、わかってるんすよね、今の僕の状況を。だから今こうして会っつて話をしてるんすよね」

どうやらミッドタウン・タワーでも色々あったみたいだなサアヤが、そこから得た情報からカタフの言わんとしたことがわかったと話せば、カタフも推測が確信に近づいたか何やら覚悟を決めた雰囲気だ。黒雪姫への言伝を頼む。

そして自分の置かれている状況もしつかりとわかっているカタフは、口にはしなかったテルヨシの気持ちを汲んであえて自分から言っつてみせた。

真実を知った自分が、これから加速研究会にどんなことをされるかはわからない。だからこうして話ができるのも最後かもしれない、

と。

「のうテイルよ。話の中でバイスとアルゴンはまだカタフを利用しようとする言動を取っていたのじゃろう？　ここまで敵対されてまだ利用しようとするからには、カタフもまたサーベラスと同様に重要な役割があるとは考えられんか？」

「それについては推測ができてるんだよ、バーちゃん。今回、カタフがああ場所に呼ばれてダイブしていたのが偶然じゃないなら、加速研究会の目的は『カタフをレベル10にすること』にあると思う」

「レベル10って、言うのは簡単だけど、実行しようとしたって……」
全損する可能性を匂わせたことはサアヤとユリにもわかったのか、ユリがテルヨシがした話の中でカタフをまだ利用しようとしている節の発言があつたことを言及し、実際にその事に関しての推測も立つてたので口にする。

サアヤもそんな現実的な話じゃない推測にはまさかといったことを言いかけて、しかし今回でユニコを拉致して『全損させる気でいた加速研究会の目論み』に気づいたか、その最も効率の良いやり方に考えが至つたのだ。

「……《インビンシブル》を全て奪つたレインちゃんをレベル9になつたカタフに倒させるため？」

「実際、コスモスから『レインの強化外装が全て奪われて失意のどん底に落ちてしまった。本人も消えたいと望んでいるから消してあげてほしい』とか言われたら、さっきまでのカタフならやってたかもしれないだろ。そこにオレ達が主犯だって聞かされたなら、そのあとにロータスも狙わせたかもしれないし、他の王もグルだって理屈ありで言われたら……」

「……想像するに恐ろしいです。実際に僕は彼らに踊らされてテイルさん達と敵対してたつすから……」

レベル9同士の戦いにはサドンデスルールが付きまとうため、たとえユニコがどんなに安全マージンを確保していようと、レベル9に敗北してしまえば問答無用で全損してしまう。

今はまだレベル8のカタフだが、バイス達の発言からもカタフがす

でレベル9になるだけのポイントを所有していることは間違いない。

さらにテルヨシはその目論見が失敗したことで最悪なシナリオも推測するに至っていたが、カタフの能力からもチグハグなものになるから可能性は低いだろうと口にはしなかった。

そう。回収された災禍の鎧マークIIを『カタフに寄生させてレベル9にし、王達を倒しレベル10に至る』などという、最悪なシナリオは起こり得ないことだ。

ネガティブな考えは口にしないのが良いと自分に言い聞かせて、カタフがこれから何をしようとしているかもこの際だから何も言わず、品川駅が見えてきたところで喉から出かかっていたことを思い切つてカタフに告げる。

「なあカタフ。お前がどうなるかはわからないし、何をしようとしてるかも詮索しない。だがこれだけは言っとく。お前にその気がなくても、オレ達のレギオンに入らないか？ オレ達はいずれ遠くない未来に《帝城》を完全攻略するつもりで、今はその準備をしてる。加速研究会を野放しにするつもりもないが、オレ達がブレイン・バーストを楽しむことを忘れるのだけはあっちゃいけないって、そう思う。今のお前にはそういう楽しむ気持ちに余裕がないって感じる。だから、来いよ。お前に教えてやる。この加速世界がどれほどの楽しさをもたらしてくれるのかを」

言いながらカタフに対して自然と手を差し伸べていたテルヨシを見て、すぐには言葉を返さなかったカタフは、差し伸べられたその手をじつと見ながら、1度は自らの手を持ち上げてみせたが、2人の手が交わされることはなく、そのまま胸の前で固く拳が握られる。

「……嬉しいっす。本当に、今まで誘われたどのレギオンよりも強い気持ち伝わってきたっす。でも僕がその輪に入るためには、清算しなきゃならないことがあるんす。もしもそれが出来た時には、こっちからお願ひに行くっすよ。『メテオライト』に入りたいっす」

「……そっか。その時が来るのを待ってるよ」

帰ってきた言葉は残念なものとはなったが、悲観的だったカタフか

ら未来が語られたのは十分な進展と言えるので、握られなかった手を引つ込めたテルヨシは生真面目なカタフを尊重してそれ以上のことは言わずに話を終えた。

まだまだ聞くべきことがあると感じつつも、カタフもカタフで整理できずに混乱させてしまう内容があったためか、それ以上の情報は伝えるべきか悩んでいたらしく、品川駅のポータルがある改札前ロビーに辿り着いてから、1度その足を止めて迷っていたことをテルヨシ達に報告。

「これは僕もまだよくわからないんですが、あのプレイヤーホームで赤の王を抱きながら僕にテイルさん達を排除するように言ってきたのは《七連矮星》^{セブン・ドワース}の序列4位《アイボリー・タワー》つす」

「何でオシラトリの小人が……なんて、今さらだな。加速研究会の隠れ蓑がオシラトリって考えるのが妥当だわな」

「そのアイボリーはテイル達の前に姿を見せてないわけでしょ？ レインちゃんをバイスに引き渡してさっさと離脱したってこと？ それとも何か別の理由が……」

「その辺の考察は今はやめた方が良さそうっす。どのみち、白のレギオンが加速研究会と繋がってるのは確実にあったってことっすから」「じゃな。あやつらに打撃を与えられれば、その辺も自然と見えてこようぞ」

「いまいちわかりにくいのが、カタフが言うか迷った理由は、いたはずのアイボリーがいなくなったことではなく、本来なら侵入者などいない前提で進めていた計画の遂行中にバイスとアルゴンだけいる状況を作ることの不自然さだ。」

カタフにその正体を隠してきた加速研究会なら、当然バイスの姿を見られるのも問題で、カタフが予定通りに遂行していたとして、その後は誰がカタフに状況を説明するのかという疑問。

事をスムーズに進めるならアイボリーは残って然るべきところで姿を現さなかった。そこに何か事情があるならそれは何か。

しかしそれを考えたところで考察する材料が不足してしまっている、だからカタフも深く考えなくていいと言って報告を終えた。

そしていよいよ話すこともなくなつてポータルを潜るだけになつた時、歩み出そうとしたカタフ達を止めたテルヨシは、冴え渡る観察眼と考察で危惧していたことを小声で伝える。

「実際に見てみないとわからないから黙つてたけど、あのポータルの周りに『影』が射してる」

「……いるんすか、あいつが」

「ちよつと待つてよ。話じゃ2人とも離脱したんでしょ？ そんなことあるの？」

「いやガストよ。離脱してサーベラスを強制切断させるだけならば、1人おれば十分じゃ。離脱したと見せかけて、儂らのことを監視しつつ機をうかがっていたと考えるのは妥当じゃろ」

ストレートに物を言つていなかったが、それだけで意図を汲んだ3人が驚きつつもあり得ないことではないと結論。

あくまで可能性の話ではあるが、蘇生したカタフをそのまま帰してしまうことがあるのかと考えた時、テルヨシは離脱前に何らかの対処に出てくると確信に近いものを感じていた。

さすがにクレーターが出来てしまったあの場所には影が射すものもなく潜伏は無理だった、遠くから観察しながらポータルに先回りし罫を張ることは十分に出来るのだ。

「じゃあ別のポータルに回つて……」

「無駄だよガツちゃん。監視されてる以上、どこに行つても移動力もあるバイスには先回りされる。無事に離脱するには周囲に影の全くないポータルを探すか、大人しくカタフを差し出すか、強行突破しかない」

「じゃあ考えなくてもいいつすよ。僕が別のポータルに行けば、ティルさん達は安全に離脱できるつす」

「バカちゃんが。そうしないためにオレ達がいる。バーちゃん、お願いできる？」

「最後のひと仕事じゃな。任せておけ」

あくまで可能性の話で、このやり取り取り自体が無駄な可能性もあるが、可能性がある以上は備えなければやられるだけ。

ポータルから30m離れた位置からやることがわかったユリは、その手に《リトル・ビッグボム》を2つ作り出して、それをポータルに向けて1つ投擲。

それと同時に両手でサアヤとカタフをホールドし、ユリに正面から抱きついてもらって残っていた必殺技ゲージを使って《インパクト・ジャンプ》を発動する素振り。

リトル・ビッグボムが爆発しその爆発によって発生した煙で視界がなくなつて、1度はその場に待機しポータルに目を凝らして、その周囲にバイスの板が展開されていないかをしっかりと見る。

——ない。が、まだ油断しない。

リトル・ビッグボムの2つ目を残したのはバイスの板が展開された場合に心意強化して破壊してもらうためと、1発目をフェイントに2発目がまだあるという心理をバイスに与えるため。

その判断はテルヨシとバイスの心理戦になるが、度胸だけは負けないつもりでテルヨシは2発目をユリが放った瞬間にインパクト・ジャンプを発動し、リトル・ビッグボムが着弾するより早くポータルを潜って離脱しようとした。

ジャンプ中はほぼ瞬間移動に等しいので視界はゼロに近いが、集中していたテルヨシはその視界でもかすかに見えた、煙の中からテルヨシ達を挟み込もうとする黒い板が迫つたのに戦慄しながら、ゼロコンマ数秒のタイミングでポータルを潜って離脱することに成功したのだった。

「……つぶねえ」

「心臓に悪いわあ……」

「せめて何か合図はして欲しかったかなあ……」

「それは素直にすみませんとしか……」

ポータルを潜って無事に現実世界へと戻ってきて、ギリギリの心理戦を制したテルヨシが天井を仰いだら、いきなり移動されて負荷もあつただろうサアヤとユリが同様に項垂れながら苦言を呈する。

それには申し訳なきはあるが、そんなことをしている余裕もなかったのだから許してほしいと目で訴えれば、2人も仕方ないかと優しい

目を向けてくれた。

そんな3人が2秒程度の遅れで現実世界に戻ってきて早々に漫才をやるもんだから、先に戻っていた黒雪姫達は何のことやらな雰囲気です。直結していたXSBケーブルを抜いていく。

「あ、あの、僕、保健室に……」

それが完了してすぐにも立つてもいらなかったハルユキが、そもそも今回の作戦を実行するに至った理由でもある日下部綸の元へと行こうとし、それには黒雪姫もすぐに了承して綸の親であるフーコも一緒に5分後に戻ると告げて2人で生徒会室を出ていつてしま

う。

「さて、色々と話したいことは多いが、ここもそろそろ空けなければならんから、話は通常対戦フィールドですることとしよう。スターターは私とフーコにするので、皆は観戦者登録して待機してくれ」

「30分で足りませんかね」

「足りなければもう1戦すればいいだろう。だがテル、そう言うからにはそれだけの案件があるということか?」

「要約すれば足りると思うけど、ほら、オレもサアヤもユリさんも話の整理がついてないことを話すことになるっていうかだから」

「そんなに複雑な内容なのか……お前達は残った先で何をしてきたのだ……」

「カタフに会って話をしてきたのよ。アンタに関わることも聞いてきたわ」

時間を確認すれば生徒会室のレンタル終了となる12時30分まであと8分を切っていて、確かに腰を下ろして現実世界で話をするには時間が足りなすぎる。

黒雪姫の指示に従って腰を落ち着かせたまま一同が観戦者登録を済ませる中で、フーコにテキストメールを打ちながらの黒雪姫に絡むテルヨシが意味深なことを言うから難しい顔をさせてしまったが、サアヤがフォローするように何かをしてきたかを簡潔に述べる。

さすがにそれだけでは黒雪姫も疑問が増えただけだが、自分が関わることなのだとわかっていれば、心構えも出来るだろうと、そういう

ことだ。

ただその心構えにかまけているわけにもいかないの、テルヨシもこれから話すべき事を順を追って整理してみんなに理解してもらえようように思考し、ついでに気になっていたことも調べておくのだった。

5分後。黒雪姫がスターターとしてフィールドを構築し、観戦者として降り立ったテルヨシは、ひとかたまりで集まっていた一同を見ながら《水域》ステージの景色に心穏やかな気持ちになる。

さつきまではどことなく孤独さを感じさせる《黄昏》ステージで激闘を繰り広げていたから、一転して晴れ渡る青空と地面一帯を浅く満たす水に骨組みだけの建物オブジェクトが構成する世界は争い事が似合わないと思ってしまう。

まあ対戦ステージなので戦うことになったら普通にバチバチとやり合うのはバーストリンカーの性だが、今は対戦目的ではないので、近くの建物オブジェクトを斬り倒して全員分の椅子を用意し始めた黒雪姫と、少し離れた位置からやって来たフーコがおそらくは第2校舎の屋上であろう位置にいたハルユキと《アッシュ・ローラー》に早く降りてこいと呼びかけるのを見る。

何やら屋上でコントのようなことをしながらハルユキがアッシュを背中を押して落とし、叫びつつ地面に不時着する様はギャグである。

ギャラリーなんだからダメージもないのに飛び降りるのを躊躇う辺りにアッシュの人間臭さがにじみ出ていたが、そうやってコントをやる余裕があるということは、無事に《ISSキット》による精神干渉は止まったのだろう。

「つていうかあれが綾ちゃんってことに未だに納得がいかないんだけど……」

「完全なるM型だしねえ、違和感は半端ないわ」

「あたしも気になっけど、その辺のことはあとでレイカーに詳しく聞きゃいいだろ」

「さて、日下部君の無事もこうして確認できたので、腰を下ろして今回

の内容をまとめて整理しようか。30分しかないから、主要な話をするのはそれぞれ問題の中心にいたであろう私とハルユキ君とテルの3人が代表で良いだろうか」

そのいつも通りな姿に安堵するも、どこからどう見ても世紀末ドクロライダーなギガうるさいアツシユのリアルが内気な論とは似ても似つかないため、ここに来てシンプルな疑問が浮かぶ。

それには今日アツシユのリアルを知った一同も首を縦に振って賛同の意思を示すが、それはまた別の時間を使って理解すればいいとニコが言えば、円座を作り終えた黒雪姫もスムーズに話を繋げて、異論も特になく席に着いた面々は作戦終了後の話し合いを開始する。

まずは黒雪姫がテルヨシ達と分かれて《東京ミッドタウン・タワー》へと向かった先で起こったことをかなりわかりやすく要約して話してくれる。

ミッドタウン・タワーのポータルと重なる形で鎮座していたISSキット本体の力は強大で、テルヨシ達が戦ったマークIIのような心意エネルギーをほぼ無尽蔵に使ってきたらしい。

そしてそのISSキット本体にはサアヤが言っていたように《レット・ライダー》のデータがサルベージされて本体を依代に存在していたらしく、ライダー本人の意思をねじ伏せてキットを作っていた。

そのライダーもキット本体が大きき力を使って消耗している間は自由になって、その間に今回の出来事について自分の考察を語ってくれたのは、すでにサアヤが推測と共に話してくれた通り。

その話を聞いたあとにキット本体の破壊に辛くも成功したものの、その中に溜め込まれていた心意エネルギーはサーベラスとインビンシブルに転送されてマークIIが誕生してしまったと、そういうことらしい。

あとはこちらの異変に気づいて離脱よりも援軍に駆けつける選択をしてあの場に辿り着いて今に至ると話し終えたところで、サアヤが「あの子の」と話してないわよ、ロータス」と助言すると、思い出したように黒雪姫もその子のことについて話を付け足す。

「途中から共闘してくれた《ボツシユ・ルーレット》だが、あれはどう

やら全損した日にライダーがインストールに成功させた最後の子
だったらしい」

『え……ええええええええええ!?!』

ここまでの話でどこか合点がいったという雰囲気です。特にリアクションを見せてこなかったテルヨシ達だったが、最後の最後でさらつと爆弾が投下されて少しの沈黙のあとにあのユニコとパドさえも席から飛び上がって驚きのリアクションをさせたのだった。

ようやくの思いで《無制限中立フィールド》から離脱して、今回の目的を全て達成したあとの通常対戦フィールド内でのミーティングが開始され、元気になった日下部綾こと《アツシュ・ローラー》の姿もある中、黒雪姫の話の最後に付け足された情報の衝撃にテルヨシ含めた初耳組が飛び上がった。

「あのアホ娘が《レッド・ライダー》の《子》だつて？ 冗談だろ」
「ニコ、それはルーレットに失礼」

「どうりで《親》が名乗り出てこないわけだ。加速世界にもういないんだもんなあ。でも《七王会議》の当日にインストールしたつてことは、ルーラーはレクチャーとか受けられなかつたんじゃないの？」

黒雪姫は忘れかけていたくらいに流し気味の話題だったが、こつちは《ISSキット》本体の破壊よりも驚く事実なだけに《ボツシュ・ルーレット》がライダーの子だと半信半疑になるのも仕方ない。

しかし実際にルーレット本人がそう話して、ライダーのゴーストもその事実を認めて受け入れていたと聞けば信じるしかない。

だがそれならとテルヨシがもつともな疑問を口にすれば、察しが良いなどサアヤが答える。

「まあその辺はリアルでライダーと恋仲だったソーンが親代わりになつてたみたいよ。ルー子も『お姉』つて呼んでたしね」

「赤の王の子である紫の王《パープル・ソーン》が親代わりつて……なんと言いますか、経歴だけ見れば凄いですね……」

「そんなこと言ったらハルだつて黒の王の子でフーコ姉さんの弟子じゃん。自分が恵まれてるつてことに気づかない鈍感さはどうかと思っけどお」

「あらチーコ、嬉しいことを言ってくれますね。それと鴉さんはサツちゃんと一緒に後日、たつぷり『可愛がつてあげます』ね」

「は、はひ……お、お手柔らかにお願いします……」

よく考えればリアルではそういう関係にもなつてたんだつけなど、ライダーとソーンのカップリングを今さらに思い出して納得したテ

ルヨシを他所に、ハルユキとチユリとフーゴが和むコントを披露してひと笑いが起きる。

その笑いだけでも皆の中で心に余裕が出てきたことがうかがえるが、いつまでも脱線していたら30分などすぐなので黒雪姫が仕切り直すように両手の剣を打ち付けて自分の話は終わりだと告げる。

「あ、ごめんロータス。最後に1つだけ。テル、一応ルー子にも声はかけといたんだけど、レギオンに入ってくれるかどうかは微妙なところだったわ。とりあえず返事は後日ってことにしてあるから、接触とかあつたら聞いといて」

「抜け目ないねサアヤ。了解です。姫、続きをどうぞ」

「ン、では次は順序でいくとハルユキ君がいいかな？ ハルユキ君、お願いしてもいいか？」

「あ、はい。えっと、話すとなるとバイスを追っていったところからです。すね——」

最後にサアヤがちやっかりルーレットをレギオンに勧誘したことも告げられたが、これはテルヨシとサアヤと、場合によってはユリにしか関係ない話なので、この場ではあつさりと終わらせてハルユキに話の主導権が移っていった。

バイスを追っていったハルユキは、その先にあつたあのプレイヤーホームまで直通の影の道——バイスが作ったと思われるもの——を通って食らいつき、そこにいたタイムされた衛兵エネミーに阻まれて1度はバイスを見失ったらしい。

その時にハルユキが出現させていた4枚の光翼。《災禍の鎧マークⅡ》を倒した時には失われていたが、あれを貸し与えたという《神獣級》エネミー《大天使メタトロン》。その第2形態が翼を介して助力し、別の影の道を通ってきたタクムとチユリ——テルヨシとパドもこの道を通ってきたはずだが出た場所は違つたみたいだ——と合流してあの中庭に到達したのだとか。

あとはテルヨシも知るところの出来事が中庭で起こり、マークⅡと一緒に空の上まで飛んでいったところに差し掛かって改めて話に集中中。

上空500m付近にまで引つ張ったマークIIは突如としてその手を放して人型形態に戻り、落ちながらハルユキとユニコに2門の主砲を発射。

これがテルヨシが見た衝突の正体らしいが、衝突の直前にハルユキは《無制限中立フィールド》でさらに思考を加速させたような空間。メタトロンが導いた《ハイエスト・レベル》なる領域に足を踏み込み、無制限中立フィールドで流れる時間をほぼ止まったような状態で、さらに大きく認識を広げ俯瞰で世界を見ることができ、それによってテルヨシ達や黒雪姫達が今、どこにいて何をしているかを知ったのだとか。

そのハイエスト・レベルでずいぶん前から世界を見ていたメタトロンは、自分が生まれた頃はただ挑戦してくるバーストリンカーを倒すだけの思考しか持たなかったことを話し、加速世界誕生から今までただの1度も倒されずに生き続ける中で『自分という存在が何なのか』を考えるようになったのだと。

それはもう人間と同じような確かな意思がメタトロンにも存在することを意味していたが、そのメタトロンがハルユキから《帝城》内部の情報を教える代わりにマークIIを倒す術を託され、その力でメタトロンと融合のような状態になって無制限中立フィールドへと戻り、メタトロン第2形態と同じだけのHPゲージと強度を持ったハルユキは主砲の一撃を直撃されながら耐え抜く。

それでもHPゲージを8割ほど削られて、これで自由落下に入ったマークIIは地面に激突して終了、かと思われたが、スラスタを噴射したマークIIがフーコのようにロケットのごとくハルユキに突撃して《ダーク・ブロー》を放ってきたらしい。

その一撃にメタトロン第1形態も無敵状態で放っていた大出力レーザー《トリスアギオン》で迎え撃つて、自らをトリスアギオンのエネルギーに変換したメタトロンの犠牲の末に攻撃をほぼ相殺しながら右腕を破壊。

そこから今度こそ落下に入ったマークIIをユニコと協力して地面に叩きつけて沈黙させ、その後すぐにテルヨシ達が駆けつけて今に至

るといった感じだったみたいだ。

それらを聞いてまるで夢の中での出来事のような感覚もある現実
に言葉が出ない黒雪姫達。

テルヨシとて力を貸したというメタトロンの行動には驚かされた
が、現実としてあのマークIIを倒すまでに至れたのは、ハルユキとユ
ニコの2人でも不可能に近い所業だったことは間違いない。

少しの沈黙のあとに黒雪姫が口を開いて、自分達がキット本体を破
壊しなければマークIIの誕生は防げていたかもと漏らす、そこはユ
ニコが《アルゴン・アレイ》の『早すぎるやろ』という発言から、取
り返しがつかなくなるレベルに至るのを防げたと考える方が良く
フォロー。

それには同意だが、そのマークIIの依代にされた《インビンシブル》
のスラスターはユニコの物で、そのシヨックはまだ癒えることなく
残っているはず。

それを押し殺してそう言えたユニコの気持ちも汲んでこれ以上の
話は不要かと切り上げた黒雪姫は、全ての情報を揃えるために最後に
テルヨシへと話の主導権を譲る。

「オレが加速研究会の拠点で見てきたものはハルユキ君とほとんど変
わりないし、離脱前に別行動でしてきたことだけでK?」

「ああ、頼む。残り時間も半分を切ったからな」

ただここまでのハルユキの話でマークII撃破までに話せることな
どほぼなくなったので、そこはあえて省くと言うとみんなも了承して
くれて、改めて再合流後に分かれてしてきたことを話し始めた。

加速研究会の拠点に《シーバ・カタストロフ》がいた理由と、その
いびつだった関係性について。

さらにカタフが担うはずだったと思われる『レベル10到達』の可
能性と、プレイヤーホームの主にしてカタフの友人。加速研究会の会
長の裏の顔を持つその人物が誰なのか。

その今後の明確な敵と定めるに値する人物が誰なのかを口にしよ
うとしたところで、話に割り込みをかけた黒雪姫は、やはり話の中で
確信したか有無を言わさない雰囲気とその口を開く。

「その名を告げるのは少し待ってくれ。我々もこの会議の最後に告げるつもりでいたのだが、よもやあれとカタフがリアルでも面識があるとはな……」

「それからカタフから伝言。もう会えるかどうかわからないから黒の王につて。『3年前のあの事件のことは納得してなかったけど、今は納得してる』ってさ」

「今さらその事について誰かに理解され和解したいとも思わんが、わかまりが1つ解消されたことを由とするか。しかし知らなかったとはいえ、加速研究会とリアルで面識があるとなると、やはりカタフの身を案じてしまうな……それこそお前達をポータル前で待ち伏せていたバイスの行動から察しても、2度と会えない可能性がある」

「そんな!? カタフさん、テル先輩との対戦を凄く、凄く楽しんでたのに……サーベラスだって本当は……」

「納得いかないよね、そういうブレイン・バーストを心から楽しめる人をただの道具にしか見れないやつらが好き勝手にしてるのは」

「サアヤの言う通りね。カタフさんもサーベラスさんも、加速世界から失うには惜しい人達ですから、わたし達でなんとしても加速研究会の企みも組織自体も潰してあげなければ」

確かに話をまとめるなら今後の敵のことは今回浮上した疑問を出来る限り解消してからのの方が締まりは良くなる。

そこに異論はなかったのでカタフから預かった伝言を無事に伝えてあげるが、やはりほとんど囚われの身に近い状態のカタフがどうなるか不安の声が上がる。

もちろんハルユキの言うように《ウルフラム・サーベラス》もまた加速研究会に囚われている1人なので、彼らを助け出す意味でもこの場の全員が加速研究会と最後まで戦う意思表示をしてみせる。

といったところで話は再び戻り、ハルユキがハイエスト・レベルで聞いたメタトロンの話の中で、この加速世界が存在する理由が最後の神器《ザ・フラクチュエーティング・ライト》に至ることにあるという事に触れる。

少し前にも《帝城》内でのあれこれをハルユキから聞いてはいたが、

確かに四神よりも強いらしい《八神》が守るTFLLは他の6つの神器と一線を画すほどの守られ方をしているのに引つ掛かりはあった。

さらに今回のハイエスト・レベルでハルユキは認識領域を広げたことで《ブレイン・バースト2039》と重なり合うようにかつて存在していた2つの世界。《アクセル・アサルト2038》と《コスモス・コラプト2040》にもまた等しく帝城が存在し、その最終目的がTFLLに至ることであったこともメタトロンから聞いていた。

それが事実であるならば、当初のゲームクリアの条件と思われていたレベル10に至ることの意味についてを考察し始めた黒雪姫達は、やはりゲームの製作者と話をしてこのゲームの本当の目的とやらを聞くしかないのかもしれないと考える。

ただレベル10到達の難易度がずば抜けて高いことと、TFLLに至る目的を天秤にかけた時に他のレベル9を5人も失わせてまでTFLLを目指させる製作者側のちよつとした矛盾——事によってはレベル9が6人の方が強いかもしれないからだ——には黒雪姫も気づき、何かを恐れている節が見られると指摘。

それに関してはすでに終わってしまった2つの世界が関係あるかもとハルユキが口を開き、残ったブレイン・バーストにしか希望がないのだとして、レベル10になることでTFLLに至るための止まれな、止まらない特別な何かが起きるのではと。

それでブレイン・バーストまでも消えてしまったら製作者側はもうどうしようもなくなるのかもと言いたかったハルユキの推測に付け足すように、フーコが初代の災禍の鎧の件でハルユキにその存在を示した《グリーン・グランデ》なら何か知っているかもと《グレート・ウォール》所属のアツシュに会談の申し出をお願いする。

さすがに緑の王を引つ張り出すなんて大役を任されてビビりまくりなアツシュだったが、怖いフーコに屈するように了承しかけた瞬間。

テルヨシ達を作る円座の外から、聞いたことはないがどこか浮世離れた落ち着きのある女性の声が会話に割り込んできた。

「それには及びません、バーストリンカーたち」

未だかつてこれほどの『上っ面なだけの優しさ』を含む声を聞いたことがなかったテルヨシは、その奥にある冷たい部分に戦慄しながら、黒雪姫以外の皆が立ち上がってその声がした第1校舎の屋上を見上げるのに続く。

そこにはデュエルアバターではない、華奢な体の純白サマードレスを着た金髪ロングの少女が仮面舞踏会のようにプラチナシルバーのマスクを着けてこちらを見下ろしていた。

所謂ダミアアバターながら、彼女が現れた瞬間にこの空間を満たす空気が彼女を中心にしたようなものへと変質したのがわかる。

それほどの存在感、絶対感といったものが彼女から放たれていることにこの場の何人が気づけたかはわからないが、これに吞まれてしまえばこの空間が丸ごと支配されかねないため、もしものことを考えながらギャラリィながらに『戦う準備』だけはしておく。

「誰だ、てめえ!!」

その戦う準備もしながらだろうが、沈黙する黒雪姫に代わってユニコが予期せぬ来訪者に疑問を飛ばすと、微風に髪とドレスを揺らせた彼女——どことなく黒雪姫の学内アバターに似ていることから《白雪姫》とでも仮称しよう——は、自分のペースを保ったまま口を開く。

「私の名前は、あとでロータスに聞いてください。いまは、もつと大切な話をしましょう」

自分から名乗ることはしなかった白雪姫だが、その回答が意味するところは黒雪姫が彼女についてもうわかつている前提であること。

事実、未だ微動だにしない黒雪姫からは色々な感情が絡み合っているのがわかるし、そうならざるを得ないほどの人物など、ここまでの話からの考察でわかりきっている。

ただ白雪姫に立ち向かう決断をし宣戦布告をすべきなのは他ならない黒雪姫と感じたので、それをやってくれると信じて今はこのタイミングで現れて何かを教えようとしている白雪姫の話に耳を傾ける。「アクセル・アサルト2038、そしてコスモス・コラプト2040。2つの世界が死に絶えてしまった理由……それは、どちらの世界も、偏りすぎていたからです。AA世界では自分以外の全てのプレイ

ヤーは常に敵であり、CC世界では常に味方だったのです」

その白雪姫の話によれば、AA世界はルーレットのような生き方が基本にある殺伐とした世界で、闘争のみのそこが滅びの道を辿ったのは自明の理である。

対してCC世界では他のプレイヤーは等しく皆が仲間である、一見すれば優しい世界だが、その実は穏やかな時間の流れの中で『闘争』が欠けてしまってプレイヤーからは遠からず『飽き』が来てしまい、それがウイルスのように徐々にゆっくりと広がってプレイヤーは滅り、確実に死に行く世界だったことがわかる。

それを考えればこのBB世界ではその在り方次第でAA世界のよくなこともでき、CC世界のような融和を作り出すこともできるが、そのどちらに偏るといったことには現状でなっていない。

《領土不可侵条約》のようなものはCC世界が陥った停滞を助長する要素なのかもしれないが、それでもBB世界だけが残っている理由はその偏りが無いことにあるのだとわかる。

白雪姫はこの世界もまた淀み始めているかもしれないと指摘しつつ、それをあえて教えたからには彼女にもまた狙いがあると判断。

——そんな世界をどうにかしたい。自分達はそのために動いている……そう言いたいのだ。

それがわかったのか、ここで身動き一つ取らなかつた黒雪姫が後方宙返りをして座っていた椅子の上に立ち、その手の剣を屋上の白雪姫へと向けて鋭い声を張り上げる。

「——それが理由だとしても言うつもりか！ ISSキットなどという代物をばら撒いておきながら、そのふぎけた言い草で正当化しようというのか！ 答えろ!! 白の王……そして加速研究会会長《ホワイト・コスモス》!!」

やはり気づいていた黒雪姫が突如として現れた白雪姫の正体を高々と告げると、その事実気づいていなかった一同から驚きの声がかかる。

どよめく一同が目の前にいる敵に対してどうすべきなのか判断に迷う中で、冷静にもものを見ていたテルヨシは1歩前に出てコスモスに

話しかける。

「《私立エテルナ女子学院》だったかな。アンタがプレイヤーホームにしてる学校は」

「……《レガッタ・テイル》。実際にお会いするのは初めてですが、やはりあなたはこちら側に欲しい逸材ですね。その身に纏う静かな闘気はとても純粹。まるでカタフを写し見ているようです」

このミーティングが始まる前にテルヨシは、直前まで自分達がいたコスモスのプレイヤーホームがどこの学校なのかを位置情報から調べて、そこに通っているのだろうコスモスを揺さぶりにいく。

しかしコスモスはそんな過ぎたことは気にしない。たとえそれがわかったところでテルヨシ達がPKなどという卑劣な手段に出てくるとは思っていないからか、意にも介さない様子でテルヨシに対しての物欲を見せる。

当然、そんな勧誘はもはや聞く耳持たないのはわかった上で言っているとされるが、その言動からでもコスモスにとってカタフが特別な存在であることがうかがえる。

「……てめえか……てめえが全ての黒幕だったのか。ISSキットだけじゃねえ……災禍の鎧ザ・ディザスターを作って、何人ものバーストリンカーに次々寄生させたのは、てめえの仕業だったのか、ホワイト・コスモス!!」

もう少し放置すれば色々勝手に話してくれそうな雰囲気もあったが、それよりも散々、加速研究会のしてきたことに巻き込まれてきたユニコがその怒りを爆発させてコスモスに叫ぶと、少し恍惚とした雰囲気があったコスモスは理性的になったか叫んだユニコへと視線を向け口を開く。

「あなたには、何度も辛い役回りを強いてしまいましたね、新しい赤の王。ですがそれも、あなたの力を認めた証……などと言っても、もちろん許してはもらえないでしょうけれど」

「あっ……たりめえだ！ 積もり積もった借りは100倍にして返してやるよ!!」

「あなたが、真にそれを望むのでしたら……私はたったいま、現状の通

常対戦モードから、バトルロイヤル・モードへの変更に応じましょう」
その怒りはもつともだと話すコスモスには恐れ入るが、それよりもその怒りを受け止める覚悟もあると言ったコスモスは、この人数差を以てしても勝てる自信があるというのか、ここからバトルロイヤル・モードで戦ってもいいと挑発。

これにバカなのかといった言葉を投げたユニコも、実際にバトルロイヤル・モードへの移行を実行する手前まで操作した黒雪姫も目に移ったが、今の発言がハツタリではないとなんとなくわかったテルヨシは、戦うべきではないと黒雪姫に小言しようとする。

「——と、本来ならば言えたのですが、そうは言わせてくれない『イレギュラー』が生まれてしまっている以上、今回は潔く退くことにします」

が、その前に自らの発言を撤回したコスモスは、その視線をチラリとテルヨシへと向けてから、これ以上の長居は無用とばかりにこの場を去る素振りを見せる。

「最後にあの鎧は、私にとって大切な希望です。またしてもあなたたちに浄化、還元させられかけたところを危うく回収したと聞いて、どれほど安堵したことか」

その去り際に発したことには思わずハルユキが噛みつき、たくさん犠牲の上に出来上がったものが希望などと認めないと叫び、さらに何かを言おうとしたのを黒雪姫が止め、その希望とやらがコスモス以外の人にとっては絶望でしかないと言。

それを肯定したコスモスのヤバさは相当だが、もう完全に相容れないところにいるコスモスにようやく黒雪姫らしい言葉がぶつけられた。

「お前には取るに足りないことかもしれないが、我々にも希望はある。お前が名前も知らないたくさんのバーストリンカーたちが、それぞれの希望を抱いて懸命に戦っている。お前がいかに軽んじ、弄び、踏みにじろうとも、我々の……全バーストリンカーの希望は決して消えない。小さな火が集まり、巨大な炎となって、いつかお前たちが振りまく冷たい絶望を残さず焼き尽くす」

「……強くなったのね、ロータス。楽しみだわ……あなたが、あなたの意思によつて、私の前に立つ時が……」

それが実質上の宣戦布告となつてコスモスに届き、表情こそ変えることなく受けて立ったコスモスは、次に会つた時が決着の時といったニュアンスの言葉で返してその体を謎の光で包み込む。

「コスモス。カタフとはもう会つたのか？」

「いえ。連絡は受けましたが、あなた方と同様、現実に戻つてまだ10分と経つていませんからね。平穩無事に話を終えられればいいと、心から思つています」

「……無理だろうな。アンタが大切に思つてきたカタフは、アンタのしてきたことを許せるほど自分に甘くはない」

「それはあなたもそうだから、きつとカタフの気持ちもわかるのでしようね。ですが私もまた、カタフの理解者であると信じて疑いません。その結果は、次の会議の時にわかるかもしれないですね」

最後にカタフのことが気がかりだったテルヨシがそのことを尋ねてみると、謎の自信と共にまだカタフを味方にする術はあると断言してくる。

そんな手段は見当もつかないが、どのみち次の七王会議で会えるかもしれないカタフの態度次第でわかることなら信じるしかない。

「さようなら、バーストリンカーたち。お話できて、楽しかったですよ……」

何故この場に現れたのか判然としないながらも、話すべきことは終わったと踵を返したコスモスは、立ち込めていた黒雲から落ちた雷と共にその姿を消してしまつたのだつた。

Acceleration Second 62

ミーティングの最中にギャラリーながらも乱入してきた加速研究会会長にして《オシラトリ・ユニヴァース》のレギオンマスター、白の王《ホワイト・コスモス》に臆することなく宣戦布告し、コスモスが去ったところで通常対戦の30分が経過して現実世界へと戻されてしまった。

その後すぐに再加速してマッチングリストを確認した黒雪姫やユニコだったが、そこにはもうコスモスの名前はなかったらしく首を横に振ってみせる。

「対戦は学内ローカルネットでやってたし、この学校内にコスモスがいたってこと、ではなさそうだな」

「ああ、おそらくは文化祭でセキュリティレベルを下げざるを得ないこの機を狙って、外部から抜け道を作ってリモート接続していたのだろう。あれはそれくらいのことではできる」

そんな迅速な行動が可能なのは、校門前に待機して離脱後にくすぐ校門を出るくらいのことではしか不可能な早業だが、予言者でもなければそんなことはできないので別の線だと勘繰ると、黒雪姫も自らの《親》のスキルは理解しているので外部から接続していたと判断。

話が最終的にまとまらない形だったので、もう1度フィールドを作って話をするのも考えたが、年少組2人による腹の虫が可愛く生徒会室に響いて、残した話は昼食を摂りながらにしようと思んなで生徒会室を出て、とりあえず保健室にいるハルユキ達とも合流を図った。「それにしてもあのコスモスが『イレギュラー』と称して負ける可能性を見せたのは驚いた」

「だな。何したんだよ、テル」

「明らかにアンタを見ながら言ってたしね」

「んー、見当は一応ついてるんだけど、オレにもそこに秘められてる重要性に理解がなくて、いまいちよくわからん」

その道中にあの超然としたコスモスが自らバトルロイヤル・モードへの移行を了承する素振りをしながら、それを撤回する発言をしたこ

とについて言及。

あの時にコスモスが言った『イレギュラー』は明らかにテルヨシを指していたのだが、テルヨシもそれほど警戒されることなのかといった理解でしかないため、説明しようにも困ってしまう。

おそらくはあのプレイヤーホームで使った《八面断絶》を打ち破るまでに高めた心意技。

あの《ブラック・バイス》と《アルゴン・アレイ》が珍しく本気で驚き、レアな現象を間近で見てもどこか歓喜するかのような雰囲気になったからには、あの心意技には何かしらの脅威があるのだ。

だが今のテルヨシにまた同じことをしろと言われても、たぶんほぼ100%で発動すら出来ないはず。

バイスも言っていたが、あの心意技を使えたのは様々な状況が複雑に絡み合って偶発的にスポーツなどで間々起きる、極限の中での集中状態『ゾーン』に入ったから。

それでもその事実がコスモスに二の足を踏ませたのなら、迷いがあったあの段階でそうならなかったのは幸いだったと考えていいが、フーコ達もまた戦う覚悟を決めながらその選択はすべきではないと黒雪姫を止めたかもしれない。

「その辺のことも《オリジネーター》のグラちゃんとカナイトがわかるかもしれないし、次の会議の時にこっそり聞いてみるか」

「何かわかったら教えてくれ。コスモスが危惧するものならば、我々も知るべき案件だと思うからな」

どうあれあの段階でコスモスと戦っていたら、全滅の上で黒雪姫とユニコを失うという惨劇を生んでいたかもしれない現実を回避したのは幸い。

次は回避などという生易しい状況は訪れないことも考え、今後コスモスがイレギュラーと恐れられた力についてはテルヨシなりに情報を集めて伝える旨を決めて話は終了。

再び合流したハルユキ達と少し話をしてから、集合場所を決めて3つのグループで分担して食料の調達に回っていく。

テルヨシ、マリア、サアヤ、ユリの4人は食後のデザート担当とい

うことで、テルヨシのクラスのケーキを店長特権でやってないサービスのテイクアウト。

もちろん代金は払った上でだが、チュリの分のイチゴのショートケーキには苺3つ乗せの特別仕様——約束していたので——にして、それらの入った箱を持って指定された第2校舎の屋上に一番乗り。

13時までには調達を完了せよとの通達もあったので、その後は割とすぐに全員が屋上へとやって来て、黒雪姫が特等席と称した場所は確かに人もいないし見晴らしは良いが、日差しが少し強いので女子には美容の敵も多い。

それでもこの場所を選んだのは、昨年のバーストリンカーになる前までハルユキがこの場所のソーシャル・カメラの死角でいじめを受けていた現実があつて、そんなことが2度と起きないようにと黒雪姫がその死角すらもなくすためにソーシャル・カメラを設置した旨をハルユキに伝えるためだったようだ。

焼きそばやお好み焼き、じゃがバターやたこ焼きといった定番メニュー。タコス、フアラフェル、サモサといった外国の食文化も交えて用意されたレジャーシート上の昼食は、飲み物含めて30分程度で全てが消化され、最後に残ったデザートケーキをのんびり食べながら雑談に時間を費やす。

ようやく戻った日常に笑顔を見せていた一同だが、その中でひっそりと浮かない顔をしたハルユキに気づいた黒雪姫やあきららが気がかりがあるなら話しておくと促す。

「えつと……僕、どうしても、気になっちゃって……ニコの強化外装を1つ取り戻せなかったことが……プロミネンスも領土戦があるだろうし……スラストアがないと《インビンシブル》は召喚できないんじゃない……」

と、ずっと気になつていたのかユニコの今後の心配を口にしたハルユキだったが、ここここに至ってそんな誤解をしているのかと小さく笑ってしまったテルヨシの腹に拳を1発ぶち込んだユニコは、割とケロツとした反応で「普通に召喚できる」と返す。

そもそもあのマークIIがミサイルポットなしでインビンシブルを

召喚していたのだから、コクピット・ブロックさえあれば召喚できることに気づくだろうと苦笑。

ついでに言えば《ウルフラム・サーベラス》がそうだったように、たとえスラストーだけとかになっても、その体のサイズに合わせた装備になることも明らかなので、コクピット・ブロックがなくても各パーツ単独で着装くらいはできそうなもの——ただ総称でインビンシブルである以上、個別の着装は面倒臭そう——だ。

しかしそうやって自分の心配をしてくれていたハルユキにお礼は言いつつ、これについては自分でどうにかするべき問題だと考えていたことを吐露。

それに水臭いと返したハルユキの言い分はもつともだが、少し雲が出てきて日差しが弱まった空を見上げて、バイスに拘束されていた時にぼんやりとあつた意識で考えていたことを話し出す。

「強化外装が次々に奪われてく瞬間、いろいろ考えた。これでプロミのレギマスは返上だな、とか……パドがちゃんと次のレギマス引き受けてくれっかな、とか……。でも、それだけじゃなかった。自分でも意外だったけど、諦めとは反対の気持ちも、ちゃんとあつた」

雑談から一転して真面目な話になってしまったものの、話した以上は全て吐き出そうとケーキを食べる手を止めて拳を握ったユニコは、その拳に視線を落として話を続ける。

「あたしは、レベルだけ見りや9だけど、力は他の王連中に遠く及ばねえ。戦闘力も、統率力も、精神力もな。プロミのレギマスを引き受けたのも半分は成り行きだったし……いつも、本当は2代目赤の王を名乗る資格なんかねえって思ってた。メツキが剥がれて無様晒す前に、何もかも投げ出しちまった方がいいんじゃないかって、心のどこかで思ってた。でも、強化外装が奪われて、それどころかポイント全損も覚悟しなきゃなんねえ状況に追い込まれて、いざ投げ出す理由ができたなら、諦めよりも悔しさを感じたんだ。こんなところで終わりにしたくねえ……3年前の大混乱からどうにかここまで立ち直ったプロミと、今まであたしについてきてくれたレギメンを裏切りたくねえ、つてき」

そんなユニコの話に、隣にいたパドとユリが何かを言いたそうに視線を向けながら見守る姿は、ユニコが2代目赤の王としてやってきたことは間違っていないと口にしたかったのだとわかるが、ここに来てまだ足りないと感じて発破をかけるユニコを前にしてその言葉を口から出さないと決めたようだった。

まだまだ赤の王としてやっていく決意を語ったユニコが名実ともに赤の王と呼ぶに相応しいことなどこの場の誰もが認めることだが、ユニコ自身がまだ赤の王を胸を張って名乗れないと言うなら、黙って支えてやればいい。

それがたとえレギオンと関係ない人であっても、ユニコをリアルで知るテルヨシ達が支えちゃいけない理由もないのだから。

皆がユニコの決意に無言で頷く中で、黒雪姫だけは何か言うべきと思っただかユニコと向き合っただけを話す。

「ユニコ……いや、2代目赤の王《スカレット・レイン》。お前に伝えるべき言葉を、私はとある友人から預かっている。我々がキット本体と戦った時、内部から出現したライダーとも戦ったと話したな。もちろん、かつて私が全損させた当人ではなく、コスモスが復活させた複製記憶ではあるが……紛れもなく彼こそが本物の《BBK》だった。そのライダーが消える間に言った。プロミを継いでくれた2代目に伝えてくれと。彼の最後の言葉だ……」

テルヨシ達も《ダスク・テイカー》の複製記憶と対峙したからわかるが、あれを偽物と断言することはまず出来ないものであるのは疑う余地がなかった。

しかしすでに全損したバーストリンカーのデータをサルベージした存在が100%本物であるとも言えないこともわかった上で、そのライダーの複製記憶から預かった伝言をユニコへと伝える。

『あんがとよ、あとは任せた』

それは初代赤の王から2代目へと繋がる正統な継承の言葉。

それを聞いたユニコは何を言うでもなく沈黙してしまっただが、その大きな瞳からはポロリと大きな滴が流れ落ちる。

その涙はユニコの意味とは無関係に止めどなく溢れ出し、どうしよ

うもないそれをせめて見られないようにと隣のパドの胸に顔を押しつけて静かに泣き崩れた。

そのユニコを優しく抱き締めたパドもまたもらい泣きしそうになりながらあやし、ハルユキ達は堪えることができなくなったか、その瞳からいくらか涙をこぼしていた。

そしてそのユニコの親、《チェリー・ルーク》の親であるユリは、成長した我が子を喜ぶ親のような優しい笑顔を向ける一方で、その視線をテルヨシとサアヤへと向けて小声で「もう、心配いらなないみたいだから」と、何かを決めたことを告げてきた。

それが意味するところはすぐにわかった2人だが、そのことをこの場で喜ぶのは完全なる空気読めないおバカさんなので、それについてはまた落ち着いてからと顔を見合って決めるのだった。

たつぷりと3分ほども泣き続けたユニコが、ようやくその小さな嗚咽の声を止めたところで、時刻は14時にさしかかる。

その前に声高々に黒雪姫が何かが始まる合図をするが、それについて理解あるのはこの場にほとんどいなく首を傾げるばかりだが、なんとなく黒雪姫と恵から漏れ聞いていたのと、文化祭のスケジュールを恵に叩き込まれたのもあって記憶の片隅から引つ張り出すことに成功。

たしか14時からは生徒会による大規模な展示が行われる、かもしれないのかもしれないことがあったと思いついて、14時を告げる鐘の音が響いたあとに校内アナウンスから恵の声でこれから生徒会による展示が始まる旨が伝えられる。

生徒会が何をするのかまではさっぱりなテルヨシは、横から「何が始まるの?」といった顔で見てきたサアヤやマリアに困り顔でわからないと答えて呆れられて落ち込むが、恵による校内ローカルネットに接続しているかの注意事項と展示エリアが本校敷地外とかいうところでもなアナウンスがされれば、ARを使った何かかもと予測することはできる。

そのアナウンスから少しの間を置いているうちに黒雪姫が第1校舎寄りの屋上よりも市街地側の方が眺めが良いと助言するので、みん

なしてそちらの手すりに近づき敷地の外に目を向ける。

するとこの梅郷中学校の敷地だけを残してその外の景色が一変。

現代的な建築の市街地は消え失せて、見える範囲いっぱいにもあまりにも広大な草原が映し出される。遠くには横幅が1kmはあろう巨大な川も流れている。

『皆さんがいまご覧になっているのは、8000年前、縄文時代早期の光景です。この頃は、武蔵野台地の端が海岸線となっていて、現在の杉並は広大な湾に突き出した半島の中央部に位置しました』

その景色をアナウンスによって恵が解説を始めて、映し出された映像がここ杉並の8000年前の姿だと理解させられる。

もちろん、現実に敷地外が時を遡ったなどというタイムスリップをしたわけではなく、ARを用いてプロジェクションマッピングしているのだが、どういう技術を使えばこんなことが可能なかは素人のテロヨシにはわかりかねる。

清らかな恵の声による解説と共に時代は進んでいき、表示されている《—8000》という数字が減る毎に周囲の景色も様々な変化を遂げていく。

縄文、弥生、飛鳥と、歴史で勉強した時代を進みながら、広大な草原だった景色も段々と人が築き上げてきた文化が形成されていき、普段はこういう勉強に含まれることには眠気が襲ってくるテロヨシも、つついその光景と照らし合わせて恵の解説に聞き入り、時おり話される教科書には載っていない知識などにはハルユキ達も感嘆の声を上げていた。

そして時代は早くもおよそ1000年前まで進み、遠い昔の出来事と思っていた第二次世界対戦における空襲が杉並の地を大火で覆う。

テロヨシでも知っている原爆が落とされた広島、長崎の大惨事は皆も知るところだが、ここ杉並でも戦争の痕跡があったことを知り、実際に燃え上がる杉並を見ると何か込み上げてくるものがある。

知ろうとしなければ知らないままだっただろう、自分達が住む杉並の歴史に言葉にならない何かを得た感覚が残るうちに、時代はさらに進んで今の街並みに限りなく近い時代にまでなると、その街並みの至

るところにソーシャル・カメラが見えるようになる。

さらに15年前の光景からは徐々に人の手から携帯端末が減り、10年前ほどになれば人の首にはニューロリンカーが当たり前のように装着され、AR・VRが世間に浸透した世界が確立されたことを見て取れた。

そんな人が紡いできた歴史を早巻きながらも見たテルヨシは、この展示が見た人に何を伝えようとしたのかをぼんやりと考える。

テルヨシの講義もそうだが、展示や発表にはそれを見せ、聞かせる者のコンセプトが必ずあるものだ。

それをここにいる黒雪姫に直接聞いたところで『それは受け取る側が各々で考えることだよ』と明確な答えをおそらく言うことはないだろう。

だからテルヨシなりに何かを感じて、受け取ったものが答えであり、その答えは人によって違っていいと思う。

『長い歴史の旅も、そろそろ終わりに近づいています。最後に、どうぞ空をご覧下さい』

歴史は人が歩んできた道のようなもの。

それは後世に名を残した偉人だけが作り上げたものでは決してないし、名前も知らない幾万、幾億という人が作り上げてきた生きた証明。

その歴史を紡いでいくのもまたテルヨシ達であり、どんなことにも未来に繋がる何かが存在し、意味がないことなどないのだと、そう考えることができた気がする。

でも哲学みたいな話は柄じゃないかと割とすぐに自虐気味に笑って、恵の声でまだ昼下がりがりながらに夕日に染まった空には、キラキラと瞬く光の連なりが近づいてくるのが見える。

時代は《0000》の現在から少し進み《+0005》で停止しているのを見れば、天空へと垂直に伸びる銀色の糸がヘルメス・コードであることに理解が及ぶ。

もちろん、現実には上空150kmの軌道をマッハ10で飛翔するヘルメス・コードを視認できるわけもないので、生徒会による演出で

ポトムステーションの細部まで見える低空をゆつくりと移動して梅郷中学校の真上で停止。

いつの間にかハルユキ達は皆が皆の手を取って大きな輪を作りヘルメス・コードを見上げていて、サアヤとマリアに手を取られたテルヨシもその輪の中へと入って同じように見上げる。

『5年後の2052年、世界初の有人火星探査のための国際プロジェクトが始動します。宇宙船の部品はヘルメス・コードのトップステーションまで運ばれ、軌道上で組み立てが行われる予定です。縄文時代、石槍を片手に草原を走っていた人類の足が、8000年の時を経て火星の地を踏むのです。しかしそこで歩みが止まるわけではありません。人はこれからも、何1000年、何1000年と前に進み続けるでしょう。その歩みに、私たちの親の世代も、私たちも、私たちの子の世代も参加しているのです』

何とも広大な話の締め括りながらも、今さっき自分がそんな答えを出していたのだから、生徒会のことをああだこうだと言えない。

そんな恵の話の終わりにヘルメス・コードも再び動き出してあつという間に夕空へと消えて見えなくなってしまった。

『これで、生徒会執行部による展示企画《時》の上演を終了します。長らくのお付き合い、ありがとうございました』

そのアナウンスを最後に夕空は展示が始まる前の色へと戻ったが、街並みはARと現実で同じだったため、終わったと聞かされても何やら不思議な感覚が残った。

展示は30分程度で終わったので、15時まで開催されている文化祭はまだ残り時間が30分あることになる。

近くではこの展示を加速も使って足りない時間を補って仕上げたなどと言ってる黒雪姫に、いつも加速を私的に使うなど注意してる側が使つてるとチユリに言及されていたのを聞いてクスリとし、これは有効活用だと言い張る黒雪姫をゲラゲラと笑ってやったら蹴られる始末。

まあ蹴られるのはわかった上で笑ってやったのでダメージは軽減したものの、それを見てみんなに笑われたのはちよつと嫌だったの

で、それはさておきと話題を切り替えて残りの文化祭を楽しもうと提案。

それもそうだと黒雪姫がチユリから逃げるようにテルヨシの話題に乗っかってどうしようかと語り、ハルユキ達のクラス展示とかを見てこようとか話し出す。

ただやはり人数が人数なのでいくつかのグループで行きたい場所を回る方がいいよなど思っていたら、横からサアヤがテルヨシの制服の袖を掴まんで軽く引つ張るので振り向くと、凄く恥ずかしそうに顔を赤くして何か言いかけて止まってしまふ。

「あー、そうね。任せんしゃい」

サアヤが何を言わんとしたのかそれだけでもちやんと理解できたテルヨシは、自分からは言い出しづらいことなのだど表情から汲み取って、盛り上がる一同にひと声かけて振り向かせてから、横のサアヤを抱き寄せて宣言。

「オレとサアヤはこれからデートするから、邪魔しないでねえ」

「お、お願いします……」

こういうことを堂々と言えるテルヨシをサアヤが頼ったのは仕方がないが、こうもハッキリ言われるとむしろ恥ずかしさが増したか、いつもの姉御肌なサアヤはどこへやらな『お願いします』が出てきてしまふ。

そんな2人に呆然とした一同ではあったが、次には様々な反応で2人に対して了承の言葉を返してくれる。

中にはテルヨシ達がデートするなら私もといった悪ノリまでかますフーコやらもいたが、それを皮切りにグループでの行動が選択肢に入ったか、マリアが謡とユニコの腕を引いて仲よし小学生グループを形成し元気良く屋上を出発していき、ユリもパドの腕に恋人のように抱きついて「じゃあ私は美早にエスコートしてもらおうかな」と誘えば、親友のお誘いに快く了承したパドも2人で屋上から消えていった。

残された黒雪姫達も話をしながらどうするかと歩いていつてしまふ、最後に残ったテルヨシとサアヤも時間は限られるのでみんなのあ

とを追うように歩き始めるが、その前にテルヨシの左手を取って正面に回ったサアヤは、両手でその左手を包んで一言だけ。

「……ありがとね、テル」

何に対してはかハツキリしないまでも、そんなお礼の言葉を述べてくれるのだった。

Acceleration Second 63

「ふっふっふっ。今こそ我が真の力を解放する時のようだな！」
「そういうノリやめなさいよ、恥ずかしい」

加速世界での長いようで短かった戦いも終えて文化祭へと戻っていたテルヨシ達は、文化祭終了の15時までの残り30分を好きなように過ごし始めていた。

テルヨシとサアヤも結局のところ今日は2人きりという状況が作れなかったので、今は黒雪姫達とは分かれて2人きりで文化祭を回っていた。

さすがに食べ物巡りは無理だったのでそれ以外の出し物をと校庭の方に行ってみれば、おあつらえ向きなAR射的なんてものがあつたので、スコアによって景品が用意されてるそれを張り切つてやろうとしたら、なんか変なスイッチが入つたテルヨシにサアヤが的確なツツコミを炸裂させる。

展示は後輩のクラスのものなのでテルヨシのこのノリにらしさがあつたか普通に笑われたが、ARの光線銃を手にとつたテルヨシがいざ参る！と構えてすぐに射的はスタート。

2m四方の枠の中にランダムに表示されるウィルスのようなターゲットを次々と撃ち抜いてスコアを順調に上げていくテルヨシだったが、サアヤが始める前に欲しそうにしていた景品は最高スコアを目指せば取れる位置にはなくて、スコアの調整が必要になつていた。

だがスコアを気にしながら難易度も上がつていく射的に余裕が全くなくなつたテルヨシは非常にわたわたした感じが出てしまい、それが面白かつたのかサアヤが横で笑い始めてしまう。

それでも彼氏としての意地を見せたテルヨシが狙い通りのスコア内に収めてゲームを終え、渡された景品である柴犬の箸置きをサアヤへとプレゼント。

欲しいと言つたわけでもないのにピンポイントでプレゼントするもんだから目をぱちくりさせたサアヤに得意気なテルヨシだったが、

直前に講演もしていた——感覚的には結構前な感じにはなるが——
せいですぐに自分が観察されていたことに気づき呆れられてしまっ
た。

だがすぐに「もう……」と許すようなことを漏らして素直にお礼を
言ってくれたので、大事そうにポーチにしまったのを見届けてから次
の展示へと移動していった。

その後はデートらしくあれやこれやと見て回れはしたものの、講演
のライブ中継のせいですっかり校内の有名人になってしまったテル
ヨシは、行き交う人に度々声をかけられては心理学についての雑学や
ら、保護者からの質問などで足を止めてしまうことが。

それをサアヤがどう思ったかは見るに見れなかったものの、文化祭
終了の5分前ともなれば人の足は自然と校舎の外へと向いていき、テ
ルヨシ達も分かれていた黒雪姫達と校庭で再び合流して、帰ろうとす
る人の足取りを見ながら祭りの終わりの余韻に浸る。

その祭りが終わるのが名残惜しいのか、ユニコがハルユキの家での
二次会でもやらないかと提案していたが、なんだかんだで色々あつて
疲れただろうから、今日はゆっくり休めと黒雪姫が言えば、否定しき
れないユニコもあっさり諦めて別れの挨拶のあとにパドと一緒に
校門を出ていってしまった。

続いてフーコと綸とあきらが今日みんながしてくれたことに改め
て感謝の言葉を述べてから3人で帰っていき、謡とマリアは飼育委員
の仕事で餌やりをするために第2校舎の裏へと移動。

生徒会の仕事が残った黒雪姫と部活のミーティングがあるタクム、
チユリもハルユキに寄り道せずに帰ってゆっくり休めと促して校舎
に戻っていき、残ったのはテルヨシとサアヤとユリとハルユキの4人
となってしまう。

テルヨシはマリアを待つ都合でしばらくはいるつもりだが、帰って
休めと言われたハルユキは帰る方角こそ同じなテルヨシと一緒に帰
ろうかと迷う表情をしたものの、サアヤとユリもいたからかペコペコ
と頭を下げて1人で帰っていってしまった。

実はハルユキのどこか元気のない様子は気づいていて、その理由に

ついても見当はついていたテルヨシだが、こればかりは会話で気を紛らわせたところでその場しのぎでしかない、優しさではないと思っていた。

おそらくハルユキは自分達のためにその命を燃やし尽くした《大天使メタトロン》の消滅に喪失感を抱いている。

それはハルユキの優しさゆえのものであり、ハルユキが乗り越えるべき悲しみなのだ。テルヨシがどうこう言って解決するものではない。決してない。

「あのさ、テル。家に寄っていつていい？」

「あ、私も少し話があるからいいかな？」

「ん？ 別にいいけど、それなら夕食も4人でしてこうよ」

「そうね。なら帰りがたら食材の調達もしていきましょ」

わかっていながら何もしてやらないのは酷でもあるかと思いつながら校門を出て見えなくなるハルユキの背中を見送ってから、サアヤとユリは途中まで一緒に帰るのかなと思っていたら、2人して家に寄りたいと言ってくるから、どうせなら夕食も一緒にと提案。

それにはすぐに了承した2人が何を作るかを話し始めたところで、いよいよ生徒以外の人は速やかに退場するようにとのアナウンスが流れて、校門の外でマリアを待つこととなった。

15分程度で餌やりを終えて戻ってきたマリアと謡を迎え入れ、1人だけ方角の違う謡は少しだけ羨ましそうにテルヨシ達を見てから頭を下げた帰ろうとしたので、なんだか凄く申し訳ない気持ちが込み上げてつい謡を引き留めてしまう。

「うーちゃんが良ければだけど、今度うちに泊まりにおいで。マリアも喜ぶから」

【UI】> よろしいのですか？ マーちゃんもご迷惑に思いませんか？

「そんなこと思わないよ！ 今日泊まってもいいくらいだもん！」

【UI】> 明日は普通に学校もありますし、さすがに今日はご迷惑なのですよ。ですがお言葉に甘えて、今度のお休みにでもお邪魔するのです」

会った頃からずいぶんと大人びていた謡だからこそ、周りに気を遣ってしまっているところがあつたため、そんな謡にもっと周りに甘えてもいいと言いたくはあつた。

だからこのタイミングでお泊まり企画を提案できたのは良かったらしく、マリアも是非と謡に詰め寄り、そんな2人に圧された謡は珍しく照れながらホロキーボードを叩いてその提案を受け入れる返事をくれた。

それが功を奏したか、また頭を下げた帰ろうとした謡の顔には寂しさを含む色はなく、そんな謡に4人は手を振って応えるのだった。

結構お母さん気質なサアヤとユリは文化祭でカロリーと栄養を度外視な食事をしたことを気にして、夕食はカロリーを抑えながら栄養面と満腹感もクリアする料理を思案してくれる。

なんでもユリは将来的にパドの店と提携するためにフランス料理の専門店を開くための勉強を始めているようで、料理に関してはなかなか厳しい面が垣間見えていた。

そのユリに平然とついていくサアヤの手際の良さはキッチンに入らせてさえもらえなかったテルヨシとマリアが見ても見事で、いつも使ってる自宅のキッチンが2人がいるだけで何故か料理店のキッチンに変貌したような錯覚に陥っていた。

そんな2人が作った豆腐ハンバーグやら湯通ししてしんなりさせたレタスで巻いた野菜巻きなどで食卓を囲み賑やかな夕食が始まる。

「サアヤさんもユリさんもお料理が上手でいいなあ」

「ユリのガチ具合はあれだけど、私のは日常的にやれば誰でもこのくらいにはなるわよ」

「よし、ならマリアも花嫁修行のためにサアヤに弟子入りするか」

「あら、テル君はマリアちゃんがお嫁さんに行っても素直に喜べるタイプ？」

「それはそれ！ これはこれ！ オレもマリアの手料理が食べたいんですー！」

「結局は自分のためじゃないのよ」

「テルも弟子入りするといいかも」

その振る舞われた料理に舌鼓を打つマリアは、自分でもこんな料理を作ってみたいと2人に眩き、ユリの本格的なのは不用意に踏み込むと泣くと助言しつつ、自分は可能なら教えてあげられるといった意味の言葉をサアヤが返す。

それを解釈して弟子入りを勧めたテルヨシに対して花嫁修行に食いついたユリから話が脱線しかけるが、なんとか脱線せずに2人してサアヤに弟子入りする流れになったような感じ。

実際に今のテルヨシの料理スキルは素人に毛が生えた程度で、分量が重要な菓子作りには繊細なのに対して、こっちはだいたいアバウト。そのテルヨシの料理に不満があるわけではないのだろうマリアでも、やはり女の子として色々と気になるものはあるということだ。

マリアが料理上手になってくれることには大賛成なのはサアヤとユリも同じなようで、今後は遊びに来た時には色々教えてあげる約束をして楽しい夕食は終了。

後片付けも手際よく2人がやってしまっただけで本当に申し訳ないと思いつつも、その間になんだかんだで疲れたのだろう、あくびをしていたマリアを先にお風呂に入れていつでも寝られるようにしてあげ、マリアの入浴中にダイニングテーブルに座り直した3人が落ち着いて話をする。

「それにしても今日は色々ありすぎて頭がぐちゃぐちゃだわ……」

「そうね。楽しいだけの文化祭になればもつと良かったのだけど」

「2人とも見た目以上に疲れてるでしょ。あまり遅くなると明日が辛いだろうし、話したいことはマリアが出てくるまでに終わらせちゃおっか」

3人とも表情にこそ出さないものの、いざ振り返ると激動の1日だったことを思い起こされて、今さらながら大変だったと感想を漏らす。

そんな2人を長居させてもいけないとテルヨシも19時になる少し前の視界の時刻を確認しつつ、遅くても20時までには帰そうと話題をシフト。

そもそも2人が寄り道したのが単に文化祭の余韻に浸りたいから

とかそんな理由ではないと最初からわかっていたし、ユリも話があると言っていたのだから、手早く聞き出すのはテルヨシの務めだ。

「じゃあまずは私から話そうかな。2人には今日のうちに報告しておかなきゃって思っていたから」

「それってやつぱり、ニコさんの時の……?」

「そう。あのあとユニコちゃんと美早にはキチンと話して納得してもらった上でだけど、私は今日で『プロミネンス』から抜けて無所属になりました」

そのスムーズな進行を妨げないように、まずはユリが自ら口を開いて話し始めて、何の話かはなんとなく察していた2人も報告してきたユリに真剣な表情を見せる。

ユニコが正統に赤の王を継承した時、ユリはその姿を見て『もう大丈夫』と呟き2人にある決意を示していた。

それが少し前に条件も提示されていたレギオンの移籍に関することであるのは察してあの場での言及は避けたが、まさか文化祭の最中に脱退してくるとは思ってもいなかった。

そもそもユリはテルヨシ達のレギオン『メテオライト』に加入する条件に『五芒星を揃える』という無理難題を提示していたので、まだそれが達成されていないこの段階でプロミネンスを抜ける意味はないのだ。

「正直に話そうって、そう決めたからここにいるけど……本当はね、私はテル君達のレギオンに加入するつもりはあまりなかったの。テル君達の『帝城』の攻略をしようっていう目標が無理だろうとかそんなことを思ったからじゃなくて、根っここのところには、まだユニコちゃんんことが心配だって気持ちが大きかった」

「そりやそうだよ。チェリーがあんなことになって、ニコさんを心配しないってのは無理な話でしょ」

「そう言ってもらえるのは嬉しいけど、私のこれはチェリーのことですんだはずのことを生かしていない、過保護だったってことに気づいたの」

その理由についてを具体的に話す前に、これまでの自分がユニコに

対してまだ過保護な立場にあつたことを吐露し、それを反省する素振りを見せる。

テルヨシが言うようにチェリーがあんな形で加速世界を退場になってしまったら、ユニコの親代わりにユリがなるのは自然な流れ。

そのユリのこれまでを過保護だなんてテルヨシもサアヤも思わないものだが、当の本人がそう言うからには、それだけ自覚する何かをしていたのだ。

「確かにあの事件のあと、私はユニコちゃんを支える立場であろうとしたわ。ユニコちゃんの親代わりとして、レギオンの一員としてもね。実際、ユニコちゃんも前よりずっと私や《三獣士》に色々溜め込んでいるものを吐き出してくれたけど、そうやってレギオンマスターとして、赤の王として頑張るユニコちゃんを、心のどこかで『上から目線』で見てた」

「そんなこと……」

あるはずがないと、そう断言さえできるテルヨシが自分に厳しすぎるユリを否定しようとしたが、その言葉を遮るように首を横に振ってから話を続ける。

「言い方に誤解はあつたかもしれないけど、私は初代赤の王のライダーをそれなりに見てきていたし、ユニコちゃんよりもバーストリンカーとしての歴が長い。それが無意識にせよユニコちゃんをレギオンマスターとして、赤の王としてちゃんと見てあげられなかったんだと思うの。そんな過保護がああ加入条件にしたんだと思う。五芒星をレギオンに揃えるなんて出来ないだろうって。それでテル君もサアヤも諦めてくれるなら、プロミに居続けられるって。ユニコちゃんを近くで見守ってあげられるって。本当にズルいよね……」

それら全てをその時に考えて行動していたなんてことはないのだろう。

ユリ自身もほとんど後付けで自分の行動に理由をつけているだけなのかもしれないが、自分が守るつもりでいたユニコに自分が依存していたことを今回のことで自覚したと言いたかったことは十分にかつた。

「それが『今まで』のユリってことでしょ。自虐も反省も勝手にやってくれていいわ。そこから前に進む力はもうユリにはあるんだから、その心配なんてしない。今回のことでどうするか、その答えが出たからここにいます。違う？」

「……もう。サアヤは昔から順序立ててもズバツと聞きたいことを聞く。それが良いところでもあるけど、たまには悪いところもあるんだからね」

そういつた話を黙って聞き続けることには耐性がなさそうなサアヤは、暗に話が長いと強引にネガティブ思考から引っぱり上げ、それに苦笑しつつも長年パートナーだったサアヤに言われたからこそ気持ちを持ちを前に向けたユリは、これからの話をしてくれる。

「……ユニコちゃんのことをちゃんと知りもしないライダーが、私よりもずっとユニコちゃんのことを認めて、2代目赤の王として見た。そのライダーの言葉を受け取って泣き崩れたユニコちゃんを見て私も考えたの。ああ、ユニコちゃんは私が思ってた以上に頑張ってる。立派にレギオンマスターとしてやってきてたんだって。『私がついてあげなくちゃ』なんておごりもいいところだった。それにユニコちゃんが強化外装について自分でどうにかするって言った時に、ハルユキ君が『水臭いよ、仲間じゃないか』って返して、仲間の形はレギオンだけじゃないんだって思った。近くにいてあげられるだけ寄り添うってことじゃない。仲間だって信じ合うことができたら……心に寄り添うことさえできれば、距離なんて関係ないんだって」

「でもその理屈だと、ユリさんがプロミを抜ける理由も、オレ達のレギオンに入る理由もなくなっちゃうよね」

「そうだね。だから私はまず、ユニコちゃんへの依存を絶たないといけない。そのためのレギオンの脱退。それに私はプロミを抜けたからって、テル君達に出した条件を取り下げるつもりもないの。だって2人とも、今はもう全力で4人を引き入れようって頑張ってる、それが形になりかけてる。それを今さらなかったことにはしたくないもの。だからその覚悟に私も応えなきゃならない。2人がそこまでし

て引き入れるに値するバーストリンカーになってね」

ユリはとても、とても優しい女性だ。

自分に厳しくて、頑固で、こうと決めたら振り返らない。

そんなユリが決めたことならテルヨシもサアヤも何を言うこともできないし、言うようにここまでやってしまっている以上、仲間集めを中断などできるはずもない。

いつになるかはわからないその条件が達成されて、ユリが輪の中に入ることになった時、その仲間達に恥じない頼もしい仲間になるための準備期間がこれからのだと笑顔で語ったユリにもう迷いはなく、そのユリの決意に2人も笑顔で応えるのだった。

——その時が来るために頑張って、それと同時に楽しみにしている、と。

「……それで、サアヤの話は何？」

「ええと……ユリのこんな話のあとにしたくないんだけど……すつごくプライベートな話だし……」

そうしてユリによる大事なお話が終了して、順番としてサアヤが話す番なのでテルヨシが振ってあげたら、なんだか物凄くタイミングを間違えたみたいなの微妙な表情を浮かべて切り出すに切り出せないみたいだ。

そこにお風呂から上がったマリアが戻ってきて、話はマリアが戻ってくるまでみたいなのニユアンスもあったことから、サアヤが「マリアが寝るのが遅くなったらダメだし、もう帰るわね」とユリの腕に引いて帰る支度をパツとしてしまう。

2人が帰るのを残念そうに見送るマリアを置いて、玄関の外まで見送りに出たテルヨシは、ユリを先に行かせたサアヤの意図を汲んであえて2人きりになると、空気の読め過ぎなテルヨシに苦笑しつつも感謝してから、あの場で言えなかつた話をする。

「テルって、明後日が振り替え休日になるのよね？」

「そうだよ。明日が後片付けで、明後日が休み。その日はバイトを開店からいつもの下校時刻までにしてあるけどね」

「バイト戦士かアンタは……でも放課後以降の時間に空きはあるのね」

？ だったらちよつと付き合つてほしいんだけど、いい？

「いいけど、何か買い物？」

「あー、えーつと、そのお、ですねえ……買い物とかじゃなくて、家に来てほしいんだけど……」

何やらデートのお誘いのようにテルヨシの明後日の予定を尋ねてきたサアヤの意図は分かりかねたが、確かに文化祭の振り替え休日が明後日なので時間はあるし付き合いもすると気軽に言えば、実際に話を通つてしまったことに恥ずかしそうにするサアヤは、唐突に家へとテルヨシを招待。

「いやあのね！ 私が是非つてことじゃなくて、今日のこれも『彼氏の学校の文化祭に行く』つて言つちやつて、そんなにお熱な彼氏ならさつさと紹介しろつてお母さんがね……言つててその……ダメ？」

いつかとは言つていた話ではあるが、こうも急に来るとキョトンともしてしまうテルヨシに対して、滅茶苦茶な理由をつけて自分の意思じゃないと主張してくるサアヤだが、なんだかんだでテルヨシを家に招きたいところはある様子。

「ダメなわけではないですよ。でもそうになると粗品でも用意していかない」と失礼か」

「いい！ そういうのいらないから！ じゃあ来てくれるつてことでいいわね？ 放課後まっすぐバイト先に行くから、ちゃんと待つてよね。それじゃあ、今日は楽しかったわ」

「うん。オレも楽しかった。今度また2人でデートしようね」

急な重大イベントが舞い込んで来たが、願つてもない親への挨拶を出来るならどんとこいな感じでした。承すると、余計なことではなくていいと釘を刺したサアヤは、何だか色んな感情が次々と沸いてどうテルヨシと向き合えばいいかわからなくなつたか、逃げるように矢継ぎ早にそれだけ言い残して小走りで帰つていってしまう。

そういうところがたまらなく可愛いと思ひながらも、やはり相当に疲れていたらしく、今頃にあくびが出たところで家の中へと戻つて、ゆっくりお風呂に浸かつてから泥のようにベッドで眠り始めたのだつた。

間章

Acceleration Second 64

「あー、落ち着かん」

文化祭から一夜明け、その後片付けに奔走した学校での作業も終わっていつも通りにバイトに勤しむ時間帯。

客足のない時間を見計らって店内の簡単な掃除をしながら、レジ前に立つパドのあえて聞こえるように独り言してみせると、凄く、すごく面倒臭そうに「どうしたの？」と尋ねてきたパドの優しさに甘えて落ち着かない理由についてを話す。

「いやさ、明日バイトのあとにサアヤの家に行くんだけど、お母さんが会いたがってるなんて言われると色々と考えちゃってね……」

「テルが色気を出さなきゃ問題ない。サアヤの親に気に入られようとかそういうの」

「ええ……サアヤの親にはサアヤとの関係を認めてもらいたいし、そのくらいはしてもいいのでは？」

「そういうことは言葉でどうこうよりも、本人達の在り方で伝わる。上辺だけで語る方が失礼」

「おうふ……悩んでたのがバカらしいほどの正論がクリティカルヒットお……」

どうせ話したいんだらうからさっさと話せといった表情のパドに昨日に決まったサアヤの自宅来訪の件を少しウザい感じで話してみると、変なことしなくてもいいとのご指摘を受けて、昨夜から色々と考えていたことが吹っ飛んでしまった。

まあテルヨシ的にはそこに至るまでの過程を楽しみたいという、遠足前夜のウキウキに近い感覚で思考していたのでこの会話自体に特に意味はなく、あくまで会話の前戯といったところ。

「……ユリさんがレギオンから抜けて寂しい？」

「それは当たり前。旧プロミに誘ってくれたのもユリだったし、今のプロミの再建に尽力もしてくれたから、私にとってアキとニコと同じ

「くらい大事な親友」

「引き止めたいって思わなかった？」

「ユリは昔からこうと決めたら動こうとしない。私が嫌だって言ったら揺らいだかもしれないけど、それはユリの決意に応えるってことにはならない」

本題自体が少し明るくないこともあったのでそういった切り出しになったが、やはり気になることは聞いておかなきゃと真面目な雰囲気です話を聞く。

親友のユリがプロミから抜けるというのはパドにとっても、レギオンにとっても大きな意味を持つのは間違いない。

「ユリの脱退は昨日のうちにレギオンメンバーに通達したから、今頃はポツキーとカッシーを中心にみんなから詰め寄られると思うけど、レベル8になって対戦拒否の権利を破棄したユリが、今よりも強くなるうとしてる決意は、きつとみんなにも伝わる」

「そういうやレベル8で領土なしなんてリスクが大きいよねえ」

「……それは自分に言ってる？」

「……あつ！ オレもレベル8じゃん！ アホやんオレ！」

パドと一緒にそのレベルを8にしたユリだからこそ、それが抜ける穴は大きいのが、ネガティブな理由で抜けたわけではないユリをパドが言うようにみんなはちゃんと認めてくれるはず。

そこはテルヨシも心配していないが、レベル8が無所属になることの意味について今さらに気づいて他人事のようなことを言ってしまった、自分もまたその状況にいることを指摘されてアホなことを言ったことを自覚。

それにはツツコんだパドも呆れ気味だったものの、狙ったのかなんのかわからないその様子に自然と笑顔が漏れてしまっていた。

翌日。文化祭の振り替え休日となった今日は、夕方頃にサアヤの家へお邪魔することになる。

平日ということもあってパドという同世代の話し相手がいなく、開店準備からバイトが始まったことで店長の薫さんが「普段はミヤアと一緒に面倒を見るのは大変だから、今日はマンツーマンでしごいてあ

げる」と大変ありがたいご教授をくださったおかげで、ほとんど厨房から出ることさえできない時間を過ごした。

まあテルヨシとの会話目的の客は学生を中心に放課後の時間帯に集中するし、平日の昼間は店頭に出てもイートイン・コーナーはあまり使われない。

暇をもて余してサアヤが来るのをあれこれ考えながら待つよりも、薫さんに怒られながらしごかれる方が有意義だったのは間違いないので、結果としては良かったのだが、放課後の時間帯になってサアヤが来ても15分ほど解放してもらえなかったのは泣きたくなった。

「アキのお母さんって厳しいんだね」

「妥協を許さないって意味ではあの人はプロフェッショナルだからねえ。働くみんながそうだけど、オレとミヤアは特に厳しく育てられてるよ」

「それだけ期待してるってことなんですよ。アンタなんて来年からは正規採用だもんね」

ようやく解放されてバイトを終了させられたテルヨシは、サアヤと一緒にまっすぐにサアヤの家へと向かい始め、環七通りから中野駅に向かうバスに乗り込んでその移動中に他愛ない会話をする。

サアヤの家は中野駅の北口から少し北上した先にあるらしく、加速世界においては中央本線を境に分かれてる中野第1戦域内ということになる。

かつて旧プロミに所属していたのだから、自宅が領土内にあるのは普通なことだが、テルヨシの家と直線距離で1kmちよつと離れてる程度なのは少し嬉しいものだ。

「それより家にはお母さんだけ?」

「そうね。お父さんは確実に夜の8時以降に帰ってくるし、歳の離れたお兄ちゃんもいるんだけど、今は独り暮らしで浦安にいるから、まあいいようなものよ」

「浦安って、千葉か」

「ほとんど東京みたいなもんよ。江戸川区が目と鼻の先にあるんだもの」

「そのお兄さんに会えるチャンスは？」

「それはちよつと待ってほしいかも……私が言うのもあれだけど、お兄ちゃんって割とシスコンで、私に彼氏がいるって知ったら『俺の妹をたぶらかしたのはどこのどいつだー！』ってマジで家に乗り込んでくるかもしれないし」

「愛されてるのね」

「8つも離れてるとお兄ちゃんの中ではまだ私はこんな小さい妹って感覚なのよ。もう15歳なんだけどねえ……」

変に緊張するとサアヤまで緊張させてしまうので会話の流れで自然と家族構成についてを尋ねて、厄介そうなのがお兄さんなことを把握。

テルヨシもマリアという妹的存在がいるから、サアヤなんていう可愛い妹がいたらシスコンになる気持ちは十分にわかるが、マリアとは5歳差なのに対して、サアヤとお兄さんは8歳差。

血の繋がりがある分、お兄さんの中でサアヤが守るべき対象として強く根付いているのだろうし、シスコン呼ばわりしてもサアヤがお兄さんのことを嫌った様子がなく、話していても楽しそうにしてるのは、サアヤもまたブラコンなどところがあるのかもしれない。

どのみち今日のところはサアヤのお母さんだけのようなので、最低限で失礼のないように挨拶はしつかりしようかと心に決めて、中野駅に到着したバスを降りて、そこから徒歩で向かおうとする。

サアヤもなんだかんでドキドキは止まらないのか、バスを降りたところで少し時間を使わないかと適当な店を勧めて寄り道を促すが、こういうのは引き延ばせば「やつぱり今日はやめよう」とか言い出すきっかけを与えかねないので、そこはきつぱりと断りを入れてあげる。

「うう……家に帰るだけなのに何でこんなに緊張するんだよお……」

「そんなガチガチになってるとお母さんに弄られるかもよ」

「それはもう色々嫌すぎる……つと、ちよつと待って」

それで腹は括ったか、寄り道は諦めてくれたサアヤが家への道を示しながら歩き始めたので、テルヨシもその隣を歩いてついていくが、

バスの運賃を払う都合でグローバル接続していたサアヤがメールを受け取ったようで反応を待ってみる。

「誰からのメール?」

「ア……違う違う。イーターからよ。なんか今どこにいる? っのと、伝言を頼まれたって」

「伝言?」

「うーん……テル、イーターとリアルで会ってみる?」

「はい? 今から? 家には?」

「30分程度なら遅れても問題ないわよ。そもそも何時に帰るなんて言っていないし」

「結局、寄り道することになるのか……」

そのメールの送り主は《アイス・イーター》だったようで、あまりに自然に尋ねられてうっかりリアルネームが出かけていたが、ギリギリで言い直してそのメールの内容を簡潔に説明。

その説明からでも加速世界のことなのはなんとなくわかるし、テルヨシにも話すということはサアヤ個人に対するものでない可能性も考えられる。

そこから何故かイーターとリアルで会おうという話に発展して、動きの早いサアヤはイーターにメールを返して合流を図るようで、家に向いていた足を反転させて中野駅に戻る進路に変更。

「イーターは中2戦域にいるみたいだし、『せせらぎ』は今日は休みだから南口の先のファミレスに入るわね」

「ちゃんとイーターに許可とってよ?」

「イーターもテルとはリアルで会ってみたって言ってたし、たぶん問題ないわ」

「たぶんじゃダメでしょ……」

まだイーター本人にテルヨシと会うことは知らせてないっぽいサアヤの勢いには呆れてしまうが、すでにグローバル接続を切ってしまったサアヤがズカズカ歩いてしまったので、イーターに同情しつつもそれについていくのだった。

中野駅の南口を出てすぐにあったファミレスのボックス席に入っ

た2人は、とりあえずドリリンク程度は持つてイーターの到着を待つ間、伝言とやらの中身を尋ねる。

「イーターの《親》が私だからってことでの伝言だったんだけど、タイミング的にはどっちかというアンタへのって意味合いがあると思うわ」

「オレに？」

「《ゲート・スピン》が話があるから会いたって。もちろんあつちだよ？」

「スピン……ってことは、キットの精神干渉は止まったんだな」

「そこはまあ素直に喜ぶべきよね。私達の努力が実を結んだんだから」

その伝言を預けたのが、先日まで《ISSキット》によって精神干渉を受けていたスピンだったとわかると、そうやってまたスピンの表舞台に出てきたことを素直に喜ぶ。

伝言に関してもテルヨシの所属するレギオンのメンバーだからとサアヤとイーターに接触した節があるようで、サアヤの所在を尋ねたイーターのメールからして、おそらくまだ中2戦域に留まってる可能性が高い。

それなら今すぐにグローバル接続してマッチングリストを開けばいい話だが、物事には順序というものがあるので、まずはこれから会うイーターとちゃんと挨拶をしてからでいいだろうとその到着を待つ。

2人がファミレスに入ってからわずか5分程度でファミレスに新たな客が入ってきて、見た目でほぼ100%小学生な男の子1人が誰かを探す仕草で店内をゆっくり歩き始めた。

その男の子を発見したサアヤが見えるように手を軽く振って呼び寄せると、気づいた男の子もまっすぐに近づいて空いていた向かいの席に座ってきた。

マリアとほとんど歳の違わないだろう目の前の男の子は、くりつとした目が可愛らしく中性的な印象がある。

黒い髪は襟首の辺りで綺麗に切り揃えてあり、青いジャージの上下

はファッションに頓着のない男の子らしいものだ。

その男の子がイーターであることは間違いないが、どういうメールが送られてきたのか、目の前のテルヨシを見る表情はちよつと呆然としている感じ。

「んじや改めて紹介するわ。この子はオオキタアキラ大喜多亮。私の従弟で家も近所よ。ほら挨拶」

「わっ、わっ、サアヤ姉がいつもお世話になってます」

「そういうんじゃないわよ……保護者かアンタは……」

座ってから一言を発しないイーターに代わってサアヤが自己紹介をして本人からも挨拶するように促したが、慌てたイーター、アキラは別の意味での挨拶を披露しサアヤを呆れさせる。

これだけで普段のサアヤとアキラの関係性がよくわかり小さく笑ってしまったが、自己紹介なことを思い出して今度はテルヨシが名乗る。

「皇照良だ。よろしくな、アキラ。でもアキラかあ……アキちゃんと同じだなあ……」

「それね、アキと会って私も思ったのよ。リアルで顔を合わせることはないだろうけど、呼び方に変化はつけない方が賢明」

「えっ？ えっ？ 僕の他にもアキラさんと知り合いなんですか？ なんかすみません」

とりあえずの挨拶を済ませてはみたものの、アキラという名前はすでに《アクア・カレント》こと氷見あきらが使用しているというかだったので、呼び方に関しては今後もアキラに即決定。

それは別にアキラが悪いわけでもないが、困る原因が自分だったことで反射的に謝る姿はやはりイーターだったので、ペこぺこと頭を下げたアキラに対して2人ともが思わず笑ってしまったのだった。

そのあともう少しだけ話を聞くとアキラはマリアと同じ年の小学4年生である事実がわかり、勢いでマリアとも対面させてみようかと提案するが、何故かそれをサアヤが止めてしまう。

「ダメよテル。アンはアキラが一目惚れしかけないから会わせるのはリスクがあるわ」

「むむっ、それは見過ごせないのう。サアヤが言うからには、アキラの好みのタイプはズバリ……」

「あ、会ってもいないのにリスクとか好みとか何なんですか……そ、そんなに可愛いんですか、アンさんって」

「そりやもうアキラが友達になったら学校の子に自慢したくなるくらいには可愛いわよ」

「それは否定しないけど、アンにも聞いてみて会いたいってことになつたらオレは会わせるのはいいと思うし、アキラはどうよ？」

「でも僕、女の子と話すのはちよつと苦手で、友達になれてもどうしていいのか……」

「ちよつと待て。その理屈だと私も苦手なはずだけど、アンタその辺で遠慮とかしたことなくない？」

「サアヤ姉は従姉だし、姉御って感じだから例外なだけだもん」

あまりリアル割れを推奨するのも良くないことはわかってるが、マリアには同世代の友達がまだまだ少ないのも現実だったので、そうした意味でもアキラは別にいいかと思う。

そこから話が従弟関係の闇が発生してしまい、サアヤがアキラを問い詰める状況が出来てしまったが、逃げることに関して無駄に磨かれてしまつてるアキラは、話を切り替えるようにスピンのことを切り出す。

「そ、それよりもスピさんが待つててくれるので、サアヤ姉かテルさんが会った方がいいんじゃない……」

「サアヤの家にも行かないとなんないしね。パパッと済ませちやおうよ」

「……仕方ないわね。それじゃ私がスピンに挑むから、2人は観戦者登録しといて」

「了解」

話の逸らし方が強引すぎてイラツとした感じのサアヤも、このあとの予定を考えて冷静になってくれて、グローバル接続をしながら2人に指示を出し、それに従ってグローバル接続をしつつサアヤを観戦者登録して、確認を終えたサアヤが加速してスピンに対戦を申し込み、

その対戦フィールドへと誘われていった。

対戦目的ではないので降り立ったフィールドが《荒野》ステージであつても特にこれといった考察もなしに見晴らしの良い場所でスピンの到着を待つと、1分程度でガイドカーソルが消えてスピンの姿を現す。

そのスピンには一昨日の段階で胸部装甲にあつたISSキットの眼球の痕跡はなく、完全にキットの寄生は存在しない証明をしてくれて改めて安堵すると、ギャラリーに声をかけて抜けてもらってからテルヨシ達と正気に戻って初めての対面。

「テイルも来てるとはな。手間が省けたか。まずはそうだな……あれだ。色々と迷惑かけて悪かった」

「あんなことになるなんて思つてなかつたんだから、スピンの謝ることもないって」

「むしろよくキットの支配に抗つて他のやつらみたいにならなかつたって感心してるくらいなんだけど」

「いや……俺も正直、限界だつて何度も思つてたんだ。あれから学校も休んでニューロリンカーも外して必死だったんだが、一昨日の段階でそれも本当に限界だった。あの時はもうほとんど意識もなかつたんだが、目を覚ました時にそばにいた《マゼンタ・シザー》が教えてくれたんだ。あのキットを使い物にならなくしたのは、お前らだつて」

対戦の時はやたらとテンションの高いスピンも、今回はそのナリを潜めて頭を下げてくる。

そのスピンのがずっと苦しんできたことはテルヨシとサアヤも十分にわかつているし、そうまでして自制して他人に迷惑をかけないようになつていたスピンの努力は立派だと思う。

「他にもネガビュとプロミもいたみたいだが、そつちとは接点もなく話すに話せなくてな。お前から機会があつたら謝つてたことを伝えてくれ」

「それはいいけど、謝罪のためだけに私達を呼び出したってことはないわよね？ それならイーターにでも伝言すれば済むもの。直接言

いたかったって話なら筋は通ってるけど、頭を下げるだけで終わるなんて柄じゃないわ」

「参ったな……こんな謝罪のあとにどう切り出そうか悩んでたんだが……」

「それがガツちゃんの良いところよね」

その謝罪に関しては何もないので、スピンがそれで満足したならそれでよしとして、性格的に謝罪してそれで用は終わりなんてことはないだろうと勘繰ったサアヤに対して、やはり何かあったらしいスピンがタイミングを見計らっていたことを吐露。

そのタイミングが唐突にやって来て困った雰囲気はあったものの、察して促してくれたテルヨシ達に軽く頭を下げてから、持ってきた話を始める。

「昨日から復帰して色んな噂を聞いたんだが、お前ら先週辺りから《五芒星》と接触してたみたいだな。理由についてはわからなかったが、こうして当人達から聞けるならと思つてな。俺達に何かあるのか？」

「あら、こつちから切り出そうとしてたから手間が省けたわね。テイル、話してあげて」

「オレ達のレギオンに入ってくれ！」

「ほとんど省きすぎよ！」

「揺るぎないですね、テイルさん……」

どこからどう巡つてそんな噂が聞こえてくるのか不思議だが、五芒星と接触していることが伝わっているならと、ここでスピンの話を聞いてから話そうと思つていたサアヤが時間短縮ができるテルヨシに説明させる。

だがテルヨシも坦々と話すだけではつまらないのでサアヤからのツッコミ必至な勧誘をして狙い通りにツッコませることに成功。

その夫婦漫才にはスピンがやや引いていたが、咳払いをして改まったテルヨシが真面目に説明を開始。

「……なるほどな。《帝城》の攻略とはまた大きく出たもんだ」

「二応、今のところシンデレラ姫からは条件付きでの了承をもらつて、リリースは論外つて突き返されて、ルールーは返事待ちつて感じ」

「……はあっ!? あの《天井知らず》がお前らの話をちゃんと聞いたのか!?!」

「そこはもつと驚きなさい。私達も未だに驚いてるから」
「僕も昨日聞いてビックリしてますし」

ユリの加入条件から始まったものではあるが、今やきつかけに過ぎないそれはあえて言わずに、帝城攻略のための戦力を集めている旨の説明を滞りなく完了させたテルヨシに腕を組んで聞きに徹したスピンは、少し呆れつつも《チャイブ・リリース》のように突っぱねることもなく呑み込んでくれる。

結果として最後の勧誘になったスピンに現在の状況も教えてあげたのだが、やはり驚きはあの孤高のバーストリンカー《ボツシユ・ルーレット》がテルヨシ達とまともに会話したことにあつた。

その事実マジで驚きまくりのスピンだったが、ゆつくりと落ち着いてから思考に移って、五芒星の全員と話はしたことを加味してその口を開いた。

「……形としてはまだお前らのレギオンに入ったやつはいないんだな。だが誰もお前らのやろうとしてることを全否定してるわけでもない。俺も帝城攻略なんて考えたことはなかったが、何かしらの策は見えてきけると判断して良いか?」

「その辺は今週末にでもある程度で可能性が示せれば良いなあとは思ってるよ」

「そう、か。俺もどちらかと言えばリリースの意見に寄るんだが、その策とやらが現実味を帯びるものになるなら、協力は惜しまない」

そこから出た返事は始めこそ否定的だったものの、キットの件もあるからと実現に向けての協力は惜しまないと言ってくれたのだった。

「ただ、注意してもらいたいことが2つある」

文化祭の振り替え休日という珍しく平日の夕方に時間が空いていたテルヨシは、サアヤの家にお邪魔する予定があったものの、その前に《アイス・イーター》ことアキラとのリアルでの対面と《ISSキツト》の影響から脱した《ゲート・スピン》との対話に応じていた。

スピンからは迷惑をかけたことへの謝罪があつたものの、それはあつさりと終わらせて話はテルヨシ達のレギオン《メテオライト》の壮大な目的についてに。

《帝城》の攻略という野望のために《五芒星》を仲間に引き入れようとしていたテルヨシ達の話に了承と取れる返事をくれたスピンに話を聞いていたテルヨシ達3人は手を取り合つて喜ぶが、その輪に加わる前にとあくまで冷静に口を開いた。

「さすがに今日これからこの瞬間にお前らのレギオンにつてのは無理がある」

「そりやお前がいま所属するレギオンにも断りは入れないといけなしな」

「ああ。レギオンを抜けることに納得してもらえようにするが、それにどのくらい時間がかかるかはわからない。今週中にとは言つておきたいが、それが済むまではお前らへの協力はする余裕がない」

「あと1つは何かしら?」

「これはまあ、俺のいま所属するレギオンがそうだからってことなんだが……」

その注意の1つは考えれば当然のことなので、3人ともそこは問題ないとあつさりと了承。むしろ今週中に説得までしてくれるのかと驚くくらい。

それほどスピンという戦力はレギオンにとつても失うには惜しいものだと確信できるし、今も話だけはレギオンにしているだろう《シンデレラ・コントラリー》と《チャイブ・リリース》とてレギオン内では決断が出ていないはず。

それほどの話をテルヨシ達が持ち出している実感が今さらながら湧いてくると、進めた計画の先で「やっぱり無理でした」とは口が裂けても言えない。

そうなたら元のレギオンに戻ればいい。そんなに話は深刻か？

否。深刻なのだ。テルヨシ達の目的のために彼、彼女らの絆の輪を崩してしまう事実に変わりはないし、その崩れた輪は決して元の綺麗な輪に戻ることはない。

だからこそテルヨシ達はその覚悟を大々的に表明する必要もあるし、妥協などあつてはならない、全身全霊で挑む野望。

テルヨシの中で『責任』という重いものがのしかかった感覚がありながらも、それを背負って前に進む覚悟も決めてスピンの話を引き続き聞くと、2つ目の注意事項は何やら今のレギオンの方針が関係しているらしく歯切れが悪い。

「仲間と呼ぶ以上は腹を割って話がしたいってわけで、レギオンではみんなリアルで顔を合わせてるんだが、俺もそのおかげで今のレギオンの良い雰囲気を保てていると思ってる」

「つまりスピンはリアルでオレ達に会って話したい。そういうこと？」

「お前らだけじゃない。これから加入させる他の3人に、それ以外のメンバーもってことだよ。それが叶うなら俺もこの話をレギオンに本気で掛け合おうと約束する」

これはどうなんだろうか……。

スピンが歯切れ悪くも口にしたレギオン加入の条件はなかなかハードなものだった。

最近ではテルヨシ近辺で頻発してしまったから感覚が麻痺気味になつてたが、本来《リアル割れ》というのはバーストリンカーにとつては御法度と呼ぶに等しい行為そのもの。

たとえば同じレギオンに所属しようと《ネガ・ネビュラス》のように全員が顔見知りなんていうレギオンの方が稀有なことは考えなくてもわかる。

それはレギオンが大きくなればなるほど顕著に現れるし、目の前の

サアヤですら旧プロミのどのメンバーともリアルでの面識はなかったと聞く。

そのリアル割れをレギオン加入の条件に加えるのは正直、かなり厳しいと言わざるを得ない。

「あー……んー……そうねえ……そればかりはオレ達がこの場でオツケーとは言いにくい」

「私達とボンバーは問題ないけど、五芒星の3人はそうもいかないからね……」

「あの、それが通らないとスピンさんはレギオンに入ってくれないんですか？」

「……いや、正直、俺もかなりの無理を言ってる自覚はあるんだ。だがそうやって今のレギオンで腹を割ってる以上、移籍先になるお前らのレギオンでそれ以下の絆の在り方は、今の仲間を納得させられない」
「ぐぬうう……筋が通ってて納得せざるを得ない……」

その厳しさはスピンにも自覚があつて、無理を承知で言っていることもわかるが、そこが今のレギオンを抜けるためにはクリアしなければならぬ壁であると話されると、こつちとしても無理と言えない。

「………スピン、今どこにいる？ 私達は中野駅の近くのファミレスにいるんだけど」

「俺は中野総合病院を出たところだが……」

「ああ、2週間近くも学校休んでたら何かしらの疑いは出るよな……」
「その辺はまあ察してくれ。それより位置的には中野駅に近いが、会うつもりか？」

「即決できる条件ではないけど、そのつもりがある意思表示だけはおく意味はあるでしょ。あと今後の連絡手段はないと話すだけでもこうやって面倒になるもの」

マズい流れになつてきていることはテルヨシにもわかったが、決断を下す状況でもないことも事実でどうするのがいいのか迷っていると、旧プロミ所属の経験が成せる判断か、サアヤがとにかく今はスピンの条件を呑む気があると示す必要性を話し、現在地からも割とすぐに合流できるスピンは少しだけ考える。

「……自分が言い出したことだ。リアル割れに抵抗はない。ただ、リアルの俺はお前らが思うほどのやつじゃないから、あまり期待はするな」

「そんなこと言ったらオレ達もそうなんじゃないの？ こっちとあつちでのギャップなんてあつて当然だしな」

「なんとなくだが、お前だけはリアルもそんな感じだと確信してる」

「良い勘してるわね。このままりアルにいるわよ」

「ビックリするくらいこのままです」

「裏表のない人間なのだよ」

リアルで会うこと自体に抵抗はないが、どうやらリアルでのギャップが心配らしいスピンの意外と乙女な部分には笑える。

ギャップという意味ではユリや綸ほどの衝撃はないだろうと確信はあるので、余程のことがない限りは大丈夫だと返したテルヨシ達に了承すると、スピンは引き分け申請のあとに対戦フィールドを去ってリアルでの合流に動いてくれた。

対戦を終えて待つこと5分ほど。

中野総合病院からファミレスまでならおよそ500mあるかどうかなので、早足くらいならそろそろ着くかなと入り口に目を向けていたテルヨシ達は、おそらく1人で来るだろう中学生くらいの男子に照準しておく。

その予想通りに1人の学校制服を着た男子生徒がファミレスに入ってきて店員に席を勧められるのを断って3人組の学生のグループを探して店内を見渡し、テルヨシ達を目に止めて視線が合ったらまっすぐに歩いてきてボックス席の前で止まる。

「君達がそうで間違いないかな」

「アンタがそう思うならそうだと思う……けど」

「いやあ……まあ……とりあえず座つてくれる？」

「では失礼させてもらうよ」

遠目からでもなんとなくその『異質さ』には気づいていたが、目の前まで来るともう凄いの一言。

スピンのリアルと思しき男子生徒は、サラリーマン顔負けのビシッ

！ としたブレザーの制服を着こなし、混じり気なしの黒髪はきつちり七三分けで整えられている。

仕草も1つ1つがキビキビとしていて背筋もピンとし、動きに無駄がないというかなんというかだ。

表現するなら率直に言つて『生真面目な男』という印象しかないスピンにギャップ慣れしたつもりだったテルヨシとサアヤもさすがにどうしたものかと接し方に困るが、アキラの隣で面接しているが如く綺麗に座るスピンは、見た目通りの真面目な性格から無駄話もなしに切り込んでくる。

「まずはネームタグの交換をお願いしたい。僕は東條陸人。トウシヨウリクト」
《明北学院》の中等部2年だ」

「お、おう。皇照良。梅郷中学校の3年だ。テルでいい」

「都田沙絢よ。《帝秀学園》の3年」

「大喜多亮です。《桃園小学校》の4年生です」

「帝秀か……我が校とは少なからず因縁があるな」

「進学校として上がバチバチやってるだけで、生徒は他校のことなんてあんまり気にしてないけどね」

「そのようだな。都田先輩の態度からそれはよくわかる」

「私が基準はやめて。私は少数派だと思うから」

早速のネームタグの要求にまずは自分からと3人に渡しながら口頭でも自己紹介。

それに倣ってテルヨシ達もネームタグを渡しながら自己紹介してみせ、3人のネームタグを受け取ってから学校の話でサアヤと少し盛り上がる。

勉強の話は頭が痛くなるので聞こえないフリをしつつリクトのネームタグにもある明北学院という学校に何故か覚えがあったテルヨシは、どこで聞いたか記憶を遡っていく。

「明北って……先週に学園祭やった？」

「我が校はそこまで熱心に取り組んではいないが、確かに先週に学園祭は開催されている」

「あー、なるほどね。その日に休んだバーストリンカーってお前か」

「もしや襲撃の噂を聞いていたか」

「まあそんなとこ」

それで思い出したのは先週のネガビユの会議の中でフーコが持ってきた《マゼンタ・シザー》の学園祭襲撃の話。

その標的となったのがリクトの通う明北学院で、襲撃されたグレウオ所属の3人の他に当日に欠席していたバーストリンカーもいたと報告にあったのだ。

それがまさかりクトであるとは思わなかったが、今はその話はさして重要でもない。「そんなことより」と話は本題へと移す。

「オレとサアヤとアキラ。3人ともと連絡手段を作るのか？ それともまだ誰か1人にしておくか？」

「そこに関しては僕もここに来る間に考えていた。現状ではまだ君達のグループに入ると約束はできないが、前向きに検討しているということは伝えられるだろう。その上で今はテル先輩、あなたとスムーズに連絡がつけばいいと考える」

「スムーズにね……こいつ平日は学校とバイトで1日のほとんどをグローバル接続切ってるけど」

「そうなのよねえ……どっちかというとサアヤの方が適任かもしれない。一応はグループのリーダーだし」

「……では都田先輩でもいいですが、僕のグループには女性がいたことがなかったゆえ、女性と連絡先を交換するのは都田先輩が初めてということになる……」

何はともあれ無事にリアルでの対面は果たしたので、あとは連絡先を交換するだけで今日のところはお開きでいい。

それならとさっさと用件を済ませにかかったテルヨシに対して賛同しつつ、結果としてサアヤとのアドレス交換となった。

ただリクトは女性への免疫があまりないらしくて、アドレス交換にドギマギする姿はサラリーマン風な身の丈から急に子供っぽさが見えて思わずニヤけてしまった。

「ふふっ、いいわねそういう初な反応」

「からかわないでくれ」

「サアヤにドギマギするのもよくわかる。よくわかるけど、残念ながらサアヤはオレと付き合ってるから、ここから恋愛に発展するようなことはないと思ってくれていいぞ」

「……中学生で男女交際とは余裕がありますね」

それは悪いと思いつつ、少し恥ずかしがるリクトにはサアヤと脈はできないという割と残酷な現実を突きつけて強引に緊張を解き、聞いたリクトも下らないとは言いつつも目の前の2人がカップルとわかると、自分とは生きる世界が違うと線引きしたのか何やら壁が作られた感覚。

恋愛観は個人の自由なので、リクトの中で中学生の恋愛は早いと言うなら否定はできないため、そこについての議論は無意味と結論を出して、滞りなくサアヤとのアドレス交換が完了。

「さて、と。用件は済んだし20分くらい使っちゃったから、待たせるのも悪いしさっさと行こっか」

「うわあ……現実に戻さないでよお……」

少し時間はかかったがこれで用件は終了したのは確かなので、まだ超重要な案件が残ってることを思い出させるように席を立ったテルヨシに対して、考えないようにしていたっぽいサアヤの足取りは非常に重い。

そんな2人がどこへ行くのかと気になるアキラとリクトも頭にクエスチョンマークを浮かべるので、隠す気のないテルヨシが「親に挨拶しに行く」と間違っではないが受け取り方によって誤解がありそうな言い方で2人を困惑させる。

それにはサアヤがすかさず「そんな大層なものじゃないから」と顔見せ程度なことを述べたが、どのみちカップルのイベントなのは変わらないので他人事のような表情になった2人は引き留めることもせず店を出ていく2人を見送るのだった。

寄り道はしてしまっただが、これでとりあえず今日の最大イベントに突入できるとテンション高めのテルヨシがそのテンションでサアヤの手を握って歩く。

対して親と会わせる側のサアヤは握る手を拒みはしないまでも、テ

ンシヨンまでがついていかずに足取りに元気もない。

「そんなにおレがお母さんと会うのが嫌？」

「嫌とかそういうのじゃないけど、いざそうなって私がどうしていいのかわからないから……」

「いつも通りにしててよ。オレもいつも通りでお母さんと会うからさ」

「それもそれで不安なのよねえ……お母さんのこと口説いたりしないですよ。」

「サアヤの前でお母さんを口説けるほど肝っ玉は据わってないっす……」

そんな調子ではテルヨシも気兼ねなくお母さんに挨拶はできないので、なんとか家に着くまでに前向きにしてあげたいと話しかけ、自分がどうなるかわからないのが不安なサアヤからそれを払拭しようとしてみる。

しかし別の不安を抱かせる結果となって苦笑してしまうが、それが逆に良かったか小さく笑ったサアヤが「信じてあげましょう」と握る手を少し強くしてくる。

「そういえばテルの両親のことを聞いたことなかったわね。どこで何をしてるの？」

「父親はおレが2歳の時に他界して、母親はアメリカの刑務所に入りながら精神治療を受けてる」

「……………なんかごめん。気軽に聞いて…………」

「知らないで聞いたんだからサアヤは悪くないでしょ。話さなかったオレも悪いしね。だからサアヤに会わせるとかは今は無理かなあ。母親とはほぼ絶縁してるようなもんだし、仲も良くない」

その流れからテルヨシの親についてを尋ねてきたサアヤに対して、余計な気を遣わせないようにと坦々とした口調で答えて会わせることはできそうにないことを言うと、ちよつとだけ泣きそうな表情をしたサアヤが足まで止めて謝ってくる。

テルヨシの中ではもうほとんど気持ちの整理をつけたことなので、サアヤが気に病むこともないと言いたかったが、優しいサアヤは少し

引き摺ってしまおうと思つて握つていた手を指を絡めるいわゆる恋人繋ぎにしてみせる。

「色々と事情はあるけど、今は充実してるし幸せだつて感じてる。そう感じられるのはサアヤがそばにいてくれるからだよ。そのサアヤが悲しい顔をするのはオレも悲しい。何より笑つてる顔が好きだしね」

「……それでもごめんね。無神経だったのは反省する」

「オレとサアヤの関係は色々とまだまだ『これから』なんだよね。今までも大事だけど、その『これから』も大事にしていこう」

「……もう、テルのくせにカツコつけないでよ」

「たまにはいいじゃないですか」

お互いにまだまだ知らないことの方が多いのが現状なのはこの前のマリアの件でも認識したが、改めてそうなんだと思わせたこのやり取りに2人とも小さく笑つて「もつと知つていこう」と顔を見合ふのだった。

少しハプニング的なこともあつたが、再び歩き出した2人は無事に家にまで辿り着き、立派な洋風建築の一軒家の敷地前で立ち止まつて握つていた手を放す。やはり見られるのは恥ずかしいらしい。

中ではサアヤのお母さんがまだかまだかと待ち構えていると思われるのでサアヤも呼吸を落ち着けてからなるべくいつも通りに玄関の扉を開けて「ただいま」と帰宅を知らせる。

その音と声でリビングにあつた気配が玄関へとやって来てお母さんが姿を現す。

「ちよつとお、遅いわよサアヤあ」

「用事もあつたんだから仕方ないでしょ……つていうかお母さん……」

顔を見せるや否やサアヤに文句を言うお母さんだが、その所作には洗練さが溢れていていつものように家に上がるサアヤはスルーしつつも客人のテルヨシには綺麗な屈み方からスリッパを差し出してくれる。

サアヤのお兄さんが8つ上の23歳ということは、お母さんは少な

くとも40歳は越えているはずなのだが、なんともまあ見た目は若い。サアヤと少し歳の離れた姉妹だと言われてもギリギリ通りそうなほど。

ただ母親としての立場は保ちたい心理か、格好に関しては非常に落ち着いた印象を受ける色合いと、肌の露出を控えたものとなっていて、人妻の色気の中に押し込めている感じ。

「お父さんと旅行に行く時以上に化粧が決まってるけど……」

「え、ええ？ 私はいつもこんな感じよ？」

そんな上品さも漂うお母さんに対してのサアヤの反応は冷ややかで、いつもよりも気合いの入った化粧には呆れてしまつて、とぼけるお母さんの恥じらい方はサアヤと似ていた。

そんな親子のやり取りを玄関に立ち尽くして見ていたら、気がついたお母さんが上品に笑いながらどうぞと立ち上がる。

「ごめんなさいね。いらつしやい、皇照良君」

「もう名前もご存知なんですね。お邪魔します」

「サアヤがいつも『アイツ』とか『アレ』とか失礼なことを言うからちやんと呼んであげなさいって注意したらポロツとね」

「ポロツとじゃないでしょ！ がつつり『彼氏の名前は？ ねえねえサアヤあ』って食いついてきたのはどこのどなたですかね！」

「もう……ポロツとの方が可愛げがあると思つたから少し捏造したのに、わかってないわね」

「ああはいはいそういうのに疎くて悪かったです。それじゃ着替えてくるからリビングで待ってて。お母さんは余計なことしなくていいからね」

すでにサアヤから名前も聞かされていたらしく自己紹介が省けたが、独特な空気で展開される親子の会話にテルヨシでさえ割り込めなくて呆然としてしまう。

その会話を強引に終わらせて2階への階段に足をかけたサアヤが自室に着替えに行こうとして、謎の注意を受けたお母さんが「何のこ」とぼけら」ととぼける様子を見て不安に思いつつも2階に上がつていき、残されたテルヨシはお母さんにリビングへと案内された。

サアヤのお母さん、都田晴海^{ハルミ}さんは、サアヤの注意を受けたとは思えないほどの好奇心でテルヨシを大型のスクリーンテレビ——家族団らんのためのものだろう——を正面にコの字型に配置されたソファアーへと勧めて、手際よく飲み物とコースターを差し出し別の辺のソファアーへと座りマジマジとテルヨシを観察。

観察することには慣れてるテルヨシもその視線には少し戸惑い一つも出された飲み物は飲むべきかと口をつけておく。

「それでテルヨシ君はサアヤとはもうキスとかしたのかしら？」

そのタイミングでニコニコのお母さんは唐突に爆弾を投下してくるから、虚を突かれたテルヨシは飲みかけていたものを盛大に嘔き出してしまふところをギリギリで堪えて咳込むのだった。

Acceleration Second 66

ようやく本日の最大イベントである都田家訪問まで辿り着いたテルヨシだったが、そこで待っていたサアヤのお母さん、ハルミの衝撃的な質問に飲みかけていたジュースを噴き出しそうになり咳込む。

サアヤが自室に着替えに行ってる間にリビングで2人きりなのをいいことに、初対面でいきなり「キスはしたの？」は破壊力抜群すぎて、いつもはそういうことを言う側だけに衝撃は大きい。

突然のことで咳しながら涙ぐんでしまったテルヨシにさすがに謝りはするハルミさんだったが、大丈夫とわかると質問の答えを待つような期待の表情を向けてくる。

「あの……そういうことをサアヤさんが言いたがらないから僕に聞くんですか？」

「それもあるんだけど、テルヨシ君の話を聞いてると、なんだかずいぶん女の子にだらしないイメージがあったから、割とそういうことに抵抗ない子なのかなって思ったんだけど」

「イメージと違いましたか？」

「話よりもずっとしっっかりしてる感じはあるし礼儀正しいから、ちよつとサアヤを怒りたい気分です」

「いえ、女性に甘い性格なのは間違ってますし、本当はキスに近い行為にもあまり抵抗はないんです。中学に上がるまではワシントンに住んでいたの、ハグとかは挨拶みたいものですし」

「あら、帰国子女なの。英語は堪能……ではないのね。逆に珍しいよな気もするけど」

その期待に沿うかはわからないものの、テルヨシなりにその質問が自分を探るものと予測して質問で返しつつ真意を聞く。

ハルミさんはまだサアヤから聞いた話の中でしたかテルヨシのことはわからないため、そのイメージ通りの男ならちよつと……みたいなことは思ってたっぽい。

ただサアヤがどう話したかも気になるが、伝わってる部分が完全に間違いでもなさそうなので、そこはちゃんと訂正しつつ欧米文化に慣

れてることを説明。

12歳までワシントンに住んでいて英語をまともに話せないというのに疑問は持たれたものの、ちよつと特殊な環境で育つたと察してくれてそれ以上は何も言わずに話を続ける。

「それで質問の答えとしては、サアヤさんとまだキスなどはしていません」

「それはサアヤが嫌がったりしてゐるから？」

「いえ、おそらくサアヤさんはもう何度か僕にそういうことをしているとおアピールしてくれていると思います」

「じゃあどうしてしてあげないの？」

「……これを言うのは恥ずかしいんですけど……」

自分の性格を改めて説明してハルミさんとのイメージを矯正した上で、先ほどの質問の答えを正直に述べ、その答えには尚更キスもしていない現状に疑問を持ったようだ。

それはそうだろうと、順序だてて話してこの答えを聞かされたら自分でもそうなるかと確信できるので、その理由については物凄く個人的な想いがあつたために少し恥じらいを持って吐露。

「大切に想えば想うほど、1つ1つの行動が起こす変化とか結果が、一気に出てしまうことが少しだけ怖いんです。今までの当たり前が明日には当たり前でなくなつていたり、当たり前じゃなかったことが、ある日から当たり前だと思ふようになったり。それは恋人だからとか関係なく、全てにおいて言えることなのかもしれませんけど、オレはサアヤとの繋がりを、たとえ周りがどう言おうと自分達のペースでゆっくりでも強くしていきたいって考えています。サアヤには焦れつたいって思われてるかもしれませんがね」

そうして自分の臆病な部分をさらけ出したテルヨシは、ついつい目の前の人がサアヤのお母さんであることを忘れて、一人称をオレやサアヤを呼び捨てにしてしまつてハツとしてしまう。

その事には気分を害したということとはなかったようだが、話を聞いてハルミさんは小さく笑うと、茶々を入れるお茶目な母親ではなく、1人の娘の母としての顔でテルヨシを見る。

「サアヤは……上に歳の離れたお兄ちゃんがいる、そのお兄ちゃんにベツタリだったせいかな、少し女性らしさが欠けて成長したんです。このままだと女性としての魅力が伸びなくなるかもと思って、日本舞踊の稽古へ無理矢理にでも参加させて、せめて所作だけでも身に付けさせました。でもサアヤは綺麗な所作とは裏腹に心が凄くたくましくなってしまうって、中学に上がった頃は恋愛なんて出来ないよ、少しだけ落胆もしていたんです。でもそのサアヤが3年生になってからどことなく身だしなみを気にし始めて、先月には彼氏ができたって報告してくれた時は、本当にビックリしました。あのサアヤを好きになっ
てくれる子がいたんだって」

「……遠回しに僕とサアヤさんをデイスってませんか？」

「そういう意味ではないの。ただサアヤは性格こそたくましくなりましたけど、本当は女の子として扱われることを誰よりも望んでいてわかってたから、テルヨシ君がサアヤをちゃんと見てくれてるんだなって思ったら嬉しくなっちゃって。女は恋をすると変わるっていうのが日に日に目に見えてもいて、だから1日でも早く会わせてっ
てお願いしたの。サアヤが好きになって、サアヤを好きになってくれた人がどんな人か知りたくてね」

本人不在でハルミさんが語った本音は、心からサアヤのことを大事に思っていることがヒシヒシと伝わってきて、聞いているテルヨシの心までポカポカと温かくなる。

それをまだ15歳の少年に聞かせるべきか悩んだ節も見られたが、テルヨシが真剣にサアヤと向き合ってくれてると理解してくれたのか、隠すことなく話してくれたことには感謝しかない。

「その、15歳のガキが言うのもなんですけど、これからもサアヤさんとは仲良くさせていただきます。たまには喧嘩もするかもしれないけど」

「ふふっ。喧嘩くらい男女の間では日常茶飯事ですし、どんどんやっちゃって。それでサアヤとのキスはいつの予定なの？　もうそろそろあの子も焦れているはずよ」

「や、やっぱりそう思いますか。それに関しては割とすぐにでもと

思ってはいるんですけど……」

そのハルミさんが話をした上でテルヨシを認めてくれたのだ。それが嬉しくないはずがなく、歳不相応ながらもすっかりとサアヤとの交際の許可を言葉にさせていただく。

それで真面目で大事な話は終わりにしようとして、両手を合わせてお茶目な母親の顔に戻ったハルミさんは、やはりキスくらいはすぐにもすべきと助言してくれて、それには今日一番のマジ顔をしかけたところで着替えを終えたサアヤがリビングに入ってきて話は強制終了となってしまうた。

リビングに入るなり話をしていた様子の2人に「何を話してたの？」とストレートに尋ねてきたサアヤの性格は相変わらずだが、まさかハルミさんとキスのタイミングの話をしていたなんて言ったら殴る蹴るの暴行に及ばれるのは必至。

そんな娘の姿が想像できたハルミさんも下手に場を乱そうとせず「サアヤのどこが好きなのか聞いてただけよ」と、かなりギリギリのラインで捏造する。

自分をどう言われたか気になるサアヤは退散していったハルミさんを他所に隣に座って問い質してくるが、その前に着替えたサアヤをチラッと観察。

制服姿が基本的に見慣れていることもあつて、着替えてきたサアヤは何を着ても新鮮なものだ。

その中で今回はザ・部屋着といった短めのショートパンツとワンピースの白のポロシャツの超ラフスタイル。

ここで少し気合いを入れておめかし！ といった感じもなく、普段からこうなんだろうという日常感が滲み出ている。

「……何よ、だんまりになつて」

「それはそうよサアヤ。彼氏が遊びに来たんだから、大胆にミニスカートくらい穿いてくればいいのに。ねえテルヨシ君？」

「スカートって……制服がそうなんだからいいじゃない」

「制服のスカートは少し長めでしょ。下着くらいチラ見せしなさいって言ってるの」

「それが娘に対する命令か！」

沈黙した時間はわずかだったはずだが、普段から反応が早い方のテルヨシの小さな変化にも気づいてきたサアヤの鋭さには参る。

その様子を夕食準備に取りかかったらしいハルミさんがキッチンから茶々を入れてテルヨシが何をしていたかを看破。

見てないのによくわかると戦慄しつつまたも親子の独特な空気に割り込めずにいたら、自分の服装を見られていたとわかって落ち着かなくなったサアヤは、小さな声で「スカートが良かった？」とか可愛いことを聞いてくる。

もうそれだけでご馳走様な状況だが、色々悪い方向に頭が働いたため少し動揺を誘ってみる。

「スカートもちろん見たいけど、今のサアヤも自然体で凄く良いなって思うよ」

「——ッ!!」

そのためにあえてサアヤの耳元でささやくように言ってあげ、とどめにつこり笑顔を向けたら最後、みるみるうちに顔全体が茹でダコのように赤くなって、声にならない声を出しながら思考停止状態に陥ってしまった。

そのあとに理不尽な連続チョップを無言で食らわされてソファアーに沈んだテルヨシだが、親の前でも普通に手は出るらしさに何故か安堵。

「テルヨシ君、お夕食を一緒にどうかしら」

それでも楽しそうな2人の雰囲気は伝わってしまったか、作業しながらのハルミさんがもう少し長居してもらおうとそんな提案をする。

時間を確認するとすでに17時になるところで、夕食も一緒にというのは非常にありがたい申し出だ。

「ダメよお母さん。テルの家にはアキラと同年の子がいるって話したでしょ」

「そういえばそんな話も聞いた気が……」

「すみません。その子に夕食を作らなきゃならないので、今回はご遠

慮させていただきます。次はその子と一緒に来るか、事前に用意をしておきますので」

だが冷静になったサアヤがテルヨシが断りを入れるよりも早くマリアの心配をしてくれて、ちゃんと話してはいなかったようだが覚えはあったか、ハルミさんもそういえばと口にする。

そんなわけで今日はマリアにサアヤの家に行くことは告げていたが、夕食は準備してなかったので丁重にお断りすれば、残念そうにはしたもののハルミさんも納得して「次はその子も一緒にね」と言ってくれた。

その流れでサアヤがマリアが心配になってしまったか、なるべく早く帰ってあげた方がいいのではと口にしてしまっ、それを言われてしまえばテルヨシは帰るしなくなる。

ここで粘ってマリアを蔑ろにするのかとサアヤに怒られるのは間違いないからだ。

「せめてサアヤのお部屋を拝見は……」

「そんなのこれからいつでも見られるわよ。でもマリアの空腹は1分1秒を争うの」

「そこまでマリアは腹ペコキャラではないけどね……まあバイトが終わってる分、今日はちよつと手の込んだ料理でも作ってきますよ」

それでもせめてとまだ完遂してないサアヤの部屋への進入に果敢に挑んだが、そんなことの一言で片付けられて却下されてしまう。

最後の突撃も玉砕に終わって落胆してしまったテルヨシに申し訳なさそうな表情こそ見せるサアヤだが、自分が言ったことを撤回はせずにテルヨシを立たせる。

が、その話を聞いていたハルミさんがまた茶々を入れて空気をぶち壊す。

「とかなんとか言ってるけど、本当は昨日から見せる気は満々で、気合い入れちやっつかえって恥ずかしくなっただけでーす」

「お母さん!!」

その暴露のおかげで少し漂った残念な空気は払拭されたが、秘密をバラされたサアヤに「そんなんじゃないから!」と言い訳されながら

「またもチョップ連打を食らうのだった。」

「家に滞在した時間はわずか20分ほどだったが、その短い時間でも濃密で有意義な時間だったと思いつながら玄関を出ていくと、見送りに出てきたサアヤが後ろで手を組んで話をしてくれる。」

「今日はちよつとバタバタしちゃったから、次はゆつくりできるようにしましょ」

「マリアを連れてくる約束もしちゃったし、いつそのこと1泊する手も」

「マリアはいいけどアンタはダメよ。家の生活観とか色々で見られるのは私だけじゃなくてお母さんとかもなんだから」

「男女差別では？」

「そつよ？ 悪い？」

「いえ、当然の主張でございます」

別れ際の何気ない会話に穏やかな笑顔でいてくれるサアヤを見て心が癒され、寂しさはだいぶ薄れてくれる。

話したように次に来る時はマリアも一緒なので、サアヤの部屋にもスムーズに入るとは十分に可能だろうと密かに思いつつ、今日の気合いの入った部屋とやらも見えたかっつと、そこだけは残念にしておく。

それで寂しさが出てくる前にさつさと行こうと一言「それじゃあ」と言おうとしたら、後ろ手に組んだままのサアヤが何やら少しモジモジとした雰囲気醸し出してきたかと思えば、ちよつとだけ顔を上げてテルヨシの顔に近づける仕草から何も言わずにその目を閉じてしまふ。

それが意味するところはアホでもわかるので、テルヨシも意を決してそうしてきているサアヤの気持ちに応えようとその肩に手を置いてみると、少しだけ体をビクつかせたサアヤは「来るのか？」といった感じでその目がより強く閉じられる。

ただ1つ、気になることがあるとするなら、それは視覚的にはサアヤには完全に死角だったこともあって仕方ない部分もあるが、そこだけはクリアしてあげないとサアヤが恥ずかしさで死んでしまうだろう。

うから、クリアするためにサアヤの顔に自分の顔を近づけ……

「……お母さんが覗いてるけど、それでもしていい？」

「へっ？ ええっ!？」

角度によってはしてしまっているように見えるだろう距離で耳元にそう囁くと、予想外の言葉にパツと目を開けたサアヤはテルヨシを振りほどいて後ろを向き、玄関の扉の間からニヤニヤしながら覗いていたハルミさんを発見。

当然、鬼のごとく怒りを噴出させたサアヤがハルミさんをチョップ連打しかねない勢いで玄関に行こうとし、そそくさと退散していったハルミさんを「許さない」と怒気も含めて声を荒らげる。

「サアヤ」

しかしそうなるのをわかってあえてそうしたテルヨシは、親子喧嘩が発生してもなるべく穏便に済むようにサアヤが歩き出すところを引き留めて振り向かせる。

その呼びかけの声でほとんど反射的に振り返ったサアヤは、即座に自分の肩を掴まれてその顔に近づいたテルヨシに対処が追いつかず、振り返りざまに不意打ちのキス。

サアヤに勢いがあったので歯と歯がぶつかるハプニングも考えて掴んだ肩でサアヤをコントロールしてなんとか事故は防げたが、思ってたのと全然違ったのかすぐにテルヨシの胸に手を当てて離れにかかったサアヤは、確かに触れた感触を確かめるようにその唇に指を這わせた。

「お気に召さなかった？」

その反応がちよつとだけ残念だったテルヨシが正直な気持ちを聞こうと尋ねてみると、ようやく頭が現実に追いついたか顔面真っ赤な状態になってから、その首をふるふるふる。首が吹っ飛んでいかないか不安になる勢いで横に振る。

「……人が決心して待ってたところに不意打ちして、怒ってるところにも不意打ちなんて酷いわ。でも、残ってる感触はとっても心地良いの。何でかな」

「それはたぶん、今のオレと同じ答えだと思うよ。言ってもいい？」

それが治まると胸に手を当てて浅く呼吸し、今のキスの感想を述べ
てくれるが、嫌な気持ちにさせずに済んでひと安心。

そしてサアヤの言う心地よい感触はテルヨシの唇にも確かに残っ
ていて、その理由を尋ねてきたサアヤではあるが、質問で返したそれ
に小さく首を横に振って答えとする。

「次はちゃんとサアヤのタイミングでするから」

「次は普通でいいからね。こんなの連続されたら心臓が持たないわ」

「了解。それじゃあまたね、サアヤ」

「うん。ばいばい、テル。ありがと」

キスしたあとというのはなんだか会話が続く気がしなく、帰るタイ
ミングまで逃しそうなのを阻止するようにテルヨシから別れの言葉
を切り出して、まだ余韻に浸っているサアヤも少し艶っぽい笑顔で手
を振って見送ってくれた。

それでサアヤの家から歩いて中野駅まで辿り着いて、南口に出たと
ころで近くの座れそうな場所に腰を下ろして、そこで自然とうなだれ
てしまう。

「はああああ………はっず」

なんとかサアヤとのファーストキスには成功してここまで来られ
たものの、正直に言ってテルヨシにはここまでいつも通りを通せたの
が奇跡だと思えていた。

サアヤの前でこそ平静を装っていたが、本当のところはサアヤのよ
うに顔面から火を噴いて、さらに地面を転げ回りたいほどのキザな行
動をした自覚があつて、実行に移した恥ずかしさがその身を襲ってい
たのだ。

だがそれをやってしまうとサアヤからキスの余韻を奪いかねない
醜態となるし、こっちが恥ずかしがると帰るタイミングを完全に見
失って後味の悪い別れになると直感して、それはもう必死に全力で我
慢していた。

その反動が今になって襲いかかってきて座り込んでしまったが、自
分のやったことに後悔はないし、あそこでキスしない選択はサアヤに
恥をかかせることになったと思えば、自分が死ぬほどキザな行動で自

爆するのなんて些細なこと。

そうやって自分のキザな行動が良い方向にいったと言いつ聞かせ、数分かけて落ち着きを取り戻したテルヨシは、いつまでも座つても仕方ないと立ち上がり、その足を高円寺の自宅マンションへと向けて夕食をどうするか考え始める。

それと同時に今日のサアヤの家でのことをなんとなく考えて、サアヤが別れ際にあんなことをしたタイミングに察しがつく。

おそらくだがサアヤは、テルヨシとハルミさんの話をドア越しに聞いていたのだ。

どこからかはわからない。仮に全てを聞かれていたとしたら、本人には聞かれたくない本心を語っただけに恥ずかしさ全開だが、最後の方のキスのタイミングうんぬんの話は聞かれていたはず。

サアヤはそれを聞いていて知らん顔であえてハルミさんのとぼけた話に乗っていたが、今までのアプローチが分かりにくかったと思つたのか、その結果がストレートなキス待ち顔である。

「……………テル、顔が緩んでる。ちよつと気持ち悪い」

「ええ？ そうかなあ？」

そのキス待ち顔が超絶に可愛くてテルヨシの脳内メモリに永久保存された上でリピート再生され続けてしまったので、帰ってから夕食が開始された段階でも惚気けてしまつてマリアから引かれてしまう。

それでも締まらないテルヨシの表情に諦めたマリアが無視する方向に舵を切つてしまったのは悲しいが、今夜はそれを差し引いても幸せゲージが振り切つてるので、明日はその幸せをマリアにお裾分けする形でリカバーすることにして全てを終えてベッドにダイブ。

そのベッドの中でも考えているのはサアヤのことばかり。

明日は店に来てくれるのか。来てくれたらどんな挨拶をしてどんな話をしようか。

そんなことばかりを考えて全然寝られる気配すらなかったが、考えられることがひとしきり出し切られたところで眠気もやって来て、次第にその意識が遠退いていった。

ただ、薄れゆく意識の中で確かに感じたのは、人を好きになること

の大切さと、素晴らしさだった。

サアヤの自宅訪問イベントから一夜明けて、浮かれた気持ちを取りセットして目覚めたテルヨシは、朝食にマリアの好きなフルーツもりもりミニクレープを付けて昨夜の不快感をさせたお詫びでご機嫌を取って登校。

また始まったいつも通りの日常の中で、少しずつでも確実に変化してきているものはあるとおぼろ気に考えながら、これからのことについてもしっかりと考えていく。

まず忘れてはならないのは加速世界の最大の敵である加速研究会。どんな崇高な目的があろうと、多くのバーストリンカーを。事によつては全バーストリンカーを巻き込んで事象を起こしてきた彼らのやり方はとてもじゃないが許容できるものではない。

その組織が白のレギオン《オシラトリ・ユニヴァース》を隠れ蓑にして《ホワイト・コスモス》がレギオンマスター兼会長である事実も証拠はないが確定した以上、今までのような防戦一方の後手後手の展開にさせない。

その攻勢に出るに当たっては黒雪姫とユニコが主導で色々と模索する形にはなっているので、テルヨシ達が単独で何かするのは向こうにとつても大した痛手にはならない。

やるなら一致団結した『大きな力』で組織を崩壊させられるほどの攻撃を仕掛ける方が効果的なのだ。

その方法については黒雪姫に考えはあるようなので任せているが、必要とあれば協力を惜しむつもりはないし、今さらテルヨシ達を巻き込むことに黒雪姫も躊躇はしないだろう。

そして加速研究会のことばかりではない。彼らの存在は確かに無視できないが、そればかりに気を張っていたらブレイン・バースト本来の楽しみ方を忘れてしまう。

その楽しみ方を貫くためにもレギオン《メテオライト》が掲げた目的である《帝城》の攻略も計画を進めなければならぬ。

未だ攻略の糸口さえない状態で、仲間集めもまだ一人も勧誘できて

いないのが現状。

進展のほどは悲しくなるほど牛歩だが、確実に風向きは良くなってきた。

まだ条件は達成できていないものの、ユリとリクトと《シンデレラ・コントラリー》は加入に割と前向きな答えをもらえているし、《ポツシユ・ルーレット》と《チャイブ・リリース》の2人もまだ可能性は残されている。

だからこそ、今週末に行われる《七王会議》ではテルヨシもしっかりと爪痕を残さないといけないが、それをしてしまえばもう後戻りはできない。

そこに関してはサアヤのおかげで黒雪姫とユニコが味方してくれる約束はしているが、テルヨシが何をやり出すかまでは報告していないので、当日にどんなフォローをしてくれるかは未知数だ。

その辺はちゃんと詰めとけと言われそうな行き当たりばったり感はあるが、そうすると黒雪姫とユニコと密な接点を匂わせることにもなりかねない——すでに遅いのではとも思うが——ので、打ち合わせは避けているといったところ。

「テル、1つ聞いていいか？」

それら色々を考えていたらあつという間に昼休みが始まっていて、早々に近寄ってきた黒雪姫と一緒にランチとウキウキで腕に引く付く恵を従えて何やら尋ねてくる。

恵がいても問題ないなら加速世界の話ではないのかとも思ったが、そこはやはり黒雪姫。しっかりと言葉を選んで許可を出したテルヨシに尋ねてきた。

「お前のバイト先に今日、サアヤは来るかな。もし来るなら、文化祭の時に話していなかったことを話して放課後は店に寄りたいのだが」

「んー、どうだろうね。そんな毎日来てたらお財布ヤバイし、聞いてみないとわからん。放課後にメールして呼びかけてみようか？」

「ん、そこまでしてくれなくても、今日にでもメールして明日とかでも構わんが」

「姫、そうは言うけど、生徒会の仕事もまだありますから、こちらの都

合はそうタイミングを取れませんのよ」

「なら都合の合う今日にするべきだな。放課後は一緒に行くぞ」

「……すまん、手間をかける」

サアヤに何の話かと思いつつも、急ぎの用でもなさそうで割と緩い感じに脱力しながらサアヤを呼び出す口実ができたと密かに喜び、恵の意見に乗って強引に話を進める。

それに少し躊躇いはあったが、生徒会も夏休みを除けばあと2ヶ月で任期を終えてしまうので、行事も相まってやるのがそれなりにあるのは本当らしく、渋々ではあるが了承し放課後の約束をして食堂へと向かっていった。

ただ歩きながらに「それで姫、テルの彼女さんにどのようなお話が？」とニコニコ笑顔で問い詰められて助け船を求める視線を見てしまったが、とりあえずスルーして狸寝入りを決め込むのだった。

放課後はすぐに黒雪姫と一緒にバスに乗り込んで、意外と久々に黒雪姫と外で2人きりな状況になって……なんとも思わない気持ちはさておいて、リクトとルーレットの勧誘の件もあるので割とグローバル接続はしているだろうサアヤにメールを送ってみると、サアヤも学校は出ていたのか1分程度で返事がくる。

「来るってさ。店に着いたらイトイン・コーナーで適当に時間を潰すといいよ」

「いちおう確認だが、お前のバイト先はレパードがオーナーであきらの母親が店長なのだな？」

「そうだよ。でも知り合いだから安くなるとかはないからね。食べたのならしっかり代金はいただきます」

「そんな期待はしていない。ただ赤いのと出くわしたりしないか心配でな」

「文化祭のあとでお金に余裕ないと思うよ？ ああでも、月始めだからお小遣いとかもらってるかも」

無事にサアヤが来るとわかって安堵した黒雪姫と話しつつグローバル接続を切り、プライベートでユニコとあまり会いたそうにしている様子には苦笑してしまう。

そんな心配をしなくてもあの店に知人が意図的ではないタイミン
グで顔を合わせることはほとんどないし、トラブルなど起きた試しも
ないのだから、たとえ遭遇しても黒雪姫がユニコと喧嘩しなければい
いだけだ。

まあ軽く挨拶代わりに口喧嘩は許容範囲だが、本格化したら摘まみ
出せば済むかと失礼なことを考えていたら、思考がバレバレだったの
か物凄いジト目で見られて「TPOくらいわきまえている」とツッコ
まれてしまった。

サアヤの通う《帝秀学園》は渋谷区の幡ヶ谷近辺に位置するので、テ
ルヨシ達と同時刻に出発したとしたらどうやっても到着は遅くなる。

それでも30分以内には来るだろうサアヤを待ったために店のイー
トイン・コーナーで1人ポツンと座ってケーキを食べながら紙媒体の
本を読む様はさすがの風格だ。

独自の空間をすぐに作り出す才能は群を抜いている黒雪姫だが、そ
んなのがイートイン・コーナーにいるもんだから他の客も邪魔したく
ないという気が回ったのかいつもよりも割増で静かにしている。

「こう見るとやっぱ姫って美人よね」

「店を騒がしくするテルとは大違い」

「賑やかにするの間違いですう」

その様子をレジ裏から覗き見ていたテルヨシとパドがヒソヒソ話
でいつものコントを披露しつつ、何で黒雪姫が来たのかについてを説
明。

別にユニコがどうこうというわけでもないとなると、パドも余計
な詮索はしないといった感じで厨房に引っ込んでしまい、あんまり目
立つサボり方をすると薫さんからゲンコツを食らうので、テルヨシも
ちゃんとやることはやり始めた。

それで集中していたら店頭の方で声がかかって出てみると、黒雪姫
の座る席にサアヤが無事に合流し注文をしたようで、手でこっちと示
すサアヤに招かれて近づくと、注文と一緒に短い会話。

「来る途中にルー子が接触してきたわ。この前の返事ももらっただけ
ど、まだ決定してない。私かテルが対戦を申し込んで勝ったらレギオ

ンに入るって」

「負けたら？」

「ソーンのレギオンに入るってさ。どっちが行く？」

「ってことはもうこの戦域にいるんだね。K。オレが行くよ」

「負けたら承知しないわよ」

昨日のあれこれが尾を引いた感じは一切ないサアヤの反応にはちよつと残念に思いながら、移動中にどこかでルーレットに乱入されたりしいサアヤが、凄く簡潔に勧誘に対するルーレットの回答を教えてください。

きつともつと言葉があつたと思うが、それだけで伝えたサアヤの要約は見事。

ルーレットもルーレットで悩んだ結果として、らしく対戦で決めようというシンプルな答えを出したようで、その重要な対戦に自らが挑むことを告げる。

折角サアヤが作ってくれた1度きりのチャンスなのだから、応えてやらないわけにはいかないと気合いが入ったテルヨシは、注文を聞いて引っ込んでから1度ニューロリンカーをグローバル接続して加速。

すぐにマツチングリストを開いてルーレットを選択し対戦を申し込むと、ずいぶん久々にも感じる通常対戦フィールドに対戦者として誘われていった。

対戦である以上、ルーレットに少しでも不利で、自分に有利なフィールドを引き当てたいと願ったが、その願いは届いたような届いていないようなフィールドで反応に困る。

降り立った《魔都》ステージはオブジェクトが硬くて、ルーレットの攻撃でも破壊できたりできなかったりな強化外装が出ると思うが、そんな『些細なこと』はもう捨て置こうと切り替える。

「伝えきれないことを言つとくわ」

すでに戦闘モードに移行しつつあつたテルヨシの気配を敏感に察して、ギャラリーで入ったサアヤが近寄って他のギャラリーが来る前にあの短い中で伝えきれなかったことを告げてくれる。

「ルー子意思表示としてはこう。『アタシを仲間にしたのなら、お姉

くらい頼りになるってことを証明しろ！　それができないならお前達のレギオンに入る価値はない！』ってさ」

「それがどうして戦って勝つことが証明になるのか……：脳筋すぎない？」

「ルー子にとっては強さが信頼になるんでしょ。もうあの子はそのくらいアホでいい気がしてきたし」

理屈が通ってるようで通ってないようなルーレットの主張だが、答えとしてどうすればいいかわかってる分で納得はしてあげて、話をしている間にも容赦なくルーレットの必殺技ゲージが溜まっていくのを見てサアヤも離れての観戦に徹する。

ガイドカーソルはブレずに近づいてくる破壊音からまっすぐに向かってきてると判断してこっちも必殺技ゲージを可能な限り溜めに動く。

レベル8にもなればテルヨシの足でも魔都ステージのオブジェクトは反動なしで破壊できるが、レベル6の時までは少し反動があったことを考えればレベルアップの恩恵を感じざるを得ない。

その足で必殺技ゲージを問題なく溜めることはできたが、ルーレットの侵攻が予想よりも早くて破壊音がすぐそばまでやって来たせいで30%あるかどうか不安な溜まり具合で迎撃に動くことに。

「《バースト・ショット》オオオオ!!」

その間に《五芒星》同士の対戦とあってかなりの人数のギャラリイが集まってきてしまつて、対戦勘のあるルーレットはそのギャラリイの観戦する位置とガイドカーソルからテルヨシとの距離をおおよそで割り出して、その間に隔たった建物オブジェクトを壁抜きで破壊して先制の必殺技を放ってくる。

ルーレットの厄介なところの1つとして、どの強化外装であろうと必殺技名がバースト・ショットであることで強化外装自体を視認していないとどの必殺技が飛んできたか不明なこと。

その利点を生かした先制攻撃は見事に2人を隔てていた建物オブジェクトの壁をぶち抜いて、高エネルギーの弾となつてテルヨシへと迫り、唯一の共通点として単純な威力強化系必殺技であることを考え

て回避を選択。

《レイズ》もなしで魔都ステージの建物オブジェクトを貫通できる強化外装は大砲型の《アレース》か電磁投射砲の《エリーニユス》くらいかと予測しつつ、建物オブジェクト自体は倒壊することなく、その先を指すガイドカーソルでルーレットの位置を確認。

必殺技を使ったことで新たな強化外装が装備されてるはずだが、有効射程はその都度で変わってしまうからきちんと見極めなければならぬ。

だから観察眼をフルに発揮させようと目を凝らして動きを止めたのが運の尽き。視界の先の壁の穴から見えたルーレットが構えていたのは狙撃銃型の《カリス》だったのだ。

当然、有効射程内なので躊躇うことなく発砲したルーレットのカリスの弾丸は回避に動く前にテルヨシの左肩の装甲に命中しそこを起点に体を大きく弾き飛ばす。

肩は弾かれたが部位欠損まではしなかったのはラッキーと思い、ルーレットの射線から逃げるように横へスライド移動。

建物オブジェクトに開けた穴から狙撃してきたので、その穴から狙えない角度を取ってしまったえばルーレットは動かざるを得ないし、射線から外れるということは視界からも外れるということになり、その間にガイドカーソルが消える距離にまで接近。

建物オブジェクトを挟んで肉薄はしたが、ガイドカーソルが消えたことでルーレットがどう動いているかわからず次のアクションが定まらない。

と、普通は思うが、先ほどルーレットがしたことをそのまま返すように、屋上に陣取るギャラリーの視線からルーレットの居場所をおおよそで割り出して、今度はこっちが奇襲する。

間を挟む建物オブジェクトは10mほどの高さしかないので、壁にある突起に《テイル・ウィップ》を引っかけて上り、そのテイル・ウィップを足場にジャンプして新たな突起にテイル・ウィップを引っかけて屋上へと到達。

まだガイドカーソルは表示されないので移動距離は建物オブジェ

クトから付かず離れずを維持している。

やけに慎重とも思うが、こっちはこっちで接近戦しかないから、ルーレットの射程で戦わせることだけは阻止しなければ勝負にならないため、この奇襲は成功させてペースを掴みたい。

その思いから集中力を増した観察眼でギャラリーを改めて見て、ルーレットがどこにいるかをより正確に見極めて屋上からダイブ。

10mの高さなら発見して狙いを定めて撃つまでのアクションを完了させる前に攻撃は可能なので、飛んだ先。建物オブジェクトの角で様子をうかがっていたルーレットに躊躇なく飛び蹴りを仕掛ける。

「かかったなー！」

が、飛んだ直後で確認が上手く出来なかったせいもあるものの、突如として落ちてくるテルヨシに顔を向けたルーレットが手に持つカリスだと思っていた強化外装をハンドガン型の《アネモイ》に持ち替えてこちらへと向けてきた。

「にやろうが!!」

カリスよりも取り回しの良いアネモイなら撃つまでの時間を短縮できるし、動きを読んで待ち伏せていたっぽいルーレットの位置が壁に密着気味なのも考えられている。

壁による圧迫感のせいで人間というのはどうしてもその圧迫感から逃げたくなるもので、屋上から飛び降りたテルヨシも壁から少し離れた位置から落ちている。

さらに角という位置は軽いステップだけで壁の向こう側へと逃げる事ができるため、気づかれていないものと飛んだ時点でテルヨシの攻撃は当たらないことが確定していた。

おまけにアネモイの4種類の弾丸で何が装填されてるかもわからない状態から回避するのは尋常ではない難易度だが、このまま落ちていても良いので《インスタント・ステップ》で落下軌道を強引に変えて発射された弾丸の直撃を避けた。

と思ったらルーレットの放った弾丸は銃口から飛び出して1mの地点でまさかの静止しての滞空。

さらにダンッダンッダンッダンッ、と装填数上限の弾をわず

かに横へズラしながら0.5秒間隔で撃ち切ると、その時にはもうテルヨシもルーレットから8mほど離れた位置に着地することには成功していた。

「もうやだあ!!」

「突撃い!!」

攻撃を回避したとも言える状況だが、しかしそうではなく、テルヨシの反応速度なら全力回避に動くと言測してアネモイの弾丸を速度のある《エウロス》でも貫通力のある《ゼピュロス》でも、徹甲榴弾の《ボレアス》でもなく、ホーミング性能のある《ノトス》にしていたのだ。

ノトスの弾丸は発射してすぐにエネルギーを留めたまま滞空してターゲットをロックオンし、何かに当たるまで直進・滞空を繰り返す悪魔のような弾丸。

そのため他の弾丸と違って発射からタイムラグが発生し、本来なら接近戦への迎撃には向かないのだが、対戦勘の良いルーレットはそれを難なくクリアしてきてしまう。

そして滞空からロックオンしたノトスの弾丸が0.5秒の時間差で次々とテルヨシへと襲いかかってきて、ホーミングの脅威に晒される。

「エウロス!」

「鬼か!」

この時間差がイヤらしいと思いつつ回避に動くと、ルーレットは次の弾丸の選択を終えて取り出したエウロスの弾丸の入った弾倉を装填し完全に追い撃ちモード。

対戦が始まってからすでにルーレットの押せ押せな戦術が嵌まりまくりでめちやくちや悔しいが、やはりそれだけルーレットが強さという面で秀でている証明なので、それが仲間に行けると思うと自然と笑みがこぼれてしまう。

——なんとしても勝ってルーレットを仲間にする。

状況は苦しいが負けてやるつもりも毛頭ないテルヨシは、アネモイの銃口を向けられながらもノトスの弾丸を最小限の動きで避けて反

撃に出る。

レイズなしのノトスの弾丸であれば対処がまだ間に合うと確信していたテルヨシは、直進から滞空、また直進までの時間を観察して、滞空から直進までに2秒の猶予があることを知り、その2秒でルーレットの予想外から攻撃を実行。

ノトスの弾丸をギリギリのステップ回避で躲してルーレットとの間に並べると、滞空している間に弾丸に近づいて全力でルーレットに蹴り飛ばしたのだ。

それを右足の回し蹴りで1度に6発分、全てを蹴り抜いてやると、まさかの反撃にさすがのルーレットも伏せて飛んできたノトスの弾丸を躲してやり過ぎすが、その隙を逃すまいとテルヨシは伏せた瞬間から急接近を試みる。

「ナメるなあ!!」

ただルーレットも簡単には近づけさせないと伏せたところからしやがみ撃ちでテルヨシを狙ってエウロスの弾丸を放ってきたが、ここが1つ目の勝負の分かれ目と判断して構わずに突貫。

バシバシとエウロスの弾丸が体に命中するが、他の弾丸に比べれば威力も低いのでHPゲージの減りも少なく、勢いを殺さなかったテルヨシに回避が遅れたルーレットは咄嗟に両腕を防御に回して繰り出した蹴りをガード。

もちろんその威力で後ろへと吹き飛び、HPゲージもテルヨシとほぼ五分の7割にまで減少したが、地面を転がっても闘志が衰えなかったルーレットはその間にアネモイをストレンジに引っ込めて新たな強化外装を呼び出し、即座に撃ってくる。

見えたのは電磁投射砲のエリーニユスで、発射の瞬間に「アレークトー」と微かに聞こえたため、必殺技ゲージの量に比例して威力が増す弾丸と意識するより前にその圧倒的な弾速で軌道すら読む隙のない攻撃を横っ飛びで回避。

それで体勢が崩されたテルヨシが地面に両手をついてリカバリーしたところで、ルーレットは片膝をついた状態でエリーニユスを腰で構えて狙いを定めていた。

「《バースト・ショット》オオオオ!!」

《ボツシュ・ルーレット》をレギオンに引き入れるべく、ルーレットの提示した条件である『ルーレットに勝利する』ことを実行に移してテルヨシが果敢に挑んでいた。

しかしやはり《五芒星》の《天井知らず》。その実力は生半可なものではなく、どちらに傾くとも言えない戦況にやつとできたと思つた矢先に、強引な《エリーニユス》の弾丸《アレークトー》が無理な体勢から襲いかかり、辛くも回避した隙を突いて今度はエリーニユスの必殺技が炸裂。

大出力による破壊の弾丸は息つく間もなくテルヨシへと迫つてきて、ほとんど高熱のエネルギーがぶつかつてきた感じの力の奔流に右腕の肘から先が巻き込まれて蒸発。

それだけで済んで良かったと考えるべきか、右手を失つてしまったと考えるべきか少し悩んだが、その悩みを解決する前にエリーニユスをストレージに戻したルーレットが次なる強化外装を装備してもう動き出してしまった。

その手に持たれたのは特殊弾装のハンドガン《ホーライ》で、片膝から完全に立ち上がったルーレットはそのホーライに《エウノミア》の弾丸を装填。

エウノミアは範囲感知型の電撃地雷を設置する弾丸で、食らうとダメージ+軽いスタンという近接殺しな性能を持つているが、反応圏が動かない設置型なのは救いだ。

もう一つ確認されている《デイクー》は対象に5秒間、銃口を向けてロックオンが完了すると、発射と同時に対象に強力な落雷を放つ特殊な弾丸で、使われるならこちらの方が厄介だったかもしれない。

どちらにせよホーライの前で動きを止めたら『詰み』なので即効性のないエウノミアならばと正面突破に走つたテルヨシに対して、ルーレットはその遅延性も計算した上で進路上にエウノミアの弾丸を放つて、ちやうど通過する頃に発動するように設置しつつテルヨ

シとの距離を保つように後退。

当然そうするよなあとガツクリしてから、道を阻むようにエウノミアーを扇状に撃ち出すルーレットに唯一の突破口となった《インパクト・ジャンプ》による強襲を仕掛ける。

インパクト・ジャンプの速度ならエウノミアーの反応圏に入っても電撃を食らう前に範囲外へ脱出しつつルーレットに痛打を与えられる。

しかしだ。そんなテルヨシの行動を『誘導』している可能性が頭をよぎると、エウノミアーを6発撃ち切ったルーレットは次なる弾丸を装填するが、ここでまさかの新種を取り出してきた。

「《エイレーネ》！」

特殊弾装のホーライだから単純な攻撃力を持つ弾丸ではないと確信しているが、何が起るかわからない以上は回避するのが良いはず。

そのためエウノミアーの電撃地雷に踏み込まないようにブレーキをかけたところでホーライの銃口がテルヨシに向き弾丸が発射されるが、予想以上に遅い弾速は動体視力など必要なく視認できてしまうもの。

時速20kmあるかどうかかな弾速で、しかもグレネードのように飛距離も出ないのか30m程度の距離でさえ弾丸は重力で落ち始めてテルヨシに当たることなく地面に落ちてしまった。

「……って、ふざけんなよバカアア!!」

その現象をついつい見届けてしまったが、自分が今どこで止まってしまっているかを冷静に思い出して、何の効果があるかわからないエイレーネの弾丸が目の前のエウノミアーの反応圏に着弾したことに気づいて慌ててインパクト・ジャンプを後方に向けて発動。

バチンツ!! と目の前で弾けたエウノミアーの攻撃をギリギリで避けて遥か後方で着地をしたテルヨシだったが、70m以上も離れたルーレットも追い撃ちをかけるには少し遠い距離であることを考えて、今のエイレーネの弾丸の違和感に気づく。

効果は謎で直接の攻撃力を持つてるわけでも、炸裂するわけでもな

かったエイレーネの弾丸だが、ジャイロ回転をしながら迫ってきた弾丸は先端が尖った注射器のような形をしていた。

だとするならエイレーネはあの注射針に対象が刺さることで効果を発揮するタイプの弾丸と予測でき、好奇心から当たってみたいとも思うが、今は大事な対戦なのでその気持ちは封印して再び集中。

避けられたものの必殺技ゲージを使わせて接近を阻止したルーレットはしてやったりなのかホーライをストレージにしまって新たな強化外装を呼び出し装備。

それを見て改めてルーレットの戦い方が上手いことに舌打ち。

ルーレットの強力無比なアビリティである《レイズ》はデュエルアバターやエネミーを攻撃することで溜まるゲージを満タンにすることで段階的に強化外装を強化できるもの。

上限も今のところ確認できていないので天井知らずなどと呼ばれるが、このアビリティの脅威はデュエルアバターやエネミーの闊歩する《無制限中立フィールド》や参加者の多いバトルロイヤル・モードにほぼ限られる。

これまでのルーレットの戦いからおおよそではあるがレイズの強化タイミングを割り出していたテルヨシの考察では、1段階目のレイズを使うのに同レベルのデュエルアバターのHPゲージを5割ほど削らないといけないらしく、通常対戦フィールドにおいてはレイズはどうやっても1段階しか強化出来ないことになる。

レベル8のテルヨシ相手なら4割くらい削れば使えるのかもしれないが、それでも誤差の範囲で1段階なのは変わらない。

それは使っているルーレットが一番よくわかっているからだ、通常対戦においてルーレットはそのレイズを前提とした戦い方を全くないのだ。

レイズに頼らずとももう1つのアビリティ《インクリース》で装備制限はあるが、強化外装の能力を倍にできるため火力面でも他に劣るということもなく、レイズに拘らないから自分のタイミングで強化外装をストレージにしまって別の強化外装を取り出す手段も取れる。

そのギャンプル性もある強化外装の出し入れで臨機応変に戦える

ルーレットのセンスは常軌を逸しているが、そのランダム性に相手も速応力を求められる戦いに勝利してきたことで、レイズを使った戦い方も含めて《博打女王》^{ギャンブル・クイーン}と呼ばれている。

ホーライの次に出てきた強化外装はボウガン型の《アポロン》で、以前に見た弩弓よりもかなりスケールダウンし片手で持てるサイズにはなっているが、小回りが利く分では今は面倒だ。

それにアポロンの射程ならルーレット自身も接近しなければ当たらないので、予想通りまっすぐに突っ込んできたところをどう迎撃するか考える。

だが考えなければならぬのはアポロンだけではない。

ルーレットにとってはいま装備している強化外装が警戒されることなど考えるまでもなく、そんな警戒の中へ単純に突っ込んで来るだけの単細胞なら苦労はない。

おそらく有効射程に入る直前か入った瞬間に強化外装をチェンジして自慢の臨機応変さでそのまま攻撃してくる。

その変化にテルヨシは対応しなければならぬため、アクションはどうしてもルーレットより半歩遅くなるが、それは受け身に入った場合だ。

「——いいね、この感覚」

ルーレットは自分の強化外装がどんなものかをよく理解して、何が出てきても状況に最適な攻撃に繋げるだけの錬度を数々の対戦の中で培っているが、それが有利なのはルーレットが対戦のペースを掴んでいる時。

ルーレットが『ここで強化外装をチェンジする』と決めたタイミングでやらせるから後手に回ってしまうなら『ここでどうすべきか』を選択させることで先手が打てるということ。

ただし反応速度も尋常ではないルーレットが選択に迷うタイミングはかなりシビアなもので、おそらくそうと決めたタイミングの直前でなければ迷いを生じさせることは不可能。

それを見極めて、悟られずに攻撃するという難易度は最上級レベルだが、その状況に笑ってしまったテルヨシの頭に失敗の2文字は存在

しなかった。

アポロンの有効射程は約30m。テルヨシ相手なら15mは近づきたいところだと思うので、まず30mでどう動くかを観察。

その30mラインを全速で駆けたルーレットはスピードを緩めずに肉薄してきて、20mラインも越えてくる。

ここでアポロンを構えて狙いをつけてきてテルヨシの動きを見るが、テルヨシもその観察眼で『見ることに重点を置いた』と見抜いてノーモーションから瞬発力だけで前へと走り出す。

これによってルーレットが詰めたかっただろう残り5mを一気に詰めてルーレット本来のチェンジのタイミングを外し、アポロンの発射タイミングも誘導。

やはりテルヨシの動き方で対応を変えるつもりでいたルーレットはその足に急ブレーキをかけてアポロンの弓を発射。

そのタイミングを誘発したテルヨシは軌道の下を潜る低空姿勢で躲して前進を続け、次の一手が繰り出される前に攻撃するつもりでいた。

アポロンを撃ち終えたルーレットは次弾装填よりも強化外装のチェンジを選択し次の強化外装に持ち替えたのだが、右手に持たれたハンドガンはルーレット最強の流星群《アストライオス》。

「《バースト・ショット》オオ!!」

これもまた空に撃ち上げてから炸裂させる遅延性のある強化外装だが、必殺技はその限りではなく、撃った瞬間に巨岩爆弾を繰り出すアストライオスはこの状況で一番出てほしくなかった。

目前まで迫ったテルヨシに対して放たれたアストライオスの巨岩爆弾は、まるで立ちはだかる壁のように出現してテルヨシの攻撃を阻み、当たった瞬間に内包したエネルギーを炸裂させようとするだろう。

不可避の状況なのは間違いない。ならばどうやってダメージを最小限に留めるかが大事……

誰でもそう思うだろう状況なのは間違いないが、ここでテルヨシが考えたのは全く別の角度からの思考。

アストライオスの巨岩爆弾はもうどうしたって当たってしまうが、10mとない距離にまで肉薄していたテルヨシに対してこれを放ったからには、ルーレット自身も爆発範囲に入ってしまったって、相応のダメージは覚悟していたはず。

だがアストライオスのダメージでスタンした相手になら、どの強化外装でも追撃で仕留められるだけの総ダメージを叩き出せると瞬時に考えて撃ってきた、のだとすればやはりルーレットの対戦勘は驚異的。

防御に回つてもどうせやられる状況になるなら、一か八かの賭けに出てもいいだろうと、目の前の巨岩爆弾に全力の蹴りをぶち込んでまさかの押し返しに出る。

巨岩爆弾自体にも推進力があつたので軽減が精々だが、《テイル・ウィップ》で地面を捉えて体が後退しないように補助してやれば食い止めることは不可能ではない。

それによつて撃つた直後にバックステップもしていただろうルーレットを爆発の範囲に少し入れてダメージをいくらか増すことができ、テイル・ウィップが破壊されながらもしっかりとテルヨシの体をその場に留めて吹き飛ばすのを阻止。

あまりの爆発に腕やら何やらが吹き飛んでしまったかというダメージで感覚がわからなくなつたが、HPゲージはギリギリ1割を残して踏み留まることに成功。

ルーレットもガイドカーソルが表示される位置まで後方に吹き飛んだようだが、ダメージもそれなりに入って残りは3割ほど。

「インパクト・ジャンプ!!」

爆発の煙の中で視界はゼロだったが、ガイドカーソルが出てくれたおかげでルーレットの位置はわかつたので、姿が見えたら撃たれると確信して最後の奇襲と意気込んでインパクト・ジャンプで前へと跳ぶ。

当たるかどうかはルーレットの体勢次第のため、当たらなかつた場合に即座に切り返してインパクト・ジャンプを使えるように足を繰り出し、実際にその足が空を切つてルーレットの後方に流れたと理解し

た時には、すでにターンを終えて改めて開けた視界でルーレットを捕捉。

あの状況で後方に転がって《カリス》をしっかり構え、直線は危ないどローリングしてしっかり回避していたルーレットはもはや化け物で、テルヨシが後方に流れたのも察知してカリスがこつちを向く瞬間に最後のインパクト・ジャンプで強襲。

——ガガアアアン!!

これを食らえば自分が負けると確信していたか、インパクト・ジャンプから繰り出したテルヨシの蹴りが最初に捉えたのは、体を守るように構えられたカリスで、その攻撃で粉々に砕け散ったカリスと共にルーレットが後方へ吹き飛ぶ。

しかしHPゲージはまだ1割を残していて、地面を転がると思われた体も必死のリカバリーで両手足をつけてダメージを最小限にして止まり全損を防ぐ。

「うおおおおお!!」

「うらああああ!!」

両者共にあと一撃でHPゲージが吹き飛ぶ状況。

20mと離れてしまった距離がもたらしたアドバンテージは圧倒的にルーレットにあり、新たに呼び出された《アネモイ》に《エウロス》の弾倉が装填されてしまう。

完全に不利な状況にギヤラリーに入っていたサアヤから「踏ん張れテイル!」と渾身の声援が飛んできてテルヨシの背中を押し、放たれたエウロスの弾丸の1発目を奇跡とも言える動きで回避。

だがあと5発も避けて接近するのは奇跡の中でも奇跡が起きなきや無理に等しいが、前に進まなきや勝機もないのでジグザグ走行でルーレットへと迫ってみせ、ルーレットも気合いとは裏腹に落ち着いた構えでテルヨシを狙う。

——そして、奇跡は起きた。

テルヨシがルーレットのエウロスの弾丸を5発とも避けきったわけではない。

アネモイのトリガーにかけていたルーレットの人さし指が音もな

く碎けて発砲されなかったのだ。

ほんの一瞬。完全に予想外なことに思考が停止したルーレットが反対の手に持ち替えて撃つまでに要した時間はわずか2秒となかったが、その一瞬の好機を逃さなかったテルヨシは20mの距離を自慢の足で一気に詰めて今度こそ最後の一撃をルーレットに食らわせた。

【YOU WIN!!】

仮想世界なのに軽い息切れを起こしていたテルヨシは、その炎文字が視界に広がった瞬間にようやく自分が勝利したことを理解して、その場で力なく大の字に倒れ込んでしまう。

次いで訪れたのはこの対戦を観戦していたギャラリーからの惜しめない歓声と拍手の嵐。

戦域的にプロミのメンバーの姿が多いが、それでもこの戦域にいるほぼ全てのバーストリンカーだったのだろうギャラリーの人数は20人近くいて、この世紀の名勝負を観られたギャラリーから「マジ最高!」とか「鳥肌立ったぜ!」とかの言葉をかけられて悪い気はしない。

「いやあ……キツツイ勝負だったあ……同レベルなら負けてたかもしれない……」

「ホントにヒヤヒヤしたわ。負けたらしばらく口を利いてやらないつもりだったんだけど」

「勝ったからオツケーっしょ」

「そういうことね」

ギャラリーが対戦の余韻に浸る中でサアヤが近寄って会話してくれるが、負けてたら大変なことになっていたことに戦慄しながら、サアヤがルーレットが倒された位置でそのルーレットに声をかけるのを見る。

「さて、結果も出たし約束は守りなさい。20分後、言っておいた店に来て。ただ先約があるからきつちり20分後でお願いね」

その言葉からこの対戦を了承する前に両者の間で取り決めがあったようだが、聞いた限りではリクトの条件を達成してくれたと判断できる。

その辺で抜かりないサアヤには感謝しつつ、ポツポツと言葉をかけては抜けていくギャラリー達にそろそろフィールドを閉めると宣言してから、10秒ほどでバースト・アウトして現実世界へと戻っていった。

神経をすり減らした対戦だっただけに戻ってからすぐにグローバル接続を切って深呼吸をしたテルヨシは、わずか2秒に満たなかった世界での出来事を一旦忘れてバイトに集中。

何事もなくサアヤに注文のケーキを出してから作業しつつ店頭の様子をうかがっていると、15分ほど経ったところでサアヤと話していた黒雪姫が席を立てて会計に入り、レジに立ったテルヨシと短い会話。

「今日はすまなかつたな。連絡手段は今回で確保したから、こういったことはお前を経由する必要はなくなった」

「そうですか。何の話をしていたかは気になるけど、直接会ってするくらいだから、言及しない方がいいよね」

「気になるならあとでサアヤに聞け。サアヤが話すべきと判断したなら私も文句は言わん」

「サアヤが決めていいことなのか。なんか変なの」

サアヤとした話についてはサアヤの判断で聞いてもいいと言う黒雪姫の言葉の不思議さ——話を持ってきたのが黒雪姫だからだ——はあるが、本人がそう言うならと納得しつつ、食べたケーキの感想も述べてくれた黒雪姫は、会計を済ませてサアヤに軽く手を振ってから店を出ていき、残ったサアヤは数分後に来るだろうルーレットを待つためにゆつくりとケーキに手をつけていた。

《オリジネーター》である《レッド・ライダー》の《子》で実妹というルーレットなら確実にテルヨシとサアヤよりも年下なので、それらしき女子が1人で来店するのを待っていると、きつちり20分後にそれっぽい女子生徒が来店。

下ろすと膝までありそうなほど長い、赤い光沢のある黒髪をツインテールにした身長150cmにも満たない、学校指定の夏服セーラーに透けブラ対策にカーディガンを着た美少女は、店に入るなりカー

デイガンの袖口に隠れた手でスカートを軽く握りレジに立つテルヨシに近寄る。

「あの、待ち合わせをされていて……」

「もうこの店に来ている人かな？ それともこれから来る人？」

「あ、あの、もう来ているはずなんですけど、会うのは初めてでその……」

この子があのルーレットだとすればあまりに衝撃的すぎるリアル
の気弱さだが、尋ねられた事からルーレットとほぼ確信。

イトイン・コーナーに行ってもいいかと尋ねたかつたっぽいルー
レットが言葉に困っているのを察知して勧めてあげようとしたら、状
況を見ていたサアヤが立ち上がって声をかけてくれる。

「テル。その子はたぶん私のことを探してたはずよ。待ち合わせもし
てたしね」

「そっか。ならこれで解決だ。ご注文はどうしますか？」

「あの、えっと、オススメでお願いします」

「ではお財布にも優しいものを」

サアヤが来たことでホツとした雰囲気になったルーレットは、それ
で注文もテルヨシに任せてサアヤと一緒にイトイン・コーナーに移
動して、端から見てもサアヤに強気のつの字も見せずにペコペコして
る様子に苦笑。

リアルがあんな感じなのに、どうして加速世界ではあんなのかと思
わざるを得ないが、リクトでもそうだったのだから、きつと五芒星は
自分含めてみんな変わり者なんだろうと勝手に解釈してリーズナブ
ルなケーキをルーレットへと出して、始まったサアヤとルーレットの
邂逅に少し緊張するのだった。

《ボツシュ・ルーレット》のレギオン加入を賭けて挑んだ対戦にギリギリで勝利し、その対戦後にリアルで会う約束をしていたルーレットがテルヨシのバイト先に姿を現す。

そのリアルは加速世界とは似ても似つかないほど温厚な美少女で困惑してしまつたが、イトイン・コーナーにサアヤと一緒に席で落ち着いたルーレットは、無事にネームタグの交換を終えて出されたケーキに手をつける。

その味には嬉しそうな笑顔を見せてくれたので微笑ましく思いつつ、あと10分もすれば薫さんから休憩を告げられる、はずなのでその時までルーレットへの挨拶はお預け。

サアヤには休憩までの間に話をまとめておいてもらつてるので、テルヨシはスムーズに会話に混ざることが可能だろうが、自己紹介くらいは好印象を与えたいとかいう無駄な欲が出てきて困る。

これも全てルーレットのリアルが美少女のせいかと思うが、テルヨシ的には女子の時点で欲は出るのでどっちみちだった。

その欲を抱えたまま薫さんに休憩を告げられて、厨房でシゴかれるパドの背中に合掌してからいつものようにイトイン・コーナーに足を伸ばし、テルヨシに愚痴やらネタやらを話したそうにしている学生の客から優先的に話しかけていく。

その様子にすぐに来ないんだみたいな顔を向けてきたルーレットの呆然とした顔が可愛いが、休憩中とはいえバイトの時間である以上、鼻負は出来ないので違和感を覚えないう時間配分で客の席を回って雑談を繰り広げる。

そうしたらやっぱり最後になつてしまつたので、途中からサアヤも「楽しそうでしょうござんすね」って顔で頬杖を突いてしまつて、やきもちとかではないが不機嫌オーラを噴出。

ルーレットもケーキを食べ終えて店のメニューをARで眺めて暇潰しをしていた。

「そんな顔するんなら『話したいことがいっぱいあるんだけど、テルくん』って目をしてくれた方が行きやすいってば」

「アンタにする世間話とかないしねえ。今度行われるサミットの焦点の話でもする？」

「政治・経済は専門外なので結構です」

「原価率とかロス率とかくらいは覚えないと販売業じゃ苦労するわよ？」

「そういうのはまだ薫さんがやってくれるからな」

「バイト気分やめろー」

「ご機嫌取りは今さらなのでなるべくいつも通りにいったら、絡みづらい切り出しで困らせる手段に出てきたサアヤにぐぬぬ。」

しかしあまり時間もないのですぐに話を切り上げて夫婦漫才に呆然としていたルーレットに顔を向けて、すでにテルヨシが《レガッタ・テイル》であることは承知だろうが自己紹介。

「はじめまして、皇照良って言います。親しみを込めてテルお兄ちゃんんでオツケーです」

「あの私、袴田静来ハカマダシズクと言います。13歳、中学1年生です。よろしくお願います、テ、テルお兄ちゃん……」

「ハッ！ ぐはああ!!」

欲こそはあったが堅い印象さえ持たれなきやいかと冗談で自己紹介がてらに愛称も指定したら、真面目な子なのかちゃんとテルヨシに体の正面を向けて座り直してペコリとお辞儀したシズクは、恥ずかしがりながらも言われた通りに「テルお兄ちゃん」呼びしてくれる。

その恥じらいとモジモジ具合から繰り出された「テルお兄ちゃん」の破壊力たるや、言わせた本人が何かに心臓を撃ち抜かれて気絶しそうなほどで、思わず胸を押さえてサアヤ達のテーブルに手をついてしまう。

「サアヤ……オレはここで死ぬようだ……あとは頼んだ……」

「バカやってんじゃないわよ。シズクも真に受けなくていいから。これのことはテルとかテルさんとか呼びやすいのでいいわ」

「じよ、冗談だったんですか……良かったです。そう呼ばないと怒ら

れるのではと思って……」

「そんなことで怒る人だと思われてたのか……あつちでもこつちでもオレはこうよ？」

「あの、私が向こうではあんなので、他にリアルで会う人もお姉しかいなかったから、こんなに変わらない人がいるんだなどビツクリしただけで、怖い人と思ったりはしてないです」

そのダメージで軽くボケてからサアヤに訂正してもらって「テルお兄ちゃん」は永久に封印されたが、2人きりの時にこつそり呼ばせてみようかなと考えたら思考を読まれて睨まれる。

しかしそうした素直な部分があるシズクがどうして加速世界ではあんなにまで敵対心むき出しで戦っているのか謎すぎる。

「それでシズつちはオレ達のチームに入ってくれるんだよね？」

「シ、シズつち……」

「もう愛称を決めたの？　そういうの早いわよね」

「可愛い子にはアダ名をつけるはモットーなのでね。あつ、家族とか歳上のお姉様とかサアヤとか、あとはアダ名は嫌だつて人は除きます」

「何その自分ルール。で、シズクはその呼び方でいいの？」

「あの、お姉は『シズ』って呼んでくれて、友達はみんな『シズちゃん』なので、シズつちって初めてでちよつと可愛いなつて。なのでオツケー、です」

それはそれとして休憩時間も残り少ないのでさっさと本題に入ろうとしたら、シズクの呼び方問題がサアヤによって浮上させられてしまい、凄く自然に言ったのに食いつかれてタイムロス。

それなら最初からアダ名を決めてから進めれば良かったと思いつながら、割と不評を買い気味のテルヨシ命名のアダ名を気に入ってくれたことには感謝。

これで呼び方問題は解決したので、それでといった顔をしたテルヨシに対して質問を思い出してハツとしたシズクは、ペコリとまたお辞儀をして改めて挨拶してくれる。

「はい。先ほど正式に皆さんのチームの所属となりましたので、テル

さん、サアヤさん、これからどうぞよろしくお願いします」

「うん、よろしくねシズつち」

「はい、よろしくね」

「立ち入ったお話はサアヤさんにくらかお話ししましたが、ご質問があれば後日お願いします。それで申し訳ないのですが、私はいま全寮制の学校に通っています、そろそろ帰らなくてはなりませんので、今回はこれで失礼します」

「アンタが呑気に話してるからよ」

「申し開きもねえです……」

他の客もいるので加速世界の用語は避けて話したが、キチンと意図を汲んで話してくれたシズクがレギオンに加入した旨を表明。

このあとは寮に帰らなきゃならないとあつて少し急いで帰り支度を整えたシズクは、会計を済ませてからテルヨシとサアヤに向き直ってお辞儀してから店を出て行って、それを見届けたサアヤも遅れて会計してバイトが終わるまで外で時間を潰してくると言い残していった。

バイト終了後、互いの乗るバスを待つ間に本人から聞けなかったシズクの事情やら何やらをサアヤが話してくれる。

しかし改めて2人きりになると昨日のことを思い出してしまうのか、テルヨシの顔を見てもすぐに視線を前に向けてしまい、それがまあ女の子な反応でいいなあとか思ったら足を踏まれてしまった。

「まずはアンタが気になってるんだろうし、シズクがあっちであんなことになる理由について」

「キャラ作りってことなのは間違いない？」

「間違いではないけど、正確じゃないかも？ シズクの《親》代わりがソーンなのはもう知ってると思うけど、そのソーンが『加速世界で女だからってナメられたらダメよ。常に気持ちと自信は強く持ちなさい』って初期にアドバイスしたらしくて、ライダーのこともあったから闘争本能むき出しの好戦的になっちゃったみたい。ほら、シズクって素直すぎるくらいの子だから、いざやるとなるとスイッチが入るみたいで、向こうじゃもうあれが素なんだってさ」

「無理してキャラを作ってるわけじゃなくて、一種の暗示を自分にかけてるのか。それならまあ、素で良いとかあつちで言わなくてもいいのかな」

「あつちでは今まで通りでいいって。ただリアルではちゃんとするか、向こうで無礼があつても多目に見てほしいって言われたけど、リアルシズクを見たら怒る気も失せるわよねえ」

「とかなんとか言うけど、実際に無礼なことされたらサアヤは怒るでしょ。サアヤもサアヤで素直な子だもんね」

そういうことだけはいつも通りで苦笑いするしかないが、テルヨシの抱えた疑問に対しては言わなくてもちやんと説明してくれるところは本当に気が利く。

それによるとシズクの加速世界でのあの狂犬みたいな性格は『女だからと侮られないようにするため』にシズクなりに考えて完成したキャラであることがわかった。

ロールプレイ、というのは実際に学習法としてもあるが、ここではゲームの設定などになりきることを指し、名前にシンデレラの入る《シンデレラ・コントラリー》などがそれ風にお嬢様口調を使っているようなことがそれに当たるが、シズクの場合は少し違う。

役になりきるといふよりは『この世界ではこうでなければならぬ』と自分に強い暗示をかけて、長い時間をかけて形成したいいわゆる『もう一つの人格』とも言えるもの。

もちろん現実世界でも加速世界でも等しくシズクとしての自我があるが、おそらくすでに意識せずとも2つの世界での顔を切り替えられるようになっていたのだ。

だから加速世界で現実世界のシズクと同じことをしても返ってくる反応はほとんど違うだろう。

そんな少々特殊なシズクにサアヤも調子が狂いそうと笑ったが、何事にも正直な反応をするサアヤがそれを知ったところで変わらないだろうと笑ったら、今度はスネを蹴られてうづくまる結果に。

「あとはリクトの要求も呑んでくれて、タイミングが合えばいつでも会うって。校外活動は18時が門限の学生寮で、学校は新宿の早稲田

にある中高一貫の《新都女子学院》。一応、私の受験候補だった進学校ね」

「ふーん。何で行かなかったの？」

「色々規則が面倒臭かったのよねえ。『淑女講習』とかいう謎の授業もあるみたいだし、お母さんはそれに惹かれたみたいだけど、何より制服が地味だったから大きいわ」

「冬服の方？ シズっちの夏服は普通だったし」

「そう。その点、帝秀の制服は生徒の意見を参考に5年周期でデザインが変わるのよねえ。こんなことに経費を使える帝秀はさすがよ。まあそのデザインが変わるのは来年度だけど、私は今のデザインが気に入って入学したから別にいいの」

「制服で学校を決める女の子な理由に萌えるんですけど……どふっ!？」

すぐに手とか足とか出るのがその証拠だ！

と言えれば苦労はないが、それがなくなるとからかい甲斐もないので内心に留めて、リクトの要求であるリアルでの対面もちゃんと約束してくれたシズクに感謝。

今までがソーン以外のバーストリンカーとリアルで会うことさえなかったシズクだから抵抗が物凄いの思っていたから、ここをクリアできたのは大きい。

何よりもテルヨシ達が《帝城》攻略を目標に掲げてからの初めての結果が伴った出来事だけに、今さらながら喜びが込み上げてきた。

それを思いながらサアヤの学校選びの理由が制服にあったことを聞いて、男子はまずそんなことを考えないから実に女の子らしいと言ったら、今度は照れからの胸へのチョップが炸裂。

一瞬、呼吸の仕方を忘れるほどの衝撃にビックリしたが、サアヤが乗るバスが到着してしまったので会話はそこで終了となる。

「あとシズクにアンタのアドレスを教えておいたから、帰ったらメールが届いてるかも。寮のグローバル接続も制限あるみたいで夜9時にはシャットアウトになるから、返事するなら早めによ」

「了解です。ボイスコールはしたら？」

「アンタのクソつままない話を聞かされるシズクに同情するのと、素

直な子だからアンタの冗談も真に受けそうで恐ろしいわよ」

「そんなに心配しなくても……」

最後にシズクとの連絡手段も確保したことと、それを私的に利用するなど暗に忠告してバスに乗っていったサアヤは、外から手を振ったテルヨシに気づいて他の客に目立たないように小さく手を振って行ってしまうのだった。

それを見送ってから数分後に来た高円寺に行くバスに乗り込んで、腹を空かして待っているマリアのために何を作ろうかと主夫さながらの思考へと入りつつ、帰ったらまずシズクからのメールが届いていないかのチェックを忘れないように頭で反復させていった。

反復させたのに、それをまずやることを放棄せざるを得ないことが家では起きていた。

玄関を開けてまず気づいたのは、マリアのものではない女物の靴が1足あることと、家の中に漂う食べ物匂い。

チーズの香ばしさとコンソメ系のスープの匂いが微かにするが、何の料理かの特定は難しいので、客人の正体と共に何なのか判明させるためにリビングへと足を踏み入れダイニングテーブルの方を見る。

「おかえりなさいい」

「テルせんぱーい。お邪魔してまーす」

「……チュチュユ？」

「あたし以外の誰に見えるんですか？」

ダイニングテーブルにはマリアが座って出迎えてくれてよく見る光景だったが、キッチンには1度は帰宅したのだろう、だいぶラフな私服にエプロンをつけたチュリが料理しながら挨拶してくる。

何がどうしてチュリが来て夕食を作ってくれているのか不明で困惑気味のテルヨシがどういふことかをマリアに尋ねようとすると、丁度オーブンが何かを焼き上げたようで軽やかな音を鳴らしてくる。

その音でオーブンミトンを装備したチュリがオーブンから3人分の器を取り出してダイニングテーブルに並べる。

その器の中にはなんとも美味しそうなグラタン……いや、すでに炊飯器が洗われているので米がないし、パンの用意も見えないところを

見るに、グラタンの下には米が敷かれているドリアか。

と、無駄に料理について考察をしまつてチユリがいる理由についてが後回しになり、テルヨシの帰宅に合わせて準備していたつばいチユリの手際の良さで野菜の盛り合わせとコンソメスープが出されて夕食がテーブルに出揃う。

「とりあえず食べながらでいいですよね」

「……そうだね」

エプロンを外しながらにチユリにそう言われてしまうと、腹を鳴らした MARIA が可哀想でもあるので促されるままに席に着いて3人で手を合わせてから夕食が開始される。

チユリ特製ドリアに舌鼓を打って「いつでも嫁に来て良いからね」と流れるように冗談を言えば、ノリの良いチユリも「じゃあその時は多重婚が認められる国に行かなきゃですね」としつかりサアヤと共生する前提で冗談を返し笑ってくれるが、MARIAの「サアヤさんに浮気したって報告するからね」と言われて現実に戻された。

「それでどうしてチユチュがこんなサービスを？」

「今日は部活が筋トレだけで割と早く終わっちゃって、帰ろうって時に MARIA ちゃんと一緒になったから、そこからはもう流れですね」

「この前、迷惑をかけたからお招きしたの」

「それでおもてなしされてちや世話ないんですけど……」

「いいんですよ。私が好きでやったことですし、このあとは一緒にお風呂に入って十分に楽しんで帰りますから」

「よし、オレも一緒に楽しむ！」

「入ってきたらサアヤ姉さんに処刑してもらいますからね」

「う、うむ。そこはマジで返さないでほしかった……」

テンションは若干下がったものの、話の本題は切り出すことができずチユリの来訪の理由について尋ねると、この前の MARIA 騒動——テルヨシが原因だけ——の際に MARIA が泊まる詐欺をしてしまったお詫びに MARIA が招いたようだった。

それで夕食を作らせてたら詫びにならないが、楽しそうに MARIA とお喋りするチユリが満足そうにしてるならいいのかと納得すること

にして、このあとは2人仲良くお風呂と聞きいつものやつを炸裂させる。

ただこの冗談だけは乱入するわけもないのに冗談で返してくれる人がいないらしく、チユリですら笑顔の奥に怖いものを垣間見せてビクツとなる。

それはそれとしてどうせなら泊まっていけばいいのにと提案したのだが、朝練もあつてテルヨシ達の生活サイクルを崩すのは申し訳ないとのこと断っていたようだった。

そういう優しさがチユリの良いところだなと思いつつ、夕食を食べ終わって後片付けくらいはやらないととテルヨシ1人が無理矢理にでも作業に入つて、2人をお風呂へと向かわせる。

その2人の漏れ聞こえてくる楽しそうな声をBGMにして作業が捗るテルヨシの単純さはアホの域だが、何か大事なことを忘れているような、そんな引つ掛かりが頭にありながら作業を終えて明日の朝食の下準備だけしておく。

それから10分程度でお風呂から上がってきた2人の仲が深まったような距離感をなんとなく感じながら、時間を見てそろそろ帰ると言うチユリを送りに外へ。

「またいつでも遊びにおいで。マリアも喜ぶから」

「大会も近いのでしばらくは難しいですけど、夏休みとかにでも泊まりに行きますよ。なんならハルとかタツくんも一緒にとか」

「仲間外れは嫌だつて姫とかも来そうだな。まあリビングで雑魚寝すれば7、8人なら無理矢理泊まれるし、なんかお泊まりイベントでもやろつか」

「それならみんなでキャンプとかの方が人数を気にしなくていいかもですよ。みんなの予定が合えばになっちゃいますけど」

「そこはごり押しだ。夏休みキャンプ計画はこれよりオレが幹事となつて開催を宣言させてもらおう」

「通達よろしくです」

その帰り道で湯冷めさせてはいけないのでチユリのペースで歩くが、さすが陸上部はペースも早くてちよつと大股で距離を稼いで合わ

せながら会話に興じる。

その中で夏休みのキャンプ計画が唐突に決定してしまったが、悪い話ではないしとそのまま実行することを宣言し、具体的な計画案はテルヨシ任せなチュリにちよつと笑ってしまう。

参加者から費用も徴収しなきゃならないので、その辺はパド辺りに頼るとして、チュリの家のあるマンション前まで到着してそこでお別れの挨拶。

そこで湿っぽいのは柄じゃないので、向き合った状態になったチュリに対して両手を左右に広げて迎え入れる体勢になると、意図を理解したチュリは少しだけ周りを見て人がいないことを確認してから、テルヨシの懐に入って軽く抱きつく。

そのチュリを軽くハグし返して、割とすぐに放すと、ニコツと笑ったチュリに倣って笑顔を向ける。

「それではまた明日っ！ 送ってくれてありがとうございます」

「夜更かししないですぐに寝るんだよ」

「あたしはテル先輩の子供ですか」

ハグにも抵抗が少なめなチュリのカレンダーリーキは本当に好きで、つついっい過剰なスキンシップも頭に浮かぶが、これ以上はサアヤ辺りに怒られそうなので未遂にしておいて、手を振りながらマンションに入ってしまったチュリが見えなくなつてから自宅に戻り入浴。

キャンプの計画を割と本格的に練るために長風呂して、気づいた時には夜の9時を過ぎていたので、上がってからマリアが寝たことも確認してすぐに寝ついてしまった。

——何か大事なことを忘れているような感覚を、わずかに残したまま。

Acceleration Second 70

「……あつ！ そうだ！」

翌朝。なんだかモヤモヤしたものが内側に残ってる状態で目覚めたテルヨシは、こういう時は時間を遡って思い出すのがいいかとゆっくりと昨日のことを順に思い出していたのだが、朝食の段階で唐突にマリアが口を開いてそつちに意識を持っていかれる。

「明後日にうーちゃんが泊まりに来てくれるって言うの忘れてた」

「……何故そんなビッグイベントを忘れるんだ」

「だって昨日はチーさんが来てくれたしお料理美味しかったし楽しかったしだったから」

「それは否定しない。よし、許そう」

おそらく昨日には決定していたっぽい謡の宿泊を報告し忘れていたマリアのうっかりには困ったものだが、仲良くなってチュリをチーさんとか呼んでるのを聞くと何も言えない。

これが土曜日朝とかになっていたらさすがに注意はしただろうが、まだ木曜日なので準備は間に合うのが幸い。そうなるとおもてなしを考えなくてはならない。

「サアヤさん、今週も泊まりに来る？」

「えっ？ ああそっか。土曜日って割とサアヤが泊まりに来る日って印象あるもんね。それは聞いてみないとわからないかな。マリアが聞いてみるといいよ」

「うん。じゃああとでメールしておく」

その流れで先週は遠慮したが、付き合い始めてから土曜日は宿泊皆勤なサアヤが今週も来るのかと尋ねたマリアは、来てほしいのかほしくないのか言葉で探ってみると、普通に来てほしいみたいだったのでサアヤと謡の2人が来ることを前提に変更。

しかしマリアの部屋に3人は手狭なところはあるので、寝床はどうしたもんかと思うが、マリアと謡ならサイズの普通にベッドに2人で寝られるから問題ないかと自己完結しつつ、仲良く隣り合って寝る

2人を想像したらなんか非常に和んでしまった。

その緩みを変に捉えられてマリアに気持ち悪がられてしまったが、週末に控えた宿泊イベントの楽しみであまり気にはならなかった。あとで好感度は取り戻さないといけないが……

「キャンプだど？」

「そつ。まだ具体的には決めてないけど、予定としてね」

加速世界では激闘を繰り広げて密度があった分、現実世界では逆のベクトルで密度を持って楽しもうというテルヨシのポジティブ思考は登校後の黒雪姫へとぶつけられて、恵がない朝の時間を見計らって唐突に決まったキャンプについてを話す。

当然、突発的すぎるテルヨシの計画に表情が明るくない黒雪姫ではあったが、残り少ない中学校生活で思い出作りは大事と思ったか嫌だとは言わない。

「実行するというのであれば、参加者へ決行日を通知して予定を空けてもらうようにしなければなるまい」

「夏休み中にする予定なんだけど、やっぱり参加者は多い方がいいよね。あとみんなで色々揃えらるとなると荷物も多くなるから、予約すれば材料とかテントとか貸してくれるサービスを頼むけど、そこに異論は？」

「ウム、それならば自分の手荷物はバッグ1つで良さそうだな。経費はそのサービスの料金を割り勘するのと移動費だけで済むか」

「1人頭3、4000円くらいに収まれば万々歳だよねえ。移動費は抑えるために東京付近にしたいけど、海もある千葉とか神奈川とかがお手頃かね」

「海なら東京にもわずかにあるがな。だがキャンプなど経験がないから、私も調べてみなければわからんが、それでも東京を出るなら移動費だけで2000円を越えてしまうはずだ。出来るだけでいいがリーズナブルな費用になるよう努力してくれ」

「そこはもう出来る限り抑えますよ。それで高くて参加できないとか言われるのが一番悲しいし」

どうせなら水場の近くで水着を着て遊んだりもできればと思つて

川か海の近くのキャンプ地を希望するテルヨシに黒雪姫も文句を言わずに明確にすべきことを助言してくれて、これはもう夏休みに入る前に全てを決めてしまう方向で進めるのが得策かと、テキストファイルに重要な案件をまとめておく。

横では次々とあれもこれも追加してくる黒雪姫が口を挟んでくることが、私的な追加を除けば有能なお方なのでそちらにも耳を傾けつつまとめていたら、あつという間にホームルームの時間に。

場所とか経費とかはグローバル接続して調べないかどうかにもならなそうなので帰ってからじっくりやるとして、とりあえず参加者リストを作成するために誰に声をかけるかをリストアップ。

そんなことを授業中にやってるから問題を当てられた時に即答できないう失態を冒すわけで、クラスの笑いをされるくらい簡単な問題が解けなかったテルヨシは教師に心配さえされてしまった。

まあ高校進学しないテルヨシだから教師も怒るようなことはなかったが「知識はないよりもあるに越したことはない」と忠告され、他の生徒の反面教師として吊上げられて授業は終了。

こんなことが受験を控えた3年生のクラスで起こるのも問題だが、クラスメートが「テルヨシなら仕方ない」とかいう雰囲気は自然に作ることが大変に不満だったので、残りの授業では積極的に挙手して教師に絡んでいき、かつてない意欲のせいでクラスメートと教師達から気持ち悪いと思われたの言うまでもなかった。

この3年近くで形成された自分の人物像というのが浮き彫りになって、良くも悪くも貴重な体験をしたテルヨシは精神的ダメージからちよつとだけ重い足取りでバイトへと向かい、練馬区桜台に行くバスに乗り込む。

店に着いたらまずはパドにキャンプの話を持ち込んでユニコ達にも伝えてもらい、とりあえずやることだけは知っておいてもらう。

なので今夜は色々と計画を練らなきゃならないからバイトに使うエネルギーはいつもより減らしておこうかなと、そんなことを考えてバスを降りる。

その時にグローバル接続して料金の支払いをしたのだが、グローバ

ル接続を切る前に視界に点滅するアイコンがあることに気づく。

アイコンはメールなので誰かからのメールなのだが、サアヤかなとそれを開いて送り主を確認して思考停止。

「……………やべええええええ!!」

登録してない新規だったので内容に人物の特定ができるものがあるだろうと読んで、ようやく昨日の夜から頭にあつたモヤモヤの正体に気づき絶叫。

それには近くを歩いていた人がビクツと怯えるリアクションをしてテルヨシを見てきたが、そんなことを気にする余裕すらなかったテルヨシは、とにもかくにもそのメールに対する返事を急いで作成して送る。

メールの送り主は昨日にリアルで会えたシズクからで、受信した日は昨日の夜。

さらにしつかりばっちりサアヤにも「帰ったらメールのチェックしてあげて」と言われていたにも関わらず、帰って早々にチュリのことから抜け、キャンプのあれこれで結局は今の今までグローバル接続せずに過ごしてしまった。

なのでメールは夜のもので登校前にも再度送っていたのである。2通が届いていて、2通目には「何か失礼なことをしたのでしたら謝ります」という1文まであつて罪悪感が半端なかった。

当然、そんな失礼など一切ないし、むしろ失礼を働いていたのは自分なのでマリアと謡顔負けの高速タイピングで謝罪文をシズクに提出。

その間にサアヤからもメールが届いて、案の定メールの返事を寄越さなかったテルヨシの情報がシズクから行ったみたいで、文面からでもその怒りの度合いが見えて血の気が引く。

これは確実に店に乗り込んでくるなと思いつながらサアヤには反省文を提出して改めてバイトに向かったが、もう色々ズタボロなテルヨシのメンタルは崩壊寸前。

そのメンタルでもミスしようものなら薫さんに容赦なくお叱りが飛ぶので仕事だけは集中してやっていたものの、とてもじゃないが明

るい雰囲気でパドにキャンプの話はできなかつたため今日のところは断念することとなる。

そして反省文を読んでくれただろうがやっぱり店に乗り込んできたサアヤは、テイクアウトで支払いを待つ間にテルヨシに小言してくる。

「長々と言いつきが書いてあつたけど、やっと出来た仲間いきなりのこの仕打ちは正直どうなの？」

「帰ったらボイスコールで土下座しながら謝る次第です」

「それは当たり前。あと来る時にお姫様から乱入されて、ぶつ飛ばすついでに進展状況を話しておいたわ」

「何か変化は？」

「今の仲間に話はしたみたいね。いざそうなつた時にはリアルでも会ってくれるかもしれないけど、今の段階では覚悟とか色々がまだね」

怒り心頭といった雰囲気はなかったものの、あの可愛いシズクを不安にさせた罪は重いと言葉に乗せたサアヤのプレッシャーは凄く、ケーキを渡しつつその辺のケアは怠らないと誓う。

そこはもう信用問題なのでサアヤも2度目はないといった感じで話を終わらせて、ここに来る途中に《シンデレラ・コントラリー》に対戦を挑まれ、倒すついでに話もしてくれたようだ。

シンデレラとは先週の《レギオンクエスト》以降から会えていなかったため、進展の方も聞きそびれていた。

日曜日に行われる《七王会議》では後に引けない動きをするので、シンデレラ達には早急に覚悟だけでも決めてもらわないと支障が出てしまう。

あとは《チャイブ・リリース》にも進展の報告をしたいところだが、あれはあれで気難しいので話を強引に進めてからの方が効果的だろうとサアヤもまだコンタクトは避けている。

「それからマリアにも返事はしたけど、明後日は泊まりに行くからよろしくね」

「うーちゃんもいるからイチャイチャは抑えないと……あいたつ」

ゆつくりではあるが確実にレギオンとしての形は出来てきた実感に感動を覚えながら、明後日に泊まりに来ることを告げたサアヤに了承の意味で冗談を言ったら、照れ隠しのデコピンを炸裂させられてしまった。

そのあとすぐに店を出て行ってしまったサアヤに元気をもらっていくらか回復したので、休憩時間にパドにキャンプの話を持ち出すことに成功。

まだまだ形もほとんどないキャンプ計画ながら、パドも出来た交友での親睦を深めるチャンスはポジティブなようで、ユニコとユリにも帰ったら話はしておくかと返してくれたのだった。

バイトが終了して寄り道なしで速攻で帰宅し、マリアとの夕食も早めに済ませて、マリアがお風呂に入っている間に自室に籠ったテルヨシは、時間を確認して夜の8時になったところで事前にボイスコールすると言っていたシズクにボイスコール。

向こうも待っていたからかコールして1秒で繋がって見なくてもわかるペコペコした挨拶がされる。

『どうもこんばんは、テルさん。夜分にご連絡くださりありがとうございますございます』

「シズつち……ホントごめん！ メールでもいっぱい謝ったけど、もうこれは直接でも謝りたいから後日また……」

『い、いえいえいえ！ いいんです気にしないでください！ テルさんもお忙しかったのでしようし、私もサアヤさんに尋ねたり、2通目なんて送らずに素直に待てば良かったんですよ』

本当に良い子なシズクだからこそメールをほぼ1日放置したことが重い罪だと感じるし、だからこそテルヨシは気にしていない様子のシズクに対してでも見えはしないがその場で土下座して深い謝罪。

その姿勢は伝わったのか謝罪に困った様子のシズクが自分のしたことを反省する口ぶりであるから、そこだけは女の子として当然の行動であると反論。

「それは違うよシズつち。女は常に反応を求めるもので、そんな女のアクションに対して男がちゃんと反応してあげるのがコミュニケーション

シヨンとして正しいんだ。今回はオレが完全にダメな男の典型をやっちゃったんだから、シズっちはオレのことをバカ野郎と罵ってくれていいくらいだよ」

『そんなこと、できませんよ。それに私がお返事をいただけないことを不安に思ってしまったのは、やっぱり私もまだテルさん達に対して信頼関係が築けていなかったということなんです。だから今回のこととはこれでおしまいにしませんか？ 私も今後、テルさん達をもっと信用して行動しますから、テルさん達も私のことを特別扱いしないでください。遠慮もなしで構いません』

テルヨシは自分が全面的に悪いと譲らず、シズクも自分の反省点は譲らない。

これでは平行線で話は終わらないと悟ったか、折れないテルヨシより先にシズクが妥協案を出してきて、今回のことはお互いに信頼関係がなかったから起きた事故のようなもの。

だから今回は教訓と糧にしてこれからを大事にしようと、そういう話をしたシズクにテルヨシも頑なな姿勢はカッコ悪いかと土下座をやめる。

「……シズっちは優しいな。でもオレが悪かったってことは信頼関係云々とは違うから、今度会った時にお詫びは用意する。これは譲りません」

『……テルさんって頑固な人ですね。それで納得していただければ、私もそれでいいですけど、その、あまり張り切らないでくださいね』

シズクの方が大人になったやり取りはそうして終わりを迎えて、折角のボイスコールなのだからと時間は大丈夫か尋ねてみると、自室なので大丈夫とのことだったからそのまま雑談に突入。

話を振るのが苦手なタイプのシズクに代わってテルヨシが話の主導権を握ってあれこれ尋ねて、それにシズクが答える会話が繰り広げられる。

最初は他愛ない、好きな動物や食べ物。映画のジャンルや苦手なもの、楽しいな雰囲気から自然と聞き出して、そんなテルヨシの話し

やすさに心を少し開いてくれたか、時折クスクスと笑いながら話してくれる瞬間もあつて嬉しい限り。

そうして仲を深めていけば女子脳に合わせられるテルヨシが自然と話を恋愛関係にスライドさせるのも当然の流れ。

「それじゃあシズつちは付き合う男の最低条件って何？」

『えっ……ええっ?! お付き合いする方の条件、ですか? それは言わないといけませんか?』

「シズつちが言いたくないならいいよ。ちなみに誰かと付き合った経験とかあるの?」

『いえいえいえいえ! そのような経験は1度も……テルさんはどうなのでしよう』

「あれ? サアヤから聞いてない? オレは今サアヤと付き合ってるんだよ」

『あつ……そう、なんですな』

女子校だと恋愛というのも積極的に出会いを求めないと難しいのかもしれないが、恋の話くらいは友達とするだろうと思った。

しかしシズクはそういう話は友達ともしないのか、回答の用意もなさそうな質問で返ってきて、会話の間に考える雰囲気があった。

それなら時間は必要だろうと別の即答できる質問で繋いで回答を待とうとしたら、サアヤからもまだテルヨシと付き合い合つてることを聞いてなかったようで驚かれました。

それと同時に何やら少し残念そうな、安心したような、不思議な雰囲気になったシズクは、少し沈黙してから本音を吐き出してくれる。

『……私、男の人と話するのが苦手で、まともに話せるのは家族くらいだったんです。だからですかね。昨日、テルさんとお話してから私、テルさんとは割と緊張しないで話せたなって思っていました……このまま仲良くなつたら、遠からずテルさんのことを異性として意識していたかもしれませんでした。ですがもう、サアヤさんとお付き合いされているのなら、そうしたこともないでしょうから』

恋愛経験もなく異性への耐性も低い女の子からすれば、テルヨシのような女の子の思考を理解して話し慣れた異性はどこか親しみやす

い印象を与えやすい。

ただこれはテルヨシの中でコミュニケーション能力が少し秀でているからに過ぎず、これと恋愛感情を結びつけるのはあまりよろしくはない。

だから昔からテルヨシは『恋人以上』のラインを越えるようなコミュニケーションを人によってちゃんとわきまえて接してきていたし、シズクに関して適切な距離感を保つ予定だった。

そのためのこの会話だったりもしたのだが、サアヤと付き合ってからその辺の気の緩みが出てしまったか、シズクとの距離感を測るのが遅れて、すでにうつつすらでも自分に好意的な意識を向けられていたことを反省。

「シズつちにそう言ってもらえるのは男として凄く嬉しいよ。シズつちは可愛いし素直だし礼儀正しいし、シズつちが彼女ならきつと自慢も止まらないだろうね」

『そんな……私なんて口下手で主張も強くないで……』

「自分のダメなところを見つめられるのも良いところだよ。でもそんなシズつちだからこそ、色んな女の子と仲良くなっちゃうオレなんかを彼氏にしたら、毎日が不安で不安で仕方なくなっちゃうって。シズつちがこれからもっと積極的に交友を持てば、オレがどれだけ恋愛に向いてない男かもわかるし、シズつちの可愛さにメロメロになる男もいっぱい出てくるよ」

嫌われない男であるのと、恋愛対象にならない男であることはテルヨシが恋愛する上で作り出している距離感である。

それを設けることでこれまで学校でもどこでもそれなりに上手くやれていたし、恋愛というのはその距離感をぶっ壊してでも踏み込む勇氣がいる行為だと考えていた。

だからこそその距離感をぶっ壊してきたサアヤがどれほどの覚悟で踏み込んできたのかはわかるし、テルヨシも受け身な形ではあるがその距離感をぶっ壊してきてくれる人を求めていたのだ。

別に自分がモテる人種などと微塵も思っていないが、心理学という学問に触れているからか、そういう心の機微にも敏感になってしまっ

いるので、イタズラに女性の心を揺さぶる行為は避けた上で自分がどういう男かをしっかりと表現してきた。

その自分の怠慢さを反省しながら、フツたフラれたといった段階になる前ではあってもしっかりとシズクが素敵な女性であることを伝えたと上で、これからのシズクの恋愛を全力で応援。

テルヨシとの交友はあくまでも男と接するきっかけでいいし、ようやくスタートラインに立ったシズクがいきなり結果を出すにはあまりにも早い。勿体ないとさえ言える。

『そう言っていたら、少しだけ自信も出てきました。テルさんのそういう褒め言葉は凄く自然と飲み込めてしまうので不思議ですね』

「本音しか言っていないからだよ。さしあたってリアルで会うことになると思うのは、イーターとスピんとリリースの3人つてことになるかな。リリースとはオレも会ったことはないけど、シズっちを傷つけるようなことを言うのならオレが怒るから安心してね」

『はい、怒るのも苦手なのでその時には頼らせていただきます』

そんなテルヨシの正直な言葉に素直なシズクもしっかりと受け取って明るい雰囲気に戻り、これからの時間を大切に考えてくれた。

これでケアも出来たかなと安堵したら、お風呂から上がったマリアが部屋をノックしてお風呂が空いたことを知らせてくれて、会話も一段落したと判断して今日のところはこれで終了。

シズクもこんなに長話をするのは珍しかったのか、しかし楽しい時間だったというように「もうこんな時間だったんですね」と呟き、向こう側で綺麗なお辞儀でもしてそんな丁寧な言葉で締めてテルヨシにボイスコールを切らせる。

こういうのは年輩が切らないとグダるしマナーでもあるので、その辺でも淑女講習とやらが活きているのだろうかと思いつつ、グローバル接続を切ってからお風呂へと入る。

最後に今回のようなことがまた起きていないかと入念にチェックしてから就寝していったのだった。

「それじゃあやるけど、覚悟は良い？」

「よっしゃ。ばっちょいや」

「き、緊張します……」

7月6日土曜日。夕方。

学校もバイトも終わって、このあとは自宅にてサアヤと謡を迎え入れてのお泊まり会が開催される予定なのだが、その前に『大事な用事』があつたテルヨシは、自宅にすぐに帰らず寄り道をして先にサアヤと合流。ついでにアキラも含めた3人で事に当たっていた。

明日には《七王会議》が開催されてしまうので、タイミングとしては今日しかないから仕方ないが、まだ準備が万全ではない段階で強行に等しいこの行為をするのはやはり少し勇気もある。

その緊張をアキラが表情に出してくれたが、先週からある程度やると決めていたテルヨシとサアヤは今さら及び腰になつてもとほとんど開き直つてしまつていた。

そんな2人に隣を歩いていきたいと覚悟を決めているアキラも、やっぱりやめようなどとは言わずにサアヤの行動を見守つた。

「……つていうか、やつたらやつたで案外呆気ないのよねえ……」

「そりゃこんなゲリラ的な行動に合わせられるところもないだろうしね」

「でもいつもよりも時間が長く感じました……」

そしてサアヤが行動を実行に移してから数十分程度、その場に待機していた3人だったが、終わってみれば何も起きることなく作業は終了了。

最初からこの段階で何か起こることはかなりレアなこととはわかつていたものの、失敗したらカツコ悪いどころか明日の会議でも話を切り出すことすらできなかった。

その可能性があつたからアキラもホッと胸を撫で下ろして、この辺でまだ小学生だなど思いながらテルヨシとサアヤも安堵して、用も済んだしとテルヨシ宅に向かうためここでアキラとはお別れ。

このあとアキラは《パンジー・ステイング》とタッグ戦をする予定とかで自宅もある中野第1戦域の方に向かっていき、前よりも積極的に対戦に挑むようになったアキラの変化には《親》であるサアヤも少し満足げな様子だった。

「ううううちやあああああん!!」

「はい現行犯」

帰る途中に夕食の買い物もして玄関を開けてみると、先に来ていた謡がマリアと一緒に迎えてくれて、家で謡が出迎えてくれるというレアなシチュエーションに興奮したテルヨシが靴も脱がずに抱きつかうとしたら、その首根っこをサアヤに掴まれて阻止されてしまった。

それで喉をやられたテルヨシが咳き込んでいたら、その隙にサアヤが玄関から上がって2人をまとめて抱き締めてしまう。

「やーん！ ただいまあー！」

「おかえりなさい、サアヤさん」

【UI】 おかえりなさいです。テルお兄さんも大丈夫ですか？

「大丈夫……だけど……サアヤがズルいです！ オレも2人をギュツてしたい！」

「それセクハラって言うのよ？」

「女同士だからセクハラにならないとかなないからね！ こういうのは両者合意ならセクハラにはならないんです！」

【UI】 テルお兄さんもサアヤさんも加減が出来る方だと思いますから、少し恥ずかしいですが構わないのです。フーねえに比べたら絶対にしたことにはないのですよ……」

性別が同じだとういう行いは甘んじて受け入れられがちだが、テルヨシがやったらダメみたいな言い方のサアヤにはついつい反論して駄々をこねる。

それを見て同情したのか謡からの抱擁の許可は出たものの、フーコを引き合いに出した謡の視線が遠くにいつてしまったことで、日常でのフーコのスキンシップの激しさが露呈することとなった。

フーコがどのくらいの抱擁をするのかは1度だけ見たことがあつ

だが、あの豊満なバストに顔が沈むと考えたら男としては天国でしかないから同情しにくいものの、あのレベルはダメだと線引きして玄関に上がってからかなり優しいあつきりしたハグで歓迎して終了。

頬擦りしたい衝動をなんとか抑えて時間も時間だしとさっそく料理の方に取りかかるため、サアヤと一緒にキッチンへと向かい、手伝うと言ってきたマリアと謡を強引に座らせて手伝いを拒否。

おもてなしがしたい側のテルヨシとサアヤが強く言うからか、謡も何もしないという行為にソワソワしながらもマリアとの会話に興じてくれて、ダイニングテーブルに可愛い生物が2匹いる光景に思わず頬が緩む。

サアヤも妹が2人いる感覚でも持っているのか、テルヨシと同様に時折マリアと謡に目を向けては鼻歌を交えて上機嫌を維持していたので、料理中はだらしない顔をするテルヨシが注意されることはなかった。

折角のお泊まり会ということで2人の時はやったこともなかった鍋料理に手をつけたテルヨシは、サアヤの助けも借りてかなりのクオリティーに仕上げることに成功する。

鍋奉行はサアヤが積極的でマリアと謡に関しては1度たりとも鍋の中に触れさせずに絶妙の煮え加減で小皿へと入れて食べさせる様は完全にお姉さん、またはお母さんのそれ。

「これならお夕食だけでもニコさんとかミヤアさんと呼んでも良かったかも」

「ニコさんはこの時間となると外泊届けが必要だからねえ。事前に話しておけば良かったかな」

「その時はユリも呼んでもっとクオリティーの高い鍋を作るわよ。今回は締めうどんとかも忘れちゃってたしね」

【UI】 うどんがなくてもお腹いっぱいなのですよ。それに美味しいお料理は心も温めてくれるのです」

「ういちゃんは良いこと言うわねえ。お姉さん感激っ」

完全に2人の腹をパンパンにさせるだろう量を小皿に盛っていたサアヤの優しさという名のちよつとした圧力から逃げるようにマリ

アがユニコとパドを引き合いにもつと人を呼べば良かったと言う。

これだけ美味しい鍋ならそういったことも言われて良いレベルで、テルヨシも謡も次があつたらまたといった意味で会話し、それならそれでもつと美味しい鍋を作りたいと張り切るサアヤも笑顔だ。

その会話でサラツと満腹アピールをしていた謡は、残りをテルヨシとサアヤとマリアに譲り会話に集中。

逃げ遅れたマリアも恐る恐るで満腹なことを告げて、残りはテルヨシとサアヤが美味しくいただき夕食は終了。

後片付けもテルヨシとサアヤがパツと済ませてしまつて、その間に2人には朝に作つて置いていたデザートのプリンを献上。

デザートは別腹とは女の常套句だが、その例に漏れずに美味しく食べてくれる2人が食べ終わる前にテルヨシとサアヤも作業を終えてプリンに手をつけていった。

デザート作りに関してはサアヤよりもテルヨシが上手なのか、少し悔しそうに食べるサアヤはこっそりとレシピの開示を求めてきたので快く教えてあげて完食。

しかし腹を満たしたものの、少々食べすぎな感じは否めなくやはり女の子な3人がその辺をちよつと気にしてる顔をしたので、腹ごなしに《エネミー狩り》でもしようかと提案してみると、かなり乗り気になつた3人と勢いでダイブ。

突発的なエネミー狩りは内部で約5時間ほど続き、成果としては《小獣級》を10体。《野獣級》を2体と、4人パーティーにしては上々すぎるものとなつた。

さすがに《巨獣級》以上と遭遇したら逃走するつもりではいたが、時間さえあれば勝てるのではと思えるくらいチームプレーも上手くいつていたと自負していた。

それも先日の作戦がもたらしたものと断言でき、いつそのこと謡をネガビユから引っこ抜いて、マリアも有無も言わずに加入させてしまおうかと考えてしまうが、それはそれで納得しない人が多すぎるので心の内に留めて現実世界へと戻つていった。

まあだからといって満たした腹が消化を促すようなことをしてき

たわけでもないので『気分的に運動してきた』というなんとも言えない現実に気づいた3人が少し落胆しつつグローバル接続を切るのを空笑いでやり過ごす。

男としてはこの1度の食事で大きくどうこうなるほどのことでもないと思うし、サアヤがたとえ100g太ったからといって全く問題はなく、マリアと謡などこれからが成長期の本番なのだから色んなところを育てるためにも普段から食べてもらいたいくらい。

と、彼氏と親の目線での感想は口にするのでデリケートなお三方が癩癩を起す可能性があるので秘めておきつつ、いよいよ恒例のあれを言う時間となった。

「さて、エネミー狩りも終わったことだし、みんなでおふ……」

「よし、エネミー狩りも終わったことだし、マリアとういちゃんはお風呂にGO！ お姉さんもこのバカが乱入しないように部屋に縛りつけてから行くから」

「サアヤさん、よろしくお願いします」

【UI】これは恒例の何かでツツコまない方がよいのでしょうか……】

これを言わないとなんかテンション的にも落ち着かないから、もはや強制的に言わされてる感もあるが、ただの1度も成功したことがない『一緒にお風呂』のお誘いは今日も却下。

どうかサアヤに遮られて最後まで言わせてももらえなかったし、仲良く着替えを持って洗面室に移動していったマリアと謡から遠ざけるように自室に引きずり込まれたテルヨシは、どこから取り出したのか縄を手に持ったサアヤに本当に縛りつけられるのかと思わされる。

が、縄はARで怯えるテルヨシを見ながらそれらしく振る舞ってから呆れたように縄を消して机の椅子に座り、何やらベッドにでも座れと促されてその通りにする。

「怯えすぎよバカ。ノリくらいわかれ」

「いやだって本当に縄出されたら怖いし」

「質感とかでわかるでしょ。それよりいい加減、あのノリはどうか

ならないの？ 冗談ってわかっても100%くらいはマジなんじゃないかって不安なんだけど」

「まあさすがに『いいよ』って言われたら断るけど、そこまでまたサアヤとコントやらなきやだし、疲れる？」

「……はあ。ちよつとだけ私も楽しんでる節があるのは認めるわよ。悪い影響ねこれ……」

腰を落ち着かせたからには話はあるのだろうと思っていたら、ここまでのノリの否定をされて落ち込むこととなったが、否定しつつも実はちよつと楽しんでいることも漏らしたサアヤは、あのノリをやめろとは言わずにいてくれる。

「どうせアンタの性格上、言わなきや変になるんだろうし、今さら言わなかつたらマリアも不思議に思うだろうから言うなどは言わないわ。ただ冗談でもずつと断られるのは精神的に辛いでしょ」

「辛いとかはないけど、いつまでこうやってバカなこと言っても許されるのかなっていう寂しさはあるよ。マリアだって中学に上がる頃には思春期に入って冗談って取られなくなっちゃうかもだし」

「それじゃあ思春期まった中の私はどうなるのよもう……っていうよりテル、アンタ水着ある？」

「学校の海パンならあるよ」

そうした前置きからテルヨシのことをなんだかんだ考えていたサアヤが心配するようなことを言ってくれたが、テルヨシの本質は今のような関係がいつか『当たり前』ではなくなる寂しさにあって、どういう形であれ今のノリをノリで受け入れられることは嬉しいものと語る。

それで余計な心配だったのかと少しトホホな雰囲気が漂ったサアヤだったが、すぐに切り替えるように海パンはあるかと尋ねてきて反射的に答えると、頬を掻きながら意外なことを言ってくる。

「だったら今日くらいサーブスしてあげるわ。一緒にお風呂は無理だけど、背中くらい流してあげるから、年少組に悪影響がないように海パンは要着用。わかった？」

「お、おっす。でもサアヤが水着ないんじゃ……」

「別に少しくらいならこのまま濡れてもいいわよ。どうせ後からお風呂にも入って着替えちゃうんだし。あつ、でもそうになるとマリアとういちゃんとは一緒に入れないか」

「ここでまさかの混浴イベント!？」

と思うが、マリアと謡もいる状況でそんなことをするのは教育上にもよろしくないし、割と健全な方向で衣服着用のまままで背中を流してくれるということに。

それでも『一緒に浴室に入る』というワードだけ見るとビッグなイベントに沸々と込み上げてくる何かを感じつつ、入浴中の2人に一緒に入るのを断りに行ったサアヤを見送って、ルンルン気分で部屋から海パンを引つ張り出していった。

ただ背中を流してもらうだけ。

そうは思ってもマリアと謡が上がったあとに海パン姿で浴室に入ったテルヨシは、もしかしたらそれ以外の何か起きてくれるのではないかという淡い期待を抱きながら、扉の向こうの洗面室にサアヤが入ってきたのを音と気配で察知。

なんだか緊張してしまって頭を洗い始めてしまったので、Tシャツにシヨートパンツだったサアヤが靴下を脱いだ程度で簡単に入ってきたことにさえ動揺してしまった。

「あら、頭もついでに洗ってあげようかなって思ってたのに」

「うう……オレもお願いしようと思ってたのに……」

「何それ。もしかして私が来る間にソワソワして黙ってられなかったとか?」

「ぐっ……」

浴室に入ってテルヨシの背後に立ったサアヤは、すでに頭にシャンプーをつけて泡立ててしまっていたことに少し残念な声色で反応。

それがまさか緊張緩和のための措置なことを見抜かれもするとは思わなかったテルヨシが珍しく言葉に詰まると、凶星だったのが意外でサアヤも「えっ?」と声を漏らす。

ただそんな珍しい光景にすぐ小さく笑ったサアヤは、彼氏の可愛い一面に何を思ったか頭に持っていった手を退かして自分の手で

頭をマッサージし始める。

「テルでもこういうシチュエーションで緊張するんだねえ。痒いところはありませんかー?」

「我ながら本心で望んでなかった分で心の準備が不十分でしたよ。大丈夫。気持ちいいです」

「あんまりじっくり触ることもなかったけど、テルの髪はちよつと固いのね。髪が太い証拠か。私のは少し細いかなって感じだから新鮮な感じ」

「禿げる心配はなさそうですかね?」

「今のところは大丈夫ですよ。でもそういうのって遺伝が大きいって聞いたことあるわね。そこは大丈夫?」

「それはたぶん」

ちよつとだけからかうようなことをしつつも、頭と一緒に緊張もほぐすようにしてくれるサアヤの会話に付き合っていくうちにいつもの調子に戻っていき、禿げる禿げないの話では互いに笑う程度になっていた。

これならいつも通りかと安心するようにシャンプーを終わらせたサアヤは、ササツとリンスもやって髪が仕上がると、あくまでついだったそこからスポンジを手を持って背中へと移行。

靴下を脱いでTシャツの短い袖を肩まで捲り上げる程度の変化しかないサアヤだが、それでも何故か見たいと思ったテルヨシは、背中を向けなきやいけない都合で目の前の鏡に集中。

湯気のせいで曇り気味だが、それを軽減するためにシャンプーを鏡面につけて流して少し鮮明にすることに成功。

一時的な効果しかないがこれでもサアヤが見える! と意気込んだが、そんな行動をしていたらサアヤに気づかれなわけもなく、鏡の向こうの背後でジト目を向けてくるサアヤに空笑い。

「はあ……別にさっきまでとほとんど変わらないんだから、そんな必死に見ようとしなくてもいいじゃない」

「彼女をいつでもどこでも見ようとするこのどこが悪いのか!」

「いつも通りになつたらなつたで面倒臭いわね……」

見られるということに恥ずかしさがあるサアヤだから仕方ないことだが、鏡越しでも目は合わせないようにして背中を洗い始め、すっかり元通りのテルヨシに呆れる。

「……明日からの1週間が勝負になるんだから、明日の会議で失敗とかしないよね」

「問題ないよ。オレはなんだかんだでみんな、それを誰かが言い出すのを待っていたって、そう思ってるんだよね。その役目をオレが担えるなら光栄だし、ある意味で功績だよな?」

「どうかね。口にするだけなら誰にだって出来るわよ。ただその発言に『力』を持たせられる人は本当に一握りだとも思う。その点でアソタはまだ足りないのも事実でしょ」

それが不治の病的なものだと諦めているサアヤも視線はもう気にせず手を動かしながら明日の会議のことについてを話す。

明日の会議でテルヨシがやることは1つだが、それが失敗するということはないとほぼ断言できると語ると、なんとなく理解は示したサアヤだが、今の段階でそれを通すだけの力がテルヨシにないことも冷静に見定める。

「だからこそでしょ。力を持つかどうかはここからのオレ達次第。だから力を貸して、サアヤ」

「乗りかかった船だもん。最後まで付き合っただけあげるわよ。はい終了。あとは流すだけ……」

そんなことも承知だから今日の夕方のあれがあるわけで、力云々も結果は来週まで持ち越しにはなってしまう。

だがその力を示すまでにまだやらないといけないこともまた多く、むしろそつちに全力で取り組まないことと改めてサアヤの協力を求めれば、当たり前前のことを聞くなどその背中を軽く叩かれて背中を洗うのも終了。

流すために湯船から洗面器でお湯を掬おうとしたサアヤを鏡越しに見ながら、ニヤリとしたテルヨシは、ここで最初で最後のイタズラを実行。

壁にかけてあるシャワーからお湯を強めに出して後ろのサアヤにかかるように噴射。

突然のことで避けられなかったサアヤが「キャッ！」と短い悲鳴をあげて尻餅をついたところでシャワーを止めて振り向くと、そこではTシャツを濡らして可愛らしい下着を透けさせたサアヤが、それを出るだけ隠しながらテルヨシを睨んでくる。

「イエス！ ナイスエッチ！」

「死ねこのエロ魔神がああ!!」

まあ当然のごとくサアヤによる鉄拳制裁という暴力が飛んできて浴室が惨劇の現場へと変わり、口から火を吹きながら洗面室に引っ込んだサアヤは、バスタオルを体に巻いてもう一度浴室に顔を出しとどめの「明日の朝食抜き」を炸裂させていったのだった。

それでもサアヤの濡れ透けエッチなハプニングを発生させて後悔はないテルヨシは、風呂から上がって虫でも見るような目で威圧しながら洗面室に入ったサアヤに戦慄しつつ、今夜は謡の希望でリビングで4人で雑魚寝のために布団を敷いておく。

あのあとに一緒に空間で寝てくれるかとヒヤヒヤもしたが、お風呂で気持ちを切り替えてくれたのか、はたまた謡のささやかな願望に水を差したくなかったか、いざ就寝というタイミングにも間にマリアと謡を挟んでちゃんと寝てくれた。

そうして全員が横になって消灯したところで、今夜が初めてのお泊まりとなった謡が寝る前にとホロキーボードを叩いて3人に感謝の言葉を述べる。

【UI】 今日はとても楽しかったのです。家族とも長らくこうして一緒に寝ることがなかったもので、眠るのが少し勿体とさえ思っています
【あー、頭が痛いー】

「またいつでも泊まりにおいで。歓迎するから」

「夏休みになったらもっといっぱいお泊まりできるよね」

「ああそうね。その分、学校の宿題は捗らないかもしれないけど」

【UI】 そこはしっかりやるのです。学生の本分は勉強ですから」

「あー、頭が痛いー」

家に来てから終始で笑顔だった謡がそんなことを言ってくれるから、テルヨシ達も逆に感謝したいくらい気持ちでまた今度を約束。

次はおそらく夏休みになるだろうが、楽しもうとするテルヨシ、マリア、謡とは違って現実を突きつけてくるサアヤの『宿題』というワードに頭を抱えれば、それを見た3人が一緒に笑って話を締めつけてくれ、良い子は寝る時間というようにサアヤがマリアと謡の2人の頭を優しく撫でてからは口を開くことなくみんなが就寝していった。

原作17巻辺り

Acceleration Second 72

——さて、どうなるものかね。

7月7日、日曜日。《ISSキット》の本体を破壊してから初めて行われることとなった《七王会議》の場にギャラリーとして入ったテルヨシは、議場となる場所へと向かう最中に会議の行方についてぼんやりと考える。

まだ《加速研究会》を攻撃するには材料が色々と足りないので、今回はまずISSキットが効力を失ったことの確認と、事前に話してきたので《ネガ・ネビュラス》がISSキット本体の破壊をしたことにして報告済み。

ここに《プロミネンス》や《メテオライト》が参加していたことと《災禍の鎧マークII》の存在は含まないとしたから、テルヨシは黒雪姫達があればこれ言われるのを初見のように振る舞う必要がある。

それから加速研究会の表の顔である《オシラトリ・ユニヴァース》の、今回もおそらくは《アイボリー・タワー》が出てくるが、その動向にも目を光らせ、安い挑発に乗らないように気をつけなければ。

実際、会議に向かう前に謡が感情的になりやすいハルユキに対して「絶対に挑発に乗ってはいけない」と幹部達から念入りに注意をしてきたと聞いている。

黒雪姫とフーコもいるし問題はないだろうが、そこまで念入りに注意されるハルユキには同情しつつ、残る1つの懸念についても考える。

あの激闘の日曜日を最後に姿を見なくなった《シーバ・カタストロフ》がこの会議に出てきてくれるのか。

もはや《ウルフラム・サーベラス》と同様に加速研究会に人質に取られる形となってるカタフだが、たった1人で立ち向かっていった彼の安否は重要な案件だ。

それら全ての要素を込みで会議の着地点をどうするか。ここが重

要になってくるわけで、黒雪姫達がやってはくれるが、オシラトリに話の主導権を握らせてなあなあで終わらせることだけはあつてはいけない。

「よつと。みんな元気ー?」

「……お前はホントにブレねーのな」

「褒めんなよナイト」

「適当に流せば良かったのに、ナイトもお人好しね」

「くつくつ。そうは言いますが、青の王が反応しなければ誰かしらが反応するまでやめませんよ、ああいう類いの輩はね」

とまあ色々と考えてもテルヨシには基本的に発言権はないし、規模が大きいバトロワ祭りだからそこでの変化を報告する義務があるだけ。

そんな立場でも会議が終わったらやることもあるので、内容に関してはこつちでも注意しつつ上手くやることにして、今回の議場に到達して早々に軽快な挨拶をかます。

それにはピリッとした空気を作り始めていた議場が一瞬で霧散して深いため息が周囲から漏れて、すでに到着していた黒雪姫達からも冷たい目を向けられてしまった。

どうせ始まつたら真面目になるんだから、今からピリピリしても仕方ないだろとアイコンタクトで返しつつ、すでに王達は全員が顔を揃えているのを確認。

あと来ていないのは、やはりカタフだ。

主催である《ブルー・ナイト》にはすでに誰が来るか連絡はいつてるのだろうか、男のことで自発的に動こうとするテルヨシなど不自然極まりないのでここで聞き出すようなことはせずに、いつも通りに場を困惑させてから『外野A』として床に座り込む。

そこから30秒程度『外野B』の到着を待っていると、ちよつとキララに入ってそうな笑い声が後ろから聞こえてきて、初めてでもないその声に振り向いてみる。

「フシシシ……まさに壮观といった光景であるな」

中世の時代の海賊の船長をモチーフにしたような淀んだネズミ色

のアバターデザイン。

羽根を突き立てたキャプテンハットに右目を覆う眼帯装甲もいかにもな感じだが、スマートな体格から伸びる腕は左右で4本となかなかの異質だ。

《ボスポラス・フォグ》。活動戦域は基本的に葛飾区周辺だが、墨田戦域のバトロワ祭りには割と積極的に参加しているらしく、レベルも7ということでカタフの次点の代表候補としては納得のいく人選。

「フォグ君、お久しぶりですねえ。くつくつ。相変わらずその笑い方は愉快ですよ」

「これはこれは黄の王もお元気そうで何より。フシシシ……ピエレットも召集に感謝する」

「なーのでーすかー?」

だがこれでカタフが欠席したことは明白となり、かつては《クリプト・コスミック・サーカス》の幹部だったというフォグが今回はその繋がりから召集されたことがわかる挨拶を2人とする。

どこか特徴的な笑い方は黄のレギオンの方針なのかと疑う独特な空気を持つ《イエロー・レディオ》とフォグは面白いが、今回はレディオがユニコ並の小柄なF型アバター《レモン・ピエレット》を連れてきた理由もなんとなく見えた。

ピエレットは名前の通りレモン色の装甲色で大きなポンポンのついた三角帽型の装甲やレオタード装甲が特徴のサーカスの玉乗り少女を思わせる姿で、レディオと並ぶとサーカスの団長と団員感が強い。

「ほいナイト。《キリンチョコ》が来たから質問。カタフの欠席の理由は?」

「俺も本人から聞いたわけじゃねーが、リアルの事情があるかららしい。まあ日曜日だし、そういう日もあるわな」

「お、おのれ《レガッタ・テイル》う……私のことを公でそう呼ぶなどあれほど……」

「まあまあ怒んなさんなキリンチョコ。それとも《フォグリん》とかの方がいいの?」

「普通に呼べんのか貴様は！」

それはそれとして現れたのがフォグならばテルヨシでも自然とカタフ欠席の理由をナイトに聞けるので、すかさず挙手から質問を飛ばすと、ナイトも直接ではないがリアル事情と聞かされていたことがわかる。

本人からではないということがきな臭いが、逆にこの場に来なかったことで『加速研究会の側についてた可能性』がぐっと低くなってくれたのは不幸中の幸い。

最悪なのはこの場に平然と現れてテルヨシ達と敵対の意思を見せてしまうことだったからだ。

どのみちカタフに関してはこれ以上のことは今のところわからないうし、下手に探れば面倒なことも起きてしまうかもしれないので、フォグとコントをしてから腰を落ち着けて、ようやく全員が揃ったことでナイトも会議を始めてくれた。

「まず、各レギオンとバトロワ祭り主催の調査報告から聞こうか……いや、逆に、こう訊ねた方がいいかな。誰か、この1週間で、まだ力を使えるISSキット・ユーザーを確認したやつはいるか？」

その最初の議題はやはりISSキットに関してで、ほとんど確定していることながら確認作業のように質問したナイトに手を挙げる者はなし。

この確認のために会議の時間はいつもよりも遅らせて、バトロワ祭りも午後2時にすでに終えてテルヨシとフォグもフィールド全域を見てきていた。

実際にキット・ユーザーとなっていたリクトの無事も確認していたので、今さらそこに疑いの余地もなかったが、改めて他のところでも同じ結果が出て安堵する。

「なら、いちいち個別の報告を聞くまでもないな。あの目玉……ISSキットは、本体が破壊されると同時に、1つ残らず消えた。俺たちに黙ってミッドタウン・タワーに特攻^{トッコ}んだ黒の王にはひとこと言いたいとこだけど、ま、ロータスの独断専行はいまに始まった話じゃねーしな」

「その言われ方は心外だな、ヴァンキツシユ。前回の会議で我々が受けた要請は、《シルバー・クロウ》が《理論鏡面》アビリティを習得し、その力で《大天使メタトロン》のレーザーを防御すること——だったはずだ。実際の攻略作戦にお前たちの承認が必要だとは聞いていなかったぞ」

その結果を受けて黒雪姫の報告が真実でひとまずの脅威が去ったことを告げるナイトだったが、現在でわずか7人のレギオンがまさかそんな大それた作戦を実行して完遂してきたことにも言及。

実際にはその倍の人員——シズクも含めている——で事には当たっていたが、そこは伏せる形なのでテルヨシもユニコ、パドも沈黙し成り行きを見守る。

そうして平然と言つてのける黒雪姫に対して、無謀とも思える特攻にナイト達も半分は呆れて言葉を交わしていくが、メタトロンを《地獄》ステージ以外で倒した話が持ち上がり、レアなアイテムでもドロップしたのかと雑談じみてきたところでふと、視線を黒のレギオン側に向けて、ちよつと気になっていたものがピコピコ動いているのを観察。

どこか焦るような雰囲気もありながら、約束通りに直立不動のハルユキだが、その左肩の辺りに紡錘状の本体に輪っかと羽のついたアイコンが存在している。

何かのアイテムのようだが、なんとなくそれがナイト達の話に反応している、ような気がしないでもないと感じつつ、どこかで見たような気もしてくる。

「——ともあれ、ISSキットのアウトブレイクが水際で防がれたことと、そいつがネガビユの手柄であることは間違いないんだ。そこは素直に認めておこうぜ」

「だからって、3年前の裏切りが帳消しになるわけじゃないけどね」
その引っかけかりについてを考える前に会議の方が一段落しそうな空気になって、ネガビユの功績を認めるナイトの発言に《パープル・ソーン》がツンツンな感じで付け足してISSキットの件は終了。

となるはずだったが、切り上げられる前に意識しないと存在感すら

薄い《アイボリー・タワー》が挙手して発言許可を取る。

「東京ミッドタウンのISSキット本体が黒の王によつて破壊された件、そして全てのキット端末が非活性化された件は了解しました。しかし、それでめでたしとはなりませんよね。事件の黒幕だという加速勉強会……いや研究会でしたか、その連中についてはどのように対処するのです?」

白の王の全権代理という立場ながらに発言許可を取る律儀なところは好印象だが、事これに關しては真相を知る側からすれば神経を逆撫でするだけの発言になる。

目的としては今後の大レギオンの行動方針を決定させた上で対策を練るための情報の引き出しと意思統一の有無。

それとテルヨシ達への精神攻撃も含まれているが、自制くらいできる準備はしてきたテルヨシ達がその挑発に乗るわけもなく、証拠もなくしに噛みつく者は誰もいない。

「ちよつとあなた、代理だからつて他人事みたいな言い方しないでよね。そもそも、ISSキット本体が置かれてた東京ミッドタウンはオシラトリの領土内だよね。なら、あなたのとこが最初にかするべきだったんじゃない?」
「なのに偵察はグレウオ、攻撃はネガビュに丸投げしておいて、そのうえ加速研究会とやらの始末までつけさせようってわけ?」

その代わりに噛みついてくれたのが意外にもソーンで、まるで自分達の認識の外からの物言いのアイボリーに筋の通った意見を述べる。

自分達はその加速研究会なのだから不干涉を決め込むのは当然だが、テルヨシ達に噛みつかれるよりも面倒な相手に噛みつかれたアイボリーは、それでもまだ用意はあったか焦りも見えない声色でのんびりと話す。

「そう言われましても、エリア境界線が見えない《無制限中立フィールド》での出来事ですからね。《オーロラ・オーバル》さんと違って、我々は無制限フィールドでの支配権を主張していませんよ。事実、《グレート・ウォール》さんやネガ・ネビュラスさんの、港区エリア内での活動には一切干渉しなかったでしょう?」

長々と話しはしたが、まとめると何もなかったということに他ならなく、ソーンも反射的にツツコミつつ、自分達が支配権を主張するのは《上位シヨップ》での衝動買いからの全損を抑制するためと説明。

それに過保護だなんだと噛みつくアイボリーもアイボリーだが、干渉よりよっぽど良いだと副官の《アスター・ヴァイン》が話を戻して、言い出したからには何か建設的な意見を述べると言う。

「私もできればそうしたいのですがね。残念ながら、加速研究会とやらについては何の情報も持っていないので、意見の出しようもありません……」

「アイボリー。あんま場を乱すだけの発言すんなよ」

それにさえ何も出せないと躲すアイボリーには、さすがにイラツとしたテルヨシは、挑発に乗るわけではないがアイボリーの姿勢に警告をすることにする。

「そんなにサラサラとソーン達に返せるなら、自分が切り出した話にも事前に意見を用意しておくのは義務に近い。その考えさえ放棄して丸投げするなら、お前に全権代理なんて立場は相応しくもない。次からコスモス連れてこいよ。お前じゃ話にならん」

「珍しいなテイル。お前が声を荒らげるとは。だが言っていることはもつともだぞアイボリー。これは会議なのだから、意見を引き出すだけの役目に徹する者はただの人形と変わらん。白の王の全権代理を名乗るならば、その白の王の顔に泥を塗るような行為はしたくはなからう？」

テルヨシがでしゃばることに違和感がないタイミングを選んだつもりだが、やはりどこか割り込んでくるな的な空気は孕んでしまっていたため、それを緩和するように黒雪姫が混ざって賛同しアイボリーを糾弾。

これにはさすがのアイボリーも下手に逆撫でする発言をすれば他の王達からも『次回からはコスモスの参加を強制』なんて意見が出かねないため、挑発に乗らずまともなところに噛みついてきたテルヨシに少しだけ視線を向けてくる。

「……場を乱すつもりも白の王の顔に泥を塗るつもりもありませんでしたが、確かに私の言動には些か配慮が足りなかったようです。次からはその辺にも考慮した上で発言させてもらいます。失礼しました」

そうした謝罪をするしかなかったアイボリーはそれでもしかし、自分の意見と言うことを述べることなく口を閉ざしてしまい、そこに突っ込んでくるように仕向けてくる。

そうすると今度は噛みついたテルヨシ達に何かないのかと切り返されるのは目に見えてるので、そこには乗らずに議長であるナイトに視線を向けてやれば、険悪な空気がいくらか和らいだところでやれやれな雰囲気ナイトが口を開く。

「あんま喧嘩腰で話すのは止めようや。あとはテイルも、口を挟むならプロセスは守れ。お前も場を乱す発言をしてる」

「言い訳はしねえよ。悪かったな、皆さん方」

立場上で冷静でなければならぬナイトだが、性格的には本来なら割と好戦的な方のナイトだからこそ、その言葉には圧力が生まれる。

そんなナイトの注意に平静を装って謝罪したテルヨシだが、目的自体は達成できたのでこれ以上は黒雪姫やユニコに任せようとその口を閉ざす。

ここでテルヨシがしたかったことは、アイボリーに会議の主導権を握らせるチャンスを少なくすることであって、今回のことで今後、アイボリーは何か発言する際には必ず何かしらの意見を用意した上でしなければならなくなったので、今回のように『何もありません』が通らなくなったのだ。

「フシシシ……王達の前で我を通す胆力、見事であったぞ」

「たまにグダるのよね、あの人達。まっ、中身はオレらと変わらない中高生って証明でもあるんだけど」

「王などと持ち上げる必要はないと？ なかなかどうしてお前も大物である。フシシシ」

その結果、テルヨシが少し注意されるくらい痛くも痒くもないので、内心ではイラツとしてたらいいなと思いつつ、横にいたフオグが

小声で絡んできたので、かなり久しぶりにまともな会話をするフオグに付き合う。

あまり人を誉めることはないフオグからそんなことを言われたのは意外だったものの、せっかく話すのだからと小声のまま会議そっちのけで話を続ける。

「そういやキリンチヨの他にも墨田のバトロワで有名なのいるけど、キリンチヨに決まったのはやっぱり黄のレギオン繋がりで？」

「だからその呼び方はやめろと言っているであろう。それもあるが、このような重要な会議に心意のことまで理解があるバーストリンカーなど、7レギオンの幹部クラス以上が精々であろうが。その点、私は元CCCの幹部であった故、事情にも精通している」

「ああそっぴや心意って秘匿されてたんだったな。加速研究会のせいでその辺の感覚が麻痺してたわ。変なこと聞いてゴメンねキリンチヨ」

「……私はむしろ旧プロミ創設メンバーの《猪突猛進》がいるとはいえ、お前がこの場にいることの方が驚きであるのだが……どこで心意を習得したのだ？」

「たゆまぬ努力と天才が成せる技によって」
「お前に聞いた私がバカだったのだよ……」

会議はアイボリーの態度にメスは入れたが、話自体は詰めておくべきかと進んでいて、ISSキット本体から放出された負の心意エネルギーの行き先とそれがもたらす今後の動きに移っていた。

すでに負の心意エネルギーはユニコの《インビンシブル》のストラクターに宿ってマークIIが誕生してしまっているが、その辺を明かすとオシラトリから証拠の提示を言及されてしまうので話すに話せない状況。

だから黒雪姫も負の心意エネルギーの行き先に関しては『追跡不能』として話し、ささやかな反撃として南の方に飛んでいった光が辿り着きそうな場所はないかとアイボリーに質問したところ。

まあ当然ながら六本木ヒルズだの品川駅だのと列挙するが、到達した《エテルナ女子学院》の名前は挙がらずに終わる。

行き先もわからずじまいではどうしようもないかと唸るナイト達だったが、この話が始めから大した進展はないだろうと踏んでいたっぽいユニコが、意外にも初めてその口を開いた。

「研究会の連中が、ISSキットを使って溜め込んだ心意エネルギーで何を企んでやるのかはともかく、だ。これまではずっと、研究会への対応が後手後手になっちまってるからな。次もまた、奴らが何かをしでかすのをただ待ってるわけにはいかねーだろ」

「そうは言っても、連中は領土を持ってるわけじゃありませんからねえ？ 先手を打つのは結構ですが、いったいどこを攻めようというんです？」

「あたしが言いたいのはその『攻める』って意思だけはこの場できっちり統一しておくべきだってことさ。もし加速研究会の本拠地が割れたそんな時は、ここに集まってる7レギオンが総力で攻撃する。もしその作戦に参加しねーレギオンがあったら、そこは研究会と通じてると見なす」

話的には決して先手を打てる策ではないが、いざそうなった時にやれ攻撃部隊の編成だ、誰を出すだのと話し合う前にレギオンで決定しておくことが可能になる。

それは1秒を争う現実世界での乱入戦において重要なスピードを問われる事柄なため、ナイトもその提案に対して賛成意見で、反対意見がないかを王達に問いかけ、黒雪姫達も賛成の意で無言を貫く。

もちろんこの案を具体的に詰めるようなこともしたくはないアイボリーも、反対する意見も言えない状況でこれ以上の悪化を防ぐ意味で沈黙せざるを得なくなる。

反対意見もなかったのでユニコの案を採用し、今後、加速研究会の本拠地が割れた際には迅速に攻撃部隊を編成し掃討作戦を実行する旨を決定。

戦力の出し惜しみはなしという意味で攻撃にはナイト自身も参加するとか言えば、さすがに《コバルト・ブレード》と《マンガン・ブレード》の2人が狼狽えたが、攻撃人数は多いに越したことはないという正論で返していた。

そしてこの決定にこぎつけたのが一番の新参の王であるユニコであることは大きな意味を持つ。

それは先週に正統な継承がされた《赤の王》という称号を真の意味で受け入れて歩み出したユニコの成長と呼べるものに他ならなく、1つ上のステージに上がったユニコに対して、何故か親のような気持ちで微笑んだテルヨシは、いよいよ会議も終わりに近づいてきたのを感じながら、自分がやるべきことがまだあることを強く意識して決意を固めていった。

「——ほんじゃ、今日のところはこんなモンか」

2週間ぶりの《七王会議》も《加速研究会》への攻撃方針が決定となつてからは《相互不可侵条約》の微修正や、先月のイベント以降、一向に実装された気配のない《宇宙》ステージの情報交換などで時間が過ぎ、それらを終わって雑談になる前に《ブルー・ナイト》が話を切り上げて会議自体を終わらせる方向に。

そのナイトの声で立ち上がった王達に合わせて、同席していたテルヨシと《ボスポラス・フォグ》も立ち上がる。

「次の会議は、加速研究会の本拠地が発見され次第、招集をかけ……」
「あー、ちよい待つてナイト。招集の方は来週もする可能性だけでも残してもらえる？」

「……あー、テイル？ それは何でだ？」

「待てよナイト。あたしもそれに関しての事はわかんねーが、そいつに聞きてーことはある」

「奇遇だな赤の王。実は俺達も気になっていたことがあつてな。会議が終わったら聞こうと思つていたところだ」

「つていうかみんな、気づいてて会議ではスルーしようとしてたわけでしょ？ 『アレ』に意味があるなら、何か言い出すのはわかつてたんだから、まずは話させなさいよ」

「くつくつくつ。どうせろくなことではないでしょうがね」

「聞いてもいないでくだらないと言うお前もろくでもないがな、レディオ」

それで次回の会議の開催予定を口にしたナイトが、来週にまた会議をやる可能性がないことを告げようとしたので、仕方なくこのタイミングで割り込みそれを阻止。

そこから誰も言い出さないから流れるんじゃと思われたことをニコを皮切りに次々と言い出す各レギオン。

それだけ目立つことを昨日の段階でしていたのだから、嫌でも目にも耳にも入る情報なだけに本題を告げていなくても話題が同じなこ

とは理解できる。

それならそれだと黒雪姫がまずはまた席に座って話を聞く体勢になると、他の王や幹部達も渋々つぼくはあるが座り直して割り込んできたテルヨシに視線を向ける。

「わざわざ悪いね。んじや話すけど、みんなが聞きたいのは同じことだろうからまずそれからな。昨日の領土戦でオレ達のレギオン《メテオライト》は中野第2戦域にレギオンの旗を掲げさせてもらった。破棄しない限り、最低でも今週末の領土戦まではあの戦域はオレ達の領土ってことになる」

「そりや言われなくても領土マップ見りやわかるしな。だがよ、ティル。昔にあそこを領土にしてた俺達が、何であそこの占有をやめたかってのはわかってる上でやったんだな？」

「もちのろん。ナイトが中2戦域を空けてくれたから今のバトロワ祭りが確立してるし、そこには感謝もしてるよ。ただ今回の旗揚げは別に今後ずっと、中2戦域を支配したいって意思を見せることにはない。むしろ今週の領土戦が終わったら破棄するつもりでいる」

議題と呼ぶにはあまりに小さなことながら、改めて席に着いた面々にまずは昨日に行った領土占有についてを説明。

実は昨日にテルヨシ達がやってきたことはこの領土占有なのだが、中2戦域は昔《レオニーズ》が占有していた領土で、この戦域を空白にするために色々仕掛けた過去もある。

その後は暗黙の了解としてこの中2戦域はバトロワ祭りの聖地として大レギオンが占有することはなかったが、そこにわざわざメテオライトの旗が掲げられたことの意味について意味不明なことを言う。「今週にどうあれ破棄すんなら、目的は領土戦ってことになるが……意図は何だ？」

『力』の主張だよナイト。お前ら7レギオンに負けない力がメテオライトにあることを証明するためにはこれしかなかった」

「大雑把だなオイ。力つてのはあれか？ 要はレギオンとしての戦力つてことか。んなもんだった3人のレギオンでゲリラ的に散々やってきただろ」

「だからってお前らがメテオライトを『災害』と見はしても『脅威』として見たことはなかったはずだぜ？ 別にお前らを脅かそうって野望はないが、少なくとも今後の話を進める上でお前らと『同等のレギオンである証明』は必要になってくる。だからこそその領土戦さ。だからこそその中2戦域なんだよ、ナイト」

領土を占有しながら、占有自体が目的ではないとするテルヨシの話にナイトが1つずつ解決へと導く会話をしていくが、対戦の残り時間もあまりないので黒雪姫がまどろっこしい話はやめろと割り込んでくる。

「お前は力の証明と言ったが、その先に見据える目的は何だ」

「《帝城》の完全攻略」

——ガタツ。

そのテルヨシの発言に対して、予想の外だったかソーン、レディオ、ナイトが思わず立ち上がってしまう。

事前に『何か言う』とわかつてはいた黒雪姫とユニコはなんとか驚きを留め、《グリーン・グランデ》も珍しく側近としていた《アイアン・パウンド》と顔を見合わせていた。

《アイボリー・タワー》は微動だにしなかったが、元より白のレギオンは眼中にないので反応だけ確認して話を続ける。

「バカな話だって思ったか？ そりゃオレも絶対の自信があつてそんな目的を掲げてるわけじゃないが、出来ないと断言するのは勿体ないだろう」

「んで、仮にお前らのレギオンがその力の証明つてのが出来たとして、帝城攻略を表明する意味はなんだよ」

「いくらオレ達でも帝城攻略をメテオライトだけで実行するのは到底不可能だってことはわかってるさ。ならどうするかって話になれば自然と話は見えてくるよな。ここに。この場に『7つも巨大なレギオンが存在する』んだから」

「……フツ。そういうことかテイル。つまりお前は我々7レギオンに帝城攻略という1つの目的のために手を取り合おうと、そういうことを言いたいのだな？」

「その通りだ、ロータス」

驚く王達にあくまで冷静に話をするテルヨシにまた腰を落ち着けた一同だったが、その先を見据えて出てきたのがまさかの『協力』とあって再びぎわつく。

今は相互不可侵条約なんていうもので停滞してはいるが、以前はここに集まる7レギオンはしのぎを削って争うライバルであつたわけで、その集団でほとんど完結してしまつていた。

だから帝城攻略という巨大な壁に対して、無意識のうちに『レギオン単位で挑むクエスト』と認識してしまつて、その中で不可能だとしてしまえば無理だと結論に至つてしまう。

だがテルヨシはその無意識の対立にヒビを入れて、何もレギオンだけで挑もうとする必要はないと進言。

「お前ら7大レギオンが不可侵条約の前までバチバチやり合つてたのは知ってるさ。本来なら敵であるレギオンだが、敵であると同時に切磋琢磨するライバルでもあつたお前らだからこそ、こういうことを言い出すのははばかられてきたのかもしれないな。だからオレが言つてやるよ。オレ達バーストリンカーが総力を以て挑んで攻略できないなら、そこで初めてオレは帝城攻略が『不可能』だつて諦めてやる。逆にそれをやらずして不可能と断言する奴がいるなら、バーストリンカーとして決定的に何か欠けてしまつてるつて、そう思うよ」

現状で帝城攻略はその糸口すらも見えない難攻不落の要塞のようなものだが、考え得る最大の戦力が上がれば見えてくるものも確実にある。

例えばかつて黒雪姫が失敗した《四神》突破の作戦も、1つのレギオンを分散配置する必要がなくなり、各門でリーダーとなる王とレギオンを配置し、レギオン単位で個別に攻略が可能になる。

4つの門を1つのレギオンで突破するという考えが、1つの門を多数のレギオンで突破する考えでは、様々なところで大きな差が出てくるわけだ。

「さしあつての攻略が四神になるわけだから、とりあえず最低でも4つのレギオンが協力してくれば、それだけで1つのレギオンでの

突破口を探る段階に移れるし、四神に対して有効なアビリティや必殺技が見つければ、戦力をレンタルしたりもできるだろ？　だがこれを言い出すに当たって、発案者がオレ達であることを許容するには、お前らに力を証明しなきゃならない」

「そのための領土戦ってわけか……」

「そうは言うけどテイル。アンタのこのレギオンってまだ『4人』しかないでしょ。それで力の証明ってのも釈然としないね」

「ソーンの言う通りだ。だが安心しな。今週末の領土戦までにメテオライトは《5つの星》を集めて『総勢8名』の少数精鋭レギオンにまで仕上げてくる。だから攻める権利があるプロミとレオニーズとグレウオ。あとはネガビュも、その数に合わせて全力できてくれ。そのことごとくを跳ね返して必ず領土を防衛してみせる」

皆まで言わなくとも各レギオンの頭なら、協力が意味するところのメリットも当然ながら理解できるし、それを言い出したテルヨシ達メテオライトが力の証明を必要とすることにも納得がいく。

その中でサラツとソーンがメテオライトの今のメンバーの人数を4人だと滑らせたが、シズクの加入はまだ公ではないため、隠してきただろうそれを勘づかせないためにいち早く反応し《五芒星》を匂わせる言葉で上書き。

「大層な目的を掲げ決意表明してくれたところ悪いが、我々のレギオンはまだ攻撃に回せるほどの人員を確保できていないのでな。今回は隣接する3レギオンに頑張ってもらいたい」

「杉並の3戦域なんて占有するから防衛で手一杯なんだろうが。まっ、帝城攻略をやるやらないはともかく、これはあたしらに対する宣戦布告でもあるわけだし、調子づかせねーためにもプロミからは《三獣士》を全員出撃させてみつか」

「なんだか話がでつかくなつちまつたが、今の加速世界は研究会の企みに影響されまくってるからな。それに抗う意味でもブレイン・バースト本来の楽しみ方ってやつを貫くのもいいかもな。コバル。マーガも行ききたきや行っていいぜ。編成は任せる」

「俺達グレウオも《六層装甲》を筆頭に仕掛けさせてもらう。ここまで

挑発したのだから、それで負けても文句は言わんよな、テイル?」

「当たり前だろ。むしろ幹部クラスを叩きのめすくらいじゃなきや証明になんねーよ。その代わり、本当にオレ達が防衛に成功した時には、また会議を開いてもらって、そこで改めて質問をさせてもらう。オレ達と一緒に帝城の完全攻略をするかどうか……いや、協力してくれって頭を下げるに來るのが正直なところか。オレ達の野望にお前らを巻き込むわけだからな」

中2戦域の五芒星と言えばテルヨシを筆頭に王達でさえ一目置く存在。

そんな5人が1つのレギオンに集ってまとまるということには何らかの脅威は発生したか、俄然やる気になったユニコ達がそれぞれ攻撃の意思を表明。

残念ながらネガビユはメンバー不足から辞退となったが、赤、青、緑の3レギオンからは幹部クラスも出張してくるとあつてテルヨシも内心で闘争心メラメラ。

しかしそれを表に出さずに、防衛に成功した暁には今の話を真面目に取り合ってもらおう約束を取りつける。

これで各レギオンにも考える時間は与えられたし、攻略の糸口はまだないが、以前《チャイブ・リリース》が言っていた『可能性』を示すことはできる。

「話はわかった。いやあ、やっぱお前は面白いな、テイル。立場的にいま言っちゃなんねーけど、お前らの野望に乗っかりたくなってきたぜ」

「お、王!? それをいま言われては、我々が全力で潰しに行く意味が……」

「わかってるって。やるからには臍履なしで全力だ。お前らの覚悟、俺達に証明してみな」

「言われなくてもやるさ。あつ、報酬の分け前とかは正式に話が進んでからにしようぜ。その辺で揉めるのは目に見えてるし、こっちも考えておくから。長々と引き留めて悪かったな。これでオレの話は終わりだ」

話は通ったので、あとは来たる防衛戦までにやれることを全てやって当日を迎えるだけ。

ナイト達には総勢8名などと宣言したものの、未だ半数が未加入という状況は変わらないので、なんとしても今週中に残りのメンバーを招集しなければならぬ。

大きな役割を終えてひと息ついたところで、ナイトも締めようとしていた会議を改めて締めて、次の開催はメテオライトとの領土戦の結果次第として会議を終了。

残り時間も200秒を切ったため、白、黄、赤のレギオンがまずは姿を消し、フオグも「楽しい会議であったぞ」と言い残して退場。

黒と緑のレギオンは先週に言っていた会談の話でもしているのか、近寄つての会話を手早くしているようで、それを横目にテルヨシもそういうえばと思いついて去ろうとするナイトに声をかける。

ナイトも何だといった雰囲気テルヨシに振り向いて待ってくれたが、そのナイトに少し待つてと告げたソーンが、珍しくテルヨシに自分から近寄つてきて話をする。

「さつきはありがとね、テイル。私とルーレットの繋がりを匂わせる発言は迂闊だったわ」

「それは今後も公にしない方向なのね。ルーラーはソーンにレギオン加入をどう説明してるの？」

「『とても大きなことをやろうとしてるあの人達と一緒に何かを成し遂げてみたい』って。そんなこと、この世界であの子が言ったのは初めてのことだったけど、今日のこれで納得したわ。あの子の《親》が誰かはもう知ってるのよね。なら約束して。絶対にあの子を裏切らないって」

「それはもう絶対の絶対。可愛いソーンちゃんの頼みなんてなくても、オレはいつでも女の子の味方だしね」

「……そうね。あなたはそういう人よね。それじゃあの子のこと、お願いね」

割とテルヨシのことは毛嫌いしている節もあるソーンだが、大事な《子》同然の《ボッシュ・ルーレット》ことシズクのことになるとそんな

な自分のことはどうでもいいらしく、刺々しいイメージも今だけは見せずにテルヨシにそんなことを言ってきた。

もはや母性とも言えるソーンの変わり様にはテルヨシもちよつとビツクリだが、そんな大事な子を他人に預ける決意もしつかりと受け取ったので、その約束だけは何かあつても守ろうと心に誓う。

話はそれだけでナイトも待たせてるしとさっさと立ち去つていったソーンを見送つて、終わったかと待ちぼうけしていたナイトに近寄つて改めて個人的な会話をする。

「なあナイト。ちよつと具体性のない話にはなるんだが、心意の第2段階つてのが今のところバーストリンカーの引き出せる力の限界つて認識は合つてるか？」

「なんだその突拍子もない話。心意の限界だあ？」

「んー、いや、この前ちよつと自分でも全くわからないくらいのレベルで心意技を使ったみたいで、それがこれまでの第2段階心意技よりももう1つ上の段階を越えたレベルに達してたっぽくてさ。もう1度やれつて言われてもできる自信は全くないんだけど、そういう経験が《オリジネーター》のナイトにならあるかなつて思つてさ」

先週の作戦時に発動させた高レベルの心意技《流星突破》メテオ・ブレイクは、あの《ホワイト・コスモス》すらも万に一つの発動の可能性を危惧するほどのものだったが、テルヨシ達にはそれ自体がどういう意味を持つのかに理解が及ばなかった。

だから加速世界誕生から生き残っているオリジネーターならば何か知っているかもと尋ねてみると、顎辺りに手を添えて唸つてから口を開く。

「……そいつは口で説明したところでどうにもならん気がするな。理屈でどうこうつてよりは、極限まで自分の『真髄』つてやつを研ぎ澄ませるかどうかつて話になる。使いこなそうと思つても第2段階心意技の何百倍の時間……事によつては永遠に習得なんてできねーよ
うな代物だ」

「それはナイトも同じつてことか」

「まあな。グランデに聞いても同じようなことを言うと思うぜ。」

まっ、本気で習得するつもりなら俺のレギオンに入って修行するプランも……」

「いやそれはいい。ただ心意技にさらに上の段階があるってのがわかっただけで収穫だったよ。ありがとな、ナイト」

「本来なら他のレギオン所属のやつに教えるようなことでもなかったが、お前は個人的に気に入ってるしな。特別なことだが、他言無用で頼むぜ」

別に自分のレギオンに所属しているわけでもないテルヨシに丁寧に教える義理もないのに、ヒントのようなものはくれたナイトは相当に甘い。

それだけではあの心意技を再び使えるようにすることは不可能に近いが、ナイトの話から『そういう上位の心意技は存在する』と示されたのは大きな収穫。

さらにナイトやグランデでさえ未だ習得には及ばないみたいなことを聞くに、そんな代物をヒヨッコのテルヨシがどうこうできるわけもないので、密かに継続していた再現の修行も今日からはもう無駄かと諦める。

具体的にどういうものかわかるまではこの件は放置の方向でいかと、話が終わったならと退場していったナイトを見送って、黒と緑の話も終わったっぽいのを遠目に確認してすぐに、コバルとマーガがフィールドを閉じてしまったよう強制的に現実世界へと戻されていった。

千代田区の飯田橋駅からダイブしていたテルヨシは、つい数分前に乗ったばかりの電車にまた乗り込んで、東京メトロ東西線で2つ先の早稲田駅を目指す。

バトロワ祭りを終えて会議のために中野駅から飯田橋駅。そしてそのまま早稲田駅へと移動ばかりで嫌になりそうだが、早稲田駅は高円寺駅に戻る道中なのが不幸中の幸いか。

そんなことを思いながらも1度は降りることになる早稲田駅で改札を潜って、事前にメールで指定されていたジャンクフード店まで寄り道なしで直行。

おそらくは自分が一番遅い到着になってるだろうと予想しつつ目的のジャンクフード店に入つてすぐ、席を確保していたサアヤが呼び込むので6人座れるボックス席へと腰を下ろす。

その席にはすでにサアヤの他にアキラ、シズク、リクトの姿があり、テルヨシの分の注文もすでにされてあつて全員が何らかの飲食はできる状態になっていた。

「あれ、シズっちは休日でも制服なのね」

「はい、校則なのですみません」

「夏休みとかは適応外？」

「一応そういうことにはなっていますが、その……そういった校則があるので着る機会もなく、私服の方はバリエーションに乏しいです」
「じゃあ夏休みはショッピンングでもしちやおつか。シズっちの着せ替えとか楽しそうよね」

「そんなこと言つて、本当はシズクの露出を増やしたいだけでしょ。男つてこれだから……」

「何が悪いというのか。なあアキラ、リクト」

「ぼ、僕は今の袴田さんでも十分すぎます」

「また色恋沙汰の話か。くだらないことを話すための集まりならば帰らせてもらうが」

バトロワ祭り終了からテルヨシ以外が直行で来ているはずなので、すでに自己紹介の方は済んでいる空気を察して、挨拶代わりに今日も制服なシズクから話を発展させてみた。

しかしリアルでのノリが悪いリクトが本当に帰りそうな雰囲気になつてしまったので、仕方なく雑談もそのくらいで今回のメンバーが集まった目的へと移っていく。

「んじゃ始めよっか。第1回レギオン会議を」

《七王会議》も無事に終えて、そのあとに予定していた《メテオライト》のレギオン会議のために早稲田駅近くのジャンクフード店に集合した。

「とりあえずリクトからだな。無事に話はついてくれたんだよな」

「ええ。これで僕も後戻りはできなくなっただんですから、それに見合う成果を報告していただかなければ、今からでもなかったことにさせてもらいますよ」

「はいはい。テルがやることもやらずに来るなんて恥ずかしいこと出来るはずないんだから疑ってかからない。それよりやることがあるでしょ」

「……確かに物事の順序を間違えてはいましたか。では改めて。本日より正式に仲間として参加しますので、今後ともよろしくお願いします」

「ようやく2人目か。とにかくよろしくな、リクト」

その会議を始める前にとドリンクをひと口含んでから、まずはまだ正式にレギオンメンバーになっていないリクトが折り合いがつかどうかの確認。

この場に来てくれたのだから聞くだけ野暮なのだが、そうして改めて加入した旨の挨拶をしたリクトを迎え入れたテルヨシは、それであろうやく話を本題に移していく。

「でだ。リクトも加わって順調にメンバーが揃いつつあるチームだが、残ってるメンバー候補の1人が問題だ」

「というよりはその1人をどうにかすれば、残りの2人は連鎖的に引き入れられるわけだけどね」

「あの、その1人ってやつぱり《最終兵器》さんですよね？」

「むしろあの堅物をどうやって引き入れるつもりでいるのですか」

「この前は話にならないって突っぱねられましたからね……」

議題としては残りのユリ、《チャイブ・リリース》、《シンデレラ・コ

ントラリー』の3人を引き入れるための動きになるが、ユリとシンデレラに関しては『五芒星が揃えば加入する』という共通項があるため、実質的にはもうリリースだけを引き入れればいいことになる。

しかしそのリリースは前回に『可能性すらない話は論外』とテルヨシ達を追い返してしまっていて、この会議の段階でもまだ可能性は示せる段階にないのが事実。

「それを解決できるかもしれないことをさっきやってきたわけ。今週末の領土戦。オレ達は旗揚げした戦域を赤、青、緑の猛攻から死守する」

「すみませんテルさん。唐突すぎて話の繋がりが見えません」

「私もリクトさんと同じく、もう少し詳しく説明してもらいたいです」「テル……それだと話を通ってる私とアキラにしか伝わらないからね……いいわ、私が補足する」

ただここからみんなに案を出してもらおう段階でもなかったのだからちよつとテンションが高くなって色々雑な説明でテルヨシが今しがた決定したことを話す。

当然、直前に七王会議があったことさえ知らないシズクとリクトには何が何やらな話だし、突然の領土戦の話には困惑の色を隠せないため、呆れたサアヤがテルヨシにチョップを食らわせつつ補足説明に入る。

メテオライトが掲げた目標である《帝城》の完全攻略が、現状では可能性すらほぼない無謀なものであると自覚した上で、どうすれば可能性が生まれるか。

そこで出した結論が7大レギオンとの共闘だったということ。

シズクとリクトは《ISSキット》とも関わりがあったので、その問題解決のために王達が会議していたと説明しつつ、その会議にテルヨシが参加して今の話を持ち込んできたと話す。

しかしその話をまともに取り合ってもらうためには、メテオライトが本気でそれを目指していることを示す必要がある、計画の立案した側としても7大レギオンと引けを取らない力関係にならなければならないこと。

そのためにレギオンとしての力を見せられる領土戦を選択し昨日に旗揚げしたのだと、そこまでを話せば2人ともがようやく話に合点がいき納得。

「共闘、ですか……確かにそれなら四方門への戦力の分散も目に見えるダウンにはならない」

「むしろ、長年のチームが1つの場所に集中できるメリットの方が大きいですね」

「まだ攻略の糸口が見つかったわけじゃないが、2人の反応からもわかる通り、『可能性』は見えてきただろ」

「この可能性で私達はアイツに再度ぶつかるわ。領土戦は今週末。つてことでタイムリミットは土曜日までよ」

「あの、サアヤ姉。チームの連係とかも練習しなきゃだから、なるべく早い方がいいよね」

「それに加えて残念なお知らせも1つあるわ」

7大レギオンのうち、どこが協力してくれるかは今のところ不透明だが、真剣に帝城攻略を考えられる可能性が示されたことで、今頃はどうかの会議が執り行われているかもしれない。

だがその前にテルヨシ達は領土戦で領土を守りきるというミッションがあるので、メンバー全員が残るリリースを引き入れるべく方針を固める。

しかしアキラが指摘した通り、ぶつつけ本番で熟練の大レギオンの猛攻をしのぎきるのは無謀。1日でも早く全員を揃えて、メンバーで何らかのミッション——連係確認でも何でもだ——はこなしておく必要がある。

それなのにサアヤはさらに残念なお知らせと称してその重い口を開いて、テルヨシの耳に入ってほしくない情報をねじ込んできた。

「ここにいるアキラ以外のメンバー全員が今週後半から期末テストみたいだから、仲間集めだんだにかまけていたら大変なことになるわ」

「うぐっ……耳が痛い……」

「学生の本分ですし、手抜きはできませんからね……」

「僕は普段から真面目に取り組んでいるから、少しくらい尽力しても支障はないが」

「私も今さら足掻くほどバカやってたわけじゃないし別にいいんだけど、みんなが揃って何かしなきゃならない場合つてのが出てきた時に、これが足を引っ張るのよ」

「ほ、補習だけは避けねばならん……」

「テルさん……そんなに頭が……」

「言うなアキラ。お前の数年後の姿かもしれんぞ……」

「ホラー過ぎるわよ」

考えないようになっている現実問題として、今週の水曜日から金曜日までに1学期の期末テストが行われるのだ。

進学しないからといってここでヤバめな点数を取ると夏休みに補習とかも普通にあり得る案件だし、サアヤにもバカな彼氏のレッテルを貼らせる——すでに手遅れな気もするが——のは忍びないため、メンバー集めに全力というのにも限界がある。

「ということは、バカなテルさんがテストに集中できるように、彼の引き入れは迅速に終えなければならぬということですか」

「リクトさん……もつと言い方があると思いますけど……」

「いいのよシズク。テルも自覚はあるんだし、私達だつてテストの片手間にやるよりも集中できるんだから」

「なんか非常に不快だが、シズくちの優しきでチャラにしてやる。つてことでアイツを火曜日までに引き入れる方針で行く」

サアヤでも直接的な言葉は避けてくれたのに、先輩への配慮もなく容赦なしにテルヨシをバカ扱いして話を要約したリクトの態度はあれだが、やるべきことは明確に決まってくれた。

そうと決まれば明日からの具体的な動きも各々で決めていく段階に入り、リリースの主な活動戦域と時間から分担して探ろうとなるが、その話にはバイトのあるテルヨシは蚊帳の外で少し寂しさがあつた。

「まあこんなところでいいわね。あと何かある？」

それらの話が終わって初のレギオン会議もお開きにしようとする

サアヤの質問に、誰も何もなかったかなと思っていたら、スツと静かに拳手したリクトが言うべきかどうかは迷っていたっぽい雰囲気で言葉を紡ぐ。

「こうして顔を合わせて会議をしてくれたことに感謝はしているが、実際に会ってみてやはりまだどこかで君を信じられない自分がいるのだが、それを確認してもいいだろうか、シズク君」

「えっと、やっぱりすぐには受け入れられませんよね……」

「いや、リアルと向こうでその在り方を結びつけるようなことがほぼ無意味なことは重々承知しているのだが、なにぶん、向こうであれなこともあるから、リアルでシズク君と会って衝撃を受けたということ……」

実際に今日が初めての顔合わせとなつているシズクとリクトだが、やはり現実世界のシズクと加速世界の《ボツシュ・ルーレット》はキャラ作りとかいう次元を超越した何かを思わせるのか、話をした上でもまだシズクとルーレットが同一人物だと確信できないリクトに失礼ながらテルヨシ達も同意。

それはシズクにも自覚はあったか、申し訳なさそうにペコペコしていたが、ではどうするかという話になれば答えはシンプルで、懐からXSBケーブルが取り出される。

「さすがにこういった大衆のいる場での直結はシズク君も抵抗があるだろうから、女性はテルさんを中継して全員で直結しましょう」

「じゃあシズクは私とね。テル、変な思考発声とかしないですよ」

『例えばどのようなことでしょうか？ 愛してるサアヤ、とか？』

それを見てそうなるよなああと各々で持つてるケーブルを取り出して直列での直結を素早く行ってみせ、サアヤに手渡されたケーブルを繋げてすぐに思考発声でふざけたら速攻でデコピンを炸裂させられてしまったのだった。

それでおふざけもありつつ無事に直結を終えてからリクトが素早く加速して直結した人だけが表示されたマッチングリストからシズクを選択し対戦を申し込むと、観戦者となったテルヨシ、サアヤ、アキラは構成されたフィールドへと降り立つこととなる。

直結対戦なのでギャラリィはテルヨシ達3人だけで寂しいものだが、そんな人数で対戦の熱が冷めるような2人でもないし、今回はドンパチやるための対戦でもないから穏便に済むだろうと、そう思っていた。

構成されたのは容赦ない日差しとどこへ行くこうとも変わらない砂の足場で埋め尽くす《砂漠》ステージ。

ここだとよく《ドライブ》を使って疾走するリクトが砂を詰まらせて回転不能になることがしばしば見られる光景だなあ、とギャラリィゆえの呑気さで過去を参照。

対してシズクの方は足場こそ悪いながら遮蔽物の少なさから割と大胆な戦い方をするのを見たことがあったかと、砂漠ステージでの対戦回数が皆無だったことを思い出す。

そこから見ればシズクの方がフィールドアドバンテージはあるか、と考えたところで対戦目的ではないリクトが近くに降り立ったシズクを見て戦う意思も見せずに近寄ろうとした。

「なるほどな、確かにあのルーレットのよう……」

「人を見た目で判断してんじゃねーよボケェ!!」

シズクがすでに仲間だという認識がリクトを完全に油断させた形にはなったが、現実世界で本人かを疑われたのを意外と気にしていたのか、こつちでのシズクはなかなかの激しきで出てきたブーメラン型の《セレネー》を至近距離から思いっきり投げつけて腹を強襲。

初期段階とはいえサバイバルナイフを2つ『くの字』にくつつけたくらいのサイズはあるセレネーはその威力でリクトの体を同じようにくの字に折り曲げてからバックステップしながら距離を取るシズクを追うように自転して戻っていく。

「お、お前なあ……ッ」

「なんだ？ もう1発欲しいのかコラ！ M男かあ!!」

「断じてそんなことはないわオラあ!!」

その不意打ちに膝をついたリクトが意味がわからないといった雰囲気で自分の距離にまで後退したシズクを睨むが、最初から喧嘩腰なシズクは勢いで挑発して、元からこつちでは我慢強くもないリクトは

それで爆発。

リクトさえ現実世界のように冷静になれば穏便に事は済んだかもしれないが、こっちでは互いにそうもいかずに激突が開始してしまった。

「あの2人つて2つの世界で2度美味しいみたいなどころあるよね」

「現実世界での話し合いはまともなのに、こっちだと肉体言語になるのやめてほしいんだけど」

「と、止めなくていいんですか？」

「面白いから良いんじゃない？　つていうかあれだよ。シズつちがルールかなんて本来……」

マッチングリクトを見た段階——直結対戦だからテルヨシ達以外の名前はない——で確認できてたはずなんだよなあ。

と、すつごい今さらなことを口にしようとしたが、それに気づいていたサアヤがテルヨシの口を塞いで案に「言っちゃダメよ」と、リクトのこっちでの意識の切り替わるタイミングを凶らずも知ることとなった。

そうなるとリクトの思考は対戦に近いものになるらしく、マッチングリクトを開いたら何かしら対戦しなきゃポイントが勿体ないとも思うのか、勝ち負けよりもとりあえず対戦しちやった感じだと思われ、それをアキラに説明するのはリクト的にも恥ずかしいことなはずだから。

なんやかんやで本気で戦い始めてしまった2人が普通に面白かったので、とりあえず満足するまでやらせてあげようかと呑気に観戦に入ったテルヨシとサアヤに合わせて、アキラも2人抜きで止める自信はなかったか黙って観戦に徹する。

砂地ということでリクトも砂が詰まる危険性を考慮して自慢の機動力は封印して走つての接近を試みるが、すでに十分な距離を取っているシズクの射程は不利でしかなく、いくら投擲武器のセレネーとはいえ、高い自動帰還能力を有していて、手元のない間は身軽な分動きも早い。

砂に足を取られて両者ともに動きは鈍いが、遠間から一方的に攻撃

しているシズクの優勢は覆ることなく戦局は進み、気づけばリクトのHPゲージは6割にまで減少。対してシズクはまだノーダメージとその差は歴然。

「ふんっ！ 《レイズ》！」

そこからさらにリクトに一撃入れて手元にセレネーを戻したところで、珍しくシズクが通常対戦でレイズを使用。

これで次に出てくる強化外装が実質的に最後の強化外装となる可能性は高く、リクトも何が強化されて出てくるのかと構えながらに観察。

《博打女王》の異名はこうした大胆なギャンブル性から来ているが、今回はそれがリクト側に傾いたのか、出てきた強化外装はシズクの中で最大級の威力を誇る流星弾丸《アストライオス》。

出てきたのはいいが、これは遅延性のある流星弾丸を1度、空へと撃ち上げないと炸裂しないため、リクトの接近を阻止したいシズクにとっては2重の意味で厳しい。

流星弾丸は空で炸裂してから地面に落ちてくるので、接近してくる相手に対して狙い撃ちがかなり難しく、対人戦においては密集地帯への爆撃として機能する強化外装なのだ。

だからリクトがひたすらに接近すればアストライオスの流星弾丸を躲すのはかなり容易で、それがわかってるリクトもシズクも戦局が変わったことに気づき動きが変わる。

せっかくのレイズの強化を捨てる選択をシズクとしてはしたくないところなので、確実に必殺技を使って強制的な装備変更はしてくるし、その際には直射型の巨岩爆弾を撃てるのでリクトに対して出遅れることもない。

「うらああああ!!」

もちろんそんなことは同じ五芒星のリクトもわかっているのですが、気合いの雄叫びと共に両腕の回転機構をドライブで動かして、その腕を砂の地面へと接地させて猛烈な勢いで砂を巻き上げて煙幕を敷く。

瞬く間にリクトの姿が砂ぼこりで見えなくなつてシズクもアストライオスを撃つタイミングを慎重に見極めて足を止め銃口を砂ぼこ

りへと向ける。

リクトの回転機構の音は止むことなく砂を巻き上げ続けているが、必殺技ゲージはぐんぐん減っていくためいずれは仕掛けなければならない。

シズクも「面倒臭い!! 吹っ飛べ!!」と砂ぼこりにアストライオスを撃たないのは、どうしたって必殺技発声が必要な分で、集中力もあるリクトなら聞き逃しはしないと踏んでだ。

ならばとシズクも足を止めてるリクトを誘導するために空へとアストライオスを撃つて流星弾丸を降らせる選択に出て、自らは砂ぼこりの中で視界はほぼゼロなりクトが気づけるかは戦術にかかっている。

——ポフンツ!

そうやってシズクが空へとアストライオスを向けて発射した瞬間、それを狙っていたかのように砂ぼこりの中からリクトが両足の回転機構を回して膝立ちの状態のお決まりの移動方法で正面突破をしてきて、その一瞬の隙で3歩以上も間合いを詰めたリクトの進撃は見事。

しかし反応速度も並みではないシズクもこれに食らいついて、右手で持っていたアストライオスをスナップを利かせて手放して落とし、素早く左手でキャッチしリクトを狙う。

「《ジャイロ・ショット》!」

そのタイムラグを取り戻すリカバリーでシズクが有利かに見えたが、その動作を完了する前にリクトも右腕から衝撃波を飛ばすジャイロ・ショットでアストライオスの射線を塞ぐ。

その衝撃波に必殺技を当ててしまえば目の前で炸裂してしまうため、シズクも回避を余儀なくされてわずかなスライド移動でジャイロ・ショットを避けてリクトを再度狙う。

双方との距離はわずか7mほどにまで接近し、いよいよアストライオスもシズクを巻き込む範囲に入るギリギリのライン。

もう撃つしかないシズクはこれ以上の接近を許さないと必殺技を躊躇なく放ち、銃口からは口径にまったく見合わない大きさの巨岩爆

弾がリクトを襲う。

さらに上空でも先に撃っていたアストライオスの流星弾丸が弾けて後退はできない状況。

「ジャイロ・ショット！」

巨岩爆弾を炸裂させてしまえばリクトの残りのHPゲージは吹き飛ぶので、シズクを巻き込んだとしても勝つのはシズク。

それでもリクトはシズクの巨岩爆弾に対してまたジャイロ・ショットを放つ。が、その狙いは自分の真下の砂の地面へと向けられていて、しかも必殺技を放ったのは直前で跳んで着地しかけていた右足。

そして着地と同時にジャイロ・ショットが地面で炸裂して、その衝撃でリクトの体がジャンプも合わせて浮き上がり、迫る巨岩爆弾をスレスレで飛び越えていった。

「おお、すげっ」

「あれができるから《豪傑王》なのよねえ」

「僕だったら腰が引けます……」

そのリクトには思わずテルヨシ達も称賛してしまい、正式に仲間になったリクトの頼もしさを再確認。

だが攻防はまだ終わっていなく、巨岩爆弾を炸裂させずに回避したリクトだが、シズクもまた飛び越えてきたリクトを視認してから新たに装備した《ホーライ》に電撃地雷の《エウノミアー》を装填して後退しながらリクトの着地点に発射。

エウノミアーのスタンを受ければ、今度は落雷の《ディケー》をロツクオンする猶予を与えてしまうので、リクトとしては食らったら終了の危機だが、ここでも奇想天外な打開策に出たリクトは、避けてまだ爆発の範囲内にある巨岩爆弾に最後の必殺技ゲージを使ってジャイロ・ショットを当てて爆発させる。

砂地という不安定な足場の利点を生かして設置されたエウノミアーを爆発の余波で砂ごと吹き飛ばして範囲外に出し、爆発のダメージでリクトのHPゲージが1割未満にまで減ってしまったものの、予想外の爆発で後退していたシズクがバランスを崩してコケてしまう。

その最大のチャンスに見事な着地を決めたリクトが一気に距離を

詰めて起き上がろうとしたシズクにダメージで増えた必殺技ゲージを使って、

「《ジャイロ・ブレイカー》アアアア!!」

「《バースト・ショット》オオオオ!!」

リクト最強の必殺技を放ちシズクを豪快に吹き飛ばし……はしたが、その直前にデイケーの弾丸に切り替えていたシズクが必殺技発声を終えてしまい、ジャイロ・ブレイカーだけではわずかにHPゲージを残したシズクが吹き飛ぶ間に空から落ちた悪魔のような雷によってリクトが焼かれてしまうのだった。

Acceleration Second 75

《七王会議》と《メテオライト》が集まったの会議が行われた日曜日
も気づけば昨日のこと。

今週末の領土戦では旗揚げした中野第2戦域を全力で攻め込んでくる《プロミネンス》《レオニーズ》《グレート・ウォール》の3レギオンから死守する大作戦が決行となるが、テルヨシが会議の時に宣言した防衛側の人数は8。

しかし現在、メテオライトの正式なメンバーはまだ5人なため、残りのヨリ、《シンデレラ・コントラリー》、《チャイブ・リリース》を引き入れるべく今日からみんなが全力で動き出してくれている。

「ぐおおおお……」

「そんな苦痛の声をあげるならやめればいいだろう」

「そうですね。別にテルがバカなこととはもうみんなが知るところですから、今さら足掻いたところで焼け石に水ですわ」

「それでも……赤点だけは取りたくないんだあ！」

本来であればテルヨシもレギオン勧誘には積極的に取り組みたいところではあったのだが、残念なことに今週の水曜日から金曜日にかけて梅郷中学校では期末テストが開催され、いつも平均を下回るクラスのアverage点下げ常習犯は、この時期になると無駄とわかっていながら足掻く。

帰ってから勉強するとかできる人間じゃないことがとつくの昔にわかつてるので、嫌でも勉強する環境にある登校中にせめてと、優等生である黒雪姫と恵の力を借りて休み時間はほぼ勉強に費やした。

だがそれも昼休みになるとほとんど力尽き、惰性でテキストを見ていたテルヨシに対して、黒雪姫と恵はもはや呆れ果てて匙を投げた。

「これだから夏休みの宿題を最終日にまとめて片付けるタイプはダメなのだ。まあ日本の詰め込み式の授業内容も先進国としてどうかと思うところもあるが」

「テルに逃げ道を作るのはダメよ姫。そんなことを言ったら『帰国子

女の自分には日本の教育が合わないんだー』なんて言いかねないわ」
「ン、それはいかな。ということでテル。恨むなら自分のバカさ加減を恨めよ」

「食堂行くならさっさと行けばいいでしょ！ バカバカ言いおつてからに……ぐすん……」

匙を投げたのと同時に行動にも示して席を立った2人が、仲良く昼食タイムに突入しようとしたのはすぐにわかったものの、移動する前にテルヨシをあだこうだと言いたい放題なのは泣ける。

実際にちよつと涙が出てきたものの、それに同情とか罪悪感とか皆無な2人は、泣くくらいなら最初から勉強しろと、別のベクトルでの勉強——もちろん心理学だ——は頑張れたのに不思議なやつ、とかいう視線を向けてから教室を出て行ってしまった。

——心理学は好奇心が働いたから問題なかったんだい！

と、内心で自分に言い訳するのも虚しくなってきたので、興味のないベクトルの勉強の効率の悪さを毎度のことながら実感しつつ、残りの時間も勉強に費やしていったのだった。

学生が学生らしく勉学に励んだ、テルヨシにとっては非常に珍しい時間も終わり、バイトへと向かうバスに乗り込んで席に着きグローク。接続。

普段はしないが今日は必要あつてのそれでまずはメールのチェック。

昨日のメテオライトの会議ではなんか知らないがシズクとリクトが対戦をおつ始めてよくわからない終わり方になり、対戦後にはシズクがひたすらにリクトに謝る光景が見られた。

それで目的まで忘れては仕方ないが、そこまでおバカな集まりではなかったの、サアヤとリクトから来ていたメールには『リリースの活動戦域を分担して探す』とあり、リリースは主に渋谷戦域を活動拠点にしているので、バイト先には来れないかもなあとわかつてはいたが残念に思う。

その渋谷からは完全に遠ざかっているテルヨシは成果が出るのを祈るしかできないが、もしも自分がやれることがあるなら全力でやる

うと心に決めてグローバル接続を切りバイトに集中することにした。

期末テストがあるため明日から金曜日まではバイト禁止令が発令されてしまっていたので、リリース勧誘作戦に比重を置くと決めていた火曜日までの期間から考えれば、テルヨシも割と自由の利く時間帯が増える。

今日は何らかの形でリリースとの接触の機会を作ればオツケーくらいの気持ちでいたテルヨシは、バイトが終わったら帰りながらメールのチェックをすることを頭に刷り込んでおく。

現状、リリースの加入が決定すれば、自分以外の《五芒星》を引き入れられたら加入してもいいと言ってくれてるシンデレラと、そもそも無理難題を叩きつけてきたユリも芋づる式に加入してくれるので、目標達成はすぐそこまで来ているのだ。

「進展は順調なのかな、テル君」

「それはもうビックリするくらい」

その事をまだ具体的には知らないだろうユリがテスト前の最後の息抜きに来店してイトインコーナーでくつろいでいたので、挨拶がてらに向こうから尋ねてきたことに笑顔で答えておく。

ユリもユリでプロミネンスから脱退後に自分磨きと称して色々やってることはパド経由でそれとなく聞いてはいたが、その無所属状態もそろそろ終わらせてあげられるといった意味でニコニコしていたら、察したユリも少し嬉しそうに笑顔を見せる。

「それなら私も急がないとかな。今ちよつと『探し物』をしてるんだけど、なかなか見つからなくてねえ」

「探し物？ 何かのアイテムとか？」

「あー、物っていうよりは……うん。とにかくそれはまず私を引き入れてくれるから報告するね。今はテル君達がやるべきことに集中して。あとテストもあるんでしょ？」

「ぐぬ……バイトしてる時は記憶の彼方に放っておいてるのに……」

「ちゃんとしなきゃマリアちゃんに呆れられちゃうぞ？」

ユリも何か探し物をしてることを漏らし、話したからにはテルヨシ達にも関係ないわけではないだろうが、今はまだといった話し方のユ

リがそれ以上を語らないなら言及は無意味。

その話を詳しく聞かされたためにも1日でも早くリリースを引き入れなきやと意気込むテルヨシに対して、現実を叩きつけるユリの発言と笑顔が普段なら「素敵だ」と思うところ、今日はなんだか凄く嫌だった。ユリにも領土戦の話をしておくべきだったかと思わなくもないが、領土マップを見れば旗揚げしたことはわかるので、色々と察してはくれてそうなのに甘えてユリが帰るのを見送ってしまった。

そのままバイトも滞りなく終了し、帰りのバスの中でメールのチェックをしたら、サアヤが代表したように今日の成果を報告してくれていて、リリース本人とは都合がつかなかったが、同じレギオンのメンバーに伝言は頼めたとのこと。

その伝言では明日の午後5時ジャストに中野第2戦域で乱入することにしたようで、テルヨシも明日はギャラリーとしてその対戦に入れば良いとあるので、了解のメールを返して終わり。

サアヤ達もテストがあるのは変わらないので、明日リリースが現れることを願いながら、その時には喉元に食らいつくくらいの粘りで引き入れてやろうと気合いを入れるのだった。

「それじゃ行くわよ」

「来てればいいけど」

「その時は向こうから伝言があるでしょう」

「む、向こうでは皆さんの円滑なお話に期待しています」

「袴田さんに同じくです」

翌日の夕方。

指定した時間にはわざわざメテオライトの全員が集まってサアヤ行きつけの喫茶店《せせらぎ》が隔日開店の日だったので腰を落ち着けて、リリースと対面するその時を待っていた。

加速世界では好戦的になるシズクやいつも弱気なアキラがだいたい他力本願な発言で苦笑してしまったものの、ここが正念場なことを理解してるサアヤとリクトも余計なことをされるよりはと腹を括り、テルヨシも昨日からの決意を示すようにシズク達に親指を立てて任せろと見せてやる。

スターターはサアヤなので、時間を見計らってテルヨシ達も午後5時10秒前にグローバル接続。

今は対戦拒否の権利もある中野第2戦域だが、可能な限りその権利は主張しないと決めていたので全員それを行使せずにいる中で、いよいよサアヤが加速しマッチングリストからリリースを探し対戦を申し込んだ。

テルヨシ達が無事に加速しギャラリーとしてフィールドに入ったということは、リリースがいたことの証明なので、構築された《霧雨》ステージの霧雨を受けながら、ギャラリーの退室を促しているサアヤを指すガイドカーソルとは別の方向を指すガイドカーソルの方に目を向けて、メニューから自動追従機能を使ってリリースの元にレポート。

「テイル。お前達がまた接触してきたからには、以前よりも現実味のある話をしてくれるんだろうな」

「そのつもりだよ。それを判断するのはリリースにはなるけど、たぶんこれ以上ないって可能性は持ってきた」

対戦者のサアヤは少し到着に時間がかかるが、そのタイムラグを無駄にしないために先行して対面したテルヨシは、腕を組んで仁王立ちみたいな不動の構えのリリースに接近できるギリギリまで近寄って自信ありといった言葉で質問に答える。

それを聞いて接近距離の設定を解いてくれたリリースは、テルヨシに続いて姿を現したシズク、リクト、アキラの姿を見て少々驚いたような雰囲気を出しながらも、霧雨が鬱陶しいからか建物の下に移動してそこに腰を下ろす。

「まさかスピントルーレットがそちらについてののか？」

「その価値があると判断したまでだ」

「お前にとやかく言われる筋合いはねえよ」

「言ったら。可能性を持ってきたって。ガツちゃんの到着はあと数分かかるけど、その前に話すことは話しておくよ」

声色などからは変化が薄いものの、やはりシズクが加入していたことはリリースにとっては衝撃だったようで、こっちでは相変わらず喧

嘩腰ながら、ギャラリーだからかいくらか抑え気味なシズクが本格的になる前に割って入ってあげる。

リリースもシズクとはまともに会話できるとは思ってたが、シズクとリクトには詳しい経緯については尋ねることなくテルヨシの話に耳を傾けてくれ、サアヤが到着した時に返事がもらえる状態にすべく話を始めた。

「話は終わった?」

話をしてみれば数分というのは恐ろしく短く、ギャラリーを退室させて合流したサアヤが来たタイミングでようやく今週末の領土戦の話を始めたところで、まだ終わってないのといった雰囲気が見え、一緒にぶつけられる。

説明下手なつもりはないが、順を追って話したらサアヤでも無理ですからね、と言えるわけもないので話を続けて、領土戦の意味についてを話し終えたところで一旦、口を閉じてリリースの反応を待つ。

前回は論外と切って捨てられた話だったが、今回はリリースが求めるものを可能な限り揃えてきたつもりだったので、これでまた論外とやられてしまえばほとんど手はなくなる。

しかしリリースは話を聞いてから前回とは違った沈黙を続けて、何かの穴探しはしているようだが、それよりも示された可能性が現状で考えうる最高峰なことに意識がいつている様子。

「……7大レギオンとの共闘、か。確かにそれが可能ならば、現状の加速世界では最高戦力に近い。《帝城》攻略に関しても、発案者がお前達である以上、領土防衛戦はレギオンとしての力を示す場には都合が良いだらうな」

「オレ達を示せる可能性は現状ではこれが精一杯だ。まだ帝城攻略のスタート地点に立ってもいけないのは十分にわかってる。それでもそのスタート地点に立つにはお前の力が必要なんだ」

「私達はアンタに無理強いはできない立場にある。けどアンタだって帝城攻略の先にある何かに興味はあるでしょ。過程でも別にいいけど、バーストリンカーとして困難なミッションに挑む気持ちはアンタの中にもあるって信じてるわ。そうでなきゃ前回、私達にアドバイス

なんてしなかったはずだもの」

割と長めの沈黙から発せられたリリースの言葉は示された可能性は論外とする段階にないことを認めるようなもの。

そこに叩きかけるようにテルヨシとサアヤがおふぎけなしで真面目な説得に出ると、リリースも自分の予想以上の話が飛び込んできて整理ができずにいるような気配。

「……仮に俺がお前達のレギオンに入り、今週末の領土防衛戦に勝利した場合。お前達が帝城攻略作戦の立案者として認められただけで、まだ7大レギオンが共闘してくれるかはわからないのだろうか？」

「そこを言われちゃ困るんだが……」

「いや、難癖をつけるつもりで確認したわけじゃない」

それでもと捻り出してきたリリースがテルヨシ達が一番取っつかれたくなかったことに触れられてぐうの音もでないことになるかと思つて、サアヤ達もそこに触れられたらほぼ終わりだと覚悟していたから緊張感が一気に増した。

しかしリリースはその懸念材料に対してネガティブなことを言いたかったわけではないとしてから、整理が済んだのかまとまった意見を口にした。

「ただ帝城を攻略するんだと言っていただけだった前回と比べれば見違えるほどの進展があったことは認めよう。俺も帝城攻略の可能性さえあるなら、そのための尽力を惜しむつもりはない」

「じゃあレギオンに……」

「だが大前提として、7大レギオンの共闘が叶わないとなつた場合は、帝城攻略の可能性は潰えると言つても過言ではないことは認めてもらおうか。その上で俺はお前達に一時的に協力する形としたい」

「要するに領土防衛戦は協力するけど、その次に続かないなら今のレギオンに戻るってことね」

「そういうことになる。だから俺としては今週末までの期間、お前達のレギオンにレンタル移籍する形としたい。そういう話でなら協力しよう」

「面倒くせえや……むぐっ！」

「オツケーオツケー！ 正式に加入するかは7大レギオンの返答次第ってことだな。了解」

テルヨシ達がどれくらい本気で帝城攻略に乗り出しているかは持ち込んだ可能性から理解したりリリースは、まだスタート地点に立てていない状況で自分がその鍵を握っていることもしつかりと理解。

それを阻止して自分がその可能性を潰すことはできない。いや、そういう状況にしたテルヨシ達の情にも訴える話にほとんど脅迫じみたものは感じていたのだろうが、リリース自身も帝城攻略は目指してもいいと思ってくれたような回答をくれた。

それもずいぶんと回りくどいというかな言い方でシズクがド直球をぶつけそうになるが、寸でのところでテルヨシとリクトがシズクの口を塞いで話はまとまった。

「それならあとはレンタルにしても加入申請は通さなきゃだから、今のレギオンに話を通してきて。出来るだけ早く」

「……それならすでに昨日の段階で済ませている。お前達が再度接触してきたことから、何らかの可能性は持ってきたと踏んでいたし、俺の学校もそうだが、多くの学校がこれから期末テストに入るはずだろう。手間は少ない方がいい」

『……………ツンデレか』

「ぐっ……………さっさと申請しろと言っている！」

そうと決まれば気が変わらないうちに進めようとサアヤがやることをテキパキと言うが、そのやることをすでに終えてこの対戦を受けていたと言うリリースに全員が沈黙。

そこから合わせたわけでもないのにみんながタイミングよく同じことを言えば、沈着冷静が売りのリリースが珍しく照れてさっさと加入申請をしろと声を荒らげたのだった。

リリースの加入申請も滞りなく完了し、対戦も引き分けて終わらせて現実世界へと戻ると、グローバル接続を切りつつ思っていたよりも話がすんなりと進行したことに驚き半分の喜び半分で顔を見合ったテルヨシ達は、他の客に迷惑にならない程度の静かなハイタッチで成功を祝う。

リリースとのリアルでの対面は今のところは保留という形でいいとリクトからも許可をもらって、いざそうなった時にはちゃんとリアルを晒すと約束してもくれたので、そちらの心配もいらぬことを含めての成功だ。

これではとはシンデレラにこの事実を伝えて加入してもらい、最後にユリに声をかければ完了だ、と思っていた。

「……あつ。でもこれからあのお姫様と話をしなきゃなんないじゃん」

「なに言ってるの。今さらそんなこと気にしてる時点で時代遅れになってるわよ」

だがその話を進めるに当たってこれからシンデレラにコンタクトしなきゃならない問題に気づいたテルヨシがハツとしてみんなを見るが、サアヤ達は全く動じることもなく、むしろ今さらみたいな顔でテルヨシを見てくる。

えっ、メールには何も書いてませんでしたけど……ってという言葉が口から出かけたわけだが、すでに手を打ってるなら気にすることもないかとツツコミはなしにしておく。

「アイツとの交渉は成功する前提っていうか、何がなんでも引き入れるつもりでいたから、それが決まった時にすぐにお姫様に声をかけられるようにアキラが事前に接触してくれてたのよ。5分後にまた加速するからそれまで小休憩ね」

「それを何故オレにだけ伝えないという意味不明な行動をするのかしら」

「むしろ何でそこまで考えてないのかしら」

「それはオレがバカだから……って違うやい！」

そのサアヤが言うにはさっきのリリースのようにある程度の結果を前提に事前に約束をしていたということになるのだが、テルヨシ以外が周知の事実というハブられ方がやっぱり気になってしまう。

その辺で1人バイトに明け暮れていたテルヨシへの意識調査みたいな部分が見えて、そう言われると確かに先を見据えたことを考えてなかったなあと思わなくもないが、今回のこれでやることもないだろ

うとは本気で思ってしまった。

その辺でノリツツコミして夫婦漫才を繰り広げると、シズクとアキラにはクスクスと笑われて、リクトにはやれやれといった雰囲気で無言の視線を浴びせられて散々だった。

ともあれシンデレラとも滞りなく接触できるとあって、いよいよメテオライトが想定している8人が揃うのも時間の問題となったことには純粹な喜びしかなく、それを考えたら5分なんてあっという間に過ぎてサアヤがまた加速してシンデレラに対戦を申し込みそのフィールドへと招かれていった。

ほぼ決定したシンデレラ加入の話になるので、テルヨシ達も身構えたりといった緊張感を持たずにシンデレラと接触。

シンデレラの方は少し前に進展の報告として加入の追加条件もサアヤが伝えていたから、リアルで会うことに引つかかるかどうかだけが心配だ。

その心配はありつつも顔を合わせたシンデレラはリリース以外の五芒星が揃った状況にちよつと驚いた様子を見せながらも、まさか本当にこんな日が来るとはと呆れ半分な感じのため息を吐く。

「まったくあなた方は……本当に無理と思ったことでもやってしまうのですね」

「これくらいの不可能、可能にしなきゃ帝城攻略なんて夢のまた夢だからね」

「……いいでしょう！ その覚悟と実行力！ わたくしも素直に認めてあなた方と共に困難なミッションに挑もうではありませんか！ リアル割れ？ 上等ですわ！ それだけのことをやるのですから、メールやダイブチャットのみは仮想のやり取りで済むことではないでしょう！ 今からでも会いますわよ。中2戦域のどこにいますの？」

その事実になんか開き直ったような、ヤケ糞みたいな雰囲気デレギオン加入を宣言したシンデレラは、心配していたリアルをにも寛容になつてくれて、むしろ今からでも会うから居場所を教えろと叫んだのだった。

Acceleration Second 76

「……すごい勢いだったね……」

「ヤケ糞な感じもあったけど、腹を括ったって解釈でいいんじゃない？」

7月9日火曜日。

《チャイブ・リリース》をレギオンに引き入れることに成功し、矢継ぎ早に《シンデレラ・コントラリー》をレギオンへと引き入れることに成功。

それなりの覚悟を持って接触してきたシンデレラは、物凄い勢いで《リアル割れ》も済ませてしまおうと、対戦を終わらせてから現在進行形でテルヨシ達のいる喫茶店《せせらぎ》に向かつてくれている。

それを待つ間にサアヤがユリに《五芒星》が揃ったことを知らせるメールを作成して送り、さすがに今日これからは難しいだろうから、テストが終わった金曜日の放課後にでも顔合わせをしようということになる。

そのメールを送ってわずか2分で了解の返事をしてきたユリに合わせて、シズク達もなんとか都合を合わせると話がまとまったところで5分が経過。

いくら同じ中野第2戦域内にいたと言っても移動には時間がかかるだろうと踏んでいたのだが、まさかの自転車に乗ってやって来たシンデレラと思しき女子が1度喫茶店の入り口を横切って駐輪スペースに停まり、着ていた水色のワンピースと、ビックリするくらいサラサラで綺麗な長い黒髪をなびかせて優雅に来店。

身長は厚底のサンダルを含めても160cmあるかどうかなくらいでどちらかと言うと可愛い系の子。

それなのにお胸の方は谷間がハッキリと見えるくらいの成長ぶりだ、テルヨシ推定でEカップはある。

その女子は来店してすぐに5人組の学生の集団を探しテルヨシ達を見つけるや一直線に近寄ってきてボックス席の前で止まって胸の下で腕を組み観察してきた。

遠目からは生粋の日本人のように見えたが、近くに来て見えた瞳の色が瑠璃色をしていたので、薄くはあっても海外の血は入っているなことを察しつつ、その女子の言葉を黙って待つ。

「ふーん。やっぱり向こうとリアルじゃ雰囲気が違うわね。でも誰が誰かはなんとなくわかった」

「そんな脂肪の塊を主張する腕組みしてないで自己紹介くらいしなさいよ」

「好きで大きくなったんじゃないんだけど……これだから無い人は」

「無くないわよ。お手頃サイズでまだ伸び代があるわ」

「無い人はいつまでも可能性を信じるからねえ」

「はいはい、おっぱい談義は女の子だけの時にしちゃうだい。メンズが反応に困るから。ちなみにオレはおっぱいに貴賤はない！」

「それはどうでもいいわ」

十中八九シンデレラなその女子はリアルでは少し強気な女の子のよう、初対面のはずのサアヤとも真っ向から張り合う。

話の内容が内容なだけにリクトとアキラはもちろん、シズクも割り込めるようなものではなく、こういうところにためらいなく飛び込めるテルヨシが2人をシラケさせるために好みを暴露して收拾。

そんなテルヨシのどうでもいい情報を聞いて口を揃えてツッコんだ2人も、目的を思い出したように口喧嘩をやめてシンデレラも席へと座らせると、改めてシンデレラが口を開く。

「ネームタグの交換で済むことでしようけど、親好を深める意味で口頭でも。私は駿河・プリンツ・クラリツサ。母がドイツ人とのハーフで、父が生粋のドイツ人。だから日本のクォーターだけど、両親ともに国籍はもう日本だから、私も国籍は日本になるわ。通ってる学校は西新宿にある《インターナショナル・スクール》で、今は中等部3年よ」

「へえ。ドイツ人の血の方が濃いのか。あつ、オレは皇照良。気軽にテルでいいよ。クラリツサと同じ年だからよろしく」

「あなたは……向こうでもこっちでも変わらないのね。でも安心したのは何でだろう……」

「そこは究明しない方がいいわよ。これに関しては深く考えるだけ無駄だから。私は都田沙絢。同い年だからこれからよろしく」

「あなたもあなたで変わらない気がするけど、無駄に空気を悪くはしたくないし、仲良くやりましようか」

ゴゴゴ……と、なんか謎のオーラを噴出させながら挨拶するサアヤとクラリツサの空気はすこぶる良くないが、それも時間が解決するだろうと今はどうしようとはしない。

本気でヤバイようなら仲裁に入るし、その辺のことはシズク達が視線で任せたといった押し付けをしてもきたので、渋々だが受け持つことで自己紹介は続き、アキラ、リクトと紹介が済んで最後のシズクになるとさすがのクラリツサも消去法で辿り着く《ボツシュ・ルーレット》のリアルに呆然とするしかなかったようだ。

「……………おかしいわよ。どうして向こうであんなにアホなのに、リアルではこんな可愛い女の子なのよ」

『同感』

「ええー!? そ、そんな皆さん、私なんてサアヤさんとクラリツサさんに比べたら月とすっぽんですよお」

「謙遜は良くないわよシズク。女の子の私やクラリツサが可愛いって思うんだからアンタは十分に可愛いわよ」

「そうよ。ああ……それになんだか触り心地も良いし」

「ク、クラリツサさん!?! どこ触って……ひゃあ!」

あまりにもかけ離れたリアルにはクラリツサも戸惑いを隠せずにしたものの、シズクが可愛いことには全会一致の意見で肯定し、それに猛反論するシズクを無視して両サイドのサアヤとクラリツサが頭を撫でたり、対面の男衆からは見えない部分で何かしていたようで、シズクがちよつと艶のある声を漏らす。

それには微妙な表情をするしかなかったアキラとリクトは視線を向けられないようにして、抵抗のないテルヨシはガッツリ堪能していたらサアヤに足を踏まれるお仕置きをされて悶絶。

それでテルヨシに餌を与えるのは良くないと判断してサアヤがクラリツサのスキンシップを止めつつ話を元に戻す。

「挨拶も済んだし、シズクの門限も迫ってるから手短に今後の話をするわよ。まずクラリツサ。みんなとアドレス交換して。最後の1人はみんなのテストが終わった金曜日の放課後に紹介する。そのあとにチームワークを深める何らかのミッションをするつもりでいるから、何か適当な案があればその時にお願ひ」

「ちよつと待つてサアヤ。その前に私が出した要求を飲んでもらわないと困るわね」

クラリツサが来てくれたのは嬉しい誤算だったが、シズクの門限も近いので長々と雑談に時間を費やすことも出来ない。

というよりも明日からはアキラ除きみんな揃って期末テストなので、頭を切り替えるためにも早めに切り上げて解散としたかったところ。

リリースとのラインも確保はしてるので、具体的なことは帰ってから決めてメールするといったことを話したサアヤがお開きにしようとしたら、クラリツサがそこに割って入って何やら重要そうなことを言う。

クラリツサから出された条件はもう全て呑んだはずだよなあ、と少し思考したテルヨシ達に対して、小さく舌打ちしたサアヤはその条件とやらを覚えていたようで、サアヤが流そうとした条件ならそこまで重要でもなかったかなと思考を停止しかけて、こめかみにピキツ、と血管を浮かせたクラリツサを見て思い出すのを再開。

「……まさかテルとアキラ君は『あんなこと』をさせておいて覚えてないなんてこと、ないよね?」

「はひっ! もちろんです!」

「あー、ああ! あれか!」

「流せば良かったのに……」

「聞こえてるわよサアヤ。それじゃ思い出してくれたならさっさと済ませてちょうだい」

あんなこととか意味深に言われると何やらいかがわしいことのように聞こえてくるが、そう言われればクラリツサを加えて《レギオンクエスト》をやったことを思い出し、そもそも何でそんなクエストを

やったかまで思い出せばはい完了。

確かに最初にクラリツサから出された条件の中に『加入した時にはテルヨシをレギオンマスターに、サアヤをサブマスターに変更することを決めていた。』

それもサアヤとクラリツサの対戦の結果で譲歩してもらったので、忘れていたのも失礼だが、かなり個人的な理由だったからサアヤもななああで流せると思っていられない。

しかしクラリツサは至って真面目にそれを主張してきたからには、元々していた約束でもあるため仕方なく応じるしかなく、渋々でB Bのインストメニューを操作したサアヤが、レギマス権限でその役職を変更し、自分のインストメニューのレギオン詳細から確認したクラリツサが、無事にレギマスがテルヨシに、サブマスターがサアヤになったのを見てメニューを閉じて機嫌も幾分か良くなる。

「そんなに重要だったの、これ？」

「言ったでしょサアヤ。私はあなたとあの人が嫌いな。立場上とはいえ私の上にいることはそれだけで見下されてるみたいで嫌」

「そ、そんなに嫌わなくてもいいのではないのでしょうか……これからみんなで仲良くしていこうとしていますし……」

「同感です。サアヤさんも別にクラリツサさんに対してマウントを取ろうなどとはしていないわけですし、そのようなことを気にすること自体がナンセンスかと」

——ピリッ。

その変化には正直なところクラリツサ以外はほとんどどうでもいいことと思っただけに、好き嫌いをハッキリ言うクラリツサの性格はテルヨシ寄りではある。

ただクラリツサの場合はそれが及ぼす影響ということに配慮がない自己中な部分が出てしまい、その態度にシズクとリクトが反発。

加速世界では今も変わらずライバル関係にある五芒星だけに、その反発はどんなことになるか予測が難しいし、実際に場の空気が緊張状態に突入してしまう。

「ねえ《クレア》。今の言葉って別にこっちのサアヤとあの人のことを人間的に嫌いつて言ったわけじゃないでしょ」

「えっ……よく私の名前の愛称がわかったわね。もしかしてテルは博識なの？」

「まさか。ただ呼びやすいようにって考えて出てきただけ。それよりどうなのかな？」

本当にこういう時には空気ブレイカーを発動する係になってるテルヨシがサアヤのアイコンタクトにに応じて割り込みをかけると、意外なところに食いついたクラリツサがテルヨシも意外な質問で返してきてアドリブで対応。

どうやらクラリツサというのはドイツでは愛称としてクレアで呼ばれるらしく、急にテルヨシにクレア呼びされて面食らったみたいなクラリツサが少し恥ずかしそうにする。

それで少し空気が変わったのを見逃さずに言及を続けると、テルヨシを見て照れながらに言葉足らずだった自分の言葉を改めて説明してくれる。

「……私はあっちとこっちではほとんど完全に割り切ってるの。だから向こうのことは向こうのこと。こっちのことはこっちのことって考えてくれていいわ。悪かったわね、空気を悪くして。でもこっちのサアヤもあんまり好きではないかもだけど」

「ああ問題ないわ。私も好きな方じゃないから。それはお互い様ってことで」

「も、もう！ お2人とも仲良くしてくださいー」

「シズクが間にいれば問題ないから」

「波長は合ってるんだけどなあ……」

クラリツサの言い分は理解できなくもないが、テルヨシとしては現実世界と加速世界を切って考える割り切り方は出来ないことなので、完全に納得がいくわけでもない。

ただシズクのことがあったりでそれも個性なのだと思えば受け入れることはできるかと思っていたら、現実世界でもサアヤとクラリツサが親友とかとは無縁になりそうなことに苦笑い。

たぶんシズクの弄り方とかその辺でも垣間見えるが、サアヤとクラリツサはどこか似通った部分があるので同族嫌悪とかそんな感じだろうなと感じたし、一緒にいること自体を嫌っている節も見えないから、関係を築くうちに打ち解けることも可能だろう。

ここにユリという年長者が加われればまた変化もありそうと予想しつつ、そろそろ本格的にシズクの門限が危ういなど時間を確認し切り替えたサアヤがお開きと手を叩き皆を立たせる。

クラリツサも今日のところは急を要することはないかと素直に立ち上がって、会計を済ませる最中に皆と連絡先を交換。

店を出てからリクトとシズクは門限などですぐに帰ってしまったが、自転車で来たクラリツサは余裕があるのか、自宅の近いテルヨシ、サアヤ、アキラと話をするためか自転車を押して中野駅の方へと一緒に歩き始める。

「先に聞いておきたいんだけど、3人は《爆弾魔》とリアルでも面識があるのよね？」

「サアヤ姉とテルさんはありますが、僕はまだです」

「先に聞いてくれたから言っておくけど、バーちゃんは最年長だから失礼のないようにね」

「さらにちなみに言っておくけど、アンタのなんて萎んで見えるくらいの持つてるから覚悟しておいて」

「本当に？ 私より大きい子はうちの学校に結構いるけど、萎んで見えるくらいって凄すぎない？」

——えっ、クラリツサの学校凄くね？

歩きながらにユリについてを先に尋ねてきたクラリツサに事前情報をそれぞれで教えてあげたのだが、クラリツサ級の胸を持つ生徒が割といるとかいうサラツとした情報にテルヨシは動揺。

クラリツサでさえ梅郷中学校なら恵をも凌駕し学年で1、2を争うレベルなのに、クラリツサの学校では上の下みたいな言い方は大変にけしからん。

インターナショナル・スクールは確かに留学生や HALF、クォーターが多い学校でグローバルな学校——語学の専攻もあるらしい——

「なのは知っていたが、そのスケールもワールドクラスみたいだ。

「クレアクラスの子がわんさかとか、行ってみ……いったあ!!」

「はいはい言うと思ったわ。このドスケベ」

そんな子達が日常生活の中にいる学校生活とか羨ましい限りで、それをついつい口にしようとしたら最後まで言うことなくサアヤに後頭部を叩かれてキャンセルされてしまう。

自分が控えめな方だから嫉妬も含まれているのだろうが、男としてはここに反応しないのは逆に失礼だしなあ、と頭を擦りつつサアヤに半分くらいは冗談だと弁明するも、お耳を閉じたサアヤは「テルは胸のおっきい子が好きだもんねえ」とツンツンモードに入ってしまった。

「あら、男が大きい胸に惹かれるのは自然の摂理でしょ。私はチラチラ見てくるクラスの男子よりはテルみたいなオーブンさは好感持てるわ。だからってガッツリ見ているとは言わないけど」

「好感が持てるなら触らせてあげればいいんじゃない？ ご自慢の胸なんでしょ？」

「それはさすがに私を彼女にでもしてもらわないとあげられない特典かなあ。どうテル？ 私と付き合ってみる？」

こうなると機嫌を戻すには2人きりになって何かしないと、と思考していたら、いたずらな笑みを浮かべてサアヤからマウントを取りにきたクラリツサがテルヨシにちよつとアピールすると、対抗したサアヤが出来もしないだろうことを口にして黙らせに行く。

しかしクラリツサは怯むこともなくそれを躲して、自分と付き合うなら触らせてあげてもいいという提案のような告白をわざわざ上目遣いで自然としてきて、その辺が日本人のそれとは違った部分でテルヨシもサアヤもちよつと焦る。

「はあ？ アンタこんなのが彼氏でも良いの？」

「こ、こんなの……」

「私、交際の経験はあるから男を全く知らないってこともないし、テルはちゃらんぽらんな雰囲気はあるけど、向こうではしっかり芯を通してるし、根っこの方は良い男だと思うのよねえ。まあ勘だけど、その

辺は付き合ってから嫌でもわかることでしょ。合わなきや別れればいいだけだもの」

サアヤとしてもまさかそんなことみたいなノリだったから、割と真面目なクラリッサに動揺を隠せず、そのサアヤにこんなの扱いでシヨックを受けるテルヨシはアキラに慰めてもらおう構図がなんとも言えない。

しかしこのやり取りを冗談で済ませるのはいかなものかと落ち込むのをやめてクラリッサと向き合おうと顔を見たら、そのクラリッサが告白したテルヨシではなくサアヤの方に意識の比重を持っていつてることに気づく。

「だ……ダメよそんなの……だってテルはこんなだけど私の……私の彼氏、だから……」

その理由については予測がついたが、答えを言うより前にサアヤが告白するようにテルヨシの袖を掴まんで自分が彼女なんだと主張。

恥ずかしそうにする姿は健気でありながら、意地悪をしていた自分に罰が下ったとばかりに涙も滲ませていた。

「……まあ知ってたけどねえ。喫茶店にいる時からテルのこと特別な目で見てたし、なーんか2人の距離感が近かったもんねえ」

「じゃあ今の告白はサアヤに意地悪しただけ？」

「んー、半分はそうかも。でもサアヤが頑固な感じで認めたりしなかったら、略奪するくらいの気持ちではいたわよ？ 私だってそんなホイホイ男の人と付き合ったりししないもの」

「お、大人な恋愛です……」

「クレアのは特殊だぞアキラ。参考にするな」

そんなサアヤを見て正直になったかとおっさり身を引いたクラリッサは、どうやら最初からテルヨシとサアヤが付き合ってることには気づいていたっぽい。

ただそれを公言したりせずにはいたサアヤが意地悪みたいなことを言い続けたから、ちゃんと関係性くらいハッキリさせろと強引に追詰めてやったわけだ。

ただテルヨシに対しての好感度みたいなものは割とマジらしく、サ

アヤと別れたら付き合うくらいの気持ちでいるクラリツサに危機感を覚えたか、涙目のサアヤがキラツと眼光鋭くする。

「アンタにはテルの浮気性は耐えられないでしょうけど、アプローチするのを止めたりしないわ」

「それって宣戦布告？ 私はお前なんかにはテルを取られたりしないっていう？」

「捉え方はご自由にどうぞ」

「2人とも……小学4年生の前でドロドロな恋愛話しないでくれる？」

サアヤもクラリツサもなんとというか互いに遠慮がないせいで質が悪くなってしまう、そこに恋愛まで絡めるもんだからもうドロドロ。

そういうのは昼ドラとかでやってくれと本気で思いつつ、アキラの前でバチバチ火花を散らす2人にはこれ以上の衝突は教育上良くないと判断して仲裁に入り、この日はなんとかやり過ぎることができた。

期末テスト前日にこんなことやってメンタル面は大丈夫なんだろうかと、赤点ストレスの成績を叩き出すことに自信のあるテルヨシが心配してしまうが、そこはやっぱり女の子なメンタルで乗り切ってしまうのだろうなとも思いながら、テルヨシも翌日からの期末テストに一旦は集中していったのだった。

Acceleration Second 77

「おっしやあああああ!! 行くぞオラあ!!」

7月12日金曜日。午後7時30分。

テルヨシにとつての1学期最大の難敵、期末テストを打ち倒して――倒せたかはわからないが――から、放課後に《チャイブ・リリース》を除く《メテオライト》のメンバーが中野駅近くのファミレスに集結。それで最後の加入となったユリとシズク達が無事に対面を果たしたのもすでに4時間ほど前のこと。

あのクラリツサがユリのスイカ並みの双丘を前にして戦慄した姿をサアヤがクスクスと笑う様子もありつつ、その場ではリリースが都合がつかないこともあつて、明日に控えた領土防衛戦の前の連係強化ミッションはこの時間まで延び、《無制限中立フィールド》で中野駅を集合場所にして再集結していた。

期末テストという苦行から解放されてテンション高めなテルヨシが一番乗りして待つて、メンバーが来る度に無駄にはしゃぐから、それを見たメンバーは皆一様に低いテンションで反応。

あのシズクでさえその狂ったようなテンションに引き気味で対応したからには、相当な浮き具合だったに違いないが、そんなことも気にせずに一番家が近い故に最後となったサアヤとアキラが到着して「うっぎ」の一言で我に返ったのだった。

「はあ。なんかこのバカが騒いでみたいけど、これで初めて全員が揃ったわね」

「うむ、儂が言い出したこととはいえ、本当にこうして《五芒星》が顔を揃えるのを見ると、にわかには信じられん光景じやの」

「御託はいいですから、これから何をするのかを話しなさいな。切断セーフティも設定して時間は有限ですよ?」

みんなはテストが終わった開放感とかないですかね。と思わざるを得ない周りとの温度差には信じられない気持ちだが、その辺をあっさりと流して……というより触れさえもせずに会話を繰り返り広げ始めたサアヤ達にしよんぼりしながら合わせてみると、早速クラリツ

サが仕切る《混沌の舞姫》2人に挨拶代わりのジャブをお見舞い。

これがまあ正論だからかサアヤとユリも明らかな反発は見せず、シズクまで何か言い出しそうなことも察して話を本題へと切り替え、それを聞くためにみんなが1度その腰を落ち着ける。

「切断セーフティはみんな50時間後に設定してきてくれたと思うけど、これからちよつと移動してある場所に向かうわ」

「内部時間で約2日も取ったからには、移動にも時間を使うということか」

「さすがリリースじゃな。今から行くところは少々遠いでの。移動しながらエネミー狩りもする予定でおる」

「それで、どこに行くってんだよ」

「っていうか、目的が見えてこないんだよ」

事前に言われていた切断セーフティの時間は内部時間で50時間。現実時間では3分と割と長め。

テルヨシもサアヤとユリからこれから何をするのかは聞かされていない。バカはテストに集中しないとダメだとかド正論を叩きつけられたから仕方ないが、どこに行くにしてもシズクが言うように目的が明確でないと意思統一ができない。

それは重々承知なサアヤとユリも、とりあえずの確認作業は終わったからと話を順を追ってしてくれる。

「私はボンバーから話を聞いただけだから、詳しくはボンバーからしてもらおうけど、正直このミッションを急造のこのレギオンで達成できるかは怪しいわ」

「そ、そんな難関ミッションなんですか……」

「そう怖がらせるでない。まずはそうじゃな。儂がレギオン加入の前にしておったことを話そう。儂はこの2週間ほどで『ある可能性』を探っておった」

「可能性？」

「うむ。皆の中で《東京駅地下迷宮》のボスエネミー《アマテラス》に挑んだことのある者はおるか。ちなみに儂とガストはかつての旧プロミ時代に撃破に成功しておる」

全容はまだ見えないながら、そうして問いかけられたことには皆が首を横に振ってみせ対峙した経験すらないことを報告。

それもそのはずで、東京駅地下迷宮といえれば東京にある4大ダンジョンの1つで、かつては神器の1つが安置されていた場所で、そこを守護しているのがアマテラスという《神獣級》エネミーになるわけだ。

あの大天使《メタトロン》と並ぶエネミーとなれば、本来なら数人単位で挑むようなエネミーではないし、7大レギオンクラスの大規模レギオンでなければ攻略もおぼつかないレベル。

「まあ今からそのアマテラスを倒しに行こうということではもちろんないが、ブレイン・バーストがアマテラスを名乗るエネミーを創造していたことから、儂はアマテラスに関連するエネミーの存在もまたあるのではないかと思うたわけじゃ」

「アマテラスに関係のあるエネミー？」

「アマテラスとは日本神話に出てくる神の名前。イザナミとイザナギの子であり、兄弟にはツクヨミとスサノオがいる」

「詳しいなリリース。歴史マニアか何かか？」

「この程度なら少し調べれば誰でも覚えられる。興味があるかないかの問題だ」

そのアマテラスを話に出したからには、アマテラスに関係した何かなのかと勘繰るとそれは当たりのようで、先回りするようにリリースが知識を披露してリクトと煽るようなやり取りをする。

こういう説明時には丁寧な説明を促すためにおバカなキャラは欠かせないので、テルヨシがその役回りに徹して疑問符を時おり挟むが、どうでもいいところで険悪な空気を出されると困ったものだ。

「リリースが言うたように、一口にアマテラスと関連があると言うてもその繋がりには意外と多い。それにアマテラスと同格かそれ以上のエネミーではガストが危惧したように、急造のこのレギオンでは太刀打ちできん」

「リリースが言いましたのは両親と兄弟でしたわね。そこから考えますとそれらのエネミーが仮に存在していたとしても、同格以上なのは

間違いありませんわ」

「ああまどろっこしい！ 《爆弾魔》はどこで何を倒そうってんだよ！」

「はいはい、ルー子は落ち着いて。それでこの仮説が正しいかどうか、それをボンバーはずつと探ってくれてたつてこと。それで見つけたのよ。アマテラスに関連する、アマテラスよりも少し下位の3体の神獣級エネミーをね」

——下位でも神獣級なんだな……

丁寧な説明によつて話は長くなつたが、ようやくテルヨシ達が何のためにそこへ向かうのかがうつつすらと見えてきて、エネミーを倒すならとシズク、リクト、クラリツサの3人は俄然やる気になる。

しかしリリースは3体という部分に引っかけかかりを感じたのか、別の考察に入ったみたいなの雰囲気。

「3体か………ムナカタサンジョシ宗像3女神だな」

「さすがにそこまで知っておれば博識の域じゃぞ、リリース。その通りじゃ」

「む、むなかたさん家の3人の女神？」

「そのおバカ設定やめなさいよ。さすがにみんな引くわよ」

「ハハッ。よいではないかガスト。テイルがこの調子なら僕も話しやすいぞ。宗像3女神とは、日本神話でアマテラスとスサノオが誓約を交わした時に生んだ3人の女神のことじゃ。スサノオもまた5人の男神を生んでおるが、そちらは時間的に探すことは叶わなかった」

「そちらは今は無視するとしても、その3女神を祀る場所。神社は全て福岡県ではないのか？ それではお前達が指定した時間を使い切っても辿り着くことすらできないと思うのだがな」

「福岡って、あの福岡ですよね？」

いよいよ移動するのかとシズク達が腰を上げる中、リリースがその3体のエネミーに目星をつけて語り、推測通りとユリが肯定。

しかしリリースが言うにはその神を祀っている神社というのは現実世界の福岡県にあるらしく、目的地に対しての設定が甘いと言う。

「それはその通りね。でも考えてもみなさいよ。そもそもアマテラス

だって有名どころは三重県の伊勢神宮でしょ。それをわざわざ東京のダンジョンのボスにするくらいなんだから、その3女神だって来るかもわからないバーストリンカーのために神話の通りのスポットにはしないわ」

「そもそもそれを言うてしまえば、メタトロンやニクスといったダンジョンのボスエネミーさえも海外の神話の生物じゃて。それらを神話の通りにしても日本ではどこも当てはまらない」

「でもそれじゃ3女神の居場所だって当たりさえつけられないけど、東京の近辺にも彼女達を祀る神社はあるわけ。そこをボンバーが見てきて、それらしいのを見つけられたのよ」

「ほう。その話から察するに場所は3カ所だな。今回はどこに行こうとしている」

「儂が見つけたのは鎌倉、八千代、日光の神社のある場所じゃ。距離的には日光が道のりでも難儀での。今回はそちらに向かおうと思っておる」

「お待ちなさい。日光って栃木県の日光市ですか？ 直線距離でもここから100kmはありますわよ？」

ブレイン・バーストに存在するエネミーは何かしらの神話や伝説をモチーフにしたゲームらしい部分があるのはもちろんだが、それら全てが何かしらの由縁がある場所に居着いたりではなく、伝説的に強い信仰などがあるから割り振られているというのがサアヤ達の主張だ。

だから場所にこだわる必要はあまりないが、アマテラスが東京に存在するなら3女神の存在もまた近い場所にあるだろうという、ちよつとした矛盾は抱えているものの、メテオライトのために適当なミッションを探してくれていたのは事実なので、その努力に対しては敬意を払いたい。

その中で出てきた地名は東京を中心に神奈川、千葉、栃木と面白いくらい3角形を作る布陣だったが、これが偶然とはサアヤとユリも思えなかったか、クラリツサの戦慄するような移動距離の悲鳴には反応が薄い。

「言ったでしょ。目的地までの移動でもエネミー狩りはしていくつ

て。ルー子も《レイズ》を強化していけるし、ただ向かうよりも建設的よ。それにボンバーの話だと、そのエネミー達ってなーんか他のエネミーとは違うみたい」

「どう違うっていうんだ？」

「今はまだ推測の域を出んからなんとも言えんが、対峙してみても一様に感じたのは共通する違和感じゃったから……皆も実際に会うてみて判断してくれんか。言葉では説明しにくいでの」

「だったらさっさと行くぞコラ。話だけで時間かけすぎなんだよ」

「相変わらずお口の悪い人ですわね」

リアルではこんなやり取りもしないのに不思議なもんだなあと、ようやく終わった話に強化外装を出しながら移動の準備をするシズクと、行った先で待つエネミーとやらの疑問を持ちながらのテルヨシ達がとりあえずは足並みを揃えて日光市を目指していく。

呑気に歩きながらでは時間が勿体ないので、走って北上しながら、目に入ったエネミーをシズクを攻撃の軸に倒してバーストポイントも補充していくのは予定通りだった。

しかしやはりブチ当たる壁はあって……

「こらルー子！ 私とボンバーで回避範囲を狭めてるんだから、余計な攻撃で範囲に逃がすな！」

「うるさいなオバさん！ 倒せりやいいだろ！」

「爆弾魔も猪突猛進も範囲攻撃をお控えなさいな。近接型のわたくし達が前へ出られませんわ」

「そもそも移動しながらの攻撃は近接型には難しい。殿をやるにしてもテイルやスピンのほどのスピードがなければ隊列が乱れる……」

「っていうかりリリースは攻撃向きじゃねーからだろ。シンデレラは文句言う前にルーレットより前で戦うとかあんだろ」

「あんな狂犬を背にして戦うことの方が危険ですわ。何かの拍子に撃たれかねませんし」

「け、喧嘩は良くないですよ皆さん……」

……仲悪いな、オイ。

今回の主目的はあくまでレギオンの連係強化なのであり、これから

向かうところはその目的達成に対する手段でしかない。

だからこそその移動中でも無駄にはできないから、サアヤとユリも大レギオンで培った経験でチームプレイ初心者のシズクへの指導に熱が入るが、そのせいでクラリツサ達への視野が狭まって不満が噴出気味。

シズク、サアヤとユリ、アキラとクラリツサとリリース、テルヨシとリクトという縦列編隊が出来上がったのは完全に自然な流れだったのだが、前線が中・遠距離型で真ん中の3人が近接型でやるのではないということが非常にマズい。

本来ならこの真ん中の3人を先頭にサアヤ達がフォローするのが編隊としてはいいのだが、まだまだ連係練度の低いシズクに背中を向ける行為自体に積極的ではないクラリツサ達が何かと理由をつけて前に出ないのだ。

それは一重にまだこのレギオンに確固たる信頼関係が存在しないことの証明であるのだが、少し質が悪いのは《野獣級》エネミーくらいならこのちぐはぐな連係でもギリギリどうにかなってしまう『個の力』だ。

伊達で集められたメンバーじゃないだけに、単体でほぼ完結できる程度には洗練されたテルヨシ達だからこそ、自己中でいいはずの個が連係の邪魔になってしまっている。

「さてさて、このレギオンがレギオンになるためにすべきことは……」シズクが手間のかかる子なのでサアヤとユリには引き続き頑張ってもらおうにしても、最後列から全員を観察していたテルヨシは、期末テストの前にこのレギオンのマスターに昇格している。

このレギオンに至ってはレギオンマスターの地位を主張すること自体ナンセンスに思えるが、それがイコール、レギオンマスターとしての役割を放棄していいことにはならない。

リーダーはリーダーらしくレギオンをまとめる役割をこなす。少なくともレギオンの意思を発信するのはテルヨシがすべき最低限の役割なのだから、レギオンメンバーの声に耳を傾けることは決して間違っていない。

「なあスピンの。前のレギオンでお前ってどんな立ち回りしてた？」
「なんだ藪から棒に。別に今とそんな変わらねーよ。機動力を活かして先陣切ったり殿やったりだ。俺の動きにみんなが合わせてくれたってのは、前の様子を見るとそうだったんだろうなとは思うがな」
「あれはじゃじゃ馬のお守りにしか見えないけどな……でもスピンはスピンなりにこのレギオンでの役割を考えてくれてるんだな」
「……どいつもこいつも個性が尖ってるんだ。だったら誰が何をするか考えるより、まず俺が出来ることは何かって考える方が建設的だろ」

「ごもつともで」

人が増えればそれだけ個性が増えて戦術の幅も広くなる。それと同時に役割に縛られてもいく。

それは互いに出来ること出来ないこと。得意なこと不得意なことがより明確になるからこそ、個々で特化した形が顕著になることを意味するが、足りないものを補い合うにはお互いの理解は必要不可欠。理解とはすなわち相手を受け入れることと同義。相手のことを自分のことのように考えられるようになれば自然、相手のやろうとしていることにも理解が及び、自分がやるべきことを決定できる。

メテオライトとしてはその第1歩を踏み出すための今回のミッションだが、先は長そうだ。

それでも隣のリクトから話を聞けば、自分なりにどういう立ち回りをすべきかをすでに考えてはくれているようで、それが全員そうなら光明は見えてくる。

長らくライバルとしてしのぎを削ってきた関係だから、一朝一夕でとれないのは当たり前だし、まだ知らないことだっただけなくさんあるだろう。

だがライバルだったからこそ、ある意味で相手への理解があるのもまた事実で、その辺が上手く転じてくれさえすれば一気に互いの距離も縮む……はずだ。

見れば前線のサアヤ達と言い争いながらも、中列のアキラ、クラリツサ、リリースの3人も何やら雑談かわからないが会話をしている

のが雰囲気でわかる。

「スピン、もう少し話そうか。殿も前が頼もしいしサボってもバレなそうだから、シンデレラ達と合流しちゃおうぜ」

「単に暇なだけだろお前……まあ殿としての役割があんま機能してないのは同感だし、俺も目的地に着くまでにアイツらとは話せるだけ話すべきとは思う」

「よし決まりい。シンデレラ姫ー。お話に混ーぜてっ」

「うるさいのが来ましたわよ……」

「無駄話には付き合わんからな」

「も、もっとオブラートに包んでもいいのではないですか……」

前線の3人は相変わらず騒ぎながらエネミーを蹴散らしてくれているので、そちらに意識を2割ほど残して中列の3人の輪の中にリクトと飛び込み、クラリツサとリリースがどういった役割をこなしてきたかを尋ねる。

「わたくしは最前線ではなく、相手の隙を突いてヒット&アウェイとアビリティや必殺技での攪乱が主でしたわ。まあ元々が黄色系ですから、テイル達のように最前線で足を止め続けるには色々工夫が必要になってきますから、仕方ないことですけど」

「俺はお前達を知る通り、これを纏っているうちは動きも鈍いし然したる攻撃力も持たないからな。ネット用語で言えば《タンク》が主体になっていた。ダメージを蓄積してからはダメージソースになることも可能だが、こういった行軍で消耗するのは正直、俺としては望むところではない」

「そういうことはちゃんと知らないと誤解を生むよ？ ガツちゃんとか『アンタも戦いなさいよ！』って普通に言うタイプだし」

「消耗したらしたで『そんなの1回死ねばいいだけでしょ』とかも言いますね」

『ああ……言いそう』

改めて各々がこなしてきた役割を聞いてみると、不思議と被らないのが面白いところ。

テルヨシとリクトは被ってはいるが、チーム戦では前線の枚数は元

から多くても問題ない。というか枚数がないと突破されて中・後列が打撃を受けてチームとしての機能を失う事態になる。

そこから考えて今のメテオライトを3つの隊列に分けると、テルヨシ、リクト、リリースが前列。サアヤとアキラとクラリツサが前列と中列を担えるバランス型。

ユリが中列で、中・後列を担えるシズクが後ろからバンバン攻撃するといったフォーメーションが理想に思える。

「んー、まあ遠隔があと1人欲しいところだけど、チームとして考えればそこまで悪くないんだよね、このレギオン」

「遠隔が欲しいのでしたら、ご自分の《子》を引き入れればよろしいでしょうに。あの子もまだ未所属なのでしょう？」

「あー、アンね。アンはなあ……残念ながらもう他のレギオンに入っちゃったのよねえ」

「えっ？ 初耳ですけど」

「だって入ったの現実時間で2時間くらい前だもん。このミッションの終わりにサラツと報告しようかなって思ってたことだしね」

チームとして機能さえすれば、7大レギオンにも負けず劣らずのパフォーマンスは十分に可能と思わせる材料はあることがわかって少し安堵するが、やはりチームを万全で機能させることは難しいので、最低でも2隊に分けられるバランスが好ましいと漏らしてしまう。

そこでその穴を埋められるマリアの存在がクラリツサから挙がったものの、以前からマリアはレギオン加入に関しては決意を固めていて、現実時間で2時間ほど前の飼育委員の仕事のあとに加入を済ませてしまっていた。

もちろん、飼育委員の仕事のあとということとは、マリアが入ったレギオンは黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》に他ならなかった。

Acceleration Second 78

「麓まで着いたけど、この不公平感は何なのかしら……」

「奇遇じゃな。儂もこの状況はどうかと思うておった……」

期末テストを終えての金曜日の夜。

《メテオライト》がレギオンとしてまとまるための連係強化の名目で栃木県日光市の女峰山ニヨホウサンの麓にまでエネミー狩りをしながら10時間程度かけて到着。

最終目的地はその女峰山の山頂にあるという《宗像3女神》を祀る神社。現実世界では滝尾神社の奥社、女峰神社があるらしい。

女峰山の標高は約2500mとなかなか山なので、登頂も横移動と同じくらいしんどいが、幸いデュエルアバターには身体的な疲労はないので、気力さえ振り絞れば問題ない。

ただその精神力をゴリゴリ削りながら移動してきたサアヤとユリは、エネミー狩りにもほとんど参加せずに後ろでお喋りしまくっていた——決してふざけていたわけではないが——テルヨシ達に気づきながら、目を離すと1人で突っ走るシズクのお守りに手一杯で、その疲労度の違いに不満が漏れ出ていた。

「よし、ここからはエネミー狩りもしないで登ることに専念できるし、ガツちゃんもバーちゃんもオレがまとめて運んじやうぞ!」

「じゃじゃ馬さんはどのくらい《レイズ》を強化できましたの?」

「思ったほど上げられなかったが、とりあえず4段階だ。もう1回強化できるが、ここから先は大型に変化するから、まだ移動するなら《アネモイ》のままの方がいい」

「意外と考えているのだな。てつきり手当たり次第に強化しているものと思っていたが」

「わざわざ持ち回しの良い強化外装で止めてたんだな」

「皆さん、だから言い方が……」

その不満が爆発して被害を被る前にテルヨシが有無を言わせずに捲し立てながら《テイル・ウィップ》で2人をまとめて絡め取って持ち上げてしまう。

シズクの方もエネミー狩りの成果は出ていて、レイズの強化も以前に見せてくれたレベルの3歩くらい前の段階にはできて、今は登山を控えてハンドガン型のアネモイで強化を止めていた。

それで小バカにするリクトとリリースにはヒヤツとするが、ここで撃つてこないだけシズクもマシになった。以前なら反射的に撃つてたはずだ。

ただ1つ残念なのは、ここまでの道中でもサアヤとユリとは一方通行の連係——サアヤとユリがシズクをフォローする連係——が変化することがなかったことか。

嘆いていても仕方ないことではあるし、そういうのも想定内だからこそ、サアヤとユリも《神獣級》エネミーとぶつかる選択をしたのだと理解はある。

半端な連係でもどうにかなるから練度が上がらないのだから、その半端を許さない状況に飛び込むくらいでなければ改善はあり得ない。

近場のダンジョンに行ったりしなかったのは、遠出をしてまで徒労に終わるような結果を受け入れにくくすることで、集中力を上げるためなのかなと移動中に考えたが、そこは推測の域を出ない。

その計画を企てた当人2名は本当にお疲れだったのか、登山を開始してタクシー並みの快適な運搬で完全に睡眠モードに入ってしまったか、ガクンと全身に力が入ってない感じ。

ユリはともかく、サアヤは比較的に喋るタイプなので、エネミー狩りしながらの移動よりもずいぶん静かな登山になったものの、途中に《変遷》が起こってしまって、ずっと無機質な《魔都》ステージだったフィールドが一転してエネミーが大量にポップする《原始林》ステージにその姿を変えてしまい、山道がより山道らしくなってげんざり。

壊せるオブジェクトが増えたのでリクト達が必殺技ゲージを溜める作業もついでにやって効率は良くなったが、やはりエネミーの数が増えてシズクが立ち向かっていくのをクラリツサとリリースの2人がかりで抑えて、迂回しながら約8時間かけてようやく登頂。

サアヤとユリも最後の1時間くらいで起きてリフレッシュ状態で

登頂したので調子も良さそうだし、計18時間もかけて辿り着いた山頂には感慨深いものと謎の達成感もある。

「不思議なものじゃな。以前来た時は《水域》ステージ故かと思うたが、属性に関係なくここは拓けた場所なんじゃな」

「確かに原始林ステージでこの拓けた空間はなかなかないわね」

「何かしらのオブジェクトの優先度が高いのかもしれないな。不自然な空洞はそれに起因しているのか、或いは」

「この山頂自体がある種のテリトリーになっているか、ですわね」

テルヨシがそうした感想を抱いていると、前に来たこともあるユリから話はもうこの山頂の考察に発展。

山頂ともなれば普通はもつとゴツゴツとした不安定な場所になって、絶景は拝めるだろうが山頂だけを見れば味気ないものになるはず。

しかし加速世界の女峰山の山頂は砂利の地面とはいえ明らかに平面な地形が続き、原始林ステージの木々の一本も植生しない、いわゆるハゲ山になっている。

広さにすればおおよそで80m四方はある山頂には身を隠せるようなオブジェクトもなく、唯一存在するのはほぼ中央に鎮座している幅も高さも5mとない小さな神社の本殿だけ。

「前の通りであれば、あの神社の20m以内に入ればエネミーが出現する。逃げる時はこの山頂から降りる必要があるでの、注意せよ」

「一応は確認いたしますが、《無限EK》の可能性はありますか?」

「その心配はなさそうじゃ。ここのエネミーは何故か出現から攻撃するまでにタイムラグというか……会話イベントが発生するんじゃ。まあほぼ一方通行でこちらの問いに答えるといったこともないがの」「何らかの隠しイベントが今も攻略されずに残っているということか。となると攻略すれば特殊なアイテムの類いも入手できる可能性もあるな」

「元々、神獣級エネミーなら初めて倒したら何かしらのアイテムは手に入るけどね。東京に出現する神獣級エネミーで倒されてないのつて、たぶんもう《太陽神インティ》くらいだろうし、古参でもなきや

実感はないかもだけど」

考察もそこそこにいつまでも立ち尽くしているとシズクが1人で突っ込みかねないので、いくつかの注意事項を述べてとりあえず戦ってみようと言うユリに、不安要素を潰すクラリッサと考察を続けるリリースも返ってきた言葉には納得する。

「それじゃさつきと行くわよ。何事もチャレンジから始まるんだからね」

「おっしやあ！ ぶちのめす！」

「えっ!? い、いきなり戦うんですか!? そ、その前に作戦会議とかやっても……」

「イーター。ここはオレもガツちゃんに賛成よ。作戦会議したいのもわかるけどね」

「まだ敵の姿もわからないまま作戦会議など無意味、ということですよ」

「まっ、俺らはここまで温存してきたし、そろそろ派手に暴れたいよなあ」

「暴れたいかはともかく、攻略の糸口は早めに見つけたいところだ」
「では逝くとするかの！」

無限EKの心配もないとわかるとみんなもアキラ以外は聞き分けが良く、戦闘を始める音頭を取ったサアヤに合わせて各々が戦闘準備を整える。

確かにアキラの言うように作戦会議も重要なのはわかるが、具体的に何をどうするかを考える上で必要な情報がテルヨシ達には圧倒的に不足してしまっている。

それでは作戦会議などしても不毛なやり取りをして終わるだけなので、それがわかってる一同も一見おバカなサアヤの指揮に素直に従ったわけだ。

そうやってみんなが賛成意見に回って正論も説かれてはアキラも納得せざるを得なく、すぐに切り替えたアキラを見てユリが先導して本殿の20m以内に踏み入る。

——ゴバアアア!!

ユリがエネミーの反応圏に入った瞬間、本殿を取り囲むように地面から大量の水が噴き上がって見えなくなり、その光景に言葉を失っている、噴き上がった水が雨となって落ちてきて山頂を水浸しにする。

そしてその水で一時的に見えなくなっていた本殿の屋根には2m程度の女の人型エネミーが立ちこちらを見下ろしていたが、その目は閉じられたまま。

エネミーなのかと疑うほどの見事な人型のフォルムに紅白の巫女装束を身に纏い、長い黒髪の間には金色のティアラのような装飾がある。

特徴的なのはその背に浮く4枚の大きな丸い鏡なのだが、腰にも抜かれてはいないが不思議な形状の剣が差してある。

そして視界右上に表示されたエネミーの情報は神獣級の証としてしっかりとその体力ゲージが4段まで存在し、名前の欄には《T a k i r i b i m e》と表示されていた。

「……《タキリビメ》？」

『左様。妾はタキリビメ。このような辺境にやってきた小戦士達よ。歓迎したいのは山々ではあるが、弱き者は妾と話すことまかり成らぬが決まり。よってそなたら小戦士は妾に示すがよい……』

情報通り、タキリビメと名乗るエネミーは出現からイベントのような説明をしてくれて、どのみち戦いはするものの、なんだか今の言い方だと『倒す必要はない』みたいにも聞こえる。

テルヨシがそんな風に解釈して話に耳を傾けていたら、呑気に会話するのが面倒になったか、先制パンチとしてシズクがいきなり話しているタキリビメをアネモイの弾丸《ボレアス》で撃ってしまおう。

それにはテルヨシ達もマジかよみたいな雰囲気ですズクを見かけるが、放たれたボレアスの弾丸はタキリビメがいち早く反応して前に出てきた丸鏡の1つの鏡面に当たると、ボレアスはその鏡面に触れた瞬間に鏡の中に吸い込まれて、次には別の丸鏡の中から飛び出して撃ったシズクの足元に突き刺さり、時間差で爆発。

もちろんボレアスの特性を知ってるシズクは回避して爆発から逃

れたものの、遠隔攻撃の反射を備えているらしいタキリビメには要警戒だ。

『事を急ぐでないぞ、小戦士。妾は寛大ゆえ許すが、妹達はそうではなからうから気を付けよ。——では妾に示すがよい。そなたら小戦士の《勇氣》を——』

少し怒った様子にも見えたタキリビメだったが、なかなか寛大な心を持っていらっしゃるらしくてお咎めはなし。

そして改めて用意されていただろう台詞を言い終えると、閉じていたその目を開いて直視でテルヨシ達を見る。

途端、晴天のはずの原始林ステージの空が、女峰山の山頂付近にだけ雨雲を発生させる。

その雨雲からはすぐに《暴風雨》ステージ並みの雨量がテルヨシ達に降り注いできて、ゴロゴロと雷鳴も轟く。

「勇氣を示せ、か。それってどうやるんだろうな」

「そんなの考えるのは後よ！ 来るわ！」

タキリビメからも尋常ならないプレッシャーが放たれ始めて、いよいよ戦闘開始となる寸前になってもテルヨシはわざわざその前に口にした言葉が気になって集中力を欠いていた。

しかしタキリビメは待つてはくれないのでサアヤが叫んで皆の無駄な思考を切つて無理矢理に集中させると、鞘から剣を抜いたタキリビメがその剣を空に掲げてみせる。

するとその剣先に降り注ぐ雨が集まって大きな水球を作り出し、その水球から勢い良く水をつぶてが射出された。

数が数なので相殺は無理と悟るや方々に散ったテルヨシ達は、タキリビメのターゲットが明確に誰なのかを見定めにかかったものの、中央に陣取ったタキリビメはこの山頂のバーストリンカー全てが標的なのか、全員がほぼ均等に水をつぶてに狙われてターゲット云々の話じゃないと理解。

こうなると前衛だの後衛だのはほとんど無意味な上、遮蔽物もない山頂では足を止めて攻撃する余裕すらないので、シズクやユリはもちろん、タンクのリリースなんて良い的になってしまう。

それを裏付けるように鈍足のリリースは水をつぶてを避け続けるのは困難と見たか、その足を止めて《アーマー・シエル》の鎧装甲でその攻撃をひたすら受けながらタキリビメに接近する手段に出ている、それを見る限りでは神獣級と言うほどの攻撃力は備わっていないように思える。

恐怖心もあるがここは確認のためにとテルヨシもその足を止めて1発だけ水をつぶてを体に当ててそのダメージのほどを確認してみると、やっぱりリリースの防御力が特別に高いだけで普通に1割もガリツと削られてしまった。

青系のテルヨシでこれでは紙装甲のユリ辺りでは数発で昇天してしまうので、早めに教えておこうと雨にも負けない声で逃げ続ける一同にダメージの程を伝えておくと、さすがソロでも力を発揮するタイプの集まりで、すでに水をつぶてを避けながら各々でタキリビメに接近する手段を試し始めていた。

サアヤは《ブレード・ファン》を広げて斜に構え、水をつぶてを受け流して確実に近づき、ユリも《リトル・ボム》を後ろで爆発させてその爆風を利用して水をつぶてを回避しつつ接近。体重と雨粒の影響で進みは遅いが被弾は避けられている。

シズクもアネモイの弾丸を弾速のある《エウロス》にしてレイズの強化で強力になった弾丸で水をつぶてを迎撃。唯一被弾なしで足を止めている。

リクトは走りながら《ドライブ》で腕の回転機構を回して、その回転で水をつぶてを弾き攻撃の変化をうかがっているようで、クラリツサは得意のステップ回避で余裕がある距離を保ちながらリクトと同様に状況の変化を待つ形。

タキリビメには遠隔攻撃が反射されるのでシズクも無闇に攻撃したりはせず、変化を加えるためには近接型が攻撃してみるしかないさそう。

そこでテルヨシは必殺技などの予備動作に隙のあるサアヤ達が踏み込めないことも考慮して自分が行くしかないかと覚悟を決めて、ステップ回避で山頂の縁にまで移動して、水をつぶての射角が最大に

なったところでその下を潜り抜けられるように水平に《インパクト・ジャンプ》を発動。

80 m四方の中央に位置する本殿なら1回で縁からほぼゼロ距離にまで接近できたが、わずかに距離が長くて本殿にぶつかってしまっただ。

それも予測してテイル・ウィップを正面に緩衝材として移動させていたのでダメージはなかったが、本殿の屋根に陣取るタキリビメが完全に見えない位置で困った。

さらに水につぶてがすぐに捕捉してテルヨシを狙ってきたのでその場に留まることもできずに本殿をぐるつとひと回りしながら距離を離してタキリビメを視界に捉え直す。

タキリビメは戦闘開始からその体も頭さえも一切動かすことなくテルヨシ達を迎撃しているの、攻撃自体がオートなのか、はたまたタキリビメには千里眼や心眼といった全方位をカバーする視覚補助があるか、その可能性がある以上は確かめる必要がある。

だからテルヨシはタキリビメの背後に回ったところで再びインパクト・ジャンプを発動して一気にタキリビメに接近からの攻撃を仕掛けた。

「はっ!? ちよちよちよつとおっ!」

ジャンプの直後にはテルヨシの視界はほぼなくなってしまっているので、長年の感覚頼りなどころがあるが、その感覚に何やら不思議な感触がわずかにあったかと思えば、直後に足を襲った強烈な痛みで悶絶しかけ、さらに圧倒的に硬い何かに弾かれて体のバランスを崩して前のめりに倒れてしまう。

近くでは何故かクラリツサの驚く声が聞こえてこつちがビツクリだが、倒れる時に自分がどこにいるかを把握したら、まさかのクラリツサの眼前。しかもクラリツサもテルヨシの出現に驚いて一緒に倒れるところだった。

それをキャンセルするだけの余裕がなかったせいでクラリツサを押し倒すような形になったテルヨシがせめてもとクラリツサの後頭部に片手を割り込ませてフオローしたが、もう片方の手はあろうこと

か倒れたクラリツサの胸部装甲を割とがつつり掴んでしまった。

むにゆりと、異常なほど柔らかい胸部装甲には金属質なはずのデユエルアバターなのかと思ってしまうが、触られたクラリツサ本人は状況に思考停止してしまう。

「……もう、お嫁に行けませんわ……」

「ご、ごめんクレア！ わざとじゃ……」

テルヨシも気が動転してついリアルでの愛称を使ってしまったが、そんな2人にもタキリビメは容赦なく攻撃をしてきて、水をつぶてが迫るのに気づいて何をするにもまずは逃げなきゃとクラリツサを抱き上げて山頂から逃げるように飛び降りる。

タキリビメのテリトリーから離れたことで攻撃は届かなくなり事なきを得たが、ちよつと乙女な感じになってしまったクラリツサが自分の胸を押さえてテルヨシを見るので、マジで土下座する勢いでいた。

しかしそれを実行するより前に山頂の方でサアヤ達の悲鳴が木霊して、一瞬遅れてテルヨシとクラリツサにもわかるほどのバアン!! という衝撃波が頭上を通過し、地面に溜まっていた水が押し出されてテルヨシ達の頭にバケツに貯めた水のように降り注いできた。

「な、なんですか?」

「わからないけど、タキリビメの攻撃に変化があつたっぽいな」

直接の状況を見られていないテルヨシとクラリツサでは何が起きたかを把握できなかったが、その衝撃波のあとから戦闘の音まで止んでしまったのが気にかかり、謝罪などはとりあえず後回しにして落ちてきた傾斜を登って山頂を覗き込んでみる。

するとそこには人っ子1人いない、来た時と同じ光景が静かにあつて、山頂の空も再び晴天に変わっている。

「みんなどこ行った?」

「あの衝撃波で吹き飛んだ、と考えるべきですけど……これはもしかして……」

サアヤ達の姿がないことにはクラリツサの言葉ですぐに思い至れたものの、あのレベルの衝撃波だとユリ辺りは麓まで吹き飛びかねな

いから、これはもしかすると再合流までに時間がかかるのではと予測。

死亡マーカーも浮いていないので全員生存はしているかもしれないが、着地に失敗して死亡も十分にあり得る。

さらにクラリツサも悪い予感がしたか、姿を消したタキリビメを再び出現させようと言い出し、確かめたいことがあるのかクラリツサは山頂の縁で待機。

『また来たのですね小戦士。懲りていないのならしつかりと妾に示さない。その勇気を』

さすがに高度なAIなのか、テルヨシ達をちゃんと個別に認識してのような台詞に変えてきたタキリビメは、またテルヨシ達を攻撃し始めたが、クラリツサが戦闘開始と同時に縁から飛び降りて山頂から抜けると、タキリビメがその目をギロリと睨むような鋭いものに変えて手に持った剣を振るい、その剣先が大気を叩いたような衝撃のあとに周囲へとそれを撒き散らして衝撃波が発生。

その威力はとてもではないがその場に留まれるものではなく、ダメージこそ始めの衝突に2割程度削れた程度だが、次に見えた視界では山頂が100mほど離れてしまっていて、足元には原始林ステージの女峰山のジャングルが広がっている。

「ノ、ノオオオオオオ!!」

そこから現在進行形で吹っ飛んで落ちていたテルヨシは、慌ててインパクト・ジャンプでブレーキを掛けながら山頂付近にまで戻って難を逃れたクラリツサと再合流したが、今のでテルヨシもあの衝撃波の発動条件に気づけた。

「やっばいねこれ。戦闘中に山頂から誰か1人でも降りるとあの衝撃波が飛んでくるのかよ」

「しかもその度に山頂の状態もリセットされて、タキリビメもリフレッシュして復活しますわ」

「……マジかい……」

「酷い目に遭ったわ……」

「まったくだ……」

「アイツ……絶対ぶっ飛ばす!」

レギオンの連係強化ミツシヨンとして挑んだ女峰山の主とも呼ぶべき《神獣級》エネミー《タキリビメ》だったが、山頂全てがテリトリのタキリビメはその山頂から逃げる者がいた時、即座に全員を弾き飛ばす問答無用な衝撃波を放ってきて、それによって女峰山の方々に落とされたテルヨシ達は、その再合流に5時間も要してしまっていた。

重量級の《チャイブ・リリース》は重さのおかげですぐ下の傾斜を転がる程度で済んだので、衝撃波からリカバリーしたテルヨシと難を逃れたクラリツサとは早くに合流。

次にアキラがりリリースから1時間遅れで合流してきて、かなり下に転がり落ちて大変だった体験談を聞く。

その次に来たのが意外にもユリで、最軽量アバターのユリは想像以上に、テルヨシ達のいる場所とは真裏の方に吹き飛んだのだが、あまりにも勢いがあつたからアビリティ《テイセント》で滞空中に体勢を整えて方向転換し、女峰山の中腹までは戻って来られたらしい。

そしてそこから3時間ほど経過してから途中で合流したらしいサアヤ、シズク、リクトが到着しタキリビメに対して恨み言を述べていった。

完全にタキリビメとの戦闘よりもここまで戻ってくることに疲れていたサアヤ達を気遣って、再び山頂の縁に登ってタキリビメの出現しない位置で休憩しつつ、先ほどの戦闘で得られた情報を整理。

「まずあれよね……あの衝撃波。このフィールドから誰かが離脱すると撃ってくるんでしょ」

「そうみたい。しかも重量級のリリースも一瞬で外に弾き出すくらいだから、強制ノックバックの効果もありそうだよね」

「それにこのフィールドからバーストリンカーがいなくなりますと、

タキリビメのステータスもリセットされてしまうようですから、発動したら最初から、ということになりますわ」

「振り出しに戻るといいうやつだな。あのエネミーが言っていた《勇氣》とはこういうことか」

「つ、つまり戦い始めたらフィールドから離脱して体勢を立て直すってこともできないわけ、ですよ？」

「だな。戦い始めたらあれを倒すまで逃げることは許されないってことだ」

「上等だ！ 血祭りにあげてやるよ！」

そこでまず拳がったのは、今の状況を作り出してくれたタキリビメの衝撃波について。

すでにみんながその発動条件に理解がいったようで、みんなの中にわずかながらにあった『一時的な離脱による立て直し』や『フィールドの外からの遠隔攻撃』が潰されてしまった。

ただ、これがタキリビメの言う『勇氣を示す』ということになるのか、テルヨシにはまだどうにもしっくり来ない感じはある。

タキリビメ自身がバーストリンカーの退路を断っている以上、挑戦者はタキリビメと戦うしか選択肢はないが、そもそもエネミーとは戦うのが大前提なわけで、それを考えればわざわざ勇氣などと表現するものなのか。

単に考えすぎなだけかもしれないが、何かを結論付けるには早計かと、息巻いてタキリビメを出現させようと立ち上がったシズクを取り押さえつつ、情報共有を再開。

「あとはあれね。テイルがタキリビメに突っ込んだ時のあれ」

「それさ、待ってる間にシンデレラ姫から聞いたけど、マジでオレ自体が鏡に吸い込まれて反射させられてたの？」

「うむ、サイズに関係なくあの鏡は映し出したものを吸収し別の鏡から出すことができるようじゃった」

「近接も遠隔もダメとかどうしようもない気もするが……まだ可能性がないわけじゃねえよな」

「そうだな。ヤツの鏡は全部で4つ。1つが吸収。1つが放出の役割

を果たすならば、3つの攻撃をほぼ同時に放てば、その内1つの攻撃が通るかもしれん」

「あとあれ。速さにしつかりついてきてたぞ。あのエネミーが反応してるってより、あの鏡自体が勝手に動いてる感じがした」

「つまりあの鏡による反射はエネミーの任意で発動するタイプではなく、オートで発動する自動防御機能ということですか?」

「かもしれないって話だバカが」

先の戦闘で得られた他の情報としてサアヤが挙げたのが、テルヨシには実感すらない、タキリビメに突っ込んだはずが別のところにいたクラリツサに突っ込んでいたあの不思議な現象について。

もちろんテルヨシもその現象を別視点で見ているクラリツサやリリースから待つ間に聞いていたが、タキリビメの後ろに控える4つの丸鏡はどうやら攻撃性のあるものを自動で吸収・反射して防御する機能だと推測。

2枚1組で機能するなら発動する回数は2回までが道理だが、仮にそれでも発動にタイムラグがあるのかも今はまだわからないし、シズクの推測が正しいと証明されたわけでもない。

ただシズクがまともに会議に参加して意見を述べたことにテルヨシ達は多少驚いたし、それでもやっぱり煽るような台詞を言うことにクラリツサがキレかけたのをなんとか制止。

シズクにも挑発する言葉は控えるように注意しつつ、おそらくみんなが気づいたはずの最後の1つの情報をテルヨシを皮切りに口にする。

「んで、タキリビメの攻撃の要になってるのがたぶん……」

『あの剣だ』

「これはほぼ確定だろうね。水を操る力もあの剣が力の源って感じだし」

「狙うならあの剣の破壊。もしくはタキリビメの手から奪ってしまふことね。それができれば勝率もグッと高くなる、と思いたいけど」

「そう上手くはいかんじゃろうて。じゃが次にやることは決まったんじゃないから、ここからはそのためにどうするかを話し合うべきじゃろ

う。無策に飛び込んでまた衝撃波で振り出しは精神的にキツイでの
「それはいいが、あの剣ってなんかモチーフあつたりしないのか？
神話とかにあるなら弱点とかリンクしてるかもだろ」

「あれは《十握劍》トツカノツルギだろう。剣の名前自体に力はないが、曖昧な部分
の多い剣でも有名だ」

「その辺は儂も調べたが、握り拳10個分の長さの剣という広義の名
称らしいぞ。皆が聞いたことのあるもので言えば……天叢雲劍アメノムラクモノツルギや
布都御魂劍フツノミタマノツルギといった剣が、この十握劍に分類されておる」

「でもそういうのってちゃんと所有者がわかってる剣でしょ。だとす
ればタキリビメが持つてる十握劍はそこまで飛び抜けた性能ってこ
ともないって考えられるわけね」

「それは楽観的過ぎやしませんこと？」

劍自体に力があるのか、タキリビメが持つから劍に力が宿るのか、
はたまた劍を触媒にしてタキリビメが力を使っているのかは不明だ
が、劍なしで水を操る力は発揮できない可能性はみんなが気づいてく
れていて、鏡の攻略も見えてきたことから話は試作の段階に移行。

さすがにまだまだ不確定要素が多いので完全攻略を目指す段階に
はないが、どんなゲームでもボス攻略というのは基本的にトライアル
&エラーを繰り返すもので、それは《帝城》の四方門を守護する《四
神》も例外ではない。

もちろんその試行錯誤の回数が少なければ少ないだけ良いわけだ
が、それを可能にするのは1度の戦闘でどれほど敵の情報を引き出し
分析できるかなので、次の戦闘では可能性を試しつつタキリビメの別
の行動パターンを引き出さなければならぬ。

その話し合いに移行してあれこれと言ひ合ひ始めたサアヤ達を見
ながら、真面目な話なのはわかっていても、ついこの状況に笑い声を
漏らしたテルヨシに、話をしていたサアヤ達が睨むような雰囲気で見
てくる。

「ちよつとテイル。真面目な会議してるんだけど」

「ハハツ、悪い。機嫌を悪くさせたなら謝るよ。ただ不思議な感覚だ
なって。顔を合わせれば戦うライバルだったオレ達が、同じ目標を

持つて集まって話し合ってるって状況が、なんかおかしくて」

1人だけ場違いな感覚になっていることを自覚してはいたものの、込み上げてくる感情を抑えられなかったのでサアヤ達に謝りつつも正直に今の気持ちを吐露する。

その言葉にサアヤ達も言われてから何かに気づいたのか、みんながみんな顔を見合ってから微妙な雰囲気で無言になってしまった。

「……これからもオレ達が互いに競い合うライバルなのは変わらないけどさ。レギオンになったからには、ただのライバル以上の関係を築けていけたらって本気で思ってる。だから今日のこれがその1歩になってくれたらって、そう願うよ」

「……テイルのくせにクサイ台詞だな」

「本当ですわ。そういうことを言うキャラではないでしょうに」

「……鳥肌立ったぞ」

「チームとしてまとまれるかどうかは別問題になるかな」

「アンタらは素直によっしやあやつたる！ とか言えんのか」

「レギオンのノリもまだ確立しておらんしの。旧プロミなら今のような場面でオー！ とも返せたわけじゃが」

「じゃ、じゃあ今からやるべき、なんでしようか」

柄にもないことを言ったなあと思いつつも最後まで自分の気持ちをつき出したテルヨシにサアヤ達もまた満更でもないような、よく読み取れない感情を雰囲気にならわせた、それぞれらしいことを返してくれる。

その中でアキラがレギオンらしくまとまったかけ声でもやろうかと提案してきて、そういう熱血っぽいノリが恥ずかしいところはありつつ、テルヨシがあえて振り切って「よっしやあ！」とその手をみんなの前に差し出す。

それを合図に躊躇っていたサアヤ達も気合いこそ出さないものの順番にその手をテルヨシの上に重ねていき、最後にシズクが馬鹿馬鹿しいと恥ずかしがって逃げるところをサアヤとクラリツサが掴んで強引に重ねさせる。

「まだレギオンとして、チームとして全然バラバラに近い状態だけど、

個性を殺してまでレギオンのためになろうとしなくて大いに結構！
それぞれがらしくやりながらオレ達は今よりもっと強くなる。その第1歩として、まずはタキリビメを倒すぞ！」

『おー!!』

これがおそらくテルヨシがレギオンマスターとして初めてレギオンのためにと動いてみせたことだったが、それを生意気だとか茶々を入れる者もいなく、言葉のあとにはみんながその手をグツと下に持つていつてから、同時に上へと振り上げて手を放したのだった。

「いやあ、青春してるねえ」

「完全に部活のノリね」

「というよりも、この中に部活に入ってる方はいますの？」

『……………』

「聞いたわたくしが悪かったですわ……」

この感じには何も言わずにはいられなかったせいで尾ひれがついてしまったが、部活のノリとか言うサアヤに思わず疑問を口にしたクラリツサに答える声はなく、そもそも今日の放課後に全員が集まった時点で部活に入っていないことは明らかで、愚問だったと聞いたクラリツサが反省。

空気がまた微妙な感じになりかけたので、切り替えるようにサアヤが「そういえば」と何かを思い出してテルヨシを見てくるので、はて何かな？ と首をかしげてみる。

「アンタ、さっきの戦闘でちやっかりシンデレラの胸揉んだでしょ。そういうのはどうなのかしらねえ？」

「それはもう死ぬほど謝ったもん！ シンデレラも次に会ったら1つ願いを叶える形でとりあえず許してくれたもん！ っていうか角度的に見えてなかった人もいるんだからシンデレラを辱しめないであげて！」

「そんな大声で弁明するあなたもあなたですわよ！」

戦闘中は全員がほぼフィールド全域に散らばっていたので見えてなかったら良かったなあと思つてたことが普通にバレてて、その辺で抜かりはないテルヨシがサアヤへの報告の義務を怠りながら必死の

弁明をする。

リリースが来るより前にクラリツサへの謝罪とその処遇については供述通りでまとまったのだが、それをみんなに聞こえる声量で言うからクラリツサも恥ずかしさで声がちよつと裏返りながらツツコミを入れていた。

そんな安定のやり取りをテルヨシとサアヤがするから、付き合いの長いユリやアキラはやれやれと笑い、リクトとシズクも何やってんだかと苦笑を漏らす中、人一倍笑い声をあげたのは意外にもリリースだった。

「フツ……フハハハハツ……ハハハハハツ」

さすがにそれは予想外すぎてテルヨシ達もリリースを見てしまったが、ひとしきり笑って満足したリリースは謝罪を入れながらその本音を語る。

「すまない。お前達はもうリアルでも顔を合わせているんだったか。少し前までは顔を合わせれば対戦ばかりだったお前達が、こんなやり取りをしているのを見るとなんだかおかしくてな。まるで昔から友人だったように話す」

リリースが大笑いする姿など見たこともなかったテルヨシ達は、その理由を聞いてなんだか意外に思う。

ただ気になるのは言い方がどこか客観的で、その括りに自分を入れていない節があるところか。

「俺にはまだお前達の作る輪の中に入る資格はないが、改めて思ったよ。出来る限りお前達の力になりた……」

「なに言ってるのリリース。お前だってもうメテオライトの一員だろうが」

「そういう他人行儀なのはシラケるんだけど」

「レンタル移籍の扱いとはいえ、こうして一緒に行動しとる以上、主は紛れもなく農らの仲間じゃ」

「んな小せえこと気にして一歩退かれる方が困るんだよ」

「そうです。リリースさんに遠慮されたら、誰がこの人達をコントロールするんですか」

「レンタルであれ移籍した以上、あなたはわたたくし達にも
《断罪の一撃》という生殺与奪権を与えているのです。それは並みの
覚悟では出来ないことのはずですわよ」

「今さらなこと気にしてんのか。バカか」

それを証明するようにテルヨシ達への遠慮があつたりリリースがその
のままの立場で話すので、そんなことと一蹴するような割り込みで言
葉を遮り、各々がリリースを受け入れる言葉を投げかけた。

なかなかクサイ台詞もあつたので返事がないと恥ずかしさが込み
上げてくるので、何気に失礼なことを言ったアキラをみんなでいじめ
ていると、それを見たりリリースがまた笑い出してしまう。

「フハハッ！ お前達は本当に面白いな。こんなことで遠慮していた
自分が馬鹿らしくなったぞ」

「懐は広いからな。んじやりリリースに遠慮がなくなつたところで、タ
キリビメ攻略作戦を練るとしますかね」

レギオンとしてこれで気持ちが一つになつた。なんてことは全然
ないが、少なくとも全員がメテオライトにすることを不快に思ってい
ないことだけは今ののでわかつたので、なんとなく雰囲気も良くなつた
のを利用してそのまま作戦会議に戻っていった。

約1時間ほどの作戦会議を経て、2度目——テルヨシとクラリツサ
の2人で突っ込んだのはノーカンだ——のタキリビメ戦に挑んだテ
ルヨシ達は、前回と同じような台詞のあとに臨戦態勢となつたタキリ
ビメに対して事前にフォーメーションを組む。

役割の被るメンバーを対面に配置する円陣でタキリビメを囲み、
各々で定めた範囲で水をつぶてを避けることで被害を最小に留めつ
つ、今回の攻撃で最低限の確認作業に入る。

「行くぞオラあー！」

その1つ目であるタキリビメの丸鏡による反射防御。

その特性を見極めるべくシズクが作戦通りに合図をしてからアネ
モイのホーミング弾《ノトス》を2発。1秒の間を空けて放つ。

それと同時に対面のユリが《リトル・ボム》を作り、ノトスの弾丸
が2発ともタキリビメに射出したのに合わせてタキリビメへと投げ

入れる。

予想通りタキリビメの丸鏡はタイミングをズラして飛んできたノトスの弾丸を2つの丸鏡で吸収して、別の2つの丸鏡から反射してテルヨシ達を狙うが、ノトスの弾丸は1度ロックオンした対象に当たるか撃ち落とされるかしないと対象を捕捉して飛び続ける。

その特性で反射されても距離さえあればテルヨシ達に当たる前に制止から再びタキリビメに向けて飛んでくれる。

ノトスの弾丸は2発とも防御されてしまったが、確認したかったのはその先だったので、丸鏡が反射までを完了させる前にユリのリトル・ボムがタキリビメへと迫った時、剣を頭上の水球にかざしていただけだったタキリビメが初めてその剣をリトル・ボムの迎撃に動かししてきた。

当然、リトル・ボムは剣に触れた瞬間に爆発し、その爆発でタキリビメにはささやかながらも確かなダメージが通る。

さらに畳み掛けるように反射されたノトスの弾丸が捕捉し直して再度タキリビメに迫るが、その時にはもう丸鏡の防御が復活してまた反射させられてしまった。

3段攻撃が通用することはこれで証明されたので、次に確認するのはその防御が復活するクールタイム。

ノトスの弾丸が反射されて捕捉し直し、再び反射されるまでにあった時間は約4秒。

その時間を正確に把握するために今度はユリがリトル・ボムの投げるタイミングを秒刻みで調整。

ノトスが再射出される直前の4秒からスタートし1秒刻みで短くしていくと、3回目の2秒後の攻撃が通ったので、今度は2・5秒を狙ってみるとこれも通ったので、

「3秒じゃなー！」

あまり半端なクールタイムはないので、丸鏡による防御は3秒で復活すると確定させ、ユリが叫んだと同時に戦闘も次の段階に移行。

3秒の猶予があればテルヨシ達もシビアではあるが攻撃に出ることは可能だが、より確実に攻撃を通すために出来ることが、あの丸鏡

を破壊してしまうこと。

それが可能かどうかもやってみないとわからないが、水のつぶてを避けながら3秒の間に攻撃するのは近接型には厳しいと言わざるを得ないので、防御だけでも崩せれば形勢はずいぶんテルヨシ達に傾く、かもしれない。

仮に丸鏡が破壊できたとしても、それをトリガーにまた新たな攻撃が繰り出される可能性もあるから、単に有利になるなどと安直な思考ではないが、何度も言うようにボス攻略は情報戦。引き出してなんぼなのだ。

ノトスの弾丸が丸鏡の防御を無効化する隙に中距離攻撃が出来るサアヤとユリが《ブレード・ファン》の展開剣とリトル・ボムで確実に丸鏡に攻撃を当て始め、シズクも弾丸を徹甲榴弾の《ボレアス》にして《レイズ》の強化も乗った強力な爆撃で丸鏡を攻撃。

丸鏡にダメージを与えても強化外装と同じようにタキリビメ自体にダメージは通らないようだったが、観察眼に優れるテルヨシが逐一で観察を続けていると、4度目のシズクのボレアスが命中して爆炎の晴れた視界で丸鏡の1つの鏡面に確かな亀裂が入ったのが見えた。

「ガッちゃん達！ 続けてー！」

タイミングに集中しているサアヤ達は丸鏡の状態を細かに観察する余裕はなかったはずなので、代わりにテルヨシがダメージが入っていることを伝えると、一層の気合いが入ったサアヤ達は「よっしゃあ！」と叫んで攻撃に力が入る。

そしてついにサアヤの展開剣が亀裂の入った丸鏡を叩いた瞬間に、鏡面のみならず丸鏡全体がパライイイン！ といった軽快な音と共に碎け散り破壊され、ユリのリトル・ボムの爆発でまた1つ。シズクのボレアスでまた1つと碎け散り、1つになつては防御も機能しないのか、切り返してきたノトスの弾丸を吸収したはいいが、出所をなくして炸裂し鏡面が碎け散った。

『タイダル・ウェーブ
《オオツナミ》』

丸鏡の完全破壊に思わずガッツポーズやらをってしまったテルヨシ達だったが、それをトリガーにタキリビメが新たな攻撃を仕掛けて

きて、掲げていた剣を逆手にして両手で持ち真下に振り下ろすと、元の見えない空間を剣先で叩いたタキリビメの動作に合わせて、頭上の水球が突如として10倍以上に膨れ上がる。

それにギョツとする間もなく肥大化した水球は途端にその形を崩して自由落下を始め、タキリビメのいる本殿だけを避けるように空洞状態でフィールド全体へ外側に押し退けるような巨大な波となって襲ってきたのだった。

Acceleration Second 80

「うっそお!？」

女峰山の主《タキリビメ》との2度目の戦闘に突入し、タキリビメを守る4枚の丸鏡の破壊に成功。

これで少しは攻撃の頻度を上げられるかと思われたが、丸鏡を破壊されたタキリビメは即座に初見の動作を見せたかと思えば《オオツナミ》なる技を繰り出してきて、頭上の水球が肥大化。

その圧倒的な水量が重力落下してテルヨシ達に襲いかかり、その量たるや高さ20mを越える津波となって全方位に押し寄せたのだ。

水の力というのは人間が考えるよりもずっと強く、これだけの水量で襲い来る津波は呑み込まれたが最後、まともに動くこともできずに流れに従って女峰山を落ちることになる。

そうなればまた再合流にも時間を要するし、このフィールドに残れる人もいなくなりタキリビメのステータスもリセット。また丸鏡が復活してしまうだろう。

「《インパクト・ジャンプ》!!」

それは出来る限り避けたいとギリギリのタイミングでインパクト・ジャンプを使って上に逃げたテルヨシは、自分の下を巨大な津波が通りすぎ、サアヤ達が全員フィールドの外へと流されてしまったのも確認。

中には津波と流されてる間のフィールド外でのダメージで死亡した人もいて、ユリ、クラリツサ、アキラが山頂に近い位置で死亡エフェクトを発生させていた。

しかしそうした確認も落下を始めたところで中断せざるを得なくなり、唯一フィールドに残ったテルヨシをタキリビメがロックオンして、空中で身動きの取れないところをフィールドの床に残っていた水を集めて間欠泉のように噴き上げ攻撃してくる。

これを《インスタント・ステップ》の足場を蹴って横に跳んで回避したものの、方向まで調整する余裕がなくて、最悪なことにタキリビメの方に突っ込む軌道になってしまった。

落下速度やら高さの関係でもう大きく軌道は変えられないので、半分くらい自棄でタキリビメに攻撃しに行き、強烈な飛び蹴りがタキリビメに炸裂する。

だがタキリビメの持つ剣が割って入って全体重を乗せたテルヨシの飛び蹴りをいとも容易く受け止めてみせると、本殿の近くに着地したテルヨシを見下しながら戦闘中にも関わらず言葉を発してきた。

『それがそなたの《勇氣》か』

「なに？」

言葉はそれだけだったが、テルヨシが言葉の意味についてを考えるとより早く、頭上で復活した水球から水のつぶてなど遊びに思えるほどの速度と圧力でジェット噴射がされてテルヨシを襲い、反応がわずかに遅れたテルヨシの体を容赦なく弾き飛ばしてフィールドの外へと落下。

ダメージも比較にならない5割を削り取られて残りHPが2割を切り、落下した先の地面を転がって木に激突してさらに削られ1割を切って真っ赤に染まる。

痛みでぐらぐらな意識をどうにか持ち直させて山頂に戻ってはみたものの、当然、タキリビメはすでにその姿を消して空も元の晴天に戻ってしまった。

その事実一気に脱力したテルヨシは、このHPで生き残っているも仕方がないかとその場で自分にとどめを刺して死亡し、その蘇生の時間までふて寝することに。

——こうして2度目のタキリビメ戦は、その圧倒的な力の前に成す術なく押し潰されて終了した。

1時間後にテルヨシが蘇生してから30分間に合流してきたのは、やはり山頂付近で死亡したユリ、クラリツサ、アキラの3人で、その3人ともが合流するなりタキリビメのオオツナミへの愚痴を盛大に漏らしていた。

あれを事前の対策なしで防ぐのは不可能に近いので仕方ないと思うが、初見殺しもいいところの技のオンパレードには歴戦のユリも苦言。

「なんというか……タキリビメはやはり他の《神獣級》エネミーとは勝手が違うのう……」

「それはオレも思った。他のエネミーでもっと殺意むき出しで攻撃してくるんだけど、タキリビメってなーんか違うよね」

「確かにそうですわね。特定の条件を満たした時に発動する技は衝撃波とオオツナミのようなフィールドの外へと追い出す目的の技のように思えますわ」

「それってつまり、タキリビメは僕達を攻撃して倒すよりも、このフィールドから追い出すことを優先してるってことですか？」

「うむ。ステータスのリセットがあることを考えれば、普通に神獣級を相手にするよりも難儀なところではあるがの……」

対峙する前から少し違うとは言っていたユリが、改めてその事について触れたことでテルヨシ達もその違いというのに理解が及ぶ。

神獣級ともなると《メタトロン》のように即死級の攻撃をいくつか持っていて、なかなかの頻度で使ってもくるものというのがテルヨシ達の認識ではあるが、タキリビメに関してはなんというか、その即死級の攻撃というのが見受けられないのだ。

衝撃波にしてもオオツナミにしても、バーストリンカーをフィールドの外へと吹き飛ばすのが本来の目的であるような全体攻撃で、食らってもサアヤ達のように死なないこともある。

「……………《勇氣》、か……………」

それを踏まえて改めてタキリビメが口にしていた勇氣という単語に注目したテルヨシにユリ達も気づき、この戦闘が一種のイベント戦であることも加味する。

「勇氣を示すとは単にフィールドから逃げないことを指すわけではないということかの」

「ですわね。或いは衝撃波やオオツナミすら乗り切りフィールドに留まり続けることを指しているのでしょうか」

「む、難しいことはよくわからないですけど、ガスト姉達が来るまでに色々まとめておきましょう」

「勇氣……………逃げ……………挑戦……………」

そこから出てきた可能性も十分に考えられることではあったが、テルヨシは少しだけ違う視点から物事を考え始めて自分の世界に突入してしまっただが、その集中に気づいたかユリ達は何かしらの意見がまとまるまではテルヨシには話しかけずにアキラの言う通り、サアヤ達が再び戻ってくるまでの間に情報の整理に努めていった。

そのあと約7時間を要してサアヤ達が再び山頂に到着し、完全に疲弊しきった状態だったので《レイズ》の強化を残しておきたいシズクを残して全員が1度死んでステータスをリセット。

蘇生待機の間にも声が聞こえはするので、残った人での話し合いやらは進め、確定した情報などは共有していく。

サアヤ達が蘇生した頃、内部時間で40時間以上が経過したことをユリが告げ、自動切断まで10時間を切ったことがわかると、話し合いの方もタキリビメ攻略と同時に切り上げるタイミングも話に挙がってくる。

「挑戦するにしても吹き飛ばされる前提にするとあと2回が限界ね。まさか再チャレンジにこんな時間のかかるやつとは思ってなかったから、完全に想定外だけど……」

「チャレンジはするにしても、攻略が叶わなかった場合に、再ダイブするかどうかは今のうちに決めるべきじゃな」

「ここまで来て成果なしはあり得ませんわ！ 必ずやあのタキリビメを倒して、気持ち良く寝たいですわね！」

「気持ちと同じだが都合は別だろ。誰か1人でも欠けるようなら日を改めるのが賢明だ」

「現実世界でたったの数分の都合もつかないような状況というのも考えにくい、再ダイブが出来ないという者がいれば拳手を頼む」

流れとしては当然のものではあった。

何ひとつ間違ったことはしていないサアヤ達ではあったが、リリースの再ダイブ可能かどうかの確認のタイミングでスツと手を挙げたテルヨシは、誤解がないようにすぐそれがダイブできないわけではないことを説明。

「なあみんな。流れとしてはこういう話は当然だと思うよ。ただオレ

がバカだつて話なら笑つてくれてもいいんだけど、そういう『次がある』つて気持ちは、今をほんの少しでも蔑ろにしたりしてないか？
トライアル&エラーの段階だし仕方ないのかもしれないけどさ。毎回、本気で攻略する気で挑むかどうかつて、オレとしては割と重要なことだつて考えてるんだ」

ただの気持ちの問題。

言つてしまえばそれだけのことなのだが、その気持ち一つで結果を変えた出来事をテルヨシはつい最近に経験してしまつている。

チャンスがあるというのは良いことだが、それは一転すれば諦めの早さに繋がることもあるのは言うまでもない事実。

人はそういう生き物だし、テルヨシだつて1度きりしかないチャンスとかでなければ、本気の本気は引き出せないと確信に近いものを感じている。

それは1回1回は小さなものでしかないが、積もり積もれば攻略の1回。いや2回分ほどの違いが出るほどのものになる可能性は十分にある。

そうした意味の言葉でサアヤ達に対してご高説をしたわけだが、聞いたサアヤ達は少しの沈黙のあとにサアヤが先陣となつてテルヨシの胸をドンと叩いてみせ、全員が同じようなことをテルヨシに行く。

無言でやるからテルヨシも少し戸惑つてしまつたが、その意味についてはみんなの雰囲気から察することができて苦笑い。

—— テイルのくせに生意気なんだよ。

人によつてはちよつと解釈は違うだろうが、概ねでそんな感じの意味の行動に言う必要がなかったかもしれないと反省。

誰も次があるからと今を全力で取り組んでいないなんてことはなく、出来る最大限をぶつけていると示し、その上で次の話をしていたと目が語つていた。

「それで？ そんなことをわざわざ言ってきたからには、次に試したいことの1つくらいは思い付いたんでしょ？ それもここにいる全員が全力で取り組まないと出来ないような博打じみたことをね」

「さすがガツちゃん。皆まで言うなつてか。確かにあるよ、試してみ

たいことが。それに賛成してくれるかはみんな次第だけどね」

これでわかっただろうとサアヤがいち早く話を本題に戻して、わざわざ意思確認をしてきたテルヨシにその真意を問うので、さすが彼女と思いつながらテルヨシも合流する前から集中して練っていたある作戦をみんなに伝えた。

3度目のタキリビメ戦はサアヤ達の蘇生後1時間後に開始され、2度目の時とは大幅にフォーメーションを変更。

サアヤ、ユリ、シズクは今まで通りにフィールドに散ってまずは4枚の丸鏡の破壊に集中してもらおう。

そのために水をつぶてを回避するスペースをサアヤ達に十分に与え、テルヨシ達はほぼ定位置から動かない、《チャイブ・リリース》を先頭に置いた不動の縦列陣形。

さらに戦闘前にアキラの《フリーザー・アイス》で必殺技ゲージを満タンの状態にして、ユリに至っては《リトル・ビッグボム》を指の間にストックできるだけ持って戦闘に入り、丸鏡の破壊のペースアツプを狙っていた。

ただしテルヨシ達が不動の陣形を作るデメリットは、リリースがその後ろのテルヨシ達の方まで水をつぶてを一手に引き受けて防御し続ける必要があることだが、先の2戦で水をつぶてを受け切つてなおデュエルアバターへのダメージは3割程度だったと言うのだから、もはや動く肉壁。

強化外装群である《アーマー・シエル》がほぼ全身を覆う鎧型の強化外装なのを差し引いても、その防御力は誇つてもいいだろう。

事実、戦闘開始から猛烈な勢いで襲いかかってくる水をつぶてを全身で受け止めて防御するリリースは頼もしく、後ろのテルヨシ達には一切のダメージも発生しない。

苛烈さが増すのは想定内だったので、だからこそサアヤ達にはより強力な攻撃でタキリビメ自身にもダメージが通るような攻撃をとお願いしていて、その威力の証明であるリトル・ビッグボムがタキリビメに当てられれば、ダメージの怯みなのかタキリビメからの水をつぶてが数秒ほど止まってくれて、その間にリリースもアーマー・シエル

の状態を確認。

リリースには本来なら見えないデータ上の数値を視覚化するクワンティファイド《数値化》というアビリティが備わっていて、テルヨシ達ではHPゲージや必殺技ゲージは単なるゲージにしか見えないが、リリースにはそこにパーセント表示が追加されたり、強化外装の耐久値が数値として見える——ただしエネミーの装備などは数値化してくれないみたいだ——のだ。

だからこそ自分が装備しているアーマー・シエルのどこがどの程度のダメージを受けていて、どの部分に余裕があるかなどが正確にわかるため、ダメージ分散が鬼のように正確でリリースのアーマー・シエルのパーツが1つだけ欠けたりといった場面はほとんど見たことがない。

さらにリリースにはクワンティファイドの他にもう1つ凄いアビリティもあるが、それが真価を発揮するのは稀で、今回に至っては必要にも迫られないだろう。

そうしてサアヤ達の猛攻でタキリビメの攻撃をキャンセルしつつ、リリースの防御力で耐え続ける状況を保って、事前の備えのおかげで大幅な時間短縮に成功した丸鏡の破壊は戦闘開始からわずか10分の間に起こった。

「《オルタレイション・ブリザード》！」

その破壊の前にサアヤ達が次の準備に入りつつ丸鏡の破壊のタイミングを計り、アキラが必殺技による強制変遷を使い、この女峰山周辺のフィールドを《氷雪》ステージへと変貌させる。

そして即座に自らがフリーザー・アイスを食べる必殺技ゲージを満タンにして1分間の行動不能に入り、そのアキラをテルヨシ達が懸命に守る。

そのアキラが復活すれば次の準備は出来たので、すかさずサアヤ達に合図して丸鏡の破壊の許可を出すと、待つてましたと言わんばかりにユリがストックしていたリトル・ビッグボムをタイミング良く放つて4枚の丸鏡をまとめて破壊。

「来るぞー！ みんな失敗しないでくれよな！」

「《ジャイアント・スノーマン》!!」

「《マスカレード・ボール》!!」

破壊のあとにタキリビメがすぐにオオツナミを発動する動作に入ったのを確認して、散っていたサアヤ、ユリ、シズクは作戦通りにテルヨシ達と合流してひと塊になり、アキラとクラリツサはその必殺技ゲージを全消費して巨大雪だるまと20体の分身を作り出す。

山頂には冰雪ステージによる変化はなかったが、その少し外にはしっかりと雪が存在していたのでアキラも無事にフィールドの縁でジャイアント・スノーマンになることができ、その巨体がテルヨシ達の前に躍り出てタキリビメのオオツナミを正面から迎え撃つ。

「——《オオツナミ》」

その万全の体制のところにとタキリビメのオオツナミが襲いかかってきて、圧倒的な水量で迫った津波は10mもあるジャイアント・スノーマンすらも物ともせずリサティーションに呑み込みにかかり、さらにジャイアント・スノーマンを後ろへと後退させてくる。

だがそれくらいは想定内だったテルヨシ達は次なる手として、決死の防御に回ってれていたリリースをジャイアント・スノーマンのすぐ後ろに配置させて、自分達はフィールドの縁ギリギリでクラリツサの分身体を正面に壁のように並べて待機。

「《起死回生》!!」

そうまでしないとリリースの攻撃に巻き込まれてしまうからだが、今までの防御でフラストレーションでも溜まっていたのか、今日一番の叫びで必殺技を発声したリリースは、その身をグツと内側に集める予備動作から一気に解放するように四肢を広げてみせると、あの猛攻でも破壊されなかったアーマー・シエルが弾け飛んでリリース本来の体が露出。

その飛んできたアーマー・シエルのパーツで豪快に分身体の3体が犠牲になったが、それも想定内なので気にせずリサティーションに状況に集中する。

リリースの必殺技であるリサティーションは、自分と強化外装が受けたダメージの総量に比例して威力が上がる爆発性の衝撃波を放つもので、防御型のリリースが転じて攻撃に出た時に繰り出せる文字

通り『起死回生の一撃』。

衝撃波の範囲は半径10mとなかなか広く、強制ノックバック効果もある。リリースの目の前に立っていたジャイアント・スノーマンは当然、その衝撃波の餌食となって、オオツナミトリサティションの圧力の板挟みに遭い破壊されてしまう。

その衝撃でジャイアント・スノーマンの中からアキラが飛び出てテルヨシ達の方に落ちてきたので、アキラを回収しつつジャイアント・スノーマンとリリースの必殺技によって出来たオオツナミの空白に入るため前進。

それでもなお、いくつかのブロック片になったジャイアント・スノーマンをオオツナミが押し退けて来ようとするので、第2波としてサアヤ、ユリ、シズク、リクトが動く。

「《ブラスト・ゲイル》！」

「《レイズ》！」

「《ジャイロ・ショット》！」

「派手にゆこうぞー！」

サアヤのブラスト・ゲイルは展開剣の状態で放たれたので、横倒しの花卉のように並んだ《ブレード・ファン》がミキサーのように回転し迫るオオツナミを狭い範囲ながら弾き飛ばす。

ジャイアント・スノーマントリサティションで威力も減退していたのでどうにか相殺出来ているが、時間の問題でもあるのでほぼ同時にリクトとユリのジャイロ・ショットとリトル・ビッグボムがジャイアント・スノーマンの破片を破壊して押し潰されるリスクを回避。

大幅な威力削減に成功したオオツナミはそれでもまだテルヨシ達をフィールドの外へと押し出すだけの力はあるそうだったが、第2波の間に最後列に後退したりリリースとクラリツサの分身体が食い止める準備を整えている。

さらにシズクが散々待たされたレイズで強化してアネモイから新たな強化外装にチェンジ。

事前に何が出てやることを決定させているのでここでのギャンブル性は完全回避済みだが、出てきてほしい希望があるので願っている。

たら、流星弾丸の《アストライオス》が出てくれる。

「《バースト・ショット》おお!!」

そうなればシズクの行動も早く、ブラスト・ゲイルの展開範囲でカバーしきれない上の方を。さらにタキリビメがいるだろう位置を狙って巨岩爆弾を発射。

その直前にテルヨシもその両足の爪先を床に2度ずつ触れさせて必殺技の発動準備を整えておき、巨岩爆弾はオオツナミに当たると同時に壮絶な爆発をするので、サアヤは展開するブラスト・ゲイルを真上に向けて爆発のダメージを軽減。

アストライオスの巨岩爆弾の余波でオオツナミも吹き飛び、テルヨシ達も吹き飛びかけたが、クラリツサの分身体がテルヨシ達を蹴ってもフィールドに残そうと動いてくれて全員がフィールドに留まることに成功。

爆発のあとにはオオツナミがテルヨシ達の横や上を抜けて後ろへと流れていきながら、正面はほぼ完全にオオツナミを退けてその先にいるタキリビメを捉えられる視界が広がる。

『行けえ！ テイル!』

「《インビジブル・ステップ》!」

全員が一丸となつてしのいだオオツナミ。

この絵を描いたテルヨシは、その最後の締めとしてみんなの決意に応えるようにインビジブル・ステップを発動しタキリビメへと突撃。

《蒼き閃光》の異名を取る速度と電光のように鋭い動きでタキリビメを攻撃したテルヨシは、その力を発揮できる5秒間の全てをタキリビメの持つ剣に集中させる。

元々ユリ達の攻撃でダメージが入っていたこともあるだろうが、ガギンツ! ガギンツ! と鈍い音を立ててぶつかるとは蹴りは確実に剣の腹を叩き、5秒間の最後に放たれた渾身の蹴りが当たった瞬間、剣はその半ばほどの位置からガラスを砕いたかのようなサウンドを響かせて折れたのだった。

Acceleration Second 81

設定した切断セーフティーの時間である50時間も背中が見えてきた3度目の《タキリビメ》戦。

決死の思いで全員が繋げた技の応酬がタキリビメの《オオツナミ》を退けて道を開き、その道を駆けてテルヨシが《インビジブル・ステツプ》による渾身の連続蹴りでタキリビメの持つ剣を破壊することに成功する。

必殺技の効果が切れてタキリビメの半ばから折れた剣を蹴って距離を取ったテルヨシは、剣と丸鏡、2つの装備を失ったタキリビメを見上げる。

この段階でタキリビメのHPも4段あるゲージの1本を消失させて、2段目も2割程度は削れていたが、まだ70%くらいは残っていることになる。

オオツナミを1発退けるだけでこっちの消耗は甚大だっただけに、ここからさらに苛烈になるかもしれないと思うと気が滅入るが、剣を破壊してから折れたその剣をじっと見るタキリビメは何故か微動だにせず攻撃もしてこない。

それを不思議に思っていると、後ろのサアヤ達も警戒しながらテルヨシのそばまで寄って互いにフォローし合える位置で構えるが、その警戒もタキリビメが突如として笑い出したことで解けることになる。

『ホッホッホッ！ 愉快！ 実に愉快じゃな！ のう、小戦士達』

『……………はい？』

『この山の主として君臨し、1度としてこの身を消滅させたことのない妾に、ようやく《勇氣》を示す小戦士が現れてくれた。これが愉快でなくなると言う？』

なんだか戦闘前の威厳のある雰囲気とはずいぶん変わって、無邪気ささえ見えるタキリビメの雰囲気は戸惑いを隠せない。

どうしていいやらかな状況に顔を見合っていると、折れた剣を鞘に納めたタキリビメがふわっとその体を浮かせて本殿から降りてテルヨシ達の前に着地。

それに反射的に構えてしまったが、タキリビメ自身にはすでに戦闘の意思はないのか、空の雨雲を晴らして強制変遷させた《氷雪》ステーションの雪がフィールドに降り始める。

『よくぞ妾のオオツナミを打ち破り、その力の触媒である剣を破壊した。そなたら小戦士の勇氣はこれで示された故、ここに褒美を賜うたろうぞ』

エネミーがこうも会話に興じる現象に更なる困惑が広がるが、それを無視して両手を合掌させたタキリビメは、すぐにその手を放してそこから1枚のアイテムカードを出現させると、それをテルヨシへと贈呈。

渡されたアイテムカードには《Serpent Slayer

Proto》と表記されている。

「《サーペント・スレイヤー》？ 蛇殺し、のプロト……試作品？」

渡されたものにはみんな興味があったかテルヨシに一齐に群がって覗き込み、サアヤが素早く和訳するが、何やら未成品を押し付けられたっぽいことがわかる。

試しにアイテム化してみようとボイスコマンドで召喚してみたが、アイテムカードはうんともすんとも言わずに沈黙したまま。

「あの、これ壊れてます？」

『何を言うか。そこに書かれておるようにその剣は原初。芽吹かせるにはそれ相応の供物が必要なのじゃ』

「供物ねえ……」

とんだ欠陥品だと思いかけてみたが、タキリビメが言うにはこのアイテムをちゃんと実体化させるには、どこにあるかもわからない他のパーツが必要とのこと。

そこまでの苦労をする価値のあるアイテムかも怪しいが、タキリビメなどについて調べたり知識があったユリとリリースがあることに気がつく。

「蛇殺しとはつまりこれは《天羽々斬》アメノハバキリということになるのかのう」

「……なるほど。タキリビメの持っていた剣が十握剣であったなら、その可能性もあるな。天羽々斬は神話においてスサノオが《ヤマタノ

オロチ』を倒す時に振るった剣だ」

「ヤマタノオロチって確か8つの頭を持つ蛇だったな。蛇殺しって英訳はそこからなのか」

『ホツホツホツ。何やら盛り上がっておるが、妾のありがたい言葉はまだ続きがあるぞよ』

まだ推測の域ではあるものの、貰ったアイテムに当たりをつけたユリ達にタキリビメがそこまでの反応を示さなかったところを見ると、日本神話を元に作られはしていても、細かな設定まではインプットされていないような部分が見える。

あくまで外側だけを借りて作られた存在でもあるようなので、どこまでブレイン・バーストが神話の設定を盛り込んでいるかが次のタキリビメの話から推測できそうだ。

『その様子からして本来であれば妾のところへは最後に来るべきではあったのじゃが、順番を選ぶのは小戦士の自由じゃな。その剣を芽吹かせるには、別のところにおける妾の妹達の試練を乗り越えねばならん』

『《イチキシマヒメ》と《タキツヒメ》じゃな。場所はもうわかっておるぞ』

『ほう。小戦士にしてはやりおるな。じゃが覚えておけ小戦士達。妾の賜うた剣は《剣でもあり供物でもある》。妹達の試練を乗り越えれば必ずとその答えもわからうぞ』

話からすれば残りの2体のエネミーの試練を乗り越えれば、このアイテムも使用可能になるようだったが、ただのアイテムということもなさそうな意味深な言葉で締めたタキリビメは、とりあえずイベントらしい説明はこれで終わりだと告げる。

『しかし、普段は《ハイエスト・レベル》でしか言葉を交わすことがない故、顔を合わせて言葉を交わしたのは5000年ぶりくらいになるのう』

「ハイエスト・レベルだって？ 《メタトロン》が言ってた上位フィールドってやつか」

『ほう。その小戦士はハイエスト・レベルを知っておるのか。見た

ところまだその域には達していないようにも見えるが、メタトロンとな。あれは変わり者じゃから、そなた達のような小戦士に興味でも湧いたのかの』

「あら、ハイエスト・レベルに行けるなら、ここ最近にメタトロンがテムムされてダンジョンの外に移動させられてたことくらいわかるんじゃないの？ それを成り行きで助けたってだけなんだけど」

『ホッホッ。メタトロンと最後に話したのは1500年ほど前になるはずじゃが、ハイエスト・レベルは個体を正確に認識できるような都合の良い場所ではないぞ。その辺はまだまだ未踏の小戦士よの』
「腹立つわねこいつ」

「落ち着けガスト。じゃがそのメタトロンも先の戦闘で消滅してしまつたからの。エネミーとはいえ協力してくれた者が消えるのは心苦しい」

『その呼び方は正しくない。《ビーイング》と呼ぶべきじゃ。じゃがあのメタトロンが消滅とな？ 少々信じられんが……少し待て』

なんとも個性があるというか自我がしっかりしているというかなタキリビメにはビックリするが、先の一件でメタトロンがテルヨシ達に協力してくれたことを考えれば、加速世界誕生から存在し続けるエネミーはみんなこんな感じなのかなと思わなくもない。

ただこの話に全くついていけないシズク達が割り込めないまま、タキリビメはメタトロンが消滅したと聞いて驚きながらも、何やらまばたきに等しいレベルで目をつむってすぐに開ける。

おそらくはハルユキが至つたというハイエスト・レベルに飛んだのだろうが、ここからさらに加速すると現実世界と加速世界のような倍率になるから一瞬の出来事だ。

『ふむ。消滅しておらんかったぞ？ むしろ元気があり余っておつたわ。確かに消滅寸前のところまでいき、体の修復に時間はかかつておるようじゃが、今は《シルバー・クロウ》なる小戦士とリンクを結んで何やらやっておるようじゃな』

「クロウと？ 聞いてないんだが……」

「リンク？ 何かしらのデータの繋がりがしら」

「何はともあれメタトロンが生存しておったことは素直に喜ぶべきであらう」

そこでメタトロンと話でもしてきたのか、ピンピンしてるらしいメタトロンがハルユキと今も何らかの繋がりを持つてることを告げられ、そんなことは一言も聞いていないテルヨシはついリアルでもハルユキと繋がりのあるようなことを口走ってしまう。

幸い眩きに近い小言でサアヤとユリがすぐに上塗りするように言葉を重ねてくれて助かった。

『ホッホッ。話が長くなったが、妾もメタトロンと同じく、この世界がなぜ存在するのか。ビーイングがなぜ生まれたのか。そこには興味があるでの。その謎を解き明かしてくれることを期待しておるぞ』

思わぬところで思わぬ事実が判明したが、会話に興じていたタキリビメもそろそろ話も終わりだというように今度こそ締めに入り、自分もメタトロンと同じような疑問はあることを教えて、エネミーなのに綺麗な笑顔を向けてその体をすうっと消していったのだった。

これでまた本殿に近寄ればイベントが始まるような気もしないでもないので、テルヨシ達も1度フィールドの縁にまで移動して、そこで今話を整理しにかかる。

「そのですね……後半のお話はちんぷんかんぷんでしたが、前半の話からすると、テイルの仮説が正しかったということになりますわよね」

「そうだなあ。ただエネミーを倒さなくても達成になるとは思わなかったが」

やはりハイエスト・レベルなどの話はクラリツサなどにも理解はできていなかったか、そっちは今は放置して先ほどの戦闘の考察に入っ
てわかったことを述べる。

テルヨシもまさかタキリビメを倒す必要すらなく達成になるとは思っていなかったが、あの作戦を実行したのが間違いではなかったと証明されて安堵。

3度目の戦闘の前にテルヨシが出した1つの仮説。

それはタキリビメが口にしていた《勇氣》を示せという言葉の意味

を情報から独自に解釈して導き出したもの。

やたらとフィールド外に追い出しにかかってくるタキリビメの行動パターンが少し特殊なのは言うまでもないが、それに意味があるとするならキーポイントである勇気は絶対に関係しているのだ。

そこでテルヨシはこれらのタキリビメの攻撃にいづらかの『回避手段』が存在はしていることにも気づき、現にオオツナミに対して初見で反射的に上へ逃げられたが、そのあとにはまた強力なフィールドの外へと押し出す技を繰り出されてしまった。

つまり逃げ道はあるがそれを選択するとタキリビメに示すべき勇気は潰えることになるため、何かしらの条件を満たせない状態になり、タキリビメはそこから戦闘することさえ拒否していたのだ。

ならばどうすればタキリビメの言う勇気を示すことになるのかと考えた時、テルヨシは『立ち向かう』ことを選んだ。

テルヨシとしてはオオツナミの他にもまだ強力な攻撃が待っている可能性も考慮していたのだが、サアヤとユリがそれならとついでにタキリビメの持つ剣も破壊しに行こうと言い出し、その2つを目標に設定して挑んだ。

そうするとこちらに都合の良い結果が出て正直なところ拍子抜けもしたが、タキリビメの言葉を解釈するなら、あの剣を破壊するまでが試練になっていたかもしれないので、それが遅ればオオツナミ以上の技が繰り出されていたかもしれない。

「じゃがこれで他の2カ所のエネミーも今回のこれと似た試練が用意されていることが判明したのは収穫じゃな」

「あとは鎌倉と八千代だったか。順番などと口にしたからには、ここ
の試練が一番困難だったと考えるべきか。或いは……」

「まあ冷静に考えて今回の試練は私達のスキルとかがたまたま合致したって考えた方が良さそうね。順番つてのもたぶん、ここが東京から一番遠いからだとも思えるし」

「で、でもあんなに強いエネミーを倒さなくてもいいなら、またみんな
で考えれば今回みたいにクリアできますよ！」

「バーストポイントは手に入らないがな」

「それを言われるとあれだけど、イーターの言う通りクリアの条件を早めに見つければ、攻略で失うポイントとか考えたマイナス収支も少なくて済む可能性はあるよね」

「たらればな考え方は良くありませんけど、ただエネミーを倒すよりもイベントをしている感じは楽しかったですわ」

「俺はドカンとぶっ飛ばす爽快感を味わいたところだが、チームとして機能してた感じはまあ、嫌いじゃなかったぜ」

ともあれタキリビメの試練をクリアしたことで、ユリがすでに見つけている他の2カ所も同様の試練が待ち受けていることがわかる。

試練のクリアとエネミー撃破の難易度を天秤にかけるとどっちにも傾く可能性はあるが、クラリツサの言うようにイベントをやってる感じは確かに試練の方がそれらしいし、タキリビメの試練をクリアしてアイテムカードを貰った以上、それを不完全なままにするのは気持ちも悪い。

それはテルヨシのみならずサアヤ達も同じのようで、話は残された2つの試練についても考察に入る。

「タキリビメは勇気を示す試練だったわけだから、残る2つも何らかのキーワードがあるって考えるのが妥当よね」

「試練をクリアするのは前提としてだ。問題はテイルが持っているそのアイテムが《有限》である可能性と、無事にアイテム化できた時の2つの問題がある」

サアヤが予想するように、残った2つの試練にも同様の何かを示すイベントがあるのはまず間違いないので、そこには疑問の余地はない。

ただし次にリリースが指摘したことはなかなか穏やかじゃない問題で、その話を今するかといった雰囲気テルヨシ達が、出てきてしまった以上は話すしかないかと諦める。

実はタキリビメが消える前に聞いておこうとして聞けなかったことが1つあり、今回の報酬であるアイテムが試練をクリアする度に貰えるものなのかどうかの確認をできなかったのがちよつと痛いのだ。

普通に考えればこのアイテムを無事にアイテム化できたとしても、

何らかの強化外装が手に入るのは名前からもわかるが、その個数に関しては確実に1つ。

つまりアイテムを入手できるのはこの中でたった1人になってしまふということ、みんなで力を合わせて手に入れたものを独占する形になってしまう。

こういう時は大レギオンなどではおそらくレギオンマスターが所有者として立てられて解決する問題——実際に《七星外装》などもそうだから——なのだが、このレギオンにおいてはそれはただの職権濫用に近い行いでしかない。

「1つ目はまあ、もう1回やってみればわかるかもだけど、私の予想だと《3枚》が上限だと思うわ」

「儂もガストの予想と同じじゃな。これほど手の込んだ入手経路じゃと、七星外装には劣るが、それに近い上位の強化外装である可能性がある。そんなものが場合によつて量産できてはパワーバランスが崩れかねん」

「そちらの推測はそれでもいいとして、現状でこのアイテムが欲しいという方はどのくらいいますか？ わたくしは剣のようですし見送らせてもらいますが」

「俺も剣ならいいや。手に何か装備するとアビリティも必殺技も活かせねえし」

「俺もいらんな。必殺技は俺の装備をまとめて弾き飛ばしてしまうし、重装備状態ではまともに振れる気がしない」

「アタシもいらねえ。下手に近接装備を組み込むと臨機応変さがなくなる」

「私も《ブレード・ファン》で事足りてるからなあ。持ってもいいなら持つに越したことはないって感じ」

「儂はそもそも剣自体に振られるくらい軽いので。扱えん装備はかえって邪魔じゃ」

「僕は……ちよつと使ってみたいかもです」

「逆に凄いくらいのいらぬ意見のオンパレードね……オレも別にそこまでって感じだけど、アビリティで試したいことはあるからちよつ

と欲しい」

その入手できるかも強化外装の上限も予測しつつ、クラリツサの質問に対してテルヨシとサアヤとアキラ以外がいらぬというこの清々しさはあつぱれ。

こういつたイベント入手の強化外装は性能も良さそうだから、普通は取り合いになったりするところだったが、ここまで性能度外視——そもそも性能がわからないところはあつぱれ——で自分のステータスやらを考慮してキツパリといらぬと言えるのは凄いいことだ。

まあそのくらいの我を通せないと《五芒星》などと呼ばれるまでの実力はつかないということなのもかもしれないが、結果として予想する上限ピツタリの人数に収まってくれたのはこの上ない幸運だ。

「それでしたらもう1度タキリビメに挑んで、複数個入手可能ならもう1度。入手できないようでしたらそれで今日は解散ということですよ。よろしくて?」

「それでいいけど……何故にシンデレラが仕切ってるんですかね」

「まあ良いではないか、ガスト。時間も8時間を切っておる。ポータルを潜って正規の離脱をするために日光市の街まで降りねばならぬし、サクサク行かねばな」

拍子抜けするほどに呆気なく終わった話に苦笑していたら、クラリツサがどんだん話を進めてまたタキリビメの試練攻略のための準備を始めた一同の切り替えは早く、自然と仕切ってるクラリツサにサアヤが疑問を持ったものの、グダグダになるよりいいのでユリがなだめていた。

ただリリースの《アーマー・シエル》がなくなったので序盤の攻略は組み直しになり、その辺を詰めながらシズクがアキラに必殺技ゲージを溜めさせてもらいながらまた《アネモイ》が出てくるまで必殺技を使いまくる。

そうやって1時間とかけずに次の準備を整えたテルヨシ達がまたタキリビメに挑むために本殿の近くに近寄ると、予想通りタキリビメが出現した。

『……………なんじゃ、またそなた達か。強欲にも妾の宝を賜りに来た

か?』

「あれ? イベント台詞はなし?」

『そのようなものはただの形式でしかない。1度妾の試練を乗り越えた小戦士達に、何故また同じ試練を与えねばならん』

「えつと……じゃあ戦わなくてもいいのかしら?」

『ふむ。妾は戦うのもやぶさかではないが、無意味なことに時間を労することもまた無駄であろう。じゃが何もなしにいうのも味気ない。試練の代わりに……そうじゃな、そなた達の冒険譚でも聞かせよ。妾はこのような辺境にいるゆえ、多くの小戦士がおる場所はこの目で見ることが叶わんからな』

—— 個性的にも程があるよなあ。

戦う気が満々だったテルヨシ達だけに、出現して早々に本殿の上から降りてきてしまったタキリビメが完全に敵意をなくして笑う。

この辺のAIと思えないほどの自我には戸惑うばかりながら、戦わずしてアイテムが貰えるならそれに越したことはないので、暴れ足りないシズクがふんがー! 言ってるのをなだめつつ、タキリビメの求める冒険譚とやらを腰を落ち着けて1人1人が語っていった。

実に4時間ほどでもテルヨシ達の話の相槌を入れながら聞いていたタキリビメだったが、テルヨシ達もそろそろ山を降りないとポータルを潜る時間がないと思い始めた時。

テルヨシ達の引き出しが底を尽きそうなることを察して大体で満足したか切り上げてくれて、報酬としてアイテムカードを2枚、サアヤとアキラへと渡して消えようとする。

しかしその前にとテルヨシが1つだけお願いをして、山を降りる手助けだけしてもらおうことにし、みんなに《テイル・ウィップ》を掴ませてひとかたまりになると、フィールドから降りてすぐに戻り、タキリビメの衝撃波をあえて食らって日光市の街の方に吹き飛ばしてもらう。

そこからは満タンの必殺技ゲージを使って全員が落下ダメージを防ぎ、無事にポータルを潜って離脱することに成功した。

—— こうしてテルヨシ達の少しだけ長いミッションは当初の目標

を達成して終わりを迎えたのだった。

オリジナル

Acceleration Second 82

7月13日、土曜日。

各々が学校や用事を終わらせて午後4時30分になった頃に喫茶《せせらぎ》に集合した《メテオライト》の面々。

《チャイブ・リリース》だけはまだリアルでの面識がないので合流は出来なかったが、今は中野第2戦域のどこかで領土戦が始まるのを待っていてくれる。

あの《神獣級》エネミー《タキリビメ》との戦闘も昨夜のことで、レギオンとしての強度を上げられたはずの今日を迎えたわけだが、集まった面々の神妙な面持ちにはレギオンマスターであるテルヨシがジューズを飲みながら苦笑。

サアヤとユリは経験が豊富なため多少はリラックスしているように見えて、やはりまだまだ急造に近いメテオライトの不安要素は危惧している様子。

クラリツサとリクトは領土戦こそ経験はあるが、これから戦うのは本気でこちらを潰そうと1週間前から編成などを考えてきただろう赤、青、緑の大レギオンとあって、落ち着いているようで考え事は尽きないような表情。

シズクとアキラはプレッシャーに弱いところがあるせいか、すでに血の気が危ういものの、始まってしまえば腹は括ると信じたい。

「さてと、もうすぐ始まるけど、何か不安なことは？」

「ズバリ言うわね。不安要素なんて考え出したらキリがないわよ」

「そうね。そんなのプロミにいた頃もいっぱいあったけど、このレギオンは特に多いかも」

「そ、そんなこと言われるとますます緊張が……」

それらの内心を大体で察した上で領土戦の前にあえて口を開いたテルヨシが愚問とばかりの問いかけをすると、半分くらいは呆れながらのサアヤとユリがすぐに答えて、アキラがオロオロしてしまう。

付き合いの短いシズク達はここにどう反応すべきか迷いがあつて口は開かなかつたが、サアヤ達の反応だけでも展開できると思っていたから問題ないとばかりに笑顔を見せて話を続ける。

「そうなんだよねえ。オレも昨日はあのあと領土戦のことを考えながら寝てただけけど、考え出したら終わりが見えなくて……」

「まさか徹夜したんじゃないでしょうね」

「開き直って寝ました」

リーダーとしてちゃんと考えてるのかと思わせることをそれらしく言うから、サアヤも本当に徹夜していたなら褒めるかもな雰囲気を出した。

だがテルヨシはそんなサアヤをバツサリと切り捨てて早々に寝たことを告げると、サアヤを含めて全員がため息を吐いて呆れてしまう。

そういう反応は良くないし！ とツツコミを入れたいところではあるものの、ここはグツと堪えて今度はリーダーらしく話をまとめに行く。

「でもオレが開き直つたのは別にネガティブな動機じゃないんだよ。サアヤ達ならきつと、どんな相手でも全力以上の力を出して戦って、そして勝利してくれるって信じたから、安心して眠れたんだ。不安な要素は確かにあるけど、自信満々で挑んで心を折られるより、やっぱりこうなつたかつて考えの方がダメージも少ないじゃん？」

レギオンとしては不安いっばいなのはもう仕方のないこと。

ならばそれを上回るポジティブな考えがあればいいんだと言うテルヨシの開き直り方は、少し強引で無理もあつた。

しかし自分達の実力を信頼していると言われて嬉しくない人間はこの場にはいかなかったようで、ちよつと照れ臭さも見せながらのサアヤ達は、ここでこれ以上ネガティブなことを言っても仕方ないと割り切ってくれたようだった。

「フフツ。なんだかテル君がレギマスっばーい」

「失礼ですよユリさん。オレは真正銘レギマスなんですから」

「それって私が言わなきゃサアヤがずっとレギマスだったから、実質的にテルがそれっぽくなつたのは私のおかげよね」

「クラリツサのおかげとか恩着せがましい言い方はあれだけど、頭がしっかりしてくれるのはこっちとしても喜ばしいことね」

「サアヤ姉はテルさんがカツコ良いこと言ったから嬉しいの間違いないじゃ……」

「アキラ君、そういうことは言わない方が……」

「惚気なら外でやってもらえませんか？　僕は遊びに来たわけではないので」

それを証明するように緊張やら不安やらが消えたとまでは言わないまでも、ずいぶんと和らいだ面々は各々がらしい感じで口を開いて和気藹々わきあいあいとしてきて、アキラとリクトにからかわれたサアヤは2人にゲンコツ。

それが照れ隠しなのかどうかテルヨシはあえて探りはしなかったが、鉄拳制裁をしたサアヤが雑談はここまでといった雰囲気ですパツと切り替える。

「それじゃあ領土戦前の作戦会議やるわよ。1人いないけど、それは始まってからでもどうにかしましょう」

その切り替えの早さにはいつもながら感心するテルヨシは、レギマスになってもこういう仕切りはまだサアヤの方が上手いなあと思いつつ、各々の持つXSBケーブルをニューロリンカーと直結させて、領土戦前の直結対戦の場を会議場とした。

作戦会議と言っても、3レギオン毎にどういう人選をしてどんな戦術を使ってくるかは全くの未知数であることもあって、具体的に『こういう戦い方をしよう』というのをガチガチに固める必要はない。

そういうのはエネミー狩りなどのパターンを作れる時のものなので、今回に限れば相手の出方次第で臨機応変に対応出来るように柔軟な計画を立てるに留める。

主な段取りとしてはスタート時。

領土戦では戦域内を東西にバツサリと分けて自陣と敵陣が区切られて、その陣地内に1人1人がランダムで配置される。

そこからまずはどうするか。敵も同じ条件なことから、まずはレギオン内での合流は最低限としても、闇雲に動いて接敵が先になるとそ

こから崩れる可能性は低くない。

数的優位を作るのも大事だが、8人全員が固まったからといって、それが領土戦での有利になるかはまた別問題。

8人集まったからそこを一網打尽なんてことも起こりうるだけに、単純に数的優位を作り出すのは戦術の幅を狭める行為になるわけだ。

そういった基本戦術からしてシズクみたいな領土戦の経験が皆無な人には養われていないし、クラリツサやリクトも本気で攻めてくる大レギオンを相手となれば勝手が違ってくる。

と、それらのことを共通認識として頭に入れていると、改めて不安要素が色々と浮き彫りになってゲンナリしそうになる。

テルヨシだつて8対8の領土戦は初めてなので、始まってどういう展開になるかは予測が難しいし、目の届かないところでの戦いも考慮しなければならぬので気疲れもあるだろう。

それでもやると決めた以上はテルヨシもサアヤ達だつてとつくに腹は括っている。

だからなのか会議が始まってからはあのシズクさえも無駄口を叩くことなく黙って話に耳を傾けていて、自分が領土戦で一番足を引っ張りかねないことも理解しているのだ。

そんな殊勝な態度のシズクを見せられればテルヨシ達もおふぎけを挟めるわけもなく、滞りなく真剣そのもので終わった作戦会議を経て、午後5時ジャストを迎えて、ついに領土防衛の3連戦の火蓋が切って落とされた。

《レガッタ・テイル》となつてフィールドに降り立ったテルヨシがまず確認したのは、フィールドの属性と自分の現在地と、対戦するレギオン。

フィールド属性はこの先の自分達に暗雲でも立ち込めるかのような曇天と無機質で強固なオブジェクトで構築される《魔都》ステージ。

デュエルアバターによつては必殺技ゲージが溜めにくいこともあって、フィールド中央に配置される《要塞拠点》ストロング・ホールドは占拠すれば必殺技ゲージのオートチャージが可能なので、ここの使い方が勝負どころで効いてきそうなところ。

次に自分の現在地を周囲のオブジェクトや地形から数秒で割り出しにかかり、もう2年近くもバトロワなどで駆け回ったことから中2戦域のどこにいるかはざっくりと判別できる。

神田川沿いの南側で川の流れ方から方角もわかり、自分達が西側の配置であることと、近くに拓けた広い空間があることから、そこが運動場だと判断して中野富士見町辺りにいると断定。

そうなるフィールドのほぼ中央に配置されたことになって、要塞拠点はほぼ北に500mとない新中野駅にある。

作戦としては真つ先に占拠に行く手もあるが、例外なく要塞拠点は拓けた空間に配置されるため、敵の編成が遠隔揃いなら良いになること間違いなし。

その辺を見極めるための最後の確認で自分と一番近い敵のデュエルアバターの名前を確認してレギオンを特定していけば、危なかった。

右上の表示には《Thistle Porcupine》の名前があり、《シスル・ポーキュパイン》と読むそのデュエルアバターはプロミネンス《三獣士》の1人。

「ポツキーかいな。どう動くかわからん」

確かに先週にレギマスであるユニコが三獣士を全員出すみたいなことを言っていたので、領土戦に出張ってきていても何ら不思議はないが、本当に三獣士を出撃させてきたならハードな戦いになるなど思わざるを得ない。

さらに相手が遠隔揃いのプロミなら要塞拠点の占拠は後回しがいと判断して、感情の起伏が激しいポツキーがテルヨシの名前を見てどう動くか見極めてから動こうと決める。

仮にもレギオンの幹部なので独断専行してぶつかってくることはないと願っていたが、あのポツキーなので先制パンチとか言っただけで仕掛けられる可能性は十分にあるのだ。

その辺でどうかとガイドカーソルの動きを静止して見ていると、カーソルの向きはゆっくりではあるがフィールド中央に向かう進路を取ってテルヨシに近づいてくる感じではなかったから、おそらくは

向こうもまずは合流を図ったものと判断。

それならとテルヨシも領土戦前にいくつか決めていた事柄を思い出して、開始から30秒経つところでその意識を音に集中。

すると少し離れた位置でドゴオン！ という爆発音が炸裂し、戦闘が起きたのかと思うが、違う。

これはこちらの合流を図るためのサインで、ユリが《リトル・ボム》を爆発させて現在地を音で教えてくれたのだ。

その音がした方向に最速の最短で駆けつけたテルヨシは、相手がプロミであることから先制のための作戦を実行しようとする。

ユリがいたのは要塞拠点のほとんど西側の戦域の端っことで、素のスピードが一番あって位置も近かったテルヨシが最初に合流することに成功。

ユリの合図に応じる予定だったサアヤとリクトもすぐに来るはずなのでそちらを待つのも1つの手だが、プロミが相手なら悠長にやってるより攻める。

「バーちゃん、飛べる？」

「構わん。上げよ」

なので合流して早々に簡単な確認を取ってから小ジャンプしたユリを足で受け止めてそのまま勢い良く上空へと蹴り上げてしまう。

ユリは《デイセント》のアビリティで降下しながら降りられるので心配はないし、これでプロミに先手を打てたはずだ。

具体的にどうなるかと言うと、フィールドの上空に上がったユリは視認してなければそれだけで高い視点から索敵からの不意打ちが可能で、そのユリの攻撃で敵の位置を大雑把に把握することが出来る。

もしも今の打ち上げが見られていたとしても問題なく、ユリを警戒して向こうの足が鈍ればそれだけで効果はあり、高高度にいるユリを撃ち落とせる戦力があるかの判断も出来るし、攻撃してくれば居場所もわかって回避は比較的容易。

こっちのリスクを最小にしながら敵の動きに制限を与えられる最善の1手。

実際にこれはかつてのプロミもやっていた戦術の1つで、まさか自

分達がやられる日が来ようとは夢にも思わなかっただろう。

どう動いてもプロミ全体の鈍化には成功したも同然で、ユリも降下先は要塞拠点を目指してくれている。

さらに領土戦前の打ち合わせのメールで《チャイブ・リリース》には開始からまっすぐに要塞拠点を目指すように指示を出しているの
で、タイミングが合えばそのままユリとの合流も出来るだろう。

「次だな。ガツちゃん、スピン。そっちは任せた」

「なるべく早く準備しなさいよね」

「要塞拠点の動きが気になるが、リリースが耐えてくれるだろう」

あまり楽観視するのも良くないものの、失敗してもリカバリーする能力は各々がちゃんと持ってるので、本格的な戦闘が始まってもし立ち回りに大きなほころびは出ないと信じて、合流してきたサアヤとリクトとは会話も短くまたすぐに分かれてフィールドへと散る。

この領土戦ではいくつかの作戦を同時進行で進める予定でいたが、そのうちいくつが通るかは不明。

だからこそ全てを試していこうと強きに出たテルヨシ達が次に仕掛ける手は2つ。

1つは開始から要塞拠点とは違う、自陣に配置される拠点を1つの目印にあらかじめリリースのように向かわせて合流を図る計画で、もう1つもその方法で合流はできているはず。

フィールドのどこに降りてもそこと決めておけばすれ違いは起きないし、合流の間に接敵されたら要塞拠点に移動するようにも指示している。

つまり行つた先に人がいなく、決めた時間内にも来ないようなら次の作戦にという流れだったが、テルヨシが向かった拠点にはバリバリに警戒心を上げているシズクが狙撃銃の《カリス》を構えていた。

そのせいでテルヨシの接近にも恐ろしい反応をしてカリスを向けられたものの、テルヨシとわかると狙いを外して「遅え！」と怒られてしまった。

「暴れたいのはひしひしと伝わるけど、それを面に出さないようにね。オレとルールーは……」

「んなのわかってる。オラ行くぞ。アタシ達が動かなきゃ他が苦しくなるんだろ」

「ではエスコートさせていただきますよ、お姫様」

そんな血気盛んなシズクをコントロールする役目になるテルヨシがせめてもの助言として釘を刺しにいくが、ちゃんとわかつてはいるシズクも怒鳴ることもなく了承して移動を促す。

シズクはシズクで面倒な性格をしているが、根は良い子なのでテルヨシも余計なこととは言わず紳士的な態度で接してから《テイル・ウィップ》をシズクの体に巻き付けて持ち上げる。

もう1つの作戦が無事に決行していきければ動きやすさが段違いになるのだが、それは本格的に戦闘が始まらないとわからないところはあるので、それを待つよりも先に動いたテルヨシとシズクがこの防衛戦で担うのは、遊撃だ。

レギオンで一番の機動力を持つテルヨシがシズクを持つて移動することで、移動と攻撃を分担し、ヒット&アウェイを狙い続ける。

これが綺麗に決まれば相手にとってウザいことこの上なく、テルヨシ達に気を取られて大技持ちのサアヤ達が制圧に乗り出せばトントン拍子で勝ちが転がり込んでくるというわけだ。

実際はガイドカーソルという厄介な存在が奇襲という行動を阻害してしまうので、思うよりも遊撃としては機能しないのは想定内。

その対策のための手がもう1つの作戦になるので、それと並行できれば遊撃はようやく十分に機能する。

それまではとにかく敵陣内でひたすらに動き回ってシズクに攻撃してもらってかき回し、向こうの作戦や準備が整うのを妨害。こちらの作戦が成功するのを援護する。

「まずは誰がいるかを把握するからね」

「それはお前の仕事だ。アタシは撃つ」

それが最良と意思つつ、この遊撃での目的はプロミの8人の参加者を全て暴くことにもあり、今のところわかっているのは移動中に切り替わったポツキーと《ブレイズ・ハート》、《アイオダイ・ステライザー》の3人。

三獣士の残り2人《ブラッド・レパード》と《カシス・ムース》もいるものと考えて、あと3人が誰なのかを判明させるために硬質な魔都ステージの地面を蹴って敵陣内に突入。

いま表示されているのはブレイズでガイドカーソルの指す方向にまっすぐ突っ込んでいるので、もうすぐ接敵はするはず。

方向的には要塞拠点とは違う拠点にいそうな感じで、待ち伏せの可能性もあるしユリの牽制で下手に動けない可能性もある。

どちらにせよやることはシズクによる当て逃げと情報収集は変わらないので、速度を緩めずに走り敵拠点のあるだろろう角を曲がると、いた。

ブレイズの他に《ピーチ・パラソル》の姿もあり、右上の表示も2人分のもの変わる。

「きたきたあ！ 正面からとかナメんなよ！」

「ハトつちと私から逃げられると思わないで……」

「ブツ飛ばーすッ！」

2人ともが遠隔攻撃型なのはすぐにわかったので狙い撃ちされないうようにすぐに軌道修正しつつ、待ってましたとばかりの2人の言葉を遮るようにシズクが攻撃されるより先にカリスをぶっ放して牽制。

その有無を言わさない先制には2人も慌てて拠点の裏に隠れたが、こちらの目的はこれで達成したのでシズクに追い打ちを警戒させながら次の相手に移行。

清々しいまでのヒット&アウェイに攻撃はシズク任せでなんだか楽な仕事してるなあと走りながらに考えてしまったテルヨシだが、タクシー並の揺れのなさでシズクを運べる技術は何気に凄くて、攻撃の際にも地に足がついているんじゃないかと言うほどには安定していたらしいシズクからも「その調子で頼むぞ」と褒められる。

それには調子に乗っちゃうテルヨシが速度を上げて次の相手を求めて激走していると、今度は《オーカー・プリズン》の表示が現れ、すぐに接敵からのヒット&アウェイで離脱。

これであと1人が誰かわかれば向こうの作戦の1つも見えてくるなど思っていると、プロミ側の陣地内でいくつかの戦闘音が聞こえ始

めて、爆発の音などからユリの攻撃もいくら放たれていることはわかった。

だがそれ以外にも面白そうな戦闘が起こっているらしく、テルヨシとシズクが敵陣を南から北へと縦断していたところで、バツタリとクラリツサと遭遇。

ただしこのクラリツサは100%必殺技である《マスカレード・ボール》によつて生み出された分身体で、それを証明するように本人も「偽者ですわ」と暴露。

この分身体が敵陣に進行してきたなら、いよいよこつちのペースだと思いつつ、混沌としてきたフィールドを止まることなく駆けつけたテルヨシは、ここからが本番だと言わんばかりに楽しそうな笑みを浮かべた。

Acceleration Second 83

いよいよ始まった《帝城》攻略に向けての第1歩となる領土防衛戦。そのオープニングを飾ったのは赤のレギオン《プロミネンス》との対決。

序盤でテルヨシ達のペースが作られてきた流れが向こうにとってどう影響してくるか、それが徐々に見え始めてくるだろう展開まで進んで、ヒット&アウェイの遊撃に回って敵陣を駆けていたテルヨシとシズクと合流してきたクラリツサの《マスカレード・ボール》の分身体の1体が情報をもたらしてくれる。

「わたくしの本体とイーターは無事に合流。猪突猛進とスピンも遅れて到着して手筈通りに進行させていますわ」

「なら要塞拠点の方にも回っておいて。バーちゃんとりリリースには頑張ってもらわないとだし、情報は入ってる方がありがたい」

「わたくしとは違う分身体がすでに向かっていますわ。あなたの方が失敗するとは考えていませんから、このままわたくしは攪乱に回りますわね」

なんとも便利なことこの上ないクラリツサの分身体は、しっかりと個々で自我があつて思考力もクラリツサと同等にあるので普通に会話が成立してしまう。

それを利用して伝令役などもこなせるが、打たれ弱いのは欠点で伝わる前に潰されると残念賞。

だが1度に最大で20体も分身体を作り出せるクラリツサが《フリーザー・アイス》で必殺技ゲージをすぐに満タンに出来るなら、それは数の暴力。

1分毎に分身体が20体追加されてフィールドに散らばっていったら、仮にインターバルの間に10体倒されても増えていくわけで、しかも分身体は防御力を除くステータスがクラリツサと同じなら放置など出来るはずもない。

さらに厄介なのは分身体のステータスはちゃんと相手にも表示されてしまうため、プロミ側からすれば一番近くに分身体がいれば右上

にはクラリツサの名前と分身体のHPゲージ、必殺技ゲージが表示されてしまい、テルヨシ達の索敵を困難なものにしてしまうのだ。

これで分身体がフィールドに満遍なく散らばってくれば、テルヨシとシズクはほとんど相手の視界に表示されることなく遊撃が可能となり、無数の分身体がアナログな口頭での情報共有をして常に相手の情報をこちらにもたらすことさえ出来てしまうわけだ。

攻撃の軸、妨害の要、諜報の肝。それらをやったのけるクラリツサの働きは獅子奮迅と言つていいだろう。

「おい、要塞拠点の方が静かだぞ」

「うーん。こりゃ読まれてるかもねえ」

まだクラリツサの分身体が本格的に増え始める段階ではないが、移動中の集中力も並みではないシズクがフィールドの中央。

要塞拠点がある場所の戦闘音がしないことを教えてくれて、意図的にクラリツサの分身体を避けさせている都合、そこでの戦闘はユリとリリースが担当することになるのだ。

そこで戦闘音がしないならプロミのメンバーがそこにいないことを意味し、要塞拠点を無視するというのはなかなか思い切った判断。それとも……

今回の領土防衛戦でテルヨシ達は、従来の戦い方であったアキラ主体のフィールドアドバンテージを利用した制圧——強制変遷と必殺技——を封印することになっていた。

もちろん戦いに持ち出すこと自体は戦術の幅として全然ありだが、レギオン《メテオライト》がチームとしての力を証明するのならば、誰かを大きな主軸にする戦い方は避けたかった。

だからこそレギオンとしての可能性をいくつも試して実行しているのだが、付き合いの長いパドやポツキー、カッシーがこちらの思考を読んで何をしてくるかを予測してきた気配がある。

その最たるが要塞拠点にいるリリース。

リリースは優秀なタンク兼、終盤での爆発力がパフォーマンスとして魅力のデュエルアバターだが、タンクと爆発力が発揮されるためにはリリースは敵からの攻撃を受ける必要がある。

それはつまり攻撃しなければ鈍重な壁に等しく、戦いを支配して数的優位が確立してから数と火力で防御力を上回り、一気に押し切れてしまう可能性——最悪、遠隔攻撃だけでも倒せる——が高い。

そしてレギオンで一番ユニークなアビリティを保有するアキラと誰を組ませると厄介なのか。

それはほぼ2択だったはずで、超火力を有するユリと実際に人海戦術をやっているクラリツサ。

そのうちのユリが開始早々に空に上がったのを見たのなら、ほとんどクラリツサとアキラが一緒にいるだろうことはパド達にもわかったはずで、下手をすればすでに索敵されて潰しに行かれているかもしれない。

そうした襲撃を警戒してサアヤとリクトを合流させ護衛に回したが、遠隔攻撃のいない守りはちよつと厳しいかもしれない。

そういう危惧があるからこそテルヨシとシズクが遊撃に回ってまとまった攻撃をさせない立ち回りで削りにいつてるわけだが、詰まるどころその遊撃すら読まれていたら攪乱も意味を為さない。

プロミの残り1人のメンバーもまだわかっていないし、メンバーをほぼ宣言していたこちらとで情報アドバンテージが最初から向こうにあったのは痛かったかもしれない。

それくらい不利を覆すレベルでなければ帝城攻略も夢物語と思うことで気持ちを向上きにするしかないのです、ここからは向こうにこちらの意図がバレている前提で動こうとシズクにも方針を話そうとしました。

「……ッ！ おいバカッ！」

「なん……だぶっ!?!」

遊撃のために大通りを避けて細道を選んで走っていたテルヨシは、右上にある表示が《オーカー・プリズン》とありガイドカーソルもちやんと正面右の方を指しているのを確認はしていた。

オーカーは高い拘束能力を有する黄系の間接アバターで目視でもしなければ能力は使えないと油断していた、わけでもないのだが、プロミの動きを先読みしようと思わされていたせいで注意力が落ちてい

た。

だから頭上から地面に向けて放たれた《糸》に気づかずに、地面と接着した糸に正面から激突し弾性によって弾き返された。

「ぐへっ……この糸はシドにゃんー」

「早く放せバカテイル！」

オーカーにはこんな糸は出せないし、伸縮性のみで特化したこれは《Masterd Salticidae》の持つアビリティ《ドラッグライン》で間違いない。

図らずも最後の1人がこれで判明したが、ハエトリグモの名を持ち索敵能力の高いサルテイシドがいるとなると、いよいよこちらの位置情報もバレているのが濃厚になる。

そのサルテイシドのステータスがまだ表示されていないのでオーカーよりも遠い距離、高さにいることはわかるが、《テイル・ウィップ》に掴まれていたシズクが放せと暴れるから反射的に解放。

すると直後にテルヨシの周囲の地面からツメのような柱が30本近くも出現してテルヨシの頭上辺りを頂点に集束。

あつという間に鳥籠のようなケージに閉じ込められてしまった。

「あらあ……」

「ホントバカだよな、お前」

見るも無惨に拘束されたテルヨシが呆然としていたら、ちやつかり危険を察知して拘束を逃れていたシズクがケージの外から悪態をついてくる。

正直、ぐうの音も出ないから言い返すことさえ出来なかったが、このケージはオーカーの拘束用の必殺技《エッジド・ケージ》だ。

オーカーの大きなツメのある両手を地面に接地させて、地中から巨大化・本数を増したツメのケージの内側にはカミソリのような刃もあるので、攻撃して壊すにしても相当のダメージは覚悟しないとなくなる。

「にゃんとかつけるのやめてほしいしい」

ただしこの必殺技の間はオーカー自身が動けないデメリットがあるので、ガイドカーソルが出ている先のオーカーを攻撃してしまえば

問題は解決できる。

しかしそうはさせまいと建物オブジェクトの屋上に潜んでいたサルテイシドがドラッグラインで降りてきて、テルヨシの呼び方にツツコミを入れてくる。

サルテイシドはかなり細身のマスタードからなる黄色系のF型アバターで、特徴的なのは顔にある目がいくつも横並びにあり、それが後頭部にまで達していること。

この目のおかげで索敵能力が高いわけだが、戦闘能力はハッキリと言えばシズクが敵わないといったことはない。

「ルールー、先にオーカーを。これが解ければオレも戦える」
「状況をもっとよく見ろ。もう遅えよ」

本当ならテルヨシとシズクの両方を拘束したかったところなのはすでにわかっている事実として、そうならなかったなら崩す余地はあると判断しサルテイシドは無視してもオーカーを狙うべきと思った。

だがサルテイシドに目がいつていたテルヨシに対して冷静に視野を広げていたシズクはオーカーを指していたガイドカーソルの方向にも目を向けて《カリス》をストレージに戻して、新たに出てきたハンドガン《アネモイ》に弾速重視の《エウロス》の弾丸を装填。

するとオーカーのいる方向から、先ほど遊撃で確認していた《ブレイズ・ハート》と《ピーチ・パラソル》が姿を現して、オーカーへと攻撃するのを阻むように戦闘体勢に突入。

ブレイズはユニコと近い小型のF型アバターで、燃えるような真っ赤な装甲にどこぞのアイドルかと思うようなツインテールとアーマースカートが特徴。

一見すると無手で遠隔の赤？と思われないが、音を炎の武器に変えるマイク型の強化外装を取り出したら彼女のライブスタートの合図。

パラソルはどこかのお嬢様風なピンク色の装甲にパラソル型の強化外装を持つF型アバターで、パラソルは広げれば防御に使え、閉じた状態なら先端にある銃口から弾丸を発射できる。

「さっきはよくも撃ってくれたな！　これはお返しだー！」

「食らうんだよー!」

状況としては4対2だが、拘束されてしてのテルヨシとオーカーを除けば3対1。

その数の有利を生かすようにしてオーカーへの道を阻みながら攻撃を開始したブレイズとパラソルは、それぞれマイクに声を響かせて燃える8分音符と重い弾丸を1発ずつ発射してきた。

「ルルー!」

「蹴散らす!」

向こうの狙いはテルヨシとシズクの両方と取れる攻撃だったが、その場に屈んで躲したテルヨシに対して果敢に出たシズクは、動き出す前にちゃっかり後ろのサルテイシドに1発撃って初動を抑えていた。

現在地はユリが空に上がっても建物オブジェクトが死角を作ってしまう位置関係にあつて、その辺も考えて罫を張ったのだとわかる。だとするとこの4人はテルヨシとシズクの2人を倒すように指示を受けていたのだろう。

サルテイシドがこつちに回っているなら、おそらくパド達はサアヤ達をすでに捕捉済みと考えていい。

クラリツサの分身体も思うようには展開できていないことも、近くにいないことからわかるので《アイオダイン・ステライザー》の広範囲攻撃で妨害されているかもしれない。あれは一撃で消し飛ぶ分身体の天敵とも言えるから。

となるとやはりテルヨシも呑気に拘束されている場合ではない。

オーカーのエツジド・ケージを前に強引に突破した時はレベル6の段階で4割ほど削られたが、今なら3割には抑えられるはず。

そう思つて立ち上がり攻撃を開始しようとしたテルヨシに、まさかの前に出たシズクが気配を察してノールックで撃つてきて、当たりはしなかったがキャンセルさせられた。

「バカは黙ってる!」

「いやいやいや! この状況で黙ってるはない!」

「こんな『有利な状況』で動くなつて言つてんだ!」

味方からの攻撃には肝を冷やしたし、動くなど言うシズクに思わず反論したが、これで有利だと言うシズクの意図がすぐにわかり黙る。

確かにここは形勢的には不利なのは変わらないだろう。だがテルヨシとシズクを倒すのにプロミは4人も投入している。

それはそうしてでも確実に潰すべきと判断したからの英断とも言えるのだ。

仮に残りの4人がサアヤ達を潰しにいったとして、人数は互角。そうそう形勢が崩れたりはない。膠着状態になる可能性もある。

それに対してこちらはユリとリリースが完全にフリー。2人はもう要塞拠点を占拠して『必殺技ゲージを使いたい放題』だ。

おそらくテルヨシとシズクを拘束して倒すのに時間をかけるつもりはなかったが、シズクが拘束を逃れたから対応が少し遅れている。

そのあとにユリとリリースを倒すつもりでいたかもしれないので、そう考えればシズクの言う有利な状況は確かにある。

だが拘束を抜けようとするテルヨシを止めるのは何故か。それは簡単だ。

1つはテルヨシの無駄な消耗を抑えるため。

そしてもう1つは、こんな状況だからこそ《天井知らず》は強いのだ。

「ぬるいんだよー！」

ブレイズとパラソルの攻撃を気道から予測してスライディングで躲したシズクは、目に見える炎の音符がテルヨシに向かっているのも把握してエウロスの弾丸をすれ違い様に撃ち落とすと、すぐに立ち上がってブレイズとパラソルに1発ずつ発砲。

ブレイズのマイクとパラソルの右肩に当たってわずかに怯ませた隙にさらに距離を詰めにくくと、それを嫌いながらオーカーへの接近を妨害したい2人はパラソルが傘を広げて防御に回り、ブレイズがその後ろから攻撃する陣形に素早くシフト。

そこに無策に突っ込むほどバカじゃないシズクも足を止めて残りの2発を振り返り様に何かしようと動き出すサルティシドの装甲に的確に当ててダメージを与える。

「《ボレアス》！」

そして次の弾丸を選択して再装填を素早く行なってから、傘を広げていたパラソルに2発撃ち込み、弾丸は広がる傘にぶつかり突き刺さると、2秒後に爆発。

徹甲榴弾というのは装甲を破ってから炸裂させて破壊する弾なので、パラソルの防御は的そのもの。

もの見事に防御能力を失ってボロボロにされた傘を閉じたパラソルは、まだ壊れてはいないらしい傘を腰だめに構えてわなわなと震える。

「よくも私のパラソルをー!! 《チャージ・ショット》 おお!!」

基本的に平常心が大事な射撃職だが、パラソルはその中で適正がある方でもなく、1度怒ると敵味方関係なくぶつ放し始める悪い癖のようなものがある。

それが発揮されて敵が沈黙するまで撃ち続けるパラソルの狂気はちよつと怖いが、ボルトアクションタイプの傘は連射性能はない。

それでも必殺技であるチャージ・ショットの威力はバカにならないので、大口徑の光弾となつて放たれたチャージ・ショットは足を止めていたシズクに迫り、さすがにお膳立てなしのテレフォン射撃では当たりっこないと難なく回避。

しかし避けた先にはテルヨシを捕らえるエッジド・ケージが鎮座していたせいで、容赦なくケージにぶち当たったところをダメージを負わないようにテイル・ウィップでケージの天井ギリギリに体を持ち上げて回避。

これ、オーカーにダメージが入るんじゃないかな。

そう思いながら地面に降りて戦況を確認すると、パラソルのチャージ・ショットを避けた直後を狙ってブレイズが絶妙のタイミングで音符を飛ばしてシズクに無理な回避を強いると、バランスを崩したシズクに、

「《シアリング・ノート》！」

通常の音符よりも強力な必殺技で狙い撃ち。

シアリング・ノートは着弾から弾けて周囲に一定時間だけ炎熱ダ

メージを与える追加効果があるので大きく回避したいところだが、今のシズクにそこまでの期待はできない。

ブレイズも考えていてシズクに避けられても近くで炸裂はするようには地面に向けて放っていたため、直撃こそさすがの身のこなしで避けたものの、直後に弾けた音符の炎でスプラッシュダメージが入ってしまう。

さらにブレイズの追撃の間に再装填を終えたパラソルが間髪入れずに狙い撃ち反撃の隙すら与えない。

バトロワ祭りでは様々な思惑やらが複雑に交錯して混沌とする故に、シズクだけを複数がひたすら狙うといった状況もなかなかないし、今回はチームの連係の練度も高い。

だからその辺で押され始めたシズクにやはり加勢すべきかと足に力を込めようとしたら、またも察したシズクが片膝をつきながらもその手をテルヨシへと向けて制止を促し、残りのボレアスの弾丸をブレイズとパラソルに撃つ。

わずかな間隙に撃つたそれも策があつたわけでもなさそうで、珍しくシズクの命中率が下がる攻撃となつたことに余裕もなくなつてきたのかと思うが、そうではなくてボレアスを撃ち切つてから素早くホーミング弾の《ノトス》を装填して2発ずつを3人に放つた。

「換装！」

遠隔同士の戦いは確実に当たる状況に追い込まれた方が負ける。

そこから見ると手数が多いブレイズ達が俄然有利でシズクもまともに攻撃に構えられないが、ノトスの弾丸がブレイズ達にも回避を強いて少しは良くなった。

このままでは打開も決定打も打てないと判断したシズクは即座にアネモイを引つ込めて新たな強化外装を呼び出し相手の対応にも変化を与え、出てきた特殊弾《アストライオス》を手に持った瞬間、シズクの雰囲気が変わつたのを敏感に察知。

すぐにアストライオスの銃口を頭上へと向けて流星弾丸を放つと、空へと高く上がった流星弾丸は頂点で弾けて小さな流星の雨となつて降り注ぐ。

「つて！・どこ狙ってるし！」

シズクへの警戒をパラソルに任せて、その軌道を目で追ったブレイズは降り注ぐ流星弾丸が自分達のいる場所に落ちないことを悟って笑い混じりの言葉を漏らす。

しかし察しが良いサルテイシドがドラッグラインを両手から射出し、その先端にパラソルが暴れて破壊したオブジェクトの破片をくっつけて武器とすると、その破片をシズクに当たるように振り回す。

「バカッ！ ルーレットの狙いは『後ろ』だつてば！」

「《バースト・ショット》！」

そんなサルテイシドの叫びでようやくシズクの狙いが姿なきオーダーであることに気づいて、流星弾丸を処理しようと動いたところで、ブレイズとパラソルに巨岩爆弾をぶつける必殺技をぶつ放し、同時にサルテイシドの振り回した破片が直撃して建物オブジェクトに叩きつけられてしまう。

ただバースト・ショットをほとんど直撃したブレイズとパラソルは盛大に吹き飛んでダメージによる復帰が即座にできずにいる。

シズクもまともに動けずにいたのでサルテイシドが好機と見てもう一度破片を叩き込むために振り回す。

「……へっ、《ホーライ》かよ。《エイレーネ》……」

そのわずかな時間で必殺技使用でまた強化外装が変わったシズクの手には特殊弾のホーライが握られ、それに笑ったシズクはテルヨシもまだその効果を知らない弾丸を込めて、テルヨシへと向けて発射。

弾丸は以前見た時と同じく大した弾速もない注射器のような形状のもので、ここにきて攻撃目的でテルヨシに撃ったわけがないと信じて、その弾丸をあえて受ける。

注射器のような弾丸の針のような先端がテルヨシの胸の辺りに突き刺さると、やはり注射器だったその中に詰められた液体を注入され、それが終わるとテルヨシの必殺技ゲージが半分ほどのところから一気に満タンに。

代わりにシズクの必殺技ゲージが空っぽになっていたのを確認したところで、サルテイシドの振り回した破片が直撃してシズクが全

損。フィールドから退場となってしまった。

決死の思いでシズクがテルヨシへと繋いだバトン。

それを受け取ったテルヨシは、流星弾丸が無事にオーカーを捉えてダメージを与えたか、エツジド・ケージが解除されて拘束から抜ける。

「さあて、選手交代だぜ」

《プロミネンス》との領土防衛戦オープニングゲーム。

戦況はまだどちらとも取れない優劣の中で勝機を掴む働きをしたシズクが《マスタード・サルティシド》《ブレイズ・ハート》《ピーチ・パラソル》《オーカー・プリズン》の4人を相手に大奮闘。

オーカーの《エツジド・ケージ》によって拘束されていたテルヨシもその散り際にオーカーへの攻撃に成功して解放してくれて、ブレイズとパラソルの2人は大ダメージを受けて昏倒。

「やっぱあー！ やっぱルーレットを逃したの痛かったし！」

シズクにとどめを刺したサルティシドではあったが、拘束を解除されたテルヨシがシズクから受け取ったバトンでやる気に満ち溢れていることに明らかかな動揺を見せて弱音を吐き出す。

それでも倒そうとはちゃんとしていて、《ドラッグライン》で伸ばした糸の先端に付けたオブジェクトの破片を振り回してテルヨシへとぶつけようとしていたが、テルヨシはまずサルティシドを完全に無視。

「《インパクト・ジャンプ》」

シズクの特特殊弾《ホーライ》の《エイレーネ》によって必殺技ゲージが譲渡され満タンになっていたテルヨシは、それを使って倒れていたブレイズとパラソルの2人へと突撃。

サルティシドの攻撃を空振りさせて且つ、弱った2人へと全力の飛び蹴りで容赦なくとどめを刺していく。

それをやるとわかってて攻撃していたサルティシドも想定より容赦のなかったテルヨシに悪態をつきながら撤退を選択しようとしていたが、それはフェイク。

「エツジド・ケージ」

その姿勢を見て追撃に動こうとするテルヨシをオーカーがまた拘束しようとする。

それを冷静に見極めていたテルヨシはオーカーの必殺技発声を聞

き逃すことなく、再び地面から伸びた30本近くのツメが頂点で集束する前にインパクト・ジャンプで真上に跳躍し回避。

跳んだ先の空中からオーカーの位置をしっかりと確認してから体の向きを下方方向に向けて《インスタント・ステップ》の足場を利用してオーカーへとインパクト・ジャンプで突撃。

エツジド・ケージの発動で身動きの取れなかったオーカーはその攻撃をガードもできずに受けるしかなく、クリーンヒットで地面に突っ込んでいた両腕がもげて後ろへと吹き飛ぶ。

そのオーカーをさらに追い撃ちのインパクト・ジャンプで蹴り飛ばしてHPゲージも吹き飛ばして、ものの十数秒で3人を撃破。

もちろんこの結果はシズクの奮闘があつてのものなので、テルヨシが自慢気にドヤ顔するなんてことは全くなく、むしろ3人を倒されて本格的に撤退に動いたサルテイシドがドラッグラインで建物オブジェクトの屋上に逃げようとしたところを接近からのインパクト・ジャンプで頭上を取つてかかと落としで打ち落とす。

サルテイシドも個人戦を想定すればかなり戦えるタイプなのだが、今回は作戦の頓挫と仲間連続撃破で動揺が酷かった。

「悪いねシドにゃん。ルーラーがあんなに頑張っちゃったら、オレも遊び心は捨てなきゃだから」

「だ、だからにゃんはやめてほしいってば……」

かかと落としからの地面への叩きつけで一気に危険域にまで削られたサルテイシドはそのダメージでまともに動けなくなっていたので、その傍に着地したテルヨシは普段のおちやらかな霧囲気を今は封印して、短いやり取りを最後にサルテイシドにとどめを刺していったのだった。

シズクのおかげで戦況的にはこれで7対4の数的優位が作れたことになる。

ただテルヨシの目の届かないところすでに誰かが脱落している可能性もあるので楽観視はせずに、まずはフィールド中央の要塞拠点へと移動して、そこを占拠してくれていたユリとリリースと合流。

こちらは予想通り交戦した様子もなく無風状態で、ユリもリリース

も無傷に等しい。

「バーちゃん、リリース。暇だった？」

「準備は進めておったから手が空いていたわけではないがの」

「それよりバーちゃんが確認してきたが、ガスト達の方に《三獣士》がぶつかっているようだ。ルーレットの姿がないということは、そちらも動きを読まれて削られたようだが」

「ご推察の通りで。ルーラーの犠牲はあったけど、向こうの4人を倒してきた。残りは三獣士と《ストロンガー》のみだ」

ユリとリリースも戦況を把握はしているようで、戦闘を避けられた分ですいぶんと思考が冷静。

シズクが倒されたことにもさほどの驚きを見せずに次にどう動くべきかを考えてもいたようで、そこにテルヨシが合流してきたことから作戦は『アレ』を実行に移すことになる。

そうなるだろうとユリも要塞拠点の利点を活かして準備をしてくれたらしく、もうあと少しで完了となるところまでできていた。

「それじゃあガツちゃん達が踏ん張ってくれてる間にこつちも最終局面に備えて万全で行こう」

「こんな戦い方はプロミ時代にもやったことはないんじやが、色々悪どすぎるぞ」

「味方が言うのもあれだが、俺もそう思う」

「勝つための最善でしょ。それにリスクーな戦法ってわけじゃないんだし、全力には全力で！ さあやるぞー！」

それが整ったらサアヤ達との合流を目指して移動になるが、会議の段階でも最終手段とかなんとか言っていただけにユリもリリースも自分達の作戦に苦笑混じりの様子。

テルヨシも本当のところはえげつない作戦とは思っているが、向こうが全力できている以上はこちらも遠慮はしてられない。

そんな気持ちも込めてまだピンピンしてるリリースには悪いが、このままではリリースが役割を果たせないで、ユリの準備が整うまでの間にリリースを滅多打ちしてダメージを蓄積させる。

そうすることでリリースの最大の攻撃技が活かせるようになるの

で必要あってながら、味方を攻撃する行為には負い目はあるのだった。

「よっし！ んじゃいくぞ！」

「パド達には後日に謝っておくかの」

「それはこちらが勝てたらにしてくれ」

そうして準備を完璧に整えた段階で残り時間も700秒を切り、サアヤ達もいよいよヤバそうだなと予感。

理想としてはサアヤ達の全員が生存した状態で作戦を成功させることだが、それはあまりに高望みというもので、現実はおそらくサアヤ達もろともになるはずだ。

ユリが移動前に交戦している場所を確認してから作戦を開始したテルヨシ達は、まず《テイル・ウィップ》でリリースを掴んで持ち運び、ユリには少し遅れて出発してもらう。

サアヤ達のいる戦場まで一直線に突き進んだテルヨシは、ユリが確認した地点付近まで来てから、その一帯に入るのを拒むように立ち込めた毒々しい赤色の霧を見て苦笑。

これは《アイオダイン・ステライザー》の必殺技《アシッド・ミスト》で、強酸性の霧を周囲へと拡散するもの。

その主成分はアイオダインが示すヨウ素で、ステライザー。殺菌剤の意味するところから自らを《毒消しキング》とか呼称していたり、名前だけ見ると無駄にカッコ良いから《ストロンガー・ネーム》とも呼ばれたりする。

あとから聞いたが、かつてあの《クリムゾン・キングボルト》と《ストロンゲスト・ネーム》の称号をかけて戦って負けたから今のストロンガーに落ち着いたとかどうでも良さそうな過去もありつつ、しかしその実力は名前が強そうとかカッコ良いだけではない。

サアヤ達が戦っている場所はこの霧の向こう側のフィールド北の端っこ。

そこを起点にしたせいでクラリツサの分身体がこの霧の範囲を抜けてフィールドに散ることができなくなったのはもう間違いない。

「やっばこの霧は邪魔ね」

「だからといって突っ込むわけではないだろうな」

「そこはほら、バーちゃんがいてくれるから」

「そういうことじゃ」

霧の前で足を止めたテルヨシとリリースが無駄なダメージは負う必要はないと意見する中で、遅れて出発したユリが追いついてその手に持った3つの《リトル・ボム》をテルヨシへと放り、普通なら爆発するはずのそれを受け取ったテルヨシはユリに道を譲る。

そこからユリは手が空いたことでリトル・ボムを霧の中へとどんどん放って爆発させて、その爆風で霧を霧散させて強引に晴らしにかかり、その後ろをついていった。

「終点じゃー!」

そして霧が晴れた先では、中野駅前の通りでサアヤ達がパド達とまだ善戦していたが、さすがプロミの幹部である三獣士といったところで、すでにアキラは潰されて姿がなく、サアヤ達もHPゲージが3割を切ってしまっていた。

対してパド達はすでに《シェイプ・チェンジ》で各々がヒョウ、ヘラジカ、ヤマアラシのビーストモードへと変身を完了させていて、その3人の後方からアイオダインが絶妙な支援でサアヤ達の行動を阻害し前に踏み込ませない戦いをしている。

サアヤも発生する霧をその都度で吹き飛ばすのをもう何度も繰り返したせいか、《ブレード・ファン》を振るう腕にいつもの力がないし、リクトも霧で両手足の駆動部を溶かされたか、自慢のアビリティが封じられているみたいだ。

クラリツサも接近戦をさせてもらえないのと、霧のせいで必殺技もアビリティも上手く使えず足踏みしている。

「パド、やっぱり来たっしょー!」

「遅いのよアンタらは!」

その状況ですつと踏ん張ってくれていたなら本当に凄いの一言。

その頑張りにはシズクに負けず劣らずの功績だが、テルヨシ達の到着でサアヤと《シスル・ポーキュパイン》がそれぞれ反応を示し、こちらに意識を全員が向けた。1人を除いて。

「《ブラッドシエッド・カノン》」

テルヨシ達が合流してくるのは可能性として当然あったからこそポツキーの発言だった。

だからこそその合流のタイミングに神経を研ぎ澄ましていたのだろうパドはその一瞬の気の緩みを見逃さず小さく必殺技発声すると、その四肢を畳んで現れた赤い砲台に自らが収まると直ぐ様反応の遅れたサアヤ達へと弾丸のごとく発射。

大規模な爆発を生みながら周囲を灼熱地獄へと変貌させたパドの特攻技によってサアヤ達はその残りのHPゲージを全て奪われて退場。

数的優位になりかけたところでのこの攻撃で、一気に形勢は3対4の劣勢へと転じてしまった。

「やりおるな、パド」

「やっぱりガツちゃん達を生存させてるのは難しかったかあ」

「逆転手は打った。あとは全力でやるだけだ」

それでもテルヨシ達もまたサアヤ達が負けることを想定してこの場に居合わせたから、パドの特攻に対しても明らかな動揺は見せずに冷静に状況を把握。

数では劣勢になったが、状況ではすでに先手を打っているから、戦況はこちらに傾きつつある。

「へいプロミの皆さん！ これ何かわかる？」

その傾きつつある形勢を引き寄せるためにテルヨシは対峙するパド達に自分の指の間に収まる3つのリトル・ボムを見せつけるようにする。

当然ながらユリとは長い付き合いのプロミならこれを見せられるよりも前に自らの頭に一定の間隔でピッ、ピッ、と響く音で嫌でもわかる。

これはユリの最終兵器《デンジャラス・タイマーボム》が発する爆発までのタイムカウントで、これを3発分も作ったものがテルヨシの手元にある。

この音は爆発の範囲内にいる間は聞こえ続ける仕組みなので、爆発

範囲である直径250mよりも離れれば助かることにはなる。

しかしここは中野第2戦域北の端っこで、パド達はこれ以上に北へは逃げられず、南側に陣取るテルヨシ達が南下を阻止している。

ならば左右に逃げれば良い。と考えるのは浅はか。1発でもHPゲージなど吹き飛ぶ威力のそれをわざわざユリが3発も作ったことに意味がある。

「そいやっー」

それを実行するためにテルヨシは持っていた内の2発をパド達の逃走先である右と左の前方に思いつきり蹴り飛ばして退路を断つ。

タイムカウントは30秒。それだけの時間ではパドはともかく、ポツキー達ではまず爆発範囲から逃れることはできない。

「あと20秒だよーん」

左右の道を断たれたところに、思考を焦らせるテルヨシのタイムカウントでプロミ側はさすがに焦りの雰囲気を見せ、迷っている時間もない以上、取れる行動はただ一つ。

唯一の退路を阻むテルヨシ達を抜いて全速で駆け抜けることだ。

当然、それを狙っていたテルヨシ達からすれば願ってもない展開に違いなく、決断の早かったパドが隙を作るために攪乱に走るが、その速度にしっかりと合わせたテルヨシが後ろを抜かれることなく阻み後退させる。

阻むのはテルヨシだけでなく、スピードのパドにはテルヨシが。パワーのカッシーにはリリースが。遠隔のポツキーとアイオダインにはユリがそれぞれ動きに反応することで抑制し、的確に時間を使わせる算段は概ねで上手くいっている。

「残り15秒っしょー!」

「全員で行くしかあるまい。1人でも突破できればまだ負けではない」

「……K。ただリリ……」

「いくぜー!」

この局面での行動決定の早さはさすがプロミで、単発での突破は望みが薄いと見て全員でのアタックを決行し、なるべく多くが突破でき

るようにと、通りの幅いっぱい横一列で突撃してくる。

それも計算済みだったため、ユリが《リトル・ボム》で左右へ攻撃し牽制するが、やはりカツシー達は爆発を受けてでも強引に突破しに来て、さらに中央にいたパドが決死のブラッドシエッド・カノンを放とうとしてくる。

「来るぞリリース！」

「ブラッドシエッド・カノン！」

「《リサティーション》！」

ここでパドの攻撃を通すと左右が突破される可能性が高くなる。

パドのブラッドシエッド・カノンの威力はテルヨシも見たことがあるから理解しているが、それに負けない威力を今は出せるリリースが勝つと信じていた。

パドが突っ込んでくる直前にリリースには叫んでユリを抱えて大きく後退したテルヨシは、前方でテルヨシの攻撃をあらかじめ受け続けて威力を上げていた必殺技を発動させたリリースの衝撃波が、砲弾のごとく突っ込んできたパドを真正面から弾き飛ばす姿をしつかりと見届ける。

さらにリリースの必殺技の余波が左右を抜けようとしたカツシー達にも直撃して横の建物オブジェクトに盛大にぶつかって動きが止まる。

「よっしー！」

決死のブラッドシエッド・カノンが弾かれて後方に吹き飛んだパドとすぐに動けないカツシー達の様子を見や否や、テルヨシは抱えていたユリをさらに後方へと蹴り飛ばして離脱させ、大役を果たしたりリリースのそばにすぐに駆け寄ると、テイル・ウィップで抱えてから両足の爪先を2度ずつ地面に触れさせる。

「悪いね皆さん。《インビジブル・ステップ》」

爆発まであと10秒を切ったところで、テルヨシ達も離脱に動き出して、移動の瞬間に持っていた最後のデンジャラス・タイムーボムをその場に放っていったテルヨシは、5秒という短い時間ながらもパドをも越えるスピードで爆発範囲から一気に離脱。

移動を終えた頃にはデンジャラス・タイマーボムのカウント音も聞こえなくなったが、それは5秒の移動の直後にデンジャラス・タイマーボムが爆発したからだ。

「本当に性格が悪いとしか言いようがないな」

「褒めるなよ」

実は最初に告げたデンジャラス・タイマーボムのタイムカウントはフェイク。

向こうにも爆発範囲にいとカウントは聞こえてしまうが、聞こえる前からデンジャラス・タイマーボムを5秒早く起動させて、それからパド達にも聞こえる距離にまで近寄っていたわけだ。

だから実際にはテルヨシが告げた時間から5秒早く爆発は起き、テルヨシが離脱した時間は本当にギリギリのタイミングだったことになる。

ただでさえ焦りを生むデンジャラス・タイマーボムを3発も使い、退路を断ち、行動不能に追い込んで、宣告より早く爆発させる。

これを聞くと滅茶苦茶なほどに悪い戦法で外道かと言いたくなるが、悲しいかな、これは領土防衛戦。勝てばいいのだ。

そうやって自分に言い聞かせないと罪悪感に押し潰されそうだからそう思うことで思考停止させていたテルヨシは、リリースの呆れながらの言葉にも心を揺らさずに目が笑ってない笑いで対応。

デンジャラス・タイマーボムの大爆発が収まるよりも前にテルヨシ達の視界には領土戦を勝利した旨のメッセージが表示されて、何はともあれまずは赤のレギオン、プロミネンスの撃退に成功しリリースとハイタッチを交わしたのだった。

「さいつあくの結果ね」

「まさか初戦から最終手段を使うことになるなんてねえ……」

「えー。そこはまず素直に喜ぼうよ……」

現実世界に戻ってきて、次の領土戦が開始されるまでのわずかなインターバルの間に、純粹に勝利を喜ぼうとしていたテルヨシ、アキラ、シズクの3人に対して、経験値が多いサアヤとユリが開口一番に余韻に浸るわけでもなく反省コメント。

確かにあの外道な作戦は最終手段として臨んではいたが、勝てたのだからまずは喜ぶべきだともっともなことをテルヨシが言うのと、アキラとシズクもうんうん頷いて賛同。

クラリツサとリクトもどっつかずな感じではあったが、サアヤとユリが空気を察して反省は後回しにしてくれて、手元のジュースを手にとってみんなでとりあえずの祝杯とした。

「とにかくあと2戦。目指すならやっぱり全員生存での完全勝利っ！」

「だからそれはかなり無理筋だつてば。今のだつて割り切らなきゃいけない場面はあったでしょ」

「サアヤは現実主義よね。私はテルくらい目標がある方がやる気出るけど」

「サアヤは将来設計をちゃんとやるタイプなのよね。テル君との将来も今から色々と考えて……」

「それはいま関係ないでしょ！」

「なるほど。専業主婦になるか共働きかで悩んでるんだな。うんうん」

「それはちよつと……つて、だから今は関係ないつて言ってるでしょ！」

「都田先輩はボケなのかツツコミなのかわかりませんね」

「サアヤ姉はツツコミですかねえ」

「ぼ、暴力はやめましょう！」

インターバルも1分程度しかないので、いつまでも祝杯ムードでいたり、プロミ戦を引き摺ったりも次の戦いには不要。

そんな意味で暗に頭を切り替えようとテルヨシから次の戦いでの目標を掲げ、それにサアヤを中心にミニコントが発生。

みんなに弄られてわなわなと震えてテルヨシを筆頭に手が出そうになるサアヤをシズクとユリがなだめに入ってなんとか抑え、脱線した話を元に戻していく。

「全員生存はまあ、みんながその気でいれば勝率も上がるはずだから否定はしないわ」

「サアヤは素直じゃないんだから」

「サアヤはツンツンのデレですからな」

「ツン成分が強いのにそれでもテルは好きなのね。やっぱりMなのかしら」

「否定はしない！」

せっかくサアヤが戻したのに一瞬で脱線させる辺りがテルヨシ達だが、そんなやり取りをしていたら次の領土戦が始まって加速してしまい、これはフィールドで余裕があったら何か言われるなど思いながらフィールドに降り立つ。

領土防衛戦2戦目の相手は、視界右上の表示を見る限り青のレギオン《レオニーズ》だ。

相手が誰であろうと勝つのみ。そんな意気込みと共に行動を開始したテルヨシの体は驚くほどに軽かったのだった。

「……見事、と言わざるを得ないな」

「貴様らの覚悟とやら、しかと目に焼き付けた」

「それはどうも……あぎやーん！」

運命の領土防衛戦の1戦目である《プロミネンス》との戦いに勝利したテルヨシ達《メテオライト》は、続く2戦目となった《レオニーズ》との戦いを勢いに乗って進撃。

元々が脳筋の近接が多い青のレギオンだけに肉弾戦になると向こうも「よっしゃこいやオラー！」みたいな勢いでぶつかってきたため、開始から局地戦が勃発。

集団戦って何だっけ？ とも思えるくらいの特攻思考のレオニーズに始めこそ付き合っていたテルヨシ達だったが、『バカはバカらしく散らせるべき』と至極全うで冷静な思考を持ち続けていたサアヤがレギオンをまとめて局地戦を多対一の状況で有利に進めていった。

まあさすがにバカばかりなら大レギオン足りえないので、参加者にいた《コバルト・ブレード》と《マンガン・ブレード》の《二剣》が残ったメンバーをまとめて突破力重視の特攻陣形でこちらを総攻撃。

これによつてまさかの《チャイブ・リリース》が必殺技を使う前に落とされるという仰天な現象が起きたりとあったが、まとまるのが遅れたこともあつて物量もサアヤとユリとシズクの火力で粉碎。

残ったブレード姉妹もテルヨシの《逃走王》としての回避能力に翻弄されているうちに『オレごとやれー！』みたいな感じだったテルヨシごと攻撃を受けて致命傷。

最後にテルヨシ達を称賛する言葉を贈ってくれたのはいいのだが、その横で倒れるテルヨシごと容赦なくとどめを刺したサアヤ達に悪意がなかったか疑問が残る結果となった。

現実世界に戻ったわずかなインターバルでその辺を言及してみると、やはり悪意はないと言い切るサアヤ達だったが、その顔には何か良からぬ笑みが浮かんでいて笑えない事実を突きつけられる。

サアヤ達に何かストレスになるようなことでもしていたらどうか

と本気で考えるテルヨシが深刻な顔をしたのもひとしきり楽しんだサアヤ達の意地悪に文句も言いたくなるものの、時間は待つてくれなくて、本日の最終戦になる予定の緑のレギオン《グレート・ウォール》との戦いへと誘われていった。

「へい、へい、へエイ!!」

——何でだろう。こいつがいるといつも《世紀末》ステージになるのは……

荒廃した街並みに曇天の夜空。街頭にはまともに機能していない街灯の代わりにドラム缶の中に可燃物を入れた松明がいくつも並んでいる。

建物内への進入禁止というフィールドのルール以外には特にこれといった特徴もないシンプルなステージながら、このフィールドに勝手な補正がかかるバーストリンカーがグレウオには存在する。

「……うっぜ」

「コラこの尻尾野郎！ そのコールドなりアクションは領土戦でしていいもんじゃねえぜ！」

それがどうしてこういう大事な場面で選出されているのか不明すぎるが、降り立った時に真っ先に表示されたのが目の前の《アッシュ・ローラー》だったせいで、向こうから何の策もなく近づいてきてのこれだ。

未だに信じられないがこの世紀末ライダーなM型アバターのリアルが、あのシズクすらもしのぐ気弱な女の子、日下部綸だということだが、そういえばその辺の事情をまだフーコ辺りから聞いてなかったと思いが脱線。

「……ん、てことはアッシュの取り巻き3人衆もいる感じ？」

「ザッツラアイト！ 俺らはワン・ハート・イコール・ボディだからなあー！」

「……『一心同体』ってそんなアホな言葉だったかな」

相手が問答無用で仕掛けてくるわけでもなかったから構えすらしてなかったが、一応は領土戦だしと思いを戻してアホは利用できるかと踏んで軽い尋問で情報を吐かせにいく。

するとやはり単細胞君はアホで早々に向こうのメンバーのうち4人が発覚。

持ち前の文法やら無視の英語、アツシユ語を炸裂させながら股がるバイク型強化外装《ナイト・ロツカー》の上で粹がる。

いとも簡単に情報戦で敗北したことは全く気にしてない様子のアツシユには同情しつつ、アホさはともかく普段から連係も取れるチームとして機能するアツシユセットを招集したなら、残りの4人のメンバーは《六層装甲》で固めている可能性は十分にある。

とにかくわかったのはアツシユの他に《パンジー・ステイング》、《ブツシユ・ウータン》、《オリーブ・クラブ》の3人がいること。

残りの4人はこの4人とは別の指揮系統で統率できる人選と見て良いだろう。

「さてと、やるならやるでいいけど、無策に飛び込んできてくれるならありがたいね」

「そんなわけナツシングだろーが！ 普段の領土戦なら俺がリーダーだから乗ってやんのも有りっちゃ有りだが、今回はアメージングなレギメンが指揮つてつかんな。オレ様の独断で迷惑はかけらんねーよ」「ふーん。アツシユがそう真面目になるってことは、こりや《デクデク》が出張つてるかな。あれ真面目だからねえ」

つまりグレウオは始めから分隊編成を前提にしたチームを組んできた可能性があるので、合流させてしまうと厄介なことをし出すことは十分にあり得る。

ならばとアツシユだけでもここで倒してしまつて、兄貴と慕つてるアツシユが抜ける他の取り巻きの戦力ダウンは考えて挑発もしてみた。

だがアツシユも今回はオラオラしててもチームのリーダーではなからか思考は冷静なようで、普段なら乗ってくるところを躲してバイクをターンさせ、テルヨシの相手は後回しにするような動きに変わる。

この個人戦を推奨しない領土戦のやり方としてのセオリーを守る感じには、六層装甲の第2席である《Viridian・Decurionデクリオン》の影

が見え隠れするのを敏感に察知し、あれがいるとするなら要塞拠点はこちらが押さえるべきところかと考えた。

しかしそこまでできてふと疑問が生じる。何故アツシユはわざわざテルヨシに接触してきたのか。

その答えは追撃に警戒しながらもフィールド中央へと向かっていったアツシユの動きと、すでに始まってしまったらしい豪快な戦闘音で返ってきた。

相手にデクリオンがいるなら、要塞拠点は押さえるべきという考えは間違っていない、少しでも乱戦を避けるために乱戦に強いテルヨシやシズクの足を止めることには大きな意味があるのだ。

シズクは出会ったら最後、倒すまで攻撃されるだろうが、相手がその気じやないと真っ先に仕掛けたりしてこないテルヨシの性格をわかってるから、おそらく視界にテルヨシの名前が表示されたら『何かしらの行動で時間稼ぎをしろ』とでも言われていたのだろう。

それをテルヨシはアツシユのいつもの調子などで気づかずに対応してしまつたために反応が遅れてしまつた。

幸い、音の激しさからしてまだ大混戦というほどじやないにしても、最初から要塞拠点の占拠に動いていたっぽいグレウオの初動の方が早いはず。

要塞拠点にはリリースがまつすぐに向かつてくれているはずだが、他はランダム配置ゆえにその都度で動き方に柔軟性を持たせるようにとだけ指示が出ている。

プロミとの戦いのように合流地点を設定する手は、合流までにかかる時間が定まらないこともあってレオニーズ戦でやめようとなつたため、今回は相手の手をとことん潰しにいく方針になっていた。

デクリオンに要塞拠点到居座られるのは困るが、そう易々と思惑通りにはいかないことも加味して、敵戦力を少しでも削つていこうとアツシユを追つたまでは良かった。

だがアツシユのバイクの速度はテルヨシが走るそれよりも普通に速いので追いつくことなど不可能。

たとえば目的地がわかつて建物オブジェクトを無視したショート

カットを試みてもその差は埋まらないと判断して、アツシユは一旦諦めて別の相手が表示されるのをその場で待っていると、10秒くらいで視界の表示が変わって《サンタン・シエイファー^{Suntan Schaffer}》の名前が。

「あつ、シエイシエイ」

その名前を見てつい反射的にアダ名を口にしてしまう癖が炸裂。

癖になつてるのは単にシエイシエイというアダ名が中国語で『^{ありがたい}謝謝』を指す言葉だから、呼ばれるサンタンがいつも「変な呼び方しないでクダサイ!」と、おそらく生粋の日本人ではなさそうな訛りのある日本語でツッコんでくれるから。

そのせいでサンタンからは『人をからかう嫌な男』と見られてる節があり、F型である彼女を面白がってからかうテルヨシもまた少し珍しかったりする。

そんな感じの微妙な因縁がある相手が視界に表示されてしまったが最後。

ガイドカーソルは始めこそ要塞拠点の方へと向かつて動いていたのに、向こうにもテルヨシの名前が表示されたかガイドカーソルは微動だにせずに同じ方向を指すようになる。

これは間違いなくまっすぐに向かつてきてるなと判断したテルヨシは、一応は単体でのアタックかどうかまだ不明なことを考慮して建物オブジェクトの屋上へと移動して接近するサンタンをまずは観察することにする。

六層装甲の第5席のサンタンなので私情優先の行動はしないだろうと思うが、その思考を逆手に取ってテルヨシの足止めに来てる可能性もなきにしもあらず。

そうして思考がグルグルしてるのが向こうの思う壺なら笑えないなど、終わりの見えない思考は一旦切り判断だけは早めにしようと待機していると、車道のだ真ん中を走ってやってきたサンタンは1人。

小麦色のチャイナ服を思わせる装甲は、コガネムシを意味するシエイファーが表れるように、黄色系統ながら厚い。

《アイアン・パウンド》を『^{アニキ}大哥』と呼び尊敬する関係で近接格闘術に長けていて、関節の可動域が広く武術拳法の心得があるために間合

いでの強さはパウンドと大差ないくらい強力。

「降りてくるデス！ ワタシがお前を足止めシマス！」

そのサンタンはテルヨシが屋上にいることも承知で道のど真ん中で立ち止まって正々堂々と一騎打ちの宣言。

ハッキリと足止めとか言つてテルヨシを要塞拠点へは行かせたくない思惑が丸見えで、そこまで言われると無視して要塞拠点に行きたい気もする。

だがテルヨシはあえて無視せずに屋上から飛び降りてサンタンの前に着地すると、意気揚々と構えたサンタンに合わせて軽くステップを踏む。

もちろん付き合う意味などあまりないが、テルヨシもテルヨシでこの一騎打ちに目的があり、それが達成できれば結果として戦局にも影響を与えるだろうと考えて。

サンタンがテルヨシを倒すことを命じられているかはわからないから、本当に足止めだけが目的かもしれないものの、テルヨシが向こうの思惑に乗っていると思わせられる意図もあるこの行動にサンタンが疑いの目を向けている可能性は低くなってくれたと思いたい。

「わざわざグレウオの六層装甲がオレの足止めなんかに来てくれるなんて光栄だね、シエイシエイ」

「どうして何度も言つてもその呼び方するデスカ！ モビルさんにも《サンタさん》呼ばわりで《親子》揃ってバカにしてマス」

「モビルとネーミングセンスを比べられるのは心外だわあ。あそこまでセンスなくないしい」

「どつちもどつちデス!!」

頃合いを見極めるのはなかなか難しいが、上手い具合にサンタンを出し抜ければ上々と思いつつ、いつもの弄りからのやり取りで戦いの火蓋を落とす。

ただ今回はテルヨシの《親》である《レイズン・モビル》が話の流れに出てきて、モビル。押留竜司オシドメリユウジのアダ名のネーミングセンスが絶望的でないのは認識済みなだけに、それと同列に扱われるのは心外でしかない。

かつては六層装甲の第2席に君臨していたからか、サンタンからのリスペクトの精神がわずかにあるリュウジの存在はやはり今も大きいようだが、リアルを知るテルヨシからすれば、そんな尊敬するような人間ではないのになと思うしかない。

ともあれそれを皮切りにサンタンの方から仕掛けてきたので、まずはサンタンのペースで戦いを作られないように間合いを支配しにかかると。

まず間合いに飛び込むタイミングをサンタンに握らせるのを防ぐために1度バックステップでタイミングを計り直させ……るところで即座に切り返して前へ。

1度でも引いた拳を再び突き出すのはどんなに頑張っても体の構造的に無理が出る。

その無理を強いたテルヨシの踏み込みでサンタンは拳を出すのを早々に諦めて、素早いステップで後ろに軽く跳びながら左回し蹴りを迎撃。

その動きには無駄がなく、さすが六層装甲の第5席と呼べる実力の片鱗を見せるが、テルヨシもこのくらいは予想の範疇。

幸い、後ろに跳んでくれたのでブレーキを掛けることで回避は難なく出来、サンタンの着地の前に《テイル・ウィップ》で右足を絡め取りに行く。

しかしその右足は左回し蹴りが空振りした後に遅れてテルヨシを襲撃してきて、サンタンは体勢が崩れるの覚悟で連撃に繋がったのだ。

ただしその右足の蹴りも左回し蹴りよりもさらに後方に流れて打ち出された関係でテルヨシに当たることはなく、結果としてサンタンの蹴りもテルヨシのテイル・ウィップも空振り。

双方がクリーンヒットを奪えなかったファーストアタックは痛み分けに終わり、倒れたサンタンも追撃を阻止するように両手を地面に付いて両足を振り回しカポエイラから飛び起き距離を取る。

「イヤな間合いの取り方をシマス」

「拳法家って独特の動きでカウンター狙いにくいよね。それって中国拳法？」

「その質問は漠然としてマス。答えるならそうとしか言えません」

再び構えながら、テルヨシの動きを嫌うようなことを愚痴るサンタンに、テルヨシもテルヨシでサンタンの動きがやりにくいことを吐露。

中国拳法なんて数えたらどのくらいの種類があるのかに意識が向かなかつたせいでアホな質問も飛び出してしまい、なんか恥ずかしいと思っていたら、その隙を突くようにサンタンが前に出てくる。

今度は拳や蹴りを繰り出してくる気配すらない突貫で何をしてくるのかわからない怖さがあり、テルヨシも距離を取る選択をしかける。

しかしすぐにサンタンの突貫の方が速度があるとわかり、踏み留まって蹴りでの迎撃に動く、その蹴りをあえて受けたサンタンはHPゲージをガリツと減らす。

避けられない一撃では決してなかったのに何故？　と思つて足を引き戻そうとしたテルヨシだったが、そこで気づく。

サンタンの掌には昆虫の足にあるような吸盤が存在し、それを使えば吸着力で壁に貼り付いたり、掴んだものを放さないなんてことも可能。

そして今、その掌にテルヨシの足はガツチリと掴まれてしまつてい

る。
「これでワタシの間合いデス」
「うげっ」

基本的にテルヨシの攻撃は蹴り技。

対してサンタンは体全部が武器になり、密着状態でも技を繰り出す術を持つているため、たとえテルヨシの足を掴んだままでも攻撃は可能。むしろやりたい放題とも言える。

力技ではサンタンの吸盤は外せない、テルヨシはサンタンから放したくなるような攻撃を繰り出すしかないが、その前に足を掴んだサンタンはその足首をねじ曲げて関節を極めにきて、曲がらない方向に捻られたテルヨシはそれに抗えずに体全体が痛みから逃れようとサンタンの思い通りに動いてしまう。

ここで関節技にまで持ち込まれて足を奪われると勝ち筋がなくなってしまう。

そんな最悪な展開が頭をよぎった瞬間、テルヨシは捻られた足首と同じ方向に勝手に向かう体に勢いをつけて捻り、テイル・ウィップで体を支えて空中に投げ出すと、空いていた足でサンタンを強襲。

振りが大きかったせいで頭の上を空振りさせられたものの、テイル・ウィップのおかげで体は宙に浮いたまま。

これだとサンタンも関節を極めにいこうにも制動の自由度が高いテルヨシを操れなくなる。

そうなれば必然、次のサンタンの行動は読めてきて、どうやっても関節を極められるようにテルヨシの両足を掴みにくる。

それが読めればこっちのものとばかりに、空いている足をフェイントも交えながら振り回しサンタンを攪乱。

その動きに当てられながらも必死に掴みにくるサンタンの動きも鋭く、いつ捕まってもおかしくない緊張状態が続く。

「ふんっぬうー！」

「くっ……あっ！」

そんな一種のギャンブルをいつまでもするわけにはいかない、振り回す足に注意がいったサンタンの意識の隙を突いて、掴まれている足を力技で振り上げてサンタンの体を持ち上げ、一瞬でも宙に浮かせる。

どんな技にも言えるが地に足が付いて威力が出るもので、その足場を失ったサンタンはそこで判断が鈍り、空白の思考の間隙を縫って空いていた足が鋭く振り下ろされてサンタンの頭を捉える。

意識を刈り取るようなその一撃で地面に足こそ付いたサンタンだが、そのダメージは見た目以上に大きくそのまま膝をついてしまう。

そしてその攻撃で必殺技ゲージがギリギリ半分溜まったテルヨシは、まだ掴まれたままで地面に降りて直ぐ様《インパクトジャンプ》を発動。

ほぼ真上へと跳んだテルヨシと一緒に上空に上がったサンタンは、ここから自らで生還する方法がないからか、テルヨシの足を掴む手は

放さずにいる。

「いいの、シエイシエイ。オレもう1回使えるけど」

「なっ……ぐっ！」

それならそれで助かるといった感じでジャンプの到達点に達した一瞬の静止でサンタンに忠告。

その意味はもう1度インパクト・ジャンプを使って地面に向けて跳べば、サンタンを下敷きにして攻撃できるぞということ。

それを理解したサンタンは単なる落下ダメージでの生存率を取ってテルヨシの足を自分から放すが、それを狙っていたテルヨシはニヤリとしつつサンタンが放れた瞬間にそのサンタンを足場にしてインパクト・ジャンプを発動。

サンタンを地面へと蹴り飛ばす軌道。自らはさらに上空へと跳ぶと、そこから《インスタント・ステップ》も併用して目的地へと落ちていく。

「さてさて、どうなっちゃったかな」

これでテルヨシ的なサンタンとの交戦の目的は果たせたことになる。

サンタンを無視して要塞拠点へと向かう選択では、サンタンを引張って要塞拠点付近をさらに混戦にしようとしたため、それを避けるためにサンタンと適度に交戦して、頃合いでサンタンを遠ざけつつ要塞拠点へ向かうのが良かったのだ。

ダメージも最小限に抑えられて、サンタンには痛打も入れたので成果としては上々。これで落下ダメージで倒せていればさらに良いが、そこまで高望みはせずに今は要塞拠点に集中していった。

Acceleration Second 86

《サンタン・シェイファー》を一時的に退けて、上空80m付近から《要塞拠点》へと落下していったテルヨシは、そのジャンプだけでは辿り着けないことがわかると、背の高い建物オブジェクトの屋上へと《テイル・ウィップ》を上手く使って落下ダメージを無効にし着地。

自慢の足を使って屋上から屋上への跳躍を繰り返してほとんどまっすぐ要塞拠点のある地点まで到達する。

その時にはもう視界右上に《アイアン・パウンド》の表示があり、要塞拠点での戦闘音もしっかりと耳に届いていた。

「せいッー！」

領土戦開始から300秒を過ぎていたために混戦模様もなかなかだったが、悠長に戦況の全てを把握していたら仲間が減る可能性もあったので、ほとんどノンストップで屋上から跳び降りたテルヨシは、その落下先の要塞拠点に居座っていたパウンドめがけてダイブキック。

混戦だったこともあってパウンドの視界にはテルヨシの名前が直前に出てきたことは間違いなく、そうと気づいたのは交戦していたリクトが察して後退したからだろう。

「ぬっ！ お前……はあー！」

「ハイ拳ちやーんー！」

どうあっても防御は間に合わないタイミングだったはずなのに振り向き様に拳を突き出してきたパウンドの野生の勘ならぬ、ボクサーの反射神経は的確にテルヨシのダイブキックに拳をぶつけてきた。

しかし全体重に落下速度も足して繰り出したダイブキックが、踏ん張って放っただけの拳に負けるはずもなく、一瞬の拮抗のあとには押し込んで攻撃を加える。

ただ拳を弾かれたパウンドはその反動を利用して体を回しテルヨシのダイブキックの軌道から逃れて躲して、受け流すように避けられ

たテルヨシはそのまま要塞拠点に不時着。

一応の保険でテイル・ウィップを支えに地面との激突は緩和したものの、ダメージを与えるまでに至らなかつた攻撃に舌打ちしてパウンドからの反撃を嫌ってすぐに要塞拠点から離脱してリクトの隣に並び立つ。

「遅えよバカが」

「シエイシエイが遊んでほしいって駄々こねてきたからさあ」

「ちゃんと振り切ってきたんだろうな」

「女の子にそんな酷いこと出来ないでしょ」

「ぶっ飛ばすぞコラー！」

パウンドも踏み込んでまで攻めてくる気配はなかつたのでとりあえずは落ち着いたものの、まだ戦況の全てを把握できていないため視野を広げて観察眼をフル活用していたら、リクトからのお小言が聞こえてふざけて反応したら怒られてしまう。

もちろんサンタンは遠ざけつつ来たから、すぐにここまで来ることはないとすぐに訂正しまた怒鳴られたが、状況があんまりふざけてられないことも理解していく。

何故ならパウンドが今いる要塞拠点の占拠を示すゲージがグレウオのレギオンカラーに染まってしまっていたからだ。

「《ビリダイン・リージョンナリー》！」

そしてその要塞拠点にはパウンドの他に西洋騎士風の鮮やかなエメラルドの装甲色をしたM型アバターである《ビリジアン・デクリオン》がどっしりと構えていて、別の方向にいたサアヤと《チャイブ・リリース》を牽制。

視界上でデクリオンの必殺技ゲージが満タンになったのが見えた瞬間、遊撃に回っていた《アッシュ・ローラー》と《ブッシュ・ウータン》がサアヤとリリースを引つ掻き回して注意を逸らせると、デクリオンが手に持つ剣を掲げて必殺技発声。

必殺技発声後にゲージが空になると同時に剣から4つの雷が放たれて周囲の地面に突き刺さると、その地面からデクリオンより少し薄い色の槍と盾を装備した無骨な西洋騎士オブジェクトが這い出て

くる。

このデクリオンの必殺技はクラリツサの《マスカレード・ボール》と効果としては似ていて、分身体ではなく忠実な兵隊オブジェクトを召喚する必殺技。

ただしクラリツサの分身体が耐久性皆無なのに対して、デクリオンの兵隊はかなりの高性能を誇り、全てにおいて高水準なせいでサアヤ達でも同時に相手取るには厳しくなる。

それをデクリオンは1度の発動で4体。さらにもう1度発動することで最大8体を操ることが出来るため、その2度目の発動はなんとしても食い止めたいところ。

要塞拠点の占拠による恩恵で全消費後にもかかわらず、すでにデクリオンの必殺技ゲージは自動チャージを始めていて、毎秒1%ほどの回復量で100秒後にはまた発動してしまう。攻撃にも手が出ればもっと早い。

向こうはデクリオン、パウンド、アツシユ、ウータンに加えて《オリーブ・クラブ》がアツシユのバイクの後ろに乗っていて、総勢5人。サンタンは引き離したので向こうはあと《パンジー・ステイング》と誰か1人が不明なだけとわかったが……

「ギガ・スキアリツしゅー！」

「バカかお前は」

実は屋上から跳び降りる直前に同じように屋上にスタンバイしていたステイングの姿をすでに捉えていたテルヨシは、自分がバレてないと思つて仕掛けてきたステイングにカウンターをお見舞いしようとする。

ただ、お見舞いも何も不意打ちする気全くなしな叫びで台無しなアタックにはため息すら出て、すっかり反応したリクトが突き出された腕の槍を横から殴つて弾くと、バランスを崩したステイングをテルヨシが回し蹴りでパウンドの方に吹き飛ばしてやる。

その様子にはリアルでも繋がりがああるサアヤが「うわあ、バカやってる」みたいなイタイ視線で哀れんだのがわかる。

「マスカレード・ボール！」

「《ボンバー・カーニバル》！」

しかしこれでグレウオは6人が占拠した要塞拠点に集結し、テルヨシ達は4人で完全に逆境。

デクリオンの兵隊も加えれば実質4対10と厳しい状況だが、すぐに遠間から援軍が到着しそれぞれが必殺技発声で突撃してくる。

クラリツサは溜めた必殺技ゲージを全消費して10体の分身体を作り出し、要塞拠点を取り囲むように展開。

ユリはお得意の上空から珍しく空爆攻撃であるボンバー・カーニバルで要塞拠点を無差別攻撃し始める。

これによって一転、要塞拠点を陣取るグレウオの面々は苦しい攻撃を切り抜けるために動くことになるが、その動きを周囲を取り囲んだテルヨシ達がボンバー・カーニバルの範囲外から妨害。

凄まじい爆撃であつという間に要塞拠点付近は爆炎と煙で埋め尽くされていく。

要塞拠点のアドバンテージは確かに強力だが、その反面でどんなフィールドでも拓けた場所に構築されることから、単に占拠するだけでは的になることは必至。

その対策を怠ったグレウオが失策だろうなと爆撃地を外から見ていたら、煙はテルヨシ達のいる場所にまで広がってきて視界が悪くなっていく。

「ちよつとこれ……」

「マズいな」

それに危険な匂いを察知したテルヨシとリクトが動こうとした瞬間、《ブレード・ファン》を広げた状態で思いつき振るって煙を吹き飛ばしにかかったサアヤの行動で煙は狙い通りに吹き飛ぶ。

しかしそれを狙っていたかのように煙の中にいたアツシユがバイクを止めて叫び、ウータンの強靱な両腕にパウンドが掴まれている。

「《フライング・ナツクルヘッド》!!」

「いくでヤンスよー」

向こうも向こうでこちらがまともな遠隔攻撃が出来るのがサアヤくらいなのをわかっていて、そのサアヤが動いたところで即座に動き

出していた。

アツシユの必殺技はバイクに搭載されていた対空ミサイルを2発撃ち出すもので、ウータンに掴まれたパウンドはその腕力で強引に投げ飛ばされてアツシユのミサイルを追従するように跳躍し、もちろんその狙いはボンバー・カーニバルを使うユリ。

ユリも長年の連係でサアヤがなんとかしてくれろと過信していたのと、必殺技発動中は一定速度を保って回転し続けなければならぬ都合で反応が遅れ、アツシユのミサイルを直撃。

サアヤも気づいてブレード・ファンを展開剣にしていたが2歩ほど遅く、ミサイル直撃で昏倒し落ちたユリをパウンドが強襲。

「《イラプション・ブロー》!!」

——ゴワツ!!

確実に仕留めるために必殺技まで使ったパウンドのボクシンググローブのような装甲から拳を押し出すような爆発的な炎が噴き出して加速させ、ほとんど撃ち落とすように振るわれた拳を受けてユリが豪快に地面へと叩きつけられる。

そこに遅れて振るわれたサアヤの展開剣がパウンドを叩き落とすように襲撃し、パウンドも防御はするが力負けして地面へと叩き落とされるが、落下地点でウータンとオリーブがガッチリと受け止めてダメージは軽減していた。

「《ハウリング・パンヘッド》!!」

この攻防でユリが戦闘不能に追い込まれて退場となり、テルヨシ達としてはこちらに傾きかけた流れをまた向こうに引き戻された形になる。

さらにパウンドを攻撃した直後のサアヤを狙って今度はアツシユの対地ミサイルが放たれてサアヤを襲い、ここまでも狙い通りだっただろうグレウオの強かさに戦慄。

もちろんこのミサイルはリリースが割って入ることで防御することはできたが、リリースが前に出たことでサアヤの視界が悪くなり、そこを突いてデクリオンの兵隊が2人に押し寄せる。

となれば向こうの狙いはサアヤとリリースの撃破と見て間違いな

く、狙いさえわかれば動きようはあると、テルヨシとリクトもアイコンタクトで動き出し、クラリツサも分身体を1ヶ所に集めて叫ぶ。

「《十人長》をこちらへ！ あなた方は向こうの救援を！」

「だそうだスピン」

「《六層装甲》を1人で引き受けてくれるなら願ったり叶ったりだ」

クラリツサにも狙いがあるのは明らかで数的不利な状況で敵のリーダー格を1人で相手にすると叫んだならば、それは自信の現れでもある。

そうと決まればテルヨシとリクトの行動も早く、まずは目の前に立ちはだかったパウンド、ステイング、ウータン、オリーブの4人に対して奇抜な抜け方をする。

リクトが四肢の回転機構を《ドライブ》で動かし、そのリクトをテルヨシがテイル・ウィップで掴んで持ち上げると、そのままリクトを横風ぎに振り回す。

ぞんざいな扱いにはリクトから文句を言われそうなものだが、ドライブが発動してるリクトはただぶつかってくるだけのデュエルアバターではないので、パウンド達もその軌道上から外れるように回避に動く。

と、読んでのテルヨシのアクションはリクトが前に振り出される瞬間に解放し勢いだけで前へと飛ばしてしまい、4人のほころびた壁を一気に抜けさせてしまうと、まんまと策に嵌まったパウンドがそれでも阻止しようと自分の拳自体を撃ち出す《ロケット・ストレート》を使おうとする。

そうやってオレから意識を逸らしちゃったらダメでしょ。

パウンドの意識がほぼ抜けたリクトにいった瞬間を逃すことなく前に出たテルヨシが奇襲で大ダメージを狙いにいくと、やはりステイング達が再び立ちはだかつてきて、ステイングは槍となってる両腕を引き絞って必殺技発声。

「《ラツシュ・ニードル》！」

「食らうでヤンスー！」

「うおおー！」

さすがにアツシユの取り巻き3人衆だけあってその連係は見事で、前面をステイングの必殺技が阻み、上と左右に逃げるのをウータンの剛腕が防ぎ、唯一の下方向をオリーブが待ち構える。

どこに行っても捕まると確信できる連係だ。しかしこちらも1人ではない。

「だっしやあー！」

これは完全にアドリブだったものの、ステイングのラツシユ・ニードルが発動した瞬間に屋上から大きな雪玉になったアキラが落下してきて、そのままステイングを押し潰してくれる。

その奇襲に驚いたウータンとオリーブが動きを止めたのですかきず間合いを詰めてオリーブを手が空いているクラリツサの方に蹴り飛ばし、掴んでこようとしたりウータンを突き放すように蹴り飛ばして、まさにロケット・ストレートが火を噴いた瞬間にその軌道に乗せてやると、「ぶへっ!？」と情けない声と共にパウンドのロケット・ストレートがウータンに直撃してリクトへの攻撃を阻止。

そして無事に抜けたリクトは高い機動力でデクリオンに肉薄して剣も盾も上手く使わずに背後に回り込むと《ジャイロ・ブレーカー》でクラリツサのいる場所めがけてデクリオンをシュート。

食らった直後はスタン効果もあるそれを受けたデクリオンは吹き飛ばしがなく、飛んできたオリーブをタコ殴りにしていたクラリツサの集団に豪快に突っ込んでいった。

これではクラリツサが何とかしてくれろと踏んで、まさかのフレンドリーファイアをしてしまったパウンドがその怒りを拳に乗せてテルヨシを強襲。

——カチツ。

切り替わる。意識が。感覚が。鋭くなる。

テルヨシが極限集中モードに移行する時、たまにスイッチが切り替わるような音が頭に響くが、これが起きた時のテルヨシは持続力こそ半分以下に落ちるものの、密集地帯での被弾率が皆無になるほどの広い視野と判断力が獲得できる。

それを勝手に《無敵モード》とか名付けるセンスのなさはリュウジ

をバカに出来ないが、わずかながらに周りの動きもスローに見える今のテルヨシならパウンドの強襲も怖くはない。

リアルボクサーの鋭いジャブが火を噴いてテルヨシを襲ったところで、そのリーチを見切つてスウエー回避に動くと、本当に紙一重の距離でパウンドのジャブを躲す。

ただしジャブは戻りが早く出も早いいため、テルヨシの回避に驚く様子もなくすぐに連打してきたパウンドに合わせてテルヨシもステツプ回避に切り替えて『見てから避ける』という集中力をゴリゴリ削る選択でパウンドを引き付ける。

幸いパウンドのストレートを放つ拳はロケット・ストレートでウータンと一緒に飛んでいったのですぐに回収は不可能。最悪食らつても大打撃には繋がらないと踏んでいた。

そうやってパウンドを自分に集中させることで他が動きやすくなり、ステイングを押し潰してくれたアキラは、ステイングに串刺しにされながらもその腕を締め上げて抜けなくして身動きを封じてくれて、デクリオンをクラリツサに押し付けて手が空いたリクトはその辺でぶっ倒れるウータンのそばに落ちていたパウンドの拳を明後日の方向に蹴飛ばして、何故か離れても感覚はあるらしいそれで一瞬強張つたパウンドの隙を突いて低空タックルをかまして押し倒す。

ここで無敵モードが切れて少しの虚脱症状がテルヨシを襲うが、パウンドへのマウントだけは維持。

「春先にもこんなことがあったが、今度はそうもいかん！」

その状態から改めて周囲を観察しようとしていたテルヨシに対して、マウントされていたパウンドがいつかの話を持ち出して一層の気合いを入れてくる。

パウンドが言っているのはおそろく、春休み中に突然の来訪をしてきたリユウジ都一緒に臨んだ領土戦のことだろう。

あの時も今のようにほとんどマウントして身動きを取れなかった後に他を全滅させて袋叩きにして勝利したから、それを根に持つてるらしい。

その雪辱を果たそうと、以前よりも緩い拘束に目をつけて拳をテル

ヨシの胸元に突きつけたパウンドに、何をするかわかったテルヨシも飛び退こうとする。

「イラプション・ブロー……」

「《バースト・ショット》オオ!!」

無敵モードの反動でわずかに回避が間に合わないと思った時に、パウンドの必殺技発声を塗り替えんばかりの必殺技発声が木霊して、言い切る前に発動したシズクの必殺技による攻撃がパウンドを襲撃。

《カリス》による狙撃だったことは間違いないが、命中したパウンドの頭が酷いレベルで吹き飛んでテルヨシの目の前で首なしパウンドが完成すると、突き出していた拳も全損によって力なく落ちて、次いで体全部が消滅してしまった。

地面に倒れるパウンドを狙えたことから、シズクの位置はかなり高い位置だろうなと立ち上がりながらパウンドの頭が吹き飛んだ時の様子を参照して方角を定めると、150mくらい離れた建物オブジェクトの屋上から飛び降りたシズクの姿を発見。

ともあれ今回の2番手であろうパウンドを撃破したのは大きく、落ち着いて状況を把握しにかかる、なんか子供の喧嘩みたいにじゃれあっていたアキラとスティングが仲良く相打ちしちやって助けるのが遅れてしまった。

まあ相打ちなら上出来だろうと、アキラの奮闘を労いつつ他を見ると、クラリツサにボコボコにされて放られたオリーブが昏倒している横で、デクリオンがクラリツサ相手に大苦戦。

「《リバース》！」

「ぬっ……ぐっ」

元来、デクリオンは正面からの戦闘ならグレウオでもトップクラスの性能を誇り、その実力で第2席にいるのは紛れもない事実。

そのデクリオンが圧されるのは、やはりクラリツサのアビリティ《インベート》による動作の逆転作用による影響だ。

相当な鍛え方をしなければクラリツサのインベートで咄嗟に『右は左』『上は下』『前は後ろ』などのあべこべな動きをコントロールできるはずもなく、それが分身体の中からどんどん撃ち込んでくるのだから

ら頭の中はぐちゃぐちゃなはず。テルヨシでもあそこから逆転は難しい。

それならデクリオンも召喚した兵隊を使えばいいだろうとなるが、それも不可能。

何故ならその兵隊4体はサアヤとリリースが全力で打ち倒しに動いていて、デクリオン自身への援軍に動かせば大きな隙を作り、瞬間に倒されてしまうからだ。

クラリツサの分身体もその数は減りはしたが、結果的にデクリオンをほぼ完封する形で撃破。こればかりは準備と相性の問題なので、決してデクリオンが弱かったわけではない。通常対戦ならクラリツサももつと苦戦していたはずだ。

残りはアツシユ、ウータン、オリーブの3人だが、要塞拠点こそ占拠しているグレウオでも、一気に傾いた形勢は覆すのは難しい段階にまで達して、デクリオンの兵隊が倒され、オリーブが倒され、ウータンも倒されて、最後に残ったアツシユも容赦なくサアヤがバイクをぶつ壊して、翼を奪われた鳥状態に。

「マジ・ナイスファイトだったぜテメーら！」

「あつ、そういえばシェイシェイが残ってた」

「ああ、サンタンならアタシのところへぶつ飛んできたから倒してきた」

「ならこのガイコツで終わりだな」

もはや哀れになるほどの状況でアツシユも諦めて称賛の言葉で締めようとあぐらをかいてしまい、そういえばとテルヨシが吹き飛ばしたサンタンがまだいるなど口にする、運良く飛ばした先にシズクがいたらしくすでに撃破済みとわかる。

それならトリクトもこの領土戦も勝利に終わったかと言葉を出していたが、どうにもスッキリしないテルヨシはそこでうーんと唸るが、サアヤはどうでもいいでしょとアツシユにとどめを刺す。

「……あつー！ もう1人いるー！」

と、まさにアツシユが倒された瞬間に思い出したテルヨシの言葉に、サアヤ達もえつ？ といった雰囲気醸し出した後に、倒したグ

レウオの人数を思い出すと、確かにまだ7人。グレウオが数を合わせてきたなら、もう1人このフィールドにいることになる。

そしてアツシユが倒されたことで相手はその残る1人になるので、必然としてテルヨシ達の視界右上の表示は等しく同じデュエルアバターの名前が表示されることになるが、それを見た瞬間、テルヨシだけでなくあのサアヤが驚き言葉を失ってしまった。

何故なら視界にはこう表示されたからだ。

《グラフィイト・エツジ》
と。

いよいよ《グレート・ウォール》との領土戦も終わりを迎えたかと思われた時、最後の1人だったはずの《アッシュ・ローラー》を倒した後にテルヨシ達の視界右上に新たな相手が表示される。

冷静になればグレウオで撃破した数はまだ7人だったことに考え至つてからの本当の最後の1人の出現には納得のいくところだった。しかしその最後の1人というのが度肝を抜くほどの衝撃を与えてくる。

《グラフィイト・エッジ》。

かつて黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》の幹部《四元素》の1人にして、あの黒雪姫の剣の師匠でもあったレベル8バーストリンカー。

「……何であの剣バカが……」

そのグラフィイト・エッジ。グラフをこの中で直接戦った経験を唯一持つサアヤが、驚きで思考が停止気味になってしまう。

ただそれはグラフの実力を知っていてそれを脅威に感じたとかよりも、ネガビュではなくグレウオに所属していることへの衝撃に思えたテルヨシは、話には色々と聞いていたグラフのことについて考察。「グラフィイト・エッジって、ここ2年くらい姿さえ見なくなつたハイルンカーではなくて？」

「しかも元々の所属であるネガビュではなくグレウオに、か」
「……空白の第1席、か」

その間に情報を確認するようにクラリツサと《チャイブ・リリース》が口を開いてくれて、事実として第1期ネガ・ネビュラスが解散という名の空中分解をした2年半ほど前からグラフはその姿を忽然と眩ませた。

以降は黒雪姫やフーコといったかつての仲間さえその足取りは追えていなかつたみたいだが、テルヨシはそこで1つの疑問が解けかける。

実はずっと気にはなっていたグレウオの《六層装甲》。これはテルヨシが日本に渡った2年ほど前に《親》であるリュウジが第2席に落ち着いていたが、それも新学期辺りから脱退して一時的に空席が存在していたことになる。

しかし現実ではその空席は当時の第1席だった《ベリジアン・デクリオン》がスライドして座ることになり、突如として謎の第1席が君臨したのだ。

当然、六層装甲の席次はほぼ実力順なので、それほどのバーストリンカーならすぐに噂になって当たり前だったが、2年ほど経った今でもその第1席の存在は謎のままだった。

だが今回のこれでその第1席に居座れるだけの実力者は極々限られた者になることはわかりきっていることから、その謎の第1席がグラフィだったのではと仮説が立つ。

「……………はあ。あの剣バカに一喜一憂してたらキリがないわ。とにかく行きましょ。いくらあの剣バカでも数の暴力には勝てないわよ」「確かに手負いとはいえこっちは6人いるしな。これで勝てないならそれこそ問題だろ」

「ふんっ。仲間が全滅しても姿さえ見せなかったやつだろ。薄情なんじゃねーのか」

「それをルールが言うとなんか凄いな……………」

とはいえあくまで仮説。事実かどうかなど本人に確認するしかないし、今はグラフがグレウオのメンバーで領土戦に参加してるなら、倒して勝つ以外の選択肢はない。

それに思い至ったか、はたまたグラフという存在にうんざりさせられてきた過去からか、大きなため息を吐いたサアヤもグラフの境遇などは考えるのをやめて領土戦に意識を戻す。

それに呼応するようにテルヨシ達も相手が誰であれ6対1を覆すほど強いとは思えないと意見をまとめて移動を開始。

ガイドカーソルはその動きを全く変えないことから、グラフは移動すらしていないのは間違いなく、必殺技ゲージも溜めている様子がない。

そんなナメキってるようなグラフの調子にサアヤ辺りがイライラのゲージを上げていたが、フィールドの端っこに近づくことから、テルヨシはグラフの目的が領土戦にあるような気がしないと思えた。

それを証明するように、いよいよガイドカーソルが中野区の南北に伸びる首都高速中央環状線に繋がる道路から一直線に伸び、その先の交差点で1人のデュエルアバターの姿を捉える。

光源の少ない《世紀末》ステージでは遠目に確認しにくいだが、その中でも一層の黒に染まっているデュエルアバター、グラフのシルエットには、ロングコート状の装甲と背中に差しているのであろうクロスした2本の剣が見えた。

「《ジェノサイド・カッター》！」

その出で立ちからしてテルヨシ達をずっと待ってた節がわかったが、そんなのお構いなしに視界に捉えた瞬間に展開剣になっていた《ブレード・ファン》で必殺技発声し、16本の展開剣をグラフへと同時に射出したサアヤ。

まさに有無を言わせずといった先制に距離はあっても明らかに慌てふためいた動きを見せたグラフのコミカルな動きはギャグだったが、どこか余裕もあるグラフは飛んできた展開剣が全て自分のところに収束することを見切って最小限の動きでステップ回避してみせる。

その回避に舌打ちしつつも必殺技発動後すぐに突撃していたサアヤは、戻ってきた展開剣が再び扇子の状態に戻ったところで、今度は扇子状態でのジェノサイド・カッターを発動し肉薄。

今度は風の刃とあってグラフも見切りが難しいと判断して背中の剣の1本を抜き、前で何度か振るうことで当たる分だけの風の刃を弾いて防衛。

会話すらしないと言わんばかりのサアヤの突撃には味方のテルヨシが面食らって、リクトとクラリッサとリリースも「何もそこまで徹底しなくても……」みたいな空気を醸し出しつつもサアヤの後ろをついていき、シズクだけが便乗してボウガンの《アポロン》を手に追撃していく。

「ちよいちよいちよい！ ちよい待ちってエツピン！ と、じゃじゃ

馬ちゃん！」

「エツピン言うな！」

「くたばれえ!!」

超好戦的な2人を前にしてハッキリと声が届く距離にまでなると、なんともハイランカーらしくない制止を促す挙動で2人に呼び掛けるグラフに、全く取り合わないサアヤとシズクが激突する直前。

別に多勢に無勢を卑怯だなどと思ってそう叫んでいたわけでもなさそうなグラフから話を聞きたかったテルヨシは《テイル・ウィップ》で2人を絡め取って強引に止めに入った。

それがとても気に食わない様子で振り返ってどす黒いオーラを少し出していたサアヤとシズクにビクツとなりつつも、攻撃をキャンセルされた2人に不意打ちをするわけでもなく、むしろ安堵して剣を背中に納めたグラフに視線を移す。

「アンタがグラフか。話には色々聞いてる。ずいぶんと周りに迷惑をかけてるみたいだな」

「ありや、どんな噂になってるのやら。まあ俺がやるのがいつも突飛で周りが反応に困ってるってのは否定しにくいな」

領土戦の最中に呑気な挨拶は完全に場違いな空気がヒシヒシとするし、サアヤとシズクも挨拶が終わったなら攻撃再開するぞと物凄い殺気をテルヨシにさえぶつけてくる。

それがわからないわけでもないグラフが頭を掻きつつ手早く話をしようとする、のんびりとしたマイペースな雰囲気から少し真面目な雰囲気へと切り替える。

「あんまのんびり話してるとこの2人が怖いから手短にいっせ。まず俺がグレウオに厄介になってることの説明は……」

「そういうのいいわよ。どうせ聞いたってはぐらかすでしょ。それにアンタの行動に全く意味がないなんてこともない」

「はぐらかす気はないんだが、まあいいならいいや。一応の口止めとして他言無用で頼む。俺がグレウオにいるのを知ってるのはグツさんとビリーと……《モンビ》だけなんだわ。んで。この領土戦はもうお前らの勝ちってことでもいい。用件が済めば俺も自滅するくらい

でいるしな」

せつかく真面目になつて話をしてくれるのに、最初から話の腰を折りにいったサアヤの無関心にはグラフもテルヨシ達も呆然としかけ、テルヨシ的には気になつて仕方ないから割り込みたかつたが、サアヤが言つちやうとどうも足踏みしてしまう。

結局そのまま話は進んで、グラフがグレウオに所属している事実がレギオン内でも明るみになつてないことを告げて口止め。

その事実を知つてる中にはリュウジも含まれていたようで、やはりリュウジの離脱と同時に第1席に座つたのはグラフと見て間違いないだろう。

さらにグラフはこの領土戦もすでにテルヨシ達の勝利で構わないと話し、そう言われてしまうとサアヤとシズクも好戦的な雰囲気若干なくして、だつたら何で領土戦のメンバーに入つてるのかと素直に疑問をぶつける。

「ホントはビリーにもしつかり戦うならとかなんとか言われてたんだけどよ。やっぱなんつーかその、お前らのやろうとしてることには俺も全面的に賛成の方向つてか、そういう感じなわけ」

「だからつて手を抜かれるのはこつちとしてもふざけんなつて案件よ。そんな例外を通したら真剣に戦つてくれたプロミとレオニーズに悪いもの。それともなに？ アンタが本気で戦つたら私達が負けてたとも言いたいわけ？」

「そ、そこまでは言つてねえだろ！ 俺一人の力なんてこの戦力差で簡単に覆るくらい微々たるもんだぜ？ 俺が言いたいのは……あー、あれよ。つまりお前らの覚悟をしっかりと見ておきたかつたつてこと」

「……………要約すると何しに來たの？」

「簡単簡単。そつちの代表1人。つまり《レガッタ・テイル》。お前さんと1対1の勝負がしたい。勝ち負けは関係ない。お前らがどんだけの覚悟で臨んできたのか、それがわかりやそれでいい。あとそうね。モンビの子つてのも興味の対象」

ちやんと戦えとデクリオンに言われておいてのこの自由奔放さな

ら、確かにサアヤや黒雪姫達が頭を悩ませるのも領ける性格をしている。

その1つ1つにツツコンでいたらキリがないのも事実なようなので、どうやら邪魔者なしでの1対1がご所望なグラフがテルヨシを名指ししたため、とりあえずサアヤとシズクを降ろしてリュウジの子として、レギオンマスターとして1歩前が出る。

「モバイルとは仲良かったの?」

「まあそうな。どっか遠くに行っちゃうってのは半年くらい前から聞かされてたくらいにはよろしくしてたぜ。お前さんを子にすることをその時から決めてたのもな」

「なるほどねえ……グラフ。アンタがうちのレギオンの覚悟にいちやもんつけないように真剣に戦うよ。それとは別にオレの中の何かを見定めようってのは正直どうでもいいから、公私混同だけはやめてくれな」

「決まりだな。んじゃ残り時間も400秒ないし、ちやっちゃと始めますか」

リュウジのところにはテルヨシの日本行きは半年以上前に手続きなどを考慮して連絡はいつていたので、グラフが言うことに矛盾はないし、当時は違うレギオンでありながらそんな話まで聞いていたなら、相当な関わりがあつたと見て間違いない。

単にそれだけの興味ならいつでも通常対戦で乱入するタイミングはあつたはずなのに、わざわざこんな面倒なことまでして接触してきたからには、テルヨシ達の《帝城》完全攻略と何かしらの意味があるように思える。

考えたところでその答えはグラフにしかわからないので、サアヤ達を下がらせて集中力を上げていくテルヨシは、とりあえず今はグラフに覚悟とやらを見せつけようとする。

「たぶんアンタはテイルのことを色々と見て知ってるだろうから、情報アドバンテージをなくす意味で教えておくわよ」

「構わねーよ」

「テイル、アイツは全部のレベルアップボーナスをあの2本の剣に注

ぎ込んだ生粋のバカよ。それだけあってあの剣はおそらく加速世界で最強クラスの剣よ。切れ味と靱性にはアイツの色であるグラフアイト。黒鉛に由縁があつて、切れ味はグラフエントって厚さが原子1個分の単一層が支えてて、剣の腹はハイパーダイヤモンドって物凄く硬い素材で出来てるから、それを使った防御力は半端じゃないわ」

「あー、なるほど。それで矛盾存在か。ありがとね、ガツちゃん」

その勝負が始まる前にと、グラフの戦いに関する情報をサアヤが簡単に教えてくれ、グラフもそのことには平等という意味で了承。

さすが黒雪姫の剣の師匠というだけあって話だけでも厄介さが滲み出ている。

そして何故みんながグラフのことを矛盾存在などと呼ぶのか、その理由についてもサアヤの説明で理解が及ぶ。

元々、矛盾という言葉は『何でも斬れる矛と何でも防ぐ盾。ならば双方をぶつけたらどうなるのか』という話から来ているらしいが、グラフの双剣がまさにその話を実現し得ることから来ているのだろう。

そんな最強の矛と盾を持つ相手、グラフを前にして臆するどころかワクワクしてきている自分が相当な変わり者だと自覚しつつも、同じ高みであるレベル8に至った自分がどれほど通用するのか、それを確かめるようにグラフへと突撃していった。

テルヨシの突撃を見ても背中 of 双剣に手もかけないグラフの余裕の姿勢には侮られているのかと考えてしまうが、あの見切りを見れば剣を抜くまでもないことも多々あるのだとわかる。

その中に含まれてしまうなら、まずは剣を抜かせるところからか。ただしいつ抜かれるかもわからない最強の矛を警戒しないわけにはいかないの、対黒雪姫戦を想定した戦い方に自然と意識が切り替わる。

黒雪姫とは違ってグラフは手の延長として剣を装備するため、四肢が剣の黒雪姫よりも接近戦はしやすい。

特に接近戦でもボクサーなどの間合いに当たるインフアイトならグラフでも剣を振るだけのリーチを確保できずに困るはず。

当然、その辺の対策など経験値で克服済みなのは間違いないが、初

対面の相手に対して相手の間合いで勝負してやる道理もない。

剣が抜きやすいように一直線でグラフに肉薄しにいったテルヨシに、少し構えはしても剣には手を伸ばさないので確認。

おそらく剣なしでの迎撃方法は黒雪姫にも使える『アレ』だろうと予想しつつ一層強い踏み込みで一瞬早くグラフへと接近し、渾身の飛び蹴りを体の中心にぶち込んでやる。

しかしグラフはこの飛び蹴りにも動じることなく右手を添えるように触れさせてくるんっ。

円運動をしながら腕を引きテルヨシの足を引き込むと、たちまちその威力を吸収して止め、間髪入れずに飛び蹴りの威力を反転させて弾き返してきた。

これは黒雪姫もどろろという原理かは説明されてもよくわからなかったが使う技術で『柔法』と言い、相手の力を利用してカウンターに繋げる攻防一体の技。

こればかりは黒雪姫から散々食らっていたので、その対策は以前からいくつか練られていた。

弾き返された足ごと体全部が後ろに吹き飛ぶのをテイル・ウィップで強引に止めて、そのまま空中に留まったまま体だけをぐるんっ！素早く縦回転させて左足でのかかと落としを放つ。

それにはグラフも「おっ」と小さく驚く声を出したが、テルヨシのかかと落としはバックステップで回避に動き、本能か経験か回避に合わせて右手が背中中の剣に伸びる。

回避に動くことはテルヨシも予測の1つにあつたので、左足が地面に触れて着地した瞬間に超低空スライディングへと繋げて右足でグラフの足を払いに行く。

その右足を切り落とさんとグラフの剣が鋭く抜き放たれて振り下ろされるが、速度は想定より上ながら誘い込んだことに変わりないその一撃をテルヨシは避ける。

払いにいった右足で『インスタント・ステップ』の足場を蹴って強引なブレイキを掛け、即座に左足でも蹴って両足を後ろへと引っ込める。

それで紙一重でグラフの剣を空振りさせて、引つ込めた両足を両手を顔の横で地面に触れさせて止め、引き絞るようになった両足を両手を伸ばすのと同時に前へと押し出して体を回転させ威力を上げて空振りしたグラフを狙う。

「ぐおっ」

そのスピニングドロップキックとでも呼ぶ攻撃でグラフは空振りした右腕にこそ当てさせたが柔法での防御は間に合わずに吹き飛び、しかし直前で自ら後ろに跳んだことでダメージはそれ込みで思ったより……も大きい。

特色の黒の分類になるためカラーサークルとしては三原色のどこに寄るといったことも出にくいところだが、サアヤの言うようにレベルアップポーションを全て双剣に注いだというのは事実のようで、グラフ本体の耐久は赤系統クラスに柔らかいらしい。

だがこれで終わりではない。

グラフが体勢を崩している間にテイル・ウィップで再び体全体を支えて地面に落ちる前に姿勢を変えてグラフに《インパクト・ジャンプ》で体当たりを敢行。

その怒濤の追撃にグラフもとうとう左手で2本目を抜き二刀流になると、ハイパーダイヤモンド製というその剣の腹を正面に見せてクロスガード。

その最強の盾へと突っ込んだテルヨシはなんとか膝蹴りでぶつかるが、ここでまさかの最強の盾で受け止めてからの柔法を加えたカウンターに繋げてきて、かなりのエネルギーでぶつかったこともあってその返しのエネルギーも相当なもので、まるでトラックに轢かれたかのような衝撃で真後ろへと吹き飛んだ。

ダメージも全身を駆け巡ってガッツンッ！ と2割以上も削られてしまったが、吹き飛ぶ中でカウンターをしてしつかり地に足を付けたグラフがすかさず踏み込んだのが見える。

グラフの双剣は現実的に考えて受け止めることは不可能なので回避するしかないが、それも難しい状況を強いられてしまい頭には諦める選択肢が不意に浮かぶ。

それも経験から来る1つの現実なのを受け止めつつも、ここで諦めるなど頑張ってくれたサアヤ達に申し開きも立たない愚かな選択だと振り払い、迫るグラフの動きに全神経を研ぎ澄ます。

如何なグラフでも完全にキャンセル不可能なタイミングは必ず存在する。

そのタイミングのみを狙って左手の剣が下から上へと斬り上げられた瞬間、テイル・ウィップを前面に盾のようにとぐる巻きで展開し防ぐが、テイル・ウィップは豆腐のように斬り裂かれてしまう。

だがそれでいいと、その一瞬でグラフとの間に視界を遮ったことで予想外を生み出し、ポリゴン片となって消えるテイル・ウィップを足場にして蹴り、バック宙を切りギリギリで体勢を整えて両足で着地。依然として迫るグラフが第2の刃である右手の剣で斬り上げてきたところを間合いを見切ってリーチギリギリで躲す。

ただそれだけではグラフに連撃を許すため、何よりも速くグラフに肉薄して両手首を掴んで剣を封じる。

「うらあああ!!」

そこから小ジャンプして両足を畳み、グラフとの間に無理矢理ねじ込んでからのドロップキックをお見舞いしてやれば、その威力でグラフの左腕が肩から外れて欠損。

相当なダメージを与えられはしたが、無理にドロップキックをしたことでテイル・ウィップを失ったこともありテルヨシはグラフのそばで不時着し、かろうじて残った右腕が握る剣を避ける間もなく腹へと突き刺されてしまった。

「……いやあ、参った参った。まさか片腕を持っていかれるとはな。でもまっ、お前らの覚悟ってやつは見せてもらっ……」

あまりにも無抵抗に刺さった剣の切れ味が恐ろしくて、そのまま動かされたら体は豆腐のように切断されてしまうだろうことを確信したテルヨシだったが、刺したままでわざわざ口を開いたグラフは、そこからテルヨシをどうこうするような気配を完全に消して称賛の言葉と共に覚悟を認めてくれた旨を伝える。

しかしその言葉は最後まで言い切る前に決着と見たサアヤ達が有

無を言わさずに倒しにかかって、なんとも締まりのないグレウオとの領土戦はそれで幕引きとなったのだった。

Acceleration Second 88

《グレート・ウォール》との領土戦は意外な形での決着となったが、結果はテルヨシ達《メテオライト》が3戦3勝の完全勝利。見事領土を防衛することができた。

そのあとにも別の零細レギオンも3チームほどが果敢に挑んできたが、それも全て弾き返して領土戦の時間は終了。

占有に関しては明日の会議の時に解除する予定なので、それまではせめてその恩恵をいただこうと、グローバル接続をしたまま別のところから参加している《チャイブ・リリース》に祝いのメールを送り祝杯ムードに。

「はいはい、まずは第1関門突破つてことで、乾杯！」

『かんぱーいー！』

「こら、あんまり騒ぐなバカども！ 出禁食らうわよ！」

「そう言うサアヤの声も大きいわよ」

こういうお祭り騒ぎは得意なテルヨシが乾杯の音頭を取れば、今日は特別とばかりにサアヤ以外がノリノリで、ここが喫茶店《せせらぎ》であることを忘れてそうなテルヨシ達にサアヤが怒鳴る。

その怒鳴り声もまた大きいからユリにツッコまればしたが、テルヨシだつて考えなしに騒いだわけもなく、ちゃんと他に客がいない間隙で音頭を取っていた。

ただそのあとやっぱりうるさいのは変わりないので、店長と流川さんには頭を下げてテンションを下げた祝杯ムードにする。

ただやっぱり祝杯ムードは最初だけで、ひたすらに向上心の塊の集団ということなのか、割とすぐに領土戦の話が蒸し返されて大反省会が勃発。

1戦目の《プロミネンス》戦から順に各々が自分を評価し、他人からの評価を聞くスタンスで進行していき、シズクなどは忘れないうめにかホロキーボードでメモを取り始める始末。

その光景にはもう少し普通に祝っていたかったテルヨシが呆然と

してしまい、本当ならワハハと笑っていてもいい状況でそうしたら怒られる不条理が発生。

ブレイン・バーストに関しては超がつく真面目な一同のひた向きさには半分くらいは呆れてしまったが、もう半分は現状に満足などしない、慢心など微塵も感じない頼もしい仲間嬉しくなっていたのだ。

しかしそうやって長々と反省会をするには少々時間もあれだったため、各自で1日寝かせてきて、明日はリリースもリアルで合流することになってるので、反省会は一旦お開きになる。

門限もあるシズクはちよつと小走りで行ってしまい、リクトも模試が控えてるということで早々と帰宅。アキラも家族での外食があるからと走って行ってしまふ。

残りは割とのんびりしたものだったが、テルヨシとサアヤは家で夕食を待つマリアがいるので道草を食ってる余裕はない。

ただやはり目ざといクラリツサが同じ方向に消えようとするテルヨシとサアヤを見逃さずにネットトリと絡んできて、ユリも面白そうに便乗してきた。

「あらあ？　なーに2人でこそこそしてるのかしらあ？」

「ひよつとしてサアヤったら、またテル君の家にお泊まり？」

「えー？　中学生でそんなことまでしてるのー？　最近の中学生は進んでるわねえ」

「アンタらは何を楽しんでんのよ……」

「お泊まりイベントはサアヤの週末の楽しみだからな」

「アンタも悪ノリするな！」

完全にからかう気満々だったユリとクラリツサにうんざりといった感じのサアヤの反応はちよつと面白くなかったが、テルヨシまで敵に回ると途端にツツコミが炸裂しテルヨシにチョップが振り下ろされる。

暴力反対！　と抗議しかけたところで飛び火を恐れたユリが「じゃあ私も夕食だけ一緒にしようかな」と同行を志願。

そうすることでクラリツサからの追撃防止策を選択肢に入れられ

るサアヤの援護に回り、孤立しかけたクラリツサも危険を察して「私もお邪魔しようかなあ」とお泊まりイベントの追加イベントとして解決していく。

サアヤ的には食卓が賑やかになること自体は悪いことではないという考えがあるようで、ユリとクラリツサが来ることには肯定的。

しかしユリはともかくクラリツサもとなると、やはり問題はマリヤとの顔合わせ。

その辺でどういった対応にするかでテルヨシはサアヤとユリとひそひそ話。

「クレアのこと、マリヤにはどう説明しようか」

「それよね……あんなのと普通に知り合う設定の難易度が高すぎる」

「そこはあれね。クレアちゃん本人に考えさせる方がいいかも。もちろんマリヤちゃんがアンであることは伏せてね」

バーストリンカー同士として紹介するべきではないことは満場一致にしても、学校も違うクラリツサとどういう経緯で知り合って連れてきたかを納得させるだけの設定と説明が出来るかは不安なところ。

テルヨシはこういうことは得意分野と思われがちだが、別に嘘が上手いわけではないので事前の備えは必要。アドリブでは穴が出てしまう。

そこでユリはクラリツサ自らが来たいと言ったからには、労することもいとわないうだろうと悪い笑みを浮かべてそんな提案をして、まあそうだよねとテルヨシとサアヤも考えることを放棄してみんなでキョトンとしたクラリツサを見る。

それからクラリツサにはテルヨシ宅にマリヤという預かりの子がいることを教えて、その子への納得のいくテルヨシ達との関係を考えておいてほしいと一方的に告げて出発。

マリヤが人見知りすることと、子供だからとテキトリーな設定をすれば言及されることも教えておきつつ、テルヨシ達の後ろを物凄く真剣な表情で唸りながら歩くクラリツサに3人で小さく笑う。

どんな設定でくるかは着いてからのお楽しみとして、歩きながら今夜のメニューをあれこれ話し始めたサアヤとユリのガチ料理トーク

にはデザート担当としてテルヨシも参加。

メインの方はユリがガチ勢なのでサアヤしかついていけないから仕方ないが、マリアがユリクラスの味を覚えてしまうと、今後は益々テルヨシの料理の地位が低くなりそうで今から怖い。

元々テルヨシの地位などあってないようなものとかサアヤにツッコまれそうな案件なのは自覚があるから言わないことにして、クラリツサにあと何分で到着するかを刻んで宣告していたら、自宅マンションの部屋がある階に到達したところでついにクラリツサも納得の設定が完成したつぽく、今までの難しい表情を笑顔へと変えてみせた。

さてどんな設定が飛び出すのかと、まるで他人事のように思いながら部屋のドアを開けてみると、1人で待っていたマリアは寂しさを払拭するようにリビングから小走りで出迎えてくれて、ユリもいるからか喜びの笑顔を見せかけた。

しかし初めて見るクラリツサの姿を捉えると、玄関前でブレーキがかかってちよつと困った顔に。

「おかえりなさい……そちらの方は……」

「はい。あなたがマリアね。私は駿河・プリンツ・クラリツサ。サアヤとせせらぎの常連仲間で、テルとユリとは今日初めて会ったんだけど、なんか彼氏の家でパーティーだからってお呼ばれました。よろしくねー」

予想通りの反応をしたマリアに対して、始めから物凄くオープンな性格を出して挨拶するクラリツサだが、決してマリアとの物理的距離をすぐに縮めるようなことをせずにいる辺りに、友達が多い人の特徴が見える。

犬や猫などの動物もそうだが、初めからぐいぐいスキンシップを取りにくい手法はその後が両極端に分かれるもので、凄く仲良くなるか、苦手意識を持たれるかでギャンブル要素が高い。

その選択をしない辺りにクラリツサのインターナショナルな片鱗を見つつ、マリアも適度な距離感を保つクラリツサに自己紹介をして、それが済んでからみんな部屋に上がって夕食の準備。

鬼の料理長ユリ神がキッチンにいるため、副料理長サアヤしか隣には立てないため、テルヨシ達はダイニングテーブルにてデザートのプロリンに着手。

I Hの電気コンロの上に鍋を置き水を沸かし、耐熱容器にプリンのを元を入れて蒸して冷やせば完成。

めちやくちや簡略な作り方だが、マリアでも料理初心者のクラリツサでも指示だけでできるし、初対面の2人を仲良くさせる意味でも好都合だったので、テルヨシは指示と準備に徹して作業をしてあげる。

その的確な指示でクラリツサも半信半疑だったらしいテルヨシのバイトを信じてくれたようで、マリアも和気あいあいとしたクラリツサとの共同作業で自然な会話が成り立つようになっていった。

そんなこんなで迎えた夕食では、料理長ユリ神からの美味しい食べ方講座なる謎のレクチャーから始まって、待てを食らった犬のように食卓に並ぶ料理を見るしかできない状況が5分続く。

マリアなんかは話し半分くらいになってるのが目に見えてわかり、マリアには甘いユリはそれを見逃すが、それをクラリツサがやると激怒したので、テルヨシとサアヤは姿勢を正して聞きに徹するしかなかった。

それを乗り越えてようやく夕食が開始され、一転して優しいお姉さんと化したユリは話し半分だったマリアに自分から美味しい食べ方を実施して食べさせるといふ羨ましいことをして、サアヤとクラリツサもそのマリア争奪戦に参加しててんやわんや。

だがわかつているのだ。ここにテルヨシが加わろうとすれば全員から「ないわー」と冷めた視線で罵られることを。

「しかしオレはあえてや……ぐはあ！」

「うるさいわよテル。マリアが困ってるじゃない」

「そうよテル君。しつこい男は嫌われちゃうわよ？」

「過保護は良くないって言うしね」

「み、みんなは違うの……」

それでも行かなきゃ男じゃねー！ と意気込んだまでは良かったものの、動く前にサアヤに潰され、盛大なブーメランを投げてる3人

からのツツコミをもらおう。

そこは代わりにマリアがやんわりとツツコんでくれたが、押し強い女衆の善意に押し切られてしまっていた。

それもいつまでもやってたらマリアが目を回して倒れかねないので、頃合いを見て落ち着くと、賑やかな食卓に何か思うところがあつたクラリツサが口を開く。

「……なんかいいわね、こういうの。家族とは違うけど、家族みたいな気軽さで和気あいあいとしてる感じ」

「普通の友達とかで同じことやつてもこうはならないわよ」

「そうね。私も他の友達だったらここまで気兼ねなく振る舞ったりは無理よ」

「えっ？ 何それ。じゃあ2人とも何でこんなに羽目外した感じなの？」

それで自覚することになるとは思わなかったサアヤとユリの反応はテルヨシもちよつと意外だったが、じゃあ何でというクラリツサの問いかけに対して顔を見合つた2人は、小さく笑ってからその視線を不思議そうにしていたテルヨシへと向ける。

「まあ大方はこれよね」

「テル君って同じ空間にいるだけで自分が何かを我慢してるのが馬鹿らしいって思えるっていうか、我慢したって仕方ないんだよなって思わせてくれるくらいオープンというか……」

「ユリさん、軽くデイスってます？」

「ほ、褒めてるつもりなんだけど、言葉が難しいなあ」

「テルはバカだけど、バカな方がいいってことだよ」

「おっ、マリアが良いまとめをした！」

「結局バカ呼ばわりなんですけど!?!」

以前から割と遠慮というものを知らない振る舞いは見せていたサアヤとユリではあつたが、その理由がまさか自分にあるとは思ってなかっただけにテルヨシの驚きは近年稀に見るレベル。

ただしその理由がなんかバカにされてるような感じがして素直に喜べない部分が多量にあると考えたら、マリアがズバツと言ってサア

ヤもユリも賛同するから項垂れる。

もう少し良い言葉を選んでほしいと本音が出かけたところで、そこまでのやり取りを見たクラリツサがクスクスと笑い出したからさすがにこの場の全員に笑われたテルヨシも黙っていない。

「クレアまで笑うとか酷いんですけどお」

「フフツ、ゴメンゴメン。別にテルをバカにした笑いじゃないから。サアヤ達の話聞いてなんか私も納得できるような気がしちゃって、不思議だなって笑ったの。付き合いなんでまだ全然ないはずなのにそう思えるって、かなり凄いなと思うわ」

「これはある種の才能なのよね。認めたくないけど」

「テル君くらい欲望に忠実な人がいると、それ以上はなかなか出せないものね」

「このあと、絶対あれ言うつもりだもん」

「一緒に風呂入ろうぜ！」

『あーないわー』

バカと呼ばれるテルヨシもさすがにどういう種類の笑いかはちやんとわかっているので、話を繋げる意味でクラリツサに振ったわけであり、それもわかった上でクラリツサもちゃんと笑いの真意についてを説明。

要はテルヨシくらいの素直な人間がいれば、遠慮なんてしてるのが無駄だと思えるから、その結果としてカオスな空間が完成すると、そういうことらしい。

言い方はともかくとしても、サアヤ達がのびのびとこの家で過ごしてくれる理由が判明したのは良いことだと、話の締めにはいつも言っているあの台詞を半ば言わされて泣き、その様を見て笑われるのだった。

夕食後には少し冷やす時間が足りなかったがみんなで作ったプリンを食べてまずまずの出来にテルヨシが非難され、そんな短時間で出来るデザートなんて急に作れただけでも褒めてよと内心でツツコンでおく。

後片付けもみんなで作れば早い早い。あつという間に終わらせて

時刻は午後7を少し回ったくらいになる。

ただそれでも中・高生では親が心配するかしないかの際どいところなので、ユリとクラリツサはこれで帰宅。

一人暮らしのユリはともかく、クラリツサは親らしき人からのボイスコールもあったので、軽い挨拶をしてからユリを引つ張つて足早に去っていき、残ったサアヤは先週は放棄していたマリアとの入浴のためにそそくさと洗面室へと入っていき、その間にテルヨシは明日の会議に備えて自室にて要点をまとめ始めた。

明日の会議には王の出席が義務ではないので、議長になる《ブルー・ナイト》以外は幹部などが代理として来るだろうが、1週間も寝かせてきた意見を持ち合うとあつてテルヨシの緊張は思いの外ある。

確かに今日の領土戦では勝利を収めて明日の会議へは繋げることができたが、それとこれとは別で、持ち寄った各レギオンの意見で全面的に協力できないとなれば《帝城》の完全攻略の夢は打ち砕かれることになる。

そんな悪い方の可能性を今から考えても仕方ないことはわかつてはいても、シズク達を巻き込んで無理を通した目標だけに簡単に諦めたくない気持ちは強く、それがホロキーボードを叩く指にも現れたか、いつの間にか風呂から上がったサアヤが背後から近づきその手を持ち上げて作業を中断させる。

「根を詰めすぎ。力なんて入れなくてもホロキーボードは叩けるでしょ」

「いやあ、なんか柄にもなく緊張しちゃつて」

「アンタが緊張したつて結果には影響ないわよ。ドンと構えて明日に臨めばいいの。私だつて一緒に行くんだから緊張らない」

「押忍っ」

こういう時にいてくれるサアヤの存在はとても大きく、テルヨシなんかよりよっぽど肝が据わつてるサアヤの態度に肩に入っていた力が一気に抜ける。

どんな結果になろうと十分な協議がなされた上で出たものなら納得するしかない。

そんな気持ちであれば自然と頭もクリアになり、会議のまとめはサクツと終わり、それからリビングのソファでマリヤも含めての家族会議に移行。

「そういえばマリヤはネガビユに入ったのよね。勧誘するつもりだった私達だからってことでその決め手は教えてくれる？」

「えっと、本当はテル達のレギオンに入りたい気持ちは今もあって、でもサアヤさん達のそばにいたら、いつまでも自分が頼る気持ちを捨てられないって、そう思って」

「サアヤとかユリさんとか、マリヤにとって凄い頼りになるから、距離を取りたかったんだって。サアヤもユリさんもマリヤには厳しくできなからねえ」

「そんなこと言ったらネガビユだって……あー、フーコ辺りはスパルタだったわ……」

「うーちゃんもとっても厳しいです……」

完全にサアヤも家族の仲間入りしてる辺りがニヤニヤもので、そこにあえて触れようとしたテルヨシをチョップで黙らせて話を切り出したサアヤは、マリヤがネガビユに入ったことを言及。

それにきちんと答えたマリヤに補足するようにあらかじめ理由を聞いていたテルヨシが口を開くと、うーんと唸りながらも納得せざるを得ない現実にガクリ。

実際問題、サアヤとユリがこれまでマリヤの育成に関して厳しいことを一切言えていないのは周知の事実であり、それは《親》であるテルヨシもわずかに含まれる。

そうした人がいるのは強みであり甘えでもあるとして、マリヤはその甘えの部分を断ち切りたいとネガビユ入りを決意。

ネガビユにはあのハルユキと綸を鍛えるフーコがいるし、学校で特訓もしてくれている謡もいて、さらに黒雪姫も対戦のことには妥協しない性格なので、マリヤの選択は自らを追い込む意味ではほぼ正解だ。

「あとこれはまだミヤアさんにしか話してないってニコさんが言っていたので、他の人には絶対に言わないでください」

「あれ、それオレも知らないかな」

「プロミも関係してるの？」

「はい。実は近々、ニコさんはネガビュとの合併を考えていて、それが可決すると一気に大所帯の大レギオンになるんです」

「ネガビュとプロミが……」

「合併!？」

さらにマリアはテルヨシさえ知らない事情を知っていて、まさかのネガビュとプロミの合併話に驚愕。

もう1つの引き抜き最有力のプロミの勧誘を断る理由も必要にはなると思っただけだが、まさかそんな解決策が用意されていたとは思わなかった。

「そんな大所帯だと、やっぱり私なんかはすぐに埋もれちゃって、ニコさん達や黒雪姫さん達とも距離が出来ちゃうと思うんです。でもそうならないように毎日頑張れるようになって、そう思っただけ」

その合併の話が可決になる可能性は、おそらくかなり高い。

加速研究会との戦いにおいてすでにネガビュとプロミは大きな繋がりがあるし、長い休戦協定に他の大レギオンからいつ文句が出てもおかしくないとも言える状況。なら合併も周りが納得する案件だ。

そしてそうなればマリアも10人余りのネガビュでならまだ存在感はあるが、4倍ほどに膨れ上がればその他大勢に含まれてしまうのも時間の問題。

その問題にも立ち向かおうと決意したマリアをテルヨシとサアヤはもう見守ることしか出来ない。

ここで何か優しい、甘い言葉をかければ、マリアの決意を踏みにじるのと同じことになるから。

「……そっか。頑張れよマリア」

「《四元素》も《三獣士》もぶっ飛ばせるくらいになりなさい」

「……うん! 頑張る! テルとサアヤさんもこれから大変だと思うけど、頑張っただけ」

色々と言いたいことがある中で言葉を選んで呑み込んで出したのは、それぞれそれだけ。

そうして送り出されたマリアもやっぱり優しいテルヨシとサアヤの気持ちにちよつと涙ぐむも、すぐに引つ込めて元気に返事してみせ、テルヨシ達の事情も知った上でエールを贈りそのまま自分の部屋に行ってしまった。

その後ろ姿を見送りながら、テルヨシとサアヤは互いに顔を見合つて、最大のエールを受けたからにはと拳を軽くぶつけ合つて頑張ろうと意気込むと、サアヤはあとを追うようにマリアの部屋に行き、テルヨシも明日に備えて就寝していくのだった。

7月14日、日曜日。午前10時。

テルヨシ達《メテオライト》の奮闘によつて執り行われることとなった会議に参加するため、テルヨシとサアヤは千代田区戦域へと足を伸ばし、自分達の無理を通した都合で議場の提供はテルヨシとサアヤがスターターとなつて用意することになっていた。

時間通りに対戦を始めてから、リアル割れも警戒しつついつも《七王会議》を行つている東御苑の方へと素早く移動し、7大レギオンの代表の到着を待った。

とはいつてもギャラリーの方が移動に制限がないのでテルヨシとサアヤが到着した頃にはほとんどメンバーが出揃つていて、集まった面子にはテルヨシとサアヤが少々驚くこととなった。

「あれ、別に今日は王の欠席にも寛容なんだけど」

「アンタら暇なの？」

「おいおいそりやないぜ。せっかく来てやったんだから歓迎の言葉くらゐまずは言えつての」

会議の場には《レオニーズ》から《ブルー・ナイト》、《コバルト・ブレード》、《マンガン・ブレード》の3人が。

《グレート・ウォール》からは《グリーン・グランデ》と《ビリジアン・デクリオン》の2人。

《プロミネンス》から《スカレット・レイン》と《カシス・ムース》。《オーロラ・オーバル》から《パープル・ソーン》と《アスター・ヴァイン》。

《ネガ・ネビュラス》から《ブラック・ロータス》と《スカイ・レイカー》。

《クリプト・コズミック・サーカス》から《イエロー・レディオ》。《オシラトリ・ユニヴァース》から《アイボリー・タワー》が参加していた。

まさかの七王会議とほぼ変わらない面子に思わず本音から出たテ

ルヨシとサアヤに対して、ナイトがおいおいと軽くツツコミを入れてくれて、さすがにこの面子だと席くらい用意しようかとサアヤが《ブレード・ファン》の展開剣で適当に席を作り、そこに王達が座ることいつもの議場が完成する。

「んじやまあ始めつか。テイル、ガスト、進行は俺で良いのか?」

「仕切りたいたいならどうぞ」

「内容によっては1分で終わっちゃうしねえ。そうならないことを祈るわ」

「つーことで今回も俺が議長やるからよろしくな」

今回は加速世界の将来を見据えてとかそういう重たい話ではないが、王がほぼ出揃ってしまおうとやはりナイト辺りが議長をやった方がスムーズになる。

それを見越してテルヨシもサアヤも進んで議長をやるナイトを止めずに、しかし会議の中心に立って成り行きを見守る。

「それじゃあ回りくどいのなしでいくぜ。昨日の領土戦でテイル達のレギオン、メテオライトが見事防衛を果たした。俺のそこ含めて3レギオンが攻めて尚、領土を維持した実力はもう認めていいよな」

そうした最初の確認としてテルヨシとサアヤがこの場で対等な立場にいることを認めるかどうかを問いかけたナイトに、他のレギオンの王達も首を縦に振って肯定。

その前提があって初めて次の本題に移れるのでテルヨシとサアヤもひとまずは安堵してナイトの進行を妨げずにおく。

「んじや本題だ。先週にテイルが持ち込んだ《帝城》の完全攻略作戦。どこもレギメンとは散々話をしたと思うが、これに乗っかってどこは拳手を頼む」

そして切り出された本題からナイトがわかりやすい形で拳手を促して反応を見ると、真っ先に反応したところは、なし。

ここでもどこも拳手しなければこれで会議はい終了。解散の流れだが、そうはなあってほしくないともう少し様子を見ると、どこも他の反応を見終わってから、最初に拳手したのは、ネガビュ。

「テイル達に触発されたからというわけではないが、我々ネガ・ネビュ

ラスにとつても帝城の完全攻略は大きな目標の1つだ。その考えうる最も勝算のある可能性がこの場にあるなら、我々は協力を惜しまない。もちろん、我々のレギオン単独でもいずれば挑むミツシオンだったからな。それが少し早まっただけの話だ」

「ちつ、ネガビユに先越されたか。んじやプロミネンスもこの作戦に乗らせてもらう。正直な話、東京戦域のダンジョンは全部アンタらが攻略し終えてて、ウチとしてもなんかでつけえ目的みてえなもんはほしいって前からポツポツ意見はあつたんだ。それがこんな形で巡ってきて、今は盛り上がってるぜ」

拳手と共に参加の理由についても述べた黒雪姫に続いて手を挙げたユニコも、新生プロミネンスとしての目標を定めかねていたことを吐露し、それが定まってやる気に満ち溢れていることを嬉しそうに話す。

そんな2レギオンの参加を見てメンバーと領き合ってから手を挙げたのは、ナイトとグランデの2人。

「なんだ、お前達のところは我々の反応待ちしていたのか？」

「いやいや、そういうわけじゃねーって。最初の宣言はしづらいもんだろ？ だから牽制し合ったら俺が先陣を切ろうとだな」

「結局切れてねえじゃねえか」

「あーもう。そういう弄りはやめてくれや。つーわけでレオニーズも参加だ。理由は面白そうだから。以上」

「我らグレート・ウォールも参加させてもらおう。我らとて帝城の攻略は長きに渡り思索していたのだ。ならばこの機を逃す手はあるまい」

「いいのかグランデ？ 帝城攻略が成功すれば、この加速世界に何らかの変化が起こるやもしれんぞ。事によつては加速世界の消滅も十分にあり得るだろう」

「——了。この世界が『真の意味での終焉』を迎えるならば、我に悔いはない」

頭数が揃ったら挙げるつもりだったっぽいグレウオはともかく、ナイトのカッコ悪い言い分にはテルヨシとサアヤも苦笑い。

最初から挙げるつもりではいたみたいでも、それならビシツと決めてほしかったものだ。

そのあと黒雪姫の問いかけに対してグランデが意味深な回答をしてグレウオの参加表明は終わり、残る3レギオンはどうかと顔を向けると、いつもの怪しい笑いを含めたレディオが口を開く。

「くつくつくつ。嫌ですねえ、熱血つてやつですか？　そういうのは私は苦手なんですが……」

「はいCCCは不参加ね。ソーンちゃんとのことオシラトリは？」

「ちよっ!?　何なんですかその雑な対応は！　まだ私が喋っているでしょう！」

「アンタはくどくどネチネチと前置きが長いのよ。昔からそういうところがみんなに嫌われてるのいい加減気付きなさいよ。そんなんだからCCCが性根が曲がってるだの陰湿だのと……」

「そこまで酷い言われ方はされてませんよ！　あなたのイメージを周りに撒き散らさないでください 《猪突猛進》！」

「………あ？」

昔からレディオとは相性が悪いっぽいサアヤは、回りくどい言い回しに苦言を呈して、そんなレギマスだからレギオンも悪評が立つんだと言わんでいいことを言う。

悪評があることに自覚はあるレディオもそこは全否定せずにツツコミを入れたが、サアヤの嫌いな通り名で呼んだせいで逆鱗を触れる。

威圧感たっぷりなサアヤはそこから無言でBBのメニューを操作してレディオを退場処分にしようとしたので、それはさすがに困るとテルヨシがなだめて事なきを得る。

「じゃあガツちゃんが今度こそ追い出さないうちにどうぞ」

「………まったく、これだから女というのは」

『あっ…』

「………いえ。私達CCCも仲間外れは嫌ですから、参加させていただきますよ。帝城の中にどんなお宝があるのか興味もありますし」

せつかくなだめたのに今度は女性陣を敵に回すような言い回しを

して黒雪姫達からさえ反感をかうレディオはもうアホの部類だろと思いつつ、意外にもCCCも参加を表明してきて素直に驚く。

サアヤは裏がありそうと嫌な雰囲気を出しているが、報酬の独占を阻止する決まり事なんかはこれから話し合うから問題はないだろう。

「1つ確認させて、テイル、ガスト。この作戦においてのあなた達、私達の立場に上も下もない。立案者だからってあれこれ決めるのに権限を持たないってことは間違いない？」

「アンタらが素直に協力しないだろうから、私達はその繋ぎとしての役目を果たしてる。そういう認識でいいわよ。そのために対等の立場になったんでしょ」

「オレ達はその繋ぎの役割と引き換えで目的達成のためにソーンちゃん達の戦力を借りるってだけよ」

これで残りはオーロラ・オーバルとオシラトリ・ユニヴァースの2つになり、どうせオシラトリの答えなど聞くまでもないだろうとほぼ無視してソーンに視線を向けると、そのソーンがくだいようだがそうした確認をしてテルヨシとサアヤも迷いなく答える。

それを聞いてヴァインと領き合ったソーンもレギオンとしての回答を述べる。

「それなら私達オーロラ・オーバルも協力するわ。《四神》には苦い思いをさせられてるし、未確認の残りの神器はあの帝城の中にあるんだろうしね」

「へえ。これで6レギオンが参加決定か。こりゃ俺もちよつと予想外だったぜ。んじゃ最後は……」

「皆さんが盛り上がっている中で申し訳ありませんが、オシラトリ・ユニヴァースはこの作戦には参加いたしません」

黒雪姫との因縁が決着していかないだけにオーロラ・オーバルは反発するかと思われたものの、それはあくまで私怨でしかないと言うように参加を宣言したソーンにテルヨシも笑顔になる。

残りの神器は確かに帝城内にあるが、その内の2つは正規ルートを無視して持ち出されてしまっているから、実質あと1つの《ザ・フラクチュエーティング・ライト》が最奥に鎮座しているだけだ。

それを知ってる黒雪姫やフリーコも今は何も言わずに成り行きを見守っていて、最後となったオシラトリ・ユニヴァースの決定をアイボリーが良い流れを無視してぶった切って告げる。

この流れで不参加を宣言するのはなかなか勇気がいることなのは間違いないが、アイボリーはそれをプレッシャーなどと思わずに平然と事務的に述べるので、進行役のナイトも一応は皆が通した理由を促す。

「加速世界で初の最大級の試みであることは事実でしょうし、我々としても十分な検討がされました。しかしながら我々の下した結論は、ここに集まった7レギオンが共闘し攻略に挑んだとして、四神の撃破までは不可能ではないかもしれないですが、その先の未知数な部分で四神以上の脅威が確認されたら手詰まりになるということでした。皆さんが帝城に挑むことを非難するわけではありません。ただ我々は『不可能』と結論付けただけのことです」

実はオシラトリに関してテルヨシは……おそらくこの場のネガビュやプロミもそうだと思うが、その回答には興味はあった。

オシラトリが加速研究会の隠れ蓑であることはテルヨシ達しか知らない事実なので、それを確定させる証拠作りを今は黒雪姫達がしているところ。

今日もこのあとにグレウオとの会談が予定されてるはずなので黒雪姫達は移動が忙しいが、今はそこは関係なく、オシラトリが、加速研究会が裏でやっていることはどういう方向へと向かっているのか。その判断の1つがこの帝城の攻略にあつたわけで。

ここで参加を表明したなら、加速研究会の目的の中に帝城が関係しているとも考えられたが、あっさり引き下がったところを見ると、加速研究会の目的は帝城の攻略にはないらしい。

ひよつとすればその攻略の先にあるザ・フラクチュエーティング・ライトを誰かが持ち出してくれることを狙っているのかもしれないので、どのみち帝城の攻略の前に加速研究会を潰すのが先決だろう。「……まあ現実的な話はウチでもあったし、その結論はわからんでもねえよ。んじやオシラトリは不参加つてことで、このあとの話し合い

は自由参加だが……」

「ではお先に失礼させていただきます」

そんなオシラトリの理由に納得したナイトがとりあえず全レギオンの決断を引き出したので、話を次の段階へと進め、帝城の攻略に関する話し合いになるから不参加のオシラトリは自由とすると、ここもあつさりとは退場したアイボリーは、皆に一礼してからスツとその姿を眩ませて議場から退席。

一応テルヨシとサアヤは警戒してメニューからアイボリーの名前がギャラリー一覧から消えたのを確認してから、ナイト進行の話に耳を傾ける。

「それじゃあまずは何から決める？ 報酬の分け前か？ 作戦決行の日時か？」

「報酬だろうな。ここをハッキリさせねば、仮にその後チームを編成し、各レギオンから戦力をレンタルしようと、報酬に目を眩ませて裏切り行為が起こる可能性は高い。特にCCC辺りはな」

「心外ですねえ黒の王。協力する以上、まずは味方の生存率を高く維持するのはダンジョン攻略の基本中の基本でしょう」

「そう言うけど実際問題、別々のレギオンのメンバーが連携をすとなつたら、綻びは出てくるものよ。信頼関係なんてそれこそ一朝一夕で築けるものじゃないでしょ」

「そうだなあ。しかも相手が最初からあの四神だけ。下手すりゃごっそり《無限EK》なんてこともあり得ちまう以上、6レギオンで腹の探り合いなんてやってたら攻略どころじゃねえ」

予想はしていたものの、今日の会議で最低限決めておきたいことはテルヨシとサアヤは事前にまとめてきていたので、早速のお悩みに対して手を差し伸べる。

ここで遠慮のないテルヨシとサアヤの性格は非常に効率的でナイトも対策済みな2人にターンを回してくれる。

「報酬の件はこっちとしても考えてきたんだが、オレ達メテオライトは攻略で得られたドロップアイテム類に関しては関与しない。手に入った時にはそつちに譲るよ。まず同じ考えのレギオンとかいる？」

「ほう。仮にも加速世界で最難関のダンジョンで手に入るアイテムを
いららないと？ ずいぶんと気前が良いな」

「あくまで私達の目的は帝城の完全攻略ってこと。報酬なんてそれに
比べたら些細なことなのよ」

「ふーん。潔くてカッコ良いじゃねえか。んじゃプロミもそれでいい
ぜ。あたしすらも過程を楽しみたいって意見が多かったからな。いち
いち報酬でああだこうだやんのは面倒臭えや」

「そういうことなら我らグレート・ウォールも頭数が多い都合、少数の
アイテムを分配するのが難しい故、ドロップアイテムに関しては譲る
ことにする」

そこでまずは報酬アイテムの関して欲しいレギオンと別にどうで
もいいという意見が出てくれるのを信じて問いかけると、プロミネン
スとグレート・ウォールが辞退してくれて、とりあえずこれで4レギ
オンが報酬を分けられるところに持っていけた。

「んじや話は早いな。次は目下の敵となる四神。これの撃破のために
チームを4つ編成することになるけど、そのチームリーダーをロータ
ス、ナイト、ソーン、レディオの4人に担当してもらいたい」

「……なるほどね。これで四神の撃破が出来た場合、各エネミー毎に
発生したドロップアイテムはその担当リーダーのレギオンの取り分
につてことね」

「だが四神4体を撃破して1つのアイテムがドーンと出た場合はどう
する？」

「その時は各チームで被害の少なかつたところがMVPってことで解
決しようと思う」

「待ってください。それでは足の引っぱり合いは解決できないのでは
？」

「だから私達がいるんでしょ。私達のメンバーは必ず4チームに2人
ずつ配置するわ。その上でアンタらのレギオン同士が足を引っ張る
ような行為をしていたら、その時点でその行為を行ったレギオンから
報酬獲得の権利を剥奪する。獲得するはずだったアイテムも私達が
総取りさせてもらうわよ」

「つまりガツちゃん達はチームの戦力であると同時にチームを監視する監督役も担うってことね」

「ガツちゃん言うなレイカー。アンタらを信用するって意味でならこれは裏切りになるのかもだけど、こうでもしないと他レギオンのメンバーに背中を預けられないってのもわかるでしょ。私達が不正を絶対に見逃さない。その一点だけは信用して欲しいわ」

報酬の話はどうやっても厳しい目で見なければならぬ部分が出てくるから、その部分をテルヨシ達が担うことで解決しようという案に、6レギオンも少し困惑。

やると決めた以上はレギオンの壁を取っ払うくらいの気持ちでいるのが度胸だが、そう簡単ではないことは長い年月で積み上げたものが邪魔をするもの。

だからその壁を完全に取っ払う必要がないようにとしたテルヨシ達の提案に対して、メンバーと少し話し合った各レギオンは、皆が顔を合わせて首を縦に振る。

「しゃーねえわな。報酬で揉めるなんざレギオン内でも起こっちゃう問題だし、それを監督してくれんなら、少なくともそのあとの問題は各レギオンに持ち帰れる」

「四神撃破のあとの攻略の際にもまた報酬の件では話し合いが必要だが、当面の目標に関してはこれで構わん。話を続けようか」

「では非常に揉めそうな案件にいきましょうかねえ。私達4人がそれぞれどの四神を相手にするかを。くっくくくっ」

まだ問題はあるが大きな部分で妥協できるとあつて反対意見は出ずに報酬問題はとりあえず解決。

テルヨシとしてはあと一つ、どうしても今回で決めたいことがあったのでそちらを切り出そうとしたら、やはり王達も何が優先かはわかるのでレイオオがらしい言い回しで最大の難関を切り出してくる。

「押し付け合いはなるべく避けてえな。この会議で挙がるのはわかりきってたし、どこも割り振られるならって意見はあるだろ。それをまづ聞くか。ちなみに俺は《ビヤッコ》だ」

「まあ脳筋のレオニーズならそうだろうとは思っていたがな。私は

《スザク》を希望しておこうか」

「あら、ロータスはあの火の鳥に勝算でもあるのかしら？ 私もスザクならと思っていたんだけど」

「やはり綺麗には分かれませぬねえ。ちなみに私も4体から選ぶのであればビヤッコを希望します」

「やっぱどこも《セイリユウ》と《ゲンブ》はやりたくねーってことか。あたしは個人としてならゲンブかスザクってところか」

「我が王はゲンブを希望しておられる。追加するのであれば、我々グレート・ウォールの主戦力はゲンブ戦のみにおいていくらかの勝算を持ってている。とはいえ確実なものではないから期待しないでもらいたいかな」

「セイリユウ希望はなしか。まあ予想した通りだな。《レベルドレイン》はリーダー責任でも重たすぎるし仕方ないけど、誰かがやらないと話が進まないしなあ」

「っていう前フリは無視して、セイリユウのレベルドレインの問題を解決できるかもってなったら、誰か意見を変えるかしら？」

最初の段階での分かれ具合は最悪ってこともないものの、やはりレベルドレイン持ちのセイリユウを受け持ちたいと名乗り出る王はいない。

ただそこも考慮して事前にレベルドレイン対策を持ってきていたテルヨシ達が皆が嫌がるそこを解決出来るかもしれない前提にすると、黒雪姫と因縁があるゾーンが動いてくれる。

「レベルドレインが無効化できるなら、電撃対策なんかもある私がやるわ。ただし、レベルドレインを完璧に封じ込める前提があつての話だからね」

「くっくっ。では私もグレート・ウォールが勝算ありと言うならばそちらに助力しようと思います」

「おっ。なんだなんだ。意外とあっさりと決まったじゃねえか」

「待ってナイト。私はまだ本決定じゃないわよ。ちゃんとしつかりとテイル達の言う対策が万全か確認が取れてから話を進めてちょうだい」

「ってことなんだが、確認の方は取れてんのか？」

各意見が出揃ってからレディオもゲンブの方に移動してくれたので、とりあえずこれで各エネミー撃破のリーダーは仮決定となり、とても大事なことなのでソーンが念押ししてきた案件をナイトがテルヨシ達に問う。

しかしそれに即答できなかつたテルヨシとサアヤは、会議を次の段階に進めるためにまたやることができてしまったのだった。

Acceleration Second 90

「おっ。集まってる集まってる」

「まだ15分前なのにみんな意識高いわね」

テルヨシ達の今後を占う大事な会議がひとまずは無事に終わって、その結果報告やらも兼ねて事前に《メテオライト》のメンバーには召集をかけて中野第2戦域にあるカラオケ店前に集合してもらった。

テルヨシとサアヤも会議を終えてからまっすぐに来たのだが、すでにリアルで面識のあるメンバーは全員集合済みで、約束の時間の前に来たのになんとか遅れたような気分になる。

「やつほーみんなー。元気ー?」

「テル君はいつも元気ね」

「そりゃユリさんやクレア、シズつちの顔を見て元気が出ないわけが……」

「はいはい、社交辞令はいいからねえ」

そのテルヨシとサアヤが到着して早々にいつものやり取りで場を和ませて挨拶代わりとすると、さっそく話は先ほどの会議の結果についてになる。

一応、終わってすぐにみんなにはメールで結果については報告はしていて、《ブルー・ナイト》らにも許可を得て今日の18時まではこの戦域はメテオライトの領土なので、その恩恵を利用して対戦拒否した上でグローバル接続をしている。

そしてここにいないもう1人《チャイブ・リリース》にも結果はどうあれ報告の義務があるので、会議の前後にはこの戦域にいてもらつて、期待通りの結果ならそのまま合流する手はずになっていた。

もちろん結果は作戦を実行に移せる段階に進んだので、リリースも約束通りレンタル移籍から本移籍になる予定だ。

メールには簡潔なことしか書いていなかったもので、これからすべきことなどは全員が集まってからカラオケ店の個室でと話しておき、リ

リリースらしき男の到着を待つこと10分。

約束の時間の5分前辺りでテルヨシ達の集団にそれらしい反応をした男が姿を現す。

身長約180cmとかなりの長身で鍛えているわけではなさそうだがガツチリとした体格。

動くのに際して煩わしさを感ぜない程度に切り揃えられた茶髪に少し睨みを効かせるようなつり目があれだが、テルヨシ見でもなかなかのイケメンだ。

「あら、良い男かも」

「クレアって面食いなだね」

「何事も第1印象って大事だと思うけどねえ」

「シズクちゃんはどうか？」

「わ、私はその、イケメンな方は緊張するので……」

「テルくらい間抜けな方が肩肘張らなくていいってこと？」

「そ、そこまで言ってますよ？」

そのリリースらしき男に女子が様々な反応をして、らしいなあと思いつつ近寄ってきた男が聞き覚えのある声で話しかけてきた。

「お前達がそうか。なるほど、誰が誰かパツと見ではわからないな。それが面白いところでもある」

「んじや全員揃ったし、まずは部屋の確保だな。いやあ、大所帯にオレも感動ですよ」

「私、もつと大きな集団にいたわけだけど」

「8人が顔を合わせてなんてサアヤも経験ないでしょ？」

「それを言ったら先日の文化祭……」

「さあ行くぞ歌うぞハッスルだー！」

声からして間違いなくリリースその人だったので、テルヨシも余計な詮索はやめてとにかくまずは安全に話ができる場所に移動しようとする行動。

その際にサアヤがポロツと先日の文化祭での大作戦を話しそうになったので、怪しまれる前にテルヨシが強引に全員を店の中に押し込めてキャンセル。

サアヤも本音が出やすい性格と気心知れた人の中で気が緩んだことを反省して引き締め直したところで、8人が入っても余裕のある個室を確保し、各々のジューズが揃ったところでまずはリリースの自己紹介。

「あちらでは見知ってはいるが改めてだな。俺はタカジヨウカイ《高城權》。《日本教育大学附属高等学校》の1年生だ」

「高城……權……」

ネームタグをサツとみんなに配りながらに口頭でも自己紹介をしたカイは、ユリと同じでこのメンバーでは最高齢ということが判明。

テルヨシが本能的に丁寧語を使っていたのも間違いないやなかったなあなどと思いながら、テルヨシ達もカイに自分のネームタグを渡して、一応カイに倣って自己紹介。

しかしその中でユリだけが何故かネームタグも渡さずに何やら思いつき出そうと頭を悩ませていて、それでサアヤに呼び掛けられてから自己紹介しつつネームタグを渡す。

「馬場園由梨。よろしくね、カイ君」

「馬場園……由梨……どこかで……」

と、ユリの自己紹介を聞いて今度はカイの方まで引つ掛かりを感じたのか思考に入ってしまった、何の因縁があるのかとテルヨシも少し緊張はしたが、ほとんど同時に思い当たったような顔をする。

「カイ君って、そうか。全国模試の成績順位でいつもトップ10にいた……」

「馬場園……お前、全国模試で唯一3年間、国語の教科だけ満点を取り続けたあの化け物か」

「うわっ、頭の痛い話をしているう……」

「全国模試って、半年ごとにやってる学力テストよね」

「あれって確か、成績上位100人と、各教科の上位1000人しか名前には出ないですけど」

「学校ごとに校内での成績順位は出るけど、他の学校の生徒の名前とか記憶してるものなの？」

「成績上位10名くらいなら、毎回載っていれば意識せずとも名前く

らいは記憶しますよ。ちなみに僕も毎回全国トップ50には入って
ます」

「中学生になるとそんなテストが待ってるんですね」

模試とかそういう単語が嫌いなテルヨシは拒絶反応でテーブルに
倒れてしまったが、ここにいるアキラ以外が理解できる内容だったの
で、その食いつきはそれぞれ違う。

思い出すのに時間がかかったのは、おそらく高校進学して3ヶ月も
経過してしまっていたからだが、意外なユリとカイの因縁のような繋
がりには驚かされる。

「国語だけはどうあっても俺の名前が一番上に出来なくて悔しい思い
をしたものだが、その障害とこんなところで会おうとはな」

「人を邪魔者みたいに言うのはちよつと嫌かな。私だって好きで満点
を取ってたわけじゃないもの。結果論をグチグチ言う人はどうかと
思うなあ」

「別に恨みを持っていてるわけじゃない。ただ昔の自分が満点を逃し続
けたことが心残りなだけだ」

少し珍しいことにユリがカイに対して良い印象がなさそうな反発
を見せて、それも当然な会話はしていた自覚のあるカイも関係の悪化
は避けようと言葉を訂正。

ただ、こういう時に場を和らげる役割のテルヨシが機能していない
のは、単に勉強関連の話で頭が痛いからであった。

そんな一波乱あった自己紹介も終えて、2時間のフリータイムで部
屋を確保したとはいえのんびりしていたら無駄になるので、話すべき
ことはさつさと話して、やることもさつさと済ませてカラオケをやる
うとなる。

そのカラオケにおいて苦い顔をしたのは主に男性陣だったが、女子
のキャツキャとする姿を見ると歌わないというのは選択肢から除外
されてしまうので、今のうちに腹を括ろうと結託。

テルヨシは別に音痴だろうと普通に歌えるから、リクトやアキラが
歌のレパートリーのなさそうな不安を顔に出しているのを面白がっ
ていたら、年長のカイに性格の悪さを指摘されてしまった。

「さてと、それじゃあ喉を枯らすくらい歌うためにも会議を始めるわよ」

「んじゃまずは今後の《帝城》攻略作戦における大雑把な決定事項とこれからやることについてな」

まだまだ関係性がしつかりとできていない都合、若干のぎこちなさもありつつで、それを解消しながら話をしようとテルヨシとサアヤが先頭に立って会議を始める。

まずはメールでも簡潔に伝えた帝城攻略作戦の実行が決定したことから報告。

協力してくれたのが《オシラトリ・ユニヴァース》を除く6レギオンになったこと。

最初の難関の四方門の各攻略リーダーが仮で決定したこと。

そして、その仮を本決定にするためにこれからテルヨシ達がしなければならぬこと。

「……つてなわけで、これから予定通り《上》に行くけど、ちよつとやるが増える」

「ソーンの奴が次回の会議までにはつてうるさいからね。クレア、ダメでしたじゃ困るんだけど、大丈夫?」

「そう言われると絶対の自信はないけど……エネミーの生態とか性質上では不可能じゃないって思ってる」

「確認するが、それは先にやるんだよな?」

「そうね。カイ君は効率を気にするタイプだし、道中に寄り道する感覚なら、少しは無駄がないと思うけど」

「で、でも千葉に向かうついでに《セイリユウ》と戦おうなんて、凄く軽く話してますけど、とんでもないんじゃない?」

「別にセイリユウを倒そうという話ではないでしょう。問題は駿河さんの《マスカレード・ボール》が《レベルドレイン》の対象になり得るかどうかがわかればいいわけですし」

「ですけど、その肝心のレベルドレインを都合よく使ってくれる保証もないです、よね」

王達との会議で四方門の攻略リーダーは《パープル・ソーン》のみ

が仮決定という形で終了してしまっていたので、ソーンが危惧するセイリユウのレベルドレイン対策でテルヨシ達に可能性があると話しましたが、あくまで可能性というだけであった。

その可能性というのが、クラリツサの必殺技であるマスカレード・ボールの分身体だ。

エネミーがその正体を看破できないほどの実体ありの必殺技ならば、セイリユウのレベルドレインでも身代わりに発動させることができるのではないかと、そういう話をクラリツサ自身がしてくれていた。

もちろん、このレベルドレインを分身体が受けて、本体のクラリツサにダメージが還元される可能性もなきにしもあらずだが、先日の《アクア・カレント》救出作戦において、レベルドレインを受けたパドが大橋を抜けたところでレベルドレインの影響を受けなくなったのを確認済みのテルヨシ達は、もしもダメージの還元が起こった時に備えて、クラリツサには大橋の端っこで待機してもらうことで対応することに。

さらに急遽決まったこのセイリユウ戦を抜きにしても、今回はどのみち《無制限中立フィールド》にみんながダイブするのは予定にあったのだ。

その目的は一昨日の夜に実行した連係強化ミッションの続き。

栃木県日光市にある女峰山の山頂にいた《神獣級》エネミー《タキリビメ》と並ぶ同種のエネミー残りの2体の試練をクリアするためだ。

その内の1体が千葉県八千代市にある神社の1つに身を置いているので、その道すがらセイリユウと1戦交えてこようということ。

当然ながら危険が伴うし、レベルドレインを撃たせるためにいくらかダメージを負わせないといけないこともあるだろうが、今のメテオライトならそこまで追い込むこと自体は難しくないとも思っていた。

その意識はなんとなくみんなにもあるのか、あの《四神》の1体と戦うとなっても、アキラとシズクが言ったくらいのが精々で、やめようとか、無理とかの言葉を出す者は1人もいなかった。

それはこのセイリユウとの1戦すらも、テルヨシ達にとつては通過点でしかないという意識の表れとも取れ、そうと決まったならと各々が持参したXSBケーブルを取り出して直結し、部屋にある固定端末と繋ぎ切断セーフティを設定。

「セイリユウとの戦闘経験はオレやサアヤ、ユリさんがあるから、その辺はいくらか頼りにしてくれ。あとは《無限EK》にだけはならないようにフォローはし合うこと。無理は絶対ダメ」

「それを《スザク》にほとんど無限EKに近い状態にされた人が言うと言得力あるわねえ」

「ふふっ。経験者が語るってやつね」

「それは言わないでくれるとありがたかった……」

向こうでやることは移動距離を含めてもそれなりに多いので、切断セーフティは現実時間で15分後に設定。

内部時間では約10日ほどもあるが、そこまで長居するつもりもないので、あくまで保険としてのものだ。

現実時間での会話はそれだけ消費することになるので、詳しくは内部で話して気合いを入れるようにテルヨシが言葉を発したものの、余計なことを言うサアヤとユリのおかげで締まるところが締まらずに部屋には笑いが溢れてしまった。

まあそれもそれでこのレギオンらしいといえらしいので、それ以上のことは言わずに短く「行くぞー！」と掛け声すれば、みんなも笑いながらにんえて、一斉に無制限中立フィールドへとダイブしていったのだった。

セイリユウの守護する東門は中野戦域から帝城をぐるつと回り込まないといけなくて少し面倒。

移動中にはシズクのアビリティ育成に比重を置きながら、対セイリユウ戦のフォーメーションの決定と対策をしておく。

とはいえ、前回のような救出作戦みたいに祭壇に近づく必要は全くないので、開幕からアキラにほぼ無限に供給してもらえる必殺技ゲージを利用して、ユリの《デンジャラス・タイマーボム》をしこたま量産してから、それを投げ入れるだけでも相当なダメージソースになる

ため、場合によってはそれだけでレベルドレインを誘発させることが可能かもしれない。

実際にやってみなければわからないので、そこは第1作戦として実行しておき、それで足りないなら次の手も打つ形で色々と考えた。

「……………うわあ……………酷い光景……………」

「第2次世界大戦の戦地もこんな感じだったのかしら……………」

——ドドドドドドドドゴオオオオン!!

それで到着してからユリにはデンジャラス・タイマーボムの量産に入ってもらって、実に8発ものデンジャラス・タイマーボムをストックして、それをタイムカウントを進めてから大橋の端っこに踏み入って投げ入れ、サアヤが《ブレード・ファン》の起こす風で奥へと押し込み、出現したセイリユウが前進するより早く大橋の半ばより少し進んだ先で大爆発。

範囲のギリギリ外からその様子を見ていたテルヨシ達は、この世の終わりのような壮絶な爆発に遠い目をしてセイリユウを少し可哀想に思いつつ、黒煙で全く見えなくなったセイリユウを一応は警戒する。

しかしそれだけで4段あるHPゲージの最初のゲージの約3割を削ったユリの攻撃に怒ったか、黒煙を払い除けて咆哮を轟かせたセイリユウは、その両手に黒い球体を出現させて、構えるテルヨシ達に放ってきた。

それはレベルドレインで間違いなく、直進すると速度が上がる性質であつという間に迫ってくるが、そこは待っていただけにテルヨシ達に焦りはなく、クラリツサも自らが前に出てマスカレード・ボールを発動し分身体を作成。

その分身体を迫るレベルドレインへとぶつけてみると、その分身体をアバターと認識したっぽいレベルドレインは、クラリツサの分身体にまとわりついて呑み込み、最初のドレインが始まったところでダメージ判定で分身体が消失。

それによるクラリツサへのダメージはなく、レベルドレインも対象を失ったことでその場で消失してしまう。

「はい撤退！ 撤退ですよー！」

それらの現象を確認したテルヨシは、レベルドレインを放つてからも近づいてきていたセイリユウを警戒しながら、大橋に踏み入っていたサアヤとクラリツサと共に大橋から抜ける。

大橋に敵がいなくなつたことで、セイリユウも大橋の向こうにいるテルヨシ達を睨むような様子を見せてから、霧のように霧散して消えてしまい、それに安堵しつつ、クラリツサの必殺技がレベルドレインにも通用することがわかって、クラリツサとハイタッチを交わしたのだった。

意外なことに被害もなく1つ目の目的を達成できたことで、レギオン内での雰囲気も良くなり、活気もある中で次の目的地である千葉県八千代市までの道中は、引き続きシズクのアビリティ育成に比重を置きながら、各々のアビリティや必殺技などからシナジー効果などが生まれなにかを議論。

人が増えればそれだけ技のバリエーションも関係も増えることになるため、本人達が気づきにくいことも客観的な視点からなら気づくこともあるだろうと、移動中は暇さえあればとにかく会話、会話、会話。

そのおかげでユリが事前に見つけてくれていた千葉県八千代市にある高津比咩神社（タカツヒメジンジャ）までの移動の間に試してみたい関係がたくさん出てきて、これから挑むことになる試練でも役に立つかどうかの楽しみが増えた。

高津比咩神社は今のフィールド属性である《古城》ステージに合わせて、そのオブジェクトを神社らしい建築を残しながらどつしりと構えていた。

赤い鳥居もすっかりとあって、ユリの話ではこの鳥居を潜って境内へと突入すると《Tagitsuhime》と呼ばれる神獣級エネミーが雷鳴と共に出現するらしい。

「それじゃあ作戦とかの前にはまずは突っ込むけど、行きたい人は？」

「ジャンケンで負けた3人はどう？」

「まるで罰ゲームのようじゃな」

「実際そうだろう。だが簡単に死なれても困るからな。やるからには粘ってくれよな」

「それはあなたにも言えることではなくて？」

「それならばしつかり役割を果たせる人選で行くべきではないのか？」

「そ、そうですよ！ ジャンケンなんてやめて話し合いで……」

「誰だろうとブツ飛ばせば良いんだろうが！」

そのエネミーが単に倒せばいいだけのエネミーと違うことはタキリビメ戦で証明されているので、ここでも乗り越えるべき試練がどういうものかを確かめる意味でも、作戦を立てる都合でも挑んでみる必要がある。

前回のタキリビメもそうだが、その段階で全員が行く必要はないと学習していたから、今回は最低限の犠牲でなんとかしようと話をしてみると、みんな行きたくないらしい。

それを敏感に察したサアヤのジャンケンが割と速攻で採用されたのは言うまでもないが、シズクだけは死亡するとせつかく育てたアビリティが無駄になるので、突っ込む気満々のところを全員が引き止めてジャンケンからも除外。

様子見という名の罰ゲームを賭けたジャンケンは異常はほどの緊張感を持って開催され、意気込んで利き手を握るテルヨシ達の気合いの入ったジャンケンは、5度を経て完結。

「言い出しっぺって負ける法則なのね……」

「うう……だからジャンケンは嫌だったんですよ……」

「泣くくらいでしたら開き直りなさいな」

それで負けたのはサアヤ、アキラ、クラリツサの3人で、公正な結果だけにテルヨシも代わるようなことは言えず、両手を合わせて合掌して3人を見送るしかなかった。

とはいえ突っ込む3人に任せきりではなく、もちろん、タギツヒメのテリトリの外からでも観察を怠ることはできないので、テルヨシ達も気は抜けない。

——そしてここからタギツヒメの試練が始まる。

《メテオライト》が発端となって計画され実行されることとなった《帝城》攻略作戦は《オシラトリ・ユニヴァース》を除く6大レギオンとで協力して行われることになり、先立っての攻略目標となる《四神》のうちの1体《セイリユウ》の厄介なスキル《レベルドレイン》への対策が通用することを証明してきたテルヨシ達は、そのまま当初の目的であった千葉県八千代市にある高津比咩神社へと到着。

そこをテリトリーとする《神獣級》エネミー《タギツヒメ》の試練に挑むため、その尖兵としてサアヤ、アキラ、クラリツサが出陣。

女峰山の主《タキリビメ》は《勇氣》という重要なワードを強調していたことから、このタギツヒメも何らかのワードを強調してこると予想。

だが実際にどんな試練が襲いかかってくるかは全く不明なため、始めから全員で突っ込んで全滅するのは愚作と判断して、公平なジャンケンによって生け贄……もとい尖兵が決定したわけだ。

「それじゃ行くわよ」

「そ、速攻でやられたらごめんなさい！」

「なるべく粘れるようにいたしますけど、皆さんも観察だけは怠らないでくださいな」

「まっかせなさい！ 見るのは得意だ！」

「テイル……その言い方は色々と誤解を生みそうだぞ……」

「いつも女の尻を追っかけて見ておるからな」

「酷いバーちゃん！ オレは尻だけじゃないもん！ ちゃんとおっぱいとか二の腕とかも……ぐほお!!」

その3人が作戦など特に立てられないからと、決まったら決まったで割とあっさりと行こうとするから、その役目を全うしようとするサアヤ達の頑張りに応えようと、テリトリーの外からの観察はバッチリだと言う。

しかし何かとボケる習性のあるテルヨシが言うから話は脱線して、

本当に変なことを口走る前にサアヤからの制裁が加えられて沈黙。

こんな怪我では観察力も落ちるってば……

なんて言葉がテルヨシの口から出てくるわけもなく、笑いにされた彼氏が恥ずかしいのか、サアヤもさっさと切り替えてみんなの集中力を再び上げさせる。

「ボンバーがここに来たのは鎌倉の次らしいんだけど、その時は会話イベントの最中に離脱して何も起こらなかったってことを考えると、やっぱりテリトリーからの離脱自体は容易なのかしら」

「それはわからんの。会話イベントの最中ではギミックが発動せんよ
うな感じじゃったし、儂がいち早く離脱したのは、鎌倉と同じような
イベントが発生するかの確認のためじゃったから、会話イベントを終
えてみんなことにはなんとももの」

「とにかく行かないことには始まらないということですよ！ 行きま
すわよ！」

「うわあ！ シンデレラさん引つ張らないでー！」

一応、移動中や現実世界でも確認してはいたが、改めて事前のユリ
の調査についてを述べたサアヤに対して、来た本人がそれ以上はわか
らないと言ってしまう、もう行くしかない。

その辺で割り切りが良いクラリッサがアキラの腕を引つ張ってズ
ンズン進んでいき、サアヤも仕方ないかとそのあとに続いて入り口と
なる鳥居を潜りに歩を進めた。

その様子を各々が観戦しやすいように陣取って見守りながら、すで
にテルヨシは今回のフィールドを観察していた。

鳥居の先は50m四方ほどの拓けた境内で、障害物は一切なし。

その境内を取り囲むように《古城》ステージなりの背の低い荘厳な
神社の建物と石垣が取り囲んでいる。

最奥には本殿がバーンと鎮座して、ユリの調査によると境内の真ん
中辺りに差し掛かると、その本殿からタギツヒメが出てくるらしい。

と、そうこう観察していたら鳥居を潜ったサアヤ達が境内の真ん中
に到達して足を止めると、聞いた通りに本殿の正面の扉がひとりでに
開け放たれて、その奥からタキリビメによく似た巫女のようなエネ

ミーが低空飛行しながら降りてくる。

遠目からは細かい装飾などは判然としないまでも、その腰に差されている剣と背後に浮く水晶玉のような球体が4つあるのはわかった。『その様子からして、ここへ偶然に迷い込んだ小戦士というわけではないのでしよう。——妾の領域に足を踏み入れた勇敢なる小戦士達よ。その強き意思を以て妾に示しなさい。そなたらの《力》を——』

——力、か。ずいぶんと漠然とした試練だが——

遠くから聞こえてきたタギツヒメの美声はとてつもなく澄んでいて、とてもではないがエネミーから発せられた声とは思えないほど。

しかし現実としてそれを受け止めて、会話イベントを終えたここからが本番だと集中力を上げ、タギツヒメが両腕を左右に伸ばして広げたのが見えた瞬間、境内を取り囲む外周に変化が起きて、ゴゴンツ！ 壮絶な音を上げて外周の地面が隆起して、あつという間に高さ20mはある鋼鉄の壁が出現。

「……ハアツ!? ちよつとちよつと!!」

その壁は高津比咩神社を丸ごと覆ってしまう範囲に展開されてしまい、中の様子は全くわからなくなってしまう。

それにはテルヨシ達も仰天して、慌てて抜け道がないかとぐるっと1周したりしてみたが、まともに入れそうなのは上だけ。

なのでユリを飛ばして様子を見てもらおうと打ち上げてみたが、何やら少し動いてみせてから、想定よりもずっと早く降りてきたユリが残念な報告をしてくる。

「天辺は確かに空洞になっておるようじゃが、その天辺には黒い膜のようなものが張られておって中の様子は見えん。儂の《リトル・ボム》でもびくともせんかったが、おそらくは車の透かし防止窓のようなものじゃろう。光は通過しておる」

「となると試練が始まったらこちらの意思での撤退は不可能ということだな。これは想像よりもキツイ……」

上も蓋をされていると聞いてガクリと肩を落としたテルヨシ達の気持ちは想像するに容易いが、これで確定したのは、タギツヒメの試練は始まったらクリアするか全滅するまでテリトリーからは逃げら

れなくなるということ。

ユリが飛んでいる間に壁の破壊も狙ってみたが、どうやら破壊不能オブジェクトのようで全く歯が立たなかった。

そうなるかと頼りになるのは中にいるサアヤ達となり、すでに2分ほどが経過しているが、音や振動も遮断するのの中は静かそのもの。

不気味なまでの静寂を見守ることしか出来ない歯痒さに落ち着きがなくなるテルヨシだったが、それもすぐに終わり、さらに30秒ほどしてから壁の内側の空から3本の光が空へと向けて伸びていき、次いで高く隔てていた壁がズズズ、と音を立って地面へと沈み込んで消えてしまう。

光は間違いなくサアヤ達の死亡エフェクトで、壁の向こうの景色が見えると、鳥居の前に浮遊する死亡マーカーが3つあり、試練のクリアは出来なかったと認識。

「やはり全滅するまでは壁はなくならないか。これはタキリビメよりも面倒かもしれんな」

「そうは思わねー。あれはあれで山を登り直す手間の方が精神的にキツイ」

「その分、こっちはバーストポイントこそ失うが、蘇生からすぐに合流できるしな。俺もこっちの方がイライラしねーかも。エネミー戦なら死ぬのも想定の内だし」

「なんにしてもガツちゃん達が蘇生するまでは作戦の立てようもないし、適当に休んどこ」

「そうじゃな。時間もまだまだあるので。焦ることはない」

問題なのはその死亡した3人以外に試練の内容を知り得なかった現実で、何か話そうにも作戦を立てることすら出来ない。

仕方なくサアヤ達が蘇生するのを各々で1時間待ち続けて、ほとんど同時に死んだらしいサアヤ達が蘇生して戻ってきたところでようやく話が進む。

「あの試練は最悪よ……痛覚2倍がこれほど辛いと思ったことはないわ……」

「ぼ、僕は速攻で砕け散ったからそこまでじゃなかったけど……」

「硬くなるアビリティがありましたのに粘らなかつたのには悪意がありましたよ……」

「あ、悪意はないですよ！ ガスト姉もシンデレラさんも『これは無理だ』って結構早めに言いましたよね!？」

話だけを聞くと3人ではどうしようもない試練だったことはわかり、死ぬまでに苦しみが伴うことも判明。

粘れば粘るほど辛いようだが、その辺でアキラが潔く死んだことを口論するのをとりあえず止めてあげて、まずは中で何があったのかをハッキリとさせる。

「試練が始まってから外周を壁で塞がれたのはわかったと思うわ。天井は光源の確保のためか開いてたけど、ボンバーのリトル・ボムが見えたから抜けられはしないみたいね」

「試練は極悪ですわよ。壁が出来てからすぐにタギツヒメの後ろに控えていた水晶玉の1つが割れて、外周の壁とは別の高密度のエネルギーの壁が出来ましたの」

「それがタギツヒメとの間を隔てるように展開されて、毎秒20cmずつ鳥居の側に移動してくるんです」

「壁自体にダメージは発生してないんだけど、どうにも耐久値があるみたいで破壊するまでに相当な攻撃をしなきゃダメね」

「わたくし達だけでは攻撃力不足で、迫る壁に対してあまりに無力でしたわ」

そうして言葉を分けて1時間前に挑んだ試練についてを説明してくれたサアヤ達に難しい顔をしてるだろうユリ達を見る。

テルヨシが説明を聞いて真っ先に考えたのは、そのエネルギーの壁の攻略ではなく、失敗した場合と仮に突破した場合だ。

失敗した場合は先ほどの愚痴からもわかるように、外周の壁とエネルギーの壁に挟まれてプチッと圧殺されることになる。

サアヤ達がほぼまとまって鳥居の前で死亡していたのはそういうことの証明なので、それを想像するとあまり失敗はしたくない。というかしたくない。

そしてそのエネルギーの壁を破壊して突破したとしても、クラリツ

サの言葉を信じるなら、タギツヒメの後ろに控えていた水晶玉は全部で4つあったわけで、似たような試練があと3つは控えている可能性が高い。

「1つの試練につき1度の失敗を踏むとして、最低でも3回は死ぬことになりそうよね……」

「テイルよ。あまりネガティブに捉えるでない。初見でも突破できる可能性はあろう」

「力を示せてるのは、純粋な攻撃力を求められてるってことなのか。それとももつと深い意味なのか。その辺も考えておかないと前回みたいに間違った解釈も出るぜ」

「要はこいつでブチ抜いていけばいいんだろ。ならさっさとやるぞ」

「ルーレットさんが頼もしい……」

「褒めると調子に乗って制御できなくなりますわよ」

タキリビメの時は《オオツナミ》を突破したところで剣を破壊したので、その先にあったと思われる試練をスキップした可能性があるが、今回はそのスキップは使用不可能とあつて段階を経る攻略はテルヨシ的に割と新鮮。

これはいざれ行う帝城攻略作戦でも必要になる段階なので、今うちにその感覚を養っておこうと少し集中力を上げていた。

そんな中でこの手の《破壊》を得意とするシズクがかつてないほどに頼もしい存在であるのはアキラの言う通り間違いなく、だからといって主導権を持たせるとクラリツサの危惧の通りコントロールが難しくなってくるので、その辺は注意しなければならない。

あくまで最大火力を鑑みてシズクを中心に余力を残しつつ壁の破壊が出来るように打ち合わせ。

壁にダメージを与えても必殺技ゲージが溜まらないとの悲しいお知らせも考慮して、可能な限りの必殺技ゲージの温存を考えて30分ほどで編成が完了。

テリトリーの中と外で隔絶されてしまう都合、シズクのアビリティだけが勿体ないが全員での特攻と決めて、この1回でクリアするつもりで意気込みで鳥居の前に立ったテルヨシ達。

「……にしても備えすぎじゃない？」

「あの広さだとこのくらいが限界でしょうね」

「シンデレラ酔いが発生しそうで嫌だなこれ……」

ただその一同の中には事前に用意したクラリツサの《マスカレード・ボール》の分身体40体が加わって、大変気持ち悪い光景になっている。

どこを見てもクラリツサとあってアキラやリクトなどはすでに立ちくろみがしていて、嫌がられたせいで「わたくしが悪いみたいと言わないでくださいな!」と41体が声を揃えて言うもんだから、同じ声が幾重にも重なった不気味な声にテルヨシも苦笑いするしかなかった。

エネルギーの壁にダメージ判定がないとのことでクラリツサの分身体にもダメージソースになってもらう算段で鳥居を潜り、境内の真ん中まで移動すると、先ほどの同じようにタギツヒメが姿を現して、やはりタキリビメと同じく加速世界の誕生から消滅を免れ続けた高位エネミーと思わせる言葉を紡いでくる。

『前は様子見といったところですか。どうやらそなた達がタキリビメの言っていた《勇氣》の試練を越えし小戦士のようなですね。ならば妾も少々期待するとうしましょう。そなた達の力を』

タキリビメ戦から現実世界ではまだ2日も経っていないので、テルヨシ達の感覚ではつい最近のことだが《無制限中立フィールド》ではその10000倍の2000日ほどが経過している。

その間に長らく暇していたタキリビメが《ハイエスト・レベル》を利用して残りの姉妹にテルヨシ達の話をしていたようだ。

どういう伝わり方をしたのか全くわからないのでサアヤ辺りが「余計なことしたんじゃないでしょうね」とここにいないタキリビメに文句を漏らしていたが、それもタギツヒメが一方的に会話イベントを終わらせて外周の壁を出現させたことでどこかへ飛んでいった。

そしてクラリツサの言う通り4つある水晶玉の1つが甲高いサウンドを響かせて砕け散り、その破片が前面に舞うと、それを元に半透明の赤いエネルギーの壁が展開された。

「赤い……」

「それじゃ頼んだわよテイル！ ルー子！」

実際に見るとエネルギーの壁は威圧感たっぷり、タギツヒメ側とを隔てる壁に隙間は完全でない。

確かにこんなのがジリジリ迫ってきたら嫌になるし、破壊できなければ圧殺される未来が待っている現実をもっと嫌だ。

その未来を回避するためにテルヨシ達も持てる力を迫るエネルギーの壁へとぶつけ始める。

エネルギーの壁が外周の壁と完全に密着するまでにかかる時間はきっかり200秒。その間に壁の耐久値を上回って破壊すればこちらの勝ち。

というのが全体の結論ではあるが、やはり警戒はしておこうと、ダメージソースのシズクをテルヨシがコントロールして動かし、本当に単なるダメージによる破壊で攻略できるのかを観察。

こういう観察力はレギオンで一番ということ、テルヨシが抜擢されたが、その責任は割と重い。

「ルールー、端から下から上へゆっくり攻撃。徐々にスライドしてつて」

「チマチマやるのは趣味じゃねーんだが」

「頼りにしてるんだからお願い」

「……わーっただよ」

シズクもだいたい言うことを利くようになったのは確かな成長でちよつと感動しちゃったが、シズクだけを見ていいわけでもない、規則正しく攻撃していくシズクをメインにしながら、他にもクラリツサの分身体の攻撃やサアヤ達の威力によって変化がないかをこれでもかという集中力を観察。

非常に神経を使うので鳥居の前でどっしりと座って構えるテルヨシの横では、ダメージには期待できないカイもサポートに回ってくれて、その年長者の知識を貸してくれる。

「エフェクトを見ると威力によってエネルギーの削がれ方が目に見えて違うな」

「実際に削れてるのか、はたまた吸収してるのかわからないのが怖いけど、厚みが少しずつなくなっただけはいいってね」

「何故わかる?」

「透過率。ほら、向こう側の景色が攻撃の開始時より鮮明になってる」
「ああ……言われてみれば。よく気づくものだ」

「もう少し経てばリリースにもわかったよ。とにかくこの壁は物量の火力で壊せそうなのは間違いない、と思う」

「あとは本当に破壊できるのかだけか。破壊できたとして、全部が砕けるのか、一部だけが砕けてその隙間を潜る形になるのか。そこは見えないとな」

リアルでの面識を経たことでカイとの会話もなんとなく壁がなくなった感じがあるなど、場違いな感想を抱きつつもしつかりとやることはやり、カイも迫る壁の圧迫感をものともせずに見てくれる。

そしてシズクも文句を言ってそうな雰囲気も満々の様子で端から端までの攻撃を終えてくれて、そのあとは壁にだけ自由に攻撃していること指示していたことから、必殺技は使わずに《アネモイ》でアホみたいに撃ち始めていた。

そのシズクの頑張りの結果、テルヨシが出した結論は単純な攻撃力での破壊が可能とのことだった。

それを聞いたサアヤ達はシズクほどではないが予測が確信に変わって俄然やる気になったか、猛然と攻撃の頻度を上げて攻撃を始めた。

「あらあらあら」

「おい、本当に壊せるんだろうな……」

しかし現実には非情で、サアヤ達の再三に渡る猛攻によって順調に壁は薄くなっているのだが、もうすぐ180秒が経過するところまで来ても壊れる様子がない。

「どれだけの耐久値なんだよ! と叫びたくなるほどの硬さに観戦していたテルヨシとカイもいよいよヤバいとあつて攻撃に参加。」

『うらああああ!!』

もう気合いをいれているんだか泣いているんだかよくわからない

叫びが全員から漏れながらの総攻撃は、端から見たら相当にヤバい光景だっただろうが、そんな世間の目とか気にしてる場合ではないテルヨシ達の気合いと汗と涙と鼻水が飛び散る——そういう気持ちでつてこと——ような猛攻が続く。

あと10秒。9……8……7……刻々と迫るタイムリミットを頭で理解しながら攻撃の手を緩めないテルヨシ達は、自分達の想定以上の壁の耐久を恨めしく思い、その気持ちまで乗せて撃ち放つと、テルヨシの背中が、みんなの背中が外周の壁に触れたところで、ピシリ。ここにきて初めて壁に異音が響き、直後には迫る移動も動きを止めて、寸でのところで壁と壁の間に挟まっていたテルヨシ達はほとんど動けなくなってしまった。

ただそこからイラツとしたサアヤとシズクが壁を思いつきり蹴りつけたら、それがとどめとなって壁は蒸発するように消滅。

その結果ほぼ全員が前のめりに倒れ込んで安堵の息を漏らしていたが、そうはならなかったテルヨシは安堵の気持ちはありつつもすでに臨戦態勢を整えていた。

「みんな！ 次が来るぞ！」

Acceleration Second 92

『そなた達の《力》。こんなものではなからう?』

始まった《タギツヒメ》の力の試練。

その第1関門となった迫るエネルギーの壁は挟まれる1歩手前でなんとか破壊に成功し、軽く《野獣級》エネミーくらいの耐久値があった壁には、200秒で削り切るには高すぎないかと思いつつ、直近の壁サンドを免れて安堵。

しかしこれはまだタギツヒメの試練の1つ目に過ぎず、ひと休みといきたいテルヨシ達に無慈悲にも言葉をかけてきたタギツヒメは、2つ目の水晶玉を砕いてみせると、今度はテルヨシ達1人1人が2m四方の立方体の透明なキューブに閉じ込められてしまう。

ご丁寧にクラリツサの《マスカレード・ボール》の分身体も閉じ込められてしまっていて、完全に孤立させられてしまったが、それ以外には特に変化は……

そう思っていたら、キューブはタギツヒメが腰の剣を抜いた瞬間に連動するように浮き上がり、サツと剣を横に凧いだのと同時に全員のキューブが完全にランダムに閉鎖されたテリトリー内を動き始めた。

「いや待ってこれってまさか……ッ!」

ランダムとはいっても最初だけで、急に直角に曲がったりではなく、接触が起きるまで直進して、そこから反射して動き続ける挙動は慣性によるもの。

ただしそのスピードは決して衰えることなく、むしろ接触の度に少しずつだが上がっていた。

接触の度にスピードが上がるなら、非常にマズイとすぐに察したテルヨシは、最初のエネルギーの壁の破壊のために呼び出したクラリツサの分身体40体も漏れなくキューブに閉じ込められたことに戦慄。

最初の壁の破壊には人海戦術が最も効率的な手段ではあったが、次のこのキューブではその人海戦術が仇となる。

「こんな密集してたらすぐにスピードが……ぐっ!」

接触の判定はキューブ同士でも当然ながら発生するため、50m四

方。高さ20mの狭い空間に48個も8立方mのキューブが動き回ったらそれはもう、ごちゃごちゃのごちゃごちゃ。スピードが際限なくあつという間に上がってしまう。

しかもスピードが上がって接触していくとその反動が中のテルヨシ達にも影響して、キューブ内で頭やら何やらをゴツンゴツンぶつける羽目になり、平衡感覚も失われる。

それがダメージ判定になってクラリツサの分身体も速攻で消えてしまい、しかしキューブは消えることなく動き続けているから、たとえキューブから抜け出せても、荒れ狂う40個もの空のキューブを処理しなければならぬのは、ハッキリ言って無理に近い。

そしてものの30秒で体勢を立て直す前に次の接触が起きるほどのスピードになったキューブに翻弄されてまともに動けなくなつたテルヨシは、この段階での攻略は諦めて次に繋げるための考察に専念。

死ぬ前にやるべきことは1つ。このキューブの破壊のために必要な手段だ。

「硬さ、はッ！ 《魔都》ステージ、のッ！ オブジェクトッ！ くらいかッ！ こ、壊せない、こともッ！ なさそうッ！」

キューブは2m四方でテルヨシサイズのデュエルアバターなら動くのにそこまでの不自由はないから、それはサアヤ達も一緒と考えて良さそう。

問題はキューブの硬さが割とあることで、このレベルだとアビリティ依存のユリヤシズクが厳しい。

火力は申し分ない2人だが、密閉空間で使えば自滅もあり得る状況ではほぼ無力化されているに等しい。

そうなるといち早く誰かがキューブを破壊して脱出し、2人のキューブを外側から破壊しないとならない。

それも現在進行形でガンガン当たりまくっても耐久が削れている気がしないため、外側は外側でまた別の対策を取らないといけないのは確実。

考えながらキューブの破壊もしていくが、体勢が安定しないせいで

踏ん張りも効かずに振り回されることが多く、いよいよスピードも時速100kmには到達しようとしていた。

もはや視界は相次ぐ接触と方向転換でぐらぐら。並みの人なら乗り物酔いと同じ症状でダウンするレベルのアトラクションには、さすがのテルヨシも気持ち悪くなってきた、それから逃れようと《テイル・ウィップ》で体をキューブに押し付けてベツタリ張り付かせて固定。それでもキューブ自体の回転が止まらないので視界は動くが、一面に固定されれば全然違うものだ。

いくらかマシになった視界で冷静にはなれたため、改めて破壊への道を探ろうと叩いたり蹴ったりしていると、回る視界の先に驚くものを発見。

動きも速くて凝視が難しいものの、必死に目で追った地上に、いる。サアヤだ。

まだ試行段階のテルヨシよりも圧倒的に早くキューブから脱出したサアヤは《ブレード・ファン》を展開剣に変えて装備していた。

しかしサアヤ以外がまだ脱出していないので、47個のキューブが目まぐるしくテリトリー内を暴れ回り、そのスピードも上がり続けている都合、安置はほぼなく、恐怖のテリトリーで逃げ回るのにも限界が……

と思っていたら案の定、必死に回避するサアヤの頭上に背後からキューブが激突して、洒落にならないレベルで吹き飛んだサアヤは連鎖的に他のキューブにも当たって3度目の激突で死亡。

中も地獄だが外も地獄。まさに地獄絵図とはこのことかと血の気が引いたテルヨシは、残るメンバーの入ったキューブも探してみるが、すでにアキラ、ユリ、シズク、クラリツサの姿がなく、無駄に耐久があるリクトとカイが粘っているものの、それも時間の問題だろう。

それを察したのか、リクトもカイも必殺技の出し惜しみなくガンガン使ったのが見えて、どうせ死ぬなら足掻いてみるかと、満タンのまま使わずにいた必殺技ゲージを全消費して《インビジブル・ステップ》を発動し、キューブ内でこれでもかと言うほど暴れて激突の際のダ

メージでガリガリHPも削り、5秒後には残り1割にまで減ればそこからは一瞬。

インビジブル・ステップを使っても壊れることがなかったキューブ内で力尽きたテルヨシは、死亡マーカアの辺りで次の手を考えながら、カイ、リクトと順に死亡したのを見て、全滅を見届けたタギツヒメも本殿へと戻り壁とキューブも消滅したのだった。

1時間後。

ポツポツと蘇生完了して、その度にタギツヒメが出現して会話イベントをやつてる間に鳥居を抜ける行動を全力でする様子を見て、テルヨシも同じようにしてタギツヒメに謝りながら鳥居までダッシュ。

悲劇としては蘇生したカイが本殿のかなり近くで死んだせいで会話が終わるまでに鳥居を潜れずまた閉じ込められ、遅れて蘇生したりクトが巻き添えで再び死んだことだが、最初の試練で死ぬなら次で戻ってこられるだろうと一同が遠い目をして放置。

そのまま2人抜きでの作戦会議を始めるのだった。

「それじゃ始めるけど、まず最初にあのキューブの破壊は無理そうだって人は？」

攻略方法云々の前にテルヨシがとりあえず把握しておきたかったのは、自力での脱出が出来ない人の確認で、その質問に対して正直に手を挙げたのはやはり、ユリとシズク。

理由も予想通り攻撃が自分にも返ってくる都合で破壊の前に死ぬとのこと、この2人に関してはテルヨシ達が先に脱出して助けることが決定する。

「それじゃあキューブの攻略だけど、ガツちゃん頼む！」

「他力本願か！ まあさっきので脱出したのは私だけだし仕方ないんだろうけど」

「えっ!? ガスト姉、あそこから出られたの!?!」

「儂はその時すでに死んでおったから、死亡マーカアの範囲から見ておった」

「それをあのキューブの中から確認したテイルはなんなんですか……」

「ガツちゃんセンサーがビビッと反応し……はい嘘です体を固定して視界を少し良くしてみました」

そこをハッキリさせてから先ほど脱出に成功していたサアヤからその方法についてを尋ねて、軽い冗談も飛ばしたが殴られそうだったから速攻で訂正。

現在進行形で悲鳴を上げているであろうリクトとカイにも悪いので悪ふざけもこれで最後と付け加えて会議を進め、話を振られたサアヤが改めて口を開く。

「私も最初はテイルと同じで体をどうにか固定しようとしてたのよ。それで展開剣を辺と辺の接地面に突き立てて外側に向かう力を加えた状態で掴まっていたの。そうしたら30秒くらいだったかしら。いきなりキューブの面を繋ぐ辺が離れて、それで脱出出来たのよ」

「儂から見てもあれは攻撃で壊れたというよりは、分解されたといった表現が合つとる気がするの」

「つまり、あのキューブにはなんらかの自壊ギミックがあるということですか?」

「たぶんだけど、あのキューブは多方向からの継続的な圧力に弱いよ。衝突に対しての耐性はあの動き様からわかったと思うけど、あの状況で起き得ない現象ってそれくらいなのよね」

「確かに衝突の際のエネルギーは一瞬だし、どんなに速くなってもキューブや壁に挟まれるなんてことにはならないか」

「だとしたら2m四方の面のキューブってなかなか厄介ですよ、ね」

「あたしらの体格だと両手を伸ばしても2面張り付くのがやつとで、高負荷はかけられねえ」

脱出できたのはほとんど偶然だったと正直に話したサアヤは、ユリの表現を自分なりに分析した言葉で推測を語ってくれる。

ダメージ目的ではなかった行動で脱出できたのだから、サアヤのその分析はかなり真に迫るものだとテルヨシ達も思い、実績もあることから次の攻略はそれを試すことに即決。

しかしアキラとシズクが言うように、キューブの大きさが絶妙にイヤらしくて、テルヨシでも両手を伸ばして体を固定させるのがやつ

と。とてもじゃないがそこから強い圧力などかけ続けられない。

だがテルヨシはその身一つではないので、その問題を個人では解決できるだろうと確信。

クラリツサも何か思い付いたのか明るい雰囲気醸し出し、とりあえず今の段階で3人は脱出可能だろうと結論が出る。

「んでだ。その圧力理論がキューブの外側にも適応されてるなら、どうにかして動くキューブを掴まえて壁に押し付けなければいいわけか」

「それより私はタギツヒメを狙う方が有効だと思っただけ」

「あら、珍しく猪突猛進と意見が合いましたわね」

「そっちの方が手っ取り早いだろ。タキリビメの時もそうだったが、それであの剣を折れば終わる可能性もある」

「皆さんが凄い攻撃的な思考です……」

「元々が血の気の多い連中じゃからな。攻めに関しては考え方が似るんじゃない」

リクトとカイにも聞く必要はあるが今は無理なので話を進めて、第2の試練のキューブからの脱出を進める段階だと思っていたテルヨシに対して、さも当然のように女性陣が邪道ルートとも取れるタギツヒメ狙いを推してきて苦笑。

テルヨシもそれは蘇生待機中に考えはしたが、あれだけのキューブの嵐の中でタギツヒメ自身に影響が出ていなかったなら、キューブ全てを個別にコントロールする能力があるか、なんらかの防御手段があるのだ。

その辺を見ているとタギツヒメは剣を振るうだけでよくわからなかったから、何やら逆鱗に触れそうなそれはあえて避けて話をしていった。

しかし勇敢というか恐れ知らずというかなサアヤ達がやる気満々なので、やらずに終わるくらいならと率先して試す方向に。

「あとは最初の試練だけど、シンデレラの分身体は使わない方が良いのかしら」

「むしろ数を増やして効率を上げるべきですわ」

「えっ？　でもあのキューブって分身体にも反応してましたし……」

「イーターよ。シンデレラの分身体は1発殴れば消える。タギツヒメが次の試練に移行する間にはわずかじゃがインターバルがあった。その隙に分身体同士で殴らせればいいわけじゃ。そうじゃな？」

「そういうことですね。タイミングの猶予は5秒程度だったはずですが、それだけあれば同士討ちの指示くらいできますわ」

「それじゃ最初の試練は手数を増やす方向でいいね。あとは第2の試練でタギツヒメへの攻撃が通らなかつた場合も想定して、キューブの捕獲方法をいくつか考えておこう。ルールーは適当にエネミー狩りしてきていいよ。オレらも話が終わったら手伝いに行くから」

「……第2の試練はあたしは力になれねえから、ちゃんとやれよな」
『ツンデレ乙』

「うっせえバーカ!!」

話の最中にリクトとカイがまた死亡して壁がなくなつたのを軽く流しつつ、第2の試練の詰め段階をいくらか話しておくだけと感じ、シズクには少しでもリセットされたアビリティを強化しておいてほしいのでエネミー狩りを推奨。

シズク自身も言動や行動は荒々しいが思考だけは凄く冷静なので、第2の試練で役に立ってないことを自覚した上で偉そうにするが、それも愛嬌といった捉え方でツツコむと、恥ずかしそうに叫んでエネミー狩りに行ってしまった。

キューブの捕獲方法についてはテルヨシのテイル・ウィップとサアヤの展開剣を器用に使えば十分に可能だろうと、その場でちよつとシミュレートしてみて、どんな感じかのイメージをサアヤと共有。

カップルの関係という謎の安心感によってユリ達がニヤニヤしながら大丈夫だろうと判断してエネミー狩りに行ったことが恥ずかしさ爆発ながら、サアヤが悪い気はしていない雰囲気だったのでツツコミはなしで良い雰囲気のまま、リクトとカイの死亡マークの近くに行つてエネミー狩りをしてくる旨を伝えておくのだった。

そして色々な準備を経ての2時間後。

さらに人員を増やしたクラリツサの分身体60体が横一列に並んだ光景はもはやギャグかとツツコミたくなる衝動がありつつも、アキ

ラのおかげで必殺技ゲージには困らない一同は、万全の状態で再びタギツヒメの試練へと挑む。

タギツヒメも心なしかくじけずに挑むテルヨシ達を面白がってる雰囲気を出しつつ、しかし全く緩める気もない試練が始まり、迫る壁に対して最初から全員参加の総攻撃。

その甲斐あってか、今回は残り50秒ほどというかなりの猶予を持つての破壊に成功し、外周の壁まで10mほども空白があった。

「心苦しいですが、予定通りになさい！」

最初の試練はこれで大丈夫そうと確認が取れて、次なる問題となるインターバル中の行動は、クラリツサの迅速な指示で分身体はペアを作って同士討ちで完全消滅。

その間にタギツヒメも次の水晶玉を割ってキューブを作り出したが、やはりその判定は発動の段階で決まるらしく、今度は消えた分身の分は生成されずに済んだ。

「よっし、あとは……」

さらにこのキューブも最初はそこまでのスピードで動かないので、脱出が早ければ早いほど色々な対応が簡単になるため、タギツヒメが剣を抜いた時には、もうテルヨシとサアヤとクラリツサは動き始める。

テルヨシは先ほどの同じようにテイル・ウィップでキューブの面に体を押し付けて固定するのだが、今回は攻撃的で両足を接地面につけてテイル・ウィップを反対の面に押しつけての2面への圧力をかける。

サアヤは先ほどと同様に展開剣で辺と辺の接地面への圧力で負荷を与えて壊しにかかり、クラリツサはなんと、キューブ内で分身体を作り出し、気持ち悪いくらいギユウギユウになったキューブ内で押しくらまんじゅうを始めていた。

もちろん20体もの分身体の全部が入るわけもないので、12体ほどはキューブの外に出現して動き出したクラリツサのキューブに掴まって動きを止めにかかっている、12体がかりで掴んでも徐々に動こうとする力にはビツクリ。

それを加味してキューブの捕獲は早期に完了させた方が良さそう
と思いつつ、まずはクラリツサがキューブから脱出に成功。

少し遅れてサアヤが脱出し、2面だけのテルヨシも30秒ほどで無
事に脱出することはできて、当初の予定通りに3人が脱出に成功し
て、そこからまずタギツヒメ狙いの作戦を敢行。

リスクを避ける意味でもクラリツサの分身体を先陣で突っ込ませ
てみると、キューブの動向に注意していたっぽいタギツヒメは、迫る
分身体に対しても反応して、手に持つ剣の先端を分身体へと向ける。

すると慣性だけで動いていたユリとシズクのキューブが突如とし
て挙動を変えて迫る分身体へと猛然と突っ込み、その勢いで分身体は
全滅。

しかも挙動を変えたキューブは勢いそのままにテリトリ内を加
速しながら慣性で移動を継続してしまい、完全に裏目に出てしまっ
た。

「これは無理そうだね。っていうかあの2人のキューブだけ凶悪に」
「まずはあの2つを止めるわよ！　じゃないと連鎖的に他のも加速が
早まるわ！」

「意地が悪いですわねあのエネミー！　攻略を難しくされましたわ
！」

「そこはズルするなっていう警告なんじゃないかな。邪道ルートだつ
たし怒るのは筋違いかもね……」

テルヨシのスピードなら反応より早く接近できるかもしれないが、
これ以上タギツヒメに突っ込んでキューブが加速すると手がつけら
れなくなる可能性の方が高かったので、それは早々に諦めてキューブ
を止める方向にシフト。

会議の時に試した方法でキューブの捕獲に乗り出したテルヨシと
サアヤは、キューブの軌道を読んで通過地点で待ち伏せ。

ほぼ正面から突っ込んでくるキューブに対してまずはサアヤが展
開剣を円形に並べてキューブがその中に収まるようにする。

そしてキューブがその中に入ったところで展開剣をキューブに側
面から締め上げるように幅を狭めて固定し、サアヤはキューブの上に

ジャンプして乗り上げ、展開剣との接触で嫌な感じにわずかな隙間で高速反射して動きが一気に加速。

展開剣での拘束はすぐに完全密着状態で完了したが、その間に20回くらい反射してそうで恐ろしい。

そのキューブが壮絶な加速で明後日の方向に移動するのを展開剣をつつかえに乗るサアヤがコントロールしてテルヨシへと向かう軌道に修正してくれて、時速200kmにも達してそうなのそのキューブにテイル・ウィップで極限のソフトタッチで対応。

接触判定を受けないレベルのそれでキューブの速度に乗ったテルヨシは、今度はその速度を殺すためにテイル・ウィップを接触させたまま自身はキューブに当たらないように回避し、テニスやバドミントンのラケット引きの要領でキューブを自分を軸にして回転させる。

その速度は始めこそテルヨシの体が高速で回らなきやならないほどのスピードだったが、衝撃が伝わらない速度で徐々にスピードを緩めていけば、30回転くらいでほぼ殺しきることが出来て、最終的にはキューブの運動エネルギーを完全に奪い去ってみせた。

そしてテルヨシの奮闘の最中も展開剣がキューブに圧力を加えていたので、その後すぐにキューブも外側から破壊が出来て、中にいたユリを無事に救出。

それに安堵してもらえないので、すかさずシスクの入ったキューブの捕獲に動いたテルヨシとサアヤは、同じ手順でキューブを掴まえて破壊に成功。

そこまで済めばまだ安全圏のスピードだったアキラ達の入ったキューブを破壊することは容易で、かなりの集中力を要したものの、なんとか全部のキューブの破壊に成功した。

——そして試練は第3段階へと進む。

Acceleration Second 93

ようやく《タギツヒメ》の《力》の試練、第2関門を突破したテルヨシ達だが、残りの水晶玉は2つ。

つまり試練はまだ2つ残されていることは確実で、タギツヒメも順調に試練を突破してくるテルヨシ達に嬉しそうな雰囲気を含めて対峙してくる。

『ならばこれはどうでしょうね』

こっちは毎回必死に攻略してるだけに楽しそうなタギツヒメの声は苛立ちを覚えるが、3つ目の水晶玉が砕けて消えると、今度は急にテルヨシ達の上から影が落ちて暗くなり、見上げてみれば透明な壁になつていた天井が巨大な岩石で隠れてしまい見えなくなつていたのだ。

巨岩はテリトリの幅いっぱいをほぼ埋めるほど大きく、輪郭に光が差し込んでいるがそれもわずか。

そしてその巨岩は謎の重力で浮いているらしく、ゴゴ、ゴゴ、と地響きと共にゆっくりと降下を始める。

『上ばかり気にはいけませんよ』

あれを破壊するとなると遠隔攻撃はほぼ必須だろ。

そう考えた矢先に暗くなったテリトリ内にまたもタギツヒメの音が響き、次いで最後の水晶玉が砕けるサウンドが響き渡り、この段階でのまさかの2つ同時の試練にはさすがに冷静ではいられない。

そんな中で何が来るんだと身構えたテルヨシ達の周囲に、1辺が50cmの光を放つキューブが無数に出現。

ただの光源とは思えないそのキューブは、緩い乱回転をしながら上空するが、光の先に見えるタギツヒメが手に持つ剣を掲げて《タキリビメ》と同じように必殺技を発声。

『《センジュ》』

タキリビメの《オオツナミ》がそれはもう凄まじい威力を誇っていたため、タギツヒメの固有技も相当なものだと予想したが、その凄まじさは理不尽なレベルだった。

出現したキューブがタギツヒメのコマンドによって高音を発するほどの高速回転を始めて、そのまま移動を開始したのだ。

キューブ自体の高速回転があつて、先ほどのキューブとは完全に別物な動きをするミニキューブは、接触の際の角度が定まらないため入射角と反射角とがイコールにならない。

そのランダム性がテルヨシ達を惑わせて、しかも数が多すぎて対応しきれなくなるのは必然で、天井の巨岩もどんどん降りてきてテリトリが狭まっていく。

「全部は無理！ みんな！」

「わかつてる！ 誰でもいいから攻撃できたらして！」

時間経過で難易度が格段に上がつていくこの試練では短期決戦に臨むしか選択肢はなく、それが可能なのはもはやこのテリトリを支配するタギツヒメ。

それが持つ能力をコントロールする剣を破壊することだけと以心伝心したテルヨシ達は、天井の巨岩とキューブはほとんど無視してタギツヒメを照準。

ただし全員が攻撃に回ればキューブの餌食になるのは確実なので、攻撃力などを考えて即座にユリとシズクが抜擢されて、テルヨシ達はその2人に迫るキューブの迎撃に専念。

主な防御はサアヤとカイが担当して、テルヨシ、アキラ、リクト、クラリツサはタギツヒメまでの射線の確保のために前方に来るキューブを処理。

この処理も痛いのもので、そう何度も繰り返しできるわけではないため、ユリとシズクも必殺技を惜しまずにタギツヒメをひたすらに狙う。

幸い、コントロールの都合なのか仕様なのかわからないがタギツヒメ自身が回避に動く気配は全くなく、2人の攻撃をキューブに受けさせたりして被弾を抑える挙動が多い。

「ぐえっ！ もっとDPS上げて！」

「やってるだろ！ 文句言うなら突っ込めバカが！」

「それは言ってるわ。突っ込んでスプラッシュ食らえ！」

「そこは当たらないように努力してくれないかな!？」

おそらく本殿のそばには狭い範囲でキューブだけを弾くフィールドみたいなのが展開されていて、その外ではタギツヒメもキューブの脅威に晒されるために動けないのだろう。

事実キューブ全ての動きを完全に把握してコントロールしているわけではなさそうな部分が見えて、キューブがタギツヒメの方向に行くこともあり、それがタギツヒメの近くで弾かれて反射するのが見えた。

だからといって剣の破壊が楽なわけもなく、2人の火力だけではこちらが先に全滅する可能性が高くて、テルヨシも隙を見て攻撃しろと怒鳴られる。

その際にユリとシズクの攻撃の巻き添えになっても責任は負わないとサアヤに言われて非常に非情。泣きたくなるほどだ。

それでも我慢してチャンスをうかがっているうちに、天井の巨岩もいよいよ10mの高さまで迫ってきて、範囲の縮小によってキューブの動きが激しさを増してテルヨシ達の攻撃を妨害してくる。

もう1つ弾けばすぐにもう1つ2つ飛来するレベルの密集率でテルヨシ達のHPゲージがゴリゴリ削れていき、その猛攻の前にクラリツサが脱落。

黄色系統でよく頑張った方と称えてやりたいがそんな余裕もないテルヨシも半分を切って減り続けるHPゲージに、使う隙がなくてずっと満タンな必殺技ゲージとの差が忌々しく思えて舌打ち。

「ちい！ テイル！ 3秒稼いでやる！ お前もブチ込んでこい！」

「スピーン！ お前は漢だねえ！ 惚れるぜ！」

「キモいこと言うな！」

「おいスピーン！ 余力があれば俺にも力を貸してくれ！」

「男衆！ 企みあるなら早くしなさい！」

「ぼ、僕は何も無いよお！」

なかなかのストレスに晒されて痺れを切らしたのはテルヨシだけではなく、同じように舌打ちしたリクトも本気で限界が近いだろうことを察して、瞬間火力の高いテルヨシを撃ち出す準備をしてくれる。

さらにカイもさすがの防御力でユリとシズクを守っていたが、そろそろ《リサティーターション》の威力も上々な仕上がりになったか、低い機動力をリクトにカバーしてもらおうとしているっぽい。

その方法はおそらく《ジャイロ・ブレーカー》で強引に吹き飛んでタギツヒメに突っ込み、激突と同時に発動させるつもりだ。

それに巻き込まれないためにもまずはテルヨシが突撃する準備として、その場で足の爪先を交互にトントン、トントンと地面に接触させ、その間の無防備をリクトが決死のカバー。

「《インビジブル・ステップ》」

狙ってやったのかは知らないが、必殺技発動までの時間稼ぎで最後にカバーした時にカイのいる方向に吹き飛んだリクトを横目で見つつ、貴重な5秒を無駄にしないためにタギツヒメへと突撃。

飛び交うキューブを高速で躲しながらタギツヒメへと迫ったテルヨシは、その手に持たれている剣のみに意識を向けて集中攻撃。

接近戦になればタギツヒメもキューブでの防御ができずにテルヨシを吹き飛ばそうとする挙動を見せるが、その隙を狙ってユリとシズクも攻撃を当ててくれる。

テルヨシの全力の連続攻撃でも剣を手放さないタギツヒメの耐久も相当に高く、再三に渡る攻撃も虚しくテルヨシのインビジブル・ステップの効果時間が終了。

しかしダメージの蓄積は出来たはずなので、ユリとシズクの攻撃の邪魔にならないように素早く後退。

「ジャイロ・ブレーカー!!」

そしてテルヨシと入れ替わるようにしてリクトの必殺技発声がして、その必殺技を受けたカイが弾丸のようにタギツヒメへと撃ち出されテルヨシとすれ違う。

天井の巨岩もキューブの数から考えればあと2mも下がれば身動きすらまともを取れなくなるのは間違いなく、健闘したアキラとリクトもここで死亡。

頼みの綱となったカイは、勢いそのままにタギツヒメに激突して動きを止めると、必殺技の弊害だった行動無効から抜けて即座に後ろへ

と回り込む。

「リサティーション！」

そこから放たれた起死回生の一撃。

それにわざわざ後ろに回り込んだ理由にここで気がついたテルヨシは、その行動に至らなかつた自分の機転の悪さを反省。

タギツヒメはキューブの脅威に晒されるのを嫌って本殿前のキューブを弾くフィールド内の位置をキープしていた。

つまりそれはタギツヒメ自身の能力とは別で、始めからこのテリトリに備わつたギミックであるという証拠。

ならそのタギツヒメをフィールドの外に出してしまえば……

カイのリサティーションには強制ノックバック効果が付与されているため、エネミーである以上はタギツヒメもその効果対象になり、強烈な強化外装のパージも加わつた威力でその体が浮き上がり、フィールドから吹き飛んでテルヨシ達の方へと向かつてきた。

そこからはタギツヒメもキューブの脅威に晒され、HPの面でこそテルヨシ達を圧倒していたが、天井の巨岩は例外らしく、押し潰されれば死ぬと理解していたのかキューブ含めてその動きを停止させた。

《《バースト・ショット》おおお!!》

そこからいくつかのキューブをコントロールして攻撃してくる気配があつたので、着地を狙つて接近を試みようとしたら、何よりも勘が鋭いシズクが真っ先に絶妙のタイミングで必殺技を放ち、狙撃銃《カリス》の射抜くような弾丸がタギツヒメの剣に命中。

「スラツシユ！」

その攻撃でついに剣の先端が欠けて、破壊まであと少しだと確信すると、行動力の塊みたいなサアヤが展開剣を鉤爪のように並べてその剛爪でタギツヒメにラツシユ。

その猛攻にタギツヒメもキューブで迎撃するが、そこはテルヨシとユリの付き合いの長いコンビが的確にフォローし、サアヤの気合いに圧されてかジリジリと防御しながら後退する。

「うらああああ!! リリース！ やりなさい！」

「リサティーション！」

タギツヒメの狙いは後退しながら再び本殿前のフィールドに入ることだとわかっていてラツシユを続けたサアヤは、防戦一方になっていたタギツヒメから距離を取るように展開剣を縦に並べて自らはその並びに押される形で後退。

それと入れ替わるように今度は大砲型の《アレース》をぶつ放したシズクの砲弾がタギツヒメを襲い、ほとんど強引にダメ押し。

最後にフィールドに戻ってくるのを待ち構えていたカイが再びリサティーションを使うことで、ダメージとノックバックを与えてまた吹き飛ばすと、その間にタギツヒメの持つ剣が半ばから折れて破壊されたのだった。

タキリビメがそうだったからテルヨシ達も剣が破壊されたのを確認して攻撃をやめたら、吹き飛んでテルヨシ達よりも後方に優雅に着地したタギツヒメは、手に持つ剣を見て小さく笑うと、そのまま鞘へと納めてスウツと右手を風ぐと、天井の巨岩とキューブが消滅し、外周の壁も静かに沈没していった。

それだけです。タギツヒメに戦闘の意思がないのはわかったの。で、テルヨシ達も1ヶ所に集まって近寄ってきたタギツヒメに視線を向ける。

『タキリビメの試練を乗り越えただけあって、要領はずいぶん良かったですね。この剣の破壊を目指すまでに迷いがありませんでした。それがあれば妾のセンジュで全滅させることが十分に可能でした。』

「どうだろうな。リリースの機転がなきゃギリギリ間に合わなかった気もするし」

「それよね。どうしてアンタはインビジブル・ステップでタギツヒメを押し出さないかな。そのくらいわかっていると思ってたのに」

「剣の破壊に意識を向けておれば仕方あるまい。それに農らのフォローもせねばならなかったし、あれもこれも求めるでない」

「結果オーライと言えば聞こえはいいが、集中力のムラだけはどうかしてほしいな」

「グチグチ言うのは後にしろよ。それより報酬もらうんだろ」

タギリビメとは違って高圧的な印象がないタギツヒメは、エネミーらしからぬ戦闘の考察をしてテルヨシ達を評価。

その内容での不満点を便乗して言ってくる辺りがサアヤとカイらしいが、それは後でにしてくれと思えば、意外にもシズクが話を進めてくれる。

戦闘が終われば和やかすぎるテルヨシ達の雰囲気にくスリとしたタギツヒメは、その手を合掌させてから離して、その間から1枚のアイテムカードを出現させる。

『では妾の試練を乗り越えた褒美を差し上げましょう。それをどう扱うかは、残りの試練を乗り越えれば自ずとわかることでしょう』

「さてさて、今回のアイテムは……《Phoenix Blade P
rotto》。《フェニックス・ブレード》か。かけえ」

「日本語訳だとどんな銘になるのかしらね」

「神話を元に行っているなら、おそらくは《天之尾羽張アメノオハバリ》だろうな。不死鳥は火の鳥とも呼ばれているし、天之尾羽張はイザナギが火の神であるカグツチを斬った剣だ」

「相変わらず博識なやつじゃの。それも勉強の中に含まれておるのか？」

「……そういうことになってくれていい」

タギツヒメから渡されたアイテムカードの名称からカイがまたも博識を披露してみせると、リアルで少し因縁が出来たユリがちよつとだけ勉強方面を絡めたツツコミで困らせる様子がなんだか新鮮。

カイも変に反発せずにそういうことでいいやと投げやりで、その反応にはユリもやれやれといった感じ。

そのやり取りを小さく笑ってから、前回はちよつと失敗した件を早めに処理しようと、タギツヒメが消えてしまう前に話を切り出す。

「ああそうだタギツヒメ。無理な頼みではあるかもだけど、このアイテム、あと2つほど貰えたりしない？」

『小戦士というのは傲慢なのです。褒美というのはそれ相応の対価なくして得られないものなのですよ』

「そうは言うけど、アンタのお姉さんはまた試練をやるのは面倒だか

らって私達との雑談と交換でくれたんだけど」

『それはタキリビメが辺境の地で小戦士達を待ち続けて退屈していたからでしょう。妾は500年に1度程度ですが、こうして小戦士達がやって来ますし、妾の試練に悪戦苦闘する様を見るのは嫌いではありません』

「なかなか良い性格をしておるな……」

「またやるってんなら相手になってやるよ!」

「まあ待てルーレット。タギツヒメも高度なAIを有している。同じ試練をまた俺達に仕掛けたところで、攻略の手順をほぼ確立した俺達からその悪戦苦闘する様とやらが見られないことはわかっているはずだ」

『何を勘違いしているのですか小戦士。妾の試練にシステム的なプロセスがインプットしてあるわけではないのですよ。妾の機嫌を損ねれば、センジュ以外の手を繰り出すのもやぶさかではありません。そうなればそなた達はたちまち全滅することでしょうね』

「ほらリリース。喧嘩腰良くないよ。謝つといたら?」

「むっ……出来れば穏便に済ませる方法はないだろうか」

前のタキリビメの時はアイテムカードを3枚貰い損ねて、雑談披露という凄い拘束時間を経て試練をスキップできたが、それがタギツヒメにも適応されるかはわからないので尋ねてみる。

するとタギツヒメは存外、Sつ気のある性格のようで、おしとやかな言葉遣いとは裏腹。

それで本当にまた試練を2回もクリアすることになったら事なので、カイには言動を謝罪させてから別の手段はないかと問いかけると、あまり考えたことがなかったのか少し沈黙して思考に入る。

『……そうですね。そなた達は『イチキシマヒメ』の試練はまだなのですよね』

「ええ。これからそつちにも行く予定だけど」

『では好都合というもの。実は妾達は試練を与えるシステムに縛られて、普段は自らの領域から出ることが叶いません。しかし試練を突破し、リザルトであるこの状況においては妾にその呪縛は無効。故に今

ならばこの領域からの脱出は比較的容易なのです。ですからそなた達がイチキシマヒメの試練に挑む様を妾に見せてほしいのです』

「ほう。それはまた面白い提案じゃな」

『ですが試練を経ての通り、妾の力の根源はこの剣。この剣なしでは妾も存分に力を行使できませんから、たとえ高位《ビーイング》の妾といえど《ミーン・レベル》にはびこる他のビーイングに苦戦を強いる可能性が高い』

「要は俺達に同行してイチキシマヒメの試練に挑む様を見せればアイテムカードをくれるんだな。それならばこちらに何の不利益もない。条件としては破格だろう」

「そうだねえ。じゃあそれで構わないよ。道中、タギツヒメはオレ達が守ればいいわけだな」

「エネミーを守るって意味わかんねえ……」

『ビーイングと呼びなさい。小戦士』

ほとんど自我に近い思考を有するエネミーは何かと変わっていると学習していたが、タギツヒメもだいぶ変わってる。

3女神もダンジョンのボスエネミーのような移動制限がされていることをここで初めて知ることになるが、その制限が今なら解除されることから、次の目的であるイチキシマヒメの試練に同行すると言い出すので、特に不都合があるわけでもないその交換条件で即決。

これでイチキシマヒメの試練を乗り越えたら、とかの条件になってくると少し面倒だが、テリトリーの外に出られることを喜ぶタギツヒメの楽しいな雰囲気にはそれはなさそうと笑う。

「……でも待って。それってつまり向こうに行ってから、またここまでタギツヒメの護衛をしなきゃならないんじゃないか……」

「うげっ。帰るまでが遠足ってやつか……」

「その辺はどうなんだ？」

『そこは抜かりはありません。おそらくあと54000秒以内に《フィールドアトリビューション》の変更が起きるでしょう。そうすれば妾の剣も再生しますから、戻る時には小戦士達の手も必要ありません』

「5万……15時間くらいか。フィールドアトリビューションってのはフィールド属性で、要は《変遷》時のエネミーの再湧出と同じ現象を利用するのか」

「変遷が予期できるとか便利ね。それも長年のデータってやつ？」

『耳慣れない単語ですが、理解があるのならそれで構いません。では行くとしましょう』

「いやいや、待てタギツヒメよ。儂らの仲間がまだ蘇生できておらん。そちらの都合のみで進めるでない」

そうと決まったら早く行きたい気持ち先行するタギツヒメが無駄に可愛いと思えるものの、決まってから気づく帰りのことで問題発生。

かと思われたが、そこは大丈夫とすぐにわかり改めて行こうとするタギツヒメに対してもツツコミ役に回らざるを得ないユリの苦労を労う。

7000年以上生きてるタギツヒメにとって1時間程度は瞬きに等しい時間とは思いますが、他人に言われるとその待ち時間は長く感じるものらしく、待っている間に手乗りサイズのキューブを5つも出してジャグリングしたりテルヨシにぶつけてきたりで暇潰ししてくる。

そのぶつけられるダメージが無駄に痛くて、ただでさえ減ってるHPが減少するのでやめてほしいと言えば、あからさまに不貞腐れて別のことをしだすところは人間と思考が一緒。もはやAIと人間とで区別することすら些細なことのように思えた。

その後、無事に蘇生を終えたアキラ達も話自体は聞こえていたの
で、特に説明の必要もなく意見がまとまり、タギツヒメという奇妙な
同行者を加えて次なる目的である神奈川県鎌倉市にあるイチキシマ
ヒメのいる神社を目指して移動を開始した。

全員の決死の攻撃で《タギツヒメ》の試練を見事に突破したのも2時間ほど前の話。

試練によるテリトリーの固定化をされていたタギツヒメが、テルヨシ達の試練の突破によるリザルトで、その固定化が一時的に解除されている事を良いことにこの後に行く予定だった鎌倉の《イチキシマヒメ》のいる神社までついてきて、その試練を見学するとか言い出した。ただしタギツヒメの力の大半を占める腰の剣が破壊されてしまったため、フィールドを闊歩するエネミーが煩わしいということでの道中をテルヨシ達が護衛。

それら全てを交換条件に試練を乗り越えて手に入るアイテムカードを貰える予定でいるので、一応は全員が納得して今も移動していた。

『ふむ。あれが《エリア00》ですか』

『《帝城》ってそういう呼び方なんだな』

「でも《ハイエスト・レベル》からなら帝城くらいいつでも見られるんじゃないの?」

のんびりと移動するつもりもなかったので、エネミーとの交戦は極力控えながら早足で東京まで戻ってきて、神奈川県に向けて緩やかに南下を始めたタイミングで、見ずに通るには不可能なほどの存在感を放つ帝城が見える。

すると歩きながらのタギツヒメはまるで帝城を初めて見るかのような反応で高くそびえる帝城を見上げるので、その辺についていくつか尋ねると、テルヨシ達を哀れむようなため息を漏らす。

『これだからハイエスト・レベルに至れない小戦士は困ります。エリア00。お前達の言う帝城はハイエスト・レベルでは《ノード》が見えず大きな空洞地帯のようになっていて、観測できないのです』

「ノード……それは何でかはわかっておるのか?」

『この世界で帝城だけが隔絶されているからです』

ハイエスト・レベルなどの話はテルヨシとサアヤとユリにしか理解がないため、耳だけ傾けているシズク達は口を挟めない。

タギツヒメの言うノードというのは、文化祭の時の作戦の後にハルユキの説明の中にあつて、加速世界を構築する情報を集めて繋がり流れる光。

つまりは現実世界の日本に溢れんばかりに設置された《ソーシャル・カメラ》を示していて、ハイエスト・レベルでは無数の光点として認識されるらしいのだ。

だがそれなら帝城は現実世界の皇居であり、そこは厳重に守られるべき場所でソーシャル・カメラも他よりも多く配置されているはずで、そこにノードが見えないのはおかしい。

それをタギツヒメは隔絶と表現し納得させにくる。

「ねえボンバー。帝城のノードが見えないって、つまり……」

「そうじゃな……考えられるとすれば、このブレイン・バーストでさえ、皇居のソーシャル・カメラにはハッキングが出来んということを示しておるのやもしれん」

「でも実際問題、その帝城には最難関ダンジョンが形成されてるわけで、千代田区の大半。これだけの規模を情報の補完だけで補えるものなのかね」

「そこよねえ……つまり皇居のソーシャル・カメラとも情報統制は取られて、その上で運営側がそのラインを断ってる。もしくは加速世界の完成の段階で隔絶された」

『面白い話をしていますね。この加速世界の創造の話であれば、妾にも推測はありますよ』

情報によって構成される加速世界で存在を認識できないなら、その情報自体が断たれてしまっているのは確かに納得できるが、ならば何故そんなことになっているのかを現実世界の話も交えて小声で話していたら、ちゃんと聞こえていたタギツヒメも仲間に入れると暗に言ってくる。

大天使《メタトロン》もそうであったように、タギツヒメもまた長い時の流れの中で自問自答や考察を繰り返してきたのは確かなよう

で、加速世界の誕生の理由についてもなかなか鋭い考察を見せる。

『そもそもとしてこの加速世界が誕生した理由は、妾達ビーイングが作られたこととイコールではありません』

「その口ぶりは根拠があるわね」

『お前達は《アクセル・アサルト》と《コスモス・コラプト》という2つの異なる世界がかつて存在していたことも知っていますね。かの2つの世界でさえ、その目的がああ帝城にあった。ならば妾達ビーイングは、お前達小戦士が勇猛果敢に挑む必要もないサブイベントのよななもの。オプションでしかないということですよ』

「でもゲームにはそういうのは必要なものだろ」

「違うわよバカテイル。アンタ帝城が何で難攻不落のダンジョンかって考えてないでしょ。そもそもほぼ攻略不可能なダンジョンが存在する時点でゲームとして破綻してるのよ」

「じゃな。東京の4大ダンジョンなどは難関ではあるが、決してクリア出来んような作りにはなっておらん。そこには運営側の『攻略法』がいくつか用意されておるのが証拠じゃ。タギツヒメ達の試練としてその理屈が通るじゃろ」

「えーっと……つまりは、何？」

ズバツと答えを言うわけでもないタギツヒメにピンと来ないテルヨシとは違い、今のだけでタギツヒメの言いたいことを理解したっぽいサアヤとユリがヒントを与えはするが、それでも閃かないためガクリとしたサアヤとユリに、やれやれな態度のタギツヒメ。

ちよつと色々と考えすぎていたかと意識を集中させて改めて頭の中を整理し、何をハッキリさせるべきかを決める。

「……………帝城だけが想定外の作りをしている？」

「そういうことよ。それがどういうわけかはわからないけど」

「少なくともこの加速世界が誕生する段階ですでに帝城が存在していた可能性は高いのう」

『その推測は正しいでしょう。妾達ビーイングが誕生した時にはすでに帝城は存在していた。そして帝城の中にある《ザ・フラクチュエーティング・ライト》へ至るためにブレイン・バーストの創造主は妾達

ビーイングや様々なオプションを生み出した。そこで妾は引っ掛かったのです。ではどうしてそのような帝城の存在を創造主たる者が許容しているのかを』

「あ、そっか。開発者なら適正な難易度に調整とかも全然出来るはずだもんね。それをしないってことは、オレ達に攻略できる超ギリギリのラインで設定してくれてるっていうスパルタな感じなのか……」

「何らかの理由で難易度の調整が出来ない。だから私達が万が一でも攻略できるように日本中にその手助けになるものを配置した」

『そういうことです。小戦士の割には聡いですね』

ちやんと考えれば答えに辿り着けるだけの思考力は持つてるのに、普段からあんまり使わないからこういう時の理解力が落ちるんだと、視線だけでサアヤに言われたテルヨシではあるが、皆の言わんとしてることはわかったので話が進んでくれる。

それで自分の言いたいことを理解したテルヨシ達に対して相変わらずのタギツヒメの上からの物言いにもムツとなったサアヤの気配を敏感に察知して、間に入ってなだめつつ、今度はタギツヒメ自身の話にシフト。

『ではその上で妾達ビーイングはお前達小戦士に倒されるためだけの存在なのですか？ 妾達姉妹は小戦士に試練を与え、その褒美を与えるだけが存在理由なのですか？』

「ゲームとして考えればそうなるとは思うけど」

「それならば自我と呼べるほどの思考力を生む高度なAIを持たせる理由がそもそもとしてないからの。もしもタギツヒメ達が『こうなること』を開発者が想定しておつたとすれば……」

「単に役割を与えられた存在じゃないってことになる、のかしら」

『詰まるところ、妾達姉妹や《四聖》達が求める答えはそういうものだということです。もしも妾達ビーイングがそれだけの存在ではないというのならば、妾はお前達小戦士のように「自由」というものを謳歌してみたいものです。此度の行軍はその先駆けといったところでしようか』

何らかの理由で隔絶されてしまった帝城にある最後の神器ザ・フラ

クチュエーティング・ライトへと至るために、開発者側が用意したのが《無制限中立フィールド》とエネミーや《シヨップ》などであるならば、バーストリンカーの敵として用意されたエネミーが果たして本当にそれだけの存在なのか。

タギツヒメ達のような特殊なエネミーもその枠組みからは外れはしないが、高度なAIを持つ彼女達にそれを与えた理由があるなら知りたいとする話は、ハルユキが言っていたメタトロンの話とも符合する。

テルヨシとしても自我の生まれたタギツヒメ達のようなエネミーを単なる敵として見ることはもうできていないし、開発者が本当にテルヨシ達の戦力アップのためだけに倒される存在として生み出したというなら、今はそれを否定したいとさえ思う。

だがそうなると日々エネミー狩りをするバーストリンカーを咎めるといったことにも意識が向いてしまうのも仕方なく、《小獣級》や《野獣級》エネミーは良くて、タギツヒメ達は特別と線引きするのも残酷な話だろう。

どうやってもバーストポイントという有限の命に縛られるバーストリンカーがそれをやめてしまえば、この世界からバーストリンカーは消滅し、タギツヒメ達とともにアクセル・アサルトやコスモス・コラプトのように消えてしまう。

『……何やら深い思考に入ったようですね。それはもしや妾達ビーイングの在り方や接し方をどうすべきか悩んでしまっているといったところですか』

「どうしたってバーストポイントの総量は減少傾向にある。それを補填するにはタギツヒメ達エネ……ビーイングを倒してバーストポイントを得なきやならない」

『弱肉強食。妾達ビーイングが小戦士に力によって倒されることがあるのならば、それは自然なことでもあるということです。妾とてこの命が正当な理由で尽きる日が訪れるのであれば、悔いはありません。だからといって、お前達のビーイングを倒す行為そのものを助長したり推奨したりもしたくはありませんが』

「それはぐもつともね」

表情などこの世界では絶対にわからないはずなのに、絶妙のタイミングでテルヨシの思考を読んだタギツヒメにいま思っていることを正直に話す。

タギツヒメとしては同じエネミーを倒されることに思うところはあるのだろうが、この世界が存続するために必要な行為であるともわかってはいるのか、ある程度の割り切り方はしているようだった。

最後にはちやんと非推奨行為ではあると言いはしたが、それは立場的には当たり前だとツツコんだサアヤが話を締めて、帝城のことは後日、改めて黒雪姫達とも話すべきだろうと判断してサアヤ達もそれに合意してくれた。

話が終わったのは移動中にその帝城が視界の後ろの方へと流れてしまったからであつて、わざわざ後ろを向きながら話を続けるつもりもないとだんまりになったタギツヒメ。

テルヨシ達との話が終わったのを少し離れた位置から見ているシズク達も、もう少しゆつくりと話す時間があれば聞こうとするような意思は見せつつ、今はそれはいいと暇になったタギツヒメに近寄ってくる。

「タギツヒメ。聞くだけ聞いておきたいのだが、これから挑むイチキシマヒメの試練。その内容について何か知っていないか？」

『不躰な質問ですね。なぜ妾が小戦士の手助けをしなければならぬのです』

その中で代表するようにカイが口を開いてタギツヒメにこれから挑むイチキシマヒメについての情報を聞き出そうとする。

しかしタギツヒメはさつきまでの友好的な雰囲気から少し距離を離すような態度になってカイを睨み付ける。

『妾がお前達の試練に挑む様を見たいのは、イチキシマヒメにコテンパンにされた後にどのような策を労するのかの過程を見学したいからです。その過程を短くするような行為はこちらにとって損失ではありません』

「ケチくせえな」

「おいそこ。思ったことすぐ口にするな。エネミーは耳も良いぞ」
『ビーイングと呼びなさいとも言ったはずですよ』

怒らせるとアイテムカードを貰えない可能性も十分にあるので強くも言えない現状、強気なタギツヒメの振る舞いは暴君に近い。

だがその暴君に恐れ知らずのシズクが対抗し、普段なら乗っかるタ
イプのリクトが止めるという光景も見えた。

「ですがあらかじめどのような試練かを知って挑むというのも存外、
味気ないものとなりますわよ。タギツヒメの味方をするわけではあ
りませんが、こういった攻略は自分達であれこれと調べて模索する時
間の方が楽しいものですし」

『その小戦士は良いことを言いましたね。開拓者というものは常に
己の足で道を切り拓く者でなければなりません。それは小戦士達に
も言えることですよ』

「特にブレイン・バーストはダンジョンとかそうよねえ。1度でも攻
略されちゃうと熱も冷めるっていうか。あと少して《東京地下大迷
宮》を攻略できそうだったのに、1日の差でソーンのとこに先を越さ
れた時は地団駄踏んだもんよ」

「あれは《アマテラス》の攻略に時間を食ったからのう。ライダーが
ソーンのやつと要らん賭け事をしてたこともあったが、それ抜きに
しても悔しかったのは事実じゃ」

タギツヒメとしては自分から楽しみを減らす行為は嫌というちゃ
んとした理由もあって、別に試練の内容について知らないといったこ
とではないとわかる。

そのタギツヒメに同調するようなことを言ったのがクラリツサで、
ゲームならゲームらしい楽しみ方をしたいと言うクラリツサの言い
分にはタギツヒメもご満悦。

さらに攻略と聞くと昔話に花が咲くサアヤとユリが、旧プロミ時代
の苦い経験を漏らす。

その話を聞く限りでは、タッチの差で《パープル・ソーン》がダン
ジョンを攻略して、そこにあった《ザ・テンペスト》を入手したのだ
ろうから、終始で神器を持てなかった旧プロミとしてはその悔しさも

一際だったことだろう。

ただこういう昔話で《レッド・ライダー》とソーンが出てくると微妙な空気を放つのが、ライダーのリアル妹であり、ソーンが親代わりのシズクで、2人が仲良くやっていた過去を聞いての今を考えれば、決して心穏やかなものではないだろう。

そういう心の動きには敏感なテルヨシがケアしようとしズクに近づくところを、ユリがサツと腕を挟んで引き止めてきて、何か狙いがあるのかと様子をうかがうと、昔話を持ち込んだサアヤ自身がシズクに近寄ってその頭をポンポンと触ってみせた。

当然、そんなことをされても気に障るだけなシズクは「んだよっ」とその手を払うが、お姉さんみたいな雰囲気醸し出すサアヤはその目で「アンタはこれから」と今ここにいる仲間を見るように促す。

現実のライダーとソーンとシズクの関係は、ライダーの全損をきっかけに変わってしまったのかもしれない。

でもそれを悲観したところで仕方のないことだというのもシズクはもうわかっているし、偶然とはいえ加速世界でライダーと話が出来たことで、ずっと胸につつかえていたものが取れて今ここにいるシズクは、まだまだ仲間を頼るといふ行為には前向きではないが、一緒に未来を歩こうという気にはなってきたことを再認識したようにテルヨシ達を見回していた。

まあこういうことは同性の方が波風立たないからなど、ユリが引き止めた理由にも一応は納得しておき、なんだか和やかな空気に耐えられなかったのか少し離れて《小獣級》エネミーを引っ張ってきたシズクの奇行に、全員がツツコミながら倒す羽目になるのだった。

無駄な戦闘は極力避けて行こうと決めてのこれにはサアヤがお説教しながら対応することになり、女の子を怒れないタイプのテルヨシとしては助かるが苦労はかけるなあと思っていたら、東京を抜けて神奈川県に突入し、大田区と多摩川を隔てて隣接する川崎市に差し掛かっていった。

その川崎市に辿り着くまでに大師橋を渡っていたら、近くを歩いていたタギツヒメが不意にその顔を左方向。東京湾の方へと向けて歩

みを止めたので、何かあったのかとテルヨシだけが反応する。

『……なんでしようね。この先に……いえ。今は詮無きことですか。先を急ぎましょう』

「何か感じ取ったなら教えてくれてもいいんじゃないか？」

『……ハイエスト・レベルから見ればわかりますが、あの大海の中腹辺りにビーイングが集中しています。それが少し気になっただけのこと』

「海の真ん中？ どうやって……」

「タギツヒメの感知はちよつと気になるけど、海の上つてことならアクアラインじゃないの？」

どうやらタギツヒメは今の時間だけでハイエスト・レベルに行つて帰つてきたことがわかり、それによるとこの多摩川の先にある東京湾の上にエネミーが集中しているらしいのだが、海の上にそんな多くのエネミーがいるものなのかと首を傾げる。

すると歩みを止める時間が長かったからか気になったサアヤが引き返ってきて話が聞こえたのか、テルヨシの疑問に割とすぐに答えてくれた。

確かに言われてみれば神奈川県と千葉県を結ぶ東京湾アクアラインが現実世界には存在し、その途中には海上施設もある。

東京湾の真ん中にエネミーが集まるならそこしかないだろう。

「さすがにそれ全部がタギツヒメ達みたいな自我を持つてるってことはないよね？ ならオレはちよつと気になるかも」

「そうね……エネミ……ビーイングが何か目的を持って集団行動するなんて聞いたことないし。タギツヒメ、そういうことはないわよね？」

『行動原理という点においては妾よりも下位のビーイングに仲間意識があるとは思えませぬね。だからこそ気になった程度のこと。フィールド・アトリビューションの変更がされた後ならば、帰りがてらに確認しておくのもいいかもしれません』

「どのみちアクアラインの先は千葉だから、少し遠回りになる程度だしね」

ただサアヤでもそこで何か特別なイベントやダンジョンがあると
は言わなかったので、本来は何の変哲もないところなのはわかるし、
不思議じゃなければタギツヒメが反応することもない。

考えるとどんだん気になってきて今すぐにでも確認しに行きたい
衝動が芽生えるものの、そんなテルヨシの内心を察したサアヤが頭に
チヨップを振り下ろして制止。

タギツヒメも今の興味がイチキシマヒメの試練の方に向いている
からまた歩き出してしまうし、誰も同行してくれないタイミングなら
仕方なく諦めるしかない。

「そんなに気になるならみんなに了承取りなさい。試練のあとにそんな
気があれば私も付き合おうわよ」

「そんなガツちゃんが好きですッ！」

「ちよつと!?! 抱きつくくなー!」

『小戦士の愛情表現は個性的ですね』

ただし現実世界の切断セーフティーはまだまだ余裕を持って設定
してはあるので、サアヤもモヤモヤを残したまま今回のダイブを終え
るつもりはないといったニュアンスでテルヨシに進言。

なんだかんだでテルヨシのわがままも通してくれるサアヤの優し
さは最早ありがたすぎて涙が出る。

それを表現するために精一杯の気持ちを含めてハグしたら、案の定
蹴られてしまったが、それを愛情表現と言うタギツヒメの感性はなか
なか鋭いと思うテルヨシだった。

Acceleration Second 95

「んじや」

「さすがに50km以上の移動はしんどかったですわね……」

《タギツヒメ》のいた神社を出発して時速5kmくらいのペースで移動してきたテルヨシ達は、10時間ほどかけてようやく次の目的地である《イチキシマヒメ》のいる神社に到着。

現実世界では神奈川県鎌倉市にある『銭洗弁財天宇賀福神社』ゼニアライベンザイテンウガフクジンジャが建つ場所にどっしりと構える建物オブジェクトとその周囲は、荘厳で神聖な空気はありながらもかなりオープンな造りをしている。

おそらくはテリトリーとなる範囲のラインも塀などがあるわけでもなく平たい石畳の地面が50m四方に広がるだけ。

ここから通れと言わんばかりの鳥居と本殿だけがある不思議な空間にタギツヒメの時のような逃走不可能な状況にはされないのかもと推測ができる。

「んじやとりあえず削れてる組でサクッと確認してきますか」

「削れてるからって即死はやめてよね」

「なるべく粘る努力はしろ」

それでも逃走すればペナルティーのような扱いで退場処分が下るからどのみち関係ないかと自己完結して、前回のタギツヒメ戦を生き延びてここまでHPを温存していたテルヨシが様子見に出ることを告げると、同じように先兵を務めるサアヤとカイがツツコミながら並び立つ。

別に手を抜くなんて一言も言ってないのにこの言われ様に物申したい気持ちがあったテルヨシの肩をポンポンと触ってきたユリとシズクのドンマイみたいな励ましがまたなんとも哀愁を漂わせたが、この5人がまずは先陣を切る。

その様子を見ていたタギツヒメは待機組の3人に混じって何やらクスクスと笑っていたので、なんとなく気にはなっ行って行く前に話しかけてみると、上品に口元を袖で隠しながら口を開く。

『気にしないでください。お前達小戦士の健闘に期待していますよ』

「表情のわかるビーイングだとわかりやすくていいわあ」

「ほら専門。意識」

『何も知らずに愉快愉快』って感じの笑い。初見だし気にしても仕方ないことだろうけど、ちゃんと聞く?」

「どうせ聞いたところで教えはせんじやろ。やらんことにしまらんし、行こうぞ」

一見すると励ましの言葉を贈ってくれたようにも思えるタギツヒメだが、それを笑いながらにされれば誰だってそんな意味がないことはわかる。

それを汲み取る能力があるテルヨシはタギツヒメが人型エネミーである利点から表情を読み、その笑いの意識を試してみると、やはり何か知ってて黙っているのは明白。

それが何かまではわからないものの、それを気にしてあれこれやるにもどうしようもないとユリが言えば、みんなもそうだなと納得して、とりあえずタギツヒメは無視して突っ込もうと鳥居を潜る。

するとすぐに周囲に変化が起き、この神社を中心に極々狭い範囲の空に暗雲が立ち込め、ゴロゴロと音を鳴らし始める。どうやら雷雲らしい。

しかし雨は降ってきたりしないのでちよつと特殊な《轟雷》ステージみたいな属性かと思っていると、正面の本殿前にタギツヒメによく似たエネミーが落雷と共に姿を現す。

その出現には「派手だなあ」と少し冷静すぎる思考で見届けたテルヨシは、絶対に雷攻撃はあるだろうと予測しておく。

『妾はイチキシマヒメ。久方ぶりの小戦士による来訪。歓迎しようぞ。ただしその方法は手荒いものとなるがな』

「そんなのアンタの姉妹達も同じだったわよ」

『ほう。《タギリビメ》とタギツヒメと戦った者か。……ん? そこにおるのはタギツヒメではないか。何故お前がそこにおる』

『妾のことはよい。さっさと試練を始めよ、イチキシマヒメ』

イベント会話が発生してから戦闘の流れは変わらないようだが、こ

れまでよりも自分の言葉を伝えてる節のあるイチキシマヒメは、こちらの言葉にも反応して応答し、鳥居の向こうにいたタギツヒメを発見して普通に会話までしてしまう。

その様子に冷めた様子のタギツヒメがさつきと始めると促すと、調子が少し狂っていたイチキシマヒメも小さく咳払いのような仕草を挟んでから、改めてイベント会話に努める。

『いいでしょう。——では妾に示しなさい。汝らの《知恵》を——』

その言葉を最後に腰の剣を抜いたイチキシマヒメは、それと同時に雷雲から落ちた雷に打たれて、その背後に6つの雷の紋様を刻む丸太鼓が出現する。

さらにイチキシマヒメは手に持った剣を足元に突き立ててみせると、その足元から竜巻のような風の流れが発生。

瞬く間にテルヨシ達の立つ位置を風が通りすぎていき、しかし何事もなかったそれに首を傾げたら、後ろの方から驚くような声が3つ上がったので振り返ると、何故か鳥居の外で待機していたアキラ達が鳥居の内側で転んでいた。

「えっ？ ギャグ？」

「違いますわよ！ 何かの力に引き寄せられましたの！」

「つまりこれはイチキシマヒメの仕業か」

「なに？ 待機も許さないってやつ？ 良い性格してるわね」

「こうなっては仕方あるまい。全員で派手に散ろうぞ」

ふざけてる場合でもないがギャグ要員としてボケてはおくかか一応は振ってみると、真面目なトーンでのクラリッサの怒りのツツコミが入って状況を理解。

どうやらあの風は鳥居の向こうにいるバーストリンカーを強制的にテリトリー内に引き寄せるもののように、だからオープンな造りをしていたようだ。

そうなるとタギツヒメが突っ込む前に笑っていた理由もこうなることがわかってたからと勘繰ることができ、唯一蚊帳の外なタギツヒメはとても愉快そう。

ただこうなればもう全員で知恵の試練とやらを解明するしかない

ので、舌打ちなどしながら立ち上がったクラリツサ達も加えてイチキシマヒメに挑む。

テルヨシ達を敵と見なしたイチキシマヒメは、その背後の太鼓をテリトリー内に散らして飛ばし滞空させると、その手の剣に風を纏わせる。

そして滞空する太鼓の内の1つが「ドンツ！」とひとりでに空に轟く音を鳴らすと、それに呼応するように雷雲から雷が落ちてきて、テルヨシ達を襲う。

この辺で経験値が高いサアヤとユリは太鼓が散ったタイミングでみんなから離れていて、テルヨシ達もそれに倣って固まらずに散っていたのが幸いし、最初の落雷はその中の1人に落ちてきたが、その速度たるや感知してからでは回避が間に合わないレベル。

当然、それを受けた1人であるカイはその一撃で死亡。

元々HPゲージが減っていたこともあって即死級なのかどうか判断が出来ない攻撃ではあるが、その範囲も体捌きでどうこうなるものではないと黒焦げた石畳が物語っていた。

そしてイチキシマヒメの攻撃はそれだけじゃなかった。

強烈な落雷攻撃はある程度予測できていたから驚きもそこまでではなかったが、風を纏わせた剣をイチキシマヒメが振るうと、攻撃力という点においては皆無な風がテリトリー内に吹き荒れてテルヨシ達に襲いかかる。

ダメージはないが問題はその発生の仕方、ただ吹き荒れるだけなら踏ん張りも効くの、その踏ん張りをさせないようにと下から浮き上がらせる風によつて、全員の足が地面から離れて浮いてしまう。

もちろん浮くといってもジャンプした程度のものですぐに地面に着地できるのだが、その空中にいるわずかな時間が今回は命取り。

——ドンツ！

まだどんな条件で発動するのかわからない太鼓がまた鳴り、それに呼応して雷雲から1発の雷がテリトリーに落ちる。

そう。そのタイミングで足が地面に触れていなければ回避に動くことさえ出来ずに落雷を受けることになるということ。

「ぐう!!」

当然、このタイミングを狙ってイチキシマヒメが風を操っているのは明白で、この落雷でターゲットされたリクトが直撃し死亡。

リクトに関してはほぼ満タン状態からの即死なので、青系統のリクトでそうならテルヨシも即死。基礎の部分で防御力に寄ってるサアヤとカイが満タンの状態でも怪しくなった。

「太鼓の破壊ー！ 剣も狙って！」

これまでのタキリビメとタギツヒメとは明らかに毛色が違う試練だと思わざるを得ない緊迫した状況に嫌でも気づき、サアヤがやるべきことをみんなに叫ぶ。

確かにそれが1番の優先事項になるのは間違いないし、テルヨシも否定するつもりはない。

ただみんながそこへ焦点を当てて動いても次に繋がるものが少なくなる。

なら今のテルヨシにやれることは……

そう考えて周囲をよく見回してみると、さっきの風で起こるべくして起きた悲劇を発見。

他のデュエルアバターよりも圧倒的に軽量なユリがああ風によって空高く舞い上げられてまだ空中で四苦八苦していたのだ。

アビリティ《『デイセント』》を使った様子もないのになあ地面に着く前にまた風で舞い上げられてしまうのは確実。

「《インパクト・ジャンプ》」

それならそれで空中から観察もできると開き直っているだろうと考えはしても、テルヨシとしては今のうちに試してみたいこともあって、それはユリにしか出来ないの救出に動く。

インパクト・ジャンプで一気にユリに近づいてその足を掴むと、いきなりテルヨシが来たからビックリして反射的に蹴られはしたが、なんとか落ち着かせてそのままテルヨシの重さで降下し地面に着地。

そこでまたイチキシマヒメから風を起こされて舞い上がるも、ユリを抱き抱えていたので今度は吹き飛ばずに済む。

その代わりに落雷でサアヤがやられてしまったから、あとで「何で

私は放置なのよ！」とか言われそうで怖い。

「して、儂にしてほしいことは何じゃ」

「《クレイモア》を使ってほしい。シンデレラだと燃費問題があるからね」

割り切りはできると信じてとりあえずサアヤからのツツコミ予想は頭から消して、再び地面に降りた時にユリが何をするのか問いかけてきて、完全に予想外だったのか《リトル・ボム》のバリエーションであるクレイモア。地雷の使用にユリは困惑。

しかし次にクラリツサの名前を挙げたことでその疑問は自己完結したようで、イチキシマヒメが次の攻撃を仕掛けてくるより前にテルヨシから離れてみんなの位置を確認し動く。

必殺技ゲージを消費するものの、足の裏から半球のリトル・ボムを地面に設置できるクレイモアは、感知範囲に入ると自動で爆発する代物。

そんなものをいま仕掛けて何になるのかと思うかもしれないが、狙いはもちろんある。

ここまで落ちてきた雷は全てピンポイントでテリトリー内のターゲットに落ちているので、対象は別としても決してランダムに落ちているわけではないことはわかった。

ではその対象はどう判断されているのか。それを確認するためにクレイモアを使うのだ。

クラリツサの場合、都合良く分身体を調整して出せるわけではない、出す時は常に最大数になるので必要な時に発動が困難になる。

クラリツサ自身も近接攻撃主体なのでリチャージも容易ではない。だがユリのクレイモアはその都度に適正の使用量で使えるし、リチャージもリトル・ボムでの中距離攻撃とあって難易度が低い。

「全員、足元注意じゃ！ クレイモアを仕掛けた！ 爆発させんように頼む！」

取り急いで仕掛けてくれた数は10個。

いま生き残ってるのは5人なので、次の落雷でクレイモアを対象としてくれるのなら当たる確率は3分の1。それだけあれば考察の時

間を稼げるが果たして……

そんな期待と不安の入り交じった中で次のイチキシマヒメの攻撃が繰り出され、全員が宙に浮いて太鼓が鳴ると、即死の雷は無慈悲に落ちて炸裂。

しかしそれは誰かの死亡エフェクトを生むことはなく、代わりにクレイモアの1つが盛大に爆発し黒煙を巻き上げた。

「よし、これで時間が稼げる」

その結果を受けてユリも全滅までの時間稼ぎにリチャージしながらクレイモアを増やし、しかし増やしすぎるとテルヨシ達が身動きが取れないので適切な量の15個をキープし当たる確率を4分の1にしてくれる。

それでもあくまで確率が下がるだけで当たる時は当たるため、次にクラリツサが撃たれて死亡。残り4人。

ユリとシズクは攻撃が届く太鼓へ確実に攻撃を当ててダメージを稼いでくれて、太鼓自身に危機回避能力はないのか定位置から動く気配はない。

対してイチキシマヒメは風の防御を得意としているのか、接近を試みるアキラを空いていた手を振って烈風を起こし後退させていた。

死亡した4人もマーカーの付近から見える範囲で各々がこの戦場を考察してくれているはずなので、長引かせればその分、こちらの次の攻略が有利になっていく。

『——数が多いのう』

太鼓の破壊は思ったほど順調でもなく、まだ1つも壊れる気配がない中で落雷ダメージによる死亡が見るからにペースダウンしたのを気にしたか、風で舞い上げてからイチキシマヒメがもうワンアクションを加えてきた。

剣を振るってからさらに地面に突き刺す動作を入れたイチキシマヒメに合わせて、全ての太鼓が呼応しドドドドドドンッ！

コンマ何秒の時間差で鳴り響き、直後に6発の雷がほぼ同時にフィールドに落ちてきた。

その威力たるや直撃していないのにその余波でダメージ判定を受

けるほどで、さらに連鎖的に設置していたクレイモアが全て誘爆してしまう悲劇が起こる。

それによって二次災害的にアキラが爆発に巻き込まれて大ダメージを負い、シズクも死亡。

辛うじて残ったテルヨシとユリも次にあんなのが来たら確実にやられるだろうと確信。

「なるほど。1体ずつ確実に落とせるけど、時間がかかるようになる」とそもそもの数を増やすってことか」

「これは良くて2分の1が限界といったところかの。イチキシマヒメの我慢の問題のようじゃが」

「粘れば粘るだけヤバいってのはありそうよね……」

それでクレイモアを避雷針とした回避方法は確率を少し下げくらしいでしか利用できなくなっただことを確認し、やるべきことはその次の攻撃がまた6発の雷攻撃なのかという確認。

もしそれが来たら次にこれが発動する条件を満たしたら難易度が超上がるのでなしの方向にもなり得るが果たして……

その覚悟で次の攻撃を待ったテルヨシとユリに対して笑みすら浮かべたように見えるイチキシマヒメは、2人を舞い上げてからその動作を停止。太鼓も1つしか鳴らなかつた。

この攻撃でユリがやられてしまったが、超攻撃は適正な数になるとやめてくれるっぽいのでひと安心。

ただこれに残るはテルヨシただ1人となり、どうせ死ぬならとここまで見てきた雷攻撃を全て頭でリピートしてそのタイミングを反復。

太鼓が鳴って雷が落ちるまでのタイムラグは1秒あるかないか。つまり音を聞いてから動いても回避は不可能だ。

「音と同時に動く……」

ターゲットするタイミングはおそらく太鼓が鳴ってからの一瞬と見て、そのターゲットして落ちる瞬間に3mほど移動できれば雷は避けられるはず。

あくまで仮説だがそれを信じて極限集中モードに移行したテルヨシは、イチキシマヒメが次の攻撃を放つ瞬間を冷静に観察し、突風で

舞い上げられる瞬間に上下で反転しジャンプして足を上へ持つていき《インスタント・ステップ》で空中を蹴り即座に地面に着地。

そこから太鼓が鳴る瞬間に反応して最大の瞬発力で横っ跳びして決死の回避に動いてみせた。

雷による即死は痛みも一瞬で実感がいまいち湧かないから当たったかどうかすぐにわからなくて困るが、今回ばかりはすぐにわかった。

「――マジ無理ー」

避けはした。直撃は間一髪で免れたものの、最後の最後に残った左足が雷を受けて消失。

これ以上ないタイミングで避けたつもりだったが、それでも避けられないならもう無理だとわかると、片足を失い《テイル・ウィップ》で体を支えるテルヨシにもう次の攻撃を避ける手段は必殺技しかない。

攻撃は規則的に行われていたので、真っ先に死んだカイがタイムカウントを正確にやってるだろうし、テルヨシの結果を受けて雷は落ちたら終わりという共通認識もできた。

最初の結果としては万々歳だろうと最後の悪あがきに残った必殺技で2回だけ落雷を避けてイチキシマヒメと健闘。

次で太鼓と剣を破壊してやると意気込んで雷に打たれて死亡したテルヨシは、全滅したことで敵の排除に成功し姿を消そうとするイチキシマヒメを見ていた。

――異変が起こる。

姿を消そうとしたイチキシマヒメは、その直前にピタリとその動きを止めて空を見上げ、雷雲ではない彼方の空に目を向けたように見えた。

その挙動にテルヨシも疑問が生じてマーカー付近で視点をイチキシマヒメの見ている方向に向けると、遠くの空から虹色の壁がどんどん近づいてくるのが見えた。

それは世界が再構築される際の現象。つまりは《変遷》だ。

あの壁の向こう側から世界はまた違う属性のフィールドに変化し、エネミーなども再湧出してしまいが、もう一つ、変遷にはありがた迷

惑な機能がある。

確率としてはあまりないことではあるのだが、変遷時に死亡していた場合、どんなに蘇生待機時間があるろうと変遷と同時にデュエルアバターは強制的に蘇生させられてしまうのだ。

咲きのイチキシマヒメ戦はトータルで10分戦ったかどうかナレベルで、カイでさえまだ50分ほどの待機時間が残されていたが、変遷の光がテルヨシ達のいる場所にまで及んで通り過ぎると、マーカ―は消失し全員が蘇生。

そして面倒なことはこの変遷を見届けるといふ珍行動をしてくれたイチキシマヒメのおかげでイベント戦闘が途切れることなく再開となつてしまつたのだ。

「ちよつとマジ最悪なんだけどお!!」

「死ぬ気で逃走を試みる!」

「それで巻き込まれるの勘弁なんだけど!」

復活早々にサアヤが本気の本音な叫びを上げれば、みんなも気持ちはほぼ一緒だつたかちよつと統率感がなくなつてしまい、テルヨシはダメ元でテリトリ―からの脱出を試みる。

それを制止しようとカイやリクトが動いたがこういう時に動きがゴキブリ並みに速い《逃走王》はそれを振り切つて鳥居を潜ろうと全速ダツシュ。

「うおおおおおおお……おおおおおおお……お……おお……」

圧倒的にスピードで鳥居を1度は潜り抜けはしたテルヨシだったが、残念ながら風のフィールドはご健在だつたようで、みるみるそのスピードを奪われて押し戻されていき、その近くにいたタギツヒメには『もつと足掻いてくださいな、小戦士。ホホホツ』とバカにされてしまつたのだつた。

そういえばタギツヒメと移動する前に15時間以内に変遷が起きると言われていたことを今さらに思い出して風のフィールドに押し戻されてテリトリ―に戻つてきたテルヨシは、真っ先に逃走してみんなからの信頼を失う。とまではいかないが、わかりきつていた結果に皆がため息を漏らす。

あのアキラまで漏らしたからには相当におバカな行動だったのは確かだが、試さずに終わるよりはいいだろ！ と開き直って立ち上がると、なつてしまったものは仕方ないと切り替えて、再び剣を抜いたイチキシマヒメに意識を向けていった。

Acceleration Second 96

内容としては今回のレギオンとしての最後のミッションである《イチキシマヒメ》の《知恵の試練》に挑んでいたテルヨシ達。

まずは様子見で挑んだ1戦目からテリトリー外の待機組を無理矢理に引き込むイチキシマヒメの挙動に動揺しながら相對することとなり、案の定その猛攻によって全滅。

全滅したらそこでイチキシマヒメも消えてくれてリセットになり、蘇生後は作戦会議だなど思っていたところで、《タギツヒメ》が予告していた《変遷》が起きてしまい、強制的に蘇生させられたテルヨシ達に反応したイチキシマヒメが消える前にまた戦闘体制に入ってしまった。

1度はテリトリー外への逃走を図ってみたテルヨシではあったが、風の防壁が内側へと押し戻して叶わず、意図しない第2戦の幕が上がってしまったのだった。

「最速のテイルで避け切れない雷をどうしのぐ！」

「身代わり案は数を出しすぎれば手数を増やされるわ。でも蘇生直後じゃまともに防御できないわよね」

真つ先に退路の確認をしたのに、逃走という選択だったというだけでみんなから白い目で見られたテルヨシが落ち込んでいたら、イチキシマヒメの最初の突風攻撃からの落雷が迫っていて、同時の蘇生直後のせいで必殺技ゲージはみんな空っぽ。

それでまともにあの一撃必殺の落雷を防ぐ手段は皆無に等しく、アキラが急いでシズクに《フリーザー・アイス》を渡しているのが見えた。

それで無防備状態になったシズクをアキラが抱き止めている間に、サアヤとカイが取り急いで差し迫る脅威への対策を練り、苦肉の策としてサアヤが《ブレード・ファン》を展開剣へと変えて、それを等間隔で離して自立させる。

展開剣の数は合計で18本。外枠の剣じゃないものも含めれば20本を一気に避雷針代わりに用意したことにはなるが、さっきの戦闘

で4分の1の確率にまで命中率を下げたら、途端に挙動が変わり6発の雷が同時に落とされてしまった。

展開剣を避雷針にしたことで確率としては約3分の1にはなったのは回避策として間違っていないし、それしか方法がなかったのも理解しているが、これでいきなり6発の雷を落とされたら堪ったものではない。

その危険性も考えた上でいきなり1人脱落するリスクを重く見たサアヤに文句など言えるわけもなく、無慈悲に振るわれたイチキシマヒメの剣によってテルヨシ達は地面から足が離れ、そこに6つの太鼓の1つが鳴り響き雷が落ちる。

1つ。そう認識した時にはサアヤの展開剣の1本が跡形もなく破壊されてしまうが、この数ならまだイチキシマヒメも許容範囲だと判断してくれたようだ。

「10秒だ。イチキシマヒメの攻撃はわからないが、太鼓は必ず10秒間隔で鳴る。確率の上でなら全滅までに270秒。先ほどの《クレイモア》も補充していけばもつと生き残れる」

「生存時間を延ばしつつ太鼓を確実に破壊してけばいいわけだ。んで、攻撃が届かないヤツは……」

「イチキシマヒメ狙いで特攻！」

強制的な蘇生からの第2戦で統率を失ったのは事実だったものの、ここぞの集中力では誰も見劣りしないレベルが集まっていれば動揺も少ない。

前回真つ先に死亡して冷静に観察する時間の長かったカイが落雷攻撃のクールタイムを確定させ、避雷針の数もある程度のラインを引く。

そして優先してすべきことをリクトが述べて、それが出来ないテルヨシが代表して近接のやることを叫び、クールタイムの間はサアヤも分散配置していた展開剣をまとめて射程重視の長大剣でイチキシマヒメを一番槍で狙う。

イチキシマヒメは風の防御で接近や物理攻撃を弾き返してくるから攻撃も届きにくい。

その問題をサアヤは風の影響を受けない展開剣のリーチで解決しにいき、サアヤの鋭い刺突に合わせてズララッ！ と前方に並んだ展開剣がイチキシマヒメを強襲。

『ほう』

風の防御を無視して突き進んできた展開剣に少し声を漏らしたイチキシマヒメは、繰り出そうと準備していた風を纏う剣を使って展開剣を弾き、さらに抵抗を受けにくかっただけと見抜いてわずかに横にズレた展開剣を横から突風で煽りサアヤ自身の展開剣を支える力に負荷をかけてきた。

展開剣は連動操作のアシストでサアヤ自身にそこまでの負荷はないが、手元から離れればそれだけ津波のように負荷は増していく。

ただサアヤが先鋒を務めてくれたおかげでテルヨシとリクトは左右からイチキシマヒメに接近することに成功し、カイも重量を活かして真正面から確実に歩を進める。

「9秒ですわ!!」

イチキシマヒメへの接近の検証も進めなきやならない中、アキラから意識のないシズクを預かっていたクラリツサが次の雷攻撃が来ると知らせてくれて、その声でサアヤは再び展開剣を散開させ、雷攻撃はランダムなことは判明していて、どうせ避けられないからとテルヨシ達は突貫を続行。

幸い、次の雷攻撃もサアヤの展開剣の1本を撃ち抜いて全員が生存し、これも新発見で雷攻撃の前に剣に纏わせた風を放出させると、浮き上がらせるための突風は繰り出さないようだった。

そしてテルヨシとリクトの挟撃でイチキシマヒメに肉薄出来るか？ というタイミングで剣を地面に打ち付ける挙動を見せると、イチキシマヒメを中心にサアヤの《リベレイション・ストリーム》のような突風が発生し攻撃の寸前で吹き飛ばさせられてしまった。

が、風というサアヤが長く扱ってきた攻撃手段を散々受けてきたテルヨシは、その経験値から吹き飛ばされることを前提に体を動かして、吹き飛ばされた瞬間に素早く体勢を変えて《インスタント・ステップ》でブレーキをかけて踏み留まると、もう片方の足でまたインスタ

ント・ステップで蹴り出し前へと出て回転からのかかと落としをイチキシマヒメへと放つ。

意外性という意味で奇襲にはなつたはずの攻撃にイチキシマヒメも動揺するかと淡い期待をしても、現実には眉一つ動かさない冷静さでテルヨシのかかと落としを素手で掴んで受け止め、その手の剣でテルヨシの足を切断しようと振るってくる。

「よつとおー」

しかしこれもまた度重なる黒雪姫との戦闘経験から『斬られる』という一点において並々ならない感覚を養ってきたテルヨシは、振るわれた剣を持つイチキシマヒメの手首を掴まれていない方の足で塞ぎ止めて防御。

ただしイチキシマヒメはエネミーとしての圧倒的ステータスを有しているせいで振りを遅らせるのが精一杯で、その一瞬の隙で掴まれている足を振りほどき、『テイル・ウィップ』を地面に接地させて振り抜かれた剣を紙一重で躲す。

そうやってテルヨシがイチキシマヒメの意識を集中させた時間を有効に使えるのが仲間達であり、剣を振り切った瞬間を狙ったサアヤの展開剣の刺突がイチキシマヒメを襲ってミリ単位のダメージを与え、さらに空中に留まるテルヨシが無防備な剣に2連蹴りを食らわせる。

そこで深追いはせずともに攻撃を食らう前に地面に降りてバツクステップで距離を取ったテルヨシに突風で吹き飛ばしてきたイチキシマヒメの拳動は少し意外だったせいで、勢い2割増しで吹き飛んでしまったものの、それと入れ替わるようにリカバリーを終えたリクトが背後からイチキシマヒメを強襲。

それに素早い反応で振り返り迎撃の突風を起こそうとした手の振りをサアヤの展開剣が突き崩し阻止すると、リクトがインファイトで拳のラッシュを剣に叩き込む。

「次、来ますわよー」

戦っていると時間の感覚が恐ろしく早く感じ、それが集中していれば尚更なため、クラリツサの予告は非常にありがたく、サアヤもまた

展開剣を散開させて避雷針にして、テルヨシも自分が撃たれてもいいようにみんなから距離がある位置で着地し太鼓の音を確認。

もちろんこの間にもヨリが太鼓を《リトル・ボム》で攻撃してくれているので、確実にダメージは蓄積してきているはずで、シズクもあと3回ほど攻撃をしのげば行動不能から必殺技ゲージ満タンの状態で復活できるから、アビリティの恩恵は少ないが火力は上がる。

よく見ればクラリツサはアキラからフリーザー・アイスを受け取って、シズクの復活と入れ替わりで必殺技ゲージをチャージしようとしていたようで、クラリツサにフリーザー・アイスを渡したアキラもイチキシマヒメが釘付けになれば少し楽になるとわかって攻撃に参加しようとしている。

それらをほとんど一瞬の処理で観察したテルヨシは、そこで太鼓が鳴り響き雷が落ちてくるのを感覚的に察知してどこに落ちたかを視認すると、まさに不運。

さすがに4分の1の確率。いつかはと思っていたらそれがもう来てしまい、またも最初に雷を撃たれたのは、イチキシマヒメまであと10mを切っていたカイ。

誰であろうとあの落雷に耐えられないと思っただけに気落ちするテルヨシだったが、そこでふとさつきとは違う状況だと思いつく。

「……あつ。リリースって確か……」

さつきは前回の《タギツヒメ》戦で相当消耗し、残りのHPゲージも2割を切っていたカイは呆気なく一撃死してしまったが、ほぼ万全の状態のカイはあるアビリティの発動条件を満たしている。

それは残りHPゲージが30%以上の状態からなら、どんなに強力な一撃を貰って死亡するダメージであっても、必ず残りHPゲージを1%残して踏み留まるアビリティ《Spirit気力》。

いわゆる《ガッツ》と呼ばれるゲームにたまにある根性系のアビリティで、それが発動していればカイは即死を1度だけ免れることができる。

「う、おおおお!!」

その際に部位欠損が起こるダメージももちろん可能性としてはあるが、それはアビリティで完全防御され、カイは五体満足でその場で咆哮。

ご自慢の《アーマー・シエル》も見事に全破壊されてアバター素体が露となったが、それだけの一撃を受けたなら《リサティーターシオン》の威力はかつてないほどの威力になっているはず。

それがわかっての咆哮だろうと苦笑いしながらも、シズクに負けず劣らずの超火力を目にできるとあつてテルヨシも内心では男としてワクワクが止まらず、カイのかつてない気迫にビクツと反応したりクトもこの上ない危険を察知したカイチキシマヒメから距離を取る。それを見て装甲を外して一転、高機動力のアバターになったカイは、リクトに対して突風を放つたのを確認してから一直線に飛び出し必殺のリサティーターシオンを……

「リサティーター……」

ホルテック・スパーク

『タケミカズチ』

今まさに解放されようとしたところ。

まるでカイの危険性に気づいていたかのように初めての挙動で剣を引き絞って刀身に手を添えたイチキシマヒメ。

そこから風ではなく超高压の電気を剣に纏わせて鋭く突き放つと、その射線にいたカイに落雷とほとんど同じ威力の雷の槍が射出される。

途方もない威力でカイを呆気なく貫通した雷の槍は一瞬でその後ろの鳥居の中を流れていき、近くにいたタギツヒメがギロリとイチキシマヒメを睨むのが見えた。

『……………』

あまりにも無慈悲で呆気ないカイの幕切れに言葉を失ったテルヨシ達は、絶好のチャンスを逃した脱力感がその身を襲うのを自覚しかけてブンブン頭を振り、何秒無駄にしたかを把握するためにイチキシマヒメを見る。

接近戦をしている相手がいなかったおかげで元気一杯なイチキシマヒメは、堂々とその手の剣に風を纏わせて突風を発生させ、それを

受けたテルヨシ達はわずかに宙を舞う。

その際にユリが飛んでいってしまったようにサアヤが手を繋いで助けていたが、直後の落雷は不運にもそのサアヤがユリのどちらかに落ちてしまい、2人ともが即死。

さらにサアヤが死亡したことで展開剣も自然消滅して避雷針代わりはユリが残したクレイモア3発分だけに。

ビックリするくらいのスピードで3人が脱落してテルヨシ達のモチベーションがガクツと落ちたのは言うまでもないが、それを汲み取って手を抜いてくれるような相手ではない。

まだシズクも行動不能から復帰していないので1分も経っていないという衝撃の事実も精神的にクルものがある。

太鼓を安定して攻撃できるのもシズクのみで、あと20秒。つまり2度も落雷に耐えなきゃならないとあって、クラリツサもフリーザー・アイスを食べるタイミングを完全に失ってしまったし、残ったメンバーで何をすべきかがいまいちまとまらない。

こういう時のリーダーシップがテルヨシにはまだ足りないと痛感するも、何かしないと次に繋がらないのが現実。

なら今やれることは……

「リリースとイーター、シンデレラはイチキシマヒメを狙って！
ルルールはオレが預かる！」

次の雷が自分に落ちる確率も低くないため、試したいことが1つだけあったからせめてそれだけは確認しておこうと指示を出しながらクラリツサからシズクを預かり、テイル・ウィップで絡め取って持つ。

イチキシマヒメを攻撃したことで1回分だが《インパクト・ジャンプ》が使えるテルヨシは、その1回で光明を見出だせればと意気込む。

そのテルヨシが狙っているのは、一見するとランダムに落ちている雷攻撃だが、ターゲット自体は確実にランダムなのは揺るがないにしても、実は直前に鳴る太鼓には順番が存在している可能性があった。

変遷による連戦は確かに不運ではあったものの、そのおかげで太鼓は出現したまま攻撃が継続されたことから、6発同時に撃たれた後からのカウントで次の雷が合計で10発目になる。

イチキシマヒメをターゲットしながらも音の発生源だけはしっかりと聞き分けていたため、どの太鼓が鳴ったかをちゃんと把握していたテルヨシにしか気づけなかったこの可能性は、太鼓が一巡して鳴った後に疑問が生じた。

そしてここまでの3発が同じ順番で鳴らされたことから、テルヨシは次に鳴る太鼓を特定し、もしかしたら太鼓が鳴るタイミングにピッタリと合わせて攻撃を加えて鳴るのを阻止すれば、雷攻撃をキャンセルできるかもしれないと考えたのだ。

「チャンスは1度きりか」

あくまで推測での検証で無意味に終わるかもしれない行動だ。

しかしそれでもやれることは全力でやる。それがレギオンマスターとしての意地であり、バーストリンカーとしてのプライドだと鼓舞し、しつかりとカウントしていた太鼓が鳴るまでのタイミングとインパクト・ジャンプを使って太鼓に攻撃を加えるタイミングを合わせに行く。

「3……2……インパクト・ジャンプ！」

完全に太鼓に集中する都合で、どうしてもイチキシマヒメへの意識を切らなきゃならないから、ここで突風が来たらマジで終了だったが、それが起きなかったという事はリクト達がしつかりとイチキシマヒメに肉薄してくれたということ。

それに感謝しながら跳んだテルヨシが、ここしかないというタイミングで太鼓がドツ……とほんの少し鳴りかけたところに痛烈な蹴りを加えて派手なサウンドエフェクトを発生させる。

音の鳴り方が落雷を呼ぶ鳴り方とは違ったせいなのか、空の雷雲からはその時が来ても雷は落ちてこなく、それにはイチキシマヒメに攻撃していたリクト達も何が起こったと落下中のテルヨシに目を向けてくる。

——これはもしかしくなくても成功ですか!?

そうとしか思えない結果に意外な雷攻撃の防御手段を発見できてガッツポーズをしたテルヨシだったが、完全に色々とお粗末なりカバリーが災いして、着地しようとしていた場所に都合良くユリのクレイ

モアが。

当然、浮かれていたテルヨシがそれに気づいたのはクレイモアが爆発の予兆として鳴らす「ピピッ」という電子音を聞いてからで、それを耳にしたが最後、その爆発範囲から逃れることはできなく、持っていたシズクもろとも爆撃を受けて自爆。

HPゲージこそまだ余力はあったが、シズクとの装甲強度の関係でおそらくシズクには割り増しでダメージを入れてしまった。

これは起きた時にキレられる……

それはまず間違いないと確信しながら、あと次の落雷攻撃の前後で目覚めるだろうシズクに先に土下座してから、さすがに今から太鼓が鳴るタイミングに攻撃してキャンセルを狙えと指示しても無理かと悟る。

そもそも空中にある太鼓を狙えるのはリクトの《ジャイロ・ショット》が精々。

たとえ攻撃が出来たとしても一定値以上のダメージが必要かもしれない以上、牽制や不意打ち程度の威力のジャイロ・ショットではキャンセルまでは見込めない可能性が高い。

なのでここはワンチャン。次の落雷攻撃で自分とシズクが死ななければ、暴れようとするシズクを取り押さえて落雷のキャンセルの方法だけを伝えて試させるくらいはしておこうと決心。

どうせ自分とシズク。どちらが欠けても成立しない行動ならとシズクを持ったまま次の落雷攻撃を待つて、太鼓が鳴る直前でピカッ！

とアイレンズを光らせて復活したシズクが状況の把握より攻撃を優先したのを咎めたら、揃って落雷の餌食となって即死したのだ。た。

こういうところで運が悪いのがオレなんだよねえ……

とかなんとか蘇生待機中に自虐しながら、残った3人の奮闘を考察を交えて観戦し、無事に3人が順番に死亡したのを見届ける。

そして大事なことなのでしっかりとイチキシマヒメが全滅を確認し、その姿を消して雷雲が晴れたのも見てホッとす。

これで蘇生するまで本殿前で待ちぼうけし始めたりしたら堪った

もんじやなかったから、引っ込んでくれて本当に感謝しかなかった。こうしてイチキシマヒメ戦の第2戦の幕は敗北で閉じ、カイから順番に蘇生しては速攻で鳥居の外まで走ってテリトリーから抜け出す作業をすること8回。

誰も捕まることなく鳥居の外にいたタギツヒメの近くで集合したテルヨシ達は、ようやくまともに話し合いができる状況になってみんなしてその場で力なく座り込んでしまった。

改めて振り返ってもこのイチキシマヒメ戦は他の2つの試練に比べて殺意が強く、その辺でサアヤやユリが愚痴をこぼすのに便乗してみんなも賛同。

それでぐったりとしたテルヨシ達の様子に唯一楽しそうにクスクスと笑っていたのは、Sっ気たっぷりなタギツヒメで、ここまでの奮闘を労うでもなく口元を隠しながらのタギツヒメは、完全なる他人事として口を開いてくる。

『よい見せ物でしたよ。この調子でもっと足掻いてみせてください』

『お前のためにやってんじゃねーよ！』

イチキシマヒメの試練も何もかも知っていながら何の助けにもなろうとしなかったタギツヒメの言葉はテルヨシ達の神経を逆撫でしかない。

その気持ち完全に一致した一同は一言一句違わない言葉で呑気なタギツヒメにツツコンでみせたのだった。

殺意に溢れる《イチキシマヒメ》の《知恵の試練》で2連敗を喫して、ようやく落ち着いて作戦会議が出来たテルヨシ達は、横で「早く挑みなさい、小戦士」と急かしてくる《タギツヒメ》を無視して輪を作り情報を整理。

「あの即死の落雷とか一見するとやられる前にやれって感じの力押ししかないように思える試練だけど、やっぱりシステム的に意図的な穴はあるっぼいね」

「知恵って言うくらいだから、何らかの回避方法はあるとは思ってたけど、あの威力を見せられたらねえ」

「そうやって思考を誘導するのも目的なのだろう。だがあの雷を無力化出来るとわかれば他の対策もしようがあるな」

「ですがリリースを倒したあの技の発動条件はハッキリさせておかないと、脅威で言えば落雷と大差ありませんわね」

死亡時にもただ死んでいたわけでもなかったテルヨシ達は、可能な限り自分の目で見えた情報を自分で処理し、確定した情報を共有。

まずイチキシマヒメの風を起こす攻撃は連発が不可能で、使わせれば落雷とのタイミングを外すことが可能。

即死で回避もほぼ不可能なら体を浮かせるのはほとんど無意味とも思っていたこれも、実は落雷攻撃が太鼓の音をかき消せばキャンセルされるのを隠すためのものであったとわかる。

かなりシビアなタイミングで鳴る太鼓にピンポイントで一定以上のダメージを与える必要性を考えれば、地に足をつけて悠長にタイミングを計る猶予を与えなくなっただろう。

そうした回避方法が用意されていながら、それを隠そうとする製作側の意図に気づいてしまえば、これが知恵の試練であることを思い出せるというもの。

ただしこれでイチキシマヒメの試練のどの程度を攻略したことになるかは全くの不明で、先の2つの試練でも丸鏡と水晶は破壊される

ことで別のトリガーが発動していたことから、太鼓を1つずつ。或いは全て破壊したタイミングでイチキシマヒメの挙動が変わると前提にしておくべき。

そして不確定な要素としてクラリツサが口にしたカイを倒した《タケミカツチ》なる雷の槍。

テルヨシやサアヤ、リクトの攻撃の際にも発動の素振りを見せなかったイチキシマヒメが、何故カイの接近にだけ反応して発動したのか。その発動条件がわからない。

「推測としてはイチキシマヒメには儂らの攻撃力が数値化して見えておつて、その数値が一定以上を上回る場合に発動するのかもしれない」「つてことはルーレットのアビリティを無闇に上げて開幕狙い撃ちされるなんてこともあり得るつてわけか」

「笑えねえし面白くねえ」

「あくまでまだ推測ですよね？　じゃ、じゃあまずはそこを確かめるのも手なんじゃないですか？」

「とは言つてもリリースレベルの瞬間火力つてなるとルーラーのアビリティを育てるしかない気も……」

テルヨシ達とカイの明確な違いはそのくらいだったとも言えるので、ユリの推測が可能性としては高いとみんなが理解しながらも、それをどうやって確かめるかという話になると難しい問題。

今からシズクのアビリティを育てるとなると、この場の7人を犠牲にしたところで4段階に上げられるかどうか微妙なところ。それではリリースレベルの攻撃力は生まれまいだろう。

それを回数こなせば確かにアビリティは育つが、1時間の蘇生時間を挟むのはテンポも悪いし、ちんたらやっているとタギツヒメが機嫌を損ねて帰ってしまう可能性もなきにしもあらずだ。

そう考えるとタギツヒメが邪魔でしかないと内心で思いつつも口にはしないでどうするかと考えていたら、ふとアキラと目が合い2人してキョトンとする。

「……………あつ！　イーターー！」

「はいいつ!?　な、何ですか!?!」

「あらそうよ。アンタがいるじゃない。ほら準備しなさい」

「準備って何を……」

「もちろん、死ぬ準備よ」

そこから数秒間アキラを見つめてから、いきなり声を張り上げたテルヨシにビクツとなったアキラが戸惑っている、テルヨシの意図を汲み取ったサアヤが冷静に解決策に思い至り《親》として命令。

何が何やらな感じで死ぬと言われたアキラは泣きそうな雰囲気を感じ出すが、テルヨシとサアヤがそこまで言えば他の人も一気に理解して順番にアキラの肩をポンと叩いて「頑張れ」と別れの言葉を贈る。さすがにみんなからそんなことをされてしまえば小学4年生でも察することはできてしまい、自分でも確かめるべきだと意見してしまつた手前で引くに引けなくなつたアキラはガクリと肩を落としてしまつた。

特殊な条件下でしか活躍できないことから割と忘れがちになるが、アキラは《氷雪》ステージという最初の条件をクリアすれば、最強の必殺技である《ジャイアント・スノーマン》を使って巨大雪だるまとなり、大きさ含めて各種ステータスが10倍にまで跳ね上がる。

そこから繰り出されるパンチやらキックやらの威力はシズクとカイにも決して負けはしない。むしろ必殺技1つで準備も自前で出来て《無制限中立フィールド》ではお手頃とさえ言える。

そのことにこのタイミングで気づくテルヨシ達が良いのか悪いのかはさておき、みんなの期待を一身に背負つたアキラは、まずはこの辺一带を《オルタレイション・ブリザード》で氷雪ステージに変え《フリーザー・アイス》で必殺技ゲージをリチャージ。

次にジャイアント・スノーマンで変身を完了させると、やるべきことは落雷を受ける前にイチキシマヒメへと攻撃することと念押し。

イチキシマヒメは試練始める際に鳥居の外にいるバーストリンカーも引き込んで強引に試練に加えてくるので、その引き込みを受けないように十分な距離を取って遠目から観察。

ただしアキラがデカすぎてその奥に出現したイチキシマヒメは100%見えなくなつたので、アキラの結果報告待ちになるなど早々に

諦めモードに。

そうして油断して寝転がったテルヨシの位置がイチキシマヒメとアキラと鳥居を一直線で結ぶライン上だったせいで、予定通りイチキシマヒメに攻撃していったアキラがタケミカツチを受けて即死。

放たれたタケミカツチは威力を減退させることなくテルヨシのところにまで伸びてきて狙い定めていたかのように撃ち抜いて即死。

完全なる無駄死に死亡マーカーの近くで顔を真っ赤にしていたテルヨシに対して、ちゃんと避難していたサアヤ達は近寄るなり物言えぬテルヨシに「バカかよ」とツッコまれてしまったのだった。

「全力で殴ろうとしたら撃たれました……」

「はいお疲れ様。それじゃあタケミカツチへの対応はそういう方向でいきましょ」

「あなた……自分の《子》に対してドライすぎませんか?」

1時間後。

テルヨシの余計な死亡もありつつ蘇生したアキラが戻ってきて早々に報告してくれて、やはり一定値以上の攻撃力で攻撃しようとするとかウンターとしてタケミカツチが放たれるようだ。

それが判明したことで機械的な感謝を述べたサアヤがサクサクと話を進めようとするのをクラリツサがやりわりツッコむも、気にも留めないサアヤにアキラが諦めてるようにクラリツサをなだめるといふ意味不明な光景が。

ぞんざいな扱いは現実世界でも間々あることなのか、そこで落ち込むようなことがないアキラになんだか強いんだか不憫なんだかわからない感情が湧いてきて、どういう言葉をかけるのが正解か瞬時に判断がつかなかったため、とりあえずスルーすることにしてサアヤの話に集中。

「まず次の戦闘では1歩2歩進んでイチキシマヒメの新しい挙動を引き出すわよ。クリアできるならしちやっていいし、無理そうなら次に繋げる。今までとやること自体は変わらないわ」

「戦闘が始まったらまず確認すべきは太鼓の鳴る順番だな。先ほどは連戦だったせいで不明だったが、毎回配置も鳴る順番も変わる可能性

はある」

「ならばまずは5回撃たせる必要があるのう。クレイモアは仕掛けて確率は下げるが、それまでに誰も死なねばよいが……」

「ああ、それならオレの必殺技でまとめて跳べば避けること自体は可能だよ。ただリチャージなしだと4回しか使えないから、1回は運に任せるしかないかな」

次での攻略は楽観視しすぎという考えなのか、意気込みこそ強いものではなかったサアヤに特に指摘するような声が上がらなかつたのは、このイチキシマヒメ戦が1つ1つのギミックの殺意が強くて臨機応変という対応力よりも、確実にギミックを見てクリアする方がげんじつてきだからか。

その辺で共通認識して余計なことを言わずに話が進むから、やはりこのレギオンに集まった面子は個性が強い以上に個々の経験値が高い。

その話の中で最初に太鼓の破壊までをノーリスクで終わらせるためにと問題点が挙がり、落雷攻撃をキャンセルはできるが、太鼓の鳴る順番を見極めるために最低5回は鳴らさないといけないとわかる。

その5回をどうしのぐかではテルヨシの《インパクト・ジャンプ》がタイミングさえ合えば避けられることは実証済み。

ただし必殺技ゲージを1回で25%消費するから、連続使用では4回が限度。戦闘中の必殺技ゲージのリチャージはかなり難しいこともわかっていたので、その1回を運に委ねるのはなかなか悔しいところ。

「それならアタシの《エイレーネ》の弾丸でゲージの譲渡が出来るぞ」
そこはどうか乗り切ろうと割り切り姿勢でいた一同に、意外なところから声が上がリ、自分から協力しようとする発言をしたシズクに全員がちよつと驚く素振りを見せる。

自覚はあるのかテルヨシ達の反応にも文句は言わなかつたシズクが進言してきたのは、特殊弾を放つ《ホーライ》の弾丸の中の1つ。

昨日の領土防衛戦の《プロミネンス》戦でテルヨシはその効果を初めて使用されて知ったが、注射器型の弾丸を射した相手に自分の必殺

技ゲージに溜まっているゲージを任意の量で譲渡できる補助型のものだ。

まだシズクは自分の強化外装群の詳細をテルヨシ達に話していない都合、判明している効果はアビリティによる強化を含めれば精々半分程度。

特に協力などしてこなかったシズクは今までそのエイレーネを使う必要性が皆無で腐らせてきたから、サアヤ達もそれを聞いて「そんなものがあつたのか」という驚きが大きいようだ。

「これはおね……《パープル・ゾーン》の《エレメンタリー・チャージ》と同じ効果だが、アタシのは自分のゲージをそのまま等倍で譲渡しか出来ねえからな。アビリティの強化をしていけば倍率は上がるが、上昇値は1段階毎に5%。ゾーンの1.60217662倍になるまでに12段階も必要だ。現実的じゃねえ」

「あー、そういえばゾーンにもそんな必殺技があつたわね。あれ自体が遠間からバシバシ撃てるから、ゲージタンクやられるとキツかった記憶」

「擬似的な移動できる要塞拠点じゃからの。効率も良いし曲者じゃつた」

「それはいいけどよ。よくまあ紫の王の必殺技の倍率をそこまで細かく知っているもんだな」

テルヨシも効果自体は知ってるが詳細については知らなかったから、初めてシズクの口からされた詳細な説明でエイレーネの弾丸を理解する。

その際にゾーンのことをリアルでの呼び方するポカをしかけたが、寸でのところで言い直してみせて、しかしそのあとに近い人でもない限り知り得ないような情報を出したせいでリクトに怪しまれることを言われてしまう。

シズクが《レッド・ライダー》の子でゾーンが親代わりという情報は遠からずみんなにも話すことになるとは考えているものの、それが今かと言えば違う気もするので、サアヤがすかさずフォローに回って「ゾーンのそれ、細かすぎるってみんなによくツッコまれてたから、

知ってる人は知ってるわよ」と補足。

それにユリもうんうん頷いてみせ、テルヨシにもアイコンタクトしてきて同じように頷き賛同者を増やす。

古参のサアヤやユリに、戦ったことすらないテルヨシが知ってるならそこまで気にすることでもないのかと、知らなかった側のリクトは自分が情報弱者だったと疑問を解決。なんとか事なきを得るのだった。

「ならば最初の5発は完全に避け切ることは可能だな。攻撃の分担はイチキシマヒメと太鼓で分けることになる。特に太鼓への攻撃は生死に関わる重要な役目だ。負担も大きいが近接組はそこに加わりにくい」

「そこは儂とルーレットに任せておけ。主らは一刻も早くイチキシマヒメの剣を破壊するんじゃぞ」

「よっし。んじゃ第3回戦、いってみよっか」

「僕のはカウントしてないんですね……」
「頑張りはみんな認めてますわよ」

見えている問題を解決して30分ほどの対策会議をした上で挑んだイチキシマヒメ戦の3回戦。

今回やることはかなり明確にされていることもあって、開幕からしっかりと役割分担が出来たテルヨシ達に無駄はほとんどない。

ユリとシズクは太鼓の配置と鳴る順番を確認するために意識をそっちに集中し、とりあえずそれが終わるまでは余計なことはせずに1ヶ所に固まってテルヨシが《テイル・ウィップ》で6人をまとめて絡め取り、彼女特権でサアヤだけお姫様だっこで持つ。

さすがに重量的な問題でテイル・ウィップはピクリとも動かせないが、インパクト・ジャンプは問題なく発動するし、まとめて移動も出来るので影響はない。

クレイモアなども設置してないので確実にテルヨシ達のところに雷が落ちるので、ここでテルヨシが5回のうち1回でも回避に失敗すれば、全員まとめて即死というプレッシャーもある中で持ち前の集中力を発揮して太鼓の音にだけ聴覚をフル動員。

早すぎればターゲットされるタイミングに被って撃たれ、遅すぎればその場で撃たれて即死。1秒とない駆け引きに技名発声までしなきゃならないとあつて難易度は高いものの、1回戦でそれをやっているのだからやれないことはない。

そうして自分に言い聞かせてイチキシマヒメからの突風を受けるも、《インスタント・ステップ》で空中を蹴れるテルヨシにはさして問題ないことと無視して太鼓が鳴る瞬間に技名発声。

最初のド、の音が聞こえたところでインスタント・ステップの足場を蹴ったテルヨシは、一瞬でその場から40m先の地点まで移動し雷を回避。

着地に難があつたので風の防壁が発生しているテリトリーの外に出るように跳んだおかげで、その風に阻まれて押し戻され、その間にテイル・ウィップからみんなを解放して各々が着地を決める。

「あと4回！ 失敗したらゴメン！」

「大丈夫よテイル。アンタは誰かを守る戦い方に向いてる性格だもの。ちゃんと守ってちょうだい」

「おつす！ 帰ったらご褒美が欲しいっす！」

「調子に乗るな」

『戦闘中にイチチャつくな』

次の攻撃まで10秒の猶予があるので、それまでにまたみんなが集まればいいとあつての判断での行動から、ちやっかり予防線を張りつつ次弾に備える。

ただしテイル・ウィップは解放しながらサアヤだけは放さなかつたテルヨシにサアヤが嬉しい言葉を贈り、そこで夫婦漫才みたいなものを披露されてしまうと周りがツッコまざるを得なくなるのは当然の流れ。

自覚がなかつたのかそれでサアヤが恥ずかしそうにテルヨシの首に回していた腕を解いて腕の中に収まり小さくなると、こういう無自覚な可愛さも良いなあと考えてしまう。

しかし惚気けていられるのもそこまでが限界で、テリトリーの中央辺りに移動して集まったみんなをまたテイル・ウィップで絡め取って

同じことを3回繰り返す。

もちろんサアヤの声援を受けたテルヨシが失敗などしようはずもなく、最後の1回の時にシズクからエイレーネの弾丸を受けて必殺技ゲージのリチャージをして、華麗に5回目も回避すると、そこからは全員が我慢から解放される。

6回目の落雷攻撃はサイクルとしては最後になるので一巡するまでもなく鳴る太鼓がわかるとあって、ユリとシズクも攻撃の瞬間まではバカスカ太鼓を攻撃。

その2人の邪魔をさせないためにイチキシマヒメの突風を封じる役目にあるテルヨシ達も2人1組のチームを作って左右と正面に分かれて襲撃。

正面担当のカイとサアヤがジリジリと距離を縮めながら牽制し、右担当のリクトとアキラががむしやらに突撃してイチキシマヒメの突風を受ける。

その隙を突いて左担当のテルヨシとクラリツサが強襲して振るわれる剣を躲しながらダメージを与える。

女を守るといふ本能が割増しで強いテルヨシはクラリツサへの致命傷を回避させながら立ち回ることもでき、2人が肉薄しているうちにリクトとアキラも2回に1回は射程内に入って攻撃を加えるまでに至る。

そして落雷攻撃は6回目以降からはユリとシズクが完全に沈黙させてくれるおかげで、そちらに気を取られずにイチキシマヒメに集中できているテルヨシ達の動きのキレはかなり良かった。

確実にイチキシマヒメの動きを封じられてきたのを確信しながら攻撃を続けるテルヨシ達に対してイチキシマヒメもされるがままというわけでもなかった。

『小賢しい。《カミカゼ》』
ゴッド・ブレス

戦況的に苦しくなると発動するのか、離れないテルヨシ達の攻撃を少しだけ防御を緩めてでも強引に別の挙動になったイチキシマヒメは、手に持つ剣を頭上に掲げて風を纏わせると、そのままクルクルと腕を回して渦を作り出す。

その勢いはすぐに増してイチキシマヒメの周囲に大きな竜巻が発生し、その勢いに吞まれてテルヨシ達は竜巻の流れに沿って宙を舞い、あつという間にイチキシマヒメの30mほど上まで浮き上がられる。

『チドリ』^{スパーク}

それで終わりならまだなんとかなると思惑こそ冷静だったテルヨシが直下のイチキシマヒメに照準していると、腕を回すのを止めないイチキシマヒメが風と共に雷まで纏わせた剣から竜巻に雷を流してくるのが見え、物凄いスピードでテルヨシ達がいる場所まで流れてきた雷は6人の体を貫いてダメージを負わせてきた。

さすがに落雷やタケミカツチのような即死性の攻撃ではなかったようでHPゲージの減少はテルヨシで約3割。

サアヤ達もその前後で留まったと思われるが、竜巻の上昇が留まるところを知らず、さらに遠くなったイチキシマヒメがまたチドリを放ってくる気配を察知。

「ナメんな！ 《リベレイション・ストリーム》!!」

これが続くようならハメ技に近いといち早く理解したサアヤがテルヨシ達に了承を得る前に行動を開始して最大範囲技であるリベレイション・ストリームを発動。

地上で使うことが普通だからわかりにくいだが、実はこのリベレイション・ストリームはサアヤを中心に『球状』で広がる暴風が吹き荒れるため、空中で使えば文字通り全方位に暴風が巻き起こる。

それに巻き込まれるとテリトリーの周囲の風の防壁か地面に叩きつけられるが、ダメージ自体は備えていれば防げる。

その辺でユリとシズクの方が心配になりつつも竜巻の中にいたりクト達をテイル・ウィップで絡め取ってまとめたテルヨシは、竜巻とぶつかるようにして発生したリベレイション・ストリームによる乱気流の中をきりもみしながら流されていった。

始まった《イチキシマヒメ》戦の第3回戦は、出だしこそ順調に事を進めていったテルヨシ達ではあったが、さすがにそのまま押し切れるわけもなく、ほとんど強制的に空中に舞い上げて竜巻に巻き込む《カミカゼ》からの電流流し《チドリ》のコンボでまとめて削られる。

それを連発する気配を察知したサアヤが竜巻を解除するために《リベレイション・ストリーム》を使つて暴風をぶつけたことで、テリトリ内では予期せぬ風の流れが発生。

不規則な流れが生み出された影響で直前に舞い上げられていたクラリツサ、リクト、アキラ、カイの4人を《テイル・ウィップ》で捕まえていたテルヨシは上下左右に振り回してくる風に視点が定まらない。

「ぐっ……ヤバイ、ぞこれ！」

そんな視界不良の中でも見るべきものはしっかりと見ていたテルヨシが捉えたのは、サアヤの起こしたりベレイション・ストリームを受けて同じように暴風に巻き込まれてしまったユリとシズクの姿。

地に足がつかない状況でも自分達の狙いである太鼓から目を離さずにはいるみたいな挙動はわかったものの、その状態から落雷攻撃をキャンセルするだけの威力とタイミングを合わせられるかと言えば、相当難しいはずだ。

しかも暴風はテリトリの外枠に展開される風の防壁ともぶつかることでなかなか収まることなく吹き荒れ続けて、次の落雷攻撃までに収まることはなさそうときた。

「仕方ありませんわね！ 《マスカレード・ボール》！」

避雷針がサアヤの《ブレード・ファン》《くらいしかない状態》で雷が落ちたら高確率で誰かが撃たれてしまうと判断したクラリツサは、6発同時を覚悟でマスカレード・ボールによる20体の分身体を放出。

確率は4分の1程度で当たるかもだが、25%なら或いは……な確率を祈つて落雷を待ち、太鼓の音が連打のように鳴り響いた瞬間、暴

風であちこちに飛んでいったクラリツサの分身体が一気に消滅。

中には近くて巻き込まれた個体もあったようだが、奇跡的に落雷に撃たれた人はいなく、その結果に心底ホツとした。

その後、残ったクラリツサの分身体には勿体ないが自滅して消滅してもらって落雷攻撃の威力を下げ、ようやく暴風も収まってきてテルヨシ達を舞い上げるだけの力を失って落下を始めたところから反撃開始。

高所からの落下によつて地面へと叩きつけられる寸前に《インパクト・ジャンプ》を地面と平行に発動して落下を防止しつつ、その方向をイチキシマヒメのいる方へと跳ぶことで一気に接近。

当然、反応したイチキシマヒメは風をぶつけて接近を阻んでくるが、ジャンプを終えて風に押し戻される前にテイル・ウィップで掴んでいた4人を勢いを利用して前へと放り、風で押し戻す力に抗わずに素早く方向転換し、地面に激突寸前のシズクを救出するためにまたインパクト・ジャンプ。

どうにか滑り込みでシズクを抱き止めて下敷きになりながら救出は間に合ったが、シズクもシズクでリカバリーを考えていたから、持っていた大砲型の《アレース》の砲口がテルヨシの顔に向けられて必殺技発動の寸前まで発声されてしまった。

それには肝を冷やしつつも撃たれずに済んで解放して立ち上がるのと、まだ救出すべきユリがいると必殺技ゲージを見るが、さすがにもうインパクト・ジャンプは使えない量まで減っていた。

しかしそのユリは同じくまだ上空にいたサアヤがブレード・ファンを広げて乗り物にして上に乗り、その滑空でユリを回収。

テルヨシとシズクのそばで華麗に着地を決めてみせてから、さすがにさっきの解決策はヤバかったと苦言を呈する。

「ガツちゃんさっきの禁止！　リカバリーに使ったゲージが半端ない！」

「私だってゲージ全消費でまた使おうなんて気も余力もないわよ！」

文句言うなら対策をいませ！　さあ！」

「ぐぬぬう！」

「バカやつとる場合か！ 次の落雷が来るぞ！」

「あれ撃つたらリセットされんのか!? なら狙いは最初のやつか、順番的に次のやつか!? それとも本来鳴るはずだったやつか!?」

「にやー！ そんなのオレにもわからんちん！」

「ええい！ こうなれば儂が最初のと前のを攻撃する！ ルーレットは次に鳴る太鼓を攻撃せい！ 《リトル・ビッグボム》！ リトル・ビッグボム！」

窮地を脱したのはいいが、それに費やした労力というか主に必殺技ゲージが重すぎて、1回限りの力技でもこれは酷いと言い争う。

次にまたカミカゼとチドリのコンボが使われた場合の対策を練らなきゃならないのはもちろんだが、落雷攻撃が10秒間隔という短いインターバルで行われることも喧嘩を助長させる。

しかも6発同時の攻撃のあとの挙動について情報が不足していて、次に鳴る太鼓が3択になってしまっただけでシズクが意見を聞いてくる混沌さ。

あれもこれも秒単位で決断しなきゃならないとかテルヨシの頭ではパンクしそうになるところをユリが即決で動いてくれて、リトル・ビッグボムを2つ使って2つの太鼓に狙いを定め、シズクも言われた通りの太鼓を狙う。

イチキシマヒメは先に放っていたアキラ達が肉薄することで風の攻撃を防いでくれるので、サアヤとの喧嘩はスパッとやめて攻撃に集中する2人に代わって鳴る太鼓を聞き分ける。

キャンセルのために爆音をぶつけるから大変聞き取りづらくはあったものの、なんとかギリギリ聞き分けることに成功し、キャンセルに成功した2人にいま鳴った太鼓を教えて鳴る順番を確定させることはできた。

それはテルヨシにしかできなかつたと理解してるからか、喧嘩腰だったサアヤも喧嘩を再開させるようなこともなく、イチキシマヒメと戦うアキラ達に加勢に行くため一緒に走り出す。

「……それで、次にカミカゼが来たらどうするのよ」

「どうしよつかねえ……」

「真面目に考えなさいよ。ちゃんと使えば働く頭はしてるでしょ」

「うーん、踏ん張ろうにもこう拓けてると掴まるものすらない……」

その前にカミカゼへの対策だけは必要だろうと落ち着いた口調で話すサアヤにテルヨシも冷静さを取り戻して考えるが、割とどうしようもない技で対策のしようがないとわかってしまっている。

しかし掴まるものすらないという点において1つだけ引つかかったのは、技を放つイチキシマヒメ本人。

技を使うイチキシマヒメが竜巻に巻き込まれては本末転倒なのは当たり前で、それが起きるならアホすぎるが、現実はそのことは起こらずイチキシマヒメはその場に留まり続けていた。

それならカミカゼには風の影響を受けない安置が存在する可能性があり、それがあるとするなら竜巻や台風でもよくある『目』と呼ばれる中心地。

「イチキシマヒメの頭上」

「竜巻の中心ってこと？ まあ確かにそこなら風の影響もないとは言わないけど、どうやってそこに入るのよ」

「ん？ それ自体はオレだけなら簡単なんだけど、みんなとなると誰かを踏み台にするしかないよね」

「じゃあテイルが最後ね。アンタしか自力で移動できないんだし、当然そのつもりで言ったんでしょ」

「オレを踏み台にしていけえ！　なんかカツコ良い？」

「はいはいカツコ良いー」

「うわあお、テツキトー」

風の影響が弱ければ体を浮き上げるだけの力がなくなるのは事実。ほぼ無風状態にあるだろう竜巻の中心ならそれが起きうるとサアヤも言ってくれて、そのため的手段もアバウトに決まる。

最後に周りに惚気だなんだとツッコまれそうなり取りをして前線まで戻ったテルヨシとサアヤは、戦いながらカミカゼ対策を4人にも伝えて、本当にそうだった時に混乱しないように予防。

これでまた1つ攻略の段階を経たということになるとはいえ、それに消費した必殺技ゲージがえげつなく、テルヨシ、サアヤ、クラリツ

サがほとんど空っぽという惨事。

アキラのアビリティでのリチャージは現実的ではないのでひたすら攻撃して溜めるしかなくて、3人の攻撃頻度が割り増しで多くなる。

そうなるといチキシマヒメもまた鬱陶しいと思ったのか、先ほどよりも早いタイミングでカミカゼを使ってきて、防ぐ手段はないテルヨシ達は再び空高く舞い上げられてしまう。

「オラオラオラオラー！」

そこはもう受ける前提だったから、慌てることなく全員の位置を確認したテルヨシは、竜巻の中で全力クロールで泳ぐという意味不明な移動方法で位置を調整して1人ずつ合流しては竜巻の中心への蹴りで送り出し、サアヤも回転率を上げるためにブレード・ファンで力技で押し出してくれる。

チドリが使われるまでには若干の猶予があったものの、悠長にやっける暇もなかったから急いで全員を中へと押し出していくと、竜巻の中心に出たアキラ達が予想通り力の弱まった風によって緩やかな落下でイチキシマヒメへと迫っていくのが見える。

その中で重量級のカイが特に早くイチキシマヒメまで到達して攻撃を再開してくれたおかげでチドリによる追撃はキャンセル。

最後になったテルヨシとサアヤも余裕を持って竜巻を抜けることができ、2人以外が地面に着地したところでカミカゼも維持をやめたのか力が分散して消滅。

サアヤと一緒に渾身のダイブキックをお見舞いしてから着地を決めてカミカゼとチドリのコンボを攻略したところで、太鼓の破壊をしていた2人からも「おっしやあー！」と気合いの声が上がったのが聞こえ、そちらに目を移せばなんと、6つあったはずの太鼓は一気に半分の3つにまで減っていた。

だいぶ均等に削っていたのはわかっていたから、破壊のタイミングも多少のムラはあってもそう違わないと予想はしていたが、まさか雪崩のように連鎖するとは思わなかった。

この調子なら太鼓の完全破壊もすぐだろうと、イチキシマヒメへの

攻撃にも俄然やる気が出てくるというもの。

イチキシマヒメの剣にも確実にダメージは蓄積していつてるので、こちらの破壊も十分視野に入ってきているが、ここで大ダメージ狙いの大技でも繰り出せば、たちまち即死級の《タケミカズチ》で崩壊させられるため、勢いだけで攻めてはいけない。

火力で押し寄せなユリとシズクとは裏腹に堅実な削りでイチキシマヒメを狙うテルヨシ達の対比は、外野から見れば少し面白かったりするかもしれないが、至って真面目な当人達はそんな視点は無視して着々とダメージを蓄積させていき……

「これで、終わりだあ!! 《バースト・ショット》 おお!!」

シズクの猛々しい雄叫びと共に放たれた必殺技によって、残り1つになつていた太鼓が強烈な一撃によつて破壊。

これでようやく落雷攻撃の脅威から解放されるという安堵はありつつも、太鼓の破壊と同時に対峙していたイチキシマヒメにも変化が起きて、やはり新たな挙動が見えるかという緊張が混在する。

太鼓を破壊されたイチキシマヒメがまずしてきたのは、肉薄していたテルヨシ達を強制的にノックバックさせる衝撃波を全方位に放つて距離を開かせ、何かの準備をする猶予を作り出すこと。

テルヨシ達としてはその準備が整うのを変身ヒーローの鉄則のようにつけてあげる義理はないので、ノックバック後もすぐに接近を試みようとした。

だがイチキシマヒメはノックバックさせたあとに剣に雷を纏わせてそれを頭上に掲げてみせ、直後には上空の雷雲から凄まじい雷がイチキシマヒメへと落ちてきて、巻き込まれては即死しては元も子もないのでテルヨシ達の接近はそこで中断させられてしまった。

自ら雷に撃たれたのは戦闘開始前の挙動と重なる部分であるため、何らかの強化がなされたと考えるのが妥当で、落雷による光が収まつて見えてきたイチキシマヒメの変化を目を凝らして観察する。

見た目には装甲が付与されたりなどの変化はない。

しかし全身にバチバチと帯電してるようなエフェクトが追加されて、その手の剣には常に風が纏われているようで、明らかに厄介な度

合いが増した印象。

『サンダー・バラージ』
『アラガミ』

近寄りがたい雰囲気すら漂わせるイチキシマヒメに接近すべきかどうか全員が迷ってしまった間に空いていた手を掲げてから技名を発声しながら前へと振り下ろしたイチキシマヒメの挙動のあと、スツとテルヨシ達の頭上にピンポイントで影が射す。

そしてそこから1秒とかからずに即死級ではないものの、明らかにスタン効果もありそうな小さな雷が落ちてくる。

推測が入ったのはテルヨシが危険を察知してすぐに回避に動いたおかげで雷を受けずに済んだからと、避けられずに受けてしまったアキラ、カイの2人がまだ死亡せずに生き残っていたから。

ただし1度でも当たるとスタンで動きが鈍くなり、次の行動に支障が出るようで、さらに追い打ちをかけるように落雷から2秒足らずでまたも頭上に影が射して落雷が襲いかかる。

次は少し視野を広げていたこともあってサアヤ達の頭上にも注意が向き、そこからわかつたのは自分達の頭上10mくらいの高さに小さな雷雲が出現し、それが雷を落としているということ。

雷を落としたあととはすぐに雷雲は消えてしまうのだが、そこで再びターゲティングが行われるのか、またパツとテルヨシ達の頭上にも出現して雷を落としてくる。

雷自体は影が射した瞬間に動けば回避が間に合う程度の緩いタイミングだが、その間隔は非常に短く、止め方もわからないとあって立ち止まることすら許されない状況に。

そして1度でも雷に撃たれれば怯みによって次の雷も当たり、その次もとなり、アキラとカイのように死亡することになる。

アキラで3発。あのカイでも6発目で死亡したところから、各々でどのくらいダメージになるかは予測がついたところで回避に少しだけ余裕が出てきたのは慣れだろうが、その慣れの間を突くようにイチキシマヒメがまた動き出す。

『レイジング・ストーム』
『アラマキ』

剣を倒して前にかざし、逆の手を刀身に触れさせて構えてから技名

発声に及んだイチキシマヒメに呼応するように剣が緑色に光り、周囲に拡散。

今度は何がと雷を回避しながら身構えていると、このテリトリー内の至るところから直径1m程度の小さな竜巻が発生。

ただ小さいからと侮ることすらできないほどの強烈な勢いで、それに巻き込まれば抜け出す事すら容易ではない。

と、まだ冷静に観察できていたテルヨシも、竜巻の発生に運悪く重なってしまったユリが捕まってそのまま雷に撃たれて死亡したのを見て、戦慄。

竜巻は雷の回避を誤れば簡単に巻き込まれそうなほどの密集率で展開されていて、そこにまだ5人が動き回っていると、味方の動きもしつかりと見て動かないと共倒れが起きる。

こうなると表面積は少ない方——要するに小さい方——が良いとテイル・ウィップが竜巻に巻き込まれて体まで引き込まれかねないから、安全性を取ってストレージに戻ってしまった。

サアヤはブレード・ファンを展開剣にして連動操作によって巻き込まれを阻止。

シズクもアビリティの強化を捨てて持ち回しの良いハンドガン《アネモイ》に換装済み。

クラリツサは元々が回避主体だけあって問題なさそうで、リクトは《ドライブ》のアビリティを使った機動力を封じられてもどかしそうに回避している。

その5人がアイコンタクトで自然とテリトリー内で散開してぶつかるのを防止しつつ、ようやくイチキシマヒメと対峙する準備を終えるが、そこまでで3人も失うことになろうとは……

これまでで一番荒々しいイチキシマヒメの攻撃は、1度でも当たれば雪崩のようにダメージを受けて死亡してしまう危険性を持つが、イチキシマヒメの半径2mほどの範囲は無風地帯らしく、接近さえすれば攻撃は十分に可能に思える。

「ただこれは……どうすればいいのか……」

ただしそこには1つの問題があって、繰り出される竜巻と雷の轟音

によってほとんど他の音が聞こえない状況で、衝突防止で離れた位置にいるサアヤ達と係が取れないのだ。

単発での攻撃ではイチキシマヒメに届くかもわからない以上、タイミングを合わせて攻撃するのがベスト。

唯一この状況で近づかずには攻撃できるシズクは竜巻によって射線の確保が難しいながらも、チャンスには確実に撃ち込んでいく、イチキシマヒメも剣で弾いて防御していた。

……と、その様子を見てふと気づく。

これだけの大規模攻撃を仕掛けられるイチキシマヒメが何故、シズクの攻撃を剣で防御するのか。

さらに言えばこの状況で別の技でも追加すればテルヨシ達はほとんど八方塞がりでも壊滅させられるのに、それをしない。

そして過去のイチキシマヒメの挙動の全てを思い出して気づいた。風と雷の強力な2属性を操って攻撃してくるイチキシマヒメだが、その強力さの代償なのかどちらの攻撃も『1つの技しか繰り出せない』のだ。

つまり今、イチキシマヒメはアラガミとアラマキを同時に使っているため、他の技が使えない。だからイチキシマヒメ本体はあの剣で直撃対応するしかない。

あくまで推測になるものの、確信に近い何かを持ったテルヨシが、接近さえしてしまえばどうにかなるかもしれないと、その事をどうにかサアヤ達にも伝えようとするが、やはり轟音で声は全く届かない。

——ならテルヨシがやることは1つ。それを行動で示すこと。

決断したテルヨシは雷と竜巻を華麗なステップで躲しながらイチキシマヒメへと最短ルートで接近していき、やはりさっきまで妨害してきた距離に詰めても何もしてこないことから技が使えないと確信して暴風地帯を抜けてイチキシマヒメへと全力の蹴りを放つ。

注意すべきは体に帯電しているイチキシマヒメ本体を攻撃すると感電させられる可能性があるため、狙いはあくまで手に持つ剣であること。

そこそまだ落ちてくる雷にだけ注意してイチキシマヒメの周囲を

翻弄するように動き回避から攻撃を繰り返す。

——伝わってくれ！

1人ではイチキシマヒメの剣に攻撃を届かせることも難しく悪戦苦闘を強いられるが、テルヨシの意図にサアヤ達が気づいてくれると信じて必死に食らいつく。

「スイッチで波状攻撃よテイル！」

「この狭い安置に留まろうとするな！ タイミングを合わせろ！」

「ルーレットさんの射線も塞いではなりませんわよ！」

その思いが届いたかどうか定かではない。

でも奮闘を見て声の届く距離にまで接近してきてくれたサアヤ達が怒濤の作戦決定で連係を作り出してきて、何か込み上げてくるものを感じながら俄然やる気になったテルヨシも言われた通りシズクの射線の確保をしつつサアヤ達と入れ替わり立ち替わりでイチキシマヒメへ全方向から波状攻撃を仕掛けていった。

そして——

「《ジエノサイド・カッター》！」

「《ジャイロ・ショット》！」

「バースト・ショットおお！」

イチキシマヒメの剣にわずかな亀裂が入った瞬間を見逃さなかったテルヨシの合図で、溜まっていた必殺技ゲージを使った3人の攻撃が炸裂。

その際に技後の硬直があるせいで3人が雷に撃たれてしまう結果となってしまうが、渾身の必殺技を受けたイチキシマヒメの剣もまた耐久の限界を迎えたか、その刀身に大きな亀裂を生み出して、軽快なサウンドエフェクトを響かせて砕け散ったのだった。

Acceleration Second 99

『ハッハッハッ！ 愉快、愉快！』

殺意の強い《イチキシマヒメ》の《知恵》の試練を試行錯誤してようやくクリアしたテルヨシ達。

イチキシマヒメの持つ剣が砕けたことで、あれだけ荒々しく巻き起こっていた竜巻と雷が止み、直前に必殺技の硬直で雷に打たれたサアヤ、シズク、リクトの3人も2発目を受ける前に事なきを得て死亡を免れた。

空も雷雲が晴れて本来の《工場》ステージの曇天に戻ると、剣を失ったイチキシマヒメが戦闘の意思を消して笑い出すから困惑。

『よいな小戦士。妾の攻撃で冷静さを失わずに戦い抜いたこと、誉めてつかわそう』

「……それはどうも」

『妾の試練は冷静さを失わせるための仕掛けが多く、挑んだ者達は皆、己の未熟さを呪って散っていったが、そなた達は見事である』

どうやらイチキシマヒメの試練はまだクリアした者がいなかったみたいな口ぶりから、その初めてのクリア者となったテルヨシ達をやたらと誉めてくる。

エネミーとしてその喜びはどのようなのだろうかと思わざるを得ないが、ずっとこの日を待ちわびてもいたのだろうイチキシマヒメを思えば理解できないこともない。

だがそうして楽しそうなイチキシマヒメに反して不機嫌そうな様子の者がいて、試練が終わったことでテリトリーの周囲に展開されていた風の壁も消えたから普通に移動してきた《タギツヒメ》がキリツと鋭い眼光でイチキシマヒメを睨む。

『見事である。ではありません。どうしてもっと小戦士達を苦しめないのでですか。あなたの《タケミカツチ》はチャージタイム以外の制限はなかったと記憶していますよ。この試練中だけで5発も撃ち損じています』

最初からテルヨシ達の悪戦苦闘を見学しに来ていたタギツヒメとしては今の試練には不満があったらしく、その理由の1つとしてあの即死攻撃、タケミカツチが何の制限もなく使えたという事実にはテルヨシ達が驚愕。

それと同時にそれなら何故5度も使えたというタケミカツチを使わなかったのかと疑問が出てくるところで笑いながらのイチキシマヒメが口を開く。

『小戦士達もタケミカツチへの警戒が強いことはわかっておったからな。使用頻度を上げればそれだけデータを与えることになる。簡単に諦める様子もなかった故、長期戦を想定しておったが、まさか出し惜しみて終わるとは思わなんだ。ハツハツ』

「……はあ。つくづくただのAIじゃないわね。この3姉妹は……」
「つまりこれ以上の回数を重ねれば何れはタケミカツチも容赦なく使っていたってことか。ここで終わって良かったぜ……」

「話だけ聞けば対人戦をしているようなものですね。もはやクエストと呼ぶべきものかも怪しいですわ」

笑ってはいっても言っていることはテルヨシ達にとってはさら恐ろしくて寒気がする。

エネミーが相手に合わせて長期戦を想定し適度に加減するなど、プログラムとしてバグが発生していると言われても不思議はないレベル。

それを平然とやってのける辺りが高位エネミーの証明なのかもしれないし、事によつては《タキリヒメ》もタギツヒメさえも同じようなことが出来てしなかつただけかもしれない。

ともかく、試練自体はクリアしたことで目的は達成したのは間違いないので、雑談もこれくらいにして報酬の方を貰いたいと切り出したテルヨシに、試練を突破されながらご満悦なイチキシマヒメは両手を合わせて放し、そこからアイテムカードを出現させてテルヨシへと渡して来る。

「《Spirit Sword Proto》。《スピリット・ソード》
かあ」

「直訳なら魂の剣ね。ニユアンスから言つて《布都御魂劍》フツノミタマノツルギかしら。強引な感じもするけど」

「おい、機嫌が良いならあと2枚寄越せ……むぐっ!？」

「あなたの口の悪さはなかなか治りませんわね!」

念願の3枚目のアイテムカードにはそんな名前が書かれていて、これまでの例からサアヤも少し調べていたのか当たりをつける推測を述べる。

さらにシズクが交渉すべきところで相手を怒らせかねない言葉で上からものを言うから、クラリツサがツツコミつつチヨークスリーパーホールドで言葉を強引に切る。

ある意味で安定したシズクの行動にも即対応できるようになってきた仲間には複雑な思いがありつつ、イチキシマヒメが消えてしまう前に言葉を選んで交渉に持ち込む。

「なあイチキシマヒメ。ここにいるタギツヒメとも交渉してるんだが、また試練をクリアする行程を省いて、あと2枚アイテムカードを貰うことはできないか?」

『ほう。交渉とな。タギツヒメはどのような交渉で納得したのだ?』

『妾はこの地へと赴くまでの護衛と、小戦士達がお前の試練に挑む様を見学することを条件に差し出す流れとなりました。ちなみにタキリヒメはこの小戦士達の冒険譚を長々と聞くことで由としたようですよ』

『ふむふむ。では妾もそれに倣って何か条件を提示してみるか』

タギツヒメと違ってかなりあつさり^{ツツ}と交渉に応じてくれそうな雰囲気を出してきたイチキシマヒメに、テルヨシ達も少し明るい気配を出す。

しかし悩む仕草を見せて沈黙したイチキシマヒメが提示してきた条件は、あまりにも理不尽なものだった。

『とはいえ妾にはこの地に縛る制約以外に不満もあまりないから……どうじゃ、いつその忌々しい制約を解除してくれたら、アイテムカードをやるうではないか』

「……………えっ?」

「それって……」

「もしかしなくても……」

「無理じゃね？」

「それはどうやんだよ」

イチキシマヒメが何を言ってるのかすぐに理解できないほどの衝撃で、1人で言える台詞を分割して言うという珍技を披露。

そして言ってからその方法すらわからないぶっ飛んだ条件にテルヨシ、サアヤ、クラリツサ、リクトが絶叫。

これならタギツヒメとタキリビメの条件の方が何万倍も楽だと思わざるを得ない条件には動揺するしかない一同を見て愉快そうにしたのはタギツヒメで、人の不幸は蜜の味とでも言いかねない邪悪な笑いには怒りが湧いてくる。

「ハハハ……制約の解除？ ああ、つまりこの神社をぶっ壊せばいいんだ。なーんだ簡単じゃない。アハハ」

「うわー！ ガツちゃんが壊れた！ そんなことしても《変遷》で元に戻るからね！」

「何を言ってますの？ やるなら徹底的にですわよ。オホホホ」

「なんだぶっ壊せばいいのか。おーしやってやらあ！」

「マズい！ 女どもが壊れた！ 1人いつも通りだがヤバイぞ！」

システムに干渉するような案件を解決など出来ようはずもないために古参ゆえなのか真っ先にサアヤが壊れて、全く無意味な神社の破壊に乗り出すのをボケ担当のテルヨシが止める逆転現象が発生。

さらにクラリツサとシズクまで便乗してしまつてカオスな状況になり、ますますタギツヒメが愉快そうに笑うのが拍車をかけていく。

收拾がつかなくなってきた現場の有り様に頭が痛くなってきたテルヨシだったが、自分以上に取り乱した人間を見ると逆に落ち着くあれな心理で頭が少しクリアな状態になると、手に持っていたアイテムカードに目が落ちて何かが引つ掛かる。

「……………あっ！」

その何かの正体に気づいて出てきた声にサアヤ達も反応して暴走気味のその手を止めてテルヨシを見てくるので、まさかの抑止力に自

分で驚きつつもサアヤ達を集めて気づいたことを話す。

それでもあくまで推測の域の話だからと前置きして、焦らすなどツッコまれてから語った話に、4人ともが沈黙して各々で考察を始めた。

やがて4人ともが同じような結論に至って、それならばと全員でイチキシマヒメへと向き直る。

「なあイチキシマヒメ。その条件を呑めるかはわからないが、とりあえずオレ達を信じてアイテムカードを渡すことはできないか？返すつてのも不可能だけど、もしかしたら制約つてやつを解除できるかもしれない」

『ふむ。アイテムカードを先に欲するということは、妾達からの褒美を使用したいということか』

「そういうことよ。タギツヒメも条件は満たしたんだから渡してもらうからね。あと仲間の蘇生も待たなきゃだし、あと3000秒くらいは待つてちょうだい」

『少々物足りないところはありましたが、約束は約束ですからね。仕方ありません』

『ではそなた達に1つ、賭けてみるとするかの』

代表してテルヨシが進言してアイテムカードの提供をお願いしてみると、こちらの意図を汲んだイチキシマヒメは説明の必要もなしにこれからやろうとしていることを理解したようだった。

イチキシマヒメがわかったならタギツヒメもだろうと、サアヤが条件は満たしたことを強く言うとかかなり渋々な様子ではあるものの、タギツヒメもその手を合わせて放し、アイテムカード2枚を出現させ、イチキシマヒメもそれに倣ってテルヨシ達を信じてアイテムカードを託してくれる。

その後、剣を破壊されてしまったイチキシマヒメは大幅な弱体化をしたとあって1度神社に引っ込んでしまい、呼び出してまた試練が始まったら面倒なのでみんなで鳥居の外まで移動して死亡した3人の蘇生を待つ。

45分くらいで無事に全員が蘇生して集まると、死亡中にも話は聞

こえていたらしいカイやユリもテルヨシ達の仮説は有力だと後押ししてくれて、預かっていたアイテムカードの2枚をアキラへと渡して、テルヨシ、サアヤとの3人がアイテムカードを3種類揃えた。

「それじゃあまずは第1志望からいこうじゃないか。せーのでいくぞ。せーのっ！ オレこれー！」

「私これ」

「ぼ、僕はこれです」

名前の違う3種類のアイテムカードは、以前のタキリビメの言葉から推測するに、ゲームで言う《アイテム合成》で1つの強化外装を作り出せると考えられた。

実際にアイテムカードを3種類揃えてから、アイテムカードに追加項目がプッシュアップしてきて、サアヤの翻訳ではまず『ベースにしますか?』というメッセージが出てきたらしい。

その先に進むとおそらく他の2枚が合成の素材として使われてアイテムの合成が開始され、強化外装が出来るのは明白で、同じ完成品は出来ないだろうという推測も以前にしていたから、被らないように合成前に誰がどれを選ぶか選択。

一応、合成開始の手前にまで進めると完成品のステータスを簡易ではあるが確認が出来て、その上で3人が最初に選んだのは、奇跡的にバラバラ。

テルヨシが《サーペント・スレイヤー》。サアヤが《スピリット・ソード》。そしてアキラが《フェニックス・ブレード》となる。

被らなかつたので予想外のスムーズさでいよいよ合成の時が訪れると、当人であるテルヨシ達のみならず、見守るシズク達まであれだけいらぬと言っておきながらガツツリと見てきて苦笑してしまう。

そうしてみんなに見られながらベースにするアイテムカードをそれぞれストレージから取り出し、合成するかの確認のメッセージにOKボタンを押す。

するとアイテムカードは強い光を放って宙に浮くと、ストレージから勝手に出てきた2枚のアイテムカードを取り込んで、その形状をアイテムカードから剣へと体積などを無視して変化させる。

光が収まると3人の視界には「強化外装を入手しました」というシテムメツセージが表示され、正式に所有者として登録された。

テルヨシのサーペント・スレイヤーは2刀1対の双剣で、両刃の直刃ながら、刀身が蛇の鱗が幾重にも重なったようにして形成されている。

どちらかというところノギリのような印象が強いが、刃の部分だけはちゃんと普通の剣をしているから、斬るという面では他の剣と変わらない。

サアヤのスピリット・ソードは日本刀型で鞘なしだが、サイズとしては脇差しくらいでとてもじゃないがメインウエポンを見据えたものではない。

見た目にもかなり普通の刀で、あれだけの苦勞に見合った強化外装と言われなければわからないレベル。

対してアキラのフェニックス・ブレードはこの3本の中で一番剣らしい剣をしていて、片刃の長刀。

刀身は幅が15cmほどもあり、見た目にも重そうながら、炎の紋様のような刃紋もカッコ良いが、刀身全体が深紅と純白の2色で構成されている。

ただこれは強化外装が所有者のデュエルアバターカラーを反映させる影響で元々の深紅にアキラの白が追加されたゆえの結果だ。テルヨシなら青色が混ざって微妙な色合いになったかもしれない。

「それで、その強化外装にはどのような能力がありますの？」

「サーペント・スレイヤーには2つあるよ。1つは《サーペント》っていう、こんなやつ」

ひとしきり観察を終えてテルヨシ達がインスタメニューからそれぞれの強化外装の能力を確認し終わったタイミングで、クラリツサが少しワクワクしながら尋ねると、まずはテルヨシから披露。

サーペントは説明が難しいので実際にやってみせることにして右手に持った方を振るい、その勢いで刀身が鱗が重なったような部分がバラバラと離れて伸び、刀身に隠れていたエネルギーのワイヤーで繋がった1本の鞭のような剣になる。

俗に言う蛇腹剣という分類のもので、テルヨシの弱点の1つである射程の短さを幾分か克服できるもの。

「んで、もう1つが《ダブルセイバー》。こうやる」

それからもう1つの変形型としてそれぞれの柄頭をくっつけて両端に刀身がくるようにした形で、これにはロマンに生きる男衆が「おおっ」とちよつと羨ましそうな声を上げた。

「あとは《エクストラスキル》があつて、必殺技ゲージを消費してこうすると……」

最後にダブルセイバーのまま余っていた必殺技ゲージを消費して頭上でグルグルと回してみせると、さっきのサーペントが発動してビュンツ！ と刀身が荒ぶり、長射程の範囲攻撃技へと変化。

思いのほか危ない感じで展開されたからテルヨシもビツクリしてすぐに戻したものの、いきなり攻撃されたに等しいサアヤ達はしつかりとしゃがんで回避してから注意喚起しなかったテルヨシをタコ殴りにしたのだった。

「だが単に射程をアップさせたいだけの選択なら、ずいぶん決め手に欠けるような気がするが、その辺の理由はどうなんだ？」

「ぐえ……そ、それはまあ射程目的じゃないから」

とりあえず死ぬ1歩手前くらいまでボコボコにしてから、テルヨシの選択理由に疑問が生じたカイに対して、ヨロヨロになりながら射程補強が目的ではないと答えたテルヨシに、ほぼ全員がえっ？ という雰囲気を出す。

普通ならそう思うだろうなと納得しつつ復活したテルヨシは、どういうことかとちゃんと説明する。

「みんなオレに《スイッチ・アーマメント》ってアビリティがあるのは知ってるよね。この《テイル・ウィップ》も元々は鞭としての強化外装を別の用途にして装備してるわけで」

「おいおい、まさかその剣も装備できるってことか？」

「そゆこと。アビリティの使用確認で見たら、こういう感じに装備できるとい」

普段から普通に装備しているから忘れられがちだが、テイル・

ウィップがそういうアビリティによって装備されてることを再認識した一同は、それでサーペント・スレイヤーを始めから装備する目的で獲得したとわかりテルヨシの挙動を凝視。

テルヨシもスイッチ・アーマメントが表示した装備の仕方を実践して、サーペント・スレイヤーを逆手に持つと、両足の側面の装甲が腰辺りからガバツと開いて、サーペント・スレイヤーを左右で1本ずつ格納するようなスペースに躊躇なく差し入れて、サーペント・スレイヤーを格納した装甲は静かに元に戻る。

終わってみれば見た目には全く変化はないが、ふふんっ、と自慢気なテルヨシは新たに表示されたモーシオン確認画面で効果を理解して、今度はみんなに迷惑がかからないようにオブジェクトを対象にして試運転。

「《スレイヤー》」

ボイスコマンドで切り替わるらしいそれを発動すると、テルヨシの両足の前後からジャギンツッ!

収納したサーペント・スレイヤーの刃が飛び出してきた、膝から爪先まで切れ味鋭い剣と化す。

これは蛇腹剣という特性が足の関節にも順応したからこそその性能であることは間違いない。

その足で工場ステージのオブジェクトを振り抜けば、圧倒的な切れ味でオブジェクトを両断し、今までの打撃力が全て切断力へと変換された蹴りに一同も驚き、テルヨシ自身もビックリ。

「こんな感じですよ。次はイーターどうぞ」

少し長くなつたものの、見せたいものは見せたテルヨシは満足して次の性能チェックをアキラへと譲り、バトンを受け取ったアキラは珍しくテンション高めに口を開いた。

「僕のフェニックス・ブレードはテイルさんのサーペント・スレイヤーほど多機能じゃないですけど、効果は強いですよ。まず必殺技ゲージを常時消費して刀身に炎を纏わせることができます!」

何でそんなにテンションが高いのかと苦笑いする一同にも臆さずに語るアキラは、手に持ったフェニックス・ブレードの刀身にゴウツ

！ と少し離れていても伝わるほどの熱気の猛々しい炎を纏わせて、その状態で試し斬りすると、工場ステージのオブジェクトはその切断面を溶かしながらバターののように切り裂かれる。

シンプルながらに明らかに強いフェニックス・ブレードにテンションが高くなるのは仕方ないかと納得しつつ、まだエクストラスキルがあるらしいアキラのデモンストレーションに付き合う。

「そしてこれがエクストラスキルです！」

炎を纏わせたまま剣を頭上へと掲げたアキラに呼応するように、炎は火柱となつて剣先から伸びると、10mくらいの長さになった炎の剣を豪快に振り下ろしてオブジェクトを業火の炎に包み込み燃やし尽くす。

範囲も射程も申し分ない大威力の炎熱系の攻撃はアキラの弱点を見事に補強する結果となる。

しかしながら炎の剣を見た目が雪だるまなアキラが操る姿は相当にシユールな絵面で《親》のサアヤが真っ先に笑いを堪える姿を見せたのは大変に失礼だった。

最後にサアヤのスピリット・ソードの説明に移り、ある意味で一番特徴のないスピリット・ソードへの関心はみんな強かったりした。

「この剣は派手な攻撃技はないわよ。でもエクストラスキルが3つある感じ」

「3つもあるとはの。して、その効果は？」

「切りつけた対象に60秒間《状態異常・デバフ無効化》付与に、ゲージ消費量に応じて回数が段階的に増える《ダメージ完全無効化》付与。それから部位欠損ダメージを修復する《再生》ね。完全にサポートに振り切った強化外装だけど……」

テルヨシやアキラと違って物凄く落ち着いた口調で坦々と説明するサアヤは、派手好きな性格からは打って変わって真逆のサポート系でテンションの上げようがないみたいな調子。

しかし説明を聞いたただけなら3つの強化外装の中でも普通に凄い性能をしていることから、まだ何か言おうとしていたサアヤの言葉を切って全員が総ツツコミ。

『それめちやくちや強くない?』
「あー、うん。強いと言えば強いんだけど……そんな寄らないで。怖
いから」

Acceleration Second 100

宗像3女神による3つの試練を乗り越えて、ようやく3つの強化外装を完成させたテルヨシ達。

その性能にひとしきりのリアクションをして、サポート特化の《スピリット・ソード》を選んだサアヤが、ストレージに戻してから落ちて着いた一同に選択の理由を明かす。

「ほら、程度に差はあってもこのレギオンの面子ってみんな頭が脳筋でしょ」

「否定できないのが辛い……」

「仕方ねえだろ。どいつもこいつも単独で前線で戦えるから《五芒星》とかそういう呼ばれ方されたりしてんだしな」

「そう。私も人のこと言えない脳筋だけど、これまでのレギオンを見てきて思ったのよね。やっぱり1歩。ううん。せめて半歩は引いてレギオンを見れるようにならないとダメだなって。私が持ち得なかったサポート能力があれば、その役割も自覚できるかなあって思ったのよ」

かなり自己中な目的で《サーペント・スレイヤー》を選んだテルヨシからすると、サアヤのレギオンのためにと考えた選択はかなり大人な選択に見えた。

ただしサアヤがそうした選択を出来たのは、テルヨシのようにまっすぐに強くなるうとする存在がいるからだと付け足しながら、外的な強化手段——レベルアップボーナスなどと違って取捨選択ではないという意味だ——だから得しかないと笑いながら語る。

それを考えると自分にも使えるスピリット・ソードの万能感が物凄く羨ましくなってきたテルヨシが交換を持ち出したり、いらないう言っていたクラリツサやカイが交渉を持ちかけたりとちよつとした騒ぎが起こるが、全く取り合わないサアヤは全員を一蹴するのだった。

「さて、強化外装は入手できたが、問題は《イチキシマヒメ》との約束

「じゃな」

「ですわね。果たしてわたくし達の仮説は正しいものなのか」

「外したらイチキシマヒメにボコられるんじゃないの？」

「し、試練なしで暴れられたら勝ち目がないんじゃない……」

「そうなたら全力で逃げればいい。仮説が外れていたらテリトリーからは出られないだろうしな」

そして強化外装の話が終われば後回しにした問題が浮上するのは当然で、さつきまでの和やかな雰囲気とは打って変わってピリツとした緊張感を持ったテルヨシ達は、アイテムカードの前借りを条件にしたイチキシマヒメとの約束を果たそうとする。

とはいえ強化外装を完成させた段階でテルヨシ達の仮説はすでに実行済みで、あとは再び鳥居を潜ってイチキシマヒメを出現してみればわかること。

なのだが、その1歩を誰が踏み出すかで謎の牽制が発生して無言の睨み合いが勃発。

検証だけなら1人が行けばそれで済むから、わざわざ全員で仲良く鳥居を潜る必要はない。

なのでここは公平にジャンケンでいこうとアイコンタクトで以心伝心した一同が輪を作って利き手に力を込める。

『なんですか。そなた達は自分達で導き出した結論に自信がないのですね。小戦士は所詮、小戦士ということですか』

その様子を見ていた《タギツヒメ》が呆れたようにテルヨシ達を挑発。

口は悪いが自信があって交渉したなら最後まで貫き通せと暗に言うタギツヒメの言い分は確かにその通りなので、ジャンケンしようとしていたテルヨシ達も一斉にその手を引っ込めて牽制を中断。

こう言われてしまえば1人を行かせるというカツコ悪いことも出来なくなつて、全員で鳥居を潜ることにして、いざ出陣！ といった意気込みで鳥居を潜る。

するとすぐに本殿前にイチキシマヒメが出現して、1度引っ込んだことで腰の剣も復活し万全の状態のイチキシマヒメがテルヨシ達を

まっすぐに見据えてくる。

が、試練の時とは明らかに違うのは、出現の際には立ち込めた雷雲がそのあとすぐに晴れてなくなり、イチキシマヒメもイベント会話などを挟むことなく、交戦の意思を見せずに本殿から降りてテルヨシ達に近寄ってきた。

『ふむ。これは確かに面白い結果じゃな。妾に課せられた試練の強制行動がなくなっておる』

『ほう。ではイチキシマヒメ。そのテリトリーから自らの意思で出ることができますか？』

それだけでもうテルヨシ達の仮説は正しかったことが証明されたが、少し嬉しそうな雰囲気のイチキシマヒメに鳥居の外からタギツヒメが更なる確認を要求すると、イチキシマヒメも自ら鳥居を潜ってテリトリーの外へと足を踏み出し、成功する。

それにテルヨシ達もホツと息を吐いて近くの人とハイタッチで喜びを分かち合う。

テルヨシ達の仮説は、3つの試練をクリアした先にある3つの強化外装を全て作成し、その作成の上限が各1つずつだという前提があった。

これだけの強化外装を量産できてはパワーバランスが悪くなるだろうとの以前の考察から至った推測は実際に正しく、3つの強化外装が作成されたことで、現状の所有者が存在している状態ができ、強化外装の作成が不可能になったわけだ。

それならば3女神の試練もその役割を休止。或いは撤廃される可能性は十分にあつて、一時的なものである可能性——所有者が全損して強化外装が失われるなど——はまだあるが、《七星外装》が所有者の全損でも消滅しないことから、これも同じようなものであると考えられた。

『ホッホッ。愉快なことこの上ないな。では辺境の地における《タキリビメ》にも報告せねばな』

『タキリビメなら、自由と知れば意気揚々と小戦士達の多くいる地に訪れるでしょうね』

「えっ……それって割と困るんじゃない？」

「うっわ。下手な徘徊系のエネミーより質が悪いわよ……」

「テリトリーから解放された《神獣級》エネミーは《メタトロン》で懲りておるといふのに……」

これでイチキシマヒメとの約束は果たせたことに間違いはなかったものの、イチキシマヒメがそうならタキリビメとタギツヒメも同じということは言うまでもなく、楽しそうに《ハイエスト・レベル》に移動してタキリビメに報告しに行ったイチキシマヒメとタギツヒメの言葉に戦慄。

冷静に考えれば試練という束縛があった故にその力のある意味で制限されていた節がある3女神だが、これで晴れてその制限がなくなりどこに行くも自由で力を振るうのも自由ときた。

そんな存在が東京を徘徊しているはバーストリンカーなんて遭遇した時点で詰み。

高度なAIがあるからこそ《無限EK》なんてことも気分次第で出てしまうことになるのでは？

それを思うとテルヨシ達が行ったことは猛獣を檻から出すような行為だったのではなからうか。

でも冷静に考えたら強化外装を3つ作ったらこうなっていたなら、それはテルヨシ達の責任ではないだろうとも思えるので、せめて言うことだけは言っておこうとハイエスト・レベルから戻ってきた2人に話しかける。

「あのう、自由の身になったのはこちら側としても非常に喜ばしいのですが、出来れば我々のような他の小戦士を見かけても、自分から突っかかりに行ったりはしないで欲しいなあ、なーんて思ってるんですけど……」

『それは約束しかねますね、小戦士。妾達も長き時を自らの住処で過ごしてきましたから、少しくらいは羽目というものを外したくなるのは道理でしょう』

『少なくともこれより100年あまりは自由にこの世界を見て回ろうとタキリビメとも話してきたところじゃ。その邪魔をするような小

戦士がいた場合は、是非もないぞ』

「じゃあこつちから突つかからなきやいいってことで1つ手を打っておいて、ついでに死亡させたら蘇生を待ったりとかもやめて欲しいんだけど」

『注文の多い小戦士ですね。お前達小戦士の密集するエリアは500時間とかけずに見て回ります。その間の事くらい大目に見なさい』

神経を逆撫でするといけないのでテルヨシが下から要求して、今後の3女神の行動をそれとなく把握。

サアヤも無限E.Kの可能性だけは潰そうと、お願いという形で手を打ち、多少の苛立ちは覚えさせつつも危機的状況は回避できそうな段階に落ち着かせた。

ということとで本日のレギオンとしての目標はこれで全て達成したことになり、あとは近くのポータルを潜れば終了ということとで、一同は一気に脱力。

現実世界に戻ったらカラオケだー、と少し盛り上がっているとところにタギツヒメとイチキシマヒメが興味津々に絡んでいたりを横目で笑いつつ、テルヨシはここに来る前に引っ掛かっていたことが気がかりでいた。

それを察して話を一緒にしていたサアヤが近寄って隣に座り、どうするのかを尋ねてくる。

「切断セーフティはまだ内部時間で9日はあるし、行きたいなら行ってみてもいいと思うけど?」

「うーん。完全に興味本意だし、みんなを巻き込んでまで行く必要はないのかなあって。どうせこつちで1日くらい離脱が遅れても、現実なら1分半くらいだし、それなら1人で行こうかなって」

「まあその考えはわからなくはないけど、ここまできて今さらみんな仲良く離脱しようって雰囲気をぶち壊す方が私はどうかと思うわ」

この神社に来る前にタギツヒメが多摩川の横断中に感じた異変。

東京湾アクアラインの上で起きている何事かが気になるのはサアヤも同じなようで、行くか行かないかというよりも、全員で行く必要性についてを悩んでいたテルヨシに意見。

確かに今の解散気味ではあるがまとまった空気を壊してまで「オレちよつと野暮用があるから残る」とか言うのは勇気のいる行為だし、現実世界に戻ってからのカラオケにも何かしらの影響が出ないとも言切れない。

それならいつそみんなで行ってしまった方がいいのかもなど決断して立ち上がると、カラオケ話に花を咲かせていた一同に話しかける。

「みんな盛り上がったるところ悪いんだけど、まだ元気があるならこれからちよつと東京湾アクアラインまで行ってみない？　なんかタギツヒメが言うにはそこにエネミーが集中してるみたいなんだよね。今もそうかな、タギツヒメ」

『ふむ……依然として集中しているようですね。確認してから未だにこの状況が続いているのは、少々意図的な動きのように思えます』
「その意図的なものつてのがオレは気になるから、オレとしては行つて確かめたいんだけど、どうかな？」

話の腰を折る提案だったから受け入れられないかもなああと内心では思いつつも、乗ってきてくれたら嬉しいと期待も込めて返答を待ってみる。

最悪、エネミーの集団との戦闘になるかもしれないだけにみんなが発言には慎重になるが、いち早く思考を終えたユリが口を開く。

「テイルが気になっておるのは、そのエネミーの集中している理由かの？　それとも意図的なものの正体かの？」

「……どっちもつてのが正直なところだけど、割合では前者に寄ってる。後者はもしかしたらつて可能性はあるからね」

「なるほどのう。儂もテイルと同じく可能性に心当たりがある。確認だけでもしておいた方がよいかもしれんな」

「私も2人に賛成。事によっては《ISSキット》みたいな問題が起きるかもしれないしね」

ユリも話だけである程度はテルヨシの意図を理解したようで、質問のあとには賛同してくれて、サアヤも事の重要さをそれとなく匂わせて味方に。

そしてISSキットと聞いて反応したのはシズクとリクトで、ISSキットと無関係ではなかった2人も無視はできないと賛同してくれた。

残るはアキラ、クラリツサ、カイの3人になって多数決という点で言えば可決にはなるが、やはりここは満場一致での可決が望ましいと返答を待つと、

「どのような危険があるかはわたくしには推し測れませんが、加速世界の混乱と無関係ではないというのであれば、見過ごせませんわね」「ぼ、僕もこの前のISSキットは良くないものだったってわかりました。そんなものがまた出てくるかもなら、どうにかしたいです」

「あくまで可能性の話であると考えるが、テイル達がそこまで危惧するのならそれなりの根拠もあるのだろう。確認してからどうするかを検討しても遅くはないか」

「よし。じゃあ満場一致で行くことで、みんな、もう少しだけよろしくな」

様々な部分も見せてはいても、加速世界の危機の可能性を見過ごすほど薄情な面子ではなかったと言える返答にテルヨシは思わず笑顔になる。

それは声色から伝わったのかみんなからやれやれといった雰囲気醸し出されて、それから気持ちも1つに。

ただし話がまとまったところで「そうと決まれば」とかなんとか言いながらいきなりテルヨシをドガンッ！

強烈な一撃で攻撃したサアヤに訳がわからないといった混乱を与えられたまま死亡。

「あとは私とシンデレラとルー子とスピンね。ちゃんとリフレツシユしてから行きましょ」

「そういうことはちゃんとおっしゃってからやって差し上げればよろしいのでは……」

「口より手が先に出る女って怖えな……」

「さっさと死ぬなら死のうぜ。1時間以上もこのエネミー達が待つのかよ」

死亡してからイチキシマヒメ戦で消耗していた分をリフレッシュさせる目的だと話すサアヤの順序の狂った感じにこれから死ぬ面々がやんわりとツツコミ、勝手に行つてしまいそうなタギツヒメとイチキシマヒメと足並みは揃えたい気持ちはあったため、迅速に死亡して蘇生待機の1時間を過ごしていった。

「それで、お前達の推測している可能性とやらは何なんだ？」

蘇生後、すぐに出発したテルヨシ達は、交代でアキラに必殺技ゲージを満タンにしてもらいながら、シズクのアビリティを育てようとエネミー狩りもしようとする。

しかし同行者にはタギツヒメとイチキシマヒメもいるので、同族殺しを見せつける行為はなんだか気が引けて遠慮することに。

そうなる手も口も耳も空いてしまうので、歩きながらカイが先ほどの話の疑問点をテルヨシ達に尋ね、可能性についてわからない一同も耳を傾ける。

「先日にミッドタウン・タワーに現れたメタトロンのことはみんな知ってるだろ？ あれが何者かによつてタイムされて配置されてたつてのもわかるよな」

「神獣級エネミー。それもダンジョンのボスエネミーをタイムなど信じられません、それでもないとおのようなことは起きませんものね」

「そういう受け入れ方は大事よ。それで私達はそのメタトロンをタイムしていたヤツ。ううん、ヤツらと交戦してるのよ」

「そしてそやつらは件のISSキットをばら蒔いた者と同じだったというわけじゃ」

それを話す上でまずは公にはなっていない加速研究会についてを話さなければならぬだろうと、順を追って話をする。

理解力も考察する力も十分にあるクラリッサ達なら、本題を切り出すよりも前に可能性については考え至れるだろうと思つていたら案の定、そこまでの話である程度は推測ができたみたいだった。

「なるほど。その組織か？ が上位のエネミーをタイムするだけの力を有していることがわかつていて、今回のエネミーの密集が意図的だ

とすれば、その組織がタイムして配置したエネミーの可能性があると
いうことか」

「そゆこと。あくまで可能性の話で、オレとしてはそうでない方があ
りがたいわけだけど」

「そうだったなら、またあいつらが何か企んでるってことに違いない
わ。潰せるものなら今のうちに潰した方が良いに決まってる」

「チツ。裏でコソコソと陰湿なヤツらだな。組織ごとぶつ潰してや
る」

「気持ちはわかるが、一人で対抗するにも敵の力は強大じゃ。王達
も動いておるし、決戦の日も近かろうて」

加速研究会についてを詳しく話すと心意についてや《オシラトリ・
ユニヴァース》が隠れ蓑であることなどの情報もいくらか話さなけれ
ばならないこともあって、これ以上の詮索はされないように注意して
話すテルヨシ達は、この問題に関してはレギオンだけでは手に負えな
いと言っておく。

王達も動いているとわかればクラリツサ達も事の大きさは理解で
きたようで、色々と事情に詳しそうなテルヨシ達への言及は避けてく
れる。

『それでその小戦士達は妾達ビーイングを操ってどのような行為に及
んでいるのですか？』

「目的に関してはオレ達にもハッキリとはわからないが、タイムされ
たエネミーは主にバーストリンカーが近づけないように拠点の防衛
に回されてることが多かった。今回もそこに何か重要なものがある
可能性は十分にある」

『どのみち、行けばわかることであろうな。待ち受けるものが妾達
ビーイングをも脅かす何かであれば、その時は力を貸してやろう』

「それでタイムされたビーイングを倒すことになってもいいのかしら
？」

『メタトロンからその者達の力の根源については聞いています。ビー
イングを縛る頸木を破壊すれば、倒すまでもなく解放することが出来
るのでしよう。あとは中級以下のビーイングであれば妾達で非功性

化させることが可能です』

人間同士の話し合いには割り込まずにタイミングを計っていたっぽいタギツヒメとイチキシマヒメは、頃合いと見て自分達の気になる部分について尋ねてくるが、テルヨシ達も加速研究会の目的までは知らないので曖昧な回答となる。

ただしエネミーは目的のための道具程度にしか思っていない空気は伝わったようで、表情こそ穏やかに見える2体も憤りは感じていることは言葉からもわかる。

状況によつては味方してくれるとも言ってくれたからには、それを最大限に活用していこうとアイコンタクトしたテルヨシ達は、のんびりピクニック気分の移動から少し気持ちを乗せてペースアップしていった。

東京湾アクアラインは神奈川県川崎市から千葉県木更津市とを結ぶ海底トンネル。

その途中に海ほたるP パークینگ・エリア Aという人工島の上に作られた場所があり、タギツヒメの感知ではそこにエネミーが密集しているらしい。

目的地は明確なため、アクアラインのトンネルの入り口からはほとんど躊躇なく進入して、光源は一応あるトンネル内をズカズカと進んでいく。

途中にエネミーとの遭遇戦も危惧していたが、長い直線の遙か先までエネミーの影も形もなくすんなりと海ほたるPAへと出るトンネルの出口まで到達。

ここからは要警戒ということでもテルヨシだけが先行して偵察へと出て、物陰を移動しながらすぐ上の高い位置から全体を見渡す。

全長約600m。幅150mほどの大きさの海ほたるPAはちよつとしたショッピングモールくらいの施設が詰まっているが、メインとなる道路が中心を走っているため見晴らしは良い。

その視界から見えたのは、木更津市に近い方の道路の上にいる姿形の違う10体のエネミー。

遠目から見ても10mを越える体躯と威圧感から巨獣級以上であることは確実。

エネミー達には予想通り、頭の部分に銀色の冠のようなものが取り付けられていて、中でも強力そうな1体の背には憎らしい人物《ブラック・バイス》が股がっていた。

さらにそこから少し離れた位置には《アルゴン・アレイ》の姿もあり、建物オブジェクトの屋上に腰を下ろして道路の方を見ている。

そしてそのアルゴンのそばには、不自然なほど発光する空間が生まれ出されていて、デュエルアバター1体分ほどのその空間には朧気ながらも人の気配がする。

そちらも気になるところだが、何よりも注目すべきは、あのエネミー達の取り囲んでいる中心には、ズタボロにされながら立つ《シバ・カタストロフ》がいたのだった。

「どういう状況だこれ……」

宗像3女神の試練を乗り越えて、無事に3種類の強化外装を入手したテルヨシ達。

これで現実世界に戻ってカラオケという雰囲気の中、テルヨシやサアヤが気になっていた東京湾アクアラインに密集するエネミーを調べに行きたいと言うと、その理由を聞いた一同はもうひと仕事といった感じで同行を了承してくれる。

《タギツヒメ》と《イチキシマヒメ》も引き連れて何の障害もなく東京湾アクアラインの海上にある人工島。海ほたるPAまで辿り着き、まずはとテルヨシが偵察。

その視界に入り込んできたのは、10体のエネミーに囲まれる《シーバ・カタストロフ》に、エネミーを操る《ブラック・バイス》と見物人と思われる《アルゴン・アレイ》だった。

もう1つ、謎の発光空間もあるが分析するのに必要な情報が不足しているため、とりあえず保留して飲み込めない状況を把握しにかか

る。
会話はさすがに聞こえない距離で難易度は高くなるものの、雰囲気は明らかにカタフが加速研究会と対峙している。

《ISSキット》の一件以来、その安否が心配されていたカタフがとりあえず無事だったことはテルヨシとしても安心することだが、状況は呑気なものではなかった。

何かを話しているっぽい雰囲気があるうちは動きがなかったカタフ達だったが、その会話が終わったかと思われた瞬間にバイスの命令を受けたエネミーが一斉にカタフを攻撃。

この海ほたるPA全体が軽く揺れるほどの総攻撃を避けられるわけもなかったカタフは、今ので即死。

土煙が晴れた場所には死亡マーカ―が浮かんでいた。

まさかこんなことを繰り返していたのか？

タイムされたエネミーによる《無限EK》はある意味で最も残酷な手段と言え、そのやり方を平然と実行する加速研究会には反吐が出る。

だが同時にあの加速研究会がこんな『地味な作業』を延々とやっているのかと疑問も浮かぶ。

単にカタフを全損させる目的なら、あの組織はもつと効率の良いやり方があるのではないのかと考えてしまう。

それだけの悪い意味での信頼と実績があるだけに今の状況を正確に理解するに至れなかつたが、不意にカタフの死亡マーカールの周囲に白い光がキラキラとまばゆき、マーカールを包み込む。

すると死亡マーカールは光が収まるのと同時に消滅して、カタフが蘇生待機時間を無視して蘇生。

それに驚く様子もないカタフは、すでにこの行為に慣れているのか、或いは……

「強制蘇生の必殺技？　だとするとあそこにいるのか」

元から知っているかの2択と考えたテルヨシは、今の現象が分類として《回復》に当たると見て、未だに加速世界で2人しか現れていないという回復師ヒーラーが頭に浮かぶ。

3人目と言われているチユリは厳密には回復アビリティではないし、強制蘇生もできないのももちろん違うし、残る2人のうち1人は悲劇のヒロインのごとく自分を巡る争いに耐えられず自らアンインストールしたと黒雪姫などからも聞いていた。

そして残る1人は《白の王》である《ホワイト・コスモス》。

《オシラトリ・ユニヴァース》のレギオンマスターにして加速研究会の会長である黒幕が、今あそこにいるのだ。

だとすればアルゴンの隣に現れている発光空間の中。いるとするならそこしかない。

まだカタフをどうしたいのかはハッキリとしないが、何かの目的が遂行中と見て偵察を切り上げてサアヤ達のいるところへ戻り、見てきたものをそのまま伝える。

「コスモスがいるのね。なら向こうもそれだけ重要な計画を進めてる

んじゃないかしら」

「じゃな。バイスとアルゴンもおるなら尚更じゃ」

「お、おい。お前達は普通に受け入れているが……」

「コスモスって、白の王ではありませんの。そんな人がISSキットをばら蒔いた方々と一緒にいるのですか？」

「いや、話からして白の王は協力者どころの話じゃねえだろ」

「黒幕はそいつか」

さすがに伝えていないことを一気に話したから、カイを始めとした面子はコスモスがいることに明らかと同様を見せてしまう。

だからといって物証もないことを話しても、はいそうですかと素直に納得できることでもないから、テルヨシ達もその辺の話はあとでゆっくり話すしかない、今はシズクの解釈でいいと疑問に対しては無理矢理に終える。

問題なのは現在進行形でカタフが延々と死亡と蘇生を繰り返されているかもしれない事実と、放置すれば全損もあり得ることだ。

話をしている間にまた微震動が伝わってきて、これがエネミーによる総攻撃だと説明すれば、いよいよ危機感を抱いた一同もカタフ救出のためにどうするかを考え出す。

『話を聞くに、操られたビーイングに小戦士が1人、蹂躪されているのですか』

『妾達にはどうでもよいことではあるが、その者達の行いはビーイングを軽視している節がある。そこは見過ごせんな』

無策に飛び出してもエネミーに殺されるだけなのでシズクすらさすがに先行したりはしなかったため、少しの沈黙が続き、そんなタイミングでタギツヒメとイチキシマヒメがいたことを思い出させるように存在アピール。

カタフに関してはどうでもいいという価値観の違いこそあれど、加速研究会のしていることが気に食わないという点では合致した以上は、協力してくれる流れにはできる。

「タギツヒメ、イチキシマヒメ。エネ……ビーイングは10体。たぶん全部2人と同じレベルのビーイングだけど、まとめて相手できるか

？」

『妾達の力はエリア制限があるゆえ、ここでは本来の70%ほどの力しか出せないでしょう。ですが全てのビーイングをまとめて相対する必要はありません』

『突破口は妾達が作ろうぞ。そなた達は小戦士を救い、忌まわしき頸木を破壊することに集中せよ』

一応の問題点として10体のエネミーを相手取れることを挙げてみても、どうやら問題なく対処できる自信があるようで、そこまでの自信があるならテルヨシ達もそれを信じて行くしかない^{と決意}。

何をどうやって相手するのもかも具体的に説明せずに善は急げみたいな行動力で移動してしまったので、そこはもうちよつと慎重に行こうよと思いつながらも、もう止められない流れには乗るしかない^{ので}、半分くらいは破れかぶれな気持ちで進軍していった。

『^{キューブ・ケージ}トリカゴ』

物凄く堂々と道路の真ん中を突っ切ってエネミー達のいる場所付近まで接近したタギツヒメとイチキシマヒメは、さすがにその存在に気づいたバイスとアルゴンに反応されてしまう。

しかし《変遷》によって復活したタギツヒメの武装類の1つである水晶を1つ砕いた後、エネミー、カタフを含めた対象が力の試練の時に出てきたキューブに閉じ込められる。

あのキューブは対象の大きさに絶妙なサイズで調整するようになってるのか、エネミーには超巨大なキューブが出現し、カタフ達デュエルアバターには相応のサイズが出現。

そして予想通り、あの発光空間も丸ごとキューブに閉じ込められたところから、そこにコスモスがいたことが確定する。

『《タケミカツチ》』

タギツヒメが個々で捕らえたのを確認するかしないかで、今度はイチキシマヒメが剣を抜いて雷を纏わせると、固まっていたエネミー達に向けてタケミカツチを放ち、衝撃に強いキューブはそれに耐えながらもその威力で吹き飛び、10体いたエネミーは一気に3体にまで減少。

キューブを破って戻ってくるまでの時間稼ぎでしかないかもだが、それにしても結構な勢いで飛んでいったので、千葉県まで吹っ飛んだかもしれない。

残るエネミーもタギツヒメがキューブを操作して互いにぶつけ合うことで左右に吹き飛ばし海上へと放り出され、バイスごとキューブに閉じ込めていた最後の1体を処理しようとしたところで向こうも反撃。

キューブは確かに強固な檻としての機能を持つが、そのステータスを無視する心意攻撃にはあまり効力はないようで、コスモスが放った破壊の心意によってカタフ以外のキューブが一撃で破壊されてしまう。

「いやあ助かったわ会長はん。いきなりカッチカチの檻に入れられて閉所恐怖症になるとこやったわ」

「いやはや、毎度のことながら君には驚かされるよ、テイル君。まさかそちらのエネミーはお仲間というわけでもあるまいに……タイムもされた様子がない。不思議なものだね」

「御託はいい。それよりもこんなところでなぶり殺しとは良い趣味してんな、コスモス」

「なぶり殺しですか。端から見ればそう見えてしまうのかもしれないませんが、私はカタフに対して悪意や敵意など一切ありませんし、全損させるつもりもないですよ」

「だったらもつと平和的な話し合いってのができないのかしら。それが出来ないほどバカってわけでもないでしょ」

「カタフの決心はすでに話し合いのみでは揺らがないほど固まってしまっていますから、説得にも強引さが出てしまうのは致し方ないことなのです。とはいえ、こうして邪魔が入っては説得などと言ってもいられませんね」

テルヨシ達の乱入にもまだ余裕がありそうな雰囲気加速研究会は、短い時間で戦力分析をするように会話に応じてきて、超然とした雰囲気のコスモスの話に嘘がないのがわかる。

どうということなのか理解するには情報が不足しすぎているので、そ

の辺を探ろうとしたら会話など不要とばかりにイチキシマヒメが風を纏った剣を振るってコスモス達を攻撃。

その風はバイスの操るエネミーが持つ巨大な尻尾が振るわれることでかき乱されて威力を大幅に減退させられてしまったが、好戦的なイチキシマヒメとタギツヒメを面倒と見たか、バイスもエネミーの背中から影に沈みこんでコスモスの隣まで移動する。

「そちらのエネミーとはリンクが形成されているわけではなさそうですね。何かしらの利害が一致しているといったところですか。となると《四神》クラスのAIに成長していると見て良さそうです。そのようなエネミーがどこにいたのかはわかりませんが」

『ホワイト・コスモスとやら。そなた達のビーイングに対するごんぎいな扱いは目に余ります。その傲慢な振る舞い』

。「この世界の神にでもなったつもりですか」
『愚かな小戦士よ。その蛮行はいつかそなた達自身に返ってくることになるうぞ』

「バチでも当たると言うんか？ ハハツ、そやったら会長はん含めてウチらとはとつくの昔に裁かれとるわ。そうやないってことは、神様もウチらのやつとることにも寛容やってことやろ」

「少なくとも、我々は我々のしていることが絶対的な悪であるなどと思っていない。それはすでに伝えているとは思うんだがね」

「そのわずかな正義を貫くために犠牲になるものが多すぎるって話もしたと思うんだが、その辺は考え直したのかよ」

「多大な犠牲を払ってでも成さねばならない。そうしなければこの世界もまた滅びの道を辿る。これも以前にお伝えしましたよ」

「話すだけ無駄でしょ。世界を救うとか大義名分を掲げて悪にでもならうってヒーロー気取りのコイツらは、そこに生きる私達を見ていない。救うっていうなら私達もまとめて救いなさいよ。それが出来ないからアンタらは受け入れられない。独りよがりの正義ほど滑稽なものはないわ」

バイスの影移動も位置的に千葉方面に逃げるトンネルまで伸びてしまっているので、撤退するとなればもう止められないことは確実。

話しながらバイスのそばに寄ったアルゴンの動きからもそこはもう諦めるとして、相変わらず話を通じない感じが否めない加速研究会にテルヨシも無駄な会話をしていると思う。

そこをバツサリと切り捨てられるサアヤの言い分には拍手を贈りたいところではあったが、向こうも分かり合おうなどという気持ちは毛頭ないからか、肯定も否定もせずに言葉を飲み込んだようだ。

「私達は止まりません。あなた達もあなた達が守るもののために戦うのでしようが、その結果がどうなるかは、楽しみにしておくとしましょう」

結局はぶつかることではしか決着はないと言い切ったコスモスは、そのまま一礼して影に沈んだバイスと呑気に手を振ったアルゴンと一緒に影の中へと沈んでいき、あつという間にこの場から逃走。

このまま戦っても向こうに分がありそうな気配はあったが、撤退したならそうしたくない理由もあるのだろうと考えて、コスモス達の撤退で沈黙していたエネミーが動き出し全員が臨戦態勢に。

1体だけ残ったエネミーは、ライオンの頭にサソリのような尻尾を持つ真つ赤な体色をした四足歩行の肉食獣型のエネミー。

固有名は《Manticores》。HPゲージは4段あるので神獣級と見て良さそうだ。

当然、このマンティコアもタイムされているため、その頭の部分には銀色の冠のようなアイテムがはめ込まれていて、体表面に内側からトゲのように食い込んでいる。

外すというよりは壊す方が手っ取り早そうなのはすぐにわかったので、連戦で疲労はあるが10体同時に相手をするような事態を避けられたと思えば気持ちは軽い。

「んじゃ他のエネミーが戻ってくる前にこいつを解放してやろうか！」

「意気込みはいいけど、まずはカタフをあそこから出すわよ！ 戦力は多いに越したことはないんだから！」

「狙いはエネミーを縛るあの冠じゃ！ タイム状態が解けたら、タギツヒメとイチキシマヒメに任せるぞ！」

『あの者が素直に引き下がればいいですが』

『そなた達がいらぬ攻撃をすれば逆上するやもしれんから、攻撃は確実に当てるのじゃぞ』

「てゆうか俺達への説明はなしかよ！」

「勝手に話を進められて不満がありますわよ！」

「うっせーな！ うだうだ言ってる暇あったら攻撃しろバカが！」

悠長に作戦会議を待つてくれるなんて都合の良いことはないので、マンティコアは猛り狂う猛獣のごとくテルヨシ達をターゲットして殲滅に動いてきて、まだコスモスが黒幕であることを受け入れられないクラリツサ達に混乱が生じる。

無理もないことだが、まずは場を落ち着かせることが最優先なのは誰が見ても明らかであり、ここでのシズクの悪態が正論になるため、ごちゃごちゃしているだろう頭を1度リセットしたクラリツサ達もようやく集中して動き出してくれた。

タギツヒメとイチキシマヒメは攻撃が割と容赦ないので冠だけを狙うといった器用なことが出来ないとかで、戻ってくるエネミーへの警戒をお願いし、テルヨシとサアヤはカタフの救出へ。残りのユリ達がマンティコアを引き付けながら攻撃をしていく。

キューブの特性はここでも変わらないようなので2人で挟んで押し合って壊しカタフを中から救出すると、何の脈絡もなくこんな海の上の孤島のようなところに来たテルヨシ達に本気で疑問があるようだった。

「どうしてテイルさん達がここにいるんすか」

「完全にたまたまなんだけだな。あのエネミーがここにエネミーが密集してるって教えてくれたから気になって来てみれば、お前が虐殺されてるからビックリだよ」

「コスモスは敵意も悪意もないとか言ってたけど、そんなことあり得るの？」

「コスモスさんの考えはもう、僕にもわからないっす。いや、理解者であつたという認識からすでに間違っていたのかもしれないっすね。あの人はもう、僕が何を言おうと止まらないっす。だから僕は今日

……」

まさかあの状況から助かるなんてという驚きよりもそちらの疑問の方が気持ちとして大きいというのも不思議な話だが、のんびりと話している暇はないと理解させるようにマンティコアが咆哮。

吹っ飛んでいったエネミーもキューブから続々と脱出しているとタギツヒメの感知から報告もあり、まずはこの危機を乗り越えようと話を切り上げる。

「近接組！ 遠隔組とスイッチで合わせろ！ 防御で隙を作る！」

「俺とシンデレラが一陣！ ガストとイーターで二陣！ テイルは1人で三陣のローテ！ 遠隔は間で攻撃しろ！」

マンティコアの攻撃はタイムの影響がずいぶんと単調なようだが、その攻撃力はカイでも多くは受けられそうにないレベル。

それでもタンクを遂行しようとするカイに応えるようにリクトもすぐに指示を飛ばして役割分担を決定。

近接組が多く狙いの冠も割と小さいのでローテーションを組むのもナイスだが、攻撃力のバランスも取っている。

「防御には僕も回るっす！ リリースさんは攻撃に回ってくれても良いっすよ！」

「バカを言うな！ こいつの攻撃力は2人で抑えるべき……」

あとは攻防のバランスが取れば効率が格段に上がるというところにカタフが加わったことで、カイ1人の負担が軽減。

何せカタフにどんな攻撃力も一撃なら確実に耐えられるアビリティ《クリティカル・ガード》があるから、それを体験したテルヨシも未だに覚えている奇妙な感覚に背筋が凍る。

全ての衝撃をゼロにするという破格の威力を誇るクリティカル・ガードは、マンティコアの攻撃であっても関係ないようで、サイズの全く違う剛爪から繰り出される攻撃もカタフの拳に当たった瞬間にその勢いを失って止まり、その隙に近接組が冠を攻撃。

離れたところに遠隔組が的確に追撃して怯ませ、怒り狂って攻撃したきたところをカイとカタフが交互に受け切りまた次に繋ぐ。

「おいおい、タンクがカタフに防御力で負けてるんじゃないの？」

「無効化と防御では勝手が違うだろうが！　喧嘩を売ってるなら買つてやるぞ、スピーン！」

「喧嘩は良くないっすよ！　僕が同じアビリティなしに攻撃を受けたら5発と持たないんすからリリースさんは十分凄いつす！」

士気を高めたり雰囲気盛り上げるタイプのリクトが、地味だが確実に大事な仕事をするカイに対して気持ち盛り下がらないように煽るだけの余裕を見せ、カタフもその輪に自然と入ってくれたのはパーティーとして非常に喜ばしいことだ。

それを狙ってやったのかはわからないものの、鼓舞されたカイも珍しく気合いの声を上げて「お前達も早く壊せバカが！」と叱咤激励。

煽り合いではシズクが最強レベルなので、そんなことを言われてダメージが上がらないわけもなく、近接組とのスイッチのタイミングが一気にシビアに。

苛烈極まるシズクの攻撃の合間に割り込むこっちの気持ちも考えて！

と弱音も吐いてられない猛攻のサイクルを狂わせるわけにもいかないし、言ったところで攻撃が緩むこともないだろうシズクに合わせて続行するしかないまま、10分という短い時間ながら恐ろしいまでのDPSを叩き出したテルヨシ達は、かつてのメタトロン戦よりも圧倒的に早くマンティコアに取り付けられた冠を破壊することに成功するのだった。

『《マンティコア》よ。お前を縛っていた頸木は破壊されました。これ以上の争いを望むと言うのであれば、妾達も是非はないですが、どうしますか?』

辿り着いた東京湾アクアライン上の海ほたるPAでは、加速研究会の会長《ホワイト・コスモス》と《ブラック・バイス》、《アルゴン・アレイ》の主要人物と、タイムされた10体の《神獣級》エネミーが《シーバ・カラストロフ》1人を追い詰めていた。

それを止めるために《タギツヒメ》と《イチキシマヒメ》の協力を得て行動を開始し、早々と撤退していったコスモス達は放置し、タイムされたエネミーをタギツヒメとイチキシマヒメが散らしてくれたので、その間に1体目となるマンティコアをタイムしていたアイテムの冠を破壊。

タギツヒメ達にはなるべくマンティコア自身へのダメージは抑えるようにと言われていたから、ほとんど冠のみに集中して破壊はできただけで、破壊直後にマンティコアの瞳の色が赤から金色へと変化し、その挙動が嘘のように大人しくなる。

ただしタイムが解けたからといってテルヨシ達バーストリンカーを攻撃するようにプログラムされているエネミーなことには変わらないので、再び攻撃される可能性は大いにあり得るため警戒は解かず、に距離を保つ。

そのわずかながらの空白時間に他のエネミーが海ほたるPAへと戻ってくるかを警戒していたタギツヒメが唸り始めたマンティコアへと語りかける。

テルヨシ達も神獣級エネミーとまともに戦闘するとなれば異常なほどの労力と精神力を奪われるので、タギツヒメの脅しも含んだ言葉でマンティコアが去ってくれることを願う。

唸りながらタギツヒメを見たマンティコアからは沸々と闘争心のようなものが膨れ上がっていくのが感じ取れて、やはり無理かと警戒

を強めるが、次にオレ達を見たマンティコアはタイムされていた時の記憶でもあったのか、唸り声を収めて重心を低くして構えていたのを解き、軽快な足取りでテルヨシ達を通ってきた神奈川方面のトンネルを走って行ってしまった。

「あんなエネミー、どこにいたんだか」

「マンティコアは私も初めて見たけど、あいつらって未開拓のところにも足を運んでるんでしょ。きつと関東圏のエネミーじゃないのよ」
「それよりも今のうちに俺達もここから離れるのが得策じゃないのか」

どうにか戦闘にならずに済んでひと安心したのもわずかで、色んなところからエネミーをタイムして呼び寄せている加速研究会の手駒の多さはやはり厄介だと感じる。

そんなエネミーがあと9体、ここに戻ってくるのかと思うと気持ち的にも滅入ってしまうので、まだ猶予がある今のうちに撤退しようとして提案するカイの意見はド正論。

ここに留まってわざわざエネミーの相手をする必要もないのだから、それが賢い選択なのは間違いない。

しかし……

『小戦士達よ。ここで退くというなら止めはしませんが、来た道に戻るにせよ、あの先へ行くにせよ、最も接近するビーイングにはどのみち追いつかれるでしょうね』

『他のビーイングも交戦の最中に集まるが、あの狭く薄暗い空間で戦うか、ここで足を止め確実に頸木を破壊するか、どちらが賢いかは明白だと思うがの』

「それはつまり、わたくし達がここで戦闘する限りはあなた方はわたくし達のサポートをしてくださる、ということですよ？」

「逆に撤収するなら追ってくるやつを止めもしないってことか。脅しじゃねーかよ」

あくまでも利害が一致しているだけのタギツヒメとイチキシマヒメは、その選択をするならそれ以降のフォローはしないと直接的でないにしても言ってきて、意味を汲んだクラリツサとリクトの言葉に嫌

な笑顔を向けてくる。

それでも全力で撤退する道はあるにはあると思うが、テルヨシは他にも不確定要素があることに気づいていて、仮に逃走中に追いつかれて戦闘になった際、トンネル内で大規模な破壊が起きてしまえば、トンネルの外側は海。

圧力によってトンネル全体が連鎖的に崩壊して道を失うことになりかねない。

水中戦になってしまえばますます形勢は不利になって、海上で死亡し《無限EK》も十分に起きうるということだ。

「……トンネルが壊れる危険性もあるし、ここで戦うのが得策かもねえ」

「じゃな。あの2人が1体ずつ戦えるようにフォローをするというなら、あと9回、同じことを繰り返せばいいということじゃ」

「あと9回って簡単に言いますけど、神獣級エネミーを相手にですよ？」

「タイムされてるエネミーは思考が単純になるから戦いやすい。ましてや操るやつが撤退したんだ。相手としては相当楽な部類だぞ」

「そうっすね。僕らがしつかりと役割分担して戦えれば、タイム用のアイテムを破壊するだけならそう難しいことではないっすよ」

その辺でみんなが同じような可能性に行き当たったのか、テルヨシの意見に全員がほぼ賛同。

やれるかどうかではなく、やるか死ぬかという極端さはあるものの、エネミーのタイムにはそれなりの労力を要することは間違いないし、ここで加速研究会の手駒を減らせるなら、気休め程度でもやらないよりはマシだろう。

異論もなさそうなのでやると決まった以上は意思の統一は早くしようとして、カタフも交えた簡易のフォーメーションを作り、どんなエネミーに対しても明確な役割を持てるようにする。

「んじゃ《メテオライト》+カタフの力、見せつけてやるとしますかー」「見せつけるって誰によ。タギツヒメもイチキシマヒメも私達になんかそんな興味ないわよ」

「タイムされたエネミーも別に儂らに対して恐怖心など覚えるわけもないしの」

「なに言ってるんだこのリーダーは」

「もー！ どうしてそんなに辛辣なの！ あんまりいじめるとふて寝するんだからね！」

「何で素直におー！ とか言えないんでしようかこのレギオンは……」

「今のはテイルの言葉のチョイスが悪かったな。俺もツツコミそうになった」

「もう少し締まりの良いことを言えばいいものを……」

「何も言わないよりはマシとは思いますがね」

「な、なんだか独特すぎる雰囲気すね、このレギオンは……」

まとまる時はしつかりまとまるのは良いのだが、気合いを入れようと意気込んだところに横やりを容赦なく入れる辺りのやり取りはもはや一芸レベル。

締まりが非常に悪くなったやり取りにはカタフもどう反応するのが良いのかと迷うことを言っただけのもの、和やかな雰囲気もここまでで、タギツヒメがエネミーの接近を知らせると皆の纏う雰囲気は真剣さを帯びていった。

爬虫類系統のドラゴン型エネミー 《L i n d d r a k e リンドドレイク》。

火と溶解液のブレスを使う強力なエネミーで、任意での表皮の硬化が出来る隙の少ない個体だが、交戦経験のあったサアヤ、ユリ、カタフがほとんど視力頼りのエネミーだと教えてくれる。

タイムが解けてから視力を失って暴れられても困るので目を潰すという選択は避けて、アキラの《ジャイアント・スノーマン》で股がっ目隠しするというシンプルな手段でシャットアウト。

暴れるリンドドレイクをアキラも必死に抑え込んでくれて、かなり効率良く首に取りつけられていたタイム用のアイテムを破壊することに成功。

マンティコア同様にタギツヒメとイチキシマヒメの言葉で交戦をやめて海の泳いで行ってしまったのを見送りつつ、いよいよ他のエネ

ミーもほとんどタイムラグなく到着し出ししてくる。

それを食い止める役目を果たしてくれるタギツヒメは、千葉方面から伸びるトンネルの出入り口に衝撃に強いキューブを詰めるように展開し蓋をして、そこから来ていたエネミーをせき止める。

イチキシマヒメも海を渡ってきたエネミーに対して海ほたるPA全域を取り囲む《カミカゼ》で侵入を拒む。

そうやってエネミーの侵入をコントロールして、猛牛型の目が合うと即死する能力を持つ《カトブレパス》。

狼型の全てを凍らせるブレスを吐き、ひと飲みに喰らう《フェンリル》。

頭が両端にある珍妙な大蛇型で酸性の霧を吹き出す《アンフェイスバエナ》。

とにかく辺り構わずに攻撃の限りを尽くす巨人型の《グレンデル》。「これで6体目え!!」

戦ってみると《巨獣級》も中にはいて、6体目のグレンデルなんかはかなり危険な暴れ方をしていたから、タイムが解けたところで攻撃を続けてきそうな勢いだった。

ただ巨獣級ならタギツヒメとイチキシマヒメは上位存在として命令で退けることが可能らしく、予想通り暴れ出したグレンデルにはその命令で大人しく神奈川方面に行かせてくれた。

そしてここまで1体平均20分くらいでタイムを解除することに成功していたテルヨシ達ではあったが、何気にダイブしてからハードな戦闘が多かったせいで、まともな休息も蘇生待機の間のみ。

残り4体とはいえ精神的な疲労が明らかに増えてきて、容赦なく次のエネミーを入れてきたタギツヒメをみんなで睨み付ける。

強力なエネミーを長時間足止めするだけでも大変なのかもしれないので、堂々と文句は言えない立場ながらも、そろそろ連係にもほころびが生じてきそうな予感はしていた。

グレンデルに続いて巨人型の全身に不気味な瞳を光らせる《アルゴス》。

100はありそうな瞳で死角のない巨人は隙もなく、近接組の攻撃

も冠に届かせるのが難しいこともあつてかなりの苦戦を強いられる。ただ連戦の後半ということもあつてシズクのアビリティが順調に育ち、火力面ではトップに躍り出てくれて一撃がデカイ。

特に電磁投射砲の《エリーニユス》の弾丸《アレークトー》は必殺技ゲージの溜まり具合に比例して威力が上がるため、的が大きいこともあつて超絶威力を連発。

エリーニユス自体が肥大化していたので機動力が極端に落ちているのをテルヨシ達が必死のターゲットイングで攻撃が向かないようにフオローしながら10分とかからずに冠を破壊。

グレンデルのように暴れ回ることもなく、元はだいぶ大人しいっぽいアルゴスはティムから解放したテルヨシ達にお辞儀をしたようなしてないような仕草を見せてから、自力で泳いで立ち去ってくれた。

残り3体！

シズクの火力も十分すぎるくらいになったのでペースアップは確実に出来ると思気込みを新たに集中力を上げたテルヨシは、それが幸いして次の動作に迷いがなかった。

アルゴスの解放で次のエネミーを引き入れようとタギツヒメが力のコントロールで栓をするキューブを縮めた瞬間、その隙間から2体の肉食獣型のエネミーが恐ろしいスピードで入り込んでテルヨシ達を強襲。

ライオンやトラほどのサイズはあるのにテルヨシの最大速度よりも速い2体のエネミーにわずかながらのインターバルで気を緩めていたユリとクラリツサが真っ先に狙われて、相当な重量があつたらしい2体の体当たりと吹き飛んだ先での余剰ダメージでほぼ即死。

さらに止まることなく鋭い切り返して再加速した2体はシズクとカイを狙い、シズクはしつかり反応しながらもエリーニユスを持ったままでは回避は不可能と見て自分だけが動いて難を逃れたものの、残したエリーニユスを剛爪が切り裂いて後ろ足で蹴り飛ばして破壊されてしまう。

これでシズクのアビリティはリセットされることとなつてしまい、火力面での期待値がグツと下がったのはかなりの痛手。

そしてもう一方のカイはスピードに対応できずに防御に回ったまでは良かったが、襲つてきたエネミーには頭が3つもあり、両腕を噛まれて拘束されたところを残った真ん中の頭がカイの頭をガブリ！容赦なく噛み砕いたことでカイは死亡してしまふ。

その一連の出来事の間テルヨシは近くにいたサアヤとアキラを庇うように立ちはだかったことで2体は攻撃の優先度を下げたように見え、カタフとリクトも背中合わせで構えていたから狙われずに済んだ節があった。

思わぬ形で相手することになった2体のエネミー。

1体は三つ首の番犬《Kerberosケルベロス》。もう1体は双頭の番犬《Orthrosオルトロス》。

今の攻撃を見る限り、2体は別々の個体ではあつても共闘するタイプのエネミーである可能性は高い。

タイムされても連係できる辺りに危機感を覚えたテルヨシは、唸りながら挟み込む形で周囲をゆっくりと歩いて回り仕掛けるタイムミングを探る2体を同時に相手するのは早々に諦める。

「オレとガツちゃんといーターでケルベロス。ルールーとスピンとカタフでオルトロスを狙おう。合流しないようにある程度の距離を離れるよ。よーいどん！」

2体を6人で相手取るのは注意力が分散して割と厳しい戦い方になるため、3人で1体ずつ、分断して戦う形の方が勝率が高いと判断し指示を飛ばすと、異論もない全員が合図に合わせて移動を開始し、東西で大きく分かれてケルベロスとオルトロスを誘導する。

ケルベロスは大きさはともかく巨獣級の格付けにあり、オルトロスと組むと神獣級の強さにもなり得る可能性があるほどには個体として強力。

スピードとパワーもさることながら、攻撃への対応が基本的に回避という珍しいタイプで受けに回ってこない厄介さでテルヨシ達を翻弄。

サアヤでさえ初見だったため行動パターンなども探り探りになったので時間はかかってしまったものの、スピードに関しては目が慣れ

始めればそこまで脅威ではなく、回避のパターンもいくつか判明させたところでアキラに《フェニックス・ブレード》を装備させて回避を誘発させる攻撃を仕掛けてもらう。

その回避した先にテルヨシがさらに追撃して無理矢理の回避を促し、最後に回避不可になったケルベロスへサアヤが強力な一撃でティム用の首輪を攻撃。

このサイクルが嵌まり出せば危険度もだいぶ下がり、順調に首輪にダメージを蓄積していく。

カタフ達の方も行動パターンを掴んだ上で攻撃のサイクルを組むことに成功したようで、なんとかかなりそうな雰囲気。

そのわずかな油断とでもいう気の緩みを見逃さないと言うように、サアヤの攻撃を受けて怯むはずだったケルベロスが、突如としてその三つ首の頭から強力な火炎ブレスを吐き出してきて、フェニックス・ブレードのエクストラスキルを使う暇もなくアキラがその炎に焼かれて死亡。

さらに向こうでも同じような奇襲があつたらしく、シズクとリクトが同時に沈められたようだった。

「ティール！」

思わぬ窮地に思考が停止しかけたのをサアヤが無理矢理に引き戻して叫び、その意図をすぐに理解したテルヨシは、火炎ブレスによる大きな硬直の際に首輪を同時攻撃。

そこでようやく首輪が壊れて正気を取り戻したケルベロスが、まだ戦闘中のオルトロスを見つけてそのフォローに回ってしまう。

「《インパクト・ジャンプ》」

そうなつては3人になってしまったこっちが圧倒的に不利になるのは目に見えていたので、オルトロスがカタフの《クリティカル・ガード》によつて動きを止められた瞬間を見逃さずに必殺技で急接近からの飛び蹴りで首輪を破壊。

これで壊れなかったら本当に危ないところだったが、なんとか難を逃れて戦闘の意思を消したケルベロスとオルトロスは、タギツヒメとイチキシマヒメの威嚇によつてキャンキャンと犬のように吠えて逃

げていってしまった。

「まさか今の2体に6人も持つていかれるとは思わなかったねえ……」

「あと1体って考えれば気は楽だけど、最後があれでしょ？」

「一番厄介なのが残ったつすね……」

疲労の蓄積によるほころびで一気に壊滅状態になるほど余裕がなかったことを現実として突きつけられたテルヨシ、サアヤ、カタフの3人の士気はかなりネガティブな方向に向いてしまっている。

その原因というのも最後に残ったエネミーが5体目のアンフィスバエナの戦闘中からずつと風の防壁に阻まれていたエネミーで、その姿は確認できていたのだ。

イチキシマヒメも残りがそのエネミーだけになったとあつて風の防壁を解除して侵入を許し、大きな翼を持つそのエネミーは雄々しく羽ばたきながらテルヨシ達のすぐ近くまで降下して咆哮。

顔だけでテルヨシ達3人分の体積を持つ猛禽類型のエネミーは、その体毛が毒々しいまでの黄色と白で構成されていて、瞳は紅蓮の炎のように紅い。

体長15m。幅は翼も合わせれば30mに迫るだろう巨大さは神獣級でも相当なもの。

その固有名は《サンダーバード》^{Thunderbird}。直訳で雷鳥だ。

現実世界で雷鳥と呼ばれる鳥はもつと小さくて可愛らしいものだが、加速世界のサンダーバードはおそらくその源流が違う。

タギツヒメなどが神の名を冠するように、サンダーバードもどこかの国の伝承などにある存在が元なのだろう。

それなら名前の通りの技は使えそうだなと考えたら、闘争心がむき出しになったサンダーバードはその体にバチ、バチと帯電させながら発電し始める。

「おいおい、雷攻撃とかトラウマしかないんだけどお！」

「飛んでるのも最悪よ。攻撃とかどうするの」

「あの帯電じゃ体に乗るのもダメーじ覚悟つすよね」

飛ぶ。雷。神獣級の面倒臭さ詰め込みセットなサンダーバードに

3人で挑まなきやいけな精神の負担は、やる気を失うのに十分すぎるくらいにはキツイ。

直近でイチキシマヒメの試練で雷攻撃を受けまくったこともあってテルヨシとサアヤのやる気は割増しで減ってしまう。

そんな感じで具体的な対策を練るのが少し遅れたのも災いして、充電を完了させたサンダーバードが再び咆哮し、羽ばたきと同時に雷を飛ばしてくるのを地上から見ることしかできない。

『タケミカツチ』

ここは最後の1体というところから1度全滅して立て直しを図るのも手かと考えた矢先。

直接の戦闘は加減が出来ないからと避けていたイチキシマヒメが容赦なく最強技のタケミカツチをサンダーバードへと放つ。

その攻撃は同じ属性ということもあってサンダーバードには力を増幅させる効果しかなくて何してくれてんの!? という気持ちから出かけるが、貫いたタケミカツチのエネルギーにサンダーバードの放った雷が吸い寄せられてテルヨシ達への攻撃がかき消される。

『妾の前で雷を操るとは、愚かな』

さらに唸りながらイチキシマヒメに向き直ったサンダーバードに対して生意気だと言わんばかりに抜いていた剣をサンダーバードへと向けて、落雷すらエネルギーにするその剣にサンダーバードが帯電する電気エネルギーを吸収。

みるみるうちにサンダーバードの全身からエネルギーがなくなり、また作り出そうとしても根こそぎ奪われる現象が発生する。

『《センジュ》』

サンダーバード最大の攻撃手段であろう雷を封じた形にはテルヨシ達も歓喜しかけて、そのまま攻撃もしてくれないかなと思っていたら、タギツヒメも水晶の1つを割って試練の時に出した無数のキューブを周囲に展開。

イチキシマヒメが攻撃妨害のみに留めているところを見ると、タギツヒメも同じかもと出現したキューブを触ってみると、簡単に運動エネルギーを得ていた試練の時とは違って空間自体に固定したように

動かない。

見ればサンダーバードもこのキューブのせいで動きを大きく阻害されてしまっている。

『何をしていますか。早くこのビーイングの頸木を破壊しなさい』

『何故このビーイングを最後に残したのか、試練を乗り越えたそなた達がわからぬわけはあるまい?』

その光景に呆然としていると、ここまでのお膳立てをしたタギツヒメとイチキシマヒメがさつさと動けと命令してきて、あの10体の中で最も苦戦を強いるだろう個体をいち早く見抜いて最後に回したとわかる発言には驚かされる。

最後になればタギツヒメもイチキシマヒメも侵入阻止の技を維持する必要がなくなり、技の制限がなくなるから、こうした妨害にも手が回せるということを考えていたのだ。

さすがにここまでのお膳立てをされてやる気がなくなったなどと言ってもいられないので、残りの力を振り絞ってタギツヒメの出現させたキューブを足場にしてサンダーバードへと肉薄したテルヨシ達は、エネミーの解放へと乗り出した。

Acceleration Second 103

「これで、ラストおー！」

海ほたるPAで繰り広げられたティムされたエネミーとの連戦も、残すところ《サンダーバード》1体のみとなっていた。

その過程でテルヨシ、サアヤ、カタフの3人以外が倒される事態にはなったが、《タギツヒメ》と《イチキシマヒメ》の援護が強力で、まともな攻撃手段も移動すらほとんど出来なくなつたサンダーバードはそのサイズからテルヨシ達への攻撃が大味に。

タギツヒメの《センジュ》によつて出現した無数のキューブが足場とサンダーバードの動きの制限の役割を果たして、空中戦も難なく出来たテルヨシ達は面白いようにサンダーバードの頭に嵌められたティム用の冠に攻撃を当てていく。

そして冠に大きな亀裂が走つたところでテルヨシの渾身の蹴りが炸裂して、サンダーバードを縛つていた冠を完全破壊。

ティムから解放されたサンダーバードは、タギツヒメとイチキシマヒメによる妨害が解除されると、雄々しく羽ばたいて上昇し東京方面へと飛んでいってしまった。

「やつと終わったあ……」

「もう無理。しばらく動きたくない」

「ハハハ……同感っす」

これでティムされていた10体のエネミーの解放は達成されたので、迫る危機を乗り越えたことは間違いないため、ようやくの安堵の時に全身を投げ出して脱力するテルヨシ達。

最初の《マンティコア》から実に約3時間もの間、戦い続けたのだから、その精神的疲労はとくにピークを過ぎていた。

最初に死んだユリとクラリツサがあと10分程度で蘇生するので、残りの3体は50分ほどで解放したことになるが、最後のサンダーバードはタギツヒメとイチキシマヒメがいなければそもそもまともに戦うこともできなかつたことを考えれば成果としては最上のもだろう。

この結果にはタギツヒメとイチキシマヒメも満足そうに近づいてきて労いの言葉でも貰えるのかなと思っていた。

が、完全に脱力モードに移行していたテルヨシはこの状況に対して強い既視感というか、デジャヴのようなものを感じ取り、背中に悪寒が走る。

この状況は先日の《メタトロン》戦の直後と同じ……

そうと考えたのとほぼ同時に周囲に変化が起こり、わずかばかり周囲の影に体がかかっていたカタフの横から、音もなく《ブラック・バイス》の黒い板が出現してカタフを挟み込みにいく。

戦闘後の疲労から抵抗力も低かったカタフはその万力に抗う間もなく挟み込まれてしまい、カタフを挟み込んだ板は影へと沈み込み姿を眩ませようとする。

影は途切れることなく千葉方面へのトンネルまで続いているため、影に入られてしまえばもう追跡は不可能。

「イチキシマヒメ！ 光！ 光を出してくれ！」

『何じゃ藪から棒に。仕方ないのう』

まだカタフを逃すまいとする加速研究会の思惑はわからないが、連れ去ろうとする以上はカタフの利用価値があるということ。

それでなくとも安否が心配されていたカタフが無事だったのを助けたばかりで、目の前で拐われるなど耐えられたものではない。

その決断力でテルヨシが近寄ってきていたイチキシマヒメに何でもいから光を放ってくれと言えば、理由はわからないにせよ、バイスの拉致現場を目撃していたイチキシマヒメはそれを阻止する動きだろうと察知して剣を抜き空から雷を落とす。

その稲光でイチキシマヒメの周囲が眩いほどに照らされて千葉方面へと続く影が分断され、さらに影に沈み込んでいた場所も光で影が吹き飛び、アビリティイの効果から外れたバイスは地面から押し出されるように飛び出してきた。

その拍子に拘束していたカタフも投げ出されて、短い拘束時間だったからかユニコのように意識を失うまでには至らなかつたようで、受け身を取りつつリカバリーしてテルヨシ達とで尻餅をついたバイス

を挟み込む。

「《ジ・エンド》」

テルヨシの予想以上の反応速度と対応に危機感を覚えて速攻で撤退を選択したバイスは再び戻った影に沈み込もうとしたところで、カタフが強力無比な必殺技を発動しバイスのアビリティを封殺。

またも影から弾き出されたバイスがよいよヤバイ雰囲気の中で立ち上がり、倒すのが目的ではないとわかってるからか割と落ち着いた様子で口を開く。

「いやはや、君には本当に驚かされるよ、テイル君。カタフ君も、この忌々しくも素晴らしい技を解いてはくれないものかな。私はここで事を荒立てるつもりはないが、私のバーストポイントをささやかでも削りたいというなら、付き合うのもやぶさかではないよ」

「何でカタフにこだわる。こんな状態のカタフがお前達に協力しないことはもう確定的だろ」

「そこは否定しないよ。もはや我々とカタフ君では見ているものも目指すものも違ってしまっている。会長もそこはすでに諦めておられるが、カタフ君の力はこの世界において『特別』なのだよ。これを易々と手放しては我々の損失は計り知れない」

「あら、言っちゃったわねバイス。アンタ達が欲しいのはカタフじゃなくて、特別とか言うカタフの力ってわけね」

「……ふむ。さすがに軽率な発言をしてしまったかな。気を悪くしないでほしいカタフ君。その力を育んだのは紛れもなく君自身であることに変わりはないのだから」

自ら会話へと興じることで逃走の隙をうかがおうとするバイスのしたたかさは敵ながらにさすがだ。

逃げると思えばカタフの必殺技の効果が切れる瞬間。リチャージなしで満タンで使えば最長で50秒は持つ。

意外と話してしまうと饒舌になるタイプのバイスが口を滑らせてくれたことで、加速研究会の目的がカタフ個人ではなくカタフの持つ力にあることはわかった。

ここまで20秒程度のやり取りとなったが、これ以上の会話はバイ

スにチャンスを与えるだけと踏み、あらゆるアビリティや必殺技が封じられている以上は有効な攻撃手段が心意しかないのは当然。

だからテルヨシ達もバイスさえも話しながらその身に過剰光を纏って来たる攻防に備えていた。

その中で驚いたのはバイスがこの心意戦においてもテルヨシとサアヤよりカタフを警戒していることで、灰色という淀んだ過剰光を全身に纏っていたカタフは、警戒されていることをわかった上で先制して動く。

「ブラック・ホール永久の闇」

右腕を前に出して開いた手を握り込む動作をしたカタフに合わせ、バイスは足下に右腕全ての板を使って床を形成。

カタフの心意技について理解があるからこそその防御行動なのだろうが、1辺10mはある範囲を床にしなければ防げない心意技とはどのような効果なのか。

「ナメないで、もらいたいっすー！」

おそらくデータありきで展開された板なのだが、より一層の過剰光を纏ったカタフは拳を握った右手をバツと右へ振ると、バイスの展開した床の外枠から黒い虚空の空間が姿を見せる。

その空間はバイスの板の範囲を越えて広がり、次にはズブリ、とその上にあつた板を飲み込んで沈めていく。

「これは参ったね……」

板のすぐ下は地面のはずでそこからさらに沈み込むなど普通ならあり得ないが、同じ現象をテルヨシは先日の加速研究会の本拠地で見ている。

破壊不能オブジェクトである地面に心意で穴を開けて、そこに沈めることで相手を圧殺する心意。

引き込まれれば最後、逃れられないブラック・ホールのごとく強力な引力まで持つその心意にはバイスも堪らず板の床が沈みきる前に蹴って範囲から脱出。

そこをカタフの技の範囲をいち早く回り込んでいたサアヤが過剰光を纏った拳で強襲。

左腕の板を崩してしつかりとガードしたバイスの防御力はさすがだが、《ブレード・ファン》を基盤に使われるサアヤの心意では拳単体の攻撃におそらく名前もない、威力も心許ないときている。

だからこそテルヨシはサアヤがバイスの足を止めてくれた好機を逃さずに、サアヤの体をブライインドにして急接近しジャンプからの《閃光の幻影》でバイスを攻撃。

吹き飛ばせばカタフの必殺技の範囲からみすみす逃す悪手になるので上から下への撃ち下ろしで放った一撃をバイスも悠々と防御。

元より移動拡張の閃光の幻影では攻撃力に欠けるのはわかっていた。

そしてかなりの疲労から捻り出した心意は限界も早いだろうと確信していたのと同時に、その疲労でかえって余計なことを考える余裕がないのが雑念を取り払う意味でポジティブに作用。

最初で最後となっていた上位の心意技《流星突破》メテオ・ブレイクを同じ相手に使うことになるうとは思ひもなかったが、バイスだから使えると確信したのも事実で、バイスの防御する板を蹴って再び空中に舞い上がったテルヨシは、あの時と同じく研ぎ澄まされたイメージーションを足に集中し、キイン、と甲高い音を立てて淡く光る足から、全ての障害を蹴り碎く必殺の一撃を放つ。

そしてテルヨシとはまた違う形でイメージーションを増幅させたカタフも展開していた永久の闇で板を飲み込んでから、一気にその範囲を縮小し凝集させると、拳サイズになった永久の闇を右拳に纏わせてバイスへと放つ。

「流星突破」
ダークネス・バイト
《侵食穿拳》

テルヨシの超絶威力の蹴りはバイスの防御の板を易々と砕いて頭を吹き飛ばし、カタフの拳はバイスの胴体の板を捉えると空間を侵食しねじ曲げて、バイスの体全部を巻き込んで粉々に破壊。

まるでバイスを構成するデータの粒子を分解するような防御無視のその一撃によってバイスは声を上げる間もなく死亡。

加速研究会の欲していた力の一端がこれなのかと考えつつ、流星突

破の反動でぶっ倒れたテルヨシをサアヤが抱き起こしてくれて、同じレベルの心意技を使っても倒れはしなかったカタフは大きく息を吐いて落ち着けてからテルヨシを見て口を開く。

「驚いたっすね。まさか自分の意志で第3段階心意技を使えるようになってたっすか」

「第3段階……オレのはマグレだよ。出そうと思って出せたことはない」

「僕のも完全ではないっすよ。まだイメージネーションが固まりきらずに研ぎ澄まされてないっす。これを完全に掌握できているバーストリンカーはまだいないと信じたっす」

あの威力でまだ極めてないと語るカタフには驚きしかないが、そう思うだけの事実があるのだろうと今はあまり考えないようにする。

どうしたって今のテルヨシではかなり特定の条件を揃えないと発動すらできないのは確実だし《ブルー・ナイト》も一生かかっても極めることができないかもと言っていたことにこれ以上の思考は無駄とも言える。

ともあれバイスを倒したことで一時の静寂が訪れて、本当に今度こそ休息を取って全員の蘇生を待つこと約30分。

アキラ、シズク、リクトが蘇生してから、バイスが蘇生する前にとつとと退散しようとなって、神奈川方面へのトンネルを通過して撤収。

その移動中にはさすがに後回しもできないことが立て続けたため、状況を整理する意味でもシズク達に包み隠さず事実だけを説明する。

加速研究会の暗躍と《オシラトリ・ユニヴァース》との関係。先日の《ISSキット》事件の原因と心意について。

一気に話せば当然ながら頭は混乱するだろうとわかっていつつも、テルヨシ達もカタフから話を聞かなければならない都合、そこは少し急ぎ足で済ませて、他言なんて出来ようはずもない事実を個人個人で受け止めている間に話を進める。

「それでカタフはあそこで何をしようとしてたんだ？ 《無制限中立フィールド》にわざわざダイブしてコスモス達と接触したからには、

何か狙いがあつたんだろ」

「現実世界ではコスモスさんにもう僕とは会えないと言われたつす。そこでどうにかできれば僕もこんな強行策に出ることもなかったつすが……」

「強行策？ コスモスを止める算段があつたの？」

「コスモスさんを止めるにはもう、コスモスさんを全損させてしまっしかなかったつす。守りも固いコスモスさんを全損させる方法なんてないに等しかったつすが、僕には2つだけその手段があつたんすよ。1つは直結対戦で全てのバーストポイントを奪い取ることでの全損。そしてもう1つは……」

「レベル9同士のサドンデスルールじゃな」

「……恥ずかしい話、僕はずっと自分の思いとは相反する力の伸びにレベルアップを躊躇っていたつす。その壁を破壊してくれたテイルさんには感謝するつすが、実はレベル9にするだけのポイントもすでに持っていたんす。コスモスさんはそれを知っていたからたぶん、僕とは会わないと言つてきてたつす」

話だけ聞くとなんともぶっ飛んだことをやろうとしていたカタフにテルヨシだけでなくサアヤやユリも深いため息。

ほぼ成功しないだろう強行策とやらに苦言を呈したのは山々だが、気づいてしまったテルヨシが確認のために割り込む。

「お前もしかして、もうレベル9になってるんじゃないか？ それを隠してコスモス達と接触して千載一遇のチャンスを狙ってた？」

「テイルさんには敵わないつすね。確かに今の僕はすでにレベルを9に上げて、コスモスさんとはサドンデスルールでの戦いが可能になってるつす。そのおかげでバーストポイントの量も心許なくなってるつすが、あそこで無抵抗に殺されて蘇生させられる度にコスモスさんは僕への警戒心を緩めていったつす。全損する前にたった1度でもコスモスさんに迫るチャンスはあつたはずつすが、やっぱり無謀だったとテイルさん達が来たら思ったつす。コスモスさんは第3段階心意技を僕よりも高度に扱える。仕掛けてもきつと返り討ちに遭っていたと、今ならわかるつす……」

かつて自分が無謀なレベル9計画を立てていたこともあったから、思考が似ているカタフならと思ったら案の定で、あの状況からそんなことを狙っていたのかと、さつきよりも深いため息が漏れてカタフも苦笑い。

「でも僕はコスモスさんがレベル1の時から少数ない友人として、どうしても彼女の凶行を止めたかったんす。いつからコスモスさんが暗躍していたのかは、正直いまもわからないっすが、近くにいながら止められなかった責任は僕にもあるんす。だから……」

「1人でケリを着けるために突っ込んだってか？　こんのアホンダラア！」

誰よりもコスモスの近くにいたと自覚しているカタフの責任感は理解できなくもないし、同じ立場ならテルヨシも同じようなことを考えて実行しようとしたかもと思う。

でも今は1人で何もかも抱え込もうとすること自体が愚かなことだと考えられるようになったテルヨシは、その結果としてカタフが加速世界から消えていた可能性と、それを悲しいと思う存在を軽視した行動に怒り、唐突なドロップキックでツツコミ。

蹴られたカタフも何が何やらな雰囲気であれながらテルヨシを見て、そのツツコミの真意を問う。

「加速研究会の問題はもうお前1人で背負うには重すぎるんだよ。誰もお前の結果に期待してもいないし、美学か何か知らないけどな、影の英雄にでもなろうってのが気に食わないね」

「別に美談にしようなんて考えはないっす！　僕はただコスモスさんを本気で止めたいと思って……」

「だから、その手段がお前は限定的すぎんの。加速研究会の問題はオレ達ベーストリンカーの問題。巻き込みたくないだのなんだのはとつくの昔に過ぎてる案件！　わかる？」

「男って感情はぶつけるのにストレートな物言いをしないわよね。恥ずかしがってるの？　カタフ、要は『オレ達を頼ればいい』ってことをテイルは言いたい」

人と繋がるということは、それだけしがらみやらが増えていくとい

うことだ。

だがネガティブな部分もある一方でポジティブな部分も確実に育まれるのは確かで、人は繋がることで強くもなれる。

だからその繋がりやの強さと、断たれる者の痛みをカタフには自覚してもらおうと言葉を尽くしたテルヨシだったが、回りくどいとサアヤにドストレートな言葉でまとめられてしまう。

それにはテルヨシが恥ずかしくなって顔を背けるとサアヤ達から笑われる事態になるも、呆然とするカタフに照れ隠しするように手を伸ばした。

「つーことで、来いよカタフ。一緒に加速研究会をぶっ潰して、そのついでにコスモスにゲンコツを食らわせてやろう」

「……………ゲンコツつか。ハハッ。それは名案つすね。あの人はそういうことされる経験なさそうつすから、今から楽しみつす」

その差し出された手を笑いながらに握ったカタフは、ようやくこれからどうするかをしっかりと見据えて立ち上がり、テルヨシと視線を交わした。

その後、テルヨシからのレギオン加入の申請にも迷いなくサインしたカタフは、先ほどの戦闘もあってか自然とみんなに受け入れられる。

「よーし、まだまだ問題は山積みだけど、まあとりあえず今日はもういいだろ。難しいことはみんな持ち帰って日を改めるってことで、まずは戻ってカラオケだー！」

「あ、それならカタフ。アンタも強制参加ね。今どこにいるの？」

「ええ!? 西新宿つすけど、そんないきなりリアルで会うんすか!？」

「言い忘れておったが、リアルでの面識はレギオンの基本原則じゃかな。何事も早い方がよい。西新宿なら中野はすぐじゃな」

「え、ええー!？」

ふとしたきっかけでの寄り道だったが、結果として新たな仲間が加わったことで最高の締めくくりとなった。

それもあつてかみんなからも疲労というのが吹っ飛んで、また呑気にカラオケ話に花を咲かせ始め、カタフも強制的に参加することとな

る。

それに戸惑いを見せつつも、テルヨシは自慢の観察眼でカタフを見れば、いやいやと抵抗しつつもその雰囲気嬉しそうなのをしっかりと感じ取ることが出来たのだった。

トンネルを抜けてからはタギツヒメとイチキシマヒメも《タキリビメ》と合流するからと早々にお別れして東京方面へと行ってしまい、なんだかんだ2人の協力には助けられたので、その後ろ姿に一礼して見送って最寄りのポータルを潜って現実世界へと帰還したのだった。

「それでそれで？ カタフがなかまになってどうなったの？」

陽気な日差しが射し込む昼下がり。

せがむ子供にすっかりお気に入りになってしまった『遠い昔のおとぎ話』を聞かせていた女性は、どこにも書籍化されていないオリジナルの物語に大興奮し、続きを促されて苦笑。

「そのあと、テイル達はまたまた悪の組織と戦うことになったのです。しかし今度は逃がしません。悪いやつにはいつかバチが当たります。テイル達は最強の6人の王様達とも協力して、みんなを困らせる悪の組織をついに倒したのです」

「むー！ またお母さんの悪いくせー。もっとくわしくー！」

「ここら辺のお話はまだ難しいからなあ。小学生になったらまたしてあげる。それよりもこのあとのテイル達は、絶対にクリアできないって言われていたお城に攻め込むの！」

「おおー！ そっちも気になってたー！」

しかし物語はまだ小学生にも上がっていない小児向けのもので構成されていないため、必ず難しい言葉を取り入れないと進められないこともあり、だいぶ端折って話したら、案の定で何度もやってきた手法に不満が爆発。

ただしそのあとの冒険は子供も待ちわびていただけにすぐに機嫌

が直って話に夢中に。

子供の気の移り変わりの激しさにはまだ戸惑うこともあるが、上手くコントロール出来てきたかもと数年でようやく思えるようになったのも束の間。

女性のニューロリンカーにメールが届き、それを見ると約束の時間が迫っていることを確認。

「あらあ、お話は今日はおしまいだあ」

「えー!! なんてー!!」

「今日は何の日だったかなあ?」

「んー? んーと……あー! マリアお姉ちゃんのたんじょうびだ!」

「イエス! お父さんの特製ケーキも食べられる大事な大事な日なのでーす! わかったら準備準備!」

それで残念ながら話は中断になってしまったものの、その理由について思い当たった子供は機嫌を損ねることなくそそくさと出かける準備に取りかかっていき、その姿を笑顔で見ながら、女性も用意していた大切な家族への贈り物を確認して、これから行われるパーティーに気分が高揚する。

そしてしっかりと準備した2人は仲良く手を繋いで家を出て、最愛の家族が待つ場所へと歩いていくのだった。

END